ウルトラマンゼロ 使い魔もゼロでセブンの息子

???

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウルトラマンゼロ　使い魔もゼロでセブンの息子

【Ｎコード】
Ｎ９４８１Ｒ

【作者名】
？？？

【あらすじ】
※三美姫の輪舞に突入
警告！
○オリ主が嫌な奴に見えがち
○オリジナルキャラ（ウルトラマンにも一人）、技複数登場

実際に読んで後悔したり怒りを覚えた方が多くいらしたので、初めて読む方への警告をここに記します。
決して原作を蹂躙したり不満を与えたくて執筆したわけではないこ

とだけはご理解ください。もし、上記の項目やその他に嫌気がさしたらすぐにご退出をお勧めします。

■あらすじ
２０１１年
二人の青年の……
涙は…

悲しみは…

痛みは…

自分のためではなく、他者のためのものだった…

無限の可能性の戦士ウルトラマンゼロ

朽ち果てぬ絆の戦士ウルトラマンネクサス

彼らそのものとなった二人の青年は、それぞれの主となる少女たちに呼び出され、異世界ハルケギニアにて戦う。

仲間、恋人、家族…
大切な人を守るために。

彼らに守られる者たちも、その思いに応えるべく共に道を行く。

その戦いは、遥か昔に刻み付けられた呪いであることを知らずに…

Z1　使い魔

皆さんはウルトラマンという存在をご存知ですよね？
彼らは宇宙の正義と平和の為に命がけで戦い続けている。時には正義や自らの力の葛藤に悩みながらも、宇宙全体の数々の星で生きる多くの命を救ってきた。

この物語は、「光の国」のウルトラマンたちの中で英雄として名を轟かせた「ウルトラ兄弟」の仲間入りを果たしたウルトラマンメビウスとエンペラ星人の戦いが終結して約４年後の２０１１年　３月、東京の秋葉原から始まる。

「はあ、学校が終わったら次は塾か…」

ごく普通の高校生、サイトはため息をついた。正直ここ最近ダルい。実は彼は、定期テストで赤点をとったので追試を受けることになっていた。親からも厳しく言われ、塾にまで強制的に通わされることに…
サイトは真っ赤な通信簿を見た。

「今こんなんじゃサラリーマンになることすら難しいなぁ…」

彼は地球防衛チームに入ることが将来の夢である。しかし今の成績ではその夢も雲の上の存在だった。

「せめて、あ！っと驚くようなことないかなぁ…。平凡な高校生活にも飽きてきたし…」

そんな愚痴を言う彼にも少しだけお楽しみがあった。ひとつめはゲ

ーム、ふたつめはネット、そして…

「高凪さん、最近忙しそうだよなあ…」

彼は高凪ハルナというクラスメートと交際している。クラスの委員長をつとめ、成績も優秀だった。サイトは彼女に教えてもらうこともあった。

しかし彼女はいつも忙しく頼る時間が長く取れず，結局サイトはまた赤点だったという…。

「はあ…」

またしてもため息をつく。

「平賀君」

「ん？」

後ろから、噂をすれば影、ハルナがやって来た。

「ごめんね。時間少しでもとれたら勉強に付き合ってあげられたのに」

「いいって。俺がバカなだけだし…」

「じゃあ明日、日曜日でしょ？家に来る？」

「え？家にって、もしかして…」

「うん、私の家」

「マジで！？いいの！？」

サイトの声が嬉しさのあまり裏返っていた。

（ああ～彼女いない歴１７年、やっと女の子の家にあがれるんだあああ！！）

嬉しさを通り越しすぎて涙まで流してる。

「んで、何時にこればいい？」

「えっと…朝の十時に校門前に」

「十時、わかった。ぜってー来るから！んじゃ！」

平賀は張り切って家へ超特急、走って行ってしまった。

「もうちょい話したかったのに…」

ハルナはちょっぴり残念そうな顔をしていたのをサイトは知らない。

「ただいま」

サイトは夜の十時、自分の家へ帰ってきた。

先に向かったのは、和室にある仏壇。

サイトは写真に映された二人組の夫婦を見て合掌し、黙祷した。

「あら、お帰り」

出迎えてきたのはサイトの母、アンヌ。かつて地球防衛軍のエリート「ウルトラ警備隊」の隊員だった女性である。

「母さん」

「偉いのね…亡くなったお母さんたちに」

アンヌは、サイトの実の母ではない。四年前、両親がウルトラマンメビウスと戦っていた怪獣による事故で亡くなり、身寄りのない彼を彼女が引き取ったのだ。母とは今も名字が違ったままだ。

「これくらい普通さ。それと明日、出掛けるんだ」

「どこに？」

「高凪さんの家だよ」

「あら、あんたもやるのね。コノコノ」

からかうようにアンヌはサイトに肘を軽く打つ。

「あははは…からかわないでよ。んで、今夜の飯は？」

「カレーよ。冷めたから温めときなさい」

「うぃーす」

サイトは食卓に向かった。

翌日、サイトは待ち合わせの場所でハルナを待っていた。

「早く来すぎたかな？」

今は九時四十五分。早いと言えば早い時間帯だ。

「ん？」

サイトは一瞬目を疑った。彼の前に光る丸い鏡のような物体が現れた。

幻覚かと思い、目を擦ってみたが、幻覚ではなかった。ちゃんと目の前に存在していたのだ。

「なんだこれ！？スッゲー！！」

サイトはその物体に近づいた。

「中に入れるみたいだな。ちょっと、触ってみるか」

サイトはその物体に触った。すると…

「おおー！」

入れた。のはいいが…

「なんだ。真っ暗で何もねえじゃん。つまんね……って
てえ!?」

サイトは入ってきた方を振り向いた。出口が消えてしまっているで
はないか。

「おい!誰か出してくれ!!」

閉じられた扉を叩くように叫ぶが、彼の声は虚しく響くだけだった。
しかも…

「あっあれ、うわあああああああああー!!」

サイトはその空間の奥へと吸い込まれていった。

「ごめんね。おまた…え?」

少し遅れてハルナは駆けつけたが、遅かった。

「平賀君!?」

そう言ったときには、サイトの姿はどこにもなかった。

学校は愚か、日本にも、そして…

地球にも。

「我が導きに答えなさい！！」

爆発。

トリステイン魔法学院の二年生ルイズは何度も失敗している。

小さい頃からずっとだ。

父も母も、二人の姉たちも魔法に関してまさに秀才と言える存在。

だが、自分だけ失敗だらけだ。

そのせいで父には「さっさと婿をとれ。無理して魔法を学ぶ必要はない」と言われ、使用人たちの陰口で哀れに思われ、学院では同級生にバカにされている。

それでついたあだ名は…

「な～にやってんだよ『ゼロのルイズ』！」

成功率「ゼロ」のルイズ。

「う、うるさいわね！今度こそ成功させてやるんだから！」

ルイズは再び呪文を唱える。絶対成功させてやるんだから！もう誰

にも『ゼロ』だなんて呼ばせない！

「わが導きに応えなさい！」

彼女は杖を掲げ、魔法陣を展開する。そして杖を剣のごとく振り下ろした。

またしてもただの爆発。

いや、煙の中に人がいる。

「や、やったわ！成功よ！」

やっと成功したのだ。今まで失敗しかなかった自分が、やっと成功させたのだ。周りの生徒たちはざわついている。あのゼロのルイズが成功させたのか！？と驚いていた。

（ドラゴンかしら？それともグリフォン？）

大きな期待を抱くルイズだが、その期待は残酷なほどズタズタに引き裂かれた。

「痛ってえ…なんだ？何が起こった？」

さっき謎の発光体に吸い込まれたサイトがそこにいたのだ。

（ひ、人？）

ルイズは恐る恐る近づいてみた。

「あんた誰？」

気がつくとサイトは見たこともない場所にいた。目の前には桃色髪の少女がいて、他にも人がたくさんいる。

「誰って、俺は平賀サイト」

「ゼロのルイズが平民を召喚したぞ！」

「何あれー！！」

「さすがゼロのルイズ！！」

ドッと笑い声が響く。

「違うわよ！こんなのが私の使い魔なわけないじゃない！ちょっと間違えただけよ！」

「ルイズはいつもそれよねえ」

（こくっ…）

同級生と思われる赤毛の女性はまだ笑っている。
その隣にいる青髪の少女は黙ったまま頷いていた。

「ミスタ・コルベール！もう一度やり直させて下さい！！」

ルイズはコルベールと呼ばれた頭の光る中年の教師に抗議するが、彼は首を横に振った。

「これは伝統かつ神聖な儀式なんだ。やり直すなど儀式を冒涜する

事なのですぞ。きっちり召喚した以上彼が君の使い魔だ。さあ儀式を続けなさい。次の授業が始まります」

「…わかりました」

ルイズは諦め、しぶしぶ頷いた。

「なあ、ここどこだ？」

サイトはルイズに尋ねる。

「あんた、感謝しなさいよね。平民が貴族にこんなことしてもらうことなんて一生無いんだから」

「は？」

ルイズはサイトの前に立って、杖を向ける。

「五つの力を司るペンタゴン、この者に祝福を与え我の使い魔となせ」

ルイズはサイトの顔を両手でつかむ。

「おい！何をする気だ？」

「いいからじっとして！」

「んぐ！？」

サイトは唇を奪われた現状を全く理解できず、急いで口をふく。

「いきなり何するんだ!?俺のファーストキス奪いやがって!!」

「うるさいわね!私だってあんたとなんかキスしたくなかったわよ!」

ルイズは逆ギレする。

(なんて生意気な女なんだ…チクショウ、高凪さんにとっておいたファーストキスが…)

握りこぶしを悔しそうにつくるサイト。すると、彼の左手に焼けるような熱が走り出した。

「ぐっあああああ!?アチい!!」

「使い魔のルーンが刻まれるだけよ。騒がしいわね」

痛みが引くと、古代文字のようなものが彼の左手の甲に刻まれていた。

「ルーンだと?俺に何をした!」

「君、ちょっといいかい?」

コルベールはサイトの手の甲を見ると、そっくりそのまま紙にスケッチする。

「ふむ、これは珍しいルーンだな」

「では儀式はこれで終了です。各自次の授業の準備をするように」

「ルイズ、お前は歩いて来いよ！」

生徒たちは空へ飛んでいった。

「飛んだ！？何で！？どうやって！？」

「何してるの？メイジが空飛ぶの当たり前。さあ私たちも帰るわよ」

「じゃあお前、飛ぶのか？」

「いいからついてきなさい！！」

その夜、サイトはルイズの部屋で質問攻め。聞きたいことだらけだ。この世界は（正確には大陸）ハルケギニア。貴族と平民の格差社会が展開されており、貴族たちは魔法を使うことが可能でメイジと呼ばれている。

まさか…ここは地球じゃ…と思ったサイトは地球で知らない者はいない単語を次々と言った。

携帯

パソコン
ＧＵＹＳ
そして…
ウルトラマン

だが、ルイズの反応は…

「はあ？あんた何言ってんの？」

信じられなかった。ウルトラマンを知らないと言うことは、ここは地球ではない。

「じゃああんたはこの世界じゃなくてチキュウとかいう世界の人間だと言うの？」

「ああ」

「信じられない。そんな魔法もないのにやっていける世界があるわけないじゃない！」

「嘘ついたってしょうがないだろ。で、ルイズだっけ？俺を早く地球に帰してくれ」

「無理。サモン・サーヴァントは呼び出すだけよ」

呼び出すだけ？

「じ……っえじゃあ俺はお前に一生奴隷同然にこき使われるのか？」

「当たり前じゃない。せいぜい感謝することね」

「いや、ちょっと待ってくれよ…冗談だろ…」

絶望。それがサイトの心を飲み込もうとしていた。

「母さんや高凪さんに…もう会えないってのかよ…」

「家族？別にいいじゃない。貴族、しかもヴァリエール家の公女である私に支えれるのよ。感謝しなさい」

サイトはルイズを睨らみながら彼女の肩を掴んで喚きだした。

「謝りもしないのかよ……お前は俺から大事なものをすべて奪いやがったんだぞ！」

「平民の癖に生意気言うんじゃないわよ！あんたは黙って私の命令に従っていればいいのよ！！」

「生意気はどっちだよ！？このクソガキ！！」

「くっクソガキですってええ！？」

ルイズだって国でもトップに近い貴族の家系の出だ。それなりのプライドをもっている。サイトのクソガキ発言はあまりにも腹ただしいものだった。

その時、ルイズの部屋のドアが開いた。

「ルイズ、さっきからうるさいわよ！夜ぐらい静かにしなさいよね」

昼間にもいた、あの赤毛の女子生徒だった。

「うるさいわねキュルケ。こいつが使い魔であるのを認めないのがいけないのよ」

「…」

サイトは身を震わせながら顔を俯かせていた。

「あら、どうかしたの？」

キュルケはサイトの顔を覗き込んだ。サイトは少し泣いていた。

「る…ルイズ、あんた何をしたの？」

「何って、そいつ訳もわからないこと言ってるのよ。家族やどうこう…。貴族に支えられるのを全く光栄に思わないのよ。それで泣きべそなんて、使い魔の癖に情けないわね」

「あんた、使い魔や平民をそんなふうに見てたの？授業で何を習ってたのよ？」

使い魔はあくまでも主人のパートナーで奴隷ではない。平民だって人間だ。貴族でもそれなりの節度を知って接するのが鉄則だ。

「魔法もダメなだけでなく、そんな常識も忘れたなんてやっぱりゼロのルイズねえ」

キュルケはそう言って部屋を出た。

「きぃーーームカつく!!」

「…俺はどこで寝ればいい?」

サイトは目を擦ってルイズに尋ねる。ルイズはぶっきら棒にベッドの近くの床の藁を指差した。

(結局こんな扱いかよ…)「で、何してるのお前?」

ルイズは突然服を脱ぎだした。

「何って寝るから服脱いでるのよ」

「ふっふしだら過ぎだろ!服を着なさい!お父さんは許しませんよ!」

「使い魔に見られたってなんとも思わないわよ。」

「じゃあ、じっくり観賞させてもらってもいいってことか?」

ほんの些細な復讐だった。

「……」

しばらくの沈黙、サイトはルイズの着替えをわざとらしく観察した。

「…あーもう!!じろじろ見てんじゃないわよ!!」

ルイズはさすがに我慢できず、サイトを部屋から追い出した。

「最初っからそうしろよ…たく」

サイトは呆れかえりながらも壁に寄りかかった。

「ああ～早く帰りてえ…」

しかしその願いはかなわず夜は更けていった。

タバサ。
それが青髪の少女の名前だ。
火、水、風、土。

全四代系統の内、三つを操れるトライアングルメイジでルイズとは比べ物にならないほどの天才である。
今、彼女は昼間に伝書鳩で届けられた命令で、ある任務についている。
その内容は簡単に言えば、化け物退治だ。

不気味な夜風を感じる森の中、その辺りで何度も化け物によるものと思われる行方不明事件が多発している。

使い魔の竜「シルフィード」から降りて、その化け物を突き止めようと歩き出した。

ちなみにシルフィードは韻竜と呼ばれる特殊な竜で、人間のような会話ができたり、人間とは違う魔法（精霊の力）を使うことができる。絶滅危惧種なものだから、研究者にとっては貴重な研究材料になるので、人前ではしゃべらないようタバサから言われてる。

「お姉さま、お化けが怖いなら無理しなくてもいいのね」

ゴチ！

タバサはシルフィードの頭を杖で叩く。

「きゅいー！痛いのね！」

「しゃべりすぎ…」

実はタバサ、寡黙な第一印象とは裏腹に、お化けが大の苦手なのだ。思い出させたくないことをこんな不気味な場所で「お化け」なんて聞かされたら、さすがに不快だし、いなくても本当に怖くなってしまう。

ガサ！

何かが近づいてくる。

「キェエエエ！！」

突然タバサにどこからか延びてきた触手が襲ってきた。

「！」

タバサはその小柄な体型で素早く避けきり、呪文を唱えると、巨大な氷の槍が形成される。

「ウィンディ、アイシクル…ジャベリン！」

氷の槍が、草影に隠れているであろう触手の本体に振りかかる。

「キェエエエ！！」

その草影から巨大なナメクジが飛び出してきた。

（何…あれ…！？）

タバサは今までドラゴンやグリフォンだけではない。トロル鬼やオークといった化け物は見たことあるが、あのようなものは見たことがない。

全身イボのようなもので覆われた、地球単位で十メートル近くある巨大なナメクジ。

ある世界でそれはこう呼ばれている。

『ブロブタイプビースト・ペドレオン（クライン）』

タバサの魔法は、確かに当たりはした。

だが、ペドレオンにはダメージかなかった。

「魔法が…効かない！？」

いや、効かなかったと言うより避けられたのだ。

ペドレオンはタバサの魔法を食らう寸でのところで、人間を補食するタイミングを伺う時になるゲル状に体を変化させて、タバサの魔法を無力化したのだ。黒い液体となったペドレオンはタバサに近づいてくる。

そして、元の姿に戻ってタバサの体をついに捕らえてしまった。しかも杖までも奪われてしまう。

「あ…！」

「お姉さま！」

シルフィードは主を助けようと飛行し、足の爪で引っ掻こうとしたが、ペドレオンの触手が鞭のようにシルフィードの体を痛めつけ、地上に叩き落とした。

タバサは両手両足の触手を振りほどこうとしたが、全くほどけない。

（私…死ぬの？）

彼女の脳裏に、母の姿が浮かぶ。憎き伯父に心を壊された、唯一の肉親である母親を…

（母様…）

だが、彼女は手に、突然温もりを感じた。
伯父の計らいで死んだ、父親の温もりに似ている。
そして、誰かが彼女に語りかけてきた。

『諦めるな』

タバサは目を開けた。

「……」

いつの間にかナメクジの化け物から解放されている。シルフィードは…

「…お肉美味しいのね～…」

気絶していたが、間抜けな寝言を言ってることから無事のようだ。

ナメクジの化け物はどこに行ったのか？辺りを見渡した時、彼女は驚くべきものを目の当たりにした。

「……！」

あのナメクジのものと思われる黒い液体の水溜まりに、巨大な銀色の拳が突き刺さっている。

その拳はズッ！と引き抜かれた。

その拳の主は、５０メイル（ハルケギニア単位）近くだろうか？

美しい銀色のボディに、赤いＹ字型のクリスタル。そして白く光る眼差し。その目は、どこか暖かみを感じた。

「銀色の……巨人…」

夢かと思った。だが、目を擦っても消えない。

銀色の巨人が自分を助けてくれたのだろうか？

巨人はスウッ…と霧のように消えていった。

Z2　決闘

「痛っ…朝か」

サイトは藁の寝床から起きた。

「目が覚めたら元の世界に戻ってた、なんてことにはならなかったか…」

薄い藁の上で寝ていたものだから背中が痛い。背中をさすりながらルイズを見た。ぐっすり気持ち良さそうに眠っている。

「くそ…のんきにぐーすか寝やがって。こっちの身にもなれよ。おい、起きろ」

ルイズを揺すって起こそうとするが、全然起きる気配がない。

「このクックペリーパイ美味しい～…」

「まだ寝てやがる……」

起こされる身になったことが、これほど腹立つものになったのは初めてだ。

「おい！！起きろーーー！！！！！！！！」

「にゃふ！？」

サイトの突然の雄叫びによってルイズはベッドから落ちた。

「何!?何事!?」

「朝だ」

ルイズはサイトの顔を見てギョッ!とする。

「誰よあんた!?」

「平賀サイトだ。忘れんなよ」

「あー昨日召喚した使い魔ね。着替えさせて」

ルイズはタンスを指差してあくびする。

「それくらい自分でやれ。使い魔は奴隷じゃないんだろ。五歳児でもできることもしないのか、貴族ってのは?」

「う~…わかったわよ。自分でやればいいんでしょ。部屋から出なさい。でも洗濯はしときなさいよ」

「はいはい」

サイトはルイズの服で一杯の洗濯籠を抱え、部屋を出た。

「洗濯するところってどこだ？」

芝生の校庭を歩き回るが、予想以上に広い。一体どこなのか…

「あっあのー…」

「ん？」

サイトは振り向くと、そこには黒髪のメイドの少女がいた。年は、同じくらいだろうか。ルイズのように勝ち気なところは見受けられず、少し大人しい印象だ。

「あなたはミス・ヴァリエールが召喚した使い魔さんですか？」

「知ってるの？」

「ええ、平民が召喚されたと学院中で噂になってますから。あの、お名前は？」

「サイト、平賀サイトだ」

「ヒラガサイト…さん？変わった名前ですね」

「かもな。君は？」

「私はこの学院でメイドをしているシエスタといいます」

「君もメイジ…って言うのかな？」

「いえ、まさか！私はあなたと同じ平民です。同じ平民同士仲良く

しましょうね。
ところで、何をなさっていたのですか？」

「あー、洗濯するところを探してたところなんだ。どこか、教えてくれる？」

サイトは洗濯籠を見せて言った。

「どうして？それは私たちの仕事なんですよ。なんなら私が洗濯しましょうか？」

「いいの？」

「ええ、遠慮なく」

シエスタは明るい笑みで答える。

「ありがとう！女の下着だからちょっと違和感があったんだ」

「いえ、気になさらないでください」

「じゃあさ、俺にも手伝えることないかな？やることあまりないから」

「じゃあ後程にやってほしいことがあったらお伝えします」

「わかった」

サイトはルイズの部屋へ戻った。

ルイズの部屋の扉の前につくと、キュルケが赤い巨大なトカゲ連れていた。しっぽには火が灯っていて、まるでポケ○ンのヒ○カゲをリアルにしたような感じだ。

「あら、ルイズの使い魔じゃない」

「あっ昨日の…えーと…」

なんだったっけ…とサイトは思考する。

「キュルケよ。あなたは?名前まだ聞いてなかったわね」

「平賀サイト」

「ヒラガサイト?変な名前ね」

「ほっとけ」

ムッとして目を背ける。目を背けたのは、怒っていたわけではなく、キュルケの胸元が妙に目立っていたからだ。

「そのトカゲは?」

「サラマンダーのフレイムよ。仲良くしてやってね」

「きゅるる～」

「へえ、危害は無いのか？」

「大丈夫よ。使い魔は主人には忠実だから」

その時ルイズの部屋の扉が開かれた。

「あんた、何ツェルプストーと話しているのよ！」

「なんだよ。話すくらいいいだろ」

イチイチ怒るようなルイズの態度にサイトはどうも好印象を持てずにいた。

「それより朝食は？まさか行かないの？」

「言われなくたっていくわよ」

「そう、じゃあ先に行ってるわね。ゼロのルイズ」

キュルケはフレイムを連れて食堂に向かった。

「うぅ～」

ルイズはキュルケの背を見て悔しそうに歯噛みしていた。

「どしたんだよ」

「キュルケはサラマンダーを呼び出したのに何で私はこんな平民なんかを…」

「仕方ないだろ。呼び出したのお前だし。そういえば、「ゼロ」ってなんだ?昨日から気になってるけど」

「気にしなくていいわよ!」

「朝食はやっぱり焼きたてのクックベリーパイと、お肉たっぷりの子羊のスープね」

アルヴィーズの食堂。こかで生徒たちは食事をとる。ルイズはナイフで肉を切り分けながら朝食を取り始めた。

「ねえルイズ」

「何よ」

「いくら使い魔だからって床で、それも固いパンだけはないんじゃない?」

サイトは床の上に置かれた皿を見た。固そうなパンに不味そうなスープしかない。

「いいのよ使い魔だし。貴族がどれほど偉いか、きっちり教えなくちゃならないもの」

ひもじそうに正座されるサイトを無視するように、ルイズは肉を口に含む。

「私が言ったこと完全に無視してるわね…あんたの言う貴族って、そんなに弱いもの苛めが好きなの？」

「あんたなんかに説教されたくないわよ」

ルイズはキュルケを嫌っていた。女性としても自分より魅力的で、男子からも人気がある。魔法に関してもだ。

そして何より、自分の出であるヴァリエール家とキュルケのツェルプストー家は犬猿の仲だ。先祖代代、恋人をツェルプストー家に盗られてばかりな話を聞かされている。

しかし、最後はただのひがみ話で先祖とは言っても他人事なのに、ルイズはそんな理由でキュルケを嫌っていた。

「ふざけるな…こんな横暴許されないぞ」

サイトもさすがに怒っていた。身が震えている。

「何よ。あんたなんかが貴族の食堂で食事ができるだけでも感謝する事なのに！！」

「それがふざけてるって言ってんだよ。このパン固くて食えねーし。もういい。こんなのしか用意できないならいらない」

サイトは固いパンを食べながら食堂を出た。

「待ちなさいよ！！」

ルイズは止めようとしたが、それでもサイトは話を聞かずに食堂を出てしまう。しかも、食堂にいた生徒たちに笑われた。

「見ろよ、ゼロのルイズが使い魔に見捨てられてるぞ」

「まあ同情するわね…床の上のご飯食べさせるなんて…少なくとも私はやらないわね」

「うぅ～、使い魔の癖に貴族に恥をかかせて…覚えてなさい…」

ルイズは立ち去るサイトの背中を睨んだ。

「まっ当然よね」

（こくっ…）

キュルケの呟きに、隣に座っていたタバサはひそかに頷いていた。

自業自得な癖に、ルイズはサイトの行為に苛立ちながら、食事を終えて授業に向かった。

サイトは学園の庭にある、小さな二階建ての家にきた。

「ここかな?にしても腹へったあ～」

「サイトさん。どうかしました？」

そこに、シエスタが走ってきた。仕事が忙しいのか、結構息が切れている。

「あーちょっと腹減ってね」

「すみません。賄い食しか用意できなくて…」

シエスタは厨房のテーブルの椅子に座るサイトに、賄いとは思えぬ料理を用意した。

「これが賄い？うまいじゃん。なんで残すんだか不思議なくらいだよ」

サイトは美味しそうに飯を平らげた。

「ご飯貰えなかったのですか？」

「固いパンだった。イラッときたから出てきたんだ」

「大丈夫なんですか？貴族の方にそのような態度で」

「貴族がなんだよ。魔法が使えるからとか身分が高いからって威張りやがって！」

昨日の夜から正直サイトは苛立ちの境地だった。見知らぬ場所にいきなり呼び出され、謝りもせず、藁で寝かされ、朝食は固いパンにまずいスープ?誰だって嫌になるわ!

「すごい!サイトさん勇気あるんですね。貴族に媚びたりへつらったりしない立派な姿勢。尊敬しますわ!」

シエスタの言葉は決してお世辞ではなかった。憧れに近い眼差しでサイトを見ている。

「いやぁそれほどでも」

シエスタの明るい笑顔に、ちょっぴりニヤケ面になってしまうサイトだった。

「だってメイジとしての能力と、プライドの高いあの方たちを怒らせてしまったら…魔法の使えない私たち平民は、どうすることもできないんですもの…」

その時のシエスタの顔は、メイジに対する恐怖心で満ちていた。

「…ところで手伝いたいことない?」

沈んだ女の顔が苦手なのか、サイトは話を切り替えた。

「じゃあお昼にまた厨房に来てくれますか?お食事の時間ですので」

「わかった。飯ありがとう!」

「ルイズは教室かな？」

校舎に戻ろうとしたとき、爆発が突然起こった。

「なっなんだ？」

サイトは現場に行くと、
無残になった教室にルイズがいた。魔法の失敗で爆発したらしい。

その後、ルイズは教室の後片付けを命じられた。
一緒に授業に受けていたキュルケの話によると、ルイズは魔法を使う時、必ず爆発を起こすと言うらしい。

（なるほど、ゼロか。まともに使えないって聞いてたけど…）

彼女は魔法が使えない。
それはサイトにもわずかに衝撃的なものだった。

「片付けろよ。さぼらないで」

「うるさいわね。なんで私が…」

自分が教室をダメにしたくせにルイズは片付けをサボっていた。

「お前が教室吹っ飛ばしたからだろ。自分の尻拭いくらいしろ」

「あんた昨日から思ってたけどその態度は何なの？本当に無礼な使い魔ね」

「うるせえ。魔法がまともに使えない癖に、自分のことを棚にあげて人を奴隷扱いするやつに言われたくないね」

サイトはルイズの苛立ちをそのまま返すように言った。

「ゼロのルイズか、笑えるあだ名ですこと」

ピク…

ルイズの眉間にシワが寄った。

「る～る～ルイズは～ダメル～イズ♪魔法な～んかできましぇ～ん♪でも平気！女の子だも～ん♪」

わざとらしくバカにするようにサイトはおかしな歌を歌う。

これも彼なりの、些細な復讐なのだろうか。

「あんたに、何がわかるのよ…」

ルイズの声が悔しさで滲み出していく。バカにされた悔しさは、彼女にとってとても深いものだった。

「魔法が使えない貴族の苦しみが！平民のあんたなんかに！」

しまいには目尻に涙を浮かべている。目を真っ赤にしてルイズはサ

イトを睨み付けた。
そんなサイトの返答は、意外なものだった。

「知るかアホ」

「なっ、なんですって…」

「知るかって言ってんだ。魔法が使える使えないがなんだ?貴族だからなんだ?立場の弱い人間を見下していいのか?」

「……」

その考えは否定できなかった。ルイズはトリステインに、魔法を行使して気に入らない平民たちに暴力をふるう貴族がいるのを見たことがある。彼らは貴族ではない、ただの暴君だと認知していた。
だが、今の自分は何なんだ?本当に彼らより立派な貴族なのか?

「魔法が使えるようになったとしても、お前がそんなんじゃ勿体ないだろ」

「でも、私は…」

「…ルイズ、そんなに魔法でみんなを見返したいのか?」

「…見返したいわよ。当たり前じゃない」

国でも由緒ある公爵家ヴァリエール家の名に泥を塗るような才能の無さ。拭い去りたくてしょうがなかった。

「でもさ、魔法が使えるようになって…その後どうする気なんだ?」

「き…決まってるじゃない！我がヴァリエール家の名をさらに高め…」

「それは本当にお前の意思か？」

ルイズの言葉を遮るように、サイトは口を挟んだ。

「…え？」

「他人に言われるがまま、そんなのは、俺は嫌だな。だからお前にも逆らう時は逆らう。使い魔とか、貴族や平民やどうこうなんて、考えたくない。人形みたいになってたまるかよ」

（人形…！？）

なら自分は、国や家に都合のいい人形だと言いたいのか？

「俺はさ、ずっと見たいと思ってる景色を実現しようと思うんだ」

「見たかった景色？」

「ああ…」

サイトはそこから長く話をした。

自分は産みの親を亡くした後、違う人に引き取られて暮らしてたこと。

ウルトラマンと呼ばれる光の戦士が、宇宙からの侵略者や怪獣から地球を守ってくれたこと。

地球の人々も、その熱意に応えようとしたこと。

「でも、戦争でしかなかった。結局誰かが傷つき、誰かが違う人を憎み、また争う。俺は、ウルトラマンに倒された連中にも大事な人はいたんじゃないかって思ってきた。だから、俺は決めたんだ。いつか地球防衛軍に入って、地球の人も、宇宙人や怪獣も仲良くできる、そんな世界を築いていくって」

ルイズは正直理解しがたいものに感じた。だが少し理解したことはある。敵と馴れ合う？

「あんた…何考えてんのよ！？ちょっと理解不能なとこあるけど、少なくとも争ってた敵と仲良くなれってことでしょ！？冗談じゃないわよ！そんな野蛮な連中と仲良しこよしなんて夢物語…」

トリステインも以前は戦争していた。戦いの歴史も、ルイズは学ばされている。だが、彼女にとって戦争で戦う敵は、単純に悪と割りきっていた。

「確かに、夢物語だって言われるだろうな。でも俺はマジだ。よくよく考えてみろよ。戦争してる相手は、階級の低い兵まで悪なのか？」

「……」

「…ちょっと熱くなりすぎたかな。でも、これだけは言いたい。自分の意思で、夢を持つんだ」

サイトはそう言って教室を出た。

「…」

自分の意思で、夢を持て。ルイズはサイトが言ったことを思い返していた。

食堂でサイトは、シエスタの頼みでケーキを配っていた。するとその時、

「君のせいで二人のレディが傷ついた。どうしてくれるんだ！？」

「もっ申し訳ありません！！」

ルイズの同級生で学園のギザな色男、ギーシュはシエスタが、床に落ちていたモンモランシーというガールフレンドからもらった香水を拾ったのが原因で、二股がバレていた。もちろん、その二人に

「「嘘つき！！」」

とビンタをくらったようだ。だが自分のせいなのに、香水を拾ったシエスタに八つ当たりしていた。

「お許しください…」

「ふん、これだから平民は「おい」なんだい君は」

そこにサイトが見てられず割り込んできた。

「二股かけたの自分なのに、関係のない女の子に八つ当たりなんて最低だな」

「そうだギーシュ、お前が悪い！」

「平民の癖にさすが！もっと言ったれ！」

生徒たちはそれを聞いて大笑いする。自分がいかに孤独な状況なのか身に染みて思い知らされたギーシュだが、平民なんかにしっぽを巻いて逃げたら貴族の恥、そのプライドもあってまた言い訳する。

「君い、もし彼女が知らないふりをすれば二人のレディが傷つくことはなかった。話を合わせるくらいできただろう！」

「話を合わせる？笑わせんな！嘘の幸せなんか、不幸となんら変わらないだろ！」

ギーシュはサイトの言い分にムカムカと目を血走らせた。

「君はゼロのルイズの使い魔だな。貴族にそんな態度をとっていいと思っているのかい？」

「お前が貴族？だとしたら貴族ってのも知れたものだな」

その言葉でギーシュの堪忍袋の尾がプチン！と切れた。

「いいだろう、決闘だ！君に決闘を申し込む！！」

「決闘？ケンカってことか。どこでやるんだ？」

「ヴェストリの広場だ。逃げるなよ」

ギーシュは食堂を出た。

「あなた…殺される…」

シエスタは恐怖に怯えて逃げ出した。

そこにルイズがカンカンに起こってやって来た。

「何してるのよあんた!!今すぐ謝りなさい!!平民は貴族に絶対勝てないのに!!」

「ヴェストリの広場ってどこだ?」

サイトはルイズの話をさらっと無視した。

「あっちだ」

太っちょの生徒が校庭のある場所を指差した。

「無視しないでよ!!マリコルヌも何案内してるの!!」

太っちょの生徒、マリコルヌに怒鳴り付けるルイズを尻目に、サイトはヴェストリの広場へ向かった。

「もう、勝手なことして!使えない使い魔なんだから!」

ルイズはサイトを追いかけて行った。

ヴェストリの広場にて、サイトとギーシュの決闘が始まろうとしていた。生徒たちは、それを観戦しようと周りを囲んでいる。

「逃げずにきたことは誉めてやろう！」

「誰が逃げるか！ギザ野郎」

「ちょっとギーシュ！決闘は禁止されてるじゃない！」

二人の会話にルイズが割り込んだ。

「禁止されてるのは貴族同士の決闘。だが彼は平民。何の問題もない。それともルイズ、君はあの平民にその乙女心をときめかせているのかい？」

ギーシュに変なところを突かれたルイズは顔を赤くした。

「へっ？
ばっ馬鹿言わないでよね！使い魔がボロクソやられるのを止めにきたのよ！」

「君が何を言おうとすでに決闘は始まっているんだ！」

ギーシュは薔薇の杖をふった。すると地面から、鎧を身につけた女性の、青銅の人形が出現した。

「な、なんだこれ！？」

「僕の二つ名は『青銅』のギーシュ。君の相手はその『ワルキューレ』だ。やれ！」

「卑怯よギーシュ！平民相手にワルキューレなんて！」

「黙って見てろ！」

サイトは無理やりルイズを観戦者の方に突き出した。

「あっ馬鹿！前見て！」

サイトが振り向くとワルキューレがサイトの腹を殴った。

「ぐっ…」

青銅は金属の中では脆い方だ。だが人間を殴り倒すには、十分な堅さを誇る。

サイトは腹を殴られて膝を着いた。

「サイト！」

ルイズがサイトに駆け寄った。

「わかったでしょう。平民は貴族に勝てないの」

「やっと名前呼んだか…」

サイトは立ち上がる。だが今の一撃は半端なものではなく、体が少しふらついている。

「でもさっき言ったよな?貴族だからって立場の弱い人間を見下していいのかって。こいつ見てると、ムカつくんだよ!」

「ちょっと待って!止めてー!」

それ以降、サイトはワルキューレに殴られまくった。何回も何回も…骨がイってしまうほど。

「終わりかい?ごめんなさい、と謝るなら許してやってもいいぞ」

ギーシュは、ボロボロの状態で地面に座るサイトを見下すように言った。

「ぐっうるせえ。ちょっと休憩だ」

サイトはワルキューレを見た。

(どうする…あんなの殴ったら腕が砕けちまうし…)

その時だった。

「!?」

サイトの目の前に、銀色に輝く剣が落ちてきた。

「せめてものハンデだ。もし君に戦う意思があるのなら、その剣を取りたまえ」

「ダメよ!それを手にとればギーシュは容赦しないわ!」

「…」

だが、サイトは剣の方に手を伸ばしていく。

「止めなさいって言ってるでしょ！どうしてわからないの！？」

サイトは彼女の目を見た瞬間、少し動揺した。
目尻に涙が溜まっている。

「泣いてんのか？」

「な、泣くわけないでしょ！」

ルイズは恥ずかしくなってサイトの顔を殴った。

「った、殴んなよ…」

それでも、サイトは剣をとろうと手を伸ばす。

「さっきお前に言った夢、俺はまだ諦めちゃいない…」

「いいから、もう止め…」

必死に止めようとするルイズを、サイトは手で払った。

「誰かを傷つけるだけの力に、意味なんかねえ…
俺には…」

サイトは剣の柄を掴み、剣を引き抜いた。

「命をかける夢があるんだ！」

手にとった瞬間、体の痛みがすっかり引いてしまっていた。

「あれ？痛みが…」

よく見ると、左手の「ルーン」と呼ばれる刺青のようなものが、青く光っている。

「だがそんな武器では僕に勝てないぞ！いけ、ワルキューレ！」

だが次の瞬間、サイトの武器の一振りでワルキューレは砕け散った。

周りから歓声があがった。

「おお、すげえな！」

「あの平民速っ！」

「ぐっまだ終わってないぞ！！」

ギーシュは新たなワルキューレを作り出すが次々とサイトの攻撃によって砕け散っていく。

（すげえ…ずっと昔から慣れたようなこの感覚…）

体が自然と、思い通りに動いていく。サイトは不思議な心地よさを感じていた。

「う、うわあああ！」

そしてサイトの武器の剣先がギーシュに向けられた。
「あ、ああ…あ…」
ギーシュは腰を抜かして座り込んでしまった。
「続けるか？」
「まっ参った…」
観戦者から驚きの声が上がった。
「どうなってるんだ！？」
「ギーシュが平民に負けるなんて…」
（…どうなってるの、ホント？）
ルイズもポカンと口を開けていた。
サイトは武器を地面に刺すと、武器は自然と消えていった。そしてどこかへ歩いていった。
「どこ行くのよ！？」
「傷冷やしに行くんだよ。あの野郎おもいっきり殴りやがって…」
キュルケはサイトの後ろ姿を見て、
（ああ、素敵…）
と見とれていた。

タバサは表情を変えないままサイトを見ていた。

学院長室

そこには、緑色の髪の若い女性の秘書と、仙人みたいに髭と髪の長い老人がいた。

「オールド・オスマン。あの平民勝ちましたね」

「あの力は一体…」

そこにコルベールが大慌てで入ってきた。

「オールド・オスマン大変です！あの使い魔の少年のことなんですが…」

何かにピンときたオスマンはロングビルを見て言った。

「ミス・ロングビル。席を外しなさい。」

「わかりました」

ロングビルは静かに部屋を出た。

「あの少年、実は伝説の使い魔、『ガンダールヴ』ではないかと思われます。彼のルーンとガンダールヴのルーンがご覧のとおり一致

しているんです」
コルベールはサイトのルーンのスケッチと『始祖の使い魔たち』という本に書かれていたガンダールヴのルーンを見せた。
確かに、ガンダールヴと呼ばれた者のルーンと、サイトのルーンはぴったり左手に、形も一致している。

「ミスタ・コルベール、このことは他言無用じゃ」

「何故です!?千人ものメイジでさえ歯がたたなかったあのガンダールヴはまさに世紀の大発見ですぞ!」

「だからこそじゃ。王宮に知らせたらどうなる?彼は戦争でその力を利用されてしまうわい…よいな?」

「し、失礼しました!私としたことが、危うくあの少年を利用されるところでした…」

「それでよい。さて、一度外の空気を吸うとしよう」

オスマンは背伸びすると、一旦外に出た。
ロングビルは二人が学院長室から出たあと、そのすきにサイトのルーンのスケッチとガンダールヴのルーンを見た。

「!?」

それを見た瞬間、彼女は何故か驚きを隠せなかった。

「このルーン、あいつのと…まさか…」

ルイズの部屋

「悪い、シエスタ。わざわざ包帯巻いてくれて」

傷を冷やしたサイトの治療のために、シエスタは包帯を巻いて傷口を塞ぐ。

「いえ、お気になさらないでください。私は謝らないといけないのに…」

少し顔を沈ませてシエスタは言った。

「何で？」

「だって私はあのあと逃げ出したじゃないですか。怖かったんです。平民が貴族に勝てるわけないって思ってましたから…でももう怖くありません！だってサイトさんは勝ったんですもの！感動しました！」

「ふん。ギーシュに勝ったくらいで対偶が変わると思ってたんでしょ。めでたいわね。」

シエスタの明るい反応とは対照的に、ルイズはそっぽを向いてる。

「でも今回は許してあげる。武器も今度の休みの日に買ってやるわ。でも言うことはきっちり聞きなさいよ」

その時、ギーシュとモンモランシーが入ってきた。

「ルイズ、使い魔君はいるかい！？」

「ギーシュ！？」

女子寮にも堂々と踏み込むとは、さすがはギーシュ。だが今回はきちんとした理由でやって来たのだ。

「さっきはすまなかった。許してほしい」

ギーシュはサイトに頭を下げた。

「どしたんだよ急に？」

「ギーシュったら、あなたのこと気に入ったみたいなのよ。別に変な意味じゃないわ。貴族や平民といった壁を越えた友人になれそうだって言ってたし」

「よ、余計なこと言わないでくれモンモランシー…」

気恥ずかしそうにギーシュは俯いた。

「別に気にしてないよ。謝るならシエスタに謝ってくれ」

「ああ、そうだね。君もさっきはすまなかった」

ギーシュは言われた通り、シエスタにも頭を下げた。まさか貴族に頭を下げられるなど、想像したこともなかった彼女はオドオドしている。

「いえそんな、私が貴族様に謝られるなんて「ここにいたのねダー

リン！」へっ？」

突然キュルケが入ってきて、しかもサイトに飛び込むように抱きついてきた。

「だっダーリン！？」

「ギーシュを倒したときのあなた素敵だったわあ。ねえ、私と愛を育まない？」

「ちょっとキュルケ！私の使い魔に何手をだしてんのよ！」

「別にいいじゃない。あなたは彼に惚れたわけじゃないんでしょ。なんならここでご褒美のキスを彼に…」

キュルケはあろうことか、無理やりサイトの顔を自分の唇に近づけてきた。

「ええ！？いやちょっと待ってくれ！！おおお俺はそう言うのは…」

「要らんことしてんじゃないわよ！！」

「そうです！サイトさんから離れてください！！」

妙にルイズとシエスタから強い女のオーラを感じだキュルケは大人しく退いた。

「ヴ…ライバル多いわね…」

（ああ高凪さん…Ｈｅｌｐ　ｍｅ…）

来もしない助け船を求めて外を見るサイトだった。

「ん？」

サイトは外が、妙に慌ただしい状況であることに気づいた。何やら、火が校舎に回っている。

「どうしたのよサイト」

ルイズも窓の外を眺めた瞬間、彼女の顔はサァーッと青くなった。

「か、火事！？」

「え！？」

「火事」という単語にみんなが反応した。

一同全員が窓の外を見ると、確かに校舎に火の手が回っている。

「急いで消さないと！」

ルイズたちは部屋を出てすぐ校庭に向かった。

「サイトさん、動けます？」

「なんとか平気…かな」

自分たちも外に避難しなければならない。

シエスタに支えられる形でサイトは寮から出た。

火は勢いよく燃え盛っていた。

だが、火事よりも強大な脅威が、その場にいた者たちを驚愕させていた。

その驚愕が最も大きかったのは、サイトだった。

「そんな…バカな…」

テレビで見たことがある。

確か、ウルトラマンメビウスが、地球で戦った三番目の怪獣。

そしてその昔には、ウルトラ兄弟六番目ウルトラマンタロウと一番目ゾフィーを倒したことのあるとされている怪獣。

「火山怪鳥…『バードン』!?」

Z3　ゼロ、参上！

M78星雲光の国

ここには、ウルトラマンと呼ばれる超戦士たちが住んでおり、宇宙の平和を守るために永い間、侵略者と戦い続けてきた。

そんなある日のこと…

「……」

ウルトラセブンの息子である若きウルトラ戦士、ウルトラマンゼロは、宇宙警備隊本部で父親を待っていた。

「ゼロ」

赤いマントを羽織ったウルトラセブンがようやくゼロの前に現れた。

「おせえぞ。親父」

「そう言うな。完成にかなり時間を費やしてな」

セブンはゼロに、青く細長い三角形のアイテムを手渡した。

「すげえ…触っただけで力がみなぎる感じがする」

「『ウルトラゼロブレスレット』。お前のために作った特注品だ。無くしたりするなよ」

「サンキュー、親父。これなら、怪獣が百体現れても余裕で勝てるぜ」

ビシッ！とガッツポーズを決めるゼロ。

「こら、調子に乗るな。やっぱり、まだまだ子供だな」

「おい、ガキ扱いすんなよ！」

「だから平気でレオの修行をサボれるんだな」

「う〝…」

そう言った時、ゼロは自分の背後にとてつもない気配を感じた。光の国は、プラズマスパークコアと呼ばれる人工太陽がある。遥か昔、まだ地球人と全くと言っていいほどそっくりだった頃の光の国の住人たちが、消滅した太陽に代わるものとして作り、その膨大なエネルギーを浴びたことでこの星の人々はウルトラマンとなった。同時に、その暖かいエネルギーはこの星に冬をもたらさない。だからこの国のウルトラマンは寒さに弱い。だが、今ゼロが感じ取ったのは、その寒さ以上に背筋を凍らせた。

「ぜぇ〜ロぉ〜…」

ウルトラセブンの弟子であり、ゼロの師である、ウルトラ兄弟七番目の戦士、ウルトラマンレオが凄まじい威圧感を放出して立っていた。

「れ、レオ?あいや、師匠?あの〜、ご機嫌悪そうですが…?」

ゼロは目上の相手も呼び捨てにするほど口が悪い。なのに、なぜがわざとらしく下手な敬語を使った。

「当たり前だ…お前、この前俺が出した課題をサボってたよな…？」

「か、課題？それは何のお話で…」

「すっとぼけるなこのくそガキゃあああああ！！！！！！！！！！」

〈レオキック！〉

数々の強敵を倒したレオの必殺キックが、ゼロのこめかみにクリーンヒット。

鬼コーチモード全快である。

「ぎゃあああああ！！！！！！！！！」

「…」

セブンは目を背け、他人のふりをしている。

「ちょ…親父見てないで助け…」

レオにヘッドロックを喰らい、父に助けを求めるゼロだか、セブンは口笛を吹いている。

「怪獣が百体現れても余裕で勝てるのだろ？なら、レオが相手でも勝てるんじゃなかったのか？」

「前言撤回！お助けえええええええ！！！！！！！！」

ヌゥーーーーン…

ゼロは、昭和のボクサーマンガで活躍した主人公のように、真っ白に燃え尽きていた。
あの後、レオに通常の何倍もの重さがあるトレーニング用プロテクター『テクターギア』を装着され、そこからレオとマジ勝負を強いられたため、エネルギーが違う意味で尽きかけていた。

「またサボって罰を喰らったのか？相変わらずアホな奴だ」

そこに現れたのは、宇宙警備隊大隊長と同世代のウルトラ戦士がやって来た。

「ベリアルの、おっさんか…今話しかけんといて…」

「ったく、お前は親父と違って本物のバカだな。罰を喰らいたくなきゃキチッと課題や修行をこなせばよかったんじゃないか」

「だってよ～レオの奴容赦ねえんだぜ。この前骨折られたし」

ゼロは右腕をぶらぶらさせて言う。以前右腕をへし折られたようだ。

光の国の医療技術がすぐれてなかったら、全治何ヵ月になったことか…。

「その分お前が未熟なだけだ。もっと精進しろよ。お前はいつまでもガキでいるわけじゃねえんだ。
俺だって、今だにケン（ウルトラの父の本名）を越えられず、あいつの影を追ってるままだ。でも、めげたって仕方ねえから、真面目に修行してんだ。歳を食いまくった今でもな。
だからな、お前も無限の可能性に賭ければいい。お前の名前『ゼロ』はその可能性があると信じた父親からもらったもんだ。だからセブンやレオ、警備隊のみんなの熱意に応えてみろ」

「へ～へ～、真面目ですこと」

ゼロは説教嫌いなものだからベリアルの話を半分くらいしか聞かなかった。

「ん？」

ゼロの真上に、ウルトラ戦士独特の暗号『ウルトラサイン』が浮かび上がる。

「『地球圏内の警備に当たれ』…か」

「ほら、行ってこい」

「へ～い」

ベリアルに背中を押され、ゼロは父からもらったウルトラゼロブレスレットを左腕の手首に装着、地球付近の警備に当たった。

「可能性…か。私ももっと進化したいものだな」

ベリアルは空を見上げて、一人黄昏ていた。

「えっと、ここが地球…か？」

セブンや他のウルトラ兄弟たちに言われた通りの方角を頼りに、彼は宇宙へと飛び立ったが、

「あれ？地球って…月が二つだったか？」

妙だ。確か話では月は一個だけだったはずだ。

でもその他はちゃんと緑に覆われ、青い海が澄んで見える美しい星。

聞いていた通りの地球だ。多分…

「せっかくだ。いっちょ立ち寄ってみるか」

だか、ゼロはそのアホで単純な性格が災いとなったせいか、全く気づいてなかった。

なぜなら、その星は地球と似て非なる星なのだから。

「バァアアア！」

突如、魔法学院に現れたバードンの火炎放射で学院中が消化活動や怪我人救助でパニック状態に陥った。

しかし、貴族たちは逃げ惑う衛兵たちを見下すような目をしている。

「ミスタ・ギトー、ここは我ら貴族の力でなんとかすればよろしいではありませんか。
我々貴族の魔法は始祖ブリミルより与えられし神聖な力。あんな野蛮な怪物ごときに負けるはずがないでしょう」

「そうですな。家畜同然のあの野蛮な悪魔に我らトリステイン貴族の力を思い知らせてやろう」

明らかに、立場が弱いとは言っても同じ人間を見下している発言だった。

教師や腕に自信のある生徒たちは暴れるバードンに向かって杖を向け、呪文を唱え、一斉に自らの魔力を放出した。

「ライトニングクラウド！」

「フレイムボール！」

「エア・カッター！」

雷、風の刃、炎弾がバードンに炸裂した。

「わはははは！どうだ！命知らずの野蛮な化け物め！我ら貴族の魔法の恐ろしささえ知っておれば死なずにす…」

しかし、彼らの顔が一瞬にして恐怖の色に染まった。バードンには、全く攻撃が通じなかった。

それもそのはずと言える。地球の歴代防衛チームは少なくとも、この世界の魔法より威力がはるかに高い兵器をいくつも所持している。もし魔法で勝てたら、地球人はウルトラマンなど必要なかったのは確定的だ。

「なっ、何をしておる衛兵！さっさとあの化け物を片付けろ！」

遂には、恐怖心にかられる教師たちの中には、魔法の使えない衛兵たちを無理やりバードンに突き出そうとする者がいた。しかし相手は炎を操る未知の怪物。魔法でダメだったのに剣と槍しか使えない人間で勝てる相手じゃない。

「無茶をおっしゃらないでください！我々の手に負える相手ではございません！」

「黙れ！私の権力をもってすれば、貴様を重罪に処することもできるのだぞ！それが嫌ならあの化け物を倒せ！」

なんとも愚劣な脅しなのか。サイトはその教師を鋭い目付きで睨む。勢い余ってにらみ殺してしまいそうだ。学院長であるオスマンと同

僚のコルベールは、その貴族たちの愚かな行為に失望感漂う表情を浮かべていた。

「くそ…どうする…どうしたらいい…！」

サイトは無力な自分を呪った。せめて、自分にみんなを守るだけの力さえあれば…

とその時、青き目映い光が、バードンにぶつかり、地上に降り立った。

「ガアア！？」

一体なにが起こったのか、誰も理解しきれなかった。しかし、その光の正体を見た人々は、眩しさを忘れ、その姿を凝視する。

「…お前の相手は…」

その青き光の巨人は、ゆっくり立ち上がってバードンの方をを振り向く。

「この俺だ！」

ウルトラマンゼロが、異世界ハルケギニアの大地にその姿を現した。

「な、何あの巨人！？」

サイトを支えてたシエスタは驚きの声を上げた。

「ウルトラマン…！」

「え…サイトさん、ご存知なんですか？」

シエスタがさらに驚いたのは、サイトがゼロの姿に感涙していたことだった。

「ああ、間違いない。始めてみる奴だけど、お馴染みの胸のカラータイマーもあるし、あの姿…どこからどう見ても、見間違いなんかできねえ…
俺の故郷をなんども救った戦士…
ウルトラマン！」

そのサイトの言葉を聞いていたタバサは、あの夜のことを思い出した。
自分を助けたあの銀色の巨人が、自分に向けてくれた眼差しを…。

「ウルトラ…マン…」

（参ったな…多分ミスったな。ここやっぱり地球じゃなさそうだ…）

ゼロはやっと勘違いに気づいた。他のウルトラ戦士から、地球には

すでに機械文明が発展して、各国に防衛チームがパトロールしていて守りは固く、平和な一面が強いと聞かされていたのに、この星に機械なんか全く見当たらなかった。
だかそこで見かけたのが怪獣バードン。人々に危害を加えるのを放っておくわけにいかない。

「ジュア！」

ビシッ！とファイティングポーズを決めて身構えるゼロ。

「ガアア！」

バードンはゼロに向けて翼をバタつかせて、突風を巻き起こした。

「デュ！？」

「うわ！」

その凄まじい突風のせいで火は消滅したが、ありがた迷惑な消火活動にも程があるその風は、ゼロの姿勢を崩してしまう。

「グゥゥ…」

ゼロは頭に装着された二本の宇宙ブーメランを手にとり、バードンに投げつけた。

〈ゼロスラッガー！〉

「ジュア！」

ゼロスラッガーは風を切ってバードンに近づき、バードンの体にぶつかった。

「キェェエ！！」

（よし…このまま一気に…！）

突風が止まったのを見計らい、ゼロはバードンに突出したその時だった。

バン！と小さな爆発がゼロに当たった。ダメージはなかったものの、いきなり誰が攻撃してきたのか？バードンとは別の新手なのか？と最初は思ったが、予想外な答えだった。

「ファイヤーボール！」

ルイズだった。ルイズはゼロを敵と見定め、彼に失敗魔法をぶつけているではないか。しかし、ウルトラマンの存在が知られていないこの世界では仕方ないことだとも考えられる。だがルイズの行動は、明らかに命知らずの無謀なものだった。

「ば、バカ！何やってんだルイズ！」

ギーシュとの決闘でボロボロになったのに、どこにそんな体力が残ってたのか、サイトはルイズの元に走って彼女から杖を取り上げようと彼女を取り押さえる。

「離せ、離しなさいよ！」

「何考えてんだ！お前、バードンに魔法が通じないのはその目で見

ただろ！ましてや、ウルトラマンの邪魔なんかしやがって！」

「黙りなさい！あれがあんたの言うウルトラマンとは違うかもしれないじゃない！とにかく邪魔よ！ここであいつら二匹ともやっつければ、誰もゼロだなんて…」

再びルイズの失敗魔法が放たれた。次に当たったのはバードンだった。

バードンはルイズの攻撃を目障りに感じ、ルイズと彼女を取り押さえるサイトに向けて火炎を放射した。

「きゃ…！」

しかし、ゼロが二人の前に駆けつけ、ブレスレットを硬質な盾に変化させてバードンの炎を防いだ。

〈ウルトラゼロディフェンダー！〉

学院中の人々は、驚きを隠せなかった。得体の知れない巨人が、たった二人の人間のために危険をおかしてまで助けに来たのが信じられなかった。

「あの子達を、守ったのか？」

「我々を、助けにきたのか…？あの巨人は…」

ゼロは二人を向いて、落ち着いて語りかけてきた。

「あぶねえだろ、あっち行ってな…」

「ウルトラマン、ありがとう！助かったぜ！」

サイトは礼を言ったが、ルイズは言わなかった。それどころか…

「あんたねえ、ウルトラマンだがなんだか知らないけど、貴族に向かってその口の聞き方は何よ！？」

（はあ！？）

ある意味見事なものに見受けられるが、さすがに言われたゼロ本人は愚か、サイトもこれには呆れ返った。

「ルイズ、いいからウルトラマンに任せて下がるぞ！」

無理やりルイズを引っ張りながらサイトは、ゼロとバードンの戦場から離れた。

「シュ！」

ゼロは再びバードンの攻撃に備えて身構える。

「キェェエ！！」

バードンは炎が効かないと理解し、最後の切り札を使うことにした。高く羽ばたき、ゼロに突撃していく。

（へっ、自分から殺られに来やがるとは…）

余裕の姿勢で再びブレスレットに手をつけようとしたが、その刹那、サイトの必死の叫び声が聞こえてきた。

「ダメだウルトラマン！そいつの嘴には毒が！」

「！」

ゼロはその声に反応し、かろうじて突出してきたバードンの嘴から逃れきった。

それからバードンはゼロの隙を突くように牽制用の炎を吐き、それを回避するゼロの背後を突こうとする。その繰り返しが続き始めた。

（くそ…どうする？）

「ちょっと、どうしたのよサイト？血相変えて」

ルイズはサイトの顔を見て知らず知らずのうちに心配そうになる。

「ダーリン、何か知ってるの？あの鳥の化け物について」

「…」

キュルケとタバサもそこにやって来る。

「俺が生まれる前、あのバードンの同種族が俺の故郷に現れた。そ

の時、タロウとゾフィーって名前のウルトラマンがバードンと戦ったけど、二人ともバードンに負けて、危うく命を落とすほどの重傷を負わされたんだ」

一同の顔はサアーッと青くなった。あの巨人の同族を二人も倒した怪獣。そいつが、最後の希望となったゼロを倒す可能性は高いことになる。

「しかも俺の知る限り、ウルトラマンは地上ではその姿を保つのに多量のエネルギーを使う。だから、戦える時間はほとんどない。胸のカラータイマーはそれを教えてくれる役割があるんだ。もし赤くなって点滅し、消えたら…」

「ど、どうなるの？ダーリン」

「ウルトラマンは…死ぬ」

さらに絶望の風が吹いた。

「基本的に三分と持たないウルトラマンが普通だった」

「そんな、どうしようもないじゃない！そんな化け物相手にしたら…」

自分たちは確実におしまいだ。

「いや、まだ手はある」

サイトは無理やりな作り笑いを浮かべた。

「バードンの嘴にはウルトラマンを倒せるほどの猛毒がある。嘴の近くにぶら下がってる袋があるだろ？あそこに毒がたっぷり溜まってる。
でも、そこが弱点なんだ。毒袋の付け根にある静脈を狙えば、毒が逆流してバードン自身が毒を浴びることになる」

「でも、自分の毒があいつに効くの？」

尋ねるルイズに、サイトは簡単な例えで答えた。

「蜜蜂は自分の毒で死ぬんだぜ」

サイトは校庭にいる人たちに呼び掛けた。

「誰か、魔法がかなり得意で空中をビュンビュン飛び回れる奴、いないか！？」

今言ったことに適応する人間さえいれば、ウルトラマンを助け、バードンを倒すきっかけを作れるかもしれない。
できれば自分が生きたいが、無力すぎるので仕方ない。

「ふざけるな平民の癖に！」

「我々にあの化け物の相手をしろと言うのか！冗談にも程かあるぞ無礼者め！」

さすがに、誰も簡単に行こうとしない。あの怪獣は決して弱くないのだから。
だが、そこでタバサが手をあげた。

「私が行く」

「ちょ…タバサ！？」

キュルケは驚きのあまり目を見開いた。

「シルフィードに乗って、私の魔法を使えば…」

「でも、珍しいじゃない。あなたがこんなに積極的な顔になったの、初めて見たわ」

「…」

タバサは口笛でシルフィードを呼び、その背中に乗る。

「タバサ、私も行くわ。ダーリンも必死なんだもの。応えなくっちゃ」

「……ありがとう」

キュルケとタバサを乗せ、シルフィードは空へ羽ばたいた。

「後は、二人がうまくいくように牽制役が必要だな…」

後は誰がいるだろう？

「私がやるわ」

意外にも、ルイズが杖を掲げた。

「ルイズ！？」

「私はウルトラマンを信じてない。あんたがどれだけ憧れても、本当に私たちの味方かどうかなんて知ることできないもの。でもね、このまま引き下がったら、ヴァリエールの名に傷がつくわ！」

「ルイズ…」

サイトの笑みにルイズはつい顔を赤くした。

「か…勘違いしないでよね！これは自分のためであってべ…別にあんたのためじゃないんだから！」

「待ちたまえ、私も行こう」

ルイズを引き留めるように、コルベールも前に出た。

「生徒を守れなくて、教師など名乗ることは私にはできない。だから私も行かせてもらうよ」

「ミスタ・コルベール…」

「さあ、行こう！」

ゼロは苦戦を強いられていた。空を飛ぶバードンは素早く、眼前で毒がたっぷりの嘴が何度も飛び込もうとする。

「デュア！」

なんとか懐に潜り込み、バードンの体を締め付けて動きを無理やり止めさせた。

それでも、バードンはもがきながら嘴をゼロの背中に突き刺そうとする。

しかし、そこでルイズとコルベールの魔法が炸裂した。

「エア・ハンマー！」

「炎の蛇よ！」

ルイズは本当のエア・ハンマーとは異なる爆発魔法、コルベールは炎の蛇を作り出してバードンの頭を攻撃する。目の辺りに偶然にも当たったため、バードンの視界は一時潰れてしまう。

「今よ！フレイムボール！」

「エア・カッター！」

シルフィードの優れた飛行能力でバードンの毒袋の近くに潜り込んだ二人は、付け根の静脈に向けて炎弾と風の刃を放った。

「ぎ…ギョアアアアア！！！！！？」

二人を乗せたシルフィードは急いでバードンから離れた。
毒袋の付け根を攻撃されたせいで毒が逆流し、バードンは苦しみ出す。

「今だウルトラマン！」

サイトの呼び掛けに応えるように、ゼロは額のビームランプから必殺の閃光を発射した。

〈エメリウムスラッシュ！〉

「デュア！」

「ギョアアアアア……」

ゼロの緑に輝く閃光をその身に喰らったバードンは、死んだようにその場に倒れた。

「やった…やったああ！」

わあああ！と学院中から歓声が上がった。
やっと悪夢から解放され、生きた心地を味わう彼らの姿は、ゼロにとっても微笑ましい光景だった。

タバサはシルフィードに乗りながら、あの時自分を助けた巨人に似たゼロに、感謝の眼差しを向けた。

（ありがとう…また、あなたたちに助けられた）

ゼロはサイトの方を向くと、ビシッ！とサムズアップした。彼は内

心、サイトに感謝していたのだ。もしサイトがバードンの弱点を知らなかったら、負けていたかも知れなかったのだから。
サイトもそれに応え、サムズアップを返した。

「はあ…生きた心地がしないわ…」

ルイズは疲れきったように言った。確かに、昨日まで平和な生活を送ってた者にとってはしんどいものだ。

だが、悪夢はまだ終わらなかった。

「キュオオ…！」

「！」

バードンはまだ生きていた。ゼロに復讐しようと、その嘴を振り上げる。でも視界がはっきりせず、ふらついている。結局今度こそ絶命し、倒れていく。
だが、倒れた先にルイズがいた。

「ルイズ、危ねえ！」

サイトはルイズに嘴が降りてくる寸でのところで、彼女を突き飛ばした。

ズン！

嘴はそのままサイトの真上から落ち、サイトはバードンの下敷きとなってしまった。

「さ、…サイト……？」

ルイズの呼び掛けに、サイトは応えない。

「サイトおおおお！！」

「…あれ？」

サイトは目を覚ました。

だが、そこは地球でもハルケギニアでもない。ただ、辺りが赤く輝いてるだけの空間だった。

「ここは…？」

「気がついたか？」

その声に反応して振り向くと、そこに等身大のウルトラマンゼロが立っていた。

「ウルトラマン…！」

「済まなかった…お前のおかげで俺はバードンを倒せたのに、不慮の事故とは言え、お前を傷つけた…」

「…別にいい。あれはお前のせいじゃないよウルトラマン。地球の人たちはウルトラマンに助けられてばかりだった。でもその地球人を強くしたのもまたウルトラマン。せめてもの恩返しができてよかった」

メビウスが地球にいた頃、当時の防衛チーム『ＧＵＹＳ』。メビウスと彼らは、互いの存在を理解し、共に仲間として戦い抜いた。サイトも、そんな彼らの必死の努力で何度も命を救われた身、一度だけでもウルトラマンに恩返しをしたかった。

「でも…」

「どうした？」

「地球に、大事に思ってる人がいる。最後に一度だけ…会いたかったな…」

もう自分は死んだ。ルイズを助けるためにその身を投げ出したのだ。

「安心しろ。お前はまだ死んじゃいない」

「え？」

「危ないところだったんだぜ。お前を助けようと、お前の肉体が死ぬ前にあの桃髪のチビっ娘が治療を周りの奴に呼び掛けてたんだ。高そうな薬まで買ってよ」

ルイズが…俺を…

ゼロは指をパチンと鳴らすと、現実世界のものと思われる映像が映された。
自分を必死に看病するルイズ、それを手伝うシエスタやギーシュ、タバサ、モンモランシー、キュルケの姿が見える。

「知らない間かも知れねえが、お前はいい仲間を持ってんだな」

「みんな…」

サイトは感激のあまり少し涙ぐんでいる。

「さて、本題に入るとしようか」

「本題？」

ゼロの言葉にサイトは首を傾げる。

「このままあいつらが頑張ってもお前は運よくても、植物状態で目覚めるか半身不随かも知れない」

「え、ちょっと待ってくれ！助かったんじゃなかったのかよ！」

「落ち着いて聞け。だからな、俺の命を、お前にやるよ」

「お前の命を…俺に？」

「そうすれば、お前は俺と一つになって蘇れる。俺は正直感動したぜ。お前の男気と仲間の活躍にな」

「いい…のか？じゃあ俺は、お前になるってこと…」

そう、それはサイト自身がウルトラマンゼロそのものとなることだった。

「いいのかって？逆に俺が言いたいさ」

「何でだ？」

「実はな、地球人と同化したウルトラマンは結構いる。だがそいつらのほとんどが同化による人格融合で元の二人に戻れなくなる可能性があるんだ。しかもこれから先、お前は俺となって何万年も戦い続けなくてならなくなっちまう。だから選択肢を二つやる。このまま楽になって死ぬか、それとも俺と一つになって戦い続けるか」

サイトは正直迷っていた。ウルトラマンに対して憧れてはある。一度はウルトラマンになりたいとも子供の時思っていた。だが現実はかなり厳しい。もしウルトラマンになればこれから先、数々の怪獣や侵略者と戦い苦しむのは確実…

だがそれだけではなかった。

（誰かを、傷つけるのか…）

異星人にも話が通じる奴はいるだろう。そんな奴と戦うのは、彼には苦しい選択だった。

「さあ、どうする？」

「……」

サイトは決意して顔を上げた。

「わかった。お前の命を俺にくれ！」

サイトは二つ目の選択肢、ウルトラマンとなって戦う道を選んだ。

「…ふっ、それを待ってたよ」

「待ってた？」

「お前なら、後者を選ぶと思ってたぜ。戦闘狂だからって訳じゃない。
お前が、バカなほどに優しすぎるからさ」

ゼロはゆっくりとサイトに近づいていく。

「今日からお前が、『ウルトラマンゼロ』だ」

「あ…」

サイトは目を覚ました。

「痛っ…」

身体中傷だらけで痛い。

それにしても、さっきのは夢だったのだろうか？

「…！」

しかし、夢ではなかった。左腕の手首に、ゼロが身に付けていたウルトラゼロブレスレットが装着されていたのだ。

外は、バードンの炎のせいもあって焼けてる部分がたくさんある。

少し、頭が痛い。

その痛みと共に、光輝く世界のビジョンが彼の頭に浮かび上がる。

（記憶も、共有されたのか）

自分は、本当にウルトラマンになったのか。

でも、いまだ実感が沸かなかった。

「…！」

自分の寝ているベッドにうずくまる形でルイズが眠っていた。目の下にくまができている。

「あ！サイトさん！」

そこにシエスタが入ってきた。

「シエスタ、俺は…」

「よかった、本当に無事で…」

彼女は嬉しさのあまり涙している。

「あれから三日も経ったんですよ。その間、ミス・ヴァリエールは高価なお薬を買ったり同級生の水のメイジの方々にサイトさんの治療を頼んでたり、もちろん私も大変でした」

「ごめんな、世話かかせて…」

「いえいえ！サイトさんには一度助けられたんですもの。でも、あの時はすごかったですね」

「ウルトラマンの、こと？」

シエスタはコクッと頷いた。

「サイトさんがおっしゃってた通りでしたね。ウルトラマンさんは、本当に私たちを助けてくださいました。貴族の方々は、トリステインの大地が遣わした平和の使者だとか、始祖ブリミルの残した神様だとか、果ては始祖ブリミルの化身だとか噂されてます」

「始祖ブリミル？」

サイトには初耳な言葉だった。

「始祖ブリミルをご存知ないんですか?始祖ブリミルは、貴族様のご先祖様たちに魔法の力を与えられた、簡単に言えば神様なんですよ」

「神様…か」

ゼロと同化したこともあり、ゼロの記憶の中であることが思い浮かんだ。

父、ウルトラセブンから学ばされた知識だ。

『ウルトラマンは決して神ではない』

ウルトラマンたちの鉄則でもあった。調子に乗れば身を滅ぼすという警告とも言える。

「でも私、ウルトラマンさんよりもサイトさんがかっこよく見えました」

「へ?」

シエスタの顔を見ると、彼女の顔は恥ずかしがってるのか赤くなっていた。

「そう言えばサイトさん、ウルトラマンさんは他にもいるんですか?」

「うん、いるよ」

ゾフィー
初代ウルトラマン
ウルトラセブン
ウルトラマンジャック
ウルトラマンエース
ウルトラマンタロウ
ウルトラの父
ウルトラの母
ウルトラマンレオ
アストラ
ウルトラマンキング
ウルトラマン８０
ユリアン

そして、
ウルトラマンメビウス
ウルトラマンヒカリ

他にも、ネオスといった様々なウルトラマンが短期間だけだが地球に現れた。

噂では、アメリカやオーストラリアにもウルトラマンが現れたこともあるらしい。

「あのウルトラマンは、俺に名前を教えてくれた」

「名前、どんな名前でした？」

サイトは微笑して答えた。

「ゼロ……ウルトラマンゼロ」

シエスタはそれを聞いた瞬間、顔を引きつらせた。

「どうしたのシエスタ？」

シエスタが恐る恐る指差した方向に、黒い思念の塊が見える。

サイトはハッ！と思い出した。ルイズに『ゼロ』は禁句だった！

「へえ…ウルトラマン『ゼロ』って言うんだあ…」

目を覚ましたルイズが鞭を手に、鬼の形相でサイトを睨んでいる。

「ちょ…待ってくれルイズ…決してお前をバカにしたくて言ったんじゃなくて、本当にあのウルトラマンが自分で名乗ってたんだ…それに、おかしな名前つけるわけにはいかないし…な？だから、鞭を下ろして…」

サイトは必死に弁解するが、今のルイズには焼け石に水だった。

「この…」

本来は馬に使うルイズの鞭の雨が、サイトに降り注がれた。

「馬鹿犬うううううううう！！！！！！！！！！！！！！」

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！！」

しかし、シエスタが巨人の名前がウルトラマンゼロだと喋ってから、たちまち巨人の名前は『ウルトラマンゼロ』に定着した。
そしてルイズは、ウルトラマンゼロと比べられてさらにバカにされてしまい、その怒りの矛先をサイトに向けるのだった。（笑）

Z４　もう一人の…？

浮遊大陸アルビオン
「白の国」の異名で他国に知れ渡っている国だ。
その国の空から、トリステインの森に向かって、神秘的な紅の光が飛来した。その光は森の中に消え、その輝きのおさまった場所に突然大きめの小屋が現れた。
その小屋の真正面にハルケギニアでは珍しい、整った顔立ちに黒髪の青年が、短剣に似たアイテムを握りしめ、それを見つめていた。

「俺に…何を望む？」

『一体どこで何を遊んでる！？』

テレパシーでの、レオからの通信にゼロ（サイト）は頭に頭痛を感じる。

『し、仕方ないだろ！怪獣が出てきたんだ。だったら対処するのは当然だろ！』

『確かにそうだが、なぜ戻ってこようとしない！？』

『ま、まあいいじゃんか！もしかしたらこの星に怪獣がまたでるかもしれないし、しばらくこの星の防衛に当たるから。んじゃ、そう

いうことで！』

『こら、待てゼロ！』

丸く納めるゼロに説教を食らわせようとしたレオだったが、ゼロは軽く無視して通信を切った。

「ふう、普段から楽じゃないよな…ウルトラマンも使い魔も。帰り道がわからないなんて言えねーし…」

サイトは額の汗を拭く。同化した影響なのか、知らず知らず、レオに殺されるのでは？という恐れを抱くようになってしまったとか。

「シエスタ、今日も飯頼むよ！」

今日も学院に平和な朝が訪れ、サイトは朝食を食べに食堂に入ってきた。だが…

「あれ？いないのか？」

いつもならすぐ目につく場所にいるのに、シエスタの姿が見当たらない。

「おう我らの剣！どうした？」

「あっマルトーさん」

マルトーは食堂の料理長を勤めている。サイトのことは彼がギーシュに決闘で勝利して以来気に入っている。怪獣を相手に体を張った姿にも惚れたと本人は言っていた。

「あの、シエスタ知りませんか？」

「ん？シエスタから聞いてないのか？」

マルトーは説明した。シエスタは実は今朝、モット伯爵の使用人として雇われたため、学院を出たのだ。

難しい知識に疎いため意味はわからないが、「妾」としてらしい。

「そんな…」

「所詮平民は貴族に勝てないのさ。さあ仕事だ仕事」

マルトーはそのまま去っていった。

「シエスタ…」

ルイズの部屋

ルイズは髪をとかし、サイトは窓拭きをしている。

「モット伯爵は王宮勅使の方よ。私は偉ぶってて好きじゃないけど」

「でもなんたってシエスタがそんなとこに…」

「考えられることと言ったら、妾は「そいつの女」になれってこと」

サイトは思わず絶句した。女にとっては、それはなんとも酷い話だ。

「じゃあシエスタは好きでもないのに、そいつの女になるってのか!?」

「貴族の間じゃよくある話よ。仕方ないわ」

「そんなの…あんまりじゃないか！自分の意思を、どれだけ無視されてるんだよ、この世界の平民たちは…」

「落ち着きなさいよサイト。あんた傷がやっと治ったばかりなのよ。使い魔は主の世話しっかりしないといけないんだから、シエスタのことは諦めなさい」

「……」

サイトは窓から夕日を眺める。

学院のホールの噴水で、モンモランシーとギーシュは隣り合わせで座っていた。ギーシュに至っては、手作りの指輪をプレゼントしている。アホな感じの割には（酷いじゃないか！）手先の器用さは見

事だ。

「ミスリルの指輪ね、素敵じゃない。
でもこれで浮気の件はなしってわけじゃないでしょ？」

ジト目でモンモランシーはギーシュを睨む。

「わ…わかっているさ。これで君が許すと」

そこにサイトが走ってきた。

「ギーシュ」

「ん？サイトじゃないか。どうしたんだい？」

「ちょっと聞きたいことがある。取り込み中悪いけど、いいか？」

「あの犬、どこへいったのかしら？」

サイトの姿が見当たらないのでルイズは廊下を歩き回りながら彼を探していた。

「まさかツェルプストーにうつつを抜かしてるんじゃないでしょうね…」

プライドの高いルイズにとって何かをとられること、それもキュルケの家系ツェルプストー家にとられるのはかなり屈辱だった。

「私が何？」

噂をすれば影、キュルケがやって来た。

「キュルケ？ちょうどよかったわ。サイトはどこか知らないかしら？」

「あら、一緒じゃなかった？まさか、ついに見捨てられたのかしら？」

フフッ…とからかうように笑うキュルケ。

「だとしたらダーリンはフリーね。今のうちにうばっちゃおうかしら？」

「ふざけないでよ！あんたに渡すものなんか石ころ一つないわ！」

「あ～ら？ゼロのルイズがいっぱしの口をきくじゃない？ウルトラマン『ゼロ』とは大違いよね～。だってウルトラマンゼロは無敵のゼロなのに対し、あなたは胸も魔法もゼロだもの」

「何ですって…？」

「何よ？」

バチバチバチ！と目線上に火花を散らす二人。

するとギーシュが、二人の様子にちょっぴり怖がりながらも割り込んできた。

「か…彼ならさっき見かけたよ。モット伯爵の屋敷の道のりを聞き出してきたけど何をするつもりだろう?」

ルイズはそれを聞いてギョッ!となる。

「モット伯爵ですって!?」

夜、サイトはモット伯爵の屋敷前にたどり着いた。しかし、予想以上の距離にはキツさを感じざるを得ない。

「あのギザ野郎…歩いて一時間なんて聞いてねえぞ。」

サイトはゼイゼイ言いながら一息ついた。

だが、そこで見張りの兵士に見つかってしまう。

「貴様!ここでなにをしている!?」

「ああ…あの…」

モット伯爵の部屋では、椅子に偉そうに座る伯爵と、その隣で茶を注ぐシエスタがいた。

「どうだ？ここでの仕事には慣れたか？」

「はい…」

シエスタの表情はどこか悲しげに見えた。

「わかっていると思うが、私はお前をただの使用人として雇ったわけではない」

モット伯爵はシエスタの匂いを嗅ぎだし、おかしなところまでベタベタ触りだす。

「……」

今すぐ逆らいたいところだが相手は魔法を使う貴族。無力な自分にはどうしようもない。

その時、兵士の声が扉の方から聞こえてきた。

「伯爵様。サイトと名乗るものが面会を求めています。」

「サイト？聞かぬ名前だな」

（サイト？まさか…）

その名で彼女の脳裏に真っ先に浮かんだのは、貴族の男に奇跡的な勝利を得た青年だった。

「なんだ、誰かと思えば平民ではないか」

モット伯爵は面会用の部屋に入って、サイトを見たとたんに卿が削がれたようにため息をついた。

「お前たち、下がれ」

「「はっ」」

衛兵は伯爵に向けて敬礼すると、言われた通り面会部屋を後にした。

「わざわざ平民が出向くとは、何のようだ?」

「頼みます。シエスタを返してください!」

そのサイトの言葉を聞いた伯爵は鼻でふっ、と笑う。

「バカを申すな。あやつは私の使用人だ。何をしようが主の自由だ。たとえ、その身を弄んでいてもな」

わざとらしく手招きする伯爵の姿に、サイトは怒りで身を震わせていく。

「そんな…汚ないぞ！シエスタが逆らえないからって！」

「そうだ小僧。お前にシエスタを返してやってもいい」

「え？」

一瞬伯爵の言葉を疑った。一体どういう風の吹き回しだ。

「ただし条件がある」

「条件？」

「至って単純だ。
ウルトラマンゼロを私の前に引き渡せ」

サイトはそれを聞いて顔をしかめた。なんとなく理由はわかるが、敢えて尋ねてみた。

「何のために…？」

「簡単に言えば、戦争の兵器だ。
すでにウルトラマンの噂は王宮にまで行き届いておる。あれほどの力、利用したい者は必ず現れるものだ」

「へえ…それは大層なことだ。でもな、これは言わせてもらうよ」

サイトはパーカーの左手の袖を捲ってブレスレットを露にすると、ブレスレットから眼鏡型変身アイテム『ウルトラゼロアイ』が飛び出してきた。

「『兵器なんかになる気はない』ってね」

伯爵はウルトラゼロアイを見た瞬間、

「ふふふ…わはははははは！！！！！！」

大声で笑いだした。

（な、なんだよ。シエスタを助けるためとは言え、どうせバラすなら正体をかっこよくバラそうと思ってたのに…）

「やっぱり来たか、ウルトラマンゼロ」

「なっ…！？」

サイトは驚きを隠せなかった。すでに伯爵は自分の正体を知ってたのか？

いや、違う。

「貴族に化けて、貴様の仲間を餌に誘き寄せて正解だった。『冥王』の命令だ。お前を消してやろう…」

伯爵の姿が、みるみるうちにドロッ！溶けていき、溶けた金属の塊になっていく。

そして、その塊は巨大化し、『金属生命体アパテー』となった。

「怪獣…だったのか！？」

アパテーの巨大な体が屋敷より飛び出したせいで、屋敷は崩れだし

た。

「く…シエスタ！」

シエスタがおそらく中にいる。急いで救出しなければ彼女は瓦礫に埋まってしまう。

一旦アパテーから離れ、階段を降りると、使用人の部屋の外にある廊下で倒れてるシエスタを発見した。瓦礫が頭に当たってしまい、気絶している。

「逃げろ！化け物だあ！」

アパテーの姿を見た衛兵たちは一目散に逃げ出していた。

サイトはシエスタは門の辺りに来たところで降ろし、ウルトラゼロアイを目に装着した。

「デュア！」

装着した瞬間、彼の顔は銀のマスクに覆われ、肌は青と赤の模様に変化し、胸元辺りにはプロテクターが形成された。

そして巨大化、ウルトラマンゼロへの変身が完了した。

「デュア！」

「ギイ！」

ぴゅう…と静かな夜風を浴びて身構える二体は、じっと互いを睨んだまま動かない。

しばらくして先制をとったのはゼロだった。ゼロはラッシュパンチを繰り出す。

「ジュワ！ダアッ！」

そして空中に飛び立ち、
アパテーに炎を纏った蹴り技を食らわせた。

〈ウルトラゼロキック！〉

「オラアアア！」

「グオッ！」

アパテーは思い切り吹き飛ばされた。だがその強靭な鉄の体で耐え抜き、再び立ち上がる。新たに肩と腰に、鎧武者のような装甲を加えた。

「ジュ！」

鉄拳を放つゼロだったが、アパテーは軽々とその拳を掴み、その腕を捕まえゼロをぶん投げた。

「ウワ！」

ドスン！と音を立ててゼロは地面に激突する。

アパテーは右腕をレイピア状に研ぎ澄ませ、ゼロに切りかかろうと走ってきた。

〈ウルトラゼロランス！〉

ゼロはブレスレットを槍に変化させ、アパテーの剣を防ぐ。

その時、ギーシュとの決闘の時のようにルーンが光だした。

（武器を握ると、心地よく感じる…何でだ？身も軽くなった感じだ）

そう思ってる隙に、アパテーはゼロの胸を斬りつけた。

「グッ！」

ゼロは怯みはしたが踏ん張り、身軽で素早いやり捌きでアパテーを突き刺す。

「デュア！デヤ！ダアア！」

「ギイ！？」

悲鳴のような金属音をたててアパテーは後退りする。すると、アパテーは直立して再びドロドロに溶けだし、数本の鉄の槍となって降り注ぎ、ゼロの周りを囲んだ。

「ジュワ！」

ランスをブレスレットに戻し、アパテーの槍に攻撃してみたが、触れた瞬間バチバチ！と電撃が走り、ゼロが逆にダメージを受けてしまう。

「ウワッ！」

そしてさらに、何万ボルトもの電撃がゼロを襲う。

もし変身しなかったら、間違いなく死んでいた。

「グワアアアッ！」

力を振り絞り、槍の一本を倒してなんとか輪の中から抜け出した。
しかし、再び身構えた瞬間、ゼロの体から急激に力が抜け、ゼロは倒れた。

「デュ…ア！？」

ピコン、ピコン、ピコン…
ゼロのカラータイマーが点滅し始めてしまった。さっきの電撃でのダメージで、エネルギーを一気に奪われてしまったのだ。
アパテーは再び元の状態になってこちらを見る。

（く、一か八かだ！エネルギーを一気に使って決めてやる！）

ゼロは立ち上がって残り少ないエネルギーを絞り込み、Ｌ字型に両腕を組み、破壊力抜群の必殺光線を放った。

〈ワイドゼロショット！〉

「ダアッ！」

渾身の一撃がアパテーに直撃、アパテーは屋敷の瓦礫にのし掛かるように倒れた。

……

しばしの沈黙があった。

倒したのか?とゼロは思ったが、その予想は見事に裏切られた。

瓦礫から這い出るように、アパテーは再び立ち上がった。右手に鉄の槍を作り出し、こちらにゆっくりと近づいてくる。

「ぐ…」

今のワイドゼロショットは通常よりも使うエネルギーを使ったため、立ち上がるだけの力がなくなりかけている。膝を着くゼロに、アパテーは容赦なく槍を振り上げてきた。

ここまでか…

だが、次の瞬間…

バシュン!

「ギイ!?」

アパテーはどこからか放たれた閃光に胸を貫かれ、そのまま爆発四散した。

一体何が起こったのか?

ゼロは立ち上がって光線の発射された方を見ると、衝撃的なものを目にした。

「!?」

夜の闇の向こうに、白く輝く眼を持つ巨人が見える。
その胸には、Y字型の赤いクリスタルが埋め込まれていた。

（もう一人の、……ウルトラマン！？）

しかも、ゼロの記憶の中でも、サイトとしての記憶の中にも見たことのない巨人だった。

謎のウルトラマンはゼロに背を向け、夜の闇に消えていった。
しばらくの間、ゼロはその場に呆然と立ちすくんでいた。もしこの場にタバサがいたら、口に言わなくてもこう思ってただろう。

「あの時、私を助けてくれた巨人…！？」だと。

「シエスタ、起きてくれ」

その声で、シエスタは目を覚ました。真っ先に目に飛び込んだのは、サイトの優しさに満ちた眼差しだった。

「サイトさん…？」

「怪我はない？」

「は…はい。大丈夫です」

シエスタは服についた砂を払いながら立ち上がった。

「サイトさん、来てくれたんですね…」

「当然だろ。飯くれたお礼でもあるんだし。さあ、一緒に帰ろう」

「はい…」

シエスタは顔が赤くなっていた。

「やっと見つけたわよこの馬鹿犬！！」

真上から、誰かの声が聞こえてきた。それに反応したサイトは空を見上げる。

「ルイズ、キュルケ！！それにタバサまで！？」

シルフィードに乗ってやって来た三人がいた。

「さあ帰るわよ。犬、後でお仕置きだから覚悟しなさい」

「はあ…」

しばらくして学院校庭に着いた。シルフィードは五人を降ろし、ルイズたちは先に部屋に戻っていった。

「サイトさん、その…ありがとうございました。助けられちゃいましたね…」

シエスタは赤くなりながら礼をいった。

「いいんだよ。気にしなくて」

サイトがそう言うと、シエスタはサイトに近づき、サイトの頬ににキスした。

「しっ、シエスタ!?」

「じゃあ、おやすみなさい…」

恥ずかしそうにシエスタは使用人の寮に去っていった。
サイトはその後、ルイズから翌朝まで正座させられた。

その正座の間、思い返していた。
アパテーに止めを刺した、あの銀色のウルトラマンを。

（見たことない奴だった。何者なんだ…？）

それに、アパテーの化けた伯爵の言っていた「冥王」とは、一体どういう意味なのだろう？

Z5　絆の戦士

トリステインの城下町トリスタニア。その街の真ん中にあるトリスタニア城での会議室で緊急会議が行われた。
たくさんの貴族たちが広く作られたテーブルを囲って座っている。
その会議にはオスマン学院長と秘書のロングビルも出席している。

「数日前、二件の大事件が発生しました」

黒板に二つ、その事件の内容が簡潔に記されていた。
まず一件はトリステイン魔法学院に現れた怪鳥バードン。もう一件は、モット伯爵の屋敷付近に現れたアパテー。
その事件の内容には当然、ウルトラマンゼロの情報もあった。
ちなみにモット伯爵に関しては、その事件の数日後に死体が発見された。おそらく事件前にアパテーに殺害され、入れ換えられたのだろう。

「謎の怪鳥とゴーレム。そしてそれらと戦った巨人…ウルトラマンゼロ。果たして彼は何者なのか…。しかし、オスマン学院長の、赤い怪鳥事件の証言からすれば、ウルトラマンゼロは我々の味方と見て取れます」

オスマンの証言はこうだ。ウルトラマンはわずか三分近くしか戦えないらしい。にも関わらず、人間のために命を削ってまで怪獣と戦い、学院の生徒たちを救った。その生徒の一人を庇ったところも見受けられ、おそらく人間に害をなすことはない。

オスマンの証言で「人間の味方」と予想したのは王妃マリアンヌ。
トリステイン国王の妻で、美人で気品のある女性と言われている。

その横には娘であるアンリエッタ王女、その後ろには壮年の男性マザリーニ枢機卿が立っていた。

「いや、失礼なのは承知ですがマリアンヌ様、あの巨人をすぐ味方と決めるのは早とちりかと思います」

一人の貴族が異を唱えた。

「ウルトラマンはおろか、その事件で現れた怪獣の情報もいまだにおぼろけな状態なのです。現在アカデミーに赤い怪鳥の死体の解剖を急いでますが、かなりの巨体であるため時間を有します。私は、もしもの時を考え、トリステイン国中の警備をより固めるべきと提案いたします」

もしもの時、おそらくウルトラマンが敵だということも彼らにとってはあり得ることだ。

「いや、その必要はないかと」

そこに、ド・ポアチエが異を唱えた。

「こうも考えれませんか？ウルトラマンはその怪獣どもを短時間で倒したのですよ。しかも信用性のあるオスマン殿が人間を守ったとおっしゃられた。

だとしたらウルトラマンゼロは、始祖ブリミルがお遣わせた神の使いに違いない。ならば、ウルトラマンゼロに全てを託すべきではないですか？」

「なっ…」

オスマンはそれを聞いて絶句した。
マリアンヌやアンリエッタ、マザリーニも言葉を失う。

「そうだ、そうですよ！ウルトラマンゼロは神の使いだ！」

「それに他国にも怪獣が現れれば、その国の国力は間違いなく低下いたします！その間に攻め込めば勝利は間違いない！」

「きっとウルトラマンゼロは我らトリステインが他国に攻め入る時にも力を貸してくれるはずだ！」

なんとも愚かな考えなのか。ド・ポアチエの言葉から信じられない発言が次々と出てくる。これが、自分たちが信じていた誇り高き貴族の姿なのか。オスマンやマザリーニたちは失望した。
ロングビルは誰にも気づかれないよう舌打ちした。

（ちっ、これだから貴族は信用ならないんだよ…『あいつ』が聞いてたら一体どんな顔したんだろうね…）

（ウルトラマンゼロ…主は何者なのじゃ？）

オスマンはなぜウルトラマンが人間を守るのか疑問を抱えた。もしウルトラマンがこの話を聞いていたとしたら、それでも人を守ってくれるのだろうか？
いや、きっと幻滅し、我らを守らないだろう。
オスマンはそう結論することにした。

「あの、よろしいでしょうか？」

一人、別の貴族が口を開いた。

「実は私、半年ほど前にアルビオンで見たことがあるんです」

「見たとは、一体何を？」

マリアンヌの言葉に、彼は答えた。

「ウルトラマンゼロとは別の、もう一体の巨人を」

会議室の面々は、面食らったかのように驚愕した。

ハルケギニアには、地球とは異なり曜日が五つとなっている。火、水、風、土、そして休日に虚無の曜日と言うものが存在する。その虚無の曜日の朝のことだ。

「タバサ！起きてる！？」

キュルケは大慌てでタバサの部屋に入ってきた。

タバサにとって趣味である読書の時間は誰にも邪魔されたくないもの。せっかくの虚無の曜日だから一人静かに本を読みたい。だから、サイレントの魔法をかけようと杖を手に取ろうとする。

「今日は虚無の曜日…」

「ああん待って！わかってるわ！あなたにとって虚無の曜日がどれだけ大事なのかは！
でも話を聞いて！サイトを口説きたいけど、ルイズがすでに街に連れていったのよ！彼のハートを射止めたい！！これは情熱の恋なのよ！」

サイトがギーシュとの決闘で、その勇姿を見せただけでキュルケはサイトに惚れてしまっていた。
しかしキュルケはホレっぽいのと引き換えに、すぐに冷めてしまうタイプなのだ。今まで無理やり自然消滅された男たちは数知れず。
タバサは彼女の友人だからわかっているが…

「…わかった」

意外にも、キュルケの頼みは何かと聞いてくれる。この二人、結構仲がいあのだ。

「えっ！？わかってくれた！？」

「シルフィードで追う…馬で行ったの？」

「そうよ。馬二頭でいったわ」

タバサは使い魔のシルフィードを口笛で呼ぶと、呼び出されたシルフィードは窓際まで来てくれた。

「馬二頭、食べちゃダメ」

二人はシルフィードに乗り、トリスタニアまで飛んでいった。

その頃、王都トリスタニア。いかにも中世ヨーロッパ時代らしく見える町並みが目の前に拡がっていた。

「へえー、ここがトリステインの城下町かあ」

「そっ、ブルドンネ街はトリステインで一番大きい通りよ」

「狭いんだなあ」

自慢気に胸（無いけど…）張るルイズだが、サイトの予想外の感想にコケそうになった。

「俺の世界の都市はこれの何倍かはあったぞ。道の幅も」

「どんな街よ…」

そんなサイトの言ってることが本当なら、ルイズから見れば想像もつかない。

「まあいいわ。それより上着の中の財布に気を付けなさい。スリが多いから」

「色々な形の看板があるんだな」

見たところ看板には、本の形をしたものもあれば、魚の形をしたものもある。

「字の読めない平民も多いからね」

「俺看板見てもなんの店かわかんね～な」

おどけたような口調でサイトは言った。

「迷子になっても知らないわよ」

しばらくして、ルイズたちは裏道に来た。
その裏道の臭いは酷かった。しかもその臭い通りゴミもばら蒔かれ、汚い以外に何を言えばいいかわからない。サイトは鼻を抑えていた。

「汚いな…ゴミ拾いのボランティアとかないのか？」

「ぼら…？

まっまあとにかく！私だって来たくないわよこんなとこ。あんたの剣を買ってやるんだから黙って着いて来なさい」

二人は武器屋に入った。扉についていたベルの音に反応し、店の奥からネズミ顔の店主がひょいと顔を出した。

「いらっしゃい。
あら、貴族様でございますか」

武器屋の店主はルイズの羽織ってるマントを見て急にかしこまった。その様子からだと、マントは貴族にとって必須用品のようだ。

「使い魔に持たせる剣を買いに来たのよ。私は剣のことなんかわからないから立派なものを適当に選んでちょうだい」

「最近貴族のお客様が多いですね。なんたってある盗賊が街を荒らしているそうなので…」

「盗賊？」

「へい。確か『土くれのフーケ』だそうです。貴族様の貴重な宝を次々に盗んでおるのです。どんな壁も扉も土系統の魔法で土にかえるのでそう呼ばれておりますぜ」

「ふぅん、それより何かないの？」

ルイズは興味無さそうに話を進める。

（へへ。鴨が。高く売り付けてやる）

一瞬店主が腹黒い表情を浮かべたが、サイトとルイズは気づかなかった。

「すいやせん。無駄話を…そうですね…」

店主は武器庫を探って…立派な大剣を出した。金そのものでできてるようで、ライオンの顔の彫刻が彫られている。

「ゲルマニアの高名な錬金術師が鍛えた業物です。鉄も簡単に斬れますぜ。エキュー金貨で２０００、新金貨で３０００で」

その値段は、ハルケギニアの人間にとって、雲を掴むようなものだった。

「なにそれ！立派な家と森つきの庭が買えるじゃない！！」

「買えないのか？ちょっと気に入ったんだけどなあ…」

名残惜しげにサイトはその金の剣を眺める。

「生意気言うんじゃねえ坊主。おめえめたいな素人にゃ棒切れがお似合いさ」

突然どこからか、少し年増の男の声が聞こえてきた。

「だ、誰だ？」

「やいデル公邪魔すんじゃねえ！静かにしろ！」

店主が、剣がたくさん入っている樽に向かって怒鳴った。

「もしかして……」

サイトはその樽の中から、適当に剣を探った。

「あ、ボウズ。俺だ」

その声の主は、サイトが自分を探していることに気がつき、サイトに呼び掛ける。

その声の導きで取り出したのは、すごく古い、錆び付いた剣だった。

「意思を持つ魔剣、インテリジェンスソード？」

ルイズはサイトの手に取った剣を覗き込む。

「おう、当たってるぜおじょーちゃん」

喋る剣は、口代わりにカタカタと金具を動かして喋っている。

「お前が喋ってたのか？名前は？」

「俺っちはデルフリンガー様だ。ん？」

デルフリンガーはサイトの左手にあるルーンを見ると、驚きの声をあげた。

「おでれーた。おめえ『使い手』か？」

「使い手？」

「なんだ知らねーのか？まあいい。俺っちもわかんねえし」

（何だったんだよ…）とサイトはデルフリンガーの意味不明な発言に首を傾げたが、この喋る剣がなんとなく気に入っていた。

「そうだな…ルイズ、これがいい」

「ええ！？こんな錆びた剣？」

ルイズは目を丸くした。他にも錆びてないキッチリした剣があるのに、この使い魔（または犬？）はこのおかしな剣を気に入ったのか？

「俺はサイト、平賀サイトだ」

「サイトか、よろしくな。相棒。俺っちのことはデルフで構わねえぜ」

「おう！」

二人は店を出て中央広場に来た。

「その錆びた剣のどこがいいのよ」

「喋る剣なんて面白れーじゃん。それより腹減ったな。飯食わね？そろそろ昼だろ？」

「そうね。どこにしようかしら？」

「サイトさーん！」

そこに私服姿のシエスタが走ってきた。

「シエスタ？何でここに？」

「新しい食材を買いに来たんです。それよりお腹すいてませんか？おすすめのお店があるんですけど」

「いいの？ありがとうシエスタ！」

「ちょっと、勝手に決めないでよ！どうするかは私が決めるの！」

と、その時だった。

凄まじい爆発音が町中に鳴り響いた。

「なっなんだ!?」

「なっ、何よ!?何事!?」

その爆発音と共に現れたのは、巨大なナメクジ型の怪獣だった。それだけではない。二つの犬の頭に腹に化け物の顔がある、地獄の番犬ケルベロスを模した怪獣もいる。

「怪獣、やっぱり現れたか!」

始めて見る怪獣だった。

その怪獣たちは、一体は以前タバサも遭遇した『ペドレオン』だったが、以前の『ペドレオン（クライン）』より何倍もの巨体を誇っていた、『ペドレオン（グロース）』。もう一体は『フィンディッシュタイプビースト・ガルベロス』。

「怪獣…また現れたのね!これ以上好きにさせるにはいかないわ!」

ルイズは無謀にも街を破壊しまくるペドレオンとガルベロスに立ち向かっていこうとした。

「よせ!やめろ!」

「無茶ですよミス・ヴァリエール!」

二人はルイズを取り押さえた。

「離して!離しなさい!あんたたちは自分に馴染みのある街が教われて黙ってられるの!?」

「確かに嫌だってのはわかるさ…でも相手が悪すぎる！大人しく逃げるんだ！あいつらは俺だってよく知らない奴らなんだぞ！」

「でも…」

丁度そこに、シルフィードに乗ってタバサとキュルケがやって来た。

「ダーリン！大丈夫！？」

真っ先にキュルケはサイトに飛び付いた。

「うおお！？」

「ちちちょっとお待ちキュルケ！また人の使い魔に手を出すつもり！？」

「心配したのよ～また怪獣が、しかもこんな街にまで現れるんだから…」

ルイズの怒鳴り声を完全に無視し、豊満な胸を押し付けている。一見美味しいが、サイトには禁断の果実そのものだった。

（だ…ダメだダメだ！クールになれ！負けるな俺の理性～！！！！）

「…」

タバサは以前より巨大なペドレオンの姿に言葉を失っている。

（他にも、いたなんて…）

「それより皆さん！ここは危険ですから安全な場所に避難しましょう！」

シエスタの呼び掛けに、一同はハッ！とする。

「シルフィード」

タバサはシルフィードを呼び出し、ルイズたちを全員乗せた。爆発音が鳴り渡るものだから、それだけでも危険度をその身に感じる。ルイズたちの隙を見たサイトは、シルフィードが街の郊外に飛び立とうとした寸でのところで降り、街の中に走り出した。ルイズたちはそれに気づかず、シルフィードに乗ったまま街の郊外へ飛び立ってしまった。

その頃、トリスタニア城から立ち向かって行く騎士たちがいた。

「トリステインの平和を汚す化け物め！裁きを下してやる！」

すでにトリスタニア城にはウルトラマンとバードンが現れた情報が行き届いている。だが王宮の貴族たちにとって、放っておくことは、無謀だとわかっていてもできなかった。次々とペドレオンの鞭や雷撃、ガルベロスの火炎弾によって倒されていった。

「わ、ワルド隊長！もう勝てません！逃げましょう！」

傷ついた兵士の一人が、巨大な鳥グリフォンに乗っている銀髪の貴族の男性に言った。

「馬鹿者！我々が民を守らなくて誰が守るのだ！？」

しかし、ワルドと呼ばれた男性は首を横に振る。

「だからウルトラマンに任せれば…」

それを聞いたワルドは杖を兵士に向ける。

「いつから我がグリフォン部隊は臆病者になったのだ!?ウルトラマンに任せればよいなど、愚か者の考えだ!第一、見たこともないのに、その話が本当かどうか怪しいのだぞ」

「しかし、勝てないのはワルド隊長もご承知のはず…」

「ぬう…」

ワルドだって、ここで死ぬことはできなかった。それは貴族の誇りではなく、ある目的のため…。

「せめて民や怪我人を待避させろ!まず王宮にいる姫様たちを最優先だ!」

ワルドの決断は犬死にではなく、救出だった。

しかし、民より王宮の者たちを優先、どこか微妙なものに聞こえるかもしれない。

兵士たちは城の貴族たちをまず安全の場所に避難させた。

「逃げろおおお!!」

「ママあああ!!」

民たちは一目散に逃げ出した。しかし、中にはペドレオンとガルベロスに捕まり、無残にも補食されてしまう者もいれば、命の惜しさのあまり他人を見捨ててしまう者もいた。

「くそ…なぜだ!?なぜウルトラマンは現れないんだ!」

「ウルトラマンは我らの味方ではなかったのか!ええい!」

貴族たちの中には、ウルトラマンゼロの未登場に苛立ちを見せる者が出てきた。実際そうだ。ウルトラマンが彼らの考えてるほど都合のいい存在であるはずないのだ。

「くっそ…」

ルイズたちから離れたサイトは密かにそれを聞いていた。

(こんなやつらのために戦うのかと思うと、腹立つけど…)

ブレスレットからウルトラゼロアイを取り出し、装着した。

「ジュワ!」

「なんとか避難完了ね…」

ルイズたちは街の郊外まで避難した。

悔しい。ルイズは正直そう思った。ただ傍観してるだけの自分が恥ずかしい。

（姫様…）

あの城にはこの国の姫君もいる。国への忠誠心からルイズはこの国の象徴たる人を、怪獣を倒して助けたいと思っていたが、それだけが理由ではなかった。

「私は、この城を離れることはできません！」

アンリエッタは自室のバルコニーから、火の手の回る城下町を見つめ、自分だけ安全な場所に移動することはできなかった。

「しかし、姫様はこの国になくてはならぬ存在なのです！ここに残るなど、危険極まりない行為ですぞ！」

マザリーニは必死の説得を試みるも彼女は頑として、バルコニーを離れようとはしなかった。

その時、ついにガルベロスが城の、しかもアンリエッタの方に向けて火炎弾を放った。

「姫様！」

マザリーニの悲鳴が轟くなか、アンリエッタは死を覚悟した。

だが、目映い光が突然現れ、ガルベロスの火炎弾をかき消した。

「え？」

恐る恐る目を開くと、城を背に立つ、青と赤の模様が刻まれた巨大な背中が目に入った。

ウルトラマンゼロが、ようやく現れたのである。

「ウルトラマンゼロ…！」

「ジュワ！」

ゼロはガルベロスの背後に飛び、後ろからガルベロスを掴み、城から離すように遠くへ投げ飛ばした。

「ダッ！」

その背後から、ペドレオンが触手を鞭のように振ってゼロの背中を叩きまくる。

「キェエエ！」

「グワ！」

ペドレオンはその触手で、ゼロの首を締め上げる。

「グゥ…！ダッ！」

ゼロスラッガーを引き抜き、触手を切り落とした。

いざ反撃に転じようとしたが、その隙にガルベロスが、今度は逃げ遅れた平民の子供に向けて火炎弾を発射した。

「な！？く！」

ブレスレットから盾を取り出す暇もない。覆い被さるようにゼロはその子供を庇った。

「グゥ…ガ…！」

実は、ガルベロスはゼロが子供を庇うことを読んでわざと子供に火炎弾を撃っていたのだ。しかも、予想通りゼロは子供を庇い、ダメージを受けてしまう。
偶然アンリエッタはその光景を目にした。

「たった一人の子供のために自分が傷つくなんて…
やはりあなたは…」

神の使いなどではない。アンリエッタはそれを確信した。あの時の会議通り、自分たち貴族のためだけに現れた存在なら、あのような子供を、身を削ってまで庇ったりしないはずだ。

今のゼロへのダメージは半端ではなかった。それでもゼロは、その子供を手に乗せ、避難していた人々の元へ運んだ。

「ママ！！」

その子供は、母親の胸の中へ一目散に飛び込んだ。

「たかが平民のガキのために…」

幾人かの貴族たちは驚きを隠せなかった。

「こんな時にあのバカ犬はどこに行ったのよ…」

ルイズはいつの間にかサイトがいなくなったことに苛立ちをみせていた。

「やっぱり探しに…」

「ダメ。あなたが戦いに巻き込まれる」

探しに行こうとしたルイズだが、タバサがそれを止めた。

まさか、目の前で戦う巨人が自分の使い魔だと、ルイズは微塵も思わなかった。

そのゼロは、ガルベロスの重い一撃のせいで、かなりまずい状況に陥っていた。

〈ウルトラゼロランス！〉

槍を使ってガルベロスの体を突こうとしたが、動きが鈍くなっている今、ペドレオンの触手にまんまと絡み付かれ、まともに攻撃が当たらなくなっている。

（ルーンの力でも、振り切れないなんて…）

左手のルーンが、少しでも痛みを和らげてくれていたが、敵を倒すほどのものではなかった。なんとか必死に触手を払おうとしたが、ガルベロスがそれを阻もうと、ゼロの腕を噛み千切る勢いで噛みつ

いてきた。

「グワアアアッ！！」

ピコン、ピコン、ピコン…さらにカラータイマーの点滅速度が早くなっていく。ペドレオンに動きを封じられ、ガルベロスになぶられている。その状況が続けば、ゼロは確実に命を落としてしまう。

「な…なにをしておるのだウルトラマン！さっさとやっつけろこの役たたず！」

避難していた貴族の一部が、悪辣な言葉をゼロに放っている。
だが、中には

「ウルトラマン、頼む！負けないでくれ！」

ゼロを必死に応援する者もいた。言ってることが何であれ、少なくともトリスタニア中の人々はゼロの勝利を祈っていた。
しかし、彼らの願いも虚しく、ゼロの意識は徐々に薄れていく。

（これで、終わりなのか…？）

地球に未練を残したまま、追い求めていた夢を、こんな場所で失うのか…？

「ウルトラマン…」

ルイズたち、そしてタバサはもうおしまいなのかと絶望していた。
しかし、タバサは見た。近くの建物の屋根の上で、サイトと同じ黒髪の青年がゼロの戦いを見つめながら立っていた。

（彼は…？）

黒髪の青年は手に握りしめていた、光輝く短剣型アイテム『エボルトラスター』を、鞘から引き抜き、天に掲げた。
瞬間、彼はゼロとは対照的な、真紅の光に包まれていった。

「ギェエエエ！」
「ガァアア！？」

ペドレオンとガルベロスは、突如現れた謎の赤い光によって吹っ飛ばされた。
同時にゼロも触手から解放される。

「……」

解放され、地面にうつぶせで横たえるゼロは、その赤い光がドスン！の音と共に地上に降り立ち、晴れていくのを見逃さなかった。

そこに現れたのは、胸にＹ字型のクリスタルを埋め込まれた銀色の巨人だった。

間違いなかった。あの巨人は…
見覚えのあるタバサ、そしてゼロは同時に思った。

（（あの時の…ウルトラマン！？））

町の人々も、突然の真打ちの登場に唖然となる。

「ウルトラマンが…もう一人!?」

「どうなってるの?」

「ウルトラマンは一人じゃ…なかったのか」

口々に町の人々、そしてルイズたちは呟いた。

（まさか、彼がウルトラマンだったなんて…）

タバサはにわかに信じられなかった。自分を助けたウルトラマンの正体がまさか、サイトと歳が変わらなく見えるあの青年だったことに。

「ガァアア!!」

ガルベロスは銀色のウルトラマンに向かって突出したが、ウルトラマンは軽々とそれを飛び越えて回避、上からガルベロスを蹴りで叩き伏せた。

「デヤ!」

「ギョ!?」

続いてペドレオンが触手を銀色のウルトラマンに向けて伸ばすが、瞬時にウルトラマンは左手に装着された腕輪を胸に当てると、元の

黒い模様『アンファンス』から赤と青の模様の入った姿『ジュネッストリニティ』に変わった。
そして、腕輪に現れた小型の刃でペドレオンの触手を切り落とす。

〈エルボーカッター！〉

「フッ！」

（変わった！？）

もしゼロに表情というものあったら、恐らく目を見開いていただろう。
銀色のウルトラマンは両腕の腕輪を一度合わせ、右拳に光を灯すと、その光を天に向けて射出した。

〈メタ・フィールド！〉

「ディア！」

射出された光は、光のドームを作り出し、銀色のウルトラマンとゼロ、ペドレオンとガルベロスを包み込んでいった。

「きれい…」

その輝きに、シエスタは思わずそう呟く。
そして、四体を包み込んだ光のドームが消えた。

「き、消えた！？」

一体ウルトラマンたちはどこにいなくなったのか。辺りを見渡して

も、あの巨体がどこに消えたのか、誰にもわからなかった。

「何てやつだ…」

ゼロはあの銀色のウルトラマンの能力に驚かされていた。
いつの間にか、彼は星空のような空と、殺風景な荒野にいた。

この空間は『メタ・フィールド』。あのウルトラマンが自分に有利な戦いを展開できる戦闘空間である。ウルトラマンは力が上がり、逆に二体のビーストたちは力が先程よりも衰えていた。

「ガアッ！」

ガルベロスとペドレオンはそれぞれ同時に、火炎弾と赤い雷撃を銀色のウルトラマンに向けて放った。

〈サークルシールド〉

しかし、ウルトラマンは瞬時に光の盾を作り出し、二体の攻撃をあっさり遮断した。

しかも、驚くべきはまだそれだけではなかった。

「ムゥゥ…」

（な…！？）

銀色のウルトラマンの胸に、なんとゼロ（サイト）のルーンと酷似したルーンが赤い輝きとともに浮かび上がった。ゼロは目が点になるほど驚いていた。

〈シュトロームソード〉

銀色のウルトラマンは光の剣を作り出した。そして、ペドレオンの作り出す電気が、彼の剣にまとわりつき始めた。

そして、その剣を伸ばし、ペドレオンに向けて振り下ろした。

〈雷光閃！〉

「フン！」

「ギェエエエ！？」

（まさか、ルーンの力であのナメクジの技を自分流にアレンジしたのか！？）

サイトはルイズにルーンを刻まれて以来、使ったことのないはずの武器の扱いに長けるようになった。

もし、あのルーンらしきものが使い魔との契約によるものだとしたら…

（あいつも、誰かに呼び出されたのか？）

「シャッ！」

銀色のウルトラマンはガルベロスの頭を掴み、もう片方の手刀でガルベロスを殴り付ける。背後から切り傷を追いながらも耐え抜いたペドレオンが迫り来るが、彼はそれを見切って後ろ蹴りでペドレオンを突き飛ばす。

地面を転がるペドレオンに、ウルトラマンはガルベロスを投げつけた。

「ガァアア！？」

「ギイオオオ！？」

二体のビーストは思い切りぶつかり合ってしまった。しまいには、二体は罪を擦り付け合うように、同士討ちを始める。台詞で考えたら「何やってんだこのワン公！」「あんだとこのナメクジ野郎が！」だろうか？

隙だらけになった二体のビーストに向け、銀色のウルトラマンは胸のY字型のクリスタル『エナジーコア』に光を集束させ、破壊力抜群の光線に変えて放った。

〈コアインパルス！〉

「デヤ！」

「！」

ガルベロスは瞬時に火炎弾でコアインパルスを弾き飛ばそうとした

が、火炎弾はあっさり消され無駄な足掻きに終わり、光線をモロに受けてしまい、爆発した。
ペドレオンは恐れをなして逃げ出そうとしたが、この亜空間に逃げ場などなかった。

〈マッハムーヴ！〉

銀色のウルトラマンは両腕の腕輪を合わせた瞬間、逃げ出そうとしたペドレオンの眼前に現れた。
彼の素早さに呆気にとられるペドレオンを他所に、ウルトラマンは、今度はガルベロスの火炎弾を元に炎を光の剣にまとわせ、ペドレオンを真二つにする勢いで下から剣を振り上げた。

〈炎竜昇！〉

「ラアッ！」

「ギェエエエオオオ！！！！！」

斬ったと同時に炎に包まれたペドレオンは、燃え尽きたと同時に青い粒子状の粒となって消滅した。

ゼロは立ち上がり、勝利を掴みとった銀色のウルトラマンを見つめる。

「お前、何者なんだ…？」

同時に、メタ・フィールドは再び光のドームとなり、そして変身を解くウルトラマンと共に消滅した。

「お前がもう一人の、ウルトラマンか」

トリスタニアの目立たない裏道で、青年はサイトの姿を見て言った。青年は少し長い後ろ髪が束ねられ、キュルケがすぐに見惚れるような整った顔立ちで、サイトが青と白の服装なのとは対照的な、黒のジャケットの下に赤い服を着ている。

「お前も、この世界に呼び出された人間なのか？」

サイトの質問に、彼は頷く。

「この世界に呼び出されたのは、半年ほど前だ。胸にルーンとやらを刻まれてな」

彼は上着を脱いで、サイトに胸板を見せると、確かにサイトのものとよく似たルーンが刻まれていた。

「と…とにかくさっきは、助かったよ。サンキュー。なあ、せっかくウルトラマン同士で会えたんだ。一緒に戦ってくれないか？」

礼を言って彼を誘ってみたが、彼は厳しい目付きでこちらを見ていた。

「お前は貴族をどう思ってる？」

「え？」

「奴ら『スペースビースト』は、心の闇を抱えた人間を主な補食対象にしている。そのビーストへの恐怖が更なるビーストの繁殖を招いていく」

あの怪物たちは、人の感情で増えているのか？地球でもかつて似たようなことがあるのをサイトは聞いたことがある。

マイナスエネルギー、怪獣を誕生させる負のエネルギーで、人の心によって生み出され、怪獣を作り出した。完全に打ち消すことが不可能なものであるため、当時任務に当たっていたウルトラマン８０も苦戦したとされている。

「だが、ビーストへの恐怖だけが、ビーストの繁殖の原因ではない。この世界のおろかな貴族たちの、横暴さでもある」

「何…！？」

「貴族どもは立場の弱い平民どもの苦痛を尻目に、自分たちだけ贅沢三昧し、勝手な正義を振りかざして平民たちを苦しめている。しかも、人間と同じ知性を持つ亜人たちを怪物扱いし、そいつらは肩身の狭い思いを強いられている。結果、ビーストは俺のいた地球よりも数が増えた挙げ句、より強化された」

亜人とは、大方エルフや翼人といった種族のことだ。貴族たちの行いがそこまで酷いものであることを、平和な生活をしていたサイトにはにわかに信じられなかった。

おそらく青年は、ビーストを増やさせないために戦ってるのだ。

「お前はそれでも戦うのか？愚かな貴族のために」

「それは…」

一瞬言葉をつまらせた。

自分たちウルトラマンを都合のいいものとして見ていない貴族。サイトも本心ではそんな彼らのために、命は張りたくはない。

だが、彼は逆に青年に言った。

「でも、貴族はみんな酷いって訳じゃない！」

ルイズだって、自分に剣をくれたのだ。キュルケも貴族や平民などといった身分など気にせず、気さくに話しかけてくれる。ギーシュも最初の印象は悪かったが、自分の過ちを反省してくれた。そのギーシュとの決闘やバードンの事件の後には、怪我をした自分の看病だってしてくれた。彼らが悪い奴に思えない。

「それでも構わないのなら、止めはしない」

青年はサイトに背を向けた。

「待てよ！お前、名前くらい…」

サイトの怒鳴り声に、青年は顔をこちらに向けていった。

「黒崎…シュウヘイ。ウルトラマンネクサス」

そう言うと、彼は街の中に消えていった。

Z６　姫君の頼み（前書き）

Z6　姫君の頼み

あれから三日だろうか。初めて見るウルトラマン『ネクサス』と『スペースビースト』の出現から。
サイトはいまだにあのウルトラマン、そして自分と同様に何者かの使い魔として呼ばれた青年『シュウヘイ』のことを考えていた。
あの非協力的な態度から見れば、彼は現時点で自分と同調はしないだろう。

（でも、あいつ…『ネクサス』って言ってたけど…）

『ウルトラマンネクサス』だなんて名前のウルトラマンは見たことも聞いたこともない。ゼロとサイト、どちらの記憶の中にもいなかった。

（もしかしたら…パラレルワールドってやつか？）

パラレルワールド、多次元宇宙。
例えるならもし、自分のいた地球をウルトラマンのいる世界と呼称したら、ウルトラマンがいないのを除けばそれ以外は自分のいた地球と変わらないといった、似て非なる世界のこと。
だとすれば、シュウヘイは別のウルトラマン世界から現れたということだろうか？

（まあ考えても本当かどうかなんてわかりっこないか）

洗濯をシエスタに任せ、朝の間は剣の稽古をやってみることにした。

「ふん！せい！」

しかし、いざデルフを振っても実戦の時とは違っていまいち実感がない。

「ギーシュん時とかはうまく振れたのに…」

「なんでい？槍使ってた時より腰がなってないんじゃねえか？」

デルフがサイトにダメ出しする。

「まあ確かに…って何で知ってんだよ！？」

確か、デルフの言う槍ウルトラゼロランスを使ったのは、変身した時だけだ。しかし、デルフはその時身につけていなかったはず。どこから見ていたのだろうか？

「あん？気づいてなかったのかい？お前さんがあの巨人になった時、俺っちは頭にくっついてた刀から見ていたぜ。しっかし、まるげ一本一本が俺っちの目みたいになってたな」

「目？」

「簡単に言やあな、右側のやつなら右目、左側なら左目としてお前さんの戦いを見せてもらったぜ」

つまり、デルフはサイトがゼロに変身した時、彼もゼロスラッガーに変身し、二本の内右側のゼロスラッガーがデルフの右目、左側が左目のようになっていたのだ。付け加えると、デルフは二本に別れていることにもなる。

「おでれーたぜ！俺っちが二人、いや二本になっちまうとはよ」

二重でデルフの口の悪さを耳から近い頭の上から聞くことになると言うわけだ。

「あぁ～、耳元でギャーギャーうるさくなるわけだ」

「そんなつれねえこと言うなよ～」

わざと嘘泣きしてるようにデルフは言った。ちょっぴりデルフを買ったのを後悔していたが、せっかく買ったものを捨てるわけにはいかないし、何かの役に立つと信じてサイトは大事に持っておくことにした。

夜、サイトは適当に稽古をやり終え、ルイズの部屋に戻っていた。そこに、キュルケの使い魔であるフレイムが、サイトに近づいてきた。

「フレイム…だったか？何だ？」

フレイムはサイトの顔を見ながら、背を向けて歩き出した。

「着いて来いってことか？」

サイトの言葉に頷くように、フレイムはキュルル…と鳴いた。一体何なのだろう？

着いて行った先は、ルイズの部屋の隣、キュルケの部屋だった。フレイムがその中に入ったので中に入ろうとしたが、薄暗い部屋の中で、彼は見てはならないものを見てしまった！と思い、すぐ扉を閉

めてルイズの部屋に大慌てで戻ってきた。

「ふう…」

「何息上がってんのよ?」

サイトの、まるで完走後のマラソン選手みたいな息の上がりっぷりにルイズは首を傾げる。

「わりい…聞かないでくれ…」

正直びっくりした。まさか、キュルケが下着姿で出迎える体制だったことに。

(あらん…刺激が強すぎたのかしら?)

その頃、一人薄暗い部屋の中でキュルケはちょっとサイトにはキツすぎたか?と思っていた。

場所を戻してルイズの部屋。
しばらくすると、
扉から誰かがノックしてきた。

「客?誰かしら?」

今はもう夜だ。こんな時間に誰が来たと言うのだろう。ルイズが扉を開けると、

「ルイズ」

それはなんと、トリステイン王女のアンリエッタだった。

「姫様！？」

（お姫様…って！？）

自分と歳の変わらないほどの少女の、それも姫君の突然の訪問にサイトはびっくりしていた。

「いけません姫様！このような下せんな場所へ護衛も付けずお一人でお越しになるなんて…」

ルイズは相手が自分より格上の人物だったため、すぐに跪いた。

「堅苦しい行儀はやめて頂戴。私達は幼なじみじゃない。」

「そんな…もったいないお言葉です。私なんかを覚えてくださるなんて…感激です！」

「忘れるわけないじゃない。ルイズ！」

二人は感動のあまり少し涙ぐみながら抱き合った。それを見ていたサイトは一人、ポカーンとしていた。

「思い出すわ。あなたとは子供のころいつも一緒だったわよね。『アミアンの包囲戦』と呼ばれている一戦を覚えてる？」

「はい！『宮廷ごっこ』で姫様とドレスの奪いあったときですね」

「そうよ。その時私の一発があなたのお腹にうまく決まって…」

「そうです。私ったら姫様の御前で気絶しましたわ！」

「ああ…嫌だわ。懐かしくて涙が出るわ」

目尻に溜まった涙を拭き取るアンリエッタ。

「あの～…盛り上がってるとこ申し訳ないんすけど…」

サイトは蚊帳の外状態に耐えられなくなって話しかけた。

「あぁ忘れてたわ。サイト。こちらはトリステイン王国の王女アンリエッタ姫殿下よ。私は子供の頃、この方のお遊び相手を務めさせていただいたのよ」

はあ…とサイトは間の抜けた返事をする。まさかルイズが、それほどのお偉いさんと知り合いだったことには驚かされ過ぎた。それに姫君なんてファンタジーの中でしか存在してなかったはずの存在なものだから、余計に実感が沸いてこない。

「はじめまして。サイトさん…でよろしいですね？」

「あ、はい。そうです」

サイトはとりあえず礼儀正しくしたつもりで頭を下げた。

「ふふ…ごめんなさい。私ったらお邪魔だったわね」

アンリエッタは二人を見てクスクス笑いだした。

「え？邪魔？」

「何で？」

「だってその彼、あなたの恋人でしょう？」

それを聞いたルイズの顔は咄嗟に真っ赤になった。サイトは（へ？）と言ってるような間抜け顔になる。

「いい嫌ですわ！！恋人なんかじゃありません！！あいつはただの使い魔です！！あんな黒い生き物なんかが私の恋人なんかで…」

「使い魔？」

アンリエッタはサイトの顔や体つきなどをあちこち見回したが、自分の知る使い魔は動物しか見たことがない。人が使い魔なんて初めて見た。

「どう見ても人、それも平民にしか…」

「人です」

人で悪いか。少しムスッとし、心の中で小さくサイトは呟いた。

「昔からどこか変わっていたのは知ってたけど、まさか人を、それも平民を召喚するなんて…」

「好きで平民を召喚した訳ではないんですけど…」

「ルイズ」

ちょっと不機嫌に言おうとしたルイズの手を、アンリエッタは暖かい手で包み込んだ。

「確かに、サモンサーヴァントは使い魔も主人も相手を選べない。でも私は信じてる。彼はきっとあなたの良きパートナーになってくれるって」

「姫様…もったいないお言葉です」

アンリエッタはルイズから手を離し、サイトの方に向き直る。

「実はね、あなたにも会いたかったのよ」

「俺に？」

「えぇ。あの事件の目撃者から話は聞いてました。平民でありながら、あのモット伯爵に立ち向かうほどの人なんだそうだもの。でも驚きました。あのモット伯爵が…」

あの事件とは、やはりモット伯爵とアパテーが入れ替わり、暴れだした事件のことだった。もちろん、国ではトップに近い地位を持つが故に、多数の貴族と関わっていたアンリエッタにとっては衝撃的な事件だった。

「私も聞きました」

ルイズはそう言った。

「ごめんなさい。さっきまで明るい雰囲気だったのに…」

「いえ、お気になさらないでください」

「ありがとう、ルイズ」

すると、アンリエッタは窓から見える双月を、どこか寂しさと悲しさを混じらせたような表情で見つめた。

「結婚するのよ。私。ゲルマニアの皇帝に」

「なんですって!?あんな野蛮な成り上がりの国に!」

ゲルマニアはキュルケの祖国で、金や優れた能力があれば誰でも貴族になれる国だ。他の国よりも人材登用がよい国だがそれがトリステインなどの貴族中心の国からは野蛮な国だと言われている。

「仕方ありませんわ。

ここ最近、正体不明の怪物どもによる影響、そして現在、アルビオンで国家を倒そうとする反乱軍の存在が原因です。先日、トリステイン貴族全員での城の会議で他国との同盟を考えた結果、私がゲルマニアに嫁ぐことで同盟を結ぶことを決定いたしました。ゲルマニア皇帝アブレビト三世もこれに同意はしてくだされましたが…

少なくとも今の私たちトリステイン軍だけでは怪獣には勝てません。しかもまたいつ怪獣が現れるかわからない。今私はトリステインのためゲルマニアに身を委ねなければなりません…。

ですが今、同盟を望まぬアルビオンの反乱軍が今婚姻を妨げる材料を探しているのです…」

アルビオンの反乱軍とは、最近活動を開始した『レコンキスタ』のことだ。共和制を掲げハルケギニアを統一し、エルフに奪われたと

される『聖地』を取り戻すことを目的としている。だが共和制は形だけで実際は卑劣な貴族が平民を騙して利用し、自らの野望を果たそうとしているのだ。

「同盟を妨げるもの…そのようなものがあるのですか？」

アンリエッタは頷き、そして顔を覆って泣き崩れた。

「おお！始祖ブリミルよ！この不幸な姫をどうかお救いください！ルイズ…私…どうしたら……私は今危険なアルビオンに行けなどとそんなことを口にしようと…」

「姫様！このルイズは姫様のお友達でありまったき理解者です！何なりとお申し付けください！」

「ありがとうルイズ。では…今から私が話すことは誰にも言ってはなりませんよ…」

アンリエッタの表情がだいぶ不安で深刻な色に染まりだす。

「俺は出ようか？」

自分が聞くと不味い気がしたサイトは、部屋の外へ出ようとしたが、アンリエッタは首を横に振った。

「いえ、メイジにとって使い魔は一心同体です。それに学院長からあなたがルイズを救ったと聞いています。頼れる人が一人だけでも必要なのです」

アンリエッタは二人に向き直った。

「では心して聞いてください。アルビオンが倒れると共にトリステインまでも破滅に誘う…そのような大変なことが起こってしまうもの。それは……」

ゴクリと二人は息を飲む。

「手紙です。私がアルビオンのウェールズ皇太子へしたためた一通の手紙。早急に手を打てばよかったのですが…これが反乱軍の手に渡れば…」

「失礼ですが手紙の内容は…？」

「それは…言えません。誰にも言えないことだからこそルイズ、あなたにお願いしたいのです」

「わかりました。一命にかけても成功させて見せます」

「ありがとうルイズ。あなたならできると信じています。そしてサイトさん」

アンリエッタは再びサイトを見つめた。先ほどの友達に話しかけるような口調ではなく、真剣さを混じらせた声で。

「私のお友達ルイズをよろしくお願いしますね」

「当然ですよ。一応使い魔なので」

サイトは意外にも真面目な表情で答えた。

（ち、調子のいい奴…）

ルイズは少し呆れたように心の中で呟いてた反面、微妙にその時のサイトの顔が凛々しく見え、少し見惚れてしまった。
すると、扉がひとりでに開いた。

「「！？」」

「誰だ！？」

侵入者か？それともアンリエッタを追ってきた者なのか？サイトはとっさにデルフに手をつけた。
しかし、入って来たのは少なくとも怪しい人物ではなかった。
そこに入って来たのはなんと、ギーシュだったのだ。

「「ギーシュ！？」」
ギーシュだった。

「お話は全て聞かせていただきました」

ギーシュはアンリエッタに頭を下げて言った。

「聞くと言うか盗み聞きだったじゃない！」

ルイズが怒ったように強く言ったが、ギーシュは怯まず立ち上がり、自分に任せてくれと言うようにバッ！と自分の胸を手で触れた。

「姫殿下。このギーシュ・ド・グラモンにもその任務、是非とも仰せ付けください！」

「グラモン？まさかあのグラモン元帥の…」

「はい、息子にございます」

ギーシュの父親も、トリステイン貴族では名を馳せた人物である。余談だが、息子同様女好きなのは別の話。

「お父様も勇敢で立派な貴族ですが、あなたもその血を受け継いでいるのですね。この不幸な姫の力になってください。ギーシュさん」

アンリエッタは微笑んだ。ギーシュはその笑顔にメロメロになる。

「ああ…姫殿下が僕の名前を…」

（大丈夫かこいつ？）

ホワンホワン…となるギーシュを、サイトは呆れた表情で見た。

「では明日の朝アルビオンへ出発します」

「ウェールズ皇太子はニューカッスル付近に陣営を構えていると聞いています。アルビオン貴族があなたたちの目的を知ったらあらゆる手を使って妨害しトリステインを危機に追い込むでしょう…しかし…」

アンリエッタは顔が少し赤くなっていた。一体何を思っていたのだろうか。

「姫様？」

「いえ、何でもありませんわ」

アンリエッタは手紙を胸に添えた。そして窓の外に向いた。

「始祖ブリミルよ。この自分勝手な姫をお許しください。自分の気持ちに嘘をつくことはできないのです…」

（姫様…）

「ではルイズ。ウェールズ皇太子に会ったらこの手紙を渡してください。すぐに例の手紙を返してくれるでしょう…それから…」

アンリエッタは自分の指にはめていた指輪をルイズに渡した。その指輪の宝珠はきれいな水の輝きをしている。

「母君から頂いた水のルビーです。せめてものお守りです。売って旅の資金にしても構いません。その水のルビーがアルビオンの吹く猛き風からあなた方を守りますように…」

アンリエッタは夜の双月に祈り、その後は一人王宮へ戻って行った。

翌日の校門前。サイトは馬小屋から馬を引っ張っていた。

「馬には慣れてないんだよな～腰がおかしくなるから嫌なんだよ～」

まだ走ってないのに腰を軽く叩くサイト。以前トリスタニアに来た時は慣れない乗り物に腰を痛めたものだ。

「だらしないな。気合いをいれたまえよ」

「お前は入れすぎだろ…馬がかわいそうだ」

ギーシュの馬は薔薇で着飾られていた。派手すぎて引いた感じがしてならない。

「そうだ。お願いがあるんだけど」

「あんだよ？」

「僕の使い魔を連れて行きたいんだが」

「使い魔？いたのか？」

「当たり前だろ」

「いいじゃない。連れていけば？」

ルイズも後から馬を引っ張ってきた。

「じゃあ紹介するよ。さあおいでヴェルダンデ！」

すると、地面から大きなもぐらが顔を出した。

「あんたの使い魔ってジャイアントモールだったの？」

「そうだよ。見たまえ！この愛らしく、つぶらな瞳を！」

ギュッ！とヴェルダンデを抱き締めるギーシュ。使い魔をかなり気に入ってるようだ。それにしてもぶさいく、とサイトは密かに思っていた。

「ヴェルダンデ、いっぱいミミズを食べてきたかい？」

「モゲ！」

「そうかそうか！」

元気よく答えるヴェルダンデを、またギーシュは抱き締める。

「ギーシュ、実を言うとお前モテてないんじゃないか？」

「な、何を言い出すんだね君は！？」

サイトの言葉にギーシュは焦るように動揺した。サイトは、ギーシュの使い魔に対する過剰な愛を見て、彼女のいない悲しみを払おうとしているように見えたのだ。

「モンモンだっけ？その娘にフラれたし」

「ぐ、それは…って言うかモンモランシーだ！それに彼女とは寄りを戻したんだぞ！」

「え、嘘！？」

「そんなに驚くのかい！？」

正直サイトは、まさかギーシュがサイトとの決闘前で自分を振ったモンモランシーと寄りを戻したことは想像できなかったようだ。ギーシュはそれにちょっとショックを受けた。

「ダメよ。地面を掘って進む使い魔を連れて行くなんて。私たちはアルビオンに行くのよ」

そうルイズが言った時、ヴェルダンデはルイズの足に触ってきた。

「きゃ！ちょっとどこ触ってんのよ！」

「どうしたんだヴェルダンデ！？あっ、もしかして姫様の指輪…」

「指輪？」

ルイズはアンリエッタから受け取った水のルビーを取り出した。ヴェルダンデはそれを見た瞬間、水のルビーをルイズから奪おうとした。

「こら！これは姫様の指輪なのよ！」

「あ～、ヴェルダンデは宝石好きなんだよ」

「嫌なもぐらだな」

「嫌とか言わないでくれ。彼は鉱石や宝石を見つけてくれるんだ。僕にとっては素敵な協力者なんだ」

「説明してないで助けなさいよ！！あっ、やめてったら！」

ルイズはいまだにヴェルダンデに襲われていた。
ある意味官能的、と考えてはいけないぞ？

その時、どこからか吹いてきた強い風がヴェルダンデを吹き飛ばした。ヴェルダンデは流れ星の如く、どこかへ飛んで行ってしまった。

「ヴェルダンデーー！！」

「手荒ですまない…婚約者がもぐらに襲われているのを黙って見る訳にはいかないからね」

そこに髭の生えた銀髪の男がグリフォンに乗って現れた。

「貴様よくもヴェルダンデを…ってあなたは！ワルド子爵！」

そのグリフォンに乗る男は、ガルベロスたちがトリスタニアに襲来した時に登場したワルドだった。

「ワルド様！？」

「やあ僕のルイズ。大丈夫かい？」

気軽な態度でワルドはルイズに話しかけてきた。

「はっ、はい…」

「すみません…僕は…」

ギーシュはワルドに申し訳なさそうに頭を下げた。ワルドは男子貴族から憧れを抱かれてるほどのメイジなので、より一層罪悪感を覚える。

「いや、僕も君の使い魔を吹き飛ばしてすまなかった」

「そういえば婚約者って…」

婚約者。その単語の意味をサイトは知りたくなった。

「ああ、僕はルイズの婚約者さ」

「え…えええええ!!!?」

ギーシュは驚きのあまり顎が外れかけた。憧れのワルドが、まさかルイズの婚約者だとは夢にも思わなかった。

「ルイズ。彼らを紹介してくれ」

「あっ…まず金髪がギーシュ・ド・グラモン、黒髪が私の使い魔、ヒラガ・サイトです」

「ふむ…君がルイズの使い魔かい?僕の婚約者がお世話になってるよ」

ワルドはサイトを見て言った。

「いえ、どういたしまして」

サイトはあまり態度を変えずお辞儀した。

ルイズは、なぜかそんなサイトの様子に苛立ちを覚えた。

（何よ…相手が私の婚約者だからって…少しは嫉妬しなさいよ…それとも私のことなんとも…って違う違う！あいつはただの使い魔なのよ！そう！それだけの…）

「さあ時間が惜しい。出発しよう！」

彼らは馬、グリフォンに乗りアルビオンへ出発した。

「見送らないのですか？オールド・オスマン」

アンリエッタはオスマンには手紙の件は話していた。城に戻っていたように見せかけ、ルイズに危険な任務を頼んだものだから、彼女たちを預かる身であるオスマンに一言言いに来たのだ。

「ほほ…見てのとおり鼻毛を抜いておりますのでな」

アンリエッタはそのオスマンの様子に呆れのため息をついた。すると、コルベールが大慌てで学院長室に飛び込んできた。

「学院長、一大事ですぞ！チェルノボーグの監獄から囚人たちが全て脱獄したそうです！」

「囚人すべてですか！？」

アンリエッタは声をあげる。

「それだけではないです！門番の話では貴族を名乗る怪しい仮面の男が…」

「仮面の男が…一体なにを？」

「あのトリスタニアを救った巨人、ウルトラマンゼロに変身して自分たちに襲いかかったとのことです！！」

「何ですって…！？」

「大多数の魔法衛士隊が、怪獣出現事件の調査で出払ってる隙に何者かが脱獄の手引きをしたのですぞ！」

「それはつまり…」

コルベールの言葉にアンリエッタの顔色が、だんだん青く染まっていく。

「そうです！城下に裏切り者がいるのです！」

「このトリステインに裏切り者が…しかもウルトラマンゼロが…」

自分を救った巨人が、門番を襲ったなどアンリエッタには信じがたいことだった。

「本当かの？ウルトラマンゼロが門番に襲いかかったというのは…」

「そう言えば…それが変だと聞きました」

コルベールは少し気を落ち着かせて続けた。

「変？」

「ええ、そのウルトラマンゼロは体が黒く、眼は一つで血のように赤く染まっていたと…」

「もしかしたら、これはアルビオンの謀略の可能性がありますわ！」

「かもしれませんな。あいだ！」

オスマンはいまだに落ち着くどころか呑気な様子で鼻毛を抜いていた。

「なぜそのような余裕の態度を？トリステインの未来がかかっているのですよ！？」

いい加減なオスマンにアンリエッタはだんだん苛立ちを覚えていった。

「すでに杖は振られたのですぞ。我々にできることは待つこと…違いますかな？」

「それは…」

「なあに、彼ならやってくれますよ」

「彼？それはワルド子爵でしょうか？それともグラモン元帥の…？」

「いや…」

「では…あのルイズの使い魔さん!?でも彼は平民のはず…」

その時、オスマンはある光景を思い返していた。あのナメクジと地獄の番犬のような怪物が現れた時、偶然人気のない場所で眼鏡のようなアイテムを身につけた瞬間、青と赤の巨人に姿を変えたあの使い魔の少年を……

「ガンダールヴにしてウルトラマンゼロ…か」

オスマンは小声で言ったつもりだったが…

「えっ!?あの使い魔の少年が、始祖ブリミルが用いた伝説の使い魔『ガンダールヴ』にしてウルトラマンゼロの正体!?」

(あっいかん!つい…)

まさか聞こえていたとは思わなかったオスマンは、誤魔化すように咳払いする。

「あーオホン…」

「オールド・オスマン!教えてください!彼は一体…」

もったいぶるオスマンに、アンリエッタは必死にすがるように尋ねる。

「そうですな。彼が何者かはわしらにもわからぬことです。ただ分かるのは…彼は異世界から来た少年…」

「異世界…？」

「はい…このハルケギニアでないどこか…わしはそう思っとります」

まだサイトとは言葉を交わしてはいない。だが、オスマンは思った。

（ハルケギニアでは珍しい『彼』と同じ黒髪…以前、わしを救った『彼』と同じような感覚じゃった…）

その時のオスマンは、顔も忘れそうになっているある人物の顔を思い浮かべた。

「そのような世界が…あるのですか？」

「余裕の態度もきっとそのせいなのですじゃよ」

アンリエッタは窓の外を眺め、思い返していた。二体のビーストから命を救ってくれた、あの青き巨人を。夢かと思いそうだったが、あの背中は、事件の過ぎた今でも忘れてない。

「彼が…異世界の少年でウルトラマン…」

アンリエッタはクスッと笑った。その表情には、ほのかな希望が芽生えたのだろうか。

「ならば祈りましょう。異世界から吹く風に」

Z7　捜索者

アンリエッタからの依頼でアルビオンへ向かう一行。サイトとギーシュは必死でワルドのグリフォンを追いかけていた。

「もう半日以上走りっぱなしなのにペースが落ちない…」

「きっちー…」

サイトはグリフォンに乗っているワルドとルイズを見た。見るからにワルドはルイズにベタベタ触っている。

（もしかしてあいつ…ロリコン！？）

全身に寒気が走る。全国のロリコンの方には申し訳ないが、サイトは怪獣以上にワルドのことを恐ろしく感じた。

「ププ…」

そのサイトを横目で見ていたギーシュは突然笑いだした。

「なんだよギーシュ、気持ちわりーな」

「もしかして君、妬いてるのかい？」

「は？」

なんのこっちゃ？とサイトは首を傾げた。

「なんだ、違うのかい？てっきり君はルイズが好きだと思ってたのに…」

期待外れの返答にギーシュはがっかりした。もし図星を突くことができたら、一発からかってやったのに。

「おい誤解だっつうの。あいつと会ってからまだ日が浅すぎだ。それに俺にはちゃんとした彼女が…」

「なにい！？いつの間に…」

「びっくりしすぎだろ…ったく…」

ギーシュの反応に少し蒸し返すサイトだったが、その彼女、ハルナはどうしているのだろう…

（元気でいるかな…）

以前、一緒に出掛けた時もあった。
確か、日の暮れた帰り道で…

『ハルナは、将来はどうするんだ？』

『私？そうだね…平賀君と一緒じゃダメかな？』

『俺と一緒？』

『平賀君って、防衛軍に入るのが夢なんでしょ？私も、一緒に行けたらいいなって』

『…俺のは、漠然とした夢みたいなもんさ』

自信のないように言うものの、夕日を見つめながら彼は言った。

『三年前、ウルトラマンメビウスが怪獣や侵略者を倒した時、誰もが喜んでいた。自分たちの平穏な生活が戻ってくるから』

『いいことじゃない。どうかしたの？』

『…俺の場合はさ、悲しくもあった』

『え？』

悲しいとはどういうことなのだろうか？侵略者が倒れ、平和が戻ったことに何か不満があるのか。この時のハルナにはわからなかった。

『侵略者だって、元々悪い奴だった訳じゃない。きっと事情とか、昔のこととかで悪に染まる奴だっている。怪獣は人と話せないから仕方ないかもしれないけど、善人になれないまま死んでいく侵略者たちを見ていると、まるで平和のための生け贄に見える』

『平賀君…』

『だから俺、見たいんだ。侵略者だった奴も、侵略された奴も手と手を繋いで、なんのわがたまりもなく日を過ごす景色を』

ギュッ！と拳を握るサイトに、彼女は優しく手を添えた。

『大丈夫、平賀君ならきっと』

「必ず帰るよ…」

サイトは小声で呟いた。

しばらくして、双月が空にはっきり映るほどの時間となった。

サイトたちは今、岩山に囲まれた場所にいる。

「この山道の先がラ・ロシェールの港街だ」

「一息つけるとほっとするなあ…」

痛そうに腰を擦るギーシュ。

「しかし、なんで港街が山の中にあるんだよ。確か、アルビオンってのに行くには、船に乗る必要があるんだろ？」

確かに、この辺りには海はおろか、船が必要な湖もない。なぜこんな山奥に？

「君はアルビオン知らないのかい？」

ギーシュは意外そうな顔をした。

「知らん。ここの常識と俺の常識を一緒にしてもらっては困る…」

すると、突然サイトたちに松明がたくさん飛んできた。

「うわ！」

ビックリしたサイトとギーシュは馬から落ちてしまう。

「なんだ？」

「奇襲よ！気を付けて！」

ルイズの声で二人は岩山の上を見上げる。そこにはたくさんの兵がいた。チェルノボーグの監獄から脱獄してきた囚人たちである。彼らはサイトたちに向けて弓矢を放ってきた。

「わあ！」

しかし、二人を守るように竜巻がまき起こった。ワルドの魔法である。

「大丈夫か二人とも！？」

「だっ、大丈夫です！！」

ワルドの言葉にギーシュが答える。

「戦う気がないなら岩陰に隠れていろ！」

隠れろと言われたくらいで下がれない。サイトはデルフを抜いた。

「俺たちも行くぞデルフ！」

「おお！やっと出番だぜ！」

デルフを握った瞬間、サイトのルーンが輝いた。勢いよく走って崖の上を登り、囚人たちを峰打ちで攻撃する。

「おらあ！」

バシッ！とまず一人が倒れ、一人また一人とサイトは倒していく。

「ぐわ！」「ぎゃあ！」

「ワルキューレ！行け！」

ギーシュもワルキューレで囚人たちを攻撃した。

その頃のワルドはサイトの戦いぶりをじっと見ていた。特に、左手のルーンを。

（あの左手のルーン、やはり…）

その時、空から凄まじい突風が囚人たちを襲った。その風が吹いて来た空に、一匹の竜が空を羽ばたいている。

「竜だ！」「矢を放て！」

矢を放つ囚人たち。だが囚人たちはその強すぎる突風で次々と倒されていった。

「風の呪文にあの幻獣…」

ルイズの顔が引きつっていた。浮かぶのは、どう考えてもあの『二人以外』考えられない。

「知り合いかい？」

ルイズはコクッと頷いた。

「お待たせ～」

その竜に乗っていたのはキュルケとタバサだった。もちろん竜はタバサの使い魔シルフィードだ。

キュルケは制服姿だったが、タバサはナイトキャップを被った寝間着姿だった。

「何しに来たのよキュルケ！」

「朝方あんたたちが馬に乗って出かけるのを見たから急いでタバサを起こしてきたのよ」

（こく…）

「お忍びの任務なのに…」

額を押さえ、肩を落とすルイズ。どこまでもまとわりつくか、と苦虫を噛むように頭を爛れた。

「それにしてもお髭のあなた、素敵な方ね。微熱は、いかがかしら？」

キュルケはワルドの方に歩み寄り、色気を出して体を押し付ける。
そのキュルケにルイズはヤカンのように顔を怒りで赤く染めたが、
ワルドは興味なさそうに押し退けた。

「あらん?」

「済まない。助けはありがたいが近づかないでくれ」

「え、え?どうして!?私が好きって言ってるのに!」

さすがのキュルケも想像だにしてない事態に動揺を隠せずにいた。

「見ろよサイト、キュルケの奴かなり動揺してる」

ギーシュはひそひそとサイトに耳打ちした。彼もこの事態は予測できなかったことがうかがえる。

「だったら理由を言ってよ!」

「理由かい?僕はルイズの婚約者だからさ」

ワルドはルイズを抱き寄せていった。

「婚約者?ルイズ、あなた婚約者なんていたの!?」

「えっと、親が勝手に決めたことで…」

「だったら先に言いなさいよ。恥かいたじゃない」

恥ずかしげにもじもじとルイズは答えた。キュルケはおもしろく無

さそうな表情を浮かべる。

「この男がルイズの婚約者ねえ…」

キュルケはもう一度ワルドの顔を見る。そんなキュルケに、不思議そうな目でタバサは尋ねてきた。

「どうしたの？」

「あの男…見た目はイケてるけど中身はダメみたい。なんか目が冷たいもの。まるで情熱を知らない氷ね。あたしは心に火を灯してくれるような人がいいのよ」

キュルケはさっきの様子から百八十度切り替え、サイトの方を向いた。

「本当はね、ダーリンが心配だったのよ」

キュルケは豊満な胸を押し付けてサイトに抱きつく。

「…うそつけ」

ボソッとサイトは赤くなって言った。

「あらあら、妬きもちなんて…ダーリンったらかわいい」

「おい！やめろって！／／／」

「ちょっとキュルケ！！私の使い魔にまた手を…」

そのルイズを遮るように、暗い影がサイトたちを覆った。頭上に現れたそれを見あげるギーシュは、思わず腰を抜かしてしまう。

「かっ…怪獣!?」

阿修羅を思わせる怪獣『アシュラン』。アシュランはサイトたちの方を睨み、炎を吐き出した。

「ギオオオオオオ!」

「避けろ!」

ワルドの呼び掛けで彼らはアシュランの炎から逃れた。

「大丈夫かい?ルイズ、みんな」

「こく…」

「だ…大丈夫です」

タバサは頷き、ギーシュは声を震わせながらも答える。

「あら?ダーリンは?」

「サイト?」

キュルケの一言で一同は気付いた。サイトはいつの間にかいなくなっていた。

「まさかあの怪獣に！？」

予測などしたくないシナリオを想像してしまうルイズ。だがその時、青き光が一瞬だけ夜空を照らした。

「デュアアア！」

ゼロが空からアシュランにキックを喰らわせた。サイトはアシュランの火に紛れて変身していたのだ。

「ウルトラマンゼロ！」

「タイミングがよかったな。ここはウルトラマンに任せよう！」

ワルドはルイズたちに手招きする。

「でもサイトは！？」

ルイズたちはサイトがウルトラマンゼロであるのに気づいていない。きっとさっきのではぐれてしまったのだと思い込んでいた。

「このままじゃ僕たちも巻き込まれる。来い！」

「ルイズ、急ごう！」

背中を押すギーシュに、ルイズは一同と共に仕方なくラ・ロシェールの港町へ急いだ。

ゼロはルイズたちが港町に急ぐのを確認すると、アシュランに連続でチョップを喰らわせた。

「デュア！！デッ！」

「ギオオオ！」

だがアシュランも負けずゼロにキックを喰らわせる。

「ギオオオオオオオ！」

「グア！」

そしてゼロに向けて火を吹いた。

「ギオオオオオオオ！」

「グッ…」

凄まじい灼熱の炎に対抗し、ゼロはブレスレットから盾を取り出して防いだ。

〈ウルトラゼロディフェンダー〉

そして炎が止み終わってすぐアシュランの足を足を払った。

「デュア！！」

さらにアシュランの上に乗って、アシュランの顔を殴りつけた。

「ダッ！ダッ！デュア！！」

立て続けに攻撃を受け、アシュランはゼロの背中を蹴って逃れた。

「ギオオオ！」

「デュアアア！」

ゼロはアシュランと対峙した。その時、月の光に照らされた周辺が真っ暗になっていく。

「月が重なろうとしている…」

その日は『スヴェルの月夜』と言って二つの月が重なる日だった。アルビオンは浮遊大陸。この日の翌日にアルビオンはラ・ロシェールの港町に近づくことになっていた。

その時遠くでゼロとアシュランの戦いを見ていた男がいた。その男の格好はサングラスをかけ、壮年ながらまだ元気な部分を出していた。

「月が重なるのを利用するか…」

サングラスの男はサングラスを外し、右手を天にかざした。すると、彼は白く輝く光に包まれ、巨大化していく。

「シャ！」

ウルトラマン兄弟四番目の戦士、ウルトラマンジャックが現れた。

「なっ、ジャック！？」

突然の参戦者にゼロは唖然となった。

「光の国以来だな」

「なんでこの星にいるんだよ！？」

「話しは後だ。まずこいつを倒してから聞かせてもらうぞ！」

「言われなくてもやってやるさ！」

二体のウルトラマンはアシュランに向き直って身構えた。

「デュア！！」

「シュア！」

「ギオオオオオオ！」

だんだん辺りが暗くなっていた。二体のウルトラマンはそれもお構い無しにアシュランを殴りまくった。

「ダッ！ハッ！シュワ！」

「ジュアッ！ダッ！デュア！！」

「ギオオオ！？」

アシュランは猛攻に耐えきれず地面に倒れ込んだ。

二体のウルトラマンはアシュランの腕をそれぞれつかんで無理やり立ち上がらせ、アシュランの腹を蹴りまくった。そしてアシュランを思い切り背負い投げた。

「ダッダッデュア！！」

「ハッハッイヤ！」

アシュランはヨロヨロと再び立ち上がった。二体に向けて牙を剥き出している。その時、二つの月が重なった。

「今だ！」

「おし！デルフ！行くぞ！！」

ゼロはゼロスラッガー（デルフ）を抜き抜いた。

「おっしゃあ！」

二体のウルトラマンはアシュランを囲むように立ち、そしてジャンプし、空中回転しながらアシュランの首を攻撃した！

〈ハードスライサー！〉

「ヤアアアア！」

〈ゼロスラッガーアタック！〉

「デュアアアア！」

ズバシュ！生々しくも、きれいにものを斬った音が響いた。

「ガ…アア…」

アシュランは黄色い血を吐いて爆散した。

ラ・ロシェールの街　サイトとジャックの人間体『郷秀樹』はようやくルイズたちが宿に入るところを目撃し、その宿の前に歩いてきた。

「なかなか腕をあげたな。あれだけ訓練をサボってたというのに」

「と、当然だろ。それにしてもなんで…あんたはこの星に？」

「いきなり予定外の星にさ迷ったんだ。兄弟全員をお前の捜索に使わせるなんて全く、世話の焼けるやつだ」

どうもハルケギニアは、光の国からかなり離れた場所にあるようだ。郷いわく、ウルトラの父はウルトラ兄弟を総動員でゼロの捜索に当てらせたが、かなり難航していたらしい。

「うっさいな…」

拗ねるようにサイトは言った。

「レオの奴はかなり怒ってたぞ。ゼロ、帰らなくていいのか？」

「俺はこの星にしばらく残るよ。そうレオや親父たちにも言ってく

れ」

後が怖いけど…とサイトが後で付け加えたのは別の話。

「結局残るのか…まあ、お前の安否確認だけできてよかったよ。あ、それともう一つ確認したいんだが」

「確認ってなんだよ？」

「ベリアルさんの息子さんが失踪したらしいが、知らないか？」

「ベリアルのおっさんのガキ？いや、知らないけど…」

実は、ベリアルには我が子がいた。確か、かなりの父親嫌いで学校ではかなりの悪ガキだって噂、ゼロとしての記憶がサイトにそう語っていた。

「もし見かけたら、受信に時間がかかるだろうがウルトラサインで知らせてくれ。最後にゼロ、忠告する」

「何だよ？」

「俺たちの敵は奴だけじゃない…何か恐ろしい敵が他にもいるはずだ」

郷はそう言って去って行った。

「恐ろしい敵ってなんなんだ…？」

サイトはなんだろうと不思議がった。

以前確か、モット伯爵に化けたアパテーは『冥王』という言葉を口にした。何か関係あるのだろうかと思ったものの、考えてもわからないのでとりあえず宿に入った。
ちなみに宿に入ったサイトはルイズに涙目で睨まれた。

食堂で食事をとる時、サイトは目を開かせていた。

「すっげえ豪華！金ぴかだな！」

スプーンも金そのものでできてるようだ。なんて贅沢なのだろう。

「おいおいあまり騒がないでくれ」

「あれ、ルイズはどこ行ったんだギーシュ？」

サイトはいつの間にかルイズがいなくなっているのに気付いた。

「子爵と一緒に外出したみたいだけど…明日の船の交渉に」

そこに、その二人が入ってきた。

「明日の夕刻にはアルビオンへ出発するよ。部屋を取ったからゆっくり休んでくれ。ルイズは僕と同室だよ」

いくらなんでもこれにはかなりビックリした。サイトは「お父さん

は許しませんよ！」と一言もの申したくなった。

「ちょっと待って！私たちまだ結婚してないのに…」

「ルイズ…」

ワルドはルイズの手の甲にキスした。

「大事な話があるんだ。一番上等で素敵な部屋を取ってある。二人きりになりたい…」

彼はルイズを連れて食堂を後にした。

「いいのダーリン？ルイズのこと…」

「だからそんなんじゃないって…」

キュルケの言葉にサイトは断固否定を通した。

「実は、彼には彼女がいるそうだよ」

「ええ！？」

「キュルケもかよ…たく…」

キュルケの反応にサイトはちょっぴり拗ねる。そんなサイトの様子を、キュルケは（やっぱりかわいい♪）と心の中で呟いていた。

「姫様から預かってる手紙、持っているね？」

この宿で最も上等な部屋で、二人は隣り合わせで座っていた。
部屋は金の飾りつけや、上等なレースのカーテンで飾られていて、
一般人には豪華の一言では済みそうにない。

「ええ、肌身離さす」

「一体、どんな内容なんだろうね。同盟を妨げるものらしいから気になってしまうな」

軽くジョークを混じらせるワルド。ルイズにワインの入ったグラスを手渡した。手紙の内容、グラスを手にとったルイズは、伊達にアンリエッタと幼少期をすごしたわけではない。きっと彼女は…

「以前に予想していた通りだった。君は誰も持ってない力がある」

「力？」

ワルドの言葉にルイズはきょとんとする。

「力なんて私にはないわ…学院でなんて呼ばれてるか知ってる？成功率ゼロのルイズなのよ」

自分で言うと、ばかにされ続けた時の悔しさが込み上げてくる。

「君は昔から、才のある姉たちと比べられていた。でも僕にはわかるよ。その証拠を、君の使い魔が証明している」

「証拠…サイトが？」

「そうだ、彼はかの始祖ブリミルがはるか昔に従えていた使い魔、ガンダールヴの力を持ってる」

ルイズは始祖ブリミルやガンダールヴについては授業などで習った記憶がある。６０００年もの昔に、四人の使い魔を従えハルケギニアの人々に平和をもたらした、いわゆる神的存在なのだ。しかし、サイトがその伝説の使い魔？

「そんな…サイトは確かにギーシュとの決闘ではすごかったわ。剣はあの時初めて握ったことがあるくらいだったみたいだけど…」

大袈裟だ。と言ったが、ワルドは下がる素振りを見せない。

「この任務を終えたらルイズ、結婚しよう」

ワルドのその言葉にルイズは、あっという間に真っ赤になる。

「僕は魔法衛士隊の隊長で終わるつもりはないさ。いずれハルケギニアを動かせる貴族になる。そのためにも、君が必要だ」

くいっとワルドはルイズの顔をこちらに向けさせた。

「わ…ワルド、私…」

恥ずかしそうに目を背けるルイズだが、ワルドは顔を近づける。

「大丈夫。君は僕が守る」

だんだんと自分の口元にワルドの唇が近づいてくる。しかし、その時のルイズにある男の姿が浮かんだ。
サイト。平民や貴族といった習慣にとらわれることなく、自分を説教したり、命を張ってまで守ってくれた。そのせいか、ワルドの顔を近づけさせなかった。

「…済まない。僕はことを急ぎすぎていたようだ」

ワルドは立ち上がって扉の方に向かった。

「でも、必ず答えを出すって信じてるよ。お休み、ルイズ」

「お休みなさい…ワルド」

ワルドはルイズの一言を聞くと、部屋を出た後別室で眠りに着くことにした。

「準備はいいな?」

「ああ、いつでもいいさ」

サイトたちのいる宿の外に、二人の人影があった。一人は、白い仮

面を被ったサイトと同じ年位の男に、もう一人はローブを身につけた女性だ。

「明日だ、それまで待機しておけ」

Z8　ゼロの影

翌日、朝日が顔に差し込み、サイトは目を覚ました。

「ふわぁ～…」

ギーシュは隣のベッドでいびきを上げて寝ている。

「寝ると品がないなこいつ…」

すると、扉から誰かがノックしてきた。サイトが扉を開けると、そこにワルドが立っていた。

「おはよう使い魔君」

「なんすか？」

「君はガンダールヴだそうだね」

「え？」

聞き覚えのない単語に、サイトは首をかしげる。

ガンダールヴとは、一体何のことだろう。

「おや、まだ知らなかったのかい」

意外そうにワルドは言った。

「まあ、知らないなら構わないさ」

「こんな話だけではないでしょう?何か用事があってここに来たんでしょ」

「察しがいいね。僕と手合わせ願いたい。ルイズから聞いてる。平民でありながらギーシュ君を圧倒したその力を見てみたい」

「どこでやるんですか?」

「この宿は昔アルビオンの侵攻に備えるための砦だった。中庭には練兵場がある。そこで勝負だ」

背を向けるワルドに、サイトはデルフを背負って着いていった。

着いた場所は、少し広めの練兵場だった。

「かつてある国の王フィリップ三世が兵士を育てるために建設した場所だ。兵士たちはその王への恩に報いるために日々鍛練を行っていた。

でも、時には下らない理由で剣をとることもあったそうだ。例えば、女を取り合ったりね」

たんたんと昔の話を話すワルド。

「結局なに言いたいのかわからないんすけど、どうぞ構えてください」

デルフを手に取るサイト。

「そう焦るな。まず介添人が必要だ」

その介添人がやって来た。ルイズだった。

「ルイズ？」

「どういうこと？来いってきてみれば…二人で何をする気なの？」

「彼の力を試そうと思ってね」

ワルドは懐から杖を取り出した。

「バカなことはやめて！そんなことやってる場合じゃないでしょう！？」

「そうだね…でも強いか弱いか気になると、どうにもならなくなるのさ。貴族と言うものは」

「やめてよ二人とも！！」

二人の耳にルイズの声は聞こえてなかった。

サイトはワルドに向けて剣を振りあげた。だがワルドは難なくそれを受け止め、今度はワルドがサイトに攻撃してきた。

まさに蝶のように舞い蜂のように刺すような攻撃だった。

（速い！！）

この速さについていけないと悟ったサイトは一度距離を置いた。

「どうした?息が上がっているようだが」

「なんでえあいつ魔法を使わねぇのか?」

「お前が錆びてっから、なめられてんだ。多分…」

確かに、さっきの攻撃を避けるのに体力を使った。息が上がってるのを隠しきれないほどに。

「ただ魔法を唱えることがメイジの戦い方じゃない。杖を剣のように扱いつつ詠唱を完成させる。軍人の基本さ」

「なら、これでどうだ!」

サイトは剣を風車のように回転させてワルドに接近した。

「アイデアは悪くないな。君は確かに素早い。ただの平民とは思えないよ。さすがは伝説の使い魔…しかし…」

ワルドはサイトの後ろに回り込み、杖でサイトを攻撃した。

「うわ!?」

「だが速いだけで動きは素人…隙だらけだ」

サイトはその後も攻撃するがワルドは難なくかわしていく。

「ただ剣を振ってはメイジには勝てない…つまり、君ではルイズを守れない。それどころか、誰もね」

そしてワルドはサイトに風の魔法エアハンマーで攻撃した。

「うわあ！？」

サイトは風の衝撃波で壁に激突し、デルフを落としてしまう。

「勝負ありだ」

立ち上がろうとした時には、ワルドは目の前で杖を突きつけていた。

「サイト！」

心配になってルイズはサイトに駆け寄った。

「わかっただろうルイズ。彼では君を守れない」

「そんな言い方しなくても…」

「とりあえず彼を一人にしておこう」

ワルドとルイズは去って行った。

「いやぁ負けちまったな」

デルフは悔しさを紛らわすように言った。

「まあ恥じることはないぜ。あいつ多分スクウェアクラスのメイジだ。って相棒？まだ話は…」

「…」

サイトはデルフになにも言わないまま、彼を鞘にしまい込んだ。真面目に訓練しておけば、なんて言い訳を考えていた訳ではない。

（誰も守れないだと…？）

ワルドのあの発言はかえってサイトの心に意地っ張りに近い炎を灯すことになった。

夕刻。船が出る数分前の時間となった。

「そろそろ出発だ。桟橋へ行こう」

「サイト…けがは？」

心配そうに尋ねるルイズに、サイトは何事もなかったように振る舞う。

「なんともないよ。気にすんな」

サイトたちは宿を出たその時、巨大な石の巨人が彼らの前に姿を現

した。

「なっ、何!?」

「ゴーレム!?」

「くっ…」

キュルケ、ギーシュ、タバサは驚愕する。その巨大なゴーレムは、どうやらサイトたちを標的にしているらしい。

「先に行って」

タバサはサイト・ワルド・ルイズの三人に言った。

「行けって、タバサはどうするんだよ!?」

「足止めする。今のうちに」

「はあ、しょうがないわね。私も残ろうかしら。ギーシュ、あんたも残るのよ」

「え、僕もかい!?」

キュルケも胸元から杖を取り出し、残る姿勢を見せた。

「よくよく考えたら、私たちはアルビオンに何しにいくのかわからないし。ほら、さっさと行きなさい!」

「あ、ありがとう!」

ルイズは少し言いにくそうにも、キュルケに礼を言った。

「勘違いしないことね。私はダーリンのために頑張るんですから！」

「わかった。死ぬなよ！」

サイトとワルドはルイズを連れて先へ行った。

「子爵…なんか怪しい…」

タバサは意味深なことをボソッと呟いた。

「おいキュルケ！何か手はあるんだろ！」

「落ち着きなさいギーシュ！まずはあんたはワルキューレであいつを牽制、そして錬金であいつを油まみれにした後あたしとタバサであいつを焼き払う！」

「りっ了解！」

「さあ、おっ始めるわよ！」

気合いを入れた三人は、謎のゴーレムに杖を向けた。

「まさか、ここで学院の生徒に手を出すなんて…気が重いね…」

その時、誰にも気づかれない高い場所から、ゴーレムを操ってる女メイジ『土くれのフーケ』がキュルケたちの姿を見下ろしていた。

サイトらは桟橋へとたどり着いた。まだ船は出港していない。

「よし、急いで乗り込むんだ」

まず最初にサイト、ワルド、最後にルイズが乗り込む。しかし、ルイズは慣れない長距離を走ったせいで息が切れていた。

「ルイズ、早く上がれ！」

「はあ…はあ…」

その時、突如ルイズの背後から白い仮面を身につけたマントの男が現れ、ルイズを捕まえた。

「きゃあ！？」

ワルドはすぐ杖を引き抜き、風の魔法で仮面の男に攻撃した。

「エアハンマー！」

「っ…！」

仮面の男はルイズを離し、ルイズはワルドの腕の中に落ちた。

「怪我はないかい、ルイズ？」

「だ…大丈夫…」

ルイズの安否を確認したサイトはデルフを引き抜き、港近くの地に降り立った仮面の男の前に立った。

君ではルイズを守れない。そのワルドの言葉は、サイトに無力感を感じさせなかった。むしろ、彼をいきり立たせていた。
すると、突然マントの男は自らのマントを脱ぎ捨てた。

「なっ！？」

その姿を見たサイトは、驚きを隠せずにいた。

「テクターギア！？」

その仮面の男は、すでに人の姿をしていなかった。どこか、変身したときの自分の体と似た体つきの上に、鎧を身に付けている。
その鎧は光の国の訓練用アーマー、テクターギア。ゼロもこれを使用したことがある。自らの自由を奪われた厳しい環境の元での訓練には重宝されている。
なぜそんなものを奴は持っているのだろうか。
奴は黒い体つきをしているため、さしずめ『テクターギア・ブラック』といったところだろうか。

「ワルドさん、ルイズと一緒に行ってください！俺も適当に撒いたらすぐ向かう！」

「ちょっとサイト！」

ルイズは反対しようとしたが、ワルドはそれを止めた。

「ダメだ、もう出発の時間になる！」

もう船はアルビオンに向かって出向し始めて、地上を離れ始めていた。

「これはこれで好都合だな…」

サイトはブレスレットからウルトラゼロアイを取り出そうとしたが、テクターギア・ブラックはこちらに手をかざし、そこから放った光でサイトを包み込んだ。

「うわ！？」

目を開けると、そこはどこなのかもわからない場所だった。だが、何かと空に浮いた感じがする。

それにしても、さっきのテクターギアを身につけた戦士は何者なのだろうか。

いや、今は現状を把握するのを優先しなくては。

「ここがアルビオンなのか？確かギーシュの話によると霧と雲に覆われているって」

「多分な」

「でも、街が見当たらないな」

回りは森と草木でだけしかなかった。街明かりはおろか、人がどこかで騒いでる感じもしない。

「相棒…なんか匂うぜ…」

「…ああ」

サイトはデルフを抜いた。すると、茂みの中からなにかがサイトに襲いかかってきた。

「うわ!?危ねえ!」

なんとかよけた。一体何が襲ってきたんだ?サイトは目を凝視させると、妙な
形をした蜘蛛が目の前にいた。

「こいつ…グモンガ!」

宇宙蜘蛛『グモンガ』。猛毒を持つ巨大なクモ。

「グモンガ?」

「だとしたら…ここはアルビオンじゃない!」

「アルビオンじゃねえだと!?だとしたらここはどこだ!?」

「ベル星人の…疑似空間だ」

その頃キュルケたちは、ゴーレムと戦っていた。
タバサは風の魔法で牽制し、ギーシュの魔法『錬金』でゴーレムを油まみれにし、そこにキュルケが炎の魔法を叩き込んだ。

「フレイムボール！」

ゴーレムは炎に包まれ、崩れ落ちた。

「やった！やったぞ！」

ギーシュははしゃぐように跳び跳ねた。

「喜ぶのは早い！ダーリンたちを追わないと…」

先を急ごうとするキュルケだったが、タバサはそれとは逆の方を向いていた。

「タバサ、どうしたのよ？」

気のせいか、彼女はどこかに何者かの気配を感じていた。

「何でもない…」

三人はサイトたちを追うことにした。

「…」

フーケは物陰から三人の後ろ姿をじっと見ていた。
実はフーケ、あることを脅迫されたせいでアルビオンの反乱軍に無理やり参入されたのだ。

（テファを、頼んだよ。シュウヘイ）

その頃、ベル星人の疑似空間。サイトはグモンガと戦っていた。
グモンガは毒ガスをサイトに向けて吐きだした。

「やば！」

サイトは急いでパーカーの帽子をマスクのかわりにして口をふさいだ。

「キエエエ！」

サイトは毒ガスが消えたところを、すぐさま剣を振ってグモンガを切り裂いた。

「おらあ！」

「キエエエ…」

グモンガは真っ二つに切り裂かれ絶命した。

「なんとかすぐに倒せた…毒ガス吸って死ぬところだった」

「いやぁ使われてる俺っちもぞっとしたぜ」

だが喜ぶのもつかの間、

キィーーーーーーーン

「ぐっ、あ…！？」

突然鼓膜を破るような怪音波がサイトを襲った。耳が痛すぎてサイトは思わず耳を塞ぐ。

「相棒、大丈夫か？」

「あぁ…とうとう奴が来たようだな」

サイトが遠くを見ると、そこには彼の父親、ウルトラセブンを苦しめた、音波怪人『ベル星人』がいた。

「ベル星人…やっぱりいやがったか…」

サイトは耳を押さえていた。だが耳をふさいでもベル星の怪音波がサイトを苦しめた。視界が歪む。

「相棒！しっかりしろ！」

「ぐっ…デュア！」

サイトは苦しみながらウルトラゼロアイを装着し、ウルトラマンゼロに変身した。

「デュア！」

だが変身したからといって超音波が効かなくなるわけではない。

キィーーーーーーン

「グッ…」

ゼロは耳を押さえた。

ベル星人は容赦なく隙だらけのゼロを蹴り倒し、そしてそのままゼロを蹴りまくった。

「グア…！」

だがゼロは立ち上がり、ベル星人を蹴り飛ばした。

「ダアッ！」

そしてベル星人を押さえ、殴りかかった。

「デュア！ダアッ！」

だがベル星人はゼロの背中を蹴り、ゼロから逃れた。そして突然空へ飛びだした。

（逃げる気か！？だが逃がさないぞ！）

「デュア！」

ゼロも空へ飛び、ベル星人を追いかけた。

鬼ごっこが始まってしばらく、ゼロはベル星人の足を捕らえた。

「ダアッ！」

だがベル星人は足をばたつかせ、ゼロの腕を払った。そして再び逃げだす。

ゼロも負けずベル星人を追いかけた。

そして両手の人差し指と中指をクロスし、額に当てて額のビームランプから必殺光線を放った

〈エメリウムスラッシュ！〉

「デュア！」

エメリウムスラッシュがベル星人に見事ヒットした。そしてベル星人は沼に落ち、爆散した。

しかし、ベル星人を倒したのに疑似空間はいまだに消滅しない。

いや、消滅しないのではない。また別の空間に姿を変えていった。

それも、光を感じさせない闇の空間へと。

「なんだ…これは？」

「重苦しいな…こいつぁ…」

紫色のドームが形成され、最後に赤紫色の空が広がった。
以前、ゼロの出会ったネクサスの展開した『メタ・フィールド』とは違う。荒れた荒野なのは同じだが、それとは全くの逆に位置するものだった。

「ベル星人などでは勝てなかったか」

「！」

背後から声が聞こえてきた。ゼロはそちらの方を振り向くと、そこにテクターギア・ブラックが立っている。

「ここは…『ダークフィールド』。光の戦士である貴様が、ここで勝てる可能性などない」

「ダークフィールドだがなんだが知らないけどな、ここから早く出してもらおうか。無駄な戦いは避けたいんだ」

「ふふふ…ははははは…」

ブラックは嘲笑うように笑いだした。

「まさか、貴様がそんなアマちゃんとは思わなかったぞ」

ジリッ…とブラックはゼロを睨みながら身構えた。

「どうしても戦うのか？」

ゼロの、サイトとしての性格が、ここにきて戦いを躊躇わせた。相手は話の通じる相手だったから、なんとか話し合いで持ち越せないだろうかと思ったが、ブラックは聞き入れる素振りすら見せない。

「バカめが、貴様も本心では戦いたくてしょうがないんじゃないのか？」

「ち…違う！」

「違う…か。だったら死ね！」

ブラックはゼロの真上に飛び、蹴りつけようとした。ゼロもすぐ足を真上に向け、ブラックの蹴りを蹴り返す。

「ラララララララアアアア！！！！！！」

その体制のまま、二体の巨人は空中へ舞い上がり、そして空中を旋回しながら何度も離れ、何度もぶつかり合った。

「ぐっ！」

ブラックは再びぶつかった瞬間、背後からゼロを捕らえ、地上に叩き落とした。

「ウワアアア！」

ガシャアアン！と砂のしぶきをたてながらゼロは地上に落とされた。

そこに追い討ちをかけるようにブラックが拳でゼロの顔を殴り付け

る。

「ちっ！」

ゼロはブラックの黒き拳を掴むと、逆にブラックを地面に押さえつけ、殴りまくった。

「ハッ！ジュア！デュ！」

ブラックは殴られながらもゼロの腹を蹴り飛ばし、ゼロと距離を置いた。

「大丈夫か相棒？」

ゼロスラッガーとなったデルフが尋ねる。

「ああ…」

（こいつ…できやがる！）

ゼロはまだ平気だったが、ブラックの強さに内心驚愕していた。

それに、このダークフィールドに入ってから力がだんだん抜けている。この空間は少なくとも、ゼロのような光の戦士には毒そのものだった。

（くそ…どっちかと言えば奴の方が有利なわけか…）

それ以前に、テクターギアを装着してるにも関わらず、互角の勝負を展開するとは、一体奴は何者なのだろうか。

すると、ブラックは炎を纏った拳で自らのテクターギアを殴り付け

た。無理やりテクターギアを破壊するつもりなのだ。
テクターギアはひび割れ、最終的にガシャン！と音をたてて破裂した。
「！？」
言葉を失うゼロ。
「相棒が…」
思わず声を震わせてデルフが口を開いた。
その体の色は黒と暗い橙色だったが、模様も姿も似ていた。しかし、その胸のクリスタルと額のビームランプは白く、目は紅く、一つ目だった。
一言で言えば、彼はウルトラマンゼロとほとんど同じ姿だった。
「もう一人！？」
「誰だ…お前は！？」
「俺の名は…『ダークロプスゼロ』」
サイト（ゼロ）と同じ声でその黒い闇の巨人、ダークロプスゼロは答える。
「ダークロプス…」
ゼロは両腕をＬ字型に組み必殺光線を放った。
「ゼロだと！？デュア！」

〈ワイドゼロショット！〉

対するロプスゼロも逆Ｌ字型に両腕を組んで暗黒光線を放った。

〈ダークゼロショット！〉

「デュ！」

光線のぶつかり合いで砂ボコりが巻き起こる。

すぐさまゼロはゼロスラッガーを投げつけるが、ロプスゼロも、ゼロスラッガーと同じ宇宙ブーメランを投げて弾き飛ばした。

「ちっ…」

ゼロはゼロスラッガーを頭に着け直し、ブレスレットから槍を取り出した。

〈ウルトラゼロランス！〉

同時に、ゼロの左手に刻まれたガンダールヴのルーンが光った。

「ほう、ガンダールヴのルーンか。だが」

ロプスゼロは両手にダークゼロスラッガーを持ち、身構えた。

「少々強くなった程度、しかもまだその力を使いこなせない貴様が、俺を倒せると思っていたのか？」

「ごちゃごちゃと！ハアアアッ！」

ここで負けるわけにはいかない。ルイズや仲間たちが待っている。
ゼロはランスの先をロプスゼロに向け、突撃した。対するロプスゼロもダークゼロスラッガーを構え、さらに自らを回転させて突出した。

凄まじい金属音が鳴り響くと、ゼロのランスが空高く舞い上がっていた。
そして、ゼロは地上に叩き落とされてしまう。

「グワアアッ！」

「ふん…」

ロプスゼロはゼロのはるか真上に浮くと、ロプスゼロのプロテクターが蓋のように開き、引っ込んだカラータイマーの変わりに、胸部に内蔵していた時空転送装置『ディメンジョンコア』を出した。

「半機械と闇の巨人としての肉体…それが俺の特性…」

ディメンジョンコアに光がだんだん灯っていく。

「おい相棒、やべえぞ！早く逃げろ！」

「だ…ダメだ…体が…」

デルフが危機感を感じて忠告するが、ゼロはさっきのダメージで体がうまく動かない。
ロプスゼロのディメンジョンコアから、凄まじい時空の嵐が放たれ、

ゼロを襲った。

〈ディメンジョンストーム！〉

「フン！」

「ぐ、うう…」

嵐に巻き込まれながらも抵抗しようとしたゼロだったが、その凄まじい衝撃に耐えきれず、宙に舞い上げられ、割れたガラスのように空いた時空の穴に飲み込まれていった。

「うわあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

ゼロを飲み込んだ時空の穴は、元通りに閉じ、ダークフィールドも消滅した。

「ふん…拍子抜けだな。あれが、『この世界の俺の力』だと言うのか」

おもしろく無さそうにロプスゼロはどこかへ飛び去っていった。

ダークフィールド消滅後、ゼロのウルトラゼロランスは宇宙にまで飛んでいっていた。
その槍を、紅き姿の巨人がそれを受け止めるように掴みとった。

「ゼロ…」

その獅子のごとき巨人はすぐ槍の飛んで来た方へ急いだ。

Z9　獅子と零

その頃、ルイズたちの乗っていた船は、どこからか現れた空賊たちに乗っ取られてしまった。
ワルドは応戦しようにも、たまたま船の燃料として使っていた風石が切れ、かわりにワルドの魔法でささえていたものだから抵抗できず、船員たちとともに捕らえられてしまった。
今二人は、牢屋代わりの物置に閉じ込められている。
（こんなときに、サイトはどこに行ったのよ！）
ルイズは仕方ないとは思っていたが、サイトがいないせいか不安を募らせていた。

「お前らは貴族だな」

空賊たちがルイズたちのところへやって来た。

「確かにそうだが」

「来い。頭がおよびだ」

二人は頭の部屋に連れて行かれた。

頭の部屋に招かれた二人は、その頭を見る。
彼は見たところ年はサイトやシュウヘイと同じくらいだろう。机に足を乗せて座っている。

「頭、連れてきやしたぜ」

「へえ、こりゃ気の強そうな貴族のお嬢さんだな。可愛いねえ」

「黙りなさい下朗！私たちはアルビオン王党派の使いよ！そして私は大使よ！だからあんたたちに大使としての扱いを要求するわ！！」

「アルビオンで何をするつもりだ？あいつらは明日にでも消えちまうよ」

「あんたに言うことじゃないわ」

「貴族派にならないか？あいつらはメイジを欲しがってる。高い礼金をくれるだろうぜ」

「死んでも嫌よ」

ルイズの足が震えている。虚勢を張り切れるのも時間の問題だった。

「最後だ。貴族派にならないか？」

「うぐぐ…」

「済まないが、なるつもりはないよ」

そこにワルドが割り込んだ。

「なんだお前は？」

「彼女の婚約者だ」

「婚約者？」

「そうだ」

「ハハハハ！トリステインの貴族は気が強すぎてどうしようもないな！まあ貴族派の恥知らずよりも遥かにマシだがね」

「！？」

突然高笑いをあげる頭。気でも狂ったのだろうか？いや、違った。

「無礼な態度をとって済まなかった、レディ。僕はアルビオン王国皇太子、ウェールズ・テューダーだ」

頭だった男は服を整えた。なんとそれはウェールズだった。

「皇太子様！？」

「本当に…皇太子様ですか？」

ワルドの言葉に反応するように、ウェールズは左手の薬指にある指輪を見せた。それには緑色の宝石が埋め込まれている。

「風のルビーだ。君はアンリエッタから水のルビーを預かっているなら出してみなさい」

ルイズは水のルビーを取り出した。ウェールズは風のルビーを水のルビーに近づけると、小さな虹ができた。

「水と風は虹を作る」

「し…失礼しました！非礼をお詫びします…」

「ふふ、そうかしこまらなくていいよ。僕が先に始めたことだ」

頭を下げるルイズに、ウェールズは何事もなかったように言った。

「これが姫様から預かった手紙です」

ルイズはアンリエッタの手紙をウェールズに渡した。ウェールズは封を開き、手紙を読んだ。

手紙の内容は、アンリエッタが同盟のための政略結婚でゲルマニアに嫁ぐこと、そして同盟の妨げになった手紙の返却を求めるものだった

「これは…あのアンリエッタがゲルマニアの皇帝に嫁ぐというのか…？」

「はい…」

「そうか…」

ウェールズは台の上の小箱を開け、ルイズに頼まれた手紙を取り出した。

「アンリエッタから頂いた手紙だ。確かに返却した」

ウェールズはルイズに手紙を渡した。

（ぼろぼろになってる。何度も読まれたのね）

ルイズはウェールズから受け取った手紙を見つめて思った。きっと彼もアンリエッタに対して…

「このイーグル号は明日の朝に民間人を乗せ出港する。それに乗ってトリステインに帰るといい」

「王軍に勝ち目はないのですか？」

ルイズは恐る恐るウェールズに尋ねた。

「残念だが勝ち目はない。和が軍は三百、相手は七万。我々にできることは勇敢な死に様を連中に見せるだけ。討ち死にする時は真っ先に死ぬつもりだ」

「そんな！何故負けるとわかって戦うのですか！？どうか亡命なさってください！姫様が自分の愛した人を見捨てるはずがありません！」

「僕とアンリエッタが恋仲と？確かに僕とアンリエッタは愛し合った仲だ。だがアンリエッタの恋文がゲルマニアの皇室に渡ったら婚約は破棄され同盟は成らず、トリステインは一国であの貴族派に立ち向かわなくてはならない。アンリエッタは王女だ。情に流され自分の都合を国の大事より優先させるはずがない…」

ルイズはそれを聞いて黙り込んだ。目尻に涙が溜まっていく。ここで、彼の説得を試みたが、現実はそれを許さなかった。

「君は大使に適任な真っ直ぐな子だ。だが何事にも真っ直ぐでは大

使は務まらないよ。しっかりするんだ。
さて、そろそろニューカッスル城だ。案内しよう」
ルイズたちはウェールズに出口へ案内された。

半機械の闇の巨人ダークロプスゼロによって、次元の狭間に飛ばされてしまったゼロ。
その彼は今、不味い状況に陥っていた。

「く、こいつら…どこから沸いて来たんだ!?」

今、ゼロたちの前に初代ウルトラマン、ウルトラセブンにウルトラマンエースの偽物ロボットが立ちふさがっている。ゼロを倒すためにロプスゼロが送り込んだ刺客と思われる。
『ロボット超人ニセウルトラマン』『ニセウルトラセブン』『ニセウルトラマンエース』は一斉にゼロに襲いかかってきた。

「シャ!」

「デュア!」

「トワア!」

ニューカッスル城の大広間にて、アルビオン王党派最期の宴が始まった。
アルビオンの貴族たちは明日の辛さを紛らすために楽しむフリがルイズには耐えられなかった。

やはりもう一度話をしよう。ルイズはウェールズの部屋を尋ねた。
彼の部屋に入り、ウェールズは彼女を目の前のソファゆ座らせ、茶を差し出した。

「どうしたんだい？」

「皇太子様は、死ぬのは怖くないのですか？」

「僕らを案じてくれるのか。もちろん怖いさ。だが、我々には義務がある。あの賊軍にアルビオン王国は弱者でないのを示さなくてはならないのだ。貴族である君にも、わかるはずだ」

「勝ち目がないなら逃げてもいいじゃないですか！それに愛する人のために生きるのもまた義務じゃないですか？」

身分を越えた幼なじみのためにも、必死に説得しようとするも、ウェールズは頑なに拒んだ。

「僕が亡命すれば貴族派が攻め入る口実を与えるだけだ。僕も彼女を悲しませたくないが仕方のないことだ。アンリエッタに伝えてく

れ。ウェールズは勇敢に戦い、勇敢に死んでいったと。それで十分だ」

ウェールズはそう言って部屋を後にした。

〈ワイドゼロショット！〉

「ジュア！」

「ヌグオァアア！！！！」

ゼロは渾身の力を振り絞ってニセエースを必殺光線で木っ端微塵に破壊した。

しかし、エネルギーは残り少ないせいでカラータイマーが点滅を開始した。

ピコン、ピコン、ピコン…

光線を放ち終えたところで、ゼロは岩壁に叩きふせられた。

「ッアア！」

ゼロはわずかなもがきも許されず、岩の壁にニセウルトラマンの蹴りで押さえつけられ、ニセセブンのアイスラッガーを首元に突きつけられたせいで身動きがとれなくなった。

君では、ルイズを守れない。
ははは…結局ワルドの言った通りかもな。
よくよく考えたら、同化してから自力で勝ったことなんかほとんどなかったよな…
自分一人じゃ、どこまでも非力だったんだろうな…
誰もが手と手を繋ぎ合わせられる世界なんか、結局できるわけなかったんだ…

親父、母さん…
ハルナ…

ゼロは自らの死を悟った。

「ダアアッ！」

ニセセブンのアイスラッガーが、ゼロに止めを刺そうとしたその時だった。

「「！？」」

突然ニセセブンたちに銀色に輝く槍が投げつけられ、ニセセブンたちが避けると同時に地面に突き刺さった。

「これは…相棒の槍！？」

「え？」

ゼロは宙を見上げると、

真っ赤なボディの戦士が、上等なマントを羽織ってこちらを見下ろしていた。

「最後まで諦めるな。俺との修行の日々を思い出せ、ゼロ！」

ゼロの師で、ウルトラ兄弟七番目の紅き獅子、ウルトラマンレオ。

「あいつは…！？」

「れ、レオ！？」

バッ！とマントを脱ぎ捨て、レオは身構えた。

「イヤア！」

ルイズは結局説得に失敗、部屋へ戻っていた。もし、自分がウルトラマンになって彼らを助けれたら…などと思っていた。だがウルトラマンは人間同士の戦いに関与してはならない。サイトも彼らを助けたいと思っていたのだろうが、きっと思い留まざるを得なかったかもしれない。

（サイト、あんただったらどうしてたのよ…）

こんな肝心な時に、サイトはどこに行ってしまったのだろうか。すると、彼女を見つけたワルドがこちらに歩いてきた。

「ルイズ、部屋に戻るのかい？」

「ええ…」

「君に言わないといけないことがある。明日ここで君と結婚する」

ルイズは驚きを隠せなかった。なぜ…

「どうしてこんなときに！？」

「皇太子も承諾してくれたよ。婚姻の媒酌を引き受けてくれた」

「どうしてよ…どうしてこんなときにそんな話…」

ルイズは涙ぐみながらワルドを睨んだ。

「皇太子は、せめて僕たちを祝いたいと仰った。君たちには、きっと風の加護のある未来が待ってるから、とね」

「ワルド…」

ルイズはワルドの服を掴み、彼の胸の中に顔を埋めた。

どうしてだろうか。なぜ自分はワルドに抱きついてるのか、誰でもよかったのか、その時のルイズにはわからなかった。

「どうして皇太子様も他のみんなも死を選ぶの？ワケわかんない。この国嫌い…早く帰りたい…みんな自分のことしか考えてない…」

「ルイズ…」

ワルドは優しくルイズを抱き締めた。

「彼らの死を無駄にしないこと。それが僕たちのやるべきことなんだ」

そう、無駄にはしないさ…ルイズを抱き締めていたワルドは、どこか悪意に満ち溢れた笑みを浮かべていた。

ルイズがそれに気づくことはなかった。

「ハッ！デュア！」

「ムン！イヤア！」

巧みなコンビネーションでゼロとレオはニセセブンとニセウルトラマンを圧倒していた。

「ゼロ、こいつらに構ってる暇はない」

「だが、この次元の狭間から出る方法は…」

「手ならある。俺とアストラがよくやるように、ダブルフラッシャーでこいつらごと次元の壁に穴を開ければいい」

「簡単で助かった！よし、行くぜ！」

ゼロはレオの前に屈み、レオはその後ろに立った。
そして、ゼロの合わせた手をレオは挟み、その二人の手から、破壊力抜群の合体光線が放たれた。

〈レオゼロダブルフラッシャー！〉

「「ジュア！」」

〈スペシウム光線！〉
〈ワイドショット！〉

「シャ！」
「デュア！」

ニセウルトラマンたちも同時に光線を放って押し退けようとしたが、ゼロとレオの合体光線に勝てず、そのまま光線を受けて爆散した。

そして、二人の合体光線は次元の狭間の壁に、巨大な穴を開けた。

「ったく、真面目に修行すれば、途中で諦めたりしなかったものを」

「はは…ごもっとも。
でもレオ、助かったぜ！
帰ったら、真面目に修行すっから頼むよ！」

「ふん、言ったからには覚悟しておけよ。
さあ行け、ゼロ！」

二人は次元の狭間から脱出した。

アルビオンの港街ロサイス。そこでようやく次元の狭間を脱出したサイトはキュルケたちを待っていた。
おそらく、彼らはこの港町にやって来るはずだ。王党派と貴族派の争いのせいで、ここしかアルビオンと地上を繋ぐ航路はないらしい。
「ふう、ロボットとは言え、ウルトラ兄弟を相手にするのがあそこまでキツイとは思わなかった…」
きつそうにゼイゼイと呼吸をあらげるサイト。
「にしても、あれが相棒の師匠か？すっげえ豪快な感じのウルトラマンだったな」
「だろ？光の国でもかなりの鬼コー…ち？」
左目の視界が、なぜかぼやけ、見えなくなっていた。
「なんだろ？左目が…」
「どうした相棒？」
左目に映っている景色が、港町ではなく、なにやらどこかの建物の内部のものに変わっている。

「教会？それにワイドともう一人誰かが見える…」

「相棒、ルーンが光ってるぞ。もしかしたら使い魔としての能力じゃねえか？」

サイトは言われて左手のルーンを見ると、確かに青く光り輝いている。

使い魔は主人の目となり耳となる。そんなことを最初、使い魔の説明で聞かされた記憶がある。

「ルイズ…」

なにやら嫌な胸騒ぎが彼の胸にモヤモヤと沸いてきた。

礼拝堂にて、ワルドとルイズの結婚式が始まった。そこにいたのはウェールズ含め、三人だけだが。

「私　ウェールズ・テューダーが始祖ブリミルの名において詔を唱えさせて頂く」

ルイズは、ウェールズの詔を聞いてなかった。

なぜ、ワルドと結婚式を挙げてるのだろうか？

確かにルイズはワルドを想っていた。親に叱られた時小舟の上でいじけていた時親に取り直してくれたのもワルドだった。

だが今のルイズの望みはワルドではなかった。自分の使い魔である彼、だった。

「サイト…」

サイトは、ワルド以上に自分のために動いてくれた。いつからだろう。サイトが他の女、特にメイドやツェルプストーと話すだけで、苛立ちを感じるようになったのは。

「新婦？」

「緊張しているのかい？」

「…ごめんなさいワルド。私…あなたとは結婚できない」

ルイズは頭に着けていた花飾りを外して言った。

「え？」

ワルドは一瞬耳を疑った。

「新婦はこの結婚を望まぬと？」

ウェールズはルイズに尋ねると、ルイズはこくっと頷いた。

「はい、私はワルド様との結婚を望みません」

「子爵、残念だが式は続けられぬようだ」

残念そうにウェールズはワルドに言うが、ワルドは納得していない。

「緊張しているのだろう。君が僕との結婚を拒むはずがない」

「ごめんなさい。今わかったわ。私はあなたを愛してない。単なる憧れだったのよ…」

すると、ワルドは苦虫を噛むような表情と目でルイズを睨み、彼女の両肩を掴む。その目はルイズの知ってるワルドの目ではなかっく、野心溢れる者の目だった。

「世界だルイズ！僕が世界を手にするためにも君が必要なんだ！ラ・ロシェールの宿で話しただろう！君には誰にも持ってない特別な力がある！」

「ワルド…あなただって私を愛してない。私の中にある、あるかすらもわからない力しか見えてない！そんなあなたと結婚なんかできない！」

「そうか…」

ワルドはルイズの肩から手を離した。

「ならば目的の一つは諦めよう。一つはルイズ、君だ」

「目的…？」

一体ワイドは何を言ってるのだろうか？

「二つ目はアンリエッタの手紙…そして三つ目は…」

「まさか子爵…」

ウェールズはワルドの正体を見切って杖を出したが、遅かった。ドス！の音と共に、ワルドの杖がウェールズの胸を貫いていた。

「貴様…レコンキスタ…」

ウェールズは床に崩れ落ちるように倒れた。

「ウェールズ、貴様の命だ。目的の一つは果たせたよ」

「皇太子様！！」

ルイズはウェールズの下へ駆け寄るがすでにウェールズは事切れていた。

「あなた…貴族派だったのね！！」

「そう、僕はアルビオンの貴族派、レコンキスタの一員さ」

「どうして…！？少なくともあなたはそんな人じゃなかったのに！」

「残念だよ。君と世界を手にしたかったのに君を殺さねばならないとは…」

ワルドはルイズに杖を向けた。ルイズは杖を持ってなかった。ただ殺されるのを待つしかできなかった。

「ライトニングクラウド、風の魔法で苦しまないように殺してあげ

るよ。さよならだ…ルイズ」

もう彼女の知るワルドはいない。そして、礼拝堂には仲間も、自分が信じている使い魔もいない。

「たっ…助けて…」

非常な目つきで彼女を見下ろしながらワルドはレイピア型の杖を振り降ろそうとしている。

いやだ、死にたくない、死にたくない、死にたくない！

「助けてよサイト！」

その時、窓ガラスがガシャアンと割れ、人影が飛び込んできた。

「うおおお！」

「何！？」

窓ガラスから飛び込んできた人影、サイトはワルドに飛びかかるように剣を振り下ろすが、ワルドはかろうじて避けた。

サイトはルイズを背に着地する。

「ルイズ。怪我は？なんとか間に合ったか」

「サイト！どうしてここが…？」

「さっきルイズの視界が映ったんだ。ルーンも光ってさ」

彼女を安心させるつもりか、笑顔を見せるサイトはワルドに向き直る。

「よくもルイズを騙したな。ルイズはてめえを信じてたのに…」

「ふん。それはそちらの勝手さ」

すると今度は地面が盛り上がり、ギーシュの使い魔ヴェルダンデが地面から這い出てきた。

「なんだこのもぐらは？」

「ダーリン！」

今度はギーシュ、キュルケ、タバサが扉から入ってきた。

「ギーシュに、キュルケにタバサ！なんであんたたちが！？」

「あの妙なゴーレムを撒いた後、シルフィードで来たのよ」

「そのあとはヴェルダンデが、君が姫様から預かってた水のルビーの匂いを追いかけてね。サイトと合流してから、サイトの見た君の視界も頼りにここに来たんだ」

「さて…と」

サイトはデルフをワルドに向けて構えた。

「サイト、気をつけて！ワルドは堕ちてもスクウェアクラスのメイジなのよ！」

「えっ？」

「子爵は裏切り者…」

タバサはワルドを怪しく感じていたが、他の二人は予想だにしてなかった。

「当たりだぜ、タバサ」

「そんな…子爵が！？」

ギーシュも、憧れていたワルドが裏切り者であることに失望する。

「大人が子供に手を上げるのは、いささか気が引けるが、仕方ない」

すでにワルドは呪文を唱え終わり、こちらに向けて杖を向けていた。

「喰らうがいい！！ライトニングクラウド！」

凄まじい雷がサイトを襲った。だが、一体どういうことなのか、サイトには傷一つついてなかった。

「ば、馬鹿な！？風の最強魔法ライトニングクラウドが効かないだと！？」

よく見るとサイトのデルフが、錆び付いた姿から、立派に磨かれた剣の姿になっていた。

「やっと思い出した！ガンダールヴ！そうだ！俺っちは初代ガンダ

ールヴの剣、デルフリンガー様だった！！いやあこの世がつまんなくなったからてめえの姿を変えてたんだ！！」

「忘れてたら意味ねえだろ。むしろ損したな…」

「うっ…それを言ったらおしまいだろ…まあ安心しな！こんな魔法吸い込んでやる！！」

「それで魔法を吸収したのか…勉強不足だったな。ならば…エアニードル！」

五人のワルドは、針のように研ぎ澄まされた風の魔法で一斉に攻撃してきた。

「これは吸収できまい！なぜならエアニードルはそのものが渦の中心だからな！」

「くそ、デルフ！なんとかしろよ！」

「そう言っても俺っちはただの剣だもん…戦うのはお前さんだよ」

「使えねえな…なら、デュア！」

〈ウルトラ念力！〉

サイトは隙をついて腕をクロスした。すると、ワルドたちの動きが一斉に止まった。

ウルトラ念力、ウルトラマンたちが人間体で使う特殊念力。サイトもウルトラマンだから使用可能なのだ。主に動きを封じるのに使用される。が、敵を倒すだけの威力は持ち合わせてはいない。

「何!?」

「今だ!」

その掛け声と同時に、キュルケ、タバサ、ギーシュは得意の魔法攻撃でワルドの分身たちを攻撃した。

「フレイムボール!」

「行け、ワルキューレ!」

「ウィンディ・アイシクル!」

念力で動きを無理やり封じられたワルドの分身たちはすべて消失した。

「バカな…この俺が、こんなガキどもに…!」

屈辱感漂うオーラをほとばしらせるワルド。堕ちてもスクウェアクラスというトップランクの強さを誇るのだ。にも関わらず、こんな子供たちに技を次々とかわされてしまい、苛立ちを隠せなくなっていた。

「ワルド、当然の結果だ。そいつには貴様は死んでも勝てない」

そこに、ゆったりとした足取りで、マントの男が礼拝堂に入ってきた。

(何よあいつ…この状況が読めないの?)

サイト以外の、ルイズたちはなぜこんな荒れた場所に部外者が入ってきたのか理解できなかった。

「どういう意味だ!?こんなガキどもにこのワルドが…あ…」

ワルドの視界が、だんだん斜めに傾いていき、床に落ちていった。

「きゃあああああああああ!!!!」

瞬間、ルイズの悲鳴が響き渡った。
マントの男が、ワルドの首を撥ね飛ばしたのだ。

「貴様は用済みだ。所詮貴様らレコンキスタは『俺たち』の傀儡に過ぎん」

「お前…まさか…」

「ふ、気づいたようだな。まさか、レオが助けに入るとは思わなかったぞ」

この台詞内容、サイトは疑うことなしに理解した。こいつは間違いなく…。

「みんなはルイズを連れて先にこの国を脱出しろ」

「は!?なに言ってんのよ!」

不意討ちとは言っても、平気でワルドを残酷なやり方で殺害したのだ。どう考えても普通じゃない。

「ルイズ。お前だけでも任務を果たせ。姫様の手紙を奪われたら叶わないだろ？」

「アルビオンの人々みたいに死ぬつもり！？」

「死ぬつもりはないから行け。早く！！」

「逃がす…だと？」

マントの男は、両手の指先をサイトたちに向けると、指先が蓋のように開いて、細かい光弾がマシンガンのように襲いかかった。

「アイスウォール！」

瞬時、タバサが氷の盾でその光弾をなんとか防ぎきった。

「…ルイズ、ここは脱出しましょう」

キュルケは割りきったようにルイズに言った。

今の技、こちらに呪文を唱える間さえ与えないほどの速さだった。

あんな技を使われたら、呪文を唱えてる間に撃ち殺されてしまう。

ここは、退くしかない。それにマントの男はこちらを逃がすつもりはないようだから、足止め役が必要だった。

「…帰ってきなさいよ」

「ああ、わかってる」

ルイズたちはシルフィードに乗って礼拝堂を後にした。

「…追いかけないのか？ルイズがお姫様と皇太子から預かってる手紙が目的なんだろ？」

サイトはマントの男に尋ねる。

「その気になれば、すぐにトリステインまで追いかけて奪い取ればいいさ。所詮魔法が使えるだけのザコが俺に勝てる可能性などない」

「だったら、何のために？」

「『闇』が、必要なのさ。俺たちが更なる強さを手にするには、人の憎しみや悲しみといっ負の感情を、『レーテ』に蓄積することで、我々は更なる強さを身につける」

「つまり、その負の感情の宿主に、お姫様を狙ったのか」

「ご名答。そして手紙を奪い、同盟を無効にすればトリステイン軍はレコンキスタに一国で戦うことになる。軍事力はレコンキスタ側が圧倒的有利。その分犠牲も増え、より更なる負の感情から生み出されるエネルギーが増えるのだ」

この男の目的は、アンリエッタがウェールズを殺されたことで彼女に深い憎しみを抱かせること、その後のトリステインとレコンキスタの戦争で多大な犠牲から生まれた負の感情を、出兵した人たちと関わりのある人たちに埋め込ませるのを目的としているようだ。

「だが、貴様が邪魔をすると少々面倒だ」

「なっ！！！？」

マントの男は、頭に被っていたフードを脱ぐと、その容姿でサイトを驚かせることとなった。

何せ、彼の顔はサイトと全く同じだったのだ。墨に塗りつぶされたように真っ黒の眼球に、白い円のような瞳、サイト本人よりも邪悪さがうかがえる。

「人間体まで、俺と同じかよロプスゼロ」

「人間の姿までその呼び名だと呼びづらいだろ?せっかくだから、人としての俺の名を教えてやる」

人間体のロプスゼロは、懐から黒い単眼メガネ型アイテム『ダークロプスアイ』を取り出し、目に装着した。
その瞬間彼は黒い闇のオーラに包まれ、ダークロプスゼロに変身した。

「かつては俺も貴様と同じ、『平賀サイト』と名乗っていた。だが俺は生まれ変わった。災厄をもたらす魔人『サイマ』として、そして闇の戦士、『ダークロプスゼロ』としてな!」

「何があったか知らないが…」

サイトもウルトラゼロアイを取り出し、装着してウルトラマンゼロに変身した。

「お前の好きにはさせねえ!」

Z10　殺陣

光の国から離れた星、キング星。そこにいるのはベリアルと、ウルトラマンたちの長ウルトラマンキング。

「最近、とある星がさわがしくなってるようだな」

ベリアルに背を向け、空を見つめる姿勢でキングは言った。

「ええ、ゼロの迷い込んだ星。あいつはハルケギニアと呼んでいます」

「そうか、ゼロはそこで戦っておるのか」

「ジャックからこんな報告を聞きました」

キングは気になるのか、ベリアルの方を振り向いた。

「気になる報告？」

「あいつは、特別な力に目覚めつつあるようです。確か、左手に妙な力を感じたとジャックは言っていました」

「ガンダールヴ…か」

キングのその言葉にベリアルは驚きを隠せなかった。

「ご存知だったのですか！？」

「うむ、私もこの星からハルケギニアでの戦いを見ておった。まさか、６０００年前にあの『冥王』と我らウルトラ戦士との戦いの場となった星。冥王の謀りであのような戦いが起こるとは…」

キングは思い出したく無さそうに顔を俯かせた。キングでも、見るに耐えない光景だったのだろうか。

「私は長期任務でいませんでしたが、まさかそんなことが…」

「あの戦いの後、あの星は文明をわずかにしか発展させないまま時を留め、地球以上の負のエネルギーを放出し続ける呪いをかけられてしまっている」

「呪い…ですか？」

「だが、今のお前の報告でどこか安心感を持てる気がするのだ」

「ゼロのことですか？」

「あいつが生まれた時、私はあいつから、まさに『無限の可能性』を感じたのだ。すべてを終わらせる、まさにゼロの名にふさわしい力を。

だが、それが希望となるか、そうでないかは、誰にもわからないな」

「無限の、可能性…」

ベリアルは繰り返すように小さく呟いた。

「それはそうと、お前息子はどうした？」

「あ、あいつなら…多分大丈夫ですよ。なんたって、私のバカ息子ですから」

平気そうに言うが、ベリアルは内心不安に思っていた。その息子とゼロが、ハルケギニアで起こりうるかもしれない、呪われた戦いに巻き込まれてしまうのではと。だが、少なくとも現在のゼロが巻き込まれてしまっていたことには気づかなかった。

「デュア！！」

「ガア！」

礼拝堂の中で、二体の光と闇のウルトラマンは睨み合う。ロプスゼロはかかって来いと言うように手招きして挑発する。

「デュア！！」

ゼロはロプスゼロに連続パンチを喰らわせるが、ロプスゼロはいとも簡単に防ぎきった。

「ガア！」

ロプスゼロはゼロの脇腹を蹴り、そして投げ飛ばした。

「ダアッ！」

「グア！」

ゼロは床に倒れる。ロプスゼロはそこに容赦なくゼロを蹴りまくった。

「フン！」

「グアア！」

地面を転がるゼロ。対するロプスゼロは、天井に向けて突き立てられた中指をゼロに見せびらかす。

（F〇〇Kサイン…！）

今ので少し闘争本能を擽られたのか、ゼロは再び立ち上がる。

「ダアアアッ！」

「ガアアア！」

二体は互いに飛び蹴りを喰らわせようと飛び上がり、互いの足がぶつかり合った。

「フン！」

距離を一度置いたところで、ロプスゼロはダークゼロスラッガーを抜いた。ゼロもゼロスラッガー（デルフ）を抜く。握った瞬間左手のルーンが輝きを放った。

「ダアッ！」

ゼロはロプスゼロに切りかかったが、ロプスゼロはそれをダークゼロスラッガーを盾にして防ぐ。

「ダアッ！ハッ！」

「闇雲に攻撃しても無駄だ！ハア！」

ロプスゼロはゼロの攻撃を弾き飛ばし、同時にゼロは壁に突き飛ばされた。

「ウワア！？」

「どうした？立てよ？」

「グッ、ダアアア！」

ゼロは立ち上がりロプスゼロを切りつけようとするが当たらない。

〈ダークロプスメイザー！〉

「そこだ！」

単眼から破壊光線を放つロプスゼロ。

〈ウルトラゼロディフェンダー！〉

ブレスレットからすぐさま盾を出して防ぐ。が、盾越しから腕が痺れるほどの振動が伝わってくる。

ロプスゼロは光線を放ってる間にゼロの眼前に近づき、盾を蹴りあげて、ゼロは盾を奪われてしまった。

「しまっ…！」

「無駄だ！今楽にしてやる！！」

ロプスゼロはゼロを蹴り飛ばし、そして額のビームランプから必殺光線を放った。

〈ダークロプススラッシュ！〉

「デュア！」

「グアアアア！」

その闇に似つかわしくない白き閃光により、ゼロのいた場所は大爆発を起こし、砂煙がもくもくと巻き起こる。

「フン、この程度か…まあいい、さっさとあの小娘どもを八つ裂きにして手紙をクロムウェルに…ん？」

砂煙が晴れた時、ロプスゼロは一瞬目を疑った。ゼロはまだ生きていたのだ。

「ハアアアア…」

しかし、エネルギーが切れかけ、すでにカラータイマーが点滅している。

しまいには膝を着いてしまう。

ピコンピコンピコン…

「この死に損ないが……なに！？」

ゼロのウルトラゼロブレスレットからウルトラゼロランス、敵を切り裂くのに使うウルトラゼロスパーク、そして二本のゼロスラッガーが、自ら宙を舞い、ロプスゼロのちょうど喉元辺りに突きつけられていた。

その時のゼロのガンダールヴのルーンは、以前にも増して青く、強い輝きを解き放っている。それに呼応するように額のビームランプも緑色の輝きを強めていた。

ヨロヨロとゼロは立ち上がって口を開いた。

「誰かを傷つけるためだけの力に、意味なんかない…！俺には！」

ゼロスラッガーを頭に装着し直し、ブレスレットにゼロスパークを戻し、ロプスゼロにゼロランスの先を向けた。

「命を掛ける夢がある！」

ゼロはゼロスラッガーを手に取り、ロプスゼロに切りかかった。

「いいぜ！その心の震えだ相棒！ガンダールヴはそうやって力をため強さを発揮する！」

デルフが励ますように言った。

「何だと…一体どこにこんな力が！？」

斬撃をダークゼロスラッガーで防ぎながら、ロプスゼロは驚愕する。さっきまで全然大したことなかったのに、どこからこんな力を発揮したのだ？

「ダアアアア！」

そして、ゼロスラッガーがロプスゼロの左腕を撥ね飛ばした。

「グアアアア！」

ロプスゼロはもぎ取られた左手の切り口を苦痛そうに押さえた。今のダメージの影響からか、カラータイマーが点滅している。ピコンピコンピコン…

斬られたロプスゼロの左腕は、バチバチと火花を起こしている。電子のケーブルなどが切り口からいくつか飛び出ていた。

彼は本当に半分機械の戦士だったのだ。

「くっ……」

「っ、あとすこし…」

後一歩のところでゼロの体にも限界が出てきた。

それでも、L字型に両腕を組み止めを刺そうとしたがデルフが止めた。

「もう限界だろ。無茶するな！」

いや、デルフが言わなくても止めなんか刺せなかった。

わずかに、ゼロの手が、躊躇うあまり震えていた。

「止めを刺さないのか？甘いな…。

いいだろう。今回は退いてやる。だが覚えておけ。すでに恐怖と絶望のカウントダウンはすでに始まっている…

いずれ貴様を倒し、俺が世界を変えてやる！」

ロプスゼロは紫色のオーラに包まれ、どこかに消え去った。

「…逃がしたか」

「俺たちも脱出したかほうがいいぜ。多分そろそろ敵が来るぜ」

「ああ、そうだな…」

ゼロはウェールズの遺体に駆け寄って祈りを捧げ、そして教会を出て空へ飛んだ。

「デュア！！」

アルビオンの空を飛び立つ時、レコンキスタの軍勢が、わずか三百の王党軍を容赦なく殲滅する光景を目の当たりにした。

「…くそ」

どこの世界でも戦いばかり、しかも今自分が見てるのは、同じ人間同士の争いだった。

（どうして殺し合うんだよ…。殺した先に、何を手に入れたんだ…）

より一層戦争に対する憎しみを募らせるゼロだった。

ゼロとサイト。

この二つの人格が一つになる前から、一見好戦的なゼロも本来戦いを好んでたわけではない。

ゼロとしての記憶の中で以前、ゼロは光の国に侵入した侵略者の機

械兵器に仲間を人質にとられたことがあった。他にもウルトラ戦士たちは大勢いたが、迂闊に手を出せない状況にあった。その時のゼロは、その機械兵器の中にいる侵略者の目を欺き、遠くから機械兵器の露出された動力部を光線で狙い撃とうとしたが、捕まった仲間の存在がそれを阻んでいた。

しかもその機械兵器には自爆機能が着いていて、いずれ光の国の一部が大爆発、たくさんの死傷者を出す緊急事態。撃たなければ光の国の人々が傷つき、撃てば仲間が死ぬ。

『ワハハハ！残念だったな！いずれ我が同胞たちが貴様らを消しに来るぞ！』

勝ち誇る侵略者だったが、

『！』

〈デスシウム光線！〉

『ハッ！』

その隙にベリアルが仲間を救出、機械兵器の動力部を破壊して、かろうじて自爆する前に侵略者を倒した。

その後のゼロは、別の仲間たちから非難された。

『ベリアルさんがいたからよかったものの、あそこで倒しておかなかったらどこまで被害が拡がったか！』

捕まった仲間は、『俺のミスだから気にするな』と言ってはくれたが、自分の甘さが他の仲間を傷つけることになりかけたことにゼロ

は苦悩した。

その後、ベリアルと二人で話をした。

『ゼロ、お前の射撃なら奴を早い段階で撃つことができたはずだ』

『…』

『盾にされた仲間を撃ってしまう恐れによるためらいがあった。違うか？』

ゼロよりも長い間戦い続けてきたベリアル。ことによっては見るだけで気づくこともあるのだ。

『ベリアルさん、俺は…』

ゼロが何か言おうとしたが、ベリアルが自分の言葉で遮った。

『いいかゼロ、我々ウルトラマンには引き金を弾くのを躊躇ってはならない時がある。それが弱き者の剣となり盾となる我々の運命だ。忘れるな』

「引き金を弾くのを躊躇うな…か」

ゼロが修行をサボることがあったのは、キツいとかそれ以前に、自分が戦うことで、仲間や相手を傷つけてしまうことの恐れによるものでもあった。

だが、いずれ彼がまた戦う道を行くことになるのは、必然的なことだった。

ロサイスの港町でルイズたちと合流したサイトは、船に乗ってトリスタニアで待っているアンリエッタの元へ向かった。
途中、キュルケに抱きつかれたりルイズに涙目で怒鳴られたりしたが、とにかく無事を喜びあった。

そしてトリスタニアに戻り、ギーシュ、キュルケ、タバサは用意された部屋で待ち、サイトとルイズはアンリエッタの部屋へ入った。

「ルイズ！よかった！無事だったのね」

アンリエッタはルイズたちの無事を知ってホッとした。

「件の手紙は無事に…」

ルイズはポケットからウェールズが持っていた手紙を渡した。

「よかった。やはりあなたは私のお友達だわ。ところでワルド子爵は？」

「ワルドは…裏切り者でした」

「え！？」

アンリエッタは驚きを隠せなかった。ワルドは王室でも名が知れ、信頼もされていた人物。そんな大物の貴族が裏切りなどアンリエッ

タには信じられないことだった。

「まさか…あの子爵が裏切り者!?魔法衛士隊の隊長が…」

ルイズは学院を出てから城にたどり着くまでの経緯を簡潔に説明した。

「ワルドは私が結婚を断ると手紙を奪おうとしました。そしてウェールズ皇太子を…」

言葉を詰まらせるルイズ。その先の言葉を理解したアンリエッタは、ボロボロと涙を流し、目を伏せた。

「裏切り者を使者に選ぶなんて…私がウェールズ様のお命を奪ったようなものだわ…」

「いずれにせよ皇太子は迷惑かけないため残るつもりでした。姫様のせいじゃないですよ」

サイトは宥めるように言った。

「迷惑なんていい、亡命して欲しかった…」

「勇敢に戦い勇敢に死んでいった、そう伝えてくれと言ってました」

ルイズはウェールズの遺言をアンリエッタに伝えた時、彼女は涙を拭った。どこかその目は暗く、沈んでいた。

「殿方の特権ですわね。残された女はどうすればよいのですか?」

「もっと強く説得すれば…」

「いいのよルイズ。あなたの役目は手紙を取り戻すこと。これでゲルマニアとの同盟が成ります。
もう大丈夫。危機は去ったのですよ」

「…あの姫様、水のルビーをお返しします」

ルイズはポケットから水のルビーも取り出し、彼女に渡そうとしたが、アンリエッタは首を横に振り、そのルイズの手を引っ込めさせる。

「いえ、これはあなたにあげるわ」

「でっ、でもこんな高価な品、私には…」

「私がいいと言ってるのです。私からのせめてものお礼です。受け取ってください」

それから受け取れない、受け取れのやり取りが少し続いたが、ルイズは結局折れて水のルイズを受け取った。

「…はい、ありがとうございます」

アンリエッタは窓の外を眺め、強い眼差しを込めて言った。

「あの人が国を、私を想い、勇敢に死んでいったのならば、私は勇敢に生きてみようと思います」

その時のサイトは、心の中で自分を責めていた。もし、早くルイズと共にアルビオンでウェールズに会い、無理やりにでも連れて帰れ

たら、アンリエッタは悲しみを抱くことはなかった、と。

その頃のアルビオン、ニューカッスル城は瓦礫の山になり、レコンキスタの艦隊が並んでいる。
現在、ウェールズの遺体と遺品の捜索が行われていた。

「おかしい。どこにもない」

礼拝堂の跡を兵士たちは、ウェールズの遺体も、遺品である風のルビーも見当たらない。

「まだ見つけられぬのか！さっさと探せ！」

レコンキスタの総帥、クロムウェルは苛立って喚いた。そこに、もう一人のサイト、サイマがやって来た。昨日の傷は全くなく、もがれた片腕も新しく装着されている。

「捜索は止せ」

「な、何を申される！？ウェールズの遺体がなければ…」

「どうやらウェールズに逃げられたらしい。とっくの昔にな」

クロムウェルはそれを聞いて驚愕せざるを得なかった。
ウェールズに逃げられた！？

「なんですと…」

サイマはボロボロの小さな人形を取り出した。胸の辺りに、穴が空いている。

実はその穴、ワルドがウェールズを刺し殺した場所と同じだった。

「スキルニル、古代の魔法人形だ。誰かの血を着けることで、その血の持ち主に化ける。服装も性格も本人そのものとなってな。この人形がウェールズを演じていたのさ。

だから、全く気づかなかったワルドには制裁を加えておいた。正直がっかりしたな」

クロムウェルはそれを聞いて怯えだした。

「お、お願いです…殺さないで…」

今やアルビオンのトップの癖に、情けない命乞いをしている。実はクロムウェル、表向きは強大な力を持ってるとされていたが、実際は平民出身なのだ。

「ま、この俺も一度油断したから、貴様への処罰はチャラにしておいてやる」

その様子を見ていた男がいた。元々王党派の軍人のボーウッドである。彼はクロムウェルをよく思ってない。主が貴族派だったのでやむを得ず貴族派になっていた。

「まさか…クロムウェルは単なる平民だったのか！？」

ボーウッドだけでなく、アルビオンの貴族たちはクロムウェルしか持たない力があると思い込まされていた。

「伝説の『虚無』の担い手であるという噂は、ただのまやかしだったのか…！」

悔しかった。国を裏切った者の下に望まず降され、しまいにはその国を裏切ってトップに立った男が、何の力もないただの人間だったこと、それは貴族として誇り高い信念を持つボーウッドには屈辱だった。

「主に、アルビオンの皆に知らさねば…」

ボーウッドは貴族たちのいる艦隊に急ごうとした。
しかし、それを阻もうと、ローブを身に纏う若い黒髪の女性がボーウッドの前に現れた。
クロムウェルの秘書、シェフィールド。

「ボーウッド殿、どこへ行こうというのです？」

「し、シェフィールド殿！無礼を承知でお聞きください！閣下は…いやクロムウェルは！」
その先の言葉を遮るようにシェフィールドはボーウッドに指先を向けた。

「どうやら知ってはならないことを知ってしまったようね」

「知ってしまった…？まさか…貴様…！」

ボーウッドはシェフィールドの本性を見抜き、杖を取り出そうとし

たが、シェフィールドがこちらに紫色の宝珠の埋め込まれた指輪を向けられた途端、彼は身動きがとれなくなった。

「か、体が…」

「安心なさい。他言無用を貫けば命はとらないわ。でもバラしたらどうなるかわかっているわよね？」

不敵な笑みを浮かべるシェフィールドに、ボーウッドは悔しそうに顔を歪ませていた。

（奴らは一体…ハルケギニアを…この世界をどうするつもりなのだ…！？）

その時、そよ風が吹くと同時に、シェフィールドの額に文字のようなものが刻まれていたのが見えた。
それはサイトのルーン、そしてシュウヘイのルーンとほとんど同じ形をしていて、紫色に鈍く光っていた。

Z11　竜の羽衣

とある広大な地下の空間にて、サイマは天井を見上げていた。暗くてよく見えないが、何か巨大なものが吊り下ろされているのを見ているようだ。

「さて、『レーテ』に闇はどれだけ集まった？」

サイマの背後から、一人の男が歩いてきた。

「なかなか溜まってはいる。６０００年もの間の不条理な貴族政治のせいで、立場の弱い人間からの闇がかなり吸収されている。だが、あんたの希望どうりには達してない」

「そうか。だがいくらでもこの世界から闇を抽出できる。あの女の主であるガリアの王もロマリア…いや、この話は後回しだ。まずはレコンキスタの連中にはトリステインへの戦争に向かってもらわないとな」

「その戦争で負った痛みや関わりのある人間の死による負の感情を、レーテに蓄積させると言う訳だな」

サイマがそう言うと、その男は不敵な笑みを浮かべる。

「ああ、だが味方がまだ少ない。貴様や新しく作り直した、そして異次元に存在していたタイプを元に作った闇の巨人どもの協力もあってたくさんの宇宙人や怪獣を手駒にできたがな」

「ところで、行方不明のウェールズはどうする？後々厄介ではない

か？」

「奴を殺らなくても、いくらでも方法はある。だが念のため、手を打っておくか」

男はサイマの耳元で何かを言った。

「…わかった。手配しておく」

サイマはそう言ってその場を後にした。

男は天井を見上げ、そこに吊り下ろされた巨大な物体を見つめた。

その物体から、赤いＹ字型の光が点滅しながら光っていた。

「もっと恐怖を吸い込め…」

アルビオンから帰還して数日、ルイズはオスマンに学院長室まで呼び出された。

「姫殿下とゲルマニア皇帝の結婚式は来月執り行われることが決定した」

「そうですか…」

愛してもない男と結ばれる幼なじみを想うルイズにもショックだった。

「それで王宮からそなたへと…」

オスマンは古くて小さな本をルイズに渡した。

「これは？」

「『始祖の祈祷書』じゃ。王室の伝統で選ばれし巫女がこの本を手に式の詔を読み上げる習わしとなっておる。その巫女にミス・ヴァリエール、そなたが選ばれた」

「ええ！？わっ私が巫女に！？」

ルイズはびっくりして声を震わせた。

まさか、自分なんかが選ばれるなんて思ってもなかった。

「これは一生に一度あるかないかのことじゃ。大変名誉なことじゃ。それに姫殿下の強い希望でそなたが選ばれたのじゃ」

「わかりました。喜んで拝命いたします」

今までまともに魔法が使えず劣等感だらけの生活を送っていたルイズ。アンリエッタからの期待が、彼女に頑張ろうという精神をつけてくれた。

ルイズが巫女に任命された頃、ヴェストリの広場でサイトは古い鉄鍋で風呂を作って入っていた。

「ふう〜気持ちいいなあ。生き返るぜえ…」

この世界でも風呂はあるが平民の場合蒸し風呂なのでサイトは嫌だったらしい。そこでマルトーから古い鉄鍋をもらい、いくつかの材料を利用して五衛門風呂を作ったのだ。

気持ちよさそうに湯の中に潜るサイト。

潜りながら彼はアルビオンで出会った彼を思い出していた。

（サイマ…）

自分もかつて『平賀サイト』と名乗っていたと言う男。姿形も年も自分と変わらない。一つ違うのは、彼はサイトとは違い、黒いウルトラマンであること。

（予想だけどシュウヘイは俺とは別の地球から来たんだ。多分あいつは、それと似たように召喚された。でも…）

彼の過去に一体何があったのだろうか？彼があの時見せた目には、冷たさと憎しみしか感じなかった。

ちょうどそこに、その辺りを歩いていたシエスタが現れた。

「あれ…なにかしら？」

周りを囲った布の壁の向こうから湯気が出ている。気になったシエスタはその布の向こうにある風呂に近づくと、息を止めきれなかったサイトが湯の中から出てきた。

「きゃ、てサイトさん!?」

「シエスタ!?ああこれはその…」

サイトは股関を隠して湯船に潜って縮こまる。

「そ、そこで何をなさってたのですか?」

「ああ、俺の国の風呂。ここの平民の風呂って蒸し風呂だから、やっぱ俺はこうでないと」

「へえ~いいなあ。私も入りたい」

「じゃあ一緒に…なんて」

サイトはほんの冗談のつもりだった。が…予想だにしない事態が起こってしまった。

「いいんですか!?」

なんとシエスタがいきなり服を脱いで風呂に入り出した。

「あああのシエスタさん!?俺一応男なんですけど…」

「サイトさんはそういうことしないってわかってますから。はあ~気持ちいいです」

「…／／」

サイトはシエスタの方を向けなかった。いや男なら誰も振り向けない…

「そんな照れないでください。私まで恥ずかしくなっちゃう…あの…こっち向いていいですよ。暗くてよく見えないし」

サイトはおそるおそるシエスタの方を向いた。でも、うまく前を見ることができない。見てはならないものを見てしまいそうだ。

「サイトさんの国のお風呂気持ちいいです。サイトさんの国ってどんなところ何ですか？」

「ああ、月が一つで魔法使いがいない…」

正直に言ったが、シエスタにはこれこそが単なる冗談に聞こえた。

「サイトさん！月が一つで魔法使いがいないなんて…私が村娘だからからかっているんでしょう！？」

シエスタは少し膨れっ面になる。その時に身を乗り出すように近づいてきたものだから、さらにサイトの顔は真っ赤になってしまう。

「かっ、からかってなんかないよ！」

「そういえば、私のひいおじいちゃんも同じことを言ってたなあ」

「ひいおじいちゃん？」

「ええ、かなり遠いところから来たそうで、しかも空から」

「空から？」

「はい。『竜の羽衣』って呼ばれているものでやってきたそうです。今は村に安置されているんです」

シエスタはそう言うと風呂から上がった。サイトはあわてて目を伏せる。

「ありがとうございます。お風呂気持ち良かったし、素敵でした。でも…」

シエスタは服を着終えると顔を赤くしながらサイトの方を向いた。

「一番素敵なのは…あなたかも」

「へ？」

サイトはそれを聞いて間抜けな声を上げた。

「お休みなさい」

シエスタは顔を真っ赤にして去ろうとした。

「あっ、あのシエスタ！」

「きゃ！」

サイトにいきなり呼ばれたためか、シエスタは思いっきり転んでしまった。

「いたた…何ですか？」

「あのさ…シエスタの村に行きたいんだけど…『竜の羽衣』を見たいんだ」

サイト自身、不思議な気持ちにかられていた。なぜかその『竜の羽衣』の話に惹かれていた。それを聞いたシエスタは、パアッと顔を明るくした。

「はっはい！ぜひ！！実は明日休暇で帰るつもりだったんです。明日行きましょう！」

その頃

「あの犬、どこをほっつき歩いてるのかしら」

ルイズは不機嫌そうにサイトを探していた。

見てはならないもの。彼女はそれを見てしまった。自分の使い魔がメイドと仲良く風呂に入ってるではないか。

「は、ははは裸で密会とはいい度胸じゃない…」

ブチブチブチ…

顔の血管が膨らみ、破裂しそうになる。

翌日、サイトはシエスタと一緒にシエスタの故郷『タルブ村』へ向かった。

なんとなくルイズは外出を許可しないと思ったので、なんとかルイズが起きる前に抜け出しはしたが、その時のサイトは、顔が腫れ上がっていた。

「あの、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫…」

まる一日かかったようだ。ちなみにサイトはシエスタが旦那様扱いしたためシエスタの父親にひどい目に合わされたという…

「あの犬…まだお仕置きが足りなかったようね」

もちろん学院でサイトの失踪に気づいたルイズは血相を変えてサイトを探し始めていた。

そこに目に入ったのは、キュルケ・タバサ・ギーシュの三人がシルフィードに乗ってどこかへ飛んでいくのが目に入った。

「ちょっとどこへ行くのよ？」

走って三人に近づいてきたルイズに、ギーシュとキュルケが答える。

「おや、ルイズじゃないか」

「ギーシュがタルブに『竜の羽衣』なんてお宝があるって言ったのよ。私、そのお宝売ってダーリンを落とそうと思って着いてきたの」

ふふ…と笑うキュルケ。サイトとの熱い抱擁を妄想してるようだ。

もちろんルイズはそれを許すはずがない。

「あんたねえ…ワルドの時といい、いちいち人のものに手を出してんじゃないわよ！」

「だったらあんたも着いてきたら？先に見つけた方がダーリンをものにするってことで」

「い、いいわ！望むところよ！」

いつの間にか宝探しが、ルイズとキュルケの恋（？）のバトルに発展した。これで勝てばサイトは私に…ってなに危ない妄想してんのよ私は！べべ…別にあんな犬なんか…

顔を真っ赤にしてブンブンと首を横に振るルイズ。結局彼女も三人に着いていった。

タルブ村の外れに、神社が建てられていた。かなり古びていたが、間違いない。きっちり鳥居も設置されている。

「実は竜の羽衣ってインチキ扱いされているんです。空を飛ぶものなのにひいおじいちゃんはもう飛べないって。それで…」

「…」

「サイトさん？」

サイトはお堂の近くにある、石碑をじっと見ていた。この縦長の形の整った石、これもサイトは見覚えがあった。

「それ、ひいおじいちゃんのお墓なんです。変わった文字ですよね。誰も読めないんですよ」

「『ウルトラ警備隊隊長キリヤマカオル異界ニ眠ル』」

キリヤマ、その名をサイトは知っていた。義理の母親や、光の戦士でもある父からも聞かされていた名前。

「えっ！？読めるんですか！？」

シエスタは驚きの声をあげる。

「なあ、竜の羽衣ってあのお堂の中か？」

「はっ、はい」

二人はお堂の扉を開き、中に入った。一瞬彼は目を疑った。連れて

来てもないのにそこには、キュルケやタバサ、さらにはギーシュもいた。ルイズもいる。

「あらダーリン？何でここに？」

「？」

「サイト？君も来てたのかい？」

ルイズはサイトを見た瞬間、騎馬用の鞭を取り出し、不敵な笑みと共にサイトに近づいてきた。

「ご主人様をほっぽりだしてメイドと二人なんて、いい度胸じゃない…」

「あ、いやこれは…」

弁解しようと必死のサイトだったが、ルイズは次の瞬間サイトに怒りの鞭の乱舞を喰らわせた。

「き、貴族様！？どうしてここに？」

シエスタは声をあげて尋ねる。

「何でって宝探しよ。ここに竜の羽衣って宝があるって聞いたから来たけど…」

キュルケは宝の地図のような紙切れを取り出し、二人に見せた。

「どう見ても鳥のおもちゃにしか見えないな。何が竜の羽衣だ。せ

っかくモンモランシーをびっくりさせようと思ってたのに…」

目の前に、その竜の羽衣があった。しかし、それはルイズたちの期待を損ねていた。

「ごめんなさいサイトさん。竜の羽衣なんて本当に名ばかりで…」

だがサイトは聞いてなかった。竜の羽衣をじっと見ていた。銀色のボディに黒いライン、少し鋭利のある台形の翼、そして翼に『ＵＨ－０１』の文字…

「ダーリン？」

「どうしたんだいサイト？」

「なにボーッとしてるのよ。そんなおもちゃ…」

「これは竜の羽衣って名前じゃない」

「…どういうこと？」

いつも無口を貫くタバサが珍しくサイトに尋ねる。なぜなら自分たちの知らなかった存在、ウルトラマンをサイトは知っていたからサイトはこれのことも知っているだろうと思ったからだ。

「これは…ウルトラホーク１号だ」

「「「ウルトラホーク？」」」

サイトは目に見えない何かに導かれるように、ウルトラホーク１号

の入り口に入った。

操縦室も、本などで見た通りだった。かなり入り組んだ機械が壁に並び、六人は乗れるスペースもある。

「…やっぱり…間違いない」

「中に入れるとは思わなかったなあ」

ギーシュは言う。

「ねえ、このウルトラなんとかって一体なんなの？」

キュルケの質問にサイトは落ち着いて答える。

「これは対怪獣用戦闘機だ。多分シエスタのひいじいさんはこれで怪獣たちと戦っていた」

「ひいおじいちゃんが！？」

自分の曾祖父の知られざる真実にシエスタは驚愕する。

「これ怪獣と戦う兵器なの！？」

もちろんルイズたちもこれには驚いた。

「でも飛ぶのかい？」

「いや、シエスタは飛べないって言ってたよな。飛べないのはガソリンが切れたからだと思う」

「ガソリン？何よそれ？」

また聞きなれない単語が出てきた。ルイズは気になってサイトに訊いてみる。

「この世界じゃ風石ってのを使って船を空に飛ばすんだろ？それと似たようなものさ」

「…サイト」

「タバサ、どうかしたのか？」

「これは？」

タバサが指差したところには音声記録機があった。サイトはスイッチを入れた。すると…

『この竜の羽衣、いやウルトラホーク１号を知る者に私からのメッセージを伝える』

「しっしゃべった！？」

「なにこれ！？」

「まさか…これ生きてるのかい！？」

サイトを除く一同は、突然ものが喋ったことに驚いた。

「落ち着け。これは生きてる訳でもないし、これがしゃべってるわ

けじゃないから」

この厳格な雰囲気を漂わせる声、おそらくこの声の主が、シエスタの曾祖父でもあるキリヤマ隊長なのだろう。

『私はある日、ウルトラセブンが地球を去ってから一年後、はるか彼方の侵略者に対抗するためにホーク1号に乗って宇宙へ飛びたった。侵略者をなんとか食い止めはしたが、私はホーク1号の燃料が切れた影響で地球に戻れなくなり、このハルケギニアと呼ばれる星で一生を過ごすこととなった。この星はまだ地球よりも文明も発展しておらず、戦争に対する愚かさにまだ気づかない者が大勢いる。このホーク1号もいずれ兵器として利用されることも時間の問題だ。もし私と同じ地球の人間がこのウルトラホーク1号を見つけたら、これを託す。戦争の兵器としてではなく、平和のためにこれを役立てほしい』

そこでキリヤマの音声記録は切れた。

「…今のは？」

「記録だよ、タバサ。シエスタのひいじいさんが生前に遺したものだ」

サイトはシエスタの顔をじっと見た。確かハルケギニアでは黒髪や黒い瞳は珍しいもの。間違いない、彼女にも地球の、それも日本人の血が流れている。

「あっ…いやですわ…そんなに見ちゃ…」

その真剣な眼差しで見つめられたシエスタは顔を赤くする。

「なあシエスタ。君ってひいじいさん似だってよく言われるだろ？」

「はっ、はい！でもどうしてわかったんです…？」

「他にひいじいさんの遺品みたいなものはないか？」

ルイズたちは夕飯までシエスタの家で過ごすこととなった。

サイトは一人、キリヤマの墓石の前にいた。

「キリヤマさん、もしせめて魂となった人と話ができるなら、あなたと話をしたいな…」

そこに、キリヤマの遺品を持ってきたシエスタがやって来た。

「サイトさん。ひいおじいちゃんの遺品を持って来ました」

遺品にはウルトラ警備隊の制服とヘルメット、そして銃『ウルトラガン』がある。

「ありがとうシエスタ。本当にもらっていいのか？」

「いいんです。ところで、ひいおじいちゃんてサイトさんと同じ国

の人なんでしょ？」

キリヤマの遺品を受けとるサイトは頷く。

「うん、親父と母さんの上司だった。二人もウルトラ警備隊にいたんだ」

「本当ですか！？もしかして…私とサイトさんは運命の糸で結ばれて…ああそんな！！恥ずかしいです！！」

かなりいった妄想を抱くシエスタ。その様子にサイトは少し引いた。

「あの～…シエスタさん？」

「はっ、ごめんなさい…私ったらつい…。あの…サイトさん」

シエスタの表情が、だんだん赤くなっていくが、彼女は勇気を出してサイトに言った。

「もし、その気があるなら、私と一緒にこの村で暮らしませんか？」

「えっ？」

シエスタの言葉にサイトは目を開いた。

「私、前から思ってました。サイトには何か運命的なものを感じるなあ…て。だから、サイトさんの気持ち…教えてくれませんか？」

この時、ようやくサイトは彼女が自分の好意を抱いていたことに気付いた。しかし、この星で一生を過ごす、したくてもサイトにはで

きない相談だった。

「ごめん、無理だ」

「えっ？」

「俺は元の世界に帰らないといけないんだ。だから…」

自分は仲間のうち誰にも話してないが、ウルトラマンだ。他の星で一生を過ごしたくても、無理だ。逆にこの力が他人に多大な迷惑をかけてしまうような気がしてならなかった。

「じゃあ、待っててもいいですか？もし、帰れなかったら…」

「姉ちゃんー！ごはん作るの手伝ってー！」

その声に反応して二人は丘の方を向いた。サイトたちの見た先には子供たちがいた。

「弟さんたち？」

「はい、八人兄弟で女は私一人なんです。
あとさっきの話、本気ですから忘れないでくださいね」

シエスタは子供たちの方へ走って行った。

「帰れなかったら…か」

「サイト！」

そこに不機嫌そうなルイズがやって来た。

「どうしたんだ？そんなムッスリして」

「さっきのメイドの話、絶対受け入れたらダメよ！」

「何でだよ？別にシエスタとどうなろうが関係ないじゃん」

「か…関係あるわよ！あんたは私の使い魔なのよ！絶対私から離れたらダメなんだから！」

「あの、俺はシエスタと結婚するわけじゃないんだ。彼女には悪いけど、断るつもりだよ」

それを聞いたルイズは一瞬安堵したような表情を浮かべたが、自分の今の顔がそう表していたのに気が付いてすぐ虚勢を張るように両腕を組む。

「そ、そう！なら安心したわ。それと、もう少しで夕食なんでしょ？さっさと来なさいよ」

ルイズはそう言って歩き去っていった。

サイトは空を見上げた。地球での家族、友達、最愛の人の顔が浮かび上がってくる。

キリヤマも生前は地球に帰ろうと必死だったかもしれない。だが帰ることはできず、この星に留まったのだ。

だが帰る見込みが出た以上帰らなくてはいけない。一時しかこの星に居られないことに、サイトは少し寂しく感じていた。

その後、日帰りでサイトたちは学院に戻った。数日後にウルトラホーク1号はコルベールが運送代を払ったおかげで学院に運ばれた。もちろんあれほど大型のものを目の当たりにした学院の生徒たちの注目の的になった。

「おお、これが異界の飛行機械なのかね！？」

これに一番興奮したのはコルベールだった。

「ええ、ただガソリンが足りないから飛べませんが」

「がそりん？それは一体？」

「この飛行機械を飛ばすのに必要な燃料です。なんとか魔法で複製できないでしょうか？」

「もちろん任せてくれ！この炎蛇のコルベール、久々に燃えてきたぞ！」

すごく張り切ってるのが目に見える。

「よ…よろしくお願いします」

苦笑いを浮かべながらサイトは言った。

すぐコルベールはホークに残っていたガソリンを試験管に入れ、自分の研究室に運んでいった。

その翌日、コルベールは五樽分のガソリンの精製に成功した。元々油と成分が似ていたため、錬金の魔法を利用することで複製が可能となったのだ。
そのガソリンをホーク1号に注入し、サイトは操縦席に座った。

「すげえ…初めて触るのに分かる」

彼の左手のガンダールヴのルーンが青く光り、その輝きと共に使い方や情報が流れ込んでくる。

「そりゃそうだ。お前さんはあらゆる武器を操るガンダールヴだからな」

背中に背負っていたデルフが顔を出した。

「思ったんだけど、ガンダールヴってなんだ?」

ワルドも、サイトをガンダールヴと呼んでいた。一体なんのことなのだろうか。

「俺っちも昔過ぎてよく覚えちゃいねえ。でも少しだけ思い出したんだ。始祖ブリミルの召喚した伝説の四人の使い魔の一人だったってことだけどな」

始祖ブリミル、確かハルケギニアで言う神様だったっけ。サイトもブリミルという単語は知っていた。

「神様、か。あまり実感ないな。そんな大層なの」

現在ウルトラマンを神格化する連中が、サイトの知らない間に増えていた。以前、ウルトラマンを戦争でも手を貸してくれるなどと盲信した貴族がいい例だ。だが、いくら神格化されても困るのはこっちだ。

それに、信じる神の違いで戦争や紛争が地球で起こったこともある。だから、サイトは神様というものに好印象を持てなかった。たまに神頼みしてみたくはなるが。

「たたた大変だあああ！」

ギーシュが馬に乗って大慌てで学院の門から飛び出してきた。

「なんだよギーシュ？また女の子に振られたとか？」

「そんな悠長なもんじゃないよ！いいかい、落ち着いて聞いてくれよ…」

それ以前に言ってる本人が落ち着いてない。

「姫殿下が、何者かに拐われたって町中大騒ぎだ！」

姫、まさか…

サイトは嫌な予感がした。

「姫って、アンリエッタ姫のことか！？」

「ああ、つい昨日の夜から行方がわからなくなってる！」

アンリエッタの突如の失踪、これはサイトにも衝撃的な事態だった。

「まさか…」

その時に浮かんだのは、もう一人の自分である彼の顔だった。

「サイマ…か！？」

いや、まだそう決めつけるには早すぎる。だが、レコンキスタの何者かがアンリエッタをさらって利用するのは見え透いたことだ。

「ちょっとギーシュ、さっきから何騒いでんのよ？」

そこにタイミングがいいのか、ルイズもやって来た。

「ひひひ姫殿下が何者かに拐われたんだよ！」

「な…何ですって！？姫様が！？」

ルイズもこれには驚かざるを得ない。

「サイト、その変なんとか1号って動くんでしょうね？」

「あ、ああ！多分！」

「多分なんて自信のない返事するな！動けるんならさっさと動かしなさい！一大事なのよ！」

「んなキツく言わなくたって！乗れ！」

サイトはルイズに乗るよう言うと、彼女も操縦席の空きに座る。そして彼はハンドルを握った。

Ｚ１２　過ぎ去りし思い出（前書き）

もうじき無印編でのシュウヘイの話を執筆しようと思います。

Z12　過ぎ去りし思い出

昨日、アンリエッタはバルコニーで夜空を眺めていた。
その目から、涙がポタリと流れ落ちていく。
自分が恋慕っていた彼は、薄汚い裏切り者に殺された。もう、どこにもいない。
「ウェールズ様…」

その時、誰かがバルコニーに足を踏み入れた。

「何者です!?」

足音に反応し、アンリエッタは杖を構えた。
しかし、その侵入者の顔を見た瞬間、杖を降ろしてしまう。なぜなら、その侵入者の正体は…

「アンリエッタ」

ウェールズだったのだ。少なくとも今のトリステインでは、故人とされているはずの彼が、なぜここにいるのだろう。だが、アンリエッタにとってそんなことはどうでもよかった。

「ウェールズ…様…」

アンリエッタはウェールズの胸の中に飛び込んだ。

「アンリエッタ。手短に話す。僕とアルビオンへ来てほしい」

それを聞いたアンリエッタは、首を横に振った。

「だめです。今アルビオンに行けば今度こそ殺されてしまいます」

今のアルビオンはレコンキスタの領土。そんな場所に、その組織と敵対する二人が行くなど、自ら身を投げるのと同行為だ。

「それでも帰らないといけない。皇太子の義務だよ、アンリエッタ。僕は君を愛している。君が必要なんだ」

アンリエッタがさらわれたと聞いてサイトとルイズはウルトラホーク1号でアンリエッタを探していた。

もちろんサイトだけではない。何せ王室を巻き込んだ大騒動だ。メイジで編成された王宮の魔法衛士隊や、平民の女性で編成された銃士隊がアンリエッタを捜索していた。

「なんとしても陛下を探せ！」

「はっ！！」

その頃、アンリエッタは馬に乗ったウェールズに抱き抱えられてアルビオンへと向かって行った。

「一体アルビオンへ何を…？」

「すまない。アルビオンに着いたら話す。それまで黙っていてくれ」

「…」

しばらくすると、魔法衛士隊や銃士隊の隊員たちが追い付いてきた。

「ウィンドブレイク！」

ウェールズは懐から杖を取りだし、兵士たちに向けて風の衝撃的を放った。

「うわあああ！」

兵士たちはその風の魔法で吹っ飛ばされてしまう。

「なんてことを…彼らは私の兵なのですよ！」

「手荒だがこうするしかなかった。あのままだと追い付かれるからね」

「…」

「もうじきラグドリアン湖だ。あそこに船がある。それでアルビオンへ行こう。そして水の精霊に誓うよ。アルビオン皇太子ウェールズはアンリエッタを永遠に愛すると」

「ウェールズ様…」

アンリエッタ自身、どうにでもなれと言った感じだった。愛する人が目の前にいる。それだけで彼女の心は満たされてしまっていた。

サイトとルイズはホーク1号に乗ってアンリエッタを捜索していた。

「何で姫様がさらわれたんだ？かなりの警護がいたはずなのに…」

「わからないわ」

「あれは…姫様！？」

サイトは窓から地上を見ると、アンリエッタの姿が目に入った。

「えっ！？どこ！？」

ルイズも地上に目を映す。サイトは指を指してその位置を確認させた。

「あそこだ。でも、あいつは」

「うそ…」

サイトとルイズは驚きを隠せなかった。

アンリエッタが死んだはずのウェールズに抱き抱えられていたのだ。

「すぐに降りるぞ！」

サイトは先回りしてウルトラホーク1号をアンリエッタたちの近くに着陸させ、降りた。

ちょうどラグドリアン湖の辺りで四人は鉢合わせした。

「姫様！！ご無事ですか！？」

「姫様を返せ！！」

サイトはデルフを引き抜いて身構えた。

「おかしなこと言うね。アンリエッタは自分の意思で僕について来たんだ」

ウェールズは薄笑いを浮かべる。ルイズは面識はほとんどなかったが、少なくともウェールズがあのような顔をするような男ではないことは知っていた。

「姫様！！その男はウェールズ皇太子の亡霊です！！騙されてはいけません！！」

ルイズはアンリエッタに強くいうが、アンリエッタは聞き分けようとしなかった。

「おかしなことを言わないでルイズ！！このかたはウェールズ様です！！あなたが見たのは影武者なのですよ！！」

「お願いです姫様！目を覚まして！」

「ルイズ、あなたは誰かを愛したことがある！？」

「え？」

アンリエッタの言葉にルイズは思わず言葉を失う。

「何もかも捨ててついていくものよ！これはあなたに対する王女としての命令よ！道を開けて！！」

「寝言は寝て言えよ…そんなの愛でも何でもないだろ！それでも行くってんなら俺が止めてやる！！」

サイトは我慢ならず、ウェールズに向けて剣を振り上げ突出した。

「エアハンマー！」

ウェールズはサイトに風の金槌を放った。

しかし、ワルドの雷の魔法すらデルフには効かなかった。よってウェールズの魔法も、デルフに吸い取られてしまう。

「効くか！！」

「その剣…魔法を吸収できるのか」

「皇太子、姫様を離せ。俺だって好きであんたと戦うつもりはない」

無駄な戦いを避ける姿勢を見せるサイトに、ウェールズはこう答えた。

「君たちが僕らを通してくれるなら、戦わないで済むさ」

「くっ…」

どうもウェールズは退く姿勢を見せない。
仕方なくサイトは右手にデルフを構え直し、ウェールズに剣先を向けて走り出した。

「来ないで！」

しかし、そこでアンリエッタが氷の壁を作り出し、その攻撃を阻んでしまう。

「私たちの邪魔をしないで…」

「ファイヤーボール！」

そこにルイズが炎の魔法を放った…つもりだが結局失敗の爆発だった。でもアンリエッタの作った氷の壁を破壊した。

（今だ！）

アンリエッタの氷の壁が崩れた今を逃せば、また壁を作られてしまう。サイトは腰のホルダーに身に付けていた、キリヤマが使っていた銃『ウルトラガン』を取り出し、杖を握っているウェールズの右手を狙った。

「当たれえ！」

ドッ！

その閃光はウェールズの右手を見事に撃ち抜いた。

「ウェールズ様！？」

アンリエッタはウェールズに駆け寄った。

「だ、大丈夫さ。これくらい…」

「ですが、手を貫かれたんですよ！せめて治療…」

そう言って彼の手を握った瞬間、アンリエッタの顔は青くなっていった。

ピチャッ…

「…え…？」

本来赤いはずの、ウェールズの血が、赤くなかった。銀色の…いや、液状化した金属が彼女の手に付着していた。

サイトとルイズもそれを見逃さなかった。

「何あれ！？血…？いえ、違う！」

「貴様、偽者か！」

そう、このウェールズはサイマがアンリエッタを拐うために利用した偽者だった。まずアンリエッタをにせウェールズを使って拐い、人質とする。その後、姫を人質にされレコンキスタに手を出せなく

なったトリステインを、レコンキスタ軍が殲滅し、その壊滅したトリステイン人たちの痛みや絶望をレーテに蓄積する。これがサイマの作戦だったのだ。

「そんな…」

アンリエッタはまんまと騙された。ウェールズが生きてるなんて、ただの幻想だった。ショックで彼女は膝をついてへたりこんだ。

「姫様！」

ルイズは彼女の元へ駆け寄って彼女を支える。

「偽者、それも金属でできたやつなら、遠慮はいらないよな」

「く…バレたからには仕方ない。アンリエッタ以外まとめて始末してやる！！」

にせウェールズはその形を失って液体金属のようにネバネバと変化し、みるみるうちに巨大化していく。

「ギイイイイ！」

金属で形成された怪獣
『金属生命体アルギュロス』になった。

アルギュロスは平手を向けると同時に、こちらに光弾を発射した。

「きゃ！」

ルイズとアンリエッタは光弾を辛うじて避けはしたが、その衝撃で飛ばされ、頭を強く打って気絶してしまう。だがこれはサイトにとってチャンスでもあった。二人を（二人同時は本人曰く重かったらしい）ホーク1号の操縦室に運び、外に出ると、ブレスレットからウルトラゼロアイを取り出し、装着した。

「デュア！」

サイトは光に包まれ巨大化、ウルトラマンゼロに変身した。

ゼロはアルギュロスに蹴りを二回喰らわせるがアルギュロスも同時に蹴りを放ち、互いの蹴りがぶつかり合う。アルギュロスもゼロに殴りかかり、ゼロはそれを華麗な動きで避けた。
そしてゼロはチョップをかますが、アルギュロスはその手を手刀で弾き飛ばす。
二体は腕をぶつけ合って腕でつばぜり合いをする。
その時、アルギュロスは体を発光させた。

「！？」

その姿はだんだん形の整ったものになり、最終的にゼロとほとんど同じ姿になった。目は紫色でつり上がっている。

「今度は俺に…」

にせゼロは口を動かし、不気味な笑みを浮かべた。
ウルトラマンには似合わないその表情には、どこか恐ろしさを感じらせた。

「フフフ…」

「！？」

ゼロがその笑みを見て動揺してる隙に、にせゼロはゼロの顔を殴った。

「ガアア！」

「ウア！」

そして膝蹴りを腹にぶつける。

「ハア！」

「グウ…」

さらに蹴ろうとするにせゼロだがゼロは掻い潜るように避けた。しかし、にせゼロは避けたところをを捕まえ、投げ飛ばす。

「くっ…」

立ち上がろうとしたところでにせゼロがゼロに襲いかかってきた。だがゼロは回転しながら高くジャンプして回避し、にせゼロを必殺キックで蹴り飛ばした。

〈ウルトラゼロキック！〉

「ダアアッ！」

「グフッ！」

ゼロはさらに地面に落ちたにせゼロをつかみ、投げ飛ばした。

「デヤ！」

「ガハア！」

だが、にせゼロはまだ倒れない。立ち上がり光弾を連続で放った。

〈ハンディゼロショット！〉

きめ細かい光弾が次々とゼロを襲い、爆発する。

「ガアア！」

「ウアアア！」

だが、ゼロはこれで倒れたりしなかった。全く効いてなかったかのように立ち上がる。

にせゼロはとっととオリジナルを始末しようと、額のビームランプに光を灯し始めた。

同時にゼロもビームランプにエネルギーを溜め、にせゼロと同時に必殺光線を放った。

〈エメリウムスラッシュ！〉

「ジュワ！」

「ラア！」

一度はぶつかり合うも、ゼロの光線がにせゼロのものを押し返し、

にせゼロは粉々に砕け散った。

三年前、この湖の湖畔でウェールズとアンリエッタは恋仲となった。アンリエッタはその時に、ウェールズを永遠に愛すると誓った。しかし、彼もアンリエッタに対して愛情を抱いてはいたが、それを口に出せなかった。薄々気づいていたかもしれない。自分と彼女が結ばれないことを。

「…」

屈辱と悲しみの涙がアンリエッタの目から溢れ、ラグドリアン湖の水となる。

「ルイズ、サイトさん、ごめんなさい…
勇敢に生きてみようなんて言っておきながら、あなたたちに迷惑をかけました。王女失格です…」

「姫様…」

ルイズは素直に幼なじみの無事を喜べなかった。今の彼女は、深く心を傷つけられていて、なんと声をかけるべきか、言葉が見つからなかった。

「城まで送りますよ。お姫様」

サイトは優しく言うと、アンリエッタはこくっと頷き、三人はホークに乗って城へと向かった。

N1　遺跡ー レリックー

サイトがハルケギニアに来る約半年前…

「ターゲットを確認、殲滅せよ！」

「「「「了解！」」」」

市街地に現れた、ゴキブリに酷似した『インセクトタイプビースト・バグバズン』に、黒と暗い青の隊員服を着た五人組『ナイトレイダーAユニット』が立ち向かっていた。

『ターゲットは一度冷凍弾で凍らせ、ナパーム弾で一気に仕留めてください』

若き作戦参謀長、吉良沢優の指示が、和倉英輔隊長に通信で伝えられる。

「了解。凪は冷凍弾、黒崎はナパーム弾を用意しろ！孤門と詩織は俺と一緒に敵の牽制だ！」

「「了解！」」

「「了解！」」

好青年孤門一輝隊員と、女性隊員平木詩織隊員は和倉に続き、対ビースト兵器『ディバイドランチャー』でバグバズンを攻撃した。

「ギオオオオ！」

「冷凍弾準備完了！」

「ナパーム弾のセッティング完了！」

西条凪副隊長、そして新人隊員黒崎シュウヘイ隊員はディバイドランチャーにそれぞれ指定された弾丸をセットした。

「よし、撃て！」

まず凪が冷凍弾を発射、バグバズンの体はたちまち凍りついていった。

「止めだ…！」

シュウヘイはバグバズンの体が凍りついたのを確認すると、トリガーを引いてナパーム弾を発射、バグバズンを木っ端微塵に吹き飛ばした。

『任務ご苦労様です。ターゲットは消失しました。帰還してください』

吉良沢は和倉に通信で伝える。

「了解。各自、基地に帰還せよ」

「「「了解」」」

五人は飛行兵器『クロムチェスターα』『β』『γ』『δ』で彼らの本拠地に帰還した。

黒部ダム基地『フォートレス・フリーダム』。そこがナイトレイダーの本拠地である。
ナイトレイダーとは『ＴＬＴ－Ｊ』の一部の隊員で、主に『スペースビースト』と呼ばれる怪物と戦うのを任務とする。

「初任務ご苦労様」

凪はデスクに座っていたシュウヘイにコーヒーの入ったカップを渡した。

「ありがとうございます。副隊長」

「キツくはなかったか？」

和倉はシュウヘイに尋ねる。

「平気です。これでも、結構裏社会での修羅場を通った経験もあるので」

「裏社会って…何？何をしたの？」

詩織は身を乗り出すようにシュウヘイに近づく。

「普通聞きますか？そんなこと」

「そうですよ平木隊員。尋ねられたくないことは尋ねちゃダメですよ」

孤門は笑顔を見せながらパソコンでビーストの戦闘データを解析している。

「だって気になるじゃなーい。って言うか孤門君最近生意気よ」

頬を膨らませて詩織は孤門を睨む。どこか可憐なのは置いておこう。

「しかし黒崎、油断は命を危険に晒す。次も気を引き締めて任務に当たってくれ」

「了解」

翌日の日曜日、シュウヘイは孤門と共に、遊園地にやって来た。
男二人なぜ遊園地かと言うと、

「お！今日も来たんだな二人とも！」

アルバイト。
そんな二人を出迎えたのは、シュウヘイとは同世代の少年、千樹憐。

「今日は何をしたらいい？」

「えと、たこ焼き作りと清掃」

「じゃあ僕は掃除しとくね。シュウヘイ、君はたこ焼き作りを頼むよ」

「…ああ」

孤門は帚を手に持ち、園内の掃除に取りかかった。
そしてシュウヘイは、憐の友達である尾白とたこ焼き屋でたこ焼きを作り始めた。
隣でたこ焼きを作りながら尾白が話しかけてきた。

「憐のやついいよな～。あんなかわいい彼女…」

屋台の向こうで、憐は一人の同世代の少女『瑞生』と仲良く話しながら、別の店でドリンクやハンバーガーを配っている。彼女なしの尾白には羨ましかった。

「あ～俺も彼女欲しいわ～！な、シュウヘイはそう思わないか？」

「興味ないな」

「んだよ、相変わらず愛想ねえな。もうちょい明るい方がモテるぞ」

「あれ、尾白知らなかったのか？」

そこにしばしの暇ができたのか、憐がやって来た。

「シュウヘイさ、この遊園地のお客さんから大人気なんだぜ。勿論女の子たちから」

「なっ…なにい！？」

確かに、シュウヘイは顔立ちはイケてるが、まさかモテてるとは尾白は思ってもなかった。

「てめえシュウヘイこらあ！なんで憐といい、女の子に縁があるんだよ～！」

泣くようにシュウヘイの胸ぐらを掴む尾白。

「それより尾白、焦げてるぞ」

シュウヘイが指差した方に、焦げ始めた尾白のたこ焼きがあった。

「あ゛！やべっ！」

「おつかれ」

バイトを終わらせ、夕方に園は閉園した。

「さて、僕はそろそろ基地に戻らないとな。
さ、シュウヘイ。帰ろうか」

「孤門、悪いが先に帰っててくれ。済ませたい用事がある」

シュウヘイはそう言うと、バイクに乗ってどこかへ走り去った。

「何だろう、最近よく早く帰るよな」

「だよな～」

不思議がる孤門の後ろから、憐がひょいと顔を出した。

「うわ！脅かすなよ憐」

「な～んか気になるよな。やっぱり『あれ』じゃないかあれ」

「『あれ』？」

何なのだろうと思っている孤門に、憐は小指を突き立て、いたずらめいた顔をしていった。

「か、彼女？」

「そう！あいつお客さんからモテるだろ？もしかしたら、女の子とこの後…ふふふ…」

「憐…それただの変質者だぞ…」

不気味でどこかいやらしい笑みを浮かべる憐に、孤門は青筋をたてる。

「でも孤門も気になるだろ？恋愛とか全く興味なさげなあいつが…瑞生や尾白も気にならない？」

その憐の言葉で、瑞生と尾白が孤門の車の影から出てきた。

「私も、ちょっと気になる…」

「くっそ～！なんでみんな俺より先に…うぅぅ…」

尾白は悔しすぎて泣き出す。

「そ、そんな悔しがることないだろ尾白！友達なら僕たちがいるじゃないか？な」

孤門は尾白の肩を叩いて元気付けようとしたが、それでも悔しそうに地面にうずくまる。

「とりあえず、行ってみようぜ孤門」

「あ、ああ…」

四人は孤門の車に乗ると、どこかへ向かっていくシュウヘイの後を追った。

さて、四人の乗る車はようやくシュウヘイの乗るバイクに追い付いた。勿論追跡は相手に気づかれてはならないので、外見状の変装をすることに。

その変装についてだが…

「私女子高生!?」

瑞生はセーラー服。

「僕、なんでカマバーのママの格好!?」

孤門はオカマ、と言うかニューハーフの格好。

「なんで俺は具志〇!?」

尾白はとあるボクシングチャンピオンの格好。アフロもグローブも健在。

「んで…俺はヒーローショーで使ってる仮面ライダーの着ぐるみ」

憐は仮面ライダー（パンチホッパー）の着ぐるみ。これは役者繋がりなのは別の話である。

「せめて僕のまともな格好にしてくれよ!」

孤門は運転しながら文句を言う。

「わり…楽屋にあったのこんだけだったから」

テヘッとわざとらしく振る舞う憐。後で締め上げてやる…と孤門は誓ったとのこと。

しばらく走ると、シュウヘイはとある店でバイクを止めた。
孤門は一度車を止め、一同は店に入るシュウヘイを覗き見る。これじゃ揃いも揃ってただの変質者だ。

「あれ…花屋？」

シュウヘイの向かった先は花屋だった。
窓越しから見ると、確かに花を買っている。

「女へのプレゼントに花か？古風だな」

「今時花で喜ぶ娘はいないと思うけど、相手がそれで喜ぶってことは…」

「かなり関係がいってるのか！？」

口々にに孤門、瑞生、尾白が言った。
もうそこまで大人の階段を登ったのか？

すると、シュウヘイは花を袋に入れた時窓越しから誰かの気配を感じた。もちろん孤門たちである。

（まっ、まずい！感づかれた！）

（隠れろ！）

とっさに一同は隠れようとした。が、肝心の隠れる場所は…

シュウヘイは店から出て辺りを見渡すが、先ほどの気配は見当たらなかった。

「…」

シュウヘイは何事もなかったようにバイクに乗り、走り出す。

その気配の正体である孤門たちはと言うと…

（…）

（…）

（…）

（…）

店の外に置かれた花壇の影に隠れていた。

「ふう～危なかった」

憐は一息着いた。

「毛虫くっついたんだぞ俺！」

尾白は肌に毛虫が着いたらしく、必死に手を洗いたくなっていた。

そんなこんなで再びシュウヘイの後を追った四人だった。

しばらくすると、シュウヘイは公園らしき場所でバイクから降り、花束を持ってその中へ入った。

「よし、降りるぞ」

四人はシュウヘイに気づかれないようにこそ…と着いていく。

「ふふ…シュウヘイの弱みを絶対握ったる」

尾白と憐が妙にいやらしい笑みを浮かべてる。（趣味悪いわよ）と瑞生は思ったが、自分も着いて行ってるから説得力のなさを実感せざるを得なかった。

「ねえみんな…ここって…」

孤門は文字の掘られた石の看板を指差した。そこは公園ではなく

「…お墓？」

そう、墓石がたくさん建ち並ぶ霊園だった。

「お墓参りしに来てたのか、あいつ」

「でも、シュウヘイに家族っていたのかな？」

普通お墓参りするときは、先祖や家族など自分と血の繋がりを持つ者に対してだ。だが今の瑞生の発言からすると、彼の家族について憐たちはあまり聞かされてなかったらしい。

「ああ、実はな…」

孤門は口を開き、シュウヘイのことを話した。

「あいつ、両親に虐待されてたんだ…」

「「「え！？」」」

１３歳、今から五年前のことだ。後に新宿大災害と呼ばれる事件が起こった。

その時に宇宙から飛来したのが、始まりのスペースビースト『ザ・ワン』。そのビーストと戦ったのが、同時元航空自衛隊の男、真木舜一の変身した巨人『ウルトラマン（ザ・ネクスト）』。その二体の戦いで家族を失うまでの間、シュウヘイは両親から虐待され続けていたのだ。

しかも、それをネタに学校でもいじめの対象にされてしまう。

ようやく両親が死んだが、その後は両親の財産を全く無関係の連中に巻き上げられ、彼は生きるのに必要な生活費すら無くしてしまう。

その後は、主に暗殺業を生業とした暴力団に加担してしまった。

後に孤門や憐たちと出会い、最初は敵意を剥き出すような態度をとっていたが、だんだん打ち解けていった。が、孤門の話を聞いた三人は、彼の過去に対して苦痛に似た表情を浮かべた。

「ひでえ話だ…」

「シュウヘイ…そんなことがあったなんて…」

「全然話してくれねえから気づかなかった…」

だが、憐はここで疑問に思った。

「でも、なんで墓参りと繋がるんだ?」

確かに、そんな他人と縁も縁もないに等しい人生を歩んでいた彼が、なぜ墓参りなどしているのだろうか?

「詳しいことはわからない。でも多分、あいつにとってかけがえのない存在だった人がいたんだよ。だから、立ち直ることもできたんだ」

「なるほどな、よし!捜索続行しようぜ。あいつ自分から絶対話したがらないだろうし、話してスッキリさせた方があいつのためになる!」

そのシュウヘイは、十字架の形をした墓石の前に花束を置き、合掌して祈りを捧げた。

墓石には、アルファベットで『Ｉｒｉｓ』と表記されている。

「……」

その墓石を見ている時の彼の顔はどこか、思い詰めたような表情だった。

（孤門たちだけじゃない。お前がいたから、立ち直れた。だが…）

怒りを滲ませるように握り拳を作るシュウヘイ。

この墓石の主と、シュウヘイは一体どういった関係だろうか？そして、一体何があったのだろうか？

（（（（…））））

物陰、と言うか別の墓石の影に隠れていた孤門たちは、彼の寂しげな背中を見て気まずくなってしまう。

その後、シュウヘイがいなくなったところで四人はその墓石を覗き見た。

「えっと…『アイリス』？」

その後、孤門たちはシュウヘイを見失ってしまい、しかも警察に補導されかけてしまった。（なんとか撒いたらしい）

シュウヘイは、今度は病院にやって来た。果物を篭に抱え、ある病室に足を踏み入れる。

「継夢、入るぞ」

病室のベッドに十歳ほどの少年が座っていた。
継夢と呼ばれたこの少年、実はネクストに変身した真木舜一の息子である。

「シュウ兄ちゃん、来てくれたんだ。
最近あまり顔出してくれないね」

「ああ、仕事ができてから忙しくなってな。悪いな」

「悪いなはなしだよ。僕も将来、パパが航空自衛隊のパイロットだったように頑張って病気治して、兄ちゃんと同じナイトレイダーに入るんだ！」

継夢は幼い頃から先天的疾患で体が弱かった。一度は退院したが、また体を壊してしまい、入院している。だが特効薬がもうじき完成するらしく、いずれ常人通りの生活ができるらしい。

「兄ちゃん」

「どうした？」

リンゴを剥き始めたシュウヘイは継夢に顔を向ける。

「まだ、引きずってんの？あのこと…」

「…」

図星を突かれたかのようにシュウヘイは黙り込んだ。

「今日も、姉ちゃんの墓参り行ったんだろ」

「…ああ」

「気持ちはわかるけど、引きずってもしょうがないよ。姉ちゃんだって、もし今の兄ちゃん見てたら逆に悲しくなっちゃうよ」

「…」

孤門たちが知らないことを継夢は知っているようだ。ちょうどシュウヘイがリンゴの皮を剥き終えた。包丁を皿の上に置き、継夢に言った。

「…お前まで気にすることじゃない。大丈夫だ。それに、まずは自分の体のことを考えろ。また倒れるぞ」

「うん…」

そう言ってシュウヘイの向いたリンゴを頬張る継夢。

「兄ちゃん、もし仕事とかでどっかに行くことになっても、忘れたりしないでよ」

「…変なことを言うな。まるでお別れみたいじゃないか」

二人はその後、継夢の学校のことやシュウヘイの仕事内での日常などで話した。

「じゃあな、早く体治せよ」
「兄ちゃんも無理したらだめだよ」

そして、彼は遊園地の楽屋へと戻って行った。自宅と言えるものを持ってないため、そこを自宅代わりに使わせてもらってるのだ。

「継夢にもあそこまで心配されるか…」

バイクを走らせて、遊園地へ直行するシュウヘイ。
しかし、そこで彼は妙な物体を目の当たりにした。

鏡のような光る球体が、彼の目の前に現れ、こちらに迫ってくる。

「く！」

ブレーキをかけ、すぐ折り返そうとしたが、その謎の発光体の方が早すぎてできなかった。

シュウヘイはその発光体にバイクやバイクに積んでいた荷物ごと、

その中に吸い込まれてしまった。

ハルケギニアの空に浮かぶ浮遊大陸アルビオン。外見からは白い雲に包まれてることもあるため、『白の国』という異名で知れ渡っている。

そのとある森の中の小さな村、ウエストウッド村に17歳ほどの、輝く金髪に耳の先が鋭く尖った少女が木の実を拾っていた。

彼女の名はティファニア。この世界の種族の一つ、エルフの母と人間の貴族の男性の間に生まれたハーフエルフ。

ハルケギニアの人間たちは、信じている神『始祖ブリミル』とエルフが遥か昔対立していたとされてることから、エルフを恐れ、対するエルフも人間たちを、大地を汚す蛮人と蔑んでいる。そういった種族間のごたごたもあって彼女はこの村から出たことはないのだ。以前は、王族だった父が自分の存在を隠していたため、幼い頃は王宮で過ごしていたが、両親が殺され、自身も殺害されかけた。しかし、殺される寸でのところで不思議な現象が起こると同時に、兵士たちは何をすべきか忘れたのか、帰っていった。
この時彼女は『忘却』の魔法を使えるようになった。どうやってそれができるようになったか、本人はあまり覚えてなかった。
その後は、父の家臣の娘で、自分の両親が亡くなったと同時に貴族

の名を奪われた女性『マチルダ・オブ・サウスゴータ』を姉代わりに養ってもらい、現在に至るまで他の戦災孤児の子供たちと共にこのウエストウッド村に隠れ住んでいる。

「テファ、今帰ったよ」

その声に反応してテファは振り向くと、そこにマチルダが金の詰まった袋を持って立っていた。

「マチルダ姉さん、お帰りなさい」

「はい、数ヵ月分の金持ってきたよ」

マチルダは袋一杯の金をテファを渡す。
ウエストウッド娘はその村自体が孤児院だ。この村で暮らしてる子供たちを養うには、人数的にかなりの金が必要になってる。

「ねえ、気になってたんだけど、このお金どこで手に入れたの？」

「ふふ、細かいことは気にしたらダメさ」

尋ねるテファに対し、マチルダは意地悪な笑みで誤魔化す。

「もう、答えにくいときはいつも誤魔化すんだから…」
ちょっと頬を膨らますテファだったが、現在アルビオンは少し政治的な問題が出てきている。だからマチルダ自身に危険が及ぶような予感があったため、無事にまた来てくれたことを喜んでいた。

その夜、子供たちと食事を終えたマチルダはテファにある提案を持ちかけた。

「テファ、使い魔を召喚してみないかい？」

「え、使い魔？」

「ああ、あんた一人じゃ、あれだけのチビたちを養うの大変じゃないかい？だから、手伝いをやってくれそうな使い魔を召喚したら、少しは負担を減らせるかと思って」

「使い魔…召喚できるのかな？だって今まで魔法が…」

「小さな爆発しか起こんないからって？大丈夫さ、今度はうまくいくって」

「でも姉さんの使い魔は？」

「あたしはいいさ。いなくても大丈夫。ゴーレム作れるんだし。ほら、でかいのが召喚されることもあるから、外に出な。やり方を教える」

二人は外に出て、マチルダは呪文の唱え方や召喚する際の杖の使い方などを教える。

そして、いよいよテファの使い魔召喚『サモン・サーヴァント』が始まった。

開始と同時に魔法陣が、彼女を囲うように展開される。

「我が名はティファニア・ウエストウッド。

我が導きに…」

「く…」

シュウヘイは目を覚ました。
辺りを見渡すと、そこは先ほどまでの、アスファルトの道路とは全く異なる景色だった。周りに木々が生い茂り、少し薄暗い。

「確か、妙な光に包まれて…」

そうだ。謎の発光体に包まれて意識を失ったのだ。

「荷物は…」

バイクはちゃんとある。椅子の蓋を開けると、ナイトレイダーの基本装備武器や隊員服、ケータイや小さなアルバムが入っていた。

三枚しか入ってないこのアルバムをシュウヘイは手放せなかった。ここから見ると、かなり大事な写真が入ってることがうかがえる。

バイクを元通りに立たせ、シュウヘイはそれを押して辺りを散策することにした。

その時、誰かの気配を感じた。

『シュウ…』

「…！」

その声に反応し、振り向くシュウヘイ。
振り向いた方に、彼より少し年下の少女がこちらを見ていた。

「アイリス？」

その少女はシュウヘイの姿を見ると、森の中へと歩き出した。

「待て！」

シュウヘイは後に、この時の自分が不思議な気持ちにかられていたと語った。
なぜか、死んだはずの彼女が自分を導くのだと。

『シュウー！』

ゴツゴツした道のりだからバイクに乗って追いかけることはできなかった。そのまま押しながら、彼はアイリスを追いかける。

「はあ…はあ…アイリス、どこだ！？」

気付いた時には、森を出ていた。

そこで彼が目にしたのは、夕暮れの空を背に、山の上に聳え立つ石の遺跡だった。

N2　六番目ーザ・シックスー

「……（ごくっ）」

夕暮れの山の頂上にそびえる石の遺跡。
職業上見覚えのある怪物を模した彫刻が彫られている。

導かれてるように、いや…間違いなく彼は導かれていた。
石の階段を登りながら、彼は遺跡へと向かい、その中へと入った。
中は松明の炎で照らされ、洞窟のように奥まで続いている。
ゆっくりと、恐る恐る歩き出すシュウヘイ。

奥へと、奥へと、姿が見えなくなったアイリスに導かれ…

そして、最深部へとたどり着いた。
目の前には、二メートル以上の、何かを模した石像が建っている。

これからだ。この石像から、誰かが呼んでいるのだ。

シュウヘイはその石像に触れようと近づき、手を伸ばす。だが、おぼろげな恐怖を感じた。触れたら、何かに飲み込まれそうで、彼は怖かった。触れたくても、触れない。

その時、背後に気配を感じた。シュウヘイは背後を向くと、アイリスがこちらをじっと見ていた。

「アイリス…」

アイリスは、大丈夫だよ、と言うようにコクッと頷いた。
シュウヘイもゆっくり頷き、石像の方を向くと、その石像に手を伸ばし、ピトッと触れた。

「ぐおああっ…！！」

触れた瞬間、手に稲妻のようなオーラがほとばしり、シュウヘイは石像から手を離した。
すると、石像はまばゆい光を放ち、その遺跡の内部を、そしてシュウヘイをも照らす。

「ぐ…」

眩しすぎて目が開けられない。

そして、彼はその光に包まれて石像の中へと飲み込まれてしまった。

「うわあああああ！！」

飲み込まれ、彼は目を開くと、自分の体が白く発光しているのがわかった。辺りは暗く、水を模したような波紋の模様が拡がっている。

すると、目の前にＹ字型の巨大な赤い光が灯り、線を描くように体を形成する。彼もよく知る、銀色の巨人だった。
最近知ったばかりだが、もう世間には知らない者がいないほど名を轟かせた神秘の存在。

「ウルトラマン…」

ウルトラマンはシュウヘイの姿を上から見下ろす。

「お前が俺を呼んでいたのか？アイリスを使ってまで…」

ギュオオオ！

この鳴き声は…

シュウヘイはその怪物のものらしき鳴き声の正体を知っていた。

「ビーストか…！」

実はこの時、遺跡の外で甲殻類（サソリ）に似た巨大な化け物が近づいてきたのだ。

クラスティシアンタイプビースト・グランテラ。

ウルトラマンは、シュウヘイと共にいるその空間に浮かび上がったモニターからそのグランテラの姿をじっと見た。

そして、彼に言った。

『君はどうしたい？』と。

「やれば、いいんだな？」

そう言った瞬間、彼は赤い光に包まれた。

その遺跡を狙いに来たのか、グランテラは遺跡のある山に近づき、口に邪悪な光を灯していく。
だが、遺跡から赤い光が放出され、空に一度飛び出すと、地上に向かって落ちてきた。

ウルトラマンネクサス・アンファンスの降臨。

グランテラは思わず攻撃を中断してしまう。
ネクサスは立ち上がり、自分の手をグッパグッパと開いたり閉じたりと動かした。

なるとは思ってなかったのだ。ウルトラマンに。

ネクサスはグランテラの方を向くと、右手の腕輪『アームドネクサス』を胸のエナジーコアに触れさせると、彼は赤と青の光に包まれ、黒と銀の模様がそれに加え、赤と青の模様に変化した。

ウルトラマンネクサス・ジュネッストリニティ。

ネクサスは両腕のアームドネクサスを一度会わせると、右拳に光を溜めそれを真上に向けて放射した。

〈メタ・フィールド〉

「ハアアア…デア！」

光は、金色のドームを作り出し、森林地帯から赤い荒野と青い星空のような景色へと辺りを変化させた。

メタ・フィールド、それはネクサスが自分に有利な戦闘空間で、ジュネッス状態のみ使用できる。この中ではネクサスは有利に戦える。が、これを使用すると三分しか持たなくなる。それ以上の使用は、下手すれば変身者（デュナミスト）、つまりネクサスに変身するその人を死亡させてしまうリスクもあった。

なら道は一つ。
グランテラを速攻で倒せばいい。

「キェエエ！」

グランテラはネクサスに向け口から光弾を発射したが、ネクサスは軽々と飛び越え、上空から飛び蹴りをグランテラにぶつけた。

「シャ！」

「ギアア！？」

「フッ！」

着地し、グランテラを見ながら身構えるネクサス。
グランテラは右手でネクサスの喉元を掴み、脇腹を殴る。

「ギエエ！」

「グワ…！」

ネクサスも負けず、グランテラの横腹を蹴り返し、さらにもう一撃喰らわせた。

「ムン！タア！」

次に来たグランテラの攻撃を、ネクサスは飛び越え、光輝く刃の光弾を発射した。

〈パーティクルフェザー！〉

「ヘア！」

「ギアア！？」

さらに飛び上がってもう一発拳をぶつけた。

「デヤア！」

「ギュオオ！？」

グランテラは逆上したのか、口にエネルギーを溜め、炎のような光弾を発射した。

〈シュトロームソード〉

ネクサスは手に赤いビームソードを形成して握り、光弾を弾き飛ばしていく。

だが、一発返しきれず胸元辺りに喰らってしまう。

「グハア！」

攻撃を喰らって倒れるネクサスに走って迫り来るグランテラ。おそらくウルトラマンを殺した後、その遺体を食べるつもりだろうが、もちろんネクサスにそんな気は毛頭なかった。

〈パーティクルフェザー！〉

立ち上がり、再び光弾を放ってグランテラに当てた。

「ギエエ！」

今こそ止めを刺す時と、ネクサスは両腕を十字に組んで必殺光線を放った。

〈クロスレイ・シュトローム！〉

「ハアアア…ディア！」

グランテラに必殺光線が直進する。

勝った。

そう思った時だった。

「！？」

メタ・フィールドの上空に黒い暗雲が現れ、真上から紫色の光をグランテラに浴びせた。そしてグランテラはその暗雲の中に吸い込まれて、光線は外れて荒野を砕いた。

「あの暗雲は…」

ネクサス（シュウヘイ）は知っていた。
話でしか聞いたことがないが、仲間たちから耳にタコができるほど聞かされた。彼らを隠れてじっと観察し、勝利を狙っていた強敵…

「アンノウンハンド…？」

瞬間、メタ・フィールドは消え去り、ネクサス自身も変身を解いた。
元のサイズまで縮まり、彼は右手、いや右手に握られた短剣型アイテム『エボルトラスター』を見つめた。

「これが、光…」

すると、またしてもまばゆい光が彼を包み込んだ。

「ぐぅっ…！」

そして、彼の意識は途絶えた。

「っ…」

頭が痛いのか、それともボーッとしてるのかわからない感覚を感じる。

彼は閉じられた瞼を開いた時、人生で最大の驚愕を味わった。

「！！！！！！！！？？？／／／／」

唇にとても甘く柔らかい感触がある。

読者はこの言い方で想像つく人もいるに違いない。

そう、彼はキスされてたのだ。

なぜ、そんなことをされてるのか？もちろん元々恋愛とは距離を置いた性格の彼からすれば、どんなに頭がよかったとしても絶対に解けない問題のようなものだ。

しかもそのキスをしてる人が、豊満な胸を持つ美女だったことにも驚きを隠せなかった。

「！／／／」

その少女はシュウヘイの目覚めに気づいたのか、慌てて唇を離した。

「ごごご…ごめんなさい！これは、その…えっと…／／／／」

少女は顔を真っ赤にしてもじもじと縮こまる。

整った顔立ちの青年はじっとこちらを見ている。

怒ってるかなあ…少女、テファは恥ずかしがりながらも、今のシュウヘイの態度に不安になる。

その時のシュウヘイは怒っていたわけではない。ただ、彼女の顔が他の人間に似ていたことに気がついたのだ。

「…アイリス？」

「「へ？」」

間抜けな声を上げるテファと、その後ろにいたマチルダ。

「あ、いや…なんでもない」

気づけば、見たこともない家のベッドにいた。
家はまるで山中にあるような、木を組み立てて作られたタイプのようだ。

「ここは…っっ！！！？」

突然胸に激痛が走った。

「ぐっぁあ…！」

胸が苦しい。まるでとてつもない高温で焼き印を焼き付けられているようだ。

「だっ、大丈夫！？」

テファはもがき苦しむシュウヘイを支えた。

「すごく痛がってるけど、ルーンが刻まれるだけさ。心配ないよ」

そうマチルダが言うと、痛みは収まった。
マチルダはシュウヘイの腕や顔を覗き込み、不思議そうな表情になった。

「変だね…ルーンが見当たらないじゃないか」

「え?もしかして、失敗したの?」

さっきからこの二人は何を言ってるんだ?シュウヘイの頭の中は訳がわからずぐちゃぐちゃになる。

「いや、さっきすごく痛がってたのはルーンが刻まれてるからのはずなんだけど…
ちょっと上着脱いでもらえるかい?」

「?」

シュウヘイは言われるがまま上半身の服を脱いだ。
鍛えられた肉体を見たテファは、また顔を赤くしてその顔を覆った。

シュウヘイは目を見開いた。身に覚えのない、古代文字のような刺青が刻まれてるではないか。

「なんだこれは?」

「ずいぶん、珍しい形のルーンだね。見たこともないよ」

マチルダはシュウヘイのルーンをじっと見て言った。

「なあ、俺のバイクは知らないか?」

「「バイク？」」

シュウヘイはその二人の反応に疑問を抱いた。この二人、バイクを知らないのか？失礼な言い方だが、どれだけ田舎なんだここは？

「えっと、あんたと一緒に出てきたあの変な鉄の塊のことかい？」

窓の外を指差した方に、確かにバイクが転がっていた。

「少し荷物をまとめる。その後、話を聞かせてくれ」

その後、シュウヘイは二人から話を聞いた。

まとめるとこうだ。

この世界はハルケギニアと呼ばれ、今自分のいる大陸は浮遊大陸アルビオン。

この村はウエストウッド村で、アルビオン王国の森の中にある、村そのものが孤児院という小さな村。時たまはぐれ者の兵士や盗賊が現れるらしい。

しかも貴族政治で平民たちは支配されており、貴族は魔法が使える。さらには特別な力を持った種族が他に数多くいるといったところだ。

どうやってこの世界にシュウヘイを呼び出したかと言うと、サモンサーヴァントという魔法によるもので、呼び出した生き物（本来人間は出てこないらしい）と契約し、主（テファ）の力とさせるためだと言った。

先ほどのキスは（この時の二人の顔が異様に赤かった）契約のためには致し方ないことだとも言った。

ちなみに、ベッドで寝ていたのは、彼が召喚された時意識がなかったため、ベッドに寝かせたからだ。

シュウヘイも自分のいた地球について簡単に説明した。
このハルケギニアが、もしかしたら…とあまり予想したくないが、地球上に存在するのかそうでないのか確かめる必要があった。

TLT（ティルト）
ナイトレイダー
ウルトラマン
スペースビースト

主に世間で知れ渡っている単語を次々に言ったが、二人の頭に？マークが着くだけだった。

「うーん、聞いたことないね…ニホンとか、あんたの祖国みたいだけど」

「それは、冗談とかじゃないのか？」

「冗談言ってどうするんだい？はぐれ者を騙すほどあたしは落ちぶれちゃいないよ」

気さくに笑うマチルダ。なんとなくシュウヘイは、彼女が詩織のように、姉らしい優しさを感じた。

気になるのは、テファだ。彼女は、髪の色や長さは違えど、シュウヘイの目にはパクりか？と思うほど似すぎていた。

（アイリスに似すぎだ…）

しかし、それよりも問題なのは、このハルケギニアは地球ではないことだ。月だってひとつのはずが、この世界では二つ、赤と青のものがあるのだ。いわゆる異世界だ。もはや他にどう表現したらいいか検討もつかなかった。

（初任務後すぐクビにされたようなもんだな…）

シュウヘイはムダだとわかってはいたが、ナイトレイダーが通信で使っている通信機『パルスブレイカー』を使って、基地にいる仲間たちに連絡を入れてみた。だが、サンドノイズに似た音が鳴るだけで応答無し。

「はあ…」

完璧に今の自分は迷子、はぐれ者だ。深くため息を着くしかなかった。

不幸中の幸いと言えるのは、憐や尾白にテファとのキスを見られていなかったことぐらいだ。見られてたら、まず憐は弱みに握ったとばかりにからかってくるだろうし、尾白だったらもう嫉妬と怒りの鉄拳で喧嘩を売ってきそうだ。

「勝手に呼び出して、ごめんなさい…」

テファは頭を下げて謝ったが、シュウヘイは聞く気にも怒る気にもなれなかった。

「そ、そう落ち込むことはないさ。手伝いしてくれたら衣食住に申し分ないから、な？」

元気づけるようにマチルダは言った。
行く先もわからないので、マチルダの言う通りシュウヘイはこの村で過ごすことになった。

手持ちにあるのは、
●ナイトレイダー隊員服
●ディバイドシューター（手持ちサイズの銃）
●孤門や憐たちと撮った写真
●バイク（燃料は四分の三はある）

バイクの燃料に関しては、マチルダが土の魔法で精製してくれそうな人を探して頼んでくれるようだ。
ちなみにマチルダは仕事を理由に、すでに村を出ていた。そのため、シュウヘイの寝るベッドもマチルダのお下がりということになった。

双月の浮かぶ夜空に照らされるエボルトラスターと、ネクサスに変身するデュナミストが持つ衝撃波動銃『ブラストショット』を見つめる。

「……」

ウルトラマンの力を手にした上、使い魔として無理やり呼び出され、どう受け止めるべきかわからない。

隣のベッドには、すやすやと安らかに、そして可憐な表情で眠るテ

ファがいた。

見れば見るほど、似つかわしくなっていく。

（アイリス…）

シュウヘイは自分の手のひらを見た。

思い出したくないが、やはり嫌な記憶ほど人の心の中に深く刻まれてしまう。

彼女の、アイリスの血で赤く染まった自分の手を。

「…っ！」

シュウヘイは握り拳を作り、怒りと悲しみを滲ませた表情を浮かべた。

その頃、とある地下のレーテ保管区域で、ある男がニヤリと笑っていた。

「来たか…『オリジナル』」

夢なのか、現実なのか、この時はハッキリしていなかった。だが、少なくともこれから起こりうる恐怖と脅威を、俺は本能的に感じ取っていたかもしれない。

ｂｙシュウヘイ

N3　王子ーウェールズー

シュウヘイが一夜を過ごした頃、アルビオンの王族の居座る城、ニューカッスル城である二人が互いに話し合っていた。

「行方不明者が続出？」

「はい、特に夜間中に何かの鳴き声が聴こえてきてますが、その近くには誰もいなかったと駆けつけた兵士たちから報告がありました。最近家族が帰ってこないと平民たちからも…」

一人の青年の名はウェールズ・テューダー。アルビオン王国の皇太子である。パリーは彼の補佐役だ。

「最近、レコンキスタというエルフに奪われた聖地を取り戻そうとしている輩の組織が宣戦布告してきたりと…この国もまずいことになったな」

ウェールズは窓の外を眺め、切ない眼差しで外を見つめた。

「いかがいたしましょうか、皇太子様？」

「パリー、選りすぐりのメイジを５０名用意してくれ。レコンキスタの策略かもしれない」

「はっ」

「後、僕も行く」

それを聞いたパリーはギョッとした。

「なっ、お待ちください！！王族のあなたが迂闊に出てくるのは危険です！ここは彼らに任せるべきですぞ」

「済まないパリー。だがじっとしている訳にはいかないんだ。この国の未来を担う者として。それに僕が敢えて出てくれば餌として奴らを引き付けることができる。そこを殲滅する。」

「…わかりました。翌日までに用意しましょう。」

嫌な予感はしていたが、パリーは命令通り部下の手配に向かった。

翌日、ウェールズたちはいくつかの部隊に別れ、まず森で調査を開始した。

「どうだ？」

ウェールズは兵士たちに異常がないか呼び掛けた。

「駄目ですね。痕跡すら残っていません。」

しかし、その時だった。

「うわあーーーー！！」

兵士の尋常でない叫び声が響いた。

「なっ、なんだ?」

「行ってみましょう!」

ウェールズたちは直ちに悲鳴の聞こえた方へ向かった。だが、駆けつけた時には誰もいなかった。

「どういうことだ?」

「皇太子!!これを」

兵士の手に握られていたのは、その場にいたはずのメイジの杖だった。無残に踏まれたように潰れ、へし折られている。周りには鎧や胄もぼろぼろの状態で転がっている。

この辺りを散策していた兵士たちは、何者かに襲われたのだ。

「まさか…この近くに何かが…皆、警戒しろ」

「はい!」

ウェールズの言葉に兵士たちは杖を手に、辺りを警戒した。

「ギャオオオ!!」

真上から凄まじい、何かのわめき声が轟いた。

「かっ、怪物だあー!!」

上空に、まるでゴキブリのような巨大な化け物が飛び回っていた。

「怯むな！攻撃しろ！」

ウェールズたちは呪文を唱え、魔法で攻撃した。

「エア・ニードル！」
「フレイムボール！」
「エア・ハンマー！」

炎や風、攻撃が当たったと同時に、魔法が直撃した摩擦で爆炎が起こる。

「やったか？」

だが怪物はまだ生きていた。全くダメージを受けずに。

「そんな…魔法が効かない！？」

すると、怪物は鋭い爪を伸ばして急降下し、反撃とばかりに兵士を捕まえ食らいつきだした。

「ぎゃあーーー！！」
「ぐあーーーー！！」

兵士たちは次々と捕まり、怪物に補食されていった。

「皇太子！！早くお逃げください！！このままじゃ…うわあーー！！」

だがウェールズは逃げなかった。いや、逃げる訳にはいかなかった。彼の貴族として、王族としてのプライドが逃げ道をふさいでいた。

「くそ…どうしたら…」

「…」

シュウヘイはベッドから起き上がり、下着の上から服を着た。

異世界ハルケギニア。確かに、別の星に文明の存在は、彼のいた地球では確認済みだった。

Ｍ８０惑星の住人。彼らは『来訪者』と呼ばれていて、２０年前、自分たちの肉体をバクテリア状に変え地球に飛来、地球の人間たちに自分たちの星の文明や歴史、そして産物の製作法を提供した。

そして本来自分たちを守るはずの、恐ろしい怪物を産み出してしまったとも言った。無論その怪物に関する情報も地球人たちに伝えた。

来訪者のもたらした産物の製作法は、主にビースト対策に使用され、世間にはある時まで知らされなかった。

その産物には、ビースト発生の元である、ビーストを恐れる記憶を消す『メモレイサー』、これはＭＰ（メモリーポリス）が使用した。シュウヘイが持っているディバイドシューターやパルスブレイカーにも、性能の一部に来訪者の技術が組み込まれている。

シュウヘイはパルスブレイカーを左腕に巻き付け、振動波を探知してみた。

「いない…か」

ビーストがいる予感はしていた。でなければ、ウルトラマンが自分に力をくれた意味がない。きっとこの星にもビーストは潜み、補食用の人間を狙っているのは間違いない。

（警戒は、怠るべきではないな）

シュウヘイはベッドから立ち上がってエボルトラスターとブラストショットを上着の内ポケットにしまい、居間に向かった。

「あ、起きたの？」

「…ああ」

居間の台所でテファは朝食を作っていた。かなりの数の皿に、いかにも美味そうな料理が並んでいる。

この村は孤児院だ。かなりの子供たちが住んでいて、年長者はいまだ17歳のテファだけだった。マチルダは時々生活費を渡しにやって来るが、住んでるわけではなかった。

たった一人、非力な少女が多くの子供たちを支える。

「キツくはないのか？」

「え？」

シュウヘイの質問にテファはキョトンとする。

「これだけの料理分の子供を支えるのが、辛くないのか？」

「ずっとやって来たから慣れちゃった。大丈夫」

神々しい笑顔で彼女は答えた。全く辛さを感じさせないその表情は、シュウヘイには眩しかった。

その後、十人近くの子供たちも集まり、朝食の時間となった。

「「「「「いただきまーす！」」」」」

つい微笑ましくなるほど元気な子供たちの挨拶と共に食事が始まった。

「やっぱ姉ちゃんの飯うまいや！」

孤児たちの中でリーダー的存在のジムはがっつくように飯を平らげていく。

料理は天然のものを食材としたもので、木の実や果物などが主となっている。

一口食べてみた。新鮮で、風味のある味だった。

両親が不仲になり、まだこの子供たちくらいの頃から飯もろくにもらえないほど虐待されていたため、母の味を知らなかったシュウヘイには、味わったことのないものだった。

「…うまい」

「あ、美味しかった？」

テファの言葉に、彼は素直に頷いた。

食後、子供たちは別々に別れて遊び始めた。

「なあ」

シュウヘイは片付けの時、テファに話しかけた。

「何？」

「何か、できることはないか？何もしないのは、いささか気が引けてな」

「うーん…じゃあ、薪割りをお願い。キツかったら言ってね。斧は外にあるから」

切り株の上に薪を縦に起き、振り下ろす。それを繰り返し、何十本もの薪を割っていった。

「ふう…」

汗だくを考慮し、薪を割る前に上半身の服は脱いでおいた。

思った以上に体力を使った。彼女はこの作業をずっとやっていた。

一見細腕に見えて根性の据わった娘なのがわかる。

「ん？」

シュウヘイは背筋に寒気に近い感覚を感じた。

瞼を閉じ、意識を集中させると、あるピジョンが見える。これはネ

クサスに変身したデュナミストたち特有の能力。ビーストが表で暴れている光景を探知できるのだ。

『うわあああああ！』

何やら、山中に近い区域で鎧を着た戦士たちが襲われていた。それを襲っていたのは、以前地球でも戦ったものの同個体『インセクタイプビースト・バグバズン』。

「始まったか」

シュウヘイは上着を着て、エボルトラスターを手に走り出した。

パルスブレイカーで正確な位置を掴みながらシュウヘイは森の中を走っていく。現場に着くと、バグバズンは自分と歳の近い青年にゆっくりと近づいてるのが目に入った。

「エア・カッター！」

その青年、ウェールズは鉄をも切り裂く風の刃を杖から発し、バグバズンを攻撃する。

「あれが、魔法か」

シュウヘイは小さく呟く。しかし、バグバズンの体表は、彼の風の魔法では傷つけられないほど固かった。しかし、ウェールズは逃げる様子を見せない。

「ちっ！」

シュウヘイはエボルトラスターを鞘から引き抜き、天に掲げ赤い光に包まれた。

「うおおおお！」

赤い光は、横からバグバズンを突き飛ばした。

「ギェエエ！？」

「なっ！？」

予想外の出来事にウェールズは思わず固まってしまう。
バグバズンが立ち上がると同時に、赤い光は地上に降り立ち、銀色に輝く巨人、ウルトラマンネクサス・アンファンスが姿を現した。

「シェア！」

「なっ…なんだあの巨人は！？」

ウェールズは動揺の境地の連続に動くことができなかった。

「ラア！」

「ギオオ！」

ネクサスとバグバズンは相手を押し出そうと、互いにつかみ合う腕に力を込めていく。ネクサスは一度その手を離すと、バグバズンの腹を蹴って突き放した。
怯むバグバズンに、さらにアームドネクサスに着いている『エルボーカッター』でバグバズンの顔を斬りつける。

「デヤ！シャ！」

切り裂くと同時に、斬った箇所が光る。それほどネクサスのパワーに力がこもってるのだ。
バグバズンも負けず、ネクサスにジャブを放つが、ネクサスはバック転してかわし、ハイキック、回し蹴りの順で攻撃し、踵落としでバグバズンを地面に這いつくばらせた。

「ギゥ…」

うつぶせに倒れたバグバズンに止めを刺そうとゆっくり近づくネクサス。しかし、バグバズンはネクサスの足に噛みついた。

「グゥ！？」

噛みついたまま、ネクサスをひっくり返した。

「くっ…」

油断はしたが、傷が浅かったので動くには申し分ない。

ネクサスはバグバズンに接近し、バグバズンの体を捕まえると、地面に思い切り投げ倒した。

「ディア！」

無理やりバグバズンを立ち上がらせると、横腹にハイキックを喰らわせる。そして、高く飛び上がり、空中から蹴りつけようとした時だった。

ドォォォン！

「グワアアア！？」

突然自分の体に爆弾らしきものが放たれ、ネクサスは地上に落ちてしまった。

「あれは！」

ウェールズは上空に目をやると、巨大な艦隊が三隻ほど飛んでいる。

「レコンキスタか！」

そう、アルビオンの王党派と対立する組織レコンキスタの艦隊だった。

『各隻、ウルトラマンを攻撃しなさい。奴はレコンキスタの障害になるやもしれぬ。災いの芽を今のうちに刈っておくのよ』

空を飛ぶ人形『ガーゴイル』から三隻の艦隊に乗るレコンキスタ兵に命令が下される。そのガーゴイルの声は、サイマと共に影からレコンキスタを操る女、シェフィールドのものだった。自分が出向かないときは、ガーゴイルを通してレコンキスタ兵に連絡を入れてる

のだ。

「了解、ウルトラマンを攻撃します」

レコンキスタの艦隊はネクサスに向けて砲撃した。

「ウワアア！」

倒すには至るほどの威力がなくても、魔法で威力を強化されてるのでネクサスを怯ませるには悪くない威力だった。

（ちっ…邪魔くさいが…）

ウルトラマンを初めて見る人間が警戒するあまり、ウルトラマンを攻撃する理由はなんとなくわかる。だが逆にウルトラマンが人を攻撃するなど、まさにご法度だ。変身しているシュウヘイはわざと威力を落とした光弾で攻撃して地上に下ろそうと思ったが、とてもそれが許されないような気がして撃てなかった。

しかし、ウルトラマンという単語を初めて聞くレコンキスタ兵の一人は疑問に思った。

なぜシェフィールドがウルトラマンを知っていたのか、と。それに、なぜバグバズンに攻撃するよう命令を下さないのだ？

「っ…デア！」

艦隊からの砲撃の隙を見てバグバズンとの戦闘を再開するネクサスだったが、砲撃がやはり邪魔で倒せるはずのバグバズンへの攻撃がうまくできない。

余裕のできたバグバズンは、再びウェールズに目を向けた。

「っ！」

ウェールズを食らおうと手を伸ばしていく。が、ネクサスの放出した光の縄がバグバズンのその手を捕らえ、無理やり自分の方に振り向かせた。

〈セービングビュート！〉

「ラア！」

「ギェエエ！？」

「まさか…僕を助けてくれたのか？」

バグバズンはネクサスを殴ってひっくり返し、彼の股に鋭い爪を食い込ませた。

「ギェエエ！！」

「ッ…グァアアアア！！！！」

ネクサスの悲鳴と共に、爪の食い込んだ箇所から血のようにオレンジ色の光が吹き出した。

「ガ…ゥウ…！」

股の傷口を押さえ、見るからに痛がっている。

バグバズンはグワアッとその鋭い牙を剥き出してネクサスに食らい

付こうとした。

「ヌォオ…シェア！」

力を振り絞ったネクサスはバグバズンの口を掴み、空中へと投げ飛ばした。そして身を屈め、両腕を十字に組んで、バグバズンの翼の付け根を向けて必殺光線を放った。

〈クロスレイ・シュトローム！〉

「ハァアア…シェア！」

「ギアアアアア！」

地上に落とされ、さらに空への自由を奪われたバグバズン。このままだと負けると悟ったのか、地面を掘り起こし、逃げ出そうとした。ネクサスはもちろん逃がすそうとしないが、足の傷のせいで追うことができなかった。しかもレコンキスタの艦隊がこちらを狙っているため、半透明に白く発光し、消えた。変身を解いて身を隠すことにしたのだ。

「消えた？」

ウェールズは気になって彼を追おうと、森の中へ走り出した。

レコンキスタの艦隊にも、ある命令が下された。

『艦を降ろしなさい。ウルトラマンを探すのよ』

「しかし、ウルトラマンはたった今消滅しましたが…」

ガーゴイルを通して艦長はシェフィールドに言うが、彼女は続けた。

『ウルトラマンは、普段は人の姿をしている。逃げられる前に急いで捕まえるのよ。利用価値があるわ。もし捕まえたら、莫大な恩賞を約束する』

「くっ…はあ…はあ…あのデカブツ、邪魔しやがって…
それに、なぜビーストの方に攻撃を仕掛けなかったんだ?」

ネクサスだったシュウヘイも疑問だった。なぜビーストを攻撃せず自分だけを攻撃したのか。
シュウヘイは右足の股の傷口を押さえ、足を引きずりながらその場を離れていった。が、地上に降りたレコンキスタ兵がこの辺りを散策し始めている。
見つかれば、絶対にまずいのがよくわかった。
草影に隠れ、レコンキスタ兵の動きを見て逃げることにした。しかし…

「誰かいるぞ!」

見つかってしまった。背後からどっとレコンキスタ兵が数十人、こちらに走ってきた。無我夢中でシュウヘイは草木を掻き分けながらレコンキスタ兵の手から逃げようと全力で走っていく。

「逃がすな！」

そして、ついに囲まれてしまった。

魔力探知用の魔法『ディストマジック』で一人のレコンキスタ兵はシュウヘイを調べるが、何の反応もなかった。

「バカな…こんな何の魔力もない平民のガキがウルトラマンなのか？」

レコンキスタ兵たちは、ウルトラマンの思わぬ正体にざわつき出す。

（まさか、僕とほぼ変わらない彼が、あの銀色の巨人…！？）

草影から見ていたウェールズも驚きを隠せなかった。

（こいつら、なぜウルトラマンを知ってる？それにどうやって普段は人であるなんて情報を手にしたんだ？）

シュウヘイは疑問に思った。ウルトラマンが普段人であることは、どこの世界でも機密事項に等しい。それをこんなウルトラマンも知らなそうな見ず知らずの兵士に、どうやって知られたのだろうか。

「まあいい、とにかくそなたには我々と一緒に来てもらおうか。なに、悪いようにはしないさ」

「…」

シュウヘイはすぐわかった。彼らはよからぬ理由で自分を利用しようとしていると。

「悪いが、そういう話には乗れないな」

「何？」

「貴様、平民の分際で貴族の命令に従えないというのか！？」

幾人かのレコンキスタ兵たちはシュウヘイの態度に憤慨する。

「…そうやって自分たちの一方的な権力で独りよがりな正義を貫くか…」

わざとレコンキスタ兵に向けてペッ！と唾を吐いた。唾をかけられたレコンキスタ兵の堪忍袋はプチッ！と切れ、シュウヘイに杖を向けた。

「貴族に逆らうことの愚かさを思い知らせてやろう！」

杖を振り下ろそうとしたその時、シュウヘイはブラストショットをポケットから取り出し、空に向けて波動弾を発射した。

一体どこに向けて撃ってるのだ？レコンキスタ兵たちは一瞬止まってしまう。

すると、空から奇妙な石の物体が舞い降りてきた。

シュウヘイがネクサスと出会った遺跡に安置されていた石像『ストーンフリューゲル』。シュウヘイは光となってその中へと吸い込まれていった。

（なんだ…あの石像は…）

「う…撃て！」

レコンキスタ兵たちは一斉に炎や水などの魔法を放つが、ストーンフリューゲルはまるでびくともしなかった。
すると、突然衝撃波が走り、レコンキスタ兵たちは遠くへ吹き飛ばされた。

「「うわあああ！」」

何人かは森の中へ、ある人は近くの河川や谷底へと落とされた。

「皇太子！」

ウェールズの配下メイジたちだった。

「無事だったのか！？」

ウェールズは草影から飛び出してきた。

「皇太子も、ご無事で何より。
しかし、あの飛行物体は一体何なのでしょうか？」

配下の一人がストーンフリューゲルを凝視して言った。

「それに、あの化け物と巨人はなんなのか…
後レコンキスタどもがなぜ化け物にだけ攻撃しなかったのか気になります」

「…」

ウェールズはもう一度ストーンフリューゲルに目をやると、気絶し

たレコンキスタ兵を避けながら恐る恐る近づいていった。

「こ、皇太子！迂闊に近づくのは危険ですぞ！」

しかしウェールズは聞いておらず、右手でストーンフリューゲルに触れた。次の瞬間…

「ぐあああ！」

稲妻のようなものがウェールズの右腕に走り出した。そして、彼の中にいくつものピジョンが流れ込んでいく。

『ウザったいんだよこのクソガキ！』
『あんたは「それ」なのよ！さっさと消えな！』
『死んどけよこのゴミが！きゃははは！』
『シュウー！今日はどこにいく？』
『いいか、貴様は機械だ！死にたくなかったら下らない情など持つな！』
『何で兄さんを殺したの！？何で…何で！？』
『シュウ…さよなら…』
『アイリスうううう！！！！！！』

「はっ！…はあ…はあ…」

ウェールズは気が抜けたようにへたり込んだ。その顔には、汗がべったりと着いている。

「皇太子、大丈夫ですか！？」

「あ…ああ、大丈夫だよ」

ウェールズは部下に支えられる形で立ち上がった。
その直後、ストーンフリューゲルは石像の姿から、白と赤の模様の入った飛行機に似た物体に姿を変え、空へと飛び立って消えた。

「彼は…一体…」

ウェールズはストーンフリューゲルに触れた一瞬、確かに見た。
彼の辛すぎる過去と、そうであるがゆえの悲劇を。

謎の銀色の巨人ウルトラマン…
僕はこの日の戦いを一生忘れることはないだろう。
だけど、彼が僕を助けたのは、もっと大きなものを守りたかったからなのかもしれない。

ＢＹウェールズ

N4　魔人ーファウストー

『あなたは私を愛してないじゃない。そんな人と結婚なんかできないわ！』

『世界だルイズ！君の力があれば…』

『止めよワルド子爵！それ以上は僕の風の刃が君を貫く！』

ウェールズはとある礼拝堂にて、トリステインから訪問してきた少女ルイズとその付き添いで婚約者、トリステイン魔法衛士隊隊長ワルドの結婚式の神父を勤めた。が、突如のワルドの凶変に、ワルドに向け杖を向けた。

『仕方ない、目的の一つは諦めよう』

『目的？』

その意味深な言葉に二人は首を傾げる。

『一つはルイズ、君だ。二つ目は君の持つアンリエッタの手紙…そして三つ目は…』

ドス！

瞬間、ウェールズはワルドの杖で胸を貫かれた。

『ウェールズ、貴様の命だ。ワハハハハハはははは！！！！！！！！！』

崩れ行く自分の姿を、ワルドは嘲笑いながら見下ろしていた。

『ワハハハハハ！！！！！！』

「うわあああああああああ！！！！！！！！」

カバッ！と彼は起き上がった。

「……」

そこは礼拝堂などではなかった。自分の部屋だ。

「夢か…」

額や胸元辺りが汗で濡れてしまっている。

しかし、とてつもないほどリアルな夢だった。まるで現実に起こりそうな、まさに正夢になりうる気がしてならない夢だった。

ウェールズは起き上がって水をカップに注いで飲んだ。

二つの月はまだ空に浮いている。

（さっきの、本当に夢だったんだろうか）

ウェールズは気づくことはなかったが、これを正夢と言うには、奇跡に近いものだった。

その頃、とある場所で行商人がロサイスの港町からサウスゴータへと向かって荷馬車を運転していた。
その時、彼の耳に妙な音が聞こえてきた。

ゴゴゴゴ…

「なんの音だ？」

辺りを見渡してみる行商人。すると、彼の荷馬車の目の前の地面から不気味な触手が、地面を突き破って姿を現した。

「な、うわあああああああああ！！！！！！！」

「して、あの巨人は一体？」

翌日、ニューカッスル城で緊急会議が行われた。
アルビオン王ジェームス一世と隣に皇太子であるウェールズが巨大な長方形のテーブルの中央に、その横から多くの王党派貴族が並んでいた。

「レコンキスタの艦隊が、なぜ巨人だけを攻撃し、あの化け物には手を出さなかったのか、それも気になります」

「巨人は人類の敵で、あの怪物には危害がないということなのでしょうか？」

「違う！」

そこに割り入るように立ったのはウェールズだった。

「あの巨人、ウルトラマンは僕を救ってくれました。対する怪物は、僕を補食しようとしてました。

皆さんはわかりませんでしたか？僕と共に調査に向かった部隊の多くがその化け物の犠牲になったことを」

それを聞いて、王党派貴族たちは互いに話し始めた。やはり味方なのか？いや、我らを欺くための罠では？と多くの議論が出される。

しばらくして、一人の貴族が立ち上がって意見を述べた。

「国王、とにかく我々アルビオン貴族はこの国の平民たちを守らねばなりませぬ。もし、またあの怪物が現れた時、少しでも対処できなければ、我々は奴らの獲物と化すのは揺るがない事実。レコンキスタに占領された箇所以外の各域に兵士を新たに投入いたしましょう」

「…そうだな。たとえどんな未知の存在が相手でも、我々は貴族としての役目を果たさねばならぬ。もし我々王党派の密かな愚行によってレコンキスタやあの怪物が現れたのならば、その罪を我らの手で拭い去るのだ！」

「では、国王…」

「うむ、兵士の新たな投入を許可する」

「では！」

その貴族は国王の承諾を受け敬礼してすぐ、仕事に取りかかろうとしたが、会議室に一人の兵士が飛ぶように慌てて入ってきた。

「報告！謎の怪物によってサウスゴータ区域が壊滅！」

「何！？」

バカな…と王党派貴族たちは信じられない表情を浮かばせた。

「さらに、サウスゴータ区域はレコンキスタの艦隊によって埋め尽くされております！」

「まさか…じゃああの怪物たちは…」

ウェールズは嫌な予感がした。自分を食らおうとしたその怪物は…

「まだ憶測でしかないが、ある程度はわかった。レコンキスタ共はその怪物の力を利用しておるのか…！」

国王が苦虫を噛むように歯を剥き出した。

「このままだと、後一ヶ月でこちらにもレコンキスタの軍が押し寄せます！」

「…急いで軍備を整えよ！スクウェアとトライアングルクラスのメイジを大量投入！サウスゴータ区域に向かい、怪物を全滅する！」

そのサウスゴータ区域は、レコンキスタの占領地と化していた。

「あっけないな…所詮王家によって腐敗した軍など、我々レコンキスタの敵ではない」

レコンキスタ総帥クロムウェルは薄ら笑いを浮かべた。口では立派な革命軍のように聞こえるが、実際は自分が新たにアルビオンのトップに立とうと野心を膨れさせていただけだった。

「私の力、少しはお役に立てましたか？」

そこにシェフィールドが歩いてきた。

「おお、シェフィールド殿。君のおかげでサウスゴータの奴らを殲滅できたよ。感謝する」

「お喜びになられてなにより…」

「…だが、忘れるなよクロムウェル」

シェフィールドの背後から、サイトに似た若い青年が出てきた。

ダークロプスゼロ、サイマ。

「俺たちの命令を素直に実行すれば国の一つや二つはくれてやる。だが逆らったりミスったら、貴様の首はないと心に留めとけ」

「は、はい…」

恐怖で青筋を立てるクロムウェルだが、すぐにいつもの態度を取り戻した。

「ん？」

向こうから何かが近づいてくる。

「王党派の竜騎士と三隻の艦隊が接近している。すぐにあれを」

「了解」

クロムウェルに命じられたシェフィールドは、胸元からハルケギニアには存在しない、異形の機械を取り出した。

【バトルナイザー、モンスロード】

そして、サウスゴータ区域の地面から、以前シュウヘイが取り逃がしたビースト、バグバズンが現れた。

「お行き…」

不敵な笑みと共にシェフィールドはバグバズンに言った。

その頃のシュウヘイは、今日も家事を手伝っていた。
しかし、昨日回復のためストーンフリューゲルに乗り、あの遺跡で傷を癒していた時間が長かったのか、テファに怒られてしまった。
まあ、傷のことが彼女に知られることなく癒すことができたので大丈夫だろう。

今日も子供たちと一緒に食事をとることに。
終わったところで思わぬ発言を耳にした。

「シュウ兄とテファ姉ちゃんて、いつ結婚するの？」

突然村で最年少の少女、エマが爆弾発言。

「っ！？」

シュウヘイはそれを聞いて思わず飯を戻しそうになった。

「ねえ、いつなの～？」

「いや、結婚とかそんなのは考えてないが…」

「違うの？」

夫婦になるのをよほど期待していたためか、シュウヘイに否定されたエマは泣き出しそうになった。

「あ～泣かした泣かした！」

ジムを筆頭とした男の子たちが、エマの泣きべそをネタにシュウヘイをあやし始めた。

テファに助けを求めようと彼女に目を向けるが、そのテファは顔を真っ赤にして固まっていた。

ずっとこの村で暮らしていた世間知らずの田舎者の彼女でも男を知らない訳ではない。マチルダにも、いつか自分に男ができるはずだとも言われたことがある。

（…）

気恥ずかしそうにシュウヘイをチラ見し、一度目を合わせると、すぐ目を背けて食器を片付けに行った。

「…」

参ったな…

子供は苦手だ。継夢にもここまでからかわれたことはなかったので、子供たちに苦手意識が現れ始めた。

逃げるようにシュウヘイも食器を片付けにテファの小屋へ戻った。

水道は地球とは違って通ってない。井戸から汲み上げた水を使って食器を洗う。

その時のシュウヘイはテファの顔を見た。

（似てる…）

髪や目の色は違うが顔を見るたび、彼女の面影を強く持っているのを実感する。

「？どうかしたの？」

テファがシュウヘイの視線に気づいた。

「いや…」

何でもない、とシュウヘイは再び食器に手をつける。

「私、なんか悪いことしたのかな？」

「何をだ？」

「やっぱり、勝手に呼び出したこと怒ってるのかな、とか…あなたが私の顔を見る度凄く思い詰めた表情を浮かべてるから…」

「そうじゃない」

首を横に振って否定した。

「それなら、どうしてそんな思い詰めた顔をするの？」

「…」

「黙ってたらわからないよ。話聞くから、教えて」

実を言うと、テファは彼が何かを抱え込んでいるような気がしたのだ。ずっと子供たちの面倒を見てきたからなのか、顔を見ただけで

誰が何を考えてるのか大体想像できるようだ。
その予想は当たってはいたが

「お前が気にすることじゃない」

シュウヘイは結局話さなかった。
すると、また彼は背筋に寒気を感じた。目を閉じると、サウスゴータ区域でビーストとアルビオン王党派貴族の戦いが勃発していた光景が映る。
ちょうど食器洗いが終わる頃だったため、タイミングがよかった。

「ちょっと出るか」

「え？どこへ…」

シュウヘイはテファの声を無視して村を飛び出した。

透視能力とパルスブレイカーで彼はサウスゴータ区域へと走って行った。

ようやく付近の草原にたどり着くと、以前取り逃がしたバグバズンが暴れている。

「今度こそ仕留めてやる」

エボルトラスターをポケットから取り出した瞬間。
ドン！の音と共に、彼の足元近くの地面が爆発した。

「！？」

いや、正確には何者かが彼を攻撃してきたのだ。
シュウヘイは顔を上げると、彼の浮かべる顔にしては珍しく、驚愕の表情を浮かべた。

「お前は…」

死人のような漆黒の瞳と胸の真ん中に埋め込まれた黒いクリスタル、道化のような黒と赤の配色。中性的な体つきに、そして額から斜めに伸びる二本の細長い角。

「ダークファウスト…」

「いかにも、私はファウストだ」

黒い闇のウルトラマン『ダークファウスト』だった。

「ぐわあああああ！」

王党派貴族の軍勢はバグバズンの暴力とレコンキスタの艦隊に敵わず、次々と落とされていった。
戦場はまさに惨劇と呼ぶのに相応しい、王党派貴族の血と死体の山が積み重なっていく。

「ギェエエエ！！」

「くそ、退きゃーく！」

王党派軍にもはや勝ち目はないと悟り、王党派軍の司令官貴族が生き残った兵に向けて大声で叫んだ。

「バグバズン、逃がす必要なないわ。一匹残らず食っておしまい」

シェフィールドの冷酷な笑みと共に、彼女の額にサイトやシュウヘイのルーンと同じ形をした紫色の光が灯り、怪獣を操る機械『バトルナイザー』を通してバグバズンの思考にシェフィールドの命令が伝わる。

バグバズンは触手を伸ばすと、生き残った王党派軍を捕まえ、次々とそのよだれかかった口の中へ放り込んだ。

「ギェエエエ！！」

「いやだあああ！！」

「たっ、助けて…うわあああああ！！！！」

「ちっ！」

今はこいつに構ってる暇はない。シュウヘイはファウストから逃れようと走り出すが、ファウストの闇の波動弾がそれを逃さない。

「逃げても無駄だ。何しろ私は、お前の影なのだからな」

「影だと？」

二代目のデュナミスト、姫矢准もかつて孤門の恋人が変身したファウストに同じことを言われた。恋人がファウスト、それはかつての孤門の心に深い傷と闇を抱えることとなった。
ファウストは相変わらず暗くて低い男性の声で続ける。

「お前が光を手にしたことで貴様の心の闇が浮き彫りになって形を成したもの、それが私なのだ」

「どういう意味だ？」

「慌てるな。いずれわかること」

「なら、一つこちらから聞かせてもらおうか」

シュウヘイはエボルトラスターを手にとって、ファウストを睨む。

「ほう、いいだろう。何を尋ねる？」

「お前のその体、斎田リコさんのものか？」

それを聞いたファウストは薄い笑い声を上げた。

「残念ながら違うな。私は貴様のいた地球ではなく、この次元世界の地球人の肉体を糧としている。言わせてもらえば、私はそのリコが変身したファウストとは根本的に違うと思ってもらおう」

「なるほど…」

シュウヘイはエボルトラスターを鞘から引き抜く姿勢をとった。

「さっきお前は自分のことを、俺の影だと言っていたな。確かに俺の心には、拭いされることのない影がある。だがそれは…」

ついにエボルトラスターを引き抜き、彼は強い意思を持ってその声を轟かせた。

「貴様などではない！」

天に向けてエボルトラスターを掲げた瞬間、彼は赤い光に身を包み、等身大のウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

「シュ！」

変身直後、ジュネッストリニティにチェンジしたネクサスは、右拳に貯めた光を天に放出、光のドームを作り出した。

〈メタ・フィールド！〉

「オォオオ…デヤ！」

しかし、ここでファウストの思わぬ反撃が出た。

「貴様の有利な空間にはさせん。闇に染まれええ！！」

ファウストが両腕を拡げた瞬間、メタ・フィールドを形成しようとしていた光のドームは不気味な紫色に染まり、侵食していく。

そして、辺りはメタ・フィールドとは異なる、光を感じさせない空間へと変わった。

「これが…孤門たちの言っていた闇の空間…」

「クハハハハ…そう、ここは無限の闇『ダークフィールド』。光の存在である貴様に勝ち目はない」

「ハアアア！」

「ディアアア！」

二体の闇と光の巨人が互いに飛び上がり、キックをぶつけ合う。
ファウストは地上に降り立った瞬間、ネクサスの首元を捕まえ、締め上げる。
「ムゥウウ…」
「グォォ…！」
そして向こう側へと投げ飛ばすが、ネクサスは難なく着地した。
〈ダークレイフェザー〉
「ラア！」
〈サークルシールド！〉
「フッ！」
ファウストの放った闇の波動弾を、ネクサスは光の盾を作って防いだ。
「ちっ、ならばこれでどうだ！」
ファウストは紫色の光を空に向けて放つと、その光は雨のように降り注ぎ、ネクサスに襲いかかった。
〈ダークレイクラスター！〉

「ウワアアアアアッ！！」

「フハハハハハ…」

モロに喰らったのを見たファウストは薄ら笑いを浮かべた。

「く…」

ピコン、ピコン、ピコン…

ついにネクサスのコアゲージが赤く点滅し始めた。彼のエネルギーが、残り少なくなっていたのだ。

再びネクサスの首を掴んで持ち上げた。

「グァ…ウゥ…！」

ネクサスは必死にその腕を振りほどこうとしたが、力がうまく入らない。ダークフィールドを展開された影響で、ネクサスの力が弱まってしまっていたのだ。

「脆すぎてつまらんな…これが貴様の実力か？正直、期待外れだな。まあいい、このままこの闇の中に沈むがいい」

だが、ここでファウストの予想外な出来事が起こった。

滅ボセ…

瞬間、ネクサスの胸に刻まれたルーンが赤く光り、彼に力を与える。
ぐっと自分の首をつかんでるファウストの手首を掴むと、ギギギと力を込めた。

ミシミシミシ！

「グアア！？」

痛みを堪えきれず、ファウストはネクサスから手を離してしまった。

「なっ、何だと！？」

「はあ…はあ…ムゥウウ…」

息を切らすネクサスは再び構え直し、ファウストに向かって走り、ファウストの両腕を捕らえた。
ファウストは腕を振りほどこうともがくが、ネクサスは隙を突いて脇腹を蹴りつけた。

「デア！」

「ヌアア！？」

そして空中へとファウストを蹴飛ばした。

「オラア！」

「グワアアアッ！？」

それだけでは終わらなかった。ネクサスは、ダークフィールドの闇を左拳に収束させ、地面を殴り付けた。瞬間、地面から紫色の光弾が次々とファウストのいる地面から飛び出し、ファウストに大ダメージを与えた。

〈滅閃光！〉

「喰らえええ！！」

「ギャアアア！！」

しかし、ネクサスの反撃はまだ終わらない。

〈シュトロームソード〉

光の剣を作り出し、縦に振って空気を切り裂く風の刃をファウストにぶつけた。

〈覇風撃！〉

「デアア！」

「グアアアア！！」

ファウストはその攻撃を喰らい、空中に投げ出され地上へと落ちた。

「はあ…はあ…」

ネクサスは自分の両手の平を見た。今の力は、自分でもよくわからないほど見事なものだった。

「ふふ…なるほどな…『リーヴスラシル』の力で、私のダークレイクラスターを貴様なりに開発し、自らの技としたか。今回のデュナミストは歴代の者より歯応えが効くな…」

ちなみに覇風撃はウェールズのエアカッターから編み出したものだ。ファウストはヨロヨロと立ち上がった。

「リーヴスラシルだと？なんだそれは？」

「いずれわかる。私も詳しいことはわからんがな…また会おう…六代目のウルトラマン…」

ファウストはそう言うと、ダークフィールドの解除と同時に姿を消した。

サウスゴーダ区域の王党派軍は壊滅、かろうじてバグバズンの魔の手から逃れた一人の兵士はこの事態をニューカッスル城の国王に報告、残った兵士も少なくなり、王党派軍の勝ち目はこの日、完全に消失した。

「ファウスト…またいずれ現れるだろうな…」

シュウヘイは一人、ウエストウッド村へ、息を切らしながら戻って行った。

リーヴスラシル、それがウルトラマンの力以外に授かった力だと後に知った。

この力のおかげもあってファウストを退けはしたが、この力が呪われた力であることを、まだ知る由もなかった。

ＢＹシュウヘイ

N5　遭遇ーコンタクトー

「サウスゴーダ区域が、レコンキスタに奪われ、しかも奪回に失敗…」

ニューカッスル城の空気は、とてつもなく重かった。

もうレコンキスタと戦うだけの戦力が残っていない。しかもこのアルビオン大陸は常にハルケギニアの上空を飛んでいるため、他国からの援軍を要請しようにも、その軍が来るのにかなりの時間を有する。

もう、アルビオン王家に残された道は一つ。

「いさぎよく奴らに玉砕し、弱者ではないことを証明することだけか…」

一人の王党派貴族が小さく呟いた。

「それが、我らの宿命ならば仕方あるまい」

国王も重い口を開いた。

「そんな…あのような連中にみすみす命を奪わせ、この国を明け渡すのですか！？」

ウェールズは父の言い分に抗議した。王族である彼にとって、逆賊であるレコンキスタなどに命を奪われたくない。それにこのアルビオンを奪われたくもない。そう思っていた。

「ウェールズ、ならばこのまま一人逃げるか？」

「！」

「そのような臆病者に育てた覚えはない。そんなに命が惜しい者など、王家の恥知らずだ。下がれ！」

「っ…」

ウェールズは悔しさで顔を歪ませ、その場を後にした。

「皆の命さえあれば、アルビオンはあんな逆賊に…」

倒れはしない。きっとまた立ち上がれると思いたかった。だが、これは地球でも幾度となく行われたことだ。暴政を奮っていたかどうかは不明だが、王家が国民によって失脚され、断罪されることはよくある話。これも一例と言えた。

だが、もちろんウェールズは納得できずにいた。

ウェールズは小棚の上にある豪華な小箱を開け、ボロボロになった手紙を見返した。

従妹であり、自分と恋仲である姫の手紙だった。

「アン、君は今の僕を笑うだろうか？」

「これもいらねえや。そら！」

とある林の中、売り物として使えなくなったものを不法投棄する男たちの姿があった。

「聞いたか？レコンキスタは民主制にしてくれるんだとよ！しかも王党派をあと一歩でぶっ潰せるらしいぜ！」

「そいつはいいな！レコンキスタと民主制にかんぱーい！」

実際、レコンキスタが民主制を掲げようとしてるのは全くの嘘だったことに彼ら平民たちは気づいてない。掛け声と共に、また荷台からゴミを林の中へ放り込んだ。

「おい、いつまでやってんだ？さっさと…」

荷台の男は仲間の二人に向かって喚いたが、返事はない。彼は荷台から降りて仲間の元へ駆けつけた時、奇妙な光景を目の当たりにした。

「なっ、なんだこりゃ！？」

真っ黄色の霧がその辺りを埋め尽くしていた。そしてその霧の中から、その霧を吸った影響によるものからか、喉を詰まらせたかのように苦しんでいる。

「けほけほ！あ…あああ！！！！」

その林にいた彼らは、そこで不運な最期を遂げた。

だがこの真っ黄色の霧は「霧」ではなかった。
あるビーストの発生させた「花粉」なのだ。

その頃、シュウヘイはテファからお使いを頼まれこのロサイスの町に来ていた。バイクの燃料はまだ十分あるので、しばらくの道中は楽にこなせそうだ。

「なあ、この野菜はいくらだ？」

「銅貨１０です」

「また野菜～？」

エマがブーたれて頬を膨らました。

「野菜くらい食え。でないと飯抜くぞ」

「え～？」

いまだに駄々をこねるようなエマの態度を無視し、シュウヘイは紙

を取り出す。ハルケギニア文字の読み書きができないため、直接頼まれたものを口頭で言ってもらい、それをメモしたもの。

「次は…」

「ねえシュウ兄」

エマがシュウヘイのズボンの裾を引っ張った。

「あれマチルダ姉ちゃんじゃない？」

「何？」

エマの指差した方を見ると、マチルダが何かでつまった小袋を換金所の中にいる店主に渡している光景が目に入った。

「今日もすごい大金だね。でもホントに金貨１００エキューでいいのかい？もうちっと高く売っても構わないんだが」

「いいさ、構わないよ」

マチルダは１００エキュー分の金貨を受け取り、換金所から離れた時、シュウヘイとエマの視線に気づいた。

「何をしてるんだ？」

「あ、これはね…ここじゃ不味いからあそこの店で話すよ」

マチルダの促すまま、三人はとある飲食店のテーブルに座った。

「その金貨、いくらあんたでも一人で稼げる金額じゃないはずだ。何をやってるんだ?」

エマを膝に乗せ、シュウヘイはマチルダに問いただす。

「言わない?」

「言わないと言ったら、話すのか?」

質問に質問、シュウヘイがそう尋ねるとマチルダは頷いた。

「あたしはさ、盗賊やってるんだ」

シュウヘイは表情こそかえなかったが、衝撃的な真実だった。マチルダの父はかつてサウスゴーダ区域を領地としていたので、彼女も身分が高く裕福だった。しかし、テファの母がエルフであることを覚えてるだろうか?テファの両親と彼女を匿ったマチルダの父は殺害され、彼女も貴族の位を剥奪された。当時まだ幼かったテファと共にウエストウッド村で暮らして以来、出稼ぎの形で貴族から金銀や宝石といった財宝を盗み、換金所に売り付けていた。その時の通り名は、『土くれのフーケ』。

この世界の平民はいくら有能でも平民のまま、一生頑張ってもバカな貴族が一年もらえる金額を手にすることは不可能だ。しかも、それ以降に村に預けられた孤児たちを放っておけなくて、かなりの金額分の財宝を狙うこととなった。それは、捕まれば確実に処罰されるにも関わらず毎度危険な場所に行ってるようなものだ。

「止めることは…現時点で不可能…か」

「ああ、そういうことさ。もしあたしがやめたら、あの子たちを養えなくなる。これは事実だよ」

シュウヘイの言葉にマチルダは言った。

「でもシュウヘイ、あんたの場合は隠さない方がいいんじゃないかい？」

「？」

「あたしさ、あんたが何か隠してる気がするんよ」

シュウヘイは少し図星を突かれたような顔をした。隠してること、それは紛れもない…ウルトラマンの力だ。

「まあ、無理に話さなくてもいいさ。あたしは口が固いから話せなんて言えないし、無理に人の聞かれたくないこと聞こうなんて思わない。けど、これは言わせてもらうよ」

マチルダはテーブルから立ち上がり、二人に背を向けた。

「悩み事は誰かに話した方が身のためだよ。それも、信頼できる奴に」

そう言って彼女はロサイスの町からも立ち去った。次なる財宝を求めて。

「エマも話すなよ。マチルダさんのこと」

「うん」

すると、シュウヘイは何かの気配を感じた。
誰かが俺を見ている。そんな目をして、辺りを見渡した。一見誰も見ていないように思えたが、これは決して妄想ではなかった。以前にも感じた、不気味なオーラを。

「シュウ兄、どうかしたの？」

「ああ、何でもない。村に戻るぞ」

「ん？」

ニューカッスルの城壁の上にいた王党派兵士は、遠くから何かの羽音を聞いた。まるで虫のような、間を挟まないほどすばやい羽音。

「大変です！怪物が出現しました！」

バグバズンがついにニューカッスル城にまで現れた。

「ちょっと行ってくる」

「え、また!?」

村に戻ったシュウヘイは買い物篭をテファに渡した瞬間、村を飛び出した。

「向こうの方角か…」

シュウヘイは誰も見てないのを確認すると、自分の背後の木に向けてブラストショットを撃った。
その波動弾は突然、木に届く前に弾けて消え去った。

「ハハハハハ…さすが、よくわかったな」

「さっきから何こそこそ着けてくるんだ、ファウスト?」

背後にいたのは、またしてもファウストだった。しかも今回のは等身大ではなく、通常のウルトラマンと同じ巨体を誇っている。

「その姿では私と戦えまい、纏え光を!」

しかし、シュウヘイはエボルトラスターに手をつけず、ブラストショットを撃ちながらファウストの魔の手から逃げ出した。

「逃げるのか?無駄だといったはずだが…バカか?」

いや、シュウヘイは逃げてるのではない。実はバグバズンのいる方へファウストをおびき寄せていたのだ。バグバズンを放っておけな

いので一度に相手をすることとしたのだ。無謀だとはわかっていたが…

「いつまでその姿でいるつもりだ?そんなに私の作り出す無限の闇が怖いか!?」

ニューカッスルまで後数キロのところでシュウヘイは立ち止まった。ここから一気に飛べば一分もかからずたどり着けるはず。

〈ダークレイフェザー〉

「フン!」

ファウストの闇の光弾がシュウヘイに襲いかかってきた。がその刹那、エボルトラスターを引き抜き、ネクサス・アンファンスに変身し、ファウストの攻撃を弾き飛ばした。

「ふふ…それでいい。さあ、楽しませてくれ」

満足が足りないような様子でファウストは笑い、二体の巨人は再び対峙することとなった。

しかし、ネクサスはここである光景を目の当たりにする。王党派軍がバグバズンと交戦しているのだ。

すぐネクサスは城壁に迫るバグバズンの方を優先し、両腕でバグバズンの動きを封じる。

「ウルトラマン!」

ウェールズがネクサスの姿を見て声を上げた。
しかし、もう一つ見たこともない巨人、ファウストも目にした。

「黒い…あれもウルトラマンなのか？」

「デア！」

ネクサスはバグバズンを城から引き離すように蹴り飛ばした。

「…」

ファウストもいる。まとめて倒すのはキツイが、やるしかない。ダークフィールドにされてしまうだろうが、他人を巻き込む訳にはいかないので、ネクサスはジュネッストリニティにチェンジ、右拳から光を空へ放出した。

〈メタ・フィールド〉

「ォオオオ…ハッ！」

光のドームが作り出され、ネクサスとファウスト、バグバズンは消え去った。

しかし、ここで思わぬアクシデントが発生した。

ウェールズまでもメタ・フィールド内に巻き込まれてしまったのだ。

「皇太子！どこに行かれた？」

「ここは…一体どこだ？」

光のドームに飲み込まれたウェールズの立っている場所は赤い荒野の拡がる空間だった。

気がついた時には、メタ・フィールドはすでにファウストによってダークフィールドに塗り替えられていた。

「デヤ！」

ウルトラマンの声が聞こえる。その声の方を向くと、ネクサスがファウストとバグバズンの二体と交戦していた。

「ヘッ！デア！」

「ムン！ハア！」

巨人同士が、互いに拳をぶつけ合っている。ファウストは蹴りを放ち、ネクサスはその足をつかんで防ぐも、ファウストは宙で一回転してネクサスの顔を蹴り着けた。

「くっ！」

バグバズンも蚊帳の外に留まらず、触手でネクサスの両腕を捕らえた。

そこにファウストの追撃が来ると思ったら、新たなビーストが現れた。
昼間の黄色い花粉の発生源である、花に酷似した『ブルームタイプビースト・ラフレイア』。
ラフレイアはネクサスに花粉を放射した。
「ヌォアアア…！」
ラフレイアの花粉は可燃性な上に猛毒、ネクサスにもこれは苦痛だった。
「ラア！」
ファウストの暴力的な乱撃がネクサスに繰り出された。
〈エルボーカッター！〉
バグバズンの触手を無理やり引き裂いて、ネクサスは自由の身になったが、エネルギーが残り少なくなっていた。
ピコンピコンピコン…
〈ダークレイフェザー！〉
「死ねい！」
「ハッ！」
すばやい身のこなしでネクサスはファウストの攻撃を辛うじて回避、

胸のエナジーコアから光の弓矢を形成し、ファウストに向けて発射した。

〈アローレイ・シュトローム！〉

「デア！」

「なっ…ちい！」

ファウストはすぐさまバグバズンを引っ張り、自らの盾代わりにネクサスの必殺技をバグバズンに受けさせた。

「ギェエエエ！」

バグバズンは光の矢を受け、跡形もなく消滅した。
ファウストとラフレイアはその直後、勝負を預ける姿勢で姿を消した。

同時に、ダークフィールドも消え去り、ネクサスも変身を解いた。

「はあ…ちっ、逃がしたか…」

シュウヘイは小さく舌打ちして座り込んだ。

「君！」

そこに、ダークフィールド内でも彼の戦いを見ていたウェールズが走ってきた。

（くそ、バレたか）

シュウヘイはすぐ走り去ろうとしたが、二体のビーストと闇の巨人を一気に相手にした疲労ですぐ追い付かれてしまった。

「君、大丈夫か？」

「俺に近寄るな…」

シュウヘイはそれでもウェールズを突き放そうとする。

「強がるな。僕は君に聞きたいことが山ほどあるんだ」

「近寄るなと言ったはずだ」

遂にはブラストショットをウェールズに向けた。

彼は平民、銃を向けられるなど屈辱だの無礼だのと考える貴族が普通かもしれないが、ウェールズは気に止めなかった。

「約束する！君の正体については誰にも話さない！」

「どう…だか…」

未だに警戒するシュウヘイだが、遂にはラフレイアの毒が回りはじめていたため、指先にまで力が入らなくなり、立てなくなった。

「無理をしたらダメだ。僕が介抱する」

ウェールズはシュウヘイを連れて城に戻った。

平民とはいえ、あの危険な場に彼が居合わていた以上、部下や他の貴族に知られると厄介なので誰にも悟られないように自室に彼を連

れて行った。

N6　共闘ータッグー

「水系統の魔法で回復させてる。毒も薬草の効果で直になくなるはずだよ」

シュウヘイはウェールズの自室で彼から治療を受けた。いざ、受けてみると不思議だ。機械も道具も使わず傷の治療を行えるとは。

「君の名前、教えてくれるか？」

「…黒崎シュウヘイ。黒崎が姓でシュウヘイが名前だ」

「クロサキ…シュウヘイ？変わった名前だな」

「…前にも言われたな」

その前とは、初めてテファとマチルダに出会った時のことだ。実際自分でも味気さがない名前だと彼は自覚してる。

「まず最初に聞く。君がウルトラマンだね？」

それを聞いたシュウヘイが、すぐにはいそうですなんて答えるはずがない。ウェールズもこれはわかっていた。

「何の話だ？」

「なら、なぜレコンキスタに追われていた時、右の股に傷があった？」

ウェールズは初めてネクサスを見た時、彼がバグバズンに股を引っ掛かれ傷を負ったところを見た。その後もシュウヘイの股に傷を見かけた。偶然にしてはあり得なさすぎる。

「…」

そこまで言われるとシュウヘイは反論できなかった。

「…だったら、どうするつもりだ？
言っておくが、俺はこの力を人同士の戦争などに使うつもりはない」

「わかってるさ。僕は王族だ。僕の命を救ってくれた恩人を、戦争に使う真似はできない。ただ…」

本当は手を貸してほしかった。そうすれば、自分の部下や父である国王を救えると思っていた。だが、こんな非人道的な頼みを、王族のプライドを持つウェールズにはできなかった。
自分の故郷や知り合いの命をあんな恥知らずの賊軍に引き渡したくない。だからって、国王たちに逃げるよう説得しようにも彼らは反対するだろうし、自分一人でのこのこ逃げることも無理だ。

「あの化け物を倒す方法を君は知ってるはずだ！頼む、教えてくれ！あの化け物は一体なんなんだ？それにあの黒い巨人は？レコンキスタはあの怪物どもを操ってるんだ！」

「…」

シュウヘイはしばらく黙ると、静かに口を開いた。

「この世界の、人の手で簡単に倒せるビーストは今のところラフレイアくらいだ」

「ら…ラフレイア？ビースト？」

「ビーストとは、宇宙から飛来した怪物の総称でラフレイアはあの植物型の化け物のことだ」

ウェールズはダークフィールドでのネクサスの戦闘を思い出す。確かに、植物のような化け物がいた。いかにも危険そうな花粉をたくさん撒き散らしていた。

ウチュウとか聞きなれない単語を耳にしたが、それより一体でも倒す方法がわかったのだ。これは不幸中の幸いである。

「本当に、そのラフレイアとやらを倒せるのか？僕らの手で」

「奴の花粉は猛毒かつ可燃性だ。下手に攻撃すれば誘爆し、広範囲に爆発が拡がる。

だがそれが弱点でもある。ギリギリまでラフレイアの花片に近づき、炎で攻撃すれば大丈夫だ」

「それは本当か？」

部屋の扉から誰かの声が聞こえてきた。

しまった、誰かに聞かれてしまったのか？ウェールズの心に焦りが出てくる。

そこに入ってきたのは、彼の父である国王だった。

「ち、父上！？」

「あんたは？」

「お主が、あの銀色の巨人の正体か。まさか平民とは思わなかったぞ。まあそんなことより…」

国王はウェールズ、いや貴族から見れば信じられない行動を見せた。シュウヘイに頭を下げているではないか。

「父上!?なにをなさるのです!?頭を下げるなんて、あなたのやることじゃ…」

「これくらい当然だ!我が子を救った恩人に対して、しかも神と言っても過言でない彼に礼を言わぬなど、私の名に傷がつく。とにかく、我が子ウェールズを救ってくれて礼を言うぞ」

シュウヘイは遠慮がちに少し困った顔をして国王に言った。

「俺は神じゃない。それに、ウェールズとやらを助けたのは単なる仕事みたいなものだった。礼など言われても…」

「そう言うな、少年」

国王は頭を上げてシュウヘイの顔を見た。

「お主に聞きたいが、レコンキスタはそのビーストとやらを使役している。もしお主の力なら奴らに勝てるか?」

「戦争沙汰に手を貸すことは無理だし、俺はこの力を手にしてからまだ日が浅い方だ。それに、奴らのバックには俺の力を凌駕する者が間違いなくいる。いくらウルトラマンである俺でも限界はある。俺一人でどうにかなる相手じゃない」

「そうか…」

さすがに国王も頭を悩ませた。もし彼を軍に投入しても、何体いるかもわからないビーストを使役しているレコンキスタに、ウルトラマンが味方に着いたところで勝ち目はない。その気になればきっと彼も簡単に殺せる可能性がある。

「ならば、お主に恥を忍んで頼みたいことが…」

と国王が言おうとした時、

「国王！一大事にございます！」

一兵士の慌てる声が廊下から聞こえてきた。国王は部屋の扉を開き、その兵士の前に姿を現す。

「何事だ！？」

「城の付近にまたしても植物の化け物が出現いたしました！」

「「何！？」」

ウェールズと国王は驚いて声をあげた。

「また現れたか…！」

シュウヘイは苦虫を噛むようにエボルトラスターを取り出した。が、同時に恐怖心がわずかに芽生えるのを感じた。

（ファウストがまた現れるかもしれない。その時は今度こそ奴の闇

に…）

飲み込まれるだろうか？

（いや…）

ギュッとエボルトラスターを握り、シュウヘイは立ち上がった。

「俺が奴らの相手をする。あんたらはみんなを避難させてくれ」

そう言ってバルコニーに出ようとしたが、ウェールズがそれを引き留めた。

「待つんだ！君の体はまだ回復しきれてないんだろ！」

しかし、シュウヘイはその声を無視し、エボルトラスターを引き抜いてネクサス・アンファンスに変身、空へ飛び立った。

ラフレイアは城の付近で迎え撃つ王党派軍の兵士に襲いかかっていた。

「あああぁ…が…」

「ギェエエエ！」

ラフレイアの花粉を吸ってしまった兵士たちは次々と過呼吸に陥り、命を散らしていく。

「シェア！」

「ギェエエ！」

そこに、ネクサスが降り立ち、少しふらつきながらもラフレイアを睨んで身構えた。

「シュウヘイ…」

「ウェールズ」

バルコニーからネクサスの姿を見つめるウェールズに、国王は彼の肩に手を乗せた。

「お前は彼を信じるか？」

「え？」

「答えるんだ。貴族としてではなく、お前自身の心で答えろ」

今までそんなことを聞かれたことないのに…ウェールズは父の言葉に驚いた。

だが答えは、決まっている。

「…助けたいです！ここで彼を助けなかったら、僕は自分を許せなくなる」

「そうか…ならば行け！お前の信じるウルトラマンを援護してみせろ！」

「はい、父上！」

ウェールズは空を見上げ、ピィイイー！と指笛を吹いた。すると、空から少し大きめの竜が、彼らのいるバルコニーの前へ羽ばたいてきた。

ウェールズの使い魔であるまだ子供の竜だった。

「頼むぞ、マラキア！」

「キュル！」

ウェールズはマラキアに股がり、大空へと飛び立った。

ネクサスは右拳からエネルギーを放射し、自分ごと亜空間内にラフレイアを取り込ませた。

〈メタ・フィールド！〉

「デア！」

「今だ！」

ウェールズの乗る飛竜マラキアはメタ・フィールドの光のドームが地に着く前にその中に侵入、メタ・フィールドへの突入に成功した。

「よし、入れた！」

ウェールズは杖を構え、ネクサスと交戦するラフレイアを睨んだ。

「ラア！デイ！」

ネクサスは何発かラフレイアを攻撃したところで、真打ちが登場した。

「本当に楽しませてくれるな…」

この低くて暗い男性の声、紛れもなくファウストだった。

「ダメージの残る体で自らの墓を作るとは…」

〈ダークフィールド〉

ファウストは出現直後、自らの闇の力でメタ・フィールドを闇の空間に変化させてしまう。

「ハアア！」

「くっ！」

ファウストの繰り出す回し蹴りをネクサスはアームドネクサスを盾代わりにして防いだ。
その隙を見せたネクサスの背後をラフレイアがタックルで突き飛ばす。

「ヌゥ…！」

迂闊に光線を放つことはできない。花粉への引火を利用するためにラフレイアに当てようにも、ファウストがいる。邪魔されるがオチだし、ファウストも簡単に攻撃を受けるほど雑魚ではない。
ファウストから習得した滅閃光や覇風撃も一度見られている。一度見た技をファウストがまた喰らうなんて保証はない。かえってエネルギーの無駄遣いだ。

「デア！」

肉弾戦に打ち込むしかない。ネクサスはファウストに回し蹴りを放った。

「ぐっ…チイ！」

ファウストのパンチを受け流し、チョップで叩き伏せるネクサスだったが、ファウストはすぐ立ち上がってネクサスを殴り飛ばした。

「ハアッ！」

「グワッ！」

ウルトラマンは傷つきながらも必死に戦ってる。自分も応えねば。
ウェールズはお得意の魔法でラフレイアを攻撃しようとした。が、

手が尋常でないほど震えている。

（ダメだ…手が…杖がうまく握れない…！）

怖い。心底そう思っていた。あんな人ではない者同士の戦いはどこの世界の人間から見ても、割り込めるような余裕はないと考えるのが普通だ。ましてや、このハルケギニアには怪獣対策に適した兵器はない。しかも今ダークフィールドに侵入できたのはウェールズただ一人。

「グハッ！」

ネクサスはファウストの攻撃で地面に叩きつけられ、しかも両腕を捕らわれてしまい、身動きがとれなくなった。

ピコンピコンピコン…

しかもエネルギーが切れかけ、彼のコアゲージが赤く点滅し始めてしまう。

『ウェールズ、行け！お前の信じるウルトラマンを援護してみせろ！』

父の言葉が、その赤い点滅音と共に彼の頭の中に走馬灯のように過った。

不思議なことに、その言葉が彼の心の恐怖心を消し去った。

「マラキア、ウルトラマンとラフレイアの間を抜けて上昇しろ！」

「キュル！」

ウェールズの命令でマラキアは勢いよく飛び、ファウストに捕まったネクサスとラフレイアの間を通り抜けた。

ほんの一瞬だったが、ネクサスとウェールズの視線が重なった。なぜなら、その時の二人は互いを信頼する眼差しと共に頷き合ったのだから。

マラキアはラフレイアの真上から数十メートルに達したところで真下へ急降下、ウェールズは狙いをラフレイアの花片に向け、自分が使用可能な系統の内、炎と風の力の組み合わさった魔法をラフレイアの花片に目掛けて撃ち込んだ。

「エア・バニッシャー！」

精神力が空っぽになるほどの魔力を絞りだし、炎と風の鋭い槍がラフレイアの花片に見事に直撃、ラフレイアの体内に溜め込まれた花粉に引火、大爆発を引き起こした。

「やっ…た…」

しかし、精神力を切らしたウェールズはそこで気絶してしまう。

「しまっ…！」

まさかネズミに一杯食わされたるとは…

ファウストは爆発に巻き込まれる前にネクサスを放し、逃亡を謀ったが、解放されたネクサスの光の縄で動きを封じられた。

〈セービングビュート！〉

「ハッ！」

「なっ！？」

ネクサスは光の縄で捕まえたファウストを、ラフレイアの方へ思い切り投げ飛ばし、ファウストは爆発に巻き込まれてしまった。

「グワアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「……？」

気絶していたウェールズは瞼を開いた。

「僕は…」

ラフレイアに放った魔法が直撃してすぐ、気絶してしまったのだ。辺りを見渡すと、彼と彼の使い魔であるマラキアは、自らの意思と関係なく浮いていた。

いや、『浮いていた』のではなく『乗っていた』のだ。

ウルトラマンの手のひらの上に。

「ウルトラマン…」

ネクサスの顔を見上げたウェールズは、思わず笑顔を表した。
その微笑みに、ネクサスはゆっくりと頷き、地上へウェールズを下ろした。

その後、ウェールズは父からあることを告げられた。

「ウェールズ、お前は彼と共にこの城を抜けろ」

「え!?」

父からそのような言葉がでるとは思わなかった。まさか、出ていけと言ってるのか?

「出ていけと言ってるのではない。このままレコンキスタと戦って、弱者ではないと証明できても、結局それだけで終わってしまう。だから、お主だけでも生きるのだ。お前の影武者は、『スキルニル』で確保できる。お前さえいれば、アルビオンのチューダー王家の血は絶えない」

国王の提案は、スキルニルで偽のウェールズを作り、自分たちと偽のウェールズをこの城に残し、ウェールズを別の場所へと逃がすことだった。

が、ウェールズは反対した。

「できません！確かに僕は、皆に生きてほしいと願って玉砕に反対しました。だけど…私一人でのこのこ逃げるなど…」

国王は顔をうつむかせる我が子の肩に手を乗せた。国王としてではなく、一人の父親としての、息子への最期の言葉。

「我々を思うのなら、我らの死を乗り越えて前に進むのだ。お前だけでも幸せになれ。ウェールズ」

「父上…」

ウェールズは使い魔のマラキアを連れ、城門から出てきた。彼が唯一持つ王家の証『風のルビー』は、スキルニルに本物そっくりの偽物を持たせてるため、なんとか持ち出すことができた。

「覚悟はできたのか？」

シュウヘイの問いに、ウェールズは嘆きを圧し殺し、凛とした態度で答えた。

「…ああ。これから君の世話になるよ、シュウヘイ」

この日、シュウヘイは新たな仲間ウェールズを連れてウエストウッ

ド村へ戻って行った。

N7　拉致ーアダクションー

あれから、数週間経った。ウェールズも子供たちから信頼されるようになり、よき遊び相手になっていた。ウェールズも「民の立場に立つのも悪くないな」とまんざらではない様子だ。
それと、彼の使い魔である子供の竜マラキアも子供たちの注目の的になった。
主にウェールズは魔法を使って子供たちを楽しませている。炎の魔法で蝋燭に火をつけたり、つむじ風で小さな竜巻を作ったり。

「すっげえ！」

「スゴーイ！」

子供たちから感動と驚愕の眼差しが溢れ出す。
それをシュウヘイとテファは家の窓から見ていた。

「ウェールズさん、凄いね」

「ああ。トライアングルクラスとか言っていたな」
トライアングルは四段階の内上から二段目のランクに当たる。三つの系統を使用できるウェールズの才能の現れが強く出ているのがわかる。

「お前は魔法使えるのか？」

「私？」

「ああ」

「私は、記憶を消す魔法が使えるの」

「記憶を？」

記憶を消す、それで彼が思い出したのは、ＭＰ（メモリーポリス）。彼らはある日までビーストやウルトラマンに纏わる記憶を消去するのを生業としていた。記憶を消すこと、それは本来許されることとは思えないと考える者が多いだろう。だが、ビーストが人を補食する残酷極まりない光景を目にした人間が発狂しておかしくなるケースが度々起こった。これでは襲われる以前までの生活を送ることができなくなるので、ＭＰはビーストに襲われた人たちの記憶の修正を行い続けてきた。そんな彼らの役目が別の方向に傾いたのは、ウルトラマンネクサスが真の姿に覚醒し、ビーストを大量発生させた最強の闇の巨人を倒した日から、人々はウルトラマンを信じる強さを身に付け、ＭＰは記憶を消すのではなく、その辛い記憶から被害者たちを立ち上がらせることを仕事とするようになったのである。

「記憶を消す…か。あまりいいものじゃないな」

テファはそう言われ、シュウヘイの顔を見る。

「消したことあるのか？」

「うん…この辺りは時々盗賊とか出るから…」

今まで彼女はその記憶を消す魔法で物取りからの危機を乗り越えてきた。が、いけないことをやっていた…そんな思い詰めた表情を作るテファにシュウヘイは言った。

「お前は非力だから使うなとまでは言わない。ある人が俺にこう言ったんだ」

シュウヘイは孤門たちに会うまで辛い日々を過ごしていたのを覚えてるだろうか？荒れ放題何て言葉では済まされない生活を送っていた彼は、精神的ショックの大きさからＭＰに記憶を消すよう頼むはずだった。だがあるジャーナリストの男がそれを聞き付けて彼に言った。

『記憶を消すってのはな、生きてきた証を失ってしまうことなんだぞ！』

彼の怒声はシュウヘイの心に強く根付いた言葉の一つだった。

「だから、記憶を消しすぎるなよ」

「…うん」

二人は再び子供たちやウェールズの方へ目をやる。

「お前もチビたちのところに行ったらどうだ？子供の気持ちは子供にしかわからないと言うらしいし」

「うん…って今子供扱いしたでしょ！」

頬を膨らませて怒るテファだが、シュウヘイは全く恐怖心を抱かず、口笛を吹きながら軽く無視。

彼女は怒っても全く怖くない。むしろ可憐に見えた。

「…！」

その時、草影から何者かがシュウヘイとテファを監視カメラのごとくじっと見ていた。

「…」

シュウヘイはその視線き気づいたのか、草影の方を振り向いた。が、誰もいなかった。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

気のせいか…？ファウストの時とは違い、全く気配がなかったのでネズミなどの小動物だろうと自分に思い込ませた。

（さすが…危うくバレるところだった）

木陰にある男が身を隠していた。

（そろそろ、『後輩』と感動の対面でもするとしようか）

相手を凍りつかせるような不敵な笑みを浮かべた男は、その場を去った。

夜、ウェールズはシュウヘイに会ってから好奇心を爆発、シュウヘイのいた地球の話を昔話を聞きたがる子供のように尋ねてきた。

故郷にいる仲間たち。
日本の政治体制。
戦争から学んだ平和主義的思想。
世界中との交流や宇宙進出、その他もろもろ尋ねられたシュウヘイは、ビーストを相手にした時以上に疲労した。
しかし、シュウヘイの過去については触れなかった。いや、触れることはできなかった。一度ストーンフリューゲルに触れた時、それだけでも恐ろしく感じ、踏み込むべき領域ではないと思ったのだ。

「君の国は…問題は決してないわけではないが、少なくとも平和を愛する人々がこの世界よりも多いのか」

「ああ…」

この話は、テファや子供たちも興味深そうに聞いていた。しかし、内容の半分以上が理解できなかったのは別の話。

「アルビオンを復興させる時、いつか平民と貴族の差がない国を、築くことができるかな?」

「あまり急ぎすぎるのも問題だと思うがな。少しずつ理解させていかないと、汚い政治家に命を狙われるぞ」

「はは…気を付ける」

冗談のように言うシュウヘイだが、ウェールズは苦笑いを浮かべた。

その後、もう夜だったので彼らは床に着いた。

「さて…」

すでに隣のベッドでテファが寝ているので、自分も眠りに着こうとした時だった。

机に置いてるエボルトラスターのクリスタルが、点滅している。近くにビーストが現れたのだ。

「眠りを妨げるとはいい度胸だな…」

シュウヘイは誰も起こさないようにエボルトラスターを握り、村を飛び出した。

シュウヘイが村を出たのを見計らい、ある人影が村に足を踏み入れた。小柄な少年のようでさっきの男ではないようだ。

「ここみたいだね…」

少年は騒ぎを起こさないよう、ゆっくりとした足取りでテファの小屋に忍び込み、寝ている彼女に近づく。

（ごめんね、拉致りに来たよ）

ズズッと彼女に手を伸ばしていく。が、その時…

「君、そこで何をしている?」

少年は入り口から聞こえたその声の方を向くと、ウェールズがこちらに杖を向けていた。

「やばっ!」

ウェールズの風の魔法を受ける前に、少年はそれを素早い身のこなしで避けきった。

「逃がさん!」

風の衝撃『ウインドブレイク』が少年に向けて放たれるが、思った以上に少年は素早い。まるで彼自身が風のようで、当たるのは、少年の残像が関の山だった。

「速い…!」

これだけ速い相手は、死角から自分を攻撃するのは容易なはず。気を引き締めて身構えるウェールズ。

だが、しばらくして違和感を覚えた。攻撃してこないのだ。

ウェールズは辺りを見渡し、姿無き敵を確認してみたが、敵よりも見逃してはならないことを見落としていたことに気づいた。

「しまった!ティファニアが…」

テファがいつの間にか連れ拐われていたのだ。

僕としたことが…ウェールズは苦虫を噛むように顔を歪ませた。

（シュウヘイに対して申し訳が立たないぞ…）

そのシュウヘイは、空を見上げていた。

「アンノウンハンド…やはり…」

黒き暗雲、アンノウンハンドが空を覆っていた。アンノウンハンドは紫色の光を放射し、地上に以前シュウヘイが初めて戦ったビースト、グランテラを召喚した。

「…」

シュウヘイはエボルトラスターを引き抜き、ネクサス・アンファンスに変身し、すぐジュネッストリニティにチェンジ、光のドームを作り出した。

〈メタ・フィールド！〉

「シャ！」

しかし、光のドームがグランテラと自分をすっぽり包んだ瞬間、アンノウンハンドがメタ・フィールドを闇の空間ダークフィールドに塗り替えた。（厄介な雲だ。こそこそ動き回りやがって…）

ダークフィールドが完成したところで、ネクサスとグランテラの戦いが始まった。

「シュ！ハッ！」

ネクサスの連撃がグランテラに当たっていく。

グランテラは、蓋のように自分の胸を開き、六つの気門を露にする。これがグランテラの恐ろしい武器であった。この気門から放たれる光弾は一発一発がとてつもなく重く、立て続けに受けてしまえば、蜂の巣は確実だ。

「ギェエエ！」

ネクサスはグランテラの気門から放たれる光弾を次々と避けていく。

〈シュトロームソード〉

立ち上がって光の剣を作り、いざ反撃に移ろうとしたが、グランテラの光弾はまだ終わらず、弾くのがやっとだ。しかも一発弾くことができず、吹っ飛ばされてしまう。

「グワアアッ！」

「ギェエエ！」

紫色の光がアンノウンハンドから降り注がれ、再び力を強化したグランテラは気門に高エネルギーを溜めていく。

（まともに喰らえば…）

死ぬかもしれない。
どうする…？あの光弾は追尾性能も優れ、とても避けにくい。逃げようにも…

（いや、一つあるか。あのバカのやり方が…）

あのバカの…憐の顔が思い浮かんだ瞬間、ネクサスはビシッ！と身構え、大胆にもグランテラへと突出した。

この無鉄砲な戦い方は、憐がデュナミストだった頃の戦い方でもあった。ほぼ捨て身に近い戦術であるため、あまり使い勝手のよいやり方ではない。
グランテラの何発もの光弾は宙を旋回しながらネクサスに迫り来るが、それをネクサスはギリギリのところでかわしたり、光弾と光弾をわざとぶつけ合わせ相殺することで回避していく。
すべての光弾を避けきり、宙に浮いたところで、ネクサスは両腕を、肘から指先まで光らせ十字に組むと、破壊力抜群の必殺光線をグランテラに放った。

〈オーバークロスレイ・シュトローム！〉

「ハアアアア…シャア！」

「グギャアアアア！！！！」

光弾を受けたグランテラは青白く光り、ダークフィールドと共に跡形もなく消滅、ネクサスも変身を解いた。

しかし、村に戻ったところで大事件発生を確認することとなる。

「ティファニアが、拐われただと？」

「済まない…僕のミスだ」

ウェールズは申し訳なく顔をうつむかせた。

「今さら後悔してもしかたない。にしても、お前を退けるとはかなりの…？」

手練れだな、と言おうとした時、シュウヘイの左目に異変が起こった。

「なんだ…目が霞む」

「どうしたんだい？」

「何か…どこかの建物？誰かいるのか？」

後に、サイトもこのアルビオンで知ることとなる能力だった。主の危機が迫る時、ルーンの輝きと共に、使い魔の視界に主の見ている光景を見ることが可能なのだ。

「あいつの視界か？」

何やら手の込んだ屋敷の中のようだ。たくさんの壁掛けや絵画…

だが、彼は目の前に映ったある男の顔を見た瞬間、恐怖と驚愕のあまり青筋を走らせた。

「あいつは…！」

シュウヘイは知っていた。仕事仲間から耳にタコができるほど聞かされていた気がするほどに。道理でグランテラを操れたわけだ。それも、自分が戦ってる隙に彼女を拐うために。

シュウヘイはバイクを引っ張り出して椅子に股がった。

「ウェールズ、村のチビたちを頼む」

「君は？」

「ティファニアを助けに行く。どうも視界に映った奴…俺の知る人間らしい」

「なんだって！？」

ウェールズもこれには驚いた。このハルケギニアに、彼以外の地球の人間がいるのか？だとしたら、なぜテファを拐うのだろうか？

「だったら僕も！」

「ダメだ。この辺りは物取りや人拐いがおおい。エマは以前人拐いに奴隷として売られるところだったんだ。一人でも、頼れる奴に留守を任せたい」

「…」

シュウヘイの目は、ウェールズを信頼する眼差しだった。

「気を付けてくれ。きっと何か嫌な予感がする」

「ああ」

シュウヘイはサングラスをかけ（地球ではヘルメットを被ってたがハルケギニアではノーヘル）、バイクのエンジンを起動させた。

月の光が、バイクに刻まれた『Ｉｒｉｓ』の文字を照らす。

「行くぞ…『アイリス』」

シュウヘイのバイクは、どこかへと拐われたテファの元へ走り出した。

N8　怪獣使い－レイオニクス－

「ここは？」

テファはようやく目を覚ました。目覚めた場所は、自分の小屋のベッドではなく、地下牢のようだ。

（どこなの…もしかして…）

彼女はハルケギニアの人間の恐れているエルフの血を受け継いでいる。その証拠に、彼女の耳の先は尖っている。バレたら不味いので帽子を寝ている時以外は常に被っているのだ。だから、シュウヘイすらそのことにまだ気づいてない。自分の過去を話してないのに、彼女のことを聞き出すのは不相応だと思ったからだ。
自分がこのような牢に閉じ込められている理由…
まさか、自分がハーフエルフであることがバレたのか！？

（殺されるの…？いや…怖い…怖い…！）

牢の冷たい石畳の床のせいだけではない。体が恐怖で震えていく。嫌だ。死にたくない。子供たちをまだ放っておけない。

コツコツ…

誰かの足音が聞こえてきた。

「お目覚めかな？お嬢さん」

仮面の青年だった。まだサイトと会う前の、サイマだった。

「あ、あなたは？」

「ここの主の、仕事仲間と言っておこう。牢から出ろ。ここの主があんたに話があるそうだ」

（ティファニア…）

夜風を切り裂きながらバイクを走らせるシュウヘイ。エボルトラスターにもパルスブレイカーにも反応がないため、場所を割り当てられない。左目に映る彼女の視界を手がかりに、彼は走る。

不思議な気分だった。たった一人、縁と言えば同じ村に住む少女、自分を召喚した主、それくらいの関係だったはずなのに放っておけなかった。

だんだんフラッシュバックのように、テファの姿がだんだん別の少女の姿に変わる。

（アイリス…）

今自分の使っているバイクの名の元になった少女。シュウヘイの目から、そのアイリスとテファが重なって見えた。

ギリ…と歯をきしませた。

「では、俺はこれから仕事なので…」

サイマはテファを豪華な扉の前まで連れてくると、その場を後にした。

その扉は、彼女がドアノブに手を触れる前に開いた。

「君が、ティファニア嬢ですか。どうぞこちらへ…」

出迎えたのは、彼女の背筋を凍らせるほど冷たい笑みを浮かべる男だった。

「暇だな…」

とある屋敷の門に、二人組の見張りが暇そうに門に寄りかかっていた。

「ったく、ここは俺たちレコンキスタにとって重要な施設とか言ってた割りには…」

「対して何もないよな。大した物品も運ばれてこねえ。運ばれたのは妙な小僧に運ばれた女か…」

「女かあ…俺も結婚したいわ～…」

彼らの下らない無駄話は、そこで終止符を打つこととなった。

「おい、なんか聞こえないか？」

「は？」

ブロロロ…

なんだろう？虫…いや、何か猪といった動物だろうか？

「なんだ…光る猪なんかいるのか？」

一点の光が、彼らに近づいていく。いや、それは猪などではなかった。

「退け！」

バイクのライト。それが光る猪の正体だった。シュウヘイのバイク

は軽々と見張りの兵二人を飛び越えた。

「し…侵入者だ！」

「ずいぶん警戒しておられる」

男はソファーにテファを座らせ、自分も反対側の椅子に座った。テファは先程から男に対して睨みを効かせている。

「エルフの血を引く私を、殺すんですか？」

「殺す？」

男はそれを聞いた途端、クスクスと笑いだした。

「とんでもない。俺はあなたを殺す気など毛頭ない。ただ、あなたの力とあなたの使い魔について知らねばならないことを伝えたいだけですよ。ただ、あの村ではできぬ故に無理やりにでも連れてくる必要があった」

彼は気軽な口調で話しながらコーヒーをカップに注ぎ、テファの方に置いた。

「コーヒー、という飲み物です。この星にはないですが…」

毒味するように男が飲む。対するテファは飲む気になれなかった。

「さて、本題に入りましょうか。あなたは魔法が使えますね？」

「ええ…そうですが…」

「それも忘却の魔法…」

そこまで言うと、彼女は言葉を失った。なぜ、忘却の魔法をこんな見ず知らずの男が知ってるのだ？

「知ってるも何も、ハルケギニアの四大系統に属さない『虚無』…あなたはそれを持っている」

虚無…それはこの世界で神格的存在である始祖ブリミルがしようしたとされる伝説の『零』番目の系統。テファも聞いたことがある。だが、信じられなかった。自分がその始祖と同じ、虚無の担い手！？

「そんなの知りません！私を家に帰してください！」

「知らない、じゃないんですよ。何せその虚無は、あなたの使い魔にも影響を及ぼしている」

指をパチンと鳴らすと、突然彼女の前に絵…いや、写真映像が浮かび上がった。

「シュウヘイ…さん？」

「そう、あなたの使い魔」

くくっ…と笑い、男は続けた。

「始祖ブリミルには四人の使い魔がいました」
あらゆる武器を使いこなす神の盾
ガンダールヴ

幻獣を操る神の笛
ヴィンダールヴ

高レベルのマジックアイテムを使い、膨大なる知識を持つ神の頭脳
ミョズニトニルン

「そしてあなたの使い魔黒崎シュウヘイが持つルーン…それは記すことさえはばかられた最強にして最悪の使い魔、『リーヴスラシル』のものだ！」

「リーヴ…スラシル？」

「あなたも歌で歌うでしょう？ストーカーみたいで非常に申し訳ないが、あなたのことは前から調べさせてもらった」

歌…確かに彼女は歌で始祖ブリミルの使い魔たちを記した歌を、ハープで奏でながら歌う。ガンダールヴからミョズニトニルンまでの歌詞がある。が…

「リーヴスラシルだけ記されてなかった。『奴は』…ブリミルはそれほど恐れてたようだ…いつかリーヴスラシルが現れることをね。だが、あなたは呼び出してしまった。遥か昔、この世界を荒らした悪魔をね…」

「シュウヘイさんが…悪魔って言ってるんですか？」

信じない。信じられない。彼は、表情こそ変えることはなかったが自分に気軽に接してくれた、初めてのお友達だった。悪魔のはずがない。

「なら、彼はなぜ自らの過去を隠すのか？」

男の歪んだ笑みが、より深く歪んでいく。

「彼は自分の残虐な本性を隠していたとしたら、あなたはどうする？彼を、受け入れられるのか？」

「……」

「ん？」

男は何かに気付き、壁掛けの方を向いて指を鳴らした。すると、壁掛けの絵が消え、代わりに別の絵…いや映像が映し出された。

「どうやらあなたを助けに来たようだ」

映像には、屋敷の中を歩くシュウヘイの姿があった。

「シュウヘイさん！？」

来てくれた…それだけで嬉しかった。テファの感激の涙が彼女の頬

を濡らした。やはり、ここまでしてくれる彼が、悪魔などであるはずがない。

「悪魔じゃないなんて言ってるような顔をされてるな。だが正確に言えは、彼は『まだ気づいてない』と言える。リーヴスラシルとしての本能に…」

そのシュウヘイは、とある部屋に差し掛かった。

「ここじゃないか…どこに行った?」

とその時、どこからか紫色の光線が放たれ、シュウヘイはとっさに反応して避けた。

「さっすが~。まっ、これくらい避けてもらわないとオイラも困っちゃうな」

その子供みたいな声が、天井から降りてきた。

「…ガキ?」

見るからに、まだ何歳も年下の少年だった。

「もしかして、オイラの拐った姉ちゃんの彼氏さん?」

こんな子供にウェールズが出し抜かれるっは想像もつかなかった。
どうやらただの子供ではないらしい。

「…ガキは毎度毎度そんな話をしたがる。耳にタコだ。その姉ちゃんとやらはどこだ?」

「今依頼主のとこで話してるんじゃないかな?」

「ならばもう一つ、なぜあいつを拐った?」

何か恨みでもあるのか?だが、その想像は見事に外れた。

「そうだね…強い奴と戦いたいってだけかな?依頼主から聞いたんだけど、あんた強いんでしょ?」

一瞬シュウヘイは耳を疑った。

「それだけか?」

「オイラは光の国出身だからさ、強い奴と戦って強くなるんだ。悪い奴どんどんやっつけてくんだ」

シュウヘイはその少年の発言に、少し異常さを感じた。いや、幼さ故の間違いと言った方が正しいのかもしれない。

「強い奴と戦うだけが強くなる方法じゃない」

「そうなの?」

「そうだ。何の理由もなく戦う奴が、たとえ勝っても何の意味もな

い」

「じゃああんたは、何で戦うの？」

「俺か？」

一瞬口を閉ざしたが、彼はしばしの沈黙の末、こう答えた。

「償いだ」

「償い？」

少年はなんのこっちゃと首を傾げた。

「さて、話はここまでとしようか。光の国だがなんだが知らんが、お前に構ってる暇はない。そこを退け」

脅しを兼ねて、彼はブラストショットを少年に向けた。とっととテファを助けねば、彼女が何されるかわかったことじゃない。早期救出を要する状況だ。

「悪いけど、簡単に退くわけにはいかないよ。オイラがここに立ってる意味無くしちゃうもの」

少年は服の袖を捲ると、腕時計のように巻き付けていたものが姿を現した。

シェフィールドが持っていたものと同じ、銀と赤のカラーリングのバトルナイザーだった。

「なんだそれは？」

「バトルナイザー、怪獣を操る機械さ」

そのバトルナイザーを掲げると、バトルナイザーから電子音が鳴り出した。

【バトルナイザー、モンスロード！】

すると、光で形成されたカードがバトルナイザーから飛び出し、等身大ながらもとてもゴツい体つきをした怪物となって床に降りてきた。

「ビーストを、呼び出しただと…！？」

「ビースト？あ～確かあんたはビーストが主に発生する世界から来たみたいだね。なら『怪獣』って呼称はあんまし聞いてないでしょ。まっ、とにかく驚いたんじゃない？オイラがただのガキじゃないって。ちなみにオイラ、１４だよ」

「グルルルル…」

そのバトルナイザーから飛び出した怪獣、『超古代怪獣ゴルザ』はシュウヘイを、獲物を狙う百獣の王のような目で見ている。

「ちっ、やるしかなさそうだな」

ブラストショットをしまい、エボルトラスターを取り出した。

「そう言えば、あんたの名前聞いてなかった。何て言うの？

ちなみにオイラはグレイ、光の国出身のウルトラマンで『レイオニ

クス』って言う怪獣使い。よろしくね！」

「ウルトラマン…だと？」

こんなガキが…ウルトラマン？シュウヘイはまたしても耳を疑った。
しかも怪獣を操るレイオニクスなんて呼称は聞いたことない。

「ほら、自己紹介してよ。ウルトラマンとしての名前も教えてよ」

「…」

なんだかさっきからこのチビッコのペースに飲まれてる気がする。
継夢にもここまで質問攻めにあったことはないから、面倒臭さが出てきた。
ウルトラマンとしての名前を教えろなんて言われても、シュウヘイの変身するウルトラマンはこの時、ただ単に『ウルトラマン』としか呼ばれてない。
なんと答えるべきか…って何真面目に答えようとしてるんだ俺は…。
いや、思い付いた。
この時、ようやく彼のウルトラマンとしての名前が誕生した。
絆…ネクサス。孤門がビースト発生の元凶と戦った時に言った言葉。

「黒崎シュウヘイ、ウルトラマン『ネクサス』だ」

エボルトラスターを引き抜き、シュウヘイは等身大のウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

「かっこいいね！んじゃ、始めよっか！」

「…悪いが、すぐ終わらせてやろう」

すぐジュネッストリニティにチェンジ、ゴルザに向かってネクサスは突出した。

「デイ！」

「ガアア！」

戦士と怪物は互いを押し出そうと力を込め合った。

「シェア！ハッ！」

ネクサスはエルボーを食らわせたが、ゴルザは耐え抜いてジャブを放つ。

〈シュトロームソード〉

バック転で避け、ネクサスは光の剣を作り、縦に振り下ろすと同時に切り裂く風の真空波を放った。

〈覇風撃！〉

「消し飛べ！」

「ギゥ！？」

真空を喰らうゴルザは大きく仰け反った。

「おお！やっる～。でも…」

ゴルザも額から細かい光弾を撃ってきた。

「シ！デイ！」

その光弾を剣で弾き飛ばし、ゴルザに斬りかかろうとした。が…体の動きが止まってしまった。

（何！？）

足が氷っているではないか。そのせいで足を動かすことができない。

（まさか…）

たった今、グレイとゴルザ以外の別の怪物の存在を確認した。天井辺りで浮いてるそれを見たところ、氷属性の竜のようだ。

「そうそう、もう一匹持ってるの言ってなかったね。『超古代竜メルバ』。同じ個体はいるけど、こいつは珍しく氷を作れるんだ」

「ちっ…」

ネクサスは必死に足を拘束する氷を砕こうとするが、ゴルザの拳とメルバの目から放つ光弾が厄介だった。

「グワ…っ！」

〈パーティクルフェザー！〉

なんとか剣を振り回して二体を近づけさせない内に、足の氷を光弾

で砕いた。

ネクサスは一度ゴルザを突き放し、ラッシュパンチを繰り出すが、この攻撃にゴルザはびくともしなかった。
やり返すようにゴルザはネクサスのこめかみをぶん殴る。

「っ…頑丈な奴だ…」

痛むこめかみを押さえながらネクサスは立ち上がった。

「ゴルザはまるっきりパワータイプだからね」

「…」
ネクサスはいざ身構えるが、今の一発が重かったせいか、少しふらついている。

「な～にやってんのさ？立ち上がってよ。待ってるから♪」

おどけた笑みでグレイは言った。しかも言葉通りゴルザとメルバは止まっている。

（無邪気だ…なめてるのか？）

ネクサスはグレイの能天気な態度に怒るべきかそれとも呆れるべきかわからなくなった。

（やはり子供か…）

とにかく、こんな子供にいつまでも構ってられない。まずはゴルザに狙いをつけ、一旦剣を消して勝負に望む。が、ゴルザから受けた

こめかみの一撃の痛みで動きが少し鈍くなっていた。

「カアアア！」

〈メルバニックレイ！〉

「グオオオ！」

〈アイアンテール！〉

メルバの光弾とゴルザの尾を回して当てた一撃が、ネクサスをさらに疲労させる。

（さっきまでのダメージの蓄積がマイナスか…いや…）

今、彼女はどうなってるか？今は彼女の視界が見えなくなってるが、だからと言って安心できない。それに、今のシュウヘイにはテファに対してある思いがある。

（アイリスの二の舞にさせてなるものか…！）

「兄ちゃん楽しかったよ。でも、そろそろ決めるよ」

すると、グレイの姿が、今のネクサスと同様銀色に光る肉体へと姿を変えた。

グレイのウルトラマン形態『グレイモン』。

（あれが、あのガキの正体か）

同時にゴルザの額に、見るからにかなりの威力と見てとれる光が灯

っていく。

「…」

ネクサスは何かを企む眼差しを見せ、突如光弾を床に撃った。

〈パーティクルフェザー〉

一発だけでなく、さらに何発も撃ち、もくもくと煙が舞い上がる。
ネクサスもその煙に紛れ姿を消した。

「姿を消すつもりのようだけど…甘いね」

グレイモンの眼が、光を反射する鏡のように光る。

〈透視能力〉

その目はいかなる闇に潜む者の姿すら見破る。
その目は、煙に隠れたネクサスの姿をとらえた!

「そこだ!」

〈超音波光線!〉

ゴルザの額から破壊力抜群の必殺光線が放たれ、煙に紛れるネクサスに直撃した。

したはずだった…

「え!?」

攻撃を受けたネクサスの姿が、跡形もなく消滅した。

「ふ…当たりだ。小僧」

「！」

気づいたときには、ゴルザの攻撃を受けたはずのネクサスがシュトロームソードを向けて背後に立っていたのだ。

「なんで！？」

「『双夢幻』…風の魔法『偏在』を元に開発した分身技だ。独自に動くこともできる。完全じゃないがな」

元とした偏在の魔法の持ち主、これも覇風撃の時と同様ウェールズから学習させてもらったものだ。

この敵の技の習得能力は、最近胸に刻まれたルーンによるものだとわかった。できる範囲はあるが、シュウヘイはこの力で新たな技をその場で身につけることができるようになった。

「さて、お前には一度待ってもらった借りがあったな。そのバトルナイザーとやらを置いて、気が変わらない撃ちに去れ」

「う…」

グレイモンは元の姿に戻り怪獣たちをバトルナイザーに戻すと、子供のように泣きわめき出した。バトルナイザーも捨てるように置いていった。

「うわあああああ！！！！！！手加減しろよおおおこの反則野郎うううう！！」

ネクサスも変身を一度解くと、その顔は泣き出した迷子の子猫に困る犬のお巡りさんのようになった。

「はあ…継夢以上に痛いな…」

と呟いた時、床に置いてかれたはずのバトルナイザーが突然ボルターガイストのように動き出した。いや、そうではなく、目に見えないほど細いピアノ線でバトルナイザーが巻き付けられ、グレイがそれを引っ張っていた。しかもシュウヘイにアカンベーまで。先ほどの泣き顔は芝居だったようだ。

「オイラ負けてねーもん！とりあえず『あんたと戦う』って任務終わったし、帰るね！また勝負してよ！」

バトルナイザーを回収すると、グレイはそのまま立ち去ってしまった。

（いい役者になれるな…）

と一息着いた時だった。

『見事だな…ウルトラマンネクサス』

「！」

どこからか誰かの声が聞こえてきた。

『いや、こう言っておいてもよかったか？ナイトレイダーＡユニット、黒崎シュウヘイ隊員』

シュウヘイは言葉を失うほど絶句した。ウエストウッド村にいる子供たちやウェールズにテファ、そしてマチルダ以外に話した記憶などないのに、この声の主は知っている。

「お前は誰だ？それに、ティファニアはどこだ？」

『安心したまえ。彼女は今丁重にもてなしてるとも』

コツコツ…と廊下から響く足音と共に、部屋の扉が開かれた。

シュウヘイはその入ってきた男の姿を見た瞬間、驚愕せざるを得ないものを目にした。

たった一度だが、地球で会ったことがある。自分より前に組織にいた男にして裏切り者…そして…

すべての元凶とも言える男。

「石堀…光彦隊員！？」

「また会えたな、後輩」

N9　石堀ーネクロスー

「数ヶ月ぶりだな黒崎、いや…今は六番目か」

「なぜ…生きてる?それにティファニアはどこだ?」

ブラストショットを向けて石堀を睨むシュウヘイ。

なぜ生きてる?と言ったか…それは石堀が以前闇の巨人としての正体を現し、シュウヘイのいた地球を滅ぼそうとしたが、先代デュナミストである孤門によって倒され、死んだはずだった。だが、何事もなかったように目の前に立っている。

「孤門が倒したはず…か?もしもの時を考えないほど俺はバカではない。最悪の状況も考え、俺は自らのクローンを作っていたのさ。もし真の姿を手にした俺が敗れた時、そのクローンが強制的に起動する…」

まだ彼が真の姿を取り戻す前に、あらかじめ分身たるクローンを培養していたのだ。

「記憶も何不自由なく持っている。真の姿を取り戻してすぐ無様に消されたのは、正直屈辱だったな。まあ、今となっては過ぎたこと…せっかくこうして会えたんだ。お前の今の力を見ておきたい」

「戦え…と言いたいのか?」

「そうだ。さっきの小僧では、まだ調べがついたとは言えない。直接お前と戦うことにしたのさ」

さっきのグレイはシュウヘイの力を見ておくために雇ったらしい。
が、それだけでは不服のようだ。
石堀は戦いを促すように手招きする。が、シュウヘイにはそんな気はなかった。この男は、あまりにも強すぎる。いますぐとんずらしてテファを探して逃げた方が得策だ。が、石堀が指をパチンと鳴らした瞬間、その部屋にあるすべての扉が鉄板で閉じられてしまった。

「逃げようなんて考えは起こさないことだ。少なくとも俺を退かねばあの娘は取り戻せない」

「ちっ…」

「俺もまだ力をある程度取り戻したばかりだからな。リハビリというものは必要だ」

そう言う彼は、懐からあるものを取り出した。
それは、エボルトラスターだった。しかしシュウヘイが持っているものとは対照的に真っ黒に染まっている。

「ブラックトラスター…とでも言おうか。これくらいまでは取り戻した。ほら、お前も早く取り出せよ」

「…」

言われるがまま、シュウヘイは白のエボルトラスターを懐から取り出した。

瞬間、二人の姿は消えた。いや…消えたのではない。すでに変身を完了し、目に見えぬ速さで何度もぶつかり合ってるのだ。

シュウヘイの変身したウルトラマンネクサス・ジュネッストリニティ。
石堀の変身した、ネクサスのジュネッス状態を模した真っ黒の闇の巨人『ダークネクロス』。

「フッ！セア！」

「ムン！ラア！」

光と闇の、二体のネクサスが、赤と紫の残像を残しながら部屋の中で何度もぶつかり合う。

〈クロスレイ・シュトローム！〉
〈ダークレイ・ジャビローム！〉

次にぶつかったのはネクサスの光線とネクロスの必殺光弾。その衝撃は部屋の壁飾りを引き剥がし、壁を突き破り、そして目映い光が部屋を照らす。

「ハアアアア…！」
「ヌウウウウウ…！」

しばらくして、互いの必殺技は凄まじい爆発音と共に弾け飛んだ。

「グゥ…！」
「グォ…！」

ズサササ！と二人は大きすぎる衝撃で足を引きずらせながらのけ反った。

「ふふ…やるな。あの孤門たちから手解きもされてるな。意志も、戦い方も」

「ごちゃごちゃとお喋りな先輩だ…フン！」

ネクサスの唸りをあげた拳がネクロスを思い切りぶん殴った。

「っ…！」

戦うこととなった以上、この男は倒さねばならない。

（孤門たちの取り逃がした敵は、俺の手で切り捨てるまでだ）

壁に突っ込んだネクロスに向けて身構えた。

「立て。この程度で終わるほどヤワじゃないはずだ」

「ふ…もちろんだ」

ネクロスは立ち上がり、ネクサスの方に飛ぶ。パンチを放つが、ネクサスは床を蹴って回避した。しかしネクロスも追い付き、蹴りを放ってきた。ネクサスはそれを床の上を回転して避けるも、ネクロスは天井を蹴ってネクサスに飛びかかってきた。

ネクサスは身を翻し、ネクロスの脇腹に手刀をぶつける。

「ハッ！」

「グッ…」

〈シュトロームソード〉

怯むネクロスに向け、ネクサスは光の剣を振り上げた。が、その瞬間ネクロスは姿を消した。

「何…！」

一体どこへ消えたのか。辺りを見回すが、姿が見えない。

「どこを見ている！」

「グフッ！」

背後からネクロスは膝蹴りでネクサスを蹴飛ばした。

「…っ！」

骨身にしみる一発を喰らい、ネクサスはふらつく。

「マッハムーヴか…」

マッハムーヴ、ネクサスが使う高速移動技。ネクロスもそれを使って一時的に姿わ消すことができたようだ。

「まだ戦いに集中しきれてないようだな。さっきの技、空気の流れを読みさえすれば俺の位置を掴めたはず。あの娘がそんなに心配か？」

「…」

ネクサスは何も言わなかった。

「図星か…ならば」

ネクロスが指をパチンとならすと、ひとつだけ残った絵画がモニターとなって映し出された。

「ティファニア！？」

テファがモニターに映されている。その場所は先ほど石堀と会談していた部屋。しかし、彼女の部屋の出入口も鉄板によって塞がれてしまっている。

『出してください！』

部屋の中で彼女は一人、扉を叩いていた。

「なぜ、あいつを狙った？」

「狙った理由か？正確にはお前も狙いだった」

「何？」

そこからネクロスは簡潔に説明した。
始祖ブリミルのこと。彼の系統である虚無の力。彼女がそれを受け継ぎ、自分は始祖の使い魔の中で最も最悪な使い魔の力を手にしてしまったこと。

「その虚無とやらを狙って…俺たちを」

「ご名答」

ネクサスはそれを聞いてだんだん怒り、身を震わせる。

「下らない理由でイカれた奴と話をするほど…」

両腕を十字に組み、必殺光線を放った。

「お人好しじゃない！」

〈オーバークロスレイ・シュトローム！〉

〈ダークシールド〉

白く輝く光線がネクロスを襲うも、紫色に光る盾を作り出して防いでしまう。

「今のは、単調すぎるんじゃないか？そんなに気にさわったか？」

「っ…」

「それに、あの娘に対してかなり入れ込んだ思いがあるのかな？例えば…『俺の手で操られた』かつての恋人に似ていたとか？」

……

「な…んだと？」

しばしの沈黙の後、ネクサスはようやく口を開いた。

一年前…

「…」

当時のシュウヘイは誰にも心を開かず、誰も信用しようとしたなかった。
それは１２歳まで両親から受け続けた虐待と、それをネタに学校の連中に嫌がらせを受けていたからだ。
その両親は２００４年に表の世界で初めて飛来したビースト『ザ・ワン』によって死亡。ようやく地獄から解放されたと思いきや、全く無関係な連中に遺族の財産を食いあげられてしまい、まともな生活ができなくなった。
ここまでは以前に説明した通りだ。
その後の、彼が行き着いた道は…

ドン！

「ぎゃあああ！」

暗殺者としての道だった。ある暴力団に介入した彼は手に入れた銃で、自分に対して多大な嫌がらせをした同級生を殺害、そして暴力団のリーダーから請け負った任務で、相手側の幹部を次々と暗殺した。証拠すら残さず完璧な状態でこなす彼は、よく任務で返り血を

浴びることから、『紅い悪魔』と呼ばれた。

そんな荒れた生活を送っていた１６歳頃の彼に、一人の少女が話しかけてきた。

話しかけられた場所は、大きな川の土手。そこで寝ていた彼に話しかけてきたのが、アイリスだった。

「ずっとここで寝てるよね。何してるの？」

容姿は髪と目の色を除けば偶然にもテファにそっくりだった。『アイリス』と言うのは本名ではなく、『愛梨』という本名と、よく花を育て、実家の庭にアイリスという名の花が植えられていることからできたあだ名である。

「ねえ、なんとか言ってよ」

「……」

シュウヘイは寝返りを移して彼女の言葉を無視した。

「私は愛梨っていうの。よくアイリスって外人みたいなあだ名で言われるけど」

「俺に話しかけるな」

シュウヘイはムクッと起き上がり、どこかへ歩き去った。とはいっても、暴力団事務所しか行き先はない。

しかし、翌日も同じように川岸の草原で寝ていると、またアイリス

が話しかけてきた。

「やっぱりここにいた。ここ通学路だからよく見かけるの」

「…ジロジロ見るな」

「ねえ、名前くらい教えてよ。あなたと話したい」

「いいから俺に関わるんじゃない」

俺に関われば、ロクなことなどない。俺の手は血まみれだ。そうシュウヘイは思っていた。
それでも、彼女はシュウヘイの元を去ろうとしなかった。

「だって、私みたいに一人でいるから…」

「？」

アイリスはそれから自身の生活を話した。彼女の高校は優秀な生徒が通う名門校だが、将来のことや受験のことばかりに目が行き過ぎてるため、友達関係すらご法度などと思われてるほど嫌な環境下の学校生活を送っていた。

「ちょっと、一緒に出掛けようよ」

「は？」

「いいから」

彼女は無理やりシュウヘイの腕を引っ張りだした。

テファと違うのは、アイリスの方が積極的な一面があることだと後にシュウヘイは語っている。

しばらくしてやって来たのは、なぜか動物園。

「ほら、あのお猿さんかわいいよ！」

彼女のような人にしつこくされるとどうも相手のペースに飲まれやすい。（例外もいると思うが）

「動物の家族って、和むよね。かわいいし」

家族、彼にとっては憎しみの繋がりでしかない、ただの肉の塊でしかなかった。だから、アイリスの「家族」という言葉には不快感を感じた。

「あ…ごめん。言ったら不味いことだった？」

「別に…」

それからアイリスのペースで二人は町などを出歩くようになった。ほぼ毎日それが日課にもなった。そして、氷のように固くて冷たかったシュウヘイの心もだんだん溶け、彼女に対して特別な感情を抱くようにもなった。

その最中に、彼女は保育園でアルバイトを行うこともあり、彼もそれの付き添いで来ることもあった。その時に、偶然保育園に立ち寄ってきた継夢と出会った。どういう訳か、関わる内に継夢にまでなつかれた。

それでも、シュウヘイは悪く思うことはなかった。

むしろこういう日々をずっと過ごしたいと思っていた。

だが、暗殺者としては、許されることではない。

彼女たちと関わってる間も暗殺者として働いていた。

「いいか黒崎。貴様は機械だ。余計な感情を持つな。最近のお前はどこか感情的すぎる」

暴力団のリーダーからも言われ、彼は考え直した。

血にまみれた自分が、彼女たちに関わる資格などない。やはり闇に生きるのが自分の道だと思った。

それからしばらく、会いに来た彼女にもまともに口をきかなくなった。

「ずっと口きいてくれないね。どうして？」

「…」

いつもの川岸で話しかけてきたアイリスにシュウヘイは何も答えず、その場を立ち去り始めた。

「お願いだから答えてよシュウ！それとも私のことが嫌いになったの！？」

（違う…）

違う。そんなことではない。

俺の手も体も、お前に触れてはならないほど血まみれだ。

俺とお前じゃ、住む世界が違いすぎる。

カッコ悪くて言えない。
それから二人のすれ違いは、みるみる内に浮き彫りになった。

そしてある日、暴力団の活動資金の調達のために、彼は任務で巨額の資金を持つとある男を暗殺した。
それが彼をさらなる地獄へと叩き落とすこととなった。

その殺した男が、アイリスの兄だった。

しかも、アイリスはシュウヘイから見放されたショックと兄の死に耐えきれなくなり、自殺。

そして…

「なんで兄さんを殺したの……なんで……」

彼女は蘇り、シュウヘイの前に姿を現した。
人の姿をしたビースト『ビーストヒューマン』となって。

「うわあああ！」
「くく…来るな…この化け物があああああ！！」

彼女は怪物のようにおぞましくなった右手でシュウヘイを除く暴力団の組員たちを皆殺しにした。

「アイリス…なのか？」

「なんで……？なんで兄さんを殺したの…」

「…」

「答えてよ！」

憎しみと嘆きに満ちた眼差しで彼女はシュウヘイに訴える。
何も答えぬシュウヘイに憤慨したアイリスは鋭い爪でシュウヘイの体を傷つけていく。

「っ…」

対するシュウヘイは無抵抗だった。ただ彼女の暴力を立て続けに受けているだけ、沈黙を貫いた。

「なんで何も答えないの？」

「……」

「なんとか言ってよバカあああああ！！！！」

ついに彼女は爪を振り上げ、シュウヘイに止めの一撃を刺そうとした。
彼女に殺されるなら本望、そう思っていた彼は静かに目を閉じた。

が、死ななかった。
彼女の凶刃が彼の眼前で止まっていた。

彼女を見やると、シュウヘイは驚愕の表情を浮かべた。

泣いていた。化け物となってなお、彼女には思いを寄せていた彼を殺す覚悟がなかった。

「……」

「……」

シュウヘイは理解した。

もう、楽になりたいのだ。化け物になってでも兄の敵を討とうとしたが、その敵への愛情のせいで、殺すことができず、かえって死よりも辛い苦痛を味わっていた。

「…そうか…お前の望みが…それだというのなら…」

シュウヘイは覚悟を決め、彼女の胸元を撃った。

床に崩れ落ちる彼女を抱きしめ、返り血を浴びた彼女の顔を涙で濡らした。

「……」

「泣いてるの…？」

力尽きかけるアイリスの言葉に、シュウヘイは何も答えない。

「また無言……そういうの嫌い…って……言ったでしょ……」

「……悪かったな」

「……私だって…謝らないと……」

自分の醜くなった腕を見つめ、苦笑した。

「化け物……になっ…てまであなたを……殺そうなんて…仇を討とうなんて……バカだよね……」

「バカは俺だ……お前を…捨てた……」

自分が血濡れた存在だからって突き放したりしなければ、彼女はこんな無様な姿を自分に晒すことなどなかった。こんな可哀想すぎる死に方などしなかった。

「アイリス……」

「なに…？」

「……好きだ…」

醜くなった彼女の手を握って言った。

「…遅すぎ……でも……嬉しい…な…」

彼女の体が、氷のように冷たくなってくる。

「シュウ……さよなら…」

一筋の涙と共に、彼女は動かなくなった。

「アイリス？」

彼女を揺り動かすが、もう動いてくれなかった。二度と…

「アイリスううううううう！！！！！！！！」

ちょうどそこに、四人の紺と黒の服を来た集団が現れた。
当時の弧門らナイトレイダーAユニット。ビーストヒューマンとなったアイリスの振動波を察知して来たのだ。

そんな悲しき形で、彼は弧門たちと出会い、優れた身体能力を買われ、ナイトレイダーへと入隊することとなった。

時を戻し…

「あいつがビーストになったのは…あんたがけしかけたからだったのか？」

「面白かったな。お前たちの悲劇の主人公とヒロインごっこは」

ブチブチブチ…

もし人の姿だったら、今の彼の顔は怒りのあまり血管が膨れ上がり、しまいには破裂していたかもしれない。

その怒りに呼応するように彼の胸のルーンが赤く輝きだした。

「貴様……！」

（ふふ…そうだ。もっと怒れ。憎め）

対するネクロスは、まるでこれを待ち望んでいたように小さく笑った。

ネクサスの、シュウヘイの怒りは、ルーンに反応し、彼に大きな力を与えた。

「ヌアアアアアアアアアア！！！！！！」

荒くもあったが、先程よりもパンチにキレが出ている。そのラッシュパンチはネクロスの体をボコボコに痛め付けた。

「グ…」

ネクロスも殴られるのを好むドMではない。その拳の乱撃を見極め、かわしていく。

（これは…だんだん『出て』きているな）

「ハアアアア！」

凄まじい拳圧でネクロスを突き飛ばした。

「っ…やるな…ならばこれはどうだ？」

〈ダークレイ・シュトローム！〉

ネクロスは逆Ｌ字型に両腕を組み、必殺の暗黒光線をネクサスに向けて放った。

しかし、光線を喰らう寸でのところでネクサスの姿は消えた。

そしてネクロスのすぐ真後ろに立ち、拳に溜め込んだ膨大なエネルギーを、床を殴ると同時に放出した。

〈滅閃光！〉

「喰らえええ！！」

「グォ…！」

ネクロスはその黒い波動で大きく吹っ飛ばされ、壁や床、天井も今の衝撃で崩れだした。

「きゃああ！」

「！」

天井からテファが落ちてきた。それに気づいたネクサスはシュウヘイの姿に戻り、テファが床に激突する前に彼女を受け止めた。

「ハハハハ…ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！！」

ネクロスは変身を解いて元の石堀の姿に戻ると、歪んだ高笑いを上げた。

「それがお前の、悪魔の力だ。解放すれば無敵の存在にもなりうるだろう。だがそのリーヴスラシルのルーンを抱えていれば、お前はいずれお前でなくなる。せいぜい気を付けるんだな」

「ごちゃごちゃと…あんたは今すぐここで叩き斬ってやる！」

〈シュトロームソード〉

テファを下ろし、光の剣を石堀に向け、彼に斬りかかった。が、石堀は軽くそれを避けた。

「慌てるなよ。お前には特別にデスゲームを仕掛けてやるから、楽しみにしていろ。ちなみに、『ひとつめ』はもう始まってるがな」

そう言い終えると、石堀は黒い霧となってその場から消え去った。

「ちっ…逃がしたか」

シュウヘイは彼女の方へ駆け寄った。

「ティファニア、大丈夫か？」

「うん…」

彼女は相当不安だったのか、シュウヘイの胸に顔を埋めた。

「怖かった…のか？」

「うん…」

しかし、一時の安息もつかの間、多くの兵士たちが彼らの前に押し寄せてきた。レコンキスタ兵たちだ。

「侵入者だ！捕まえろ！」

兵士たちは二人に向かって迫り来るが、シュウヘイは反射的に、石堀との戦いでも使った黒い衝撃波を放った。

〈滅閃光！〉

「はっ！」

「「「うわあああ！」」」

「なな…なんだ今のは！？」

「…！」

シュウヘイ本人も驚いた。どうもウルトラマンとなった時の技も使えると言えば使うことができたのだ。これもまたリーヴスラシルの力とやらなのか？

「逃げるぞ」

「え、きゃ！」

彼女を抱き抱え、玄関ホールに捨て置いてたバイクに乗ると、二人は急いで村に戻っていった。

しかし、思った以上にレコンキスタ兵の追っ手は多く、竜騎士まで使ってきたのだ。その速度は、全速力でもなかなか振り切れにくい

二人はようやく村にたどり着いた。

「二人とも、無事だったか！」

真っ先に出迎えたのはウェールズだった。子供たちも先程までのテファの失踪に動揺したためか、夜間中にも関わらず起きていた。

「みんな、急いでティファニアの小屋に集合しろ！レコンキスタ兵がここに来る！」

「え！？」

「呆けるなウェールズ！早くしろ！」

「わ、わかった！」

シュウヘイの指示で、村の子供たちは無理やりながらもテファの小屋の中に集められた。

最後にウェールズとテファが小屋に入った瞬間、村はレコンキスタ兵によって囲まれてしまった。

「無駄な抵抗はよせ！あの女と貴様さえこちらにくれば何もしない」

石堀がわざわざ見逃したのに自分とテファを狙っている。彼らは知らなかったが、シェフィールドの計らいによるものだった。

虚無の担い手である彼女とその使い魔を独断で捕獲しようと影で目論んでいたのだ。

「…」

一人外に出ていたシュウヘイ。

「シュウヘイさん…」

テファはシュウヘイを不安げに見ていた。一体彼はどうするつもりなのだ？

「そういう話には乗れないな」

軽く投降を拒否した。

「愚かな平民が…なぜシェフィールド殿が貴様らを狙うかわからんが…いいだろう！かかれ！」

ついに強行に出るレコンキスタ兵だったが、その瞬間赤い光がその周囲を包み込んだ。

光が晴れた場所には、小屋ごとシュウヘイたちの姿はなかった。

「バカな…小屋ごと消えただと！？」

「周りを散策しろ！なんとしても見つけるのだ！」

「…あれ？」

いつの間にか、小屋の外は森ではなくなっていた。
昇ってきた朝日が、窓を通して差し込んでくる。そして妙に滞空間がある。

「まさか…」

ウェールズは窓の外を見ると、銀色の巨大な手が小屋を抱えている。
シュウヘイの変身したネクサスが、テファたちを乗せた小屋を運んでいたのだ。

「あの、シュウヘイさんは？どこに行ったんです！？」

最悪の事態を想像していたのか、テファは姿を見せないシュウヘイの居所をウェールズに尋ねる。

「彼なら、僕たちを運んでいる」

落ち着き、はにかんだ笑顔を見せてウェールズは答えた。

運んでいる？

まさかと思った彼女は窓の外を見ると、ネクサスの朝日で銀色に光

るマスクと白く光る目が、彼女の目に映った。

やっと気づいた。

彼の正体が、ウルトラマンだと。

自然と涙が溢れた。

今まで時たま姿を消していたのは、きっと一人で必死にビーストと戦ってくれていたのだ。自分たちの平穏を保つために。

彼女の胸の内に、彼への思いが溢れていった。

（ありがとう…『シュウ』）

なぜかそう呼びたくなった。心の中で彼女はシュウヘイに感謝した。

小屋を運んで空を行くネクサスは、トリステインの方角へと飛んで行った。

彼がその日ウルトラマンだとやっと気づきました。

でも、後に名前を知ったんですけど、あの石堀って人から聞いた話

がなぜか引っ掛かってました。
私が始祖と同じ虚無の担い手で、彼は悪魔の使い魔…

悪魔…それを聞く度彼に対して不安を覚えるようになったのです。

ＢＹティファニア

N９　石堀ー ネクロスー （後書き）

この次辺りでサイトと出会います。（Ｚ５参照）
ほぼオリジナルに近い話はなんか難しいですね…未熟さを感じます…

次はようやくサイトが活躍します。でもいろんな意味で大変なことに…

EX1　プレイボーイサイト？

アンリエッタ救出から三日後のことだった。

今の時期は夏期休暇のため、生徒の大半は帰省している。

「ふう～いい湯でした」

サイトはその夜も風呂から上がり、ルイズの部屋へと戻って行く時である。

その途中、広場に置かれた小さな椅子とテーブルを目にし、その上に何か飲み物の入ったグラスが置かれている。

何かのジュースだろうか？サイトはそのグラスを手にとり、それを飲んでみた。勝手な真似を…

風呂上がりだったためか、体を冷ましたくなったのだ。

「あ、いけるんじゃないか？っといけね。早く戻らねえとルイズがうるさいよな」

そう言ってその場を後にした。

それから数分、ルイズの同級生であるモンモランシーがそのテーブルに来たとたん、声をあげた。

「あ〝あああ！私の惚れ…って！」

思わずボロを出すところだった…とモンモランシーは焦って口を閉ざした。

「ったく、どこのどいつよ…私の惚れ薬飲んだの…できればギーシ

ュであってほしいわ…」

モンモランシーはどうやら、あのグラスに惚れ薬入りのドリンクを注いでいて、しかもそれをギーシュに飲ませるつもりだったらしい。原因は初盤辺りで始っての通り、ギーシュの浮気癖だ。他の女の子にアプローチしてくるものだから、モンモランシーは怒って惚れ薬を作り、ギーシュに飲ませることを決意したのだ。しかし、残念ながらギーシュではなく、サイトがそれを飲んでしまったことを、彼女は知る由もなかった。

だがその惚れ薬、一部デフェクトが存在していた。モンモランシー本人は材料をきちんと揃えたように見えたが、作り方が本物通りではなかったため、あれが果たしてサイトにどんな影響があるのか誰もわからなかった。

「ああ…私の計画が…」

モンモランシーは結局自室に戻って作り直すことにした。ギーシュは他の娘にアプローチしてるし…（サイトとの決闘のせいもあってあまり成功しなくなったが）泣きたくなった。と言うか泣いていた。

そんなネガティブモードに陥ってる最中に、ルイズの部屋に戻るサイトとぶつかってしまった。

「いたっ…ちょっとどこ見て歩いてるの!?」

「あっ、わりい！…」

床に転んだモンモランシーの顔を見たサイトは、彼女の目尻に涙が溜まっているのを見た。

ビリッ…

その時の彼の体は、わずか一瞬だけだが静電気が走ったようにしびれた。

涙を見られたモンモランシーはその視線の先が自分の目の辺りだと気がつき、涙を拭く。

「ちょ…見ないでよ…」

「泣いてるのか？」

「泣いてなんかないわよ！」

さしのべるサイトの手を彼女は叩き飛ばした。

「男なんか…男なんかみんなそうなのよ！自分の女の子すっぽかして他の女のところに行って、飽きたらまた別の女に…もう男なんか…男なんか…」

「大嫌いって？」

「そうよ…優しくしないでよ…平民の癖にルイズの使い魔だからって…調子に乗ってるの？惨めになるだけよ…」

そのまま床の上ですすり泣いてしまう。
その次に言ったサイトの言葉は、今までの彼から見ればあまりにも照れ臭いセリフだった。

「惨めなもんか。心を裸にした君の姿は、とても素敵だよ」

「そんな、心にもないこ…と…」

涙を拭いてサイトの顔を見た瞬間、彼女は驚くように目を見開く。

「心にもないことなんかじゃない。本当だよ。愛しさが止まらない。できることなら今すぐ抱き締め、慰めてあげたいよ」

彼女の視界に映るサイトの顔は、彼女が今まで会ってきた男の中で最も美しく、カッコいい顔立ちとなっていたのだ。キュルケが一発でその眼差しで気絶してしまうほど、その眼差しはキラキラと、少女マンガのハンサムな男性のように輝いている。

（ど、どうしたのかしら…ギーシュと決闘した時ともまるで別人みたい…
ああ…胸が張り裂けて彼の中に溶け込みそう…心がどんどんひかれていく…）

「俺は君を抱くことができない。君にはもう素敵な彼がいるから…」

「いいの、そばに来て…」

今のモンモランシーは、完全にサイトにひかれてしまっていた。
もう今の彼女の頭の中は、目の前のサイトしか浮かんでない。哀れ

なことにギーシュは片隅もなかったのだ。
モンモランシーはだんだんその唇をサイトに近づけるが、サイトは指先でそれを止めた。

「これは俺の役目じゃないだろ?明日、君の笑顔に会えるのを楽しみにしてる」

そう言うとサイトはルイズの部屋に戻って行った。
が、それを偶然にもサイトを探していたルイズ、そしてギーシュが見てしまった。

「なななななにしてんのよ…このバカ犬うううう!!!!!!」

「き、君って奴は…僕のモンモランシーになにをしたあああああ!!!!」

「ぐほっ!?」

二人の同時ドロップキックでサイトは壁に顔を押し付けられた。

ちなみにモンモランシーは虚ろな目に、ボーッと顔を赤くしたまま座り込んでいた。

その後、サイトやモンモランシーから話を聞いた。

「あれは自然と口に…」

「じゃあ本当にモンモランシーの作った薬のせいと!?」

「ああ…」

モンモランシーの作った薬（本来の惚れ薬とは違うものになったらしい）をサイトが誤って飲んでしまった影響でサイトがおかしくなってしまったことでようやく定着した。ギーシュはモンモランシーに手を出されたことで怒ってはいたが、話をキッチリ聞いてはいた。独占欲の強すぎるルイズがまともに話を信じないせいでだいぶ時間を有してしまったが。

ともあれ、またあの状態のサイトを持続するわけにもいかない。下手したら完全にギーシュと同じ色に染まってしまう。

「とにかくモンモランシー、早く私の使い魔を元にもどしなさい！」

「そう言われても、すぐには無理だし、そのうち効果が切れるわよ」

「薬の効果はいつまでなんだい？君がまた彼に手を出されると思うと心配で…」

ギーシュがそう言うと、モンモランシーは彼の胸ぐらをつかんで睨んだ。

「あんたも原因だから。

（因みに私も明確な効果期間わからないのよ）」

「はい…」

「全くこのバカ犬はメイドにもうつつを抜かすし…」
サイトは現在ルイズの言うそのメイド、シエスタと仲がいい。恋人って訳ではないがよき親友に近い。ただそのシエスタがサイトに好意を抱き始めてしまったが…ルイズはそれが不満だった。

（アルビオンで助けた癖に助けた癖に助けた癖に…）

彼女まで悔しさのあまり涙を溜めだした。
それがまた、サイトの…いわゆる『キラキラモード』のスイッチを入れてしまった。

「ルイズ…そんな気を落とさないでくれ…」

「うるさいわね！何よ、他の女見ればいちいち鼻のし…た…」
サイトのキラキラな眼差しを見た瞬間、彼女もまたトロンとなってしまい、怒る気が失せるどころか逆に彼にひかれてしまい、

「あうう…」
そのまま気絶してしまった。

「あ！ルイズ！？」

そして翌日…

「行っちゃやだ！」

ルイズはあの眼差しだけでサイトにべたつくようになってしまった。

「いやだから、シエスタに飯訳でもらうだけだから！」

「嘘だもん！そのメイドといちゃつくつもりなんだもん！」

ルイズはサイトにくっついたまま離れようとしない。完全にキラキラモードのサイトに惚れ込んでしまっている。

「ルイズ、俺を信じてくれ。な？」

「うん…待ってる…」

彼女の顎を支え、そのキラキラ光る眼差しにルイズは頷いた。いつもツンツンしてるせいか、一度デレッとしてしまうとギャップが激しいものだ。

「モテモテですね…サイトさん」

その声を聞いて振り向くと、シエスタが何かと不敵な黒い笑みを浮かべて立っていた。

「あ…シエスタ！これはだな…」

「いいんですよ…サイトさんとは別に、そういった関係じゃないですから…」

どうも機嫌が悪いようだ。キラキラモードにも反応してくれない。

「いやこれは、惚れ薬のせいで…」

「惚れ薬？」

シエスタはその単語を聞くと、耳を疑った。

「そんな冗談通じませんよ。惚れ薬はご禁制で法律じゃ禁止されてますから」

ふん！とシエスタは頬を膨らましたまま歩き去ってしまった。

「禁止ものだったのか…ルイズは知ってた？」

「あうう…」

ルイズはいまだトロンと目を虚ろにさせていた。

ようやく目を覚ますと、いつものツンツンとした態度を見せ、先ほどの自分を恥じるようにサイトから目を背けた。

「と、とにかくモンモンに聞いてみるか。おかしな薬作ったのあいつだし」

「そうね。あんたがこのままだったら私の身が持たないもの」

そのモンモランシーは自習室として使われる空き部屋でギーシュと話をしていた。

「惚れ薬なんて必要ないさ。僕は君しか見ていない」

「夏期休暇で口説く相手がいないだけでしょ」

「うっ…」

図星を突かれたギーシュは言葉を失った。
そこに乱暴な扉の開けっぷりと共にサイトとルイズが入ってきた。

「モンモン！」

「ちょっと、ノックぐらいしなさいよ！それと私はモンモランシー！」

「そんなことはどうでもいいわ。早くサイトを元通りにしなさいよ」

「だから、効果はいつか切れるって…わ！」
と弁解するモンモランシーだが、ルイズは遮るようにどアップで彼女に怒鳴る。

「解除する薬とかあるんでしょ！？」

「あるにはあるけど…ここじゃ無理よ」

「とにかくサイト、君はまたモンモランシーに手を出したら…」

ギーシュがサイトに詰め寄る。対するサイトは背中に背負ってるデルフの柄を握る。

「そこまで根っからのプレイボーイじゃないぜ？それと手を出したら…なんだ？」

「あ…あははは…モンモランシー、ここは彼の要求を飲むべきだと…」

「情けない男ね」

モンモランシーは恐れを成すギーシュの姿を見てため息をつく。

「解除薬に必要なのは『精霊の涙』っていうんだけど、ただ直接行っただけで取れる訳じゃないのよ？」

「場所はわかるのね。今から取りにいくわよ！」

ルイズの提案にモンモランシーは驚愕した。

「今からですって！？」

「サイト、あのなんとかホークは動かせるわよね？」

「メンテナンスはバッチリだからいつでも大丈夫だ」

「「あ…／／」」

キラーン！と白い歯を見せて微笑むサイトに、ルイズとモンモランシーは一瞬見惚れてしまった。
でも今はそれどころじゃないのですぐ元に戻る。

「とと…とにかく、すぐ行くわよ！」

「だ、だけど…」

モンモランシーはいまだ面倒臭がって納得しようとしない。

「確か惚れ薬は禁止されていたよな？」

サイトがそう言った瞬間モンモランシーは背筋を強張らせた。それを聞いたルイズはニヤリと魔王のごとき笑みを浮かべる。

「学院長に報告したら、あんたは家からも…」

「わ、わかったわよ！今から行けばいいんでしょ！」

ここで薬の件を報告されたら自分は間違いなく罰則されてしまうのは目に見えてる。仕方なくモンモランシーはルイズに従うことになった。

「誰も着いて来いなんて言ってないわよ」
ホーク一号の操縦席に座り、モンモランシーはギーシュに言う。
「君のナイトだから当然じゃないか。あはははは！」
「はあ…で、これホントに動くの？」
一応飛んだところを見たことはあるものの、実際はレビテーションの魔法で浮かしていたのではないのかと彼女は疑っていた。
「大丈夫だよ。竜よりも早いから」
「ああぅ…／／」
またサイトのキラキラ眼差しを見たモンモランシーはクラクラしてしまい、ギーシュはそんなサイトを恨めしそうに見ていた。もちろんルイズも。

馬だと半日かかる距離だったが、ホーク一号の速度はとても早く、わずか数十分で目的地、ラグドリアン湖へとたどり着いた。
正確には近くの村に着陸したのだが、その村は水没していたのだ。
「水のメイジはここで精霊と契約を交わすのよ。
子供の頃、一度きりだったけどこんな感じじゃなかったのに…多分水の精霊は怒ってるのよ」

「怒ってる？」

「日没まで待ちましょう。その時間帯にしか出てこないから」

夕日が沈む時間辺りで、モンモランシーはカエルの使い魔、ロビンを手のひらに乗せて彼に言った。

「いいことロビン、これから湖に飛び込んで私の古い友達を探してくるのよ」

わざと針の先で指先から血を一滴出し、ロビンの頭に着けた。

「これで私のことがわかるはずよ。お願い」

ケロッ！と鳴き声を上げてモンモランシーの言われた通りロビンは湖に飛び込んだ。

「ホントに来るの？」

「湖の精霊が契約を交わしたときの、私の血を覚えてたらね」

疑わしそうなルイズにモンモランシーは落ち着いて答えた。

「涙って、悲しい話でも聞かせるのか？」

とサイト。モンモランシーは呆れたように言った。

「涙って言うのは通称。体の一部を分けてもらうことで手に入るの。いいこと、もし怒らせたりしたら私たちの命すら怪しいんだから」

水の精霊、いや精霊の名詞が着くものはそれほど恐ろしいものでもあった。その警告で一同は緊張感を高めた。とその時、激しい水しぶきが湖から巻き起こった。

「来たわ！」

モンモランシーは前に出て両手を広げ、現れるであろう水の精霊に語りかけた。

「私はモンモランシー・ラ・フェール・ド・モンモランシ。カエルに着けた血を覚えてるかしら？もしわかるなら、私たちにわかるやり方で、返事をしてちょうだい！」

「懐かしいな」

背中に背負ってたデルフが鞘から飛び出して言った。水しぶきは、だんだんモンモランシーのシルエットを映し出したような形となり、彼らに言葉を発した。

「覚えてる、単なる者よ。貴様の体に流れる血を我は覚えている」

「よかった。お願い、あなたの体の一部を分けて欲しいの」

「断る、単なる者よ」

「どうして？」

断られそうな気はした。尋ねようとしたとき、サイトは水の精霊に言った。

「頼む！ほんのちょっとだけでいい。何か理由があるなら聞くから…」

「ちょ…あなた止めなさいよ！さっきも言ったけどもし怒らせたりしたら…」

あわててモンモランシーはサイトの口を閉ざそうとした。

「……」

水の精霊はしばしの沈黙の後、サイトの姿を見て言った。

「そこの黒髪のお主、こちらへ来るのだ」

「え？」

思わず四人は水の精霊を仰視したが、言われた通りサイトは水の精霊の前に立った。

「水に手を入れよ」

サイトは水に手をチャプンと入れる。

『我の声が聞こえるか？』

『すげ…確かに聞こえる！』

『この形でお主と話すのは、おそらくお主でないとならないと感じたのだ。ガンダールヴ、いや…光の戦士よ』

そう言われたサイトは思わずギョッとした。この水の精霊は、自分の正体を見切っているのだ。

『６０００年前、お主と同じガンダールヴが我の願いを聞いてくれたことがある。そして同じ時期、この世界に起こった災厄で遥か彼方からお主とよく似た光の戦士たちがこの大地のために戦ったことも覚えている。だからお主を信じてみたくなったのだ』

そんな昔にもウルトラマンが飛来していたのか…

サイトはこの事実には驚きを隠せなかった。

『我の頼みを叶えたのなら、我の体の一部をくれてやろう。防犯のために増やした水かさも引いておく』

『頼み…ってのは？』

『「アンドバリの指輪」と呼ばれし秘宝がある。我と時を共にしたものだ。

それを盗みに、ある女が怪物を使い、我から秘宝を無理やり奪い去ったのだ』

またいずれその怪物が現れる…そう予測した水の精霊はわざと村を

水没させるほどの洪水を起こしたのだ。

『それを、奪い返せって？』

『いや、それはしばらくしてからで構わない。まず、この辺りにその女の残した怪物を退治してくれ』

すると、サイトの右手の袖に隠してあるウルトラゼロブレスレットを通して、青い光が流れ込んできた。

『何をしたんだ？』

『恐れることはない。かつてブリミルが我に、もし後世にガンダールヴが現れたら、「これ」を渡してほしいと頼まれたものだ。きっとお主の力となるはず』

今の話から、この世界では神格的存在である始祖ブリミルとも深い関係を持っていたらしい。

『頼んだぞ』

水の精霊はそう言うと、湖の中へ戻って行った。

「ちょっとあなた、水の精霊から何か言われたんでしょ？なんて言ってたの？」

モンモランシーの質問にサイトは他の三人に対し、簡潔に説明した。

「怪物退治かい？しかし、水の精霊が恐れるほどのものだとしたら、かなりまずいじゃないか…」

とギーシュ。

「モンモランシーのナイトなんでしょ？もう少しシャキッとしなさいよ！」

腰を震わせるギーシュにルイズはキツく言った。

「私は嫌よ！水の精霊すら怖がる相手なんか…もう帰らせなさいよ！」

嫌がるモンモランシーだが、サイトはキラキラ眼差しで彼女の瞳をじっと見て言った。

「でもこのままじゃ君は罰せられてしまうだろ？俺は君にそうなって欲しくない。それに水の精霊と言葉をかわせる君の力も必要なんだ。お願いだよ」

「は…はい…／／」

またしてもサイトのキラキラに誘惑されてしまうモンモランシーは断りきれず、受託してしまった。

「「ギギギ…！」」

他の二人は歯ぎしりしてサイトを睨み付けていた。ルイズも若干見惚れてしまっていたが、嫉妬心もあってかろうじて理性を保っていた。

その後、辺りが静まり返る夜まで四人は待つことにした。

「怪物なんてホントにいるのかな?まだ現れてないぞ」

木陰に隠れ湖畔を眺めるギーシュ。

「ふん…どんな怪物も私の魔法でやっつけてやるんだから」

「ゼロのあんたに何ができるのよ?」

「ゼロゼロ言うな!」

ルイズは怒ってモンモランシーの言葉を一蹴した。

「来るぞ…」

そうサイトが言った時、湖畔が水の精霊が現れた時以上に吹き上がりだした。

「バアアアア!」

水牛が突然変異した『水牛怪獣オクスター』。

水の精霊はオクスターから逃げ道を作るために狭かったラグドリアン湖の水かさを増加させていたのだ。

「怪物…って怪獣じゃないかああ!」

ギーシュは腰を抜かしてしまった。

「この、ファイヤーボール!」

ルイズは杖を掲げ、炎の炎弾でオクスターを攻撃しようとしたが、相変わらず爆発しか起こらず、しかもオクスターには威力が小さすぎてノーダメージで終わった。

「なにやってんのよルイズ！無駄に怒らせるだけじゃない！」

「ううううるさいわね！」

モンモランシーの怒声にルイズは声を震わせて怒鳴り返した。口喧嘩にまで発展してしまった。

ラチがあかないと思ったサイトは、再びキラキラ眼差しを二人に向ける。

「「あ…／／」」

（…ごめん！）

二人が自分の眼差しに釘付けになってる間、サイトはギーシュごと二人を手刀で気絶させた。

「いいのか相棒？もし解除薬作らんかったら娘っ子にエライ目にあうこともねえかもしんねえによ」

デルフが鞘から飛び出して言った。

「黙っててくれ。今はあの怪獣の方が先決だ」

ブレスレットからウルトラゼロアイを出現させ、目に装着した。

「デュア！」

サイトはウルトラマンゼロに変身、湖にいるオクスターに立ち向かう。

「ダアッ！」

オクスターの角を掴み、ひっくり返そうとしたが、力があるのはオクスターの方だった。逆にゼロがひっくり返されてしまった。

「ウワッ！」

オクスターの口から溶解液が吐き出され、なんとかゼロは避ける。避けた後でゼロの背後にあった森の一部が、その溶解液で溶けてしまった。

もしウルトラゼロディフェンダーによる防御を図っていたら、彼は盾ごと溶かされたかもしれない。

オクスターはゼロを湖底に無理やり引きずり込んでしまう。

「グッ…ウゥ…」

オクスターはのし掛かり、ゼロに向けて牙を剥き出した。かろうじてその牙を掴み、必死に抵抗する。

さすがのウルトラマンでも水中では自由が利きづらいのだ。

以前ウルトラマンジャックはオクスターと戦った時、ウルトラブレスレットの力で湖の水を蒸発させ雲に変えて、オクスターを呼吸困難に陥らせたことで逆転勝利を飾ったことがある。

だが今回は水の精霊という住人がこの湖にいる。そんな手を使えば水の精霊は最悪命を落とすかもしれない。

なんとかもがいてオクスターの重みから抜け出そうとするゼロだがその時、彼のブレスレットが光り、彼は光に包まれた。

光が晴れると、彼の体に頑丈そうな鎧が身に纏われていた。装甲の下の肌も青と赤から、赤一色に変わっている。

ブレスレットギア・キーパーアーマー。

水の精霊がサイトに渡した力の一つ。パワーと防御を重視したアーマーだ。

ゼロは先程より数段上がった力でオクスターを押し退けた。

「ゴゥ!?」

「よし…シャープに決めるぜ!」

キラン!となぜがここでもキラキラモードを出すゼロ。オクスターは一瞬何やってんだ?と固まってしまった。まあ、とにかく気合いだけは十分のようだ。

オクスターはゼロに食らいつこうと突出するが、驚くことにゼロはなんと片手でその進撃を防いだ。しかも後方へ足がズルズル引き摺られてもいない。オクスターはそれでもゼロを押し出そうとしたが、びくともしなかった。

ゼロはオクスターの体を捕まえると、地上に向かって大きく飛び立ち、ザバアン!と湖から飛び出した。そして地上にオクスターを叩きつけた。

「ダアアアッ!」

ズシンと叩き落とされたオクスター。水中でしか呼吸できないせいですでに呼吸困難に陥っている。

（ごめんな、眠らせてあげるよ…）

ゼロは両手に凄まじいエネルギーを溜め込み、一つのエネルギーボールを作り出し、それをオクスターに向けて放った。

〈キーパーゼロショット！〉

「デュア！」

エネルギーボールはオクスターに直撃し、オクスターは爆発四散した。

（やったか…）

敵を倒し、変身を解こうとしたその時だった。

「！？」

突然どこからか光線が放たれ、ゼロの肩に直撃してしまう。

「っ…誰だ！？」

新手がいたのか？肩を押さえ、辺りを見渡した。

その先で目にしたのは、信じがたい光景だった。

光線を放ったのはウルトラマンネクサスだったのだ。なぜ、彼がゼロに光線を放ってきたのだ？

「な…なにをするんだシュウヘイ！」

変身者の名でネクサスに抗議するが、対するネクサスは話を聞かず、ゼロに向けて必殺光線を放ちまくる。

〈クロスレイ・シュトローム！〉

〈ウルトラゼロディフェンダー！〉

ゼロは盾を作り出し、その光線を防ぎきった。キーパーアーマーのおかげもあってダメージは全くなかった。盾を下ろし、ゼロスラッガーを構えてネクサスの方を見たが、ネクサスはどこかに消えてしまっていた。

（一体どういうつもりだ…あいつ…？）

彼に対する不信感が、本能的に募っていた。

その後変身を解き、水の精霊から「精霊の涙」をもらった。今回は驚くことに水の精霊から現れてくれた。

「ありがとう。新しい力までくれてさ」

『いや、我からも礼を言わせてもらう。では指輪のことも忘れずに頼んだぞ』

水の精霊はそう言って湖の中へ消えていった。

（ルイズたちを起こして、さっさと学院でモンモンに解除薬作ってもらうか）

ギーシュと同じにはなりたくはないのが、最もな本音だった。プレイボーイのままだと、地球で待ってる彼女に嫌がられそうだ。

そう思い、ルイズたちのもとへ歩きだした。確か変身する前に気絶させてホークの中に運んでたっけ。

瓶詰めの精霊の涙を見ながらホークに向かうサイト。

その時、彼は訳のわからない光景を目の当たりにした。

ルイズでもモンモランシーでもない。女の子がなぜか森の中で倒れている。

それも、黒くて長い、夜風の中で美しくなびくであろう綺麗な髪。

その髪の持ち主を彼はよく知っていた。

「高凪さん!?」

サイトは一目散に走りだし、自分の彼女でもあるその少女ハルナのもとへ走った。

その時サイトは気づかなかった。

以前ネクサスが初めて彼の前に姿を現したときに暴れていた『ガルベロス』が彼をジッと見ていたのを。

どうして高凪さんが地球ではない、こんな場所にいるのか…
俺はその時、目の前の現実を受け入れがたく感じていた。

ＢＹサイト

EX2　品評会

「なななんてこと！貴族でラ・ヴァリエールの私がこんなバカ犬にいい…！」

ルイズはサイトが解除薬を服用した後、キラキラサイトに見惚れた恥ずかしさのあまり彼に向けて鞭を振るった。

「痛い痛い！止めろって！」

「うるさいうるさいうるさい！！あああんたが薬飲みさえしなかったら！！」

ルイズはまともに話もさせず、鞭の乱舞をサイトに向けて放ちまくり、キラキラサイトだった頃とは裏腹に彼の顔は腫れ上がってしまった。

そこにキュルケが迷惑面で入ってきた。

「ルイズ、痴話喧嘩もほどほどにしたら？前にも言ってたけど、すごい響くのよ？」

「ううるさいわね！ここ…このバカ犬がご主人様に色目見せるものだから…」

「それは誤解だろ！お前が勝手に見惚れてただけじゃないか！」

「うっさい！」

「はは～ん」

キュルケはそれを聞いて意地悪そうな笑みを浮かべた。

「あのルイズがダーリンを好きになっちゃうなんて…」

「だ、だだだだから違うって言ってるでしょ！／／」

ルイズは顔を真っ赤にして断固否定。

「それはそうと、もうすぐ夏期休暇終わるでしょ？休み明けの使い魔品評会、あんたはネタあるの？」

「う〝…」

キュルケに言われたルイズは不味そうに言葉を詰まらせた。

「まっ、きっと大丈夫じゃない？だって私のダーリンなんだから」

キュルケはサイトに抱きついた。

「わわわわ！ちょちょ…止せって！／／」

「えええ～いいじゃな～い」

「いい加減にしなさいよツェルプストー！」

その後、約一時間近く二人の喧嘩が続き、サイトはなぜかルイズの八つ当たりの対象にされたとか。

「はあ…」

キュルケが部屋に戻った後、ルイズは椅子に座ってため息を着いた。

「どしたんだよ？」

「休み明けに使い魔の品評会があるのよ。だけど…」

気を重くしている。サボりたいって言いたいのだろうか。

「出たくないのか？だったらでなけりゃいいじゃん。」

「二年生は全員参加なのよ。明日だから出し物考えてちょうだい」

「んな無理言うなよ。ギーシュん時みたいにうまくやれるわけじゃないんだぜ」

「とにかく！恥かきたくないから何か特技考えときなさい！わかった？」

結局ルイズの無茶ぶりで、サイトは品評会向けの芸の開発をすることとなった。

「なあデルフ、お前剣だろ？なんかすごい芸とか知ってるだろ？」

ホーク一号の方へ歩きながらサイトはデルフに尋ねる。

「無理言うな。あいにく俺っちは実戦用だ」

「はあ、一番無理言ってるのはルイズだもんな…」

サイトは芝生の上に寝っ転がる。

寝転がりながら昨日のことを思い出した。
森の中に倒れていたハルナ。そして、オクスター戦後に突如襲いかかってきたウルトラマンネクサス。ハルナはあの後、シエスタのいる宿舎で保護させてもらった。帰るときはルイズに知らされないよう、ホーク一号の操縦室とは別室に運んでいたので、余計なゴタゴタを避けることができた。
だが二つ目に気になること。なぜネクサスが、シュウヘイがゼロ（サイト）に襲いかかってきたのか、検討もつかない。

（一体何で…）

そこにシエスタが、顔を覗き込むようにサイトのもとへやって来た。

「サイトさん、そこで何をなさっているのですか？」

「そういや悪いな、この娘の面倒見てくれなんて」

シエスタの部屋で二人は話していた。

「いえ、これくらいのこと。頼んできた人がサイトさんですから」

ちょっと頬を染めてシエスタは言った。

「惚れ薬のこと、本当だったんですよね。すみません…冷たくして…」

「あ、いいって！済んだことだし、シエスタは何も悪くないよ」

ちょっと沈んだ表情を浮かべたシエスタにサイトは気にしてないと言った。

「この人、サイトさんの知り合いの方…ですか？」

シエスタはハルナを見やる。自分と同じ黒髪はとても珍しい。少なくとも自分の家族以外で見たことあるのは今のところサイトだけだ。

「うん、知り合いって言うか…」

ちょっと気恥ずかしそうになるサイトだが、はっきり答えた。

「彼女」

瞬間、シエスタは固まった。まるで機械が故障したかのようになにやら怪しげな口調で喋りだした。今の彼女の頭脳は完全に真っ白、思考がまともに働かなくなってしまった。

「これはきっと夢…そう夢なのよ…悪夢なのよ…」

「し…シエスタさん？」

シエスタ再起動までしばしの時間がかかった。

数分後…

「あ…また私ったら…」

（そこまで衝撃的に受け止められたら俺複雑だよ…）

サイトは心の中で小さく呟いた。

「なあ、シエスタは品評会って何か知ってる？」

「もちろん。毎年この時期に行われる行事なのですから」

「それでルイズから無理言われたんだよな。恥かきたくないから何とかしろとか…」

「仕方ありませんもの。この行事は毎年あるんですが今年はアンリエッタ姫様が来られるのですから」

「アンリエッタ姫様…」

ルイズに手紙の奪還を依頼してきた幼なじみのお姫様だ。

「この国の王女様で、美人で気品のある方ですから国民のみんなからとても人気があるんです。はあ、一度お目にかかりたいな…」

窓の外を見ると、広場にはキュルケ、モンモランシー、ギーシュ、マリコルヌなどが品評会の練習を自分の使い魔と一緒に練習していた。

「優勝すると王室からご褒美が貰えるそうなんです」

シエスタがそう言ったとき、キュルケは「優勝商品は私のものよ！」と高らかに言っていた。実は他のやつもそれが目的だった。

「あれが目的の人もいるわけか…」

サイトは思わず苦笑いした。

「サイトさん…あの…」

「ん？」

シエスタは顔を染め、サイトの手を握って言った。

「品評会、頑張って下さいね。」

そして品評会前日、アンリエッタが馬車に乗ってやって来た。

「アンリエッタ姫殿下のおなーりー！！」

その声と同時にアンリエッタが馬車から降りて来た。一斉に「アンリエッタ姫バンザーイ！」の歓声が響く。

「やはり可憐だなぁ姫殿下は」

ギーシュはモンモランシーを尻目にアンリエッタの容貌に見惚れている。

「私のほうが美人じゃない」

とキュルケ。

「……」

相変わらずタバサは無口を通していた。

「やっぱりワルド、いないのね…」

裏切り者だったとはいえ、幼い頃から憧れていたのは事実だ。本来ならアンリエッタの護衛で来るはずだったが、あの優しかった子爵はもうどこにもいない。

「ワルド子爵か…魔法衛士隊グリフォン隊隊長だったのにトリステインを裏切るなんてね…原因を突き止めたいほどだよ」

「その前に、グラモン元帥の息子であるあなたも頑張ってくれないとね」

モンモランシーのキツイ言葉でギーシュはショボンとなった。彼の父であるグラモン元帥はトリステインでは有名な貴族だが、息子のギーシュはまだ最低クラスのドットメイジだった。

続けて彼女は言った。

「そういえばあの姫殿下はゲルマニアと同盟を結ぶために政略結婚するそうよ。怪獣やアルビオンの反乱軍に対抗するために」

「大抵王族や貴族はそんなもんじゃないの？自分の気持ちは無視されて周りが勝手に決めるのよ！？冗談じゃないわよ！」

キュルケはキイーッ！と珍しく歯ぎしりする。

恐らくキュルケも今のアンリエッタと同じような目に遭ったのことがあるだ。

「かわいそうね。お国のためとはいえ…あの枢機卿がやっぱり仕切ってるのね。街で流行ってる小唄の内容も知ってる？」

「あら、どんなの？」

モンモランシーの言ったことにキュルケは気になって尋ねた。それに答えたのは、先ほどまで無言だったタバサ。口を開き、歌い出した。

「トリステインの王家には美貌はあっても杖がない～杖を握るは枢機卿～灰色帽子の鳥の骨～…」

「おっおい！聞こえるぞ！」

ギーシュはあわてて止めた。

「姫殿下はあの笑顔の下で、お悩みになってるかも知れないわね…」

「そうね…」

幼なじみで彼女も一番の理解者であるルイズも、愛する者と結ばれなくなったアンリエッタの、心の奥底に隠している苦しみを見通していた。

その夜、剣術の練習をしてみたが、いまいちしっくりこなかった。なんだがどうでもよくなったので、ルイズの部屋に戻る前、サイトはシエスタの部屋にいるハルナを尋ねてみた。

「まだ、寝てるのか」

ベッドでいまだに眠るハルナの頬を、優しく撫でた。一体なぜ彼女がここにいるのか、わからない。だが元気でいてくれたのは嬉しかった。

「高凪さん…」

「ん…」

撫でた手を話した瞬間ハルナは目を開いた。

「あれ…ここ…」

「高凪さん、気がついた?」

「え?」

ハルナは自分の名前を呼ばれ、サイトの顔を見る。
見間違いなどではない。どこからどう見ても、自分が恋している男だった。

「平賀君…なの？」

「そう、平賀サイトだよ」

だんだん彼女の目から涙が溢れてきた。地球じゃサイトは行方不明扱いされ、しかもニュースでも取り上げられるほど地元を騒がせていた。ハルナもサイトとよく出歩く場所をあちこち散策しながら探したが、どこにも彼女の望む姿はなかった。だが、こうして目の前で、自分をまっすぐ見てくれている。

「平賀君！！」

「わ！！」

嬉しさのあまりハルナはサイトの胸に飛び込んできた。

「あれ…サイトさん、いたんで…」

タイミングが悪かった。
シエスタがそこで入ってきたのだ。二人のその姿を見て、どこぞの魔法少女として活躍する白い魔王のような、顔は笑ってるが目が笑ってない状態に。

さらにさらに悪いことに、サイトを探しに来たルイズまで現れた。

「サイト～…一体何をやってるのかしら？」

「あ、いや…これはだな…」

サイトが遅くまで姿を見せなかったものだから、ルイズは先ほどから不機嫌だ。弁解の余地すら与える気はない。

「このバカい…」

罰としてサイトに鞭を振り上げてきたその時、ハルナがいち早く反応し、サイトの前に立ちふさがった。

「あなた、平賀君に何をする気ですか!?」

「な、なによあんた!誰だか知らないけど、人の使い魔に抱きつじゃないわよ!今すぐ離れなさい!」

「いいえ、退きません!平賀君は私の大切な彼氏なんですから!」

ルイズはそこで固まってしまった。

「……は?彼氏?」

「ええ、そうです。抱きつこうが何しようが私と平賀君だけが決められます。使い魔だがなんだか知らないけど、あなたに邪魔する権利なんかありません!」

ぐぐ…ルイズとハルナは互いに唸り声をあげながら睨み合っている。

「あ…あのさ…なんか用かルイズ?」

正直怖かったが、サイトはルイズに尋ねた。

「用も何も、品評会の出し物ができたかあんたに聞きに来たのよ！」

ぶっきらぼうにルイズは喚く。

「出し物か…剣術にしてみたがダメだな。1日じゃ無理だ」

「仕方ねえさ。1日で剣術極められるなら誰も苦労しねえよ」

デルフも鞘から飛び出して言う。

「はあ…」

ルイズは怒る気が抜けてため息をつく。

とその時、トントトン。と変わったリズムで誰かが扉を叩いていた。

「このノックの叩きかたは…」

ルイズは扉を開いた。

「ああ、やっぱり！」

「ルイズ、また会えてうれしいわ」

扉のノックの主はアンリエッタだった。

「姫様、どうしてここに私がいると…」

「あなたの様子をみたくて、この宿舎の窓からあなたの後ろ姿が見えたからここにいるんじゃないかって…」

「あああああ…アンリエッタ姫様！？なな…なんで…」

平民であるシエスタは、まさかこの場で、しかも自分の部屋で国のトップ近くにあたる人物をこんな近くで拝めるとは夢にも思ってなかった。

「でもあなたを危険な場所に送った私に…」

友達なんて語る資格があるのか？

アンリエッタは決して平気な顔でルイズをアルビオンへ行かせた訳ではない。ルイズたちが無事だったとは言え、送り出したことを後悔していたのだ。下手したら大事な幼なじみが死ぬかも知れなかったのだから。

「何を言うのです姫様！私はラ・ヴァリエール家の者。王家とは深い関係にあるのです。ですから何なりと申し付けください！」

「ありがとうルイズ。その気持ちだけで十分ですわ。明日の品評会、サイトさんがどんな特技を見せていただけるか楽しみにしている。頑張って」

明るい笑みを浮かべながら彼女は去って行った。

だがこれは同時にルイズにとってプレッシャーでもあった。

どうしよう…もし姫様をがっかりさせるような結果に終わったら…こうなったら品評会の開会式前にでもサイトに

「サイト、今すぐ外に出なさい！一刻も早く芸を完成させるのよ！」

「そんな無茶苦茶な！俺疲れてるし、もう寝る時間だろ！？」

「ダメよ！拒否権なし！さっさと行きなさい！」

「えええええええ！？」

無理難題なルイズの強制に、サイトは悲鳴を上げた。

「まったく、ここまで硬いんじゃお宝が手に入らないじゃないか」

夜風が吹きすさぶ中、学院の宝物庫前の外壁。そこにローブをまとった女がいた。以前レコンキスタの命令でサイトたちを襲った『土くれのフーケ』。彼女は今全長十メートルのゴーレムに乗っていた。今はたいていの人間が寝静まるころ、気づく人間はほとんどいない。いたらその時は…

だが、問題がある。学院の宝物庫の扉が開かない。外の壁を壊そうにも強力な固定化の魔法で頑丈にできている。ゴーレムのパンチでもヒビ一つはいらなかった。

「やっと解放されてひと暴れしようと思ってたのに…」

と、そんな時彼女に誰かの話し声が聞こえてきた。

「ほら、さっさとやる！」

「だ、だからもう休ませてくれよお！！大体一日でできるんなら苦労ないって！」

無理やり芸の特訓をやらせようとるルイズと、無理やりやらされてるサイトが目に映った。

「もう、こういうときに…？」

ルイズがこちらを見上げている。まずい！気づかれたか！

「ゴーレム！？まさか、賊！？」

彼女はとっさに杖を向けてゴーレムに魔法を放った。とっさにフーケも杖を構えたが、結局ルイズの魔法はいつもの失敗に終わり、宝物庫の壁のあたりが爆破した。

フーケは驚きのあまり目を疑った。ゴーレムの鉄槌でもヒビ入らなかった壁が、割れて宝物庫の中が露わになっていた。

しかしこれはチャンス。彼女はあの名から宝物庫内に侵入し、怪しげな箱を担ぐと、ゴーレムに乗った。彼女が乗ったと同時にゴーレムは学院の外の方へ向かう。間違いなく逃げる気だ。

「！」

あれほどの巨体を止めるには変身するしかない。そう悟った彼はウルトラゼロアイを取り出した。しかし、そこで運がいいのか悪いのかキュルケ、タバサ、ギーシュがやってきた。

「ダーリン、何があったの！？」

「キュルケ…」

そこでサイトは足元に何かが落ちているのを見つけた。一枚の紙だった。

『破壊の杖』いただきました。

土くれのフーケ

盗賊が来たという非常事態の影響で、品評会は中止、アンリエッタも事態の報告と身の安全の確保のため王都へ帰ることになった。

EX3　二柱の巨人

土くれのフーケが学院の宝物『破壊の杖』を盗んだ。学院中は大騒ぎになった。まさか真昼に侵入してくるとは。フーケを探した兵士たちからは見つかったのはゴーレムだった土の山だったと報告された。

翌日、教師全員とルイズ、キュルケ、タバサ、ギーシュ、そしてサイトが学院長室に呼び出された。ちなみにハルナは呼び出されてない。

「犯行の現場を見たのは君たちじゃな？」

いつもはセクハラでニヤケ面のオスマンも、今回は厳格な態度を示している。

「はい、大きなゴーレムが突然現れて私たちを襲って来ました。そして宝物庫の壁を壊し、フーケは宝物を盗んでゴーレムに乗ったまま逃亡しました」

罰が怖かったルイズは壁を壊したのは自分だとは言えなかった。

「フーケ、大胆なやつじゃ。学院にいるのはほとんどメイジ。それで我々が油断していたのをフーケはわかっていた。まさか賊に襲われるとはワシも夢にも思わなかったからのう…」

「こんな時にミス・ロングビルはどこに…？」

コルベールは学院長室中を見渡すが、ロングビルだけは何故かいな

かった。

「すみません！遅くなりました！」

ちょうどその時、ロングビルが学院長室に入って来た。もちろん前話で話した通り、彼女はフーケであり、そしてマチルダでもあるが、その場にいた者たちがそんなことを知る由はなかった。

「どこに行ってたのですが！？こんな時に！」

「申し訳ありません。実は今朝から調査していたのです。フーケの居どころがわかりました」

「仕事が早いの」

「近くの森の廃屋に黒ずくめのローブを纏った不審人物が入っていったそうです。おそらくその人物がフーケではないかと…」

「では早速王室に報告しましょう！王宮衛士隊に頼んで兵隊を差し向けてもらわなくては！」

シュヴルーズが言うが、オスマンは机を叩いてそれを否定した。

「馬鹿者！王室に知らせてる間にフーケに逃げられてしまうわい！！それにこれは我々の落ち度！身にかかる火の粉を己で振り払えんで何が貴族じゃ！学院で起きた問題ならば我々の手で解決する！我と思う者は杖を掲げよ！」

だが誰も揚げなかった。

フーケが、怖いのだ。

「どうした？フーケを捕らえて名をあげようとする貴族はおらぬのか？」

「ミセス・シュヴルーズ！あなたは当直だったのでしょう！？あなたがいくべきでは！？」

「そうですけどミスタ・ギトーもまともに当直してましたか！？」

フーケ退治に行くどころか、教師たちは内輪揉めをしだした。オスマンは頭が痛そうに肩を落とす。

「だめだこりゃ…盗まれた『破壊の杖』は彼からもらった大切なものだというのに…」

するとその時、杖を掲げた者がいた。挙げたのはなんとルイズだった。

「ミス・ヴァリエール！あなたは生徒ではありませんか！ここは教師に任せて…」

「誰も杖を揚げないじゃないですか！だから私がいくんです！」

「私も志願します。ヴァリエールには負けられませんわ」

キュルケも対抗意識からか杖を揚げた。

「僕も志願します。賊から逃げるなどグラモン家の恥です！」

ギーシュも杖を揚げた。続いてタバサも杖を揚げた。

「あなたはいいのよ？」

「みんなが心配…」

「もう、タバサはほんといい子ね」

キュルケはタバサを撫で、タバサは撫でられても無表情を通していた。

「では彼らに頼むとするか」

「私は反対です！生徒を危険にさらすなど…」

シュヴルーズは反発した。まだこんな子ども達に、無慈悲な盗賊の相手など危険すぎる。

「ならば君がいくかね？」

「それは…」

オスマンの言葉に彼女は何も言えなかった。

「きっと大丈夫じゃ。それにミス・タバサは『シュヴァリエ』の称号を持っている。王室から与えられる爵位としては最下級の称号だが、その若さで得られたのならば彼女の実力は確かなものじゃ」

「そうだったの！？」

驚きの事実にキュルケの質問にタバサはコクッと頷いた。

シュヴァリエの称号は今のルイズたちからみればそれほどのものだった。

「ミス・ツェルプストーはゲルマニアの優秀な軍人を輩出した家系の出、ミスタ・グラモンはあのグラモン元帥の息子。そしてミス・ヴァリエールはミスタ・グラモンを圧倒した使い魔を召喚した。彼の実力を持ってすれば、フーケに遅れを取るまい」

キュルケとギーシュは鼻が高そうにしていたがルイズは自分より使い魔が誉められたのが少し不満だった。

「そうですぞ！！なんたって彼は伝説のガンダー…もが！」

（内密にしろと言ったじゃろ！）

オスマンはコルベールの口をあわてて押さえた。

「いえ…何でもありません…」

「では諸君の義務に期待する。決して死なぬように」

「「「杖にかけて！」」」

彼らはフーケ退治に向かうため、出発した。

その前にサイトは、ハルナの元を訪れていた。

「どこか…行くの？」

「うん、盗賊退治ってとこ」

「そう…」

昨日のように沈んだ表情を浮かべるハルナ。

「どうかしたのか？大丈夫だって。俺がいないときはシエスタが面倒見てくれるし」

「そうじゃないの。なんか寂しいの…平賀君がこの世界の人と仲良くしてるから、だんだんこっちの世界の人になっていきそうで…」

その哀しげな顔に、ズキッと胸に痛みを覚えた。

しかし、不安を隠すように笑顔を作った。

「…大丈夫」

「え？」

「いつか一緒に地球へ帰ろう。な？」

サイトは小指を突き立て、指切りをせがんだ。ハルナは先ほどよりも明るい表情になり、サイトの小指と自分の小指を結ばせる。

「ゆ～びきりげんまんうっそついたら針千本飲～ます！ゆ～び切った！」

そう言い終えたところで二人は指を離した。

「そう言えば、どうしてあの森にいたんだ?」

まだ聞いてなかったことがあった。なぜ彼女がラグドリアン湖の近くで倒れてたのか。

「私にも、わからない。ほとんど記憶なくて…しかも左腕の肘に火傷まで…」

「え!?」

サイトは驚き、彼女の左腕の袖を捲ると、確かに火傷の痕があった。

「だっ、大丈夫だよ平賀君。シエスタさんがなんとかしてくれたから…行ってきて」

袖を戻し、ハルナは背中を押すように言った。

「…必ず戻るから。約束する」

「ミス・ロングビル、手綱なんて付き人に…」

ロングビルが馬車の運転をしてる時、ルイズがロングビルに言う。

「フーケの情報を集めた私が案内した方がよいかと思いましたので

…」

「でもあなたは秘書なんですよ？」

ギーシュも言った。

「いいんです。私は貴族の名を無くした者なので…」

貴族の名を無くした？あまりそういったことを近親者から聞かされないので、一同は気になったが、失礼なので言わないことにした。しかし、キュルケは気になって尋ねてきた。

「興味あるわ。お聞かせ下さいません？」

「よしなさいよこの恥知らず！」

「いいじゃない！おしゃべりしたいだけなんだから」

「おい、ケンカすんなよ」

「うるさい…」

「フーケに気づかれるぞ」

サイト、タバサ、ギーシュが順に口喧嘩に発展しそうな二人を止めた。

しばらくして、馬車では生けないほど深い茂みの前にたどり着いた。
一同はそこで降りることにした。

「ここからは森が深くて馬車では進めません。徒歩で行きましょう。そのさきにフーケの隠れ家があるはずです。私は怪しいところがないか別行動で偵察にいきます」

ロングビルは森の中へ消えていった。

「お一人で大丈夫かしら?」

とルイズ。

「気にすることなんじゃない?あの人は魔法がかなり使えるらしいし。それより自分の心配したら?」

なめるようにキュルケは言った。

「うるさいわね。余計なお世話よ」

「あのゴーレムが現れたらどうせ逃げてサイトに戦わせて自分は高みの見物――そうでしょう?」

「だっ誰が逃げるもんですか!?フーケもゴーレムも私の魔法でやっつけてやるわよ!!」

「魔法?ゼロのあなたが?笑わせないで!」

二人はまたケンカしようとした。

「やめたまえ二人とも！」

「おーい！見えたぜ！あれじゃないか？」

サイトが指差した方向には、かなり古びた廃屋があった。

「あれがフーケの隠れ家のようだね」

「人の気配がないわね。作戦は？」

キュルケはタバサを見る。シュヴァリエの称号を持つ彼女だ。きっと何か作戦があると見たのだ。

「まず偵察兼囮が中の様子を確認、フーケがいたら挑発し誘き出して魔法で一気に攻撃…」

「誰がやるんだ？」

サイトが言うと、タバサは真っ先にサイトを見た。

「すばしっこいの」

「「「すばしっこいの」」」

他の三人もサイトを真っ先に見た。

「俺…？」

結局彼女達の視線に折れ、サイトはしぶしぶ偵察に行った。

「がんばって～」

「頼んだよ～」

キュルケとギーシュの声を背中から聞き取りながらサイトは廃墟に向かった。

「何で俺が危ない役を…」

廃屋に近づき、中を覗き込んだ。人影はなく、気配もない。窓から光が差し込んでるくらいだ。

「誰もいないな」

サイトは四人の方へ手を振ってサインを送った。

「誰もいない時のサインだわ」

「行くわよ」

草影に隠れていた四人も廃屋へと向かった。

「本当に誰もいないの？」

「罠はないみたい」

タバサはディストマジックで廃屋を調べたが、反応はなかった。フーケはメイジ。魔法による罠を仕掛けると思ったが、そうでもなかった。

「鍵すらかかってないじゃない」

キュルケは不思議そうに言った。
怪しく感じながらも五人は廃屋の中に入った。

「埃っぽいな」

煙そうにギーシュは言った。埃が目に入り過ぎて涙が出そうだ。

「手分けして『破壊の杖』を探すわよ」

だがルイズがそう言い終えた時、

「これ…」

タバサは台の上に被さっていた布をとった。そこには…

「え?」

「ん?」

「ええ!?」

「あっ!?」

「「「『破壊の杖』!?」」」

なんと、その埃被った布の下に『破壊の杖』があった。

「あっけないわねぇー」

拍子抜けたようにキュルケはため息を着いた。

「まあいいわ。フーケが来る前にはやく出ましょ」

ルイズは外への扉を開いた。

「なあタバサ。俺に見せてくれないか？」

タバサはサイトに『破壊の杖』の箱を渡した。

それを見た瞬間、彼は驚愕せざるを得なかった。なぜなら、その箱にはサイトに見覚えのあるシンボルマークが書かれていたのだ。

「どうしたの？」

タバサは興味深そうにサイトを見た。

「これ…俺の世界の…」

ゴゴゴゴゴゴ…

サイトがそう言い終えた時、地響きが起こった。

「なっ、なんだ!?何が起こってるんだい!?」

「小屋が揺れてる!!」

天井が、まるで何かか飛び込んで突き破るように破壊された。

その穴から、巨大なゴーレムがこちらを見下ろしていた。

「ゴーレム!?」

すぐさまタバサは呪文を唱え、巨大な氷の槍を作り出した。

「ウィンディアイシクル…ジャベリン!」

「行け!ワルキューレ!」

ギーシュもワルキューレを作って攻撃した。

「フレイムボール!」

キュルケも炎の弾を作り、ゴーレムに攻撃した。

だが、ゴーレムには全くの無傷だった。タバサの氷の槍だけはなんとか突き刺さってはいたが、その氷が抜けた瞬間に傷ついた部分がなおってしまった。

「うそ…びくともしてない!?」

「ここは…一旦退却…」

キュルケとタバサは『破壊の杖』を持って一旦退却した。

「おっおい君たち!!待ってくれ」

ギーシュも仕方なく二人を追うように待避した。

(よし、今なら…)

サイトはブレスレットに手をかけ、ウルトラゼロアイを取り出そうとした。だが…

「は、サイト！ルイズが！！」

後ろを振り向いたギーシュがゴーレムの足元の方を指差した。

「あっ、あいつ何してんだ！？」

ルイズはゴーレムにまた無謀にも立ち向かってるではないか。

「ファイヤーボール！」

だが、小さな爆発で弾けただけだった。

「やめろ！！かないっこないだろ！！」

「そうだよ！君に何が…」

「あんたたちだけ逃げればいいじゃない！！ここで逃げたらまた『ゼロのルイズ』って言われるじゃない！！それに私は貴族よ！魔法が使える者を貴族と呼ぶんじゃない！！敵に後ろを見せない者を貴族と呼ぶのよ！！」

その時、ゴーレムがルイズに拳を振り下ろしてきた。

ルイズは下がろとしたが、足が引っ掛かり後ろへ転んでしまう。

「あっ危ない！！」

無慈悲に、ゴーレムの拳が振り下ろされた。

「きゃあああ！！」

ギーシュは直視できず、目を背けた。しかし、サイトはその瞬間、腕をクロスした。

〈ウルトラ念力！〉

「デュア！」

すると、ゴーレムの動きが止まり、そして後ろへ倒れた。サイトはウルトラ戦士特有の念力でゴーレムの動きを止めたのだ。

「なっ何をしたんだ？」

「簡単な、念力だ。それより早くルイズを！」

「わ、わかった！」

ギーシュはワルキューレを使ってルイズを救った。

（まさかこんなことも出来るなんて…君は一体？）

ギーシュはチラとサイトを見た。簡単な念力？一体どういうことだ？

ワルキューレにこちらへ運ばれたルイズは、突然サイトに怒鳴った。

「じ、邪魔しないで！！あれくらい私にだって…」

その瞬間サイトはルイズを平手でバシッ！と殴った。

「なっ何をしてるんだ君は!?」

ギーシュの声を無視し、彼はルイズの胸ぐらを引っ張って彼女に怒りの形相と共に怒鳴り返した。

「バカヤロ!!貴族だからなんだってんだ!!そんなのがなんの役にたつんだ!?死んだら終わりなんだぞ!!」

「だって…」

彼女の声が、まるで転んで怪我をして泣き出しそうになる幼い少女の様に段々と震えていく。

「だって…いつもみんなに馬鹿にされて…悔しくて…逃げたらまた馬鹿にされるじゃない!!」

彼女の目から涙が溢れてきた。悔しかった。アルビオンでは何もできず、ただサイトが、みんなが戦うのを見ていただけで頼りっぱなし。しかも学院ではウルトラマンゼロと比べられ、結局自分は可能性「ゼロ」のルイズのままではないか。

「「…」」

その沈んだムードを壊すようにゴーレムが再び動き出した。

「退くぞ!」

「あ、ああ!」

サイトはルイズを抱き抱え、ギーシュと共に一旦退いた。
。

「ひゃあ！／／」

ルイズはいきなりサイトに抱き抱えられたので仰天した。

「ちょちょちょっと待って！／／」

「喋るな！舌噛むぞ！」

そこにキュルケとタバサを乗せたシルフィードが降りてきた。

「乗って」

まずギーシュ、ルイズが乗ったが、サイトは乗らず、一人残る意思を見せた。

「先に行け！」

「ちょ、サイト！」

一人で戦う気か！？ルイズが反論しようとした時、ゴーレムが追い付いてきた。

「行って」

タバサに言われた通り、シルフィードサイト以外の四人を乗せ飛んで行った。
残ったサイトはゴーレムを睨み付ける。

「泣くなんてらしくもねえ…何とかしてやりたくなるじゃねえか…。
土くれが…なめんなよ！！」

サイトはデルフを引き抜き、左手のガンダールヴのルーンが青く輝く。

「おお！やっと出番か！」

「こちとら…ゼロのルイズの使い魔だっつうの！！」

サイトは素早い動きと剣さばきでゴーレムを切り裂いていった。
まさに韋駄天のごとく素早く、そして無双の戦士のごとき剣さばきでゴーレムの体は傷ついていく。

「なんかすっごく速くない！？」

キュルケは驚いて目を見開いた。
だがどんなに切ってもゴーレムの体は元に戻っていった。

「くそ…これじゃキリがない！！負けはしなくても勝てもしない！」

どうにかしなければ…ルイズは自分になにができるか思考しとき、破壊の杖の箱が目に入った。

「タバサ！！破壊の杖を貸して！！」

ルイズは破壊の杖の箱を受け取った瞬間シルフィードから飛び降りた。

「おっおい！」

「ちょっとルイズ！」

タバサは落ち着いてレビテーションを、地上に飛び降りたルイズにかけた。

そして地上に着地し、破壊の杖を取り出し振った。

「えい！」

だが何も起きない。何度振っても爆発による失敗魔法の方がマシに思えるほどなにも起こらなかった。

「どうして！？魔法の杖じゃないの！？」

「ルイズ貸せ！！」

サイトはルイズに駆け寄り破壊の杖を無理矢理ルイズからとり、模型を組み立てるように破壊の杖をいじった。

「こいつはな、こうやって使うんだ！」

サイトは破壊の杖を担ぎ、杖にはないはずの引き金を引いた。

瞬間、なんと破壊の杖から高威力の弾丸が発射、そしてゴーレムに当たり、そのわずか一発の凄まじい連続爆発と共にゴーレムは粉々になった。

「おでれーた！！」

ビックリしたデルフは思わず声をあげた。もちろんルイズも驚いていた。

「すごい…これが破壊の杖の力…でもよく使い方がわかったわね」

「ああ、これはな…」

その時、キュルケがサイトにいきなり飛び付いた。

「すごいわ！さすが私のダーリン！！」

「わわわ！／／」

「ちょっとキュルケ！！また人の使い魔に！」

自分の使い魔にじゃれるキュルケを睨むルイズは怒鳴った。

「ところでフーケは？」

ギーシュは辺りを見渡した。が、肝心のフーケがいない。

「近くにいるはず…」

五人はあたりを見渡した。すると茂みからロングビルが出てきた。

「お疲れ様使い魔君」

ロングビルは破壊の杖を拾った。

「これほどの威力だとはね…私のゴーレムが粉々じゃない」

「『私の』ゴーレム…？まさか…」

「そう、私が…」

ロングビルは髪止めと眼鏡をとった。

「土くれのフーケよ！」

ついに彼女はフーケとしての正体を現した。
五人は身構えた。だがフーケも破壊の杖を構えた。サイトたちは自分たちの武器に手をつけようとしたが、それをフーケが許すはずがない。

「動かないで！破壊の杖はぴったりと狙っているわよ！全員武器を捨てなさい」

サイトはデルフを、ルイズたちは杖を捨てた。

「どういうことですか！？あなたというレディが…」

「知りたい、ミスタ・グラモン？
そうね、破壊の杖を奪ったのはいいけど使い方がわからなかったの。だからそこの使い魔君に使わせようとあなたたちを利用したのよ」

「じゃあ私たちはかませってこと！？」

キュルケは声をあげた。

「そうよ。そこの使い魔君ならわかると思ったのよ。さすがは『ガンダールヴ』ね」

「ガンダールヴ？」

ルイズとサイト以外の面々はなんだ？と目を丸くした。

「悪いわね。でも、さよなら」

あたしにも生活かかってるから…そう思いながらもフーケは破壊の杖の引き金を引こうとしたが、

「待て」

そこにフードを被った別の青年が現れ、フーケの手を下ろさせた。

「それは魔法の杖じゃない。手加減など不可能だ。俺たちの本来の目的は、こいつらを殺すことじゃなかったはずだ」

「シュウヘイ…」

「シュウヘイ…だと！？」

サイトはその名を聞き逃さなかった。

青年はフードを取ると、確かにあの長めの、後ろ髪が結ばれた黒髪と整った顔立ち。紛れもないシュウヘイの顔だった。

「あれは怪獣と戦う兵器だ。そんな威力の兵器をこいつらに使えば、命の保証など馬鹿げた話だ」

「そ、そうかい…あんたがそう言うなら…」

「まあいいさ。こいつを売れば金は溜まる。さっさと行くぞ」

シュウヘイはフーケを連れて逃げようとした。
だが、デルフを拾ったサイトが、すばやい動きで先回りして剣を向けた。

「待てよシュウヘイ！」

「なんだ？」

こんな盗賊に手を貸すなんて…やはりこいつは…
サイトのシュウヘイに対する不信感がだんだん膨らんできた。

「そいつを逃がそうってのか？」

「そうだが、そこを退いてもらおうか」

シュウヘイはまるで眼中にないように言った。

「命が惜しければ降参しなさい！あんた見たとこ平民のようだけどその賊の味方なら容赦しないわ」

ルイズたちもサイトの後ろに立って杖を向けた。
見たところ平民だ。なら自分でも倒せるかもしれない。平民相手に大人気ないだろうが、盗賊に加担するなら仕方ない。

「ふん、温室育ちの非力なガキの集りが俺に勝つつもりか？」

ルイズはムカッとなった。この平民、貴族をなめてんじゃないの？いやなめてるわ。

「早く退け。斬るぞ？」

シュウヘイは左手にエボルトラスターを握ると、そこからビームソードが生えてきた。

（あの技…）

サイトはそのビームソードを見たことがある。そうだ、確かネクサスに変身した時にも使っていた技だ。人の姿でも使えるのか？そう、ネクサスの技であるシュトロームソードだ。

「さっきから貴族をバカにして、ふざけてんじゃないわよ！」

ルイズは爆発魔法で（ファイヤーボールのつもりだったが）シュウヘイを攻撃したが、本人には全くダメージがなかった。なにやら光の盾が、彼の身を守ってるように見えた。

「うそ…！」

「だから退けと言っている。何度も言わせるなクソチビ」

より一層ルイズはムカムカと怒りをたぎらせた。こんな平民なんかに…こんな平民なんかに！また魔法を放ってやろうと思ったが、サイトがそれを止めた。

「ちょっと待て！」

不信感は募ってはいる。だがまだ戦いを仕掛けるには納得できない。

「どういうつもりだ!?その盗賊に手を貸すなんて!自分のしていることがどういうことかわかってるのか!?」

「…お前には関係あるまい。失せろ。後ろの連中もな」

シュウヘイはサイトに真実を明かすつもりはなかった。なぜフーケの手伝いをしてるのか、それはテファたちの生活費を少しでも稼ぐためだ。今、トリスタニアと学院を挟んだ位置の森の中に小屋を置いて暮らしている。真面目に働いたくらいじゃとても足りないのだ。だがそれを言ったところで、サイトは納得しても後ろの連中がおとなしくなるとは思えない。

特に、あの桃髪のガキは話なんか全然聞いてくれなさそうだ。

「ただの賊だと思うならそれでもいい。邪魔をするなら…」

シュウヘイは、右手に新たに銃『ディバイドシューター』を取り出した。それを組み立て、今度は緑色に光るビームソードを出現させる。

近接武器『ディバイドセイバー』。ナイトレイダーのディバイドシューターと連動され、接近戦を考慮し新たに開発された武器だ。銃としても剣としても利用できる。

「来い」

「二刀流!?」

ギーシュは声をあげた。自分のワルキューレにもここまでやらせた

ことはない。ちなみにキュルケは…

「ああ…素敵…」

シュウヘイの顔立ちに見惚れていた。こんな状況で…とルイズは呆れていた。

「相棒、あいつやる気だぜ」

「仕方ない…か」

デルフを構え直し、シュウヘイと対峙した。

「ワルキューレ！」

ギーシュはワルキューレを使い、シュウヘイとフーケに向けて攻撃を仕掛けたが、シュウヘイの二本の太刀筋があっさりとワルキューレたちを切り裂く。そしてギーシュの背後に回って、銃の持ち手の部分をぶつけて彼を気絶させた。

「ギーシュ！？」

「速い…」

タバサですら驚いている。

「呆けてる場合じゃないわね…ファイヤー…」

「遅い！」

キュルケも炎の魔法を使おうとしたが、シュウヘイの拳が彼女の腹を突き、彼女も倒れてしまった。

「キュルケとギーシュがこんなあっさりと…」

ルイズは口をパクパクさせていた。少なくとも魔法じゃ二人の方が優れてる。キュルケはタバサにも継ぐほどだ。それがわずか十秒ほとで…

「こここの賊なんかに…！」

ルイズも失敗するとはわかっていたが、杖を構えてシュウヘイに魔法をぶつけようとしたが、シュウヘイはすでに彼女の目の前にいた。

「眠ってろ」

ガス！と拳で彼女の腹を殴り、彼女も意識を失った。

「ジャベリン！」

その隙にタバサが氷の槍でシュウヘイを貫こうとした。が、シュウヘイは剣を向け、なんと真正面からその氷を真っ二つにした。

「…！」

タバサにとってこれは予想外だった。動揺してる間にシュウヘイはタバサも膝蹴りで腹を突いて気絶させた。

「さて、残るはお前だけだな」

「く……」

「どうする。俺はこいつらを斬ってでも逃げ切らせてもらう」

倒れてるタバサに剣を向けている。

「…止せ」

サイトはウルトラゼロアイを取り出した。

「ウルトラマンなのに、ここまで非情になれるのか…平気で人に手を出すのか！」

躊躇わず斬ることも考えるなんて…やはりこいつはただの…悪者だ。以前にも無意味な攻撃を仕掛けてきたし。サイトのシュウヘイに対する不信感はより強くなった。

「お前はウルトラマンじゃない…。俺が…俺が本当のウルトラマンだ！」

ウルトラゼロアイを装着すると同時に、青い光に包まれてウルトラマンゼロに変身した。

「あいつが…ゼロ！？」

フーケ、いやマチルダは驚愕した。まさか彼がウルトラマンだったとは…

いや、確かあいつはシュウヘイにも『ウルトラマン』と発した。

「まさか…」

そのまさか、シュウヘイは剣ををしまい、エボルトラスターを鞘から引き抜き、空に揚げた。

「ハッ！！」

彼も赤い光に包まれてウルトラマンネクサスに変身した。

「やっぱり…」

あいつがウルトラマン…

（テファの奴…とんでもない奴を使い魔にしたね…）

確かにウルトラマンが使い魔、ある意味とんでもないかもしれない。
そのとんでもない者同士の戦いが始まろうとしていた。

「変身までしたというのなら、どうしても返す気はないようだな」

ネクサスの問いに、ゼロはこう答える。

「ああ、お前なんかウルトラマンとして認めるわけにはいかねえ！デュア！！」

「ふん…シャア！！」

二体のウルトラマンは互いに対峙した。

〈パーティクルフェザー！〉

「ハッ！！」

先に攻撃してきたのはネクサスだった。オレンジ色の刃の光弾が連続で放たれ、ゼロに襲いかかった。
ゼロは腕をクロスしてガードした。
だが砂煙の中からネクサスが現れ、連続で飛び蹴りをかます。

「ハァ！」

「グア！？」

その後もネクサスは連続で回し蹴りを放つがゼロはバック転で避けた。そしてネクサスの脚を掴み、ネクサスをハンマー投げのように投げ飛ばした。

「ダアッ！！」

「ウオワアア！！」

ゼロはネクサスを無理矢理起こし、腹を殴りつけた。

「ジュア！！」

「グア！！」

だがネクサスも負けずゼロを捕まえ投げ倒す。

「シュアアア！！」

「ウオワア！」

ネクサスは立ち上がったゼロを殴ろうとするがゼロは避けてネクサスに回し蹴りを頭に喰らわせた。

「デュア！！」

「ウオ！？」

その後も戦いは続いた。ネクサスがゼロに鉄拳を喰らわせる。

「シュア！！」

ゼロがネクサスを投げ飛ばす。

「デュア！！」

ネクサスが空中回し蹴りを喰らわす。

「デヤ！！」

ゼロは槍を使い、ネクサスにガンダールヴの力をプラスした連続突き攻撃を繰り出す。

〈ウルトラゼロランス！〉

「ダダダダダ！」

ネクサスが地面を殴ると同時に放たれた黒い衝撃波がゼロを襲う。

〈滅閃光！〉

「ラアア！」

ゼロのブレスレットから取り出された飛び道具でネクサスを攻撃する。

〈ウルトラゼロスパーク！〉

「ダアッ！」

ネクサスの雷を纏う剣がゼロの体を切り裂く。

〈雷光閃！〉

「シャ！」

二体のウルトラマンは再び睨み合い、互いの拳を放った。

「デュアアア！！」

「デヤアア！！」

二体の拳がぶつかり合い、その衝撃で赤と青のエネルギーが天を登った。

そのエネルギーの余波が宇宙へと飛び立つのを、石堀は望んでいかのように笑って見ていた。

「クク…思惑どおり戦って力を解き放ったか…」

そのエネルギーの余波は、次元の壁をも突き破っていたことを、二人の戦士は知るよしもなかった。

相手を投げ飛ばそうと取っ組み合いをする二体の巨人。

「グウウウ…」

「ヌウウウ…」

そしてゼロはネクサスの腕を掴み、彼をハンマー投げのようにぶん回し、そのまま遠くへ投げ飛ばそうとした。

「ウオオオオオ！！」

だがネクサスは体重をかけ、地面に脚を着け、逆にゼロをハンマー投げのように投げ飛ばした。

「デヤアアアアアア！！」

「ウオアアアアアア！！」

ゼロは地面に激突するも、。。なんとか立ち上がった。ネクサスは挑発の意味を込めてゼロに手招きし、空高く飛び上がった。

「シャア！！」

ゼロも追いかけ、空へ飛び上がった。

「デュア！！」

二人のウルトラマンは足にエネルギーを溜めて必殺の蹴りを相手に向けて放った。

〈アンファンスキック！〉

「シャアアアアア！！」

〈ウルトラゼロキック！〉

「デュアアアアア！！」

二体の蹴りが空の上でぶつかると同時に凄まじい大爆発が巻き起こり、二人のウルトラマンはその衝撃で吹き飛ばされた。

「ウオアアアアアアアアアア！！」

「グアアアアアアアアア！！」

二体のウルトラマンはドスン！と音をたて、地上にに墜落した。

「グッ…」

「グウ…」

その時、ピコンピコン…

ゼロのカラータイマーとネクサスのエナジーコアが点滅し始めた。
それでも決着を着けようと力を振り絞って立ち上がる。
ゼロは人差し指と中指をクロスして額に当てた。
ネクサスも両手を左の脇下に引っ込めてエネルギーを溜めていく。
しばしの間の後、二体の必殺光線が同時に発射された。

〈エメリウムスラッシュ！〉

「デュアアア！！」

〈クロスレイ・シュトローム！〉

「デヤアアア！！」

二体の必殺光線が弾け、一瞬辺りが、目が見えなくなるほど目映い光に包まれた。
その衝撃で二体のウルトラマンは地面に倒れた。そしてエネルギーが切れてその姿を保てなくなり、元の人間の姿に戻った。
フーケは倒れたシュウヘイの元へ駆け寄った。

「シュウヘイ！大丈夫か！？」

「っ…」

シュウヘイはかろうじて目を覚ましたが、立てなくなるほど傷ついていた。
対するサイトは、すでにダウンして意識を失っている。
ちょうどその時、オスマンとコルベールが騒ぎを聞き付けてやって来た。

「オールド・オスマン…」

「ミス・ロングビル、いやフーケ君、何があったか話してもらおうかの…」

「フーケ!?」

コルベールは驚きのあまり絶句した。まさか、気品のある素振りをよく見せていたロングビルがフーケだとは想像してもなかったのだ。

「オールドオスマン!」

そこに目を覚ましたルイズたちも駆けつけてきた。

「一体なにが起こったの?」

キュルケ・タバサ・ギーシュ・ルイズは先ほどまで気絶させられていたので現状を理解できなかった。

「この平民…!よくも!」

なめられた怒りで杖をシュウヘイとフーケに振り上げるルイズだが、対するフーケもルイズに杖を向ける。

「手を出したらただじゃおかないよ…」

「マチルダ…さん…」

オスマンはルイズとフーケの間に杖を突き刺し、それを阻んだ。

「止しなさい二人とも。彼には手を出さん。まずは学院に戻って話を聞かせるとしよう」

彼らは破壊の杖を回収し、サイトとシュウヘイ、ルイズたちを連れて学院へと戻った。

ＥＸ４　任務完了

「って…」

サイトは使用人の厨房でシエスタからの治療を受けていた。ハルナも付き添いで側にいる。異世界なものだから唯一の知り合いの近くにいないとダメな状態だ。もちろん、シエスタは快く思ってない。

「いや～、まさか『我らの剣』でも苦戦はするもんだな。だが盗賊どもを捕まえられてよかったじゃないか」

マルトーが厨房の台所で食器を拭きながら言った。

「俺は無敵って訳じゃない。俺より強い奴はいくらでもいるさ」

サイトがそう言うと、マルトーは突然奥にいる部下たちに大声で言った。

「聞いたかお前ら！」

「「「はい！」」」

奥にいたマルトーの部下たちが一斉に返事した。

「真の達人とは傲ったりしないものなのだ！達人は誇らない！」

「「「達人は誇らない！」」」

「この野郎！俺はお前さんを余計好きになったぞ！どうしてくれる

！」

酔っぱらいのようにマルトーは面白がりながら唇を近づける。

「だあああ！男から接吻される趣味はねえ！」

「ふふっ」

ハルナそんな愉快なサイトの周りを見てクスッと笑った。

「平賀君の周りってにぎやかだね」

「はは…」

楽しそうにハルナと話すサイトを見ていたシエスタは、思わず力んでサイトの手の包帯を思い切り締め上げた。

「あだだだ！」

「あらごめんなさいサイトさん、ちょっと勢い余って…」

口では謝ってるが、彼女の目は全然反省してない。ジェラシービーム。

（シエスタさん怖い…）「そういや、ルイズたちは？」

「貴族の娘っ子どもなら褒美をもらいに行ってるとこさ。全く、話によれば我らの剣の方が活躍してんのによ。全く貴族と平民は不公平だ」

憤慨しながらマルトーは引き続き、皿洗いを続けた。

「そういや、あいつもいたんだよな」

「あいつって、あのシュウヘイって人？」

ハルナは尋ねる。

「ああ、なんで盗賊と手を組んでたか、わからないままだ。話そうともしてくれなかった。なんでなんだ…」

自分と同じウルトラマンであるはずの彼が、なぜ一人の盗賊のために自分に抵抗したのか、疑問だ。

「平賀君、もう一度彼から話聞いてみたらどうかな？」

「もう一度？」

確かに話は訊きたいところだが、あいつは口を割ったりしなさそうだ。何度も話したところで本当に…

「平賀君はよく宇宙人とウルトラマンとの戦いで、地球を狙ってた宇宙人が死んじゃってよく悲しいって…だから…」

そうだ。そうだった。侵略者の死すら嘆く自分が、なぜ話をしぶとく聞こうとしなかったのか。なぜ「お前はウルトラマンじゃない」なんて暴言を言ったのだ。

「…わかった。話聞いてみるよ」

その頃、トリスタニアではアンリエッタとゲルマニア皇帝の結婚セレモニーの準備が行われていた。たくさんの飾り付けの取り付けに、平民も貴族も大忙しだ。しかし、それを当の本人であるアンリエッタは快く思ってない。それはそうだ。ゲルマニア皇帝であるアブレビト三世とは縁もゆかりもない。愛する人であるウェールズと結ばれない嘆きすら癒せない。むしろその傷が深まるばかりだった。

その様子を、母であるマリアンヌは理解していた。
そして学院の品評会が行われる前に、城を抜けてあることをするために学院へ向かっていたことを。

「あの夜、あなたは一体何をしていたのです？」

「アルビオンのウェールズ皇太子へ送った手紙を、最も信じる幼なじみを使いに出して返却させていただこうと頼みに参りました」

アンリエッタは頼めるのがルイズのみだったとはいえ、ルイズを危険な旅に向かわせたことを悔やんでいた。下手をしたら彼女は死んでいたかもしれない。現に護衛に向かわせたワルドが裏切り者だったのだから。だが、もし手紙の存在がアルビオンを支配するレコンキスタに知られたら、奴らはゲルマニアに手紙の存在をバラし、同盟を決裂させようとしたのはわかりきったことだ。
こんな事態を招いたのは、紛れもなく自分だとアンリエッタは自覚していた。

「何なりと私に罰をお与えください」

「いえ、あなたは十分に罰を受けました。想い人の死を」

予想外な返事だった。頭を下げていたアンリエッタは驚くように顔を上げる。

「過ぎたことは運命だと受け入れなさい」

「お母様…」

母の慈愛に満ちた眼差しを見たアンリエッタは、だんだん込み上げ、最後には母の胸の中で涙を流した。

しかし、そこで不吉な知らせが入った。

一人の兵士が二人に跪き、その不吉な知らせを伝えた。

「一大事でございます！」

その頃、ルイズ・キュルケ・タバサ・ギーシュは学院長室に呼び出されていた。シュウヘイとマチルダも武器を奪われ、手を拘束された状態でその場にいる。

「よくぞ破壊の杖を取り戻したのう。たいしたけがもなくて良かったぞい。

君たちの功績を称え、ミス・タバサには『精霊勲章』、他の三人に

は『シュヴァリエ』の爵位を与えようと思う」

「まさかミス・ロングビルがフーケとは、どこで採用したのです？」

コルベールはオスマンに尋ねると、その内容はとんでもなく間抜けなものだった。

「街の居酒屋でのう、給仕をしとったんじゃがあんまり美人なもんで…しかも尻を撫でても怒らんし魔法も使えると言うんで秘書に…。美人なんですっかり騙されてしまったわい」

「そ…そうですな。美人はそれだけでいけませんな！」

ルイズら四人の内三人はアホらしい…と内心呆れていた。その除かれた一人はもちろんギーシュ。

「尻触られても平気なわけないだろ…全く…」

マチルダがそうぼやくと、ルイズはキッと彼女を睨む。

「罪人の分際で偉そうに口きいてんじゃないわよ！全く、なんでオールド・オスマンがあんたたちをここに招いたか疑問だわ」

「まあまあ落ち着きなさいミス・ヴァリエール。わしこの二人から話を聞きたかっただけなんじゃよ」

「ところで…サイトには何もないのですか？」

ルイズにそう言われたオスマンはふう…と申し訳なさそうに息を着いた。

「残念じゃが彼は平民じゃ。できればわしも恩賞を与えてやりたいところじゃが…」

「要りませんよ」

遮るようにサイトが学院長室に入ってきた。

「すみません、ノックしても返事なかったんで勝手に入っちゃいました。
それより俺、話があって来たんです」

「話か…よかろう」

オスマンは話を聞く態度をとった。

「まず、シュウヘイ」

サイトはシュウヘイの方に向き直った。

「なんで盗賊に手を貸した?」

「サイト、話なんかしなくたっていいでしょ!こいつらは単なる悪人、金使ってただ遊んでるだけなのよ!」

ルイズは、悪は悪と割りきってる。悪人なんかに慈悲など無用だと思っていた。貴族に対して舐めきった態度と行動ばかり示し、貴族の誇りを傷つけたこの二人を一貴族として断じて許せなかった。
だが、サイトは首を横に振った。

「悪人ってさ、生まれた時から悪だと思うか？」

「は？」

「だってさ、悪の道に走る奴は、それほど辛い人生を歩んでしまったせいもあるだろ？例えば仕事ができなくて生活費が無くなりかけてるとか、仕事でひいきされまくって金が貯まらなくなるとか」

「ご主人様に意見する気！？いいこと！トリステインの法律じゃ貴族の誇りを侮辱した盗賊を処刑するのは当然の話よ！」

「処刑だと…ふざけるなよ！」

処刑、地球にいた時から彼が最も嫌う刑。どんな悪でも貴重な命だとサイトは思っている。とても苦労はするだろうが、きっと道に光を灯すことができるはずだと。だから、悪は処刑されて当然なんてルイズの考えは本気で気に入らなかった。

そこにオスマンも口を挟む。

「ふむ…サイト君気持ちはわかるが、フーケによって貴族にかなり被害が及んでるのは事実じゃ。加担した者も同罪。それにフーケを捕まえたことを知ったら、堅物の貴族どもはその二人を直ちに処刑せよと言うのは間違いない」

「ほらご覧！あんたの甘さなんかでこの事態は解決できないのよ！」

オスマンの言葉とルイズの当然だと盲信する言葉に、サイトはもう我慢ならなかった。

「じゃああいつが、トリスタニアの街を救ったウルトラマンだと言

っても処刑処刑なんて言えるんですか!?」

「「「「「!!!?」」」」」

部屋は一度、静まり返った。

「彼が…ウルトラマン…!?」

コルベールは思わず声を漏らした。

「こいつがウルトラマンですって…!?そんなバカな話あるわけないでしょ!あんたバカ!?そんな嘘をついてまでこいつに肩入れするなんて変よ!」

もちろんこんな普通あり得ない話を、異常な頑固さを持つルイズがホイホイと信じるはずがない。

「シュウヘイ君、じゃったな?それは誠か?」

オスマンはシュウヘイの顔をジッと見る。尋ねはしたが、長く人を見てきたせいか薄々感づいてはいたが。

「……私、見ました」

ここで珍しく、タバサが口を開いた。

「彼は以前、トリスタニアに現れた怪獣に苦戦したウルトラマンゼロを救うべく、銀色のウルトラマンに変身したところを見ました」

「それ、本当なのタバサ?」

キュルケは驚いていた。もちろんシュウヘイがウルトラマンであることもあったが、タバサがこんな犯罪者のために証言するとは思ってもなかった。

「嘘じゃない。この目で見た。間違いない」

「ミス・タバサまで彼の正体を見たことがあるとはの…」

「だったら証拠は、証拠はあるの！？」

ルイズは嘘をつくタイプじゃないタバサの発言にも納得しきれてない。

「…余計なことをベラベラと」

シュウヘイは小さく呟いた。

「じじい、証拠ならある。俺から没収したものを出してもらいたい」

「こいつ…オールド・オスマンになんて口の聞き方を…」

いい加減にしろと言うだけでは済まされない。口の聞き方を習ってないのかと、ルイズはよりシュウヘイを気に入らなくなった。

しかし、対するオスマンは意外にも笑っていた。

「ほほ、じじいとは大きく出たの。ほれ」

机から引き出されたのは、マチルダの杖とシュウヘイが持っていた二本の銃、ディバイドシューターとブラストショット、最後にその

証拠になりうるエボルトラスター。

「コルベール君、彼の拘束を」

「は、はい」

オスマンに言われたコルベールは拘束具の鍵を使ってシュウヘイの拘束を解いた。

もしもの時を考え、ルイズは杖を構えるが、サイトは「止せ」と言って杖を降ろさせた。

シュウヘイはエボルトラスターを手にとり、それを引き抜くと同時に赤い光に包まれた。

光が晴れた場所には、シュウヘイの代わりに等身大のウルトラマンネクサス・アンファンスが立っていた。

「そんなバカな…」

ギーシュはショックのあまり気絶寸前になっている。キュルケも空いた口が塞がりそうになかった。

「これで、納得するか？」

ネクサスは元のシュウヘイに戻ってオスマンに言う。

「わかった。では理由を話してもらおう」

オスマンは再びシュウヘイの顔を見て話を聞く態度を作る。その時のシュウヘイはマチルダの方を見た。彼女の目は『あいつがエルフだってことは絶対伏せろ』と語っていた。対するシュウヘイも『大

丈夫だ』と頷いて返した。

「俺を召喚したマスターがいる。彼女は今、たくさんの戦災孤児たちを養いながら生活している。俺とフーケ、いやマチルダさんも生活費を稼ぐために働いてはいるが、平民が頑張って働いてもそう何人もの子供たちを養える金は貯まらない。楽してる貴族よりも遥かに収入が低すぎるからな」

「だから二人で、盗みを働いてでも生活費を稼ごうとしたと言うのかね？」

「ああ」

そこでルイズが抗議の声を上げた。

「そんなのただの言い訳じゃない！そんな汚いやり方で手にしたお金で育ててもらっても…」

嬉しいはずがないではないか。盗みを働くより、まともに働いて手にしたお金の方がいい。

だがシュウヘイは冷静に言い返した。

「さっきも言わなかったか？どんなに頑張って働いても貴様ら貴族の収入より遥かに低いとな。平民の一生分と貴族の一年分を比べても、かなりの差だ。それでも何人ものガキの生活を支えられると？」

そう言われたルイズは、返す言葉を見つけられなかった。ゼロとバカにされた自分は、幼いころから贅沢な暮らしをしていたものだから、平民の苦しみや事情を全く理解してなかった。この二人は貴族の身勝手な事情の犠牲者とも言えるのだ。

「俺のマスターはまだ17、俺よりまだ一つ下だ。あいつは話すこともできない事情で表の世界に出られない。働けるのは俺とマチルダさんだけだ」

そうだったのかよ…

「そうならそうって言ってくれよ」

やっと理由を聞けたサイトはスッキリしたような表情を浮かべたが、シュウヘイは言葉を返す。

「ベラベラ喋ればいいって訳ではないだろう？嘘と疑われても仕方のない理由だ」

「でも、このままの生活だと生活費は稼げないだろ？また盗みを働くのか…」

「だろうな…」

この場は少なくとも凌げるかもしれないが、どのみち金がないことに変わりない。いずれ金を稼ぐためにまた盗みでもやらなくてはならなくなるのだ。

そこでオスマンが一つ提案した。

「わかった。ならわしが生活費を送ることとしよう」

「そんな、オールド・オスマンが生活費を！？」

こんな平民のためにみすみす貴族の金を渡すと言うのか？声を漏ら

したルイズは愚か、他の貴族組も驚きを隠せなかった。

「いや、この年になると金の使い道が無くなってしまっての、なら有効活用できるものが使う方がよい」

オスマンはそう言い、たくさんの金の詰まった袋をシュウヘイに手渡した。

「エキュー金貨が２００ある。しばらくは持つはずじゃ。また足りなくなったら来なさい」

「いいのか？」

「いいから言っておるのじゃろ。さて、次はミス・ロングビル」

マチルダの名を仮の名前で呼んだ。

「引き続き秘書として働いてくれるなら高収入を約束するぞい。契約書も書いておいたわい」

その契約書を受け取ったマチルダだが、頷かず一度オスマンに返した。

「よっぽどのことじゃない限りは受けられないよ」

ロングビルとして働いてる間、オスマンから日に日にセクハラされまくったトラウマのせいもあった。盗賊とはいえ女、セクハラは女の敵なのである。

「契約書はそのままとっといてください、オールド・オスマン」

ロングビルらしく礼儀正しいお辞儀をして言った。

「うむ、ちょっと残念じゃのう…」

名残惜しそうにマチルダの胸と尻を眺めるオスマン。やはりどこぞの○仙人みたいなスケベは健在だった。

「あの…まだ話一つありますが」

お楽しみのところ申し訳なさそうにサイトは手を上げて言った。

「『破壊の杖』、あれをどこで手に入れたのですか？あれは俺のいた地球の兵器なんです。
名前は『エレクトロHガン』。ウルトラ警備隊と呼ばれた組織の武器です」

オスマンもかなり重要な話に映ったのか、表情と目付きを変えて答えた。

「もう何十年も昔じゃ。わしが『彼』と出会ったのは…」

何十年もの昔、わしは山中で薬草拾いをしていた。

そろそろ帰ろうとした時、巨大なワイバーンがわしを餌にしようと襲いかかってきたのじゃよ。

不覚にもわしは杖を奪われてしまい、絶体絶命の状態じゃった。じゃが、そんなときじゃったよ。彼がわしを助けたのは。

『そこの人！下がってくれ！』

その声の直後、わしはその声の通り下がると、凄まじい威力のある爆発でワイバーンは砕け散った。

爆発を起こしたその弾の飛んできた方を見ると、多少傷を負った一人の男が破壊の杖を持って立っておったのじゃ。彼は変わった格好をしておった。ハルケギニアにはない材質でできた灰色の服に赤の目立つ兜を被っておった。

彼はこう名乗った。

『私はウルトラ警備隊のキリヤマ・カオルだ』と。

その後、彼は君の言う『ウルトラホーク1号』とやらでタルブ村の方角へ飛んでいってしまった。

「キリヤマ隊長！？」

ここでまたしてもキリヤマの名を聞いた。シエスタのひい祖父さんであることは以前きいたが、まさかオスマンとも面識があったとは…

「キリヤマ…彼を知っておったのか？」

「ええ、俺の父の上司だった人です」

話を簡単にまとめるとこうだ。
この世界に着いたとき、ワイバーンに襲われたオスマンを見かけ、エレクトロHガンで彼を救い、その後はタルブで残りの一生を終えたのだ。

「君を見るとキリヤマ君を思い出すのう…彼は貴族以上の強靭な魂を持っておったとわしにもわかった。君からも彼に似たそれを感じる」

「俺はそんなんじゃないですよ…」

照れるようにサイトは頭の後ろを掻く。
そんなサイトの左手を、オスマンは手にとってじっと見つめる。

「それに…これはガンダールヴ。君の使い魔である証じゃ。これは遥か昔にも活躍したとされた伝説の使い魔じゃ」

「…ワルドも言ってました。伝説の使い魔だってことは」

「お前がガンダールヴ…か」

そこでシュウヘイが口を開いた。すると突然、上着を脱ぎ出した。

「ちょちょ…何してんのよ!?」

思わずルイズとタバサは赤面しながら顔を伏せ、キュルケはまた顔をニヘラ…と緩ませた。

「…これって…」

彼の胸に刻まれたルーンを見てオスマンとコルベールは目を見開いた。

「リーヴスラシル、ガンダールヴとやらと同じ、伝説の使い魔らしい。それが俺の力となっている」

そして石堀から始祖とガンダールヴらを含む四体の使い魔に関してある程度のことを伝えた。

オスマンたちが驚いたのは、その石堀と呼ばれた男がなぜハルケギニアの人でもいのに知っていたことだった。

「石堀…彼は何者なのじゃ?」

「…奴は、危険な奴だ。少なくともそれしか言えない。関わればあんたたちも命はないのは確実だからな」

ウルトラマンであるシュウヘイも恐れる存在、一体どれほどの力を持つ男だろうか、シュウヘイを除くその場にいた者たちは想像もつかなかった。

「とにかくこれまでの話は他言無用が鉄則じゃな。もし漏らせばそれなりの罰則を加えるとしよう」

オスマンはそう提案した。

「さて、今夜はフリッグの舞踏会じゃ。今回の任務の疲れを忘れて着飾るとよかろう」

「あ…そうでしたわ！」

キュルケは忘れていたことを急に思い出すように手を叩いた。

「ねえ、せっかくだから私と踊って愛を育まない？その凛々しい顔と鍛えぬかれた体は魅力だわ～…」

キュルケはいきなりシュウヘイを誘惑しようと抱きついてきた。が、シュウヘイはうっとおしそうに彼女を突き放した。

「あらん？」

「興味ないな」

「き、興味ない…！？」

ワルド以外でそんなこと言われたのは初めてだった。今まで落としてきた男たちは失神するくらい喜んでいたというのに…

ワルドの時以上のショックを隠せない一面を見たルイズは思わずニヤリと勝ち誇るように笑った。

「ならあんた、私の従者にならない？お金必要なんでしょ？それなりの報酬は弾むわ」

ウルトラマンであるこいつを従者に引き込めば誰もゼロのルイズなんて呼ばないはず！威張るように胸を張るルイズだが、返答はキュルケ以上にひどかった。

「貴様のような生意気なチビガキに仕えろと？冗談じゃないな」

プチ…

「ぬわあああんですってえええええ！！！！！？？」

「止せってルイズ。お前確か金払うだけの小遣いなかったろ？それに食事はわびしいし…」

「余計なこと言うな！」

金！ルイズの蹴りがサイトの股間を突くと同時にサイトは崩れ落ちた。

「よ…よくも人の切ないところを…蹴ったわね…」

「うっさい！とにかく、なんでなのか理由を聞かせなさい！」

サイトの瀕死っぷりを無視しルイズはシュウヘイを睨む。

「お前は俺をウルトラマンだからという理由で引き入れようとしたな？」

「そうよ！ダメなら、そのウルトラマンに変身するためのマジックアイテムを置いていきなさい！
貴族でラ・ヴァリエールである私に相応しいわ！」

はっきりシュウヘイはこう思った。
ルイズはデュナミストにはおろか、どの世界のウルトラマンにも『永遠に』選ばれないタイプだ。

「だったら尚更だ。俺の、ウルトラマンネクサスとしての力は単なる力じゃない」

そうだ。彼が尊敬する今までネクサスとして戦ってきたデュナミストたちの『絆』の証でもあるのだ。こんなふうに、力を手にしたらすぐ威張りそうな小娘に渡したくない。

「簡単に言えば、貴様にウルトラマンの力など不相応だ」

「ぐギギギ…！」

ルイズは悔しそうに歯ぎしりした。無理やり奪おうにもシュウヘイの元の力と比べても遠く及ばないし、これ以上平民に求め続けたら貴族の面子が丸潰れだ。結局ルイズは諦めることにした。

「なあシュウヘイっての」

サイトの背中に背負われていたデルフが、鞘から顔を出した。

（剣が喋ってるのか？）

「その胸に刻まれたルーン…本物か？」

「そうだが、どうかしたのか？」

「あ、いや…なんでもねえ…」

デルフは一体何を言おうとしていたのだろうか。まるでその口調はいつものお調子者じみた彼とは違う、何かを恐れてるようだった。

（俺っちの思い過ごしか？いや…確かあのルーンは…）

とその時、シュヴルーズがあわてて学院長室に飛び込んできた。

「何事じゃミス・シュヴルーズ！？」

「たた、大変です！アルビオンがトリステインとの同盟を破って宣戦布告を！」

その頃、タルブ上空に待ち構えていたレコンキスタ艦の甲板で石堀とサイマはあるものを待ってるように空を眺めていた。

「奴らをぶつけたことで、あの強大な怪獣が呼び出されたか」

とサイマ。

「さて、自分たちのせいで『あの怪獣』が呼び出されたんだ。奴らがどう責任をとるか、見ものだな」

石堀たちの、更なる闇を求める計画はさらに先を進むこととなっていた。

その空の上に空いた時空の穴から、巨大な怪物の頭が一瞬だけ見えた。

EX5　ゼロ&ネクサス　二人の戦士の共闘

「アルビオンが攻めてきたと!?」

現在、アルビオンとトリステインは、アルビオンの王党派が国を治めていた頃から同盟を結んでいた。血縁関係も深く、両国が戦うことなど決して考えられなかった。

「始祖ブリミルの名において同盟を結んでおきながら…許せないわ!」

怒りを露にするルイズ。しかしサイトは当然のようにも感じた。

「あり得るだろ。何せ、婚約者であるうちのマスターを平気な顔して裏切りやがったんだ。そいつらみたいな連中が今アルビオンを支配してるんだろ?」

そう言われると、確かにそうだ。今アルビオンを支配しているレコンキスタは、卑怯な真似を平気でやる人間すら味方に引き入れている。それにアンリエッタの結婚式の準備が行われてるこのタイミングで宣戦布告とは、不意討ちを狙ってきたとも考えられた。

「コルベール君、ミス・シュヴルーズ。二人は生徒たちに慌てず速やかに避難させるように呼び掛けるのじゃ」

「わ、わかりました!」

コルベールとシュヴルーズは急いで学院長室を出て行った。

「……」

何かの気配を感じ取ったシュウヘイはエボルトラスターを見る。クリスタルが心臓の高鳴りに似た音を鳴らしながら点滅していた。
目を閉じると、瞼の内に外の光景が見える。
レコンキスタのものと思われる戦艦が数隻、その上空に、巨大な暗雲が渦を巻いている。
やはり、奴らが…

シュウヘイはエボルトラスターを握りしめ、学院長室の扉に歩き出した。

「ちょっと、どこ行くのよあんた!?」

こんな罪人を目の前で逃す訳にはいかないと、ルイズはシュウヘイの前に立ちふさがった。

「邪魔だ。退け」

「退くわけないでしょ!自分の立場わかってて出ようとしてるの!?」

「ああ、やるべきことができた。それだけだ」

「やるべきことってなんだよ?」

サイトがシュウヘイに歩み寄って尋ねてきた。

「レコンキスタのバックに、俺の倒さねばならない敵がいる。そいつらを倒す」

「石堀って奴のことか？」

「そうだ。さて、チビガキ。わかったらそこを退いてもらおうか」

ルイズの方に向き直っていうが、ルイズは下がろうとしない。シュウへイへの不信感は絶頂のままだ。

「お前たちの故郷が潰されても構わないのか？」

「あんたが潰す気じゃなくて？」

もしかしたら、こいつがトリステインを滅ぼしに来たのではと疑い始めていた。一度ウルトラマンゼロを助けたのも、実はそのための自作自演では？

サイトはこれ以上はキリがないと思い、ルイズを止めるように彼女の肩を掴む。

「ルイズ、いい加減にしろよ。貴族ってのはそんなに疑り深いのか？大人気ないとか思わないのかよ？」

「っ…」

確かにこれ以上は醜態しか晒せそうにない。それに、よくよく考えたらこいつはウルトラマンでなくても強い。立ち塞がるだけ無謀だ。しぶしぶサイトの言う通り下がることにした。

「マチルダさん、あんたもここを出るぞ。急いであいつらのところに戻ってくれ」

「あ…ああ、わかったよ」

二人は学院長室をあとにした。

「…俺も行くか」

サイトもシュウヘイたちの後を追うことにした。

「ちょ、サイト！待ちなさいよ！」

放っておくことができなかったのか、ルイズも彼らの後を追いかけた。

「ああくそ！もういなくなってたか」

シュウヘイたちはもうすでにどこかに消えてしまっていた。

「でも確か、レコンキスタのバックに倒すべき敵がいるとか…」

ホークを飛ばせば、何か掴めるだろうか。おそらくシュウヘイもそこに向かっているはず。倒すべき敵…今まで現れた怪獣たちとの繋がりもあるかもしれない。現にラグドリアン湖の水の精霊も苦心していたのだ。

「よし、行ってみるか」

ホーク一号の入り口は真下から入るようになっている。微妙な隙間が船底の真ん中にできているので出入りに関しては問題ない。

操縦席に座り、ホークのエンジンを入れたその時、別の誰かが後ろの席に座った。

ルイズだった。

「ルイズ、何で!?」

「私は貴族よ。レコンキスタなんて賊に背を向けたくなんかないわ!あんたもきっと奴らのところに向かう気でしょ?」

「だけど、危険だ!今すぐ降りろ!」

もしウルトラマンが絡むほどの事態になったら自分の正体までバレる可能性が大きく、それに彼女の身に危機が迫るかもしれない。下げなくては。

だが、ルイズはここで引き下がるような女ではなかった。

「危険なのはあんたも承知の上でしょ!私は、アルビオンじゃ何もできなかった。フーケの時だってあんたに頼りっぱなしのままだった。だから、あいつからウルトラマンの力をぶん盗ってでも、姫様やみんなのために力を奮いたいって思ってる!だから、連れていくだけでも連れてって!」

何も私利私欲ってだけではない。大切な幼なじみの思いに応えたい。

だからシュウヘイからウルトラマンの力を取り上げようとしたり、

従者として雇おうと考えたりもしたのだ。（デュナミストの意思がなければ、シュウヘイに代わってルイズはウルトラマンになることはできないが）

「相棒、こうなったら全然聞かんぜ。この娘っ子は」

デルフが鞘から顔を出して言った。

「……命の保証はできねえぞ」

「わかってるわよ」

「けど…」

ちょっと照れ臭そうに頭の後ろを掻いてサイトは言った。

「俺がお前を守る。お前だけじゃない、みんなも絶対にな」

その時のサイトの目は、彼女が見てきた男性の中で最も凛々しく見えた。途端ルイズは顔を赤くする。

「あっ当たり前じゃない！あんたは私の使い魔なんだから！」

「さて、ちょいと時間喰ったな…行くぞ！」

操縦席のハンドルを握り、サイトはウルトラホーク一号を発進させた。

マチルダにはトリスタニア郊外の森にいるテファたちを頼んでいる。ウェールズもいるし、きっと大丈夫だ。

シュウヘイはストーンフリューゲルの中にいた。この石像は飛行機代わりに飛ばすことも可能なので、これを使って目的地へ向かっている。

現在はタルブの辺り。

外の景色を見ると、レコンキスタの攻撃でその辺りにある花畑や森が荒れていく。

その付近の住人たちは逃げ場を失い、無残にも艦隊の攻撃によって力尽きていく。

（石堀め…罪無き連中に手をかけてまで人の心の闇を増やすつもりなのか…！）

シュウヘイの乗るストーンフリューゲルはレコンキスタのある艦隊に向けて急速に飛んだ。

トリスタニア中にもレコンキスタが攻めてきた情報が渡っている。

急いで平民や力なき貴族たちを避難させ、アンリエッタは自分を総大将に軍を出した。
すでにレコンキスタからの攻撃が始まっている。

「なんとしても戦艦を落とせ！」

トリステイン軍の隊長の一人が兵士たちを鼓舞するが、敵の力は半端なものではない。空から敵の砲撃が降り注ぎ、地上のトリステイン軍を次々と倒し、空中戦でもドラゴンの攻撃でトリステイン軍のグリフォン部隊は呆気なく減らされていく。

「あんなの…どうやって落とせと言うのだ…」

戦力は圧倒的不利。トリステイン軍に勝ち目はなかった。

「ウェールズ様…」

どうすればこの状況を乗りきれるのだ?アンリエッタは倒れゆく兵士たちを悲痛な思いで見つめていた。

「ひでえ…」

外を見つめながらサイトは唇を噛み締めた。シエスタの故郷、タル

ブが荒れ放題となっている。
レコンキスタのバックにはきっとサイマが…

自分と同じ名前を持っていた彼が、こんなことをさせていたら、許してはおけない。

（なんでだ…なんためにこんな…）

「サイト！前から敵が！」

ルイズの声で我に帰るサイト。幾人かの龍騎士たちがサイトたちの乗るホークに迫り、風や火の魔法を放ってきた。
だが、ホークにはわずかに傷が入るだけだった。

「何！？魔法が効かないだと！？」

ウルトラホークをはじめとした地球の兵器は怪獣の攻撃でやっと落とされるほどの丈夫さを備えている。怪獣よりも小さな攻撃にはビクともしない。

「すごい防御力ね…」

「本来は怪獣と戦う兵器だからな。簡単にゃ落とされないぜ」

サイトはハンドルを動かし、レコンキスタの一つの艦隊に向かう。

「ちょ…いきなり大将狙い！？」

周りの敵は放っておく気なのか！？
しかし、サイトはそれを当然のように言った。

「こいつは人に向けるもんじゃねえ！履き違えるな！」

もしこれで人を落としたら、今は亡きキリヤマ隊長に申し訳が立たないし、サイト自身人殺しなんか絶対にしたくなかった。だからレコンキスタの親玉のいる戦艦さえなんとかすれば敵の兵士は活動できなくなる…と思ったのだ。

「このデカブツ…！」

帆を狙い撃とうと標準を合わせ、ロックオンする。いざ発射しようとしたその時だった。

操縦席のモニターに突然映像が映し出された。

「え！？」

ルイズは目を疑った。これは鏡じゃなかったはず。だがいくら擦ってもその視界は変わらない。なぜなら、そのモニターの中にまでサイトの顔が映っていたのだ。しかし、何か変だ。モニターに映るサイトの顔は、とてつもなく邪悪な雰囲気を漂わせている。

「お前…サイマ！」

そう、ダークロプスゼロことサイマだった。
その黒い漆黒の瞳が光った瞬間、ルイズは突然座席の上で意識を失ってしまう。

「ルイズ！？」

『安心しろ。眠らせただけだ。お前とだけ話しておきたいと思ってな。
まさかウルトラホークを使ってくるとは思わなかったぞ。だが…』
モニター内のサイマは指をパチンと鳴らすと、不気味な暗雲が渦を巻く映像が映された。
「これは…？」
『こいつはお前と、ネクサスに選ばれた男が力をぶつけ合ったことで空いた、いわばワームホールさ』
「ワームホール…だと？」
『あのワームホールから凄まじいパワーを持つ化け物が現れる。あれを呼び寄せたのはお前とその男だ。責任とって早く始末しないと大変なことになるぞ？』
そこでサイマからの通信はプツン！と切れた。
「俺が怪獣を呼び寄せただと…？」
サイトが、この世界を守るどころか破壊を助長したような言い方ではないか。
いや、実際にはそうなっていた。彼がシュウヘイの変身したネクサスと戦い、その凄まじいエネルギー同士の激突のせいで次元の壁に穴が空いてしまったのだ。その先に潜むのはおそらく、怪獣。それもかなりの強敵のようだ。
サイトは外のワームホールを見ると、中央から巨大な化け物の頭が

這い出てきた。ウルトラマンがすっぽり飲み込まれてもおかしくないほどの頭と口。

『巨獣ゾーリム』

ゾーリムは波動弾を吐き、ホークを落としにかかってきた。

「くっ…にゃろう！」

ハンドルを動かし、波動弾を避けた。そしてお返しにビームをゾーリムに向けて発射する。が、ゾーリムはびくともしなかった。でかすぎるだけでなく、体が丈夫すぎるのだ。

その時、ゾーリムの波動弾がホークに再び迫り来る。次も避けようとしたが、今度はホークの右翼をかすった影響でホークはバランスを失い、地上に落ちていった。

ハンドルが効かない。このままだと地上に激突する。

「っ…デュア！」

サイトはウルトラブレスレットからウルトラゼロアイを装着し、変身した。

ストーンフリューゲルに乗っていたシュウヘイは、レコンキスタの

戦艦に降りた。
この戦艦のどこかに、石堀がいるような気がする。レコンキスタ兵を利用して何かを企んでいる可能性が高い。

「貴様、そこで何をしている！」
シュウヘイの格好は明らかにレコンキスタ兵とは異なっている上、現在はトリステイン軍との交戦で見張りが厳重な状態のため、すぐに侵入はバレた。が、そんなことはどうだってよかった。すぐ石堀を探し出さなくてはならない。

「捕らえろ！」

レコンキスタ兵たちはシュウヘイを捕まえようと杖を取り出し、彼に襲いかかってきた。

「どけ！」

シュトロームソードとディバイドセイバーの二本を手に、シュウヘイはレコンキスタ兵を次々と斬り倒していく。
リーヴスラシルの力でその剣には炎や風が纏い、敵兵の鎧を砕く。

〈炎竜昇！〉
〈覇風撃！〉

「「うわあああ！」」

この騒ぎを、レコンキスタの総大将クロムウェルも聞き付けた。

「なっ、なんだあやつは！」

見たところただの平民のようだが、あの光る剣はなんだ？しかもメイジのように炎や風を使っている。しかも、剣が氷を纏い甲板を突き刺した瞬間、いくつもの等身大の氷山が現れ、兵の体を刺していった。

〈氷狼牙！〉

「な…何をしておるか！あんな平民ごときに！」

クロムウェルはヒステリックな声で兵たちに怒鳴り散らすが、シュウヘイに攻撃を当てきることはできずにいた。龍騎士もシュウヘイのブラストショットとディバイドシューターで羽を撃ち抜かれ、落ちていく。

戦艦の兵は全滅こそしなかったが、怖じけついて彼に立ち向かう者はいなくなっていた。

「ええい何をしているんだ役立たずどもめ！」

とクロムウェルが苛立つが、その隙に光る剣が彼の喉元に突き付けられていた。殺気を込めた目付きでシュウヘイが目の前に立っていた。

「ひっ…」

「あんたが…クロムウェルか。今までずいぶんとなめた真似してくれたな。ビーストを操って反乱を起こすとは…」

クロムウェルを許せない心でいっぱいだった。ビーストを戦争の道具に使い、あまつさえ自分までも利用しようとしていたこの男をシ

ュウヘイはどうしても許せなかった。
周りの兵たちはシュウヘイへの恐れと主の自由を奪われたせいで手が出せずにいた。

「まま…待てい！私は始祖ブリミルより虚無の力を受け継いでおる！もし私を殺せば始祖からの裁きが…」

「そんのもの怖くもなんともない」

そんな迷信そのものと言える言葉をシュウヘイは信じなかった。事実、クロムウェルは身に付けている『アンドバリの指輪』の力で自分が虚無の担い手だと誤魔化していただけで、実際は平民だったので、まるっきりの嘘だが。

「さて、貴様に聞きたいことがある。石堀はどこだ？貴様らのバックに奴がいることは知ってる」

後数ミリのところまで剣先を近づけるシュウヘイ。彼を知る人物たちから見れば、その時の彼の目はとてつもなく冷たいものだった。

「ひっ…やっ止めろ！止めてくれ！」

恐怖で足を震えさせるクロムウェル。もはやアルビオンの新たな王としての面影はない。
その時、ドスッ！と生々しい音が鳴り、クロムウェルは床に倒れ込んだ。

「ミスタ・イシボリならここにいないわ。残念だったわね」

血のついたナイフを手に、シェフィールドが不気味な笑みを浮かべ

て立っていた。

「シェフィールド殿!?なんの真似です!?閣下を刺すなんて…」

シェフィールドは表向きはクロムウェルの秘書。だからレコンキスタ兵たちはシェフィールドの予想外な行動に困惑する。

利用した者を刺したと言うことは、おそらく用済みということになる。彼女は動かなくなったクロムウェルの指からアンドバリの指輪を抜き取った。

「あんたは…?」

シュウヘイは剣を向けて尋ねる。

「シェフィールド、と名乗ってるわ。以後お見知り置きを、我が『同胞』」

「同胞だと?」

一体この女は何を言っている?

いや、そんなことより…

「石堀を知ってるのか?」

「知ってるも何も、私の仲間だからねぇ…ふふ」

悪役らしい色気と狂気を混じらせた笑みを浮かべる。

「あの方から大体聞いてるわ。恋人殺しのデュナミスト…だとね」

プチ…
瞬間シュウヘイはシェフィールドを撃った。が、撃ち抜かれたシェフィールドの姿は小さなボロボロの人形となって甲板に落ちた。

「スキルニルか…チキンな女だ」

とその時、ゾーリムがシュウヘイの乗る戦艦に波動弾を撃ち込んだ。戦艦から火が上がり、墜落していく。

「「「ぎゃあああ！」」」

レコンキスタ兵たちは逃げ始めるが、逃げ切れなかった者は落ちる、焼き尽くされるなど無惨な最期を遂げていった。

「ちっ…」

シュウヘイも宙へ投げ出されたが、瞬時に鞘から引き抜いたエボルトラスターを掲げ、赤い光に身を包み変身した。

ゾーリムの被害は地上にまで及んだ。レコンキスタとの戦いで限界だった時にに、怪獣からの追い討ちはトリステイン軍にとって地獄の一時だった。

「ぎゃあああ！！」
「うわあああ！！」

「全軍引き上げなさい！怪我人も連れて待避するのです！」

アンリエッタは犠牲者を増やしたくない一心で兵たちに呼び掛けた。
その時、青と赤、その二つの光は二体の巨人の姿となって地に降りた。

「ウルトラマンだ！」

「おお、来てくれたのか！」

ゼロは自分が乗っていたホークを、中に乗っているルイズを起こさないように下ろした。

「俺とお前が戦ったせいで、あの怪獣は現れたらしい」

ネクサスの方に向き直ってゼロは言った。

「なら、責任とって倒すまでだ。無論、行けるんだろうな？」

「当然！ジュア！」

「シェア！」

ゼロ、ネクサスの順で二人のウルトラマンは空へ飛び出した。

ゾーリムは、今度は炎を吐き出し二人のウルトラマンを攻撃した。

〈ウルトラゼロディフェンダー！〉
〈サークルシールド！〉

二人はブレスレットから出現させた盾、そして光のバリア状の盾を

作り出して防ぐも、その凄まじい炎の威力に耐えきれず、押し返されて地上に叩き落とされた。

「ウワアアアッ！」
「ヌワアアアア！！」

地上に落ちた二人への追撃として、ゾーリムはさらに火炎放射で地上を攻撃する。

「グォア…ち！」

〈パーティクルフェザー！〉

「くそ…デルフ、行け！」

「よっしゃ！」

〈ゼロスラッガー！〉

ネクサスの刃状の光弾、ゼロの二本のブーメランがゾーリムに向けて飛ばされるが、その炎を突き抜けるまでに至らず、パーティクルフェザーは消滅、ゼロスラッガーは弾き飛ばされてゼロの頭に戻ってきた。

「あっちち！ありゃ近づきようがねえぜ！」

ゼロスラッガー（デルフ）が火傷をしたかのように声をあげる。

（でかすぎて、メタ・フィールドに誘い込めないな…）

ネクサスも、巨大かつ強大な敵に頭を悩ませた。
ゾーリムの攻撃はそれからも続き、地上の草原は火の海と化していた。

「ウルトラマンでも手が出せないなんて…」
「もうおしまいだあ…」

トリステイン軍から絶望の声が聞こえてきた。

「…」

ウルトラマンたちがゾーリムと戦ってる頃、ルイズはサイマの催眠術からようやく目を覚ました。

「あ…私…」

サイトがいないことにまだ気づいてない。重い腰（太ってなんかないんだからね！）を上げ、立ち上がると、オスマンから受け取っていた始祖の祈祷書が落ちていた。すぐ拾わねばと手に取ると、不思議な現象が起こった。
偶然、すべて白紙でしかないページの一枚を開くと、アンリエッタからもらっていた水のルビーの輝きと共に、文字が一つもなかったそのページに光る文字が次々と現れ、彼女の目に飛び込んでいく。

これより我が知りし心理をこの書に記す
これを読みし者我が行いと理想と目標を受け継ぐ者なり
以下に我が扱いし“虚無”の呪文を記す

初歩の初歩の初歩
エクスプロージョン

同時に彼女はまるで何かに憑依されたかのようにホークの外に出て、遥か上空にいるゾーリムに向けて杖を向けた。
杖を向け、彼女の口から何かの不思議な呪文が発せられる。それは、今の時代では誰も聞いたことのない呪文…

エルオー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ…

呪文を唱え終わった瞬間、辺りは真っ白になった。

「っ…なんだ、今のは…？」

（なんだったんだ…今のは…）

一瞬辺りが真っ白になって見えなくなったと思ったら、一体何が起こったのだろうか。ゼロとネクサスは目を空に向けると、ゾーリムの様子が先ほどよりおかしい。

「グガアアアァアアアァ！！」

何やら苦しんでいる。

「今のは…娘っ子か！」

デルフが閃いたように声を上げた。

「娘っ子って…ルイズが！？」

「目覚めたのさ。伝説の系統“虚無”の力によ。遂にお前さんの主としての力を発揮したのさ」

ゼロは地上にいるルイズを探すと、彼女はホークの近くで倒れている。

「安心しな。急な覚醒で気を失っただけだ。本来ガンダールヴであるお前さんの役目は呪文の完成まで主を守ること。その主が疲れちまったんだから、代わりに止めを刺しに行ってやりな」

とにかく、今なら攻撃のチャンスと言うことだ。

「シュウヘイ、いくぜ！」

「ああ、わかった」

ゼロはウルトラゼロブレスレットを掲げると、ブレスレットはブレスレットギア・キーパーアーマーとなってゼロの体色を赤一色に変えて身に付き、ネクサスはジュネッストリニティにチェンジした。

空中で苦しむゾーリムに向かって飛び立ち、口が開いたところで二人は口からゾーリムの体内に侵入した。

〈キーパーゼロショット！〉

「ハアアアア…ジュア！」

〈オーバークロスレイ・シュトローム！〉

「ケアアア…ヘアッ！」

「グギェアアアアアアアアアア！！！！！！！！」

ゼロの作り出したエネルギーボール、ネクサスの超破壊光線がゾーリムの体内で放たれ、ゾーリムは首の根元辺りから跡形もなく砕け散った。

「やった…やったあああああ！！」

「うおおおお！！」

「始祖のご加護は我らにあり！」

トリステイン軍の兵士、そして遠くへ無事避難していたタルブの住人たちから歓喜の声が上がった。

「始祖よ…感謝します」

アンリエッタも天に向けて感謝の祈りを捧げた。

「デュワ！」

「シェア！」

二体のウルトラマンは歓声を浴びながら遥か彼方の空へと飛び去っていった。

トリステインとレコンキスタの戦いは、一時は怪獣の介入で双方を滅ぼしかけたものの、二体のウルトラマンと虚無に覚醒したルイズの活躍で、トリステイン軍の勝利という形で幕を閉じたのであった。

1　闇の接近

タルブでのトリステインとアルビオン――厳密にはレコンキスタだが――の戦争はトリステインの勝利となった。この戦績により、アンリエッタは実力を認められ、同盟の条件だったゲルマニア皇帝との婚約を破棄、その状態で同盟の維持ができるようになった。それは、アンリエッタが正式に王女からこの国の女王となった証にもなったのである。

だが、肝心のアンリエッタは女王への即位を望んではいなかった。

「私は女王の冠などいらないわ…」

「また我が儘を仰る…お気持ちはわかりますが、今やトリステインの民はあなたに早く女王となり、アルビオンを支配するレコンキスタの賊を殲滅することを望んでおるのです」

アンリエッタとマザリーニ枢機卿は玉座の間で話していた。外から「トリステイン万歳！」「アンリエッタ様万歳！」と歓声が上がっている。それは女王として頑張らなくてはならないことを彼女に言ってる言葉なのだが、彼女の精神を疲労させていく言葉でもあった。彼女の望むもの、それは愛する人の慰みの言葉だった。その愛する人は、いない。少なくとも彼女の目の届く場所には…

アンリエッタの即位パレードは午後から行われ、サイトたちもそれを見に来ていた。ひそかに別の場所でシュウヘイとテファも見に来ていた。

「ご立派なお姿だわ。姫様…」

アンリエッタの女王にふさわしい美しさと気品のある姿にルイズは目を奪われている。女性からも憧れの的でもあるのだ。

「あの私たちと歳の変わらない人が、女王様？」

「ああ、すっげえ美人で優しい、まさにお姫様って感じの人だよ」

「もしかしてあの人に目が行ってるんじゃ…？」

「いだだだ！痛い痛い！俺は高凪さん一筋のつもりだからそんな尻をつねらないでくれ！」

ハルナはサイトがタルブから帰ってきて以来、片時も離れようとしなかった。異世界で自分を知るのはサイトのみという孤独感。それが地球にいた時以上のアプローチの糧にもなった。

「あんたねぇ…なんでそう毎度毎度私の使い魔にべったりくっつくわけ！？」

「いいじゃないですか！平賀君は私の大事な彼氏なんですから、くっついても構わないじゃないですか！」

「いい訳ないわよ！こいつは私の使い魔なのよ！どうするかは私が決めるの！」

「ルイズさん、一体何をそんなに怒ってるんですか？前にあなたから説明させてもらいましたけど、平賀君は使い魔である以前にれっきとした人間です！どうするかはあなた一人で決めていいはずがありません！
では訊きますけど、ルイズさんは平賀君が好きだって言うんですか！？」

ハルナにそう言われたルイズは瞬時に顔を赤くしたが、断固としてそれを否定する。

「ばばばは…バカ言ってんじゃないわよ！べべ別にこんなバカでアホでドスケベな使い魔なんか…！／／」

「そうですよね～別にあなたの恋人じゃありませんもんね。なら、どうして怒るんです？ただの使い魔が違う女の子と一緒にいることですぐ怒るなんて、変です！」

「ぐぎゅうう…！」

バチバチバチ！ルイズとハルナの目線は爆薬以上の火花を散らしていた。

（バカでアホでドスケベは否定しないのですかハルナさん…ってか二人が怖い…）

サイトはハルナがルイズのサイトへの悪口を否定しなかったためか、蚊帳の外でちょっぴり沈んでいた。

「アン…」

そんなのんきな時間を過ごすサイトたちとは別の場所で、シュウヘイとテファとマチルダ、今回ついてきた子供たちの後ろで深くフードを被った青年が声を漏らした。

「やはり会いたいか？」

シュウヘイの言葉に青年は迷わず頷く。

「彼女はゲルマニア皇帝との婚約を破棄した状態で同盟を結ぶことはできたが…いずれ別の男と結ばれるだろう…僕がアルビオンを再興する頃にはきっと…」

このフードの青年、すでにわかった人もいるだろうが、元アルビオン皇太子のウェールズだ。

「そう自信を無くすな。結果がどうあれ今は信じるしかあるまい。それまで諦めるな」

「元気出してください。私も力不足だけど、応援しますから」

「なんだい、アルビオン皇太子も戦場で命を散らす度胸はあっても女へアタックもできないのかい？恋は、戦いだよ。本気であの女王様を好きでいるなら、そうウジウジしないことだよ」

シュウヘイ、テファ、マチルダがウェールズに励ましの言葉を送り、彼はにわかに笑顔を戻した。

「そうだね…ここで縮こまっても彼女に会うことは…」

とその時、ピュウ！とそよ風が吹き渡り、ウェールズの被っていたフードが吹き飛んだ。

「まずっ…！」

すぐフードを被り直し、何デモアリマセンと言ってるように誤魔化しの態度を示した。

しかし、アンリエッタだけは一瞬のその光景を見逃さなかった。

（今の…いえ、まさかね…）

ほんの一瞬で運がよかったのか、アンリエッタはフードを被っていた青年の正体が自分の愛した男であることまでは見抜けなかった。

その頃、トリスタニアの路地裏に一人の男がいた。

サイマ、ダークロプスゼロ。なぜ彼がここにいるのか？

それは時間を少し遡る。

とある国の地下、レーテ保管施設。

「なんだと…石堀！どういうことだ！」

「ウルトラマンゼロの精神を追い詰め、奴の光のパワーを頂くためだ。何がそんなに不満だ？」

何やら石堀のたてた作戦にサイマが不服のあまり反発しているらしい。

「当然だ！だって、『あいつら』に力を与えて利用していたってことだろ！あいつらは…」

「お前はまだ人としての未練を残してるようだな？いいか、お前は…俺の『人形』だ。下らん感情を持つな」

「ふざけるな！」

サイマは瞬時にダークロプスゼロに変身、石堀に飛びかかった。しかし、石堀もダークネクロスに変身、あっさりとロプスゼロの拳を押し退け、壁の方へ蹴飛ばした。

「グワッ！」

「言っとくが、奴らの命は俺が預かってるようなもんだ。もしまた俺に逆らうと言うのなら、どうなるかわかってるよな？」

「っ…」

ネクロスの言葉にロプスゼロは返す言葉を見つけられなかった。

「せめて邪魔だけはしないことだ。ロプスゼロ」

「……いいだろう、もうてめえには従わない。俺自身の意思で動いてもらう」

サイマはその時以来石堀とは対立的関係となった。
だが石堀は何も感じず、むしろ笑っていた。

「前に逃げ出した人形を取り戻すにはいい機会かもな」

そして時を戻し…

「どこだ…どこにいるんだ!?」

彼はどうも誰かを探しているようだ。

「…あまりやりたがる作戦じゃないが…仕方ない」

左手のダークゼロブレスレットから黒い霧が放出し、メガネ型変身アイテム『ダークロプスアイ』となる。サイマはそれを手にとり、装着した。

「デュア!」

黒い暗黒のオーラが彼を包み巨大化、ダークロプスゼロへと変身した。

もちろんあまりにも目立つ巨体なものだから、まだパレード最中である町中の人たちは騒ぎ出す。

「あれ…ウルトラマンゼロだ!」

「でも様子が変じゃない？」

「まさか！きっとアンリエッタ様の即位を祝いに来たんだぜ」

「でも…あんなに真っ黒だったか？」

その黒い巨人が放ったのはアンリエッタへの祝いのクラッカーではなく、闇の波動光線だった。

〈ダークロプスメイザー！〉

彼は主に貴族組を狙って、その赤いモノアイから暗黒光線を放った。

「うわあああ！！」

「にっ…逃げろおおおおおおお！！」

「気でも狂ったかウルトラマンゼロ！？」

もちろんサイトとシュウヘイもその騒ぎを見逃すはずがなかった。

（サイマ！？あいつなんでこんなときに！？）

「な、なんで！？ウルトラマンゼロって人間の味方じゃなかったの！？」

やはり侵略者だったのか？ルイズのウルトラマンゼロへの評価は一気に落ちた。

「平賀君、あの黒いウルトラマンは何！？」

「あれはウルトラマンゼロじゃない…」

「じゃああれ…偽物！？」

ああ！とサイトはぶっきらぼうに答え、ブレスレットとは別に右手に装着していたキリヤマの形見でもあるウルトラ警備隊通信機『ビデオシーバー』の蓋を開く。

「シュウヘイ、聞こえるか！？」

『平賀か、やはり今の騒ぎを聞き付けていたか』

ビデオシーバーのモニターにシュウヘイの顔が映る。実はタルブの戦い後、二人はいつでも連絡を取り合えるように互いの通信機に細工を施したのである。

「ああ、聞き逃しも見逃しもしないさ！そっちに知り合いの女の子たちを預からせてくれ！」

『わかった。そちらとの距離はほとんどないようだからすぐこっちに来い』

「了解！」

ビデオシーバーを閉じてサイトは二人の手を引っ張って人混みの中を潜り抜ける。シュウヘイたちとはすぐに合流した。

「シュウヘイ！」

「こっちに来い。安全な場所に連れて行く」

シュウヘイは自分の家族やサイトらを連れて街から一旦退いた。

「あんた…どうして私たちを助けたの？」

ルイズはフーケ事件以来シュウヘイに対する信用度があまりない。口の聞き方もイラッとくるし、得体が知れなさすぎるのだ。だからシュウヘイの今の行動を理解できなかった。それになぜ、彼をたくさんの子供たちが囲っているのだ。子供と戯れるような感じなどまるでないのに。いや、よく見れば彼とほぼ同年代の少女とフードの青年が目に入った。確かシュウヘイも、女の子から召喚されたらしい。彼女がきっとマスターなのだろう。一つ気に食わないのは、なぜが彼女の胸がキュルケ以上だったこと。まさかキュルケを越える奴がいたとは…

「ば、バストレボリューション…」

サイトも今回テファを初めて見たので、思わずその神々しい美貌と胸に目が釘付けになる。

「あんたこんな非常事態によくもまあ盛っていられるわね！」

お仕置きの鞭がルイズの手から放たれようとした。

「だああ待て待て、ってあれ…？」

かろうじてひょいと避けたサイトはあることに気が付いた。

ハルナがいないではないか！

「どうした？誰か置いてきたのか？」

その様子にシュウヘイは気づく。

「ハルナが、もう一人俺と同じ地球から来た女の子がいなくなってんだ！さっきまで一緒だったってのに…」

「世話が焼けるな…俺が奴を止めてる間に探しに行け」

「すまない！」

せめて足止め役になってくれれば助かる。サイトはシュウヘイに感謝し、ハルナを探しに街へ駆け出した。
シュウヘイはフードの青年に近づいて耳打ちする。

「ウェールズ、みんなを頼む」

「わかった。気を付けてくれ」

エボルトラスターを上着の内ポケットから取り出し、街の方へ走り出す。

途中街の大理石が爆発でひっくり返ったが、それをものともせず、エボルトラスターを掲げた。

「うぉおお！！」

赤き光を纏い、シュウヘイはウルトラマンネクサス・アンファンスに変身、ロプスゼロの暴行を抑えようと彼を取り押さえる。

「ディ！」

「グッ…！」

ロプスゼロはネクサスの腕を振りほどき、ハイキックでネクサスを蹴りつける。

「ッグ！」

「ちい…ゼロを引っ張り出そうとしていたのに、なぜ貴様が出る！」

「貴様が何を狙って現れたか知らんが、これ以上暴れるというのなら容赦はしない」

「フフフ…そうだ。そうこなくてはな」

そこで、別の声が割り込んできた。この野太い死人のような声は…

まさか！とその声の聞こえた背後を向くと、ネクサスの思っていた通りの声の主がそこに立っていた。

そう、ダークファウストだった。

「ファウスト…生きていたのか？」

「何をそんなに驚いている？私は貴様の影だと最初に会った時に言ったはずだ」

「なんだ…あの不気味なウルトラマンは…」

また新たな黒いウルトラマンの出現に街の人たちは騒ぎ出す。

「お前…やっぱりここにいたんだな。ゼロを探して聞き出す手間が

省けたよ…」

ロプスゼロは突然ファウストに手を伸ばしてきた。まるで、懐かしき友人と再会を喜んでいるように。
しかし、ファウストはロプスゼロの手を払い除けた。

「なっ…」

「冥王に逆らいし者め。貴様の汚らわしい手で私に触れるな！フン！」

〈ダークフェザー！〉

仲間割れか？ファウストはロプスゼロに向けて暗黒弾を放ち、ロプスゼロはギリギリのところで避けた。

外れたその暗黒弾は偶然にもサイトの近くの噴水をぶっ飛ばし、水と砂のしぶきが巻き起こる。

「うわっ！」

「おい相棒…」

デルフの声でサイトはようやく気が付いた。ロプスゼロ以外にも、黒いウルトラマンがネクサスに敵意を示している。

「もう一体…だと！」

一度に二人のウルトラマンを相手にすれば、さすがのシュウヘイでも限界がある。それに、もしこのままあの二人、ロプスゼロとファ

ウストが暴れだしたら…

（…ハルナ、ごめんな。少しだけ待ってて。すぐ方をつけるから）

ブレスレットからウルトラゼロアイを取り出し、装着して彼もウルトラマンゼロに変身した。

「ほぅ…もう一人のウルトラマンか」

興味深げにファウストは声を漏らす。

「シュウヘイ…あいつは？」

ゼロはネクサスの顔を見て尋ねる。

「ファウスト、闇の巨人だ」

「闇の巨人…」

今まで悪のウルトラマンと言えば、サイトの記憶の中ではロボットや異星人の化けた偽物くらいで、本物の悪のウルトラマンなど見たこともなかった。しかし、ロプスゼロのように自分や誰かと似ているわけでもないのに、見たこともない姿のウルトラマンだ。

「メタ・フィールド内に誘い込む。そこで二人まとめて叩くぞ」

「おう！」

ネクサスの提案にゼロは承知、ネクサスはジュネッストリニティにチェンジしてから右拳から光を飛ばし、光のドームを形成した。

〈メタ・フィールド！〉

これで街への被害はまずない。思い切り暴れることができる。

「ファウスト…今度こそ俺が冥府に落としてやる」

「フフフ、いいだろう。珍しく貴様からの申し出だ。受けて立たねばな」

ネクサスが身構えると同時に、ファウストもジリッと身構える。

「貴様…勝手に話を進めやがって！」

憤慨するようにロプスゼロはネクサスに向かって走り出すが、ゼロが彼の前に立ちふさがる。

「お前の相手は俺だ！行くぜデルフ！」

「おうよ！」

「邪魔をするなああ！」

黒き炎を纏い、ロプスゼロは拳を突き出すと同時にゼロも炎を右拳に纏って攻撃する。

〈ビッグバンダーク！〉〈ビッグバンゼロ！〉

「「ダアッ！」」

ガキン！と凄まじい衝撃が、拳と拳のぶつかり合いで迸る。

「シャ！デュ！」

「ムン！ラア！」

二人のゼロの拳は互いを交差しながら繰り出され、避ける当たるの繰り返しが続く。
ほぼ互角の勝負。

「ラア！」

ロプスゼロの膝蹴りがゼロの腹を突き

「ジュア！」

ゼロの肘打ちがロプスゼロの顔に直撃

〈ウルトラゼロキック！〉〈ダークゼロキック！〉

「「デュア！」」

互いの必殺キックが宙で激突する。

「ほぼ互角か…」

ズササ！と足を擦らせながら後退するゼロ。やはり彼は強い。

「ゼロ、今から貴様にはない技を見せてやる」

ロプスゼロがそう言うと、彼は突然自分の右腕を掴み、力を入れると、なんと人形の腕が外れたように、彼の右腕が外れてしまった。右腕の繋がってる箇所には穴が空いている。

自らの腕を引っこ抜いてまで何をするつもりなのだ？

すると、突然その腕の接続部にあった穴から、幾多のミサイルが放たれた。

〈ヒューメラスクラッシュ！〉

「なっ、何！？うわっ！」

驚愕の間すら与えず、ミサイルはゼロに次々と直撃する。

それだけではない。

今度はロプスゼロの膝がパカッ！と蓋を開くように割れ、そこから一個の爆弾が落ち、爆発と同時に火柱が吹き出しゼロの体を苦しめる。

〈ヘル・ブーケット！〉

「そらよ！」

「ウワッ！」

今度は指先が開き、マシンガンよりも連射速度の速いきめ細かい光弾が放たれる。

〈チェリーブラスト！〉

「ヌアアア！」

いくら鍛え抜かれたゼロの体でも、攻撃がどんなに小さいものでも積み重ねれば危険だ。塵も積もれば山と言うものだ。

「死ね」

ダークゼロスラッガーを二本とも抜き、ロプスゼロはそれを蹴ってゼロの方へ飛ばした。

〈パラサイトソード！〉

その二本のブーメランはゼロに近づくにつれ巨大化し、最終的には怪獣ほどの大きさのある物体を簡単に真二つにするほどのサイズとなった。

ゼロに近づいていくダークゼロスラッガーは、決して止まることを知らなかった。

が、直撃しようとする刹那、ゼロの姿は消えた。

「何…？」

辺りを見渡すが、ゼロの姿は見えない。と思った瞬間、ロプスゼロはいきなり背中を攻撃された。

「グワッ！」

方膝を着き、背中を見ると、光で形成されたクナイが数本ほど刺さっている。

黒い影が目の前を駆け巡り、ロプスゼロに何度もぶつかる。

「ドワアア！」

攻撃が止んで目の前を見ると、先ほどとは違う鎧を身につけたゼロの姿があった。

黒い体色に網目模様、そして手甲と薄い胸当てが身に付けられている。

まるで忍者をモチーフにしたアーマーだった。

ブレスレットギア・シャドウアーマー。

地上での速さと隠密行動能力の向上を重視したアーマーだ。

一方、ネクサスとファウストも激闘を繰り広げていた。

「シュ！デア！」

ネクサスのラッシュをファウストは両腕を使ってガードしていく。

その攻撃で隙のできたところを突き、正拳でネクサスの腹を突く。

「ラア！」

「グホッ！」

さらに回し蹴りでネクサスを吹っ飛ばした。

「ヌワア！」

ドスン！と音をたて、ネクサスは地面を転がる。

「デアア！」

ネクサスに踵落としを仕掛けるファウスト。しかし、ネクサスは拳に紫色の光を込め、地面を殴ると同時に黒い衝撃波を放出した。

〈滅閃光！〉

「食らええ！」

「グォアアア！」

ファウストは丁度ゼロに一発重い一撃を喰らった影響でぶっ飛んだロプスゼロと背中合わせの状態でぶつかった。

ゼロとネクサスは横に並び、ビシッと身構えると、跳び側転で二体の闇の巨人たちに近づき、同時に必殺キックを放つ。

〈〈ダブルゼロキック！〉〉

「「デア！」」

「「グワア！」」

勝負はついたように見えた。が、ロプスゼロとファウストは何事もなかったように立ち上がる。

「フフフ…やはりやるな。また楽しませてくれよ、六代目…」

ファウストはそう言い残し、逃げるように消え去った。

「ちっ…逃がしたか」

そう言ったのはネクサスでもゼロでもなく、ロプスゼロだった。

「逃がした？どういう意味だ？」

「お前、あのファウストってのと何か関係あんのかよ？」

ネクサスとゼロは口々にロプスゼロに尋ねる。質問攻めされたロプスゼロは背を向けた。

「一つ忠告しといてやる。ゼロ、お前はいずれ闇に堕ちる」

「俺が闇に…堕ちる？」

どういうことなのか尋ねようとしたが、ロプスゼロもどこかに消え、同時にメタ・フィールドも消えてなくなった。

トリスタニア城で、無事ロプスゼロらの暴動から逃れきったアンリエッタたちトリステイン貴族と彼らを護衛した、平民の女性のみで編成された『銃士隊』がいた。

「陛下、お怪我はございませぬか？」

銃士隊隊長、アニエスがアンリエッタに言った。

「大丈夫です。あなた方銃士隊とウルトラマンの活躍で私は怪我もなく無事でいられました」

なぜ平民の女性のみでか？アンリエッタはワルドの裏切りが原因でメイジ不信に陥っていた。だから、国力低下の原因でもあった平民と貴族の差を無くし、身分に関係なく優れた人材を取り入れる方針をとることにしたのだ。無論、昔ながらのしきたりにこだわる貴族から反感を抱いたことがなかったわけではない。が、アンリエッタのある話で貴族たちはしぶしぶ納得せざるを得なかった。その話とは、ウルトラマンゼロが初めてハルケギニアに降り立った時、バードンに臆すことなくゼロに助言したサイトの活躍。平民に遅れをとりたくないと貴族たちの意地をアンリエッタはうまく利用したのだ。さて、話が微妙にそれたのでここで戻すことにする。

「しかし、あのウルトラマンと似た黒い巨人たちは…」

一体なんだったのだろうか？少なくとも、かなり危険な存在であることだけはわかる。

「陛下、我々は街の見回りに向かうので、しばらく身の安全のため、城から出られないようにしてください」

「わかりました。気をつけて…」

アニエスら銃士隊の一行は街へと向かった。

「うっ…」

街のど真ん中で倒れていたハルナは目を覚ました。

「私…確か平賀君たちとはぐれてから…」

そうだ。逃げる途中でサイトとはぐれてしまったのだ。だが、それ以降の記憶が彼女の中にはない。

サイトたちはどこに行ってしまったのだろうか？

お前は、誰でもない…

「え？」

ハルナの頭の中に、怪しげな男性の声が聞こえてきた。

お前は人形…

「や…」

冷たく、恐ろしい声だった。聞くだけで背筋が凍りついていく。

「いや…来ないで…」

何かが、何か恐ろしいものが近づいてくる。逃げ出そうと思ったが、恐怖のあまり体が小刻みに震えて動けない。

しかも、昼間なのにあっという間に辺りは真っ暗になり、どこに建物や障害物があるのかもわからなくなる。

「いや…いや…助けて…平賀君……」

頭を抱え、ただその場で震えるしかないハルナ。

そして、彼女の手を何者かが引っ張り出した。

「いやあああああああああああああああああああああ！！！！」

「高凪さん！」

「……え？」

その汚れなき暖かい声を聞いた彼女は顔を上げた。

サイトだった。変身した時に受けたケガとかもあったが、全然平気

な様子。

サイトの顔を見た瞬間、彼女はサイトの胸の中にしがみつき、顔を埋める。

「ちょ…高凪さん!?」

いきなり抱きつかれてビックリしたが、その仰天は彼女のすすり泣きですぐに冷めた。

「平賀君……私、怖い…」

「……大丈夫」

サイトは彼女を抱き締め返し、彼女の頭を撫でる。

「俺が守る」

「うん…うっ…ひっく…」

サイトの優しさにより触れられたハルナは、やっと泣き止みそうだったのにまた泣き出してしまった。

その頃、アニエスは銃士隊の隊員たちを町中に散らし、怪しい者がいないか捜索に当たらせ、自身も単独で調査を行った。

「これほど荒らされるとは……」

そう言えば、あのウルトラマンゼロとよく似たものっは別の黒い巨人が姿を現したとき、彼女はなぜか恐怖や脅威とは別の、ある感情に抱かれた。

（見覚えがある気がする…）

２０年前、アニエスの故郷ダングルテール村は、村人たちの大半が本来の『ブリミル教』とは別の新教を信仰していた。それをある貴族の連中に目をつけられ、滅ぼされた。少なくとも、国家に反逆するような人は一人としていなかったのに…だから、アニエスは貴族が心の底から憎くてしょうがなかった。一人尊敬できる貴族は女王であり、自分に貴族の位と『復讐の機会』を与えたアンリエッタただ一人だ。

その２０年前の薄れかけた記憶の中、彼女には忘れられない光景を心に刻んでいた。

背中に火傷を負いながらも自分を助けてくれた男性の後ろ姿。

もう一つは…

ファウストとよく似た黒い巨人だった。

「まさか…な」

２０年前に自分の故郷を滅ぼしたのがあの黒い巨人とは考えがたい。

今は忘れておこう。まずは見回りが優先だ。

そう思った時、彼女の目の前に怪しげな男が現れた。身をすっぽり包むコートを着用し、顔はフードでよく見えない。

「何者だ?」

一応銃を取り出して構えるが、男は敵意を表さなかった。

「もうすぐ始まる…」

「?」

いきなり何を言い出すのだ?アニエスは首を傾げる。

「デスゲームが…始まる」

そう言い終えた男性は黒い霧のように消えた。

「あの男…」

一体何者だろうか?

ここで彼女はなぜか、２０年前に自分を助けた男性の背中の火傷を一瞬だけ思い出していた。

2　魅惑の妖精亭

彼女の、高凪さんのあどけない笑顔、何気ない仕草…
すべてがいとおしかった。俺は、これから訪れる幸せが永遠に続くことに、何の疑問も抱かなかった。

ＢＹサイト

アンリエッタの即位パレードは闇の巨人たちの暴動で散々に終わった。街の修復のため、アルビオンへ侵攻するための兵力編成にも遅れが出ている。

その一方で、幸せそうに学院のベンチに座っている二人組がいた。サイトとハルナだ。

「ごめんな…ずっと連絡もできなくて」

改めてサイトは、ハルナに会えずにいたことを謝罪した。

「でも、ルイズは決して悪気があったわけじゃないから、あいつのことだけは許してあげて」

「…」

ハルナは少し膨れっ面になっている。そんな表情に影はさしてるわけではないので、どこか可憐に見えた。というか、サイトにとってはどんなハルナの表情も魅力的だった。

「怒ってる…？」

「平賀君は女の子に優しすぎ…」

「もしかして…妬きもち？」

ちょっと悪戯じみた顔でサイトは尋ねた。

「嬉しいな～俺のために妬いてくれるなんてさ」

「もう！からかわないでよ」

頬を少し朱色に染めてハルナは怒鳴る。

「でも、また会えてよかった。ずっとプレゼントしたかったものがあったから」

「俺に？」

「もち！」

ハルナはこの世界に来たときからずっと制服のままだ。

制服の胸の内ポケットから何かを取り出し、おまじないをかけるよ

うに両手の中で包んでからサイトに手渡した。
それは、ウルトラセブンのアイスラッガーを模した飾り付けの着いた首飾りだった。

「お守りだよ。平賀君、ウルトラセブンが一番好きだったんでしょ」

「ありがとう！大事にするよ」

早速首にかけてサイトは礼を言った。

「じゃあ、そろそろ君のこと、こう呼んでいいかな？」

「え？」

何だろうとハルナは首を傾げたが、答えはいたって単純かつハルナにとって嬉しいものだった。

「ハルナ…」

彼女を名字かつさん付けではなく、名前で呼ぶことだった。

「ハルナって、呼んでいいかな？」

ハルナはまた顔を赤くした。いざ言われるとやはりドキドキしてくる。

「うん…いいよ／／」

「本当に！？」

「名前で呼んでって、いつか言おうと思ってたから…」

顔から火が出そうな勢いだった。

もちろん、これを快く思わない人もいる。草影からルイズ、シエスタが覗き魔のように二人を見ていたのだ。

「またあの女とイチャついて…少しは私を見てたっていいじゃない！」

「ハルナさんめ…絶対サイトさんをものにしてみせるんだから」

「ちょっとメイド、サイトは私の使い魔なんだから手を出すんじゃないわよ」

「そんなの関係ありません。サイトさんは私が旦那様に選ぶ人なんです。たとえミス・ヴァリエールが相手でも譲れません！サイトさんがミスタ・グラモンに決闘で勝って以来、貴族様なんて怖くもなんともないですから！」

「言ってくれるじゃない平民の分際で！」

バチバチバチ！二人の目から火花が迸る。サイトが見ていたらきっと背筋を凍らせていたに違いない。

「あの…ミス・ヴァリエール殿…」

「何よ！」

八つ当たりするように、自分に話しかけてきた声に向かってルイズは怒鳴り散らす。怒鳴られた声の主はアニエスだった。

「あ…あんたは？」

「お取り込み中失礼する。私は銃士隊隊長アニエス・シュヴァリエ・ド・ミラン。女王陛下よりミス・ヴァリエールを呼び出すよう命令を承って参りました」

「女王陛下…姫様から！？」

アニエスの乗ってきた馬車でサイトら三人はトリスタニアの城へとやって来た。なぜ三人かというと、ここでもハルナが一緒じゃないと嫌だと言い、サイトも断りきれなかったのが原因である。もちろんルイズから怒りの鞭を喰らい、サイトは顔が腫れてしまった。

「酷いじゃないですかルイズさん！平賀君が何をしたんですか！？」

「うっさい！だったらそのエロバカ犬の胸に聞きなさい！」

（エロバカ言うな…）

散々な道中だったが、何事もなくアンリエッタの待つ王座の間へ着いた。

「ああ、ルイズ！また会えて嬉しいわ！」

相当政務に悩まされていたか、幼なじみとの再会に史上の喜びを感じ取っていた。

「もったいないお言葉ですひめ…いえ女王陛下」

「そんな堅苦しく女王なんてやめてちょうだい。今まで通り私のお友達でいて。でないと私、仕事疲れで死んでしまうわ…」

「では、姫様。今日は何用で私たちを？」

そうルイズに尋ねられたアンリエッタは、真剣な表情を浮かべて言った。

「あなた方もご存知ですよね？私の即位パレードの時に現れた黒いウルトラマンを」

黒いウルトラマン…ファウストとロプスゼロ。

トリステインの政治家たちから見てもかなりの身近な脅威と判断されたと見える。

「実はあの日以来、黒いウルトラマンがトリスタニアの街を荒らしているとの噂があるのです」

「え！？」

三人とも驚いていたが、最も驚いたのはサイトだった。

「狙いは全くの不明。しかし、ここまで目立った犯行となれば、我々トリステインの魔法衛士隊や銃士隊の兵力をもって解決したいのですが…」

「つまり、私たちに黒いウルトラマンの討伐をお命じになられるのですね？」

そうルイズは尋ねるが、アンリエッタは首を横に振った。

「いえ、そうは申してはいません。とても黒いウルトラマンの討伐はルイズ、私はあなたには以前に危険な任務を負わせたのです。だからそのような命の危機に関わる任務を与えることはできません…」

「そんな、遠慮などなさらないでください！なんでもこのルイズ・フランソワーズにご命令を！」

「ありがとう、でも気持ちだけで十分よ。あなたに与える任務は、少し別の場所にあるの」

「別の場所？」

討伐ではないようだ。一体どんな任務なのだろうか。

「現在、我がトリステインは内部の者たちの意見でアルビオンへの報復のために軍事力を増強せねばならない状態なのです。私はできれば戦争を避けたいのです。しかし、今のアルビオンはいずれまたこの国はおろか、他国への侵攻を狙っております。ならばせめてこ

ちらの犠牲を最低限に抑えなくてはなりません。ルイズ・フランソワーズ、そのためにあなたに今から任務の内容を伝えます」

「なんなりと…」

「あのワルド子爵の裏切りの件もあって、私は現在アルビオンの回し者が他にもこの国の内部に潜入してるのではと予想してます」

「スパイ、ですか？」

サイトが尋ねると、アンリエッタは頷く。

「あなた方に下す命令、それは黒いウルトラマンとアルビオンのスパイが潜んでいないか、そして現在のトリステイン貴族が平民に問題行為を行っていないかの確認です。お願いできますね？」

「お任せください。このルイズ・フランソワーズ、杖にかけて必ずお役目を果たします」

ルイズは再び頭を下げて受託した。

「サイトさんとハルナさん」

今度はルイズの後ろにいるサイトとハルナの顔を見る。

「は、はい。なんすか？」

「私の大事なお友達を、よろしくお願いいたしますね」

その期待に胸を膨らませた顔は、サイトの顔を思わずニヘラ…とさせてしまった。

「サイト…」

「平賀君…」

しかし、その下心満載な顔は、背後にいる美しき二人の悪魔によって崩れ去ったのであった。

アンリエッタから王室からの身分証明書を受け取り、早速任務に当たることとなった三人。

まずは平民のフリをして街に溶け込むことを第一とした。だからルイズは平民の服を購入した。

「地味ね…」

ルイズファンから見ればどんな格好も似合うように見えるだろうが、本人はどうも不服らしい。黒のワンピースとベレー帽だった。

「平民のふりして任務を行う以上、服も平民のじゃなきゃダメって言ったのルイズだろ？」

「だからって…って言うかハルナ」

「はい？」

何だろうとハルナは首を傾げる。

「平民のあんたならわかるかもって頼んだけど、この服、本当に私に合わせてるの？」

どうやらハルナに頼んで服を選ばせたらしい。

「ええ、似合ってるって思いますけど。平賀君も、そう言ってたし…」

サイトも評価した。それを聞いたルイズはちょっと嬉しかったのか、ほのかに頬を染めてサイトを見る。最初に彼を召喚した時の態度と比べると、だいぶいい方向に傾いてるようだ。

「それにしてもたった１００エキューじゃ馬も乗れないわ…」

「「馬！？」」

平民になりすまさなくてはならないのに、町のど真ん中を馬で横行するなんてルイズは何を考えてんだ？とサイトは思った。

「あの、馬は必要ないかと…」

しかし、ルイズはハルナのその言葉を無視し、貴族用のホテルに立ち寄ったが…

「２００エキューですって！？」

わずか一泊でもかなりの大金だった。

なら銀行に行けば…と銀行に向かうが、ここでまたしても問題。

「貯金がたった１０エキュー！？」

実はルイズ、かなりの無駄遣い癖が災いし、貯金もちょっと給料のある平民とほぼ同クラスの金しか残ってなかった。

「普段から無駄遣いばっかしてたのか…はあ、先が思いやられるな…」

アンリエッタから受け取った金も決して多くはない。それはアンリエッタ自身がお金を多く持たないのではなく、任務の都合上の判断からだ。

よくあの程度の金で馬や貴族用の宿を使おうだの思い付いたものだ。

サイトは肩を落とすほどあきれ返った。

「ふん、いいわよ！私一人でがっぽり稼ぐから！」

「え、おいルイズ！」

サイトの引き留める声を無視し、ルイズは逆ギレしてどこかへ歩き去ってしまった。

数時間後、すでに夕刻となり、噴水の側で座り込むルイズをようやく発見した。そこで彼女の口から衝撃的な事実を聞くことに。

「「全部カジノですったあ！？」」

どうもルイズはカジノで一発逆転を狙ってたらしい。が、テクニックも当たる運もあるはずないルイズがカジノで稼げるはずもない。

「だって、必ず当たるって言ってたから…」

そんなカジノがあったらどこの平民も金持ちだ。

「腹減ったなあ…」

昼からメシもまともに食べてないのだ。どうしたものか…

ちょうど右手に着けているビデオシーバーが目に入る。

ビデオシーバー？

「そうだ！この手があった！」

「何よ、何かあるの？」

「ふふ…この連絡装置ビデオシーバーであいつに連絡をとるのだ…

そうすれば…」

そう、サイトはシュウヘイに連絡をとって寝床や飯の用意などをさせてもらおうと考えたのだ。

しかし…

『うちのガキから飯をとる気か？』

ビデオシーバー越しからシュウヘイの一蹴の言葉が返ってきた。シュウヘイは今、テファたちと共に十数名もの子供たちを養っている。

食費もかなり膨大なため、飯を分ける余裕はまるでないのだ。

「余りとかないのか？」

『あいにく満席だ』

「はあ…」

もう打つ手なしか？と思ったが、そこで彼からある提案を持ちかけられた。

『あまり勧めたくないが、実は俺はある店で料理人として働いてる。そこなら部屋を提供してもらえるんじゃないか？』

「え！？ホントか！？」

ここでまさかの紹介とは、意外についてるか！？

『もう一度言っておくがあまり勧めないぞ』

「なんだっていい！その宿に案内してくれ！」

そしてとある店にて…

「い、いやよ！なんでこんな格好しなきゃなんないのよ！」

「うぅ…なんか足がスースーするよぅ…」

二人のとてつもなく恥ずかしがってる姿があった。
シュウヘイの紹介した仕事、それは地球で言うメイドカフェともいうのにふさわしい店『魅惑の妖精亭』での給士だった。
もちろん店の主な従業員たちは露出のある服を着た女の子たちだ。

「おま…クールそうでこんな趣味が…」

「違う！あのじいさん（オスマン）からもらう金だけではって仕事探していたらあのカマ店長の目に着いてしまっただけだ！」

青筋をたてるサイトにシュウヘイは断固否定した。
そのカマ店長とは…

「妖精さんたち！今日は嬉しいお知らせがあるわ！」

その通り、髭っ面で異様に筋肉質なオカマのオッサンだった。仕事を探してたところ、シュウヘイは運悪くこの店長スカロンに目をつけられ、無理やり働くことに…。しかもシュウヘイの顔立ちの良さと料理の腕を買われたせいで、店で働く女の子にまで気に入られてしまう始末だった。

「ちょい待ち！最後の贅沢だろ！」

一方、ルイズとハルナも妖精の衣装で仕事をすることになった。

「るるるルイズなのです～…」

「ハルナですぅ…」

ルイズは引きつった笑みを浮かべ、ハルナは顔を真っ赤にしながら

自己紹介した。

「さあみんな、拍手！」

ハルナは我慢すれば大丈夫だとは思ってるが、名門貴族出身でプライドの高いルイズが平気な訳がなかった。目くじらがたちまくりである。

「やっぱり怒ってんな…でも…」

厨房で皿を拭いていたサイトはルイズとハルナの様子を見ていたが、だんだんハルナの妖精コスチュームに目がいってしまい、デレデレの状態に。

「ちょっと新人さん、手が止まってるわよ」

黒髪の給士の少女が台所からサイトに注意する。

「あっすいません…」

いけない。完全に見惚れていた。サイトは引き続き皿を拭き始めた。

「あんた、名前は？」

給士の少女はサイトに話しかけてきた。

「サイトです」

「サイト？シュウヘイといい、変わった名前ね」

「よく言われます。はは…」

「よろしくねサイト。
あたしはジェシカよ。わかんないことがあったら何でも言ってちょうだい」

「はい」

ジェシカのその容貌はどこかシエスタにそっくりだった。イコール、美少女。サイトはちょっと彼女に対して下心を沸き立たせたが、すぐ目をキリッとさせて皿を拭き続けた。

（いかんいかん！ハルナがいるのに他の女の子に目が行ったら殺される…）

「むぅ…」

「何よ、また他の女ばっか見て…」

ハルナとルイズはジェシカと話しているサイトを睨み付けていた。

「さあ妖精ちゃんたち！今週はお待ちかね、チップレースよ！」

「「「わあああ！」」」

チップレースという単語に反応し、女の子たちは喜びの声をあげた。

「今週最もチップを稼いだ人にはボーナスの他に、この店の名前の元となった魅惑の妖精ビスチェの一日着用する権利が与えられます

！」

スカロンが店の壁にかけられたカーテンを開くと、そこには黒く、そしてどこか輝きのある上等なビスチェがかけられていた。

「このビスチェには人を惹き付ける特別な魔法がかけられてるマジックアイテムなのよ！これを着た日はがっぽり稼ぎ放題！昨年トップだった娘なんか稼ぎすぎて田舎に帰っちゃったくらいなんだから、妖精ちゃんたちも頑張って稼ぐのよん！」

「「「「はい！スカロン店長！」」」」

「違う違うわよん！お店ではミ・マモドアゼルと呼びなさいといつも言ってるでしょん！」

「「「「はい、ミ・マモドアゼル！」」」」

「トレビア～ン…」

「稼ぎ放題…」

（チャンスだわ！）

魔法の威力を知らないハルナはいまいち実感はわかなかったが、ルイズは野心を膨らまして笑っていた。

こうして、魅惑の妖精亭にて情報収集を兼ねた給士仕事が始まった。

早速仕事を始めるルイズだったが…

「こご…ご注文の品をお持ちしました…」

「何やってんだよお嬢ちゃん、早く注いでくれよ」

この店では女の子たちが酒を注ぐのが普通なのだが、

（しし、酌!?この公爵家の私がへへ平民なんかに…）

プライドの塊とも言えるルイズがやるはずもなかった。

「できれば口移しで…っぶっ！何しやがんだクソガキ！」

怒ったルイズは客に思い切り酒をぶっかけてしまう。

「こここの下朗！恐れ多くも公爵家の娘である私に…！」

思わずボロを出しそうになったルイズだが、スカロンが客を無理やり抱き締める形でなんとか防がれた。

「ごめんなさいねえ。彼女は新人さんなもんだから、代わりに店長の私がサービスしちゃおうかしら?」

「ややめ…ぎゃあああ！」

しばらくその男性客の悲鳴が響き渡るが、全員他人のフリをして見ようとしなかった。

その後、ルイズは料理を運ぶたび客に乱暴するようになった。客がどうも自分の貧相な胸を指摘してくるのだ。

「君みたいな胸の薄い娘がいいなあ…」

こんな言葉も彼女にはかなりのレベルに達する禁句だ。その客たちもルイズのビンタの餌食となっていく。

一方のハルナだが…

「なあ姉ちゃんかわいいねえ…ちょっと俺と遊ばない」

こちらも男性客からちょっかいを出されていた。

「あの、私はまだそんな…」

「いいじゃんかよ。胸くらい触らせ…ボハッ！」

無理やりハルナの体を触ろうとする男性客だったが、突然サイトの投げつけた皿が直撃した。

「何しやがるこの野郎！」

「いやいやすみません、この店ではセクハラは許してはいないと店長が仰ってましたからつい…」

サイトは顔はわざとらしく笑ってたが、目は全然笑ってない。某ストリートファイトゲームで言う殺意の波動状態だ。

「なんだよ？乳揉むくれえいいだろ？そういう店なんだろ。ああ！？」

「先ほど私が言ってたことお忘れですか？確かにこの店は女の子と戯れるのは許してますが、セクハラまでは許してはいないと。守れないなら即刻ご退席なさってください」

「ふざけんじゃ…ゴバッハア！」

さらに反抗する男性客だったが、その刹那、サイトの昇竜拳でその男性客は店の外へ吹っ飛ばされてしまった。

「ちくしょう～覚えてやがれ！」

捨て台詞を残し、その男性客は逃げ出した。

「あ…ありがとう平賀君。でも…よかったのかな？」

「よかったって何が？今の変質者を殴り飛ばしたこと？」

「だってこの店、そういうところじゃ…」

「だからセクハラまでは許さないって。特にハルナの体に気安く触る奴がいたら全員半殺しだ」

ゴゴゴ…とオーラを強めるサイト。

（平賀君怖い…）

この日以来、女の子たちへのセクハラはゼロになったらしい。

しかし、ハルナは内心嬉しくも感じた。

（私のために怒ってくれるなんて…なんか嬉しい／／）

それを見て不服に思う人物もいたが。

「あ～もう！なんでご主人様が平民の下朗どもにセクハラされてんのにあのエロバカ犬は！少しは私の場合でも怒りなさいよ！」

「その前にお前がビンタ喰らわせてんじゃ話にならんだろ」

「うぐっ…」

厨房で調理していたシュウヘイに痛いところを突かれ、ルイズは何も言い返せなかった。

●黒いウルトラマン
●トリステイン貴族の権力乱用
●スパイ捜索

望みの情報は上記の三つ。

「情報、まるでなしか」

仕事を兼ねての情報収集、それが任務だったのだが、いまだ何の手がかりもなかった。
サイトは三日目の夜、店が閉まってから客用のテーブルで顔を埋めた。

「何かやってるのか？」

「え、あいや…なんでもないぞ…」

たとえシュウヘイの口が固いとしても、任務のことが知られてはならない。サイトは口をつぐんで首を横に振った。

「何か隠してるようだが、一体なんだ？」

「それは、その…」

バレちゃダメだバレちゃダメだバレちゃダメだ…
でも顔が異様に引きつってるせいで、もはや何かを隠してるのかバレバレだ。

「まあ、そんなに知られたくなければ別にいいさ」

ふう…シュウヘイのその言葉でサイトはホッとした。その先の領域を知られたらルイズにお仕置きされそうな気がしたので助かった。

「ところで、お前は平気なのか？」

「え？」

平気とはどういう意味だ？シュウヘイの質問に疑問を抱くサイト。

「お前の住んでいた地球には、家族や友達がいたんじゃないのか？」

「ああ、いたよ」

地球人平賀サイトとしての記憶、その中には何もハルナだけではない。母や通っていた学校でよくばか騒ぎした同級生たちもいる。未練がないと言えば嘘になる。

「いつかハルナと一緒に帰ろうって約束したさ。なっ、ハルナ？」

ちょうど着替え部屋から出てきたハルナの方を見てサイトは言った。

「うん、いつかきっと。そして、一緒に平賀君の夢を叶えよう」

「夢？」

こんな少し間の抜けた奴にも夢とかあるのかと、シュウヘイは感心した。

「俺の地球は長い間、宇宙人や怪獣の侵略に合っててさ、それで地球の人たちは傷ついてばかりだった。でも宇宙人たちにもきっと理由があったんじゃないかって思う」

理由で思い付くこと。

生きていくのに必要な資源を無くした、あるいは独裁者が自分たちの星のリーダーになって逆らえなくなった。地球での戦いの歴史でも起こっていたのと似たようなことが宇宙でも起こっているのかもしれない。

サイトは戦いを好む性格ではない。今はやむを得ずウルトラマンと

して戦うこともあるが、いつか終わらせなくてはならないと思っている。

「侵略された人の子孫と侵略した人の子孫が手と手を取りながら笑い合える世界、それが俺の夢なんだ。まず地球に帰って地球防衛軍に入隊したら、そこから夢の一歩をハルナと一緒に進むつもりなんだ」

「子供みたいな…夢だ」

要は、みんな幸せにしたいと言っているのだ。そんないつかは幻と認識して当たり前な夢を、サイトは抱いてるのだ。

「だが、その潔さは羨ましい限りだ」

子供みたいな夢、そうは思ってもシュウヘイはバカにしたりはしなかった。

「シュウヘイには夢はないのか？」

「俺の夢？」

そう言われれば、自分は将来の夢とか、そんなのちゃんと考えたことがなかった。

「もしかして…お前を召喚したあの娘と結婚とか？」

爆弾発言。もしこれをテファが聞いていたら、どんな顔をしていたのだろう。

わざと悪戯じみたことを言うサイトだが、シュウヘイは表情一つ変

えないまま無表情を貫き通している。

「俺に誰かを愛する資格なんかない…」

自分の手のひらを見つめながらシュウヘイは答えた。いまだに昨日のことのように焼き付いている。

自分が初めて愛を感じた少女を、自分の手で殺したあの日を…

「「え?」」

最初は動揺するかめ思ったが、意外な答えが帰ってきた。

「さて、俺はそろそろ家に戻らなくてはな。ティファニアだけじゃない、ガキどもが帰りを待ってる」

シュウヘイはこの店で泊まり込みで働いてはない。

以前レコンキスタにテファら共々追われていた後、ネクサスに変身して、トリスタニアに近い森の中に家を運んでいた。主に通勤時はバイクを使っている。目立ちはするが…

「じゃあ、またな」

シュウヘイは二人に背を向け、店を後にした。

「黒崎君、だったっけ。何か合ったのかな?」

「さあ、俺は何も聞かされてないから…」

本当に何があったのだろうか?気になってしょうがない。

そこに、ルイズが顔を出してきた。

「サイト…」

「どうしたんだルイズ？」

「やっぱり、故郷に帰りたい？」

少しビックリした。最初、彼女は「帰る必要はない。ただ私に従っていればいい」と酷いことを言っていた。

「…帰りたいな、うん」

ズキッ…ルイズは胸が一瞬締め付けられた感覚を覚えた。でも、自分ももし彼のように誰かに召喚されたら、家族と自分を引き離したその召喚者を恨んでいたかもしれない。もしかしたら、サイトから恨まれてるのでは、そう思った。

「でも、そう早くは帰ろうとは思ってないよ」

「え？」

「シエスタやキュルケにギーシュにタバサ、そしてお前って仲間ができた。だから、すぐには帰れそうにないさ。もうしばらくはこの世界にいるつもりだ」

ジワリと目尻に涙が溜まるのを感じた。

この使い魔は優しすぎる。慈愛心が強すぎる。

「ごめんなさい…」

ルイズは初めて、心のそこからサイトに謝った。

「そんな、泣くほどのことじゃないだろ」

「泣いてなんか…」

何か悪いことを言ったのか？おろおろするサイトにルイズは涙を拭いていつもの強がりを誇示した。

（ルイズさん…）

実を言うとハルナは、本気でルイズを恨んでいた。自分の大事な人を問答無用で奪い去った張本人なのだから。こうして会えたのはまずないと言っていい。しかし、ルイズの謝罪の言葉を聞いて、ハルナは悟った。彼女も、誰かに対して優しくできる普通の女の子なのだと。

しかし、その夜二人はどちらがサイトと寝るかで喧嘩してしまい、結局狭いベッドに三人一緒に寝ることになってしまった。

（眠れない…）

翌日、彼は一睡もできず、立ったまま眠るという特技を身につけたらしい。

「じゃあおやすみなさい」

一方、トリスタニア近くの森の小屋で子供たちやウェールズらが眠ってから、シュウヘイとテファも眠ることにした。のはいいが…

（どうして、こうなるんだ？）

あれからテファは一緒に寝たがるようになって、今もシュウヘイと同じ部屋で同じベッドに寝ている。よほど石堀に拐われたことが精神的にショックだったらしい。

もしテファの召喚した人がサイトだったら彼女の豊満な胸への欲望に負けて襲ってしまうかもしれない。

シュウヘイはサイトよりも自制心はしっかりしてるので、そういったことはないが。

とにかく眠ることにした。明日の仕事もある。

しかし、突然彼の目の前に明るい光が現れた。

「？」

テファは気づくことなく、いまだ眠っている。

光を背景に、誰かがシュウヘイを見ているが、その人影の背後の光で顔は全く見えなかった。

「誰だ？」

『誰、ダト？知ッテル癖ニ…』

怪しげな口調でその声の主は語る。

『倒セアイツヲ…俺タチノ敵、俺タチノライバル…
ソレガ俺タチノ生キ甲斐…サア、早ク行ケ！アノ女の力ヲ受ケ継イダ、アイツヲ破壊シロ！ソシテ、スベテヲソノ手デ無ニ帰セ！』

そう言い終えると、その声は光と共に消えていった。

「まっ、待て！」

シュウヘイはその声の主を追おうとするが、同時に頭が割れるほどの激痛を感じ、膝を着いてしまった。

「ぐぅあぁ…うっ…がっ…あっ…うわあああああああああ！！！！」

その頭痛と共に、幾多のビジョンが走馬灯のように流れていく。

テファのように耳の尖った女性とサイトとどこか似た小柄な青年。

歪んだ笑みと共に高笑いをあげる女性。

死体の山。

そして…

自分がアイリスを手にかけた時のように紅く染まった、自分の血濡れた手を。

「はっ！はあ…はあ…」

夢、だったのか？
汗で額はベトベトで息が荒くなっている。

「シュウ、どうしたの？」

テファが寝ぼけ眼で目を擦りながらシュウヘイを見る。すると、そのシュウヘイの顔を見て彼女の表情は一瞬にして蒼白なものになる。

「どうしたの！？顔、すごく真っ青…」

「いや、悪い夢を見ただけだ…」

ベッドから起き上がってバケツに汲んだ水で顔を洗った。

夢にしては、あまりにもリアルなものだった。

（なんだったんだ…あれは…）

シュウヘイが思いを馳せながら顔を拭いたとき、朝日が窓から差し込んでいた。

3　警告ーワーニングー

ある日の夜のトリスタニア。不可解な現象は人知れず起こっていた。

「うわあああああ！」

突如宙に現れた黒い穴、そこから奇妙な触手が現れ、街の人々を捕まえ、引きずり込んでいた。

「くっ…野蛮な怪物め！エアハンマー！」

風の魔法で街のメイジらも応戦するが、敵の正体がわからない状態で攻撃しても無駄撃ちにしかならなかった。

「い……いやだあああ！！」

人々の悲鳴はそれからほぼ毎日のように街に響き渡った。

さて、一方で今日も諜報活動を兼ねた仕事が始まる。が、ルイズは相変わらずプライドを捨てきれないせいでチップをろくに稼げなかった。

「ルイズちゃんはここで他の女の子のやり方を学んでちょうだい」

「はい…」

スカロンにも客への暴力を問題視され、ルイズは見学することになった。

一方ハルナは少しずつだがルイズよりも稼ぐようになっていた。

サイトはシュウヘイやジェシカと話ながら台所で働いている。

「じゃあ、君スカロン店長の娘!?」

「そうよ」

「どうやったらあのおっさんからこんな娘が…」

ジェシカはかなりの美少女と言っても過言じゃない。だがあのオカマ店長からなぜこんなかわいい娘が生まれたのか不思議だ。

「そう言えばさシュウヘイ」

「？」

台所で皿洗いの途中サイトはシュウヘイに話しかけてきた。

「お前、故郷にはどんな思い出があるんだ?」

「あたしもちょっと気になる」

ジェシカも気になる様子で割り込んできた。ルイズとハルナも仕事中（ルイズは見学だが）にも関わらず、ひそかに耳を傾けていた。

「思い出…」

「ほら、ジェシカや俺たちみたいに家族とか友達！俺も学校に友達けっこーいて…って」

シュウヘイはサイトの話を無視していた。

故郷では確かに思い出はある。仕事仲間や同じバイト先の友達がいた。

だが、彼はどちらかと言えば嫌な思い出の影が強かった。

「なんとか言えよシュウヘイ」

「すまん、言いたくないんだ」

そう言って食器棚に皿を運び込んだ。しかし、好奇心旺盛なジェシカだけは引き下がらなかった。

「そこまで隠されるとますます気になるのよね～。ね、いいから教えて？

もし教えてくれたらあたしが…いろいろ教えてあ・げ・る」

しかもシュウヘイの手を握り、それを自分の胸に持っていくという際どく、かつ大胆な手口まで使う。

が、シュウヘイはその手を振り払った。

「しつこい。それ以上踏み込むな」

キツイ言動でジェシカを振り切った彼は、一体エプロンを脱ぎ、外

で休憩しにいった。

「なによ～感じ悪いわね」

ジェシカはノリの悪いシュウヘイに少し苛立ちを覚えた。

（何を隠してるんだ、あいつ…）

以前にも「誰かを愛する資格などない」など意味深な言葉を呟き、自分の過去を一切話そうとしない。

辛いことと言えば、サイトもアンヌに引き取られる前、ちょうどウルトラマンメビウスが地球にいるとき、怪獣の出現で血の繋がりのある両親を喪ったことはある。しかし、彼の目はもっと深い嘆きを背負ってるかのようだ。

（……）

「んもうなにやってるのあなたたち！仕事中なんだから真面目にやってくれないとお仕置きしちゃうわよん！」

スカロンのその男から見たら恐ろしい眼差しで目を覚ましたサイトはとっさに皿洗いを再開し、他の面々を仕事に集中した。

「ふう…」

そんなに俺の過去なんかが気になるのか？
シュウヘイはなんでこうまで気にかけられるのか理解に苦しんだ。

「やあ」

そんな彼のもとに、フードを被ったウェールズがやって来た。

「ウェールズか、何しに来た？」

「僕だけじゃないさ」

ウェールズの後ろからひょこっとテファが顔を出してきた。

「街には迂闊に来るなと言ったはずだが？」

「済まない、彼女がどうしても君の顔が見たいって言うから…」

どうも俺は周りから妙な心配を買われるな、とシュウヘイは思った。
実際テファも、シュウヘイがよく森の家を離れトリスタニアで働くものだから
不安に思うようになっていた。

「シュウ……あの…」

「？」

テファが小さな小包をシュウヘイに手渡した。

「お弁当、作ったの」

「……」

弁当がなくてもこっちで食べられるのだが…とは思ったが口には出さなかった。

「じゃ、気をつけて帰って来てね」

「僕が彼女を送っていくから安心してくれ」

そう言って二人はシュウヘイの元を離れ、森の家へと戻って行った。

「あの…」

その二人とすれ違う形で、帽子を被った紫の髪の少女が話しかけてきた。後ろから堅物そうな女性が付き添いで来ている。

「この辺りで、ルイズという名の少女をご存知ですか?」

「……ああ、この店で働いてるが」

とその時、店の方が異様にざわついてきた。音は表の方から聞こえてくる。

何だろうとシュウヘイ、そしてその少女と女性が見に行くと、店にいたはずの客たちが店から占め出され、店の前で困り果てた顔をしていた。

「何があった?」

客だった男性に話しかけると、男性は悔しそうにしながらシュウヘイに言った。

「チュレンヌだよ！あのデブ貴族が俺たちを店から追い出しやがったんだ！
一発殴ってやりてえが、あいつは貴族だし、護衛もいるから無理なんだよな…」

「なんてこと…」

まるで自分のことのように紫の髪の少女は責任を感じていた。

店の内部を見ると、確かに偉そうな肥満体質の貴族の男が数人の武装兵士を配備させ、椅子に座っていた。

その時だった。

シュウヘイの腕に着けられていたパルスブレイカーが音を鳴らしだした。

「！」

店の中はがら空きになっていた。さっきシュウヘイに事情を話した男性の言う通り、チュレンヌが兵士を使って他の客を脅したのが原因である。

「さあどうした！わしはこの地域の徴税官なのだぞ！酌を入れんか！」

苛立ってチュレンヌは店の女の子たちに怒鳴りだし、女の子たちは怖がって近づこうとしない。内心では嫌がってもいた。

「なんだあいつ？」

「なんか変態って感じがする…」

そう呟くサイトとハルナの横からジェシカが説明した。

「チュレンヌはこの辺りで徴税官を勤めてるの。位の高い貴族だからこの辺りで商売やってる人たち困ってるのよ。逆らったり気にくわない奴には重い税をかけるし、女の子を触るだけ触ってチップ一枚払いやしない。誰も酌なんかしないわよ」

「ねえ質問」

ハルナが小さく手をあげてジェシカに言った。

「何かしら？」

「ルイズさんが…」

ハルナの指差した方には、なんと酒瓶とグラスをおぼんに乗せてチュレンヌの元に来たルイズの姿があった。

「何やってんだあいつ！？」

（ふふ、金持ちそうな貴族。チャンスだわ！
見てなさいよハルナ、あんたよりチップ稼いでチップレースで優勝
……そして…）

スカロンが優勝した人に着用を許す魅惑の妖精ビスチェが頭に浮かぶ。

（あのビスチェでサイトをメロメロにすれば…）

どうもサイトをめぐったハルナに対する対抗心からか、チュレンヌに気に入られて一気にチップを稼ごうとの魂胆らしい。

「なんだ？この店は男を働かせておるのか？」

チュレンヌがおかしなことを言った。

「お、男？」

だんだんルイズの表情が、顔は笑ってるが目は笑ってない状態になる。

「あ、なんじゃ。ただの胸のない小娘か」

ルイズに「胸のない」はまさに禁句である。ルイズの中で怒りの炎がだんだん燃えていく。

「どれ、ならわしが確かめてやろ…」

「ふざけてんじゃないわよ変態！」

ついにルイズは堪忍袋の尾を切らし、チュレンヌの顔を蹴りつけてしまった。

「「「きゃあああ！」」」

「のおおお！！」

ついにやってしまった。

この店はおしまいだ。スカロンや女の子たちはパニック状態になってしまう。

「この小娘…やりおったな！捕らえろ！」

チュレンヌも逆ギレし、護衛の兵士を使ってルイズを捕まえようとしたが、それを阻む者が彼らの前に立ち塞がる。

「おっさん、いい加減にしとけよ」

サイトだった。

「無礼者！貴族であるこのわしになんと失礼な！」

「貴族がなんだよ！貴族だからって偉そうにしやがってムカつくんだよ！

いいか、ルイズやハルナに気安く触る奴は俺が許さねえ！」

その言葉でルイズとハルナは少し頬を赤く染めた。

「この男と洗濯板娘を捕まえろ！」

とその時だった。

突如店の外の空間に黒い小さな穴が開き、そこから飛び出してきた不気味な触手が店の窓を突き破って、チュレンヌの護衛の兵士たちを捕らえてしまった。

「うわあああ！！」

「なっ、何よあれ！？」

ルイズは目を丸くした。

「まさか、怪獣か！？」

そう、サイトの言う通り怪獣が現れたのだ。

しかし、どこか奇妙だった。

怪獣の体ではなく、空間そのものから触手が飛び出してきたことだ。

店の外でも全く同じ現象が起こっていた。

突如現れた触手によって幾人かの人たちが連れさらわれ、黒い穴に姿を消していった。

「今の…クトゥーラか」

シュウヘイにはスペースビーストの知識が今のハルケギニアの誰よりも知っている。そしてこの怪獣のものらしき触手のこともだ。

あのビーストの名は『フィンディッシュタイプビースト・クトゥーラ』。

「あんたたちも避難しろ」
「は、はい！」

彼の背後にいた二人組にもそう言い、シュウヘイは、人気のない場所へと向かい、そこでエボルトラスターを引き抜いた。

「ハッ！」

一方、サイトたちにもクトゥーラの触手が襲ってきた。

「くそ！なんなんだこいつら！」

こいつらも自分の知らない怪獣なのだろうとサイトは確信した。

「この！」

「エクス…プロージョン！」

サイトはウルトラガン、ルイズはあのタルブ戦の時よりも威力を低められた爆発魔法でクトゥーラの触手を攻撃、追い払った。

「みんな、怪我はないか！？」

サイトは店の中の人たちに呼び掛ける。
その時に、足を押さえて床に座り込むハルナの姿が目に入った。

「は、ハルナ！？」

「だ、大丈夫…割れたガラスで切っただけだから」

痛みをこらえ、汗をにじませながらやせ我慢するハルナ。
すると、右腕に着けていたビデオシーバーから音が鳴った。ここから連絡を入れてくる相手は一人だけ。

「シュウヘイ、何があった…？」

シュウヘイからの通信からだと思ったが、違った。
本来なら繰るはずのないものだった。

『アレハ警告ダ』

カタカナと漢字、バックは黒く塗りつぶされた形で、どこか不気味さを感じさせるようにビデオシーバーの画面に文が映されていた。

嫌な予感がする……

「ルイズ、ハルナを頼む！」

サイトはルイズにハルナの身の安全を託すと、店の外へ飛び出した。

「ちょ…平賀君！？」

「サイト！？」

ちょうどシュウヘイが変身にさしかかると同じタイミングで、サイトも人気のない場所でウルトラゼロブレスレットからウルトラゼロアイを取り出し、装着した。

「ジュワ！」

街の人たちはパニック状態だった。謎の触手に逃れきれず、触手に捕まって黒い穴に吸い込まれてしまう。そして…

「きゃあ！？」

先ほどシュウヘイと話していた少女にもその魔の手が襲いかかった。

「へ……陛下！！この！」

その触手をなんとか剣を抜き、切り捨てることで付き添いの女性はその少女を助け出した。今の彼女の発言からわかった人もいるだろうが、この少女はアンリエッタ、女性の方はその護衛に付き添ってきたアニエスだった。
この目で街の現状を知りたくなって、お忍びでやって来ていたのである。

「ありがとう、アニエス」

「いえ…それよりも」

触手は次々に人々を捕まえ、自分たちの現れた穴へと飛び込んでいく。

「民が…」

アンリエッタは、自分の国の民が酷い目にあってるのに何もできない自分の無力さを呪った。

その時だった。

〈ゼロスラッガー！〉
〈パーティクルフェザー！〉

サイトとシュウヘイの変身した、ウルトラマンゼロとウルトラマンネクサス・アンファンスが現れ、宇宙ブーメランと細かい光弾を触手に放って千切り、捕まった人々を救出した。

「ウルトラマン！！」

〈ウルトラキック戦法！〉

「ジュワ！」

ゼロは念力で二本のゼロスラッガーを浮かし、思い切り蹴ってクトゥーラの触手を千切る。

「蹴るなんてひでえじゃねえか相棒！」

ゼロスラッガーに乗り移ったデルフの悲鳴が聞こえたが、ゼロは聞こえないフリをしていた。

「シュ！」

ネクサスは引き続きパーティクルフェザーで触手を攻撃し、人々を解放していく。

二体の巨人は人々を襲う触手を次々と切り裂いていく。

しばらくすると、クトゥーラの触手は捕まえていた人々を捨てて穴の中へ姿を消した。

「逃げたのか？」

ここまで早く終わった戦闘は初めてだが、敵がいなくなったので二人は変身を解いて店へ戻って行った。

だが、ここでまだ騒ぎが起こる。チュレンヌが先ほどルイズに暴力を振るわれた腹いせで店に文句を言いに来たのだ。

「小娘！よくもこの私を足蹴にしおったな！」

「平民の癖になんとも無礼な！」

チュレンヌや護衛兵に口々に怒鳴られるルイズだがそこで引き下がるような女じゃないし、サイトもそれを邪魔をする。

「控えろ！この方をどなたと心得る！？」

どこぞの黄門様の付き人のようなしゃべり方でサイトはデルフを抜き、チュレンヌたちに向ける。もちろんだが斬ったりはしない。

「じゃあ、これが目に入るかしら？」

そこでルイズが取り出したのは、アンリエッタからもらった王室からの身分証明書だった。

「そっ、それは王室からの！？」

「この方は公爵家三女、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエール様にあられる！貴殿ら頭が高い！控えおろう！」

「「「は、ははあ！！」」」

チュレンヌたちも自分たちより身分の高い貴族には頭が上がらない。
一斉に土下座した。

「平賀君そのしゃべり方…」

同じ地球人であるハルナはそのサイトの話し方の元ネタにいち早く気づいた。

「まあ、そんな雰囲気な気がしたからつい……」

「お……お許しください！ラ・ヴァリエール様！」

チュレンヌは土下座したまま許しを乞う。

「いいこと！ここで見たこと聞いたことは全て忘れなさい！それとこれからは客としてのマナーをキッチリ守ることね！」

「「「はっはいいいい！！」」」

チュレンヌたちは大量のチップを残し、一目散に逃げ出した。
こうしてその日以来、チュレンヌは死ぬまで客としての節度を持って行動するようになった。

「すごいわルイズちゃん！」

「あの変態役人を追い返すなんて！」

「サイト君もさっきのセリフかっこよかったよ！」

店の女の子たちはサイトとルイズに詰め寄って褒め称えた。

「でも正体バラしちゃったな…どうする？」

確かに身分を隠さなくてはならない任務なのに正体がバレるのはご法度だ。

しかし、そこでスカロンが言う。

「安心して。店の内情に関しては貴族も全く触れないのよ。だから誰も見てないし聞いてもない」

「チップはあんたが一位ね。数えるまでもないわ」

ジェシカはテーブルにあるチップの山を指差して言った。

「今回のチップレースの優勝はルイズちゃんです！」

「「「わあああ！！」」」

優勝はルイズ。ちなみにハルナは三位に終わり、チップレースは幕を閉じたのだった。

「ルイズ、見事だったわ」

店の外から見ていたアンリエッタはほっと一安心した。これでチュレンヌも人として少しはまともになるかもしれない。

「……大したものだ」

シュウヘイも素直にルイズを評価した。

そして…

「どっちなの!?」

「平賀君はっきりして!」

なぜかサイトはルイズとハルナに問い詰められていた。

ルイズに至っては、優勝したことで着用を許可された魅惑の妖精ビスチェを着ている。対するハルナも露出のある仕事服を着用している。それでハルナと自分を比べようとしたが、サイトは結構一途だ。ハルナへの思いもあってなかなかルイズの方を選べない。かと言ってハルナを選べば、せっかく着たルイズがかわいそうだ。お仕置きも喰らいそうだし…

「「なんとか言って!」」

「と……トレビ、ア～ン!」

最後の逃げ道、訳のわからないことを言ってしまった。

「せめて…」

「もっと違う言葉で誉めてよ……」

「こ……ごめん！」

ちょっとがっかりするように肩を落とした二人をなだめながらサイトはさっきビデオシーバーに映ったあの不気味な文を思い出した。

『アレハ警告ダ』

（警告って、どういうことだ？）

最初はシュウヘイのいたずらだろうかと思った。ビデオシーバーで連絡をとれる相手は彼だけだ。しかし、シュウヘイは

「いや、知らん」

と言った。確かにシュウヘイがいたずらであんなことをするとは思えない。

あの不気味な文は一体何を意味するのだろうか？

その夜、三人はまた今日も同じベッドで寝ることにした。
身分を隠しての任務で明かしてはならない正体がバレたのだ。念のため明日は任務終了期間までに新たな仕事を見つける必要がある。
ルイズがまた金を無駄遣いしそうな気がするからとサイトの提案からだ。

しばらく時間が過ぎた頃、ハルナは急に起き出した。

（水、飲もうかな）

下の階に降りて水を飲みに行き、水の入った小瓶からコップに水を注いでそれを飲む。
その時だった。

お前は人形…

「！誰！？」

またあの声だ。まるで手のひらで踊らされる自分を見下ろしているかのような不気味な声…

私の作った美しい人形…

「誰…！？」

その声がそう言った時、彼女は窓ガラスに目が入った。

窓ガラスには、あの死人のような黒い瞳を持つ闇のウルトラマン、ファウストがじっと彼女を幽霊のように見ていた。

4　人形ーマリオネットー

「ば……化け物…」

自分の映った窓ガラスから、ファウストが蜥蜴に似た四つん這いの状態で這い出てきた。
そして立ち上がると、ハルナにゾンビのように手を伸ばしながら近づいてくる。

「来ないで…」

後退りするうちに、店の壁の隅に追い詰められてしまった。

「来ないでえええええええええええええ！！」

「ハルナ、どこに行ったんだ？」

昨日の夜、彼女とルイズの二人とベッドに寝ていたはずだ。一体なぜだろうか？どうしてハルナがいなくなってるのだ？

「ハルナ、おーい！」

今はまだ店を開けるには早い時間帯だ。ルイズは寝ぼけ眼を擦りながら起き上がった。

「ふぁ～、何よサイト？朝からうるさいわね」

「ハルナが、どこにもいないんだ！」

「ハルナが？」

確かに自分も覚えてる。昨日もまたどっちがサイトと寝るかでもめて結局三人一緒に寝ていたはずだ。

すると、ピピッとまたビデオシーバーから文が表示された。あの謎の警告と似た文章だった。

『オ前ハ大切ナ者ヲ失ウ』

「大切な者を…失う！？」

その時、サイトの背後から黒い物体がサイトにまとわりついた。

「ぐ…」

激痛が彼の頭の中に走り出す。

『早く逃げろ！』

少し歳の寄った男性が娘らしき少女と妻と思われる女性に必死に呼び掛けている。目の前に立っているのは、約１０メートル近くのネズミに似た化け物。

男性にその削ぎ済まされた鋭い爪を剣のように振り下ろした。

『うわあああ！！』

男性の悲鳴が響き渡った。

『あなたあああ！！』

『お父さあああん！！』

男性の倒れている場所には、血がベットリと着いている。

そして、今度は女性の方にその爪が振りかかってきた。

『いやあああああ！！』

『きゃあああ！！』

娘らしき少女。それはハルナだった。おぞましい光景を目の当たりにし、逃げ出してしまう。そこに、フードつきのローブを着た謎の男が彼女を守るようにネズミの怪物の前に立ちふさがる。

寄りすがり、彼に助けを求めるハルナ。

しかし…

『え……？』

男の取り出した、杖と思われる長い棒から炎が巻き起こり、彼女を包み込んだ。

きゃあああああああああああああああああああああああああああ！！！！

「！？」

ハルナの悲鳴が、その時はるか遠くから聞こえてきた。

『アレハ警告ダ』

『オ前ハ大切ナ者ヲ失ウ』

あの二つの不気味な文が意味することは、まさか……

サイトはデルフを担ぎ、部屋を飛び出した。

「ちょっとサイト！どこ行くのよ！？姫様の任務ほっぽり出す気！？」

ルイズの声を無視し、階段から降りる途中、昇ってきたジェシカとぶつかりそうになった。

「ちょっ、どうしたの？」

「あ、悪い！ちょっと行ってくる！」

「サイト！？」

サイトは大慌てで店を飛び出した。

「どうしたのかしら？」

あんなに慌てた姿は始めて見る。

「待ちなさいって言ってるでしょサイト！」

ルイズはサイトを追い、自分も町の中へ姿を消した。

「はあ…はあ…ハルナ、どこだ!?」

サイトは全速力で町を駆け巡っていた。

『消える…』

誰かの声がサイトの頭の中に響いた。まるでサイトを遠くから見下すように見ているかのような声だ。

『お前のせいで高凪ハルナは消える…お前がウルトラマンに選ばれた、そのせいであの女の家族は消えた…』

「黙れ! お前は誰だ! ハルナに何をした!?」

『会いたいか?』

「何だと!?」

『イーヴェンブルグの森に行け…そこにハルナがいる』

そこで声は聞こえなくなった。

「ハルナ…くそ！！」

その時の彼のいつもの表情は似つかわしくない怒りの形相だった。ちょうど町の出口に差し掛かったところで、黒い光弾がサイトに向かって飛んできた。

「相棒！」

デルフの呼び掛けもあり、いち早く避けることはできた。一体誰が攻撃してきたのか？見上げると、死人のごとき黒き瞳がサイトを見下ろしていた。

「お前…ファウスト！」

闇のウルトラマン、ダークファウストだった。今は約１０メートルほどの大きさになっている。

「光の国の戦士よ。人間同様貴様らに選択肢など存在しない。何をしても無駄だ。運命に従い我らに従え」

「黙ってそこを退け！」

荒々しい口調でサイトはウルトラガンの銃口をファウストに向ける。

「貴様がハルナをさらったのか？ハルナを返しやがれ！」

バシュン！ウルトラガンから放たれた閃光は、ファウストの平手で払われ消えた。

「ハルナ？その女ももうじき消える」

消える？ハルナが……消える？

「一体、どういう意味だ？」

「言葉通りだ。貴様も闇に染まって消えるがいい！」

〈ダークレイフェザー！〉

ファウストの闇の光弾がサイトを目掛けて放たれたが、背後からもう一つ飛んできた、別の波動弾と共に弾け飛んだ。

「ファウスト…やはり現れたか」

「その声…」

サイトはその声に反応し、ファウストの背後にいる人物を見た。

「シュウヘイ！」

シュウヘイがバイクに股がり、ブラストショットを向けた状態で現れた。

「フハハハハ…現れたな。ウルトラマンネクサス」

「平賀、だいたいの経緯はわかっている。先に行って高凪を探せ。ファウストは俺が始末する」

バイクから降りて、ファウストを睨みながらシュウヘイはエボルトラスターを引き抜き、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身

した。

〈メタ・フィールド〉

すぐさまジュネッストリニティにチェンジし、光のドームの中へフ
ァウストを取り込み、共に姿を消した。

「シュウヘイ、恩に着るぜ！」

サイトはシュウヘイのバイクを使い、イーヴェンブルグの森の中へ
急いだ。
因みに、サイトは無免許であるがここは置いておこう。

一方、ルイズもサイトを追っていたが、完全に見失っていた。

「全くあの犬、どこに行ったのかしら…」

チップレースで優勝してもやはりハルナの方に気持ちが行ってしま
ってるサイトに苛立ちを感じる。嫉妬深いルイズには常人以上に腹
がたつことだった。

（まさか…あの女と二人で…）

遂に想像したくもない光景を目にしてしまうのでは…
『やっと二人きりになれたね。ハルナ』

『平賀君…あん！／／』

そして二人はベッドに入り…

「ああ！ダメダメ！これ以上変なこと考えたら私とこの小説の品性が疑われる！！」

こをなハレンチな妄想を浮かばせることよりサイトを探さねば！ルイズは町の人に聞き込みながらサイトの捜索を続行した。

メタ・フィールド内では、ネクサスとファウストの激闘が繰り広げられていた。しかし、自分に有利な空間のはずなのにファウストの方が優勢だった。

「この中なら勝てると思ったか！」

「グォア！」

ファウストのハイキックを喰らい、ネクサスは片膝を着いてしまう。

「ぐ……」

「苦しそうだな。なら今すぐ楽にしてやろう！」

ファウストは両拳を合わせ、雷状の闇のエネルギーを溜めていく。

そして左拳で右拳を上から叩き、そこから闇の力をねじ込んだ破壊

力抜群の必殺光弾を撃ち込んだ。

〈ダークレイ・ジャビローム！〉

「ハアアア…デア！」

光弾はネクサスにぶつかると同時に、大爆発を起こした。

勝った。ファウストは確信した。

「他愛もない。冥王がなぜ奴を気に召し…なっ！？」

目を疑うしかなかった。

ネクサスが、力を振り絞り、自分の左手のアームドネクサスにさっき撃ち込まれたファウストの必殺光弾を吸収していたのだ。

〈スピルレイ・ジェネレード！〉

「シェア！」

「グワアアアアア！！」

予想外な出来事に動揺していたファウストはネクサスのカウンターショットを回避できず、左肩へモロに受けてしまう。

「ぬぅ…」

ファウストは左肩を押さえながら紫色に発光すると、姿を消した。

「ちい…また逃がしたか…」

ネクサス自身もダメージの蓄積もあり、一旦変身を解いた。

「私は…誰なの？」

薄暗い森の中で、ハルナは右肩から血を流しながらさ迷っていた。

『お前は誰でもない』

「え？」

『お前は人形だ……

もうお前は、あの光の戦士となった小僧がこの世界に導かれたその日、私の手でとっくに死んだのからな』

「私がもう、死んでる？」

その時、彼女の脳裏に悲惨な光景が走馬灯のように蘇る。

この世界に来る以前まで共に暮らしていたはずの両親。暖かい食卓で彼氏であるサイトのことを話しながら楽しんでいた。

はずだった…

その暖かい光景はすぐに真っ暗になり、ハルナが誰もいないのに楽しそうに一人、両親に話しかけているように独り言を言ってるだけ

の状態になった。
（父さんと母さんは…？なんで私、一人なのに楽しそうに話してるの…？）

そして次に浮かび上がったのは、サイトがいなくなったあの日、自宅近くの路上に現れた怪物に両親を、そして助けに来たはずのローブの男に、蛇のような炎で焼き殺される自分の姿が映された。

「きゃあああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

そのハルナの悲鳴と共に、カラスの鳴き声が森の中に響いた。

イーヴェンブルグの森にたどり着いたサイトは辺りの茂みや草木を掻き分けながらハルナを探していた。

「ハルナ！！どこだ！？」

サイトは叫んで呼び掛けるが返事はない。

その代わり…

「フフフハハ…」

目の前に現れたのはなんと死んだはずのワルドだった。

「ワルド…てめえ！邪魔しに来たのか！」

サイトはウルトラガンでワルドを撃ち抜くが、当たった瞬間手応えを感じさせることなく霧のように消えた。だがワルドだけじゃない。

「ギイ！」

「キュオオオオ！！」

「グルル…」

アパテー、ペドレオン、ガルベロス……今まで戦ってきた敵が、サイトの目の前に現れた。

「侵略者ども！また下らない野望のために誰かを犠牲にするつもりか！？」

サイトは、今度はデルフを抜いてアパテーを切りつけた。

「お、おいどうした相棒！？」

さすがにデルフも、今のサイトが普段の彼と比べてかなり異常な状態にあると悟った。

「その前に俺が貴様らを全滅させてやる！！」

サイトはデルフを振り回し宇宙人たちを切りまくった。

「どうした相棒！？何をしてやがる！止めろ！」

だがサイトは何かにとりつかれたかのようにデルフを振って振り回しまくった。デルフの声は、サイトの耳に全く届いてなかった。

「砕け散れ…この世界から消えろ…」

彼はそれからもがむしゃらにデルフを振り回し、また現れては霧のように消え行く敵を次から次へと切り捨てていく。

「消えろ！消えろ！消えろ！」

サイトは完全に正気を失い、暴走していた。

だが、そこに急いで駆けつけた人物に腕をつかまれ、止められた。

「目を覚ませ！平賀！」

シュウヘイだった。ファウストとの戦いの傷も癒えてないにも関わらず無理をしてサイトを追ってきたのだ。

「お前が戦っているのは…全て幻だ！」

実はサイトが見た宇宙人たちは、みんな幻影だった。手応えがないのだから当然、普段のサイトならここで理解してもおかしくないが…

「なんだよ…邪魔しないでくれよ…だって俺は…人の命のために戦っているんだから」

悪霊に取り付かれたようにサイトはシュウヘイを払いのけて、デルフを誰もいない方角に構える。

「相棒！あいつの言う通りだ！お前さんは幻想を見てんだ！！」

「黙ってろデルフ…剣なら剣らしくおとなしくしてろ…」

不味い。今のこいつは闇に取り込まれようとしている。シュウヘイは声を強めてサイトに忠告する。

「しっかりしろ！闇の波動に取り込まれれば…二度と戻って来れないぞ！！！！」

そう言ってサイトの肩を掴みだした。

「うっせえなあ！！！！」

いい加減腹を立てたサイトは乱暴にシュウヘイの手をを振り払った。

「邪魔するな！！」

しかも仲間であるはずの彼にウルトラガンを発射してきたではないか。しかし、シュウヘイはローリングで避け、サイトの頭にブラストショットを撃った。

「ウオオオオオオ！！」

波動弾がサイトの額に当たった瞬間、彼の背中から影のようなものが現れ、消えた。

「…シュウヘイ？俺…」

落ち着いた口調になっている。どうやら目を覚ましたようだ。

「目が覚めたか相棒？よかったよかった」

デルフもサイトが元に戻ったので安堵した。シュウヘイはサイトに近づき、なぜサイトが一時的に狂わされたか説明した。

「ビーストがとりついていた。そいつは人の怒り、憎しみ、不安と言った負の感情を吸収し、幻覚を見せる」

「幻覚？」

「おそらく誰かがお前を狙っている。お前の心を闇に染めるために」

「誰かって…お前が前に言ってた石堀って奴か？」

確かに石堀ならやりかねない。だが必ずしも奴が犯人とは限らない。

「わからない…ただ…」

シュウヘイが何か答えようとしたその時だった。

「平賀君…」

薄い霧の向こうからハルナが二人をじっと見ていた。

「ハルナ！！」

サイトはハルナに近づき、彼女の肩を押さえる。

「よかった！てっきりお前が殺されたのかとしれないって！」

ハルナは、まるでくっついた虫を払うようにサイトの手を振り払った。

「殺されたわ…」

「……え？」

「私も…私の家族も、平賀君のせいで殺されたのよ……あなたが…あの方にとって邪魔な存在だから…」

「俺の…せいで？」

すると、ハルナの声の調子が不気味に低くなり、紫色の闇に包まれていく。

しかも一瞬、あの黒い闇のウルトラマンの顔に変わっていた。

「さっき魅惑の妖精亭で見ただろ？お前のせいで私は殺された」

「…！？」

サイトは思わぬ光景に思わず後退りする。

「操り人形として、利用されるために…」

ハルナの体は完全に闇に包まれていく。そして闇が晴れると、そこにハルナの姿はなく、変わりに等身大のファウストがそこに立っていた。

「私はファウスト。全てを飲み込む、無限の闇だ」

「嘘だ…嘘だ…」

サイトは現実を受け入れられなかった。自分の恋人が…ファウストなんて…信じたくもなかった。

「ならば俺は、その闇を打ち払う！！」

そのシュウヘイの言葉を聞いた瞬間、ファウストは黒いオーラに包まれ巨大化した。

「ハッ！」

シュウヘイもエボルトラスターを抜いてウルトラマンネクサスに変身した。

「フン！」

「デヤア！」

二体のウルトラマンは互いににらみ合いながら身構えた。

一方、その場から離れた場所で、ハルナを殺害したあのローブの男が二体の巨人の姿を見ていた。
悪魔のような、歪んだ笑みと共に。

「始めようか、デスゲームを」

「ハア！」

ネクサスはファウストに投げ技を仕掛けようとつかみかかる。対するファウストもつかみ返してきた。
ファウストはネクサスを投げようとするが、逆に脇腹を蹴られ、投げ飛ばされた。

「ハア！デヤア！」

「グオ！」

ネクサスはジュネッストリニティにチェンジ、更にエネルギーを空に向けて放出した。

（また闇に乗っ取られるだろうが、平賀を巻き込む訳にはいかない）

〈メタフィールド！〉

「デヤア！」

だがファウストは両腕を拡げ、新たに自分に有利な空間を展開した。

〈ダークフィールド！〉

「ふん…ハア！」

「ち……やはりそう来たか…」

だがダークフィールドはサイトのいた外にも拡がり、サイトも飲み込んだ。

「うわ！？」

「ダアアアア！」

「デヤアアアアア！」

二体の強烈なクロスカウンターが互いに決まったところでサイトは目を開いた。互いにモロにダメージを受けた巨人たちは片膝を着く。

「グウ…ハア！」

ファウストは容赦なくネクサスの腹を殴り、ネクサスを空へぶっ飛ばした。

「グ…デヤアアアア！」

ネクサスは身を反らして体制を整え、空中からキックをファウストに喰らわせようとしたが、ファウストは回避する。

地上に着地し、ネクサスはすかさずファウストに連続で光弾を放った。

〈パーティクルフェザー！〉

「ハア！」

しかし、ファウストはそれを横に回転しながら次々と避けていった。

「相棒…見てるだけでいいのか？」

デルフがサイトに話しかける。

「何を…俺にハルナかシュウヘイを殺せってのか…？」

「で、でもよ…」

サイトはハルナを止めたいのだが…

手が震えてウルトラゼロアイに手をつけることができなかった。

もし変身してハルナを止めたとしても、それがハルナを死なせることになるかもしれない。

だからと言ってシュウヘイを止めようとしても、二人ともファウストに殺され、救うことすらできなくなるかもしれない。もしそうなったらテファや子供たちが悲しむことに…

サイトはどうすればいいのかわからなかった。

ネクサスはファウストがパーティクルフェザーを避けている隙をつ

いて光の剣でファウストを斬ろうとした。

〈シュトロームソード！〉

「ダアアアア！」

だがあと少しのところで止めた。

（高凪を…斬る！？）

ネクサスにもためらいがあった。同じ悲しみを持つ人間が、また増えていくような気がして、彼の剣を鈍らせる。

「脆弱な奴め、フッ！」

ファウストはその隙にネクサスに光弾を一発ぶつけた。

〈ダークレイフェザー！〉

「グワア！」

ネクサスが倒れこんだところに、ファウストは彼を地面に押し付け、首を締めあげる。

「今度こそ貴様を倒し、私の一部として取り込む。更に無敵となるために…」

ネクサスの体からだんだん赤い光が溢れ、ファウストの体の中に吸い込まれていった。ファウストはネクサスのエネルギーを吸収し始めている。

「ハハハハハハ…」

「グウ…オ…オオ…」

「ハハハハハハ…」

「グア…アアア…ア…」

ピコンピコン…

ネクサスのコアゲージが点滅し始めた。彼の命綱であるエネルギーが、吸われ尽くそうとしている。

「…」

サイトは思い出した。ハルナと初めて会った日を…

四年前のことだ。

「ガアアアア！」

『わあああ！逃げろおおおお！！』

『きゃあああ！』

ウルトラマンメビウスが飛来するあの日、彼が人生で初めて生で見る怪獣『ディノゾール』が襲って来た。ハルナも町の人々と共にディノゾールの魔の手から逃げていた。

『ハア…ハア…きゃ！』

不運にもハルナは転んでしまった。しかもビルが崩れ落ち、瓦礫がハルナに落ちて来た。

『きゃあああ！』

『危ない！！』

その時サイトがハルナを背後から突飛ばし、落ちて来た瓦礫から救った。

『え！？』

しかし、逆に自分が両足を瓦礫に埋められ重傷を負ってしまう。

『だ……大丈夫ですか！？』

その後、病院に運ばれ、両足骨折で済み命に別状はなかったがサイトは血の繋がった親を亡くしてしまう。その後は、アンヌと出会い、彼女に引き取られた。

サイトは忘れられなかった。ハルナが瓦礫に埋まって傷ついた自分を必死に励ましていたことを。

「クハハハハ…」

「グア…グウ…」

ピコンピコン…

「やめるんだ…ハルナ…」

ファウストのあの笑い声がハルナのものだなんて、信じたくない。
こんなことがあってたまるか…

高校に入学したときのことだ。奇跡的な偶然、サイトはハルナと再会した。

『もしかして…平賀サイトさん!?』

『あ、はい…』

『嬉しい!また会えるなんて!』

『のわ!?ちょちょちょっと!』

いきなり抱きつかれたものだからかなり動揺したものだ。だが今の彼女は……

「ハハハハハハ…」

不敵な笑い声を上げ、同じ仲間を傷つけ、いや殺しにかかっている。

「ハア…グア…」

ピコンピコン…

「やめろーーーーーー!!!!!!!!」

もう我慢できなかった。サイトはファウストの顔にウルトラガンを撃った。
傷こそは着かなかったが、ファウストはサイトの方向を向いた。
その時のサイトの目から大粒の涙がこぼれていた。

『何をしている!?早くウルトラマンネクサスの光を奪え!!』

ローブの男の声がファウストの頭に響くが聞こえなかった。ファウストは思わずネクサスを離す。

『平賀…君…』

「ハルナ…」

『かすかに記憶が…ちい……』

ローブの男が目を閉じると同時に、ダークフィールド内に新たなビーストが現れた。

「あのビーストは!」

そうだ。ハルナの家族を惨殺した怪物『フィンディッシュタイプビースト・ノスフェル』。

『ノスフェル、お前がネクサスに止めを刺せ。ファウスト、お前はウルトラマンゼロを抹殺しろ』

「ぐっ…ウォオ…!」

そのローブの男の力によるものだろうか。ファウストは頭痛に悩ま

されたように頭を抱え、苦しみだすと、サイトにその黒き手を伸ばそうとした。

一方、ノスフェルは倒れ込んでいたネクサスに長く鋭いかぎ爪を振り上げ、彼を斬り殺そうとした。

（終わり…か）

もうここまでかとネクサスが死を悟ったその時だった。

ドス！

「……？」

生きてる？なぜだ？ネクサスは顔を上げると、信じがたい光景を目の当たりにした。

それは、ローブの男から見ても信じられなかった。

「何……！？」

「ア……ァア…」

ローブの男に操られていたはずのファウストが、サイトを殺さず、しかも瀕死のネクサスを庇ったのだ。

ノスフェルは乱暴にファウストを蹴り飛ばした。

「ウワアアア！！」

蹴り上げられたとき、ファウストの背中から血のように光が吹き出していた。

「貴様…よくも…よくも…」

怒りが込み上げてくる。ハルナの家族を奪い去り、しまいにはハルナを殺したあのビースト…

許さない……許さない…

ぶち殺してやる！！

サイトはウルトラゼロアイを装着し、ウルトラマンゼロに変身した。

「ウワアアアア！！！！！！！」

ゼロは変身直後、ノスフェルを殴り飛ばした。

「ギオオオ！！」

倒れ込むノスフェルに、ゼロはなんの躊躇いもなくゼロスラッガーをカラータイマーにセットし、セットしたゼロスラッガーから必殺光線を放った。

〈ゼロツインシュート！〉

「消えろおおおお！！！！！」

「グギョアアアアア！！」

ノスフェルはゼロの光線に耐えきれず、爆発四散した。

「ハルナ!!死ぬな!!死んじゃダメだ!!ハルナ!!ハルナ!!」

サイトが意識を失ったハルナの名を呼びかける。

必死に呼び続けると、ハルナはゆっくりと目を開けた。

そこでルイズがようやくやって来た。町の人たちに黒髪の男がどこに向かったか聞き込んでようやくたどり着いたのだ。

「ここの犬!!やっぱりご主人様の…」

目を盗んでその女といけないことをしてたのか!?とルイズは思い、サイトのもとへのしのしと歩き出す。

だが、傷だらけになったシュウヘイがそれを阻んだ。

「よせ……」

「あんた…どうしたのよその傷!?」

ルイズはシュウヘイの血だらけの服にギョッとした。

「平賀…君…私…後悔してないよ…」

弱々しい声でハルナはサイトに話しかけてきた。

「平賀君と会ったこと…後悔なんてしてない…」

「…」

「もっといろんなこと…話したかったな…」

「俺だって、まだ話してない！大事なことを…」

「ウルトラマン…でしょ？」

一瞬サイトは身を強張らせた。まさか、気づいてたのか？

「私、自分がファウストだって知った時…平賀君がウルトラマンなのも知ったの…」

「隠して…ごめん…」

「うぅん…気にしてないよ…ウルトラマンになった平賀君…かっこよかった…」

彼女の手から、だんだんぬくもりが消えていく。

「平賀君、一緒に夢…叶えられなくて……ごめんなさい……

さよ……なら……」
ハルナは一筋の涙を流し、ゆっくりと目を閉じた。
彼女の手から、力が完全に抜けていた。
「ハル……ナ……！？」
彼女の身をゆすってみるが、なんの反応もない。
嘘だ…
嘘だ！！！！！！！！
「やだよ！！やだよこんなの！！ハルナ！！ハルナ！！」
すると、彼女の体は金色に輝き、美しい光の粒となって空へ消えていった。
もうサイトの手の中に、彼女はいない。
「う……うわあああ！！！！！！」
右拳で何度も何度も地面を殴り付けた。
何が侵略者の子孫も侵略された人の子孫も共に手と手を取り合える世界を作る、だ。
大事な人も、まもれなかったじゃないか！

「俺は…俺は…一体なんのために、戦ってるんだあああ！！！！！！！！！！」

一人の青年の涙の咆哮が、空を飛び越え、宇宙にまで轟いた。

シュウヘイも、悔しそうに近くの木を殴った。

（……あいつにも……俺と同じ嘆きを味あわせた……俺は…弱い…）

誰も気づかなかった。

その悲しみに満ちた光景を、母なる存在がジッと悲しそうに見ていたことを。

5　平賀サイトの絶望

トリスタニアの城にて、滞在期間を過ぎたためルイズとサイトは学院に戻ることとなった。
現在、アンリエッタのいる玉座の間にはルイズとアンリエッタ、そして護衛にアニエスとその他銃士隊の隊員がいる。

「すみません姫様、これといった活躍ができなくて…」

「何を言うのですルイズ。あなたはチュレンヌの横暴を止めたではありませんか」

「え？」

つい二日前の出来事をすでにアンリエッタが知っていたことにルイズは驚く。

「お忍びで町に行ったらちょうど見かけたのよ。かっこよかったわ」

可能性「ゼロ」とバカにされていたルイズにとって、誉め言葉は普通の人間よりも喜びを味あわせた。

「ところで先ほどから気になってましたが、サイトさんとハルナさんはどうなされてるの？」

いつもならルイズの側にいるはずの彼がいない。それに、もう一人の黒髪の少女もいなかった。なぜなのかアンリエッタは気になった。

「実は…」

ルイズは話すべきか迷いはしたが、幼馴染みに隠し事をするわけにもいかず、任務中に起こったあの悲劇を一通り説明した。
実は黒いウルトラマンの一人がハルナで、おそらく何者かに操られていたこと。そのハルナを助けられず、死なせてしまったことを。
その悲しみで最も大きなショックを受けたサイトは現在街の中央広場にいると。

「ごめんなさい…私は聞いてはならないことを聞いてしまったようですね…」

アンリエッタも大切な人を亡くした悲しみは痛いほどわかる。だから、この話をあげたことを反省した。

「いえ…では私はここで失礼します。姫様、お体にお気をつけて…」

ルイズはそう言って王座の間を後にし、アニエスが彼女の護衛で城まで送ることとなった。

「まったく…ご主人様にボロ剣持たせるなんて…」

デルフは今ルイズが持ち運んでいる。少し重たいのでルイズは荷物運びをさせるサイトに文句を言いたくなった。

「そう言うなって娘っ子。あんなショッキングな出来事にゃ、お前さんも耐えられないだろ」

「それは……」

確かに、もし自分の大切な人間があんな残酷な殺され方をしたら自分も耐えられない。はっきり言えることだ。

「相棒はガンダールヴ、娘っ子は伝説の虚無の力を持ってはいる。だけどな、完璧な人間なんざこの世にいないのさ」

「そう…ね…」

「……」

一人沈みに沈んだ表情で噴水に腰かけていたサイト。よく周りの人間に見せる笑顔を失い、ただハルナからもらった首飾りを見つめていただけだった。

「……」

結局俺が弱かったせいだ…ハルナを助けられなかった。何が宇宙人同士の平和だ。大事な人を一人守れてないんじゃ…

「そうよ。あなたのせい」

「！」

その声…サイトは声の聞こえた方を見ると、そこには死んだはずの

ハルナがいた。
だが、どこか様子が変だ。まるでサイトを恨んでいるような目をしている。そのせいか、サイトはハルナとの再会を喜ぶどころか、固まって動けなかった。

「あなたがルイズさんに召喚され離れ離れになったあの日の夜、私たち家族はこの世界から現れたビーストに殺されたの。
そう、すべてあなたのせい…」

そう言うとハルナは霧のように消え去っていった。

「やあ」

そこに、顔が見えないほど深いフードの着いたローブを着こんだ男がサイトの肩を叩いた。

「誰だよ…あんた」

もう構わないでくれ。一人にしてくれと言うようにサイトは呟いた。

「ミゾロギ、そう名乗っている。とは言ってもこの名前は同じ力を持っていた男の名前を借りてるだけだけどね。
それと…君の恋人を焼き殺した男さ」

「！」

ビリッと静電気が走ったような感覚がサイトの全身に走り出した。

「なん…だと…」

「もう一度言ってやろう。君の恋人を焼き殺した男だと」

怒りが込み上げてくる。

まるで内に秘めた力が溢れていくように、サイトは握り拳を作る。

「君たちの恋人ごっこは面白かったよ」

「ざけんな！」

サイトは本気で目の前の男を殴り殺す勢いで拳を引っ込め、突き出した。

しかし、ミゾロギはその拳を受け止め、サイトの腹を殴り、手刀で地面に叩き伏せた。

「っ……のお！」

それでも殴りかかるサイト。しかし、ミゾロギのフードの下に隠れた目が紫色に輝くと同時に、サイトは力が抜けたように膝をついてしまう。

その時サイトは見た。

（見間違い…か……？）

その一瞬で見たフードの下の男の顔が、彼の知る人物に見えた。

ミゾロギは力の抜けたサイトの胸ぐらを掴むと、空間の歪みにサイトもろとも飛び込んだ。

一方、シュウヘイはネクサスの力を得たあの遺跡の石像『ストーンフリューゲル』の中で横たわっていた。この中にいる間、デュナミストは戦いで受けた傷を癒すことができる。
しかし、今の彼はうなされていた。
前日のあの悲劇と、かつてビーストと化した自分の恋人をその手で殺したあの日が重なっていたのだ。

（平賀……）

サイトはコンクリートの床の上に倒れていた。
気がついて起き上がり、あたりを見渡すと、あの赤紫の闇の荒野『ダークフィールド』が拡がっていた。

「平賀君！来てくれたんだ！嬉しい」

「……！」

その声に反応して振り向くと、その向こう側にポツンと立っていた扉からハルナが飛び出してきた。先ほどの、サイトを罵っていた彼女の面影はどこにも見当たらない。

「今日来てくれるって約束だったもんね。こっちこっち」

呆然とするサイトの手を引っ張り、ハルナは彼を家の中に招き入れた。

「どうしたの？悪い夢でも見たの？」

「あ、いや…」

夢…

そうか。あの日のことはきっと夢だったのだ。

いや、あのファンタジーだらけの世界で起こったこともきっと夢だったのだ。

その世界に召喚されるはずの日、サイトはハルナの家を訪れる予定だった。

サイトは目の前の現実を受け入れることにした。

ハルナはリビングにサイトを案内した。

「お父さん、お母さん。平賀君が来たよ」

「は、初めまして！平賀サイトといいま…」

礼儀正しく自己紹介しようとしたが、サイトはその目を疑った。

ハルナが椅子に座っている両親と言ってるものが、ただのマネキンだったのだ。だんだん辺りが暗くなっていく。

「ハルナ…これは一体…」

とっさにハルナを見たが、さっきの彼女の姿はなかった。

代わりに、その暗がりの空間の向こうでハルナが倒れていた。ノスフェルの一撃でファウストの変身が解け、あの森でサイトに抱き抱えられた時と同じだ。

「ハルナ！」

彼女をあの時のように抱き抱え、彼女の名を呼ぶが、目を覚まさない。

もう動かないと思っていた。が、突如ハルナは目を覚まし、立ち上がった。

でもその姿は一瞬にして異形の姿、ファウストとなり、サイトを見下ろす。

「お前のせいだ…お前のせいで私はこうなった…」

ファウストは言い終えた瞬間、マネキンとなってバラバラに崩れ落ちた。

「ハルナ！」

マネキンのパーツをかき集め、ハルナの名を呼んでも何も起こらない。

「う……ぅう…」

またあの悲しみが込み上げ、サイトの心を深く抉るように傷つけて

いく。

「この弱虫！」

その怒声と同時に、サイトはいきなり顔面を殴られた。

殴ったのは、なんとルイズだった。

彼女だけではない。彼女の後ろからギーシュ、シエスタ、キュルケも現れる。

「ハルナさんが死んでたこと気づかなかったんですか。鈍感！」

「こんな情けない男に、僕は負けたのか？」

シエスタとギーシュが心にもないことを言い出す。

するとキュルケはサイトの頬を掴み、嘲笑うように彼を見下ろした。

「人形となった恋人とのごっこ遊び、見てる側は愉快だとは思わない？ヴァリエール」

「その通りねツェルプストー」

その時のルイズの笑みは、まさに悪女の象徴とも言えた。

（平賀、ダメだ…！闇に惑わされてはならない……！）

ストーンフリューゲルの中、悪夢の中で苦しむサイトに、シュウヘイの必死の念は届かなかった。

「あはははははははは！！！！」

「くはははははははは！！！！」

「あはははははははは！！！！」

「きゃはははははははは！！！！」

自分を囲む四人から嘲笑われ、サイトの精神はもう崩壊寸前だった。

気づかない内に四人は消え、サイトはダークフィールドのど真ん中に座り込んでいた。

「俺は…ダメだ……俺は…ダメトラマンだ……」

そんなサイトの背後から、ビーストの影がサイトに近づき、寄生虫のように彼の体に乗り移り、彼を黒く塗りつぶしていく。

（平賀！）

ストーンフリューゲルの中、シュウヘイはエボルトラスターを強く握りしめた。

すると、光が輝きを増したような音がサイトの耳に入った。同時にサイトの体に寄生しようとしたビーストの影も逃げるようにサイトの体から離れていく。

『光を見失うな、平賀！心を強く持て！』

その声に反応して顔をあげると、金色に光るウルトラマンネクサス・

ジュネッストリニティが彼の目の前に立っていた。彼のいる箇所から、だんだん光の亜空間『メタ・フィールド』に変わっていく。

あと少しでサイトにダークフィールドから変化したメタ・フィールドが届く。

しかし…

『よそ者の干渉はそこまでだ』

そこでミゾロギの声が聞こえ、瞬く間にメタ・フィールドはダークフィールドに戻ってしまい、ネクサスも消えてしまう。

（そろそろ返しておくか。まだこいつはいたぶりがいがある）

ネクサスの紅き光はシュウヘイの手に握られたエボルトラスターに戻り、シュウヘイは起き上がった。

「平賀…」

「どこに行ったのかしら…この辺りにいるはずなんだけど…」

中央広場にいるはずなのにサイトの姿がない。
ルイズとアニエスは辺りを見渡した。
すると、突然サイトが飛び込むように姿を現した。
「サイト！」
「っ……！うわ！」
サイトはルイズの姿を見た瞬間、まるで化け物を見るかのように身を縮ませた。
「なっ、何よ！人が心配してるのに人を怪獣みたいに！」
一つお仕置きしようかと考えたが、アニエスがそれを遮り、サイトの顔を自分に向けさせ、
「しっかりしろヒラガサイト！」
バシン！乾いた音がビンタと共に響いた。
「ルイズ…それにあんたは…」
サイトはようやく理性を取り戻した。顔をあげると、ルイズの他にもう一人キツそうだが内に強い心を持っているように見える女性が彼を見つめている。
「銃士隊隊長のアニエスだ。お前のことは聞いている。前日死んだお前の恋人のこともな」

「……」

「私も幼い頃に故郷を焼かれたことがある。だからお前の悲しみはわかるが、お前の知る彼女がそんなところで立ち止まることを望んでいるのか？」

「！！」

それを言われ、サイトはハッ！となる。

「殺した相手を憎むんだ。その憎しみを力に変えて、敵をとれ」

少なくともその言葉は、サイトの心を突き動かす源になった。

6　メフィスト

光の国…

アニエスに喝を入れられ、サイトは一度ゼロに変身、一時光の国に帰還した。

「お、ゼロ！戻ってきたのか！」

同じ宇宙警備隊の隊員たちから気さくな挨拶をされるが、ゼロは全く聞いてない。

彼の向かった先、それは人工太陽プラズマスパークコアの保管された、プラズマスパークタワーだった。

力が欲しい…

仇を討つためにもっと力を…

力を！

ゼロは憎しみのあまり力を渇望しすぎていた。

目の前に見えるプラズマスパークコア。これに触れることは光の国では重犯罪に値した。なぜならあれを奪い取れば光の国は、あの人工太陽を得る直前までのように、氷河に覆われた死の星に変わって

しまうからだ。だが、今のゼロ……サイトにとって他のウルトラマンのことなんかどうでもよくなっていた。

プラズマスパークコアに手を伸ばし、それを奪い取ろうとする。

これさえあれば…
もっと敵を倒せる。

仇をとれる。

だが、それを許すまいと一体のウルトラマンがそれを阻んだ。

父、ウルトラセブンだった。

「邪魔をするな！」

父に向かって反発するゼロだが、セブンは全く気負うことなく言った。

「自分のしていることがどういうことかわかってるのかゼロ！久しぶりに戻ってきたと思ったら…
この星にはお前の同胞たちが何億もいるんだぞ！」

「知るか！俺はこんな甘ったれた連中なんざどうでもいい！ハルナを殺した奴らをこの手で全員ぶっ潰してやるんだ！あのコアの力でな！」

もはやハルナ以外のことなどどうでもよいと思っているゼロ。父から見てその姿はあまりにも辛いものだった。

「そこを動くな！」

その騒ぎを聞きつけ、ゾフィー、初代ウルトラマン、ウルトラマンジャック、ウルトラマンエースが彼らの前に現れた。

「ゼロ、お前は宇宙警備隊規律を破った！すぐこちらに来い！」

セブンはハッ！となってゾフィーの前に走り、必死に彼に弁解する。

「待ってくれゾフィー兄さん！ゼロは今精神的に……」

「セブン！」

初代ウルトラマンはセブンの肩を掴み、首を横に振った。

「親としてのお前の苦しみは、兄として痛いほどわかる。だが、これは我が光の国のルールなのだ。
それにもしゼロを庇えば、お前も犯罪者として追放を余儀なくされるのだぞ。私は仲間が一人でも多くいなくなるのは見たくないのだ…」

「…ハヤタ兄さん…」

セブンはウルトラマンからの言葉を受けて何も言えなくなった。自分は警備隊でも重要な階級にいる。このまま息子共々追放されたら光の国に混乱を起こすこととなるかもしれない。

「さあ来い！」

ジャックとエースはゼロの両肩と両腕を捕まえ、彼を引っ張り出す。

「放せ！放せよ！」

乱暴に二人の手を振りほどこうと暴れだすゼロ。そのまま彼は光の国から追い出されてしまった。

追放処分。それがゼロに下された処分方法だった。

ウルトラセブンの息子の凶行は、光の国中でも話題となり、セブン自身の立場も精神も不味くなったことを、ゼロ……いやサイトは知らない。

その頃…

「ウェールズ兄、今度はあっち行こうよ」

「エマ、早いって」

ウェールズは「たまには外に出てみたら?」とテファの提案で、子供たちを連れてトリスタニアの街に来ていた。子供たちはなかなか街に出かける機会がないため、はしゃいでいる。

「エマ、そんなに急いでも街は逃げないって」

「だってジム兄、もっと街を回りたいもん。ゆっくりしてらんないよ」

皇子の座を追われてから大分経つ。しかし、平民として生活することに辟易した感情を抱くことはなかった。あの子供たちの笑顔を守りながら戦う恩人の姿は、どの貴族よりも孤高で立派だ。彼のようになりたい。貴族である以前にれっきとした人でありたい。ウェールズは子供たちを見てそう思った。

しかし、ここで問題が一つ発生した。

「ウェールズ兄！エマがいなくなった！」

「え！？」

慌ててウェールズに報告するジム。エマはどうやら迷子になってしまったらしい。

そのエマはと言うと、ある二人組の若い夫婦に誘われていた。

「エマ、元気でよかった」

「パパ！ママ！」

戦時で死んだはずの両親と再会していた。

一方、サイトは学院に戻っていた。
ルイズが授業の時も、彼女に付きっきりの護衛をさせられている。
でもサイトにはなかなか理解できなかった。
その授業の間、あの日を思い返していた。

ハルナのファウスト化。
姿をフードで隠した謎の男、ミゾロギ。

追放処分のことは思い出したくもない。

（後で、ビデオシーバーでシュウヘイに教えた方がよさそうだな）

今授業はコルベールが担当している。彼はなにやら奇妙な装置を使った実験を生徒たちに見せている。

「石炭を燃やすと蒸気が起こります。この蒸気の力を使えばほら！魔法も使ってないのにこの蛇くんが顔を出しましたよ！」

蒸気の力によって、その装置から蛇のおもちゃが顔を出した。

「たとえ魔法が無くてもこの蒸気の力があれば、私は魔法に代わって人々の生活を支える力となるものが存在すると確信しております」

しかし、生徒たちはまるで興味を示さなかった。魔法さえあれば別にいいではないか。そう考える者たちばかりだ。

「で、それがなんなんですの？」

「いや、ミス・ツェルプストー…私はたとえ魔法がなくても」

色々と説明するコルベールだが、ほとんどの生徒は聞く耳持たずだった。

しかし、ただ一人だけ興味をもった者がいた。

「それ、エンジンじゃないですか！」

サイトだった。なんという偶然なのか。地球から離れたこの星にもエンジンの祖が誕生しようとしていることにサイトは多大な興味を沸き立たせた。

「おおサイト君！君ならわかってくれると信じていたよ！」

「ええ！俺のホークも同じように動きますから！」

「そうだったのか！せひもう一度見せてもらいたいよ！」

ルイズも含め、生徒たちはポカンと口を開けていた。一人反応が違っていたのはタバサ。彼女だけは表情を全く変えないから何を考えてるか読めなかった。

同時に、そのコルベールの背中から伸びた影に、悪魔のような顔をしたウルトラマンの顔が映っていたことに気づく人はいなかった。

「エマがいない？」

森の小屋に戻り、ウェールズはエマを除く子供たちを連れて帰ってシュウヘイたちに報告した。

「済まない、僕がちゃんと面倒を見てなかったせいだ」

「下手をしたら奴隷商人に捕まることも懸念するな。俺が探しに行く」

椅子から立ち上がって外に出ようとしたが、テファが彼の手を突然握って引き留めた。

「あ……ごめんなさい……」

何をしてるのだろうか？テファは思わずシュウヘイから手を離した。

「その、気を付けてね…」

「あ、ああ…」

一体なぜ彼女はいきなり手を握って来たのだ？いや、そんなことよりエマを探さなくては。

シュウヘイはバイクに乗ってトリスタニアの街へと向かった。

「ごちそうさま」

一方、サイトは厨房でシエスタからもらった昼食を平らげた。

「あの、サイトさん」

少し聞き辛そうにシエスタは口を開いた。

「ん？なに？シエスタ」

「ハルナさんは、どうなさったんですか？それにいなくなってからのサイトさん…なんか怖い感じが…」

「……いや、怖いのは気のせいだよ。それと…ハルナなら…」

死んだよ。そう告げるとシエスタは頭を下げだした。

「すみません…私…」

悪いことを聞いてしまったと思った。

「いいよ、シエスタが気にすることじゃないさ」

そうだ。こうなったのはあの男のせいだ。

ミゾロギ。必ず俺が殺す…！
いや、あいつだけじゃない。人の幸せを阻む奴は片っ端からぶっ倒してやる。
カップを握りしめながらサイトは強く決意した。
すると、サイトのビデオシーバーから音が鳴り出した。
「それ、ひいおじいちゃんの……使ってくれてるんですね」
シエスタにとってサイトが自分の祖父が愛用したものを使ってくれるのは嬉しいことだった。
嬉しくてつい少し顔が染まっていく。
しかし、その笑顔はサイトの憎しみに満ちた表情を見た瞬間曇ってしまった。
「……！」
『こっちに来いよ。面白いものを見せてやる』
ミゾロギからのメッセージがビデオシーバーの画面に表れた。
『そこから近いだろ？すぐ近くの森に来い。
小娘を一人預かってる』
そこでブツン！と画面は途切れた。
「あの野郎！」
サイトはデルフを担ぐと、すぐ厨房を飛び出してしまう。

「さ、サイトさん!?どこへ行くんですか!?」

シエスタの声は彼に届くことはなかった。

その頃、以前サイトがフーケと争っていた場所の近くの空き家――両親はここが新しい家だといっていた――でエマは恐怖に身を強張らせていた。戦時で死んだはずの両親との再会は確かに喜ばしいものだ。だが、どういうことだ。

なぜ両親が自分の目の前で暖炉などによく使われる薪を食いちぎってるのだ?

「パパ、ママ…どうしちゃったの?そんなの食べたらお腹壊しちゃうよ?」

「好き嫌いしないで食べなさい」

エマの母は立ち上がると、無理やり彼女に、彼女にも配っていた薪を口に入れようとした。

「嫌!止めてよママ!」

ちょうどそのエマの悲鳴を聞きつけ、サイトが駆けつけてきた。

「あんたら、何してんだ!?」

「何って、食事よ」

何の詫びれもなくエマの母はエマを押さえつけたまま答える。

（あの子、確かシュウヘイが養ってた…）

サイトは透視能力を使ってエマの両親の体の内部を観察した。
人のものではない臓器がたくさんひしめいている。
はっきりした。この二人は人の姿をした怪獣なのだと。

「その子を離せ！」

サイトはウルトラガンを二人に向けた。しかし、今のエマは人質でもある。迂闊に攻撃したら彼女の身が危ない。

「嫌！嫌！離してよママ！パパ！」

エマの両親は彼女を捕まえたままその空き家から逃げ出した。

「待て！逃げんな！」

血相を変えながらサイトはその二人の後を追った。

「エマ、どこに行ったんだ?」

シュウヘイはエマの行方がわからなくなったトリスタニアへ、バイクを走らせていた。

怪獣に狙われているのでは?そう思って目を閉じ、デュナミスト特有の透視を行う。

本来この透視能力は彼の胸のルーンの力だと思う人もいるかもしれないが、この場合は違う。なぜならその場合、テファがピンチに陥らないとできないことだ。今シュウヘイの使っている透視能力は主にビーストがらみの事件に巻き込まれた人の光景が映るもの。

不運にも予想通りだった。エマを捕まえた二人組とそれを追う仲間の姿が見えた。その二人組の手は、人のものではなかった。以前ゼロが倒したノスフェルの鋭い爪の生えた手に似ていた。

「やはり、ノスフェルは……」

その時だった。突然彼の足元に紫色の閃光が飛んできた。

「!」

ブラストショットを左手に、小型銃ディバイドシューターを変形させたビームソード『ディバイドセイバー』を構え、周りを警戒する。

『なぜ君は戦う?』

ミゾロギの声がシュウヘイの頭の中に響き渡る。

『大して世間から称賛されるのはお前自身じゃなくて、ウルトラマンだというのに、ボロボロになってでもなぜ戦う？』

木陰から人影が顔を出した。ついにシュウヘイの前にも、彼が姿を現した。

「あんた、誰だ？」

フードで相変わらず顔を覆い隠している。
シュウヘイは警戒しながらミゾロギに尋ねる。

「ミゾロギ、そう名乗ってる」

「ミゾロギ？」

ミゾロギ、その単語を聞いてシュウヘイはある人物を思い出した。たった一度だが顔を見たことがある。ナイトレイダーに入隊する以前、アイリスをその手にかけ保護された日に訪れた留置場の牢屋の中にいた、闇の力を手にした男…溝呂木眞也。そして、シュウヘイから見れば先輩にも当たり、ナイトレイダーの前副隊長だった。

しかし、声からして別人だったのがよくわかった。

「ふざけ半分で他人の名前を名乗るなど回りくどくないか？本名を教えろ」

「……」

男はフードを取り素顔を現した。

もし、サイトや魔法学院の生徒らが見たら驚愕せざるを得なかったに違いない。なぜなら彼は、学院でも変人と呼ばれながらも教師として評価の高い男。

『炎蛇』のジャン・コルベールだったのだから。

そう、実は彼がハルナとその家族を殺した張本人だった。恐らく異世界であるにも関わらず地球に現れたのは、彼の中にある邪悪な力によるものだろう。

「あんた、だったのか」

「驚かないのかい？君と会うのは初めてではなかったはずだが？」

コルベールの言う通りだ。シュウヘイとコルベールはここが初対面ではない。シュウヘイとマチルダが『破壊の杖』の件で捕まった時に顔を合わせたことがある。

「あんたから闇の匂いがして、予感はしていたからな」

「なるほど…さて、話を戻すとしよう」

一度癖の咳払いをして彼は続けた。

「君の痛みを理解する人間などいない。そんな戦いを繰り返しても、

虚しいだけだ。
君も私のように闇に身を委ねたらどうだい？何もかも忘れ、楽になれる。
冥王はおっしゃっていたぞ。『彼に光は似合わない』と」

こっちへおいでと言うように手招きするコルベール。しかし、シュウヘイは頑な意思で首を横に振った。

「確かに俺に光など似合わない。そして、誰かに感謝されたいわけでもない。
俺はこの光の力を、過去の俺の行いからの贖罪と、なぜ俺のような悪人が光に選ばれたか、その意味を探している。それだけだ」

武器をしまい、シュウヘイは懐からエボルトラスターを取りだした。同時にコルベールも、持ち手が左右に伸びた黒い棒のようなアイテムを取り出し、両側の持ち手を握る。

「これが私の、闇だ」

その黒い棒、『ダークエボルバー』を両側に引っ張った瞬間、彼の体は紫色のオーラに包まれた。
顔からヒビが入り、その中から一体の巨人が飛び出すイメージ……
紫色の光が消えると、コルベールのいた場所には死神のような、骨をイメージした模様のある悪魔の巨人『ダークメフィスト』がその凶悪な姿を現した。

「ファウストの次は…やはりメフィストと来たか」

そう呟いてシュウヘイはエボルトラスターを引き抜き、ウルトラマ

ンネクサス・アンファンスに変身した。
シュウヘイのネクサスへの変身を確認したメフィストは、右手の腕輪『アームドメフィスト』から切れ味抜群の爪『メフィストクロー』を出現させる。

ジリッ…と身構える二人の巨人。
激闘の幕開けを感じさせた。

すると、メフィストは指をパチンと鳴らした。

「出てこい、ノスフェル」

「嫌！嫌！助けてー！」

嫌がるエマを、彼女の両親は離そうとしない。
メフィストが指を鳴らした頃、地響きが起こり、地面からゼロに倒されたはずの怪獣『ノスフェル』が顔を出した。

ノスフェルの額は発光し、エマと彼女の両親を包み込む。

「嫌！嫌あああああああ！」

その光に吸い寄せられ、エマたちはノスフェルの額に消えてしまった。

「くそ！どこに行ったんだ！」

一方サイトは、エマと彼女を捕まえた彼女の両親を見失ってしまった。

早く見つけないと…

ちょうどその時、ネクサスとメフィストの戦いが始まっていた。

「新しい…黒いウルトラマン…！」

そしてその近くに、サイトにとって憎き怪獣がいる。

「ノスフェル…まだ生きていたのか…！」

ギリッと歯をきしませる。

「相棒、ちょっと落ち着けよ！熱くなりすぎてやがる」

「黙ってろデルフ！」

八つ当たりするような怒鳴り声でデルフを黙らせたサイトは、ウルトラゼロブレスレットからウルトラゼロアイを取りだし、目に装着

して変身した。

「ジュワ！」

その頃、一人の１０歳近くの少年がネクサスたちの戦場の近くを走っていた。その少年はジム。エマと同様シュウヘイとテファに養われている少年である。

孤児の年長者であるジムは責任感を持っており、それ故エマを放っておけず、テファやウェールズの目を盗んで一人危険を省みずに飛び出してきたのだ。

「エマー！どこだー！」

その呼び掛けの最中、出現した光の柱からサイトの変身したウルトラマンゼロが姿を現した。

標的はノスフェル。

「ダアアアッ！」

目一杯の拳でノスフェルを殴り付けた。

（ふふ…やっぱり来た）

ネクサスとの戦いの途中、メフィストは額に指を当て、ジムにそれを向ける。

すると、ジムの頭の中にあるビジョンが映った。
ノスフェルに吸い込まれたエマ。そしてウルトラマンゼロに変身するサイト。

そして、そのウルトラマンゼロが戦ってるのはノスフェル。

「止めろ！エマがその中にいるんだ！」

ジムは必死にゼロに呼び掛けるが、恋人を殺された憎しみに取り付かれたゼロに彼の声は届かなかった。

「シュ！デヤ！」

ネクサスの連続パンチを避け、メフィストはメフィストクローでネクサスを切りつける。

「フン！」

「ヌワッ！」

さらにもう一撃喰らわせようとするが、ネクサスはメフィストクロ

ーの刀身を直接素手で止める。

「ウォオオ…デヤ！」

メフィストクローを封じてる隙にメフィストの脇腹を蹴りつけ、さらにハイキックを仕掛けるが、メフィストはバック転して避け、ネクサスの背後に空中回転して回り込み、再びメフィストクローで二度ネクサスを斬りつけた。

「グアッ！」

攻撃を喰らい、うつぶせに倒れるネクサス。

『助けてえ！！』

立ち上がろうとしたとき、幼い少女の泣き叫ぶ声が聞こえてきた。

どこから聞こえてくるんだ？ネクサスは辺りを見渡し、声の主の居どころを探ると、信じがたい場所にその主がいた。

エマがノスフェルの額のこぶの内部に閉じ込められている。触りたくもないベトベトした肉に挟まれるなど、あんな年行かないにも程がある年齢の女の子にさせることではない。

しかも最悪なことにサイトの変身したゼロがノスフェルと戦ってるではないか。

「待て平賀！」

すぐ助けに向かおうとしたが、メフィストがそれを阻む。

「よそ見は事故の元だよ？」

「貴様…！」

ギギ…と握り拳を作り、ネクサスはメフィストを睨み付ける。自分が養う少女をあんな目に会わせるなど、彼からすれば断じて許せないことだ。

「ちょ…テファ！待ちな！」

ここにきてジムの失踪を知ったテファは彼を探しに家を飛び出し、マチルダどウェールズはそれを追っていた。

「ジム！」

なんとか巻き込まれない内にジムを発見した。ノスフェルとゼロの激闘をただじっと見ているしかなかった。

「テファ姉ちゃん大変だ！エマが、あの化け物の中に！」

ジムの報告に、三人はサァーッ…と顔を青くした。

「そんなバカな…」

ウェールズはメフィストと戦うネクサスの姿を見て彼に呼び掛ける。

「シュウヘイ！あの怪獣の中にエマが！」

それはネクサスにもわかっていた。確認してすぐ彼女を助けに向かおうにも、メフィストがそれを邪魔してなかなか助けに行けない。

〈セービングビュート！〉

主に救出に使う光の縄を伸ばし、ノスフェルの眉間のこぶの中にいるエマを助けようとしても、メフィストに光の縄を捕まれ、あっさりと引きちぎられてしまう。

（エマ…！）

「デュ！」

ゼロはブレスレットを掲げると、それを鎧に変えて身に纏い、鎧の下の体色を赤一色に染める。

ブレスレットギア・キーパーアーマー。

攻撃力と防御力を重視した鎧だ。しかし、もう一方のシャドウアーマーと比べるとスピードが劣る。

ノスフェルはさほど素早くはないのでこの鎧を選んだのだ。それに、

左手のガンダールヴのルーンの効力が鎧を通してゼロに速さをも与える。
まさに速く重い攻撃。

「デュ！デア！」

鎧の力と憎しみの力、それはゼロのノスフェルへのダメージを大きく上げた。
体当たりし、チョップを喰らわせノスフェルを怯ませる。

「ハアアア…」

ゼロは赤く光るエネルギーボールを作りだし、それをノスフェルに向けて投げつけた。

〈キーパーゼロショット！〉

「ジュア！」

「ギアアアア！！」

しかし、それでもノスフェルは倒れない。

「しつこい奴だ…そんなに苦しみたいか…！」

いつまでも倒れないノスフェルにさらに苛立ちを覚えるゼロ。

「おい相棒、なんかあいつからちっこい子供の悲鳴が聞こえねえか？」

「空耳だろ！黙ってろ」

本当に悲鳴がノスフェルから発せられてるのにゼロは確認すらしなかった。

「！止めろ平賀！」

ネクサスはノスフェルに止めを刺そうとするゼロを止めようとするが、やはりメフィストに邪魔され、エマの救出に向かえない。

両腕を×印に組み、光で作られた十字架型の刃を作り出すと、それをノスフェルに向けて放ってしまう。

〈ウルトラゼロクロスアタッカー！〉

「デアアアアア！！」

今度こそ地獄に落ちろ！その念を込めた一撃はノスフェルを貫き、ノスフェルは爆発四散した。

「エマあああああ！」

「「エマ！」」

ジム、テファ、ウェールズ、マチルダの声が、虚しく空に響いた。

「クフフフ…」

メフィストは薄く笑い声を上げて姿を消した。

「……」

その場に立ち尽くすネクサスは再び怒りのこもった握り拳を作り、霧のように姿を消した。

この事態の情報はトリスタニアや学院にまで及んだ。

現在怪我人の確認などで王宮からたくさんの兵士たちや研究員――ノスフェルの肉片の解剖を目的としている――が集まり、調査を行っている。

変身を解いたサイトは、遠くの草原を見つめるシュウヘイの元に駆け寄ってきた。

「よう、シュウヘイ！見ただろ俺の活躍！俺の力も捨てたものじゃ…」

何も知らず、いや知ろうともしなかったサイトの軽率な言葉は、憎しみの愚かさを知り、必死に怒りを抑えるシュウヘイの心を爆発させた。

バキ！

「がっ…」

唸りを上げた拳で殴られたサイトは何が起こったか理解できなかっ

た。

「シュウヘイ！なにしやが……」

殴られた意味もわからずサイトはシュウヘイに殴り返そうとしたが、その前に胸ぐらを掴まれ地面に押し倒された。

「平賀…貴様何も見えてなかったのか！？何も聞いてなかったのか！？

エマがノスフェルの中に閉じ込められていたことを！」

「…え…」

力のない声をあげるサイトに、シュウヘイはある方角を差した指を見せしめる。

「エマ！しっかりしろエマ！」

担架で運ばれるエマに、ジムが必死にすがっている。

ノスフェルの肉片から、かろうじて救出されたエマは一命をとりとめたものの、意識もなく重傷の状態で水系統のメイジからの治療を受けていた。治療費はシュウヘイとマチルダが稼いだ金と、オスマンからもらった金が貯まっていたため難なく払うことはできたが、そんなことよりエマの方が心配だ。

さらに拳をサイトに向けて振り上げようとしたが、そこで押し止まった。殴っても仕方ないと理性が言っている。

「お前の言っていた夢は何だった？

結局倒して満足なら、あんな子供染みた夢を語るな！俺はお前を信

じていたが……見事に裏切られた気分だ…
もし、俺の言っていた通りなら、お前を軽蔑する…」

「シュウ！」

涙ぐみながらテファがシュウヘイの元に駆け寄ってきた。

「エマが…エマが…」

「一命はとり止めたんだ。あいつの意識が戻るのを待つぞ」

なんとか彼女をなだめながらシュウヘイはテファと共にその場を去った。

「デルフ…ごめん」

デルフは知ってて彼にあの時の悲鳴を教えてたのに全く聞く耳を持たなかった。俺は…最低だ…

「相棒、もう過ぎたことだ。気にすんなよ」

「サイト！どこに行ってたの！」

勝手にいなくなったサイトを探しにルイズが怒って彼の元に走ってきた。
学院中も学院付近にまた怪獣が現れたので、休校するかどうかの会議が現在、学院の教師を中心に行われているほどの事態にまで発展した。しかもこんなときに＋アルファでコルベールが休職願いを出して姿を消したという始末。

「ちょっと！ご主人様に詫びも入れないの！？」

「…あ…ああ…悪い……」

何の気力も込めてない返事でサイトは謝った。

俺の憎しみが、まだ幼い少女を傷つけてしまった。

下手をしたら、光の国でもっと酷いことをする羽目になっていたかもしれない。

憎しみに囚われ、力を求めた俺は夢のために奮闘すること、本来のウルトラマンとしての心を見失っていた。

そして俺の心は、また深く傷ついた。

ＢＹサイト

7　未来に生きろ

「先日の新たな黒い巨人とネズミ型巨大生物。なぜ平民の少女を狙ったのか…」

オスマンもあの事態を知らずにはいられなかった。

あの事件後、学院内で会議が行われて休校するかどうか討議されたが、いずれにせよ怪獣はこの世界の人間にとって、地球人以上に知識がない。どこへ逃げるべきかも、どこへ力無き者を逃がすのかもわからずじまいだった。

目の前に、ちょうど寄付金を貰いに来たシュウヘイがいる。

「君は何か知っておるか？」

「……ああ」

話すかどうか迷ったが、彼は素直にオスマンに真実を明かした。

コルベールが悪魔―メフィストの力を手にしたこと。サイトの精神を追い込むためにノスフェルの体内にエマを閉じ込めたこと。

「なんと！コルベール君があの黒い巨人と！？」

「奴は名前を尋ねたらそう名乗っていたし、一度ここで会った時と同じ特徴をしていた。間違いはない」

「むぅ、なら王室にコルベール君の捜索願いを……」

「いや、まだそうと決めるには早い」

シュウヘイはオスマンの話を止めるように平手を突き出して言った。

「以前にも、コルベール以外でメフィストになった男がいた」

そこからシュウヘイは話した。最初のメフィスト、溝呂木眞也のことを。

彼はコルベールと同様陰湿かつ卑劣な手口でシュウヘイの後の仲間たちを苦しめていた。だが、実際は彼もハルナのように石堀の操り人形で、彼自身が悪人だった訳ではない。

「おそらくコルベールは、心の闇を付け入られ、石堀の人形にされてるはずだ。もし元に戻った状態で発見された時にお尋ね者だったら立ち直ることもできなくなってしまうかもしれない」

「じゃが、野放しにするわけにもいくまい。いくら操られても、彼の行いは許されないことじゃ」

「俺もなんとかしなくてはならないと思ってる。もともとメフィストは俺の世界の怪物だからな。俺の手で終わらせる」

シュウヘイが学院でオスマンから寄付金を貰いに行ってる間、テファはベッドで眠っているエマの側にいた。忘却の魔法であの事件の

ことを忘れさせようか、検討している。どれだけ辛くても記憶を消すことは本来やってはならないことだ。だから今は見合せの状態で留まっている。

「……」

彼女も心配だが、テファはシュウヘイが常日頃重荷を背負ってる気がしていた。

「薬、ミス・サウスゴータから受け取ったよ」

ウェールズが薬瓶と水入りのカップを持って部屋に入ってきた。

「ウェールズさん…」

薬を注ぐウェールズに背を向けたまま、テファは彼を呼んだ。

「あの…ここのところシュウが沈んでる気がするんですけど、何か……？」

「ここのところって、やはり今回のエマのことより以前から気になっていたみたいだね。
そうだな…シュウヘイのことが心配？」

図星を突かれ、テファは少し頬を染めてオロオロしだした。

「あ…あの……マチルダ姉さんが言ってたの。使い魔と主は、その……常に信頼関係を持つべきだって…」

「……」

そうだな、ウェールズは本当は隠しておくつもりだった。以前彼はストーンフリューゲルに触れ、その中で傷を癒していたシュウヘイの悲しみの記憶をその頭の中に焼き付けた。つまり、シュウヘイの過去を知るのは、シュウヘイ本人を除いてウェールズただ一人だった。

話さないとダメなのかもしれない。ウェールズはシュウヘイの過去について知っている範囲内のことを全て話すことにした。

校庭のベンチで一人サイトは身を垂れさせていた。
ハルナの件からいまだ立ち直りきれてない。
彼の額の左側には絆創膏が張ってあった。これは、あの事件直後、ジムからの怒りを受けたことによるものだった。

『何がウルトラマンだ！僕は許さない！お前を一生許さないからな！』

ジムはそう言ってサイトに大きめの石を投げつけ、彼の額に傷を入れた。その後はテファに止められたが、ジムの怒りは収まらなかった。

「……」

「ずいぶんシケた顔だな」

オスマンから寄付金をもらってきたシュウヘイが、サイトの隣に座った。

「俺のこと、見限ったんじゃないのか？」

サイトが顔を上げて尋ねる。

「それはあの時俺の言っていた通りだったらの話だ」

「…ごめん…」

「急にどうした？」

シュウヘイは驚いたようにサイトに顔を向けた。

「俺のせいで、エマって娘が傷ついただろ。
その娘もハルナも、俺のせいで…
お前も何か背負ってるんだよな？きっと辛い過去があるから、『人を愛する資格なんかない』なんて言ったんだろ？」

「……ああ、お前の予想は当たっている」

やはりそうだ。シュウヘイも重たい荷物を毎日運ぶように、何かを引き摺っているのだ。

「でも、俺はお前ほど強くなんかない。弱くて愚かで、辛いことなんか何も知らないまま夢物語みたいな夢を描いて……愚者の極みだよな」

「そんなことはないさ。誰にだって、忘れてしまいたい過去はある」

二人が会話をしている間、ちょうどルイズがサイトを探しにやって来た。が、入り込む隙が、なぜか見当たらず隠れてしまう。

（あいつら、一体何を話してるの？）

「ルイズ、物陰に隠れて何してんのよ？」

「ひっ！」

後ろからやって来たキュルケの声にビックリし、ルイズは間抜けな悲鳴を上げた。

「なな何よキュルケ！脅かしてんじゃないわよ！」

「あんたが勝手に驚いたんじゃない」

おそらくルイズは何かを見ることに集中していたから自分に気づかなかった。そう思ってキュルケは辺りを見渡すと、ベンチで話すサイトとシュウヘイの姿が目に入った。

「あらん！あのお方が来てたなんて！」

ホレっぽいキュルケに、シュウヘイの整った顔立ちは鬼門だった。ルイズはまたか、と頬を染めてうっとりするキュルケにあきれてしまう。

「でも二人で何を話してるのかしら？ちょっと気になるわね」

コソコソと二人のベンチの後ろに植えられた庭木の影に隠れ、二人の会話に耳を澄ませてみた。

「盗み聞きなんて貴族のやることじゃないでしょ」

ルイズはキュルケの行動に一言もの申した。

「とか言っておきながらあたしの後に着いて来たのは誰かしら？」

「うっ…」

結局ルイズも気になってキュルケのように二人の会話に耳を澄ませていた。

「俺は『プロメテウス・プロジェクト』で、ある人物のＤＮＡから産み出されたハイブリッド児『プロメテの子』だった」

「え！？」

サイトは目を見開いた。

じゃあ…

「だから俺に血の繋がりを持つ親は最初からいない。親からの愛なんか一切知らないまま生きてきた」

そんなある日、俺はある金持ちの夫婦に引き取られた。

プロメテの子は、元になったＤＮＡの持ち主が超能力者であるが故、一般人よりも頭脳明晰でテレパシーといった能力がある。
後に父と母となるその二人は俺のプロメテの子としての力で富と名声をより求めようと企んでいた。
だが、俺は何の力もなかった。超能力も持たず、頭脳も一般人とほとんど変わらないでき損ないの失敗作。それが、六年前までずっと義理の両親から虐待を受けるきっかけになった。
義理の父と母は、大して役に立たない俺を、経営で何の役にも立たないと言う理由から毎日殴る蹴るを繰り返し、飯もロクにくれなかった。
なぜ殴られなければならないのか、俺にはわからない。ただ俺は、二人から愛されたかったのになぜか殴られる？
しかも学校でもそれをネタに嫌がらせを受ける毎日、まさに生き地獄だった。
そして六年前の２００４年、最初のビースト『ザ・ワン』が飛来し、ウルトラマンがそれを倒す『新宿大災害』が起こった。
その時、俺は崩壊する家から父と母を捨てて逃げた。
汚れきった人間からの行いで、当時の俺は周りの人間が憎かった。
だから、ある裏社会の仕事を始めた。

『暗殺者』

銃を手に取り、俺はまず学校で俺をいじめの対象にした連中を殺し、その後は暴力団直属のアサシンとして手を血で汚し続けていた。
そんな時、俺に話しかけてきた女の子がたった一人だけいた。
アイリス、本名は明日花愛梨。よく花を育て、植物や自然に愛情を

注いでいたことから、名前繋がりで花の名前『アイリス』の愛称で呼ばれていた。彼女は俺の心から拭いされない影だ。

彼女は名門校に通う大和撫子だが、彼女の学校は勉強できない奴＝クズの思想が強く、友達関係の薄い学校だった。それでずっと一人だったから俺を求めたらしい。

最初は彼女を避けていた俺も、毎日のように俺に話しかけてくる彼女にだんだん惹かれていった。

学校のない日や早く終わる日、彼女は保育園で保育士のアルバイトをして、俺もその手伝いをするようになった。それで血の繋がらない弟もできたりした。

気づけば、俺は彼女に愛情が芽生えていた。

だが、そんな俺に暗殺任務が降される。

俺にはやはり彼女といることは許されない。だから、俺は彼女を避けるようになった。

『どうして口をきいてくれないの!?私のことが嫌いになったから!?』

嫌われても構わない。俺と関わらせたらダメだと思っていた。

そして俺は、その暗殺任務で多くの富を築いていた彼女の、唯一の兄を殺した。その日の夜、彼女は絶望のあまり自殺した。

そして、ビーストとなって蘇って俺の前に立ち塞がった。

俺は抵抗しなかった。彼女の手で死ねばきっと俺の罪は命と共に消

えると思っていた。
だが、彼女は俺を殺さなかった。むしろ楽にして欲しいと懇願した。
そして俺は、彼女を殺した…

「その後、俺はＴＬＴに保護され、それをきっかけにナイトレイダーとなった。ビーストと戦って人を守ること、それが俺に課せられた罰と信じながら俺は戦うことにした。
仲間ができた頃、俺はアイリスに導かれ、この光を得た。この光の意味が俺のような悪人に来たのか、お前を見ているとそれを感じられたんだ。
今まで俺のようにネクサスの力を手にした人たちも大事なものを失った人がいたが、それでも前を見て奮闘していた。
俺を召喚したティファニア…アイリスの面影を強く持ち、子どもたちを支える彼女や、夢を求めて戦うお前、今地球で人々のために戦う俺のナイトレイダーの仲間たちを見て、俺はある答えにたどり着いた。『過去は変えられないが、未来なら変えることができるかもしれない』」

エボルトラスターを見つめ、シュウヘイは今まで自分の心に光をくれた人たちのことを思い返していた。
別に不幸自慢したいわけじゃない。
彼に伝えたかったのだ。

憎しみだけでは何も変えられない。

「……無意味だ」

サイトはしばしの沈黙の後、それを否定した。

「未来を変えたってハルナは戻ってこない。そんなの、無意味だ」

ベンチから立ち上がり、サイトはそのままどこかへ歩き去った。

「……」

やはり傷が深すぎたか……シュウヘイや木陰に隠れていたルイズとキュルケはただじっと立ち去るサイトの背中を見ていた。

すると、シュウヘイのエボルトラスターのクリスタルがそこで点滅し始めた。

パルスブレイカーでもチェックすると、振動波がキャッチされている。

（やはりまだ生きていたか、ノスフェル）

バイクに乗ると、シュウヘイは学院から急いで飛び出した。

（平賀、過去と向き合い未来を生きるんだ！
憎しみは簡単には捨てなくていい。だがお前には夢がある。憎しみよりもその夢を掴もうと努力する力で戦うんだ！憎しみだけじゃ何も変えられない！）

「もう今は過ぎたことだけど、シュウヘイは今でも自分の過去で苦しんでいる」

「そんな…シュウが……」

テファはシュウヘイの血にまみれた過去を聞いて愕然とする。

「多分彼は、君に大して……愛情があると思うんだ」

「え？」

「でもかつての恋人と重なってて、君を彼女の代わりにしか思ってないのではないのかと思って、君に対しても自分の心を奥底まで見せたりはしなかったんだ。代わりにしているとしたら、君を傷つけてしまうと…僕は、そう確信してる」

「……」

テファは窓の外を眺め、シュウヘイの姿を思い浮かべた。

「一通り聞いてもわからないことだらけだけど、彼も辛い過去を背負ってるのね」

木陰から出たキュルケは珍しく思い詰めたような顔をした。

ルイズもだいたいシュウヘイの話は理解した。自分が成功率ゼロと言われてるのと比べたら、自分のなんか全然生ぬるい。なぜなら、自分は少なくとも他者との関わりがあるし親から愛を注がれてる。だが彼は親からも愛されず、友達からもただ心ないことをされ続けていた。唯一愛情を抱いた女の子を残酷な形で喪う…

ショックの連続だ。

「ところでキュルケ、『も』ってどういうことよ？」

「え？さ、さあ？」

キュルケはなぜか慌てて誤魔化すように目を反らした。

（過去は変えられないが、未来なら変えられるかもしれない…）

いつの間にかタバサもそこにいた。

自分の過去と、シュウヘイの過去を照らし合わせながら、彼の去った学院の門をじっと見ていた。

とその時だった。

「ギュオオオ！！」

ノスフェルの鳴き声が遠くから聞こえてきた。

「あの怪獣…」

まだ生きていたのか！？
てっきり死んだとばかり思っていた学院の連中は驚くしかなかった。
なぜ復活したか？
それは現在のハルケギニアでは、シュウヘイしか知らない。

「彼を助けようとしても無駄だよ？」

一方、シュウヘイはコルベールと対峙していた。
あの名教師らしい優しさに溢れる彼の顔に、善なる心などない。邪悪な笑みを浮かべシュウヘイに言った。

「黙ってみている方が面白いよ？彼が闇に転落していく様をね…」

「貴様ぁ…！」

怒りの声と共にシュウヘイはエボルトラスターを引き抜き、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身、対するコルベールもダークエボルバーを両側に引っ張ってダークメフィストに変身した。

メフィストはメフィストクローを装備すると、地面に突き刺し、闇

の力を放出する。
すると、突き刺した箇所からだんだん辺りが紫色のドームによって包まれ、外の世界と分断されていく。

ダークフィールドの展開だ。
メフィストは「フフ…」と不気味な笑い声をあげると、姿を消した。

ネクサスはダークフィールドの完成と同時に地上に降り立つ。

メフィストは一体どこに消えたのだろうか。辺りを見渡しても姿が見えない。
僅かな光で照らされた赤黒い荒野と、ダークフィールド内に巻き込まれた僅かな森や家があるだけだ。

しかし、戦いの狼煙は突然上がることになる。

「ガア！」

上空から高速で舞い降りてきたメフィストがメフィストクローをネクサスに向けて振り下ろし、ネクサスはそれを避ける。
避けた直後、すぐジュネッストリニティにチェンジした。

メフィストクローを突き出すメフィストを飛び越え、背後から彼の腕を捕まえ、前方へメフィストを投げる。難なく着地はされたが、立ち上がる好きにネクサスはメフィストの胸元を蹴り飛ばした。

「シェア！」

「グォ…！」

〈シュトロームソード！〉

ネクサスは光の剣を作り出して掴み、それを連続で振って風の刃をメフィストに向けて飛ばした。

〈覇風撃！〉

「セイ！フッ！」

何発も放たれる風の刃を次々と避け、メフィストは力を込めた光弾をネクサスに撃ち込んだ。

〈ダークフェザー！〉

「フッ！」

「グッ…！」

剣を盾代わりにして防ごうと試みたが、衝撃までは吸収しきれず、ネクサスは後方へ飛ばされてしまった。

「ヌワアアア！」

「グゴオオオ！」

ノスフェルは以前ゼロに敗北された時よりも弱体化していた。その証拠に、体長は十メートルと以前の四部の一程度になっている。

「ファイヤーボール！」
「エア・カッター！」

学院の教師や生徒らは数々の魔法でノスフェルに対抗するが、いくら弱体化しても人間から見れば強いことに変わりはない。口から伸ばした触手でメイジたちを叩き潰していく。

しかし、ノスフェル自身余裕の様子ではない。なぜなら、この学院にいる者たちにも強者がいるからだ。

「ウィンディアイシクル…ジャベリン！」

シルフィードに乗り、タバサは空中から氷で作られた槍の雨を飛ばしてノスフェルの身に突き刺していく。

そして、成功率ゼロと呼ばれた頃とは段違いに成長したルイズも活躍した。

「エクスプロージョン！」

虚無の魔法の威力は術者の精神状態に左右される。現在は魔法学院の危機的状況でもあったので、ノスフェルにかなりのダメージを与えれた。

幸い、爆発＝失敗魔法の法則が生徒たちに深く染み付いてたため、虚無の魔法であることはバレたりしなかった。まあ、伝説的存在でもあるため簡単に信じる者はほとんどいないと言えるが。

だが、虚無の魔法は今のルイズにとってリスクが大きい。場合によっては精神力を一気に切らしてしまうのが普通だったからだ。

「はあ…はあ…」

疲れきり、膝を着いてしまうルイズ。

最悪なことにルイズにノスフェルの触手が襲いかかってきた。

「ルイズ！ジュワ！」

もちろんサイトがこの騒ぎを放っておくことはなかった。触手がルイズを捕まえる寸でのところでウルトラマンゼロに変身、ゼロスラッガーを投げ、ルイズを襲う触手を切り裂いた。

「ギェエエエ！」

触手を切られ後ずさるノスフェル。
弱体化した今なら光線技一発のみで倒せる。
今度こそ仇を討ってやる…そして地獄で傷つけてきた人の分だけ永遠に苦しんでしまえ…

左手を一度横に伸ばし、両腕をＬ字型に組んで必殺光線を放って止めを刺そうとした時だった。

『助けてぇ！』

「！」

ノスフェルの眉間のこぶには誰もいない。だが、今のゼロに以前その中に閉じ込められたエマの悲鳴が今頃になって彼の頭の中に響いてきた。

『助けてぇ！』

「……」

「ウルトラマン！早く撃つんだ！」

学院の生徒たちは口々にゼロに呼び掛けるが、ゼロは全く動こうとしない。まるで凍りついたように震えたままその場で固まってしまっていた。

「何してるのウルトラマン！早くそいつを倒して！」

ルイズからの言葉も、今の彼には届いてない。

『僕は許さない！お前を一生許さないからな！』

ジムからの怒りの声も響き、彼の視界はズブズブと泥沼に沈むように見えなくなってしまう。

ゼロが固まってる間に、ノスフェルはついに逃げ出してしまった。

「た……助かった…」

学院の生徒や使用人らは危機を回避できただけよしとし、その場で腰を抜かす者たちが続出した。

だが、ルイズはただ一人ゼロを睨んでいた。

「なぜ撃たなかったの…？」

「……」

「なぜ撃たなかったの！！！！下手したらまたあいつのせいで被害が増えるのに！」

「……」

エマの悲鳴が聞こえたとか、そんなのは言い訳にならない。結局は自分の心が弱いせいでまた取り逃がしてしまったのだ。

ゼロは逃げるように、静かに姿を消した。

シュウヘイ、お前の言う通り、憎しみじゃ何も変えられなかった。
俺はどうしたらお前のように強くなれるんだ？
俺はこれからどうするべきか、わからない……

ＢＹサイト

8　閃光ーライトニングー

ネクサスとメフィストの戦いは闇の世界で続いていた。

「シュア！」

「グホッ…」

「グゥ…ラアッ！」

メフィストの蹴りを耐え抜き、ネクサスは炎の剣でメフィストを切り上げた。

〈炎竜昇！〉

「ディヤアア！」

「ッガ…」

地に落ちるメフィストに、エナジーコアから放った光線を、対するメフィストは炎の鞭を腕に巻き付け、ネクサスの光線に応戦した。

〈コアインパルス！〉

〈バーストスネーク！〉

光線と炎のつばぜり合いの中、ネクサスはあることに気がついた。ＴＬＴに保管されたビーストのデータの中に、ファウストをはじめとした闇の巨人のデータを彼は視聴したことがあるため、闇の巨人の技はだいたい把握はしている。たが、今のメフィストの技は、以

前の個体にはなかったものだ。

蛇のごとき鞭状の炎。

それがコルベールの二つ名『炎蛇』の由来だった。

二体の巨人の必殺技は、長く持つことはできず弾け飛んだ。

「グワアッ！」

「グォア…！」

弾けた衝撃は二体の巨人の巨体を遠くへ飛ばし、荒野の上を転がる。

メフィストは立ち上がると、緑色に発光して姿を消した。

「まっ、待て！」

追いかけようと手を伸ばすネクサスだったが、やはりダメージのこともあって追うことは叶わず、片膝を着いた瞬間変身が解けてしまう。

そしてダークフィールドが消滅すると、シュウヘイは両手を地面に着けた状態で身を屈めていた。

「はあっ……はあ…」

「……」

ボーッと虚ろな目でサイトは校庭の噴水の水を覗き込んでいた。水の波紋模様が揺れる度、ハルナとの幸せな日常が浮かんでは消えていく。

「相棒、いつまでそうしてる気だ？もう過ぎたことなんだぜ。ハルナって娘っ子のことも、今回の怪獣のことも…」

なんとかなだめようとサイトに声をかけるデルフ。だが、サイトは全く話を聞かず、それどころか背中に背負っていたデルフや腰のホルダーのウルトラガン、右腕のビデオシーバーを外し、床に捨て置き、どこか歩いて行ってしまう。

「おい相棒！俺を置いてきぼりにしてどこに行くんだ！？おい聞いてんのか！？」

デルフの声はただ虚しく響き、サイトの耳に届くことはなかった。

もう守るものなんかない。戦ったらまた傷つけてしまう。自分自身だけでなく、きっとルイズたちも。

どうせ俺なんかもう生きてたって…

サイトはもう誰とも関わらない場所へ逃げていくことにした。そして静かにその命を自らの手で…

ブレスレットからウルトラゼロランスを取り出し、自分の腹に突き刺そうとした。
が、振り上げたところで誰かの手が槍を握る彼の手を掴んだ。

「ここにいたのか、ゼロ」

「……！？」

信じられないという目でその人物を見た。

光の国からゼロ（サイト）の追放処分を実行したウルトラマンジャック、郷秀樹だった。

「あああ～もう！あのバカ使い魔はどこに行ったのよ！」

ルイズはご立腹の状態でズシズシと歩きながらサイトを探していた。

「あの、ミス・ヴァリエール？」
そこにシエスタがやって来た。
「シエスタ、ちょうどよかったわ。サイトがどこに行ったか知らないかしら？」
「実は、私もなんです」
よく見ると、シエスタの腕の中にサイトが所持していたデルフ、ウルトラガン、ビデオシーバーがあるではないか。
「校庭に落ちてたんです。どうしたのかな…ってデルフさんに尋ねたら…」
「相棒、ちょっと前に俺らを捨ててどっか行っちまったんよ」
デルフがそこで口を挟んで説明した。
「かなりの重症だぞありゃ…よほどあの娘っ子が死んじまったのががショックだったんだな…」
「それはわかってはいたけど、サイトはどこに行ったのよ？」
「多分、学院から出てったぜ」
「「学院から！？」」
同時に声をあげるルイズとシエスタ。まさか学院を出るほどとは思ってもなかった。

「使い魔の癖に世話が焼けるんだから…探しに行くわよ！」

時間をかけたくはない。主と使い魔は常に一緒でなくてはならない。さっさとサイトを連れ戻さなくては。

「ちょっとお待ちヴァリエール」

そこにやって来た人物がいた。

キュルケにタバサ、そしてギーシュとモンモランシーだった。

「最近沈んでいると思ったら、そういうことだったのね」

モンモランシーは納得したように呟いた。

「水臭いな彼は。僕という大親友がいるというのに」

ギーシュはバラの杖を加えながら言う。言ってる人がギーシュだからかちょっと疑いがあるが。

「あたしはサイトが心配だから協力するわ。なんでか、タバサも協力するそうよ」

「本当なのタバサ？」

ルイズの質問にタバサはただコクッと頷いた。

キュルケは本当は知っていた。なぜタバサがサイトの捜索に協力したのか。それが彼女の過去と今のサイトがどこか、鏡に映したかのように見えたのは、タバサにしかわからない。

「シルフィードで行く」

「気分はどうだ?」

サイトと郷は森に流れる小川の近くで切り株に座っていた。

「見るからに最悪そうだな」

「……なんで来たんだ?…俺にはもう、守るものも帰る場所もない……」

守るべきハルナは死に、地球にいる義理の母にも会わせる顔がない。ルイズたちと一緒にいたら彼女たちが傷つき、下手をしたらハルナと同じ運命を辿るはめになってしまう。

「もう誰からの繋がりもいらない…俺と関わる奴はみんな傷つくだけだ…
ジャック、あんたも追放された身の俺を案じたら不味いんじゃないのか?
早く、故郷へ帰ってくれ…」

顔をだらりと俯かせたままサイトはシッシッと言うように手を振った。

「一人で悲劇の主人公を気取ってるな」

郷は切り株から立ち上がり、身に付けていたサングラスを取り外して続けた。

「俺たち兄弟も大切なものを何度も失った。恋人、親友…その他守りたいと思った人。守りたくても守れなかったという結果に終わることがほとんどだ。

自分だけとは思うな。その痛みを、ただ引きずってるままじゃ、余計他人から気遣われる。そしてお前が戦わねば、その人がまた傷ついて、お前はさらに痛みに溺れる。

もうお前は他者との繋がりを断ち切ることはできないんだ。だとすれば、お前のなすべきことはここで一人果てることではないはず。違うか？」

「…郷…さん…」

郷も地球で活躍した頃、ナックル星人に恋人とその兄を殺され、憎しみに身を委ね、そのせいで一度敗北してしまったことがある。

郷だけじゃない。他に例を挙げると、ウルトラマンレオことおおとりゲンも、若い頃にマグマ星人に生まれ育った星を破壊され、さらには地球でも『シルバーブルーメ』に仲間や恋人を皆殺しにされたことがある。憎しみで戦っても残ったのは、虚しさだけ。結局自分と相手を傷つける結果に終わった。

今のサイトに、シュウヘイのように郷は昔の自分を見た。彼はサイトに手を伸ばした。

「追放されたとはいえ、お前は我らとは関わりが深い。親しかった男をそう簡単に放っておくほど冷血だと思うか？」

そうだ、そうだったな。
そんな人たちじゃ、なかったよな。

サイトはゆっくり手を伸ばすが、そこに紫色の光が二人の間に飛んできた。

「「！」」

とっさに避けた二人は、飛んできた方を見るが誰もいない。

「誰だ！？」

郷がそう言ったとき、突然ローブの男が彼の襟を掴み、出現した時空の歪みの中に放り込んだ。

「うわあっ！」

「ご、郷さん！」

郷の姿は歪みの中へ跡形もなく消えてしまった。

「余計な説教を説くことはないのに。それこそ思いやりがない証拠だ」
「あんたは…！」

彼の前に現れたのは、ダークメフィスト、コルベールだった。
しかも今回はサイトの前で初めて素顔を見せた。

「やあ、サイト君。よほど彼女の死がショックだったんだね。仕掛人からすれば愉快だったね」

……愉快？

よく彼はサイトのシエスタから譲られた所持品などに関して多大な興味を示していた。「君の世界に連れてってくれないか？」とも言うほどだ。

人としてもどの貴族よりも人間らしく、優しく、まさに名教師とも言えた。

なのに…

彼女の死が愉快？

「まさか…そんな…」

信じたくもない事実を突きつけられたような感覚だった。

じゃあ、ハルナを殺したのは、子供たちに酷いことをしたのは…

そして、あの黒い巨人は……

「かわいそうに」

「……騙してたのか？今までずっと…」

この世界のに来てから、サイトから見れば数少ない、尊敬に値する人だ。その尊敬の念が、憎しみに転じようとしていた。

「そう思いたかったら思うといい。でも今回は君にお詫びと言ってはなんだが、会わせたい人がいる」

「会わせたい人……だと？」

コルベールはサイトの耳元に顔を近づけ、耳打ちした。それも、ま

たしても信じがたいことだった。

「君の恋人に会わせてやる。そう言ったのさ」

「……！」

コルベールが彼の前から離れると、森の向こう側に彼の望んでいた人の姿が目に入った。

「ハルナ…！」

ハルナは笑顔を見せながらサイトに背を向け、森の中へ走りだし、サイトも引き付けられるように彼女を追い始めた。

「待ってくれ、ハルナ！」

「シュウ……」

森の中、テファは大胆にもたった一人で走っていた。なぜ彼女がたった一人でこの場所にいるのか？あのウェールズの話の後、彼女はシュウヘイの身を案じ、皆の制止を忘却の魔法を使ってまで振り切ってここまで来たのだ。

彼女もこのハルケギニアにおける種族間上の問題で孤独な苦しみを味わった。だから彼の痛みに共感し、彼の力になりたいという思い

が強まった。アルビオンにいたときに助けられたこともあって、その思いは岩のように強固なものとなった。

「ギェエエエ！」

その時、森の茂みの中から触手が飛び出し、彼女を叩いた。

「きゃ！」

その触手の主は、ノスフェルだった。あれからも補食を人知れず続け、力がほとんど戻っている。テファに食らいつこうと触手を伸ばす。

だが、数発の波動弾が触手を貫き、ノスフェルにも直撃していく。テファは自分の走っていた道を振り替えると、バイクに乗った状態のシュウヘイがブラストショットを構え、ノスフェルを睨み疾走しながら波動弾を撃ち込んでいた。

「ギェエエエ！」

ノスフェルは何発か喰らった後、森の奥へ姿を消した。

「大丈夫か？」

シュウヘイはバイクから降りてテファの元へ駆け寄る。

「大丈夫、ちょっと擦りむいただけ…」

擦り傷がノスフェルに叩かれた箇所にできていた。

「一人で出歩くな。今ノスフェルに襲われて身に染みただろ！」

「あなただって、たった一人で辛い過去を背負っていまで、危険な

戦いに身を投じてるじゃない…」

「……」

ウェールズの奴、喋りやがったのか…

シュウヘイは唇を噛みしめ顔を歪ませた。

「シュウ、あなたの苦しみはわかってるつもりよ。でも、あなたにも安らぎの場所は必要よ。だから……」

「……」

その時だった。デュナミスト特有の透視能力でシュウヘイは、不気味な紫色の光が差し込む森の中を走るハルナとそれを追いかけるサイトの姿を見た。

シュウヘイは立ち上がり、彼女に背を向けた。

「ありがとう。だが、ここから先はお前の踏み込むべき場所じゃない」

そう言って去ろうとしたが、テファは彼の服の裾を掴んで引き留めた。

「代わりでも、いいから…」

思い詰めたような表情でシュウヘイの背中に寄り添った。

「アイリスって人の代わりでもいいの…だから…」

「代わりなんかじゃダメだ」

シュウヘイは首を横に振って否定した。

「お前はこの世に二人ともいないお前自身だ。代わりにしたところで、お前を傷つけるだけだ」

「でも…あなたを放っては置けないよ。痛みなら、私に分けてもいい、だから一人で背負わないで……それとも、私じゃ…力になれないの…？」

「……」

過去と向き合い、未来を生きるんだ。

サイトにそう言ったことを思い出した。

よく考えたら、自分も過去に囚われた囚人と言っても過言じゃない。

シュウヘイはテファに振り向き、彼女に言った。

「帰りを待つだけで十分だ。それでいい。それだけで力が出る。だから、お前は俺を信じて待ってるんだ」

言い終えると、シュウヘイは再び彼女に背を向け、走り出した。同じ悲しみを抱える男を助けるために。

「ハルナ、どこにいるんだ！？」

赤い霧のせいで薄暗くなっている霧の中を掻い潜りながら、サイトはハルナを探していた。

すると、目の前にポツンと白い扉が、まるで○こでもドアのように立っていた。白い扉は勝手にギィーッと開き、まるでその通りだったかのように別の景色をその向こう側に表していた。ハルナの、部屋だった。

そしてその部屋の窓ガラスの前に、ハルナがあの邪気を感じさせない笑顔で待っていた。

「平賀君、ここで私と一緒に暮らそう？
何もかも忘れて幸せに。
いいでしょ？」

「……うん、そうしよう」

もう何もいらない。彼女さえいれば…

サイトは人形のような足取りでその扉を越え、彼女の部屋に足を踏み入れた。

その部屋が見えているのは、サイトだけだった。

実際は扉が立っているだけで部屋など存在しない。サイトが今足を運んでいるのは、実際は木の葉で散りばめられた地面だった。

ちょうど駆けつけたシュウヘイには間違いなくそう見えていた。

「平賀！」

すぐに向かわねば。彼は今も幻影に魅せられている。
しかし、それを阻もうと紫の閃光が彼の足元に放たれた。

「邪魔するなんて、野暮な人だな」

コルベールがダークエボルバーを握り、悪魔のごとき笑みを浮かべて歩いてきた。

「コルベール…！」

シュウヘイは銃をディバイドセイバーに変形させ、コルベールに斬りかかるが、コルベールはシュウヘイの頭上を飛び越え、彼にダークエボルバーを突こうとし、シュウヘイはそれを握る手を受け止める。

コルベールは笑い、シュウヘイは彼を殺気の秘めた眼光で睨み付ける。

「ハルナ…本当に…」

「どうしたの平賀君？何もかも忘れていいって。
だから、もっと近くに来て」

サイトはそんな二人に全く気づかず、だんだんハルナの幻影に近づいていく。

「ダメだ平賀！闇に囚われるな！」

シュウヘイが必死の思いで彼に向かって怒鳴るが、サイトの耳には

足音一つ聞こえもしなかった。

「もう彼を楽にしてやりなよ？」

コルベールが言う。

「何？」

次の瞬間コルベールはダークエボルバーでシュウヘイの腹を突き、シュウヘイは真後ろの木に叩きつけられた。

「ぐわあっ！」

「君は彼の中に昔の自分を見ていたようだが、いい加減彼は苦痛から解放されたがってる。愛する人の思い出にすがりながら生きる方が彼には幸せなのさ」

ダークエボルバーで突かれた腹を擦りながらシュウヘイはそれを否定する。

「そんなのは、生きてる意味がない！」

「心配しなくてもいい。後で残った脱け殻は我々が面倒を見るよ。『忠実な操り人形』としてね」

我々…？他にも闇の戦士の仲間がいるのか？いや…それよりも…目の前の奴だ！

「貴様ぁ！！！！」

今度はブラストショットを放ち、対するコルベールはダークエボルバーから闇の波動弾を撃ってそれを相殺した。

パキッ

サイトの足元から何かが折れたような音がした。
右足を退けると、ハルナからもらったアイスラッガーの飾りのペンダントがあった。知らない間にポケットから落ち、踏みつけてしまったらしい。
サイトは片膝を下ろしてそれを拾い、じっと見つめた。

「平賀君?」

ハルナは一体どうしたのだろうと彼を見る。

『平賀君ならきっとできるよ』

「……」

ハルナとの、夢を語り合った思い出が浮かんでは消える。
同時に、あの悲しき思い出も蘇る。

『ごめん…ね……』

腕の中で冷たくなっていくハルナ。あのときの彼女の体は氷よりも冷たく感じた。

「……何を迷ってるの?すべて忘れ、楽になりなさい」

その時の部屋は不気味な赤い霧に包まれ、目の前のハルナの声も、冷たく重いものになっていた。

しかし、サイトはただじっとペンダントを見つめ、目の前のハルナに言った。

「ハルナは、死んだんだ……お前はハルナじゃない……」

「え……？」

「お前はハルナじゃねえ！」

サイトのペンダントと、彼の左腕のウルトラゼロブレスレットが共鳴しつ発光、金色のまばゆい光が辺りを包み込んだ。

「あああああああ！！！！」

ハルナの幻影は悲鳴をあげながら、粉微塵のことく消滅した。

「うわっ！」

サイトは時空の歪みから投げ出されるように飛び出した。

辺りはすでに夜で、真っ暗だ。

「ギェエエエ！！」

この聞く度に怒りが沸き上がる鳴き声…
ノスフェルの鳴き声だ。

そしてその近くに、サイトを探しに来たルイズたちがいた。

「みんな…」

郷の言っていた通りだ。もう自分には断ち切れないものが存在していたのだ。
しかし、安心はできない。すぐに向かわねば。

「んもう！全然効いてないじゃない！」

「油断……あのときより回復してる…」

ゼイゼイと息を吐きながら身を屈めるキュルケとタバサ。ギーシュは気絶していて、モンモランシーが水系統の魔法で、二人の後ろで彼を治療している。

「ひいおじいちゃん…力を貸して！」

シエスタもサイトが持っていたウルトラガンでノスフェルを攻撃するが、キュルケたちと同様傷を負わせてもほとんど応えない。

「ギェエエエ！」

「きゃ！」

シエスタにノスフェルの爪が振り下ろされた。彼女は反射的に目を閉じた。

が、いまだにその爪は来ない。

なんとかサイトが彼女を突飛ばし、爪の攻撃から回避できたのだ。

「サイトさん！？」

「相棒…！」

シエスタと、彼女の背中に背負われたデルフは驚きの声をあげる。

「みんな、探しに来てくれたんだな…」

シエスタはサイトの言葉を聞いて、飛び付くように彼の胸にしがみついた。

「心配したんですよ…」

「ごめんな。それと…ルイズは？」

サイトが尋ねたとき、強烈な爆撃がノスフェルを襲っていた。向こう側から放たれたらしい。

「あそこか！」

サイトはシエスタから装備品をすべて返してもらい、ノスフェルの近くにいるであろうルイズの元へ走り出し、ウルトラゼロアイを装着した。

「デュア！」

「グゥウウウウ…！」

「はあっ…はあっ…私はサイトを探してたのよ…邪魔しないで！」

爆発魔法エクスプロージョンはノスフェルには致命的ではないものの、威力は凄まじいものだったためダメージは与えることはできた。が、威力が高ければ高いほど精神力を急激に失っていく。

もう戦うだけの力が残ってない。

ノスフェルがのっしりとした足取りでルイズに近づき、触手を伸ばしてきた。

が、青く輝く光の出現と共にその触手は脆くも千切られた。

どこからか飛んできた一本の宇宙ブーメランは、赤と青の配色のある巨人の頭に戻っていく。

「デュ！」

ウルトラマンゼロの降臨。

「ウルトラマン、ゼロ……」

なぜだろうか。命を救われたのとは別に、妙に安心感が彼女の心を満たしていた。

「シャ！ハッ！」

ノスフェルに何度も殴りかかり、ゼロスラッガーを手に取り、×印の傷を描くようにノスフェルの体を斬りつける。

〈ゼロスラッガーアタック！〉

「デュ！」

「ギオオオオ！」

腹に×印の斬り傷を負わされ苦しむノスフェル。

だが、一つ気がかりなところがある。

今までノスフェルは何度倒してもまた復活してきたのだ。おそらく普通に戦って勝っても、奴は決して死ぬことはない。

（くそ…どうする？）

思考するゼロだが、その隙をノスフェルは見逃さなかった。呆けるゼロに爪を振り上げ、彼の体を切り裂こうとした。
だが、その時だった。

「ディアアアア！」

紅き光が、ノスフェルのゼロへの攻撃を遮り、銀色の足の出現と共にノスフェルを蹴り飛ばした。

ウルトラマンネクサス・ジュネッストリニティ。

「呆けてる場合か。先程までといい、世話が焼ける」

「わ、わりい…」

ネクサスの辛口にゼロは謝るしかなかった。

「俺が奴の口を開ける。その中に命中精度のある技で奴の喉を突け」

「え？」

「奴の弱点は口の中にある。その中に再生機能のある臓器が存在している。だから今までお前に倒されながらも生き延びたんだ」

「そういうことか、よし！頼むぜ！」

「ふん」

パシン！と気合いのタッチをする二人。弱点さえ判明すればこちらのものだ。

が、そう簡単に行かないのが世の中の厳しさだ。

コルベールの変身したメフィストがノスフェルの前に立ち塞がったのだ。

「私が君たちにそう簡単に勝ち星をあげると思ってたのかい？」

二対二ではノスフェルの口を開ける役が足りない。メフィストの狙いは間違いなくゼロたちに二対二のタッグバトルを挑み、ノスフェルへの止めを邪魔することだ。

「コルベール先生…あなたは本気なのか？」

ゼロがメフィストに話しかけてきた。

「学院でルイズやみんな、それに俺に見せたあの好奇心と優しさに満ちたあなたはどこへ行ったんだ！？」

「……」

メフィストは何も答えず、メフィストクローをゼロに向ける。

「君は甘い。私は貴族として生まれたが、あの貴族の称号を優先するあまり立場の弱い人間を傷つけ、人としてのしきたりを忘れたグズの教育などに辟易していたのよ！」

「なっ…！」

「こんなグズ貴族が支配する世界、私の手で覆す！一度すべてを駆逐し、新たに世界を築き直す！そのために、君たちの光のパワーを

頂こうか！」

言い終えた瞬間、メフィストはゼロとネクサスにメフィストクローを振り上げ、突進してきた。

だが、その時だった。

十字型の二枚重ねの光が一瞬だけその一帯を照らし出した。

「あれは、まさか…」

一ヶ所に固まったルイズたちもその光に目を奪われた。

「シュワ！」

その光は、銀色の体に赤いライン、そしてゼロのものと酷似したブレスレットを身につけた巨人となった。

その名はウルトラ兄弟四番目、ウルトラマンジャック！

「なっ、貴様……私の作った亜空間から脱出したのか！」

「ゼロ、この男は俺が相手する！君たちはノスフェルを倒せ！」

ジャックはそう言ってメフィストを二人から遠ざけるように押し出した。

「ギオオオオ！」

ノスフェルは最後の足掻きでネクサスに爪を振るが、光の剣でそれを受け止められた。

〈シュトロームソード〉

「シャ！」

受け止めたその爪を弾き飛ばし怯んだところでネクサスはノスフェルの上顎と下顎を掴み、ゼロに顔を向けさせて口をこじ開けた。

「今だ、撃て！」

「ああ！」

ネクサスの呼び掛けにゼロはコクッと頷く。

額のビームランプの輝きを強めながらゼロは思い返す。

『助けてぇ！』

『僕は許さない！お前を一生許さないからな！』

エマの悲しき悲鳴と、ジムの憎しみと怒りの投石。

それを心にしっかりと刻み込んだ。

（俺は逃げない。憎しみも悲しみもすべて背負って生きていく）

標準を合わせ、ビームランプの光が最高潮となる。

「これ以上、誰かを不幸にしないためにな！」

〈エメリウムスラッシュ！〉

「デュワ！」

エメリウムスラッシュは緑色に輝く閃光状の光線。その細き閃光は攻撃範囲には優れない分、百発百中の命中精度を誇る。
結果、その閃光はノスフェルの口内にある再生機能を持つ臓器に、ダイレクトにヒットし、それを破壊した。

「ギェエエエアア！！」

口元を押さえながら悶え苦しむノスフェル。

今こそ止めの時だ。
ゼロとネクサスはＬ字型に両腕を組み、必殺光線を同時発射してノスフェルに止めを刺した。

〈ワイドゼロショット！〉〈オーバーレイ・シュトローム！〉

「「デア！」」

「ギェエエエオオオ！！！！！！！！！」

ノスフェルは光線で体を撃ち抜かれ、爆発四散した。

一方、メフィストを足止めしていたジャックは、同じように必殺光線をメフィストに撃ち込んだ。

〈スペシウム光線！〉

「シャ！」

「グワッガア！」

大きく仰け反ったメフィストは倒れはしなかったが、光線で攻撃された左肩を擦りながら姿を消した。

今回の敵はメフィストやノスフェルと言うより、サイトの恋人を失った悲しみからのトラウマと言える。

そのトラウマに、ゼロ（サイト）は見事打ち勝ったのだ。

「ゼロ」

ジャックはゼロに近づいて彼に言った。

「これから君に宇宙警備隊への復帰を試すテストを後日に我ら兄弟から行うこととした。それも兼ねて我々はこの星に一人ずつ、不特定に訪れる。いつ来てもいいように日々の鍛練を怠らないようにな」

「……ああ」

ゼロは強く頷いた。

「では、それまで私の後輩をよろしく頼んだよ」

ジャックはネクサスの肩を叩き、空へと飛び立った。

「シュワッチ！」

「ってて、悪かったからそんなにぶつなよ…」

「ふん！」

あの後、無断で学院を抜け出したことでサイトはルイズからお仕置きされ、顔の一部が腫れ上がってしまった。
ルイズに至っては、お仕置きの後不機嫌そうにそっぽを向いている。

「やれやれ、相変わらずだね。素直に彼が戻ってきたのを喜べばいいのに」

「まっ、そこがルイズらしいわね」

ギーシュとキュルケが口々に言った。

まあ、仕方ないか。俺がまだ力以前に、心も弱かったから。

そう思いながら、学院のベンチに目を向ける。
そこにハルナが座り、サイトに微笑みかけているような気がした。

「いい天気だな」

天から降り注がれる光をその身に浴びながらサイトは背伸びした。

これからもまだ頑張れそうな気がする。

この世界にも仲間ができたのだから。

9　黙示録ーアポカリプスー

「フッ！」

「ギュォオオ！！」

インセクティボラタイプビースト・アラクネア。
ネクサスは今それと戦っていた。
しかし、ノスフェルを倒して以来彼の様子がどこか変になっていた。

（力が…）

力がうまく入らなくなっていたのだ。しかもそのせいで、ジュネッストリニティへのチェンジができない状態となっていたのだ。

「くっ…！」

彼はアクティブとなったビーストの位置をほぼ正確に特定できる。
移動手段もある。だからすぐに怪獣やビーストの暴れている現場にたどり着くことができた。しかし、それは同時に彼に休む暇を与えないことを意味していた。戦いの後に利用するストーンフリューゲルの力でも、傷の治りが遅くなっていたのだ。

〈クロスレイ・シュトローム！〉

「っっ……デア！」

「グガアアア！」

アラクネアを倒しはしたが、人一倍疲れた彼はアラクネアが爆発する前に変身が解けてしまった。

もちろん、テファやウェールズが気づかないはずがない。連日の戦闘で疲れてるのが見え見えだ。

「はあ…はあ…」

もはや病に見えても仕方ない。ベッドで休むことも多くなってきた。

「……シュウ」

テファは辛そうに口を開いた。

「もう戦わなくていいよ…」

「何？」

「だって、あなたは……何かもらえるわけでもないのに、ただひたすら化け物と戦い続けてる。何かの特になるわけでもないのにずっと…

みんな心配してるのよ？あなたが最近疲れてること。前にも言ったよね？あなたにも安らぎの場が必要って」

「……」

しかし、そこでまたエボルトラスターが点滅し始めた。

彼はとっさにそれを握り、立ち上がってぎこちない足取りで小屋か

ら出た。

「行かないで！」

「……済まない」

シュウヘイは一言言い残して小屋を後にした。

「……」

テファはもう我慢ならなかった。こうなったら忘却の魔法を使ってでも引き留めなくては。

すぐ追いかけようとしたが、彼女の前にある人物が立ち塞がった。

「そんなに彼が心配かい？」

「うわあああ！！」

あれからも怪獣、主にビーストの活動は活発化していた。

以前ゼロたちの逃したビースト、クトゥーラの触手が人々を次々に食らい付くしていた。

ウルトラマンだけがこの国を守ろうとしている訳じゃない。この国を護衛する役目を持つ魔法衛士隊や銃士隊などの戦士も活躍する。

「一斉射撃！」

「「「はっ！」」」

いくつもの魔法、そして銃声が鳴り渡り、クトゥーラの触手を攻撃する。

「ギェエエエ！！」

空間に出現した黒い穴からクトゥーラの悲鳴が響き、その触手は引っ込んでいった。

「ふう…あの奇妙な触手が出て、これで六つ目だな」

クトゥーラの触手が消えたことで一息つくメイジの若者は言った。

「休んでる暇はないぞ。怪我人の手当てだ」

「「「はっ！」」」

衛士隊の面々は急いでその場に倒れている怪我人の手当てに出回る。

「しかし、ウルトラマンが現れる以前までこの世界にあのような化け物など出没しなかった。一体なぜ？」

アニエスは疑問に思った。なぜ、怪獣なんて存在が現れたのだろうか？

もしかしたら、誰かの計らいによるものだろうか？

「……」

その時、突然紙飛行機がアニエスの元に飛んできた。彼女はその紙飛行機をパシッと取り、広げてみた。

『裏通りまで来い。君に真実を教えよう。ダングルテールの生き残り』

「……！」

アニエスは辺りを見渡し、紙飛行機を飛ばした人間を探したが、それに当たりそうな人はどこにも見当たらなかった。

一体誰だったのだろうか？

その場は部下に任せ、アニエスは追いかけてみることにした。

「……」

たどり着いた路地裏は薄気味悪い場所だった。

手紙を握りしめ、アニエスはその場で叫ぶ。

「出てこい！私に話があるのだろう！？」

すると、彼女は背後から凄まじい威圧感を漂わせる闇の気配を感じた。すぐ銃を構えて振り向くと、あのローブの男の姿が立っていた。

「貴様は、あの時の…」

そのフードの男はフードを取り、その姿を現した。

「久しぶりだね…ダングルテールの生き残り…」

ダークメフィスト、コルベールだった。

「お前、確か魔法学院の……どうして私がダングルテールの生き残りだと知っている!?」

あの事件での生き残りがアニエスであることなどほとんど知られてない。なぜだ?
もしや…この男は…

「私の村を焼き払った実行部隊の…隊長か?」

「……」

コルベールは瞼を閉じると、薄く笑って言った。

「そう、あれは私の部隊がやった」

その時のアニエスの目は、驚愕のあまり目が天になっていた。瞬間、その目は憎しみの色に染まり、腰に着けていた剣を引き抜いてコルベールに突出した。

こいつが…こいつが私の村を!!

「うわあああああああああああああああああああああ!!!!」

「まだ話の途中だよ？」

速いのは確かだが、直進してるだけなのであっさりとかわされた。

「貴様の話などどうでもいい！貴様は私が殺す！」

２０年間ずっと恨み続けていた。必ずこの手で父や母、幼なじみの命を奪い去った者に復讐してやろうと。だから髪を切り、女であることを捨てて生きてきた。

「……そろそろ時間が来るな。彼らとの決着だ」

そうコルベールが言い、アニエスの剣が彼に通った。はずだった。まるで空気を斬るような手応えの無さだった。斬ったと思った瞬間に、コルベールの姿がなかったのだ。

『君なら冥王に強き闇を献上できる…』

最後に彼の声がどこからか聞こえてきた。

「くそぉ！」

悔しそうに吠えるアニエスは、剣でガキン！と石畳の地面を針で縫うように刺した。

空は雨雲に覆われたように真っ暗だ。波の音が響き、不気味な岩が

立ち並んでいる。

「ここは…どこ?」

テファはそこにいた。さっきの男性に話しかけられた瞬間、こんな見慣れない場所にいつの間にか立っていたのだ。

「テファ、無事かい!?」

その声に反応して振り向くと、マチルダやウェールズまでここにいた。

「どうして二人もここに!?」

「わからない。さっき現れた男に話しかけられたらいつの間にかここにいたんだ」

ウェールズが答えた。

(さて…もうじきメインキャストが来る)

コルベールは三人から離れた場所から空を見上げていた。空には巨大な黒い穴が開こうとしていた。

俺は、たとえ迷うことがあっても前に進むと決めた。ハルナと約束した、平和な世界をいつか築くため、そして大切な仲間を命に代えても守るために。

ＢＹサイト

「はっ！せい！おりゃ！」

あれからサイトは張り切って稽古に励んでいた。その稽古に付き合ってるのは、ギーシュのワルキューレ。ギーシュもサイトに一度負けてから魔法に磨きをかけ、サイトのよい稽古相手となっていた。

「まだまだ！」

そこに貴族や平民といった隔たりはない。あるのは、二人の男の熱意だった。

「ダーリンあれからすごい張り切ってるわね」

キュルケは壁に寄り掛かりながらタバサに言った。

「わかる。迷いがない」

タバサにもサイトが吹っ切れた様子が理解できた。そして同時に、どこか羨ましくもあった。

（彼らみたいに、強くあれたら…）

自分も表には出さない、心の中に封じた醜い心を持たなくてすむのだろうか？いつも本を読んでいるはずの彼女はじっと二人の稽古を見ていた。

「……」

ルイズもその様子を見ていた。確かにサイトはあれから変わった気がする。だが、変わってないところがあることを知っていた。

（私を見てない気がする）

主人とか使い魔の関係からだろうか。サイトは自分を一人の女の子として見ていない気がする。やっぱりハルナへの思いが心の奥底にあるのだろう。

（ってなな何考えてんのよ私は！これで…いいはず…）

サイトを見てると胸が熱くなることが多くなってきた。まるで病のようにとっさに起こる。どうしてだ？

「ミス・ヴァリエール」

そんな彼女に、青みかかった髪の女剣士が話しかけてきた。

「銃士隊副隊長ミシェルと申します。女王陛下がお呼びです。すぐに来ていただきたい」

女剣士、ミシェルはそう言うと馬を走らせ町に戻って行った。

「姫様からまた、何なのかしら？」

「……」

キュルケはその話を聞き逃さなかった。

「聞いたタバサ？」

「ん……」

「はあ…はあ…」

体が重たい。いつもはまだこんなにバテたりはしないのに。

トリスタニアの街にはたどり着いた。

その街の頭上に、黒い穴が開こうとしている。その穴はだんだん拡がっていった。

すると、彼の脳裏にあるビジョンが映る。

テファ、マチルダ、ウェールズ。あの三人だ。

「くっ、俺を誘ってるのか…！」

今はかなり体に限界がきている。おそらく奴はそこを狙ったのだ。

しかし、それでも彼は躊躇わずエボルトラスターを引き抜いた。

「っ……ぉおおおおぉおおおお！！！！」

「あんた…こんな場所に連れ込んで一体何をする気だい！？」

マチルダは杖を向け、コルベールを睨み付ける。

「彼は今連日の戦いで回復する間もなく疲れきっている。君たちも気づいてたはずだ。だから彼を無理やりにでも休ませようとした。だが彼が回復しない内に手を打っておかないとまずくてね。だから君たちをここに連れ込めば、彼は君たちを救いにここへ来る。もちろん、ボロボロの状態でね」

ふっ…と笑うコルベール。マチルダは学院で彼とは仕事仲間として共に働いたことはあったが、こんな冷たい笑みを浮かべる男ではないと思っていた。かつてない寒気のあまり青筋が走る。

「ほら、やっぱり来た」

空に開かれし穴からウルトラマンネクサスがズシン！と音をたてながら降りてきた。

コルベールはテファに目を向け、話を続ける。

「彼は君と出会う直前、宇宙より飛来した光と同化し、ウルトラマンネクサスとなった。だが彼はその力の意味を理解してはいない」

ちょうどその時、ネクサスの両手両足、そして腹に触手が巻き付いた。そして岩の影から触手の主、クトゥーラが姿を現す。
まるでムンクの叫びのような顔がいくつも彫り込まれているような、不気味な姿だった。

「グッ…ヌォ……！」

必死に触手を振りほどこうとするネクサスだったが、いつも以上に力を発揮できず、しかもクトゥーラの吐く黒い吐息が、ネクサスの体に小さな爆発をいくつも起こし、いたぶりつくすように痛め付けていく。

「ウワアアア！！」

片膝を着くネクサス。
それだけではなかった。

パキッ

ネクサスの心臓とも言えるエナジーコアにヒビが入った。

「また、あなたにお願いしたいことがあるのです。ルイズ」

サイトとルイズはトリスタニアの城にいるアンリエッタから呼び出

され、今は長いテーブルの置かれた会議室にいる。

「姫様、こんな私めにできることがあるなら何なりとお申し付けください」

「ありがとう。ところでサイトさん」

「あ……はい。なんですか？」

なんだろう？サイトは首をかしげた。

「もう、大丈夫ですか？最近元気がないかと」

あ……ハルナのことか。

こんな俺を心配するなんて、慈悲深い人だな…とサイトは思った。

「大丈夫です。全然」

「よかった…」

アンリエッタがサイトを自分していたのは、自分と同様愛する人を奪われ、その姿を利用されたという共感からだった。サイトが無事立ち直ることができたことに、彼女は安心した。

「では、あなた方に伝えなくてはならないことがあります。先ほど家臣の者たちに伝えたことですが…」

アンリエッタは机の上に、トリスタニアの市街地を記した地図を広げた。地図には六つほどの、赤い点と数字が刻まれている。

「この赤い点はオスマン氏がある人物から直接聞いた、スペースビ

ーストと呼ばれる怪物の犯行現場です。数字は犯行の順番を表しています。これを見て、あることに気が付きませんか？」

「「……」」

一目見ただけではなかなかわからない。だが、見る毎にだんだんあることに気がついた。

「城を、囲ってる？」

「ええ、でもそれだけじゃなかった。これはある種の挑発行為です」

「挑発行為？一体誰がそんな不届きなことを！？」

ルイズは声を荒げた。

「あなた方もご存知のはずです。最近このトリステインを脅かすスペースビーストを率いる悪魔、メフィストを」

「「！」」

メフィスト、それを聞いて二人は驚いたように目を開いた。特に驚いたのはサイトの方だ。

（コルベール先生、一体どうしたんだよ……）

「そのメフィストは大胆にも、我々に次の犯行のメッセージを伝えてきたのです」

「予告状…ですね」

「ええ。次に来るのはまだ不明ですが…現在衛士隊や銃士隊の者たちに現場を調べさせています。きっと何か意味があるはず…」

すると、そこでサイトのビデオシーバーが音を鳴らしだした。

「……」

この音はシュウヘイか、それとも別の誰か、それしか思い当たらない。

恐る恐るビデオシーバーの蓋を開けると、ハルナの時のように不気味な文字が浮かび上がった。

『黙示録の始まりだ』

「なにこれ?なんて書いてあるの?」

「サイトさん、この文字は?」

ルイズとアンリエッタは日本人ではないのでこれらの文を読み取れない。もしかしたら、とサイトに尋ねてみた。

「黙示録…」

そして次に、別のメッセージが表示された。

『七つ目の封印解かれし時、終焉の地への扉が開かれる』

サイトは二人にわかるようにそのメッセージを読み上げた。

「終焉の地って…なんでしょう？」

「いえ、さっぱりわかりません…終焉の地なんてはじめて聞いたし……」

終焉の地…

コルベールは一体何を狙っているのだろうか？

「現場に行けば、何かわかるかも…」

その時、バタン！と大きな音を立てて一人の兵士が入ってきた。

「陛下！一大事です！二つ目と四つ目の調査現場の間より謎の暗雲が出現！」

「何ですって！？それで、街や民の被害は！？」

「今のところ被害はございませんが、暗雲の中より怪物の鳴き声と思われる音が聞こえるとの情報もあります！」

「……サイト」

ルイズはサイトを見やった。

おそらく、今言った暗雲が……

「ああ、開かれたんだ。きっと」

「ハアッ…ハアッ…」

ピコン、ピコン、ピコン…

ネクサスのエナジーコアの点滅がだんだん速まっていく。
クトゥーラの触手のせいでいまだに身動きが取れない。

「シュウ、立ち上がって！」

「立ち上がりなシュウヘイ！そんなヤワな男じゃないはずだろ！」

テファとマチルダの必死の声援が響くが、声援だけで形勢が逆転するほど世の中は甘くはない。

「無駄だ。彼の体はすでに限界にきている。
そして彼が倒れることで君たちの心に闇が生まれ、その闇が私たち闇の戦士の力となる…
ハハハハハ…」
嘲笑うコルベール。

だんだんネクサスの視界がぼやけ、何も見えなくなった。
同時に、エナジーコアから光が消失し、ネクサスは倒れ、目の輝きすら失った。

「シュウ……ヘイ？」

嘘だ…こんなことがあってたまるか。

ウェールズの握り拳から血がにじみ出した。

「シュウ……嘘でしょ…約束したでしょ…」

俺を信じて待ってろ。そう言ってくれたはずだ。

どうして…

なんでこんなことになったの…

「起き上がってよぉおおおお！！！！」

「いくぞルイズ。振り落とされるなよ」

二人はウルトラホーク一号に乗り込んだ。目指すはあの黒い穴の中に存在するやもしれぬ『終焉の地』。

「行くぞ、発進！」

レバーを引き、ホークは空へと舞い上がった。

しかし、ここである異常が起こる。

黒い穴が、閉じようとしているのだ。

「ちょっと！間に合うの！？」

「そんなのやってみなくちゃわからねえ！」

ホークの速度をマックスにし、かなりの重心が体に来る。

「く……」

普通の人間なら気絶してしまうほどだが、二人は粘り強い根性で理性を保っていた。

なんとか間一髪、ホークはその穴へ飛び込んだ。

「なにこれ…」

黒い穴の中は現実のものとは思えない光景が拡がっていた。地上がなく、真っ暗な闇しかない。

しばらく飛ばしていると、目の前に一筋の光が見えた。

「あれだ！」

ハンドルを握り、サイトはホークをその光へ飛び込ませた。

その光の先には、黒い海と不気味な岩場が拡がっていた。

「ここが…終焉の地ね」

確かに、その名にふさわしい、終わりを感じさせる風景だ。

おそらくこの中にメフィストがいるかもしれない。アンリエッタは

おそらく二人の身を案じ、調査までに止めようと思っていただろうが、サイトはその意に反していた。

（戦わなくちゃ、ならないんだ）

きっとコルベールは自分らを殺しにかかるだろう。ならば迎え撃つしかない。ブレスレットに軽く指先を触れさせた。

「サイト……あれ…」

ルイズが窓の外を指差した。なんかその口調は恐怖心が芽生えているような感じだ。

一体なんだろう。サイトは運転席の前の窓から外を見てみた。ちょうど巨大な岩の前だ。

その岩にあるものを見つけた途端、彼は驚愕のあまり息を詰まらせそうになった。

「サイト、あれって……」

間違いなかった。特徴的な銀色のボディとY字型のエナジーコア。まるで十字架の刑に処せられたイエス・キリストのように、岩に貼り付けられていたのは、紛れもない彼だった。

「ウルトラマンネクサス！？」

だが…その白く輝いてるはずの目に生気はなかった。輝きはなく、全く動こうとしない。

まさか…

まさか…

「嘘だ……嘘だあああああああああああああああああああああああ！！！！！」

目の前の現実を受け入れきれないサイトの叫び声が終焉の地に響いた。

10　滅ぼせぬ光

「あいつが、シュウヘイが負けるなんて…嘘だ！！」

あいつは強い。どんな敵にも倒れることを知らず戦い、勝ってきた。自分を時には導く存在として導いてくれた時もあった。そんな彼が今、力尽きた姿で蔦に両手両足を拘束され、岩に貼り付けられている。

コルベール先生…

「あなたは本当にに悪になったのか…？」

貴族の中でも数少ない尊敬に値するコルベールが、ここまでするとは…

一体なぜだ…？

「ギュオオオ！」

しばし思考するサイトたちの乗るホークにクトゥーラは触手を鞭のように振って攻撃してきた。

「！」

とっさに反応し、サイトはハンドルを横倒しにすると、辛うじてホークはクトゥーラの触手から逃れた。

そしてトリガースイッチを押すと、ホークの翼の下にある砲口からビームショットが連続発射、クトゥーラを怯ませた。

「ほう…」

コルベールは素直に評価したように声を漏らした。

「一旦降りるぞ。地上にあのムンクもどきを操ってる奴がいる」

サイトはホークを地上へと着地させた。

幻想世界の森の中、シュウヘイは苦しそうな顔で落ち葉の積もった地面に横たわっていた。

「……」

『目ヲ覚まセ……』

「……！」

ドクン…ドクン…

シュウヘイは苦しむように胸元を押さえた。

『君の力を、我らが力「リーヴスラシル」を解放するのだ…そうすれば君は無敵の戦士となる…』

誰だ…？

以前夢で聞いたこの声は…

『さあ…私に心を委ねるのだ…』

その声はだんだんシュウヘイの中で大きくなっていく。

「ダメ！」

『なっ…貴様ぁ！』

一瞬の輝きは、その怪しげな声を打ち消した。

「シュウ……目を開けて」

その優しさ溢れる声に反応し、シュウヘイは起き上がった。
すぐ目に入った。ビーストヒューマンとなりながらも自分を想ってくれた少女。

「アイリス…」

「そんな…」

ルイズは驚愕していた。なぜなら、目の前にいる敵が自分の尊敬する教師だったのだ。いや、本当に彼なのだろうか？

「ミスタ・コルベール…！」

「ミス・ヴァリエール。落ちこぼれだった時と比べたら見事な成長だ。あの伝説の『虚無』の系統を手にしたそうじゃないか。そう…」

コルベールは人質のつもりか、テファを腕を捕まえた状態で引っ張り出す。

「彼女のように」

「その娘は、シュウヘイを召喚した…」

サイトは少し記憶を探って思い出す。確か、ティファニアだったか？

「って待ってください！彼女のようにってまさか…」

「そう、彼女もまた虚無の担い手さ。しかも…」

コルベールは彼女の被っている帽子を手でつかみ出した。

「やっ、止めてください！」

嫌がるようにテファはもがき出した。

しかし、帽子はあっけなく剥ぎ取られてしまう。

それと同時に、彼女の人間とは異なる尖った耳が露になった。

「え、エルフ！？」

一体どうなってるのだ？

ルイズの知識では、エルフは『先住魔法』と呼ばれる力を行使し、独自の発展を遂げてきた。だがエルフは人間と対立関係にある。なのに、人間と同じ魔法を使い、人間を使い魔にするなんて…彼女は何者なのだ?

「あんた、テファから離れな!」

「さもなくば僕らの魔法があなたを貫くぞ!」

マチルダとウェールズも杖をコルベールに向けて脅す。

「え、ウェ、ウェールズ皇太子!?」

「うそっ!?」

またしても驚いたサイトとルイズ。なにせ、ウェールズは彼らの記憶の中ではすでに死んだはずの人間なのだ。それも、二人の目の前で。

にも関わらず、盗賊土くれのフーケと共にいるとは、何がどうなってる?

「どういうこと!?ウェールズ皇太子は死んだんじゃ…」

驚きながらそう言ったのは、ルイズでもなければサイトでもない。なんとキュルケだった。そしてその後ろにタバサと彼女の使い魔の竜、シルフィードもいる。

「キュルケにタバサ!?なんであんたたちがいるのよ!?」

「だってあなたたちに起こることって、次から次へと不思議なこと

ばかりじゃない。気になって来てみたら、ミスタ・コルベールまでいるじゃない」

「……」

「さて、処刑の時間だ」

コルベールはネクサスの張り付けられた岩の方に向き直った。

「処刑…？」

テファの言葉に、コルベールは行動で答えを示した。蔦がみるみるうちにネクサスの体にまとわりつき、彼の姿を隠していく。

「あの蔦がウルトラマンネクサスの体を覆い尽くす時、黒崎シュウヘイの命は完全に消える。そして彼の光はこの終焉の地に解き放たれ、私はその光を奪い、この醜く歪んだ世界を変える。より高き者、より完璧なる者として！」

コルベールはダークエボルバーを両側に引っ張って変身、ダークメフィストとなってその威圧感を見せつけた。

「ミスタ・コルベールがあの黒いウルトラマンだったの！？」

〈メフィストショット！〉

「ハッ！」

メフィストは装備したメフィストクローより不気味な緑色に染まった光弾でサイトたちのいる方へ攻撃してきた。

「きゃあ！」

「うわっ！」

わざと外したのか、光弾は当たらなかった。

（まだ君たちに恐怖を味わってもらわなくては。冥王へ闇に染まった心を献上する者として…）

メフィストは、今度は直接メフィストクローをルイズたちに向けて振り上げてきた。

だが、それを青き光によって受け止められてしまう。

「デュ！」

ウルトラマンゼロだった。先ほどの光弾が爆発する最中、サイトはウルトラゼロアイを装着して変身していた。

「オラッ！」

「ヌッ！」

ゼロのタックルでメフィストはルイズたちの近くから突き放された。

「ウルトラマンゼロ…！」

タバサは思わず声を漏らした。

「やっと来てくれたわ～…」

救世主の登場にキュルケはようやくホッとする。

「安心してはダメだ。ここから一旦離れよう！」

ウェールズがその場にいる皆に言った。

「でも、シュウが！」

今、張り付けにされているネクサスにいくつもの蔦が巻き付き、彼を飲み込もうとしていた。

「ティファニア、気持ちはわかるが、今は君の身を案じるんだ。それに…」

敵はメフィストだけではない。クトゥーラがこちらに迫ってきているのだ。

ただでさえメフィストに苦戦するのに、もう一体怪獣がいたら不味い。

二体の強大な敵を相手に、ゼロは正直なところたじろいでいた。

（たとえでも、ハルナを殺した本人でも……）

やはり彼はあの優しき教師、コルベールだ。その好印象でゼロの心にもわずかな躊躇いがあった。

「ハッ！」

「くっ！」

突然眼前に来たメフィストクローを素手で掴み、なんとか攻撃を止めた。が、力比べでどうこうなる相手じゃない。

（くそっ…）

しかもクトゥーラが触手でゼロの体を縛り付け動きを封じた。
そして口から黒い霧を吐き、ゼロの体に火花が走る。

「グアッ…」

メフィストクローを掴んでいた手が緩み、ゼロのプロテクターを傷つけた。

「くっ…」

「恩師を攻撃するのは気が進まないけど、見てるだけは我慢ならないわね…タバサ！」

「ん」

キュルケとタバサはシルフィードに乗った。

「ほらルイズ。あなたも乗りなさい！」

「ちょ、わっ！」

無理やりルイズの腕を引っ張って乗せたところでシルフィードは空へ羽ばたいた。

「フレイムボール！」

「エア・カッター！」

炎の礫と風の刃がメフィストを襲う。しかし、わずかに火花が散るだけでダメージはなかった。

「ふん、見てなさいよあんたたち！エクスプロージョン！」

ルイズの杖に青白い光が灯り、凄まじい爆発がまき起こった。

「っ……」

が、これでも倒すに至るほどのダメージはなかった。

「頑丈すぎる…」

タバサがそう呟いた時、メフィストの手から光弾が放たれた。

〈ダークレイフェザー！〉

「ハッ！」

「シルフィード！」

タバサの呼びかけに応え、シルフィードはとっさにその光弾を回避した。

しかし、メフィストはしつこく光弾を連射してくる。一発でも当たったら間違いなく殺られてしまう。それにシルフィードもいつまで持つか怪しいものだ。

だがここには味方であるウルトラマンもいる。そう簡単には殺られたりは少なくともない。

メフィストクローで直接斬りかかるメフィストだったが、ゼロスラッガーを構えたゼロにそれを阻まれた。

「俺は…絶対に諦めないからな！」

横目でネクサスの方を見てゼロは強く言った。

「俺はナイトレイダーに入隊し、そしてお前に導かれ、この光を得た。

戦う使命を与えられたこと、それが……他者への憎しみのあまりたくさんの人を死なせた俺に課せられた罰だと信じて…」

そうだ。光なんか似合わない自分に光がやって来た。それは自分が少しでも罪を償うこと。シュウヘイはそのために戦い、人々を救い道を選んだ。

「そして、石堀を倒し、すべて終わらせたら孤独に死んでいく……だがすべて終わらせる前にそれも終わった…」

エボルトラスターを握り、見つめながらシュウヘイは言った。ここまで醜く生きてきた自分を、一体どれほど憎んできたのだろう…

だが、アイリスはそれを否定するように首を横に振った。

「シュウ、その力は償うためにあるんじゃない」

「え……」

すると、エボルトラスターから目映い光が彼の視界を呑み込んだ。

目にした光景は、ネクサスと出会ったあの遺跡。

「あなたに与えられた光は、永い時を越えてたくさんの人たちに受け継がれてきた。その人たちは時に大切な人を喪い、悩み続けながらも戦ってきた」

そう言ったとき、彼はちょうど壁に彫られた壁画を目にした。すぐにその壁画の内容を理解した。ウルトラマンとビーストの戦いを記録したものだ。

「じゃあ、初代の真木さんより以前にデュナミストがいたってことか？」

初代デュナミスト、真木舜一。地球で自分を兄のように慕っていた少年の父親で元航空自衛隊の一員。

病魔に侵された息子のために彼はウルトラマンとなって戦った。

そこまではシュウヘイも知ってはいたが、まさかそれより前にも光を手にした人がいたのか…

この壁画はきっと今までのデュナミストたちの戦いを再現したものなのだ。

「あなたは選ばれたの。その光の継承者として」

「俺に…その資格があるのか？」

「私、あなたが好きだったよ」

「え…！」

シュウヘイは顔をあげてアイリスの顔を凝視する。

「私はあなたが光を手にする導き手としてウルトラマンに選ばれた。
少しでも、私のことで苦しんでるあなたを助けたかったから。
あなたが苦しみながら戦い続けるのを見てると辛かった」

言葉を続けていく内に、彼女の姿はだんだん薄く半透明になっていく。

「アイリス…！」

「もう私のために戦わなくていいの。あなたは、今のあなたが大切に思ってる人を守ってあげて」

「大切な……人」

真っ先に浮かんだのは、地球で待っているであろう仲間たち。
次にこの世界でできた仲間たち。
そして…

「テファ…」

そう呟いたとき、彼女は笑顔で頷いた。

嫉妬心がないわけではない。実際は自分と彼が今でも一緒であってほしかった。だが自分の死が彼の心を傷つけてしまった。シュウヘイが誰かを愛する資格がないと言ったように、今の彼女もまた彼と結ばれる資格などないと自覚していた。ならばせめて、彼の力になりたい。彼女は死後もなお、彼の幸せのために……

「シュウ、死なないでね」

そう告げた時には、彼女の姿は完全に消え失せた。

「……済まなかった」

意を決して立ち上がり、エボルトラスターを改めて見つめるシュウヘイ。

立ち上がらなくてはならない。

ウルトラマンとかナイトレイダーである以前に、一人の男として。

「俺は今度こそ守ってみせる、この光で。

それが俺に与えられた使命…いや、俺の見つけた『答え』だ！」

エボルトラスターの紅の輝きが溢れだし、彼の身を、そしてその世界すらも包み込んでいった。

ドクン！

エナジーコアの輝きが蘇り、彼を飲み込もうとする蔦が火花を起こしながら散っていく。

「何！？」

メフィストは思わず攻撃の手を止めた。いや、メフィストだけではない。ゼロや仲間たちもその姿を見ていた。

再び、力尽きたはずのウルトラマンネクサスが立ち上がったその姿を。

「ウルトラマンネクサスが……」

「シュウヘイ……！」

もう倒れたはずなのに…

ルイズ、ゼロは目を見開く。

「シュウ……」

テファは心の底からホッとした。彼が生きていたということが、これほど喜ばしいものに感じるとは…。

しかし、ネクサスの目に光は戻ってなかった。今のネクサスに、ほとんどエネルギーが残ってないのだ。またいつ倒れるか時間の問題だった。

「力とは…」

メフィストはネクサスに近づいていく。

「他者を支配し圧するためにある」

そしてネクサスの首元をひっ掴む。

「それに気づけぬ君が、私に勝てるはずがない！」

メフィストは強く言い放つと、ネクサスは思い切り投げ飛ばした。

〈エメリウムスラッシュ！〉

「させるか！」

ゼロはネクサスに続けて攻撃を仕掛けようとするメフィストに閃光を走らせるが、メフィストはメフィストクローを盾代わりに防いだ。

「そんな威力の光線は効かないぞ。まだ躊躇ってるのかい？」

「っ……」

図星だった。やはりあのコルベールがハルナを殺した張本人であることや、自分の仲間やあの幼い少女に地獄わ見せたとは信じたくな

いという自分が、自分に迷いを生み出している。

「…・・」

テファは意を決したのか、ネクサスの方へ歩き出した。

「ちょっとテファ、どこへ行くんだい！危険だ！」

マチルダは彼女を引き留めた。

今、テファの手には、先ほどまで身に着けていた指輪が握られていた。

「母さんが遺してくれたこの指輪なら、彼を助けられるかもしれない。

この指輪には、エルフ独自の魔法がかけられているの」

「でも今彼のいる場所に行くのは危険だ」

ウェールズの言う通りだ。今、ネクサスを守ろうと奮闘するゼロと、その光を奪わんと襲い掛かるメフィストが争っている。近づけばどうなるか…

「でも、今のまま戦えば彼は間違いなく殺されちゃう…そうなってからじゃ遅すぎる。だから…」

行かせてください。そう言った時の彼女の眼は本気だった。皆が反対しても絶対に行くつもりだった。

「…僕らで護衛しよう」

「はあ…あんたいつからそんな命知らずになったんだい？」

結局二人は折れてテファの護衛をすることにした。

マチルダは土から巨大なゴーレムを作り出し、メフィストに向かわせた。

「ゴーレム、シュウヘイからあの黒い巨人を引き離せ！」

ゴーレムはメフィストに向かって走りだした。

「ゴーレムでも敵いそうにないけど、囮でなら…」

「よし、僕が彼のもとまで護衛する。行こう！」

「はい！」

「ヂュ！」

一方、ゼロはメフィストとクトゥーラのタッグに苦戦を強いられた。

触手が彼の手足を縛り付け、メフィストがメフィストクローで彼を斬りつける。

しかし、そこにマチルダのゴーレムが現れ、メフィストを突き飛ばした。

「ヌ！」

ゴーレムはさらにクトゥーラも突き飛ばし、ゼロを解放する。

「ハア…ハア…」

まさか以前に対峙した人のゴーレムで助けられるとは…

向こうを見ると、ネクサスの元へ急ぐテファとウェールズの姿があった。

（何をする気だあの二人？）

何か考えでもあるのだろうか？

いや、とにかくあの二人をメフィストやクトゥーラから離さなくてはならない。

「ジュアアア！」

ゼロはメフィストに掴みかかり、ネクサスの元へ向かう二人からメフィストを突き離した。

「グォ！」

クトゥーラもゼロに触手を伸ばすが、その瞬間ゼロはシャドウアーマーを装備、鋭く研ぎ澄まされた細かい光弾を素早く連射、クトゥーラの触手を次々と千切っていく。

〈クナイ光弾！〉

「シュ！シュ！デュ！デ！デュア！」

「ギョゴオオオ！！」

その戦いを潜りながら、テファとウェールズは片膝を着いているネクサスの元にたどり着いた。

「本当に、彼が立ち上がれるのかい？」

ウェールズはテファに尋ねた。

「わからない…でもやってみるしかない」

ネクサスの方に向き直り、彼女は母の形見である指輪に着いていた宝珠を、ネクサスのエナジーコア目掛けて投げつけた。その宝珠は白い光となり、ネクサスのエナジーコアへと吸い込まれていく。

「！」

しかし、運悪くメフィストに気づかれてしまった。

ゼロと取っ組み合いをしていたが、一瞬の隙を着いてメフィストはネクサスにメフィストクローから発した光弾を撃ち込んだ。

〈メフィストショット！〉

「グワアッ！」

ネクサスは大きく吹っ飛ばされてしまう。

「「！」」

まさかこのタイミングで攻撃されるとは思わなかったテファとウェールズ。マチルダや、シルフィードに乗るルイズら三人、そしてゼロは息を飲む。ネクサスが立ち上がるか、それともまた倒れるのか。

天へ力を振り絞って手を伸ばすネクサスだが、その手はダラリと地に落ちた。

「「「……！」」」

今度こそ終わってしまったのか？

いや、終わらなかった。

黒いラインを通し光がエナジーコアに集束し、ドクンドクン！と心臓が高鳴るような音が鳴る。

そして輝きを失っていた光は輝きを取り戻し、ウルトラマンネクサスは再び立ち上がった。

「やった！」

一時はどうなるかと思ったが、母の形見が、彼に力を与えてくれた。テファの心は幸福と達成感に満たされた。彼女だけでなく、他の面々も満足げな笑みを浮かべた。ルイズだけはやっと立ち上がったのねと素直に喜ぼうとはしなかったが、それが彼女らしいところだ。立ち上がったところでネクサスはアンファンスからジュネッストリニティにチェンジした。

「バカな…君の光は完全に消えかけていたはずだ！」

メフィストはメフィストクローに緑色の光を灯し、七発ほどの強化した光弾として放った。

〈ハイパーメフィストショット！〉

「はっ！」

ネクサスは左腕を、盾を構えるように突き立て、真っ向からその連発された光弾を受け止めた。

「この力は、決して希望を捨てない人のためにある。それに気づけぬ貴様が、俺に勝てるはずがない！」

左腕を引っ込め、受け止めた闇の光弾を光に変換し、一発の必殺光弾に変えてメフィストに打ち返した。

〈スピルレイ・ジェネレード！〉

「ハアアア…シェア！」

メフィストに直撃し、彼のいた場所は爆発した。砂煙が晴れると、片膝をつくメフィストの姿があった。

「希望……笑わせるな！」

何事もなかったように立ち上がるメフィスト。やはり強さは半端ではないという証拠だ。

「私は無敵だ！断じて負けはしない！ハッ！」

「シュア！」

二体の光と闇の巨人は空へ飛び立ち、互いに拳を交えていく。

「ハッ！フッ！デ！」

「デュ！ハッ！シュワ！」

拳だけでなく、剣と爪がぶつかり合うことで金属音も空に轟く。

〈シュトロームソード！〉〈メフィストクロー！〉

「「ダッ！ハッ！」」

その最中、ネクサスは隙を突いてメフィストに掴みかかるが、逆にその手を振り払われ、メフィストに腹を思い切り蹴られ、地上目掛けて落ちてしまう。

〈ダークレイクラスター〉

「ハッ！」

メフィストが新たに放った光弾は分裂し、地上に向けて雨のように降り注がれる。その射程圏には、テファやウェールズも混じっていた。

ネクサスはそれにいち早く気付き、地上へとすぐに向かい、彼女らの前に降り立ち、光のバリアでメフィストの光弾をすべて防いだ。

〈サークルシールド！〉

止み終わったところでネクサスは彼女の方へ目をやると、ネクサスはゆっくりと頷いた。その意味を理解したのか、テファも笑顔で頷き返す。

一方、ゼロはクトゥーラと抗戦していた。

〈クナイ光弾！〉

「ジュ！ハッ！デュ！」

何十何百もの細かい光の刃がクトゥーラの体に突き刺さっていく。その連射速度は目では確認できないほど速かった。クトゥーラ反撃すら許されなかった。

ゼロはゼロスラッガーを重ね合わせると、ゼロスラッガーは巨大な風魔手裏剣となり、止めにゼロはそれをクトゥーラに向けて投げつけた。

〈ゼロ式風魔手裏剣！〉

「ジュワ！」

クトゥーラは横に真二つに切り裂かれ、ゼロの風魔手裏剣が彼の手に戻ると同時に爆発四散した。

「私たちも負けてられないわね」

キュルケの言葉に、タバサは黙って頷き、ルイズも渋々ながらも彼女に同調して杖を構えた。

「フレイムストーム！」

「ウィンディアイシクル」「でっかいのいきなさい！エクスプロージョン！」

先程より威力の重い炎の衝撃、氷の槍、そして大爆発がメフィストを襲う。

メフィストの顔に深く辺り、メフィストは怯む。

「やった！」

「いえ、まだ」

確かに効きはしたが、まだ倒れはしない。

メフィストは標的をシルフィードに乗るその三人に向けると、彼女らに向かって突出するが、

「ジュ！」

「シェア！」

ゼロとネクサス、二人のウルトラマンに阻まれ、叶わなかった。

〈ダークレイ・シュトローム！〉

「ハアッ！」

メフィストは最後の一撃にする姿勢になり、逆Ｌ字型に組んだ両腕から暗黒光線を放った。

〈ワイドゼロショット！〉

「デュア！」

〈オーバークロスレイ・シュトローム！〉

「デア！」

同時に二人のウルトラマンも必殺光線を発射してメフィストの光線に対抗する。

メフィストの光線は確かに強力だ。

かつての二代目デュナミスト、姫矢の変身したネクサスの放つ必殺光線と同レベルの威力を持つ兵器「ウルティメイトバニッシャー」を光弾一発で消し去るほどだ。

しかし、メフィストにはないものがあった。

仲間との、結束の力だった。

「「ハアアアアア！」」

二体のウルトラマンの光線に次第に押し返され、メフィストは二人の必殺光線をモロに喰らった。

「グワアアアアアア！！！！」

メフィストはその光線の光の中に包み込まれた。

「……」

シュウヘイは変身が解け、意識を失った状態で倒れていたコルベールに近づいた。
彼の近くに、メフィストへの変身に使われたダークエボルバーが落ちている。

ブラストショットを構えると、ダークエボルバーに向けて波動弾を発射、ダークエボルバーは砕け散った。

「シュウ！」

テファが彼の元に駆け寄ってきた。続いてウェールズとマチルダもやって来る。ちょうど彼の前にコルベールが倒れてるのが目に入る。

「この人は…」

「メフィストにされた男だ。意識はないが生きている。ダークエボルバーを砕いたから、もうメフィストになることはないだろう」

「そっか…でも、けがはないの！？」

心配そうに彼の体中を見回る。
だが、シュウヘイは首を横に振った。

「お前のお陰だ」

そうだ。彼女が母の形見の指輪を使わなかったら、きっと負けてい

た。

その時、彼女は驚いていた。
彼が初めて、彼女の前で笑っていたのだ。作り笑いすら浮かべなかった彼の、本当の笑顔だった。

「平賀」

シュウヘイはいつの間にか自分の後ろにいたサイトを呼んだ。ルイズたちもその後ろにいる。

「そいつを学院に連れ戻しておくといい」

「運ぶには運ぶけど、大丈夫なのか？」

「そいつはもうメフィストじゃない。もしかしたらそうであった記憶すらもないかもしれない」

「ちょうど待ちなさいよ！本当に連れて帰るの！？」

ルイズが抗議の声を上げた。この人は確かにコルベールだが、同時にあの危険な黒い巨人だ。恐ろしくて近づくこともままならない。しかし、そんな彼女を無視してサイトはコルベールを背中に背負う。

「あのさ…」

サイトはシュウヘイを見て言った。

「ファウストとかメフィストってお前の世界にいた黒いウルトラマンだよな？」

「そうだが、どうかしたのか？」

「最初にそいつらになった人の話、聞かせてくれないか？」

「……いいだろう」

彼らはホークに乗り、終演の地を去った。
終演の地への扉は、彼らが元の世界に戻ったところで消滅した。
メフィストとの戦いはこうして幕を閉じたのである。

「メフィストも倒したか…さすが、俺の見込んだデュナミストだ」

トリスタニアの街に戻ったホークを、石堀は不敵な笑みを浮かべながら見つめていた。

「だがお前の敵は、『お前の中にも』いる。果たしてそれに気づけるか…」

石堀はそう言って街の中へ消え去った。

11　ネバーエンドラヴァーズ（前編）

光の国…

「ジャック、ゼロの様子はどうだった？」

宇宙警備隊本部にて、ウルトラセブンはウルトラマンジャックに尋ねる。

「闇に堕ちそうでしたが、辛うじて立ち直りました。一安心といったところです」

「そうか…あいつを強くするためとはいえ、辛すぎる試練を与えたこと、今でも正しいのか不適切だったのか未だにわからないものだが…」

セブンは何かを悔いるように顔を俯かせた。

「セブン兄さん…彼女のことなら…」

「セブン！」

セブンをなだめようとするジャックの言葉を遮るように、ウルトラマンたちの母なる存在にして銀十字軍のリーダー、ウルトラの母（ウルトラウーマンマリー）が大慌てで二人の元へ走ってきた。

「あの娘を……『テラ』を見ませんでしたか！？」

「テラ、ですか？確か私が担当するまで、あなたに教育を任せてい

たはずですが…」

「私が別任務で隊員の治療を行ってる間に、脱走したみたいなのです！」

「え！？」

セブンとジャックがもし人の姿だったら、今のウルトラの母の言葉に目を見開いていたかもしれない。それほど驚いていたのだ。

それにしても、『テラ』とは一体誰のことだろう…

一方、ハルケギニアのとある地域……

「グォオオオ！！」

その街に二体の怪獣が現れ、街で破壊活動を行っていた。

「うわあああああ！！」

その街の人々は怪獣たちの魔の手から逃れようと必死だったが、やはり逃げ遅れてしまう人が必ず現れる。

「あああああ！！！！」

逃げ遅れた一人の男性は、真上から降りてきたその怪獣の足の下敷きとなり、それ以降彼の姿を見た者はいなかった。

あの後、コルベールは学院で保護されることとなった。表向きは旅の道中での遭難ということになっている。
そしてサイトとルイズは、トリスタニア城でアンリエッタに事態を報告した。

「メフィストはウルトラマンたちに倒されたのですね」

「はい、ウルトラマンがいなかったら間違いなく…」

ルイズはウルトラマンがいなくては何もできない自分を呪った。たとえ虚無を手にしても倒すまでに至らないことが、悔しかった。

「ルイズ、そう悔やむことはありません。ウルトラマンに比べれば我々は非力なのです。でもきっとできることがあるはず。それをまず、見つけたらどうでしょうか？」
その時のアンリエッタはチラとサイトを見て微笑んだ。オスマンが以前、口を滑らせてたことでウルトラマンゼロの正体を知っていた。その感謝の意のある眼差しだった。
逆にサイトは、その眼差しにビクッ！と肩をひきつらせた。まさか、バレてるんじゃ…と。もし正体を貴族の連中にバラされたりしたら、自分は戦争の兵器として利用される恐れがある。頼むからもし知ってもバラさないでくれと願うしかない。まあ口の堅いアンリエッタだからよかったのだが。

「あの姫様…」

「何でしょう？ルイズ」

「あなたに会わせたい方がいます」

「え？」

会わせたい人？
一体誰のことだろうか？
すると、王座の間の扉からフードで顔を隠した青年が入ってきた。
サイトとルイズは道を開け、彼をアンリエッタの前に通した。

「あなたは…？」

フードの青年にアンリエッタは尋ねた。なぜだろう。とても懐かしい感じがしてならない。
フードの青年は、それを脱いで素顔を露にした。

「久しぶりだね、アン」

「……！！」

ウェールズだった。

「ウェールズ…様…？」

「ああ。先ほどサイト君とミス・ヴァリエールから僕の偽者が君を陥れようとしたそうだが、僕は本物だよ」

偽者、金属生命体アルギュロス。レコンキスタの刺客としてウェールズに化け、アンリエッタを騙してレコンキスタに連れ去ろうとした。しかし、サイトがゼロに変身し撃退したことで難を逃れた。その偽者とはまるで違う。自分の心を本当に理解しようとしている眼差し。そして今のアンリエッタも、姿だけでウェールズだと判断するほど盲目ではない。
手をとるとわかる。紛れもない、本心証明、本物のウェールズだ。

「ウェールズ様！」

アンリエッタはウェールズの胸の中に飛び込んだ。
以前の偽者とは違い、鉄のような冷たさではなく、人としての温もりが確かにあった。サイトはルイズの背中を押すと、部屋の外へ出るよう促した。

「気が利くのね」

「それくらいわかりきってるっての」

数分後、サイトとルイズは廊下で待機していたが、アンリエッタから再び入るよう促された。

「まさか、ウェールズ様をお救い下された方がおられるとは……感激のあまり言葉が見つかりません」

「俺たちは、何もしてません。実際に皇太子を助けたのはあいつですから」

「あいつ？」

サイトはビデオシーバーの蓋を開くと、しばらくのサンドノイズからある映像が映された。

『どうした？』

映像にはシュウヘイの顔が映っていた。

「なっ、なにこれ！？マジックアイテム！？」

ルイズは驚きの声をあげる。無論アンリエッタも、いきなり絵が出てきたと思ったらその絵と思っていた男がいきなり喋りだしたのだ。

「ああ、これは簡単に言えば、遠く離れた場所にいる人と話ができるアイテムなんだ。しかし、シュウヘイ以外で似たようなものを持ってる人がいるとはね」

ウェールズはアンリエッタに説明しながらビデオシーバーの映像を見つめた。

「アン、彼が僕の命の恩人なんだ」

「この方が、ですか？」

どう見ても、普通の平民のようだが。でもどこかウェールズとは違う、引き締まり具合がある顔立ちだ。思わず見とれそうになったことに気づいたアンリエッタは少し咳払いをしてからビデオシーバーに映るシュウヘイに話しかけた。

「あなたが、ウェールズ様のお命を救ってくださった方ですか？」

『そうだが、お前がウェールズの言ってたアンリエッタか？』

その口の聞き方にルイズは眉をつり上げた。

「あんたね、私の時といい、貴族に対して口の聞き方ってのができてないの！？無礼にもほどがあるわ！
いいこと！このお方は恐れ多くも…」

「いえ、いいのですルイズ。落ち着いて…」

アンリエッタ自身、まさか平民からため口で話しかけられたのは初めてだったせいか驚いていた。
でもここは落ち着いてルイズの怒りを静めさせる。

「はは…彼らしいな。彼はクロサキ・シュウヘイ」

ウェールズに至っては少し苦笑いしている。

「クロサキ・シュウヘイさんですね。ご存知の通り私はトリステイン女王アンリエッタと申します。
この度、ウェールズ様を助けていただき、感謝の言葉も見つからないほどですわ」

『別にいい。俺は助けたいと思ったからそうしただけだ。礼には及ばない』

なんなのよこいつ。わざわざ姫様からお礼の言葉をいただいてんの

に、貴族ではほとんどないことを名誉なんて思わないの？
ルイズはいっそ殴りたくなったが、サイトはその仏頂面に気づいて彼女の肩を押さえた。
下手したらビデオシーバーが壊されそうな、嫌な予感がした。

「まっ、まあまあルイズ落ち着けって…」

『それとウェールズのことだが、お前でもすでにわかってると思うが公にはできないことのはずだ』

シュウヘイに言われ、アンリエッタは頷く。今やウェールズは亡命者。いきなり皇子だ！なんて言っても偽者、または不届き者扱いは免れない。本物だと思われてもそれなりのパニックは起こるのは間違いない。

『しばらく引き続き、俺の元で預かっておくことで異論はないか？』

「ええ、そうしていただきたいと思っていたところです。本当にありがとう…」

思わず涙までホロリと流してしまう。確かに口は悪いが、なんていい人なのだろうかとアンリエッタは感激した。

『その顔にされるとなんか悪いことしたみたいで罪悪感があるのだが…』

「あっ、ごめんなさい…つい涙なんて…」

アンリエッタは目尻に溜まった涙を拭き取った。

『じゃあウェールズ、後で平賀の付き添いで戻ってこい』

そこでビデオシーバーの映像はプツンと切れた。

「皇太子様にもあんな口の聞き方…」

「いいんだよミス・ヴァリエール」

ウェールズまで容認するとは、あいつはどれだけ馴れ馴れしい奴だとルイズは思った。シュウヘイの他人を寄せ付けない性格からすれば『馴れ馴れしい』という表現はおかしいと考えられるが。

その時、突然起こった地震でその場一帯が大きく揺れた。

「うわっ！」

「なっ、何これ!?」

動揺するサイトたち。すると、街の方から悲鳴が聞こえてきた。

「たっ助けてくれぇ!!!!」

その声を聞いてサイトは窓から外の様子を見る。

二体のよく似た怪獣が暴れまわっている。

「ガロンと、リットルか！」

兄怪獣ガロン。そして弟怪獣リットル。

「陛下、怪獣が現れました！ご命令を！」

王座の間に一人の兵士が現れ、跪いてアンリエッタからの命令を待った。

「魔法衛士隊に怪獣への迎撃、銃士隊全員に民の避難をするよう知らせなさい！急いで！」

「はっ！」

その兵士はその場から大急ぎで走り去った。

「……」

サイトもその後に続き、ルイズもそれに気づくと彼を追った。

「ちょっとサイト、待ちなさいよ！」

ガロンとリットル。二体の双子怪獣はやりたい放題で街を荒らしまくった。

現在トリステインは魔法だけでなく、大砲などの兵器も新たに取り入れ、怪獣に対抗する。

「撃てっ！」

何発もの大砲の玉が放たれ、ガロンやリットルにぶつかった瞬間爆発する。

同じみの魔法も兵士たちの持つ杖から放出された。

「ライトニングクラウド！」

「ファイヤーボール！」

しかし、いくらダメージが与えることができても、倒すまでに至らない。

ガロンとリットルは余計に怒り、さらに暴れだす。

「怪獣、どれだけ人を困らせたら気が済むの…！」

外に出たルイズは杖を構え、ガロンたちに向けた。

「エクスプロージョン！」

大爆発が、大砲ほどの威力を発揮し双子の怪獣たちを痛め付けた。

「ゲアアア！？」

リットルは兄よりも好戦的である分怒りっぽいのか、すぐにルイズを見つけ、怒りを露にしながら街の建物を踏み潰しながらルイズに近づいてきた。

一方、別の場所でサイトは人々の救助を行っていた。

「早く逃げろ！」

そこにシュウヘイからの通信が入る。

『平賀、俺も行くぞ』

「ダメだ！お前、まだ体が回復しきれてなかったはずだ。それに、彼女をあまり心配させすぎだ。少しは側にいてやれよ」

『だが…』

「大丈夫だ。お前の分もやってくから」

そう言ってサイトはビデオシーバーの蓋を閉めた。

ちょうどルイズがリットルに狙われたところを見つけた彼は、ブレスレットからウルトラゼロアイを装着、青き光に身を包んだ。

「デュワ！」

その顔は銀色のマスクに覆われ、青と赤の模様のある巨人へと姿を変える。

ウルトラマンゼロの参上だ。

「ジュ！」

ゼロはルイズの前に立ち、正面からリットルを押さえつけた。

「ウルトラマンゼロ！」

街の人々に希望の光が蘇った。

「デュアアア！」

リットルの首元を押さえつけながらゼロはリットルを押しだし、突き飛ばした。

その直後、ガロンが横からゼロに突撃してきた。

「グア！」

ガロンとリットルは一体一体のみで戦うとあまり大した実力を見せられない。だがその分タッグで組むとかなり厄介な相手となるのだ。

「ガアアア！」

「グォ…！」

ガロンがゼロと抗戦している間にリットルが背後からゼロを殴る。そして怯んだところを、リットルはガロンの方へゼロを突き飛ばし、ガロンも弟へゼロを蹴りで返す。

いたぶられたままではさすがに耐えられない。ゼロはブレスレットを光らせると、赤一色に色を染め、攻撃と防御に優れた『キーパーアーマー』を装備した。

それと同時にやって来た双子怪獣の挟み撃ち攻撃を、なんとゼロは手をかざし、念力の力で止めてしまったのだ。

「ヌゥウウウ…デア！」

喝を入れるような気合いでゼロは二体の怪獣を吹き飛ばした。

「「キシャアアア！？」」

まず最初の標的はリットル。ゼロスラッガーを握りガンダールヴの力が発揮される。
立ち上がるリットルは口から光弾の嵐を放出するも、ゼロの刀捌きによって次々と弾かれてしまう。

まさかこのような形で攻撃を防がれてしまうとは…
リットルが動揺のあまり固まってる隙に、ゼロはブレスレットからゼロスラッガー以上に敵を斬るのに優れた武具を手に取り、それをリットルに投げつけた。

〈ウルトラゼロスパーク！〉

「ジュワ！」

ザシュッ！リットルの首は撥ね飛ばされ、そのまま絶命した。
残るは兄のガロン。
しかし、そこであることに気がつくゼロ。

「いない？」

ガロンの姿がないのだ。弟を見捨てて逃げたのか？
目をキラリと光らせ、彼は何もかもを見透す『透視能力』を発動した。

すると、離れた場所の地面に大きな穴が空いてるのを発見した。その中に、ガロンがこちらの様子をうかがっている。

「逃がすかよ！」

〈エメリウムスラッシュ！〉

百発百中の必殺光線でその穴を的確に狙い撃つと、その穴は爆発し、ガロンが痛みに耐えきれず飛び出してきた。

「ガアアア！？」

今こそ止めの時。

ゼロは赤く染まったエネルギーボールを作り出し、ガロンにぶつけた。

〈キーパーゼロショット！〉

「ダアアアッ！」

必殺の光弾はガロンに直撃、ガロンは爆発四散した。

「わあああ！」

「助かった…」

「ありがとう、ウルトラマン！」

ウルトラマンゼロが怪獣を退治したことで悪夢から目を覚ました街の人々から歓声が上がった。

しかし、ゼロは何かおかしな違和感を覚えていた。

（妙だ…）

なぜが、誰かから自分を覗き見られているような、そんな視線を感

じていた。しかし、透視能力でもそんな視線の先を関知できない。

（気のせい…なのか？）

「ウルトラマンゼロのデータはとれたか？」

「ああ、とることは意外にも容易かった。ガロンとリットルは役に立ったぞ」

その頃、ハルケギニアで作られたとは思えない部屋の一室で、とある異星人の二人が何かを語り合っていた。

「ようし、取得したデータを早速詳しく調べてみることにするぞ」

その部屋のモニターに、ある映像が映し出された。

その映像にはなんと、ウルトラマンゼロの戦う姿が真っ先に表示された。

そのエイリアンたちの顔は、人からはかけ離れていた。どちらかと言えば、鳥のような顔だった。

12　ネバーエンドラヴァーズ（中編）

エイリアンたちの視聴する映像に、ゼロが現れた姿が映っていた。

『デュワ！』

「ウルトラマンゼロは、身長５０メートルの巨人にも、細菌レベルのサイズにも小さくなれる」

次に映ったのは、彼の左手のガンダールヴのルーンが輝くところだ。ゼロスラッガーを手に、リットルの乱射攻撃を弾いている。

『デア！』

「ゼロは、左手に刻まれし伝説の『ガンダールヴ』のルーンにより、初めて使用する武器を自在に操ることができる。更には自らの移動速度も高めることが可能だ」

次は、穴に隠れたガロンを探すところ。

『……』

「透視能力。ウルトラ一族の戦士なら誰もが会得する技。しかし、隠れた位置にいる敵をも簡単に見通してしまう」

そしてガロンを発見したところで緑色の閃光が、穴に隠れたガロンを襲う。

〈エメリウムスラッシュ！〉

『ジュア！』

「これがゼロのウルトラビームだ。父親同様、その熱線はあらゆる金属をも貫き通すだろう」

そして最後は、キーパーアーマーでの必殺技を放ってガロンに止めを刺す場面。

〈キーパーゼロショット！〉

『デュワ！』

『ギアアアア！』

凄まじい爆発音が、映像でもその戦いの激しさを物語っている。

「ウルトラゼロブレスレット。これはウルトラマンジャック同様優れた武具を収納できるアイテム。かつてのジャックは何度かこのアイテムで敗北の窮地から立ち上がったことがある。さらにゼロの場合、『ブレスレットギア』なる鎧を身に付け、パワーアップすることができる。

現在確認されているのは両方とも地上戦向き、パワーを重視した『キーパーアーマー』もう一つは攻撃速度と素早さに優れた『シャドウアーマー』。これを使われたら厄介なこととなる」

最後に、ゼロのカラータイマーと額のビームランプが点滅する場面。

「カラータイマー、他のウルトラマンと同様ゼロの活動限界を知らせるものだ。そして、新たに判明したことがある。額のビームラン

プは、ブレスレットギアを装着できる限界時間を知らせるものだ。
いくらゼロも、あれほど優れた鎧を身に付ける度にエネルギーを使用するらしい」

ゼロと双子怪獣の戦闘映像はそこで切れた。

「ウルトラマンゼロの正体は、実は…」

映像が切れた後、新たに画像がモニターに表示された。その画像は、サイトの顔写真だ。

「この青年、平賀サイト。人間体でもガンダールヴの力を行使できる。が……」

「だったらそのサイトを変身する前に始末すれば簡単ではないか。それにこの星にはもう一人ウルトラマンがいるはず、それも未だ未知の存在だ」

「いや、ウルトラマンゼロを始末しなくては、この星の人間に絶望を与え、我らに屈服させることはできない。それに今、もう一人のウルトラマン『ネクサス』はダメージの蓄積もあって今は回復して動くことはできまい。
なあに、我々には奴を倒すだけの力がある。
他の連中に先を越されぬ内にこの星を我らのものとせねば…」

他の連中…この星を狙うのは何も闇の巨人たちだけではない。
ハルケギニアは、地球のように美しい星であるがゆえ、数多のエイリアンたちに狙われていたのだ。

「うぅ…」

サイトはメフィストの呪縛から解放され、昏睡状態となったコルベールの見舞いに来ていた。今もコルベールは意識をなくしたまま、ベッドで魘されている。

「うぅ…止めろ…来るなぁ…！」

「……」

果たしてコルベールは元の彼に戻れるのだろうか？もし目を覚ましたとしても、またサイトたちと敵対しないとも限らない上、うやむやも募るばかり。

「コルベール先生、またこの学院のみんなに授業を請け負って上げてください。それまで待ってます」

とても恋人の仇に対する言葉ではないが、コルベールもまた犠牲者。放っておくわけにはいかない。

あまり時間をここで食うのもどうかと思うので、サイトは一旦コルベールの部屋を後にした。

「相変わらず目が覚めねえみてえだな」

「ああ…」

背中に背負われたデルフの言葉にサイトは力のない返事をする。

「ったく、洗濯いつまでやらせるんだか…」

しばらくして、サイトは物干し竿の蛇口辺りで洗濯した。

ルイズは、サイトは気づいてないが彼を意識しはじめた頃は「洗濯はメイドに頼むから…」なんて言ってた癖に、以前にハルナが来てからまたサイトに洗濯をさせていた。

そこから推測すると、

○サイトがハルナとくっつきまくっていたことによる乙女の嫉妬心

○違う女の下着を洗わせることでハルナから愛想を尽かせる

こう言った理由でまたサイトに洗濯をさせていたようだが、一度もハルナがそんな光景を見なかったものだから何の効果もなかった。

「女の下着…美味しくもあるけど、ガチで抵抗あるんだけど…」

まだ、今は亡きハルナへの思いが強く残るサイトにはちょっとつらい。

つまらないことをボヤきながらも蛇口の下に溜まる水面に手を入れた時だった。

「！」

サイトは水面を覗き込んだ瞬間、何か目を疑った。一度目を擦るが、自分の顔以外何も映ってない。
見間違いだろうか？
いや、確かに気配があったはず。

そう、その気配は確かなものだった。なぜなら、今度は近くの窓に、自分の背後にいる異星人の姿が目に入ったのだから。

「お前は……ガッツ星人！」

そのエイリアンは、かつてゼロの父ウルトラセブンを、そして先輩であるウルトラマンメビウス苦しめた『分身宇宙人ガッツ星人』だった。

「そう、私はいかなる戦いに負けたことのない、無敵のガッツ星人なのだ。
とは言っても、君たちウルトラマンに負けるまでは、の話だがね」

野太く低い声でガッツ星人は言う。

「なぜ、この学院に来た？」

この学院を乗っとるつもりなのだろうか？いや、そうは思えない。
確かにこの学院の人間の多くは魔法を使う特殊な体質を備えているが、ガッツ星人の力と比べたら全然大したものではない。一体なぜこんな場所に？

「我々の狙いはウルトラマンゼロ。君だ」

それを聞いてサイトは息を詰まらせた。こいつは、自分が誰なのかすでに見破っている。

「……俺に、用なのか？」

「君には我々からの挑戦を受けてもらう」

「挑戦……？」

「そうだ」

つまり、ガッツ星人と戦えと言うことだ。だがサイトは争いを好まぬ性格。言葉が通じる相手ならなおさら嫌だ。もしこのガッツ星人にも、彼を大事に思う誰かがいるとしたら、もし倒した時、自分に復讐してくるのでは？と懸念した。

「悪いけど、その話はパスするよ」

「何？」

「俺は君たちと戦うつもりはない。無駄な争いはしたくないんだ。それでもこの星にいたいのなら、大人しく住む場所を探してくれ」

そう言ってサイトは物干し竿に洗濯物を干すと、篭を持ってルイズの部屋へ行こうとしたが、

「！」

向かった先にまたもう一人のガッツ星人が現れたことで阻まれてし

まう。

「君に拒否権など存在しないのだよウルトラマンゼロ」

するとそのガッツ星人の後ろに、相変わらず怒りっぽい態度でルイズがやって来た。

「サイト、いつまで洗濯に時間…！」

続けようとしたが、ガッツ星人の姿を見て言葉を切らした。

「なっ、何よこの亜人！？」

「ルイズ、学院長に知らせるんだ！こいつらはお前の敵う相手じゃない！」

しかし、ルイズは逃げようとしない。目の前のガッツ星人に杖を向けた。

「誰が逃げるもんですか！私は貴族よ！使い魔を守れなくて貴族を名乗れないわ！」

「ほほう…君のマスターとやらはなかなか勇敢だな。だが…」

ルイズの前にいたガッツ星人はパッ！と消え去り、そしてルイズの背後に現れた。

「同時に無謀だ」

「な……」

こいつら、何者なんだ？いきなり姿を消しては現れる亜人など見たことも聞いたこともない。そもそも、ハルケギニアにいたのか？

「ルイズ、学院長に早く知らせろ。こいつらは俺が足止めする。学院長に、学院のみんなを避難させるように言うんだ」

「だから誰が…」

「いいから早くしろよ！」

いつになくキレたルイズ以上の気迫でルイズに怒鳴り付けるサイト。思わずその怒声にルイズは身を強ばらせたが、言われた通り学院長室に向かって走り出した。

「先ほど君に拒否権など存在しないと言ったな。それを今証明しよう。少々野蛮なやり方だがね」

花火を起こしたような音と共に目映い光がサイトの目を無理やり閉ざさせた。

「っ！」

目を開けると、巨大化したガッツ星人がサイトを見下ろしていた。もちろんこんな朝っぱらから巨大生物が現れたら、学院中はパニック状態だ。

「かか、怪獣だ！また現れたぞ！」

使用人をはじめとした、学院勤務の平民たちは大騒ぎを起こし、とにかくガッツ星人から離れた場所へ避難した。

ガッツ星人はわざとその平民たちに向けて怪光線を放つ。わざと外したのか、彼らの近くの地面がひっくり返った程度で済んだ。だがいつ彼らにあの魔の光線が来るかわかったものじゃない。罠かもしれない。が……

「ジュワ！」

犠牲の出る前に、サイトはウルトラゼロアイでウルトラマンゼロに変身した。

「変身したな。待っていたぞ」

戦うことになった以上やるしかない。気は進まないが、ゼロはガッツ星人に向けて二本の宇宙ブーメランを投げつけた。

〈ゼロスラッガー！〉

「デュア！」

しかし、斬ったと思いきやガッツ星人はゼロスラッガーに当たったと同時に二人、そして四人にまで分身したのだ。

「くっ…」

やはり地球で学んだ知識、そして光の国で知った知識と同じだ。攻撃が当たったかと思えば分裂。一体どうなってるのだろうか。

ガッツ星人は再び一体に戻る。

「相棒…あいつ、まるで手応えされなかったぞ。斬った感覚が全然ねえ…」

声を震わせながらゼロスラッガー（デルフ）が言う。

「なら、デュワ！」

〈エメリウムスラッシュ！〉

光線技でならと、ゼロはビームランプから閃光を放つ。しかし、光線を受けたガッツ星人はバリバリと音をたてながら、消滅した。

「くそ！」

透明になって姿を隠したのか？ガッツ星人のいた場所へ向かい、蹴りや拳を振るが、すべて空振りに終わる。

すると、ゼロがさっきまでいた場所に一体のガッツ星人がまた現れた。

〈ワイドゼロショット！〉

今度は威力を高めた光線を放つが、これもエメリウムスラッシュの時と同じだった。バリバリと音をたてながらガッツ星人は消えてしまう。

倒したとは思えない。なぜなら、ゼロスラッガーで攻撃したときのように手応えが全くなかったのだ。

これはどこからか作っている立体映像なのか？ゼロはそう思って目を光らせる。

〈透視能力〉

しかし、透視しても他にガッツ星人は見当たらない目の前の個体のみ、それも実体を保っていたものだけだ。

攻撃を受ける前に幻影を残し、どこかへ回避していたのか？今度はそんなおぼろ気な憶測をたて、ゼロはブレスレットを鎧とし、シャドウアーマーとして装備した。

〈クナイ光弾！〉

「ダダダダダ！」

これなら幻影を残し、避ける間すらも与えない。倒すに至らなくてもダメージはあるはず…

が、その予想も見事に外れる。先ほどまでの光線技を受けた時のようにガッツ星人はまた姿を消した。

（もうまもなくゼロのエネルギーは尽きるぞ）

二体に分身した状態で再び姿を現したガッツ星人。

ゼロはシャドウアーマーを、今度はキーパーアーマーに変え、宙を飛び上がり、必殺キックでガッツ星人たちに攻撃を仕掛けた。

〈ウルトラゼロキック！〉

「ダアアア！」

しかし、キックはすっぽりとすり抜けてしまった。まるで空気を蹴るように…

「手応えが……無さすぎる…」

今の攻撃は確かにヒットするはずだった。なのに、光線を喰らわせた時とは違い、まるで幽霊の体を抜けるようにすり抜けた。

「くそ！」

ヤケになったゼロは一体のガッツ星人にエネルギーボールを投げつける。

〈キーパーゼロショット！〉

ガッツ星人に当たりはしたが、バリバリと稲妻が走るような音がまた鳴ると、今の技に使われたエネルギー波がゼロに跳ね返ってきた。

「グァアア！ウゥ…」

キーパーゼロショットはワイドゼロショットよりも威力を込めた技。その報復ダメージは半端なものではなく、ゼロの体に大きなダメージを与えることとなった。

片膝を着いたところでガッツ星人は再びゼロの背後に現れ、もう一体の相方に向けて蹴りつける。その別個体のガッツ星人も同じようにゼロを蹴り転がした。

「っ……」

立ち上がって身構えるも、どうすればいいのかわからない。攻撃がどれも通じず、打つ手が見当たらないのだ。
ガッツ星人たちはゼロに向けて怪光線を放った。

「デュ……！」

怪光線はゼロを包み、じわじわと痛め付けていく。
光線が止み終わった頃、ゼロのカラータイマーとビームランプが共に点滅を開始した。

ピコン、ピコン、ピコン、ピコン…

その音を聞き、ガッツ星人は勝利を確信する。さらに怪光線を放射し、ゼロは透明の十字架の中に閉じ込められてしまった。
十字架は多くの人々への見せしめなのか、宙へと浮かび上がる。
その時には、ゼロは鎧を解除され元の姿となり、目の輝きと意識を失っていた。

「これは砕いておかねばな…」

ガッツ星人は十字架内のゼロの左腕からウルトラゼロブレスレットを奪うと、それを握り潰し、砕いてしまった。

「なんてことじゃ…」

教師たちを使い、生徒らに避難勧告を呼び掛けたオスマンは外を見

た途端膝を着いた。
オスマンだけでなく、他の学院の生徒たちからも絶望感が漂っていた。
さっきの戦いは誰もが見ていた。
誰もがこう自覚した。

ウルトラマンゼロの完全なる敗北。

「ハルケギニアの諸君、君たちの英雄ウルトラマンゼロは我々が倒した。
残るウルトラマンも彼のように我々の手で命の炎を消されるだろう。
この星はもはや、我々ガッツ星人のものとなった。君たちも我らの指導の下、永遠に我々の手足となって働くこととなるのだ」

ガッツ星人の声が、空に響き渡っていい消えた。

その頃、ある一体の女性の姿をしたウルトラマンが宇宙空間を駆け抜けていた。

「今度は私が、あなたを助ける」

その黒混じりな赤い光の向かう先は、青く澄んだ星だった。

13　ネバーエンドラヴァーズ（後編）

ウルトラマンゼロの敗北。それはすぐ王宮にも伝わり、魔法衛士隊や銃士隊などの兵士が派遣された。

「ウルトラマンが負けるとは…」

十字架の中に閉じ込められたゼロを、アニエスはじっと見上げていた。

ウルトラマンはピンチに陥りながらも強敵たちを相手に何度も勝ち抜いてきた。そんな彼らを敗るなど、一体どんな敵なのだろうか。

「隊長…」

銃士隊副隊長のミシェルがアニエスに話しかけてきた。

「ミシェルか、どうした？」

「やはり、あのウルトラマンを倒した怪獣と戦うのですか？」

「今さらどうした。まさか、怖じけついたのか？」

「いえ、私は大丈夫ですが…」

そう、ウルトラマンが敗北した以上自分たちの手でなんとかしなくてはならないのだ。だが、敵はウルトラマンを敗るほどの相手。

「なな、なぜウルトラマンを倒すほどの連中と戦わねば…」

「いやだああ！」

誰だって戦いたくない。返り討ちにされ、命を落とすことしか想像できない。

学院の生徒たちも男子が主に戦いに駆り出されるだろう。彼らの中には逃げ出そうとした者が学院を出ようとしたが、衛士隊によって阻まれてしまう。

「貴族は弱虫ばかりだな。いつも平民に威張りだす癖に……」

キツく呟くアニエスだが、彼女も心の奥底ではこれが現実だと悟らざるを得なかった。

「ガッツ星人…」

学院の教師一同は頭を悩ませていた。

残された手は二つ。降伏し、ガッツ星人に屈するか。または玉砕覚悟でガッツ星人に挑むか。意見が二つに別れていた。

「我々貴族があのような鳥もどきに屈するべきではありません！」

「バカを申されるな！ウルトラマンですら勝てなかった奴らにどう立ち向かうおつもりです！？」

これでは収集がつかない。オスマンはウルトラマンゼロを助けたかった。なにせ、無関係なはずのこの国を何度も救った英雄。見捨てられようか、いや見捨てられない。
だが、あのガッツ星人に対抗する術が何一つなかった。
結局このままガッツ星人に屈服するしかないのか…

そんな中、ガッツ星人からの攻撃もないまま一日が過ぎていった。

「サイト！サイト！」
ルイズはガッツ星人から自分を逃がしたサイトを探していた。
あれから時間はだいぶ経っている。もうハルナのことは吹っ切れたかもしれないのに、学院からまた飛び出したのだろうか？

「どこ行ったのよ…」

よくよく考えたら、怪獣が現れる度にいつも姿を消している。帰ってきたと思ったらいつも土埃や血で汚れていた。おそらく、ウルトラマンと怪獣の戦いを省みず、その付近にいる人を助けていたかもしれない。
だが今回は不運にも……

「……」

サイトは何かと自分をいつも気遣ってくれた。階段から転げ落ちそうになった時とかはすぐ正面から受け止めてくれた。フーケのゴーレムと戦った時も使い魔なくせして説教たれたりもした。使い魔のためとはどうもいかがなものかと思いがちだが、ルイズは天でハルケギニアの人々を見守っているであろう始祖ブリミルに祈りを捧げた。

（すぐ女に色目つかったりするエロ犬だけどサイトは大事な使い魔です。どうか、サイトを返して…）

その時だった。

「おい、なんだよあれ！」

男子生徒の一人が声をあげた。その指を指した方に何かあるのか？

ルイズもその指の指された方を見上げた。

何やら赤い、巨大な発光体がまるで隕石のようにこちらへ近づいてくる。

「流れ星…？」

「さすがに流れ星じゃないと思うわ」

いつの間にかルイズのとなりにキュルケ、そしてタバサが来ていた。

「だって流れ星がこっちに落ちてくるはずないじゃない」

「それはそうだけど…」

だんだんその赤い光が地上に近づくにつれ、より一層学院中が騒ぎだす。

「おっおい！近づいてきてるぞ！」

「まさか、また怪獣がやって来たのか！？」

怪獣、その単語はもはやこの世界の人間を、聞いただけで恐怖させるものだった。もし怪獣だとしたら、最悪のタイミングである。

「全部隊配置に着け！」

もしもの時に備え、衛士隊隊長ド・ゼッサールとアニエスは自分の部隊の隊員らに武器の準備と、指定された箇所への配備に着くよう呼び掛けた。

やがてその発光体は学院中の連中が見守るなか、地上に激突した瞬間爆発した。その爆発で巻き起こる砂煙の中から、巨大な影が現れる。

やはり怪獣か！？兵士たちは杖、または銃を構えた。

だが、怪獣ではなかった。

巨人、それも見たこともない

ウルトラマンだった。

「あれは…」

ルイズの漏れた声に続き、タバサは小さく言った。

「新しい…ウルトラマン…」

そのウルトラマンはどこか、サイトとシュウヘイがかつて戦った闇の戦士「ダークファウスト」とよく似ているが、どこか違っていた。顔立ちと体つきがより女性らしいものになっており、黒かったカラータイマーは青く、死人のような黒い色をしていたはずの瞳は白く活力のある輝きを放っている。二本の角もファウストより半分ほどの長さで黒い模様がだいぶ少なくなり、目元の赤いクマのようなラインもない。

最初は誰もがあの黒いウルトラマン、ファウストかと思ったが、以前とは大分変わった風貌に戸惑いを感じていた。邪悪なオーラが全く見られない。まるで、女神なのか、はたまた聖母のような輝かしさだ。

そのウルトラマンの名は、『ウルトラウーマンテラ』。

テラの目線の先には、透明の十字架の中に閉じ込められているゼロがいた。

「狙いはウルトラマンゼロか！？」

あの女のようなウルトラマンはゼロに止めを刺しに来た刺客なのか？だが、違った。

テラは自らの光を放出し、ゼロのカラータイマーへと流し込んでいく。すると、ゼロのカラータイマーの点滅速度がだんだん遅くなっていく。

「仲間…？」

タバサはそう思って声を漏らした。わざわざ遠くから仲間を助けに来てくれたのか？

だが、それを阻もうと現れた者がいた。

そう、ガッツ星人だった。

「我々も知らぬウルトラマンがいたとはな。だがあの男の復活はさせんぞ！」

すかさずガッツ星人は目から怪光線を放ってきた。テラはかろうじて避けるが、学院を囲う石垣の塀が一部砕け散った。

避け続けたら、いずれ学院が瓦礫の山となってしまう。

なんとなガードしようと踏ん張るも、怪光線は彼女にとって威力の重いものだった。

「っ……」

なんとかガッツ星人に攻撃を仕掛けるが、ガッツ星人は相も変わらず分身し、テラの攻撃をすり抜ける形で避ける。

しかもアニエスは、ここで気がついたことがある。

「あのウルトラマン…動きがゼロやネクサスより素人だ」

彼女はまだ戦闘経験が浅かった。そんなまだ未熟さを少しでも残し

てる戦士が、数多くの異星人との戦いに打ち勝ってきたガッツ星人に実力で敵うはずもない。

それはテラもわかっていた。だからせめて、ゼロにエネルギーを分け与え、戦力を上げなくては少なくとも勝ち目はない。

テラはゼロの閉じ込められている十字架に近づき、自らのエネルギーを分けようとしたが、ガッツ星人はそれを阻止しようと背後に瞬間移動してテラを殴り飛ばした。

「ッアア！」

「フッ！」

叩きつけられたところでテラはガッツ星人からまたも怪光線を受けてしまう。

「ッウ…」

ピコン、ピコン…

そろそろカラータイマーが鳴り出した。

このままだと、テラはゼロを救うどころかその前にやられてしまう。

「このままだと、あのウルトラマンが……」

ゼロの二の舞になってしまう。

「……」

何かしらの本能なのか、それとも内に秘める優しさか貴族としてのプライドなのか、ルイズは立ち止まってるわけにはいかなくなった。すぐ太ももにくくりつけていた杖を手に、戦場へと走り出す。

「ルイズ!?」

キュルケも胸元から、タバサも身の丈以上の長さの杖を手にルイズを追った。

「ウッ…」

体を起こすのも難しくなり、片膝を着いた状態でガッツ星人を睨むテラ。

「出会ったばかりだがお別れだ…死ね」

ガッツ星人の手が、だんだんテラに近づいていく。
しかし、そこでガッツ星人の体に爆発が起こった。

「ぬ!?」

一体誰が?
ゼロか?いや、ゼロは自分の作り出した十字架の中だ。それともネクサス?いやネクサスも今、怪我が原因で動くことができないはずだ。

ガッツ星人の予想は外れた。

ルイズとキュルケ、そしてタバサの得意魔法によるものだった。

「まったく、無茶するわね」

「別に、放っておけなかっただけよ」

「サイトの影響かしら？クスッ…」

「ち……違うわよ！」

キュルケの発言にルイズは顔を赤くして否定した。

「砲撃用意！」

彼女たちの行動に応えるように、アニエスやゼッサールは自分の部下たちに銃、杖や大砲の用意を呼び掛けた。

「発射！」

銃撃や魔法、大砲の攻撃がガッツ星人を襲う。

「この下等生物どもめ…始末してくれる！」

逆上したガッツ星人は怪光線を学院に目掛けて放とうとしたその時だった。

「ヌワッ！」

突然彼の背中に緑の細い光が直撃した。

振り返ったとき、彼は目を疑った。

倒したはずのウルトラマンゼロが立っているではないか！

「ウルトラマンゼロが……復活した！」

ガッツ星人が学院にいる兵士たちに気をとられてる間に、テラが『リライブ光線』でゼロにエネルギーを与え、ゼロは内側から十字架を砕くことで復活したのである。

「おのれ！だが我が能力を見切ったわけではあるまい！」

確かに、見切ったわけではないのは事実。復活したところで勝てるわけではない。

悔しそうに握り拳を作るゼロだが、テラは彼の肩に触れ、首を縦に振った。

私に任せて、と。

彼女は拳にエネルギーを詰めると、ガッツ星人に向かってその光を光弾として放った。

〈テラピンガー！〉

「フッ！」

光弾はガッツ星人に当たったが、ダメージはなかった。

「ふん、ハエほどのパワーも感じんぞ？脅かしおって…我が力に惑え」

ガッツ星人はそう言うと、自らの体を発光させる。

お得意の分身を使うつもりらしい。

が、ここでガッツ星人にとってまさかの事態が起こった。

分身できないのだ。

「なっ、なぜ!?」

「わからない?」

ここでようやくテラが口を開いた。

「今の光弾には敵の能力を封じる力があるの。
そのせいであなたの分身や瞬間移動は使えない。だかこれでいかなる攻撃もあなたに通る」

今までゼロの攻撃が効かなかったのは、攻撃が当たろうとした時にガッツ星人が瞬間移動で、あらかじめ作り出した分身と入れ替わったことによるものだった。分かりやすく例えると、忍者で言う『変わり身の術』だ。
テラは戦闘能力はまだないに等しいが、代わりに特殊な技を備え合わせていたのだ。
ちなみに今のテラの技は昔、ウルトラマンメビウスがガッツ星人の力を封じ込めた技と同じものだ。

「さて、ガッツ星人」

もう勝ちは見えた。ゼロはガッツ星人に言葉を発した。

「大人しく自分たちの星へ帰るんだ。侵略なんてバカな真似は二度とするな」

「……断る!この星は我々のものだ!」

「……」

どうしてこんなことで意地を張る？侵略したって自分も相手も幸福にはならないのに…

だがこのまま放置してもガッツ星人がなにもしないとは限らない。

「フン！」

ガッツ星人は悪あがきに怪光線を放つが、ゼロは自分の回りにバリアを作り出して防いだ。

〈ウルトラゼロバリア〉

何もブレスレットなしで攻撃が防げないわけではない。ウルトラマンがバリア系の技を使うのは本来当たり前なのだ。ブレスレットを使って防いだ方がエネルギーを使わずに済むのでゼロはずっとブレスレットによる防御を使ってきたのだ。

ゼロとテラはゼロスラッガーを宙に浮かせ、強化した蹴りでガッツ星人に撃ち込んだ。

〈ウルトラキック戦法！〉

「「ハッ！」」

「かは…」

ゼロスラッガーはガッツ星人の体を貫き、ガッツ星人は貫かれた箇所を押さえながら倒れ、爆発した。

すると、どこからかガッツ星人の宇宙船と思われる発光体が空を飛んでいたが、ゼロとテラは追わなかった。

「本当に…本当に…」

変身を解いたサイトは、なぜか涙で頬を濡らしていた。
決して目薬を使った悪ふざけではない。本物だった。

なぜなら、彼の目の前で変身を解いたテラの正体が……

「ただいま、平賀君」

ダークファウストとなり、最後はサイトたちを助けて死んだはずのハルナだったのだから。彼女もまた少し涙ぐんでいた。
自分にとって大事な人とやっと会えたのだ。嬉しくない訳がない。

「ハルナ！」

サイトはハルナを力強く抱き締めた。

「ちょ…平賀君！／／」

いきなり好意のある男に抱きつかれたものだから、ハルナの顔は真っ赤になった。

「は……恥ずかしいから…」

「ご……ごめん、つい…」

サイトは彼女を離し涙を拭き取る。

「でもどうして?君はあの時…」

そうだ。ノスフェルに背中を刺され、光となって昇天したはず。

「私もあの時死んじゃったんだって思ってた。
でも実はね、私を助けてくれた人がいた」

「助けてくれた人?」

「平賀君も知ってるでしょ?『ウルトラの母』を」

「ウルトラの母!?」

そう、あの悲劇を見ていた人物、それはウルトラの母だった。
ウルトラの母はハルナの死を目の当たりにし、自分の元に光の粒子となったハルナを自分の元に呼び寄せた。まずはファウストの状態に戻し、そこに光の国の力で発せられた命のエネルギーを吹き込まれた。
すると、その黒かった瞳とカラータイマーはウルトラマンらしい輝きとなり、さらに姿形がより女性らしいものとなった。

これが『ウルトラウーマンテラ』の誕生だった。

『あなたなら、彼の力となる。さあ、お立ちなさい。新たなウルトラマンとして』

きっとウルトラマンの力を正しく使い、ゼロの力となる。ウルトラの母はそう思い、ハルナに新たな命を与えたのであった。

すぐにハルケギニアへ戻りたかったが、ある人物にそれを止められた。

ゼロの師であるウルトラマンレオだ。

『たった今、ゼロは警備隊から追放処分を下された。今行けばお前も同罪にされてしまうぞ』

まさにバッドタイミング。ちょうど戻ってきたゼロが力の渇望のあまりプラズマスパークコアを奪おうとしたため、光の国を追い出されてしまったのだ。

『それに、不謹慎だがこれはチャンスと考えてる。あいつが自らの心の闇を乗り越え、更なる強さを手に入れるために』

このレオの発言によって、テラは修行を終えるまで光の国からの出国を禁じられた。だが、隙を見計らってハルケギニアへと来てしまい、現在に至る。

「みんな、そうまでして…」

サイトはレオたちの提案の意味は理解はしたものの、詐欺師に騙されたような気分になり、肩を落とした。実は故郷のみんなは、彼女

の生存を知っていた。でも自分だけ知らされずじまいなのが蚊帳の外みたいで、正直凹んでしまった。

しかも悪いことに、ウルトラゼロブレスレットがガッツ星人に壊される始末。

「ブレスレットがないと、これから先は不味そうだよ…」

「大丈夫」

ハルナはそう言うと、ポケットからあるものを取り出した。

それはなんと砕かれたはずの、ウルトラゼロブレスレットだった。

「スペアで作っていたのをセブンさんからもらってたの」

「はは…」

サイトはブレスレットを再び左腕に付け、パーカーの袖の下に隠した。

「でもまだ修行、終わってないから帰らなきゃ」

「え?」

「さっきの私を見たでしょ?まだ弱いから…」

思い返せば確かにそうだ。彼女は自分と比べたら全然未熟だ。いくら特殊な技を使えても、それが必ず成功するとは限らない。

「でも大丈夫だ。俺が守れば…」

「ごめんなさい…」

ハルナはサイトの言葉を遮るように言った。

「またガッツ星人みたいな敵に負けないとも限らないでしょ？
私ももっと強くなって平賀君の役に立ちたいの」

「そっか……」

たとえ反対されてもこの星にいて欲しかったが、仕方ない。彼女が光の国へ戻ることを容認した。

「本当は、ガッツ星人のことより心配してたことがあるの」

「え？」

何だろう？ハルナの言葉に思い当たる節が見つからないサイトは首を傾げた。

次に言葉を発した時のハルナの顔はどこか怖いものだった。

「平賀君が他の女の子に色目使ってる気がしたから」

「え゛！？」

俺そんなに女ったらし！？
基本的鈍感なサイトはこれには驚愕した。
ハルナはずっと気になっていたのだ。シエスタやキュルケ、果ては

ルイズと妙に仲がよいものだから密かに嫉妬してたりした。光の国にいたときも実は、サイトが他の女の子に目が向いてないかじっと穴が空くほど見ていたのだ。ルイズよりも見事な執念である。

「そ、そんなことはないぞ！死んだと思ってたとはいえ、俺はハルナへの思いはまだ捨てきれなかったんだからな！」

慌て弁解するがハルナのどこか黒いオーラは止みそうにない。

「本当に？」

「ホントホント！命賭ける！」

「なら、一つお願い聞いて」

「はっはい！」

サイトはピシッと気を付けをした。お願いします、「死刑」とか「リンチ」とかは勘弁して。

「目を閉じて」

やっぱり暴力かあああ！
ルイズの時となんら変わらないよおおお！！
目を閉じ、心の中で嘆くサイトだが、次に来たのは暴力ではなかった。

なにやら口に柔らかい感触がある。
目を開けると、彼の頭の中は一瞬にして真っ白になった。

ハルナが自分にキスしている。

「ふう…やっちゃった…」

顔を赤くしてハルナは笑った。

「私、平賀君が大好き。だから、今度会ってそれからはずっと一緒にいてね」

彼女は恥ずかしそうに背を向け、テラに変身すると、そのまま宇宙へと飛び去っていった。

数分後…

「サイト！どこに行ってたのよ！」

ルイズに見つかったサイトだが、どこか様子が変だった。まるで石のように動かない。

「サイトのバカバカ！あの鳥もどきが出てきてからどこに行ってたのよ！心配したんだから…」

泣きべそをかきながらルイズはサイトの胸元を叩くが、サイトは物言わぬ石像のように固まったままだ。

ルイズに胸を叩かれた途端、彼は体制を崩すことなく、そのポーズを保ったまま倒れてしまった。

「ちょ…サイト！？」

サイトの体を揺するルイズだが、サイトはまったく動こうとしない。

目も虚ろでルイズの存在にすら反応を示さない。
地面に後頭部をぶつけて血を流してるにも関わらずだ。

「石化してる…？」

タバサもサイトを杖でつついてもまったく動かない。
しばらくの間、サイトはそのままの状態でルイズの部屋に運ばれ、
翌日になっても元通りに戻るのに時間がかかったらしい。

「一言言おうと思ってたがテラの奴、恥ずかしそうに部屋にこもってしまったな…」

光の国では、テラの珍行動に首をかしげるレオがいた。

「若いなあ……」

それを理解するようにセブンはなにやらジジ臭いことを言った。

0　無敵の機械兵器

「これは…凄い」

こちらは代わって石堀たちのいる場所とは別の、トリステイン王立研究機関、通称アカデミーの敷地内。
土の魔法で作られた囲いの真ん中に、夜の月の光で照された金属のボディが煌めいていた。

「このゴーレムの体の金属、ハルケギニアのどこにも存在しないものですわ」
そのボディを眺める、整った口ひげと銀髪を持つアカデミーの最高評議会議長ゴンドランに、ルイズの姉エレオノール・ド・ラ・ヴァリエール。

「このゴーレムは後のアルビオン攻略は愚か、他国へ攻め入るにも役立つやもしれぬ」

「私は反対ですわ」

ゴンドランの提案にエレオノールは反論する。

「私はこれを対怪獣用兵器として利用すべきと考えます。もしこの兵器がウルトラマンを圧倒するほどの力を持ってるとしたら、逆に敵はこれよりも高度な兵器を用いるかもしれませんわ。それに市民からも過剰防衛と反発されることも懸念します」

「それは怪獣とて同じではないかね？それに…」

次にゴンドランが言ったことは、誰もが耳を疑いたくなるものだった。

「ウルトラマンは必ずしも正義ではない。今は我々を助ける存在だとしても、あの黒い巨人たちのようにいずれ我々の敵となるやもしれん。その前にこの兵器をウルトラマンにぶつける方が賢明ではないか？」

「議長！」

確かにウルトラマンは、地球とは違いこの世界では存在自体が曖昧だ。だがこの国を守ったのは紛れもない事実。その恩を仇で返すのを平気でやらかすつもりなのか？

「翌日から実験を開始する。拒否権は認めない」

ゴンドランは元々弱気で覇気のない人物。力となるきっかけができたことでかなり強気な姿勢となっていた。

「……」

少なくともエレオノールはゴンドランの提案には賛同できなかった。あれを恩人であるウルトラマンに向けるのも躊躇わないなど卑怯極まりない。あの黒い巨人たちならまだしもだが……

対怪獣兵器。その噂は学院にも広まった。
トリスタニアの街の外にその兵器の保管区域を設置され、一目見ようとたくさんの野次が集まる。
好奇心からかサイトとルイズ、そして買い物帰りでやって来たシュウヘイがその保管区域にやって来た。

「対怪獣兵器、そんなものが作られてたなんて知らなかったな」

「実際は偶然拾った凄いゴーレムを調べ、本当に動くか実験してるそうよ。
詳しい詳細は知らされてないから」

「でも、ヤバそうな気がする」

この時のサイトは、どこか嫌な胸騒ぎを感じていた。

「俺もそんな気がするな」

シュウヘイもサイトの考えを肯定する姿勢で言った。

「『力の過信は全てを失う』。以前俺がナイトレイダーに入隊した時に隊長が俺に教えてくれた言葉だ」

「力の過信……」

サイトは自分の隠し持つウルトラマンとガンダールヴの力、ルイズは自分の虚無の力を思い返した。自分たちは少なくとも常人以上の力を持っている。
だが結果的にそれが吉か凶か、持ち主にも全くわからないものだ。

ただわかるのは、無闇に力を振るえばロクなことはまずないと考えるべきだということ。

「ミス・ヴァリエール」

誰かがルイズに話しかけてきた。

自分の名を呼ばれたルイズ、そしてサイトはその声の主の方を向くと、アニエスが立っていた。

「あなた方も来ていたのはちょうどよかった。女王陛下がお呼びです」

「どうだ？」

ゴンドランは保管区域の囲いの中に保管された巨大ゴーレムを見上げながら、それを修復する部下メイジたちに尋ねた。

「錬金の魔法でなんとか穴などを塞ぎました。外部の修復はもう終了したと言ってもいいでしょう。ですが、起動の方法がまだ……」

「安心せよ。起動方法なら別の班に今、エメラル鉱石を使って調べてある。そのゴーレムの中でな」

そのゴーレムの中には、ハルケギニアの軍艦で言う操縦席の一室が

存在していた。
起動方法を調べているグループは操縦席にある動力部と思われるカプセルに、緑色に煌めく鉱石をセットし、操縦席のコントローラーをいじり始めた。
その数分後…

ギギギギ…

突如、動力部を中心にゴーレムが揺れだした。

外にいる修理班はいきなりゴーレムが動いたものだから一斉にビックリした。

「このゴーレムは、戦艦のように舵で動かすことになってるのか？」

改めて操縦席の装置を見て回るが、その舵に当たる装置がまるで見当たらない。

すると、突然操縦室内にうるさく警報が鳴り出した。

『アラート！アラート！無許可運転を確認、無断操縦者を抹殺します！』

そして…その直後にその場一体が地獄絵図と化した。ゴーレムは内部にいる人間たちを引っ張り出し、握り潰してしまう。

「ぐぎゃあああああ！！」

「なっ！？」

ゴーレムが勝手に動いている！ゴンドランは思わぬ事態に硬直してしまう。

「議長、ここは危険です！下がりましょう！」

部下の一人が硬直したゴンドランを引っ張り、一目散にゴーレムの元から離れた。

「バドゥル…バドゥル…」

声のような奇妙な機械音を鳴らしながらそのゴーレムはトリスタニアの街へと歩き出し、その拳と言う名の鉄槌で街を破壊し始めた。

それはハルケギニアで言うゴーレムなんて生易しいものではなかった。

地球でも悪名高いロボット怪獣にして、あのウルトラセブンですら敵わなかったペダン星のスーパーロボット。

『宇宙ロボット・キングジョー』

「あなたが街に来ていたなんてちょうどよかったわ」

城の王座の間にて、アンリエッタは笑顔でルイズとサイトを出迎えた。

「姫様、またお呼びしていただいたと言うことは…」

何か頼みがあってここへ呼び寄せたとしか思い浮かばない。

「実は、アカデミー議長のゴンドランが最近あるものを製造し、それをアルビオン攻略への要とする姿勢を見せていると噂されてます」

「街の郊外にある、対怪獣兵器のことですか？」

サイトの質問にアンリエッタはコクッと頷く。

「でもゴンドランは私たち王族にもその事態を報告してません。『何でもない』としか言わないのです。あなたたちにお願いしたいのは、その兵器をゴンドランの目を盗んで調べることです。なんだか嫌な予感がしてならないのです」

とその時だった。

街から爆発音が響くに響き渡った。

「なっ何事です！？」

三人は窓から外を眺めると、街を破壊し回るキングジョーの姿が見えた。

「キングジョー…！」

サイトは地球人としての、同時にウルトラ戦士の両方の記憶でもキ

ングジョーを知っていた。
父でも自力で倒せなかった強敵。しかし、サイトはあることに気がつく。
自分の知るキングジョーは金色のボディだ。だが今暴れているキングジョーは…

「黒い…」

真っ黒ではないか。これは何を意味しているのだろうか。

ともかく、ただでさえガルベロスらや双子怪獣たちの破壊活動で街の復興がかなり難航してるのに、またこの街は脅威に晒されたのは確かだ。

とそこにエレオノールが王座の間に大慌てで入ってきた。

「女王陛下！」

「えっ、エレオノールお姉さま！？」

いきなり姉が、しかも珍しく慌てた様子でやって来たことにルイズは驚く。

「お姉さまって、アンリエッタは遮るように二人の間に割って入った。

「申し訳ありません、女王陛下…議長の計画した対アルビオン攻略用ゴーレムの開発を止めることができませんでした…」

「対アルビオン攻略用ゴーレム？一体何の話です？」

それからエレオノールは説明した。ゴンドランはあのゴーレムを使うことでアルビオン攻略のための兵器とすること。逆にエレオノールはそれを反対して対怪獣兵器とすることを提案したがゴンドランにそれを却下されたこと、全てを話した。

「全て、私の責任です。あのような兵器を使うこと事態が間違いだった……何なりと罰を」

「お姉さま…」

今日の姉の姿は今までにないものだ。ルイズは今の姉になんと言えばいいのかわからなかった。

「エレオノール嬢、今あなたのすべきことは私から罰を受けることではありません。
ゴンドラン議長を探しなさい。そして彼と共に私の元へ来るのです」

「……」

サイトは自分を除く三人が自分たちの会話に気をとられてる隙を突いて王座の間から抜け出した。

街では、圧倒的力を見せつけるようにキングジョーが暴れまわっていた。

「にしても、キングジョーまでがどうしてこの星に……？」

ペダン星人が送り込んできたのだろうか？

いや、考えても仕方ない。戦わなくては。

「平賀！」

そこにシュウヘイが駆けつけてきた。傷も回復し、エボルトラスターを構えた状態で準備も万全。いつでも行ける。

「行けるな？」

「ああ」

シュウヘイの言葉にサイトは躊躇わず頷き、ウルトラゼロアイを装着した。

「デュワ！」

シュウヘイも同時にエボルトラスターを鞘から引き抜き、天に掲げると同時に赤い光に身を包んだ。

「はっ！」

「バドゥル…バドゥル…」

砲口からビームも発射し、街を大惨事に追い込む黒いキングジョー。
街は逃げ惑う人たちで大混乱だ。

「逃げろおお！」
「うわあああああ！！」

「撃ち方用意、放て！」

もちろん街の兵士たちが黙って見ているはずがない。国のため、彼らは大砲や魔法を使ってキングジョーを攻撃する。

しかし、ウルトラセブンが戦った当初は新型の特殊爆弾を使うことでようやく倒せた相手。その特殊爆弾より劣る大砲や魔法では、怯ませることはできても倒すことはできない。セブンの光線技すらも効かないほどのボディの持ち主なのだ。

「バドゥル…バドゥル…」

感情のこもらない声のような音を鳴らしながらキングジョーは逃げ遅れた民に手を振り上げる。

しかし、そんな彼らに救いの手が現れた。

「デュワ！」
「シェア！」

ウルトラマンゼロとウルトラマンネクサスの二人だ。

「「ハッ！」」

同時にキングジョーを殴り飛ばし、キングジョーは地の上を転がされた。だがすぐに何事もなかったように立ち上がった。

「ちっ…機械じゃ痛みがあるかもわからない」

愚痴を溢すネクサス。
ロボット怪獣は痛みを感じない。それが戦う相手に「まだ戦えるのか？」と思い込ませ、精神的にも追い詰める。これは厄介なものだ。

「ヂェアアア！」

まずはゼロは先にキングジョーに飛びかかった。数発力の込めた拳で殴りつけるが、まるでびくともしない。まるで幼い子供がただ意味もなく壁を殴るようなものだった。

〈クロスレイ・シュトローム！〉

ジュネッストリニティにチェンジしたネクサスは援護射撃の姿勢で光線をキングジョーに当てた。が、そのネクサスの光線技も通じなかった。
ゼロはセブンが戦った時の苦労がなんとなくわかる気がしてきた。

だが倒さなくてはならない。このまま放っておけば街に更なる危害が及ぶ可能性がある。

ブレスレットをキーパーアーマーに変化させ、身につけたゼロは更に強化された拳で殴りつけるも、これにもびくともしなかった。

ギイイイン！

凄まじい金属音と共にキングジョーのビンタがゼロに炸裂、ゼロは突き飛ばされた。

これだけ強すぎると、ネクサスの技「メタ・フィールド」も使い物にならない可能性が高い。あれを使ったら三分以内に倒さなくてはならないし、それを過ぎたら使った本人が死んでしまう。

とにかく肉弾戦に持ち込んで弱点を少しでも探れたら…

ネクサスは背後からキングジョーの動きを止め、動きを封じた。それを見計らったゼロはビームランプより緑の閃光を放った。

〈エメリウムスラッシュ！〉

閃光はキングジョーの足の間接部に直撃、キングジョーは動きを止めた。

今だ！

〈ワイドゼロショット！〉

「デュ！」

破壊力のある必殺光線で大ダメージを狙うが、ここでキングジョーは驚くべき行動に出る。

なんと頭、両腕両足と次々に分裂してネクサスの拘束から解放され、しかも驚くほどのスピードでゼロの背後で足から順に組み立てられ、完成したところでゼロのこめかみをぶん殴った。

「グアアア！」

ゼロは街に溜まる瓦礫の山の中に突っ込んでしまう。

次にキングジョーの狙う標的はネクサス。顔からビームを放ってきた。かろうじて飛ぶようにそれを避けるが、再び放たれたビームまでは避けきれず、地面に叩きつけられた。

「グォッ！」

立ち上がる隙も与えず、キングジョーはネクサスの上にのし掛かってきた。

重い。しかも力一杯自分を窒息させるつもりなのか無理やり押さえつけてくる。パワーだけならメフィストをも越えてるかもしれない。

なんとかキングジョーを払おうとするが、力がだんだん入らなくなる。

エネルギーが尽きかけてきたのだ。証拠にコアゲージが点滅し始めている。

ピコン、ピコン…

「頑張れウルトラマン！」「負けるな！立ち上がってくれ！」

街の人々の声援を糧に、瓦礫からゼロは立ち上がった。顔を上げると、ネクサスがキングジョーに押さえつけられている光景が目に飛

び込む。

なら、この技でどうだ！

〈ウルトラゼロキック！〉

「ダアアアアッ！」

力一杯、さらに力一杯に込めた灼熱の蹴りがキングジョーを突飛ばし、ネクサスは解放された。

「っ……助かったぞ平賀」

「気にすんなって」

キングジョーは今のゼロのキックを受けてなお平気そうに立ち上がってきた。

しかし、ここでゼロとネクサスは見逃さなかった。

キングジョーのボディのあちこちがボロボロになっている。この星の科学力はほぼ皆無に等しい。それゆえ完璧な修復かできるペダン星人と比べると、修理も完璧ではなかった。錬金の魔法で作られた金属を穴に埋め込んだくらいだ。

これはまたとないチャンスだ。

〈ゼロスラッガー！〉

「ジェア！」

〈パーティクルフェザー！〉

「タア！」

連続で放たれるゼロの宇宙ブーメラン、そしてネクサスの刃状の光弾が、キングジョーの不完全な修理のされた部分を襲い、キングジョーはだんだん動きを鈍らせていく。
わずかに火花も吹き出してきた。

今こそ止めの時。
ゼロは鎧を解いて槍を手に、それをキングジョーの腹目掛けて投げつけた。
ネクサスは光の剣を作り出し、大抵の鉄を切り裂くほどの風の刃を放った。

〈ウルトラゼロランス！〉〈覇風撃！〉

槍で貫かれ、さらに連発された風の刃が穴を広げる。吹き出す火花がさらに増加し、キングジョーは気を付けの姿勢になると、ドミノのように後ろに倒れ、大爆発した。

その後、アンリエッタの元に突き出されたゴンドランは、無断での

兵器開発とその兵器の暴走の責任を問われ、で爵位をシュヴァリエにまで降格された。エレオノールは罰を下されなかった。

「お姉さんが罰を受けなくてよかったな、ルイズ」

「よかったなんて思えないわ。エレオノールお姉さま、責任を感じすぎてあまりお元気じゃなかったもの」

ルイズは優しい面はあるが基本的わがままで短気。だが責任感が人一倍ある。その性格の拡大版であるエレオノールは今回の事件で責任を最も重く受け止め、仕事を休み、実家に帰省し自己謹慎に勤めることとなった。

サイトは一つ気になることがあった。

あの黒いキングジョーは一体何だったのだろうか？

なんのために作られ、この星に？

それは次回から語る、タバサとあの怪獣使いの少年を中心に語ることにする。

1　雪風と少年たちの出会い

何万年もの昔、レイブラッド星人と呼ばれる、約４６億年もの宇宙の歴史の中で最強最悪のエイリアンがいた。そのエイリアンは何百何千もの怪獣を操り、宇宙の頂点に君臨していた。しかし、生ある者はいずれ滅びる。彼も寿命で死ぬ時が近づいてきた。だが一つ、彼はせめてもの策を考案した。それは自らの遺伝子を宇宙へばら蒔くこと。その遺伝子を受け継いだ者に怪獣使い『レイオニクス』としての力を与え、互いに争わせる。その戦いで生き残ったレイオニクスを我が子として宇宙の頂点に立たせることだった。

宇宙警備隊特別隊員ウルトラマンベリアル。ウルトラの父とウルトラマンケンの同期に当たる歴然の戦士だ。彼には異星人との間に授かった息子がいた。

しかし、今は亡きその母は侵略者の同族であるが故に、ウルトラの星の学校の同級生から疎まれていた。侵略者の子だ、と。その忌むべき侵略者の血を持つ彼は、当時不器用で乱暴な愛しかくれず、かつ同級生からのいじめを『試練』と父から教えられたが、余計に父を嫌うようになった。

その我が子の心の闇に付け入り、彼にレイブラッドの遺伝子いや、魂が不運にも宿ってしまったのだ。

ベリアルの息子である少年に憑依したレイブラッドは力を失った『冥王』と手を組み、全宇宙の掌握を試みる。この時彼は、異次元のウルトラマンと出会った。

「あんたは…何のために戦ってるの？」

「償いだ…」

その戦いで、彼はレイブラッドの力を出しきれず、敗れてしまう。少年に憑依していたレイブラッドはあまりの肉体の脆弱さに憤慨し、新たな肉体を求めることとした。

そこで目につけたのは…
少年の父ウルトラマンベリアルだった。

とある異星にて、本来の口調でベリアルの息子の体を人質に、レイブラッドはあることをベリアルに持ちかけた。

「貴様…誰だ！？」

「私はレイブラッド…全宇宙を支配するものだ」

「レイブラッド…だと！？」

「ベリアルよ、貴様の息子の体は頂いた。この肉体はいずれ我が野望のための道具として働いてもらう」

「貴様…私の息子を返せ！」

無論ベリアルは愛する息子を見捨てることはできない。だが同時に手を出すこともできなかった。息子の肉体に攻撃すれば、レイブラッドではなく息子が傷ついてしまう。

「息子を返してほしいか？ならば貴様の体を寄越せ。そしてお前に力を与えてやろう…」

そして少年の肉体から離れたレイブラッドは、今度はウルトラマンベリアルの肉体に憑依した。

「うぐあぁぁあああぁぁぁあああぁ！！！！止めろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

ウルトラマンの少年、グレイモンは解放された。
だがこの日から、ウルトラマンベリアルは…

母であるババルウ星人から受け継いだ二本の角。父から受け継いだ銀色のボディ。彼はウルトラマンとしては異質な姿をしている。

「うっ…」

グレイモンは緑豊かな大地の上で目を覚ました。

「ここは…確か学校帰りだったはずなのに…」

レイブラッドに取り付かれていた時の記憶はすべてなくなっていた。しかし、一つ彼の右腕に、二本の角の着いた赤いブレスレットが装着されていた。これは一度意識をなくす前にはなかったものだ。

「何だろこれ…馴染みがあるんだけど…」

辺りを見ると、その美しい広大な大地が彼の目に飛び込んできた。初めて見る、異星である。

「わあ～…」

少年らしい、冒険心が彼を駆り立て、彼は人間の姿『グレイ』となってその大地を走り出した。

トリステイン南方の国
ガリアの首都リュティス

ハルケギニア最大の都市で３０万人の人々が暮らしている。その街の郊外には壮麗なる『ヴェルサルエル宮殿』、さらに別の場所には別荘らしき小さな宮殿『プチ・トロワ』。

「花壇騎士七号様の、おなり！」

主の間、タバサはそこに呼び出されていた。

タバサの本当の名は『シャルロット・エレーヌ・オルレアン』。先代ガリアの王シャルルの娘。
なぜタバサと名乗っているか、それは血みどろの権力争いで父が殺され、母も心を壊される毒を盛られ、しかもその母の命を現国王で伯父であるジョゼフ一世に握られている。かつては王女だったタバサも現在は王族の言いなりの状態で逆らうことは許されてない。
ジョゼフらは、花壇騎士七号とシュヴァリエの、貴族の位としては申し分ないが王女である彼女から見れば低い称号二つを与え、彼女が命を失ってもおかしくない任務を押し付ける。

現在彼女の目の前の立派な椅子に座ってるのは、彼女と容姿の似た王女『イザベラ』。タバサが青く澄んだ瞳を持つのとは対照的に、彼女は暗雲の立ち込めたような目をしていた。その目は、タバサの親戚であることを疑わせるほど彼女の狡猾さと残忍さを表していた。その歪んだ性格は部下たちからも快く思われてないが、相手は王女、逆らえば自分たちの家族などがとんでもない目にあわされてしまう可能性大なため、部下たちも黙って従わざるを得なかった。

「やっと来たね。人形娘」

「…」

「ったく、少しは反応しな。人形どころか、まるで空気に話しかけてる気分だよ」

王女にしてはあまりにも押しとやかさを感じさせない口調だ。

「ほら、これが今回のあんたの仕事だよ」

ピッ！と手紙を投げ渡し、タバサはそれをパシッと受けとる。

「『火山山脈付近に出現した謎の巨大植物を退治せよ』…」

（ったく、少しはビビりやがれ）

てっきり恐怖に染まったタバサの顔を期待していたイザベラだったが、眉一つ動かさないタバサにちっと期待外れの舌打ちをした。

「もう行きな。健闘を祈っといてやるよ」

しばらくして、タバサが風竜で空を飛び立つ光景が窓から見えた。

（ちくしょう…なんであいつが…）

タバサはまだ15歳であるにも関わらず、水・風・土の三つの系統を使いこなすトライアングルクラスのメイジ。イザベラはまだ水系統、それも最低限の魔法しか使えないと、タバサと比べて才能に乏しい。それはタバサへのコンプレックスにもなり、同時にもともとタバサとは決して不仲ではなかった彼女の性格を、だんだん歪ませてしまった。

「そういや…サモン・サーヴァントやってなかったな…」

タバサが怖じけつくことなく任務に当たるのは、愛する母を守るため。そして…

「『諦めるな』…」

ウルトラマンネクサスと初めて会ったときの言葉が、胸の奥まで刻まれていたことによるものだった。

一時は彼の元の姿の青年が盗賊に手を貸したときは驚いたが、彼もきっと大事なもののために戦ってる。自分も彼のようになりたい、純粋にそう思えた。

この雪風の少女と怪獣使いの少年の物語は、サイトとルイズがアルビオンから帰還してすぐの頃から始まる。

タバサがたどり着いた場所火山山脈。そこはガリアから南西の宗教国家ロマリアとの国境沿いであり、火山の活動が活発なため、結構なんてものじゃないほど暑い。。そこはガリアから南西の宗教国家ロマリアとの国境沿いであり、火山の活動が活発なため、結構なんてものじゃないほど暑い。。その不毛の大地に、なにやらおかしな形の竜が崖の下にいた。いや、そもそも竜なのか？

「あんな竜見たことないのね」

そう呟いたのはシルフィード。タバサに召喚される前から今まで幾多の竜を見たことがあるが、あんのものは初めてだ。

いや、今はあの竜よりも任務の方が大事だ。

ターゲットである謎の巨大植物はこの近くにいるはずだ。

すると、その巨大植物が地面から姿を現した。

（早速来た！）

『巨大植物ジュラン』。かつて初代ウルトラマンが現れる以前、地球人たちが自分たちの力で怪獣と戦っていた頃に現れた、体長１００メートルを越える怪獣だ。

ジュランの真ん中から黄色い霧のようなものが噴出される。花粉なのか？

シルフィードの背中から見下ろしながら、ジュランを観察するタバサ。

その時、地上で倒れている二人組を見つけた。

「降りて」

何か情報を聞き出せるかもしれない。タバサはその二人組の近くへ降りるようシルフィードに言った。

その二人組の格好は、見たこともないものだった。青と白のような配色をしていて、兜の色も青い。何か文字が刻まれてるが、ハルケギニアでは見たこともない。

何か症状を表してるようなので、タバサは一旦二人をシルフィードに乗せ、ジュランから離れた場所で水系統の魔法を使い二人を治療した。

「っ…」

一人は歳はおそらく５０だがまだ元気で豪快そうな男性、もう一人はまだ２０代の若い細腕の男性。まず５０歳ほどの男性が目を覚ました。

「おいオキ、大丈夫か？」

「あ…ボス？」

若い男性は『オキ』というようだ。変わった名前だ…一体どこからやって来たのだろう？

「もしかして…君が俺たちを助けてくれたのか？」

ボスと呼ばれた男はタバサに尋ねると、彼女はコクッと頷いた。

「俺はヒュウガ、ＺＡＰ母船スペースペンドラゴンのボスだ。
こいつはクルーのオキ。
助けてくれてありがとう」

「ざっぷ？」

スペースペンドラゴン？
もしかして、先ほどの奇妙な竜のことか？いや、もしかしたら…

サイトと同じ世界の人たちなのか？
以前竜の羽衣と呼ばれた『ウルトラホーク１号』の存在が彼女にそう予想させた。

「助かった～…ジュランの毒花粉で一時はどうなるかと…」

「お前の怪獣マニア癖が災いしたんだろ。全く、無茶しやがって…」

「す、すいません…」

「毒花粉？」

タバサは聞き捨てならなかった。まさか…

「ジュランの花粉には毒が含まれてるんだ」

オキの言ったことと自分の悪い予想が合致した。

だったら、余計に放っておけない。シルフィードの背に乗ると、シルフィードはタバサを乗せて空へ舞い上がった。

「ちょ…君！危ないぞ！」

ヒュウガの怒鳴り声はタバサの耳には届かなかった。

ジュランの毒花粉、これは厄介だ。近づかないように攻撃しなくてはならない。

「エア・カッター！」

鉄をも切り裂く風の刃。いくら巨大であるがゆえに固くても、傷を追わせることはできるはず。しかし、花粉に近づかないよう距離をとっていたものの、その花粉の範囲が広すぎるため、エア・カッターはジュランには届かなかった。

「遠すぎる…」

近づくには危険だ。シルフィードも嫌がっている。

「ダメなのねダメなのね！これ以上進んだら毒にやられちゃうのね！」

いくらジュランでも植物。植物である以上弱点もおそらく存在するはずだ。
例えば、炎。炎で目一杯攻撃すればジュランの体は燃え尽きるかもしれない。しかし、タバサは火系統の魔法が使えないため却下。
もう一つは冷却。植物は極寒の中では成長を止める。しかし、ここは火山山脈の近く。凍らせてもすぐ溶けてしまう。それにタバサの精神力では完璧に凍らせるのには無理がある。
最後に、根元から叩きおる。根元に攻撃魔法で集中攻撃すれば、養分を地面から吸いとるための根は失われ、ジュランは絶命するはず。が、根元辺りにまで花粉が降り注がれていて近づけない。
打つ手なしだ。

「お姉さま！やっぱり逃げた方がいいのね！」

シルフィードはそう言うが、タバサには逃げられない理由がある。
もし逃げれば、母の命があの憎き男に…

ジュランはタバサを標的に、地面から何本もの触手を伸ばし、彼女とシルフィードを狙う。
シルフィードはタバサを落とさないように猛スピードで避けていくが、数の暴力に敵わず、幾度か触手からの殴打を受けてしまう。

「ぎゅいー！」

その時、小さな飛行機体が飛来し、いくつものビームショットでジュランを攻撃した。
ヒュウガとオキがペンドラゴンに取り付けられていた小回りの効く小型機体『ドラゴンスピーダーα』。しかし、この機体は怪獣を倒

せるだけの力はない。
ヒュウガたちはせめて自分たちを囮に彼女を逃がそうとしたのだ。

「君！早く逃げろ！」

しかし、それはタバサから見れば有り難くも無駄な行為だった。逆に彼らに逃げてほしかった。

（どうすればいいの…）

とその時、空から風を切るように一体の竜が飛来した。シルフィードよりも大きい。ジュランの半分近くの大きさだ。

「ボス、見てください！メルバですよ！超古代竜メルバ！」

オキがスピーダーの後部座席で興奮している。彼は極度の怪獣マニアなのだ。

超古代竜メルバ。その背中に乗っているのは、グレイだった。

「なんだ…あの子供は…」

なぜあんないかにも危険そうな怪獣の背中に年端も行かぬ少年が乗っているのだ？ヒュウガは疑問に思った。

「これが噂のバトルナイザー…なんで持ってたんだろ？」

いや、まずはあの花の化け物が先だ。

「メルバ！」

〈メルバニックレイ！〉

メルバの目から細かい光弾が何発も放たれジュランに直撃する。

しかし、ジュランを倒すだけの威力が足りない。

メルバはスピードで敵を突くタイプだ。力でごり押せる攻撃は備えてない。

「ゴルザ！」

【バトルナイザー、モンスロード！】

彼の右手のバトルナイザーから一枚の光のカードが飛び出し、今度は強靭な肉体を持つ怪獣となった。

超古代怪獣ゴルザ。

だが、力任せなタイプの戦士の大抵は接近戦が普通。ゴルザも遠距離に対応できる技を持ってはいるが、そう何発も撃てる訳じゃない。

「ますは…」

あの小さな青い竜と小型飛行機体を避難させる必要がある。

「ちょっとそこのあんたら！遠くへ離れて！」

グレイは大声でタバサとスピーダーを運転するヒュウガに呼び掛けた。

彼には何か考えがあるのか？得体が知れないので簡単には信用できないが、今は彼に頼るしかない。ヒュウガはハンドルを動かしてその場から離れ、タバサもシルフィードにその場から離れるよう言った。

彼らが離れたのを確認したグレイはメルバにある命令を下す。

「メルバ、翼をばたつかせろ！」

そう言われたメルバは翼をバタバタと動かし、凄まじい突風を巻き起こした。

ビュオオオ！と台風にも匹敵するその風力は何ヘクトパスカルかわからないほど。その風は花粉をあっという間に吹き飛ばしただけではない。その激しい風はジュランの体にも影響を及ぼしていた。岩や石と同じ、風化である。風は大地を乾燥させ、山や岩をも削り、やがてすべてを砂漠に変える滅びの力を備えている。

タバサたちに避難を呼び掛けたのは、吹き飛ばした花粉を吸い込まないためと、この突風でどこかへ飛ばされたりしないためだ。

（私の風の魔法でもあれほどの風は生み出せない…）

怪獣の力、やはりとんでもないものだった。

その凄まじい風はジュランを枯れる寸でのところまで追い詰めた。

「ゴルザ、超音波光線！」

バトルナイザーをビシッと掲げたグレイに応え、ゴルザは額から破壊光線を放った。

〈超音波光線！〉

「グオオオ！」

攻撃を受けたジュランは爆発四散し、跡形もなく消えた。

怪獣たちをバトルナイザーに戻したところでグレイはスピーダーから降りてきたヒュウガたちと合流した。

とりあえずタバサも混じり、自己紹介をした後、この星についてタバサは尋ねられ、ありのままの真実を伝える。

「そんな中世ヨーロッパみたいな文明の続いてる星があるなんて…」

オキは驚愕の境地だった。

「宇宙は広い。魔法もあればそういった文明の星があってもおかしくないはずだ」

ヒュウガは次に、グレイに質問する。

「君は何者なんだ？なぜ怪獣を操れる？」

「どうして怪獣が操れるのか、僕にもわからないんだ。ちょっと前から今までの記憶が飛んじゃっててさ。完璧な記憶喪失ってわけじゃないけど。
とにかく、あんたらが無事でよかったよ。じゃあ」
そう言ってグレイは立ち去ろうとするが、ヒュウガはそれを止める。
「行く宛はあるのか？」
「ないよ」
「だったら俺と契約しないか」
「契約？」
「衣食住の提供も兼ねてお前のその欠落した記憶探しの手伝いをしてやる。その代わり、俺たちのクルーにならないか？」
「え？」
なぜヒュウガたちＺＡＰがこのハルケギニアにいるのか？それはペンドラゴンが宇宙を飛んでいた怪獣の攻撃でエンジンをやられてしまったせいでやむを得ずこの星に不時着したからだ。
しかも不時着した星に怪獣がいる。このままだと地球に帰ることもできずじまいだ。エンジンの修理パーツが見つかるまで、グレイを自分たちの仲間に率いれようとしたのだ。
「まあ…いいけど」
「いいの！？やったあ！」

オキは子供のように跳び跳ねる。彼の性格からだいたい想像はつく。グレイの怪獣をじっくり鑑賞したいのだ。

「タバサ…だったな？」

ヒュウガは今度はタバサの方を向く。

「君はどうする？」

あの時自分たちを回復させた力、あれが魔法なのだろう。医務に関してはオキが担当しているが、彼女も加わればさらに生存率があがるかもしれない。それほどヒュウガはタバサを評価していた。

「私は任務でここに来た身。あなたたちのクルーにはなれない」

愛する母を守るため、彼らＺＡＰの仲間入りを果たすことはできない。タバサも好奇心から仲間になりたいとは思ってはいたが、私情は無用。仕方なく断った。

「そうか…もし気があればこの先のペンドラゴンへ来てくれ。いつでも構わない」

少し残念だが仕方ない。

ヒュウガはオキとグレイを連れ、ペンドラゴンへと向かって行った。

サイトたち以外の地球人のヒュウガとオキ。彼らの素性はだいたいわかった。が、問題は自分とほぼ同じ年齢に見えるあの少年は…

「グレイ…」

一体何者なのだろう？
いや、今は任務完了の報告をイザベラに伝えなくては。
シルフィードの背に乗り、彼女はプチ・トロワへ帰還した。

その様子を、妙な青っぽい装甲に身を包んだ男が見ていた。
兜、いやマスクをとったその顔はどこか石堀に似ているが、彼とは違って強い使命感を備えた目をしていた。

「ウルトラ一族の血を引くレイオニクス…」

2　謎の男

「つまりお前は、あの光の住人であるウルトラマンなんだな」

タバサと別れて数時間、ヒュウガはペンドラゴン指令室にてグレイからある程度の話を聞いた。

ウルトラマンベリアルという名前のウルトラマンの息子で、光の国のとも違う異星人の血を受け継いだハーフらしい。

光の国を出てからの記憶はないが、いつの間にか怪獣を操る特殊機械を持った状態でこの星にいたとのこと。

「怪獣!?ねぇっねぇっ。僕に見せて!」

さすがは怪獣マニアのオキ。グレイが困っているにも関わらず興奮して詰め寄って来た。ヒュウガは無理やり彼を引っ込ませて続けさせる。

「落ち着けオキ。とにかくグレイ、行く宛がないのなら俺たちと一緒にいてもいい。この星にも怪獣はいるがあまりにも非力だ。君の力を貸してもらいたい」

「わかった。オイラも断る理由ないから」

ヒュウガはグレイの意外な返答に驚いた。てっきり断るのかと思ったのだ。なにせ、聞き方を変えれば、力を利用するとも言えるのだ。

「故郷に帰らないのか。両親が……」

「母さんはもう死んだし、父さんは顔も見たくないんだ。もし光の国に帰っても、別にやることないし」

「……」

一種の反抗期なのか？父親と何かあったのだろうか？ヒュウガにも地球に家族がいる。反抗期というものに縁がないわけではないので、グレイの父親の苦労にどこか共感を感じた。
ここは彼の父親に代わってなんとかしてあげたいと思った。

「そうか…」

「ところでさ、あんたたちはどうしてこの星に来たんだ？」

確かに、地球人であるＺＡＰクルーがなぜこの星にわざわざ来たのか以前わかってない。

「地球防衛軍が、新たに知的生命体の住む惑星を発見したらしくてな、上層部の命令でその星の調査をすることになった。もしかしたら侵略者の惑星である可能性もあるからな」

「その調査をすることになったのがこの星ってわけだね？」

「正解だ。しかし、ペンドラゴンが一度怪獣の攻撃を喰らって一部故障したものだからしばらくは帰れないな」

「ボス」

ヒュウガがグレイに理由を話してるとき、クマノがタオルで汗を吹きながら指令室に入ってきた。

「フゥーッ、スペアパーツがあったおかげでエンジン部分の修理が終わりました。この星を脱出まではできませんが、この星の範囲内なら動かせます」

「そうか。どこか街へ行くことさえできればなんとかなりそうだな」

とその時、ピーッ！ピーッ！とコンピュータから音が鳴り出した。

「ボス！クマさん！これを！」

オキは二人を呼んでコンピュータの画面を指差した。グレイも二人の後に続き画面を覗き込むと、ペンドラゴンの位置を表す青い点の北西辺りに、謎の反応を表す赤い点が見える。

「よし、この場所に行ってみるぞ。配置に着け！」

ヒュウガの指示でペンドラゴンは発進した。

しばらく空を飛行すると、オキがセンサー画面にある反応に目をつけた。

「その先にさっきの赤い点…怪獣の反応があります！」

「何！？」

ペンドラゴンの外に広がる森に、一本角で岩のようにゴツゴツした体つきの怪獣がいた。

「岩石怪獣ガクマだ！」

オキはすぐにその怪獣が何者なのかを見極めた。
ガクマはペンドラゴンを敵と見たのか、低空飛行しているペンドラゴンに向けて青い光線を吐き出してきた。

「クマさん避けて！」

オキに怒鳴られたクマノはとっさに反応してハンドルを右方向に傾かせ、ペンドラゴンはガクマの光線からの回避に成功した。
避けた箇所にある森の木々は、ガクマの光線によって、本来あるべき姿とは全くの別物となってしまう。

「石になった！？」

クマノはその光景を見て背筋を凍らせた。

「ガクマの吐く光線は、たとえ鉄の塊であるトラックすらも石に変えてしまうんです！」

「なんて恐ろしい怪獣だ」

ヒュウガは冷や汗をにじませて言った。

「オイラが行こうか？」

グレイはバトルナイザーを持って外に向かおうとしたが、ヒュウガ

はそれを止めた。

「そうちまちまとお前の力を借りたら俺たちがだらしなくなる。お前は最後の手段として力を溜めておけ」

グレイにそう告げた彼は、胸の内ポケットからＺＡＰのマークが刻まれた一枚のＩＣカードを、コンピュータのカードリーダーに差し込んだ。

「ボス、まさかあれを？」

「わかってるならガクマの方に集中しろ、クマノ」

クマノの戻された視線の先に、ガクマが大きく口を開けていた。まずい！と悟るクマノはすぐハンドルを動かし、ガクマの眼前からペンドラゴンを、ちょうどガクマの真後ろにまで移動させた。

「ガクマは動きが遅い。今のうちに！」

「よし、ハイパーオメガ砲…放てえええええええええええええええ！！！！」

「うぉおおお！！」

ヒュウガの豪快な雄叫びと、それに呼応して飛び出すクマノの叫び声が重なると同時にトリガースイッチがプッシュされると、ペンドラゴンの船体から砲口が現れ、ガクマに向かってとてつもないビームが放たれた。

「ガアアアア！！」

ハイパーオメガ砲をモロに受けたガクマは木っ端微塵に砕け散った。

「ワォ……」

唖然とした様子でグレイは声を漏らした。

「これでダメだったら、お前に頼ってたな」

最低限は自分たちの力で戦う。それが地球人が度重なる怪獣の脅威の中、ウルトラマンと共に戦う上で学んだことだった。

「でも、どうしてガクマが現れたんでしょう?ガクマは本来岩山に生息するはずなのに」

「あいつらは普通岩の中にいるのか?」

オキの疑問にクマノは尋ねてきた。

「ええ、岩山の洞窟内にいる生物を補食するんです」

「よし、降りて調査する」

ヒュウガの指示で、ペンドラゴンは地上に着陸した。

ちょうどサイトがモンモランシーの失敗作の惚れ薬を服用した頃、魔法学院は夏期休暇となっていた。タバサは久しぶりに母の元へ帰ることを許された。今回友人であるキュルケもタバサの故郷に興味を示し、同行して来た。
現在、馬車でタバサの故郷ガリアに向かっているところである。

「知らなかったわ。タバサがガリアからの留学生だなんて。どうして留学してきたの？」

その質問にタバサは何も答えない。ただ本のページをめくっては読んでいた。

「私はほぼ厄介払いなのよ」
キュルケの次に言った一言にタバサは顔をあげる。これには興味を示したようだ。

「ちょっとした問題を起こして向こうの学校止めさせられて、娘が無法者になるのは内情に関わるから婿をとりそうになったけど、その相手がじいさんよじいさん！全く嫌になったから違う国の学校に通うことにしたのよ」

ギーッ！と歯ぎしりするキュルケ。相当嫌だったことがうかがえる。

除け者…
あの怪獣使いの少年もそれが故にこの星に来たのだろうか？
タバサはそんなことを考えていた。

しばらくして外を眺めていたキュルケは、ちょうど通り過ぎたある看板に目を奪われた。

青い縦の上に×印に組まれた二本の剣。

「あれってガリア王家の！？もしかして…」

あの看板に描かれた紋章の意味は、タバサのガリアにある実家で明らかとなった。

「おかえりなさいませ。シャルロット様」

執事と思われる白髪の老人が出迎えてきた。

客室に案内されたキュルケはそこでタバサに待っているように言われ、ソファーに座る。

部屋中に目をやると、壁掛けにタバサと同じ水色の髪をした若い男性の絵が目に入った。

そんな時、出迎えてきた執事に紅茶を用意してもらった。

「私はこの屋敷で執事をしておりますペルスランと申します」

「私はゲルマニアのフォン・ツェルプストー」

「まさかシャルロットお嬢様が外国のご友人を連れてくるとは思いもしませんでした」

「シャルロットが、あの娘の本当の名前なのね。どうして偽名を使ってまで留学してきたの？あの娘は自分のこと話さないのよ」

「そうですか…お嬢様はタバサと名乗っておられるのですか…」

意を固めたようにペルスランは一度閉じた目を開いた。

「お嬢様が心を許されたツェルプストー様なら、あなたを信じてお話しましょう」

それからペルスランは話した。

タバサ、いやシャルロットが王族で、現ガリア王『ジョゼフ』の姪で、あの壁掛けに描かれた男性は彼女の父でガリア王の弟『シャルル』であること。前国王が亡くなったことで起こった継承争いで、父は暗殺されたこと。その後はとある晩餐会で、タバサを狙う刺客が彼女に心を破壊する魔法がかけられたグラスを、母が彼女を庇って飲んだことで、母も……

「その後、お嬢様は遂行不可能と言われる任務を与えられましたが、それを全て遂行なさってきたのです。お嬢様を邪魔に思う王族たちは彼女にシュヴァリエの称号を与えられ、外国へと厄介払いの形で留学なされたのです」

「厄介払いか……」

醜い争いの被害者となり、快活で明るかった自らの心を閉ざしたタバサ。しまいには除け者扱いされてトリステインへ……

キュルケは珍しく思い詰めた表情を浮かべた。

その後、夕食の時間で食事をとる二人。そこにペルスランが一枚の勅命書をタバサに渡した。

それを受け取ったタバサは内容を目で読み上げる。

「いつ頃取りかかられますか？」

「明日…」

「ではお嬢様、ご武運をお祈りしています…」

忠誠心からか、ペルスランは彼女の力になりたかったが、自分はただ執事をやってるだけの平民。ここで祈るしかない。彼はタバサに頭を下げると、その場から立ち去って行った。

「明日はここで待ってて」

タバサは他人を巻き込みたくない思いからキュルケをここに置いていくつもりだったが、キュルケはそれを断るように首を横に振った。

「ごめんね。さっきの人から聞いたのよ。私も行くわ」

「ダメ！」

思わず声を上げてしまうタバサ。彼女があそこまで大声を上げたところをキュルケは聞いたことがないのでこれには違う意味で驚いた。だがそれで退くほどキュルケは粘りの弱い女ではない。

「危険なのはわかってる。でもあなたは私の友達だもの。助け合うのは当たり前、でしょ？」

キュルケは、恋愛に関してたとえ最終的にすぐ飽きることになっても、最初は何を言われても聞かない性格。今もそうで、たとえタバサが頑なに断って任務に向かっても彼女を追うつもりだった。

「……わかった」

「隊員服、なかなか似合うんじゃないか？」

「どうも」

ヒュウガに、初めて着る自分の隊員服を見られグレイは少し照れた。地上にできたガクマの足跡を追いながら、ヒュウガとグレイはその先にある岩山にたどり着いた。

「これは…」

ヒュウガがその洞窟内にてあるものを発見し、拾い上げて観察する。そこで見つけたのは、エメラルドよりも綺麗な緑色の光を放つ鉱石だった。

「エメラル鉱石…ガクマはこれを食って生きてたのか」

エメラル鉱石、それは宇宙でも五本の指に入るほどの希少価値の高い鉱石。だが希少価値よりもすごいのは、この鉱石はわずかなかけらにも、発電所が不要になるほどのエネルギーが備わっていることだ。

『おそらくそうなりますね。ガクマはすっごく贅沢な食生活を送っていたことになりますね』

通信機を通し、留守番に勤めるオキが言った。ちなみにクマノの留守番役である。もしも二人の外出中にペンドラゴンに万が一のことがあって壊れたりしたら、それを完全にでなくても修理できるのはクマノだけなのだ。

「しかし、鉱石がこの辺りに見当たらなくなってる」

『あれほどの鉱石です。きっとこの星の人間たちもエメラル鉱石を彫り上げていたんです。それで食用のエメラル鉱石を失ったガクマは地上に現れたんじゃないでしょうか？』

「なるほどな」

「そのガクマがいなくなったから、多分この辺りの人たちは鉱石取り放題ってわけか」

きっとかなり儲かることになるだろうとグレイは予測した。

とその時だった。

「レイオニクスうううううううううううう！！！！」

突然青っぽい鎧を着こんだ謎の男がグレイに飛びかかってきた。

「うわっ！」

いきなり襲いかかってきた謎の刺客にグレイは蹴られ、地を這う状態になる。

「レイオニクスは皆殺しにする！」

凄まじく喚きながらグレイに銃を向けるが、対するグレイもやられっぱなしではいられない。
男の背中を蹴りつけて脱し、ヒュウガから配布された銃『トライガンナー』を向けた。

「ちっ、ガキの癖に…」

舌打ちしながら再びグレイにかかろうとしたが、彼は油断していた。
標的にしか目が行ってなかったせいで、ヒュウガの存在を認知してなかったのだ。

「そこまでだ。青二才」

ヒュウガから後頭部にトライガンナーを突きつけられたことで男は自由を奪われた。

「大人しく我々の母船に来てもらうぞ」

3　エギンハイム村

任務の内容は翼人と人間の争いの終結。場所はエギンハイム村。人口は二百人程度。

シルフィードに乗り、エギンハイム村にたどり着いたところで村の村長が出迎えた。

「よく来てくださいました貴族様。さあ、まずは私の家に御上がりください」

村長はタバサたちを家に案内した。

彼の家に招かれ、タバサはキュルケと一緒に椅子に座って村長に尋ねた。

「まずは状況を教えて」

「ええ、私どもはメイジを何度も雇っていたのですが次々とやられていきました。私どもも案内役を務めているのですが」

「翼人は先住魔法を使うの？」

「先住魔法ですって？」

先住魔法とはメイジたちが精神力を使って放つものとは違い、自然を味方につける特殊な力である。主にエルフなどの亜人が使用する特殊能力。

「ええ、実際に使ったところを見たものもおります」

「姿を見た人は？」

「いえ、おりません。逃げるだけで精一杯でしたので」

「どんな魔法を？」

「なんか、指先から光の弾を出すんです。それで今までのメイジたちは殺されました」

「先住魔法・・・実際に見ることになるなんてね」

親からそういった力を持つ連中は恐ろしいと教えられたこともあり、キュルケはわずかに恐怖した。だが友のためにここで下がるわけにはいかない。

「案内して」

「では私の息子たちに案内させます」

森の中、タバサたちは村長の息子のサム、ヨシアに着いて行った。兄のサムは巨体で弟のヨシアは細身だった。

サムとヨシアは武器を身に付けてない。タバサとキュルケは貴族のマントではなく粗末なポンチョを身に付けていた。杖も隠している。タバサは身の丈よりも長い杖なのでぼろ切れでぐるぐる巻きにして

いた。
これは翼人たちに警戒されないようにするためだった。
シルフィードも空中から飛びながら見張っている。

「このあたりのはずですが…」

そうサムが呟いたとき、タバサはあるものに目をやった。人形、にしては奇妙な形だ。わざわざ倒れてる形の人を模している。

「殺されたメイジかしら？錬金の魔法でも人を石に変えることは無理だと思うけど…」

その死体はそう呼称するより、石像と呼ぶべきだった。一体なんの魔法でこうなったのだろうか？

「ひでえ奴らだ。あの翼つきの化け物どもは人間を虫見たいに見ているからこんな殺し方ができるんだ。人をあんな化け物じみた力で石にするなんてよ！」

兄のその一言にヨシアは猛反論した。一見力強さのない彼の印象とは想像もつかない。

「兄さん！そんな言い方しなくても！彼らの住み処を襲ったのは僕たちじゃないか！！人と同じ言葉を話し、理解もできる！同じ森に住む仲間だ！！」

「あのなあヨシア！何であの化け物どもとお友達ごっこしなきゃいけねえんだ！！あんな鳥の化け物、俺に力があったら殺してやる！！」

「兄さん！」

「まさか、てめえまだあの鳥もどきと…」

その一言でさらに反発しようとしたヨシアは黙り込んだ。

「そこまでにしなさい。喧嘩してる場合じゃないでしょ？案内を続けて頂戴」

キュルケは二人の間に割り込んで止めた。はっと我に返るサムは慌ててキュルケに頭を下げた。

「す…すいやせん！！みっともないところを！！ほら、てめえも謝れ！！」

だがヨシアは謝らなかった。絶対に謝るもんか、と言ってるようなその態度にサムは苛立っていっそ殴ろうとしたがキュルケが再び止めた。

「何か訳ありみたいね。自分の意見が間違ってるとは思ってないみたいね」

「…」

「まっ、そこら辺の口だけ貴族よりはましね」

「え？」

「ほら、まだ翼人は見つかってないでしょ」

「案内、続けて」

サムとヨシアはキュルケの気さくな態度とタバサの何も気に留めてない様子に驚いた。今まで雇っていたメイジは皆威張っていた。こんな貴族は初である。

一行は引き続き森の中を進むと…驚くべき光景を目の当たりにした。

「これは、翼人の…」

そこにはなんとさっきのメイジと同じように石となった翼人が倒れていた。翼にあたる部分もくっきりしている。

「どういうこと？翼人が同じやり方で…」

キュルケも驚きの声を上げる。

「まさか…第三者の干渉…？」

そう思うタバサだが、証拠が少なすぎる。決めつけるにはまだ早すぎだ。

すると、サムは空を指差して叫んだ。

「翼人だ！」

サムの指差した場所には翼が背中から生えた男が二人いた。間違いない。彼らが翼人なのだ。

「去れ人間ども。我々は争いを好まない。精霊の力を貴様らに使い

たくない」

「直ちに去れ」

弓を引き、いつでも矢を放てる体勢で警告する翼人たち。人間ほど争いたがる種族ではないのがわかる。

「石になったあなたたちの同胞を見た。あれは？」

タバサの一言に翼人はピクッと眉をひそめた。

「こっちが聞きたいくらいだ。それより、我々は争いを好まないと言ったはずだ。今そこの人間は我々が貴様らを石化したように言ったが、あのような残忍な殺し方はしない。早く立ち去れ。貴様らに構ってる暇などないのだ」

「貴族様！騙されてはいけません！早くやつらを！」

「あ、バカ！」

キュルケはサムの言葉を遮ろうとしたが、もう遅かった。サムの軽率な発言で翼人たちは彼らを敵と定めた。翼人たちにとって貴族は天敵の一種なのだ。

「人間の薄汚い貴族をまた雇ったか！」

「精霊よ、我らに奴らを蹴散らす力を…」

二人の翼人の弓矢に光が灯り、ヒョウッ！と放たれた。風のように早いそれはタバサたちに向かって飛んでいく。

「フレイムボール！」

「ウィンドブレイク」

二人の魔法がその翼人の矢をなんとかかき消した。しかし、ハルケギニアの貴族たちの魔法とは違い、翼人たちの先住魔法――正しくは『精霊の力』――はメイジの使う魔法とは違って精神力を使わない。だからほぼ無制限に使うことができるのだ。

「たかが一度消したところで！」

翼人たちはタバサたちに反撃しようとした。

「我に仇なす敵を「待ってください！！」え！？」

そこに、翼人の少女が人間と翼人の間を割り入るように現れた。

「アイーシャ！？」

ヨシアはそのアイーシャと呼んだ少女を見て驚きの声を上げる。どうも知り合いのようだ。

「戦ってはなりません！武器を収めなさい！」

アイーシャは二人の翼人に言うと、二人の翼人は逆らえない様子で弓をしまった。

「アイーシャ」

「ヨシア…」

二人は互いに歩み寄った。恋愛経験豊富なキュルケはこの二人の関係にすぐにピンときた。

「なるほどね。彼女、あんたのこれ？」

キュルケはヨシアに小指を立てた。ヨシアとアイーシャは何も反論できず顔を赤くした。

そしてヨシアはようやく口を開いた。

「お願いです！翼人たちに危害を与えないでください！彼らは何も悪くないのです！」

「私からもお願いします！！人間と翼人が争うなんて私には耐えられません！！」

二人はタバサとキュルケに頭を下げて懇願する。

だがすぐに「はい」と答えたら場が余計に混乱する。他にも人はいるのだ。タバサはあることを尋ねてみた。

「まず聞きたいことがある」

「なっ、なんでしょう？」

「翼人たちはあのような殺し方はしないと言ってたけど…本当？」

アイーシャは石化した翼人を見て首を横に振った。

「あれは、この地に眠っている岩の竜が原因なのです」

「「「「岩の竜？」」」」

「あれを見てください」

アイーシャは遠くにそびえる岩山を指差した。

「あの岩山には、遥か昔から『ガクマ』という怪物が眠っているのです。
ガクマはその口から吐く光でいかなる物体を石に変えて補食することで生きるんです。でも、岩山でしか生息しないはずのガクマが下山してきた…」

「ガクマが！？」

翼人の一人は驚きの声を上げた。

「大変なのね！こうなったら翼人だの人間だのなんて言ってる場合じゃないのね！」

「確かにそうね。タバサの任務はこの村の人と翼人の争いの終結。犠牲はなるべく無くすことが鉄則よね」

「ちょっと貴族様！あの忌々しい翼人どもを討伐しに来たのではないのですか！？」

納得できない様子でサムはキュルケとタバサに問い詰めた。

「さっきキュルケが言ったように私たちはこの辺りの争いを止めに

来た。翼人の討伐は作戦行動に含まれない。それにもし戦えば、双方に多大な犠牲が出る」

「あんな化け物たちと仲良くできませんよ！こうして近くにいるだけで…」

とサムは続けようとしたが、ここでキュルケが杖をサムに突きつけた。

「そんなちっぽけなことにこだわって貴族に詰め寄る平民を火炙りにしてもいいのよ？」

サァーッとサムから血の気が引いた。貴族に逆らえば、とてつもなく恐ろしい目に合うことを彼はよく理解していた。

「きゅいきゅい！さっきから聞いていれば不機嫌極まりないのね！父様と母様はよく言ってたのね！翼人の人たちは争いを好まない、平和主義の種族って！」

「そうね。この二人を見ていたら、そう見てとれないわ」

キュルケはちょっと意地悪そうな笑みでヨシアとアイーシャを横目で見た。その二人は、どう受け答えしたらいいかわからず、顔を赤く染める。

「そう言えば、あんたたちはいつどんな感じで知り合ったの？」

「それは以前、僕がキノコ狩りに山を上っていた時に足を怪我して…その時にアイーシャがやって来て、魔法で僕の怪我を治してくれたんです。

あれが先住魔法って言うんだよね。初めて見た時は驚いた」

「先住魔法って言い方はあまり好まないの。私たちは精霊の力と呼んでるわ。この世界の森や石、または建物には精霊が宿ってる。私たちはその力を借りてるだけ」

「このようにアイーシャが僕の知らないことをよく教えてくれるんです。それでお互いのことをもっと知りたくて、一目を盗んで会うようになって……」

そこまでいくとヨシアは赤面して言い辛そうに黙り込んだ。

「素敵すぎるじゃないの！あんたたち、もうこうなったら結婚して百歳になるまで一緒に生きてから逝きなさい！ここで引き裂かれて終わりなんてバッドエンドは絶対に認めないわよ！」

翼人と人間、元々対立してた普通ならこんな恋愛はあり得ない。だがキュルケにとって種族間の争いなんて些細なもの。他人の恋人を奪うことを面白がる彼女は、本気で愛し合ってるカップルにまで手を出すことは絶対に許されないことを知っている。

「きゅい！シルフィから見ても素敵な恋なのね！」

「でしょ？こんなこと滅多……に……」

ここでようやくキュルケは気づいた。

きゅいきゅいなんて誰が言ってるの？

あたしはさっきまで誰と話していたっけ？

サム？それともヨシア？いや、あの声は女の子の声だ。ならタバサ？いや、あんな話し方なタバサは絶対想像できないしあり得ない。

ならアイーシャか?そのアイーシャもこちらと視線が合ったとき、違うと首を横に振ってる。

まさか…

自分の横に停まった竜と視線が合うと、その竜は冷や汗をかいていた。

「喋る竜なんかいないのね…」

遂にはボロを出してその竜、シルフィードは言ってしまう。

「バカ…」

タバサに限っては呆れていた。

「ドラゴンが……喋ってるうううううううううううううう!!!?」

タバサを除く一同の絶叫が森中に響いた。ヨシアとサムは兄弟仲良く腰を抜かし、キュルケも驚きのあまり顎が外れかけていた。

「授業で習ってたけど、シルフィードって韻竜だったの!?」

以前に説明したと思うが、韻竜は言語能力に優れ、翼人たちのように精霊の力を扱える種族だ。

バレた以上隠しても仕方ないのでキュルケがそれを説明した。

「他言無用…話したらどうなるかわかる?」

いつもは大人しそうなタバサも、もしシルフィードの正体が韻竜だとバレたら彼女がどうなるか知れたこと。サムとヨシアを睨み、忠告の意を込めて杖を向けた。無論逆らえない二人は首を縦に振りまくって頷いた。

「そう言えば、そもそもこの事態の発端てなんなの？」

キュルケはサムとヨシアの方を見て言った。

「僕たちの村は木を切ってできた木材を売るのを生業としています。ある日、村から少しばかり離れた場所に巨大な大木があるんです。それを切って高く売ろうと父、いや村長が決めたんです。でもその木は…」

「私たち翼人たちの巣なんです」

ヨシアの後に続くようにアイーシャが答えた。

「別にこんなことしなくても村は平気なのに、父は反対する僕の意思を無視してこの計画を推し進めようとしたんです。翼人がいるなら尚更だって…」

「ヨシア、てめえ村のみんなが貧しくてもいいのか！？もしもの時に金がなかったらどうする！？貴族様のお助けどころか、まともに飯が食えなくなったら責任とれるのか！？」

「僕だって貧しいのは嫌さ！だけど、人の命を奪ってまで贅沢なんかしたくない！絶対後悔するだけだ！なら兄さんは、逆に翼人たちのわずかな贅沢のために命を奪われても平気なのかい！？許せるのかい！？」

弱虫ヨシアの癖に……
言いたい放題な弟にサムはいっそ逆らえないよう痛め付けてしまおうかと思ったが、キュルケに「一度じゃ聞こえないなら、いっそ火炙りにさせましょうか？」と脅され、結局大人しく引き下がることしかできなかった。

「退去はできないの？」

タバサはアイーシャに尋ねると、彼女は頷いた。

「あの地は私たち翼人にとって大切な場所なんです。ヨシアの村が完成する以前からずっと長い間…
ですから、たとえいかなるお方の命令でも……」

その時、大きな地響きがその場全体を襲った。
彼らの中には地震を経験した者はいるだろう。しかし、この地震は今までになくかなりでかい。

すると、地面から巨大な影が這い出てきた。

ペンドラゴンの砲撃で倒されたはずの怪獣、ガクマだった。
いや、微妙に違っていた。ペンドラゴンに敗れた一本角のガクマとは違い、たった今現れたのは二本角のガクマだ。
ガクマは兄弟怪獣だったのだ。

「ガアアアア！」

ガクマはタバサたちの元へ近づいてくる。

「こっちに来る！」

タバサとキュルケは杖を手に、アイーシャは祈りを捧げるように手を閉ざじ、その地の精霊たちに語りかける。

「フレイムボール！」
「ウィンドブレイク」

だが、岩石の肉体であるガクマには全く効いてなかった。

「やっぱり効かない！」

それどころかアイーシャの場合…

「精霊の力が…」

使えなかったのだ。
この時、ガクマの出現で精霊が怯え、アイーシャに力を貸すのを拒んでしまっていた。

「ここは退くのが上策」

「逃げるのは気にくわないけど…仕方ないわね」

自分たちの武器である魔法が全く通じないのでは話にならない。
逃げるしか選択肢がない。

だが、ここでヨシアが転んでしまう。

「ヨシア！」

いくら意見が対立しても弟。兄であるサムはすぐ助けに向かおうとしたが、その前にアイーシャが滑降しながらヨシアの下へ急ぐ。

「アイーシャ様危険です！お戻りください！」

一人の翼人は引き留めようとしたが、肝心の彼女はヨシアの下に着き、彼を支える。

「ヨシア、大丈夫！？」

「ご、ごめん……」

少々和やかになる二人の様子を無視し、ガクマは容赦なくその巨大な足をあげてきた。

「あああああ！！」

アイーシャはヨシアを庇うように上から覆い被さる。ここまでか……だが、助け船は意外なところから来た。

ガクマに煙を吹いた何かが飛来し、ガクマの体に激突すると同時に爆発を起こしたのだ。

「今のは！？」

爆発だからってさすがにルイズだとは信じがたい。結果的に違っていたが。

遠くからタバサにとって見覚えのある飛行物体が飛来した。

「ペン、ドラゴン…」

ペンドラゴン船内でオキはモニター越しでガクマを見ると、驚きの声を上げた。

「ガクマがもう一体いたなんて！」

「ボス、地上に人がいます！」

「クマノ、ミサイルを発射しろ！怪獣が怯んでる隙に彼らを確保するんだ！」

ヒュウガの指示でクマノはペンドラゴンよりミサイルを発射、ガクマを攻撃した。

「グゴオオオオオ！」

ガクマが怯んでいる隙に、ペンドラゴンは彼女たちの近くまで低空飛行、停滞すると、入り口からグレイが顔を出してタバサたちに向かって叫んだ。

「乗って！早く！」

まるで当然のようにタバサはシルフィードに乗り、他の面々に乗るよう促した。

「大丈夫なの！？」

得体の知れないペンドラゴンにキュルケは動揺を隠せずにいた。

「大丈夫、敵じゃない」

親友であるあのタバサが信じているのだ。キュルケはペンドラゴンを信じ、無理やり呆然としていたヨシア、サム、アイーシャの三人と二人の翼人を乗せた。

4　翼人と人間にかけ橋を

タバサたちはもはや言葉を失っていた。なにせ、今彼女たちのいる船、スペースペンドラゴンは彼女たちの想像の範疇をはるかに上回っていたのだ。

「この船、精霊の力で動いてないのに、すごいわ…」

「こんな乗り物が存在していたとは…」

アイーシャら翼人たちも驚かざるを得ない。ヨシアとサムも、果てはキュルケも壁中を見て回って目を丸くしている。

「ペンドラゴンにようこそ。タバサ」

ヒュウガは以前のように笑顔でタバサたちに言った。

「タバサ、知り合いだったの！？」

「以前、別の任務で助けられた。敵じゃない」

まさかタバサがこれほど未知なる存在と知り合いになっていたとは予想だにしなかったキュルケ。それから彼らは自己紹介、なぜガクマと遭遇したのかなどの現状を互いに話し合った。

ＺＡＰはグレイを襲った謎の男について何か知らないかタバサたちに尋ねたが、何もわからなかった。

拘束されているその男を見て、誰もが首を傾げた。

こいつは誰だ？と。

「見たことない鎧ね。ロバ・アル・カリイエの人かしら？」

ロバ・アル・カリイエとは、トリステインやゲルマニアなどの国より遥か東方に存在する区域である。

メイジはいるようだがあまり内情を知らされておらず、危険としか情報のない。そこから来た男ではとキュルケは予想した。

一方、指令室でオキはコンピュータで近くに怪獣の反応がないか調べ、クマノはペンドラゴンを運転していた。

「……これは！」

何か反応がある。赤い点が一つ、いや…二つ！？

「ボボ、ボス！怪獣の反応が二つもキャッチされました！」

「なにい！」

ヒュウガは直ちに指令室に走り、コンピュータのモニターを見ると、確かに二つの反応である赤い点が互いに向き合うようにマークされている。

「バイオセンサーで調べたら、この反応の近くには人口密集地があります！それも二ヶ所です！」

「バカな…！」

タバサたちもその場に居合わせた。

「人口密集地…もしかして！」

ヨシアはクマノの隣の運転席の窓から外を覗き込むと、北西の方向から煙が上がっている。

「アイーシャ、来てくれ！」

アイーシャもヨシアに呼び出され外を眺めると、言葉を失った。あの煙の元は…

「僕たちの村に…」

「私たちの巣が！」

間違いなかった。自分たちの故郷が荒らされていたのだ。

「人間の方！早く船を出してください！」

そう言われたクマノは慌ててハンドルを握り、エギンハイム村の方角にペンドラゴンを飛ばした。

翼人たちの巣である大木たちと、エギンハイム村は怪獣の攻撃で荒れ放題となっていた。

地上にて、翼人たちは森の精霊との契約を争いに使うことを躊躇っていたが、このままでは何もできないまま死ぬこととなる。

「大地の精霊よ。我らに邪なる者どもから守る盾を！」

複数の翼人たちが力を合わせ、地面より大地の壁を作り出し、怪獣からの進撃を阻んだ。だが、怪獣はその壁に自らの身を叩きつけ、壁を破壊しようとする。

「族長！いくら精霊の力で壁を作っても長くは持ちません！」

「っ……全員女子供を優先して引き上げろ！」

翼人たちが女性や子供を連れ、自分たちの集落から離れた。
もちろん、破壊され続けボロボロとなった故郷を見て嘆く者はいた。
離れようとしない者も多数発生した。

「私たちの集落が……」

また、故郷を壊された怒りで怪獣に無謀にも立ち向かおうとする者も。

「くそぉっ！」

「止せ！このまま突っ込めばお前も石にされるか食われちまうぞ！」

石にされる……
実はこの時、翼人たちの集落を破壊していた怪獣は……

「ガアアアア！！！！」

ペンドラゴンのハイパーオメガ砲で倒されたはずの、一本角のガク

マだった。
ガクマの光線で次々と石にされる木々や逃げ遅れた翼人たち。
その悲惨な光景を、とある場所から楽しんでいた黒い帽子に黒マントの男がいた。

「さあ、我が力で『超獣』に生まれ変わったガクマの兄弟たちよ。その怒りを、力を、だみんを貪るだけの愚かな下等生物に見せつけるのだ！ウハハハハハハハ！！！！」

一方でエギンハイム村の住人たちも村から避難していた。

「俺たちの村が！」

いくら対立種族と言えど、故郷を思う気持ちは翼人と同じ。その強い思いのあまり村から離れるのを拒否する者がいた。

「皆の者、村から離れるのじゃ！急げ！」

村は二本角のガクマによって石にされたり、踏み壊されていく。
ヨシアとサムの父である村長は残った村人たちに必死で呼び掛け、村から避難する。
その逃げた先で、偶然にも翼人たちと鉢合わせした。その途端、人間たちは非情にも翼人たちを罵る言葉を上げた。

「お前たち翼人のせいだ！お前たちが村から出ていかなかったせい

であの怪獣どもが現れたんだろ！」

「屁理屈を申すな蛮人め！我々は争いを好まぬ！だいたい、貴様らが我々にとって重要な領域に足を踏み入れ、勝手に自分たちのものとほざいてるだけであろう！」

同じ犠牲者同士なのにこんなところで言い争い。こんなことをしても何も解決しないのは、本来ならわかるはずなのに…

「や、やめるんじゃ皆の者！人間の方々も言い争いをしてる場合では…」

翼人の族長はなんとか止めようとしたが、老いている影響もあって自らの体力を削られてしまい、膝を着いてしまう。

「とっととでてけったんだよ！」

「ふざけるな！だから貴様らは野蛮なのだ！」

言い争いは、遂には暴力にまで発展してしまいそうになった。人間たちは斧や弓を、翼人たちは弓や槍を手に精霊の力を行使しようとした。

その時だった。

バアアアン！

凄まじい銃声がその場一帯に響き渡った。

突如の、何かが爆発したようなその音は、翼人や人間たちを聞こえてきた方に振り向かせた。

「皆の者、争ってはなりません！武器を下ろしなさい！」

ＺＡＰクルーにタバサとキュルケ、ヨシアとサム、そしてアイーシャら三人の翼人だった。

「アイーシャ様！？」

「サム、ヨシア！」

翼人たちは驚いていた。なぜ人間たちの場所に自分たちの族長の娘がいるのか。対するエギンハイム村の人間たちも同じだった。翼人の肩を持つヨシアはともかくサムまでなぜ翼人の元に？

「サム、お前まで翼人なんかの味方をするのか！あんな奴らに！」

遂には村人たちは、今まで自分たちの仲間だったサムを見下すようなことを言い出した。

「なっ…」

サムどころか弟のヨシアにアイーシャもこれには目を開かされた。現金なものだ。自分たちのように翼人を敵視した仲間を、ただ翼人たちの近くにいると言うだけで裏切り者扱い。

サムはこのときようやく自分の過ちに気づいた。自分も今の彼らのように、相手のことを全く知りもしないのに勝手な言いがかりで化け物扱いしていたのだ。

キュルケやタバサも自分たちの握る杖を、今にもおってしまいそうな勢いで握りしめていた。

一方でそんな彼らを尻目に、ガクマの兄弟たちは、避難していた翼人や人間たちを目標にのしのしと迫ってきた。

「うわあああ！来るなっ来るな化け物おおお！」

が、その時だった。

突如、ガクマたちの真横から空にも轟く雷撃が襲いかかった。

「ライトニング・クラウドじゃない…」

風系統の魔法でトップクラスの威力のある雷魔法、ライトニング・クラウド。その雷にしても今のはスクウェアクラスのメイジでも放てる威力ではない。

その雷を放ったのは…

「グァオオオ！！！！」

黄色のたてがみに後方に伸びる二本の角を持つ怪獣だった。

またしても怪獣が現れたことに誰もが、より深い絶望感を抱いた。

翼人たちを除いて。

「あれは…」

「アイーシャ、何か知ってるの？あの怪獣のこと」

キュルケに尋ねられたアイーシャはこくっと頷いた。

「はい、あれはほんの少し前にこの地域にいたものです。私たちに

対してとても友好的な怪獣で、人間たちとのもめ事で精神を病ませていた私たち翼人の心を癒してくれていました。でも、まさかあの巨大な姿だったなんて…」

あの怪獣は、アイーシャの記憶の中では等身大、人と同じくらいの体型だった。だがなぜ、巨大化したのだろうか。

「あの怪獣…確か…キングバモス！」

オキは興奮して声を上げた。

とある怪獣の島で王の座にあった、人類に対しては友好的ながらも起こったら手をつけられなくなるほど恐ろしい怪獣。そのパワーは宇宙警備隊、エリートの集まる『勇士司令部』のウルトラマンネオスをも圧倒した。

その名は『変貌怪獣キングバモス』。

「ガアアアアアアア゛ァァァ！！！！！！」

アイーシャはそのバモスの叫び声にある感情を抱いた。今の自分たちと同じ、負の感情…

「怒っている…」

バモスは怒りに怒るほどそのパワーが普段より圧倒的に上昇し、なおかつ自分の体から電気を発生させることができる怪獣。そのパワーは計り知れないものだ。

バモスの怒りの鉄拳はガクマたちの強固な体を砕く勢いで放たれた。その鋼のごとき尾でさらなる攻撃を放つバモス。

さらには一本角のガクマを逆さにして持ち上げ、バックドロップで後方に叩きつけた。

「すごい…」

誰もがそう思った。バモスのパワーは凄まじいものだった。同時にその力が自分たちにも向けられる、といった不安が人間たちの心を飲み込んでいた。

面白く無さそうに黒マントの男はそれを見ていた。

「たかがキングバモスに我が超獣の力が…
さっと始末しろ！さもなくば…」

その苛立ちはガクマたちに伝わり、もし倒せなかった時の恐怖が二体を鼓舞させた。

「ゴオォォ！！！！」

「グガ！」

二対一。最初は優勢だったバモスもやはり二体の怪獣を相手にするのは不利だった。ガクマたちの角の攻撃がバモスの足を刺す。

突進攻撃が繰り返され、バモスはまともに動けなくなってしまった。

そして、二体の怪獣は同時に石化光線を放ち、バモスは足元からだんだん石化してしまい、そして遂には完全に石像となってしまった。

ガクマたちはまだ終わるつもりはなかった。自らの身を引っ込め、

片足で地面を擦りながら身構えている。

「まずい！突進して石になったバモスを砕く気だ！」

「オイラが行く！」

グレイはすぐ飛び出し、石になったバモスを救うべくバトルナイザーを掲げた。

「ゴルザ！」

【バトルナイザー、モンスロード！】

バトルナイザーより光のカードが飛び出し、超古代怪獣ゴルザとなって地上に降り立った。

「ガアアアア！」石にされたバモスに迫るガクマの尾を引っ張り、自分の方へ無理やり引き寄せた。

引き寄せたところで顎を蹴り上げ、背中に乗ってガクマを殴り付ける。だが、ガクマは背中から波動を放出し、ゴルザを背中から落とした。

「グゴッ！？」

ゴルザが起き上がったところでガクマは光線を吐いてゴルザわ石に変えようとしたが、ゴルザは鍛えぬかれた筋力による跳躍力でガクマの光線を飛び越え、ガクマを正面から押さえつける。

そこに膝蹴りでガクマを蹴り、角をへし折ろうと角につかみかかるが、ガクマの角から電撃が走り、ゴルザは手を離してしまった。

「グゴォ！？」

「電気を操ることもできるのか…」
グレイは呟いた。
ガクマは足の爪と角をより長く営利にすると、ゴルザの足元目掛けて突進する。

ゴルザが膝を抱えて痛みをこらえる隙にガクマはあの石化光線をゴルザに浴びせてしまった。

「ヤバイですよ！ゴルザが石になる！」

足元からじわじわと石化していくゴルザ。
先ほどバモスに向けたようにガクマたちは互いに石になったバモスと、石になろうとしているゴルザを挟む形で突進する構えをとっている。

「見てられないわね、タバサ」

こくっ…

もう見てるだけでは無理だ。キュルケとタバサは共に杖を握った。
すると、急にキュルケは村人たちの方を向いた。

「ちょっとあんたたち、頼みたいことがあるんだけど」

「なっ、なんですか？」

「全員武器をとりなさい。あの怪獣の隙を作るのよ」

「貴族様、そんな無茶な！あの怪獣に立ち向かえなんて仰るのですか！？」

「倒す必要はないわ。隙を作ってあのゴツい怪獣（ゴルザ）に止めを刺させるの。時間ないから早くしなさい！」

「あんまりですよ。貴族様は私たちを守るどころか死地に送り込むなんて、結局我々は貴族様から見れば単なる道具ですか…我々はただ必死に税を稼いで生きてきただけなのに…」

ここにきてネガティブな本音を漏らし、村人たちは誰も武器をとろうとはしなかった。が、キュルケはそこで止まるような女ではなかった。今まで落としてきた男たちを口説き落とした時のような根性で口を開いた。

「そうね。でもあんたたちのそれは生きてるフリをしてるだけで、実際は生きてない。生者の仮面を被った死人よ。今のあんたたちのようにただ隅っこでいじけてる奴をわざわざ救ってやるほど貴族は甘くはない。悔しかったら少しは自分を磨きなさい」

次にキュルケはアイーシャの方を向いた。

「あんたは翼人たち全員の力であいつの動きを封じてくれる？」

「…わかりました。やってみます。皆の者、今こそ精霊の力でこの森を守るのです。賛同する者は私に続いて！」

アイーシャの激励で翼人たちは、躊躇いを捨てておおお！と叫んだ。すべては自分たちの平穏を守るため。

「シルフィード」

二人はシルフィードに乗り、怪獣たちの戦場に向かった。

村人はいまだにふて腐れていた。力はないくせに口だけは達者。どうせ途中で逃げるんだろとか、翼人も貴族もあんなのばかりなんだとか。

そん言いたい放題な彼らに、ヨシアは弓矢を手に叫んだ。

「武器をとるんだ！村は、僕たちの手で守ろう！

翼人たちに僕らが何をしてきたか思い出すんだ！今までどんな間違いを犯してきたか！」

ヨシアだけではない。サムも斧を手に村人たちに向かって怒鳴った。

「俺たちはなぜ翼人や貴族からバカにされてきたかわかるか？魔法が使えない？違う！

今の俺たちのように、叶わなければ陰口叩いて、脅されればしっぽを巻いて逃げ出すかおとなしく従うか。そんな情けない姿を晒しまくったからバカにされてきたんだ！

そんな貴族様が俺たちを頼りにしてきてんだ。こんな機会は絶対にねえ。あの貴族様に言われたように悔しかったら武器をとるんだ！

俺たちに続け！

このままいじけてただ殺られるのを待つことこそこの村の真の敗北だ！」

ヨシアとサムの言葉。それは今まで自らの心を闇に潜ませていた人たちに光を射し込ませた。

「そうだ。俺たちのような奴にも意地ってもんがある！」

「あのヨシアでさえやる気なんだ！ここで逃げたら失格だぜ！」

「私たちも行きましょう！」

村人たちは遂に剣や槍などの武器を手に立ち上がった。女子供も石を手に立ち上がる。

「ヨシア、私たち翼人も力を貸すわ。今度こそ翼人と人間の力を合わせ、私たちとあなたたちの集落を作りましょう。誰からも侵されない、楽園を」

「アイーシャ、ありがとう」

翼人たちを率いてやって来たアイーシャに、ヨシアは目尻に溜まった涙を拭いた。そして父である村長の方を向く。

「父さん…」

「ヨシア、立派になったな。なのに私は情けないかぎりじゃ」

「いいんだよ。きっとアイーシャたちは共に生きる仲間として力を貸してくれる。翼人たちと共に生きる明日を信じよう」

「そうじゃな。こんな老骨にまた鞭を打つ時が来たようじゃ」

「よし、行くぞおおお！！！！」

まるで敵国に果敢に立ち向かう軍人のようなサムの怒涛の叫び声で、

翼人と人間の連合はガクマたちに向かって走り出した。

「契約は草木を鞭に変え、我々にあだなす者の自由を奪う！」

連合は二手に別れ、翼人たちは一斉に精霊の力で草木を鞭に変化させ、ガクマたちの体や足をきつく縛り上げた。さすがにガクマたちも拘束されるのをよしとせず、必死にもがく。

「今だ！目を狙え！」

ヨシアの一矢に続き、石や剣や槍がガクマの目を狙って投げつけられる。

人間より遥かな力を持つガクマも急所を立て続けに狙われたら敵わない。

「俺たちも行くぞ！一斉射撃！」

「「了解！」」

ヒュウガ、クマノ、オキらＺＡＰクルーも彼らに続いてトライガンナーを弾切れになる勢いで連射した。

「エア・スピアー！」

「火傷に気を付けなさい。フレイムボール！」

「ギョエエエ！！」

キュルケとタバサの追撃の魔法攻撃により、遂には二体とも視力を失ってしまった。

「ゴルザ、今だ！みんなの想いに応えるときだ！」

グレイは身体中に力を込めると、自分自身の真の姿『グレイモン』を現す。

その変身と同時にゴルザにも変化が起こった。まるで体にヒビが入り、爆発するように割れると、ゴルザの体表がまるで灼熱のマグマのような色に染まった。

同時にに石化は解けた。

煉獄の炎を身につけた超古代怪獣、ファイヤーゴルザ。

ガクマは電撃を浴びせるがゴルザはものともせず、ガクマの角をチョップで叩きおった。

「ゴルザ、お前の新しい技…見せてやれ！」

「ヴウウゥゥ…」

唸り声を上げながらゴルザは額に炎と光を溜め込み、それを強烈な炎弾に変えてガクマに撃ち込んだ。

〈獄炎弾！〉

「ガアアアア！！！！」

「グゴォ…」

炎弾を喰らったガクマたちは倒れ、自らが石となると、土に還るように消えていった。

「「やったあーーー！！」」

勝った。ついに悪夢が終わったのだ。村人や翼人たちから勝利を喜ぶ声が上がった。

しかし、そう簡単にわがたまりがなくなるわけではない。互いの種族を見た瞬間、その場一帯は静まり返った。

「ボス、なんだかまたもめ事が起きそうな雰囲気ですけど…」

不安そうに言うオキに、ヒュウガは首を横に振ってある人物たちに指を指した。

その人物、アイーシャとヨシアは翼人と人間たちの警戒心のつまった視線を省みず互いに歩み寄ってきた。

「アイーシャ」

「ヨシア…」

二人は笑顔で互いの顔を見つめ、やがて愛のある抱擁を交わした。

本来なら相容れない種族同士から生まれたカップルの誕生という喜ばしい光景に、ヨシアの兄であるサムが拍手すると周りの村人や翼人たちも拍手した。

もちろんタバサとキュルケも祝福の拍手を送った。

そして拍手が終わるとヨシアとアイーシャはタバサたちとＺＡＰクルーに向き直った。

「ありがとう貴族様、ざっぷの方々。そして…」

ガクマが倒れた影響で元に戻ったキングバモスを見上げるアイーシ

ャ。バモスもまた、この光景を愛らしい表情で見守っていた。

「この恩は決して忘れません」

ヨシアとアイーシャが手を差し出すと、ヒュウガとタバサは二人と握手を交わした。

グレイはバモスを見上げると、バモスの姿は光輝くカードとなり、彼のバトルナイザーの中に入り込んだ。

「あなたのことが気に入ったみたいですね」

「そうなのかな？」

アイーシャの言葉にグレイは、いまいち実感の湧かない表情を浮かべた。

この一日後、ヨシアとアイーシャは結婚した。

ヨシアは翼人の正装、アイーシャは純白のドレスを身を包み、翼人や村人たちからは盛大な拍手が送られた。

タバサとキュルケも参加し、拍手を送った。

ＺＡＰの四人のクルーたちもこの祝辞に参加し、新たな新郎新婦を祝福した。

ただグレイはある思いを巡らせた。

自分の父はなぜ、異星人の女性と出会い、結ばれたのだろう…

とその時だった。

「ぼ、ボス！大変です！何者かがペンドラゴンのスピーダーを一機奪い去っていきました！」

「何！？」

思わず声が上がりそうになったが、祝いの席でパニックになるわけに行かず、

「仕方ない。こっそり抜け出すぞ」

彼らは気づかれないようにその祝いの場から抜け出した。

「スピーダーαの行方は？」

ペンドラゴンに搭乗し、盗まれたスピーダーの反応を追うＺＡＰ。

「この先のはずですが…」

運転席よりクマノはセンサーの反応を追うが姿が見えない。

「ボス、オイラを襲ったあいつがいなくなってる！」

グレイは拘束していた男の様子を見に行っていたが、その男がいつの間にかいなくなっていたことをヒュウガに伝えた。

すると、クマノのチェックしていたセンサーにある反応が見つかった。

「これは…ペダニウムエネルギー？」

一方、キュルケを一旦学院に送り返したタバサはシルフィードに乗って、イザベラのいるプチ・トロワに向かっていた。任務完了の報告のためである。

「きゅいきゅい。せっかくの結婚式なのにあの伯父様やおちびちゃんたちはどこに行ったのね？」

シルフィードはプチ・トロワに向けて翼を羽ばたかせながら行った。いつの間にか失踪したＺＡＰのクルーたちが気になっているようだ。

「彼らにもきっと事情がある」

そう割りきっていたタバサ。

プチ・トロワへたどり着いた時、二人は自分たちの目を疑った。
プチ・トロワの宮殿が崩壊していたのだ。
「これは…一体どうなってるの？」
これにはいつも冷静なタバサも驚かざるを得なかった。
ちょうど近くを通りかかった平民に事情を聞いてみた。
「何があったの？」
イザベラは部下からの評判は険悪と言える位悪い。もしかしたら遂に部下からの謀反で暗殺されたのか？と思った。
いくら相手がイザベラでも、この形で別れるのはスッキリしなかった。元々タバサとイザベラは仲のよい従姉妹同士だ。昔はミドルネームの「エレーヌ」で呼ばれていたほどで、単純に言えばジョゼフが王になってからイザベラのタバサへの、嫉妬心が爆発しただけのことだ。
だが予想は違った。
「かか、怪獣ですよ！あの宮殿から怪獣がいきなり現れて、宮殿があっという間に破壊されたんですよ！」
「怪獣？その怪獣はどこに？」
「聞いて驚きますよ！
貴族様もご存知ですよね」

「？」

「ウルトラマンが現れたんですよ！怪獣をやっつけてくれたんです。いやあでも、あんな王女がいなくなった後だから怪獣と悪女の同時退治をやってくれた感じではしゃいじゃいましたよ」

この平民の男性もイザベラのことをよく思ってなかったようだ。

果たしてイザベラは死んだのか？

それに、その平民の男性の言っていたウルトラマンとは一体…

5　ダイナミックヒーロー！／レイオニクスハンター

さて、タバサたちがエギンハイム村で奮闘してる頃、ガリア上空で、赤いラインの入った三角形の飛行物体が空を駆け巡っていた。

「ここは…どこだ？確か俺、あの時空のねじれの中に飲み込まれて、父さんと再会してその先の光に進んだら…」

その青年はハルケギニアのどこにもない服装で、少し抜けたようだが根性だけは一級品な印象だった。

「ちょっと、降りてみるか」

その飛行物体、いや戦闘機を下ろした青年は地上に降り立ち、その一帯の調査に向かった。

「ったく、この程度のこともできないのか！愚図め！」

今日もタバサの従姉妹であり、ガリア王女のイザベラは苛立ちの極みだった。

自分の思い通りに少しでもいかなかったらすぐ部下に対して八つ当たり、殴る蹴るの暴行を加える。

彼女に従う者たちは少しでも逆らいたいところだが、相手は王女。

もし逆らえばその権力で一生飯にもろくにありつけない生活を強いられる。

そんな貴族や王族以前に人としてのマナーや常識に欠けるに欠けた彼女は、今日はあることをしようと決心していた。

「宇宙の果ての我が下僕よ！我は念じる！我が導きに応えよ！」

使い魔召喚魔法『サモンサーヴァント』。

その美しいはずの顔は嫉妬心などの負の感情で歪みに歪んでいく。

それでタバサのシルフィードより優れた使い魔を召喚しようと企んだ。

（あたしがあんな人形娘などに劣るはずないんだ！）

あんな竜よりも遥かに優れた使い魔を召喚できれば、父上だってあたしを認めざるを得ない。

父であるジョゼフは今、イザベラに対する愛情はまるでうかがえない。退屈しのぎに彼女にくれたものは『北花壇騎士隊長』の称号だけ。イザベラの心を満たすには至らなかった。

魔法の効果は発動したメイジの精神力によって作用される。憎しみや妬みは人に力を与え、本来魔法の才に乏しかったこのイザベラにもまた、強い魔力を与えた。

しばらくして展開された魔方陣の真ん中に、召喚のゲートは完成した。

「やった！さあ来い！」

竜？それともグリフォン？イザベラの召喚のゲートから何かが飛び出してきた。
だがその影の正体は、彼女が思ってるほど立派ではなかった。

「なんだここは？」

こいつは、人間？いや明らかに違う。
まるで細長い黒棒に目がついているような、不気味な亜人だった。

「あんた…誰だよ？」

「そういう貴様こそ誰だ？」

王女のプライドの強いイザベラはその亜人の口の聞き方に苛立ちを覚えた。こいつは貴族への口の聞き方を知らないのか？

「あたしはガリア王女のイザベラだ！」

「ガリア…あぁ、確かこの星は人間の作り出した格差社会が展開されてると聞いてたが…なるほど。確かに地球よりも文明が遅れてるな」

「あんた…なに訳のわからないことぶつぶつ言ってんだ。とにかくあんたはあたしの使い魔だ。このイザベラ様に絶対の忠誠を誓いな」

逆らったらこいつの家族も故郷もあたしの権力をもってめちゃめちゃにしてやる。嫌なら犬のように素直に従いな、とイザベラは思っていた。
もしかしたら、あの人間娘の竜などより優れているかもしれない。
だが、その返答はあまりにも彼女の心を踏みにじった。

「貴様のような下等生物ごときがこの『ゼットン星人』に下僕になれと？生意気な小娘だ」

ピキビキ！

「衛兵！早く来やがれ！あたしの部屋に入り込んだ侵入者だ！殺してしまえ！」

見込み違いだった。こんな無礼極まりないやつに可能性を見出だそうとしたのが失敗だった。こんなやつ殺してさっさと新しい使い魔を召喚しよう。

衛兵たちは集まり、一斉に火や風の魔法で『変身怪人ゼットン星人』に攻撃を仕掛けた。だが、ゼットン星人はそれをなんとか避けていく。

「ちっ、ハエが偉そうに。だが仕方ないな」

彼が懐から取り出したもの、それはなんとグレイが持ってるものと同じバトルナイザーだった。

「行けナース！下等生物どもを皆殺しにしろ！」

【バトルナイザー、モンスロード！】

鈍い緑色に輝く光のカードがゼットン星人のバトルナイザーより飛び出し、黄金の円盤となってプチ・トロワの空に現れた。

『宇宙竜ナース』

円盤形態のナースからビームは放たれ、イザベラたちのいる宮殿に向けて放たれた。

「ひ、きゃあああ！！」

「たっ、退避！宮殿内の者を安全な場所に避難させろ！」

衛兵たちはイザベラの部屋を出て、宮殿内のメイドや使用人たちの避難に向かった。

ただ一人、イザベラを残して。

「ちょっとお前ら！あたしを置いていくな！」

助けを求めるイザベラだが、誰もその呼び声に応えようとしなかった。

偶然逃げ遅れていた使用人の男を見つけ、イザベラは頼み方を無視した口で怒鳴った。

「おい！あたしを背中におぶれ！」

他にも人がいたことに気がついた使用人は助けに向かおうとしたものの、その声の主がイザベラと知った瞬間「ちっ」と舌打ちして逃げ出した。

「この、ちくしょう…」

その使用人の他にも逃げ遅れていた者はいた。イザベラは何度も助けを乞うが、誰一人として助けようとしなかった。

「おい！あたしを助けろ！褒美はとらせる！平民の場合は貴族にとりたて…いやあああ！！」

宮殿はもはや瓦礫の山と化そうとしていた。天井から落ちる石は次々とイザベラの体を痛め付け、青と白の美しいドレスは所々血で赤く染まっていく。

そんな中、衛兵の一人が彼女の近くに姿を現した。
おそらく他に逃げ遅れた人間を探しに来たのかもしれない。

「おい！あの人形娘を連れ戻せ！あの竜を退治させろ！早くしやがれ！」

その衛兵はそれを聞いた途端唖然とした。この衛兵はイザベラよりもタバサ、つまりシャルロット王女の方に忠義の心を持っていた。あの恐ろしい化け物に自分たちの真の主である王女をみすみす捧げるなど…

「さっさとしやがれ。でないと貴様の家族をあたしの権力で…」

一度脅せば大人しく従う。そう思っていたが、その衛兵は彼女の予想と大きく違う返答をした。

「私がお仕えしているのはシャルロット王女。お前のように人を人とも思わない、それもあの王権の剥奪者の娘を助ける義理はない。死んでしまえ！」

グサリと剣で胸を貫かれたような感覚だった。衛兵はイザベラに今までの恨みを込めた言葉を吐き捨てて立ち去っていった。

もう逃げる気力もない。
誰も助けに来ない。
さっきまで死にたくないと必死だった彼女は、その場にへたり込んだ。

そっか、誰も助けに来ないんだ。
みんなあの人形娘の方がいいんだ。
騙してたんだ。

自分が死んだら父上とあの人形娘は自分をどう見るだろうか。やはり見下すか何も知らなかったように忘れるだろうか。
魔法の才に乏しく、配下から愛されず、父にも愛情を注がれなくなった自分はなんのために存在していたのか…

「ふ…ふはは…あはは…」

渇いた声で自らを嘲笑し、床の上に倒れ込んだ。
瓦礫の一部が自分の真上から落ちてくる。これで最後か…
と思った時だった。

……

たった今落ちてきたはずの瓦礫がいつまでたっても落ちてこない。うっすらと目を開けると、そこには変わった格好をした青年がいた。

「ナーイスキャッチ！見たか俺の超ファインプレー！」

その青年が落ちてきた瓦礫をキャッチしていたのだ。しかし、決して軽くなかったのか、邪魔にならない場所に置いた瞬間手をぶらぶらと振った。

「あ～いてて！やっぱ気張りすぎたか？」

なんで…？イザベラは顔をゆっくりあげた。

「あなたは…？」

「おっ、怪我ないか？ってありまくりだな。すぐ脱出するから捕まってろ」

最初は嘘だと思った。だって自分のことを助けるやつなんて一人もいないと思っていた。だがよく見ると、彼女の知らない人間だった。

青年はイザベラを抱き抱えると、落ちてくる瓦礫を潜り抜けながら宮殿の外へと走り出した。

ズサササ！とスライディングを決めると同時に二人は脱出に成功した。

「セーフ、ホームイン！っと」

青年は空を見上げた。ナースの攻撃はいまだ地上に向けられたまま

で、宮殿周辺の街は不味い状態だ。

街から離れた方が良さそうだ。青年は街から少し離れた場所の草原に置かれた岩の影に彼女を置いた。

「ここを動くなよ。すぐあいつをなんとかする」

「あなたの、名前は…？」

「俺？ああ言ってなかったな。
俺はアスカ・シン。『不死身のアスカ様』ってとこかな」

「アスカ…様…？」

安心したせいなのか、イザベラは岩にもたれかかる形でまどろんだ。
アスカは眠りについた彼女に背を向け、懐から変身アイテム『リーフラッシャー』を出し、空高く掲げた。

「ダイナあああああああああ！！！！」

「さあ壊せナースよ！下等生物に『レイオニクス』である私の興を削いだ愚かさを思い知らせるのだ！」

ナースを操るゼットン星人は遠くで高笑いを上げていた。

「全くあの小娘…一人別のレイオニクスを殺せるところでこんな場

所に呼び出しおって…ん？」

宮殿から離れた草原より目映い光の柱が現れ、空に届くほど高く登った。

「まさか…この光は！」

その光の柱より現れたのは、この次元でもシュウヘイが元いた次元の地球とは別に存在する地球に出現した戦士だった。
アスカが防衛チーム『スーパーＧＵＴＳ』に入隊したばかりの頃、宇宙空間を漂っていた彼の前に現れた『光』が彼と一つになることで誕生した、光の戦士。

「あれが噂の…ゼロ？」

「違う。だが…彼もまたウルトラマンだ」

その名は、『ウルトラマンダイナ・フラッシュタイプ』。

「ジュワ！」

「くそ、ウルトラマンめ！この星でも我々の邪魔をするか！さては『レイオニクスバトル』の噂を聞き付けたか！
ナース、殺れ！」

ウルトラマンの出現という予想外な事態にゼットン星人は驚くも、すぐ戦いに集中する姿勢となり、ナースをダイナ討伐に向かわせた。
どくろを巻きながらナースはダイナに接近する。
ナースからの攻撃に備え、対するダイナもジリッ…と身構える。
先ほどから自分の周りを回っていくしか動きを示さない。何か狙っ

ているのか。と次の瞬間だった。
ナースの体よりビームが放たれ、ダイナを襲った。
「ウォ！」
バンバンバン！
マシンガン並の勢いで放たれる光はダイナに向かって雨のように降り注ぐ。
「この！」
いざ反撃に転じようとしたダイナだが、ここで思わぬ事態が発生する。
砂煙に紛れ、ナースが姿を消したのだ。一体どこに消えたのだ
辺りを見回そうとしたその時だった。背後の砂煙の中を掻い潜ってナースが姿を現した。
「ギェエエエ！！」
そしてダイナの肩にガブリと噛みつく。
「ウォアア！」
必死にもがきながら離そうとするダイナだったが、ナースの顎の力は半端ではなく、なかなか離れようとしない。それどころか、ナースはダイナの身体中を縄で縛り付けるように絡み付いていく。
ミシミシ！

その圧力はそこらの鉄をも潰してしまうほどの勢いだった。

「ヌォォオオ…！」

このまま締め上げられた果てに潰され、身を二つに分けられるにはいかない。

「ハアアア…ダアッ！」

ダイナは額に埋め込まれた宝珠『ダイナクリスタル』を赤く輝かせると、一瞬だけ半透明となり、そして一瞬にして先程までの青と赤の模様から、真っ赤なボディに変わった。

多数の光線技と素早さと引き換えに超絶的なパワーを誇る赤の戦士、ウルトラマンダイナ・ストロングタイプ。

「デア！」

ナースの頭をわしづかみし、ダイナは地面にナースの頭を叩きつけた。

そのダメージのせいで、ナースはダイナへの拘束を解いてしまう。

逃亡を図ろうとしたが、ダイナは逃そうとしない。ナースの尾を掴み、引っ張って地面に叩きつけた。

すでに半壊しているナースは空を飛ぶほどの力は残されていなかった。

ダイナは元のフラッシュタイプに戻ると、両腕を十字に組んで必殺

光線を放った。

〈ソルジェット光線！〉

青く輝くその光はナースの頭を砕き、頭を失ったナースは地に落ち、決して動くことはなかった。

「お、おのれ…覚えておれウルトラマン！」

ゼットン星人は捨て台詞を吐き、どこかへと姿を消した。

「逃がすか！」

〈ダイナテレポーテーション！〉

ダイナはゼットン星人を追おうと、自分も瞬間移動能力でその場から姿を消したのだった。

「…様！姫様！」

誰……？

イザベラはうっすらと眼を開けた。

見覚えのある顔が自分を呼んでいる。

「東花壇騎士団長のカステルモールです。異変を聞きつけ、駆けつけました」

ようやく視界がはっきりすると、カステルモールの背後に大勢の部下兵士たちが並んでいた。実をいうとカステルモールはイザベラを快く思わない側。本当はイザベラが死んでも構わなかった。それでも本心を明かさず、偶然気絶していたところを発見したイザベラを起こした。

「う…」

「は？」

なんだがイザベラの様子がおかしい。いつもの邪な雰囲気がまるで見られない。どうも子供っぽい感じだ。しまいには…

「うわあああああん！！！！」

まるで仕事で遠く離れた親とようやく再会した子供のように泣き出してしまった。

イザベラは悪印象だらけなものだから、カステルモールら東花壇騎士たちは唖然となった。

この泣き声を聞き付けたのか、タバサとシルフィードもやって来た。この二人も目を疑わざるを得なかった。あのイザベラが泣きわめいてるのだから。

「あんなイザベラ…初めて見た」

「ホントに…助けに来たんだよな…」

涙を拭くイザベラにカステルモールは手をさしのべた。

「我々の拠点に向かいましょう。この宮殿はしばらくは建て直されませんから。シャルロット様もこちらへ」

タバサの存在に気づいたカステルモールはタバサを見て言った瞬間、イザベラは顔を真っ赤にして顔を伏せた。

嫌っていた相手には見られたくなかった時に見られてしまった。誰だって恥ずかしい。

カステルモールに背負われたイザベラはタバサに小さく言った。

「言いふらしたらただじゃおかないからな。エレーヌ」

「！」

思わぬタバサは足を止めた。今度は「人形娘」ではなく、昔のように自分をミドルネームの「エレーヌ」で呼んでくれたのだ。

この後、イザベラは「アスカ」と名乗る男はいなかったかとカステルモールに尋ねたが、彼はおろか、誰もアスカがどこに行ったか知るよしもなかった。

一方、ＺＡＰのペンドラゴンは、スピーダーαを盗み出した犯人を探しに空を駆け巡っていた。
以前捕まえ、拘束していた謎の男はいない。おそらくそいつが脱走しスピーダーを盗みだしたのだ。

そしてペダニウムエネルギーをキャッチしたところで現在に至る。

「ペダニウムエネルギー…ペダン星のエネルギー反応がどうしてこんな場所に？」

「オイラがスピーダーβで調査してみるよ」

「わかった。気を付けてな」

グレイの推薦を承諾したヒュウガは出撃を許可し、グレイは残ったスピーダーβに搭乗した。

二手に別れ、ペンドラゴンとスピーダーβはαの捜索を再開した。

「えっと…この辺りから反応が出てますが」

クマノが運転席の窓から外を見つめるが、何も見当たらない。異常もたいして見られない。

ならばなぜペダニウムエネルギーの反応があったのだろうか？
すると突然、ペンドラゴンに大きな衝撃が走りだした。

「どうした！？」

「たった今確認したエネルギー反応の元に引き寄せられています！それも、真上からです！」

「なんだと！？」

ヒュウガがクマノの言葉を聞いて驚きの声を上げたとき、ペンドラゴンは空に向かって引き寄せられていった。

一分経つ間もなく、真上に現れたその巨大な飛行物体の内部に保管された。

「ペダニウムエネルギーがこの飛行物体の内部から発せられているなら、おそらくこの施設にペダン星人がいるだろうな」

隊員服を整え、トライガンナーをホルダーにしまい、グローブを着ける三人。

ヒュウガが言い終えると、オキはヒュウガを見て尋ねてきた。

「グレイに連絡もしないで本当にペダン星人と交戦するんですか？あいつらは…」

ペダン星人はどれも曲者揃いと言っても過言ではない。なぜなら、あのウルトラセブンだけでなく、後にサイトたちと戦った時にも彼らを追い詰めたキングジョーを作り出したのだ。

「そうならないことを祈ってるよ。グレイがいても、それは同じだからな」

クマノが代わりに答えたその時、突然何者かがテレポーテーションのように姿を現した。
あの、以前ペンドラゴンで拘束していた男だった。
三人は即座にトライガンナーを向けた。

「慌てるな。お前たちに話をしに来ただけだ。それとこのペダン星制の無人ドックにペダン星人は俺一人しかいない」

男は身に付けていたマスクを外し、姿を見せる。
その姿は全くと言えるほど地球人やハルケギニアの人間と同じだった。

「ペダン星人も祖体はヒューマノイドだったのか…」
オキは銃を構えたまま呟いた。

「俺はダイル。ご察しの通りペダン星人だ」

すると、突然ペンドラゴンが大きく揺れだした。
クマノが外を見ると、なにやら細いビームがペンドラゴンの所々を切り裂いている。

「俺のペンドラゴンが！」

「『俺の』？」

クマノの発言にオキは目を丸くした。いつからこのペンドラゴンが彼のものになったのだ？
クマノは自分の手を着けた機械には我が子のような愛着を持つ癖があるためか、このペンドラゴンも同じように大事にしていたのだ。

「このペンドラゴンとやらを、怪獣にも対抗できるよう改造してるのさ」

「改造？」

ヒュウガが尋ねると、続ける形でダイルは答えた。

「遥か昔から数年毎に、レイブラッド星人の後継者を決める、怪獣を操る者『レイオニクス』同士のバトルで宇宙の星たちは荒れていってる。我々ペダン星も多大な被害を被って命を落とした同胞は数知れない。
事態を重く見た俺たちは『レイオニクスハンター』を結成し、この星でのレイオニクスバトルの主なフィールドである『ロバ・アル・カリイエ』に根拠地を置いた」

「レイオニクス、ハンター？」

「その名の通りレイオニクスを抹殺することを仕事としている。だが、今ここにあのレイオニクスのガキはいないようだな」

そしてまた揺れ出すペンドラゴン。クマノはその揺れでまた動じるそぶりを見せた。

「慌てるな！もうじき作業は終了する」

その揺れが終わると、この無人ドックに飲み込まれる前のように空が拡がっていた。すでにあのドックが勝手に消滅したらしい。

すると、どこからか一体の怪獣がペンドラゴンに向かって飛来した。

「ベムスターだ！」

オキが叫んだ。

『宇宙大怪獣ベムスター』。かつてウルトラマンジャックを一度敗北に追いやった、怪鳥型の怪獣だ。

「武器はいつも通り使用できる。騙されたと思って使ってみろ」

「…クマノ、ワイバーンミサイル発射だ！」

「り、了解！」

ヒュウガは一度疑いはしたが、すぐクマノに命令した。言われたクマノはすぐ運転席に座り、ミサイル発射のスイッチを押し、狙いをベムスターに向ける。

すると、ミサイル発射口から何十発もの高威力ミサイルが放たれ、ベムスターを直撃、大爆発を起こした。

「きぇえええ！！」

ミサイルを受けたベムスターはダメージが大きすぎた影響で逃亡を開始する。

「なんて威力だ…」

「驚くのはまだ早い！ちょっとどけ」

「わあっ！」

ダイルはオキを無理やり退かすと、カタカタとキーボードを叩き出した。

「ペダニウムランチャー発射用意、完了」

「ペダニウムランチャー!?待て!もうベムスターは逃げ…」

ヒュウガが声をあげるのを他所に、ダイルは発射スイッチを躊躇わず押した。

「ペダニウムランチャー…発射!」

スイッチが押されると同時に、以前はハイパーオメガ砲のために使われた発射口より、その何倍もの凄まじさを誇るビームが放たれた。そのビームはベムスターを貫き、爆発四散させただけでなく、その先にあるハルケギニアの双月の内、赤い月の方にはっきり見えるほどのクレーターを残した。

「「「……」」」

空いた口が塞がらなくなるＺＡＰクルー。

「ハアッ!見たか?これがペダンの科学力だ」

得意気になるダイルに、ヒュウガが鬼の形相を表して彼に銃を向けた。

「今すぐペンドラゴンから降りろ!このペンドラゴンは本来戦艦ではない!
ましてや、逃げる相手を消すなど…」

そうだ。元々はこの星で新たな資源を探す任務に着いていただけだ。怪獣と戦うこととはまるで違う。

「バカを言え。怪獣だぞ？これくらいの兵器がなければレイオニクスだって殺せない」

「それは、グレイのことも言ってるのか？」

「ああそうだ。レイオニクスはどいつもこいつも戦いと血に飢えた狂戦士だ。いずれお前たちを裏切り、レイブラッド星人の後継者となるべく果てしない戦いを繰り広げる」

「あいつはそんなやつではない！言っておくが、お前が兵器をくれてやったことと引き換えにあいつを引き渡そうなんて思ってはないからな」

「立場をわかってないなお前らは」

ダイルは勝ち誇るように言った。

「そうタダで兵器をくれてやるほどバカじゃない。先ほどの改造でこの船に爆弾を仕掛けさせてもらった。それもあのペダニウムランチャーと同じ威力のな」

「なっ…」

三人は言葉を失った。

「これからお前たちにあのガキを連れ戻すことを命じる。もし逆ら

えば俺はこの船から抜け爆弾を発動、そうなればこの国はデカイクレーターと化すだろうな」

もし逆らえば関係ない地上の人々も巻き添えに…
せっかく結ばれたアイーシャやヨシアの幸せだけでなく、その近くにある命すべてを天秤にかけることになった。

「…わかった。だがグレイには」

手を出すな。そう言う前にダイルは遮るように言った。

「考えといてやるよ」

6　善か悪か（前書き）

グレイのプロフィール

グレイ
（イメージＣＶ．高山みなみ）

光の国出身のレイオニクス。ウルトラマンベリアルの息子。母はすでに亡くしている。その母からの血が原因で学校の同級生から異端児扱いされ、父親がその相談に乗ろうとしなかったため、それが父親を嫌う要因となっている。
人間体は小柄な１５歳ほどの少年で性格は子供っぽくてふざけ半分な面が多く見られる。だが頭はとてもいいので、子供だからといってなめると痛い目を見るぞ。レイブラッド星人に一度憑依されたことでその遺伝子を手にし、レイオニクスとなったが本人は全く覚えてない。同時に、アルビオンでシュウヘイと戦った記憶もない。

元にしたキャラ
※主に幼さのある少年キャラを元にしました。

外見
リリカルなのは　エリオ
（瞳は青、髪は灰色で褐色肌）

性格
ロックマンＸ　アクセル
烈火の炎　小金井薫

ＦＦＸ　ティーダ

これを見てなんだよこれって言う人もいるでしょうね…
覚悟はしてるつもりですが、いざ言われたりしたらショックですね…

でも気にせず一人でも読んでくれる方がいると頑張れます。

6　善か悪か

父さん…

なんで…

なんで、侵略者の同族の人と結ばれたんだ?

どうしてオイラが光の国の学校でいじめを受けるネタを作ったんだ?

なんでオイラをいじめてたあいつらから助けようと思わなかったんだ?

母さんは、どんな人だったんだ?

もしも〜し?

誰？母…さん？

「…し。もしも～し」

「っ…？」

誰だろう？自分を呼ぶのは。
この声、確かつい最近に聞いたような…

グレイは目を開け、起き上がった。

「あ、起きたんですか？」

その声の主の顔を見て、彼は驚愕の極みを感じた。

「タバサ…さん？」

「タバサ？誰のことですか？」

そのタバサそっくりの少女はなんのこっちゃと首をかしげた。
確かにタバサと顔立ちがよく似てるが、特徴的な眼鏡もないし、長○や○波みたいな寡黙さが見られない。むしろ明るさがまるっきし表れてる。

「私、ジョゼット。この修道院で育ったんだ」

ジョゼットと名乗った少女は二人のいるその修道院の聖堂の天井を指差した。人がすっぽり入るくらいの大きな穴が空いている。

「君、降ってきたんだよ。びっくりした」

「降ってきた？」

そう言えばなぜ、オイラはここにいるんだ？
グレイは先ほどまでの記憶の糸を辿っていく。

確か盗まれたスピーダーαを探しに行ってた時のことだ。他のクルーたちがダイルと会話してる頃、彼は残っていたβ機を飛ばし、捜索を続けていた。

「どこなんだろ…？」

とその時だった。どこからか彼のスピーダーを狙って何者かが光線による攻撃を仕掛けてきた。

「うっ！？」

光線は何度も発射され、グレイのスピーダーβを墜落させようとする。

攻撃が激しすぎる。ここは一旦地上に降りるのが上作だろう。

スピーダーβを着陸させ、地上に降りたグレイ。

そんな彼の前に、一人の男性が顔を出した。

「よう」

ピンっと指で耳に着けているピアスを鳴らす。どこかチャラチャラした感じの男だった。

「あんたは…？」

「俺はグランデ。キール星人のレイオニクス。お前は？」

「グレイ。光の国のレイオニクス…らしい」

まだレイブラッドに憑依された時の記憶が戻っていないため、自分がいつ、なぜレイオニクスになったのかわからずじまいだった。

「あ、まだあったのあの偽善者揃いの星。てっきりぶっ潰されたのかと思ってたぜ」

ウルトラマンを偽善者呼ばわし、またピアスをピンッと鳴らすグランデ。何も考えてないのか、それとも余裕の表れなのか…

「お前つよそうだな。俺を楽しませてくれるか？」

どうもグランデは好戦的性格がゆえ、戦いを楽しむ傾向が見られる。
グレイは、この男の態度に苛立ちを覚えた。誰かに認められたい、と本能的に考えるグレイとは違う。

「オイラはあんたとは違う」

「はい？」

何言ってんの？と間抜けな顔をするグランデを無視し、グレイはバトルナイザーを手にとった。

すると、なぜかグランデはがっかりした表情を浮かべた。

「んだよ～。お前『それ』か。期待して損したぜ。
まっ、暇潰しにはなるかな」

そう言ってくるくると回転させながら彼が手にとったもの、それを見たグレイは目を疑った。
あれはバトルナイザーなのか？自分の持っているものとは大きく違い、まるで二本角のような突起と変わった模様が彫り込まれている。

それは『ネオバトルナイザー』と呼ばれた。

【バトルナイザー、モンスロード】

グランデのネオバトルナイザーより紫に光るカードが飛び出し、一体の巨大な怪獣となって現れた。

ウルトラマンタロウが地球を守っていた時代に、数知れない怪獣の

怨念から誕生し、たった一体でウルトラ兄弟を圧倒した強敵。
『暴君怪獣タイラント』。

「ゴルザ！」

【バトルナイザー、モンスロード！】

対抗意識を強め、グレイもゴルザを召喚する。

「ほう、少しはできそうだな。タイラント、相手してやれ。最初は手を抜いていけ。すぐくたばられたらつまんないからな」

「なめんなよ、ゴルザ！戦え！」

「グオオオオ！」

ゴルザはタイラントに向かって体当たりし、突き飛ばした。

そこからゴルザの猛攻が始まる。
ラッシュパンチを喰らわせ、しっぽでタイラントの顔を殴り、飛び蹴りで押し出した。

タイラントも負けず、両手に装備された爪でゴルザに向かって攻撃する。

「ガアッ！」

「っぐう！？」

その時、グレイはまるで刀で斬りかかれたような痛みを感じた。そ

の痛みの位置もゴルザの受けた箇所と同じ。まさか…

「なに驚いてんの？レイオニクス同士のバトルじゃ、怪獣の痛みはレイオニクスの痛みだ。
もし怪獣が死んじゃったらあの世行き～」

「怪獣が死ねば、オイラが死ぬ…？」

「そのくらいスリルがないと面白くないだろ。
お前変わってるな。レイオニクスは戦いに飢えた戦闘種族なのによ」

「お前…！」

グレイは力を振り絞り、再びバトルナイザーを掲げた。

「出番だ、キングバモス！メルバ！」

新たにグレイのバトルナイザーからメルバ、そして新たな仲間『変貌怪獣キングバモス』が現れる。
グレイはメルバに飛び乗り、空を駈ける。

「そんな面白い怪獣いるなら早く出しとけって」

タイラントはバモスとメルバの出現と同時に、三体の怪獣たちからの攻撃を受けた。

「一斉攻撃だ！」

グレイの指示を聞き、三体の怪獣はそれぞれの必殺技をタイラントにぶつけた。

〈超音波光線！〉
〈メルバニックレイ！〉
〈エレクトリックスパーク！〉

ゴルザの光線、メルバの連続光弾、バモスの雷の波動がタイラントに迫りくる。普通なら危機を感じるはずなのに、対するタイラントも、そのマスターであるグランデもまったく動揺するそぶりを見せなかった。

「タイラント、たっぷり吸い取ってやれ」

タイラントは大胆にも自らの腹を突き出した。だがこれが奴の狙いだった。ゴルザたちの攻撃が、タイラントの腹に吸い込まれているではないか。

「ばかな……全部吸収した！？」

「はい、ごちそうさまでした。タイラント。もうこのへっぴりを叩き落とせ」

タイラントの口に、灼熱の炎がみなぎり、まず地上のゴルザとバモスに向かって強烈な火炎を放った。

〈爆裂放射！〉

「「グアアアアア！！！」」

「っく…！戻れ！」

ダメージが半端ではない。このまま戦えばあの二体が…。危険を悟ったグレイは二体をバトルナイザーに戻した。だがタイラントは、今度は宙を飛ぶ、彼を乗せたメルバに向けて爆裂放射を撃ち込んだ。

「うあああああああああああああ！！！！！」

「負けた…のか」

あんなちゃらちゃらした変な男に…。確かに変だが、とてつもない実力を持っているのは事実だ。あのタイラントを巧みに操ったのだ。只者ではない、と表現するだけでは物足りない。

「負けたって、何の話？」

「あ、あはは。な、なんでもないよ」

素振りもなんでもないと言うようにグレイは言うと、尻についた砂を払って立ち上がった。

「そうだ。せっかく助けてくれたんだから、お礼しなきゃ」

「お礼なんていいのに」

遠慮するジョゼットだが、それではグレイの気がおさまらない。し

ばしの思考の末、彼は不純なお礼を言った。

「じゃあ、デート一回ってのは？」

「え？」

もちろん本気で言った訳じゃない。初対面であったばかりの相手が承知すると思うほどバカではないのだ。むしろ、ＩＱは２００、いや３００だ！と言えるほど。

だがその返事は意外なものだった。

「『でえと』って、何？」

「……へ？」

さすがのグレイも間抜けな声を漏らすしかなかった。

「ごめんね。私、物心つく前からずっとここで生きてたから、外の世界のことよく知らないの。その『でえと』も多分常識…なのかな？」

「あ～、わかんないなら気にしなくていいよ」

すると、グゥーッ…

グレイの腹から、誰もが聞き及ぶ音がした。

そう、腹の虫である。

「お腹すいたの？」

「…多分」

ぶっちゃけ恥ずかしいが強がると笑われるだけである。
以前ペンドラゴンで食事をとった時、自分の腹の虫を初めて聞いたものだから、虚勢を張るどころか激しく動揺し、それでクルー全員に笑われたものだ。

「ご飯、ここの人に頼んだらもらえると思うから」

「いいの？」

「うん。初めて外の世界の人との記念ってことで」

「サンキュー、ジョゼット！」

「３９？」

いきなりなんの数字を言ってきたのだろうとジョゼットは思った。
ハルケギニアには英語などないものだから、こんな反応をされても不思議ではない。

「あ～、今のは『ありがとう』って意味なんだ」

グレイがそう説明することで、ジョゼットは納得した。箱入り娘の、初の異世界語は『サンキュー』。どこか面白みがあるかもしれない。

「なんかお互い、変わってるように見えるよね」

「全くだよ」

初対面にしては、なかなか話が弾んでいた。が、そこで彼はあることを思い出す。
ＺＡＰのクルーたちだ。

「マズイ。そろそろ戻らないと」

「え？」

「オイラを待ってる仲間がいるんだ。だからいつまでもここにはいられない」

「それって…お父様とか？」

そのジョゼットの言葉に、グレイは一瞬眉を潜めたが、すぐ真顔で答えた。

「父さんは関係ない。母さんもオイラを産んで死んだし」

「ご、ごめん…」

ペコッと申し訳なさそうに頭を下げるジョゼット。グレイにとっては掘り起こしたくないことだと思ったのだろう。
だが、すぐ彼の親への認識とは全く角度の違うことを言った。

「でも羨ましい」

「なんで？」

「私、誰がお父様なのかお母様なのかわからない。ここの修道院のみんなも両親のいない孤児がほとんどいないし、だから君が羨まし

く思えるよ」

「…」

逆に親がいなかったら、自分もジョゼットのように羨ましさを感じていたかもしれない。
そんなことを思っていたその時だった。

ズオオオオオオ!!

とてつもない爆発音が二人のいる修道院近くに響いた。

「なっ、なに今の!?」

「まさか…」

グランデか?いや、あいつはオイラを倒す間際、完全に拍子抜けしてたから違う。
だとしたら…あのガクマの住み着いてた岩山に来た時襲ってきた男?
もし、この修道院が攻撃されたらジョゼットとこの修道院にいる孤児に怪我人、最悪死者が出ることも考えられる。

「着いてきて!」

グレイはジョゼットの手を引っ張ると、彼女と共にその修道院の聖堂から外に出た。

外に出たところで彼の目に真っ先に飛び込んだもの。それは…

「ペンドラゴン！それと…」

彼の見上げた空に浮かぶペンドラゴンを囲う形で、怪しげな円盤がいくつか浮かんでいる。

すると、グレイの持つＺＡＰ携帯通信端末『リサーチシーバー』が鳴り出した。

彼はそれを手にとった瞬間ヒュウガの顔が映し出された。

『グレイ、逃げろ！』

「え？」

じゃああの円盤は…

そう思った瞬間グレイたちに向けて円盤からビームが放たれた。

「伏せて！」

「きゃ！」

そのビームからジョゼットを庇うように、グレイは彼女をビームの当たらない場所に伏せさせた。

「くそ…なんたってオイラたちを！？それにペンドラゴンがなんで捕まってるんだ？」

一体なぜなのかわからず疑問に思うグレイ。そんな彼の前に、転送の形である男が現れた。

「あんたは…」

「久しぶりだな。レイオニクスのガキ」

その男はペダン星人ダイルだった。

「前にも思ってたけど、なんでオイラを狙うんだ？オイラが一体何をしたんだ？」

「レイオニクスは存在自体が許されないんだよ。いくら善人ぶっても、やはり醜い本性がある」

実を言うと、ダイルはあの翼人とエギンハイム村民がタバサやＺＡＰクルーたちと共に事件を解決した時の一部始終を知っていた。無論最初は目を疑った。ダイルの中のレイオニクス＝悪人のイメージが崩れ始めてきていた。

だが、やはり信用できない。こいつらレイオニクスのせいでペダン星は壊滅的被害を被った。許すものか…

電気をまとったロッドを握りしめたダイルはグレイを睨み付ける。

「ハアッ！覚悟しろ」

「……ジョゼット、下がって」

何が起こってるのか理解できないジョゼットは、黙って従うことで精一杯だった。言われた通りグレイとダイルの側から離れた。

「ラアッ！」

真っ先に攻撃を仕掛けたのはダイルだった。剣のようにロッドを振

ってグレイに攻撃を仕掛けてきた。

しかしその瞬間、グレイの姿が人間とは明らかにかけ離れたものとなる。

「それが貴様の正体か！」

グレイモン。グレイのウルトラマンとしての本当の姿である。強化された身の丈夫さでダイルのロッド攻撃を防いだのだ。

「フッ！テイ！」

「はあ！であ！」

グレイモンとダイルの攻防はそれからも続いた。グレイモンは腕を盾にしてダイルのロッドを防ぎ、対するダイルは蹴りを加えてガードを崩し、再び攻撃を仕掛けるが、白刃取りでそれを受け止め、奪い取ると、そのロッドを怪力でへし折った。

「この、調子に乗りやがって！」

逆上した様子でダイルは銃で撃ってきた。グレイモンはすぐ避けようとしたが、避けなかった。と言うよりできなかった。彼の真後ろにジョゼットがいたからだ。彼女を覆う形で立て続けにダイルからの銃弾を受け続けた。

「なぜだ…」

撃ち終えたところでダイルは動揺しきった声を漏らす。

「お前はなぜその小娘を庇う？レイオニクスはどいつもこいつも残虐非道な連中だけなはず…」

「ほっとけなかった…それだけさ」

変身していたため大したダメージはなかったが、やはりチクチクと痛みを感じる。

「……」

たとえどんな手を使ってもレイオニクスを抹殺するつもりだった。なのになぜだ…仕掛けてきた俺自身が躊躇うなど…

「…気が削がれたな。帰る」

「へ？」

あれだけ殺意を剥き出してきた男が、いきなり戦いを拒絶してきたことにグレイモンは驚きのあまり変身を解いた。

ダイルは自分の円盤から放射された光に吸い込まれる形で円盤に乗り込むと、どこかへ飛び去ってしまった。

その直後にペンドラゴンが地上に降り立ち、ヒュウガたち三人が降りてくる。

「済まん、奴に捕まってペンドラゴンに爆弾を仕掛けられたせいで手助けできなかった」

「いいってボス。みんな無事だったから」

「それよりマズイことになってましたね。この星は…」

オキの言う通りだ。この星でレイオニクスバトルと呼ばれる、怪獣使い同士の殺し合いゲームが行われている。もしこの星の人間たちが巻き添えになったらただ事では済まされない。

「行くの？」

ジョゼットがグレイに話しかけてきた。

「うん、ごめんね。もうちょっと話したかった？」

そう尋ねるグレイに彼女は頷く。

「初めて外の世界の人と話したから…」

「じゃあさ、またいつか会いに行くって約束してやるよ。そん時はもっと面白い話、聞かせてあげるからさ」

「いいの？」

「ぜんぜん！」

驚きの表情のジョゼットにグレイはサムズアップと笑顔のダブルで応えた。

「ありがとう…助けてくれて」

助けてくれたと同時にまたいつか自分のために来てくれることに、

嬉しさはあるがやはり遠慮するべきだと感じるジョゼット。
だがグレイ自身もあることを気にしていた。

「今さらだけど、それ本気なのか？オイラは普通じゃないんだけどな…」

そうだ。ウルトラマンとしても自分は異端児だ。ウルトラマンを知らない女の子あんな人とはかけ離れた姿を見せたら、恐れられても不思議ではない。

「最初はびっくりしたわ。でも、助けてくれた人を悪い人だなんて思いたくない」

「…なんか照れちゃうな」

気恥ずかしそうにグレイは人差し指の先で頬を掻く。

「ったく、人の目を盗んでナンパだなんて…このやろ！」

そんなグレイをからかうようにクマノは彼にヘッドロックをかける。

「いたた！クマさん誤解だって！」

「とにかく、これからどうするか考えなくてはな。一旦ペンドラゴンに戻るぞ」

「「「了解！」」」

「じゃあ、またなジョゼット」

「うん、また会おうね。グレイ」

四人全員で戻る直前、グレイはジョゼットに明るい笑みで手を振ると、対するジョゼットも手を振って、空へ飛び去るペンドラゴンを見送るのだった。

ちなみに一方、ジョゼットと容姿がそっくりなタバサはと言うと、東花壇騎士団の根拠地である『グラン・トロワ』の宮殿にいた。

タバサはイザベラのいたプチ・トロワに起こったゼットン星人の怪事件の大方の説明を、カステルモールから聞いた。

あの謎のウルトラマン、ダイナとアスカと名乗る青年に関しては以前はっきりしないままだった。

それよりも、ある問題があった。イザベラがしばらく面会謝絶という形で誰とも顔を会わせようとしないのだ。かろうじてわかるのは、「アスカ…様…」と性悪イメージの強いイザベラからすれば薄気味悪い声が、彼女の部屋から聞こえてくる位だった。

「あれは何なの？」

自分の母のように毒でも盛られたのか？

タバサはカステルモールに尋ねると、彼はどこか笑いをこらえてるような、だが少なくともバカ笑いではない笑みを隠そうと必死に答えた。

「あれはですね…誰もが一度は経験する病ですね。シャルロット様にもわかりますよ。きっと…」

笑いを堪えたままカステルモールはその場から一旦立ち去った。結局あのタバサでもその言葉の意味を理解しきれなかった。その意味がわかるのは、ずっと先のことになるだろう。

そんな彼女の前に、一羽の鳩が飛んできた。その足には封筒が捕まれている。どうやら伝書鳩のようだ。

タバサはその意味だけは理解できた。

彼女の請け負う命懸けの任務は、必ずしもイザベラからではない。伯父であるジョゼフ一世ら王室の場合もあったのだ。

『ロバ・アル・カリイエの方角より怪しげな円盤が飛来するのを確認しました。斥候部隊によると、それはハルケギニアの技術を遥かに凌駕するものと思われます。シャルロット様にはこの円盤の調査、危険とあらば破壊を命じます。もし失敗すれば、お母上のお命は…シェフィールド』

シェフィールド…

レコンキスタのバックで石堀やサイマと共に暗躍していた者の一人。彼女はガリアにもよからぬ野望の手を伸ばしてるのか、それとも…

レコンキスタを影から操っていたことは、タバサでも知り得ないことだが、今はたとえ生存率がなくても危険な任務を全うすることが最優先だ。

それと、この時の彼女にはずっと心に留めていたものがあった。

『諦めるな』

ペドレオンの討伐任務の時に助けてくれたウルトラマンの言葉が彼女の支えにもなっていた。

しかし、まさか遥か東方の『ロバ・アル・カリイエ』に行くことになるとは思わなかったようだ。

そのロバ・アル・カリイエには、ハルケギニアの人間どころか、その世界より文明の発達した地球の出身であるサイトやシュウヘイでも驚くべきものが存在した。

ペダン星人の、移動型の超巨大要塞だった。

その中の司令官室と思われる一室にダイルがいた。彼の目の前には、白い髪をした上官らしき女性がいる。

「ダイル、なぜあのレイオニクスの少年を抹殺しなかったのです？」

「…」

「はっきり答えなさい。少しでも反省してるのなら、しっかりとした現状を司令官である私に伝えるのですよ」

最初はどう答えるべきかわからなかったダイル。ペダン星人たちの間では、レイオニクスへの酷い見解があるため、まさか見ず知らずだった人間をレイオニクスが助けたなんて信じられようか…

だが、ここは敢えて真実を伝えることにした。

「あのグレイと名乗る少年は…他のレイオニクスとは異なる特別な部分があるのです。ハーラン司令」

それから彼はハーランに伝えた。

彼が種族間での争いを終結させるために、人間と翼人たちに協力し、奮闘したこと。そして自分と交戦したときにジョゼットを身を呈して庇ったことを。

「これは私の憶測にすぎませんが…もしかしたら、グレイなら我々ペダン星人の危機を救う者となるやもしれません。よって敢えて殺さず、ハーラン司令にこのことをお伝えに参上しました」

「ほう…」

ダイルはハーランが、そんなことがあるものかと言うと思っていたが、対するハーランはそうは思わず、むしろ興味ありげな笑みを浮かべていた。

「ダイル、その少年をここに呼びなさい。私が直に会ってその真意を見定めましょう」

「もし、彼が我々に逆らったら?」

「無論、我がペダンの新兵器『キングジョーブラック』の大軍で徹

底的に始末するのみです」

その頃、その要塞内部に存在する兵器製造工場には、何十、いや何百体ものキングジョーたちが造られていた。

後にサイトたちが戦うことになる、あの黒いキングジョー、『キングジョーブラック』たちが。

7　ある戦士の墓標

ロバ・アル・カリイエへの超遠征任務へと向かうタバサ。今日もシルフィードに乗り現場へと向かう。

ロバ・アル・カリイエにもメイジは存在しているようだが、ほとんどその地域の情報はなく、ただ危険だとされているだけの未開の地の認識が強かった。

「…」

謎の円盤…

一体なんなのだろうか。

だが考えても仕方ない。心を壊された母の命のためにも、行かなければ。

あの日は相当な目にあったため、ＺＡＰのクルーたちはひとまず休んでから、これからどうするかを決定することにした。

グレイは自室で自分のバトルナイザーの画面に映る相棒たちを見ていた。

「最近よくバトルナイザーを見るよね」

共にグレイの部屋に来ていたオキが言う。

「戦った後に声をかけると嬉しそうに答えてくれるんだ」

そんな彼も嬉しそうな笑みを浮かべてバトルナイザーを見つめていた。三体の怪獣たちがグレイに向けて張り切るように吠えたり、バモスの場合は手を振っている。

「怪獣たちと心が繋がってる証拠だね」

「うん」

「なるほど、それがお前の力か…」

二人は突如聞こえた声の方を向いた。そこにはダイルが立っていた。

「いつの間に!?」

「グレイ、お前に話がある。俺と来て欲しい。そして、俺たちペダンの総帥ハーラン司令と会ってくれ」

それを聞いたグレイは少し眉を潜めた。総帥と話?

「会ってどうするの?」

ダイルたちにレイオニクスハンターの仕事を与えたのは、そのハーランとか言う上官とその仲間ではないのか。今さら話し合いでどうする気なのだ?

いまいち信用にかけるグレイにダイルは続ける。

「ハーラン司令がお前に会いたいそうだ。お前が本当レイオニクス

バトルを終結させられるかを見たいと言ってる。もしあれば我々ペダン星人は故郷に帰り、荒廃したペダン星の復興に尽力する。もうこの星に干渉しないと誓う」

ダイルの目は真剣だった。嘘は見られない。
殺意も見受けられなかった。本当に話をしたいと思ってるようだ。

「わかった」

グレイは一応承知したが、オキは慌てた口調で反対する。

「ダメだよ！罠かも知れないよ！」

「それでも行くよ。オイラはダイルを信じる」

「それを待っていた。すぐに来い」

ダイルは自分の腕輪に触れると、グレイと共にその部屋から一瞬にして姿を消した。
オキはこのことをすぐに指令室にいた他のクルーに知らせた。

「どうしますボス？相手はペダン星人ですよ」

クマノが少し焦り気味で尋ねた。

「よし…我々も」

とヒュウガが続けようとした時だった。

「動くな！」

武装した四人のペダン星人がダイルのように転送の形で出現、銃をこちらに向けていた。

「貴様ら…」

鋭い目付きヒュウガは彼らを睨み付けた。
そんな異変が起こっていた時、タバサは密かにペンドラゴンに潜入していた。シルフィードには外で待機させている。
今はペダン星人たちに悟られないように隠れていた。

彼らには世話になっている。騎士とは借りを作らないと、タバサの騎士道精神が語っている。その彼女なりの良心が彼らを助けたいと思う源となった。

だが、下手に動けば命はないだろう。ここはひとまず隠れたまま大人しくすることにした。

その頃、グレイとダイルはロバ・アル・カリイエに置かれたペダン星人の要塞の前にたどり着いた。

「デカい…」

要塞の圧倒的迫力にグレイは驚かされた。

「地球人より永い間科学に力を注ぎ込んだからな。あれくらい当然だ」

すると、二人の前にも四人のペダン星人が現れ、その後ろからハーランがステッキを持って出てきた。

「お前がグレイですね」

「そうだ」

ハーランは彼の顔を見て、満足そうな表情を浮かべた。

「なるほど、確かに特別な力を感じます」

「ならハーラン司令、彼をお認めになられたんですね」

「ええ」

「よかった…」

ダイルはそれを聞いて安心した。
グレイもそのダイルの様子に笑みをこぼした。
ダイルのことを誤解していたようだ。単に暴力を奮うような奴ではない。むしろ平和を望んでいる男だったのだ。

しかし、ハーランが次に言った言葉は信じがたいものだった。

「その力…我々ペダンのために使わせて頂きます。最強の…『兵器』として」

「「！？」」

二人はそれを聞いて唖然となった。

「どういうことですかハーラン司令！？」

「実はレイオニクスハント作戦に一部修正があったのです。レイオニクスを洗脳し…我々の兵器として利用しようと」

「ハーラン司令！そんなことが…」

ダイルは反発しようとしたが、他のペダン星人たちに止められた。

「我々のためにその力…使っていただけますか？」

グレイは確信した。

この女はペダンの平和のためなんか考えてない。

ただの侵略者なのだと。

「断るに決まってるだろ！」

それを聞いたハーランは顔をしかめた。

「それは自分の仲間がどうなってもよろしいと？ご覧なさい」

ハーランはステッキを別の場所に向けた。

その先にはヒュウガたちクルーが捕まっていた。

「みんな！」

彼らは妙な足場の上に連行され、そこから発せられた特殊なバリアの中に閉じ込められた。

「なんだこれ？」

オキはそのバリアに触れようとした。

「待てオキ！」

だがすでに遅く、オキはバリアに触れた瞬間手を弾かれた。

「うわあ！」

「大丈夫か！？」

クマノがオキの手を見ると、オキの手のひらは見事に焼けてしまっていた。

「今すぐ仲間を解放しろ！でないと…」

バトルナイザーを手に、グレイはハーランを睨み付ける。

「いいでしょう。でもまずお前を洗脳します。あなたの力を持ってすれば我々ペダンの邪魔者はいなくなるでしょう。そしてすべての生命が我々ペダンにひれ伏すのです！どうです？素晴らしいでしょう？」

「素晴らしくあってたまるか！そんなことはさせない！」

バトルナイザーを掲げようとしたグレイだったが、他のペダン星人

がグレイに銃を向ける。いつでもグレイを射殺できる体制だった。

「ラア！」

「ごあ…！」

そこにダイルが他のペダン星人を殴り飛ばし、ハーランに反発した。

「ハーラン司令、私に約束したはずです！もうこの星には干渉しないと！これからは故郷ペダン星の復興に尽力すると！レイオニクスを…グレイを利用するなど間違ってる！この世界には力より大切なものがある！」

ダイルの言葉を聞いたヒュウガは驚いていた。
明らかに自分たちと考えが造反していたはずなのに…

「今すぐ彼らを解放してください！いくら力があっても、いずれより強い力に踏み潰される。我々のペダン星もそのせいで…「ドン！」ぐぅ！！！！？」

何かが爆発するような音と共にダイルの口から血が流れ、彼は倒れた。ハーランがステッキに仕込んだ銃で彼の腹を撃ち抜いたのだ。

「は…ハーラン…司令…」

「約束とは一体なんの話かしら？
それよりも、ペダンに臆病者は不要です」

冷酷非常なハーランの言葉にグレイはついに怒りを爆発させた。

「てめえええ…行け、ゴルザ！メルバ、バモス！」

【バトルナイザー、モンスロード！】

グレイは三体の怪獣たちを召喚した。

「みんなを救え！」

ゴルザはヒュウガたちが捕まったバリアに近づいてきた。

だがハーランが黙って見逃すはずがない。ステッキを要塞に向けると、キングジョーブラックのパーツがいくつも飛来してきた。

「キングジョーが！」

「何て数だ…全部で百体はいるぞ！」

いくらグレイでもあれだけの数のキングジョーたちを相手にしたらひとたまりもない。「さあ、見せてご覧なさい。お前の力を」

ハーランは椅子に座って傍観しだした。

「ハアアア！」

グレイはグレイモンに変身した。それと同時にゴルザはファイヤーゴルザに変わる。

「戦え！」

「ガアアア！」

「キエエエ！」

「グオオオ！」

三体は高らかに吠え、キングジョーブラックの大群に立ち向かった。

「ガアアア！」

ゴルザはキングジョーブラックの一体を殴り付け、投げ飛ばした。
さらに光線でダメージを与えていく。

〈超音波光線！〉

「ガアアア！」

「ギ…！？」

メルバも奮闘、空気を切り裂いて飛び回り、キングジョーブラックに氷の礫を撃ち込んだ。

〈ショットガンアイス！〉

「キエエエ！」

とある世界で超古代の戦士『ウルトラマンティガ』と戦ったメルバとは違い、グレイのメルバは氷を操る力を持っていた。
キングジョーの数体は凍らされ動けなくなった。

バモスもキングジョーブラックの一体を持ち上げ、ジャイアントス

イングで振り回し、他のキングジョーたちに投げつけた。

「グオオオ！」

〈エレクトリックスパーク！〉

口から電撃波を放ってキングジョーたちを攻撃した。

「ギギ…！」

「確かに強い…でも、どこまで持つかしら？」

さすがに数が多すぎてキリがない。グレイの旗色が悪くなってきた。

「ギギ…！」

何十何百ものキングジョーたちはリンチを仕掛けるようにゴルザたちを殴りだす。

「ガアアア！？」

ドドドドドドドド！！

「ガアアア！？」

「グオオオ！？」

さらに砲撃は続いていき、遂には怪獣たちは膝をついてしまった。

「グオオオ…」

「くそ…このままじゃ持ちこたえられない…」

キングジョーブラックたちはのしのしとこちらに迫ってきた。

「みんな…無理させて悪いけど、もう少し頑張ってくれ！」

グレイモンの呼び掛けに三体の怪獣たちは力を振り絞って立ち向かっていった。

だが、そこでキングジョーに立ち向かう新たな影があった。

「な…これは霧？」

突然キングジョーの周りを真っ白な霧が覆いだした。標的を見失ったキングジョーたちは闇雲に攻撃を仕掛ける。が、攻撃が当たったのはグレイの怪獣ではなく、自分とは別機体のキングジョーだった。目が見えなくなるほどの霧の中、キングジョー同士の同士討ちが始まった。

この霧を発生していたのは、ペンドラゴンに潜入していたタバサだった。得意の水系統の魔法の力で霧を作り出し、敵の撹乱を図ったのだ。

しかし、これだけ大規模だと当の本人もきつい。

「ハアッ…ハアッ…」

「無理したらダメなのね」

心配そうに彼女を乗せているシルフィードが言う。

「何をしてる！死に損ないの怪獣どもに遅れをとるのか！？」

ハーランは怪獣たちのしぶとさに少し苛立って怒声を放つ。

「せめてこのバリアから抜け出せたら…」

あれからタバサは外側より魔法、ヒュウガたちは内側からトライガンナーでバリアを破壊しようとするも、全く効果はなかった。

「グレイはまだ本気を出しきれてない時に、くそっ…」

「グレイがまだ本気を出しきれてない？どういうことです？」

ヒュウガの言葉にオキとクマノは疑問を抱く。あれだけのキングジョーなら本気を出さないとマズイにも関わらず、肝心のグレイがその本気を出してないと言ってるのだ。

「お前たちを…気にしてるからだ…」

すると、ダイルが体をずるずると引きずりながらこちらに近づいてきた。

「あいつの仲間への思いは強さでもある…だがそれは奴にとって最大の弱点にもなる…バカな奴だ…その甘さがなければ…もっと強くなれると言うのに…」

ダイルはずるずる体を引きずりながらバリアのスイッチに近づいた。

「！やれ！」

それに気づいたハーランはすぐダイルを撃つよう命令した。

「撃て！」

ドドドドドド！！

「ぐああ！」

「ダイル！」

「何してんだ！？逃げろ！」

だがダイルは痛みを堪えながらスイッチを押そうと装置に手を伸ばした。

「俺は…ペダン星の…誇り高き…ハンター…」

さらに銃弾が彼の体を貫いていった。

ドドドドドド！！

「もう止せダイル！逃げろ！」

クマノの悲痛な叫びが轟くが、彼は退こうとしなかった。

「グレイ…未来を…たの…」

辛うじてスイッチを押した瞬間ダイルは崩れ落ちる石像のように倒

れてしまった。それと同時にバリアが解かれる。

「ダイル！しっかりしろ！」

クマノはダイルを抱き抱える。だが、彼はあふれだす血を口内に溜めたまま返事をしなかった。瞼も閉じられ、何も答えようとしない。

「奴等を逃すな！一人残らず抹殺しろ！」

ハーランがすぐ射殺命令を下すがすでに遅かった。

「なっ、またこの霧が！」

ＺＡＰクルーの射殺にかかるペダン星人を阻もうと、タバサの作り出した霧が覆い、視界をふさがれてしまう。

「うっ…」

ちょうど近くをシルフィードに飛ばせていたタバサは、さすがに精神力を切らしかけ、シルフィードの上に倒れ込んだ。

「お姉さま！？」

彼女の体力切れに感づいたシルフィードは、彼女を乗せたままその場から一旦退却した。

そこから本気を出せるようになったグレイと彼の怪獣たちの快進撃が始まる。

バモスはその鋭い爪でキングジョーブラックたちを切り裂いていっ

た。

「ガア！」

〈メルバニックレイ！〉

メルバは目から放つ光弾でキングジョーたちの間接部を的確に狙い当て、動きを鈍らせる。

〈超音波光線！〉

ゴルザはフルパワーの必殺光線でキングジョーブラックたちを打ち砕く。

「みんな…行けえええ！！」

グレイモンの怪獣たちの猛攻の結果、キングジョーブラックたちを次々と打ち倒されていった。

「ハーラン司令！ここはもう危険です！すぐ撤退を！」

ペダン星人の一人は撤退を勧めた。もう彼らに勝ち目などないことを知ったのだ。だが、ハーランはステッキを彼に向けてきた。

「黙れ！撤退など許しません！我らペダンの科学力がたかが怪獣ごときに！」

その頃、ペダン星人たちがタバサの作り出した霧で隙だらけになった隙にヒュウガ、クマノ、オキはペンドラゴンに帰還していた。だが傍観などできない。すぐ攻撃体制に入った。

「心無き科学は…悪魔の力だ。それをお前たちに教えてやる」

ヒュウガは認証カードをカードリーダーにセットした。

「ペダニウムランチャーの発射準備完了！
ダイル、お前からもらった力を借りるぞ」

「射程位置に入りました。いつでも撃てます！」

オキは怪獣たちとキングジョーたちの戦ってる場所から少し遠くにペンドラゴンを移動させた。
運転席から真正面にその戦場が見える。

「よし…ペダニウムランチャー…撃てえええええええ！！！！！！」

「うおおおおおおおおおお！！！！！！！」

クマノはトリガーを前に押し倒し、ペダニウムランチャーを発射した。

「一斉攻撃だあああ！」

グレイもその怒声と共に怪獣たちに命令、怪獣たちは自分たちの必殺技を繰り出して残り少なくなったキングジョーたちに止めを刺しにかかった。

〈獄炎弾！〉
〈ショットガンアイス！〉

〈エレクトリックフラッシュ！〉

「「「ガアアア！」」」

ズオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン！！！！！！！

キングジョーブラックの大軍は大爆発を起こし、次々と爆発の中に消えていった。

その時、破壊されたキングジョーブラックの一体の頭部がハーラン司令の真上に落ちてきた。

「あああああああああああああああああああああ！！！！！！！」

それ以降、ハーランの姿を見た者はどこの世界にもいなかった。

遂にキングジョーブラックの大軍は全滅した。

「ボス！あれを！」

オキが指差した方向に、ペダン星人の要塞が空の彼方に消えていった光景があった。

「また…襲ってくるのでしょうか？」

ヒュウガはそれを聞いて薄く笑った。

「いや、二度と来ないさ」

四人のクルーは夕日を背にダイルを埋葬した。

墓石の変わりにキングジョーブラックの砕けた柱のパーツを地面に刺し、その下にダイルのヘルメットを置いた。

「誇り高き戦士に…黙祷！」

四人のクルーとタバサは胸に手を当て、勇敢なる戦士に祷りを捧げた。シルフィードも目を閉じる形で今は亡き戦士に祷りを捧げる。

「また、君に助けられたな。ありがとう」

ヒュウガはタバサを見て礼を言った。

「騎士は借りを作らない。気にしないで」

「ダイルにも、感謝しないとな」

少なくとも彼のような人物がいなかったら、きっと自分たちは殺されていたかもしれない。

だがダイルの命は惜しいものだった。生きてたら、きっと自分たちの仲間として迎え入れることができたのに…

グレイはバトルナイザーを手に、ある決意を固めた。

「ボス、オイラは戦うよ。レイオニクス同士の戦いが招いた悲劇なら、終わらせたい」

「なら俺たちも協力するぞ」

「俺も構わないぜ」

「僕も協力するよ。怪獣の知識なら自慢できるほどだから」

「サンキュー、みんな」

みんながいれば、きっと終わらせることができる。グレイはそう確信した。

だが、予定の悪いタバサはどうしようか。

「タバサは、どうするの？」

「私は、いつもは無理だけど少しなら協力できるかもしれない」

もし愛する母が、レイオニクスたちの魔の手にかかったら、今までの努力が水の泡となる。そうならないために、僅かばかりながらも協力する意思を固めた。

その日から、グレイはレイオニクス同士の戦いを終わらせるために仲間と共に奮闘するようになった。

「これは…ゴーレムなのか？」

その数日後、瓦礫となったキングジョーの山の前にトリステインの研究機関『アカデミー』の研究員がいた。

後にまだ稼働しそうなキングジョーブラックの一体がトリステインで修復され、ウルトラマンゼロとウルトラマンネクサスと戦うことになるのは、この時誰も知るよしはなかったのだった。

0 獣人

皆さんは、時々夜道を通って家に戻る時、誰かが後ろから着いてくるなんて、思ったことはないだろうか？もしかしたら、それはストーカーかもしれないし、あなたの命や金品を狙う悪人かもしれない。

もうすぐハルケギニアで二つの月が重なる皆既月食が近い真っ暗な夜、白いワンピースの女性がカバンの中に水の入った水筒をしまい込んで帰宅していた。いつもと変わらないはずだった。

背後に気配を感じるまでは。

誰かいるの？

彼女は夜の冷えた空気と恐怖心で身を震わせながらも急ぎ足で自宅へ向かう。

勇気を出して恐る恐る背を振り向いた。

だが、なにもなかった。思い過ごしだったようだと思った女性はひと安心し、渇いた喉を潤そうと水筒に手をつけた。

しかし、彼女の危機は去らなかった。

目の前に、化け物と言っても過言ではない亜人が彼女をじっと見ていたのだ。

一方、魅惑の妖精亭での仕事を終わらせたシュウヘイは、テファたちの待つ家に戻ろうとバイクのエンジンを起動させた。

その時だった。

「きゃあああああ！！」

どこからか女性の悲鳴が聞こえてきた。

すぐバイクの腰掛に股がり、バイクを走らせるシュウヘイは現場へと向かった。

現場にたどり着いたところで見たのは、地面に横たわる白いワンピースの女性と、彼女を狙う謎の亜人。ビーストとも異なる感じがする。だが油断はできず、シュウヘイは亜人にブラストショットを向けた。

「ミディ…ア」

「なに？」

亜人の口から発せられた言葉で、手を緩めてしまったシュウヘイ。

その隙に亜人は風のように姿を消した。

「一体、誰のことを言ったんだ？」

翌日からそれからも、白い服を着た若い女性が謎の亜人によって被

害を受ける事件が相次いだ。

王室も魔法衛士隊や銃士隊に街一帯の調査を命じたが、その亜人は一体どこに行ったのか検討もつかなかった。

サイトとルイズもアンリエッタに呼び出され、街の調査を開始したが、一時間、二時間と虚しく時が過ぎていった。

「どこにもいないじゃない。やっぱり貴族に恐れをなして逃げたのかしら？」

そうとも考えられるだろう。魔法衛士隊のメイジたちが調査を開始したころから亜人は姿を消している。タイミングがちょうど合っていたのだ。

「そうと決めるには早いと思うな」

もしかしたらその亜人が、地球を狙う侵略者であることも懸念される。サイトは可能性の一つとしてそれを心に留めていた。

とにかく調査を続けないとなにも始まらない。サイトはそう思って一歩歩き出した。

その時だった。マントに身を包んだ怪しげな人間が彼とすれ違う形で歩き去った。

それに気づいたサイトは、ウルトラ戦士としての勘からなのか、それとも本能的かそのマントの人物を走って追った。

「ちょっとサイト！ご主人様置いてどこ行くのよ！」

喚きながら彼を追うルイズだが、サイトの耳に届くことはなかった。

しばらく追っていたが、予想以上にマントの人物はすばしっこく、噴水広場の角を横切ったところで見失ってしまった。

「相棒、あいつなにもんなのかねえ…」

「わからない。ただ普通じゃないと思う。人間の足であそこまで体力が尽きないまま速く走り続けられるはずがない」

しかし、サイトは噴水の腰掛けにあるものが置かれているのを見つける。

双眼鏡…なのか？それを手にとり覗き込んでみた。決して彼は住宅内部で着替える女性を、その双眼鏡で見ようとしてるわけではないのでご安心ください。

「これは…！」

驚くべき景色が、彼の視界に飛び込んだ。

どこかの豪華な屋敷。その屋敷の池のほとりで日傘をさす、白いワンピースの女性。

真夜中目の前に映る怪物の手。

そして、星が真っ暗な闇の中、赤い輪郭で自らの丸さを示す姿。

「この双眼鏡は一体…？」

「水？」

シュウヘイはあの夜の翌日、魅惑の妖精亭で、被害にあった女性から話を聞いた。

「はい、あいつに襲われた時、私ちょうど喉が渇いてて水筒を手に持ってました。そしたらあいつが現れて、私びっくりして水をぶちまけたんです。そしたら、すごく怖がりだして…そこからは気絶してよく覚えてないんです」

「水…ミディア…」

水を恐れ、ただ「ミディア」と一言言った謎の亜人。

シュウヘイはそれからもその事件について仕事が終わった頃に独自調査を行った。地球で人を守る職務に着いていたこともあって、別の世界でもその使命を全うする意思を持っていた。

そしてあることがわかった。

「ストライフ家の別荘屋敷のちょうど周りを正方形に囲う形で事件が起こってたのか？」

ビデオシーバーを通し、パルスブレイカーで連絡してきたシュウヘイの言葉にサイトは驚いた。

『ただ、しらみ潰しに調べるには広すぎるな…
そっちはどうだ？何か知らないか？』

「実は、調査中に妙な双眼鏡を拾ったんだ」

サイトはその不思議な双眼鏡についてわかることをシュウヘイにくまなく話した。

『白いワンピースを着た女に屋敷…
チビ、何か知らないか？』

「チビとは相変わらず失礼ね！ルイズ『様』と呼びなさいよ！」

『様』を妙に強調して怒鳴るルイズ。

『とにかく教えてくれ。そのストライフ家の話をな』

「ふん、特別に教えてあげるからありがたく思いなさいよ。ストライフ家は、百年前の皆既月食の時に起こった怪事件で突然滅んだ名家だったそうよ」

『突然の怪事件…』

それに現在起っている、白いワンピースの女性を狙う連続殺人事件。無関係とは思えない。

『引き続き調べる。何かわかったら教える』

「わかった」

そう言ってビデオシーバーを閉じるサイト。

最近現れた亜人は、あの双眼鏡に映る白いワンピースの女性となに

らかの関係があったのだろうか？

サイトとの連絡後、シュウヘイはある人物と出会った。

「ハイネ・クラウザー？」

「独自調査を行ってるとの噂を聞いて、あなたになら私の話を信じてもらえると」

そのハイネと名乗る人物は、シュウヘイと同様に事件を独自に調査していると言った。

シュウヘイは直ちにサイトに連絡、サイトとルイズをあのストライフ家の屋敷前に集合させ、ハイネから話を聞くことにした。

集合し、ハイネはサイトを、正確にはサイトの持つ双眼鏡を見て驚愕の表情を露にした。

「き、君！それを一体どこで！？」

「どうしたんだ？」

シュウヘイが首を傾げると、ハイネはサイトの持つ双眼鏡を手にして答えた。

「これは自分の見たものすべてを記録するマジックアイテム…『グラスメモリア』！」

サイトの拾った双眼鏡、グラスメモリア。
それはこの事件に深く関係するものとハイネは語った。

「ちょうど今から百年前の皆既月食の時期、ストライフ家の屋敷にある男が滞在していました。
男の名は『ジェガン』。彼については素性が全くわからず、判明してるのは、彼が異国を転々と旅する放浪者だったことです。
ジェガンには変わった特徴がありました。獣のような耳を持ち、しかもわずか一滴の水すらも恐れた。
ジェガンはストライフ家の令嬢ミディアと恋に落ちた。得体の知れない彼との交際をミディアの両親は反対しましたが、それでも二人の決意は固く、後に我が子を授かったそうです。
しかし、皆既月食の夜、突如現れた亜人にミディアは殺害され、しかもストライフ家の一族や家臣も命を落としたそうです」

「亜人…まさか！」

サイトの驚愕に呼応するようにハイネは頷いた。

「ええ、ちょうど今の皆既月食の時期に事件を起こした犯人がミディアを殺した。その亜人は通称『獣人』と呼ばれています。
その夜にジェガンは姿を消した…。
そのグラスメモリアはジェガンの所有物でした。ある来客がジェガンの旅に興味を示し、『一体どんな場所を旅したのですか？』と訪ねると、彼は『覗いてごらんなさい。私の旅が見えてきます』と言い、来客がグラスメモリアを覗き込むと、異国の城や砂漠の景色…
そして、黒い星が赤い輪郭で輝く姿が見えたそうです」

「日食を見たってこと？」

ルイズの質問にハイネは「おそらく」と言った。

「つまりこのグラスメモリアは、ジェガンの持っていた一種の記録媒体…」

グラスメモリアを手に持ち、サイトは呟いた。

しかし、そこである疑問が浮かんだ。

この話だと、ジェガンの正体は、最近起こった殺人事件の犯人である『獣人』と言うことになる。

サイトが初めてグラスメモリアを覗き込んだ時、そのジェガンが獣化した姿があった。あの異形の腕がおそらくそうだ。

その獣化したジェガンが、なぜわざわざグラスメモリアで自分の手を見ていたのだ？

その後、ハイネは屋敷内で独自で過去の文献を利用した調査を開始し、サイトたちは今後の獣人への対策を話し合った。

「俺の予想では百年前の皆既月食の夜、ジェガンは獣化し恋人のミディアとその家族を殺してしまった。おそらくそれを自分でも気づいてない」

「ええ、ジェガンは確か水を極端に恐れた。水に触れると自我を失い、獣化してしまう特性を持ってしまっていたのよ。だけど、水に触れてしまった…」

シュウヘイの言葉に続くようにルイズが言った。

「でも百年もの間一体どこに？」

そのサイトの新たな疑問に、ルイズが答えた。

「このトリスタニアには、地下道が張り巡らされてるらしいわ。きっとそこでずっと眠っていたのよ。そして皆既月食のこの時期に目を覚ましたんだわ」

「そして町中にいた白いワンピースを来た女性をミディアと思って、次々と襲ってしまったわけか。でも、なぜ…」

ジェガンが獣化した自分の手を見た？いや、それとも…

サイトは再びグラスメモリアを覗き込んでみた。獣化したジェガンが自分の手を見たと言う一つの矛盾を明かすために。

すると、そこには驚くべき光景が見えた。

ナイフを持った男がジェガンとその背後で守られているミディアに近づいている。意を決したようなミディアはジェガンに何かを耳打ちすると、ジェガンは池の中に足を踏み入れるというあり得ない行動に出た。

瞬間、ジェガンは獣化し…

そこで貧血を起こしたようにサイトはグラスメモリアから目を離し、

膝をついた。

「サイト、どうしたのよ？」

「…見えたんだ」

「え？」

「もう一人この屋敷に滞在していた人物がいたんだ」

その夜、獣人となったジェガンを待つべく、ルイズは池が真正面に見える玄関に、サイトは庭野茂みに、シュウヘイは木陰に隠れていた。

ルイズはにわかに信じられなかった。ジェガン以外の滞在者の存在に。

その滞在者はなんと…

ハイネだったのだ。だが彼らの会ったハイネはあの皆既月食の夜の事件から百年経ったハズなのに、初対面のときの様な若い姿、しか

ももうひとつ気づいたのは、そのハイネがジェガンとほとんど似た顔立ちだったのだ。

一体何がどうなっているのだ？とシュウヘイも首を傾げていた。

しばらくすると、獣のような人影がのしのしと池のほとりに近づいていく。

間違いない。獣人となったジェガンだ。

「ミ…ディア…」

自分の愛した女性の名を言い、その手に持っていた白い花をポトリと落とした。ミディアに渡すつもりだったのだろう。

まず先に飛び出したのはシュウヘイ。獣人にディバイドセイバーを振って攻撃した。だが獣人もパワーでは劣らない。逆にしばらくのつばぜり合いの後、シュウヘイの剣を弾き飛ばした。

「っぐ！」

「エクスプロージョン！」

シュウヘイが戦ってる隙に呪文を唱えて虚無の魔法で止めを刺す。それが今回の作戦だった。凄まじい爆発が獣人に当たりはしたが、ダメージはあったものの倒すには至らなかった。

「そんな！」

実は虚無はある欠点があった。本人の精神力の他に、本人の精神状

態にも左右される。追い込まれれば追い込まれるほどそれが高まり、威力を高めることができる。だが、今の彼女は精神的に追い込まれるほど不幸でもなかった。
結果、タルブ村の戦いで発した時はおろか、いつもの爆発と同じ程度だった。
獣人はルイズを新たな標的とし、近づいてくる。

だがそこで、黄色い閃光が獣人に直撃する。サイトがウルトラガンで攻撃してきたのだ。

獣人はルイズの虚無の魔法やウルトラガンの一発のダメージが効いたのか、ふらつきながらも走って逃げ出した。

「追うぞ！」

入り組んだ地下道に逃げ込んだ獣人。人としての理性を無くした今の彼の頭の中には、ただ一握りの記憶があった。

「ミディア…」

愛する人と過ごした、暖かい日々、ただそれだけ…。

「アアアア…ァアアアァアァ…」

ようやく追い付いた三人は獣人に銃、杖を向ける。

「こんなになっても、ミディアのことを思い続けてたのね…」

「それだけが、百年経った今でもこいつを動かしてきたんだ」

ルイズの言葉に続いてシュウヘイが言った。
次の瞬間獣人は三人に襲いかかり、ルイズを庇うようにサイトとシュウヘイは向かってくる獣人に銃を乱射した。が、何発も当たったにも関わらず、獣人はまずシュウヘイを殴り倒し、壁に叩きつけた。

「ぐが！」

そして今度こそ魔法で止めを刺す姿勢だったルイズの腹を殴り付けた。

「っあぅ！」

「シュウヘイ！ルイズ！」

サイトはデルフを背中の鞘から引き抜き、接近戦で獣人と交戦する。
刀身が獣人の拳とぶつかる度に凄まじい金属音が鳴り響く。
だが肉弾戦に関しては獣人の方が圧倒的で、蹴りで脇腹を突かれたサイトは剣を落とし、壁に蹴飛ばされてしまった。

「うわあっ！！」

「ウゥ…ウウウウウ…」

獣人は涙声のような唸り声を発しながら地下道の角の向こう側へと逃げ込んだ。そこでもまたわずかに残るミディアの記憶が過ってい

た。

「ミ…ディ…ア」

かろうじて立ち上がったサイトは獣人の前に立ち、ウルトラゼロアイを装着してウルトラマンゼロに変身する。

「ウアアア…ァアアアァァ…アアアア…ウウウウウァアアァァァ！！！！！！！！！」

その悲鳴は、どんなにクールでも冷血非常な人間も聞くだけで胸を抉られるような痛みを感じてしまう。
心優しすぎるゼロにはあまりにも精神的に効いてしまっていた。

「平賀、撃て！もうどんなに探してもミディアはいないんだ！せめてお前の手で、終わらせてやれ！」

「……」

もっといい方法があるかもしれない。でも彼を救う方法がどこにも見当たらず、だからといってこのまま野放しにしたら、また新たな犠牲者が増えてしまう。

「相棒、あいつの言う通りだ。女に惚れてるままならあいつだって、このまま誰かを傷つけて生きるより楽になる方を望むはずだ…」

「ああ…」

意志を固めたゼロは、一思いに頭に着けられた二本の宇宙ブーメランを獣人の脇腹めがけて投げつけた。

〈ゼロスラッガー！〉

「デュワ！」

ズバシュ！

「あ…アアアア…」

脇腹を切り裂かれ、ゆっくりと後ろへ倒れ込む獣人、もといジェガン。

彼が地面に背中を着ける前に、どこからか現れたあのマントの男が彼を自らの腕の中で受け止めた。

「悪い夢を見ていたんだよ、ジェガン。さあゆっくりお休み。目が覚めれば、ミディアに会える」

「ァア…にい…さん…」

ゆっくりとマントの男に手を伸ばし、そして届かないままその手をパタッと落とすと、ジェガンは白い光の粒となって消えた。

変身を解いたサイトは、その男の正体に気づいた。

「君だったのか…ハイネ」

「…ええ。ですが、その『ハイネ』という名前は本当の名ではありません」

そのマントの人物の正体は、なんとハイネだった。

しかも本名ではないと言っている。さらに死に際にジェガンの言っ

た言葉からすれば…

「私の本当の名は『ジェイド』。今ジェガンが言っていた通り、ジェガンの兄です。以前噴水広場にグラスメモリアを置き、あなたに拾わせたのも私…」

「君にはどうしても弟を殺めることはできなかった。だから俺たちに…」

サイトの言葉にジェイドは深く頷く。
そこからジェイドは、あの皆既月食の夜のことを話した。

「当然でしょうが、ジェガンはこの世界で出会ったミディアと恋に落ちたのは覚えてますね？
でも私とジェガンにはミディアを支えるだけの生活費を持っていなかった。少なくとも彼女をどこかへ連れて行き、静かに暮らすためのお金がなかった。そんなとき、彼と出会った」

「彼？」

首を傾げるサイトに、ジェイドは懐から一本の少し手の込まれたナイフを取り出した。
ナイフが…彼？どういうことだ？
だが、その『彼』の意味をすぐに理解することとなった。

「どうも、インテリジェンス・ナイフの『地下水』といいやす」

「ナイフが喋った！？」

「喋る剣を持ってる野郎が今さら何驚いてやがんだ？」

驚くサイトに、デルフはちょっと怒ったような口調で突っ込む。

「たとえ平民でも彼を手にとれば、水系統の魔法が使うことができる。私は彼の力で賞金稼ぎを仕事に働き始めました。すべてはミディアとジェガンの未来のために。ですが、それが裏目にでることとなった…」

百年前…

「ジェガンを殺せ！？」

ジェイドはミディアの父親から、弟の暗殺を依頼されてしまったのだ。

「私に弟を殺せと言うのですか！？」

「ジェガン、あやつは我が娘ミディアに肩入れし過ぎた。私が貴族としてさらに出世するにはミディアをあのような男ではなく、有名な名門貴族に嫁がせることが最も。そのためにミディアの心を奪ったジェガンは邪魔でしかない」

「彼女の意思を無視して政略結婚だなんて…私は反対です！」

弟思いの兄、ジェイド。彼にとってミディアの父親が放った言葉は

絶対に許せなかった。
しかし、彼には逆らえない理由があった。

「この娘がどうなっても？」

そう言ってミディアの父親は、縄で縛られた小さな少女を見せつける。
この少女、実はいつしかミディアがジェガンとの間に授かった愛の結晶だった。しかし同時にミディアの父親から見れば孫娘。そんな子供すら人質にして逆らえなくしていたのだ。
ミディアの父は少女の耳を引っ張る。その耳は人のものではなく、まるで獣のような耳だった。

「ウェザリー！」

「この耳を見ろ。お前とジェガンが髪の中に隠しているように、この小娘もまるで獣のような耳をしている！こんな混じり物などに我がストライフ家の家名は汚された！これを洗い流すには、ジェガンを殺し、貴様とこやつを追い払い、ミディアを上級貴族のご子息に嫁がせることのみ！」

「…」

もし逆らえばジェガンの娘、ウェザリーは殺されてしまう。

「…わかりました。任務を果たして参ります」

そしてジェイドは地下水を手に弟と、彼の背後にいたミディアに近づく。弟は嫌っていた池に追い詰められていく。

「兄さん止めてくれ！僕は兄さんとは戦えない！」

「ジェガン…私も本当はお前を殺せない。だから私と戦え。そしてこの屋敷からミディアとウェザリーを連れて逃げろ！」

そう叫んでジェガンに地下水を投げ渡す。

ジェイドは自ら弟に殺されることで彼らを自由の身にさせることにしたが、いざその場に立たされた弟がかけがえのない兄を殺せようか、いや殺せるはずがない。

その時、ミディアがある賭けをジェガンに持ちかけた。

「もし私のことを思ってくれているなら、あの池の睡蓮を取ってきて」

ミディアの賭け。それはジェガンが苦手とする池に触れさせ、たとえ獣化しても人の心を失わず、かつ獣人の力でウェザリーを救って、四人でこの屋敷を脱出することだった。

彼女への思いが宿命を乗り越えると、彼女を信じて賭けに乗ったジェガン。しかし…

「ジェガンは獣人となり、人の心を失ってしまった…」

「この世界の貴族の権力争いと、私の非力が引き起こした悲劇です。責任を果たすべく、ジェガンを永遠に眠らせてやろうと思いましたが、どうしても殺せなかった。だから、私たちと同じ異星人であるあなた方に頼むしかなかった…」

ジェイドは自責の年に百年もの間苦しみ続けた。

弟とその愛する人と娘の幸せを守れず、責任をとって弟を殺めることもできず…

どれだけ苦しみを抱えてきたのか本人でも計り知れない。

彼は、グラスメモリアと地下水をサイトに託すと、そのままどこかへと姿を消し、サイトたちの前に二度と姿を現さなかった。

「どうしても弟を殺せなかったのね」

三人は地上で合流し、アンリエッタに事件の解決を報告した。その後、三人であの事件のことを振り返っていた。

ルイズは虚無をまだ使いこなせてない未熟さや自力で任務を果たせなかった悔しさより、ジェガンたちの悲劇を知ったことによる同情心の方が強かったので、自分への怒りはすでに鎮火していた。

「覚えてるか二人とも。グラスメモリアで見た『黒い星が赤い輪郭

を纏う姿』を」

「ああ」

「それがどうかしたのサイト？」

「やっとわかった。あれはこの世界の大地から見た景色じゃない。なぜなら、皆既月食とはその星が太陽と月の間に入り、月がわずかに漏れてきた太陽の光で赤く光るようになる現象。俺たち地球人やハルケギニアの人が見る皆既月食は、日食の場合のように赤い輪郭を纏う黒い星になることはない。あれはきっと、あの皆既月食の夜よりももっと昔の皆既月食の夜…」

そこで一旦言葉を途切れさせたサイトは、夜空に浮かぶ二つの月の内、向こう側に位置する青い月を指差した。

「グラスメモリアを持っていた異星人があの青い月からこの星を見ていたときの景色だったんだ」

「じゃあ、ジェガンとジェイドはどこか別の星から来たってこと？」

「ああ…おそらくな」

この世に霊魂が存在するならきっと今頃、ジェガンはミディアとウェザリーと共に、この夜空を幸せそうに見ているかもしれない。

サイトはルイズにそう答え、すでに皆既月食を終えた夜空に浮かぶ双月を、切ない目で見つめていた。

だが、誰も知らないことが、あの皆既月食の夜の事件の数十年後に起こっていた。
それは現在より約２０年前にさかのぼる…

「父上…」

獣のような耳を持つ美しい女性が、廃墟となったストライフ家の屋敷にいた。

ミディアとジェガンの子、ウェザリーだった。彼女はたった一人奇跡的に生きていた。

しかし…その心は深い闇に包まれていた。幸せだった父と母を奪った、貴族の名にすがるだけのあの祖父母や、この世界で身勝手を働くだけの貴族への憎しみが彼女を支配していた。

「私は誓います。必ず父上と母上の無念を晴らします」

「なら、俺が力を貸してやろう」

自分の後ろから聞こえてきた声に反応し、ウェザリーはバッ！と背後を向いた。

その声の主は、シュウヘイにとって因縁の深い、闇の象徴とも言えるあの男だった。

1　武士っ娘

とある暗い闇の一室にて、石堀と、椅子に居座る漆黒のマントに身を包んだ謎の男がいた。

「レーテの闇はどれだけ溜まっている？まだ満足のいくまでに達してないのか？」

「ああ、これだけの闇を積めた世界から残らず搾り取るのは時間がかかる。
俺のいた地球に保管されていたオリジナルのレーテを元に製造し、２０年ほど前からこの場所に設置したが、なかなか苦労している」

「その闇が打ち払われなければいいがな」

「今度は闇だけじゃない」

石堀は首を横に振った。今回彼が求めるのは、本来の力の源である闇だけではないようだ。

「真の『伝説』すらもこの身に留まらせ、史上最強の戦士になってみせよう」

「ふっ…協力者として期待はしておこうか。
それはそうと、君の元部下だが、私に引き取らせてもらえないか？」

「あいつを？なぜだ？」

石堀にとってその『元部下』は自分に逆らった用無しでしかない存

在。なぜこの男は彼を引き取ろうとしてるのかわからなかった。

「どうもこの体の元の主が急かすのだ。『あいつがどれだけ成長したのか』とな」

「それは、あのウルトラマンゼロのことか？それとも、その体の持ち主の息子の…」

「強いて言えば、両方かな？そのために君の残った部下たちにも彼を試させてもらいたい」

「先に獲物を横取りされても文句は無しだぞ？それと、あの六番目のデュナミストは俺の獲物だ。なんたって奴は後輩でもあり、そしてなにより…」

次に石堀の言った言葉は、この時二人にしかわからない意味を備えていた。ただわかるのは、その時の石堀は野心家の笑みだったことだけ。

「『俺自身』だからな」

「ふん、構わんぞ。我々の元にたどり着く前に死んだらそれまでのこと…」

「さて…お前にも働いてもらうとしよう」

石堀は背後を振り替えると、そこには黒い服になぜか角の生えた青髪の少女がいた。

一方、トリステインから遠く離れたとある国で…
その国の城の壁に刻まれた怪しげな魔法陣がいくつもあった。しかし、そのうちの一つがすうっ…と消滅してしまった。

「ばかな…サキュバスの封印が解けた!?」

ガッツ星人との戦闘からしばらく、怪獣や異星人の起こす事件は起こってない。

「ふう…」

サイトは今日もギーシュとの訓練に励んでいた。今は休憩中である。

「はあはあ…君はもうちょっと手加減してくれないか?ワルキューレを新しく作る余裕もなく狙われてるんじゃどうしようもないぞ」

ベンチで隣に座るサイトにギーシュは言った。

「お前がまだ甘いだけだろ。敵は待ってはくれないのが普通さ。弱音を吐くくらいなら精進しろ」

「厳しいな……」

「俺の師ならそう言う、って話だけど」

「君に師なんていたのかい？」

そんなこと初耳だぞ、とギーシュは目を丸くした。

「まあ、かなりの鬼コーチで有名なんだけど…ぶっちゃけルイズより怖いかも…」

「想像したくないことを聞いたよ…」

ルイズ以上の怖さを持つ人間など想像しただけでゾッとする。

とその時、デルフがいきなり鞘から飛び出し声を上げた。

「相棒、抜け！」

「え！？」

「はあああああああ！！」

突如、銀色の光がサイトの視界に映った途端、サイトはデルフを引き抜き、その光の正体である剣を止めた。

「ほう、なかなかやるな。気配は消したつもりだが」

「いきなり何すんだ！？君は何者だ？」

見たところ、サイトたちと同じ年齢の少女のようだが、変わった格好だった。地球で言えば和風で、しかも使っている剣は日本刀。かつ髪にはかんざしが着けてある。

まさかこの子…

「相棒、俺っちを下ろしな。どうもこの娘っ子、お前さんを試すつもりだったみてえだ」

「試す？」

首を傾げるサイトだがとりあえずデルフを鞘に納めた。少女も刀を鞘に納める。

「インテリジェンスソードとは珍しいものを持ってるな。まあそれはさておき、先ほどは失礼したな。私の名はクリスティナ・ヴァーサ・リクセル・オクセンシェルナだ」

「長っ…」

相変わらず名前が長い連中が多い、とサイトは思った。

「ではクリスと呼んでくれ。異国からこの学院に留学してきた」

「てことは、留学生？」

「そうだ。明日からこの学院で世話になるぞ。サイト」

「なんで俺の名前知ってんだ？それにその恰好…もしかして地球人！？」

自分やハルナにシュウヘイ、それにシエスタのひいじいさんであるキリヤマ隊長以外にもこの世界に来た地球人がいる。それはサイトにとって驚くべき事実。だが、クリスが次に言った言葉は全く違っ

ていた。

「なにを期待させたのかわからないが、私は日本の者ではない」

「え?でもその恰好、どう見ても…」

かなり昔のファッションだが、まぎれもない日本人の恰好なのは間違いない。いや、それとも似てるだけか?

「ふ…その反応だと、アンリエッタの言うとおりお前はニホンから来た者のようだな」

「君は日本の人じゃないだろ?なんで日本を知ってるんだ?」

不思議がるサイトだが、クリスはそれを無視し、大喜びで彼の手を握って飛び跳ねた。

「やはりそうか!会えて嬉しいぞサムライのサイトよ!」

「え…あのー…」

聞いてなかったのか?ルイズといい、貴族って勝手に自分のペース作ってこっちが大変だ…心の中でサイトは愚痴った。

「あっすまない。何か言おうとしていたみたいだな」

「じゃあ、改めて訊くよ。君はどうして日本を知ってるんだ?それに、女王様とどんな関係なんだ?その話し方だと…結構親しいのか?」

「師匠だ。彼もまた日本から来たと言っていた。ただ、「ここことは違う世界から来た」という意味が理解できなかったが…アンリエッタは私の古い馴染みでな。彼女からお前のことを聞いてぜひ会いたいと思っていた」

クリスは邪気のない笑みを浮かべた。こうして見ると、彼女もまた魅力的な顔立ちをしている。

（っていかんいかん！下心のあまり顔がゆるむところだった！下手したらルイズにお仕置き喰らいそうだし…）

別にルイズが見てるわけでもないのに…相当ルイズに恐怖しているサイトだった。

「しかし、あんたメイジなんだろ？魔法は使わないのか？」

そこでウルトラガンのホルダーから突然声が聞こえてきた。獣人事件のさい、サイトがジェイドから託されたナイフ「地下水」である。

「インテリジェンスナイフまで持ってるのか」

「まあね。でも君は、魔法使うよな？」

サイトの質問にクリスは頷く。

「一応な。系統は風で二つ名は『迅雷』だ。でも私はサムライだから基本は剣を使う。お前もそうだろう、サイトよ」

「え…あ、うん」

同じ知識を持つ者同士、何かと話が弾んでいる。この時、誰もが忘れていた。美女に目がない男代表といえるけだものの存在を。

「退きたまえサイト！君なんかより僕の方が手馴れてるのだから！」

そう言ってサイトを突き離し、気安くクリスの手を握るギーシュ。
ぶっちゃけ図々しいにも程がある。それにこれは「違う意味」で手馴れてることだ。
その証拠にクリスも…

「サイト、なんだこれは？何とかしてくれ…」

めちゃくちゃ困り顔だった。

「ああ、君という美しい花に惹かれてしまった愚かなミツバチに、君の名前を教えてくれないか？」

「クリスだ。忘れてもらっても構わん」

「クリスか…どうだい？これから一緒に食事でも…」

ギーシュのギザなアプローチにいい加減イラッとしていくクリス。
その眼はかなりすわっていた。
しかも刀に手をかけようとしている。さすがに血を見ることになりそうだったので、サイトはある手を使う。

「あ！あそこでモンモンが！」

びくっ！
それを聞いた瞬間ギーシュはジェットエンジンのように去って行っ

た。ふう…とため息をついたクリスはサイトの方を向いた。

「さて、悪い虫が去ったことだし、この学院を案内してくれないか？」

とその時だった。

「さあああああいいいいとおおおお！！！！！！！！」

ルイズが鬼の形相で近づいてきた。一体何をそんなに怒ってるのだろうか？
理由は至ってお約束のものだった。

「あんたって奴はまた知らない女に…！」

どうもサイトが他の女の子と話すこと事態が気に入らない。本能的にそれが染み付いてしまったようだ。

「おいおい誤解だって！」

その後、クリスへの学院案内を兼ね、ついでにルイズを静めるのに約一時間はかかった。
ようやく静まったところでサイトは、どうしても尋ねたかったことがある。

「なあ、クリスの師匠ってどんな人だった？」

厨房を案内した時、その中に是非入りたいとせがんできたクリスを招き入れ、椅子に座ったところで彼は尋ねてみた。

「そうだな…とても偉大な方だった。私に武士道を教え、武術を教えたのも彼だった」

「ぶしどう？サイト、ぶしどうって何よ？」

さっぱり意味がわからないと尋ねるルイズにクリスは意外そうな表情を浮かべる。

「なんだ？ルイズはサムライのサイトを使い魔にしてるのに、そんなことも知らなかったのか？」

その「知らなかったのか？」という、まるで当たり前のことを知らなかったと疑う言い方は、ルイズのプライドを刺激してしまった。

「サイト、ぶしどうって何よ！？今すぐ御主人様に教えなさい！」

「い、いやそう言われても…ルイズには難しすぎるって…」

実際サイト自身サムライをやっていたわけではないので、どう説明するべきか困っているのだ。

「あっ、済まない。忘れていたことがあった」

「忘れていたこと？」

「今日、アンリエッタに挨拶に向かおうとオールド・オスマンに言われてきたんだ。護衛はサイト、お前にお願いしたいが頼めるか？オールド・オスマンもお前やルイズならば頼れると仰っていた」

よほどクリスはサムライ一本人の認識で一であるサイトが気に入ったようで、逆にルイズはそれがサイトへのアプローチにも見えているせいか、彼女から唸り声が聞こえる。

「けけけ…もてる男は辛いねえ、旦那」

「相棒はそういう奴さ。新入り」

傍観者としてそれを楽しむ視線で見守る地下水にデルフもからかいじみた笑みを浮かべるように言った。

それはさておき、女の子一人にアンリエッタの元へ行かせるわけにもいかないし、ここはやはりルイズ本人に許可をもらうしかない。

「ルイズ、どうする?学院長から言われてるそうだし…」

「…仕方ないわね。サイトが私の見ていないところで変なことしないように見張る必要もあるし」

「変なこととはなんだ?」

何を言ってるのだ?不思議がるクリスにルイズは恥ずかしげに顔を赤くして怒鳴った。

「何でもないわ!それよりサイト、あのなんとかホークとやらを用意しなさい!」

「なんとか…ほうく?サイト、それはなんだ?
馬車は使わないのか?トリスタニアにはここから徒歩二日、馬では二時間以上はかかるらしいが…」

「まっ、まあ来てみればわかるから。後、乗ってる間に話の続きを聞かせてくれないか？」

サイトはルイズとクリスを連れ、ウルトラホーク1号の搭乗席に座らせ、発進させた。

「サイト、これがウルトラホークというのか。何て速さだ…これほどのものを見たら驚きすぎて逆に言葉が出ないぞ」

「師匠からは聞かされてないのか？」

「ああ、師匠も見ていたら、きっと驚きすぎて寿命が縮まったなんて言っていたかもしれない」

「その人、まだクリスの国にいるのか？」

同じ日本人としては興味深い。是非とも彼に会いたかったサイトだったが、クリスの表情は暗くなっていた。

「実は、去年亡くなったんだ」

「え？」

私がまだ幼い頃、森に教われた私を魔物から救ってくれた剣士がいた。それが私の師匠だった。

彼は名もなき剣士としか語らなかったが、私は是非彼に褒美を与えようとしたが彼は断ったよ。

「俺の剣の届く範囲が俺の国で、俺が王様なんだ。その国の中のお嬢ちゃんを俺は助けただけ。お礼なんかいらないさ」

私はそれでも彼にできることはないか、無理やりにでも城に招き入れた。

存在事態興味深い人なものだったから、私は彼に、私の師匠としてこの国に留まってほしいと頼んだ。

彼は故郷へ帰ることを目的に旅をしていたのだが、もう諦めかけていたこともあって彼は私の師匠として私の国に留まってくれた。

ようやく名乗った名は、『錦田小十郎景竜』。

それから格好や心構えを武士らしくあるように師匠からみっちり叩き込まれた。

まるで、父上が二人いるようだったよ。

でもそんな平穏を切り裂くように、私の故郷に今までに見たこともない魔物が現れたんだ。

「見たこともない魔物？まさか！」

声を上げるサイトと目を丸くするルイズにクリスはそのとおりと頷く。

「そのまさかだ。この国でも暴れたのだからお前たちも知ってるのだろう。『怪獣』をな」

怪獣は暴れまわった。まるで本能のおもむくままにただただ暴れまわった。

魔法も通じない相手に、師匠はただ一人刀一本で立ち向かった。

そして彼は凄まじいほどの傷を負ったところで刀に怪獣を封じたのだ。しかしそれは、ケガの影響で師匠が死することでもあった。

「あんなに小さかったクリスがこんなべっぴんさんになるなんてな…俺は何をやってたんだか…刀なんか持たせやがってよ…でも、家族に会えなくなった俺にとっちゃいい冥土の土産になるよ…」

「そんなことをおっしゃらないでください！」

「なあクリス…最期に、俺の願いを聞いてくれ…
いい嫁さんになって、悔いの残らないように死ぬこと…いいな…」
そう言い残すと、師匠は息を引き取った。

「亡骸は手厚く葬った。父上もこの国を救った英雄だから当然のことをせねばと言ってくれた時は嬉しかったよ」

「そっか…あと一年早かったら、会えたかもな」

「師匠は時々私のいないところで『帰りたかったな…』とよく呟いてた。
サイトは…どうなんだ？」

そうクリスが尋ねた時は、ルイズも思わず身を乗り出しそうになった。

「すぐ帰ろうとは思ってない。この世界でもやることはあるんだ。
ルイズの使い魔だし…」

そしてウルトラマンとして…
そこまでは言わなかったが、この星に留まる理由があるならば、立ち去るわけにはいかない。

「そろそろ着く頃のはずなんだけど…」

とサイトは外を見つめた。もうトリスタニアの街が見えてきている。

「凄いな！まさか、こんな短時間で着くとは！」

感嘆のあまり大声を出すクリス。

とその時だった。

カダン！

別に地震の起こる地上でもないにも関わらず、ウルトラホークが一瞬大きく揺れだした。

「きゃ！」

「なっ、何が起こったサイト！？」

「くそ…エンジンなら正常だったはずなのに…」

今朝と言うか、劣化を防ぐために毎朝欠かさず点検を行っていたのに、一体何が起こっているのだ？

すると、サイトはあることに気が付く。

「そんな…地上がだんだん遠くなってる！」

なんと、ウルトラホークがみるみるうちにハルケギニアの大地から離れ、宇宙へと浮遊大陸のように登っていたのだ。

「この！言うことを聞け！」

操縦ハンドルを握りしめるサイトだが、ハンドルは全く言うことを聞かず、ホーク1号はゆっくりと宇宙へ浮かんでいく。

その先にあったのは、ハルケギニアの世界を象徴する双月のうち、赤い月だった。

その赤い月で奇妙な機械音を鳴らす機械を持つ異星人がいた。

「まんまとかかりやがって。貴様を邪魔者として狙う連中は私だけではないと言うのに…」

そして光輝く星より、一筋の光が飛んできた。

2　眠り姫ルイズ

「ここは…」

気づけば、彼らは予想だにしない場所にいた。今は昼にも関わらず外は真っ暗だ。

「どうなってるのよこれ！いきなり揺れたと思ったら外は夜になってるし！」

「落ち着けルイズ。騒いでも何も始まらない。サイト、お前は何かわからないか？」

「俺にもわからない。ただ、やな予感がするのは確かだ」

改めて外を見るサイト。地上ではめったに見られないクレーターがいくつもある。間違いない。ここは…

「ここは、月だ」

「へえ…ここが月…てえええええええ！？」

今のサイトの言葉にルイズは驚きのあまり顎が外れそうになった。何せ、地上から見ていた月の大地に立つなんて、まだ宇宙進出を果たしてないハルケギニアの人間から見ればありえない。

「こんなことあるわけないじゃない！フライの魔法もないのに」

「あのなあ、今更何言ってんだ？いきなり怪獣とか宇宙人がハルケ

ギニアに現れたってのに、『あるわけないじゃない』はないだろ？きっとこれも、異星人の仕業かもしれない」

「う…」

確かなことを指摘されたルイズは返す言葉を見つけられなかった。まあ自らの意思と関係なくいきなり月に降り立ったなんて事態になったら、ベテランの宇宙飛行士だって驚かざるを得ないだろう。

「このウルトラホークに宇宙耐性のシステムがあって助かったよ」

かつてウルトラ警備隊が使用したウルトラホーク1号と2号には、宇宙での任務を可能にするため、空気清浄器や酸素タンクの設備が整ってる。もしなかったら彼らは窒息死して宇宙の藻屑になってたかもしれない。

サイトから宇宙の危険性を聞かされた二人はぞっと恐怖した。

「じゃあ早くここから脱出しないとマズイじゃない！」

「サイト、何とかならないのか！？」

「慌てるな二人とも。もう一回操縦してみる」

サイトはホーク1号のハンドルを握り、数多くのスイッチやレバーを使いながら発車を試みるが、ホークは全く動こうとしなかった。

（今侵略者や怪獣が現れたりしたら対処できない。シュウヘイに連絡を入れないと）

ビデオシーバーの蓋を開き、シュウヘイの持つパルスブレイカーに通信したが、ビデオシーバーの画面には砂嵐が移るだけで、シュウヘイとの連絡は結局取れなかった。

「くそ…操縦も連絡もできない。このままだったら間違いなく…」

最悪の事態が、迫ろうとしていた。いずれこのホーク内の酸素は尽きるしかないだろう。その前に、何か手を打たねば…

すると、操縦席の電波探知装置の針が、大きく揺れだした。何か超音波が放出されてるのか？

確かめねば。おそらくこの超音波は外から発信されている。

「二人はここにいるんだ。俺は外に出てみる。ホークの故障の原因がわかるかもしれない」

「外に！？あんた今外に出るのは危険て言ったじゃない！」

「ちゃんと宇宙服を着たら外に出られるさ。とにかく二人はここで待ってるんだ。絶対に出てくるなよ。いいね？」

サイトはそう言って二人をホークの操縦室に残し、入り口付近でウルトラゼロアイを取り出し、装着した。

「ジュア！」

彼の言う宇宙服、それはウルトラマンゼロとしての姿そのもののことだった。これなら宇宙空間でも耐えられる。等身大のゼロはホークの入り口から外に出て、月の大地に降りた。

あたりは暗く、わずかに太陽の光が差し込むだけだった。もし戦闘になれば、太陽光線から光エネルギーを吸収できず、苦戦は避けら

れない。
何としても見つけないといけない。このまま変身した状態でホークを運び、地上に戻ることを、正体不明の敵は許さないだろう。

「どこにいるんだ！なぜ俺たちを狙った！？」

『なぜだと？それはお前が一番よく知っているだろ？ウルトラマンゼロ』

ゼロの怒鳴り声に答え、どこからか声が聞こえてきた。そして岩の影から一体の異星人が現れた。

「お前は確か、ザンバ星人！」

現れた異星人は『復讐怪人ザンバ星人』。ウルトラセブンことモロボシダンの上司だったキリヤマ隊長と、その親友だったクラタを罠にはめようとしたエイリアンだ。

「ホークに異常を起こさせたのはお前か！」

ゼロの指摘に、ザンバ星人は見慣れない小型機械を見せつけた。

「この装置でお前の乗り物をこの月へ誘い込んだのだ。しかも電波障害のおまけ付きでな。
この月面では助けも来ないだろう。ふふ…」

「一体なぜこんな真似をした。俺だけが標的なら、二人を巻き込む必要などなかったしく、機会がいくらでもあったはずだろ！」

「さあな。私はただ我々の主である『冥王』の命令に従うだけ。詳

しい情報など知らぬ」

口笛を吹くように知らないと言い張るザンバ星人。ゼロはどうもこのザンバ星人は何かを隠している気がしてならなかった。

「バカな真似は止めて今すぐお前の星へ帰れ！俺は、できれば戦いたくない」

「噂通りの甘ちゃんだな貴様は。だったら我が怪獣たちの餌になれ！」

ザンバ星人は妨害電波発生装置を捨てると、新たに別の機械を取り出した。

グレイも所持する装置『バトルナイザー』だった。

【バトルナイザー、モンスロード！】

ザンバ星人から二枚の光のカードが飛び出し、一体は『月怪獣ペテロ』もう一体は『満月超獣ルナチクス』となって降り立った。

「なっ、超獣まで従えてるのか！？」

超獣と言えば、ウルトラマンエースやウルトラマンタロウ、そしてウルトラマンメビウスとも戦った、完全な兵器としての怪獣。メビウスに倒されてから姿を見せてなかったはず。が、こうして超獣が自分の目の前にいる。考えられるのは、この超獣がわずかな生き残りであること。もう一つはもっと最悪な…

（エースの言っていた…奴がまた…）

「何ボーッとしているのだ！やらないのからこっちから行くぞ！行けテペト！ルナチクス！」

二体の怪獣はゼロを踏み潰そうと走り込むように迫ってくる。ゼロは踏み潰される前にいつもの約５０メートルの体に巨大化、近づいてきたルナチクスを押さえつけ、蹴り飛ばした。

「デュア！」

ゼロはペテロに飛びかかり、連続パンチを喰らわせた。しかし、慣れない暗い空間の中では、光の存在である彼は思うように力が発揮できない。

よりパワーを上げるため、ゼロはブレスレットを鎧に変え、キーパーアーマーとして装備し、ペテロを蹴り飛ばす。

だが背後からその攻撃の隙を突き、ルナチクスがゼロの背後からぶつかってきた。

「グワッ！」

月の大地を転がされるゼロ。ペテロはそんな彼に水を体内から噴射した。ウルトラマンは寒さに弱い。この宇宙空間は零下何百度にもなるので、水をかけられるだけでも非常に危険なのだ。

水を浴びせられてるゼロにルナチクスは、目から放つ光弾を次々と撃ち込んでいく。

「ウワアアア！」

しかも、ここでゼロを更なる危機に陥れる事態が発生した。クリス

はホークの窓の外を見つめ、あることに気が付く。

「！また暗くなっていく…！」

月面がまたさらに暗くなっていたのだ。この時、ハルケギニアの大地ではもうじき日が暮れ、夜が訪れようとしていたのだ。

ザンバ星人はこれを狙っていた。日時や戦う場所、そして敵の弱点をしっかり調べあげ、時が来たらそこを突いて討つ。まさに巧みの技と言えた。

だが危機はゼロにだけ訪れた訳ではなかった。

コトッ…コトッ…

ホークの内部から足音が聞こえてきた。サイトが帰ってきたのか？ルイズは操縦室の扉を開けると、彼女は刹那的に驚愕の表情を浮かべた。

「あ、あなたは！」

一方でゼロも苦戦を強いられていた。

ペテロに飛びかかるも、逆に彼はペテロにのし掛かられてしまい、身動きを封じられてしまう。

しかも夜が訪れようとしているせいで、体が冷え始めている。水をかけられたこともあって凍りついていた。

ペテロの重みと共にルナチクスがエネルギー弾を連発してくる。

「グォォ…！」

ピコン、ピコン、ピコン…

カラータイマーがエネルギーが尽きかけているのを知らせ、ビームランプも点滅し、アーマー装備の限界を知らせていた。

「デュ…ア！」

無理やりのし掛かるペテロを蹴り飛ばして抜け出すが、体が凍りつくように動けない。

「もう限界のようだな！」

ザンバ星人が勝ち誇るように叫んだ。

「さあ、ペテロとルナチクス！止めを刺せ！」

「くっ…」

「ガアアアア！」

高らかに吠えるルナチクス。ペテロと共に、片膝を着いているゼロに近づいていく。

ゼロ、まさに絶対絶命のピンチだった。

「ハハハハ！ウルトラマンの一人を抹殺すれば私もこの宇宙で名を上げた戦士となるだろう！！」

「そうはさせんぞ！」

突然どこからか声が轟いた。その光は赤い発光体としてペテロとルナチクスを突き飛ばした。

「グゴオオ！？」

「なっ！？」

赤い発光体はゼロの前に降り立ち、その姿を現した。特徴的な二本角に父とよく似た赤いボディと顔立ち。

ウルトラの父の息子であるウルトラ六番目の戦士。

名は『ウルトラマンタロウ』！。

「ハアアアア！」

タロウは高く飛び上がながら空中を舞い、ルナチクスを蹴り飛ばした。

〈スワローキック！〉

蹴り飛ばされたルナチクスは、偶然にもザンバ星人の真上に落ちてきた。

「ぎゃあああああ！」

ズン！

ザンバ星人は悲鳴と共にルナチクスの下に潰れ、悲鳴と共に消えていった。

ルナチクスは立ち上がり、眼球を乱射してタロウを攻撃するが、対するタロウは見事な身のこなしで次々と避けていった。

ゼロは今ふらつきながらも立ち上がっている。タロウはすぐ自らのエネルギーをゼロのカラータイマーに流し込んだ。

「タロウ…あんたまで…」

「話は後だ。一気に行くぞ！」

「ああ！」

ゼロはペテロ、タロウはルナチクスを捕まえ反対側にに立つと、相手側の方へ駆け込み、捕まえていた怪獣同士をぶつけた。

「ゴオオ！？」

怯んでいる隙にゼロはＬ字型に、タロウはそれとは上下左右が反対向きに両腕を組み、必殺光線を同時発射した。

〈ワイドゼロショット！〉〈ストリウム光線！〉

二体の月を象徴とする怪獣たちは、二人の戦士たちの攻撃で大爆発を起こし、消え失せた。

「助かったよ、タロウ」

「以前ジャック兄さんから聞いただろう？日付不定で君を試すと？」

そう言えば、確かにそうだ。以前メフィストと戦った時もジャックが宇宙警備隊に戻る資格があるかを確かめに来たことがあった。タロウも同じ理由で来たのだ。だがそれだけではなかった。

「君に知らせなくてはならないことがある」

「なんだよ？」

「私やジャックを初めとしたウルトラ兄弟の中には、一度は命を落とした戦士がいるのを知っているな？」

「ああ、でもなんとか生き返ったんだろ？ハルナみたいに」

昭和時代、初代ウルトラマンをはじめとし、ウルトラマンジャックからウルトラマンレオまでのウルトラ戦士が命を落としたことがある。中にはバラバラになって殺されるという残酷な死に様を見せたこともあった。

だが、彼らは光の国の高度な科学力や他のウルトラマンたちによって復活し、最終的に自分を一度殺した敵を倒したのだ。

ウルトラマンメビウス曰く「そんな保証はない」またＧＵＹＳ総監サコミズ曰く「奇跡的なこと」だった。

次にタロウが言ったのは、その奇跡を潰す事実だった。

「新しい命のエネルギーの精製が不可能になった。もう誰も生き返らない」

「なっ、なんだって!?」

「何者かが銀十字軍のデータベースに保管されていた命のエネルギーの精製データや必要な器具を根こそぎ破壊してしまったのだ」

「そんな、あそこは俺たちにとって重要な機関だろ!警備だって万全なはずだ!」

「確かに警備は万全だった。ババルウ星人ほどの変身能力の持ち主すら今は入れないほどにな。にもかかわらず侵入を許した。こんなことは考えたくないが……我々ウルトラ戦士に裏切り者がいる」

衝撃的事実が、ゼロの胸に突き刺さった。

「ゼロ、君はまだ追放処分が解けていないから新しい命の提供はできないままだったが、もはやもしもの時の、君の命の復活にさえ希望が潰えてしまった…
だからゼロ、全うなウルトラ戦士として生きたいのなら」

ガッ!とタロウは力強くゼロの肩を掴んだ。その込められた力は、彼の強い願いそのものでもあった。

「絶対に死ぬな。いいな?」

「…ああ、わかった。って言うか、ハナから死ぬつもりはないから安心してくれ」

「そうか、それを聞いて本当に安心したぞ」

「ケケ…もう勝った気でいるのか？」

「「！」」

ゼロとタロウはその声でバッ！と振り向く。

よーく見ると、ルナチクスに潰されて死んだはずのザンバ星人が生きているのだ。

「私は…ただのカモフラージュだ…わざわざこんな月面で貴様らと私を戦わせたのも、あの方たちの命令…今頃…貴様の仲間であるあの小娘たちは……」

「！」

ザンバ星人が完全に事切れたと同時に、ゼロはやっと気づいた。自分はまんまと罠にはめられてしまっていたのだ。

「急いでホークに戻らないと！」

「私も一度お前の現在の情報の報告に光の国へ戻る。気を付けるんだぞ、ゼロ」

「ああ、あんたもな」

ゼロの言葉を聞いてすぐ、タロウは宇宙の大海原へと飛び去っていった。

「タアアア！」

「二人とも！無事か！？」

変身を解いてホークの操縦室に飛び込んできたサイト。真っ先に飛び込んだのは、床に意識を失って倒れていたクリスだった。
だが、どういう訳かルイズはいなかった。

「クリス！しっかりしろ！クリス！」

彼女を抱き抱え、サイトは必死に揺り動かした。
うめき声をあげながら、クリスは目を覚ました。

「サイト…無事だったか…」

「ルイズは！？姿が見えないぞ！」

「はっ！そうだ！」

クリスは血相を変えて体を起こし、立ち上がった。

「何があったんだクリス！？」

「それが、お前が出てから何者かが侵入して、ルイズを拐ったんだ！私は刀を抜いて戦ったのだが…」

「返り討ちにされて気絶していたって訳だな、武士の娘っ子」

デルフの言葉に、クリスはコクッと頷いた。

「済まないサイト。私が不甲斐ないばかりに…武士失格だ」

「そう責めるなよ。別にクリスが悪い訳じゃ…」

クシャ。何かを踏んだような音がした。サイトは気になって足元を見ると、何か小さな手紙の封筒を踏んでいた。拾い上げ、中身を調べてみると、ハルケギニアの文字で何かが書かれていた。

「地下水、読めるか？」

「えっと…『君のご主人は預からせてもらった。返して欲しければトリスタニア城の地下へ来い。君と同じ、地球人の使い魔を連れてな』。旦那、こりゃ脅迫状ですぜ」

ザンバ星人は囮で、ゼロ（サイト）が戦ってる間に彼女を人質として捕まえるのが狙いだったようだ。しかし、一体何者が何のために？

「ここにずっといることはできない。まずはアンリエッタにこのことを報告する必要があるな」

「ああ、ホークの異常の元手は絶ったし、急いで戻ろう！」

サイトはすぐ操縦席に座り、ハルケギニアの大地へ戻って行った。

「ルイズが拐われたですって！？」

アンリエッタは二人から事情を聞いて思わず声をあげた。
せっかくの再会の機会が台無しとなっていた。

「使い魔である俺の責任です。すいません…」

「いえ、サイトさん。あなたも悪くないわ。でも気になるのは…」

あの脅迫状らしき置き手紙だ。

「トリスタニア城の地下には、何かがあるんですか？」

「わかりません。いくら女王の私でも、この城のすべてを知り尽くしてる訳じゃないわ。この城には、王家の子孫たちを代々守る存在がいるとか…曖昧な情報だってあるのです」

「とにかく地下へ行ってみよう。罠かもしれないが、何かあるかもしれない」

三人は、とにかくしらみ潰しにでも手持ちの情報通りに動くしかで

きない。とりあえず地下へ行って何があるのか確かめに向かった。

「アンロック」

鍵解除の魔法で鍵のかけられた地下への扉を降り、三人は地下一階へとたどり着いた。

そこは怪しげな、少し狭い扉が一つ置かれているだけだった。

「この扉があったなんて知らなかったわ」

「…」

サイトは目をギラギラと光らせ、透視能力でその扉が何なのか確かめてみるが、何も見通せなかった。

（透視できないなんて…この扉は…）

「ルイズ！」

いきなりアンリエッタは何かに飛び付くように駆け寄った。

今…ルイズって言ったのか？サイトはアンリエッタの腕の中にいる人物を覗き込む。

「！」

紛れもないルイズだった。だが、宇宙船もなしに一体どうやってこんな場所にたどり着いたのだ？

必死にアンリエッタは涙ながらにルイズの名を呼ぶが、ルイズは先ほどから目を覚まそうとしない。

その時、クリスは扉の前にもまた、手紙が置いてあるのを発見した。

「『小娘の心は我々が奪わせてもらった。心を取り戻さない限りその小娘は永遠に目覚めない。もとに戻したければその小娘と頼れる仲間を連れてその扉を潜り抜けろ』。心を奪わせてもらった…だと！？」

「そんな…じゃあルイズは…」

動かないルイズを見て、アンリエッタは最悪の状態を想像していた。自分の心を許せる相手がまた一人いなくなってしまったのか…

しかし、サイトは動揺の姿勢を見せず、ルイズとの契約の印であるガンダールヴのルーンをアンリエッタに見せた。

「このルーンはルイズとの絆です。これが消えない限り、ルイズも俺も死んだことにはならない。だから泣かないでください。やっぱり女の子は笑顔が大事ですから」

回りを安心させるその明るい笑みは、アンリエッタの心に落ち着きを取り戻させた。

「そうですね。ごめんなさい、女王とあろうものが取り乱して…」

「いえ、女王である以前にあなたは人ですから、取り乱さない方が変ですよ」

「それより二人とも、なるべく早い方がいいんじゃないか？この扉の先に、ルイズの心を奪った輩がいるのだろう？」

クリスの言葉に二人は我に返った。そうだ、手っ取り早くしないとルイズに何が起こるかわからない。

すぐ、頼れる仲間にビデオシーバーで連絡をとった。

その数分後…

「事態は、深刻のようだな」

サイトの連絡でシュウヘイとウェールズ、そして心配になってやって来たテファまでやって来た。

「ルイズの心を取り戻すには、あの扉の先に行く必要があるみたいなんだ」

「だったら、開けるしかあるまい。手立てはここしかないんだろ?」

「ああ…」

「よし、念のため離れてろ。俺が開ける」

シュウヘイはその扉のドアノブに手をかけ、ゆっくりと扉を開いた。

瞬間、まばゆい光が辺りを包み込んだ。

「っ…」

目映い光が晴れ、目を開けたサイトに映ったのは…

「ここは…トリスタニア城のホール!?」

城の内部をよく知るアンリエッタは声をあげた。
さっきまで城の地下室だったにも関わらず、いつの間にか城のホールに転移していたようだ。

しかし、どこか違う感じがするのをアンリエッタは感じ取っていた。

「み…みんな、外を!」

ウェールズが声を震えさせて窓の外を指差した。
言われるがまま一同は外を見つめると、またしても驚くべき光景が映った。

「街がない…というか、草木一つ見当たらない」

外には何もなかった。ただ真っ黒の雲に空は包まれ、大地も焼け焦げたように黒く染まりきっている。草木も、たった今シュウヘイが言ったように植物も生えてない。虫の気配すら掴めなかった。

「まさか、あの扉を開けたばかりに…」

自分の国が滅亡してしまったのか?アンリエッタは絶望のあまり腰

を抜かして床にへたり込んでしまった。

「安心したまえ。ここは君たちが知るハルケギニアではない」

「！」

突然ホールのど真ん中に、黒い霧のようなものが出現した。サイトたちはすぐそちらの方を見ると、その中からある男が出てきた。銀髪の、サイトたちとは変わらない若い青年のようだ。

「初めまして。僕はダンプリメと申します。以後お見知り置きを」

「ここが私たちの知るハルケギニアじゃないって、一体どういうことです？」

杖を手に警戒心をむき出しにするアンリエッタ。ダンプリメと名乗るその青年は気負うことなく続けた。

「この宇宙中の星の世界には、かならず表と裏がある。例えば国が豊かである反面、実は裏で汚い仕事で国を支えてると言ったことがあるようにね」

「何が言いたいんだ？」

とサイト。ダンプリメは態度を変えず続ける。

「この世界は簡単に言えば…裏のハルケギニア、僕たちはこの世界を『ネガ・ハルケギニア』と呼んでいる。つまりもう一つのハルケギニアさ」

それを聞いて、一同は一瞬固まった。

「ただ君たちのやって来たハルケギニアとは違う。君たちの来た表のハルケギニアはちゃんと存在はしてるから安心して。女王陛下」

どうやら自分たちの住んでいたハルケギニアとは似てるだけの別物らしい。ちょっと安心したアンリエッタとウェールズだが、まだ明かされてない事実がある。

「ならどうして、この世界はこんなに荒れてるの？」

テファの質問に、ダンプリメはさらに続けた。

「この世界はね、この世界でのルイズが、自分の使い魔の怒りを買ったせいで滅んだのさ」

その言葉に最も動揺したのは、サイトだった。

「それ、一体どういう意味だ！？」

「それ以上は、そう簡単には明かせないよ。面白くなくなるから」

指をパチンと鳴らすと、彼らの前に四つのくぼみが掘り込まれた扉が二つ現れた。

「君たちには選抜でメンバーを決めてもらう。この扉を行く組を二つ、待機組を一つ」

そして次にタンブリメの手に取り出されたのは、二枚のカード。その二枚を、一枚はサイトに、もう一枚はシュウヘイに投げ渡した。

「僕は物語を作るのが趣味でね。ハッピーエンドもバッドエンドそんなに嫌いじゃない。君たちには僕が数々の次元世界を元にした仮想世界に旅立ってもらう」

「ゲームのつもりか？」

シュウヘイの言葉に、ダンプリメはただ笑うだけだった。

「まあ、そう見てもらっても構わない。ちなみにルイズの心を取り戻すには、用意された全ての物語を完結させればいい。そうすれば、今君たちが持ってるカードの形でルイズの心のかけらが手に入る。さて、眠り姫にはベッドくらい用意しようか」

ダンプリメが再び指をパチンと鳴らすと、扉から少し離れた場所にベッド、そしていくつかのソファーが用意された。敵ながら気遣い万全な奴だ。

「じゃあ、健闘を祈ってるよ」

ダンプリメは黒い霧のようにフッ…と消えていった。

「遊んでやがる…ルイズの心をもてあそびやがって…」

握りこぶしを作るサイト。怒りが少しずつ込み上げてくる。

「ネガ・ハルケギニア…まさかそんな世界があるなんて考えたこともなかった」

ウェールズは荒廃した窓の外を見つめた。

「まず扉が二つあるなら、両方行くのに二グループが適任だろう」

シュウヘイの提案で、いまいるメンバーを三つに分けた。

まずサイト、クリス。

次にシュウヘイ、テファ。

待機組はアンリエッタとウェールズ、そして眠り姫となったルイズ。

「本当なら置いていくつもりだったんだが…」

とシュウヘイ。本当はテファを置いていくつもりだった。危険がふりかかる可能性が大だと考えるのが妥当だからだ。

「ごめん…でも、もう一人は嫌だから…」

それでもテファはどうしてもシュウヘイから離れたがろうとしなかった。彼が心配で、かつ拐われた時のトラウマもあって、かなりの寂しがり屋になっていた。

「来たからには仕方ない。俺から離れるなよ」

「うん」

「なあ、気になるんだけどこのカード…」

サイトはタンブリメから渡されたカードに描かれた絵柄を見て、不

思議そうに呟いた。

「この絵、どう見てもウルトラマンの絵にしか見えない」

その二枚のカードには、赤と紫と銀のウルトラマン、もう一枚にはウルトラセブンに似てはいるが、模様やプロテクターの形が違う赤いウルトラマンが描かれている。

（この二枚目の方は、なんか光の国で見たことあるような…誰だったっけ？）

ゼロとしての記憶を探るが、なんかどうしても思い出せずにいた。

「よし、時間をかけるわけにもいかない。サイト、行こう」

サイトは頷き、クリスと共に左側の扉に立った。

「じゃあウェールズ、ここを頼んだぞ」

「ああ、気を付けてくれ」

「あなた方に始祖のご加護があらんことを…」

ウェールズは信頼の眼差しを向け、アンリエッタは旅立つ戦士たちに祈りを捧げた。

サイトは扉の前で三色のウルトラマン、シュウヘイは赤いウルトラマンのカードを高く掲げた。すると、扉は光を放ちながら開かれ、サイトとクリスは左側、シュウヘイとテファは右側の扉の先にある世界へと足を踏み入れた。

「待ってろよルイズ…」

クリスと共に光の道を歩くサイト。
その時、背後から誰かの視線を感じた。

「…！？」

とっさに振り向くサイト。彼の視界に映ったのは、青い髪の、幼い少女だった。その少女はだんだん自分たちとほぼ同年代の若さに成長していき、最終的には幻のように消えた。

「どうしたんだサイト？」

「あっ、いや…なんでもない」

やはり幻だったのか？とサイトは思った。しかしこうも考えていた。

（あの子…どこかで…）

しかし、ここで立ち止まるわけにはいかないので、サイトは道の先にある光へと歩き出した。

これがルイズではなく、サイトやシュウヘイ自身にかけられた罠だとも知らずに。

3　ティガ／二つの再会

仮想世界のとある山奥で…

「おい、バチ当たらないか？」

「今さら何言ってんだよ？昔っからよくやってたろ？それにこんな古ぼけた場所に置くだけなんてもったいねえ。換金して有効活用した方が効率的だ」

日本制と思われる、小さなお堂から、金箔で塗られた小さめの像と、立派な日本刀を盗み出している三人の泥棒集団がいた。

同じ頃、山道で一人の巡査が自転車で夜道を走っていた。

とその時。

『復讐だ…』

突然山が地鳴りを起こし、巡査は自分の走っている山の頂上を思わず見上げた。その山から、なんとウルトラマンの手とほぼ同じくらいの巨大な腕が飛び出してきたではないか。

「あぁ…あああああ！！」

思わぬ光景に恐怖を覚えた巡査はすぐさまその場から逃げ出した。謎の巨大な腕は巡査が立ち去ると同時に、再び山の地面の中に潜っていった。

「ここは…」

見知らぬ地に来ると必ず出してしまう台詞を言うサイトとクリス。
クリスにとってあり得ない光景と言えた。
彼女の感覚では、ガラス張りの壁が数多く敷き詰められ、しかも自分の国やトリステインの城よりもかなり高い。自分たちの立っている城の一階の、真ん中に空いている大きな吹き抜けがその巨大っぷりを物語っている。
しかも驚くことに、装備していた武器を除けばサイトとクリスの服装がいつの間にか変わっていたことだ。

「ここって…地球!?」

確かにここは紛れもない地球の施設だった。軍服のような格好をした人や白衣を着た科学者らしき人が多くいることから、おそらくここは地球防衛軍施設の一つなのだろう。だがサイトですら知らなかったことがある。

「ＴＰＣ?」

吹き抜けの高い場所に『ＴＰＣ』とアルファベットで書かれたエンブレムが飾られている。

「これが仮想世界ってのか。ここまで世界をリアルに再現できるな

んて…」

タンブリメは一体何者なのだろうか？サイトはだんだんダンプリメへの不信感を抱き始めた。

「ここが師匠の言っていたサムライの国か？話とはだいぶ違うようだが…」

クリスはここが師匠の景竜のいた世界だと感じてはいるようだが、彼女の師匠のいた時代とは大きく異なっていた。

「いや、間違ってないよクリス。ただ時代が違っていたんだよ」

「時代が、違う？」

「多分クリスの師匠は俺の世界の時代とはまた違う、別の世界の遥か過去の時代からハルケギニアに流れ着いてきたんじゃないかな？」

そう説明はしたものの、やはり別世界の概念がないクリスが理解するのに少し説明する時間を要した。

「つまり、私の師匠のいた時代の遥か未来で、お前の知る地球とやらともまた違う世界だと言うことか？」

「あくまで予想だけどね」

「世界とは広くて難しいな。私が師匠から学んだ武士道よりも難しいな…」

とクリスは少し難しい顔をした。まだ理解しきれてないようにも思

われる。

「おい、相棒…」

デルフは突然鞘から顔を出してきた。その声は何かに驚いてるように震えている。

「どした?デルフ…って!?」

「まさか…」

間違いない。自分たちと同じ白を強調とした隊員服にあの桃色の髪をしている少女…

「ルイズ!?」

ルイズだった。だがさっきまで目覚めぬ眠りについていた彼女がなぜここにいるのだ?

とにかく話を聞いてみよう。サイトはルイズに駆け寄った。

「ルイ…」

「やっと見つけたわ!あんたが新しく配属されたサイトリーダーにクリス隊員ね!さっきまでどこで道草食ってたのよ?」

サイトの顔を見るや否や、ルイズはいきなりサイトに怒鳴り出した。

「は…あの~ルイズさん?どうかしたんでしょうか?」

「ルイズ?誰のこと言ってんのよ?私は『レナ』よ!覚えときなさ

い！」

レナ？いや…そうか。

確かこの世界はタンブリメの作り出した仮想世界。タンブリメはルイズの心を分け、俺たちに用意した世界に一つずつ振り分けたんだ。

そしてこの世界でルイズは『レナ隊員』の役を与えられたからサイトを知らず、『サイトリーダー』なんて呼び方をしてるのだ。

「集合かかったからあんたたちも一緒に指令室に来なさい。イルマ隊長がお呼びだから」

そう言うと彼女はきせるを返して歩き去っていった。

「ハルケギニアでの俺たちを知ってるようには見えなかったな」

「確か、あの銀髪小僧は『物語を完結させろ』とか言ってた。旦那と武士の娘さんがこの世界でやるべきことは、この世界で与えられた役割を果たすこと、ってことなんでしょうね」

地下水が言った。

「とりあえず、指令室って場所に言ってみよう。役割を果たすために何をするべきかわかるかも」

「そうだな、行こう」

この世界の防衛チームの名前は『ＧＵＴＳ』という名前で、元々は謎の現象の解明を明かす仕事だったが、突然の怪獣復活を期に、対怪獣防衛チームとなった。
指令室に来たところで、二人はそこで待機していた隊員たちに自己紹介した。

「本日、このＧＵＴＳに配属された新副隊長の平賀サイトです」

「新隊員のクリスティナ・ヴァーサ・リクセル・オクセンシェルナです。クリスで結構」

ちょっと緊張はしたが、はっきりと答えた。

「新しいリーダーなのに、すごい緊張してますね。
あっ、僕はヤズミです」

ヤズミ、隊員たちの中でも若く、怪獣分析を担当している。
リーダーとは、このＧＵＴＳでは副隊長格の人間の通称のようだ。
「なんか新しく入隊してきた時のダイゴみたいやな～。俺はホリイ。よろしゅう」

関西弁で喋るこの小太りの男性は兵器開発に優れたホリイ隊員。

「止してくださいよ。あっ、今ホリイ隊員の言っていたダイゴです。よろしくお願いします、平賀リーダー、クリス隊員」

「ああ」

ダイゴが手を出すと、サイトもその手を握り握手した。
その時の二人は一瞬、不思議な感覚を覚えた。

（この人…何かを感じる…）

（このダイゴって奴、なんか俺みたいな力を…）

「何ボーッとしてんのよ?」

レナの一言で二人はハッ!と我に返る。

「あはは、何でもないよレナ」

ダイゴが誤魔化すように笑うと、女性隊長イルマがちょうどかかってきた電話を切り、隊員たちの方を向いた。

「昨日の夜、宿那山にて突然巨大な腕が出現したとの報告があったわ。
平賀リーダー。早速クリス隊員とダイゴ隊員、そしてレナ隊員と一緒に宿那山に行ってくれるかしら?」

「わっ、わかりました!」

一方、あの三人の泥棒集団は車で山を下った後、近くのコンビニで休憩をとっていた。
その中の一人は車の中で留守番をしている。
退屈そうに男があくびすると、ちょうど同じタイミングで金箔塗り

の像が風呂敷から顔を出した。そして、男に異変が起こった。
『バカな奴よ…拙者が苦労して退治した魔物を復活させおって』

「だっ…誰だ！？」

『今の拙者は「本体」から切り分けた魂の一部でしかないため肉体がない。お主の体を借りるぞ』

「かか…体を借りる？って待て！あっ…がっいたっ…あああああ！！！！」

しばらくその男の悲鳴が響いたが、悲鳴が収まると同時にその男は刀を担いで車から降りた。
ちょうどそこに買い物を終えた二人が戻ってくる。だが、仲間が戻ってきたにも関わらず刀を担いでる男は完全に無視しその場から歩き去ろうとしていた。

「おい、どこ行くんだよ」

それを見逃すまいと一人がナイフを彼に向ける。

「そいつ（刀）は置いてけ。刺すぞ」

と次の瞬間、ズバシュ！
なんと刀を持った男がナイフを突きつけてきた仲間に刀を振り下ろし、ナイフの男はその場に倒れ付した。いきなり殺人現場を見ることとなった残りの一人は腰を抜かしてしまう。

「ひひ…人殺し！」

「案ずるな。峰打ちじゃ」

「刀に血がついてるように見えますけど…」

「幻覚じゃ。それよりお主、この箱を動かせるか？」

刀を持つ男が車を刀の先でカツカツと叩きながら尋ねた。まるで「自動車」という言葉すらも知らないような言い方だった。

「確かに動かせますけど…」

「なら拙者を、お主たちが盗みを働いたあのお堂まで連れていけ」

「それはできます…って帰りは確かあんたが運転するって！」

かちゃ！

「はい、わかりました…」

文句をいう男だったが、刀を持つ男が刀に手をつけようとした瞬間大人しくなった。

宿那山のふもとに着いたところで、ダイゴはサイトの元に走ってきた。

「平賀リーダー」

「どうしたんだ？」

「あなたは、一体何者何ですか？」

「っ！」

ダイゴはやはりあの握手の時、自分の中にある力を感じ取っていたようだ。
ウルトラマンの力を。

「お前も、ウルトラマンなのか？ダイゴ」

それを言われ、ダイゴは息を詰まらせたように言葉を失った。

「その様子だと、やっぱりそうなんだな」

「…はい」

ようやく口を開いたところでダイゴは頷いた。
そして彼は続けた。自分の肉体には超古代の戦士の遺伝子が組み込まれていること。以前二体の怪獣が『ティガの地』で現れ、そこで破壊されかけたウルトラマンの石像の一体と一つになり、『ウルトラマンティガ』に覚醒したと。

「この力のお陰で数々の強敵を倒してきました。でも時々不安になるんです。僕がこの力に心を奪われ、悪になるんじゃないかって…」

不安げに彼は胸を締め上げるように握った。いきなり思いもよらない力を手にすれば、二つに思いが分散する。自らの力を過信するか、自分を恐れるか。ダイゴはその悩みで苦しんでいるようだ。

「誰だって不安さ。ウルトラマンじゃくてもな」

サイトの言った言葉にダイゴは俯かせていた顔をあげる。

「俺も戦うことに不安を感じたことがある。ウルトラマンになったことが時々誤った選択じゃないかって考えたりもした。でも考えてたって仕方ないさ。とにかく何のために戦ってるのかを心に留めとけば、少なくともそいつは悪にはなったりはしない」

「…すみません。変なこと聞いちゃいましたね」

「気にするなって。仲間に相談するのは悪いことじゃないさ」

「宿那鬼？」

現場である宿那山、その山の、刀や像が盗まれたお堂にたどり着いたサイト、クリス、ダイゴ、そしてレナ。山から出てきた巨大な腕について、実際に見たと言う巡査、山田に尋ねると彼は「宿那鬼が復活したんだ！」と言った。

「宿那鬼って、一体何ですか？」

ダイゴが尋ねると、山田巡査が続ける。

「宿那鬼はその昔、この世を荒らしていたと言われてる、この地域に伝わる伝説の鬼神のことですよ。その鬼神を錦田小十郎景竜が刀で四肢をバラバラにして退治し、その体を山のあちこちに、自らの魂の一部と宿那鬼の魂を刀に封じ込めたそうなんです」

「！」

錦田景竜…

その言葉にいち早く反応したのはクリスだった。

師匠が、この世界にいただと…？

「錦田景竜は生涯放浪の旅をしていたらしく、その旅先で会ったもののけ、つまり怪物たちを打ち倒していったそうなんです」

「なんかうさんくさい話ね」

とレナ。やはり『レナ』という役割を与えられても、彼女（ルイズ）らしい感想だった。何かと現実主義的である。

「私が昨日見たのは間違いなく宿那鬼の腕ですよ。『恨みを晴らしてやる』とか『復讐だ』とか…きっと封じられて何百年も経ってる今でも景竜のことを恨んでるんです。あぁ、恐ろしい…」

「…」

「クリス、大丈夫か？」

景竜の名を聞いて驚きのあまり固まっていたクリスに、サイトは声をかける。

「え?あっ…済まない…」

(いきなり死んだ師匠の名前聞いたんだもんな。そらビックリするよな)

とその時、また彼らのいる宿那山が地響きを起こした。

『おのれ…今度こそ…今度こそこの世を…』

地響きと共に、彼らの頭の中に聞こえてきた声は、両腕・両足、そして頭の順で宿那山の周囲の地面から這い出てきた。

「宿那鬼の体のパーツか!」

サイトはそれらを見上げ叫ぶ。て

「リーダー、指示を!」

「よし、ガッツウィングに急げ!」

リーダーであるサイトの指示で、四人はＧＵＴＳの対怪獣用戦闘機『ガッツウィング1号』と『ガッツウィング2号』を着陸させたポイントに向かう。

「ねえ～、もうこの辺りで勘弁してくださいよ…なんか出てきたし…殿、この通りでございます」

男はまるでサムライのようになった仲間に愚痴を言う。現在車で山道を進み、もう車では行けないほど狭い獣道の前にいた。

「この辺りでよいだろう。大義であった」

刀を担ぎ、彼は車から降りると、その先の獣道をたった一人で歩き出した。

ガッツウィング1号と2号の着陸ポイントへと急ぐサイトたち。しかし、ダイゴは途中で人影を森の獣道の中で発見した。

「リーダー、人がいます！」

「何だって！？」

「どうしたんだ二人とも？」

「ちょっとダイゴ、どこ行ってんの！？ガッツウィングから反対側なのよ！？」

ダイゴに続き、サイト・クリス・レナの三人も後を追った。
その人影の正体は、謎の声に取り付かれた泥棒だった。きっちりと刀を担いでいる。

「おい！ここは危ないぞ！早く避難…」

とダイゴが彼に近づいた瞬間、彼は突然刀を引き抜き、ダイゴに振り下ろした。が、それに気づいたクリスは自分も刀を引き抜き、男の刀をダイゴに届く前に防いだ。

「ほうやるな小娘。拙者の太刀筋を防ぐとは」

「ありがとうクリス隊員」

「いや、不思議と今の太刀筋を見たことがあった気がしてな」

「…お主とお主。人なのか？」

男の視線の先は、ダイゴとサイトに向けられていた。

「だが邪な気は見えぬ。
あっ、失敬したな」

男は殺意を消し、刀を鞘にしまい込んだ。同時にクリスも刀を鞘に収めた。

「あなたは、一体誰なんです？」

ダイゴが尋ねると、その男の姿は一瞬にして姿を変えた。
その姿はまさに戦国の世の象徴、サムライだった。

サイトたちはもちろんその変わりように驚いていた。ただ、クリスの驚きだけは、他の三人とは違っていた。
まるで懐かしき人とまた会えたような…

「拙者の名は錦田小十郎景竜。肉体がないので、この盗人の体を借りている」

「錦田景竜!?」

間違いなかった。以前にクリスが話した師匠のサムライ、錦田景竜だった。

クリスの身は震えていた。そしてその目にみるみる内に涙が溜まり、溢れていく。

「師匠!」

クリスは景竜の胸の中に飛び込んできた。

「ぬおお!?なんじゃお主は!?」

さすがの景竜もクリスほどの美女に飛び付かれ驚いてしまう。

「またこうして会えるなんて、…夢のようです…」

「ちょちょ…くくくクリス隊員!いいあいきなり抱きつくなんてふしだらよ!」

レナが怒鳴り出す。ルイズの特徴である、興奮した時によく発する

頭文字の連呼だ。

「はっ離れてくれ！拙者は主のような美女とは無縁じゃ！」

その数分後…

「私を、知らない？」

クリスが落ち着いたところでようやく場が収まった。

「どこの誰かと間違えたのではないのか？残念じゃが、拙者は主とは初対面じゃ」

クリスは落胆した。仮想世界だとわかっていたはずだが、やっと会えた師匠が自分のことを忘れたどころか知りもしてなかった。

「……」

「そう落胆するな娘よ。拙者は放浪の旅を続けてたからな。もしかしたらその最中に会っていたかもしれん」

いや、そんなはずがない。師匠は昨年のあの日、怪獣を封じた直後、その戦いのダメージで自分の目の前で死んだ。初めて会ったときは、目の前の姿よりも年老いていた。

「クリス…」

サイトは宥めるように彼女の肩に軽く触れる。

「ああ、済まない…サイト」

「俺は景竜を安全な場所に。ダイゴとレナはガッツウィングで宿那鬼の様子を。まだ動いてないが油断はできない」

「「了解」」

ガッツウィング1号に乗ったレナ、そして2号に乗ったダイゴは上空から宿那鬼のバラバラの体を見ていた。

バラバラだった宿那鬼の体は地面に一度潜り込むと、地響きと共に、すべての体のパーツが一つとなって地面から這い出てきた。

「宿那鬼が復活した…！」

ダイゴとレナは、思わず声を漏らした。

宿那鬼はダイゴのガッツウィング2号、レナの乗る1号に向かって炎を吐き出した。

「うぉ！」

辛うじて避ける二機だが、一発の攻撃だけでは終わらず、宿那鬼はもう一度炎を吐いてガッツウィングを撃ち落とそうとする。

「っくそ！レナ、攻撃だ！」

「わかってるわよ！」

二人がトリガースイッチを押すと、ガッツウィングよりビーム光線が発射され、宿那鬼を痛め付ける。

「グゴゴ…」

しかし、まさに鬼の形相らしく宿那鬼は攻撃されていく内にだんだん怒りを滲ませていく。

「よし、背中からなら…」

ダイゴの2号が宿那鬼の背後に回り込み、2号の必殺兵器『デキサスビーム』を発射しようとしたその時、

宿那鬼の後頭部の髪が浮き上がった。その髪に隠れていた、宿那鬼のもう一つの顔が露になり、ダイゴのガッツウィング2号に向けて突風を噴射した。

「うわっ！」

2号は火を吹きながら地上へと落下していく。

「ダイゴ！…こいつぅ！」

仲間を撃墜されたレナも逆上し、再び宿那鬼にビームを放つ。

墜落しようとするダイゴの2号だったが、墜落寸前のところで神秘のアイテム『スパークレンス』を掲げた。

「ティガ！」

ダイゴの体はスパークレンスによって光となり、姿を変えて巨大化していく。

その体は赤、青紫、銀の三色に染まり、その白き瞳は優しさと勇敢さを備え持っていた。

超古代の戦士『ウルトラマンティガ』が宿那鬼の前に姿を現した。

「デュ！」

宿那鬼に向けてティガはラッシュパンチを繰り出す。宿那鬼もティガに対抗して回し蹴りを放つが、ティガはそれを伏せて回避、宿那鬼の体を捕まえると、自分の後方へと巴投げで投げ飛ばした。

「タアア！」

「グフッ…！」

形勢はティガの方がやや優勢のようだ。ティガの手から放たれた光弾が宿那鬼にヒットする。

『ハンドスラッシュ！』

「ヌォ…」

宿那鬼に近づき、さらなるパンチやキックなど追撃をするティガ。宿那鬼の腹を殴り、連続回し蹴りで顔面を蹴る。

しかし、宿那鬼もずっとやられっぱなしでいられるはずがない。ティガが宿那鬼の背後に回り込んだ時、宿那鬼の髪の下に隠れていたもう一つの顔から突風が噴射され、ティガは大きく仰け反ってしまう。

「グゥ…」

ティガが怯んでる隙に、宿那鬼は山の中に手を突っ込み、引き抜くとその手には磨きあげられた刀が握られていた。

刀をブンブン振り回し、凄まじい気迫を出す宿那鬼。

「フン！」

そこから宿那鬼の反撃が始まった。宿那鬼の刀捌きは半端ではなく、ティガはその猛攻から避けるのに必死だった。

宿那鬼は時には刀を振り、時には蹴りを加えてティガを圧倒する。まさに鬼神と言われるが所以の戦いぶりだった。

「グアッ！」

刀の剣先がティガの左手に当たり、傷ができてしまった。しかもその怪我は浅くはなかったせいで、ティガは左手がまともに使えなくなってしまう。

「拙者は邪気を感じ取れる力を持ってな、その力で各地を転々としながらもののけどもを退治して回っていた」

景竜はサイトに自分の生前の旅の話をしていた。

「宿那鬼もその一体だ。拙者は奴の体の両腕両足と首を胴体から斬

り離し、この宿那山の大地のあちこちに埋めた。そして奴の魂を、拙者の魂の一部ごとこの刀に封じ込めたのだよ」
景竜は刀をサイトに見せて言った。

（生前に師匠が話してくれた通りだ…）

クリスは師匠の景竜が死ぬ以前、彼から旅の話をよく聞かされていたことがあった。今彼が話していることを聞くのは、実は初めてではなかった。

「つまりその刀がその体の持ち主である泥棒たちに奪われたから、宿那鬼は蘇ったってことですか？」

「うむ、奴はバラバラにしても死なないほどしぶとい奴での、魂を封じるか、肉体を完全に破壊しない限りは死ぬことはない」

すると、宿那鬼のパワーに押されようとしているティガの姿がサイトたちの視界に入った。

「！いけない！」

「そろそろ行ってやるといい。それと済まんが、この体の持ち主を頼む。なにせ物欲というもののけに取り付かれた哀れな奴でな」

そう言い終えると、景竜の魂はその男から離れ、泥棒の男は元の姿に戻り、直後倒れてしまった。

「あ！ったく、無責任なんだから…」

愚痴をこぼしながらもサイトは彼を宿那鬼から離れた木陰に運んだ。

「クリス、その人を頼む」

「おい、こんな時にどこへ行くんだ？」

「ちょっと、行ってくる」

クリスから目の届かない場所まで走り、立ち止まると、サイトはブレスレットからウルトラゼロアイを取り出し、

「デュワ！」

目に装着してウルトラマンゼロに変身した。

「あれは、確かアンリエッタの言っていた巨人か！？なぜこの世界に？」

クリスはウルトラマンゼロの姿を見るのは初めてだった。しかし、こんな幻の世界で彼が出現する要素などなかったはず。なぜ現れたのだ？

一方のティガは、辛うじて白刃取りで宿那鬼の刀を防いでいたが、手の中で挟まれている刀が宿那鬼の怪力の影響でズルズルとずり落るように迫ってくる。

だがその時、真横から二本の銀色に輝くブーメランが飛び出し、一本は宿那鬼の背中を、もう一本は宿那鬼の刀を持ってる手を斬りつけた。

「ヌォオオ！！」

「！」

ティガはそのブーメランが帰っていく方を向く。そこには、自分と同じ光の戦士が立っていた。
ウルトラマンゼロとウルトラマンティガ。本来会うことのないはずの戦士がここに立っていた。
互いに頷き合い、宿那鬼の方を向いて身構えるゼロとティガ。

「デュ！」
「ダッ！」

獲物の始末を邪魔され、さらに怒りだす宿那鬼。刀をさらにぶん回して暴走に近い状態となる。
そして、刀を振り上げ、二人に襲いかかってきた。

〈ゼロスラッガー！〉

「デュ！」

目には目を、刀には刀を。ゼロも二本のブーメランを双剣として宿那鬼に対抗する。

「ハッ！シャ！デュ！デア！」

剣と剣がぶつかり合う度、金属音がガキン！ガキン！と鳴り響いていく。

宿那鬼は確かに凄まじい刀捌きの持ち主だったが、武器を使っての勝負ではゼロの方が格上だった。
彼には、武器を手にとった瞬間持ち主の身体を強化するガンダール

ヴの力があったからだ。

「ドリャアアア！」

ズバッ！

ゼロスラッガーの刀身が宿那鬼の脇腹を切り裂いた。

『お…の…れぇ…！』

宿那鬼の力が、恨みの増加のためか上がってきた。刀を振り下ろされ、それを防ぐが、だんだん押されていく。

「ぐぎぎぎ…！」

「旦那、俺を使ってください！俺をの力が今こそ役に立つ時ですぜ！」

サイトが新たに手にしたインテリジェンスナイフの地下水もまた、デルフのようにゼロスラッガーの一本に乗り移っていた。ちょうど今、直接敵を斬って攻撃できなくても、地下水の能力ならば…

「エル・ダウ…」

ゼロがなにやら怪しげな言葉を呟きだした。宿那鬼とティガは一体何を言ってるのかわからなかった。

怪しい言葉を言い終えると、ゼロのゼロスラッガーの刃先からもくもくと真っ白な霧が覆いだした。

宿那鬼は思わず刀に込めた力を緩ませ、その隙にゼロは霧の中へと

消えた。

実はこの霧、ゼロがゼロスラッガーの一本に乗り移った地下水の力で発した水魔法の霧『フリーズスモーク』。

以前地下水の元の持ち主だったジェイドが、彼の力を利用して賞金稼ぎをしていたのを覚えているだろうか？地下水の持ち主は水魔法が使える。

つまり、ゼロ（サイト）は武器の力だけでなく、魔法すらも身につけた疑似メイジのウルトラマンとなったのだ。

視界が完全に塞がれるほどの濃霧に宿那鬼は混乱する。刀を乱暴に振り回すが、やみくもに振り回したところで当たるはずもない。

「ダッ！」

「ジュワ！」

どこからか放たれたゼロとティガの同時攻撃が宿那鬼に炸裂する。

宿那鬼は視界が潰されたことと自分が劣勢にある苛立ちで暴走状態に陥ったかのように炎を吐くわ刀を振り回すわと繰り返した。だが無駄に体力を失うことなり、ゼイゼイと膝をつく。

〈ゼロスラッガー！〉

〈ギガハンドスラッシュ！〉

霧の中から飛び出したゼロのブーメラン、そしてティガの鋭く巨大な光の刃が宿那鬼の首元と刀を貫いた。刀はポロッと折れてしまい、宿那鬼の首も無残に落ちてしまう。残った胴体はその場に膝を着いた状態で留まっていた。

同時にゼロの作り出した霧は晴れた。

「勝ったのね」

ガッツウィングから見下ろしながら、レナはホッとした。

ピコンピコン…

ゼロのカラータイマーが点滅していた。

フリーズスモークの霧は濃霧な分寒くもあり、寒さの耐性が人間ほど強くないウルトラマンゼロには苦痛でもあったのだ。しかも魔法はまだ使いなれてないため、エネルギーをだいぶ使ってしまったようだ。

「はあっ…はあっ…さすがに張り切りすぎたか?」

「あれ、慣れてないんですか?」

ティガは意外そうに尋ねる。

「使うのは初だからな…ちょっと疲れた」

「倒したのか…」

クリスもウルトラマンたちの姿を見上げながらほのかに笑みをこぼしていた。

しかし、ここである疑いが出た。

自分とサイト。この中でウルトラマンゼロを知るのはサイトだけだ。

そのサイトがウルトラマンティガとの戦いの最中に消えたと同時に

あのゼロが姿を現した。

（じゃあ、あいつは…）

とある確信に近づこうとした時だった。

「ヴウウウ！！」

なんと宿那鬼の頭が勝手に動きだし、ティガの肩にガブリ！と噛みついた。

「グワッ！」

ピコン、ピコン…

ついにティガのカラータイマーまでもが鳴り出してしまう。そろそろ限界時間が迫ってきているのだ。

ゼロはティガの救助に向かうが、宿那鬼の後ろの顔から放たれた突風で大きく吹き飛ばされた。

「グォ！」

「何よあいつ、首だけで動いてるなんて！」

レナは驚きのあまり声をあげた。なんとか自分もティガを助けようとガッツウィング1号からビーム光線を放つが、宿那鬼の頭は離れようとしない。

引きちぎれそうな痛みに、さすがのティガも耐えられない。

「このままだとあの巨人が…」

何か打つ手がないかクリスは思案する。

「そうだ！」

師匠の、景竜の刀だ。

自分の知る景竜もあの刀でもののけたちを退治していたことを知っていた。その通りだったら…

クリスはレビテーションの魔法で景竜の刀を浮かすと、ティガに噛みついている宿那鬼の頭に向かってそれを放った。

刀は宿那鬼の額にブスリと突き刺さっていた。

「グヌアアアア…」

宿那鬼の頭は、燃え尽きていく炎のようにメラメラと消滅した。刀に封印されたのだろう。

「やった…！」

だが胴体がまだ残っている。ゼロとティガはL字型に両腕を組み、必殺光線で宿那鬼の胴体に止めを刺した。

〈ワイドゼロショット！〉

〈ゼペリオン光線！〉

「「ダッ！」」

宿那鬼の胴体も光の戦士の攻撃によって滅ぼされた。

その後、景竜に取り付かれていた盗人は警察に引き渡されることとなった。盗まれた刀も元のお堂に保管されることとなった。
その時の彼はクリスの顔を見ると、「少し時間をくれ」と巡査に頼んだ。
彼はクリスの前に立つと、意外な言葉を口にした。

「私に憑依した景竜さんから、あなたに伝えたいことがあるそうです」

「え、私に？」

「はい、あなたと彼がどういう関係かわからないんですが、彼はこう言ってました。
『最後に拙者の刀を使って宿那鬼に止めを刺したお主の活躍、大義であった。
なぜだがこう言いたくなった。「さすがは俺の弟子」だ』と」

「っ…！」

「んじゃ」

一度お辞儀した彼はその後、パトカーで警官たちに警察署へ仲間と

一緒に運ばれていった。

「ここは仮想空間だからかどうかわからないけど、きっとお前の記憶の中の景竜の記憶が、さっきの景竜の魂に影響したんだ。多分最後だけは…」

「…ああ。きっと私の知る師匠になってくれたのかもしれない」

クリスは笑顔でサイトの言葉に答えた。

すると二人の前に、あのネガ・ハルケギニアのトリスタニア城にも現れた扉が出現した。

「まず一つ目の関門はクリアしたみたいだな」

「リーダー」

ダイゴとレナが二人の前に走ってきた。

「もしかして…行くんですか?」

「うん、そうみたいだな」

「また会えますか?」

「多分信じてれば…」

サイトは笑顔でダイゴに言った。

すると突然レナの体が輝き、彼女は光になったと思ったら、一枚のカードとなってサイトの手の中に収まった。

そのカードには、ガッツ隊員の服を着たルイズ、つまりさっきまでのレナの姿が描かれていた。

「これでルイズの心のかけらが一つ戻ってきたってことか」

「よし、もたもたしてる場合じゃない。残りも早く集めようクリス。今頃シュウヘイたちも頑張ってる頃だ」

二人は目の前に現れた扉の向こうへと足を踏み入れた。

しかし、たどり着いたのはアンリエッタたちのいるフロアではなく、ただ壁一面真っ白で向こうに扉がまた一つあるだけの部屋だった。

「あれ？元の部屋じゃないのか？」

すると、突然クリスは扉の前に何者かの気配を感じた。

「！サイト、下がれ！」

「っ！」

クリスに言われるがまま、サイトも後ろへ下がる。

彼らの目の前に、タンブリメが現れた時のように黒い霧が立ち込め、そして人の姿となった。

「ククク…また会えたなガンダールヴ」

「！」

ダンプリメではなかったが、その男をサイトは知っていた。

なぜだ、確か奴はもう一人の自分、サイマことダークロプスゼロに首を跳ねられ殺されたはず。

「いや、こう呼ぶべきなかな？『ウルトラマンゼロ』」

元トリステイン魔法衛士隊グリフォン部隊隊長にして元ルイズの婚約者である男。

「貴様は……ワルド！」

4　復活のワルド

「こう呼ぶべきかな？『ウルトラマンゼロ』」

「貴様は……ワルド！」

死んだはずにも関わらず再びその冷酷な瞳を秘めて現れた元トリステイン魔法衛士隊グリフォン部隊隊長ジャン・ジャック・フランシス・ド・ワルド。

（今、奴はサイトをウルトラマンゼロと呼んでいた。まさか…）

クリスはサイトの後ろ姿をじっと見ていた。自分のまさかの予測が、当たっていたとは。

「ルイズは元気かい？いや、言うまでもなかったな…ふふ」

「お前…何で生きてる！？」

「蘇ったのだよ。お前たちの敵対するお方…『冥王』の手で新たな力を手に入れてな…」

「冥王…まさか…」

その時のサイトの脳裏に思い浮かんだのは、以前闇の手先として現れたハルナ（ファウスト）とコルベール（メフィスト）。そしてシュウヘイの言っていた男、石堀。

「石堀って奴か？」

「ご名答。そう、私はあのお方から新たな命を授かった。さて、まずはお前に知っておかなければならないことがある。お前は自分ですら忘れている過去があるんじゃないか？」

「いきなり何を言い出すんだ？」

「あるのだろう？例えば、幼すぎた頃の記憶だからとか」

「…一体、何が言いたいんだ？」

「実はな、お前の幼い頃の友達を我々が預かってるのだよ」

「…下手な嘘は止せよ」

「嘘？だったらお前はさっきの仮想世界へ来たとき、青い髪の少女を見たんじゃなかったのか？」

「っ！」

なぜワルドがそんなことを知ってるのだ？確かにティガの世界に飛び込む前、なぜか見覚えのある少女を見たのだが。

「名前はなんだったか思い出せないか？あぁ、彼女が知ったらどれほど嘆くか…」

わざとらしくワルドは顔を伏せて嘆くフリをする。

「まさかどんな者にでも手をさしのべるような男が自分を慕っていた少女の名前すらも忘れるとは、薄情者よ。ははははは！！」

サイトの手からブチブチと血管が膨らんで破裂したような音が聞こえる。ワルドのような者に挑発され、怒りをたぎらせていた。

「黙れ！！！！」

デルフを鞘から引き抜き、ワルドの喉元に突きつけようとしたが、その前にワルドもレイピア型の杖でサイトごとその攻撃を弾き飛ばした。

瞬間、サイトが床に転がり込むと同時に彼の服のポケットからなにかが落ちてきた。悪魔の翼を模したようなペンダントだった。ワルドはそれを見せつけるように拾い上げる。

「どうした？まだ思い出せないか？お前にこれをくれた持ち主を」

「……り」

「そうだ。もっと頭をひねって思い出せ」

サイトはデルフを杖代わりに立ち上がり、頭の中にある記憶の糸を辿っていく。

あの少女の名前は…

幼い頃の記憶がだんだん蘇ってくる。長いツインテールがチャームポイントでちょっと小悪魔じみた女の子だった。

『お兄ちゃーん！』

自分をまるで兄のように信頼し、一緒に遊んでいた。だがある日、突然姿を消した。なにらかの事情はあっただろうが、サイトはまだ

幼かったため、それを理解できず、少し泣いていた。

「り…し……ゆ…リシュ」

ワルドはそれを聞いてふっ…と笑った。

「ようやく思い出したか。そう、『リシュ』だ。しかし、貴様は正義の味方のつもりでいるわりにはとんだ薄情者だったな。そんな非情な男には」

ワルドはサイトから奪い取った悪魔の翼のペンダントを握りつぶそうとした。

「このペンダントは必要ないな」

力をギギッ…と強めていく。だが、次の瞬間ワルドに風の刃が次々と襲いかかってきた。

「何!?」

思わずワルドはペンダントを話してしまう。

クリスだった。何時もなら出すことのない魔法の杖で風の魔法を使い、ワルドを攻撃したのだ。彼女は床に落ちる前にそれをパシッ！と手にとった。

「サイト」

彼女はサイトにそのペンダントを返した。

「あっ、ありがとうクリス。それとワルド」

サイトはペンダントを落ちないように首に巻き付けると、ウルトラゼロアイを手にワルドを睨み付けた。

「気安く触るな！これは俺がリシュからもらった大事なお守りなんだ！」

「大事な…？」

さっきまで冷たい笑みを浮かべていたワルドの表情が崩れ、さらに歪んでいく。

「さっきまでさっぱり忘れていた薄情者が偉そうに！」

そう言って彼が取り出したのは、ダイゴの使っていたスパークレンスと酷似したアイテムだった。

「なっ、それは！？」

「貴様は知らないだろうが、貴様らがさっきまでいたあのティガの世界には、遥か昔に恐れられていた闇の戦士がいた。冥王はその三人の戦士を元に新たな闇のウルトラマンを作り出した。よく見ておくがいい…私はその戦士の力を手にしたのだ！」

そのアイテム『ダークスパークレンス』が黒い稲妻のような光を放った瞬間、ワルドの姿は変わっていた。

『闇の俊敏戦士・ダークヒュドラ』

「ワルドが闇のウルトラマンに…！」

「へへ…いけないなあ…この姿になると口の聞き方までおかしくなるから、早いとこ始末しとかねえとな…へへ…」

ヒュドラに変身した影響なのか、ワルド自身の意識に異常が出ている。

「そんなになってまで力を欲しがってたのか？」

睨み付けるサイトにヒュドラは全く反省の色を示してないような態度で答える。

「お前もそうだろ？力こそ自分の意志を全うできる手段なのだ」

「違う！力だけではどうにもならないことだってある！」

「やはり貴様とは意見が合わないか。まあいい…さあ、リシュを助けたければ私と戦うがいい」

「いいだろう、受けて立ってやる！」

サイトもウルトラゼロアイを装着し、等身大のウルトラマンゼロに変身した。

「デュ！」
「ヒェア！」

シュウヘイがいたら、能力の一部でもわかっていたかもしれない。
そう思ってはいたが、ここでは彼からヒュドラの情報は聞けない。
何か自分に不利な技が来ても実力で対処するしかない。

だが、ゼロはまさかシュウヘイですら知らなかった闇のウルトラマンと対峙することになるとは思ってもなかった。

「！」

思考してる間に、ヒュドラはいつの間にか自分の眼前に飛び込んでいた。そしてゼロに二発の回し蹴りを放つ。一発目は防いだが、二発目を顔面に喰らい、さらに顎を蹴りあげられ、もう一発腹をパンチで突かれた。

「グハッ…！」

とんでもない早さだ。目では決して追い付けるようなものではない。怯んでるゼロに、ヒュドラは襲いかかる。ゼロはゼロスラッガーを手に取り、ヒュドラが振り上げてきた爪『ドラフォーク』を防いだ。

「このっ…デア！」

力任せにゼロはヒュドラを弾き飛ばした。

「ふん…」

ヒュドラは天高くドラフォークを掲げると、それに青く染まるエネルギーを吸収させていく。

「せっかくだ。俺の新たな必殺技を…」

そう言い、ドラフォークをゼロの方へ突き出し、必殺技を使おうとしたが、

「待ちなさい」

ゼロとヒュドラの間に、獣のような耳を生やした女性が現れそれを制止した。

「貴様、何の用だ？これは俺とウルトラマンゼロの戦いだ」

「はあ、あなたやっぱりこんな感じね。闇の戦士の力を手にした途端血気盛んになるんだから。少しでもいい気になると油断する。だから前に一度死んだみたいな無様な姿を晒すのよ」

「なんだと…！」

「怒らないでさっさと変身を解きなさい。それともあんた、冥王の命令に逆らったらどうなるか知っててこんな戦いを仕掛けたの？目的がズレてるわ」

「ちっ……」

小さく舌打ちしながらも、言われた通りヒュドラは元のワルドの姿に戻った。

「初めましてね、ウルトラマンゼロ君」

女性はゼロの方を向いて言った。

「私の名はウェザリー」

「ウェザ…リー？」

どこかで聞いたような…
そうだ、思い出した！

「ジェガンとミディアの娘さんか？」

「あら、私の親を知ってたのね。だったら知ってるわよね？この世界の貴族どもの醜さを」

ゼロもそれは承知してるつもりだ。権力や地位にすがり、自分の利益のためならば相手を精神的に追い詰めることも蹴落とすことも躊躇わない。

だが彼はこうも考えた。
きっと、それらを失う勇気がないだけだ。それよりも大事なものがあれば、あるいは…と。

「私はね、貴族って奴が大がつくほど嫌い。そのせいで私が今までどれだけ苦しんできたか…。
あなたもそう思わない？なんなら、私たちの仲間になる気はない？」

「仲間？」

ワルドは一瞬ウェザリーを睨み付けた。こんな奴が俺の仲間？冗談じゃない！こいつのせいで俺がどれほどの屈辱を味会わされたことか！
だが、ゼロは首を横に振った。

「確かに、この世界の貴族たちの間違いは決して浅い事では済まされないかもしれない。でも、彼らもまた今の日を必死に生きようと…」

「してるって言うの？甘いわね？だいたいあなたも、故郷から追い出されたでしょ？」

「っ！」

そうだ。以前ゼロは光の国で絶対に触れてはならないプラズマスパークコアを独り占めしようとした。復讐のための力を得るために。

「私とあなたは同じ。他者から淘汰された存在よ。にも関わらず、いまだにあなたに肩入れするなんて、どれだけご都合主義かしらね？ウルトラマンっのは」

「……」

確かに、光の国のウルトラマンたちは、見立てを変えればご都合主義な面がある。自分を追放したくせにまた手をさしのべるなど、私情で助けてくれてるように見えて実際は戦力増強が狙いなのではないかとも思える。

「そんな連中に味方するのは止めて私たちの仲間になったら？」

ウェザリーはゆっくりゼロに近づき、彼に手を伸ばす。だがゼロは、彼女の喉元にゼロスラッガーの刃先を向けた。

「断る！仲間を裏切るわけにはいかないんだ」

「…そう。別にいいわ。意地でも仲間にするつもりだから」

面白くなさそうにウェザリーは胸元から一枚のカードを取りだし、

ゼロにそれを投げ渡した。

「あなたへのプレゼントよ。ありがたく受け取りなさい」

「そうだ、ウェザリー！リシュをどこに隠した！？」

ゼロはウェザリーに問い詰めるが、彼女はいやらしい笑みと共に、鼻で笑った。

「カードが導くってことしか教えてあげられないわ。じゃあね」

彼女はゼロに手を振ると、ワルドと共に黒い霧となって消えた。

「待て！」

引き留めようとするが、すでに二人の気配すら感じられなかった。

「くそ…ワルドなんかのせいでリシュの名前を…」

悔しがりながらゼロは変身を解き、ウェザリーから受け取ったカードを見つめる。今にも握りつぶしてしまいそうだ。

「サイト…」

クリスがサイトに恐る恐る話しかけてきた。

こんな状況で不適切だろうが、彼について確かめないといけないことがあるのだ。

「不快なところ悪いが、お前がアンリエッタの言ってた巨人だったのか？」

「…ああ。でも今は何も訊かないでくれ。そう言う気分じゃないんだ…」

「…わかった。時が来るまで待とう」

「ありがとう…さて」

とにかくワルドたちの話で、目的が二つになった。

早く心を砕かれたルイズを、奴らに捕まってるリシュを助けなくてはならない。

ウェザリーから渡されたカード。それには優しい顔をしている青いウルトラマンと、絶対的正義に忠実そうな赤のウルトラマンの絵が描かれていた。

サイトはそれを自分の目の前にある扉にかざすと、扉は再び開かれ、二人をその先に誘った。

「とりあえず、リシュのことを『覚えて』くれたみたいね。よかったじゃない、リシュ？」

「…」

城のとあるフロアにて、大型の水晶からサイトたちの様子を覗き見ていたウェザリー。彼女の背後には、青い髪に二本の曲がった角を持った少女が顔をうつ向かせて椅子に座っていた。

彼女がリシュだった。しかし、なぜ角が生えてるのだろうか？これはサイトの記憶にもなかったものだ。

「浮かない顔して。嬉しくないの？あんたが兄のように慕っていた男なんでしょ？」

「…嬉しい…です…」

思い詰めた表情を崩さないまま、リシュはただ元気のない返事をするだけだった。

「それにしても、いいできじゃないあの仮想世界。あんたの『夢を操る力』を実物に変えるなんて。本来なら眠ってる人間にしかあんたの力は使えなかったもんねぇ？」

「…」

ワルドは不機嫌そうに腕を組んで壁に寄りかかっていた。

「ところでダンプリメ、あんたはネクサスの方は見てきたの？」

「今進んでるところさ。いずれ彼が、あるべき姿になる日が近い」

ウェザリーの質問に、タンブリメは薄ら笑いを浮かべて答えた。

「そろそろ僕らも出る頃だよね？」

「…」

ダンプリメは自分の背後にいた巨漢の男を見て言ったが、その男は寡黙そうな性格なのか黙っていた。

5　マックス／ワ多し歯駄ぁレ？

サイトたちがティガの仮想世界で奮闘してる頃、シュウヘイとテファも自分たちの訪れた仮想世界の、日本支部の地球防衛軍施設『ベースタイタン』にいた。

この世界に来たと同時に二人の服装は変わっていた。赤と白を強調した隊員服に。

「ここが地球…すごい」

ただでさえハルケギニアでは見受けられないものばかりが目に飛び込み、テファは目を丸くしていた。

「ああ、だが…」

ベースタイタンなんて施設は彼のいた地球にはなかったものだ。

シュウヘイの入隊した、

元々秘密組織だったＴＬＴ。そのため、黒部ダムの内部に基地の入り口を、深き湖の底に基地を配備、存在事態結成された当初は明かされてなかった。

しかし、海の上に浮かぶこのベースタイタンは元から公のものとなっている。しかも子供たちに社会科見学を許可してるというおまけ付きだ。

そして何より…

「ウルトラマンマックス、か…」

この世界に来るために使用したカードの絵柄と同じ姿をした、赤いウルトラマンの戦う姿が作戦室のモニターに映されていた。

「ウルトラマンマックスを見るのは初めてですか？」

後ろからテファとは違う女の声が聞こえてきた。

「ああ。…って！」

背後に振り向いた瞬間、シュウヘイは驚いた。

ＤＡＳＨ隊員服を着たルイズが立っているのだ。それもまるで、タバサのように無表情を浮かべて。

「あなたが新しく配属された黒崎隊員ですね？私はエリーといいます。怪獣の解析などは私にお任せください」

「あっ…ああ…」

自らをエリーと名乗ったルイズはコンピューターの搭載されたデスクの椅子に座り、キーボードのキーを叩き始める。

「シュウ、あの娘確か…」

テファはシュウヘイの耳元で　囁いた。

「私たちのこと、わかってないみたい。どうして？」

「何らかの力で操られてるかもしれないな。ともかく、この世界ではエリーという役割を遂行している。俺たちが新しく配属されたＤＡＳＨ隊員の役割を与えられてるようにな」

シュウヘイはそう言って、隊員服の胸に付けられているＤＡＳＨ隊員バッチに触れる。

「それにしても…」

シュウヘイの記憶の中のルイズ。それは悪く例えると…

『なあああんですってええ!?』

ちょっとあおるだけで暴れ猿のように必要以上にキレては騒ぐし、とても１６とは思えない（シュウヘイのちょっとが世間的にどれほどか不明だが）。中身も見た目もまだ幼い子供のようだ。そのルイズがエリーという名前で、しかも落ち着いてどこか論理的な雰囲気であることが、本物のルイズとの間に大きなギャップを生み…

「くく…」

彼のツボにいったのか、シュウヘイはおかしさのあまり少し笑ってしまった。

「何かおかしなところでも?」

ウィン!と機械音を鳴らしながらエリーはシュウヘイの顔を見る。

「ああすまん、なんでもない」

今の機械音、これはエリーが人間ではなく、アンドロイドである証拠だ。彼女は優れたオペレーティング力を持ち、ＤＡＳＨの作戦行動の大きな要でもある。しかしアンドロイドなためか抑揚のないし

ゃべり方で人の心を読むのを苦手としていた。ここまでは本来の『マックスの世界』での彼女の特徴である。が…

「…」

シュウヘイから目を背け、再びコンピューターのディスプレイを見始めた時の彼女はどこか不機嫌そうだった。

その後、グリーフィングの時間で二人はＤＡＳＨ隊長のヒジカタに若き隊員トウマ・カイト、白人隊員ショーン、射撃スペシャリストのコバに紹介された。

「今日からこのＤＡＳＨに配属された黒崎シュウヘイ隊員とティファニア・ウエストウッド隊員だ。みんな、仲良くしてやってくれ」

ヒジカタは二人の肩を押して言った。

「僕、ショーン！Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ！」

「コバ・ケンシロウだ。よろしくな」

「トウマ・カイトです。よろしくお願いします！」

彼らの気さくな自己紹介に、シュウヘイは騒がしい…と感じながらも懐かしさを感じた。

『今日からこのナイトレイダーＡユニットの隊員となりました黒崎です。よろしくお願いします』

初めてナイトレイダーに入隊した時のこと。あれからどれくらい時

間が経ったのだろうか。自分が正しい道を歩むのを手伝い、仲間に率いれてくれた恩人たち。今はどうしているのだろう…

「黒崎、早速だが地域のパトロールを頼めるか？」

「了解」

パトロール前のこと。

「…トウマ」

「なんですか？」

ベースタイタンが見える公園に来たシュウヘイはカイトに話しかけた。

「マックスとやらは、お前か？」

それを言われ、カイトは思わず絶句する。が、焦りながらもすぐに作り笑いを浮かべた。

「そんなわけないでしょハハハ…」

実際当たっている。

元々ＤＡＳＨの入隊試験に落ちた彼は怪獣の出現時、ダッシュバー

ドを無断で使用して怪獣と戦ったが撃墜、その際に自分を救ったウルトラマンマックスと同化したのだ。

（バレバレだ。その慌てっプリで）

口には出さなかったが、シュウヘイはすでにカイトがウルトラマンマックスであることを見きっていた。

それからその仮想世界で二日ほど経ったが、あまり大きな変化はなかった。

どうすればルイズの心を取り戻せるのか、いまだ不明なままだ。だがこの幻想の世界で骨を埋める訳にはいかない。なんとしても、この世界で成すべきことを発見しなければ。

そんなとき、ある怪奇的な出来事が町中起こり始めた。

「あのおじいさんの九官鳥が何も話さなくなったそうよ」

「うちのポチ、お手も待てもできなくなったのよ」

「そう言えば今朝のニュース番組、アナウンサーの二人漢字が読めなくなってたぞ」

「おい、あんたの抱えてる赤ちゃん人形だぞ？間違えてるぞ」

「えっうそ！？」

当たり前のことのはずなのに、人々の記憶からその当たり前なことが消えていってるのだ。漢字の読み書きや足し算をはじめとした簡単な計算、家族の名前、自分の成すべきこと。そういったものが人々の記憶から消え去っていった。

その兆しが見えてきた日からエリーは、精神科に通った患者の数を調べあげた。その数は…

「１０万人…！」

しかも日に日にその数は増していたのだ。新たに分かったのは、モニター上の地図の集計グラフが三方向に枝分かれしていた。

「これ、確か一か月前の…」

この仮想世界の時間で一か月前、三つの隕石がその位置に落下した。しかし、その時コバとショーンが現場に急行したが、猫が入るくらいの小さなクレーターが残されていただけだった。

「あのくらいのクレーターを作る隕石は米粒くらいの大きさダヨ」

「あの、そのインセキってそんなに小さくても大きな穴を開けられるんですか？」

テファがエリーに尋ねてみる。米粒サイズの小さな石が身近な動物が入りきれるほどの穴を開けられるなんてハルケギニアの種族から見たらありえないことだ。

「小さな隕石でも、その大きさの何十倍ものサイズのクレーターを作ることができます」

「でもクレーターには何もなかった。だから落下の衝撃で消滅したって話になったんだよな」

そこでエリーはある仮説を立てた。

「もし、地面の下に潜ったとしたら？たとえ小さくても、この一か月で成長した可能性があります」

すると、ピピッと通信の受信音が作戦室中に鳴り渡った。

『ベースタイタン応答願います。こちら黒崎とカイト』

何か住民の頭脳を侵す電磁波が発せられてないか、シュウヘイとカイトは電波受信機を使い、ベースタイタンの見える位置から調べていた。

「何か異常は見えたか？」

『いや、今のところ何も異常は見られません。でも…』

カイトに続き、シュウヘイが口を開いた。

『逆におかしいと俺は思います。まるで何かに吸い取られてるような…』

その時、ベースタイタンを囲う湾の水面から一点、また一点と光が灯りだした。その光が発せられた水面はやがて水しぶきをあげ、そ

の中から一体の巨大な一つ目の怪獣が出現した。

『宇宙化猫ミケ』。おぞましい姿には似合わない、猫の尾が後頭部に生え、かつ猫の鳴き声で鳴くのが特徴である。稲妻状のオーラを発して鳴くミケ。

怪獣出現にヒジカタも命令を下す。

「コバはダッシュバード一号、ショーンは二号に。ティファニアは地上でカイトたちを援護しろ」

コバ、ショーン、ヒジカタは格納庫に安置されたダッシュバード一号二号、ダッシュマザーに搭乗し、シートベルトを締める。ここまでは悪くなかった。が…

「…どうやって操縦するんだっけ?」

防衛チームでは本来言ってはならないことを口にしてしまった。いや、この時のコバとショーンは本当に忘れていたのだ。現地住民と同じように、忘れてはならないことが彼らの頭の中から消えてしまったのだ。

「落ち着け俺!確かこれで…」

何とか記憶の糸を探るコバが押したボタン。それは発進のためのものではなく…

ズドオオオオオオオオオオオン!!!!!

「「…」」

ミサイル発射スイッチだった。格納庫内部で使ったものだから案の定大爆発を起こしてしまった。

「こーわしたこーわしたー」

ショーンは馬鹿にするように歌いだした。

「ここ、壊してなんかないよ?」

対するコバはとぼけたフリをする。

「もしかして、忘れてる?」

デスクの上で一体どうしたのだ?と言ってるかのようにエリーは首を傾げた。

『エリー、ダッシュマザーに一旦二機を格納してくれ!』

ヒジカタの命令でエリーは遠隔操作システムを用い、二機のダッシュバードをダッシュマザーに格納する。ダッシュマザーは格納庫からベルトコンベアで運ばれ、発射口から浮き上がる。

いざ出撃の時だ。

「よし、でも…」

どうやったら操縦できるんだっけ?ヒジカタにまで記憶障害の影響が出ていた。

「これ、だったか?」

ヒジカタはハンドルを横に押し倒した。
すると、最近子供たちに流行りのべ〇ブレー〇並の勢いでダッシュマザーは大回転し始めた。

「「「ぎゃあああああああああ！！！！」」」

ヒジカタ、ショーン、コバの悲鳴が、通信を通してエリーの耳に入っていく。

そして…

「なぜ戻ってきたんですか隊長？」

目を回しながらヨロヨロとその場でへんてこダンスを踊る三人がエリーのいるベースタイタンの作戦室に戻ってきた。

「えっ、なんでって？」

とヒジカタが言った瞬間コバとショーンはよろめいたままのヒジカタに押し倒され、コクピットへ繋がってる扉にまた押し戻されてしまう。
ショーンの場合、ダッシュマザーに再び搭乗、しかし操縦の仕方が分からず、また駒のように回転するダッシュマザーの中で苦しむハメに。

「ＯＯＯＯＯＯＨＨＨＨＨＨＨ！！！！」
そしてコバは奇跡的に出撃はしたが、まだベルトコンベアで運ばれている格納庫からいきなり発車させたため、口の中が空気抵抗で浮き上がってしまった。
なんとか外には出たものの、高く上がっては落ち、高く上がっては

落ちの繰り返し。辛うじてミケの目の前にダッシュバード二号を浮かせた。

「よーし、ミサイル発射！」

さっきはレバーにあったトリガースイッチを押してミサイルを放っていた。だからその偶然得た知識を生かすはず、と思った人もいただろうが、残念なことにコバが使ったのはミサイル発射のスイッチではなく、

「…あれ？」

脱出レバーだった。

そのままコバは「ＤＡＳＨ！」とカメラ目線でキメポーズを決めたが、全然かっこよさを見せつけられず、海にドボンと落ちた。

「……もう、海に沈んでいてください」

さらっと怖いことを言うエリーだった。

「なんでそんなに落ち着いてるの？あっ、アンドロイドだからか」

ヒジカタの一人言を他所にエリーは急いでミケの能力を見極めようと、自分の頭に搭載されたＣＰＵ、そして目の洞察機能を使う。

恐るべき能力が判明した。

「あの怪獣の特殊な波長が有機生命体の頭脳に影響してるのね」

ミケの恐るべき能力、それは自らが発する特殊な磁場の波長でありとあらゆる知能を持つ生物に記憶障害をもたらすことだった。

一方、ショーンは大回転を繰り返すダッシュマザーの中で身動きがとれずにいた。この大回転は乗り物酔いには地獄である。
コバの操縦していたダッシュバード二号は操縦者を失い、しかも自動でバランスよく飛ぶオートパイロット機能を使われてなかったため、空をくねくねと飛び回っていた。その果てにミケの方へ一直線…

グサリ！

ミケのこめかみにクリーンヒット。

「キシャアアアア！！」

怒ったミケはベースタイタンに向けてダッシュバード二号を触手で投げ飛ばした。その衝撃はベースタイタン中に響き、ショーンは幸か不幸かその衝撃で作戦室に帰還した。
だが一気に吐き気を感じ、トイレに直行。

一方、シュウヘイとカイトはというと…

「…どうやって変身するんだっけ？」

「…俺に聞くな」

ミケの発する磁場の影響で変身の仕方を忘れてしまったのだ。

「確かこれで…」

カイトはマックスに変身するための『マックススパーク』、シュウヘイはエボルトラスターを見る。使うものだけはわかっていた。が、そこから先の領域に踏み込めることができなかった。

「えっと…はっ！」

シュウヘイはエボルトラスターを鞘から引き抜くことでウルトラマンネクサス・アンファンスに、カイトはマックススパークを左腕に着けることでウルトラマンマックスに変身する。だが、二人が次にとったポーズは間違っていた。

カイトはマックススパークを鼻にくっ付け、シュウヘイはエボルトラスターを初代ウルトラマンのハヤタのように、天に掲げていた。

「ダメか…ネクサス！」

次にシュウヘイは両手を広げ、エボルトラスターを顔の前から突き出したが、これもダメだった。ちなみに偶然にも今のシュウヘイの変身ポーズは、かつて東光太郎がウルトラマンタロウに変身するさいのポーズだった。

「違う…はい！」

カイトは思いっきり口に入れたり、額にくっ付けたり、靴下を脱いで足の裏にくっ付ける。さらには脇の下に挟み込んだりもした。しかし、どれも当然の失敗に終わる。
そんな二人の元に、救援に駆けつけたテファが走ってきた。

「シュ…！あれ…私どうして？」

忘却の魔法使いのテファですら、ミケの力で記憶が混乱してしまっていた。ミイラ取りがミイラになってしまったのである。しかし、目の前に自分の思いを寄せた人とその仲間がいることを察知し、なんとか駆けつけた。

「シュウ、大丈夫！？」

しかし、そこでミケがダッシュバード二号ごとベースタイタンに攻撃したことで起こった衝撃で三人は大きく宙を舞った。

「うわあああああ！！」

落ちた箇所が柔らかかったのか、カイトは地面に激突するさいのダメージは受けずにすんだ。そう、確かに柔らかかった。なぜなら彼の乗っかっていた場所は地面ではなく…

モミッ

テファの豊満な胸の間だったのだから。

「あっ…ああ…／／」

「っ！まっまず！」

恥ずかしそうに声を漏らすテファ。カイトも慌てて彼女から離れた。そしれそれは、血のような朱色のオーラを身に纏う赤い悪魔の出現の合図でもあった。

「……」

顔にかかる暗い影に二つのわずかな光をともしていたシュウヘイはカイトをその眼光で睨み付け、彼の頭をわし掴みしていた。カイトはその圧倒的な負のオーラに腰を抜かし、立てなくなっていた。サムライが刀を引き抜くように、シュウヘイはエボルトラスターを鞘から引き抜き、その先でカイトの顔面を殴り飛ばした。

「らあああああああ！！！！」

「ぎゃあああああああああ！！！！」

鞘から引き抜かれたエボルトラスターの先で顔を殴られぶっ飛ぶカイト。その時、彼の手にあったマックススパークが偶然にも彼の左腕に落ちた。

この茶番劇のようなやり取りが偶然にも二人の変身条件を満たし…

シュウヘイはウルトラマンネクサス・アンファンスに、カイトはウルトラマンマックスに変身できた。

が…

「…なんでマックスはくつろいでる？」

マックスは地面に倒れたまま変身したためか、そのままのポーズで現れるというカッコ悪い登場に。

対してネクサスは何をやらかしてるのか、刀で敵を居合い抜きしたようなポーズだった。

こんな登場のせいか、この世界では新たな未知のウルトラマンであるネクサスの出現に誰も驚かなかった。

でも回りへの配慮はあった。ネクサスはテファの方を向き、すぐに離れるよう顔を動かす。

「…気をつけて」

そう言ってベースタイタンに急ごうとするテファ。しかし…

「…戻るって、どこに?」

やはりミケの記憶封じのせいでどこに戻るか迷っていた。でもこの後、なんとかベースタイタンに戻ったらしい。

「デュ!」
「シェア!」

二体もの強敵の思わぬ登場にミケはたじろぐ。
一気に必殺技で!とマックスは左腕を天に掲げる。マックススパークにエネルギーが吸収され、逆L字型に組むことで必殺光線『マクシウムカノン』が放てる。のだが…

「シュ!……」

光線がでない。微妙にマックスのポーズが間違っていた。逆L字型なのに、十字型。しかも左手が左方向に無駄に反れていた。

次にネクサスは、メタフィールドを展開しようとエネルギーを収束させた右拳を掲げる。…はずだった。

拳ではなくいつの間にかパーになっていて、しかもエネルギーが放射されてない。明らかな失敗だった。
それから二人は多彩なポーズを決め、なんとか必殺技を使おうとするが、全然ダメだった。

そのポーズの中には某宇宙の帝王の部下の中で最も忠実かつ強力な五人組の異星人特戦隊がとる全くイケてないポーズや、もう言葉で言う死語のレベルにまで落ちていた『命！』のポーズをとったりもした。

さすがのミケもその単眼を点にしてしまっていた。

「ウルトラマンも人間だから…」

エリーの言う通り、ウルトラマンはどこの世界でも生きた知的生命体である。よってミケの記憶封じの影響を受けてしまっていた。
これが効かなかったのは、アンドロイドであるエリーだけ。

一方、ベースタイタンでは。

「り、リベンジ！」

酔いから立ち上がったショーンが再びコクピットへの通路へと向かっていた。
ヒジカタもようやく彼の行動を見て自分のやるべきことに気がつく。
「あっ、そうだ。出撃しないと」
しかし…やはりズレていた。

「あっ、長官と教授もご一緒に」

ちょうど作戦室前を通りかかったトミオカ長官とヨシナガ教授を捕まえ、一緒に連れ込んでしまった。

「ちょちょヒジカタ君！私は今カレーを…」

「ちょ、私も乗るの！？」

しかし時すでに遅し、もうご老体の長官と教授まで乗り込ませ…

「「「「ぎゃあああああああああああああああああ！！！！」」」」

またしてもダッシュマザーで大回転するのだった…

その時のエリーはというと…

「…いい加減にしてほしいです」

微妙に眉間にシワを寄せていた。

外ではネクサスとマックスは苦戦を強いられた。

ミケの口から放たれた電撃で二体は対処する策をもて余したまま、立て続けに攻撃を受けていた。

「く…」

なんとか立ち上がる二体の巨人。しかし…

ピコン、ピコン…

ネクサスのエナジーコア、マックスのパワータイマーが遂に点滅し始めてしまった。

絶体絶命。

なんとか自分がマックスたちに指示を与えなければ。ちょうどその時、テファが戻ってきた。

「えっと…ここだったよね。よかった、また迷ったのかと…」

「ティファニア隊員、あの銀色のウルトラマンの名前はわかりますか？」

エリーは疲れきったテファの方を向いて尋ねる。

「えっと確か…ね、ね…」

「なんとか記憶の糸を探ってください」

「なんだったっけ…えっと…」

なんとか頭を絞りながらわずかな記憶をさぐりだす。

「えっと…ウルトラマンジャイアン？」

「それはないと思います」

「じゃあ、ウルトラマンスーパーデラックス？」

「そんなに長い名前じゃややこしいです」

「えっと、ネクス…あっ！ネクサス！」

「ウルトラマンネクサス、なるほど、『絆』。ウルトラマンの名前にふさわしい意味ですね」

やっと名前がわかったところでエリーは外の様子を表示したモニターを見つめ、無線を通してウルトラマンたちに話しかけた。

『ウルトラマンマックス、ウルトラマンネクサス。落ち着いて聞いてください』

名前を呼ばれた二人は、もしかして俺？と言ってるように自分たちを指差す。

『そう、赤いあなたがウルトラマンマックス。銀色のあなたはウルトラマンネクサスです。
まずはマックス、マックススパークはわかりますか？あなたの左腕に着いているアイテムです』

「シュ？」

左ってどっち？マックスは迷子のように左右に目を通す。

『ご飯を食べる時、お茶碗を持つ方の手です』

マックスは自分の両手を見るが、一目じゃわからない。試しにご飯を食べる仕草で確かめてみた。
ようやくわかった。左腕に着いている金色のアイテムをわかったぞ！と言ってるように掲げた。

『ウルトラマンネクサス、あなたの場合はマックススパークと同じタイプの装備が両腕に組み込まれてるようです。マックスと同様、それを使って戦ってください』

なんとか戦い方を少しだけ理解することはできた二人の戦士。
しかし、いまだ回転するダッシュマザーからレーザー光線が発射され、ネクサスとマックスに直撃してしまう。

「ウアア！？」

「ヌォアア！？」

この時、ショーンがダッシュマザーの回転を止めようとしたが、誤ってレーザー発射スイッチを押してしまったのだ。
だんだんエリーの顔が現実世界にいた、逆上状態の桃髪のご主人様のように歪んでいく。

ようやくダッシュマザーから降りて作戦室に戻ってきたヒジカタたちだが、まるで宴会で酒を飲んだことで酔っぱらったようにおかしな行動ばかりとっていた。

「…だからなんで戻ってきたんです？」

エリーの呟きは誰にも聞こえなかった。

「アチョー！」

今時の言葉とは思えない言葉を喚きながらトミオカはカレー皿を掲げる。

「あらあ？怪獣なんていたの？いつの間に～？」

ヨシナガはまるで小動物を可愛がるような口調でモニターに映るミケを見る。

「うっぷ…トイレええ！！」

ショーンはまた酔ってトイレへ直行。

「あははは…長官、今度ゴルフにでも行きませんか？」

勤務中なのにヒジカタは上司をゴルフへ誘ってる。

ただ、誤解はしないでほしい。本来ヒジカタたちはこんな情けない姿を晒すような愚か者ではないのだ。ただ、相手が悪すぎたとしか言いようがないのである。

さすがに、彼らのように記憶障害を起こしたテファもこの事態にドン引きしていた。オロオロと辺りを見渡し、何か手はないかと慌てるばかり。

しかし、ヒジカタたちの暴走は止むことなく、むしろエスカレートしていった。

「「「ダハハハハハハ！！」」」

そして遂に…

「うるさあああああい！！！！！！！！」

ピタリとヒジカタたちの暴走が止まった。
彼らの視線の先に、ハルケギニアでも、ウルトラマンゼロの恐れた桃髪の魔王が降臨していた。そのおぞましさを表現するかのように、その長い髪を波立たせながら…

「……ええかげんにせんかい」

「……はい」

その時、更なる脅威が外にいる二人のウルトラマンに迫ってきた。

「ニャアアアア！！」
「キシャアアア！！」

ミケに続き、『宇宙化猫クロ』『宇宙化猫タマ』が水面から噴き出した水しぶきの中から現れてしまった。

「そんな…」

だが、新たな脅威はそれだけではなかった。その脅威に本能からか、真っ先に気づいたのはテファだった。

「あれは…！」

ネクサスのエナジーコアの上に刻まれたリーヴスラシルのルーンが、不気味な朱色に輝いていた。血のような、鮮血の紅だった。

――記憶が欠落したからといってそんなこけ脅しの化け猫に負けるのか？

――やはり君に光は不要

――逆らうのは止めて私の闇に身を委ねろ

――君は本来…

私そのもの

闇の存在なのだから

ネクサスは頭を抱えて苦しみ出す。
聞き覚えはあった。自分が倒すべき相手と同じ…
だが記憶障害のせいで思い出しきれない。

その時の彼は見るべきものではないものを見てしまった。

「！？」

水面に映る自分の顔の半分が、自分と姿形も因縁も対をなすあの黒い闇の戦士になっていた。

黒い顔に邪悪な赤い眼…

マックスもその光景に硬直してしまった。

『左へ飛んで！』

無線からテファの声が聞こえてきた。同時に三体の化猫怪獣から電撃波が放たれる。今の彼女の声のお陰もあって二人は今の攻撃を回避、ベースタイタンの前に降り立った。

代わってエリーが無線で二人に言う。

『今あなたたちの後ろ、そこにはこの星を守る人たち、あなたの仲間がいる。思い出さなくても、あなたは彼らを、そしてこの地球を守ることを考えるだけでいい。
だってあなたたちは』

ウルトラマンだもの！

その言葉は、二人の強みになった。

そうだ。ここに立っているのは、誰かを守りたいという思いからだ。

〈パーティクルフェザー！〉
〈マクシウムソード！〉

ネクサスは三日月状の光弾を、マックスはウルトラセブンやウルトラマンゼロと同じ、銀色の宇宙ブーメランをミケに向かって放った。

「ギニャアアアア！」

ミケは体を切り裂かれ、爆発四散する。

仲間が倒されたことで怒るクロとタマはそれぞれネクサス、マックスに光線を放った。

〈サークルシールド〉
〈マクシウムバリア〉

しかし、その攻撃はあっさりとバリアで防がれてしまう。

攻撃が終わったのを見計らった二人の戦士は、ネクサスは十字型、マックスは逆Ｌ字型に両腕を組んで必殺光線を放った。

〈クロスレイ・シュトローム！〉
〈マクシウムカノン！〉

「デヤア！」
「シュワ！」

「「ギニャアアア！！！？」」

残った二体の恐るべき化け猫たちも、爆発と同時に仲間の元へ逝っ

た。

「グゥ…」

マックスは何時ものように飛び去ったが、ネクサスはダメージの蓄積やさっき起こった謎の症状のせいかその場に片膝を着いていた。

水面を覗き見ると、さっき見えた自分の顔の半分は元の銀色の肌に白い目に戻っていた。

（あれは…なんだったんだ?）

変身を解いてベースタイタン近くの公園に来ると、テファがエリーを連れて迎えに来た。

「シュウ、大丈夫!?」

「なんともない。気にするな」

嘘である。さっき水面で自分を覗き見たとき、顔の半分が明らかに異常だった。まるで、あいつの…

石堀が変身した闇の戦士のような…

思い出しただけでも、ゾッとせざるを得ない。

「ところで、なぜエリーがここにいる？」

「あなたにお礼が言いたいって」

「俺に？」

シュウヘイはエリーの顔を見る。彼女はそのとおりですと言ってるように頷いていた。

「マックスを助けてくれてありがとうございました」

テファがさっき話したのだろうか？シュウヘイの正体がマックスとは別のウルトラマンだと理解していた。

「いや、俺の方が助けられた。感謝する」

遠慮がちにシュウヘイはエリーに礼を返した。対するエリーは機械音を鳴らしながら笑みを浮かべると、目映い光に包まれたかと思ったら一枚のカードとなって姿を消した。

シュウヘイはそのカードを拾って見ると、エリーの役割を任されたルイズの姿が描かれていた。

「カードになったの！？」

「どうやら、これでこの世界でのノルマはクリアしたことになるようだ。

クリアするごとに、その世界である役割を任されたあのチビがカー

ド化するらしい。
おそらくこのカードは心を失ったこのチビを目覚めさせるのに必要なものってことだろう」

すると、二人の前に突如扉が現れた。きっと次のエリアへ繋がっている。

その扉へ歩き出すシュウヘイにテファは気になることを訊ねる。

「ねえ、どうしてあの娘を助けようって思ったの？」

よくよく考えたら、シュウヘイにはルイズと特にこれといった深い関わりはない。ただ少し会ったことのあるだけの他人ではないか？助ける理由でもあったのだろうか、テファはどうしても気になっていた。
しかし、シュウヘイの答えは至って単純だった。

「…要求助者の救出もナイトレイダーの仕事だ」

ただそれだけ言ってシュウヘイはその扉を開き、テファもその後に着いて行った。

仕事だと言ってはいたが、仕事でなくてもやはり誰かを守ろうとする意志が彼の胸の内に秘められていた。
テファはそう解釈することにした。

一方その頃…

「俺はどうなるのおおおおおおおお！？」

ベースタイタンの外の海面からワカメを頭に乗せながら溺れていたコバ隊員の姿があった。

6　剛力戦士

「そのカードさえあれば、ルイズって娘を助けられるのかな？」

扉の先にある真っ白な部屋にたどり着くと、テファはシュウヘイに尋ねてきた。

「奴らは八つの世界を用意したと言っていた。おそらくこのカードを八枚集める必要がある。ただ、わからないな」

「え？」

「連中はあのチビの心を奪ったにも関わらず、脱け殻となったそいつの肉体をほったらかしている。違う人格さえ埋め込んだりすれば操ることも可能かもしれないのにわざと回りくどいやり方でこちらに挑戦してきた」

最初はルイズの虚無の力を狙ってきたと思っていた。だが今シュウヘイの言った通り、その気になれば、かつてシュウヘイのいたネクサスの世界にいたファウストとメフィストの器だった斎田リコ、溝呂木慎也のように心を取り込むことができたはず。

もしかしたらの話だが何か裏がある。

「お前の予想は大方当たってるぞ、ウルトラマンネクサス」

「！」

寡黙さを供え持った低い男の声が聞こえると同時に、屈強な体格を持った巨漢が二人の前に現れた。

シュウヘイは怯えるテファを自分の背後に下げる。

「貴様は誰だ？」

「我が名は『ダーラム』。闇の剛力戦士」

冷たい無表情を貫き通したまま巨漢は自己紹介した。

「その剛力戦士が俺たちに何の用だ？」

「…迎えに来たのだ。マイフレンド」

「マイフレンドだと？俺がお前たちの仲間だと言いたいのか？」

眉を潜めてシュウヘイはダーラムを睨む。

「なぜ心の闇の度合いの強いお前が光に選ばれ、あのお方の目に付けられているかわかるか？」

「…知るか」

あのお方とは、どうせ石堀のことなのだろう。奴が自分たちに何を企んで挑もうと、立ち向かうしかない。だったら知ることよりも、目の前にいる敵を倒してでも先に行くべき。

「闇だろうがなんだろうが…」

シュウヘイは早速エボルトラスターを手に取った。

「俺の道を阻む敵なら倒すまでだ」

エボルトラスターを手に取ること、戦う準備ができた合図でもある。
だがダーラムは両腕を組んで瞼を閉じたまま続けた。

「…お前の実力ではあのお方には勝てん」

「なんだと？」

「いや、お前にあのお方を倒すことなど、どんなに実力をつけても不可能だ。あのお方を越えたところで、勝敗が必ず貴様の勝利と決まることはないのだ。
はっきり言おう、お前は必ず敗北する」

まるで、『シュウヘイ』という存在であること自体でシュウヘイに勝ち目がないと言ってる台詞だ。

「なぜそんな根拠のないことを言える？」

「…お前はあのお方の…いや、これ以上は敢えて語らん」

わざともったいぶる言い方をするダーラムは、ズボンからワルドが持っていたものと同じダークスパークレンスを取り出した。同時に黒い稲妻が彼を包み、強固な鎧を身に纏った黒と赤の闇のウルトラマンの姿となった。

『闇の剛力戦士・ダークダーラム』

「意地でも話さないってか」

シュウヘイもエボルトラスターを引き抜いて等身大のウルトラマン

ネクサス・アンファンスに変身した。

「さあ、その力を俺に見せてみろ」

「見せるんじゃない。貴様を消すだけだ！」

すぐさまアンファンスからジュネッストリニティにチェンジし、光の剣を振り上げた。

〈シュトロームソード！〉

「デエエヤアア！！」

普通ならここでダーラムを切ることができたはずだ。だが、

「なっ…固い！？」

ダーラムのボディが固すぎて切ることができなかった。

「ムン！」

ダーラムが体に力を込めた瞬間、彼の回りから強い衝撃波が放射され、ネクサスは壁に激突した。

「グォ！」

「シュウ！」

テファは彼に駆け寄ろうとするが、ネクサスは立ち上がって近づくなと平手を向ける。

「これくらい平気だ。そう心配するな」

しかし、あの鎧はとてつもない頑丈さだ。シュトロームソードですら小さな傷が一つ付いたくらいで貫くまでには至ってない。それどころか、シュトロームソードが今の衝撃波であっさりとへし折られていた。

「お前のなまくらの剣で俺の装甲は貫けんぞ」

「っ…ならば！」

リーヴスラシルのルーンが光ると、ネクサスの右拳に黒々としたオーラが集まり、ネクサスはダーラムの至近距離で黒い衝撃波をお返しに放った。

〈滅閃光！〉

「喰らえええ！！」

ダーラムはその衝撃波で起こった大爆発に巻き込まれた。

やったか？

だが煙が晴れると、その場にダーラムが平然とした態度で立っていた姿があった。あれほどの威力を持つ必殺技にビクともしていなかったのだ。

「何て奴だ…」

「今のお前の力はこの俺でさえ倒せないようだな。やはりお前には

必要だ」

ぐっと足を踏み込ませた瞬間、ダーラムはネクサスの眼前に現れ、彼をタックルで突き飛ばした。

「グハッ…」

さすが、剛力戦士と名乗れることはあった。たかが一撃でも凄まじい重さを誇っていた。

その場に両手を着いて倒れてしまうネクサス。それからもダーラムはその怪力でネクサスの顔、腹を殴り付け、最後はうつ伏せに倒れたところを一回踏みつけた。

「がぶっ…」

テファには痛々しい光景だった。見るに耐えられず、思わず目をそらしてしまう。

もし人間の姿だったら、今のシュウヘイは顔が晴れ上がり、血へドだらけだったに違いない。

「リーヴスラシルの真の力がな…」

「真の…力だと?」

その場にうつ伏せで倒れ伏しながらもネクサスはダーラムの顔を見上げる。

「そうだ。お前に与えられたその力はそんな程度ではない。本来の力を覚醒させれば、いかなる世界の戦士さえも圧倒する力を得られ

るのだ。
だが、今のお前はそれを頑なに拒絶しているようだな。
さあ、諦めてその力に心と身を…」

と続けようとした瞬間、ネクサスはシュトロームソードを作り出し、ダーラムの顔に向けて刃を奮った。

「ぬっ！？」

鼬（いたち）の最後っ屁にしかならないだろうが、ダーラムの顔に小さな切り傷ができた。

「…そんな曖昧なものに、俺は頼らない」

ネクサスはヨロヨロと立ち上がりながらも剣をダーラムの方に向けて身構える。

ピコン、ピコン、ピコン…

すでに彼のコアゲージの点滅音が彼の限界を知らせていた。

「シュウ、もういいよ！逃げないとあなたが…」

ここで彼を下げないと、彼が死んでしまう気がしてなかなかったテファは戦いを止めるよう促すが、ネクサスは平手を向けてそれを拒絶した。

「…逃げたって同じだ。こいつらは俺を狙っている。どんなに遠くへ逃げても、こいつらはきっと追ってくる…」

「……」

ダーラムはふうっ…とため息を着くと、突然変身を解いて人間の姿に戻った。

「っ…!?どういうつもりだ?今さら怖じけついたのか?」

「今のお前は我々と戦うことしか考えてないようだな」

彼はポケットから二枚のカードを取り出し、ネクサスに投げ渡し、ネクサスはそれを受け取り、変身を解いてからカードを確認する。

一枚は大地を象徴とした赤い巨人と海のような深い青の巨人、もう一枚にはアスカが変身したものと同じ、ウルトラマンダイナの姿が描かれていた。

「その二枚のカードが作り出す世界を行くがいい。そして思い知ることだ。
お前の意思だけでは、あの方には決して敵わないことを」

ダーラムはそう言い残し、その場から黒い霧状となって消えた。

「っ…」

さすがにダーラムから受けたダメージのせいで満足に立てそうにもなかった。

「大丈夫?」

テファはすぐ駆け寄って彼を支える。

「ちょっと、無理したかもな…」

「無理したかもなんてことじゃないよ！本当に無理していた…」

彼女はシュウヘイの顔を涙目で見つめていた。こんな純粋で戦いとは無縁な少女には、小さな争い事も苦痛に見えるのだ。

「勝てなかったら、逃げてもいいのよ。誰もあなたを責めないし、もし死んじゃったら……」

とテファが続けようとしたが、シュウヘイは彼女の口を塞いで強く言った。

「俺は死なん」

「…え？」

「俺が逝くのは、やるべきことをすべて終わらせてからだ。わかったか？」

「でも…」

「信じる信じないはお前の勝手だ。だが、少なくともやり残しがある時に死ぬつもりはない。
それとも、やはりこんな死にたがりに近い奴の言うことなんか信じられないか？」

「そんなことじゃないの…そんなことじゃ……」

信じてない訳じゃない。だが、やはり不安で仕方ないのだ。
以前石堀から聞かされた話とか、傷だらけの体を引きずりながらも戦う彼の姿が、痛々しかった。それでも自分のことより他人の方を気遣う彼への不安が強まっている。

「…無理し過ぎないで」

「…考えておこう」

体は少し重いが、力を振り絞って立ち上がったシュウヘイは、扉の前でダイナのカードを掲げ、新たな世界へ続く扉を開き、テファと共にその先の世界へと歩き出した。

「どうだったんだい？ダーラム」

ダンプリメが、自分たちの根拠地のフロアに戻ってきたダーラムに尋ねてきた。

「まだ心に大きな光を灯している。あの方は奴の心が闇に染まるのを望んでおられるのだが、今のままでは無理だな」

「なら、次かそれ以降の世界で彼の心に影を出させるようにしてお

く必要がありそうだね。
ところでウェザリー、そっちは？」

「順調よ。ゼロ君はこっちの思い通りに進んでいるわ」

ダンプリメの問いに、ウェザリーは何の狂いもないように答える。

「リシュ、この計画もあんたの行動次第。しっかり働きなさいよ。
『サイトお兄さん』を守りたかったらね…」

「……はい」

明るくもどこか悪どさのある口調で話しかけるウェザリーに、リシュはその可憐な表情に光を射し込むことはなかった。

7　コスモス／宇宙正義の守護者ルイズ

「なんだよこれ…」

新たに訪れた世界で見た光景は悲惨だった。
二体の赤いモノアイの凶悪なロボットが、東京の街を破壊し尽くそうと砲撃を乱打している。人々はロボットたちの魔の手から、必死に逃げていく。

「なんだこの有り様は…私の国に怪獣が現れた時よりも酷すぎる…」

クリスもその目に映る、廃墟と化す街に言葉を失いかけた。

その時、二人は目の前の公共ベンチで傷つき倒れていた青年を見かけた。直ちに彼の元へ駆け寄り、声をかける。

「大丈夫か!?」

「うっ…」

青年はうめき声をあげながら目を覚ます。

「平賀キャップ…」

「え?」

キャップ、つまり隊長と言われたサイトは自分とクリスの服装を確認する。『ＥＹＥＳ』とアルファベットで刻まれたエンブレムと青を強調した隊員服に変わっていた。なるほど、この世界ではまた隊

長と隊員ょ役割を任されてるようだ。ちょうど青年の身分証明書が落ちていたので、彼の名を確認する。

『春野武蔵』

「武蔵、何があった？」

サイトは武蔵に尋ねると、武蔵は痛む体を起こして向こう側を指差した。

「ウワアアア！！」

青いボディに赤の模様が刻まれた日食のフォーム。
優しさと慈愛の戦士、ウルトラマンコスモス・エクリプスモードが先ほどのロボット『スペースリセッター・グローカーボーン』の攻撃を我が身を呈して防いでいた。彼の背後には怪獣が一体すっぽり入るほどのロケットが幾つか並んでいる。コスモスはどうもそれを必死に守っているようだ。

「コスモスは…同化していた僕を死なせまいと、僕と分離して…」

武蔵は今までコスモスと一心同体となり、戦い続けていたようだ。

「わかった。もう喋らない方がいい。ここで休むんだ」

「はい…」

「クリス、武蔵を看ててくれ」

「行くのか？」

同じサムライ（サイトはそのつもりではないかもしれないが）の友が戦場に出るのはやはり心配だったクリスは不安げに顔を曇らせる。

「大丈夫、コスモスだけじゃない。ルイズやリシュも助けないといけないし」

そう言ってサイトは、ブレスレットからウルトラゼロアイを取り出し、装着してウルトラマンゼロへ変身した。

「ジュワ！」

ゼロはコスモスの眼前に降り立ち、グローカーボーンの砲撃をブレスレットから出現させた盾で防いだ。

〈ウルトラゼロディフェンダー！〉

「！」

コスモスはまさかの援軍に驚きの様子を見せた。

「大丈夫か、コスモス！？」

「君は、一体？」

「ウルトラマンゼロ、ウルトラセブンの息子さ！
デュア！」

ゼロは盾でグローカーボーンたちの攻撃を防ぎながら接近、盾をしまった瞬間飛び上がって必殺キックを放った。

〈ウルトラゼロキック！〉

「デアアアア！」

今の攻撃で一体のグローカーポーンが機能を停止した。
残る一体も、ゼロの更なる必殺光線で撃ち抜かれる。

〈エメリウムスラッシュ！〉

「ギギ…」

残った一体も機械音を鳴らしながらその場に倒れた。

「ありがとう」

コスモスはゼロに近づいて礼を言った。

「君のお陰で武蔵の夢を、守ることができた」

「夢？」

そこからコスモスはゼロに武蔵との出会いからこれまでの話を簡潔に教えた。
最初に武蔵と会ったのは森の生い茂る公園の中、武蔵がまだ少年だった頃だ。バルタン星人との戦いで傷ついたところを武蔵に助けられ、彼が成長してからは彼と同化、カオスヘッダーと呼ばれる宇宙ウイルスとの戦いを経て、数々の怪獣だけでなく、カオスヘッダーそのものの心すら救い出したこと。その後に現れたサンドロスと呼ばれる怪獣からは『ウルトラマンジャスティス』と共闘し、地球を

守ったこと。
先ほども一度や二度分離した武蔵とまた一体化して戦ったが、武蔵の身を案じたコスモスは強制的に彼と分離した。そこでゼロが加勢し現在に至る。

「もうすぐ実現する武蔵の夢を一目見ようと地球に来たが…」

「あのロボットたちが地球に襲いかかってきたって訳か」

ゼロは完全に停止したグローカーたちを見て言うと、コスモスはゆっくり頷く。

「このロボットたちには見覚えがあるのだ。まさかとは思うが…」

そうコスモスは機能停止したグローカーを見ていた頃…

「あのウルトラマンは一体…？」

ベンチからそれを見て不思議がる武蔵にクリスは説明した。

「お前の言うコスモスと同じ、正義の戦士ウルトラマンゼロだ」

「ウルトラマン、ゼロ…」

『なぜ…』

武蔵とクリスの耳に突然、誰かの声が聞こえてきた。

『なぜコスモスはお前と同化したのだ？春野武蔵』

辺りを見渡すと、黒が目立つ服装を身にまとった女性の姿があった。クリスはそれを思わず凝視する。あの桃の髪と小柄な体型…

「ルイズ…？」

ルイズだった。以前ティガの仮想世界でレナと名乗っていた彼女とは違い、どこか神秘的雰囲気があり、見るからにかなり大人びていた。

『夢…？コスモスはそんな曖昧なものを』

彼女は白鳥の翼を模したアイテム『ジャストランサー』を胸に当て、目映い光に包まれた。

『宇宙の正義より、優先すると言うのか！』

ルイズの変化した金色の光はゼロとコスモスの前に現れ、やがて力強さを持った赤いウルトラマンとなって現れた。

「君は…」

コスモスは声を震えさせる。

「ジャスティス！」

宇宙正義の守護者、ウルトラマンジャスティス・スタンダードモード。

「なぜ、君がここに？」

「…」

その赤い戦士、ジャスティスは何も答えず、停止したグローカーポーンたちに向けてエネルギー波を流し込んでいった。

〈ジャスティスリムーバー〉

すると、倒れたはずのグローカーポーンたちが再び起動したではないか。

「そんな！」

クリスと武蔵は目を疑った。ウルトラマンとは人類を守る存在のイメージが強い。にも関わらず、ジャスティスは人類の驚異であるあのロボットたちを復活させたのだ。

「ジャスティス、何故だ！？」

同じウルトラマンとは思えない行動にゼロはジャスティスに問い詰めたが、ジャスティスは返答の意志を全く見せなかった。それどころかゼロとコスモスに向けて光弾を放ってきた。

〈ジャスティススマッシュ！〉

「く！」

〈ゼロスラッガー！〉

とっさに反応したゼロは宇宙ブーメランを投げつけ、それをかき消した。

「相棒、あいつ何考えてんだ!?敵のデカブツ復活させやがったぞ！」

ゼロスラッガーの一本に乗り移ったデルフが信じられないと声をあげる。

「わからない…でも、止めないと！」

まずはグローカーを止めなくては。ゼロは素早くグローカーポーンたちに突進、唸りを上げた拳で二体を攻撃した。

「デュア！」

さらに追撃を加えようとグローカーに近づこうとしたが、その前にジャスティスが立ちはだかる。

「なぜ…」

「デアア！」

ジャスティスは容赦なくゼロにハイキックを放つ。辛うじて避けるゼロだったが、ジャスティスはすかさずゼロの首元を締め上げる。

「ぐっう…なんで同じウルトラマン同士で戦うんだ!?何でだ!?」

ゼロから見れば同じ光のウルトラマンとの苦い戦いはこれで二度目。あの時は敵だったネクサスに、たとえ盗賊でも守らなくてはならない人がいるという理由があった。ならばジャスティスにも似たような理由だってあるはず。だが、

「…」

ジャスティスはいまだ無言を貫き通していた。

「なんとか言ってくれ！なぜ何も答えないんだ、ジャスティス！」

「デアアアア！」

蹴りを返事代わりに放つジャスティス。どうしても話したくないのか、それとも話したところで無駄だと言うのか？

その時、グローカーたちが宇宙ロケットに向けて砲撃しようとする光景が目に入った。

「止め…」

止めに入ろうとするゼロだったが、間に合いそうにない距離。このままでは宇宙ロケットが…

だがその時、ボロボロになっていたはずのコスモスが飛び出し、身を挺してグローカーたちの攻撃からロケットを守った。

「ウワアアア！！」

「コスモス！」

ピコン、ピコン、ピコン…

コスモスのエネルギーが尽きかけている。彼はヨロヨロと立ち上がり、ゼロに声をかけた。

「頼む…ジャスティスに、伝えてくれ……私が武蔵から教わった…こと…を……」

コスモスはまるでブロンズ像のような色に染まると、倒れていきながらパリン！と砕け散った。

「……！」

コスモスが消えた。それを察知したかのように、ジャスティスはグローカーたちと共に姿を消した。

「なんで…」

震えながらゼロは握り拳を作った。なぜこんな酷いことを、ジャスティスは平気でやったのか。あのロボットたちと一緒に何を目的としているのか…

「なんで、こんな戦いばっかなんだよ…」

「旦那、もう変身を解きやしょう。連中の気配はもう感じねえ」

「…」

ゼロスラッガーに乗り移った地下水の言葉を聞き入れたゼロは無言のまま変身を解いた。

武蔵はあの後病院に運ばれ、治療を受けていた。現在彼の受けている治療室の前にはサイト、クリスの二人だけでなく、ジャスティスの変身したルイズがいる。この世界ではルイズは『ジュリ』と名乗っていた。

「なんで、あんなことをした!?君は俺やコスモスと同じウルトラマンだろ!?」

「予測したからだ」

「予測？」

「今から約二千年後、地球人は宇宙に害をなす存在となると『デラシオン』は予測したからだ。
よって今から約35時間後、この地球の生命体のリセットを開始する」

デラシオンとは宇宙正義を確立させた、ウルトラマン以上の絶対的存在である。だが、そのやり方は場合によっては独善的で無慈悲。しかし、そのやり方で宇宙の平和を守ってきた。

「そんな勝手な！」

「人間が家を食らい尽さんとするシロアリを駆除するのと同じことだ」

「シロアリと人間は違う！」

「…先ほどこの星の代表たちも勝手だのシロアリと一緒にするなと言ってたな」

ジュリはサイトたちが武蔵を病院に運んでる間、デラシオンからのメッセージをこの世界の地球防衛軍たちに伝えていた。無論、いきなり悪さもしてないのに死刑宣告を下されて黙っていられるはずがない。

「君はなんとも思わないのか？そんな心ない正義を行使して、たくさんの人が痛みを癒す間もなく死んでいくのを見て…」

心ない正義。サイトもそれを行使してしまったことがある。ノスフェルとの二度目の戦いで、その中に閉じ込められた少女の存在を無視し、ノスフェルを倒してしまった。結果、その少女は一命をとり止めたものの、意識不明の重体だった。サイトの心に深いトラウマを残すのと引き換えに、サイトはウルトラマンとして大事なことを思い出したのである。

「…私は同じ過ちを繰り返すわけにはいかないのだ」

「同じ過ち？なんだそれは？お前は何をしたと？」

クリスの質問に、ジュリは目を光らせると、サイトとクリスにある立体映像を見せた。

サンドロス。そう呼ばれているエイリアンが地球の都市を次々に破壊している。そこにコスモスとジャスティスが現れ、サンドロスを撃退したものだった。

「サンドロスはかつて、地球人のように愛などと曖昧な感情を持つ種族だった。しかし、いずれサンドロスが宇宙の害物となることも懸念した。だがすぐ抹殺するには早いと判断したデラシオンと私は２０００年の猶予を与えた。サンドロスがあの時のままでいられることを願いながら。

だが、サンドロスは裏切った。自らの快楽のために星の文明を蹂躙、破壊し尽くしていった」

「「…」」

サンドロスは地球人のように美しい心を持っていた。にも関わらず、自らの利益しか考えない侵略者となってしまったのだ。だからジュリは今回の地球人の件では、猶予を与えることも許してはならないと判断した。

「でも、地球人がサンドロスと同じになるなんて限らない。ジュリ、考え直してくれ。少なくとも攻撃するのは、地球人が本当の侵略者になってからの方が…」

「これ以上お前と話しても無駄だな」

サイトの言葉を最後まで聞く前に、ジュリはその場から歩き去っていった。

「…俺はたとえ守ってる人が侵略者になったとしても、諦めたくない…」

そのサイトの呟きは誰にも聞こえなかった。

『武蔵…』

治療を終え、病室のベッドに寝かされていた武蔵の耳に、聞きなれた彼の声が聞こえてきた。

『武蔵、私はまた君を傷つけてしまった』

『いいんだコスモス。これは僕が決めたことなんだ』

『私は武蔵、君から夢の大切さを、それを守ることの大切さを教わった。それをジャスティスに伝えたかった…』

『僕はまだ、諦めてない。どんな問題にもきっと解決できる方法があるはずなんだ…』

二人の会話は、武蔵の夢の中で展開され、誰もその二人だけの会話を聞くことはなかった。

ただ一人、サイトたちの後から武蔵のいる病室に来た人がいた。

アヤノ、武蔵と同じＥＹＥＳの隊員で彼に好意を寄せた女性。彼女は友好的な怪獣たちをとある島で合法的に保護している。その忙しさもあって彼と会う機会がなかなかなかった。

「武蔵、また話できるよね」

「…やはり、この星の人間は守る価値などない」

自分の回りに転がるチンピラたちを見て、ジュリは心なき言葉を言った。

先ほどまでこの辺りを歩いていたところを、どこからかやって来たチンピラたちに絡まれたが、あっさりと返り討ちにしたのだ。

「助けてくれ！」

チンピラの多くはその場から逃げ出した。

すると、彼女の足元に何かがもぞもぞと動いていることに気がついた。白い子犬だ。

「コスモス！」

そこに、１０歳ほどの幼い少女が走ってきた。

「よかった…いきなり走っていっちゃうから…」

「この子犬が…コスモス？」

コスモスと聞いて思い浮かんだのは、かつての戦友でもったあの青い戦士。彼と同じ名がその子犬にも名付けられていることに、わずかにも彼女は興味を抱いた。

「うん、でも名前負け。臆病だからすぐ吠えちゃう」

「私には吠えてなかったが」

「きっとあなたが優しい人だから、コスモスは吠えてなかったんだよ。
これ、お礼」

少女はジュリの手に、紙で包まれた飴玉を与え、握り納めさせる。

「じゃあ、お姉ちゃんバイバイ」

その少女は子犬コスモスと共に、ビル街の中へ消えていった。

「…」

手のひらにある二つの飴玉を見つめるジュリは、この時どう思っていたのだろうか。

「ジュリ」

つい先ほど覚えたばかりだったが、聞き覚えのある声が背後から聞こえた。
サイトとクリスの二人だった。

「人類は確かに君たちから見れば愚かかもしれない。でも、さっきの女の子のように何も知らないままの人々の感情を無視してリセットなんてするほど、本来の宇宙正義は残酷じゃないはずだ」

「…」

すると、彼らのいる場所が薄暗くなった。夜になったわけでも暗雲が立ち込めてるわけではない。
頭上に巨大な宇宙船が現れたのだ。おそらくデラシオンの送り込んだ刺客である。その宇宙船からまたしてもグローカーボーンが二体、いやさらに三体現れ、合計で五体となった。グローカーたちは無慈悲にも都市のビルを砲撃、破壊していった。

「わあああああ！！」

「にっ、逃げろおお！！」

街の人々はグローカーの魔の手から逃れようと必死に逃げ惑う。

サイトは時計型通信機『ＥＹＥＳペーサー』で基地にいるチームＥＹＥＳのメンバーたちとコンタクトした。

「ワタライ、デラシオンにメッセージを送れ！『地球人に猶予を与えてくれ』と！他のメンバーはテックライガーでグローカーに攻撃だ！」

『キャップ、デラシオンと交信するなんて不可…』

今攻撃を仕掛けている相手がこちらの話を聞くはずがない。ワタライだけでなく、誰もがそう思っていた。

「最後まで諦めるなよ！時間がないから、泣き言言ってないでやるんだ！いいな！」

その時のサイトは隊長どころか隊員の経験がないとは思えない気迫

だった。

『わっ、わかりました。やってみます！』

ワタライは気迫に押されかけたが、サイトの命令通りデラシオンとの交信を開始した。

サイトはＥＹＥＳペーサーを閉じると、ウルトラゼロアイを取り出した。

「クリスは地上の人たちの避難誘導を頼む」

「わかった。気を付けろよ」

「わかってる。デュア！」

サイトはウルトラゼロアイを身に付けウルトラマンゼロに変身、グローカーたちに飛びかかった。

「ダアアアッ！」

二体のグローカーボーンはゼロの攻撃で地に押し倒された。

「…無駄だ」

ジュリはただ、そう一言呟いていた。

「ダアア！」

キーパーアーマーを身に付け、ゼロは肉弾戦に持ち込みグローカーたちと交戦していた。地に叩きつけ、蹴り飛ばし、投げ飛ばす。

しかし、グローカーたちの猛攻は止まらない。街の人たちに向けて攻撃してきてもいるため、守りながら戦うのは至難の技だ。

「デュォ！？」

身を呈して人々を守ることは、多勢に無勢の状況内ではさすがにハイリスクだ。

「ウルトラマンを援護だ！」

「「了解！」」

ＥＹＥＳのメンバーたちも見ているだけは耐えられない。戦闘機『テックライガー号』『二号』から放つショットでグローカーを攻撃、ゼロを援護した。

「…デュ！」

立ち上がり、タックルでグローカーの一体に攻撃するゼロ。しかし、戦況は覆らない。五体ものロボット怪獣がいるのだ。街を守りながら戦えば、過度のダメージでいずれ倒れてしまう。

「ウルトラマンゼロ、まだわからないのか？お前の努力など、結局無駄な足掻きだ」

一方その頃、病室で休んでいた武蔵はこの騒ぎで起き上がった。

「うっ…」

やはりダメージが回復しきれてない。体の節々がズキッと痛む。

「ダメよ武蔵！まだ寝てなきゃ…」

「コスモスを助けないと…寝てる場合じゃないんだ」

アヤノの制止を退け、武蔵は病室から退室し、痛む体を引きずりながら廊下を歩き出していく。

「くっ…」

やはり無理をしたためか、床の上に倒れてしまった。

「ほら、言わんこっちゃないんだから！」

「休んでる暇なんかないんだ…コスモスがいないと、地球は…」

そこに、避難誘導をしにクリスが駆けつけてきた。

「大丈夫か？」

「行かせてくれ…コスモスのところへ…」

「無茶をするな。傷がまだ癒えてないのだろう？」

「それでも、今はコスモスの力が必要なんだ…
敵は、強大すぎる…」

「…」

クリスは杖を出すと、武蔵に向けて魔法を放った。水の泡たつような音が鳴り、武蔵の傷がいくつか塞がっていった。

「今のは？」

「水の魔法は傷を癒す。
さあ、ここは危ない。早く出るぞ。コスモスがいる場所に心当たりはあるのか？」

「手伝ってくれるのか？」

「ああ」

「…僕とコスモスの初めて会ったあの公園に行ってみよう」

「まだ足掻くのか？」

ジュリがそう呟く中、ゼロとチームＥＹＥＳのテックライガー一号と二号は痛みを堪えながらグローカーたちに立ち向かう。そろそろ精神的にも効いてきた頃だ。

「く…」

だが、その時思わぬ援軍が空から飛来した。

「キエエエ！」

「なっ…」

ジュリは目を疑った。グローカーたちに向けていくつかの光弾が放たれていたのだ。

『友好巨鳥リドリアス』の口から、散弾銃のように。

リドリアスだけではない。一体のグローカーの足元の地面が蟻地獄のように崩れ落ち、引きずり込みながら新たな怪獣が姿を現した。

『古代暴獣ゴルメデ』

そしてさらにライオンのような鬣（たてがみ）を持つ『伝説薬使怪獣　呑龍』、赤いとげのような突起を身に纏う『電撃怪獣ボルギルス』。グロー

カーを二体同時に突き飛ばした。

彼らもまた、コスモスに救われた怪獣なのだ。

「お前たちが、俺たちを助けてくれたのか?」

ゼロの言葉に、近づいてきたリドリアスはそのとおりと鳴いてみせた。

「よーし、燃えてきた!」

普通ならウルトラマンと敵対する怪獣たち。そんな彼らが仲間として共に戦ってくれるなどこの上ない心強さだ。体の痛みはいつの間にか抜けたゼロは立ち上がってグローカーたちに立ち向かう。

「バカな…なぜ怪獣までもが人間たちの味方を!?」

ジュリはいまだ驚愕の境地にあった。

その時、彼女の耳にある声が聞こえてきた。目を閉じ、耳を澄ませると幾人もの人の悲鳴が聞こえてくる。だがその中でも最も彼女の耳に響いたのは…

『コスモス!コスモス!』

コスモスという名の子犬を連れていたあの少女の叫び声だった。まるで本能のまま動かされたように、ジュリは少女の元へ風のごとき速度でたどり着いた。

「どうしたんだ?」

「コスモスがこの下に埋まってるの！」

今にも泣きそうな少女の指差す瓦礫の下から、子犬のコスモスの鳴き声が聞こえてくる。辛うじて隙間の間に入り込んで一命をとり止めていたが、瓦礫の重みは少女には重すぎて退かせず、かといって子犬コスモスを放って逃げるわけにもいかなかったのだ。

「自分の命の方が大事なはずだ。早く逃げろ」

「嫌！コスモスは私の大切な友達だもの！」

退かせるはずもないのに少女は瓦礫を力一杯退かそうとするが、やはり重すぎて退かせない。

一方で、ゼロと怪獣、そしてＥＹＥＳの攻撃でグローカーは苦戦を強いられた。

一体はテックライガーの射撃。

一体は、ゼロの必殺光線とリドリアスの光弾。

〈エメリウムスラッシュ！〉

「デュ！」

一体はゴルメデの怪力やボルギルス、呑龍の攻撃で倒れていった。

しかし、残ったグローカーボーンたちはその身を青い花びらのように散らすと、その欠片は一つの形を成し、合体した。

『スペースリセッター・グローカールーク』

「コスモス…」

武蔵、アヤノ、クリスは武蔵とコスモスが初めて出会った公園で倒れていたコスモスを発見した。しかし、エネルギーの尽きていた彼は半透明のガラスのように体が透けて今にも消えてしまいそうになっている。

「なんとかコスモスを復活させる方法がないと…」

いずれコスモスは死ぬ。辛うじて彼の呼吸が聞こえるが、いつまで持つかわからない。

コスモスは果たして復活するのだろうか…

ルークとなったグローカーの攻撃は凄まじく、怪獣たちはその砲撃によって大ダメージを受けていた。

「く…」

ピコン、ピコン…

ゼロはなんとか奮闘するも、さっきまでのグローカー五体との戦いで体力が残り少なくなっていた。

『障害となるものは全て、排除』

「「ギェアア！！」」

ゴルメデたちもグローカーの砲撃で大苦戦を強いられ、立つこともままならない。

リドリアスだけは空を飛び回りながら光弾をグローカーにぶつけるが、パワーアップの影響でダメージがほとんど見られない。反撃にリドリアスに向けて砲撃、リドリアスは撃ち落とされた。

「キェエエ！！」

撃ち落とされたリドリアスはもはや翼をバタつかせる気力も失い、立つこともできなくなった。

グローカーが止めを刺そうとリドリアスに迫り、左腕のパーツのカッターでリドリアスを切り裂こうとした。

「止めろおお！！」

〈ゼロスラッガー！〉

ゼロは力を振り絞って二本の宇宙ブーメランを投げつけ、片方はグローカーのカッターを、もう一本はグローカーの頭を切り裂いた。

リドリアスの危機を救うことはできたが、今度はゼロに砲撃が放たれてしまった。

「グアッ…！」

「なぜ、どいつもこいつも…」

強大すぎる力を前にしても、目の前の危機を恐れず他者を労れるのだ？

ジュリは遂に目の前の瓦礫を持ち上げ、退かした。その下の隙間に閉じ込められている子犬には大した怪我は見られなかった。

「ありがとう！」

少女は笑みを浮かべジュリにお礼を言うと、他の人々の逃げていった先へ走り出した。

「…これが、お前がこの星の未来を信じた理由なのか？コスモスよ…」

彼女はすぐ辺りを見渡した。

一度は倒したはずのコスモスを探していたのだ。透視能力でその都市から約何キロもの範囲を見渡すと、森の中に青い半透明の巨人が横たわっているのが目に入った。

ジャストランサーの翼を広げ、彼女はそれを胸に当てて光に包まれた。

「うぉおおお！！」

やがて彼女の姿は巨大化し、ウルトラマンジャスティス・スタンダードモードとなってゼロを背に降り立った。

「ジャスティス！」

「…怪我をしたくなかったら下がっていろ」

ジャスティスは自らの体を発光させると、ジャスティスのプロテクターに金色の鳥の翼を表したようなラインが入った。

ウルトラマンジャスティス・クラッシャーモード。

「デアッ！」

ジャスティスは高く飛び上がり、グローカールークに向かって強烈な飛び蹴りを放った。

結構効いてはいたようだが、ジャスティスがグローカーの方を振り向いた瞬間、グローカーは右手でジャスティスの首を締め上げた。

「グォ…！」

『抵抗するものは全て排除』

グローカーから何の感情もこもってない声が消えてくる。たとえ手を組んだ者だとしても邪魔立てすれば容赦しない。それがデラシオンのやり方だった。ジャスティスは今まさにその対象だったのだ。

グローカールークのカッターがジャスティスな振り下ろされようと

していた。

「ヌウウ…デア！」

ジャスティスはそのカッターが自分に下ろされる前に、それを肘打ちで打ち砕き、グローカールークの腕を振りほどいた。

立ち上がったところでジャスティスは両腕を、円を描くように一回転させ、両拳を突き出して必殺光線を放った。

〈ダクリューム光線！〉

「デアアア！」

グローカールークは後ろにもたれ掛かる形で倒れ、大爆発を起こした。

モニターから見ていた地球防衛軍の幹部は誰もが目を疑った。わざわざ自分たちに出向いて「地球生命のリセット」を宣告してきた、それもコスモスを倒した戦士が地球の味方となる行動をとっていることが信じられなかった。

「なぜ…？奴は人類の敵ではなかったのか？」

「くそ…ダメか…」

武蔵は鏡を手に苦虫を噛むような表情を浮かべていた。鏡を使い、それに反射された太陽光をコスモスに浴びせることでコスモスの復活を図っていたが、やはりエネルギーとなる光が足りなすぎる。

しかし、そこに二人の人物が駆けつけてきた。サイトとジュリの二人だった。

「サイト！無事だったか」

「ああ」

サイトを出迎えたクリスだったが、背後にいるジュリの姿を見て思わず警戒する。

「大丈夫だクリス。彼女は考え直してくれた」

「え？」

サイトの思わぬ発言に間の抜けた声をあげるクリス。ジュリはそんな彼女や武蔵とアヤノを尻目に、ジャストランサーからコスモスのカラータイマーに向けて光エネルギーを流し込んでいく。

すると、半透明だったコスモスの姿が本来の青と銀のはっきりしたものとなり、やがて光となって武蔵の体内に入り込んでいった。

何かに気がついたように武蔵はポケットからあるものを取り出す。

それは少年時代にコスモスから授かった不思議な石「輝石」だった。

武蔵がコスモスとまた一つとなった影響で、輝石は変身アイテム「

コスモプラック」に変化した。

「ありがとうジュリ！」

「礼を言われる筋合いなどない。私はただ、この星への償いをしただけだ」

ジュリはそう言うと、ポケットから一枚のカードを手渡した。自分の姿、ジュリとその背後にいるウルトラマンジャスティスの姿の描かれたものだった。

「お前の役目はこの世界に留まって戦うことじゃないはずだ。仲間と共に私の本体を救う、そうなのだろ？」

それを言われたサイトは思わず言葉を詰まらせた。

「どうしてそれを…」

「私にもわからない。ただ、お前の記憶の中の私がせかしているのかもしれない。早く助けてくれと」

「でも…まだデラシオンとの戦いは…」

「さっきも言ったはずだ。お前の役目はこの世界に留まって戦うことじゃないと」

「…」

そうだ。ルイズとリシュ。急いで助けなくてはならない人がいる。サイトはジュリからカードを受け取った。

「気付かされた礼だ」

「ありがとう、ジュリ」

サイトから礼を言われたジュリは武蔵の方に向き直った。意を決したように互いに頷き合うと、武蔵はコスモプラックを掲げ、ジュリはジャストランサーを胸に当てた。

「コスモおおおおおス！！」

コスモスの仮想世界から出た二人は、ワルドと再会したものと似ている真っ白な部屋にたどり着いた。

「彼らは、大丈夫なのか？」

クリスの問いにサイトは首を横に振った。

「きっと大丈夫だ。俺と同じウルトラマンだから」

「ところでお前に尋ねたいことがあるのだが」

尋ねたいこと？自分がなぜウルトラマンなのかとかだったか？だが、

違った。リシュのことだった。

「リシュとは何者だ？お前とはどんな関係だった」

「えっと…子供の頃でしかあってないけど、結構ハツラツとした女の子で、俺によく『兄ちゃん』て甘えてきてさ、その分寝ることとかが好きな娘だった」

そう言ってサイトはポケットから、リシュからもらったものとされる悪魔の翼を模したお守りを取り出した。

「これ、お守りにしちゃちょっと不気味だけど、大事なものだったんだ。
でも…リシュは気づいた時にはいなかった。事情もあってどこか遠くへ引っ越したんだと思うけど、その夜にちょっと泣いた気がする。それっきり名前も思い出せなくなったんだ」

「そうか。済まない、辛い思い出を掘り起こしたようだ」

「いいって。俺の大事な人なんだ。このまま助けにいけばやっと会えるんだから。ん？」

気がつくと、一枚のカードが足元に落ちていた。おそらく次の世界へ導くものらしい。サイトはそれを拾い上げると、そのカードにはサイトのウルトラマンゼロとしての記憶で、『ある意味で』印象深いウルトラマンの姿が描かれていた。

（こいつは確か、宇宙警備隊でもかなりの才能なしって言われてた…）

実はクリスとの会話時、本来なら光の国で修行中のハルナが一番だけど、と一途さを表す言葉を言うはずだった。だが、クリスが知らなかったために彼女から指摘されなかったのか、ハルナのことは一言も語らなかった。

いや…

彼の頭の中から、いつの間にかハルナに関する記憶が欠落していたのだ。

まるで彼女のことを知りもしなかったように…

8　ダイナ／負け犬の意地（前書き）

別作品の主人公、ソラ＝ウルトラマンアグルを主人公にした続編書こうかな…
でもネタがない…
何かアイデアとかありませんか？なるべく2つ以上…

8　ダイナ／負け犬の意地

「…」

新たな仮想世界の大地を踏んだところで、シュウヘイはアスファルトの上に落ちていた一枚のボロボロの紙を拾い上げた。

『やりたい放題ダイナ。街の被害甚大！』

新聞の切れ端だった。その記事に記載された写真には、ボロボロの街のど真ん中で勝ち誇ったようにガッツポーズを決めるウルトラマンダイナの姿があった。

『ウルトラマンダイナは街の被害を全く省みず、街に現れた怪獣を光線で倒そうとした。しかし何度か空振りに終わり、その度にビルが破壊され、ダイナはその繰り返しの結果、街に甚大な被害を残した形で怪獣を撃破。しかし、以前にも似たようなやり方でダイナは怪獣を倒し、街をボロボロにしている。まるで本人は我々人類の味方と言うより、ただバトルを楽しむためなら回りのことを考慮しない迷惑野郎だ。地球防衛軍はダイナへの対策として、彼がまた現れた時は彼を戦いから除外する作戦を考慮している』

「迷惑ヒーロー、ダイナってことか」

新聞を公衆のゴミ箱に捨ててシュウヘイは言った。

「なんで迷惑なの？ウルトラマンって、人の味方なんでしょ？」

テファは日本語が読めないので、なぜシュウヘイが一枚の紙の切れ

端を見ただけでダイナを『迷惑』と言ったのかわからなかった。

「この世界のウルトラマンダイナは人のために戦ってるのではないってことだ」

「なんで？」

「それを今から調べる。幸い、この世界でも防衛軍の役割を任されてるようだしな」

現在二人の服装は、『ＧＵＴＳ』とアルファベットで描かれたエンブレムを刻まれた隊員服を身に付けていた。だがサイトたちの訪れたティガの仮想世界のＧＵＴＳとは違い、それとは対照的な黒と赤の色をした服だった。この世界を守る防衛チームは『スーパーＧＵＴＳ』、ＧＵＴＳから発展した対怪獣防衛チームだ。

しかし、イザベラと出会ったアスカのいた世界とは違う。それは仮想世界だからではなく、アスカの変身するダイナがこの世界のダイナとは違い、単に力を自慢したがるような戦士ではないからだ。

そんな事実を知る由もなく、シュウヘイの通信機『ウィット（Ｗ．Ｉ．Ｔ）』から音が鳴り出した。

『黒崎、ダイナはおそらく人間の姿に化けて潜伏しているはずだ。見つけ次第保護しろ』

「見つけて、どうするつもりだ？と言うか、あんたは誰だ？」

『はあ！？隊長の俺の名前も忘れちまったのか！？ヒビキだ！ちゃんと覚えとけ！』

鼓膜が破れそうな怒鳴り声でキーンと耳鳴りがシュウヘイの頭の中で走り出す。

『ったく、血圧上がったりだ。とにかく、見つけ次第保護しておけ。仲間に率いれてみっちり教育しとかねえと奴はまた街に被害をだすかもしれねえからよ。じゃあな！』

そこでプツンと通信が切れた。

「…すでに会ったことがあるという設定か。勝手だな」

ヒビキ、スーパーＧＵＴＳの隊長らしい。だが二人はさっきのマックスの世界の時のように自己紹介してもなければ会ってもない。この世界のヒビキの記憶ではすでに会ったことがあるようになっているようだ。

「手分けして探す…は無理か。お前はなんか方向オンチな気がするし、第一一人じゃ危険だしな」

ここはハルケギニアでもなければ、二人の住んでいる場所でもない。彼女を一人で出歩かせるには危険が伴う。怪獣がいきなり現れたりしたら対処できない。

「シュウ、酷い…」

あうう…と元気を無くしかけるテファ。

「そう気を落とすな。俺がその分カバーすれば済む話だ。だが…」

ヒビキの情報だとダイナは人間の姿を借りて潜伏しているとなってるが、特徴に関する情報が乏しいどころか全くない。どうやって探せと言うのだ？

「雲を掴めと言われてるようなものだ」

「くっ、蜘蛛？」

虫の蜘蛛を掴むのかと勘違いするテファ。確かに掴みたくはないだろうが…

「ベタなボケは止めろ…」

彼女の勘違いにシュウヘイは呆れるしかなかった。

「ちょっと！」

そこで聞き覚えのある声が二人の耳に入った。

「何そこでボーッとしてんの？」

ルイズだった。彼女もまたスーパーＧＵＴＳの隊員の役割を与えられている。おそらく自分たちとも面識のある設定となってるかもしれない。

「ダイナの情報について何か掴めたか？」

以前から会ったことのある話し方でルイズに尋ねてみた。

「ふふん、聞いて驚きなさいよ。掴んだにも何も、ダイナは私の知

り合いが変身してたんだから！」

今回のルイズ、結構現実のルイズとキャラがほとんど変わってないようだ。威張り具合が全く同じ。

とにかくダイナの情報があれば、真相を確かめることができそうだ。

ダイナがなぜ、あんなに周囲に被害を伴うような戦いをするのか。

「よし、案内しろ」

「少しは驚きなさいよ…まあいいわ。このＧＵＴＳのスーパーレディ『マイ様』に着いてきなさい！」

また無駄に威張る…故郷にいるナイトレイダーの平木隊員みたいにも思えてきたシュウヘイは疲れたように頭を抱えながらテファと共に彼女に着いていった。

「…」

そのダイナ、マイと同じスーパーＧＵＴＳ隊員の真は公園のブランコに腰かけていた。ダイナへの変身に使う『リーフラッシャー』を手の中に握りしめ、本来の彼のテンションとは違い、沈んでいる。

一体何があったのだろうか？

実は新聞で『やりたい放題ダイナ』の記事が載る前のことだ。人気のない夜の闇の中…

『シェア！』

『デア！』

真は自分の変身するダイナに化けた、ある異星人に勝負を挑まれた。偽者なんかに負けるはずがない。それまでピンチに陥ることもあったが、彼は敗北することもなく数々の戦いに勝ち続けていた。

しかし、

『ハアッ！』

『ウワアアアア！！』

彼は負けた。異星人の化けたにせウルトラマンダイナに。そして偽者は彼に言った。

『所詮貴様は人の情を捨てきれない軟弱者。そこで這いつくばるのがお似合いだ負け犬』

今までダイナとして戦い、勝ってきた彼のプライドはズタズタに引き裂かれた。そのショックで真は戦うことを放棄するようになった。

「…ちくしょう…」

「真」

その声を聞いて真は顔をあげる。マイと、知らない顔であるシュウヘイとテファの二人が彼女の後ろからやって来た。

「何しに来たんだよ、マイ」

「まーだいじけてる。らしくないじゃない」

マイはいつ、なぜかは不明だが真がダイナであることを知っていた。シュウヘイはそう読んだ。

「ほっとけよ。俺なんかどうせ、ウルトラマンでも威張るだけのへっぴりだ…誰も守れやしない…」

「あんたねえ！」

マイは真の胸ぐらわ掴み上げた。いい加減彼の今の態度に苛立ちを覚えていた。

「いつまでそんなんでいるつもりなのよ！なんのために私があんたの正体を隠してあげてると思ってるの！全部、あんたがこの星の救世主だって信じてるからなのよ！なのにあんたは…」

たった一度きりの敗北だけで拗ねる。そんな彼の無様な姿を、彼女は許せなかった。

「簡潔にでも構わないから、俺たちにも教えてもらえないか？」

「…そうね。話すわ」

アスカから手を放したマイは、説明した。謎の異星人の化けたにせダイナに、真はダイナとなって迎え撃った。その場にマイも居合わせ、見守っていたが、彼は敗北。悪辣な言葉言い捨てられ、彼は戦意を喪失し、彼に成り代わってにせのダイナが怪獣と戦うようになった。だがその戦いぶりは人類のためではなく、ただ暴れたがってるだけなため、防衛軍も頭を悩ませていた。

「お前に何がわかる…ウルトラマンでもない単なる非力な人間のお前に…」

「人間だからどうした?」

シュウヘイは鋭い視線を真に向けた。

「誰にでも敗北は付きまとうものだ。だが大切なのはその先に見出だすもの。今のお前はそれすら見いだそうともせず、ただ『負けた』という事実に囚われた囚人。お前の仲間であるそいつ（マイ）も幾多の試練や敗北からスーパーGUTSというクラスにまでのし上がれた。かつてのお前もそうだったからスーパーGUTSになれた。違うか?」

「……るせえんだよ」

しばらくの沈黙を経て真は口を開いた。

「説教垂れるなよ!見ず知らずの野郎が!」

それから彼は立ち上がり、言い訳ばかりで事実から目を背ける子供のように走り去った。

夜風の吹く中、結局他に行き場のない真は塔のようにそびえ立つ総合本部基地の外にある草腹の木陰に座り込んでいた。

「あら？」

偶然にもテファが彼の前にやって来た。そのまま彼女は真の隣に座り込む。

「シュウはあん風にキツくいう人だけど、本当は凄く優しいんだよ」

「…」

真は無言のままだった。ただ石像のように固まり俯いている。これじゃあ、話が進まない。テファはあることを話してみた。

「彼もウルトラマン」

「え？」

「でも、それ以前に辛い過去を引きずってる。それが彼にとっての敗北、ってことかな」

それから彼の過去を知る限り話した。勝ち組からみれば、彼の人生は確かに敗北だらけだったかもしれない。

「ウルトラマンになってからも彼はその過去を忘れないように、一

人でずっと抱えてきた。でも、そろそろ限界だから私が支えてあげたいの。だからあなたも、信じてる人に支えてもらって、負けた過去と向き合って。シュウも信じる人が故郷にいたから、立ち上がれたんだよ」

テファはそろそろ帰るね、と言い残し、基地にいるシュウヘイの元へ戻っていった。

「…信じる、人」

リーフラッシャーを見つめ、真は一人ポツリと呟いた。リーフラッシャーを上着の内ポケットにしまい込んだところで、ヒビキから通信が入った。

『真、怪獣とダイナが現れた。相変わらず奴は周りの配慮を考えずに戦ってやがるから街中パニック状態だ。すぐ基地に帰還して現場に急行するぞ』

「ラジャー！」

市街地にて現れた『破壊獣モンスアーガー』をにせダイナが迎え撃っていた。

だが、その戦い方はあまりにも乱雑かつ乱暴、まわりの市街地がど

うなろうが構わず、光線を乱射している。これでは怪獣よりもにせダイナの方が厄介だ。いくらダイナでも、たとえ本物でも偽物でも街に危害を加えている以上何とかしなければならない。

「マジでやりたい放題しやがって…攻撃！」

「「了解！」」

現在、スーパーＧＵＴＳ用戦闘機『ガッツイーグル』に搭乗しているのはヒビキ、マイ、シュウヘイ、テファの四人。ヒビキの号令でガッツイーグルより光線砲『トルネードサンダー』が発射され、にせダイナとモンスアーガーに直撃した。

「ダアッ！？」

にせダイナには肩に掠れ、かすり傷程度だったがモンスアーガーにはモロに直撃、モンスアーガーは大爆発を起こして消え去った。

「ヌウウ…ダアッ！」

〈ビームスライサー！〉

にせダイナは邪魔をされて逆上したのか、ガッツイーグルに向けて光弾を乱打した。

「く！」

今のではっきりした。あのダイナは人類の敵となった。ガッツイーグルはかろうじて一発回避するが、それからもにせダイナは光弾を乱射する。このままだと、いずれガッツイーグルは落とされてしま

う。

地上からの攻撃を任されていた真は、自分の偽者を睨み、意を決した。

「俺は、諦めの悪い奴だったてことを思い出せた。それを気づかせてくれた奴を消すってんなら…！」

彼はリーフラッシャーを掲げ、ウルトラマンダイナ・フラッシュタイプに変身し、にせダイナの前に姿を現した。

「ダアッ！」

「…来たか」

ガッツイーグルからダイナの姿を見たシュウヘイは静かに呟いた。

「またか…負け犬のくせに懲りないやつだ」

うんざりしたようににせダイナは言う。

「俺はもう、てめえみたいにただ戦いを楽しんで、力を自慢するだけの奴には負けねえ！いや、負けらんねえ！」

「…別の強大な光の力を感じて、そいつをおびき出すつもりだったってのに…」

強大な光の力、それを聞いたアスカはテファの口から聞いたことを思い出した。

『彼はウルトラマンなのよ』

確か、シュウヘイとかいったか…あいつの力を感じ取ってまた出てきたってわけか。

「まあいい。はずれで我慢してやるか」

「なめんじゃねえ！デア！」

〈ソルジェット光線！〉

ダイナはにせダイナに向けて必殺光線を放った。同時ににせダイナも構えも形も全く同じソルジェット光線を放ち、ダイナの光線とのつばぜり合いが始まった。

しばしのつばぜり合いが続いたが、だんだんダイナの光線がにせダイナのものに押されていき、最終的にダイナは光線をかき消され、大きく吹っ飛んでしまった。

「ウアアアア！」

「へへ…」

あざ笑うにせダイナ。全然余裕の様子だ。にせダイナは高く飛び上がり、ダイナの肩を踏み台替わりに彼の背後に飛び移った。

それからダイナとにせダイナのガチンコバトルが続いた。回し蹴りを避け、にせダイナの連続パンチを受け止めていくが、にせダイナは、すべての世界のにせウルトラマンの中で、本物すらも圧倒した数少ない強敵。戦う動機が何であれ、実力は本物だった。

「シェア！」

「グァ！」

背中を合わせ、ダイナがにせダイナの顔面に拳を打ち込もうとしたが、にせダイナは隙だらけとなったダイナの脇腹を狙ってパンチを放ち、再びラッシュパンチを繰り出す。お返しに拳をぶつけてくるダイナの腕をつかみ、空中に投げつけると、自分も飛び上がってダイナにキックを連発、ダイナは地上に落ちてしまった。

「真！」

マイが心配になって叫ぶと同時にダイナはよろよろと立ち上がったが、彼のカラータイマーは既に点滅、限界が近づいていることを知らせていた。

ピコン、ピコン…

「シュウ、助けてあげないと！」

テファは慌てた口調で言うが、シュウヘイはそれを否定するように首を横に振った。

「これはあいつが自信を取り戻すための戦いだ。俺が立ち入っていい場所じゃない」

「でも…」

しかし、一対一の不可侵領域のバトルステージに、空気も読もうともせず、土足で踏み込んできた侵入者が現れた。

白く発光する謎の球体が、たった今倒れている本物のダイナに突然

何の前触れもなく光弾を発射した。

「隊長、スフィアが現れました！」

「何い！？」

『宇宙球体スフィア』。真と同様現実でダイナに変身できるあのアスカも苦しめた強敵だ。

「ウワアアアアア！！」

スフィアの放つ光弾はダイナに雨のように降り注いだ。

「誰だ！人のタイマンに踏み込んできた馬鹿は！」

にせダイナは怒りを露わにした。意外にも彼は、フェアな戦いを好む性格だったのだ。だから、スフィアがどんなに強かったとしてもいきなり余計な助太刀などされたら嫌で仕方ないのだ。それを証明するようににせダイナはスフィアに光弾を撃ち込んだ。だがスフィアの数が多すぎて、ほとんど減る兆しが見られない。

しかもスフィアはにせダイナにも光弾を放ってきた。

「ヌワ！」

スフィアの介入で三つ巴となってしまった。これでは事態が余計に混乱してしまう。スフィアはにせダイナとの戦闘でダイナが弱ったところを狙ってきたのだ。

（何者かは知らんが、気に入らないな）「テファ、ここでじっとしてろ」

そう言われた彼女はその意味を理解し、深く頷いた。再び前に向き直る彼はエボルトラスターを取り出して引き抜き、紅の光に包まれ外へ飛び出した。

〈パーティクルフェザー！〉

「ディア！」

いくつかのスフィアは、突如放たれた三日月状の光弾によって消された。現れた紅の光は、やがてウルトラマンネクサス・アンファンスとなってスフィアの前に立ちふさがる。
それから彼はジュネッストリニティにチェンジし、光の剣から放つ風の刃でスフィアたちを攻撃した。

〈覇風撃！〉

「シャ！」

「へ、空気読めてんなあのウルトラマン…」

ヒビキはネクサスの戦う姿を見て笑っていた。
さて、これで邪魔者は立ち入らない。気を取り直し、にせダイナはダイナの方を見て再び身構えた。しかし、対するダイナはいまだダウン状態。何とか立ち上がろうとはしていたが、まだ立てなかった。

「もう終わりか？やっぱりお前では満足できないか」

「…めんな」

「あ？」

ダイナの脳裏に、自分の信じる人、マイやヒビキの顔が浮かび上がった。負けられないんだ。彼らのためにも。

「俺をなめんじゃねえええええええ！！！！」

ダイナはその怒声とともに立ち上がり、両腕をクロス、ストロングタイプにチェンジした。

それは、ダイナの快進撃の始まりでもあった。

「デア！」

止めを刺そうと迫りくるにせダイナだが、ダイナはその拳を受け流し、彼の腹に強化した拳をぶつけた。そして左手で天秤のようににせダイナを持ちあげ、思い切り投げとばした。

それからのにせダイナの攻撃は先ほどまでとは大きく異なり、全くヒットしなくなり、逆に本物のダイナの攻撃が直撃していった。

「俺が、負け犬ごときに…アアアアアアア！！」

「デュアアアアア！！！！！！」

ドゴッ！！！

強烈なクロスカウンターと同時に、凄まじい激突の音が響いた。辺りは静寂に包まれ、ダイナのカラータイマーの点滅音だけが耳に届いた。

息を飲みながら、街の人たちやヒビキ、マイ、テファは一体どっち

の攻撃が通ったのか凝視する。
にせダイナの攻撃は通ってなかった。対するダイナの攻撃は…
「ぐお…あ…」
見事に通っていた。にせダイナはダウンし、ダイナのパンチでひび割れた顔が崩れ落ちた。その素顔はどこか悪人のようで、黒いマントを羽織っていた。
『宇宙格闘士グレゴール人』。
「あれがにせダイナの正体ね」
「覆面脱いでギブアップしやがったな」
マイとヒビキが順に口を開いた。
ダイナはグレゴール人にゆっくり近づいていく。
「負け犬も、支えられて強くなるもんだ」
「それが、お前の力の根源か…」
グレゴール人は自分をマントで覆い隠すと、一瞬にして姿を消した。
ダイナは空を見上げ、スフィアをすでに追い払ったネクサスを見た。
彼の頷きに、ダイナは感謝の意を込めたサムズアップをした。

「これ、お礼ね」

シュウヘイとテファは真とマイから、一枚のカードを手渡された。
マイの役割を任されたルイズの姿が描かれている。

「俺、あんたらのおかげで目が覚めたよ。ありがとうな」

「ふ…これからはそう安々と諦めないことだ。それと、こんなところで時間を食っていいのか？」

「「え？」」

二人がなんだろうと首を傾げてると、真のウィットから通信が入った。真はそれを起動させた瞬間、鼓膜が破れそうな怒声が彼の耳を貫いた。

『真！マイ！どこで道草食ってんだ！？とっとと戻らねえと…』

「す、すいませんすぐ戻ります！」

二人はシュウヘイたちに手を振り、そのまま走り去って行った。

「ここも、大丈夫そうだね」

「ああ。さて、次は…」

シュウヘイはポケットから取り出した次の世界へ導くカードを見た。
大地と海を象徴とした赤と青の巨人のカード。一体どんな世界と戦いが待ち受けているのか…

9　ゼアス／未熟者が熟す時

「えっと、ここって…」

新しいそう世界に来たサイトとクリスは辺りを見渡して辺りを見渡す。そして今自分たちの着ている服装…

「ガソリンスタンド！？」

「がそりん？」

外から匂うこのガソリンの臭いと、窓の外に見える自動車の列。そして縦じまの赤いラインの制服。どう見てもガソリンスタンドだった。

「がそりんとはなんだ？」

ガソリンの存在自体知らないクリスは首を傾げるしかなかった。

「おいおい！お前そんなことも知らないでこのＭｙｄｏ（マイド）で働いてるのか？」

そこで口を挟んできた男がいた。Ｍｙｄｏ隊長の大河内神平。ちょっと抜けてはいるがカリスマ性のある男である。

しばらく大河内の唾が飛ぶほどの力説をクリスは無理やりながらも聞かされた。

「ったく、俺たちは表向きはガソリンスタンドのスタッフなんだ。

紛争のない今の時代に武装集団が顔を出してると物騒だからな。わかったか、アホ」

なんかムッとしなくなるセリフを言った大河内はそのまま隊長専用のデスクに座り込んだ。

「無礼な隊長だ…」

小声でクリスは苛立ったように呟いた。ガソリンとは無縁の世界で生きてたから仕方ないじゃないか。

「ん？」

サイトは空いてる席に、一枚の身分証が置いてあるのを見つけた。それを手にとって見てみると、ある若者の顔写真と名前が記載されていた。

『Ｍｙｄｏ隊員　朝日勝人』

「勝人？」

「あ～勝人か？」

大河内は身分証を見るサイトの方を向いた。

「あいつかなりのダメ野郎でな、ゼアスが現れる時はいっつもどっかに身を隠すし、仕事もダメばっかやらかす奴だった。やる気だけは人一倍だったがな、ゼアスが自分の偽者に負けて以来、勝人も辞表出してどっかに消えちまったよ」

「ゼアス…」

光の国で聞いたことがある。確か、Ｚ９５星ピカリの国の出身のウルトラマンだが、宇宙警備隊の隊員の中でかなりの落ちこぼれだったウルトラ戦士だ。どうもこの世界、彼が主人公の世界のようだ。

すると、いきなりその部屋のモニターに映像が表示され、その映像にいかにも悪者そうな男の顔が映された。

『ごきげんようＭｙｄｏの諸君。私はベンゼン星人の悪神亜久馬だ』

だが、その悪者らしい名前の男だけではない。次に姿を現した人物の姿に、クリスは絶句した。

『私は影美。悪神亜久馬の妻よ』

なんと、ルイズだった。彼女がまさか、この世界での敵であることにショックを受けるしかなかった。

『これから私たちは地球人たちへの洗脳を開始する。この最強の兵器…ウルトラマンシャドーによってな』

悪神が親指で自分の背後を指差すと、カメラがその方角へ動き、そこに巨大な黒いウルトラマンが保管されていた。

『ロボット超人　ウルトラマンシャドー』。その姿形は色や目付きなどを除けばウルトラマンゼアスそっくりだ。

『私たちの下に着けば、辛いことを何にも味あわなくて済むわ。ありがたく思いなさい。じゃあね♪』

影美と名乗るルイズがそう言い終えた瞬間、映像はプツンと切れた。

「ふざけた奴だ。ゼアスが負けた隙を突く気か」

「あの、隊長…」

サイトが窓ガラスの外を指差した。なにやら真っ黒な黒い足がガソリンスタンドの前に立っている。

「まさか…」

三人は外に出て、その巨大な足の正体を確認した。
そのまさかだった。その足の持ち主は、先ほどモニターから見たウルトラマンシャドーだった。

「シャドー！」

シャドーがその赤い眼差しで三人を見下ろすと、目から怪しげな光線を放ってきた。

「危ない！」

サイトはクリスを抱き抱え、その光線を回避した。だが、大河内は真に受けてしまう。

「隊長！」

光線が放射し終えたところで大河内の無事を確認しようとしたが、彼は何の反応も示さない。

「大河内隊長？どうしたんですか？」

サイトとクリスの呼び掛けに大河内は無反応のままだ。まるで人形のようにその場に立ち尽くしている。

「まさか…今の光線で？」

そうとしか考えられない。実はウルトラマンシャドーが今放射した光線には、洗脳効果があったのだ。大河内は隊長の威厳を全く見せつけられないまま洗脳されてしまったのだ。大河内だけではない。ガソリンスタンドに客としてきた人間たちもまるで人形のようにその場に突っ立ったままだ。

シャドーは再び二人に向かって洗脳光線を放ってきた。

「相棒！ここは退け！一旦体制を建て直した方が良さそうだ」

デルフが鞘から顔（？）を出して言った。

「くそっ！」

「サイト、その悔しさは次に繋げるんだ」

苦虫を噛むように顔を歪ませるサイトを落ち着かせるようにクリスは言った。

二人はその難を逃れはしたが、街の人たちはみんなシャドーの洗脳光線でベンゼン星人たちの手駒にされてしまった。

「旦那、もうここまではあのデカブツも追ってこねえみたいですぜ」

地下水がそう言ったところで二人は足を止めた。気づけば、近くの裏山の木造の建物の前にいた。

「しかし、街の人たちを洗脳しただけでなく、もう一つマズイことがある」

クリスが焦るように言う。そうだ、あのルイズが今までは味方の立場の役割だったのと異なり、まさかこの世界では敵の役割で現れたこと。彼女をどうやって攻略するか悩みどころだ。

「ルイズをどうやったら…」

「ルイズ？ルイズってなんだよ？」

は…？クリスは思わず間抜けな声を漏らした。今何て言った？ルイズって何だと？

「何ってお前のマスターだろう？サイト。何せお前をハルケギニアに召喚したのは彼女だ」

「ボケたのかクリス？俺たちはリシュを助けに来たはずだ。ルイズ

なんて、会った記憶もないぞ」

「何を言ってるんだ!?だって私たちがこの世界に来たのはルイズの心を…」

「やっぱり変だぞクリス?そんなことより、勝人って奴を探そうぜ。あいつはこの世界での鍵だって確信してる」

サイトはクリスの話をまともに聞こうともせず、そのままどこかへ歩き出してしまった。

「変なのは、お前の方じゃないか。一体どうしたと言うのだ?」

彼も洗脳光線を受けたのか?いや、一度もシャドーのあの光線を受けてはいなかった。

いや、まてよ…自分がトリステインに来た『理由』を思い出すクリス。

(まさかあいつ…いや、まずはこの世界をクリアする必要があるな。それから話そう)

今はこの世界に集中することにしたクリスはサイトの後を着いていった。

しばらく山奥に進むと、何か爆発したような音が響いた。

「なんの音だこりゃあ?」

デルフが顔をあげる。音が聞こえたのは谷の方からだ。二人は急ぎ足で谷の方へ向かうと、そこにはシャドーそっくりの真っ赤な巨人

がいた。なにやら特訓している様子である。そう、彼がウルトラマンゼアスだ。汚れた地球をクリーンにするために派遣された戦士だ。だが、彼の宇宙警備隊での評価は低かった。サイトが先ほども言ったように…才能がないのだ。かつ自信もない弱虫。

〈スペシュッシュラ光線！〉

「ゼア！ってうわあっ！」

光線技がまともに撃てない。今発射した光線も空に放つつもりが岩に当たって自分に跳ね返ってきた。しかもさらに厄介なのは…

ズボ！

「ウワアアア！」

極度の潔癖性で綺麗好きなため、ちょっとの汚れも嫌う。たった今、跳ね返ってきた光線を避けたものの、それと引き換えに泥沼に自分の手を突っ込んでしまった。別に体に害があるわけでもないのに、もう見たくない！と言うように泥まみれの手から目をそらし、しかも自分の体に近づかせないようにピン！と腕を伸ばしながら滝の水で手を洗っている。
一流とは程遠い姿だ。

「あれが、ウルトラマンなのか？」

クリスはゼアスのあまりに情けない姿に、あっけにとられていた。

「うん。まあ…ね」

サイトも苦笑いしながら答えた。とりあえず彼が変身を解くまで待ってみることにした。

「やっと取れたあああ…」

人間体となったゼアス、朝日勝人は手にタオルを強く擦り付けていた。相当僅かな汚れが嫌いなのが伺える。
そんな勝人の元に、サイトとクリスが歩いてきた。

「お前、何してるんだ?」

「平賀…さん?」

シュウヘイたちがダイナの世界ですでにその世界の住人たちと知り合いだという設定の上で動いていたように、この世界でもサイトたちは勝人とは知り合いということになっていた。

「お前、大丈夫なのか?さっきみたいに汚れることなんか戦いじゃしょっちゅうあることだろ?」

「だって…僕汚れ大嫌いで、ちょっとでも汚れてると集中できないんです」

「そんなんで街の人たちを助けられるのかよ!お前、なんのために

特訓しているんだ!?」

「それは…新しい技の開発ですけど…」

なんだが自信無さげな口調だ。宇宙警備隊で働いてた彼と同じだ。全然自信が見受けられない。これではせっかくな特訓も無意味だ。

「そんなやる気なしじゃ勝てないぞ。それに、お前のその過ぎた綺麗好きな性格、ウルトラマンであるお前にとっちゃ荷物にもなってる」

「へへ。おい相棒、いつになく上から目線だな」

「黙ってろ」

デルフはサイトの様子にからかいじみた笑い声を上げた。そんな彼を押さえつけるように、サイトはデルフを鞘に無理やり押し込む。

「はあ…強引だけどしかたない。俺がコーチ代わりに付き合ってやる」

「え?」

数十分後…

「旦那ぁ、何をさせるきでやんすか？」

「サイト、なんでわざわざこんな汚い泥の池を作らせたんだ？しかも真ん中の気に、玉が吊るされてる」

クリスの水魔法やサイトが地下水を使った魔法で、真ん中に木を生やした泥の池が完成した。木にはクリスの言う通り、ボールが吊るされている。その高さは二メートル以上。

首を傾げる地下水やクリス、そして特訓される側の勝人に、サイトは特訓の内容とあの泥沼の池の説明をした。

「勝人、あの池の真ん中に吊るされてるボールを百回蹴ってこい。もちろん高く吊るされてるからジャンプして蹴るんだ」

「ええ!?嫌ですよ!あんな泥沼の真ん中まで歩くなんて…」

僅かな汚れを嫌う勝人には、あまりにも苦痛な特訓だった。

「お前、さっきまで新しい必殺技の開発とか言ってたけど、せっかくの技もお前がそのお荷物な潔癖性をなんとかしないとなんの意味もないぞ。技の発動中に体が汚されたりしたらどうするんだ？」

「うっ…」

確かに、一撃必殺の技を勝人が手にしても、発動するところで体をちょっとでも汚したら、また滝の水で手洗い、その隙に攻撃されるなんてこともありうる。

「言っとくけど逃げたら無理やり放り投げるからな」

「はい…」

サイトの脅しにしぶしぶ勝人は泥の池に足を踏み入れた。ズブズブと足が泥の中に沈んでいく。

「あああああ！」

もう嫌だ、汚れたくないと本能が吠え、勝人を岸に上げようとするが、サイトはデルフを向けてそれを許さない。

「うぅ…」

もうこうなったらヤケだ。勝人は全力で走りだし、木に吊るされたボールをジャンプして蹴ろうとした。だが、足場がぬかるんでいる。ジャンプする前に足を滑らせ、泥の中へドボンと落ちた。

「うわっ！あああ！」

思わず悲鳴をあげる勝人だったが、次こそはと走りだし、木のボールをジャンプで蹴ろうとする。だが足場が悪いものだから高く飛べず、また泥の中へドボン。

一回も蹴れないまま一時間過ぎていった。

もう勝人の精神は限界だった。やっぱり無理だ。自分のような落ちこぼれの戦士じゃこの星を守れない。岸に上がろうとしたが、サイトはそれを阻んだ。

「まだ百回蹴ってないぞ」

「無理ですよ…無理ですよ！」

勝人はサイトを睨んで泣き叫んだ。もういやだった。こんな泥まみれになっても何も成果が出ない。さっさと風呂に入りたくてしかたない。

「僕なんかじゃ…やっぱり…」

「最初はそうやってできないことを可能にしていくんだ。さあ勝人、早く」

「平賀さんはいいですよね」

勝人は遂にサイトへの苛立ちを口にした。

「そうやって岸からただ僕を見て、笑ってるんでしょ…何も出来ない僕を導いてくれるんじゃなくて、情けない姿を晒してる僕を見下して楽しんで…
やっぱり僕にはできな…」

「バカ野郎！！！！！！！！！」

バキッ！バシャン！
勝人の弱気な人間空見ても気弱すぎる発言にいい加減苛立ったサイトは勝人を殴り飛ばし、泥の池へ突っ込ませた。そして自分も泥の池へ足を踏み入れ、勝人の胸ぐらをつかむ。

「この世界で頼られてるのは、今やお前だけなんだ！」

「僕にはできない…」

「じゃあ、お前以外に一体誰がやるんだ!?」

「それは…」

もう勝人の目は涙で溢れ、顔はくしゃくしゃだ。もう嫌だと語る子供の顔だ。

「なんだよその顔は、その目は…その涙はなんだ!?お前の涙で…この世界を守れるのか?」

「…」

突き放すようにサイトは勝人を放して岸に上がった。クリスはもはやなんと声をかければいいかわからなかった。あの温厚なサイトがあそこまで鬼になれることが、あまりにも衝撃的だった。師と弟子は似るとはよく言ったものだ。

「……でぇぃやあああああああ!!!!」

勝人は涙を拭き、今度はやる気のある雄叫びをあげながら特訓に集中した。

何回も失敗して一時間…

「ラアアアア!」

勝人は遂に、かかと落としのポーズのまま空中回転で加速しながら

ボールに近づき、それを蹴るという荒業でボールを初めて蹴った。

「…よし！」

それからは驚くべきものだった。なんかいも連続で失敗したのに、今回は連続で成功している。そして、遂に百回目の蹴りがヒットした。

「やった！やりました平賀さん！」

すでに彼は泥まみれだった。しかし、さっきまでの彼とは違い、なんともないように岸に上がってきた。

「すごいぞ勝人、文句なしの合格だ」

「はい！」

すると、空から巨大な影が三人の真上にのし掛かってきた。

『ようやく見つけたぞウルトラマンゼアス』

ベンゼン星人たちの操縦するウルトラマンシャドーがわざわざ彼らの前に出向いてきたのだ。シャドーに搭載された無線通信でベンゼン星人、悪神の声が響く。

『お前たちも洗脳し、この地球をいただく』

そう言い終え、悪神はシャドーから降り巨大化、『慢性ガス過多症宇宙人・ベンゼン星人』としての姿を現した。

「クリスは離れてろ」

「わかった。気を付けろよ…」

「二対二か。勝人」

「はい」

クリスがその場から離れたところで互いに頷き合う二人。サイトはウルトラゼロアイを装着し、勝人は歯ブラシ型変身アイテム『ピカリフラッシャー』で軽く歯を磨き、それを天に掲げ、ウルトラマンゼロとウルトラマンゼアスへ変身した。

「デュア！」

「ゼア！」

「ふふ…影美、我々夫婦の野望を果たすとき」

『任せて。このシャドーは無敵のロボットだから』

自信ありげなベンゼン星人夫婦。自信たっぷりなのは現実のルイズと同じのようだ。

「あの星人は俺に任せろ」

「ハイ！僕は…」

ゼアスはシャドーの方を向いた。感情のないあの不気味な眼差しは、一度敗北したときと変わらない。でも、そう何度も負けるわけにもいかない。

「ヂュア！」

ベンゼン星人はゼロの方へ走り出し、彼の腹を膝で蹴りつけた。地面に押し倒したところを追撃しようとしたが、ゼロは立ち上がろうとしたところで後ろ向きの状態でベンゼン星人を蹴り飛ばす。

立ち上がり、ベンゼン星人に飛びかかり、横腹を蹴りつける。さらに彼の脳天に向けてハイキック。続いて飛び上がってチョップ。

「デュワ！」

「グホッ…おのれ…！」

少し距離を置くつもりで後ろに後退すると、ベンゼン星人は怒り狂って、頭からエネルギー弾を連発した。

「くっ！」

一方、ゼアスはシャドーと交戦していた。何度かシャドーの脇腹を蹴りつけるが、びくともしない。逆にひじ打ちで反撃され、同時にベンゼン星人に攻撃されたゼロと背中合わせとなる。気づけば、二人はシャドーとベンゼン星人に挟まれていた。

「影美、シャドリウム光線だ！」

『ええ』

ベンゼン星人の指示通り、影美はシャドーのコントロールスイッチでシャドーを操作、シャドーは必殺光線の構えをとり、ベンゼン星

人も力を込めた光線を放とうと、稲妻のようなオーラを纏う。
だが、ゼロはこれを好機ととらえていた。

「勝人。落ち着いて対処するんだ」

「はい」

〈シャドリウム光線！〉

「デア！」

「ムン！」

シャドーとベンゼン星人の光線が同時発射された。これを喰らえば、ひとたまりもない。これで自分たちの勝利を確信していた。しかし、それはベンゼン星人夫婦の詰めの甘さを表すこととなった。

「「デア！」」

二人のウルトラマンは光線の発射と同時に空高く飛び上がった。ベンゼン星人とシャドーは光線を中断できず、互いに光線をぶつけ、大ダメージを受けてしまう。逆に自分たちの攻撃を利用されてしまったのだ。

ゼロはベンゼン星人の、ゼアスはシャドーの頭上からはるか高い場所まで浮いた。その時の彼の脳裏には、サイトから受けた特訓を必死にこなす自分、朝日勝人の姿。泥沼の真ん中の木に吊るされたボールを、高くジャンプしながらかかとで蹴る。そのイメージは、彼に新たな技をもたらした。大回転しながらかかとを相手の頭にぶつける技。

〈ウルトラゼロキック！〉〈ウルトラかかと落とし！〉

「「デア！」」

ゼロとゼアスの必殺のキックが、ベンゼン星人とシャドーの頭にクリーンヒットした。シャドーは倒れこみ、カラータイマーを点滅させながら停止した。ベンゼン星人に至っては頭への強すぎるショックで気絶していた。

「コントロールが効かない！」

シャドーの操縦室内で、影美は必死にシャドーの操縦装置のキーやレバーをガチャガチャと動かすが、肝心のシャドーは再起動の兆しを見せなかった。

その隙に、ゼロとゼアスはシャドーに向けて止めの必殺光線を放った。

〈エメリウムスラッシュ！〉〈スペシュッシュラ光線！〉

「「ジュワ！」」

光線は一つになり、シャドーのカラータイマーを貫通、しシャドーは大爆発を起こし、鉄くずの山と化した。

「おのれ…ウルトラマンめ…」

よろよろとゼロに敗れたベンゼン星人は、いつの間にかシャドーから脱出した影美をその手の中に抱えながら立ち上がった。

すると、彼はゼロに向けて小さな光弾を放つと、それはカードとなってゼロの手の中に納まった。

「今回はそれを手打ち料に退いてやる。だが次こそは、この地球を我々のものにさせてもらうぞ。さらばだ！」

ベンゼン星人は捨て台詞とともに、宇宙へと飛び去って行った。

「勝人」

ゼロはゼアスの方に向き直った。

「やったな」

「はい！平賀さんのおかげです！」

「俺たちはすぐにここを離れないといけない。でも…俺がいなくても大丈夫だよな？」

「もちろんです！」

二人がその時に交わした握手は、岩よりもはるかに硬かった。

ゼアスの仮想世界からむけ、真っ白な部屋にたどり着いた二人。影美の役となったルイズのカードを見つめ、サイトは首を傾げていた。

（誰だ？こんなのに会ったか？）

クリスは床に落ちていた新たなカードを拾い上げる。そのカードには初代ウルトラマンとウルトラセブンに似た二人の戦士が描かれている。

「サイト、少しいいか？」

「ん、どうしたんだ？」

「私がどうしてこのトリステインに来たか、まだ話してなかったな」

「トリステインに来た理由？」

なんだろうとサイトはクリスの話に耳を傾けた。

はるか昔、ハルケギニアには『サキュバス』と呼ばれる種族がいた。彼らの使う先住魔法はエルフや翼人よりも効果が厄介で、相手を夢の世界へ誘う力がある。その夢の中に閉じ込めながらその者の生気を吸い取って生きていた。その力を戦争で利用した国は、敵の国を一夜にして滅ぼしたこともあるらしい。彼女の祖先はその力が世界にあまりにも危険と感じ、サキュバスたちを特殊な封印魔法で封じ込めていった。だが、トリステインのエリアに封印したサキュバスの封印が何者かによって解かれ、その真相を確かめる目的でクリスは王女の身でありながらわざわざこの国にやってきたのだ。

「そんなやばい種族がいるのか…でもそれが今とどう関係があるんだよ？」

「サイト、ルイズのことは覚えているか？」

「…さっきも思ったけど、ルイズって誰だ？」

やっぱりそうだ。この城でいくつかの仮想世界が自分たちの試練として現れた。その世界を進むうち、ウルトラマンであるサイトにサキュバスの力が及んでいるとしたら、ルイズをさらってこの城におびき寄せた理由がわかってくる。

それと、サイトが幼馴染と語るリシュ。普通幼いころとはいえ、ここまでしてたすけに行くほどの仲なら両親からたまに行う会話で名前くらいは思い出したりするはずだ。だがサイトは今まで覚えてもなかった。

「サイト、これは予想だが、お前にはすでにサキュバスの力が及んでいる」

「え？」

「それと…」

「それと、なんだよ？」

「私はそのリシュがサキュバスではないかと…」

それを聞いたサイトは、沈黙した。リシュが人間じゃない？サキュバスで、自分に何かしていると言うのか？

「何言ってんだよ！俺がもうおかしいって言うのかよ！」

「だってお前、もともとルイズを助けに…」

そうだ。心切り分けられたルイズを助けにきたじゃないか。アンリエッタたちも今頃抜け殻となったルイズの体を奪われないように見張っているはず。

「じゃあそのルイズってやつのためにリシュを見捨てろってのか！納得できるか！」

「サイト、だから話を…」

何とかわからせようと必死に訴えるクリスだが、サイトは聞く耳を持たなかった。まだ会ってもないリシュ以外何も考えようとしていない。

「わかったよ、そんなにおかしいってんならここでじっとしてるがいいさ！」

「お、おい！待てサイト！」

サイトは乱暴にクリスからカードを奪うと、そのカードで先にある扉を開け、一人でその世界へ飛び込んで行ってしまった。

「計画通りね。もう彼にリシュ以外のことは考えられない」

巨大の水晶に映るサイトの必死の姿に、ウェザリーは不敵な笑みを浮かべていた。後ろでも、椅子に座りこんでいたリシュはつらそうな表情でそれを見ていた。

「さて、私はちょっと休むからそこでじっとしてなさい。出たくても出られないのは知ってるわよね？」

「はい…」

ウェザリーは休養のため、その部屋から出て行った。今、その部屋にいるのはリシュだけ。しかし、逃げられないように扉に鍵をかけられた。

（サイト、あなたに会っても私、どうしたら…）

その時、申し訳なさそう一人涙するリシュの姿を見た者は誰もいなかった。

１０　ガイア／大地と海の絆

「これは…」

窓の外に広がる景色を眺めるシュウヘイとテファは素直にすごいと感じていた。

防衛組織　ＸＩＧ（シグ）の巨大基地、『エリアルベース』。その名の通りその要塞は空の上に浮かんでいたのだ。

「これほど巨大な機械の要塞を空に常時浮かせるとは…」

「シュウの故郷でも、なかったの？」

「ああ、さすがにこれほどの要塞はなかった」

「凄いでしょ？このエリアルベース」

二人の後ろから、少し髪の長い若い青年が話しかけてきた。

「このエリアルベースを空に浮かせるシステムを作ったのは僕なんだ」

「あんたが？」

シュウヘイは耳を疑った。その青年は、推定でも年齢はシュウヘイと一つ上くらいにしか見えない。いくら自分と同じプロメテの子として誕生した憐もキャラに関してはアホっぽいがＩＱに関しては決してバカではない。そうでもないのにこの青年はこれほど優れたシステムを開発したのだ。

「君が新しく配属された黒崎君だね？僕は高山我夢（がむ）」

「我夢、か。変わった名前だな」

「自分でも思ってるよ」

我夢は笑いながら握手を促すように手を伸ばし、シュウヘイもそれに応えその手を握り返した。

実はこの我夢、地球から光を授かり、大地の赤い巨人『ウルトラマンガイア』となった。それが、彼がＸＩＧに入隊するきっかけとなったのである。

「君は見習いオペレーターのティファニアさんだね。気を付けなよ、君の先輩になる敦子は怒ると怖いから」

「はっ、はい…」

テファの耳元で警告する我夢。純粋かつ天然な彼女はなんでも信じやすいから彼の言葉をすんなり信じてしまう。

「がああああむううう…？」

後ろから何やらドス黒いオーラが忍び寄ってきた。声は女の子らしく可憐だが、その奥はとてつもなく怖いものだった。我夢は冷や汗をかきながら恐る恐る振り向くと、そこにはＸＩＧの隊員服を着たルイズが鞭を持ってそこに立っていた。さっきの我夢の発言にキレているようだから、この世界では『敦子』の役回りらしい。

（まさか…）

この後の展開を予想したシュウヘイはテファを連れてその場から離れた。

「ってあ！黒崎君待って！」

助けを求める我夢だったが、シュウヘイの耳に届くことはなかった。代わりに…

「我夢のバカあああああああああ！！！！」

「いいい痛い痛い！敦子痛いって！あああああああああ！！」

敦子の『乙女の怒り』が炸裂。その我夢の悲鳴を聞いたベース中の人たちは、聞こえないフリをしていたことは言うまでもない。

「俺の光は、もうないか…」

遥か彼方まで広がる海の見える港に、一人の白髪が少し目立つ青年がいた。

『藤宮博也』。彼はかつて地球の海より光を授けられ、『ウルトラマンアグル』への変身能力を得た。だが彼は遥か昔に発見されたある記録から、地球を守るためには人類は滅ぶべきと考え、人類を守

ることを第一とする我夢と対立したことがある。かつてサイトとシュウヘイが争ったように。だがその記録は自分や我夢と対立する存在『根源的破滅招来体』の計らいによるものと知り、自分が地球を乱していたこと、そして自分に守るもののないことを自覚して、彼は我夢にアグルの光を渡して姿を消してしまう。
現在はただ無駄に時を過ごす毎日である。

「稲森博士…俺はどうすればいい？俺は結局地球のために何もできやしなかった。どうすればいい？」

稲森京子博士。藤宮が唯一尊敬する生物研究者。かつて怪獣を制御するシステムを開発しようとしたが失敗、逆に怪獣に殺害されてしまった人物である。

『私を呼んだの？藤宮君』

「！」

藤宮はその声にハッ！と顔をあげる。今の声は9時の方角からだ。
その方を見ると、白衣を着た女性が藤宮を見ている。

「稲森博士…？」

「一週間前より、東京湾上空に謎の振動波を確認した」

エリアルベース作戦室にて、石室司令官（コマンダー）は各隊員にある怪奇現象について報告した。

「ここしばらくこのエリアルベース真下の都市地域上空でも似たような現象が起こっている。もしかしたら根源的破滅招来体の可能性がある。諸君らにはこの怪奇現象の解明をしてもらいたい」

この作戦で最初に任務にでることに、シュウヘイと我夢の二人が選ばれた。

シュウヘイはＸＩＧの複数の作戦チームの一つ『ライトニング』の戦闘機『ＸＩＧファイターＳＧ（スカイゲイナー）』で出撃、我夢も『ＸＩＧファイターＥＸ（エキサイター）』で出共に撃した。

「あのさ…」

我夢が通信機を通してシュウヘイに話しかけてきた。

「君となんか雰囲気の似た人がいたんだ」

「俺に似た？」

「うん」

そこから我夢は藤宮との出会いから今までの経緯を簡潔に説明した。

「予想だけど、やっぱり君も？」

そこで我夢の言葉は途切れていたが、だいたい言いたいことをシュウヘイは理解した。

「…まあ、地球から授かった光じゃないが。だが、何が言いたいんだ？」

「藤宮は最初人類を敵だと思ってた。でも君は、藤宮みたいに後悔してほしくない。それをわかってほしいんだ」

「俺には、信じてる奴がいる。だから、そいつが信じる連中を俺は信じる」

今自分を信頼してくれるテファやサイト、そして自分の元の世界にいる仲間の期待に応えるため、自分は戦わなくてはならない。そう考えていた。

「それを聞きたかった。ありがとう」

我夢がそう礼を言った時だった。ブーッ！ブーッ！と二人の機体からブザーが鳴り出した。

「これは…！」

モニター上の地図を見ると、二人から十時の方角に何かの反応がある。

そしてさらに、エリアルベースからも通信が入った。

『えっと…こちらティファニア！これでいいのかな？』

初のオペレーターの仕事に慌て気味のテファがシュウヘイに通信を入れてきた。

「どうした、テファ？」

『あんたたちがいる場所から反対側にもエネルギー反応があるわよ！』

続いて敦子が怒鳴るように口を挟んだ。確かに、真逆の方角にも何かの反応を示す赤い点がモニター上の地図に打たれている。

「高山、この先の方は俺が行ってみる。あんたは反対側を」

「よし、気を付けてくれよ」

シュウヘイはこのままま っすぐ、我夢は機体を反対側にUターンさせ、エネルギー反応の出た各ポイントに向かった。

シュウヘイの向かうポイント、そこには真っ黒に染まっている雲なのか、穴なのかわからない巨大な何かが空に浮かんでいる。

（突っ込んでみるか）

シュウヘイはファイターをその先の黒い穴に突っ込ませた。

何事もなくその中に侵入できた。しかし、辺りは静まり返ってエンジンの音以外何も聞こえやしない。その中には真っ暗闇の静寂な闇に包まれている。一見何も見当たらないように見えるが、シュウヘイの持つエボルトラスターのランプが、心臓の高鳴りのような音を出しながら点滅している。何かがこの闇の中に潜んでいるのだ。

ファイターを着陸させ、地上に降りてみた。

彼もまた、勘のみで何かを感じ取っていた。この辺りに何か邪悪な気を感じる。

この胸騒ぎは一体…

一方、我夢は空き家となったばかりのある施設にいた。この場所から先ほど探知されたエネルギー反応があったのだ。

施設の内部は薄暗く、静まり返っている。でも破滅招来体に似た気を彼は感じている。

すると、とある部屋から何か音が聞こえる。誰もが聞き慣れたこの音。

「ピアノ？」

扉を開けて中に入ると、そこに二人の男女がいる。一人はピアノを弾く女性と…

「藤宮！」

アグルだった男、藤宮博也だった。見ない間に髪が一部真っ白になっている。

「また来たわよ、藤宮君。宇宙の害虫の味方をする邪魔者が」

女性、稲森博士は恨みや憎しみを込めたような口調で藤宮に言った。

「あなたは地球人が根源的破滅招来体と呼ぶ存在の思惑通りに動いてくれた唯一の戦士。今はそれを後悔して自分の光をそこの愚か者にくれてやったみたいだけど、それは賢明ではないわ。あなたは何一つ悔やむことなんかないんだもの。むしろ誇りに思うべきだった。人類ほど愚かで身勝手な害虫はいない。だから藤宮君」

稲森博士は藤宮がアグルへの変身に使っていたアイテム、『アグレイター』を手のひらに乗せた。今そのクリスタルの中に光はない。だが、稲森博士の手が発光した瞬間、光を失ったそのクリスタルに光が灯った。

「さあ、藤宮君。愚かな人類のせいで死んでいった怪獣たちに代わって復讐するのよ。そうすればこの地球は救われる」

この世界での怪獣はコスモスの世界とはまるで扱いが違い、淘汰されるべき存在との意識が強かった。だから人類こそ滅ぶべきと考える者も他にいたかもしれない。

だが、目の前にいる我夢は人類と怪獣との共存を望んでいる。この意見の相違が藤宮とたびたび衝突する元にもなった。

「まず手始めに…」

稲森は藤宮に一丁の拳銃をアグレイターと共に手渡した。

「あの男を撃ちなさい。人類の味方である彼は私たちの最大の障害なのよ」

「…」

藤宮はアグレイターを右手に装着し、拳銃を我夢に向けた。

「藤宮！本気か！？」

「さあ、藤宮君。この地球を想うなら撃ちなさい。そしてこの地球の絶対的な守護者となるのよ」

「っ…」

藤宮の手は震えている。やはり躊躇いがあるようだ。人を殺せなんて、人類は滅ぶべきと考えている頃から躊躇っていたことだ。だって大事に思っていた稲森も人間ではないか。

「止せよ藤宮…人類は滅ぶべき存在なんかじゃ…」

「そんな戯れ言は聞き飽きたわ。さあ藤宮君」

稲森は我夢の言葉を遮って早く撃てと藤宮に催促する。それでも藤

宮はまだ撃たないままだった。

「藤宮、その人の言葉を信じたらダメだ！」

「何を迷ってるの？早く撃ちなさい！」

しばらくその繰り返しが進む中、我夢の通信機『ＸＩＧ－ＮＡＶＩ』から音が鳴り出した。我夢はすぐそれを起動する。連絡を入れてきたのは、テファだった。

『通信を通して聞いてました』

「ごめんティファニアさん、それどころじゃ…」

『待ってください！私に彼と話をさせてください』

「え！？」

『私にも、わかるんです。藤宮さんも私が大事に想ってる人と同じなんだって…』

どうもテファには過去を背負う姿の目立つシュウヘイと藤宮がダブっているようだ。だから通信回線を通して聞いたところ、ほっとけなく感じていたらしい。

『藤宮さん』

「君は？」

『ティファニアといいます。あなたが自然やその一部である怪獣を、

彼らの住む地球を大事に想う気持ちは私にもわかります。私も自然が身の回りにある田舎に住んでましたから。
でも、それらを壊されたくないからって、逆に人を殺すことは許されることではないです。結局それも自然を壊す人と同じ。結局あなたを倒そうと人は力を着けてあなたに戦いを挑んで、その繰り返しなんです。だからお願いです、その人の言葉に惑わされないで！あなただって、人間なんですよ！』

「！」

そうだ。俺は、人間なんだ。ウルトラマンである以前に地球の自然の一部、人類。

「藤宮君。あんな戯れ言を信じるの？それは地球の意思に背くことよ」

稲森も負けず藤宮を自分たちの側に引き寄せようとする。

だが、ドン！

「……な……なぜ」

銃声と共に一人の人間が床に崩れ落ちた。
倒れたのは、我夢ではなかった。

「なぜなの…藤宮君…」

稲森だった。藤宮に撃たれた彼女はメラメラと消え行く灯火のように消滅した。

「破滅招来体が、また君を利用しようとしてたんだ」

「…我夢」

藤宮は一度稲森のいた床を見つめた後、我夢の方に向き直った。

「俺は、罪を償いたい。まだ守りたいものがようやく見つけられた。怪獣と人類の共存、そのために破滅招来体と戦う」

すると、再び我夢のＸＩＧ－ＮＡＶＩに通信が入る。今度は敦子からだ。

『黒崎隊員の向かった先の歪みのエネルギー反応が強くなってる。急ぎなさいよ我夢！』

『お願い、シュウを助けて！』

後に続いてテファも言う。

「よし…藤宮、行こう！」

通信機を閉じて我夢は藤宮の方を向いて強く言った。

「ああ、しばらくサボってたからな。人一倍やってみるか」

一方、シュウヘイはあの真っ暗な歪みの中にいた。いまだこの邪な気配の正体がつかめていない。

「隠れてないで出てこいよ。いるんだろ？」

シュウヘイがそう言った時、ちょうど我夢のいるポイントで藤宮が現役の稲森を撃った時、どこからか現れた青白い光がだんだんシュウヘイの前で集まり、巨大化していく。やがて、幾多の触手と女性の叫び声に似た声を発する怪獣となった。

『超空間波動怪獣クインメザード』

藤宮に稲森の幻影を送り込み、再び彼を利用しようとした、根源的破滅招来体の怪獣だ。

「お前には聞こえないのか？身勝手な人類のせいで死んでいった地球の怪獣たちの無念の叫びが」

クインメザードはシュウヘイを見下ろしながら言った。

「無念の叫びだと？」

「そうだ。私はその怪獣たちの恨みの声を聞いている。彼らの声はまさに地球の意思。それに逆らい、自然を破壊する人類は消えなくてはならないのだ！」

「違うな」

シュウヘイは聞くだけで嫌そうな顔をしている。身勝手なのはどっちだと問いたくて仕方ない。

「貴様は口先でそう言ってるだけで、実際はお前の言う人類のように自然どころか、壊したいものを何でも壊したがってるだけだ。それに、死んだ者の恨みの声が聞こえるなど、俺から見れば狂ってる証拠だ！」

死んだ者の声。大事な人と別れた人なら聞いたくはなるものだ。だがそれは過去と決別しきれない障害的欲求でしかないのだ。それを自分たちの利益のために利用しようとしているクインメザードをシュウヘイは許さない。

「ならば貴様もその声を聞くがいい！」

クインメザードは触手の一本を叩きつけると、バン！と爆発によって火災が起こると同時にその炎はだんだん巨人の形を成していく。

その姿はやがて、シュウヘイの知る戦士の姿となった。自分とシルエットは同じだが色合いは全く逆の真っ黒で目は赤い。
自分と対をなす最強の黒い闇の戦士の仮の姿、『幻影ダークネクロス』。

「石堀の、幻影だと？」

〈ダークレイフェザー！〉

幻影ネクロスはシュウヘイに向かって闇の光弾を放ってきた。

「ちっ」

シュウヘイは軽く舌打ちすると、エボルトラスターを引き抜き、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。すぐさまジュネッストリニティにチェンジし、幻影ネクロスに向かって身構える。

「シェア！」

「タアッ！」

幻影ネクロスの飛び蹴りがネクサスに炸裂する。

「っく！」

「ディ！フン！」

連続で放たれるキックをバック転で避けるネクサス。お返しに繰り出したハイキックは、同様にネクロスの放つキックで塞がれる。

「そうだ！争え！滅べ！それが地球の意思、人類は滅びなければならんのだ！」

そんなもの関係ない。人間は自分の意思で行動する。失敗を繰り返しながらミスを改善して成長する生き物なのだ。

滅ぶべきなのは、それを無視して地球の意思が人類の滅亡と偽る貴様の方ではないか！

〈シュトロームソード〉

ネクロスは光の剣に炎を発火させ、ネクロスに向かって斬り上げた。

〈炎竜昇！〉

「セイ！」

しかし、斬ろうとしたところである言葉が彼の頭を過り出した。ダーラムの言ったあの怪しげな言葉だ。

『お前ではあの方には絶対に勝てない。たとえどんなに力をつけてもな』

なぜこんな時にあんな戯れ言が浮かぶ？

その僅かな思考が隙を作り、ネクロスに腹を思いきり殴られてしまった。

「グガッ…！」

〈ダークレイ・ジャビローム！〉

しかももう一発、今度は黒い光弾が飛び出し、ネクサスのエナジーコアに当たってしまった。

「グアッ！」

怯んで膝を着いた時、幻影ネクロスは両手で彼の首を締め上げていった。

「グッォオ…」

「フフフ…」

なんとか自分の首を締め付けてくる幻影ネクロスの腕をほどこうとするが、うまく力が入らない。
幻影とはいえ、彼はネクロスのプレッシャーにも押され、ダーラムから言われたあの一言が腕を鈍らせていた。

ピコン、ピコン、ピコン…

コアゲージの点滅が彼の限界を知らせ始めた。このままでは力尽きてしまう。そして別の意味でも、危険がネクサスに迫ってきた。

――何をしてる？

――早く目覚めろ

――力を解放し、私に身を委ねるのだ…

ドクン！胸に刻まれたリーヴスラシルのルーンが血のような紅の輝きを増していく。

「さあ、止めを！」

クインメザードが幻影ネクロスに止めを促したその時だった。

「ガイアあああああ！！！！」

我夢のものと思われる怒鳴り声が空に轟いた。目映い赤の光と青い光がその空間の内部を照らし出した。

そして、その光から一発の光線が幻影ネクロスに向かって放たれる。

〈フォトンエッジ！〉

「グヌォアア…！」

光線を一発受けただけで幻影ネクロスはネクサスを放し、光の粒となって消滅した。

「おのれ、またしても貴様か！」

クインメザードが恨めしげに言ったとき、赤い大地の巨人がズシン！と力強さを表すかのように舞い降りてきた。

彼だけではない。海のように青い光の巨人も共に降りてきた。

ウルトラマンガイア・スプリームヴァージョン。

ウルトラマンアグル・ヴァージョン2。

「大丈夫かい？」

ガイアはネクサスに駆け寄り、彼を支える。

「ああ、色んな意味で助かったな…」

「色んな？」

アグルが首を傾げる。

「いや、こっちの話だ。それより…」

幻影が消えた今、後はクインメザードを倒すだけ。三人の戦士はクインメザードの方に向き直る。

「忌々しいウルトラマンめ…どこまでも邪魔をするか！そんなに死にたければ、屍をさっさと晒せ！」

クインメザードの触手から凄まじい電撃が走るが、ネクサスは両腕を十字に、ガイアとアグルは自分たちの持つ最大の必殺光線をクインメザードに放った。

〈オーバークロスレイ・シュトローム！〉
〈フォトンストリーム！〉
〈アグルストリーム！〉

「「「デヤアッ！」」」

三人の光線はクインメザードの雷撃を押し返し、クインメザードに直撃した。

「ぎゃあああああ！！！！！」

そして光線を受けた彼女は爆発四散し、跡形もなく消し飛んだ。

クインメザードの時空の歪みに作り出した超空間から抜け出し、変身を解いた三人は地上で迎えに来たテファと敦子と合流した。

「君がティファニアか。助かったよ。君が俺を説得しなかったら俺はまた…」

破滅招来体にいいように利用されていたかもしれない。藤宮はテファに礼を言った。

「そんな、私がみんなにできることなんてこれだけなんですから…」

藤宮の礼に謙遜するテファ。すると、我夢が敦子の体に触れた瞬間、彼女は光に身を包み、たちまち一枚のカードになった。絵柄にはもちろん敦子の役割を任されたルイズの姿がある。

「僕たちの気持ちだ。受けとってくれ」

「ああ」

シュウヘイがそのカードを受けとると、我夢と藤宮は二人の前から去っていった。

ガイアの世界も抜け、残る世界はサイトたちの方も含め、二つとなった。
真っ白の部屋の中、テファは口を開いた。

「サイト、大丈夫かな？」

「あいつのことだ。なんとかしているだろう。また世話の焼くことになったら助ければいいだけの話だ」

とシュウヘイがテファに言ったその時、黒い霧が現れ、すぐに人の形を成した。

「残る世界は二つ、ここまで来るとはさすがはウルトラマンだね」

自分たちをこの世界に誘った男、ダンプリメ。

「さて、君たちの場合、残る仮想世界は一つ。そろそろ故郷が恋しくなったんじゃないかい？」

「どういう意味だ？いや、待てよ…」

まさか、次の世界は…

「そう、君の故郷さ」

ダンプリメがそう言って一枚のカードをシュウヘイに投げ渡し、彼はそれを受け止め絵柄を確認する。

やはりそうだ。この絵、明らかに自分の変身する姿、ウルトラマンネクサスのものだ。

「仲間に会いたいかい？いや、会えるのかな？」

突然ダンプリメは不思議なことを言う。まるでシュウヘイが故郷の仲間に会うことは許されてないような言い方だ。

「何が言いたい？」

「君の中には、強い闇を感じるんだよ。そんな状態で仲間に会うなんて、恥ずかしくないのかな？」

「…っ！」

「まあいいさ。この扉を進んで確かめればいいだけの話。じゃあね」

ダンプリメは再び黒い霧となってどこかへ消えていった。

「俺の…故郷…」

シュウヘイが自分の世界のカードを見つめる中、テファは何か不安そうな顔をしていた。

（どうして？なんか、胸が締め付けられてる感じがする…）

「さあ、次はどうしようかダーラム？」

リシュの軟禁された部屋で、ダンプリメは両腕を組んで瞑想しながら壁に寄りかかるダーラムを見る。

「…まずは俺が行く。最初は俺がやるが、お前も念のため着いてこい」

「ふふ。彼が目覚める瞬間を生で見れるわけだ。楽しみだね、リシュ」

「……」

楽しそうに言うダンプリメの言葉に、リシュは何も答えなかった。

11　ネクサス／悪魔の器（前編）

「ここは…」

シュウヘイがネクサスのカードを掲げて、その扉の先にたどり着いた世界。

メリーゴーランド、ジェットコースター、観覧車、ショーに使われる屋根付きステージ、お化け屋敷…

「やはりそうだ！俺の故郷にあった遊園地だ！」

最初はナイトレイダーの先輩でもある弧門に誘われ、休みの日はここでよくバイトしていたものだ。仮面ライダーの着ぐるみを着せられるわ落ち葉の掃除を何時間もやらされるわハンバーガーやたこ焼きの作り方を夜通し叩き込まれるわ…

こうして立つと懐かしさが蘇ってくる。

「テファ」

普通なら彼女が何か感嘆に一言くらい言うはずだが、さっきから彼女の声が聞こえない。いや…

「いない！？」

彼女の姿すらどこにも見当たらないのだ。いつはぐれてしまった？

「世話の焼ける…まあ退屈はしないか」

そう言って遊園地を歩き出そうとしたときだった。

「シュウヘーイ！」

聞き覚えのある声が彼の耳に飛び込んできた。

シュウヘイの友達で元デュナミスト、千樹憐。

「ちょうどよかった！実は楽屋に置いてきちまった荷物があってさ、俺今から着ぐるみ着て風船配らないといけないから時間ないんだ。頼むぜ！」

仮想とはいえ、久々の再会に彼はその時間すら与えず、どこかへと走っていった。

（相変わらず、騒がしいな）

どうしてあんなにハイテンションでいられるのかシュウヘイには疑問でならなかった。まあ、そこが彼らしいのだが。

「しかし、テファはどこに行ったんだ？」

辺りを改めて見回すが、姿が見えない。仕方ないので一旦楽屋に向かってみることにした。

その歩みが、彼が何かに引きずり込まれるカウントダウンになっていることを彼は知らない。

「ここ、どこ？」

その頃、シュウヘイとはぐれてしまったテファは豪華な部屋の中にいた。なぜか服装がメイド服になっている。どうやら今回は使用人の役割らしい。

「シュウ！どこにいるの！？」

もう一人にしないで。置いていかないで。味わいたくもない孤独感が彼女の心を塗りつぶそうとしていた。

すると、彼女の隣からバン！と何かが叩きつけられたような音がした。

「！」

シュウヘイなのか？彼女は気になってその部屋を出て確かめに向かった。

「これでいいのか？」

楽屋から隣に頼まれた荷物を持ってきたシュウヘイは迷子保護センターでその荷物を渡した。荷物はリュック詰めの風船でできた動物。

「わりいなシュウヘイ、助かったぜ！」

隣はシュウヘイに礼を言うと、センター内で親とはぐれてないている子供に風船のライオンを渡した。

「ほら、これで元気出しなよ。母ちゃんも今頃探してる頃だから、な？」

「…ありがとう」

しばらくすると、一人の若い女性が子供を探しにやって来た。先ほど隣にライオンの風船をもらった子供の母親らしい。彼女は隣に礼を言うと、その子供と共に帰っていった。

「やっぱり子供は宝だよな、シュウヘイ」

「…ああ」

宝、か。自分はそんな扱いを受けたことなどなかった。むしろその真逆、ゴミのように扱われた。もし自分を引き取った義理の親たちに愛されていたら、こんな性格ではなく、隣のように明るく振る舞えるような人間になっていたかもしれない。

すると、シュウヘイが右腕に装着していたパルスブレイカーが鳴り出した。この世界でもやはり元の故郷と同様、スペースビーストが現れるということだ。パルスブレイカーを開くと、小型モニターに副隊長である『西条凪』の顔が映った。

「こちら黒崎」

『黒崎隊員、ビーストが新宿市街地に出現したわ。直ちに現場で合流しなさい』

「了解」

命令を受け、シュウヘイは憐を見る。

「憐、もし長い金髪で胸が異様にでかい女の子を見かけたら保護してくれないか？」

「へ？」

憐は一瞬彼が何を言ったか理解できなかった。まず性格上女との関係などせいぜい友達止まりなはず。

「まさか、彼女！？」

遂にこいつにも春が来たか！と憐は期待する。

「はあ…そんなんじゃない。世話が焼ける奴だからほっとけないだけだ」

いつもこうだ。弱みを握るようなことがあるとよくからかってくる。

シュウヘイは深いため息をつく。

「嘘言えよ。このヤローのろけやがって！このこの！」

憐はいたずらっ子のように肘で軽くシュウヘイを叩く。

「…とにかく見つけたら保護だ。名前はティファニア。尾白や瑞生にも言ってくれ。頼んだぞ」

「ああ、行ってこいよ」

シュウヘイは笑顔で見送る憐を背に、新宿市街地へ急行した。あの笑みが、自分の背中をよく押してくれたものだ。最初は過去のことで人としての道を拒絶していた自分が光に照らされた道を歩むきっかけとなった。その一人が、憐。シュウヘイにとって大きな存在だった。

暫くして、彼は市街地に辿り着いた。辿り着いたのは良いが、妙なことにだれも居ない。

「？」

おかしいと思ったシュウヘイはパルスブレイカーで凪に通信を入れた。

「こちら黒崎。西条副隊長応答願います。副隊長？」

しかし、ザザ…とノイズが走り、彼女の声が聴こえない。妨害電波でも出てるのか？とその時だった。

突然シュウヘイに向けて一発の弾丸が撃ち込まれた。すぐに反応したので何とか回避することは出来た。顔を上げた瞬間、彼は目を疑った。

「ターゲットを確認！目標は人型ビースト！一斉攻撃！」

孤門、詩織、凪、そして隊長の和倉。ナイトレイダーＡユニットの仲間であるはずの彼らがシュウヘイにディバイドランチャーを向けているではないか！

「な、待ってくれ！待ってください隊長！みんな！俺が分からないのですか！？」

「惑わされないで平木隊員、孤門隊員。彼は溝呂木の様に闇に取り込まれた存在。哀しいけど…」

「…わかりました」

「悪く思わないで頂戴ね」

感情を押し殺したように詩織と孤門もディバイドランチャーをシュウヘイに向けて発射した。

「く！」

シュウヘイはブラストショットで撃ってそれらを相殺すると、一旦

彼らの前から逃亡を開始した。

「逃がすな！」

和倉たちナイトレイダーたちもシュウヘイを逃がさないと、彼を追い始めた。

「ハア、ハア…」

暫くの逃亡の末、廃工場の壊れた機械の物陰に隠れたシュウヘイ。仮想世界とはいえ、まさか仲間に武器を向けられるとは思わなかった。相手は自分が誰なのかは分かってはいる。だがそれを承知の上で…何故こんなことになったのだ？これも罠なのか？

――見える

「！」

この声、またか！シュウヘイは必至にその声を払おうとしたが、物体でもないものを消すことなど出来るはずも無かった。

――見えるぞ、君の心が…

黙れ

――仲間に裏切られ、心にまた深い傷を負った君の心が

黙れといってるだろ！

――それでいい、そうすれば私は君の全てを…

止めろ…

――支配できるのだ！

止めろおおおおおおおおおおお！！！！！！！

扉の隙間からその中を覗き見たテファは今自分の見ている光景が信じられずにいた。話には聞いていたが、ここまでやるものなのか？人のとる行動とは思えない。

「このゴミクズめ！噂のプロメテの子だと思えば、失敗作の単なるガキか！」

父親と思われる男性は鞭でまだ幼い少年を殴り付けていた。その少年はなんと…

（シュウヘイ…なの！？）

まだ六歳ほどだが紛れもない、あの顔はシュウヘイそのものだった。顔はアザと火傷、血で無惨に変わり果てている。

「お前のプロメテの子として持つ、超能力でさらなる財産を築けるかと思ったら、連中はこんな役立たずをくれおって！」

シュウヘイがプロメテウス・プロジェクトで生み出されたハイブリット児であることは覚えているだろうか？そのプロジェクトで生まれた子ども達は『プロメテの子』とよばれ、ＩＱが人並み以上に高いことと、テレパシーなど特有の超能力を持っている。後にシュウヘイの義理の両親となる金持ち夫婦は彼を利用し、一攫千金を狙おうとした。だが、シュウヘイは失敗作、超能力を持っていなかった。彼を元々保護していた『アカデミー』は厄介払いの形で、失敗作の彼を一般人に引き取らせようとしていたのだ。これに怒った彼の両親は「役立たず」などと彼を罵るようになった。やがてその扱いは、彼の通う学校にも伝染した。

それから父親のシュウヘイ少年への暴行は続いた。見るに耐えられなくなったテファは扉を開け、その男性を突き飛ばす。

「うぉ！？」

「なんてことを…大丈夫！？」

テファは傷だらけの彼に呼び掛けるが、彼は何も言おうとしなかった。

「…」

「貴様使用人の分際で！」

シュウヘイの義理の父親はテファの髪を乱暴に引っ張った。

「いたっ！」

「使用人の分際で主人に逆らうとはいい度胸だ。礼に私の慰みものにしてやろうか？」

非情極まりない義理の父親の言葉に、ボロボロのシュウヘイ少年は近くに置かれたオブジェを手に取り、それで父親の後頭部を殴り付けた。

いきなり凶行に走った少年の行動に解放されたテファは一時硬直したが、すぐシュウヘイの父親の脈を図る。幸か不幸か、父親は気絶程度で済んでいた。

「なんで…」

シュウヘイ少年は血のついたオブジェを持ったまま、黄昏ながら口を開いた。

「父様と母様は僕を苛めるの？どうして学校のみんなは僕を苛めるの？なんで誰も、僕を助けてくれないの？」

「…」

テファはようやく理解した。自分が今見ているのは、シュウヘイの過去のことだ。しかし、テファは父と母から愛されていたのとは違い、シュウヘイは逆にひどい虐待を受けていた。話には聞いていたが、こんなの見ている側が耐えられない紛れもない。

そこに、シュウヘイの義理の母がやって来た。

「あんた…私の夫をよくも！今すぐ来なさい！」

「離せよ！このババア！」

付き添いで彼女と共に来た他の使用人たちはシュウヘイ少年を無理やり連れていった。その後、彼はひどい拷問を受けることになるのだが、室内にも関わらずそこでビュウ！と風が吹いた。

「なっ、なに！？」

風が止んだかと思ったら、景色はそこで一変していた。建物は先ほどのものと全く同じだが、壁は崩れ、ガラス窓は割れ落ち、火があちこちに回っている。

この時は、２００４年。彼の世界で始まりのスペースビースト「ザ・ワン」がウルトラマンと戦った日だった。この屋敷も被害に遭っていた。

「だっ誰か助けろ！」

今の声はシュウヘイの義理の両親だ。あんな人でも助けなくては、テファは早足でその場に駆けつけた。二人は崩れた屋根の下敷きになっていたが、顔だけはなんとか出して一命を取り留めていた。そこに当時１２歳のシュウヘイが歩いてきた。

「おお、丁度良かった息子よ！」

「私達を助けて！一人で無理なら、他の使用人に手伝いを…」

しかし、シュウヘイは動かなかった。口も利きたくないような、そんな負のオーラを感じる。

「な、なにぼさっとしてる！はやく助けろ！」

ついには表面上の父親面を崩した義理の父。その仏頂面は辛うじて怒りを抑えていたシュウヘイの逆鱗に触れた。

「都合のいいときだけ父親面しやがって、いい加減あんた等の声なんか聴きたくないんだよ」

彼がその時持っていたのは、壁掛け用に飾られていた一丁の拳銃。まさか…テファの予想は的中した。

「止めて！」

自分の慕う男が人を殺すところなんか見たくない。そんな彼女の願いも虚しく…バンバン！

その銃声とともに、彼の両親は悲鳴を上げる間もなく地獄へ落とされた。テファは直視できず、目を背けていた。

そしてまた風がビュウ！と吹き、景色が変わる。今度は暗い夜道のなかシュウヘイが、学生服を着た男女に銃を向けているものだった。

「わ、悪い冗談はよせよ黒崎…昔の事なら悪かったからさ、な？」

「そそそうよ、だからそんな物騒なものしまって…」

実はこの学生、シュウヘイを苛めていた学生の一員だった。なんとか許してもらおうと弁解するが、先ほどと同じように余計にシュウヘイを怒らせ…

「ぎゃあああああああああ！！！！！」

その二人もまた、無残な最期を遂げた。シュウヘイが暴力団の一人

になった夜の事だった。

「もうやめてよ…」

こんなの耐え切れない。すると、いつの間にかあたりは静まりかえった廃工場に変わった。そして、ダンプリメがテファの前に歩いてきた。

「アレが彼の過去、そして真の姿さ。憎しみに囚われ、負の感情のみで動く、本物の悪魔」

「違う…」

あのシュウヘイが好き好んで人を殺すはずが無い。確かに人を殺すことは許されないが、日に日に見てきた彼の優しさは本物だ。

「あんなの、ただの幻です！彼の本当の姿のはずが無い！」

「ふうん、だったら…」

このくらいじゃ絶望しないか。ダンプリメはある方向を指差した。そこには、以前自分とシュウヘイの前に立ちはだかった巨漢、ダーラムと

「…シュウ？」

シュウヘイが彼に背を向け、その場に立ち尽くしている姿があった。

「ダーラム、回収頼むよ」

「分かった」

ダンプリメから不可思議な頼みを聞いたダーラムは再びシュウヘイを見る。彼はゆっくり顔を上げた。その時テファは感じた。

彼の瞳の奥に、今にも爆発しそうな殺意を。

そしてその眼差しは、今彼の胸で輝いてるルーンのように血の紅に光っているのを。

「でエエエエエエえええああああああああ！！！！」

シュウヘイはダーラムに向かって突撃し、唸りをあげた拳でダーラムを襲うが、ダーラムは咄嗟に回避、続けて繰り出されたキックも避けきった。

「まだ目覚め切れてない。奴の意識とルーンに封じられたあの意思がぶつかって…」

暴走…なにやら気になる言葉を口にするダーラムだったが、シュウヘイが彼に休む間も与えないつもりでこちらに近付いてきた。

「手間をとらせおって…」

ダーラムはダークスパークレンスを取り出し、闇の戦士『ダークダーラム』（等身大）に変身、対するシュウヘイもエボルトラスターで等身大のウルトラマンネクサスに変身した。だが、なんだかおかしい。普通はアンファンスの状態で変身が完了するはずが、今回はいきなりジュネッス。そのジュネッスも彼がチェンジするジュネッストリニティとも違っていた。まるで血のような色をしている。

しかも顔の半分が…

黒い肌に紅い目の、邪悪な色に…

「ハアアアアアアアア！！！！」

「デアアアアアアアア！！！！」

ネクサスの早すぎて見えないほどのラッシュパンチがダーラムに放たれ、ダーラムはそれを避けていく。その最中、彼はネクサスの攻撃をかいくぐって彼に強烈なキックを放った。

「グオア！」

壁を突きぬけ、吹っ飛ばされるネクサスだったが、怯むことなく再び連続パンチを放つ。ダーラムはそれらを見切り、繰り出されたネクサスの拳を捕まえると、彼を床に叩きつけ、天井に投げつけた。

「ウア…」

天井に顔を突っ込んで一時は動けなくなるネクサス、これで終わったか？いや、まだだった。天井からネクサスは顔を出してきた。なにやら、「くくく…」と不気味な笑い声を発しながら。

〈パーティクルフェザー！〉

「デア！」

ネクサスの光弾が放たれるが、ダーラムは拳で相殺した。だがそれは牽制、今度はネクサスが直接飛び降り、拳でダーラムに襲い掛かった。対するダーラムも鉄拳で応戦、二人の拳は凄まじい音を立て

ながらぶつかり合った。
一度距離を置き、ネクサスはまたラッシュパンチを出す。それらを避けて、ダーラムは一度穴の開いた天井の真下の吹き抜けにある鉄骨を踏み台に立ち、ネクサスもそれを追って鉄骨の上に立った。

〈シュトロームソード！〉

おなじみの光の剣を、ネクサスは作り出して握る。ダーラムと彼は同時に飛び上がり、剣と拳をぶつけ合った。

「ハッ！デゥオ！」
「フッ！デイ！」

しばらくそのぶつかり合いは続いた。一度距離を置くと、ダンプリメは見逃せなかったものを見た。

「ダーラムの息が上がっている…！」

ダーラム本人にも体力の限界と焦りが生じてきた。対するネクサスは、以前にダーラムと戦った時とは大きく違い、息一つ乱れてない。

「デアアアアアア！！！」

「ウオアアアアアアアア！！！」

二人は再び剣と拳を構え、互いに向けて走りこんだ。
そして…

ザシュッッ！！！！

「が…？」

ダーラムの後ろで背を向けているネクサス。ダーラムに至っては…右腕が無残にももがれていた。今のネクサスの斬撃で、見事に斬られてしまったのだ。今のダメージで変身が解けてしまう。もう変身を解いても大丈夫と悟ったのか、シュウヘイは元の姿に戻った。

「ククク…」

「あ…あぁ…」

不気味な笑い声を上げながら近付く青年に、ダーラムは恐怖のあまりその場から動くことすら出来なかった。テファも動けず、ただ今見ているもの全てが幻想であってくれと願うしかなかった。ダンプリメも恐怖こそしていたが、同時にそのスリルに異常なまでに興奮している。

そこから、まるでいたぶりつくすかのようにシュウヘイはダーラムを殴り、蹴り、投げ飛ばしたりと、いつもの彼の面影を感じさせなかった。うつ伏せに倒れたダーラムの上に馬乗りになり、ルーンの力でシュトロームソードを振り上げる。そして…

ドス！

「があ…」

鮮血がシュウヘイの顔に飛び散るようにかかる。ダーラムの胸元辺りを裏返した背中に剣が突き刺さり、そこから大量の血が噴き出し

ていた。

「くはは…あはははははははは！！！！！！」

本当にコレがシュウヘイなのか？彼を知る者達が見れば、そう思わざるを得ない。だって彼は、こんなに冷酷非道で残虐な人間なはずがないのだ。だが今の彼は、血が大量に顔に掛かっているのに笑っている。
まるで…

『紅い悪魔』

「いや…いやあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

あまりの残虐な彼の姿に、テファの悲鳴がその場に轟いた。

12　ネクサス／悪魔の器（後編）

「くはははははは！」

凶刃で瀕死のダーラムを斬りつけ、悦楽に浸るシュウヘイ。その姿にかつての彼の面影はない…

「止めて…」

泣きながらその場に座り込むテファは直視できなかった。こんな嫌な光景、見続けたらこっちが耐えられない。

「不甲斐ないなダーラム。でも相手も相手か」

さすがにダンプリメもまずいと感じていた。

（冥王から始末するつもりで回収しろとか言われたけど、これじゃあね…。
もう少し様子を見て、疲れたところを突いた方が良さそうだ）

彼は残されたダーラムやテファを無視し、一旦どこかへ身を隠した。

「ン？」

血を舐めとるシュウヘイは、上空からなにかが降り注いでくるのを確認した。あれは…ミサイルか！

彼のいた廃工場は空から降り注ぐミサイルによって跡形もなく消し飛んだ。

だが、彼らは死ななかった。瞬時に血のような紅のジュネッスネクサスに変身した彼が消し飛んだ廃工場の天井を突き破って現れた。

しかし、不思議な光景が目に入る。彼は手のひらに乗せていたのは、テファだった。

（え？）

彼女もまた驚きの表情でネクサスを見上げる。なぜ自分を助けてくれたのだろうか？

（そうか、彼のリーヴスラシルのルーンは普通の使い魔のルーンと同じように主人が死ぬと消えてしまう。だから助けたのか）

廃工場の外にある瓦礫に身を隠して見ていたダンプリメはそう解釈した。

その解釈が真実かどうかは彼にもわからないことだが。

先ほどミサイルを落とした機体、クロムチェスターδ、α、β、γが全て揃った状態でこちらに迫っていた。ナイトレイダーＡユニットだけでなく、シュウヘイが入隊する頃にはすでに結成されたＢユニットやそれ以降の部隊の操縦する同型機体も揃っている。それだけではない。他にも日本の自衛隊の戦闘機もある。その数は…

五百。

――邪魔だ。全て破壊しろ

スパイダーミサイル。その威力はスペースビーストに大ダメージを与える威力を持つ。それほどの力のあるミサイルがネクサスに向けて発射された。しかし、ネクサスの発射した光線によって相殺される。

〈クロスレイ・シュトローム！〉

「フッ！」

その光線はミサイルどころか、数機の戦闘機を破壊した。次々と放たれ、そして撃墜していく機体。

ついにα・β・γ・δ四機のチェスターが空中で形を変え、一つの機体に合体する。

『ハイパーストライクチェスター』。ウルトラマンネクサスと共に強敵と戦い抜いた対ビーストの超戦闘機。その機動力と攻撃力は一機のみの時とは大きく違う。さらにはネクサスのメタフィールドや闇の巨人の作り出すダークフィールドへの侵入も可能なのだ。その機体がまさか、仮想世界とはいえ、ウルトラマンに向けられることを誰が予測したのだろうか？

ハイパーストライクチェスターの必殺武器、ハイパーストライクバニッシャーがネクサスに発射された。ある程度のビーストだって一撃で倒すことはできる。だが…

「ムン！」

ネクサスは左腕のアームドネクサスにそのビームを吸収したのだ。下手したら腕が破壊されるかもしれないにも関わらず。それともダメージすら受け付けない自信がその時の彼にあったのか？

〈スピルレイ・ジェネレード！〉

ビームを自らのエネルギーに変換し、一発の強烈な光弾となって放たれ、そのハイパーストライクバニッシャーは撃墜された。

ネクサスは気づいてない。その機体の中には、自分が仲間と信じていたナイトレイダーＡユニットの隊員たちがいたことに。幸いなのは、彼らが現実世界の彼らと別人だということ。

その機体は地上な激突、大爆発を起こした。ネクサスの暴走はそこで終わりはしなかった。残された幾多の機体の攻撃すら許さず、あらゆる技で彼らを葬り始めた。

〈雷光閃！〉

雷の閃光の剣が貫き、

〈炎竜昇！〉

炎の竜のごとき光の剣が焼き付くし

〈覇風撃！〉

いかに硬いものすら斬り通す風の刃が次々と消し去っていく。その時のネクサスは…

「フハハハ…アハハハハハハハ！！！！」

狂喜と快感の高笑いを上げていた。

「これじゃあ、隠れても無駄か。冥王からちゃんと回収しろって言われてたし…」

あの様子だといずれ街をも破壊しに行くだろう。その最中で彼がテファを手にかけたら、不味い。彼らが冥王と呼ぶ人物から「奴が自我を失い、ルーンが覚醒しそうになったところを回収しろ」と命じられていた。だからルーンを刻んだ本人が死んでルーンが消えたら計画が水の泡だ。

ダンプリメはポケットから、武蔵がコスモスの変身に使っているものと酷似したアイテム『カオスプラック』を掲げると、その漆黒の花が開くと同時に紫色の輝きが彼を包み、巨大化させた。

ネクサスは強者の気配を感じたのか、現れた紫色の光の柱に目を向ける。その中から現れたのは、ウルトラマンコスモスによく似た巨人だった。

コスモスの世界にいた光のウイルス『カオスヘッダー』は怪獣だけでなく、コスモス本人にも憑依したことがある。その結果、そのウイルスはコスモス・コロナモードに酷似した巨人『カオスウルトラマン』を誕生させ、以降コスモスを苦しめていった。

石堀もダーラムやヒュドラと同様、そのカオスウルトラマンを元に新たな闇の巨人を作り上げた。カラーリングに変化はないが単なる再現ではなく、強化体として作り上げ、ダンプリメに与えた。

『闇の混沌戦士・ダークカオス』

「回収開始、と」

ダンプリメの時のようなしゃべり方は相変わらずだが、真剣にやらないと殺られてしまうのを感じている。カオスはスウッとネクサス

に向かって身構えた。

〈インベーディングウェーブ！〉

「ダアッ！」

早速光線を放つカオスだったが、ネクサスは難なく飛び越え、カオスを蹴り飛ばした。

「ヌォ！？」

さらに首もとを掴み、腹を数回殴り付け、地面にカオスの頭を叩きつけた。

「グフッ！」

そして足払いでカオスを攻撃しようとしたが、さすがにやられっぱなしで終わるカオスではない。立ち上がってすぐバック転して回避、ネクサスから距離を置いた。

「デア！」

「ダアッ！」

蹴りがぶつかり、拳と拳がぶつかり合う。

カオスはネクサスの肩に足を乗せようとしたが、逆に肩に乗せられたまま足を捕まれた。それでもカオスはその体制で背中を反らし、今度はネクサスの足首を掴む、そこから地獄車のように転がりだした。

「ヌォオオオ…デア！」

今度はカオスが回転中に足に力を入れ、その状態からネクサスを遠心力を利用して吹っ飛ばした。が、宙に舞い上がったネクサスは何事もなかったかのように着地する。

「くそ…冥王も厄介な仕事頼んできたな」

愚痴を溢すカオスだったが、何を言っても仕方ない。カオスは拳繰り出したが、その腕を掴まれ、光の剣で胸元辺りを斬られてしまう。

〈シュトロームソード！〉

「セイ！」

「グホァ！？」

暴走してるとはいえ、今のネクサスは普段の彼よりも凄まじい強さだった。

「仕方ない、取って置きだ！」

カオスは自分の右拳を掲げると、紫色のオーラに身を包み、パワーアップした。カオスウルトラマンの強化体、カオスウルトラマン・カラミティを模した闇の巨人『ダークカオス・カラミティ』。

〈ブレイキングスマッシュ！〉

「ハッ！」

〈サークルシールド！〉

数発の光弾を放ち、カオスはネクサスに近づいていく。対するネクサスは光の盾で防ぎ、途中で空に飛び上がった。しかし、地上に降り立ったところでまたカオスの放つ光弾が繰り出された。

「タアッ！」

「デア！」

ネクサスは高く飛び上がり、カオスの後方に着地した。

「フッ！デア！ジュワ！」

「ダッ！ハッ！デヤア！」

カオスとネクサスのパンチ、キックがそれぞれ不規則にぶつかる。パワーアップした影響からか、カオスの方が少し優勢になってきた。

「フ！デア！」

ネクサスの腕をつかみ取り、彼を前方に投げつける。倒れこんでところで縦に開店しながらネクサスに突撃、彼を思い切り突き飛ばした。

「グオァ！」

そして顔を地面に押し付け、思い切りタックルで突き飛ばした。ズサササと地面の上を引きずらされるように飛ばされているところで、

カオスはネクサスに刃状の必殺光線を放った。

〈カラミティブレード！〉

「ダァ！」

「グ…」

それだけでは終わらなかった。さらなる必殺光線をカオスはなネクサスに放つ。

〈カラミュームショット！〉

「デアアアアア！」

「グ…ァ…」

そこからカオスは立て続けに光線技と連発していく。相手が相手なので手が抜けない。本気で倒す勢いで連射していく。

〈ブレイキングスマッシュ！〉

〈カラミティブレード！〉

〈カラミュームショット！〉

カオスの光線は凄まじく、さすがのネクサスも限界に達したのか、うつぶせに倒れこんで動かなくなった。

「！」

見ているしかなかったテファは思わず口元を覆った。暴走していて

も、彼女の頭の中には『どんな姿でもシュウヘイ』だという法則が成り立っていた。

「手間をかけさせて…ん？」

倒れたネクサスに近づくカオスだったが、思いがけない事態が起こった。カオスが触れようとした瞬間ネクサスが消滅したのだ。

「な…！？」

まさか、本当に消してしまったのか！？だとしたら任務に失敗したことになる。彼を生かしたまま連れて帰らなくては意味がない。だがその時、カオスは感じた。自分の真後ろにたった今消えたはずのターゲットがいたことに…

――弱イ

「ごほ！？」

瞬間、彼の体から銀色の拳が貫くように飛び出してきた。ネクサスの拳が。

「なぜ…」

確かに光線を連発したことで倒したはず。なのに彼は平然としている。

実は、あの戦いの最中、ネクサスは風系統の魔法「偏在」を元に修得した技「双夢幻」で分身を作り、その分身と入れ替わっていたのだ。自分の分身と戦わせることで敵のエネルギーを奪い、体力が尽きかけたところを突く。

「フフフ…」

ネクサスの狂った笑い声は、カオスにその意味を知らせた。止めを刺す気だ。

「や…やめ…」

彼の命乞いすら聞くこともなく、拳で貫かれたままのカオスを地面に倒し、ネクサスは黒く染まった光線の衝撃波でカオスを攻撃した。

〈滅閃光！〉

「デアアアアアアアア！！！」

「嘘だあああああああああ！！！！！」

カオス、いやダンプリメの悲鳴はむなしく空に轟き、その黒い光線の中に飲み込まれていった。獲物が消えたことでネクサスが落ち着くと考える方がいるかもしれない。

しかし、ネクサスは物足りないのか、歯ごたえのある敵がいなくなったことで怒り狂うように暴れだした。

〈パーティクルフェザー！〉

「ヌアアアアア！！！」

街のビルを次々に破壊し、本能の赴くままに破壊していくネクサス。

嫌だ。こんなの、こんなの…

テファの目から大粒の涙があふれていく。彼女の脳裏に浮かんでいたのは、初めて笑った時の彼の顔。ダーラムを斬ったときに浮かべた狂喜の笑みではなく、暖かくて優しい笑顔。

シュウヘイじゃない！！！

「やめて！！！！！」

その声に反応し、ネクサスは手を止めた。振り向き、見下ろすと、彼女は泣いていた。不思議なことに彼は攻撃の姿勢すら見せなかった。

「お願い…やめて」

「……グ」

びきいっっ！ネクサスの頭に激痛が走り、彼は頭を抱えながら苦しみだした。その激痛とともに、声が聞こえてくる。彼にとって懐かしく、優しい声と、石堀のような野心に満ちた声。

シュウ、ダメ！■■にとらわれる！

おのれ、後一歩のところでまたしてもおおおお！！！！

ルーンの赤くまばゆい光は、ネクサスやテファだけでなく、その世界すら包み込んだ。

「う…」

ここはどこだ?いや、ここは確か、遊園地の楽屋にあった…

「俺の、部屋?」

いつの間にかシュウヘイは元の姿に戻り、楽屋のベッドで眠っていたようだ。すると、枕元に置いていた携帯電話から着信音が鳴りだした。一体誰からだ?シュウヘイは携帯を開くと、驚いたように目を見開いた。

今日、一緒に出掛けよ

愛梨

彼は服を着て外に飛び出すと、そこにはテファに似て、彼女とは異なる黒くて短く切った髪の少女が笑顔で出迎えてきた。

「アイリス?…」

「もう、『愛梨』って呼んでってこの前言ったでしょ？ま、いっか。行こ」

現状を理解できず、流されるままシュウヘイは愛梨に引っ張られていった。

一方、テファは別の場所で目を覚ました。寝ていた場所はシュウヘイや憐が働く遊園地のベンチ。

「あれ、私…」

さっきまで荒れ放題の街にいて、彼をとめようとして…

「そうだ！シュウ！」

彼がどうなったのか確かめなくては！彼女は立ち上がり、急いで彼を探しに走り出した。ちょうど良いタイミングで自分とほぼ同世代に見える少女を見かけたところで彼女は立ち止った。
その少女は憐と恋仲である瑞生だった。

「あら、どうしたの？」

「あの、シュウを見ませんでしたか！？」

「シュウヘイ？彼なら、さっき彼女と一緒に出掛けたけど…」

「え…」

自分でも不思議なほど聞き捨てならなかった。テファは瑞生の服をひっつかみ、彼女に必死に詰め寄る。

「どど…どこに行ったんです!?」

「えええええっと…街に」

少し驚きながらも瑞生は園の外に続くゲートを指さす。彼女を放し、その方に向かってテファは一目散に走り出した。

「いたた…腕っぷし見かけによらずあるわね…」

「やっとデートできてうれしい」

「やっと?」

街を二人で歩きながら、シュウヘイは愛梨を不思議そうに見やる。

「最近ナイトレイダーの仕事で忙しかったでしょ?メールしようにも基地、電波の届かない場所だから」

この世界でもシュウヘイはナイトレイダーという位置づけのようだ。同時に愛梨も何事もなかったかのように生きている。それも自分の

彼女という役割でだ。
しかし、さっきまで自分はどうしていたのだ？かろうじて覚えているのは、新宿の市街地で仲間に武器を向けられたことぐらい。他は記憶がはっきりしていないせいで覚えていなかった。
だとしたら、仲間たちは今どうしているのだ？
その不安はやがてある仮説にたどり着く。

（まさか、俺はみんなを…！？）

だんだん記憶がよみがえってくる。ダーラムを惨殺し、ネクサスに再変身したときに…

「最近疲れてない？」

「え？」

いきなり話しかけられてシュウヘイは顔を上げた。

「じゃあ質問。どうしてあんなに私のことで自分を責めてたのかな？」

それを聞いてシュウヘイは耳を疑った。今彼女は何を言った？まるで現実世界と同じように自分が死んだみたいな言い方ではないか。
ひそかにテファは二人の会話を近くの木陰から聞いていた。どういうわけか胸がさっきから苦しい。

（何やってるんだろ私…）

何で自分を責めたか、そんな理由はわかりきっている。

「俺は、大事な人を傷つけたんだ。多分、さっきも…」

また罪を重ねてしまった。罪悪感がまた自分を苦しめている。苦しみから解放されなくてもいい。でも、人間はずっと苦しみの中で生きられるはずがない。愛梨を手にかけたその日からシュウヘイは心のどこかでこう思っていた。

許されたい。でも…

「罪って、許されるのか?愛梨」

それを聞いていたテファは驚きの表情を浮かべた。彼の心の影の象徴でもある女性を、まさかその眼で見ることになるとは思いもしなかった。

「許せと言ったところで、やはり許されるはずないか…」

「シュウ」

愛梨は彼の名を呼ぶと、テファのいる木陰に近づき、彼女を引っ張り出した。

「え!?」

いつの間に気づかれたんだ?とテファは驚いていた。

「大事な人、やっとできたんでしょ?だったら、その人に癒されても、許されても誰も咎めないよ。それでも許さない人がいたら仕方ないけど、その時は…」

彼女はテファの耳元み顔を近づけて言った。

「あなたが支えてあげてね」

「え？」

「そうそう、いろいろとズルズルズル引き摺るんだから難しいんだよな」

そういいながらそこに現れたのは、何と憐だった。彼だけじゃない。孤門や瑞生、尾白、それに和倉隊長と凪、詩織もいる。さっきシュウヘイのネクサスに撃墜されたはずなのに…

さっきのことはまるでなかったことのようだ。

「男でしょ？口だけじゃなくてもっと張り切らなくちゃ」

詩織は気さくな笑みで励ます。

「黒崎、お前には俺たちや、彼女のように異世界でできた仲間がいる。そう何度も自分を責めるな」

「憎しみに負けない心を持ちなさい。また闇に飲まれそうになっても」

「シュウヘイ、諦めるなよ」

和倉、凪、孤門も先輩としてシュウヘイに大事なことを伝えた。

「これ、持って行って」

愛梨は、シュウヘイの手の中に一枚のカードを渡した。そのカードには、ルイズの姿が描かれていた。それもナイトレイダーの恰好をしている。

「気が付かなかったみたいけど、Bユニットの隊員の役割だったんだよ」

いつの間に…全然気が付かなかった。

すると、シュウヘイとテファの前に光り輝く扉が現れた。名残惜しいが、この世界ともお別れらしい。

「テファ、また一緒に歩いてくれるか？」

「…」

正直言うと、彼女はさっきのこともあってシュウヘイに恐怖心を抱いていた。でも今の彼からは、邪悪なところは見られない。

「…うん」

信じよう、どんなことが待ち受けても、自分の知る彼であり続けると。彼女は笑顔で頷いた。

新しいルイズのカードをしまい、シュウヘイはテファを連れてその光の先に歩みだした。

「みんな、行ってくる」

仮想世界だから、やはり幻かもしれない。でも、交じらせた思いは本物だと彼らはしっかり受け止めていた。

今度は、現実で会いに行こう。シュウヘイはそう決意した。

そのためにも、今違うルートで戦っている仲間のもとへ。

13　ネオス／明かされる真実

「やっぱり開かない！」

サイトからおいてけぼりにされたクリス。すでにサイトがカードで開いた扉は固く閉ざされていた。

あれから一時間、刀で扉を開こうとしたり、鉄を切り裂く風の魔法『エア・カッター』などで試してみたが、やはり開く様子がない。

「カードがなくては開かないのか…このままではあいつは…」

サキュバスのいい操り人形にされてしまう。

「こうなったら、ダメ元で！」

ヤケになったクリスはコモンマジック『アンロック』で扉を開けようとした。

カチャ…

「……え？」

扉は今までの苦労がまるでなかったかのようにゆっくりと開いた。

（なぜ早くこの魔法使わなかったんだあああああああああ！！！！）

基本中の基本の魔法で開くとは…基本を忘れてはならないと皮肉にも改めて思い知らされたクリス。

心の中で絶叫するが、ここで沈んでも仕方ない。その扉を開くと、先ほどとは違ったところが見受けられる部屋が彼女の目に飛び込んできた。
巨大な水晶に椅子に座り込む青い髪の少女。
いや、待てよ、あの悪魔のような角は…

「お前…」

その少女はリシュ。偶然にも目的であるサキュバスの彼女を発見したのだ。彼女も驚いたように顔をあげてクリスを見た。

「貴様！よくも我が友をたぶらかしおったな！」

刀を抜き、彼女に向けて剣先を向けるクリス。サムライ魂を持つ王族だからか、義理堅い彼女にとって仲間が耐えがたい目に遭うのは嫌で仕方ないのだ。

「待って！仕方なかったんです…」

「仕方ない？」

「お願い！私を彼の、サイトのもとに着くまで護衛をしてください！詳しいことはその途中で話します！」

「なんだと？」

信用できない。こいつはサイトを陥れようとした張本人ではないか。

「すぐに信じられないのはわかります。でも私…彼に謝らないといけないんです！」

とその時、二人の足元が突然弾け飛んだ。クリスは顔をあげると、ワルドがレイピア型の杖をこちらに向けているのが目に入る。

「ネズミが侵入していたとはな」

シュウヘイが自我を失って暴れている間、クリスに逆上したサイトは彼女から取り上げたカードで新たな世界な足を踏み入れていた。

その世界での彼は防衛チーム『ＨＥＡＲＴ』の一員として地球の平和を守ることになっている。はやくノルマを達成し、リシュを助けなくては…それしか考えきれなかった。

そして現在、同じＨＥＡＲＴの隊員『カグラ・ゲンキ』とともにカバンを必死に抱え込む少女を後ろに下げ、自身は目の前に現れた、凄まじいプレッシャーを放つ帝王のごときエイリアンと退治していた。

「その小娘を渡してもらおうか」

「ダークマターに飲み込まれたザム星はいまやお前たたのものだってのはわかった。でもな、彼女たちにはお前たちから故郷を取り返そうなんて意思はない。やっと地球という平和な星で住む場所を見つけたんだ。なのになぜ執拗に彼女を追う！？」

その彼女…それはルイズだった。この世界では希望を意味する『エスラー』という名前で『脳魂宇宙人ザム星人』の王族の一人として役割を担っている。
ザム星は宇宙に存在する黒い闇『ダークマター』に飲み込まれ、そのダークマターで誕生した怪獣たちによって故郷を追われてしまい、地球に漂流してきたのだ。今目の前にいるエイリアンは彼らザム星人の星を、怪獣たちを退けることで手に入れたのだが、今目の前にいるエスラーがいずれ自分からザム星を取り替えそうとしているのではと警戒しているのだ。

「私にはわかる。その小娘が私の障害になるとな」

「彼女にはザム文明の未来がかかってるんだ！お前に渡してたまるか！」

カグラが誰がお前なんかに！その意思を込めてエイリアンに怒鳴り付ける。

「話し合いは無駄なようだな」

エイリアンは自らの体を紫色のオーラに包み込むと、姿形を変えて巨大化していく。

その姿は先ほどの多少人間に近い姿ではなく、完全な怪人としての姿となっていた。

『宇宙進化帝王メンシュ ハイト』

「カグラ、お前はエスラーを連れて先にいくんだ！」

「でも…！」

サイトの提案に一言もの申そうとするカグラだが、それ以上反論できなかった。実はこの時のカグラの体はすでにボロボロだった。なぜならメンシュハイトと遭遇する前に現れた怪獣との戦闘で、勝ちはしたもののエネルギーのほぼ十分の九を使い果たしてしまっていたのだ。

仕方なく彼女を連れてその場から離れていった。

「なあ相棒」

デルフが鞘から顔を出した。

「あのサムライの娘っ子にあんな言い方しなくても…」

いくらサムライ魂を持ってたとしても女の子、この世界に来る前に置いていったクリスが深く傷ついているのではないかとデルフは気にしていたのだ。

「旦那、あっしもちょっと気になって…」

「黙ってろデルフ、地下水！そんなことよりもあいつを倒すのが先決だ！」

二人を黙らせると、サイトはブレスレットからウルトラゼロアイを取り出し装着、ウルトラマンゼロに変身した。

「シャ！」

〈ゼロスラッガー！〉

変身と同時に二本の宇宙ブーメランを投げつけるが、メンシュハイトはなんなくそれらをジャンプして避けた。そして、ギン！と目を開いて発生させた衝撃でゼロを吹き飛ばした。

「ウワアアアッ！」

たった一撃だけでもかなり重たかった。

そこからメンシュハイトは容赦なくゼロに向けてエネルギー弾を連射する。

「く！」

〈ウルトラゼロディフェンダー！〉

ブレスレットを盾にしてそのエネルギー弾を弾き飛ばすが、盾越しにも関わらず凄まじい衝撃が走り、ゼロの体に痺れを引き起こさせる。

「ッアッ！」

そこでメンシュハイトの攻撃は終わりはしなかった。超能力で動きを封じ、電撃を流し込む。

「グワアアアッ！」

その最中、ゼロは見た。自分の仲間であるクリスともう一人が、ワルドに追われているのを。

「リシュ！」

そのもう一人がリシュだとわかった時は偶発的にも力が上がり、無理矢理拘束を解いた。

「デュア！」

解放されたのはいいが相手はメンシュ ハイト。簡単に倒せる相手ではない。

だからといってリシュたちをほったらかしたらワルドの餌食にされてしまう。

だがその時、彼に思いがけない助っ人が現れた。

〈ヴェルザード！〉

父ウルトラセブンのものと酷似した宇宙ブーメランがメンシュ ハイトに直撃した。

「ギュオオオ！？」

ブーメランが飛んできた方を見ると、セブンのように赤いボディを身に纏う戦士がいた。

宇宙警備隊・宇宙保安庁所属でウルトラセブンの後輩。そして彼とよく似た容姿から「２１世紀に現れたウルトラセブン」という意味である名前が与えられた。

その名は『ウルトラセブン２１』！

「光の国の友よ！君の仲間が助けを求めてる。さあ、行くんだ！」

「助かったぞ、セブン２１！」

ゼロはすぐ自らの体を縮め、リシュたちのもとへ急いだ。

一方、カグラはメンシュハイトとセブン２１の戦いが展開される中、自分が変身に使うアイテム『エストレーラー』を見つめていた。確かに自分の体はボロボロだ。だが、このままじっとしているわけにもいかない。

「ネオス」

エスラーはカグラに話しかけてきた。

「このまま戦いに出たら、あなたは死んでしまう」

「ああ」

その時のカグラは、なぜか笑っていた。

「どうして、そんなに嬉しそうな顔をしているの？」

「俺が戦おうとしてるのは、宇宙の未来のためだ。決して死ぬことはない。俺たちは宇宙の未来になるんだ」

エストレーラーを強く握りしめ、カグラはそれを天に掲げた。

「ネオーーース！！」

その叫びと同時に光に身を包んだカグラ。その姿は初代ウルトラマンに酷似しているが、模様や額に埋め込まれた縦長のビームランプなどの違いがある。
宇宙警備隊・勇士司令部のエリート戦士『ウルトラマンネオス』！

「ヘア！」

しかし一人、それもボロボロの戦士が助太刀に来たところで戦況は変わらない。

メンシュハイトは空に浮かび、背中から翼を生やすと、セブン２１とネオスに向けて凄まじい突風を起こす。

「ウワッ！」
「デュ…！」

その突風は回りの建物ごとネオスとセブン２１を軽々と吹き飛ばした。メンシュハイトは二人が地面に叩きつけられると同時に目を見開き、超能力で二人の身動きを完全に封じた。

「ウワッ！グ…」
「デュォ…！」

そして、彼らのいる場所に火を起こした。その炎は地獄の業火のごとく辺り一体に燃え盛り、ネオスとセブン２１の体を燃やし尽くそうとする。

「まずい…」

エスラーはリュックを捨てると、ネオスたちの方へ走り出した。

ピコン、ピコン…

もうネオスのカラータイマーとセブン21のビームランプは点滅している。

彼女は自分の本当の姿、ザム星人の姿になると、二人に向かって温もりを感じさせる金色に輝く光のエネルギーを放射した。

そのエネルギーを受けたネオスとセブン21は先ほどまで受けていたダメージが消え、カラータイマーも元の輝きに戻って立ち上がった。

すかさず二人は光弾でメンシュ ハイトを攻撃する。

〈21アタックビーム!〉

〈ネオス・ナックル・シェル!〉

さらに額のビームランプから必殺光線を発射。

〈アドリウム光線!〉

〈ウルトラ・マルチビーム!〉

「デュ!」

「ヘア!」

「ギュオオオオ!!!?」

この逆境でまさか自分が押されるとは、メンシュ ハイトは予想だにしていない状況に圧倒され、逆に自分が瀕死の状態にまで追い詰められた。翼も失って地に落ちてしまう。

止めにネオスとセブン21はメンシュ ハイトに最大に力の溜め込まれた必殺光線を放った。

〈レジアショット！〉
〈ネオマグニウム光線！〉

「デュワ！」
「シュワ！」

その光線を受け、メンシュ ハイトは跡形もなく粉々に消し飛んだ。二人にエネルギーを与えたエスラーは、すでにその姿が消滅し、代わりに彼女のいた場所には一枚のカードが落ちていた。エスラーの役割を与えられたルイズのカードが。

その頃、クリスはリシュを連れてワルドの魔の手から逃れようとしていた。だがネオスとセブン21が苦戦している頃には、風の魔法「偏在」で作られたワルドの分身に周りを囲まれ、逃げ場を失ってしまう。

「一体どこけ行くつもりかな？リシュ」

「そこを退いてください！私はサイトに会わなくてはいけないんです」

ワルドに強く言い放つリシュだが、無論ワルドが聞くはずもない。

「お前はウルトラマンゼロを我々の操り人形にするための駒だ。その間に奴と接触させることは避けねばならない」

彼の目には、スクウェアメイジ特有の殺意が宿っていた。クリスは彼の視線から感じていた。数多の戦場を潜り抜けた経験と、

（人を殺した数…）

ゴクリと唾を飲み込んだ。どうにか切り抜けたいところだが、自分はまだ二段目のラインクラスのメイジ。ワルドよりも手数は少ない上に戦闘経験も浅い。刀で戦おうにも、以前ガンダールヴの力を使った時のサイトの力をワルドは知り尽くしている可能性が高い。

万事休すか…

しかし、そこで閃光のごとき光の槍がワルドの方に飛んできた。

〈ウルトラゼロランス！〉

ワルドはとっさに避け、彼の立っていた位置には光の槍がサクッと刺さっていた。

「ワルド！」

スタッ！と降り立ち、槍をブレスレットにしまうのは、ワルドが目の敵にもしている戦士、ウルトラマンゼロ。

「なぜ！？貴様は今頃この世界の怪獣と…」

リシュを捕まえていたワルドたちは、彼女の力を利用することで仮想世界で起こっていることをコントロールできた。つまり今頃メンシュハイトと戦い、その果てに自分たちの操り人形にできた。

リシュには夢を相手に見せて生命力を奪ったり自分の思い通りに動かす力がある。彼女の夢を実体化させた仮想世界で敢えて花を持たせ、気づかない間にサイトの記憶を嘘の思い出と少しずつすり替え、一方のシュウヘイには精神的なショックを与えて彼の自我を破壊し、リーヴスラシルのルーンが覚醒しそうになったところを回収する。それがウェザリーたちの作戦だった。だが、そのターゲットたるウルトラマンゼロ、平賀サイトがリシュの前に現れたのでは結局パアだ。

（逃げてる間に、この世界のウルトラマンに足止めをするようこの世界をコントロールしていたか。それでまた俺の前に…）

奴が、ウルトラマンゼロがいる。だがワルドにとっては個人的に都合がいい。

「ふん、ちょうどいい。計画は台無しになった」

「計画だと？」

そうゼロが尋ねてるときのワルドは、嬉しそうに笑っていた。やっと自らの願望を果たせる、野心家の顔。

「知る必要はない。どのみち貴様は…」

彼は懐からダークスパークレンスを取り出し、自分の胸に当てると、等身大のダークヒュドラに変身した。

「ここで俺の手で死ぬからだ！」

ヒュドラはゼロに飛び付くと、ゼロの背後に小惑星のような足場が浮かぶ異空間への入り口が開き、自分ごとゼロをその中に放り込んだ。

「「サイト！」」

二人はその入り口に入ることができなかった。向こうには自分たちが着地できる位置に足場がなかったのだ。

「異空間じゃ私の力も届かない…」

リシュの力でも、その空間に影響を与えるどころか入ることもできなかった。

二人にできること、それはサイト＝ウルトラマンゼロの勝利と無事だけ。

そんな二人に更なる魔の手が忍び寄ってきた。

「あらあら、あれだけ出るなって言ったのに…」

二人は、色気をわざと出しながらもその奥にある残酷な本性を現すその声に反応し、背後を向いた。

その声の主は、ウェザリー。無論闇の巨人の力を持つ強敵だった。

ルマージョン。二人が戦っている異空間である。足場がほとんどないその空間は、俊敏戦士の異名を持つヒュドラにとって得意の空中戦を仕掛けられる絶好のフィールドだ。

〈空中殺法！〉

「ヒェア！」

「グワッ！」

右腕に装着された爪型の武器『ドラフォーク』でゼロを真下にある足場に向かって叩き落とした。

ゼロが足場に叩きつけられたところで、更なる追撃として光弾を乱射する。

〈バルテスター！〉

「ハッ！」

「くっ！」

ゼロは瞬時にシャドーアーマーを装備、そしてゼロスラッガー（デルフ）を握ってガンダールヴの力を発揮して身体能力を向上させ、素早い身のこなしで次々と光弾を走って避けていった。だが狭い足場にいつまでも避けていけるわけではないのだ。

〈ヒューガスト！〉

「死ねぃ！ウルトラマンゼロ！」

ヒュドラはドラフォークに収束させたエネルギーを一気に放射、突風光線がゼロのいた足場に直撃し砕け散った。
足の着ける地面を失った以上、空中へ飛び出すしかない。

だが、それはヒュドラの仕掛けた罠でもあった。空中へ飛び出したところをマッハの速度でヒュドラはドラフォークで彼を突き刺そうとする。

「ハッ！」

「グゥ…！」

かろうじてゼロスラッガーで防ぐことはできたが、脇腹が隙だらけになったところをヒュドラは目に止まらない速さのキックで別の足場にゼロを突き落とした。

〈ジャノック！〉

「ヘア！」

「ウワッ！」

再び足場に叩き落とされたゼロに向かって、ヒュドラは突出する。
回し蹴りを放ち、避けようとしたところに蹴りを加える。

「っぐ！」

少し仰け反る程度だったが、すでにヒュドラはあの突風光線の構えをとっていた。しかし、どこか違う。まるで稲妻のようなものが纏われている。

「風系統の最強魔法ライトニング・クラウド。それを融合させた俺の必殺技を受けてみるがいい！」

凄まじいパワーを感じる。あれほどの力を込めてる上、奴のスピード重視な選出から考えたら速度もことも考えられる。

ならば…

ゼロは自らの体からエネルギーを搾り込み、額のビームランプに右手の人差し指と中指を当てると、指先に彼のエメリウムエネルギーが集まっていく。

そして、ヒュドラの必殺光線が放たれた。

〈ライトニング・ヒューガスト！〉

同時にゼロも指先から槍のように、そしてエメリウムスラッシュよりも細く研ぎ澄ませ、攻撃速度に特化した必殺光線を放った。

〈スピアゼロショット！〉

確かにヒュドラがたった今放ったライトニング・ヒューガストは威力を考慮すればゼロでも人溜まりもなかったかもしれない。

しかし、ゼロの新たな必殺技『スピアゼロショット』はパワーを狭い範囲にまで凝縮させた分エメリウムスラッシュよりもパワーがあ

るため、より固いものも貫けるようになった。その結果…

「グハッア…にぃ…!?」

ライトニング・ヒューガストという固い壁を切り裂くように突き抜け、ヒュドラの体を貫いた。それも急所に近い部分、心臓部のすぐ近くに。

「これで…終わったと思うな…俺は必ず貴様の命を奪い去ってやる…必ずな…」

貴族として平民に負けるなど自分には許せないこと。にも関わらず自分は負けた。屈辱感と自分にそれを味あわせた男への憎しみが彼を支配していた。

彼はやがてその足場から身を投げるように落ちた。

「……!」

ゼロは彼を助けようと手を伸ばそうとしたが間に合わず、結局ヒュドラはルマージョンの遥か下の方まで落ちていった。

ネオスの世界では、ウェザリーがクリスとリシュの前に現れていた。

「全く、ワルドもやり直しを効かせる気はなさそうね。計画が見事に台無しよ」

その美しき容姿はみるみるうちに歪み、魔女のような恐ろしい形相に変わっていた。すべてうまくいくはずだった。だが、リシュがサイトまたはクリスと接触してしまった。おそらくもうこちらの計画は筒抜けだ。もう最後の手段しか残されてない。

「リシュの力で私たちの操り人形になったウルトラマンゼロをハルケギニアの愚かな人間にぶつけて絶望させ、皆殺しにするつもりだったのに…！
こうなったらあんたを消すしかなくなったわ」

ウェザリーの殺意に満ちた視線にリシュは身を強張らせた。今サイトの援助は当てにできない。

「待て」

リシュを背後に下がらせ、クリスは刀を構えた。

「あんた、わかってるの？そいつはあんたのお友達を利用しようとした最悪の女じゃない。なのにその娘を助けて勇者ごっこ？」

「…」

とその時だった。ウェザリーの背後から一発の波動弾が撃ち込まれ、彼女に直撃した。

「っな！？」

後ろを向くウェザリー。そこにはなんと…

「どうにか間に合ったか」

ブラストショットを構えるシュウヘイ、そしてテファが杖をウェザリーな向けていた。

「お前は…くそ、ダンプリメも失敗していたか」

「次は貴様の番だ」

ディバイトシューターをセイバーに変形させ、ウェザリーに斬りかかるが、彼女は斬られる直前に黒い霧のようになって姿を消した。

「逃げられたか…」

腰のホルダーに武器をしまいこみ、シュウヘイとテファはクリスとリシュの元に歩み寄ってきた。

「みんな、無事か!?」

突然現れた次元の歪みから彼の声が聞こえてきた。ヒュドラことワルドとの戦いを制したウルトラマンゼロが無事帰還したのだ。彼は皆の姿を確認すると同時に変身を解くと、真っ先にリシュの姿が目に入った。

「リシュ！」

彼女に近づき、サイトは笑顔で話しかけた。

「サイト、来てくれたんだ」

「当たり前だろ！俺はお前を守るって決めてたんだからな！」

「ありがとう、でも…」

脅されていたとはいえ、彼をこんなにしたのは自分だ。だんだん彼女は自分の顔を曇らせていった。

「どうしたんだリシュ？やっと会えたのにそんなシケた顔して…」

「だって…」

そこから彼女は本当のことを話した。たとえ彼が信じなくても自分の口から告げねばならない事実。

自分が石堀に目覚めさせられ、言うことを聞かなかったら殺すと脅されたこと。自分のサキュバスの力で作り出した夢の世界を、彼らの協力で実体化し、その中にサイトたちを冒険させて少しずつサイトの記憶を書き換えたことを。本当に大切なのは自分ではないことも。

「そんな、そんなバカな！？」

「私はあなたに今まで会ったこともなかった」

「でも…俺はお前からお守りをもらってたんだぞ！ほら！」

やはり記憶を書き換えられた影響でリシュの話をまだ信じきれずにいた。その証拠であるリシュが幼い頃にくれた小悪魔の羽をモチーフにした翼のペンダントを取り出す。だが、それをリシュや他の面

々に見せた瞬間、そのペンダントは全く別のものに変化してしまう。
彼の本当に大切にしてる人、ハルナからもらったアイスラッガーのペンダントに。

「サイトがこの城に来たのは、私じゃなくてルイズを助けにきたのが、本当の理由…
寂しかったの。やっと目が覚めて自由になれたって思ったら…また昔みたいに…」

「昔？どういう意味だ？」

辛い過去を持っているが故か、シュウヘイはその話に反応した。

「封印される前、私は人間の男の人と恋に落ちたの。それもサイトによく似た人。でも種族の違いとか迫害、私のせいで死んじゃったの。だから、サイトみたいな男の子とせめて友達になりたい。それをあいつらに利用された…
全部、私が起こしたこと…」

そう言ってリシュは酷いことをした後悔のあまり泣き出しそうな顔になる。それを見たサイトは慌てるように言った。

「止せって！そんな顔するなよ」

「そうだよね、私に泣く資格なんて…」

「そうじゃなくて！」

「え？」

違うのか？リシュは驚くように顔をあげた。

「そりゃあさ、俺の記憶勝手にいじくり回してふざくんなって思ってる。でも本気で怒る気になれないんだよな。確かにリシュと一緒だった記憶は嘘だった。でも俺はリシュの笑ってる顔が大好きだった。だから、泣くよりも笑ってくれた方が嬉しいよ」

「サイト…」

同じだ。自分が好きになった男性のような無償の優しさ。思わずウルッときてしまいそうだ。

「…ずいぶん優しいな」

自分には怒鳴り散らしたくせにとジト目でサイトを睨むクリス。

「ご…ごめんなさい…」

つい丁寧語でサイトは謝った。

「女には苦労するな。お互い…」

「人のこと言えない癖に…」

シュウヘイの一言にテファは口を尖らせて言った。こっちもこっちで苦労したのだから。そうだったな…と彼は頭の後ろを掻く。

「ふふ…」

なんだかおかしく感じたのか、リシュはクスクスと笑いだした。

「あっ、そう！その顔だよ！」

それを見てサイトは言った。

「リシュとの思い出は嘘なのは事実だけど、君が笑ってくれて嬉しいって気持ちは本物だから、な？」

リシュはそのサイトの言葉で救われた気がした。そして同時にドクンッと胸が高鳴る感じがする。

「ところで平賀。お前あのチビガキのカードはいくつ手に入れた？」

「あっ…確か…」

シュウヘイに言われ、サイトは自分のポケットを探ってみる。ルイズのカード、レナとジュリと影美の三枚。

「シュウヘイは？」

「さっき拾ったものも含めて五枚ある」

シュウヘイもポケットからカードを出した。ナイトレイダーBユニットルイズ、敦子、マイ、エリー、そしてザム星人エスラーの五枚。

「あっ、そのカードいつの間に拾ってたのか？」

エスラーの描かれたカードを指差してサイトは驚きの表情を表す。

「世話が焼けるな…その様子だと、本来ならお前が持つはずのカードだったんだろ？」

「悪りい…」

「カードは、お前が持っておけ。お前のマスターのものなんだからな」

「ああ、そうするよ」

これで八枚すべてのルイズの心のカードは揃った。ルイズを再び目覚めさせるための素材、使い魔として大事に持たなくては。

「現実世界には戻れるか？」

シュウヘイはリシュに訪ねると、彼女は頷いた。

「この世界も私の力で成り立ってもいるから、出口を作ることができます」

彼女は祈るように合掌して目を閉じると、目の前に現実世界へ続く扉が現れ、開かれた。

「よし、行こう！」

仲間を、ルイズを助けるために。そして、ウェザリーを止めるために彼らはその扉の先を潜っていった。

１４　暗黒を消し去る零

「ああ、よかった！ルイズの心を全部取り返したのですね！」

現実世界、ネガ・ハルケギニアのトリスタニアの城に戻ってきたサイトたち。

「ありがとうサイトさん、シュウヘイさん、そしてクリス。私のお友達のためにここまでしてくださるなんて、感謝の言葉が見つかりませんわ」

「いえ、そんなにかしこまらないで…」

入り口ホールで脱け殻となったルイズの体を見張っていたアンリエッタとウェールズと合流し、これまでの経緯を簡潔に話した。

「ルイズ…」

サイトはルイズの脱け殻となった体に近づき、試しにルイズの心のカードを掲げてみた。が、何も起こらなかった。

「ウェザリー…あの女を倒さなくてはならないようだな」

「そうか…やはり戦わないとダメなのか」

サイトとシュウヘイの入った仮想世界への扉がなくなっている代わりにホールの奥行きに新たな扉が一つ置かれている。

「クリスとリシュも皇子様や姫様と一緒にここで待っててくれ。俺

とシュウヘイでウェザリーに会いに行く」

「サイト…大丈夫なのか？」

「気をつけてね…」

「大丈夫だって。必ず戻るから」

サイトはクリスやリシュに笑顔を見せる。

「シュウ…」

「そんなに心配しなくても平気だ。さっきみたいなことは起こさないし、死ぬつもりはない。ここで待ってるんだ」

心配そうに自分を見つめるテファに、シュウヘイは彼女の肩を軽く叩いて言った。

「くれぐれも気をつけてくれ。二人とも」

「あなた方に始祖のご加護があらんことを」

ウェールズとアンリエッタの祈りに後押しされるように、サイトとシュウヘイはその扉を開き、その先にいる敵の元へ向かった。

神殿、居住区、そして彼らに馴染みのある巨人たちに酷似した朽ち果てているいくつもの石像…
そこはまるで古代ギリシャの遺跡のようだった。

「この石像、ウルトラマン？」

朽ち果てた石像には、彼のウルトラマンゼロとしての記憶の中であったことのある戦士と似た石像もある。印象的かつ興味を抱かずにはいられない場所だ。

「ルルイエ…とある世界に存在していた古代文明の街」

二人はその声の聞こえた方を見ると、ウェザリーが二人の前に姿を現した。

「このフロアはそれをただ再現しただけの見せかけの遺跡だけどね。計画が台無しになった今、あなたたちにはこの石像たちのように朽ち果ててもらわなくてはならないといけないわ」

戦う意思を見せ、彼女は金色のスパークレンスを手にとるが、その瞬間サイトは彼女に平手をバッ！と見せた。

「待てよウェザリー。どうしても戦うのか？」

「なんですって？」

「お前の過去はトリスタニアで起こった獣人事件で知った。確かに自分の身に起これば凄く辛いしやり返したくもなる。でも、その憎しみで結局なにを手に入れたんだ？」

サイトには憎しみだけで力を奮うおろかさを知っている。以前シュウヘイの養っていた幼い少女を憎しみのあまり、彼女を捕まえていたビーストごと傷つける結果に終わってしまった。残ったのは結局、虚しさだけだ。彼女の父と母の幸せを奪われた怒りや悲しみは痛いほどわかっているつもりだ。

「頼む。もう誰かを傷つけるのはやめるんだ！これ以上戦っても、お前はその心を持て余すだけだ。後悔しか残らない」

「…そんなの知らないわよ。あなたは本当おめでたいわね」

サイトの必死の願いを冷ややかな返事で一蹴するウェザリー。話を聞く気すら持ってなかった。

「だからこの世界の貴族は自分の行いの愚かさにいつまで経っても気づかないのよ。それでも私を説得するつもりなら…」

彼女は金色のスパークレンスを開き、黒い稲妻に身を包むと巨大化し、黒く鈍った銀色の女のウルトラマンの姿に変わった。

『闇の愛憎戦士・ダークカミーラ』

「そのままなにもせずここで死になさい！イェア！」

〈カミーラウィップ！〉

彼女は右手に氷の鞭を出現させ、サイトたちに向かって振り回した。

「…ここまで聞く耳持たずじゃ連行できそうにないな」

シュウヘイはカミーラの鞭を避けながら呟いた。

「相棒、ここは戦うしかなさそうだぜ」

「あっしもいますよ旦那。このまま説得続けたら死ぬだけですぜ」

「…ああ、わかった」

サイトはブレスレットからウルトラゼロアイを目に装着、シュウヘイはエボルトラスターを掲げてウルトラマンゼロとウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

「デュワ！」

「シェア！」

カミーラは二人が変身したのを確認すると、鞭の速度をより速くした。反撃の余地すら与えないつもりなのが認識できる。

〈ゼロスラッガー！〉〈シュトロームソード！〉

「デルフ・地下水、行くぞ！」

「おう／へい！」

ゼロは二本のブーメラン、ネクサスはジュネッストリニティにチェンジし光の剣を出現、果敢に振り回してカミーラの鞭を打ち返していく。

「ジュ！デュア！」「ハッ！デア！」

「少しはやるようね。なら、これでどう？」

〈アイゾード！〉

カミーラも鞭を氷の剣に変化させ、手始めにゼロに切りかかってきた。

「フ！ハ！」

次々と迫り来る剣の攻撃を防ごうと、ゼロスラッガーで防いでいくゼロ。ゼロスラッガーとアイゾード、剣と剣のつばぜり合いが起こるとカミーラは口を開いた。

「あの最悪の夜、私は貴族だけでなく人間達からの迫害に毎日怯えて生きてきた。単なる人間と獣人のハーフなのに化け物扱いされ、いつ殺されるかも分からず、ただ光の無い明日に縋りながら…ね！」

〈カミーラウィップ！〉

背後から剣を振り上げて切りかかってきたネクサスの両腕に、カミーラは左手から新たに作り出した鞭を絡みつかせた。そのせいで彼は攻撃を相殺されてしまう。今度はネクサスに話しかけてきた。

「あなたは闇を抱え、しかもあのお方から認められているのになぜ闇を否定するの？心のどこかで闇を恐れてるのかしら？」

「そうじゃない。俺はただ…」

ネクサスはリーブスラシルのルーンを光らせ、ビースト『ペドレオン』から修得した紅い雷を剣に通していく。

「あんたらの匂いが嫌いなだけだ！デア！」

〈雷光閃！〉

勢いのまま、彼は雷の纏った光の剣で無理矢理カミーラの鞭を引きちぎった。その隙にゼロはバック転で一度距離を置き、カミーラに緑に光る閃光を発射した。

〈エメリウムスラッシュ！〉

「デュア！」

「ックア！」

光線を受けたカミーラはダメージを受け、少し仰け反った。だんだん苛立っていく彼女はゼロに向けて鞭を振るおうとしたが、真上からネクサスが剣で串刺しにする勢いで落下してきた。辛うじて避けるが、剣が地面に突き刺さった瞬間彼の周りで地面が爆発、カミーラはその衝撃で宙に打ち上げられた。

〈流星刃！〉

「フ！」

「ウアアアアア！！」

宙に浮き上がった彼女はやがて地面に激突する。今のはかなり効いているようだ。

「なぜ…」

カミーラは立ち上がると、再び二人に尋ねてきた。

「それだけの力を持ちながらあのクズな人間の為に命をかけられるの？あんな世界、一度壊してから作り直したほうが…いいじゃない」

しばらくの沈黙の後、ゼロはその質問に答えた。

「俺達はただ、平和の為に信じられる人に力を貸すだけでいいんだ。人間に復讐したってなにも生まれやしない」

力を持ってるだけの戦士や権力者が無理に世界を変えようとしても、余計に混乱を招く可能性が高いのだ。どんなに世界を思っていたとしても。ネクサスも口には出さなかったがゼロと同じ考えだった。

「本当に甘いわね…まあいいわ。どのみちあなたたちとは相容れないようね。思う存分、お前たちを殺せる」

カミーラが自分の武器を消した瞬間、彼女は辺りから発生させた闇に身を包み始めた。とてつもなく深く、重苦しい。二人は闇で姿が見えなくなっていく彼女を見ながらそれを感じていた。

「これが、闇…」

「生きてて６０００年、あんなの初めてだぜ…」

ゼロスラッガーに宿っていたデルフが恐ろしさの余り声を震えさせていた。彼らのいる場所の上空に闇はより濃さを増し、やがて中央からおぞましいが姿の怪物が顔を出した。

『暗黒魔超獣デモンゾーア』

〈デモンジャバー！〉

デモンゾーアの口から氷の槍がマシンガンのように連射され、二人のウルトラマンに向かって降り注いだ。その速度は決して目で追えるものではなく、二人は防ぐこともできず次々とその攻撃に苦しんでいった。

「ウワアアア！！！！」

「ヌアアアア！！！！！！」

ピコン、ピコン、ピコン…

不味いことに二人が倒れた瞬間彼らのカラータイマーがエネルギーが底をつきかけていることを知らせていた。

「貴様らの甘い光で私の闇を消し去ることなどできない」

デモンゾーアの口元に冷気が再び纏われていく。次の技で止めを刺すつもりだ。だがその時、ゼロのブレスレットが輝き、八つの光が飛び出した。それはルイズの心のカードだった。カードたちは誰の目にも映らないほど一瞬だけ光ると、いつの間にか消えていった。

「脅かしおって…ん？」

最初は気にも留めなかったカミーラだったが、予想だにしない出来事が起こった。

ビシュン！

「ぐう！？」

どこからか緑色に光るビームがデモンゾーアに向かって飛んできた。倒れていた二人の戦士にも一体何が起こったのか理解できなかった。彼らの上空に、ティガの世界の防衛チームＧＵＴＳの特徴的な機体であるガッツウィング１号が姿を現した。

「ガッツウィング！？」

それだけではない。その後継機に当たる機体の一体であるガッツイーグルαも飛来した。

「サイトには…」

「手を出させないわ！」

その機体たちにはなんと、ウィングにはレナと敦子、イーグルにはマイとエリーが搭乗していたのだ。さらに、新たに現れたクロムチェスターδにはナイトレイダー姿のルイズも乗っていた。

「喰らいなさい！クアドラブラスター！」

チェスターδから発射されたビームがデモンゾーアに直撃する。

「あの怪獣の本体は中央の頭のようです。そこに」「集中攻撃をして！」

エリーと敦子は各機に的確な指示を与え、他の三人はそれに従いながらデモンゾーアに攻撃した。

「おのれ、小娘が小癪な真似を！」

怒るカミーラに呼応するように攻撃しようとするデモンゾーアだったが、そこに先ほどのビームより強力な光線が撃ち込まれた。

〈ビクトリューム光線！〉

〈シャドリウム光線！〉

「デアア！」

「ダア！」

その光線を放ったのは宇宙正義の守護者ウルトラマンジャスティス・スタンダードモードとロボット超人ウルトラマンシャドー。

『何をしてるのサイト！？立ちなさい！』

シャドーの無線マイクから影美の怒鳴り声が轟く。その時の、エネルギーがなくなりかけていたゼロとネクサスに暖かい光エネルギーが流れ込んでいた。その発生源は、巨大化していたザム星人エスラーのハサミからだった。

「私の力で、立ち上がって！」

エスラーの治癒で二人のウルトラマンのカラータイマーの点滅は終わり、元の青い輝きを取り戻し、ウルトラマンゼロとウルトラマンネクサスは立ち上がった！

「ジュワ！」「ディア！」

「おのれえええええええ！！！！！！！！」

ことごとく邪魔をされたカミーラの怒りは頂点に達した。口に纏った冷気を一気に放出しようとしている。

「平賀」

ネクサスが零の顔を見ると、ゼロはゆっくりと頷いた。八人のルイズたちに視線を向けると、彼女たちもまた頷いてみせ。決着を今こそつける。

ジャスティスはクラッシャーモードにチェンジし、それぞれ必殺光線、そして必殺ビームの発射準備に取り掛かった。

「よし、行くぞ！」

〈ジャブラッシュ！〉

「ばあアアあああああ！！！！！！！！！！！！」

デモンゾーアの口から氷の槍を光線状にして放つ必殺技がゼロたちに向かって発射された。

「デュアアアアアア！！！！！！！！！」

そのゼロの怒涛の叫びと同時に彼らも自分たちの必殺光線で迎え撃った。

〈ワイドゼロショット！〉〈オーバークロスレイ・シュトローム！〉〈ダクリューム光線！〉〈シャドリウム光線！〉

四人以外の三機の戦闘機と、エスラーも援護射撃として共にビーム光線を放つ。彼らの光線とデモンゾーアのジャブラッシュが激突する。

「私が、この私が…お前たちの様な闇から逃げるだけの臆病者の集まりに負けるものかあああ！！！！」

互いの技が激突する中、カミーラは憎しみと怒りのこもった怒声を轟かせた。だが、ネクサスがその言葉を返すように言った。

「だったら貴様は…闇に逃げるだけの臆病者だ！！！」

「そんな奴に俺たちのビッグバンは…」

ゼロも続けて言い放ち、光線に自分の全てをかけて力を開放した。

「止められないぜえええええええええええ！！！！！！！！！！！」

「なっっっっ！！！？」

その時、幻想だとは思うがカミーラは確かに見た。ゼロが銀色に輝く伝説の鎧を身につけ、ネクサスが二つの翼を持った神秘的な光の戦士に変わっていたのを。その油断が、ジャブラッシュが彼らの光線に押し返されることとなった。

「ぎゃああああああああああああああああああああ！！！！！！」

ウルトラマンたちの光線をもろに受けたデモンゾーアはカミーラご

と空の上で大爆発を起こし、消滅した。

「光…私も欲しかった」

サイトの腕の中で彼女は弱々しい声で言った。彼女が復讐より望んだもの、それは奪われた父や母との何気ない日常。

もう彼女に自分たちと戦うだけの力はなかった。サイトたちに看取られながら、ウェザリーはゆっくり目を閉じ、その目は二度と開かれなかった。

「…」

できれば彼女を助けたかったが、もう過ぎてしまったことだ。サイトは彼女をゆっくりと下ろし、シュウヘイや八人のルイズたちの方を向いた。

「これで、終わったんだよな」

「おそらく、な」

サイトの言葉にシュウヘイは頷きながら答えた。次にサイトはルイズたちを見る。

「あの時、みんながいなかったら俺たちはやられてたかもしれない。ありがとう」

「気にするな。私たちはお前のマスター」

「使い魔だもの。ちゃんと助けないと貴族の誇りが丸つぶれよ」

ジュリと、その後に影美が代表して言った。

すると、彼女たちは光に包まれ一つに集まると、一枚のカードになってサイトの手のひらに収まった。その絵柄には、いつもの学生服を来たルイズの姿が描かれていた。

「行こう、姫様たちが待ってる」

サイトとシュウヘイは仮想のルルイエから仲間たちの元へ歩いていった。

ネガ・ハルケギニアから出て元のハルケギニアのトリスタニアの城に戻ってきたサイトたち。この時ウェールズの存在を明かされる、テファがエルフであることがバレるのを避けるため、シュウヘイたちは先に帰ることにした。ぜひお礼をしたいとアンリエッタはシュウヘイに言うが、シュウヘイは「どうしてもなら、貸しの形でとっておいてくれ」と断った。

今、サイトとアンリエッタ、そしてクリスとリシュはルイズを客室のベッドに寝かせている。果たして彼女は目覚めるのか…？

サイトはルイズのカードを彼女の頭の上で掲げると、カードは光の滴となって彼女に降り注いだ。

「ん…」

光の滴が降り止むと同時に、ゆっくりとルイズの目が開かれた。

「ルイズ！」

アンリエッタは泣きながら飛び付くように彼女に抱きついた。

「よかった…本当によかった…」

「姫様…私、今まで？」

ルイズはまだ寝ぼけてるらしく、今の現状を理解できずにいた。

「ルイズ、気分はどうだ？」

サイトは彼女の顔を覗き込む。

「私、さっきまでなにをしてたの？それにいつからこの城に？」

え？と一同は間の抜けた声を漏らした。実はルイズ、先ほどまでのことを全く覚えてなかったのだ。自分がウルトラマンだったら宇宙人だったり、そうであった記憶が完全に消えてしまっていたのであ

る。

その時の彼女に新たに映ったのは、リシュの姿だった。自分が認めるほどの可憐な顔立ちに美しい青色の髪、どういうわけか吸血鬼みたいに犬歯が目立ち、さらには黒い角のようなものが頭から生えている。ありもしない疑いをサイトに抱き始める。カミーラよりも真っ黒なオーラを放出しながら。

「あの～ルイズさん？どうかしたんですか…」

なんでルイズが不機嫌なのかわからず、恐る恐る話しかけるサイト。

「私の知らない間にまあああた、女の子といちゃついてたようねえええ…」

「え？あいや、それは誤解…」

ベッドから降り、鞭を突きつけるルイズにサイトは後退りしていく。なんとかアンリエッタたちに助けを求めようとしたが、そのルイズのオーラに敵わなかったのか三人は作り笑いを浮かべながら部屋から出ていこうとしていた。

（薄情者おおおおおおおおおお！！！！！！！！）

「この、エロ犬うううううううううううううううう！！！！！！」

この後、屍のように倒れてるサイトがその客室内の床に倒れていたと言うのは言うまでもない…

それから数日後、表向きはトリステインへの留学だったため、クリスは魔法学院でしばらく授業を受けるようになった。格好が生徒たちから見て変わっていたため不思議がられてはいたが、彼女の授業態度は完璧と言えた。暇な時はサイトと剣の稽古をよくやっていた。ギーシュが恨めしそうにサイトを白い目で睨んでいたがサイトは断固無視した。

リシュはクリスが故郷に帰るまでの間は見習いメイドとして働いていた。角はちゃんと隠していたので何事もなくこなしていった。本当ならクリスの封印魔法で封印される予定だったが、サイトがそれに反対、普通の人間として暮らさせてやりたいとクリスに必死に説得した結果、彼女の封印は中止、もしものことがないかぎり見送りされることになった。

そして一週間たち、クリスはリシュを連れて故郷に帰る日がやってきた。

「じゃあなクリス。リシュのこと、よろしくな」

「ああ、こちらでも何か手を打ってみるよ」

サイトの言葉にクリスは笑みを浮かべた。

「そういやリシュって、嘘の思い出の中じゃ、俺を兄ちゃんみたいに思ってたんだよな」

「うん…」

ちょっと恥ずかしいのか、リシュは少し頬を赤く染めていた。

「次に会えるのを楽しみにしてるよ」

寂しさを圧し殺しながら笑顔で言うサイトに続いてデルフが鞘から顔を出す。

「そん時は気いつけろよ。相棒は女ったらしだからな」

「黙ってろデルフ…」

少しドスの入った声で呟きながらサイトは鞘にデルフを押し込んだ。

「ではまた会おう、サイト」

「さよなら、『お兄ちゃん』」

「ぶふっ！？」

クリスの何気ない別れの挨拶まではよかった。しかし、リシュのまさかの『お兄ちゃん』発言はサイトのハートにズギュン！ときてしまっていた。

気をとりなおして、サイトは二人の乗る馬車が見えなくなるまで見送っていた。

しかし、そこで彼に異変が起こった。

（あれ？めまい…か？）

視界がかすれ、なんだか体が少しだるい。あの戦いの疲れがまだとれてなかったのだろうか？

まさかその異変が、彼に重大な影響を及ぼしていることを、この時の彼は知るよしもなかった。

１４　暗黒を消し去る零（後書き）

次回はいよいよアニメ第二期です！やっとだぁ…

0　怪獣使いジュリオ

「行かないでよ！」

クリスとリシュが学院を去ってから間もない頃、学院の男子生徒たち全員は軍に駆り出されることになった。ギーシュも例外ではない。実を言うとアルビオン＝レコンキスタとトリステインの攻防は続いていたのだ。

「モンモランシー、そんなに悲しい顔をしないでくれ。笑顔で見送ってくれないと辛いじゃないか」

「どうしても行くの？死ぬかもしれないのよ…」

「貴族にとって戦場で死ぬことは名誉なんだ」

「名誉がなによ！結局死んだらもう会えないのよ…」

そのモンモランシーの言葉にギーシュは思わず涙ぐんできた。

「そんなに僕のことを思ってくれていたのか…」

なんだかんだでこの二人やはり仲はよかったりする。喧嘩するほど仲がよいと言うが、よい例になるものだ。

「男子生徒全員駆り出されるなんて」

「戦争か…」

ギーシュの「戦場で死ぬことは名誉」の意見はサイトから見れば愚かでしかない。自分の命をなんだと思ってるんだ。名誉と人の命なんか天秤にかけるまでもないほど価値の差がある。でも、彼に戦争を止めるだけの頭なんかない。見てることしかできないのだ…。

とそんな時、空から何かが飛んでくるのが目に入った。

「あれはなんだ?」と生徒たちはざわめきだす。その飛来してきた何かは鳥のような姿をしている。いや、鳥だった。

「あれは…リトラ!」

「あんた、あれ知ってるの!?」

原始怪鳥リトラ。初代ウルトラマンが地球に現れる以前、サイトのいた地球に最初に現れた怪獣の一体。古代怪獣ゴメスと死闘を繰り広げ、自らの命を犠牲にゴメスを倒した、数少ない人類に友好的な怪獣だ。

ルイズに説明したが、彼女には理解できない部分があった。

「そのリトラが一体なにをしに来たのよ?」

確かに、リトラが友好的だからといって人間の前にホイホイと姿を現すはずがない。ならばなぜ?

実はそのリトラは、ある人物の指示でここに来たのだ。

「キェエ!」

リトラは大胆にも学院の校庭の芝生に身を降ろし、同時にその背中

から一人の金髪の凛々しい青年が降りてきた。

「キャーーー！！！！」

彼の姿を見た瞬間女子生徒たちは自分たちの彼氏との別れの悲しみをすっかり忘れてその青年に見とれてしまう。キュルケはもちろんだが、さっきまで感動的な場面を見せてくれたモンモランシーまで頬を染めて釘付けに。唯一そうでなかったのはタバサだけだった。

「あの、モンモランシー…」

「あら、あんたまだいたの？」

「そ…そんな…」

構ってくれとせがむギーシュを冷ややかな視線で寄せ付けないモンモランシー。日頃の女癖が災いしたのも原因だろうが、モンモランシーも結局ギーシュとあまり変わらないようだ。

青年はルイズとサイトの方へ近づくと、白い歯をキラリと光らせながら笑顔で自己紹介した。

「僕はジュリオ・チェザーレ。ロマリアの神官さ。よろしく」

「はっ、はい…／／」

思わずルイズは彼の顔立ちの良さに顔を赤くしてしまった。

でもその熱気もすぐに覚めてしまう。

「女子生徒、全員並べ！」

アニエスら銃士隊が突然学院に総動員でやって来た。

アニエスがこの学院に来たのは、男子生徒がいない間この学院が狙われることを予想したアンリエッタの判断によるものだった。よって彼女は銃士隊の隊員たちと共に、女子生徒たちに最低限の自衛ができるようにするための訓練を行うことにした。

男子生徒たちが学院を去ってから訓練は始まった。女子生徒たちには先を布で覆った棒が配布された。ちなみに神官であるジュリオは立場上軍に志願できなかったため、一緒に訓練に参加した。

だが彼女たちはメイジで貴族。平民出身である癖に上から目線のアニエスを快く思わないのがほとんど。魔法だってあるのに棒など必要ない。

「こんな棒いらないわ。実戦用の魔法の訓練の方がいいじゃない」

モンモランシーは棒を捨てて杖を取り出し、アニエスに抗議した。

「ほう…ならば！」

瞬時にアニエスはモンモランシーの手を捕まえ、杖を取り上げてしまう。

「どうした?魔法で私を倒してみろ」

「痛い!離してよ!」

そろそろ痛がっていたので彼女はモンモランシーを離し、杖も返した。

「敵は呪文の詠唱時間さえ与えてはくれんぞ。これは最低限自分の力のみで身を守るための訓練だ。お前たちにあわせて魔法の使用許可のある訓練も行う予定だから安心しろ。さあ、死にたくなければ文句を言わずに訓練に励め」

それからようやく訓練が始まった。まずは突きと構えの繰り返し。ジュリオはそのルックスのおかげもあってキュルケを含むたくさんの女子生徒から一緒に訓練しようと誘われたが…

「ごめんね。僕の相手は一人だと決めてるんだ」

彼が決めていた相手、それはルイズだった。

「なんでルイズなのよ!」

納得できないキュルケは悔しそうに歯をむき出しにする。

「ほら、遠慮なく」

「はっはい。やあ!」

誘われるがまま棒を構え、ジュリオに突出するが、ルイズはさすがになれてないものだからあっさりと避けられた。というか肩に手を

回された。

「ダメダメ。そんなんじゃ簡単に避けられちゃうよ？」

「あ、はい…／／」

サイトは平民でこの学院にとどまってるだけの存在だからか、訓練には参加していない。暇そうにルイズたちの訓練を見ながらあくびしていた。

とその時、いきなり木剣で銃士隊副隊長のミシェルがサイトに攻撃を仕掛けてきた。

「！」

とっさに反応したサイトはデルフの峰で防ぐ。

「悪くない反応だな」

「いきなり何するんですか！？」

「敵はいつ来るかわからん。お前も死にたくなければ訓練を参加しろ」

ミシェルは二本持っていた木剣のうち一本をサイトに渡す。

「さあ来い。木剣でも私は倒せるぞ」

「やるしかないか…せあ！」

ガキン！と凄まじくぶつかる音がつばぜり合いの展開と同時に二人の木剣から響いた。それからしばらく経ち、二人の息があがったところで休憩に入った。サイトが水分補給をしていると、ジュリオが彼に話しかけてきた。

「見事な太刀筋だったね」

「そりゃどーも」

実を言うとサイト、地球で暮らしてた時からなのかジュリオのようにチャラチャラした奴が嫌いなのだ。個人的にあまり好印象を持てない。

「なんか嫌われてるみたいだね。じゃあ、僕と勝負してみないかい？」

「は？」

「君の実力がどれくらいのものか見極めておきたいんだ。そうだな…勝った方がルイズとキスするっていうのはどうだい？」

「なななによそれ！勝手に決めないでよ！！」

聞き捨てならんと顔を真っ赤にしてルイズはジュリオに怒鳴りだした。

「危ないから木剣でどうだい？」

「別にいいけど…」

サイトはデルフと、ベルトのホルダーにしまわれていたウルトラガンと地下水を下ろし、立ち上がって木剣を手にとった。

「ちょっと止めなさいよ！」

ガンダールヴの力は本来実戦用の武器じゃないと発揮できない。現時点ではデルフなどの武器がないと力を出しきれないのだ。ルイズもそれをわかっていた。けがでもしたら大変だと思っている。だがサイトから見れば絶好の機会にも考えれた。ガンダールヴの力を木剣でも発揮できるようにするとか、ガンダールヴなしでどこまでやれるかを確かめることができるかもしれない。

女子生徒たちが二人の戦いを、主にジュリオの勇姿を名東黄色い声をあげながら周りを囲んだことで、立派なフィールドが出来上がった。

「もう…」

ため息を着きながらもルイズは内心サイトの勝利を期待していた。もしサイトが勝てばサイトと…

（ってなに考えてるのよ私は！！これじゃご主人様の面子丸つぶれじゃない！／／）

顔を赤くしてブンブン！と振り払った。

「じゃあ、遠慮なくきていいよ」

「けがしても知らねえ、ぜ！」

サイトが木剣の先を突き出しながら突撃するが、ジュリオはいとも簡単に避け、反撃に転じる。それでもサイトはジュリオの木剣をことごとく防いでいく。
それなりに互角の勝負と言えた。

「すごい、サイトあんなに剣の腕を上達させてたの!?」

「グラモンとかいう奴と個人的に訓練はまめにやってたみたいだぜ。あのサムライの娘っ子ともな」

いつの間にギーシュやクリスと訓練なんかやってたんだ?

「勝てそう?」

今にも出そうな下心を隠しながらルイズは尋ねてみる。

「負ける可能性もあるな」

「え!?」

「あのジュリオとかいうのまなかなかの達人だ。相当剣の扱いに慣れてやがる」

(サイト…)

サイトを心配そうにルイズが見つめるなか、女子生徒たちからは「ジュリオ様頑張って!」と男子から見れば不快な応援が聞こえてくる。でもその中に意外なイレギュラーがいた。

「サイト!負けたら承知しないわよ!」

モンモランシーだった。もしジュリオが勝ったらルイズとジュリオがキスすることになる。それが嫌らしいのかサイトの応援をしていた。キュルケはその様子をクスクス笑って見て、タバサは無表情のままサイトとジュリオの勝負を見ていた。そのタバサはサイトを見て違和感を感じていた。

（太刀筋が、ウルトラマンゼロに似てる…）

そして、その勝負の行方は…

ガキン！

「まっ…参った…」

ジュリオの木剣が宙に打ち上げられて地面に突き刺さる。サイトの勝ちだ。

「きゃあああジュリオ様あああ！！！！」

女子生徒たちは一斉にジュリオのもとへ駆け寄る。まさかギーシュの時のようにジュリオが負けるとは思ってもなかった。

「ほらよ」

サイトは気に入らないとはいえ、地に膝をつくジュリオに手をさしのべた。

「はは、君は優しいね」

笑いながらジュリオは彼の手をつかんで立ち上がる。

「君は男としても悪くないね。ルイズだけでなく君にもキスしたいかな」

そう言われるサイトは全身に鳥肌がたつのを感じた。

「止めろよ気持ち悪りい！」

「なに真に受けてるんだい？冗談に決まってるじゃないか。ははは！」

弁舌ではジュリオの方が上手。サイトは正直そう思わざるを得なかった。

とその時、学院から見える山の方角からなにかが爆発する音が聞こえてきた。

「なに？この音…」

女子生徒たちは不安がり、銃士隊の隊員たちは警戒心を強める。

その時、向こう側から現れたのは『暴れん坊怪獣ベキラ』。ウルトラマンレオと死闘を繰り広げた怪獣だ。ベキラの口から花火のような炎が勢いよく噴射されている。

「学院の教員と生徒たちは急いで避難！我が銃士隊の隊員たちは大砲の発射準備だ！あの怪獣を攻撃する！」

アニエスの指示で、あらかじめ学院の外壁に設置された大砲のもと

へ、隊員たちは集まっていく。

「きゃあああ！！！！」

女子生徒たちはベキラのブレッシャーに押され避難していく。
その最中、どさくさに紛れてサイトはルイズに気づかれないように人気のない場所へ向かい、ウルトラゼロアイを取り出し、装着した。

「デュア！」

たちまち銀色のマスクにおおわれた彼はウルトラマンゼロに変身、ベキラに立ち向かっていった。

彼は気づいてない。まさかジュリオにそれを見られていたことを。
そしてジュリオが驚くどころか面白いものを見ているように笑っていたことを。

「あれ？サイトは！？」

一方でルイズは仕方なく他の生徒たちと避難しながらもサイトを探してたが、結局見つからなかった。見つかるはずもないが。

「デュッ！」

ベキラの方へ走り込む時、ゼロはベキラの尻尾で足を払われたが、ベキラにのし掛かって手刀で攻撃。いつまでも喰らうわけにもいかず、ベキラもゼロをはね除け、花火のような炎を噴射する。ゼロははそれをバック転でかわしながら後退していく。そしてベキラの後方へ飛び上がって尾を掴み、ひっくり返した。

ベキラの弱点は背中の、特に首筋辺りが急所になっている。ゼロスラッガーで切り裂けば…
だがベキラも自分の弱点を知り尽くしている。それを許すまいと反転しゼロの顔面を殴り付けた。

「ギェエ！！」

「グワ！」

ゼロが怯んでる隙にベキラは接近戦に持ち込むつもりで連続パンチを繰り出す。逆にゼロはそれを受け流し、後ろ蹴りでベキラを突き放した。

〈エメリウムスラッシュ！〉

ビームランプから放つ閃光でベキラの顔を攻撃したが、まだこの程度で倒れるような相手ではない。
やはり背中を必殺の蹴り技に攻撃するしかないか。だが弱点を突こうとしてるのはベキラに読まれてしまっている。弱点を攻撃されないための防衛本能が発達してるなら武器攻撃もおそらくかわされる。
とその時だった。どこからか光線が飛んできてベキラを攻撃した。

「！？」

一体誰が？シュウヘイのネクサスか？いや、光線の形状が彼のものとは違う。その光線の持ち主は、意外なものだった。
初代ウルトラマンも苦戦した『古代怪獣ゴモラ』だった。鼻の先にある角から強烈な光線『超振動波』でベキラを攻撃している。しか

し妙だ。見ず知らずの怪獣がなぜ助けに来たのだ？それとも獲物を狩りに来たのか？

とにかく今のうちに！ゼロはベキラの真上に飛び上がり、必殺キックで背中の首筋辺りに向かって急降下した。

〈ウルトラゼロキック！〉

「ダアアッ！」

炎を纏った蹴りで背中を凄まじい勢いで蹴りつけられ、ベキラは倒れると同時に爆発四散した。

ゼロは爆発と同じタイミングで地にスタッと降り立ち、ゴモラを見る。ゴモラをしばらく見ると、ゴモラはなんと光に包まれたかと思ったらまるでカードの形の光になってどこかへと飛んでいった。

「…！？」

あれは一体どういうことなのだ？いや、そう言えばあのジュリオが乗っていたリトラは気づかない間に消えていた。まさか…

でもこのまま自分の巨体を晒したままにはできないので、ゼロは空へ飛び去って行った。

「デュ！」

その頃、ゼロの戦いを見ていたジュリオの手にはキール星人グランデが持っていたものと同じ機械『ネオバトルナイザー』があった。

「ご苦労、ゴモラ」

ネオバトルナイザーの小さなモニターにはリトラだけでなく、あのゴモラも映っていた。

その後、ルイズは突如ミシェルからの伝言で呼び出しを受け、ジュリオとサイトと共に学院の空き部屋にいた。

「なんでお前がいるんだよ?」

「なにおかしなことを。僕たちは仲間じゃないか?いや、親友かな?」

あって間もないくせに親友とは大きくでたものだ。

「さっきからジュリオになに目くじらたててるのよ?」

「別に…」

実際目くじらをたてずにはいられない。あのジュリオには読めないところがあるのだ。リトラを簡単に操っていたし、あのゴモラと無関係とは思えない。

「サイトさん、彼の言う通り、仲間です」

その言葉と共に部屋に入ってきたのは、トリステインの現女王アンリエッタだった。

「彼はロマリアの教皇様の命令でこのトリステインに来てくださいました」

「教皇様もアルビオンの動きに警戒してるからね。女王陛下の力になるようにと僕を派遣したんだ」

「なにせアルビオンは、怪獣を侵略のために調教し、各国への侵略に利用していると噂されてます。そのためにも、怪獣を唯一正しく使うことのできる方を探した結果、ジュリオさんを見つけたのです」

「え！？」

ルイズは目を丸くしてジュリオを見た。ウルトラマンと怪獣の先ほどの戦いは見ていたし、リトラに乗ってやって来たのはわかるが、さっきのあの屈強そうな怪獣もジュリオの手で呼び出されたものだとしたら驚きだ。

「現在ハルケギニア中で怪獣の目撃情報も多数寄せられています。もしアルビオン、または以前学院を襲った鳥型の亜人のような宇宙からの侵略を目論む輩の謀略だとしたらトリステインだけでなく、この世界の存亡に関わることになる。このことで頼れるのはルイズ、サイトさん、ジュリオさん。あなたたちだけなのです」

「姫様、このルイズになんなりとお申し付けください。たとえ命を投げ出すことになる任務だとしてもお役目存分に果たして参ります」

命を投げ出す。サイトはピクッと眉を潜めた。

「ルイズ、あなたが死ぬような命令を下すつもりはありません。大切なお友達ですもの…その命、もっと大事にとっておいて」

アンリエッタは跪くルイズを立ち上がらせ、悲痛な表情で訴えた。

先日のようなことよりももっと悪いことがあったら、もう耐えられない。ルイズだけは失いたくない。その思いが顔に現れていた。

一方、アルビオンでは…

「みなさんよくお聞きなさい！血に飢えたトリステイン女王アンリエッタは我がアルビオンを怪獣を操り、ハルケギニアの頂点に立とうと企む侵略者と決めつけ、この地への侵略を開始しようとしております！」

城の演説に使われるバルコニーから何万もの兵士たちに向かってシェフィールドが演説していた。そのカリスマ性とオーラ、表向きでは亡きクロムウェルの秘書でしかなった彼女は今やレコンキスタ総帥＝アルビオンの皇帝の座に君臨しているようなものだ。（ちなみにクロムウェルをシェフィールドが殺害したことは公になっていない）

だが貴族たちは、彼女に逆らえずにいた。まるで見えない力に遮られてるように。

「シェフィールド閣下万歳！アルビオン万歳！」

満足げに怪しげな笑みを浮かべる彼女の指にはラグドリアン湖の水の妖精から強奪した『アンドバリの指輪』腰には紐でくくりつけられていた『バトルナイザー』がある。

（…！ベキラとのコンタクトが途絶えたか…）

何かに反応したかのように、シェフィールドは視線を自分のバトルナイザーに向けていた。

1　病魔に蝕まれし花

ジュリオの来日から翌日のこと、彼女は突然やって来た。

「いだだだた！！いだいでずお姉ざまあ〜！！」

ルイズは無理やり誰かに引っ張られている。あのルイズが逆らえないとは一体？朝早くなものだから少し霧が立ち込めてる。よーく目を凝らすと、その正体がわかった。

ルイズの姉エレオノール。金髪で目が常にすわってるように鋭く、いかにも女王様みたいなオーラが出ている。ルイズの性格拡大版と言える。でもよーく見ると引っ張られているのはルイズだけではなかった。サイトも無理やり引っ張られて逆らえずにいた。

「全く、軍事教導なんて魔法学院も物騒になったものね」

「お、お姉さま…これからどちらに？」

恐る恐る尋ねるルイズ。よほどこの姉が怖いのだ。

「何って家に帰るのよ」

「え！？」

姫様から頼られてるこの時に！？一体エレオノールはどういうつもりなのだ？

「あの、ルイズのお姉さん…」

サイトもエレオノールのプレッシャーに押されながらも恐る恐る手をあげる。

「何よ!?平民が気安く呼ばないでくれる!?」

「すいません…どうせなら、移動手段を早くできる方法がありますけど…」

「移動手段を早く?私は馬車で丸一日かけてきたのよ?平民なんかになにができるわけ?」

「あるから言ってるんですけど…」

「へえ、ルイズもずいぶん大きく出る従者を雇ったものね」

「従者じゃなくて使い魔…はっ!」

しまったとルイズはあわてて口を塞いだが遅かった。人間を、それも平民を使い魔にしたことは家族には内緒にしていたのだ。もし話したら余計自分が情けなく見られるし、特にこの姉に伝わったら…その姉が、遂に知ってしまった。

「平民を使い魔に、へええ〜…」

「おおおお許しくださいエレオノール姉様…」

冷や汗をかきながらなんとか許しを乞うが、ルイズの拡大版である彼女に通じるはずもなかった。

「騒がしい連中だな」

偶然それを見かけたジュリオは楽しそうに見ていた。

エレオノールとルイズをウルトラホーク一号に乗せ、一行はルイズの自宅『ヴァリエール邸』に向かった。

「なんで平民のあなたがこんなもの持ってるのよ！」

サイトのホーク一号は、タルブ村の戦いで有名になっており、無論エレオノールもそのことを耳にしている。まさか自分の妹の使い魔が操縦してるとは思わなかった。

「い…」

すごいでしょお姉さま！と普段のルイズなら調子に乗って自慢したくなるのだが、それが姉の逆鱗に触れてしまいかねないので止めた。ただでさえ今、エレオノールが彼女の頬を力強くつねったから真っ赤になっているのだ。痛くて仕方ない。

エレオノールはアカデミーでこのホークをサイトから没収して調べあげようと考えたが、止めることにした。以前キングジョーの一件での反省もある。また貴族として家名に泥を塗りたくはない。

今、戦争に巻き込まれようとしている妹ルイズを守るためにも。

ホークは長時間かけることなくヴァリエール邸近くの平原で着陸し

た。ハルケギニアの人から見れば怪しい飛行物体にしか見えないため、最初は衛兵や召し使いたちが集まって警戒したが、その中から自分たちの使えてる主の娘が二人現れたことで落ち着いた。

「こんなにでかかったのか…」

さすがは公爵家。地球では滅多に見られないほどの大公邸だった。庭には大きな池や小さめの森もある。そして家の中もシャンデリアがたくさん吊るされ、就寝時間以外に光が絶えることはなかった。

家の中に入ったときにルイズをエレオノールとは対照的に暖かく出迎えてきた人がいた。

「お帰りなさい。私の小さなルイズ」

「ちい姉様！」

顔立ちはルイズにそっくりだが、彼女やエレオノールのように勝ち気な雰囲気はなく、とても穏やかな印象を持つ女性。エレオノールの妹でルイズのもう一人の姉『カトレア』である。

「また見違えるようにきれいになったわね」

「そんな、ちい姉様には及びませんわ。それより、お体の具合は？」

「ありがとう、大丈夫よ」

その後、ルイズら三人の姉妹は母『カリーヌ』の待つ食堂で食事をとった。一応サイトも付き添いで来ていたのだが、貴族じゃないのでその場に護衛として立ってるだけ。腹の虫がグーっと鳴る。

（腹減った…）

「母様！ルイズに何とか言って頂戴！もう家でおとなしくしてろって」

食事中、エレオノールはカリーヌに言った。

「どうせ学院でもおちこぼれなのよ」

その一言でルイズは黙ってられなくなり、思わず椅子から立ち上がる。

「いつまでも昔のままの私じゃないわ！姫様、陛下が私を必要としてるのよ！！」

「成功率ゼロのあなたに何ができるのよ？さっさと婿でもとらせるべきよ」

「で、でも結婚ならエレオノール姉様が先にバーガンディ伯爵と…」

カトレアはそのルイズの発言に冷や汗か流れるのを感じた。何とかルイズの言葉を遮ろうとしたが、すでに遅かった。エレオノールから凄まじい獄炎のごときオーラがほとばっしっている。

「婚約は解消よ！か・い・しょ・う！向こうは『限界』なんて言うのよ！まったくどうしてかしらねえ！？」

（あんな性格じゃ相当のMが相手じゃないと無理ですよ…）

おそらくルイズ以上の嫉妬深い性格が、他の女性との何気ない会話すら許さなかったのだ。だから伯爵はエレオノールと結婚したら命がいくつあっても足りないと婚約破棄したのだろう。言葉には出さなかったがサイトはそう解釈した。

「この私に口答えなんて随分偉くなったものねちびルイズ！」

「お姉様おちつい…」

苛立ちのあまりルイズに八つ当たりしようと詰め寄るエレオノールをカトレアはなんとか止めようとしたとき、いきなりその場の空気が悪くなった。カトレアが倒れたのだ。

「ちい姉様！？」

サイトもこんな事態、予測の範疇になかったことだ。何か重い病に掛かっているのだろうか？試しにカトレアの体内を透視すると、思いがけないものを目にした。

（あれは…！？）「あの、俺が部屋まで運びますよ？」

「そんな、悪いわよ…」

きつそうに断ろうとするカトレア。エレオノールはサイトを睨みつけて怒鳴る。

「気安く私の妹に触らないでくれるかしら！？まったく無礼なへ「黙っててください！！！！」！？」

まさか、逆に自分が平民如きに…エレオノールだけでなく、ルイズ

もその場に硬直してしまう。最初は下心があったのかと思っていた。美人とはいえ、病人の姉に手を出そうなんて鬼畜の極みだ！と。でも今の彼は全くやましい表情を浮かべてない。怪獣が現れたときと同じ、自分でさえ戦慄する真剣な顔だった。

（エレオノールを黙らせるなんて、あのような平民は初めてね）

カリーヌはサイトを興味深そうに見ていた。

カトレアの案内でサイトは彼女の部屋まで運んでいった。その部屋のありように、彼は目を丸くする。

「なんじゃこりゃあ！？」

動物だらけではないか！！！ウサギ、猿、鳥ならまだしも、熊や虎までいる。

「大丈夫よ、あの子たちは人を襲ったりしないから」

人も獲物にしか見ないはずの猛獣たちに懐かれるとは、これは凄いなんてものじゃないぞ…とサイトはちょっぴり恐怖さえもした。だが猛獣だけではない。

「ぴぴ、ピグモンまで！？」

赤い毛の様な柔らかい突起で身を覆う怪獣『友好珍獣ピグモン』。

初代ウルトラマンと縁がある、人間に友好的な小型怪獣だ。まさかピグモンまでいるとは思わなかった。

「あなた、この子のことを知ってるのね」

ベッドで座り込むカトレアは驚きの表情を見せる。このヴァリエール邸に来る来客たちに顔を見せることがあったが、「見たこと無い」とよく言われていた。姉には「研究材料にされたくないなら控えなさい」と言われて以来誰の目にも留めさせてないので、結局一生その子が何者か知らないままだと思ってたが…。

「ピグモン…かわいい名前ね」

「俺の故郷でも人に懐くって言われてますよ。ってそれどころじゃない！早く横になって！」

サイトはカトレアをベッドに寝かす。

「あの、いつからお体を悪くしたんですか？」

「まだ子供の頃よ。あれから国中の、強力な水の魔法を使うお医者さんに診てもらったけど、魔法でもどうにもならないことってあるのね」

「…」

サイトはカトレアを凄すぎる、いや、強い人だと思った。おそらく彼女は２０代前半。それまで何年もの間病魔と闘ってきたのだ。でもいつかは、テレビの特番でよく見かける、病気と闘った人達みたいに…

「そんなに悲しい顔をしないで。あなたがピグモンて呼んでた子も、怪我をしてたところを見つけてきたの。大怪我だったのに必至に生きようとするあの子の姿は、治せない病気で生きる気力をなくしかけた私の心を救ってくれたの。だから病気がいつものことに思えるくらい、今は楽しい毎日よ」

ピグモンとの間にそんなことがあったなんて。

「あなた、まだお名前訊いてなかったわね」

「あ、サイトです。平賀サイト。ルイズの使い魔です」

まあ、とカトレアの表情が明るくなった。

「あなたが手紙でルイズの言ってた使い魔さんね。ふふ、あの子お姉様が苦手だから、人間の男の子を召喚したなんて知られたら不味かったのがわかるわ」

どうやら彼女もこの時までサイトがルイズの使い魔であることを知らなかった。

「でもあなた、普通の人とはどこか違うわね。ピグモンのことまで知ってたし、あのお姉様を黙らせちゃうなんて」

顔に似合わず鋭い勘の持ち主だ。

「あ、ごめんなさい。まるであなたが化け物みたいな言い方して」

「良いんですよ、気にしないで下さい。それと、今から目を閉じて

ください」

「え？」

「良いから閉じて。別に襲ったりしませんから」

「襲ったらルイズたちが怖いわよ？」

クスクス笑いながらカトレアは布団を被り、目を閉じて横になった。心配そうに見つめるピグモンにサイトは笑顔を見せて安心させる。

「大丈夫、必ず助けるから」

サイトはウルトラゼロアイを取り出し、装着した。

「ジュア！」

等身大のウルトラマンゼロに変身した彼は、両腕をクロスした瞬間、見る見るうちに小さくなっていった。

〈ミクロ化〉

ウルトラ戦士は自らの身体を何百メートルにも巨大化できれば、細菌ほどにまで縮めることが可能なのだ。ゼロは目にも映らないほど小さくなると、カトレアの鼻の穴から彼女の体内に飛び込んでいった。

「ダア！」

（お願いね、小さな騎士どの）

僅かに小さく目を開いてそれを見てたカトレアは小さく笑っていた。

「女の中に入るなんて、変質者じゃね？」

「余りでかい声だすなデルフ、人間の体内ってデリケートなんだ」

カトレアの体内を飛行して進みながらゼロはゼロスラッガーに憑依しているデルフに言う。そう、人の体内はちょっとでも傷付けたら、身体の持ち主の命に関る可能性だってあるのだ。今回はかなり神経を使う戦いになる。サイトは見た。カトレアを長年苦しめてきた病魔の正体である化け物が、彼女の体内にいるのを。

でも、侵入する異物を徹底的に排除しようとする人間の体内のセキュリティがゼロを敵と認知し、苦しめる。まるで風船の様な小さな臓器が存在する場所に辿り着くと、泡の様な物質がゼロに降りかかっていく。

〈ウルトラサイコキネシス！〉

「デュ！」

ゼロはその物質たちを超能力を用いて沈めた。その先に通路と小さな小部屋がある。なるべく、いやカトレアの身体を絶対に傷つけないように飛行し、先に進んでいく。

「見つけた！」

先に進んだ先にゼロは天井に張り付いている蜘蛛の様な小型怪獣を発見した。『宇宙細菌ダリー』。僅か1ミリしかなく、人間に寄生してその人間の血液を摂取する。ダリーに血液を吸われていくと、いずれその人間は吸血鬼のように血を求めてしまう。そうなる前に仕留めなくては。

しかし、戦う場所の環境がゼロに適していない。下手したら助けるはずのカトレアを自分の手で殺してしまいかねない。

〈エメリウムスラッシュ！〉

光線の威力を大きく弱め、ダリーに閃光を発射する。張り付いていたところを落とすことはできたが、威力が小さすぎて倒せなかった。ダリーはゼロを警戒しながらかさかさと動き回る。やがてダリーは再び天井の血管に張り付き、反撃にゼロに口から特殊な霧を噴射した。

「ウワ！ウ…」

この霧は、攻撃手段を制限されているゼロにはまずいものだった。あっという間に真っ白になったゼロはその場に倒れてしまう。

ピコン、ピコン、ピコン…

カラータイマーも点滅を開始している。このままではゼロは…

だがその時、その場の壁の色が変わっていった。さっきまで暗がりの空間だったのが、金色の光が差し込んだように明るくなっている。

実はこの時、カトレアが水系統の魔法のかけられた薬を服用してい

たのだ。その魔法の力は、倒れていたゼロの身体に付着していた泡の様なものを消し去り、さらには服用したカトレアだけでなく彼に回復効果まで与えていた。
再び立ち上がったゼロは血管に張り付いているダリーに光線を放った。

〈エメリウムスラッシュ！〉

ダリーがまた落ちたところを、ゼロは地下水の意思が宿っている方のゼロスラッガーを引き抜き、呪文を唱える。そして自分の超能力と組み合わせ、魔法効果のある泡を放出してダリーに浴びせていった。

〈ウルトラマジックバブル〉

ポクポクと音を立てながら泡はダリーに付着していく。やがてダリーはその大量の泡の中で溶けてなくなってしまった。安心してください。この泡は人体に影響を与えません。

〈テレポーテーション！〉

「デュア！」

病魔の元を退治したゼロは、エネルギーを著しく使う瞬間移動でカトレアの体内からパッと姿を消した。

「う…ん」

カトレアは今の自分の身体に不思議な感覚を覚えていた。身体が軽い。それも魔法も使ってないのにまるで空を飛んでるかのように。

「気分はどうです？」

おそらくゼロがダリーと戦ってる間に看病しに来たルイズが、心配そうにカトレアを見る。因みに婿を取る話は彼女の父であるヴァリエール公爵が帰宅してからとなった。

「ええ、とっても素晴らしい気分よ」

そう言って彼女は立ち上がると、何と部屋の中で踊りだしたではないか。今までの彼女はここまで大きな運動もできないほど身体が弱っていたはずなのに。

「い、いけませんちい姉様！お身体が…」

「もう大丈夫よ、小さな騎士どのが治してくれたから」

「は？」

カトレアの意味不明な言葉にルイズは困惑する。その言葉の意味は彼女と、自分を治してくれた彼にしかわからない。

その彼が、未だ1ミリサイズの大きさでベッド脇の花瓶に生けてある花から顔を出したとき、カトレアは今までに無いほどの微笑みを見せていた。

ピグモンや動物たちも嬉しそうにはしゃいでいた。

しかしその頃、ヴァリエール邸の庭に奇妙な岩の様な金属の塊が降りてきたことは誰も知らなかった。

2　FEAR　OF　GREEN

サイトたちがヴァリエール邸に来た時は、ホーク1号で予定よりかなり早く着いていたのでまだ朝の時間帯だった。その頃、ヴァリエール領に向かう1台の馬車があった。

「全く、今の世はどうかしておるわ。怪獣だの戦争だの…」

馬車の中で愚痴を零している、立派な髭の男。ルイズたちの父親ヴァリエール公爵だ。エレオノールと同じ金髪に、鋭い眼光はまさに公爵としてのオーラがみなぎっている。

そんな彼に魔の手が忍び寄っているとは誰が予想したのか…

「ここ、公爵様！」

「む？」

馬車の運転手がいきなり悲鳴をあげてきた。一体何事だと外を見ると、黒い影が彼にのし掛かるように襲い掛かってきた。

「な！？」

いきなり異形の何かに襲われ、彼は反撃に魔法をぶつけることも出来なかった。

「♪～♪～」

一方、ヴァリエール邸の庭で花の世話などをしている庭師の女性は鼻歌を歌いながら作業に当たっていた。久しぶりに三女のルイズが帰って来たので彼女の目に留められるくらい綺麗にして置かなくては。しかし、そんな彼女はある光景に目が留まった。自分と同じようにここに使えている召使いの男とメイドの女性が何かを見ている。

「どうしたの？」

「見てくれよ」

男性があるものを指差す。そこには、いつの間にか岩の様な大きさの金属の塊が置かれていた。

「一体誰がおいたのかしら？ご主人様お厳しい方だから、早く片付けないと怒られてしまうわ」

メイドの女性はこんな重いものをどうやって運ぶべきか迷っていた。やはりメイジの同僚に手伝ってもらおうという結論に至り、彼女たちはそのメイジの元に向かった。彼らとすれ違う形で、サイトが偶然その金属を目にした。あれは？いつの間にこんなものが？透視してみるが…

（おかしい。透視できない？）

不可解なことに、その金属の中身を見ることが出来ない。まるで真っ白の靄にかかったように。

「どうした相棒？そんなにまじまじとその石ころ見て」

「ただの石ころじゃないから見てるんだろ」

光の国の資料で見たことがある。『チルソナイト８０８』。現在確認されてる情報では、ワイアール星でしかとれない特殊金属だ。その金属がなぜこんな場所に？でもこのままほったらかすわけにはいかない気がしてならない。

その夜、ルイズはカトレアと同じベッドで寝ようとしていた。

「まだ眠れないの？ルイズ」

「うん…」

「誰かのこと考えてたの？もしかして、あなたが使い魔にしたあの男の子かしら？」

それを言われたルイズは顔を真っ赤にしてガバッと起き上がり、大慌てで否定する。

「ちちちち違うもん！！ただの使い魔だもん！好きじゃないもん！」

「あら、誰もそこまで聴いてないわよ」

「ちい姉様なんか大嫌い…」

「あらやだ、嫌われちゃった」

再び布団にもぐりこんでいじけるルイズ。でもカトレアから見ればかわいい行動にしか見えない。布団を被るルイズの顔に手を添え、優しく語り掛ける。

「それでいいのよ。行ってらっしゃいな、あなたの居場所に」

「…」

カトレアは大抵の人間、特にルイズの事をなんでも見通してしまう。一見「この人には勝てない」と苦手意識が芽生えそうだが、それがルイズにとって一番の理解者となるきっかけにもなった。

言われるがまま、ルイズは寝室から抜け出し、サイトが寝室に使ってる物置部屋に向かった。

「べべべべ別に会いたいわけじゃないの！つつつつ使い魔が一人心細そうだから行ってあげてるだけで、ほほほホントにそれだけ…」

廊下を歩きながら必至に言い訳を考えるルイズ。1分くらいでサイトが居るであろう物置部屋に着いた。公爵家の三女がこんな場所にいるなんてばれたら不味いので辺りを見渡す。誰も見てないわね。

ソローッと入り、彼の寝床にもぐりこもうとしたが、サイトは居なかった。どこに行ったのだろう？あのボロ剣もはぼ常時持ち歩いてるので、誰かに尋ねようがない。

とそのときだった。

「あああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

尋常じゃない悲鳴が屋敷中に響き渡った。

一方、サイトは用意された部屋、と言うか物置で寝ようと平民用の食堂から戻っていた。しかし、あのチルソナイト８０８がまだある。

（重すぎて運べなかったのか？それともただの金属だと思って気にも留めてないのか？）

その時、ルイズが聴いたのと同じタイミングで男性の悲鳴が聞こえてきた。サイトはすぐ現場に駆けつけると、木のような化け物が誰かを襲っていた。

「やめろ！」

すぐさまウルトラガンでその怪物の足元にレーザーを撃ち込む。怪物は、襲っていた召使いの男性から離れ、どこかへ逃げ出した。急いで追いかけるが、もう怪物の姿は見当たらなくなった。

「くそ、逃げられた…」

あの怪物、間違いない。『生物Ｘワイアール星人』だ。待てよ、だとしたら！サイトは急いでさっきの男性のもとへ戻った。悪い予感

は当たっていた。

「きゃあああああ！！！」

さっきの男性の姿はなく、代わりに別のワイアール星人に似た化け物がサイトを探しに来たルイズに襲い掛かってきた。実を言うと、あれはワイアール星人ではない。さっきワイアール星人に襲われた召使いの男性が突然変身してしまったもの『人間生物Ｘ』なのだ。ワイアール星人に襲われた人間は、彼らに似た怪物になってしまい、またその怪物化した人も別の人間を襲う。ねずみ算式でワイアール星人は仲間を増やしていく、恐ろしいエイリアンなのだ。だが元々人間だった彼を攻撃したら死ぬ可能性が高い。ここは…

「地下水、出番だ！」

「りょ～か～い」

くるくると回しながらホルダーから地下水を取り出したサイトは呪文をぶつぶつと唱えていく。そしてルイズに怪物が迫る前に、自信のウルトラ念力と合成した水系統の魔法を放った。

「パーフェクト・フリーザー！」

そのサイトの掛け声と同時に、人間生物Ｘは一瞬にして氷付けにされ、固まった。

「ふう…大丈夫かルイズ！？」

「サイト…」

ルイズの身の安全を確認しに彼女の元へ駆け寄るサイト。でも妙に彼女の様子がおかしい。助けられたのにすごい不機嫌そうだ。なぜか？朝、エレオノールから魔法成功率ゼロの意味で『ゼロ』と呼ばれてた矢先に自分の使い魔が魔法を使ったのだ。それも水系統で、氷を発生させるほどだ。しかもなにより、杖を使ってない。

「あんた、魔法使ってたわよね。一体どういうことなのかしら～？」

引きつった笑みを浮かべながらなんとか許してもらおうとサイトは必死に自分の脳のシナプスを働かせる。

「じ、実は…このナイフが」

「ナ・イ・フ…ですってぇ～？」

ルイズさんその目は怖いですから…でもそこで地下水が喋ってくれたのでその場を免れた。

「おう、初めて話すよな嬢ちゃん！旦那が世話になってんぜい」

「地下水は、使う奴に水魔法の力をくれるんだ。だから使えたんだ」

「そのとおり！嬢ちゃんも使ってみっかい？」

最初は使ってみたいと正直思った。これなら姉に認めてもらえるかもしれない。しかし彼女は伸ばそうとした手を引っ込めて我慢した。

「止めておくわ。自分の魔法でお姉さまを認めさせないとなんだか納得できない気がするのよ。それより…」

ルイズは再び氷付けになった人間生物Xに目を向ける。こんな怪物ハルケギニアのどこに住んでいたのだ?見たことも聞いたこともない。それに自分の家に使える召し使いがいきなり怪物化するなんて。いや、これは恐らくサイトがいつぞやに言ってた…

「宇宙…人?」

「あたりだぜルイズ」

とそこに、ルイズの母カリーヌと二人の姉エレオノールとカトレアが他の召し使いたちを連れ、大急ぎで駆けつけてきた。

「何が起きたのです?、それにこれは…」

カリーヌたちは氷付けになった人間生物Xを見て絶句する。サイトやルイズから騒ぎの一部始終を聞き、大方のことを理解した。

「まさかこのヴァリエール家に侵入者を許すとは…」

外壁を守る衛兵たちは決して不調ではなかった。でも一瞬の隙を突かれてしまったと言うことなのだろうか?首を傾げてる時、もう一人別の人物が彼らの前に姿を現す。

「父様!?」

ルイズたちの父、ヴァリエール公爵だった。

「明日の朝に着くつもりだったが、予定を早めて先ほど来たところだ。それにしても、一体衛兵は何をしておったのだ?」

「父様、ここは王室に連絡するべきと考えますわ。急いで…」

不安と焦りでいっぱいのカトレア。王都にいる軍の力を借りて解決すべしと考えたが、公爵は凄まじい剣幕で彼女に怒鳴り出した。

「止めろ!!」

「え…?」

「公爵家の家に侵入者を許したなどと知られたら、いい物笑いだ。いいか、絶対に知らせるな!」

「ですがあなた…」

カリーヌも一言もの申そうと夫に言おうとするが、「ならぬと言ったらならぬ!」と聞く耳を持たなかった。

ヴァリエール公爵はいつもなら、彼の記憶の中でまだ病人の彼女に怒鳴ったりしないはず。カリーヌの言葉にも耳を貸そうともしていない。

「全く世も乱れたものだ。女王陛下も戦争を煽って、全く不愉快だ」

「父様!アンリエッタ様は戦争を煽ってなど…」

自分の知るあのアンリエッタが戦争を好きで行うはずがない。それを訴えようとするが、公爵はルイズにも怒鳴りつける。

「お前に何がわかる!いいかルイズ、無理に魔法を覚えんでもいい。学院など辞めて婿をさっさととれ。話は以上だ」

言い終えた瞬間、公爵はさっさと自室へ戻っていった。

（勝手な親父さんだな。まあ、自分なりに娘を気遣ってるつもりだろうけど…）

サイトは公爵の立ち去る姿を見ながら心の中で呟く。

「決まりね。明日の朝からルイズの縁談をまとめましょ」

「そんな、結婚ならエレオノール姉様から…」

とルイズが言うが、それはまた墓穴を掘ったことになった。血相を変えてルイズの頬を力強くつねりだす。

「婚約解消って言ったでしょ！」

「ごご、ごめんなひゃい…」

再び頬が真っ赤になったルイズ、痛くて涙が出てきてしまった。

「母様、お姉様。こんな大変な時に縁談の話なんてルイズが困ってしまうじゃない」

「そうね。その方も今は地下に収容しておきましょう。この事態が解決するまで夜間の外出も禁じます。皆にそう伝えなさい」

「はっ！」

召し使いのうち二人は氷付けとなった人間生物Xを地下牢に運び、

他の者たちはこの事態と夜間外出禁止令を伝達にし向かった。

その夜は誰もが外に出ていたあの化け物、ワイアール星人に恐怖し、まともに眠ることができなかった。

ただ一人を除いて。

「邪魔が入ったが、まあいい…」

ヴァリエール公爵が自分の両手に乗っている、大きさは違うがあのチルソナイト８０８と同じ金属の塊を見て笑っていたことは誰も知らない。

翌日、公爵は再び王室へアンリエッタの政策の反対を訴えようと早くから出発の準備をしていた。

ルイズは池に浮かぶ小舟に座り込んでいた。貴族は幸せに思っている人がいるかもしれないが、それは大きく違う。以前アンリエッタがそうだったように政略結婚で好きでもない人と結ばされてしまう人は大勢いる。ルイズもまた、その一人だった。

（サイトはハルナがいなくなってからも、私に見向きもしてない。私、嫌われてるの？）

ルイズはわかっていた。ハルナがいなくなった時からもサイトはあの黒髪の巨乳メイドどころか自分に気持ちが傾く様子がないことを。まるで彼が女性として見てる人が誰もいないかのように。

そう考えると、涙が自然に溢れてくる。

ただでさえ姉たちが自分の力を認めようともしてないときに、心の支えである彼が、自分を…

（結局私はご主人様であいつは使い魔…）

いずれ婿をとることになるのだろうか？愛してもない相手と結ばれて自分は幸せになれるのか？

そんなときだった。向こうになんだが巨大な何かが暴れているのが見えた。

カリーヌは庭にあるチルソナイト８０８に困り顔になっていた。ルイズの縁談のことでエレオノールやルイズと話し合いをしようとしていたが、いまだ片付けられてないあの金属が目に入った。ためしにレビテーションの魔法で浮かしてみたが…

（重い…）

重すぎて浮かすことができない。ならば、自分の得意とする風の魔

法で切り裂くことはできないか？術者によっては鉄を切り裂く『エア・カッター』で切りかかったが、それでも傷ひとつ入らなかった。

（困ったわね…この重たい金属一体誰がどうやって運んだのかしら？）

「全く、ルイズはどこに行ったのかしら？」

エレオノールは目くじらをたてながらルイズを探していた。縁談の話はまだ始まってもないのにどこへ行ったのだ？

「ひゃあああ！！」

誰かの悲鳴が聞こえてきた。聞こえたのは、父上の部屋の方からだ。ただちに向かうエレオノール。

部屋に入ると、怯えているメイドが机を指差している。さっきまでこの部屋の掃除をしていたようだが、一体どうしたのだ？

「こ…公爵様の机から変な音が…」

「音？」

たかが音でここまで怯えるのか？とはいっても昨夜のワイアール星人の夜襲でエレオノールも布団をかぶりながらおびえていたのだが。

机に近づくと、引き出しからなにやら怪しげな音が聞こえる。引き出しを開けようとしたが、『固定化』の魔法でもかけられたのか開かない。すぐアンロックの魔法で引き出しの扉を開くと、庭に置かれていたあの奇妙な金属の塊のミニチュアが顔を出した。

「なにこれ…」

父上はなんでこんなものを持っていたのだ？庭にあったものと何か関係があるのだろうか？とりあえずそれを持って庭に急いでみた。

そこには母カリーヌがいた。いざ、あの庭にある金属の塊のところにたどり着いたはいいが、一体なんなのだろう？気になったのか、その場にはカトレア、そしてちょうどその場が目に留まったサイトが駆けつけてきた。

「サイトさん、だったわね。あなたこの金属がなんなのかわかるかしら？」

「ええ…まあ」

それをエレオノールはフンと馬鹿馬鹿しそうに鼻で笑う。

「平民に意見を求めても仕方ないでしょ？今父様が出発の準備でもしてるでしょうから…」

この金属について何か尋ねてみようと思った時だった。サイトが、エレオノールからいつの間にかあの小さめの金属の塊を取り上げ、しかも地面に置いたかと思えば、いきなり背中に背負ってる剣で突き刺したではないか。

「何勝手なことしてるの！？」

しかし、ピキ！

何かが割れる音がした。その音を辿ると、あの金属からだった。鉄を切り裂く風の魔法でも切れなかったあの金属にヒビが入っている。さらにサイトがデルフで突いて小さめの方に穴を明けると、またさらに大きな穴が、大型の方にも空いた。その穴から見えたものは、彼女たちの目を疑わざるを得なかったものだった。

「あ…あなた！？」

「父様！？」

なんとそのチルソナイト８０８の中に、出発の準備をしているはずのヴァリエール公爵が意識を失った状態で閉じ込められているではないか！

「父様、父様！」

「う…」

カトレアが慌てて彼を起こすと、公爵はうめき声をあげながら目を覚ました。

「え？じゃあさっき出発の準備をしてた父様は？」

そうだ。さっき荷物を召し使いたちに積ませて、馬車に乗り込もうとしていた。

「やはり偽物だったんだ」

小型のチルソナイトから出てきた金属部品を見てサイトははっきり判断した。その金属部品は発信機能のある電子頭脳だったのだ。

ワイアール星人は昨日本物の公爵を襲い、大型のチルソナイトの中に彼を閉じこめた。別に用意した小型の方にこの電子頭脳を埋め込み、転送に似た形で彼に化けていたのだ。おそらく内部からトリステインを壊滅、国民たちをじわじわと自分の支配下に置くために。

ガンダールヴの力で強化した脚力を使い、猛スピードでサイトは屋敷の玄関辺りの馬車へ急ぐ。

まだ偽の公爵は出発していない。彼が乗り込もうとしたところでサイトは馬車にウルトラガンのレーザーを撃ち込んだ。馬車に乗っていた公爵は芝生の上に転がり落ちる。

「貴様、何をする！」

その公爵の怒鳴り声に呼応するように召し使いたちが身構え、サイトを睨み付ける。しかしサイトは怖じけつく素振りを見せない。

「こっちがそう聞きたいさ、ワイアール星人！」

偽の公爵は自身の正体を突かれ息をつまらせる。

「今すぐこの星を立ち去るんだ。下らない侵略は結果的にお前のためにもならないぞ」

「ふん、何を言い出すかと思えば…」

ワイアール星人とはなんぞや？と偽の公爵は開き直る。だがすでにボロが出ていた。

「なら、お前のその植物みたいな手はなんだ！」

サイトに言われ、偽の公爵は自分の右手を見る。その手は人間の肌でなくなり、まるで木の葉がたくさんのりでくっ付けられたような真緑に染まり、凸凹だらけになっている。

「ぐ、しま…た…」

本物の公爵が解放された影響で、偽の公爵はもはやその姿を保てなくなり、植物の化け物のような姿となる。

「うわあああああ！！ご主人様が化け物になったあああああ！！」

召し使いたちは主の突然変異に驚愕し、一目散に逃げ出した。

「セセ…セブンノ息子…ココココ…コロ…ス…」

もはや公爵としての姿を全く留めておらず、その姿だけで敵に恐怖を与えるワイアール星人。彼は正体がバレたからには仕方ないと、巨大化する。一気にこの屋敷の者たちに自分の噴出する特殊液体で下僕に変えてしまうつもりなのだ。

だがそれを許さない宇宙の戦士がここにいた。

「デュワ！」

サイトはウルトラゼロアイを装着、巨大化してウルトラマンゼロに

変身した。

「邪魔…スルナ…」

「帰るつもりはないんだな、どうしても…」

ワイアール星人は敵意をゼロに向けている。
いきなりワイアール星人は体全体から光線を発射してきた。

「グ！？」

怯んで膝を着くゼロ。その隙にワイアール星人はゼロにのし掛かってきた。

「下僕ニ…シテヤル」

その言葉は、あの特殊液体をゼロに浴びせ、自分の配下にする意思の現れだった。だがワイアール星人は侮っていた。ゼロはこの程度の相手で苦戦まではしない。

〈ビッグバンゼロ！〉

「ハアアアア！」

右拳に炎を纏い、思い切りワイアール星人を殴り飛ばしてしまった。
解放されたゼロは一歩下がり、ワイアール星人に向けてデルフの意志が宿った宇宙ブーメランを投げつけた。

〈ゼロスラッガー！〉

「ジュア！」

空気や風を切りながらゼロスラッガーはワイアール星人に接近、そのまま縦にワイアール星人の体を真っ二つにしてしまった。

ゼロスラッガーが頭に戻ってきたところでゼロは真っ二つのワイアール星人に止めの光線を放つ。

〈エメリウムスラッシュ！〉

ワイアール星人は木っ端微塵に砕けちり、ゼロは同時に大空へ飛び去っていった。

「ジュワ！」

ルイズは驚愕の境地だった。まさか父様とあの宇宙人が入れ替わっていたなんて。

今本物のヴァリエール公爵は治療のため部屋に運ばれていた。

「まさか、父様が襲われてたなんて…」

「油断してたところを突かれてしまったんだよ。きっとな」

切なげにサイトは言った。侵略者はどうしてこんな真似ばかりするんだ。侵略はいずれ自分たちを危険さらしてしまうのに…

とそこに、カリーヌがエレオノールとカトレアを連れて現れた。

「サイト、だったわね」

カリーヌに言われ、サイトは思わずピシッ！と背筋を伸ばして気をつけをする。

「今回、あなたの行動が我がヴァリエール家の者たちを救いました。感謝いたします」

決してふざけてるわけではない。カリーヌは本気でサイトに感謝していた。娘だけでなく、夫も助けてくれたのだ。礼を言わないなんて貴族とは言いがたくなる。

「カトレアもあなたの持ってきた薬で治ったと聞き及んでます」

カトレアの病気の件も知っているようだ。ただ薬ではないが、おそらくカトレアがサイトの正体を明かされないためのカモフラージュに使ったのだろう。

「薬？」

穴が飽きそうなジト目でルイズはサイトを見る。

「いえ、俺は何もやってないですよ！」

冷や汗をかきながら止してくれとサイトは両手の平を突き出した。

「全く、まさか監視役で私たちまで学院に来ることになるなんてね」

「ええ！？」

あの母が平民のサイトに頭を下げただけでなく、エレオノールまで学院に来ることにルイズはびっくりする。だとしたら地獄の毎日が始まってしまうことになるではないか。

「大丈夫よ、私も行くから」

それを聞いてさっきまでドヤ顔だったルイズの顔が、一瞬にしてパアッと明るくなる。ちなみに後ろからピグモンも跳ねながら喜んでいた。

「ちい姉様がいれば怖いものなんてないわ！」

いや、一人いたことを彼女はこの時忘れていた。

「『お姉様たち』でしょ！」

「いだだ…ぞうべじば…」

エレオノールのつねり攻撃でまたまたルイズの頬は真っ赤になった。サイトはそれを苦笑いしながら見てるしかなかった。

ともかく、サイトとルイズはカトレアとエレオノール、そしてピグモン含むカトレアの動物たちをウルトラホークに乗せ、学院へ飛ん

でいった。

カリーヌはサイトのあの姿を見て、他の平民にはないものを感じ取っていた。だから娘たちを託してみようと思ったのだ。

（若い頃を思い出すわ）

あの真っ直ぐなサイトの視線を見て、彼女は昔の自分を懐かしがっていた。

ちなみに、ワイアール星人に襲われ人間生物Ｘに変えられた人は元通りになったそうだ。

事件は無事解決した。しかし、いつあの金属の塊が宇宙から飛来してくるかわからないのです。朝起きてみたら、あなたの家の庭をご覧ください。もしかしたら、ワイアール星人のチルソナイト８０８が置いてあるかもしれません。

3　秘密の地下書庫と地底人（前書き）

読了時間１０００分突破！しかし、リメイク前は完結まで９５０分ほどだったのにこっちはまだ双月編。自分でもよう書けたなと…（汗）２０００分になるほど大変だとしても頑張りますのでヨロシクです！

ＺＺＺ…

3　秘密の地下書庫と地底人

サイトたちがヴァリエール家に滞在している頃、トリスタニアの近くにある森。そこに一人の男の帰りを待つ少女たちがいた。

「シュウ兄、遅いな」

「そうね…」

魅惑の妖精亭で（スカロンに捕まってほぼ無理やりに）働いているシュウヘイ。今日は帰りが何時もより遅かった。

「ジム、もう寝る時間だよ。こっちへおいで」

小屋からウェールズが促すように誘う。身分を隠すため、今は平民用の服装で、髪も結構刈ってしまっている。

「帰ってくるかな？」

「いつもそうだっただろ？彼は約束を破らない」

「うん！」

ジムは笑顔で頷き、ウェールズと共に小屋の中へ入っていく。しかし、テファだけは戻ろうとする素振りを見せなかった。

「シュウ…」

その頃、トリスタニアの街付近には一体の怪獣が現れていた。『地底怪獣テレスドン』。皮膚はかなり頑丈で防御力が高い。その怪獣と戦うのはトリスタニアを守る魔法衛士隊。

「撃てい！」

風の刃、炎の弾丸、雷などの魔法が彼らの杖から放たれる。同時に大砲から発射された爆弾がテレスドンを襲う。しかし、堅すぎる皮膚を突き通すまでに至らなかった。

でも戦っているのは彼らだけではない。テファが帰りを待つこの男も、人間たちの努力に応え姿を現した。

「シャ！」

ウルトラマンネクサス・ジュネッストリニティ。テレスドンを恐れることなく彼はタックルで攻撃を仕掛けた。

「ギェエ！！」

〈シュトロームソード〉

光の剣を形成し、テレスドンに斬りかかろうとしたが、妙なことが

起こった。テレスドンが自分の這い出てきた穴の中へと逃げ込み、消えていった。

（どういうつもりだ？）

ネクサスは小さくなって変身を解き、元のシュウヘイの姿に戻る。すぐテレスドンの逃げたあの穴に近づき、その中を覗き込んで見た。夜の闇のせいもあるが、やはり穴の内部は真っ暗闇だ。

（なぜ逃げた？大したダメージを受けたわけでもないのに、なぜ？）

だが、その時後ろから誰かがシュウヘイの背中を押しだし、彼を穴の中へ突き落とした。

「なっ！？うわあああ！！」

彼の叫び声は、闇の底へ近づくにつれ、姿と共に聞こえなくなっていった。

「地下図書館？」

ヴァリエール家から学院に戻った翌日、アニエスによってサイト（

念のためいつもの様に武器を全て所持している）、ルイズ、ジュリオは平民用の宿舎にある会議室に呼び出された。そこはあまり使われてないため、今は主に銃士隊が使用している。

「ああ、この学院にはトリステインでもかなり重要な機密事項を隠した地下図書館への通路があるとされている。今でも情報を隠すために使用されていることを陛下は我々銃士隊に調査させて突き止めたものだ。学院の女子生徒用のトイレに隠し扉がある。だが…」

「だが？どうかしたの？」

腕を組みながら唸るアニエスに、ルイズは尋ねる。どこか苛立ちを覚えてるようだ。

「女王陛下の許可が出たにも関わらずオスマン学院長は『鍵の解除の命令は受けてない』と言って反対したのだ」

「どうして？」

サイトの疑問に応えるように、ジュリオが説明した。

「あの地下図書館は数千年も昔に作られた場所だからね。古代の魔法で厳重なトラップがある可能性があるから、何が起こるかわからない。命の危険があると学院長は予想したんじゃないかな」

「私は騎士だ！死など恐れはしない！」

生に必死にすがる者など臆病者の証だ。そうなったら騎士の恥でしかない。今のアニエスに引き下がる余地は見られない。

「ルイズ、君の魔法でなら扉を開けられる？奥は魔法でロックされてるらしいけど」

「確かに、虚無にもそのための魔法があると思うけど、私はまだ使えないし、それ以前に精神力が大きく削られるから…」

少なくとも今の自分では当てにできないと言うことだ。だとしたら…

「ロックを解除しろですって？」

学院の研究室で勤務していたエレオノールに頼ることにした。

サイトたち五人は女子トイレの奥にある木造の扉を開くと、その先は真っ暗闇の地下に続く階段となっていた。

「ところで、どうしてアニエスさんはこの地下図書館の資料を調べるように言われてたんですか？」

サイトの質問に、アニエスは松明にランタンに火を灯しながら答えた。

「まず先に内部で隠れている裏切り者のいぶりだし。おそらく今のアルビオンに手を回している輩が内部にもいると陛下は見ている。その証拠になるやもしれぬ公文資料がこの地下で眠っているはずだ。本来どんなに都合の悪い事実も記録として残すためにその図書館が設立されたのだからな」

「なるほどね。だとしたら、過去の研究者たちの記録もあるかもね」

一時は身を引いたが、研究者としての好奇心はエレオノールからは

消えていない。もう一度いろんなことを研究したいという願望がある。

しばらく歩くと、三つの正方形のくぼみが縦に並ぶ石の扉に差し掛かった。ここでエレオノールの出番となる。三つ、おそらくトライアングルクラスのメイジでないと開かない仕組みのようだ。

「神の戒めよ、解けよ」

エレオノールが杖をピッ！と扉に向けて振ると、扉のくぼみがカチャ！と鍵を解除する音を鳴らし、先への道を現した。

「さすがお姉様！」

怖いのは事実だが、尊敬もしている。ルイズの一言でエレオノールは誇らしげに振る舞うルイズのようにふっと鼻で笑った。

「さて、ここからは危険だ。私一人で行く」

引き返すことを促すアニエスだったが、エレオノールは下がろうとしない。

「そうはいかないわ。私も中身を知りたいから鍵を開けたのよ」

ルイズもこれには異を唱えた。

「危険ならなおさら一人デ行くべきじゃないわ」

「僕たちは仲間だろ」

ジュリオも胡散臭くはあるが下がらない様子だ。

「隊長、私も同行します」

その声に反応し、一同は自分たちが歩いてきた道を振り返る。声の主はアニエスの副官である銃士隊副隊長のミシェルだった。

「ミシェル、お前まで…」

でも次のサイトの一言で少し空気がおかしな方向に走る。

「騎士とかそれ以前にアニエスさん女の子でしょ？怪我でもしたら…」

「お、女？」

騎士になると決めてから髪を切って女であることを捨て去ったアニエス。にも関わらずこの男は自分を女だと思って気遣っている。段々彼女の顔が赤く染まっていく。

「ばっ、馬鹿かお前は！私はとっくの昔に女であることを捨てたのだぞ！」

「そうはいっても、覆らない事実でしょ女だってことは？それにアニエスさん美人だからもったいないじゃないですか」

ただでさえ「女の子」発言で顔が真っ赤になるほど過敏に反応したのに今度は「美人」。さすがに冷静さを保っていたアニエスも参るようだ。

「びび、美人!?っええいもういい。男だろうが女だろうが私は行くぞ!」

アニエスは照れ隠しなのか、それとも怒ったのか、顔を真っ赤にしたまま先に進んでいった。余談だが自分の上司の意外な顔には、ミシェルも唖然としていた。
しかし、全員がその場に足を止めてしまった。なせなら…

「そんな目でアニエスを見ていたとはねぇ~…」

ルイズが髪を波立たせながら怒りと嫉妬の表情で杖をその手に持っていた。

「それにアニエスは胸があるしね~、それに比べたら私なんかペッタンコだもんねぇ、えぐれてるもんねぇ…」

「いやいや、俺は決してやましい気持ちで言ったわけじゃないぞ!素直に褒めただけだから!だから早く杖をしまっ…」

「このエロ犬、ドスケベ犬うううううううううう!!!!」

ズオオオオオオオオオオオオオオオン!!!!!!!

「「「「わあああああああああああああああああ!!!!!!」」」」

桃髪の嫉妬魔神の放つ大爆発はその場一帯を包み込んだ。

「ぐっ…」

シュウヘイはほぼ真っ暗な部屋で目を覚ました。
ここはどこだ?確か、何者かにあの怪獣の開けた穴に突き落とされて…。
体を起こそうとしたが、動けない。よく見ると、自分は今拘束されていた。手足を鉄性のベッドにくくりつけられている。すると、誰かの声が聴こえてきた。

「目が覚めたかね?ウルトラマン」

「誰だ?」

コツコツ、と足音が彼に近付いてくる。その声の主はハルケギニアでは見かけないサングラスをかけ、多少変わったスーツを着ている。後に続くように同じような服装の男女がゾロゾロとやって来た。

「我々は６０００年前にこの星の地上で暮らしていた。しかし、奴らは我々の大地を侵略し、地上を支配したせいでこの地下数百メートルの世界での生活を余儀なくされた。貴族制度などという下らない階層社会のせいでこの星は負の歴史に囚われてしまったのだ。そこでウルトラマン、君の力を貸して欲しい」

「貴様の侵略の手助けをしろと言うのか？」

「侵略？ははははは！！！」

サングラスの男は笑える冗談でツボに入ったように笑い出した。

「この星を取り返したいだけだ。侵略なんて野蛮な真似はしない」

「じゃあ、この星はお前たちの」

母星だったというのか？と尋ねようとしたその時、突然警報が鳴り出した。

「どうした？」

「たった今、地下５０メートルから妙な揺れを探知しましたが…」

この時、ルイズが魔法でサイトに制裁を加えていたのだが、彼らがそれを知るはずも無かった。

「無視してすぐ警報を止めろ。うるさくて彼と話が出来ない」

その男の命令で、警報は鳴り止んだ。

「さて、話を戻そう。ウルトラマン、我々が従えているテレスドンと地上を破壊するのだ。君は宇宙の秩序を守る存在、あんな貴族と名乗って横暴を働く侵略者を抹殺しても宇宙の掟が許すさ」

さっき（正確には昨日の夜）戦った怪獣テレスドンは彼らの従えている怪獣で、一度逃げたのはシュウヘイをここへおびき寄せるため

だった。だが、返答は彼らの期待と大きく異なっていた。

「断る」

即答でシュウヘイは答えた。同時にサングラスの男は眉を潜める。

「なぜ断る？君だって知っているはずだ。君が守ってる地上の人間たちの醜さを。今他国への侵攻の準備をしているそうじゃないか。となると君は戦争の手助けをしているのと同じ」

「だからといって守っていた連中を裏切る気はない。それに俺は秩序を守るために戦ってるんじゃない」

こんな自分を信じているあいつの為に戦っている。彼が戦う理由は至って私的なものだった。だからって昔みたいな過ちを犯すつもりは無いが。はあ、とため息をつくサングラスの男。こんな揶揄に期待した自分が馬鹿だったと思っているようだ。

「残念だ。なら無理矢理にでも頼もうか。アレをだせ」

男は一人の部下に何かを持ってくるように言うと、部下の男はサングラスの男に大型のライトの様なものを受け取り、スイッチを押す。すると眩しい光がシュウヘイに向かって放射された。

「ぐう！？」

「このライトの光は相手の脳波を狂わせ、自我を崩壊されてしまう。出来れば君の意思を尊重して、話し合いで解決したかったのだが仕方ない」

「が…ぐう…」

その光は段々彼の理性を削り取っていく。それは彼が常時押さえ込んでいた『闇』が彼の意思と関係なく表に這いでてくることを意味していた。

――連中も役に立つものだ

――これなら、私の復活も

（止めろ…出てくるな！！）

またあの時の様に自我を失い、ただ本能で動くだけの殺戮者になればもうおしまいだ。何とか必至に自我を保とうと抵抗するシュウヘイ。サングラスの男はシュウヘイの両腕を一旦解放し、エボルトラスターを差し出した。

「さあウルトラマンネクサスよ！その光で我等に未来を！そして地上の人間どもに死を！！」

「ぐう…」

何とか自我を保っているうちに変身しないと不味い。頭に響く激痛を必至に堪えながら彼はエボルトラスターも鞘から引き抜き、光に包まれた。

だが、長い間地下で生きていた彼らに、その光は毒だった。その光に耐えられるだけの耐性がなかったのだ。

「ぬあああああ！！！」

「ああ、これが我々が追い求めていた…」

光を浴びたショックで彼らは気絶し、光が晴れた場所には等身大のウルトラマンネクサス・アンファンスが立っていた。

「ギリギリ、だったな。急いで脱出しなければ」

辛うじて意識を回復したネクサスは倒れていたサングラスの男たちをまたいでその部屋から抜け出した。同時に警報も鳴り響く。

『プリズンエリアより脱走者あり！ただちにとらえよ！』

別室の監視カメラの並ぶ一室の放送マイクでサングラスの男の仲間と思われる女性が施設の内部中に設置された放送スピーカーから命令をくだすと、武装した兵士たちは脱走するネクサスに銃を発砲する。だが、今の彼に鉛球が効く筈もなかった。その強靭な肉体で弾丸を次々と弾き返していく。

「くそ、なにぼやぼやしている！早く捕まえろ！」

放送マイクを通して女性は部下たちに命令を下すが、その時別の監視カメラには、ルイズの魔法で生き埋めに、またはその場に倒れていたサイトたちが映っていた。

「まさか、我々が先住民であるという証拠を探し、もみ消しにきたのか？」

その意味は一体何なのかわからないが、何にせよ彼女にとって都合の悪いことでしかないようだ。彼女は装置にある、ハルケギニアのものでもない文字で『テレスドン』と表記されたスイッチを押した。

「予定変更。テレスドン、いけ！二体同時に任務を果たせ！一体は街の破壊、もう一体は『ファイル』の消去をもくろむ輩の始末！」

すると、その地下施設のどこかに設置された巨大なオリの鍵が開かれた。そこから二つの巨大な影が吹きぬけた天井へと登って行った。

「このちびルイズ！！魔法を使う場合は時と場所を考えなさい！そんな初歩的なことも習わなかったの？」

「ごごごめんなひゃい…」

エレオノールはかんかんに怒ってルイズの頬を思い切りつねった。こんなに狭い場所じゃ無関係の人まで巻き添えになってしまうものだから彼らの服は砂と埃だらけだ。

「しかも…これじゃ帰れないね」

ジュリオが通ってきた方を指でさすと、先ほどの道は瓦礫で埋まってしまっていた。

「あ～あ、折角アニエスを口説けると思ったら嫉妬深い女神様にまた尻をしかれたね、サイト」

「口説いてねえ！てめえと一緒にするな！」

ただ褒めただけだっての！とジュリオに怒鳴るサイト。少し恥ずかしそうにアニエスはコホンと咳払いを居てその場のメンバー全員に言った。

「ここで喧嘩しても仕方ない。行こう」

気を取り直してサイトたちは奥へと進んで行った。しばらく歩くと、地下の空間にも拘らず道の先が明るくなっている。光に満ちたその先に向かうと、そこには１００メートル以上に渡る石の橋が設置され、向こう側には立派な石作りの建物がある。あれが地下図書館とみて間違い無さそうだ。

「あの、アニエスさん」

橋を渡りながらサイトはアニエスに気になることを尋ねてみた。

「どうした？」

「初めて会った時アニエスさんは故郷を焼かれたって言いましたよね。やっぱり誰かに恨みでもあるんですか？さっきから、何か抱え込んでいるように見えますけど…」

「…読まれていたか、さすが陛下が認められた男だ」

アニエスはそこから自分の幼少期のころを話した。故郷のダングルテール村を全焼され、たった一人生き残ったこと。実際はありもしないでっち上げの反乱で滅ぼされたこと。いつか絶対に家族や友達の仇を討とうと憎しみに身を任せる道を選んだことを。

「私がここに来たのは、陛下の任務のためだけではない。故郷を焼き払った部隊の正体とその命令を下した輩を暴くことだ」

「復讐…か」

なんだかほおって置けなかった。もしこのまま憎しみだけで突き動かされることになったら、彼女も自分と同じ道を辿ることになってしまうかもしれない。

「アニエスさん、俺は以前ハルナのために、殺した相手に復讐しようとしました。でも…」

無関係の少女を傷つけ、自分が憎まれる結果に終わった。その過ちは後にハルナが生きてることを知ったサイトの心を今でも、思い出すたびに苦しめている。

「その時、ある仲間から教えてもらいました。憎しみだけで生きることの愚かさを、そして『過去は変えられなくても未来は変えられる』ことを」

「『過去は変えられなくても未来は変えられる』…」

それを言われ、アニエスはしばらく沈黙した。自分でも分かっている。たとえ自分の大事な人達を奪った連中に復讐しても、サイトの言うとおり未来を変えても父や母、故郷のみんなは戻ってこない。それでも殺してやりたいという念が自分を動かしていく。

「…考えておこう」

ただそれだけ答えた。

「ここね」

入り口の扉に差し掛かったところで一同は立ち止まり、エレオノールは扉の上に書かれた文章を読み上げる。

「『資料の持ち出し、廃棄、及び魔法の使用を禁ずる。さもなくば死の制裁が下される』。ふん、ただの脅し文句じゃない。何にせよルイズは使えないから安心ね」

ルイズはそれを聴いて少し膨れっ面になる。一同は扉を開き、その中に入ってみる。薄暗く埃っぽいが、かなり高く横長の本棚に何冊もの本が収納されていた。

「これは凄いな。ロマリアの宗教図書館なみだ」

ロマリア出身のジュリオは目に飛び込む数多の本に驚いている。

「この中ではごく最近のものだ。みんな、その辺りを徹底的に調べ上げてくれ」

彼らはアニエスに言われたとおり、最近の記録の記された資料を探し出す。調べるのは最近アルビオンに手を回す輩の発した命令書とダングルテール事件の資料。まずはダングルテール事件の資料だ。その事件で命令を下した奴が、自分が討つべき仇。この図書館以外に安置された資料をしらみつぶしに調べ上げ、ある人物が容疑者に挙がった。恐らくそいつはアルビオンに手を回している。

「ねえアニエス、これじゃないかしら？」

ルイズはある一冊の本を差し出した。題名は『ダングルテール事件』。

「これだ！」

アニエスはその本を受け取って近くの机に運ぶと、当時の事件で自分の故郷を焼き払った実行部隊に配布された命令書の複製を探す。持ち出せないなら必要な部分をメモで書き写すしかない。メモと紙を用意して、ページを捲っていく。

「見つけた！『ダングルテール村に疫病発生。村人を全員焼却処分せよ』…バカな、疫病だと！？」

自分の記憶では疫病など発生していない。もし本当だとしたら自分も疫病にかかって死んでいたかもしれないのだから。次に目が入ったのは実行部隊の隊長、『コルベール』。もう彼は行方が知れていない。彼の勤務していた学院にも姿は、見えなかった。（実際はアニエスでも知らない一室で今も意識不明の状態で看病されており、サイトは時折見舞いに行ってる。）

そして命令を下した人物…

「やはりお前か…」

アニエスは命令を下した人物の名前を見て、憎しみの余り資料のページを勢い余って握りつぶしてしまいそうになる。その命令書の発行人物の名は…

『リッシュモン』

アニエスがメモを必至に書いている最中、サイトは少し離れた場所の壁に気になる扉を発見した。扉は固く閉ざされ、開きそうにない。扉にはハルケギニアの文字で何かが書かれている。

「何を見ているんだい？」

ジュリオが興味深そうに横入りするようにサイトが見ている扉を見た。

「何て書いてあるんだ？」

サイトに頼まれ、彼は扉の文字を解読した。

「『オメガファイル』…て書いてあるね」

「オメガファイル？」

とそのときだった。突然地響きがその図書館中に起こった。

「ちょ…誰よ魔法使ったの！？」

一同に怒鳴りつけるエレオノール。でも、誰も使ってないと言った。サイトも地下水を使ってないし、ルイズはさっき言ったように論外。残ったのはジュリオ、アニエス、ミシェルだが、彼らは魔法が使えない。となると…一同の視線はジーっと細目でエレオノールに向けられた。さっき、図書館の扉に書かれた警告文を『脅し文句』と馬

鹿にしていたし…

「私を疑ってるというの!?ちびルイズもなにそんな目で見ているの!?」

濡れ衣を着せられかけて焦るエレオノール。まあ、今彼女は魔法を使ったわけではないので、読者の方も彼女を許してあげましょう。

「とにかくここから脱出しよう!メモは何とかとりおえた!」

もう用なしのこの場所に用は無い。早く出なければ。一同は図書館の入り口付近に出たが、そこで思わぬ怪物と遭遇した。

「死の制裁って、怪獣の事だったの!?」

「僕達を帰さないつもりだね!」

橋の遥か下の闇から、テレスドンがその牙をむき出しにしながら這い出てきた。やがてテレスドンはすでに夜となっていた地上に出て行く。

「まずい!学院を壊す気だ!」

ミシェルがわめく。サイトは左腕の袖の下に在るブレスレットに触れようとしたが、そこでようやく気が付いたことがあった。それもかなり不味いことだ。

(な、ない!ウルトラゼロブレスレットが無い!)

袖を捲し上げたが、思ったとおりいつの間にかブレスレットが紛失

していたのだ。不味い。あれが無いともしもの時、地球や光の国への帰還も、なにより変身できない。

【バトルナイザー、モンスロード！】

でも今回は最悪とは言えなかった。ジュリオがネオバトルナイザーからリトラを呼び出し、全員を救い挙げるように乗せると地上に向かって飛んで行った。

リトラで全員を地上に出し、学院の校舎に批難させたところでジュリオはもう一体の相棒を呼び出す。

「行け、ゴモラ！」

光のカードは空に飛び出し、ゴモラとなって地上にズシンと降り立った。

「キシャアアアア！！！」

凄まじい雄叫びをあげ、ゴモラはテレスドンに突撃、前転して振り上がった尻尾でテレスドンの頭を攻撃した。怯んでいる隙にヘッドロックでテレスドンの頭を捕らえ、殴りつける。地面に押し倒すと、テレスドンにのしかかって顔面を何度も殴りつけた。

「超振動波！」

ジュリオが命じると同時にゴモラは立ち上がり、テレスドンの腹に鼻の角の先を突き刺し、光線をテレスドンの体内に流し込んで行った。そして中へテレスドンを打ちあげると、テレスドンは地に激突した瞬間爆発し、消滅した。

「すごい…」

アニエスはゴモラの圧倒的なパワーに感嘆した。サイトは少し悔しくもあった。いつの間にか消えていたブレスレットがあれば、ジュリオに苦労をかけることも無かったのに。

ともあれ、今回のアニエスの任務は完了した。しかし、その直後にあらたな事件があったことを、彼らはまだ知らなかった。

そして、テレスドンは一体だけではなかったことも。

「ガアアアアアア！！！」

本来、シュウヘイを捕らえていた謎の地底人たちが彼の変身するネクサスと共に地上を破壊するために用意したもう一体のテレスドンは、予定を変更して一体だけで地上に現れ、トリスタニアの街に向かっていく。このテレスドンは、ジュリオのゴモラが倒した個体と形が微量に違っていた。どこかジュラ紀の恐竜に似たような姿だ。この個体は『パワードテレスドン』と呼ばれ、昔この同族がアメリカに出現した。

そのパワードテレスドンを追って、後から続く形でジュネッストリニティにチェンジしたネクサスが飛び出してきた。

「フ！」

地上に降り立ち、機からをこめた蹴りで攻撃を仕掛ける。しかしテレスドンはそれを避け、ネクサスを頭突きで突き飛ばした。倒れたところでのし掛かろうとするが、ネクサスの跳ね起きと同時に突き出されたキックで押し出される。

今の攻撃で後退したテレスドンの目に、ネクサスは一発の光弾を放った。

〈パーティクルフェザー〉

「ハア！」

「グギャアアア！！！」

〈シュトロームソード！〉

光に弱い上、目を潰されたテレスドンはすでに弱り果てていた。視界が閉ざされている隙にネクサスは光の剣を形成、テレスドンに留めに一閃を与えた。

〈雷光閃！〉

一瞬の光と共にネクサスはテレスドンの背後に立ち、胸元を貫かれたパワードテレスドンは倒れて絶命した。

（地上の人間たちが侵略者…か）

もしあの話が本当だとしたら、彼らこそこの星の住人で今のハルケギニアの人々は侵略者の子孫、そして今自分は許されないことをしたことになる。しかし、彼らは呈示できる証拠を出さなかった。再

び尋ねようにも、あそこは危険地帯で連中は自分を狙うだろう。ネクサスはそのまま帰りを待っている家族の下へ帰還した。余談だが、彼が帰って来た瞬間、「まる1日どこに行ってたのよ！」と自分のマスターに涙ながらに怒られ、返す言葉が見つからなかったらしい。

一方、アルビオンからは巨大な謎の飛行物体がゆっくりトリステインの方角へ飛行していたが、この時だれもその危機を察知できずにいた。

4　盗まれたウルトラゼロブレスレット

「よし…」

テレスドンが地上に現れ、ジュリオのゴモラが交戦してる頃、仮面を着けた謎の女が学院長室の金庫の扉を無理やりにこじ開け、その中に機械じがけの箱を押し込んだ。

「誰じゃ！？」

しかし、そこで駆けつけたオスマンに見つかってしまう。

「くっ！」

謎の女は自分の胸元に手を突っ込みだす。何が隠してるようだ。

「ぉほ！でかい…じゃが！」

一瞬豊満な胸に釘付けになりましたが、オスマンはそれに流されまくるほどアホではない。自分の手に持っていた、星のマークのハンコを投げつけ、それは女の胸元に当たると、当てられた胸元にハンコのマークと全く同じ形の刻印が刻まれた。

「ちっ！」

女は舌打ちと同時に、胸元に隠し持っていた杖を振ると、床から立方体のレンガの山が盛り上がり、オスマンと彼女の間を阻む。その盛り上がった土が元に戻った時には、女の姿はなかった。

「逃げられたか…」

テレスドンがジュリオのゴモラによって倒された直後、学院長室の辺りには野次が集まっていた。野次にはサイトやルイズもいる。学院長には世話になってもいるので様子を見に来たのだ。

「一難去ってまた一難か…」

ブレスレットを無くした左手首を握りながらサイトは呟いた。ブレスレットは肌身離さず持っていた、にも関わらず彼の手元から消えていた。でも今朝はきっちり身に付けていた。確か一時意識を失ってたんだよな…だとしたら！

（地下図書館への道中でルイズの魔法喰らった時だ！）

自分がルイズの爆発魔法で皆が一時気絶した時に、犯人はサイトからブレスレットを盗み出したのだ。しかしあの時、ルイズの魔法で帰り道が塞がれたのなら、犯人も同時に逃げられなかった。そして地下図書館へたどり着くまでが残されたただひとつの道、それまでに誰かが歩いた痕跡はない。つまり…

（まさか、俺の正体を知る誰かが気絶してる隙に…）

地下図書館へ向かってる時に同行していたのはアニエス、ミシェル、ジュリオ、エレオノール、そしてルイズ。最初ロマリアの神官であること以外素性の知れないジュリオを疑いたくなった。が、証拠が無さすぎるし、それ以前にあのブレスレットは変身した後も目立った特徴として捉えられてるはず。いきなりそいつを疑えば、自分の正体が広まってしまう可能性がある。今は堪えるしかなかった。

「銃士隊の隊員でこの件を調査する。全員部屋に戻れ」

ミシェルの指示で野次の女子生徒たちは女子寮の自室に戻っていった。

「私たちも戻りましょ」

「ああ」

ルイズとサイトも一緒に戻ろうとしたが、サイトはアニエスに引き留められた。

「ミス・ヴァリエール。済まぬがサイトをお借りしたい。あなたは部屋で待機してくれ」

「え？なんでよ？」

「調査内容に従ってサイトの力が必要なのだ。申し訳ないが…」

現在、夜風が吹き抜ける真夜中の学院長室にはサイト、アニエス、ミシェル、ジュリオが集まり、そしてオスマンがテレスドンが暴れてる間ここ起こったことを説明した。

「さて、あの地面より出現した怪獣が暴れてる間、賊はわしが学院長室に戻った時には金庫をこじ開けておった。幸いモートソグニルがすべて見ておったからの、逃がしはしたがその前に犯人の証を刻み付けることだけはできた」

白いネズミの使い魔を撫でながら、オスマンはあの星のマークのハンコをサイトたちに見せる。

「このハンコはわしにしか押せない特製のマジックアイテム。一度押せばトライアングルクラスのメイジでも消すのに時間を有する」

「だけど賊が脱走した形成も侵入してきた形成も学院の校舎中を回ってもいなかったよ。つまり…」

ジュリオに続くように、ミシェルが言った。

「賊は内部にいる」

「しかし、読めないのは賊の目的じゃ。こんなものを置いていきよったただけで何も持ち出しとらん」

そう言ってオスマンが机に出したのは、鉄製の小型の箱だった。しかし、その箱箱は機械のようなボタンがいくつか着いている。いや、機械そのものだった。

「これは…通信機？」

サイトが言った。なぜ賊はこんなものを残したのだろうか？明らかに何を目的としたかの証拠を残してるようなものだ。通信機自体ハルケギニアではまだ発明されてないので、オスマンが首をかしげる理由がわかる。

「通信機？なんだそれは？」

アニエスがサイトに尋ねる。

「遠く離れた人と連絡をとるために使う機械、まあハルケギニアでいえばマジックアイテムみたいなものです」

電話機に音声記録機能があるように、この通信機にも似たような性能があるかもしれない。試しにサイトはスイッチの一つを押した。すると、わざとらしく濁らせたような声が聞こえてきた。

『任務完了しました、閣下。迎えをお願いします』

「任務完了…一体どういう意味だろう？」

「おそらく何か任務を与えられて侵入してきたのじゃよ」

疑問に思うジュリオの後に、オスマンは一つの仮説を立てる。

「今のハルケギニアに通信機を作る技術はない。にもかかわらずアルビオンには怪獣を操る技術がある。だとしたら、犯人は…」

サイトの予測と同調するようにアニエスも口を開いた。そうとしか

考えられない。

「アルビオンと繋がっている王立高等法院長『リッシュモン』の配下メイジ」

「高等法院がかの？」

この時リッシュモンという人物は、トリステインの名貴族として名を馳せている。オスマンもトリステイン貴族のトップクラスに近いので彼のことは知っている。確かに通信機から聞こえた『閣下』の意味ではまさかり通るがまさかアルビオンと繋がってるとは…。でも同時にアニエスたちが地下図書館を利用したこともわかった。あれほど警告したのに…と思ったが過ぎたこと。まずは目の前の事件の処理だ。

「犯人がこの学院内のメイジに紛れてるってことは、学院の教師生徒の女性は全員容疑者ってことだね。何せ学院長好みの胸の持ち主だったからね」

「お恥ずかしながら…」

スケベなのは事実なため、ジュリオの言葉に否定できないオスマン。そこにサイトが異を唱えた。

「でもルイズは土の魔法なんか使えないぞ」

「確かに娘っ子はは土系統の魔法は使えないが、あいつの姉さんたちはどうかねえ？」

デルフが鞘から顔を出した。

「どうしてだよデルフ？」

デルフの話だと犯人はあの姉の内の一人と言うことだ。失礼な話になるが、エレオノールはルイズみたいに胸が薄い。対してカトレアはバストサイズは姉とは大きく違う。ここからしたら最も疑いがあるのはカトレアになる。

（でもあの人は病み上がりだ。元々病弱だからそう動ける体じゃないはず）

オスマンの目の前から巧みに逃げるほどの相手だ。闘病生活のせいでカトレアはあまり運動は得意じゃないのは目に見える。つまりカトレアの体や運動能力ではオスマンの前から逃げること事態かなわないはず。病気の元であるダリーをこの手で退治したのだ。少なくともサイトはカトレアへの疑いを持っていない。

しかし、これだと一体誰が犯人かわからない。ウルトラゼロブレスレットをほったらかして紛失したとは思えないし、勝手な憶測だろうがそれを盗んだ犯人と、学院長室に忍び込んだ犯人が無関係とは思えない。通信機などという手段を使い、『任務完了』の通達。おそらく任務の内容は、自分（サイト）からウルトラゼロブレスレットの強奪。敵の上層部は少なくとも自分の正体を知ってるだろう。以前シュウヘイが『レコンキスタのバックに黒幕（石堀）がいる』と話していた。その石堀と繋がりのあるアルビオン貴族がリッシュモンに、そして今回の犯人に任務を言い渡した。そして通信機を学院長室に置いた。

だが、納得できない部分が出る。大体なぜここに通信機をわざと置いていく必要があったのか、それにこれを話したところで自分以外の人たちが納得できるはずがない。なにせ自分の正体に関わることだ。何より、アニエスたちには自分たちが納得できる、エレオノー

ルかカトレアが犯人であるアリバイがあった。それはミシェルの口から説明された。

「ヴァリエール姉妹の父上は女王陛下の政策に反対していたらしい。今の戦時政策に不快感を抱き、アルビオンと接触、そしてこの学院に来た二人に命令を下した。もしトリステインの存亡に関わることになったら、これは立派な国家反逆罪だ」

彼女たちの妹であるルイズ。その父上がアルビオンとの接触があったことが本当だとしたら、ルイズもただでは済まされない。なんとしても彼女たちの身の潔白を証明し、ウルトラゼロブレスレットを取り返さなくては。

ジュリオとアニエスは女子生徒、サイトとミシェルは女性教師とルイズを除くヴァリエール姉妹に刻印の有無を調べるため、二手に別れて調べることにした。しかし、調査方法がいかがわしい…なにせ犯人の胸元に刻印が刻まれているのだ。いきなり見せろだなんて言っても相手は犯人じゃなくても見せないのはわかりきったことだ。

「どうするんですか？ミシェルは女性だからいいんですけど俺は男だし…」

これがルイズや光の国にいるハルナに知られたら大変だ。
ジュリオは女子生徒からの人気があるから、想像したくないがきっ
女子生徒たちは素直にジュリオに従うだろう。アニエスは女子だか
ら問題なし。まあミシェルがいるからよかったが、と思ったらミシ
ェルから予想外の言葉が出た。

「お前はヴァリエール姉妹を頼むぞ。私は教職員に当たる」

「え？一緒にやったりしないんですか？」

せめてミシェルと二人同時なら、自分は犯人の見張り役になれるの
に、まるで自分に痴漢しろと言ってるようではないか。

「お前のようなへっぴり腰がいても足手まといだ。犯人など私一人
で十分」

ミシェルはサイトを見下したような言葉を放って、職員室に行って
しまった。

（可愛くない奴…）

サイトはムッとしながらも、まずはエレオノールの部屋に入った。

彼女の部屋はすでに真っ暗でエレオノールは眠っていた。地下図書
館に行くだけだったのに怪獣だのルイズの失敗魔法で生き埋めにな
りかけるだのと疲れたのだろう。
一寸先は闇、とはまさにこのこと。彼女を起こしたらルイズ以上の
お仕置きが来るのは言うまでもない。とりあえずバレないように調
べるしかない。ハルナやルイズ、そしてエレオノールに心の中で謝
罪しながらそっとそ～っと近づくサイト。しかし、そこでまさかの

事態が発生！

「伯爵さまあああ！！」

「のわっ！？」

バッバレたあ！？
もうダメだダメだダメだダメだもうおしまいだ
死んだ
地獄行きだあああああああ！！！！

とにかく絶望思考がサイトを支配しようとする。いや、今「伯爵」って？

実はエレオノールは起きてない。夢で自分との婚約を破棄した伯爵とイチャイチャしてるという、まあなんとも卑猥な夢を見ていたのだ。寝ぼけるあまり、近くにいたサイトに抱きついてしまったのである。さすがはルイズの拡大版。普段ツンツンしてばかりなせいで、デレ具合が彼女より凄まじい。声は完全に甘くて高い。女のいい匂いが彼の理性を削っていく。

「あああ～伯爵様あぁ～今すぐ抱いてえええぇえぇ～」

だっダメだダメだ！クールになれＣＯＯＬに！シュウヘイみたいに！でなければ負けよ平賀サイト！
必死に誘惑に耐えながらサイトは彼女の手を離そうとゆっくり彼女をベッドに寝かせ、その際にエレオノールの胸元を見る。

（あ～よかった…なかった）

エレオノールには刻印がなかった。予測はしていたが、これならアニエスたちも納得できるはず。しかし…

「焦らさないでぇぇえええぇぇ伯爵さまあああ…」

エレオノールが完全に夢の世界に入り込んでたため、彼女の呪縛から解放されるのに時間を有した。

30分時間をかけてなんとか解放され、なんとか脱出したサイト。エレオノールの部屋の扉であまりの恐怖と誘惑のスリルに圧倒され腰を抜かしてしまった。

「いっそ襲ったらよかったんじゃないすか旦那?」

ウルトラガンを収納しているベルトのホルダーから地下水がからかってくる。

「バカ言え、女子の体は色んな意味で宝なんだぞ!気安く踏み込んだら向こうが傷付くか殺されるか…」

とその時、いきなりエレオノールの部屋の扉がバン!と風船が破裂したように開き、鬼の形相のエレオノールが立っていた。

「誰が私の部屋に入り込んだ輩がいるわね!?どこ!?どこにいるの!?」

しかし、その入り込んだ輩は彼女の目に入らなかった。なぜならその輩、サイトは彼女が扉を開けた瞬間、その扉の裏側に挟まれぺしゃんこになっていたのだから。

「ふん、まあいいわ。次見つけたら晒し首よ！」

とまたバン！と思い切り扉を閉めた。ぶっちゃけ騒音なので迷惑だ。サイトはペラペラの紙のようにズルズルと床に崩れ落ちた。

「サイト、大丈夫か？」

ちょうど女子生徒たちを調べ終わったのか、アニエスがサイトの元に駆けつけてきた。しかし、ペラペラ紙状態のサイトから返事なし。

「…重傷だな。仕方ない、運ぶか」

アニエスはサイトを肩に乗せ、学院長室に戻った。

「新しい、記録？」

ジュリオも戻り、サイトが元に戻ったところで学院長室で新たな話があげられた。話によると、あの通信機にさっきまで入ってなかった音声が入ってたのだ。いわゆる返信である。

「これじゃ」

サイトがやってみせたように、オスマンは受信された返信を再生するため、ボタンを押すと、今度は男の声が聞こえていた。

『迎えに行く余地なし。すでにミサイル発射は完了。１０分後君は名誉の死を遂げる』

「ミサイル？」

聞き慣れない単語にアニエスとジュリオは首を傾げるが、サイトとオスマンは顔を青くしていた。サイトはもちろん知ってたし、オスマンも以前今は亡きキリヤマ隊長に助けられたことがあるため、地球兵器の恐ろしさを知っている。

まさか…この通信機の役目は相手と連絡を取るためだけではないのなら…

「１０分後、ミサイルがここに墜落したら学院は破壊される」

「なっ！？」

心臓が止まりかけ、寿命が縮むような事実を知った一同。ミサイル到着まで１０分の間生徒や職員、料理人やメイドたちを逃がすには、出兵した男子生徒たちを除いても人数が多すぎて無理がありすぎる。それにミサイルは町ひとつは軽く破壊できるものだってある。逃げ道なんてない。ウルトラホークも役に立たない。

「あれ？ミシェルは？」

ジュリオのその発言で一同はあることにようやく気がついた。

ミシェルがいないのだ。ここに集合してから姿を見せていない。どこへ行ったのだ?まさか…

「すみません、借ります！」

「おいサイト！どこへ行くんだ！?」

サイトはアニエスの制止を振り切り、通信機を持ってどこかへ走り出した。

やっとわかった。

地下図書館へ行った時もいたし、テレスドンが現れた時はそちらへ気をとられてたので気がつかなかった。

ウルトラゼロブレスレットを盗み、学院長室に忍びこんだ犯人はミシェルだ！

一刻一刻とミサイルは、魔法学院の方へ向かっていた。その大きさは役百立法メートル。爆発したらその何倍もの一体が火の海と化すのは間違いなかった。

「迎えが、まだ来てないのか？」

真犯人のミシェルは学院から少し離れた森の中にいた。通信機の連絡通りならもう迎えが来るはず。しかし、迎えに来るはずの竜騎士も馬に乗ってくる騎士も来なかった。

そこに、大急ぎでやって来たサイトがミシェルの背後にハアハア…と息を切らしながら現れた。

「あなた、だったんですね？犯人は」

それを尋ねられたミシェルはとっさに反応して銃を、対するサイトもウルトラガンを手に取ろうとしたが、先に撃ち込まれてウルトラガンは弾かれてしまった。

「く…」

「お前の言う通り、私が犯人だ」

その証拠としてミシェルはサイトから盗み出したウルトラゼロブレスレットと、胸元に刻まれた刻印を見せつける。

「私は元々トリステイン貴族だ。しかし、この国に裏切られた」

元トリステイン貴族、それなら土の魔法を使ったことと一致する。

「裏切られた？」

「父はある汚職事件で濡れ衣を着せられ処刑され、母も後を追った。帰る場所を無くした私は汚い仕事に手を染め、生きるにはなんでもやった！そんな時、リッシュモン閣下は私を助けてくだされた。この国を転覆させろと、そのために私と繋がってるアルビオンに従えと。

しかし、この国をアルビオンの領土にするために邪魔な存在がいる。それが平賀サイト、いや…ウルトラマンゼロ！お前だ！」

杖を突き付け、ミシェルはサイトを睨み付ける。正体が英雄でも神でも彼女にとって自分を裏切った国の味方をする彼は憎む敵だった。

「そんなの憎しみからの逆恨みじゃないか！だからって関係のない人たちまで巻き込むってのか！？

今回俺が狙いだったら、どうして他の人まで巻き込むんだ！？」

ミシェルの狙いはサイトただ一人。彼がゼロへの変身に使うアイテムを奪い、学院にミサイルを呼び寄せれば、サイトも学院と運命を共にすることになる。

変身できなければミサイルを止められまい。あの通信機にはミサイルを学院へ飛ばすためのコントロール装置的機能も働いていた。正解な位置に落とすように操作し、学院長室においたのはそのためだった。磁石に似たコントロール方法で呼び寄せてるのだ。

任務内容は、ウルトラマンゼロの変身に使うアイテムを強奪、そして抹殺。同時に地下図書館もミサイルで破壊してリッシュモンがアルビオンに寝返った証拠の完全消去すること。

石堀やシェフィールドがバックに着いていたこともあって、サイトの正体を手に取るように掴めたのでミシェルには容易い任務だった。

「ふん、そんなことは知らん！女王だってなにもしてくれもしない。どうせ腐った国だ…そんな国の民も貴族もみんな腐ってる…国を転覆させるほどのことをせねばこの国は腐ったままだ！」

彼女もまたこの国、いやこの星の負の歴史の被害者。その悲しみはやがて憎しみとなり、国に反逆するに至ったのだ。

「違う！その世界に生きる人が他人を信じ、努力すればどんな国も世界も、そして人々も平和でいられるんだ！」

「ふん、何を言おうとあと8分でお前と学院の者共の命は終わりだ」

勝ち誇るようにミシェルは言う。

「あなたも死ぬのか？」

「私は仲間が迎えに来る。後は爆発の炎で苦しみながら死ぬ貴様らを傍観してやる」

「…」

やはり彼女は知らないのだ。そう思うだけで彼女に対して悲しみを抱かずにはいられなかった。

「あなたはリッシュモンに救われたと思ってるけど違う。汚職事件であなたの家族を陥れたのはリッシュモンだ」

「なっ…！？」

予想だにしないサイトの言葉にミシェルは不敵な笑みを崩した。

「アニエスさんの読んだ資料のメモ、俺も読んだんだ。文字まだ読めないから正確には読んでもらったんだけど」

「バカな…デタラメを言うな！」

サイトに杖を突き付け、憎しみの念を放つミシェル。信じた人間を侮辱されたようなものだ。ただの独りよがりな自己満足でしかない正義の味方を気取っていい気になりおって！

「証拠ならあるさ」

サイトはミシェルが使っていたあの通信機の再生スイッチを押し、受信されたメッセージを流す。

『迎えに行く余地なし。すでにミサイル発射は完了。１０分後君は名誉の死を遂げる』

「誰も来ない。あなたはリッシュモンにとって都合のいい操り人形、初めから見捨てられてたんだ」

「…っ！……」

ミシェルは杖と銃を落とし、酷い精神的ショックを受けた。自分は信じてたリッシュモンにずっと騙され続けていたのだ。

なんて無様なんだ。結局自分はなんのために…

目から大粒の涙を流しながらサイトの顔を見上げるミシェル。サイ

トは彼女の手を優しくとり、強い眼差しを見せながら言った。

「この国、いや…この星でもう一度生きるんだ。この星と共に」

「…」

ミシェルは何も言わず、サイトから盗んだブレスレットを彼の左手首に装着させた。

そしてサイトはウルトラゼロアイをブレスレットから出現させ、装着し変身した。

「デュワ！」

等身大のウルトラマンゼロとなった彼はトリステインへ近づいてるであろうミサイルへ飛びながら向かっていく。急がなければ。

一分も経つことなくゼロはミサイルを発見した。

ここに来る直前ミシェルは、あのミサイルは内部が宇宙人の船のような作りとなっていると言っていた。ならば内部に侵入して！ゼロはタックルで壁をこじ開け、ミサイルの内部に侵入した。学院のあの通信機兼コントロール装置ではもう起動は変えられないらしい。急いでここで別の起動に乗るよう操作しなくては。辺りを見渡し、ミサイルのコントロール装置を発見したゼロ。ガンダールヴの力のおかげで初めての『兵器＝武器』であるミサイルのコントロールも簡単にできた。スイッチをいくつか押し直し、ハンドルやレバーを動かすと、魔法学院へ落ちるはずだったミサイルは起動を変え、宇宙の彼方へと飛んでいった。

ミシェルの様子を見に、もとの森に戻ってきたサイト。しかし、彼の目に飛び込んできたのは悲惨なものだった。

「っ！」

ミシェルは倒れていた。オスマンに刻み付けられた刻印のある胸元を銃で撃ち、自殺したのだ。しかも、手首の頸動脈を剣で切っていた。

冷たい氷のように動かなくなり、安らかな眠りに着いた彼女を、サイトはかがんで抱き上げた。指も全く動かない彼女の手を握り、悲しみに満ちた涙で彼女の顔を濡らしていった。

（どうして、絶望の淵から這い上がろうとしなかったんだ…？俺にも、それができたってのに…）

翌日の早朝、サイトは事態をアニエスやオスマンに報告し、ルイズの部屋へ戻っていった。

いつか、私たちも他の世界へ行ける日が来るのかもしれない。しかし、そこに生物がいないという保証はどこにもない。もしあなたが

他の星へ旅立つとしたらあるいは、悲しい最期を遂げたミシェルと同じ運命が待ち受けているのかもしれない。

5　女王の休日

「例の調査は済みましたか？」

「はい、これが調査報告書です」

翌日のトリスタニアの城にて、アニエスはアンリエッタに地下図書館で手に入れた情報を纏め上げた報告書を差し出した。彼女から受け取った報告書を読み上げ、アンリエッタは顔を顰める。リッシュモンは彼女もよく知っている。幼い頃からの付き合いでもあった。彼が自分が生まれたときからずっと騙し続けてきたことは、彼女にはショックだった。でも真実は真実。心を鬼にして構えなくてはならない。

「獅子身中の虫とはまさにこのことですね」

「即刻逮捕し、お裁きになりますか？」

「いえ、これらの情報だけでは、『情報の偽造』と疑われる可能性があります。あの計画を進めましょう」

「しかし、陛下の身に及ぶようなことになったら…」

主の身を案じるアニエスだが、アンリエッタの顔は自身に満ち溢れていた。

「心配には及びませんわ。私には頼りになる護衛がおります」

まず一旦魅惑の妖精亭で待機、そしてアニエスから内容を言い渡すとのこと。トリスタニアにある魅惑の妖精亭の前についた時、彼は深いため息をついた。

「はあ…俺あの店長苦手なんだよな」

スカロンのあのテンションと、気持ち悪さは男から見れば…これ以上はどう表現すべきかわからない…

「任務だから仕方ないわ。姫様がアニエスを通してご依頼してきたのよ。きっととても難儀な任務なのよ。さ…入りましょ」

魅惑の妖精亭では、なぜか店員の女の子たちはいつもの服装とは違い、まるで劇でもやってるような格好だった。たった今振り付けの練習をしているように見える。

「いいわよ妖精さんたち!!」

ポーズを決める店員たちをほめるスカロン。彼もいつも以上に女装に手を加えた服装だ。

「あっあの…」

「お久しぶりですスカロン店長…」

サイトたちが入って来たことに気が付いて、スカロンたちは一旦練習を中断する。

「あらあんたたち、来てたの？」

「どうしたの急に！？」

ジェシカは驚きの様子でサイトに尋ねてきた。

「待ち合わせ…かな？」

女王からの直々の依頼なんてとても言えないのでそう答えるしかない。

「ちょうどいいわ！！人手が足りなかったのよ。あんたたちも今夜の舞台に出なさい！」

「舞台！？」

スカロンの無茶振りにサイトとルイズは絶句する。

「じゃああなたたちのその格好…」

「そっ！！今夜劇場で舞台に出ることになったのよ。これ似合うかしら？」

ジェシカは貴族の礼状のような可愛らしい服を着ている。

「あ…ああ、似合うよ。でもこの店、シュウヘイも働いてるんだよな？あいつ何の役だ？」

「ふふっ、聞いて驚きなさいよ…店のみんなの意見一致で『無理や

り』主役に立ち上げさせたのよ！」

「「主役！？」」

驚愕する二人に、ジェシカは壁に張られた劇の広告と思われるポスターを指差す。ポスターの絵にはウルトラマンネクサスのアップと、主役コスチュームのシュウヘイに、さっきの服装からかヒロインの役割をしてると思われるジェシカの姿が描かれていた。

「『トリステインの守り神・ウルトラマンネクサス』…？」

地球でいう、ヒーローショーみたいなものをやるようだ。しかし、店にはシュウヘイの姿が見当たらない。

「今あいつどうしてるんだ？肝心の主役、いないみたいだけど」

「今買い出しに行ってるわ。もうじき戻ると思うよ」

「さあ、何ボサッとしてんの！？さっさと着替えてお店手伝ってちょうだい！！」

「えっあっ！ちょっと！」

サイトは厨房に、ルイズは他の店員たちに更衣室へ連れていかれ、露出のあるメイド服に着替えさせられた。

「しょうがないわね…学生服よりも自然に見えるもんね…」

夜、サイトはシュウヘイと厨房で皿洗いをしていた。

「お前演技とかできたのか？」

そんなところまでシュウヘイは器用だったっけ？とサイトは思った。

「遊園地でのバイトでな、ほぼ無理やり仮面ライダーの着ぐるみ着せられてたんだ。特に憐と地〇兄弟の役をやってたな」

「地〇兄弟って…」

ずいぶんヤバい役をしていたな…今夜の舞台の主役にもなるほどだし、シュウヘイはやはりすごいとサイトは思った。

「ルイズちゃん！ご指名よ！」

「あっはい！」

待機していたルイズはスカロンに呼ばれ、自分を指名した客のもとへ向かう。

「お待たせしまし…ってあなた！」

指名してきたのは、なんとジュリオだった。なぜこんな場所に！？

「やあルイズ。その衣装、可愛らしいね」

「なななんで…ってひゃ！／／／」

ジュリオはルイズを引き寄せ耳元でルイズにささやく。

「実は僕もアニエスに頼まれたんだ。ここに待機するようにね」

「え？」

店の裏手に出たサイトは抱えていたガラス瓶の箱を運んでいた。サイトもまさかジュリオが来るとは思わなかった。

「あいつ…一体何しに来たんだ？」

とその時、フードを被った見かけない少女とぶつかった。

「あっ、すいません！大丈夫ですか？」

すぐに彼女の元へより、かがみこむ。

「大丈夫です。あの…ここに『魅惑の妖精亭』という店はありますか？」

「ああ、ここですけど…て」

「「その声！！」」

同じタイミングでその驚愕の声は重なった。その少女はアンリエッタだった。

「！しっ！！」

彼女は何かに気がついたようにサイトの口を塞ぐと、トリスタニアの兵士たちが裏手近くの道路を走っていた。

外は雨だし、そのままでいることはできないのでサイトは店の更衣室へアンリエッタを連れてきた。

「ルイズを呼びましょうか？」

「いえ、サイトさん。私はあなたのお力をお借りしたいのです。数刻の間私を護衛していただけますか？」

「俺に？ですけど姫様には部下がたくさんいますし、アニエスだって…」

「極秘にことを進めないとなりません。どうか…」

女王なのに頭まで下げて頼むアンリエッタ。サイトとしては断る理由もないし、これから先アンリエッタが危険が伴うことに向かうようなので了承した。しかし、なんだろう…なにかいけない気がする…

「いいですけど…（変な意味で）危ないことじゃないでしょうね…」

「へ…？／／」

「後で皇太子様やルイズに知られたらもうしわけが…」

「だっ大丈夫です！ご安心ください！それより早く出発しないと！時期に兵が巡査に回ってきます。いつまでもここにはいられませんわ！」

急いでフードを取る。でも今の自分は女王らしく高級なドレス。この格好では目立ってしまい、人目で正体がバレてしまう。

「サイトさん、平民に見える服を貸していただけないでしょうか？」

そう言われ、サイトは着替えの入った箱を探る。

「ルイズのシャツとスカートしかないですけど…」

「それで構いません」

「…え〝…！？」

サイトが振り向いた時には、彼女はもうドレスを脱いで裸になっていた。月の光で彼女の白く美しい背中が真っ先に飛び込んできた。しかし、女王たるものがなんて大胆なことを…

「ありがとうございます。サイトさん、服を」

必死に目を手で塞ぎながらアンリエッタにルイズの服を渡す。

（にしても…ルイズのシャツ着れるのか？）

アンリエッタはルイズよりも一つ歳上なこともあって身長も高い。

それに元々バストサイズのないルイズのシャツに、シエスタ以上キュルケ未満なほどの彼女に着れるのか？

「うーん、シャツが小さいですわ」

着るには着れたが、やはり小さすぎてボタンをすべて閉めることができず、谷間が丸見えだった。読者の皆様、あまり釘付けにならぬよう…

（やっぱり…）

その頃の魅惑の妖精亭…

「乾杯～～！」

「「「乾杯～～！」」」

ジュリオは店員たちと酒を飲みまくり。これがロマリア神官の姿なのか…？

「いやぁいい店だなぁ！あはははは！」

「はあ…アニエスはまだかしら…」

ルイズはぐて～とテーブルに頭を乗せている。ジュリオに勧められ

て酒を飲んでしまい、ちょっと弱っている。酒をアニエスはまだ来ていなかった。

「妖精さんたち!!今夜は舞台だからお店早終いにしちゃいましょ！」

「「「はーい！」」」

「えー。もう閉めるの？もっと乾杯しようよ」

「おしまい！」

酔っぱらうジュリオを無視し、ルイズは立ち上がって店中を見て回る。そこでようやく気がついた。サイトが厨房にいなかった。

「ちょっとシュウヘイ、サイトがどこに行ったか知らないかしら？」

「いや、俺はあいつが空き瓶を運んでから姿を見てないが…」

一方、アニエスはリッシュモンの屋敷にいた。表向きは相変わらず高等法院長なので、今回の任務の秘密度を高めるためにリッシュモンから街道の封鎖許可をもらいにきたのだ。

暖炉の火は彼女の憎しみの源である記憶の、ダングルテール村を焼き尽くす炎のように燃え上がっていた。その食事などで使われる広

い部屋でアニエスは憎き仇、リッシュモンと再会する。

「急報とな。銃士隊の隊長がやって来たからにはよほどのことだろうな」

「女王陛下が失踪いたしました」

「なに？」

リッシュモンは予想だにしない事態に耳を疑う。

「お主らは無能を証明するために新設されたのか！？以前にも同じような事件が起きたばかりだぞ！！」

「汚名を注ぐべく、国家全力をあげての調査中であります。街道の封鎖許可を頂きたい」

リッシュモンは許可証にサインしアニエスに渡した。

「全力を上げて陛下を探せ。見つからなかったら貴様らを高等法院の名にかけて縛り首だ」

「は！」

街ではトリステイン兵士が全力をあげて検問を行っていた。

「非常線を張られてますね」

これでは先に進めないな。サイトはそう呟いた。

「貴族の娘が拐われたとして、巡査の兵を配備させたのでしょう。私を探すために。顔を隠すと余計怪しまれますわ。サイトさん、私の肩に手を回してください」

言われた通りサイトはアンリエッタの肩に手を回し、検問に当たる兵士たちを通りすぎようとする。が…

「なんか…目立ってる気がしますけど…」

アンリエッタも身を寄せてるような姿勢なため、相当のバカップルにしか見られない。

「し…そのまま…」

アンリエッタは大胆にも谷間にサイトの手を突っ込んだ。ここまでするとは、さすがと言うべきか…

「／／／／／／…」（ああハルナ、皇太子様、ご主人様お許しください…このサイト…女王陛下の谷間に…）

顔を真っ赤にしながらサイトは必死に詫びるに詫びたのであった。

その頃、サイトを探し始めたルイズは偶然にもアニエスと会った。

「アニエス、ここで何してるの？警備も厚いし、何が起きてるの？」

まさかここでルイズと鉢合わせするとは思ってなかったか、アニエスは少々動揺していた。この時、リッシュモンの屋敷から出てきた男を探してたところだった。

「今は説明してる暇がない！来い！」

「え、ちょ！」

いきなりルイズを引っ張り、アニエスは魅惑の妖精亭とは別の飲食店に入り込んだ。さっきリッシュモンの屋敷から出た男は二階への階段を登っている。見つからないように追いかけ、壁の影に隠れる。

「ねえ、一体なんなの？」

「しっ！静かに…」

訳がわからず訪ねるしかないルイズをアニエスは黙らせ、壁から覗き込むように男の様子を観察する。

男は部屋から顔を出してきた髭の人物と話している。

「例の劇場でリッシュモン様がお待ちです。どうもこの日、女王が連れ去られたとか」

「嘘！！」

アンリエッタの失踪を聞いてルイズの驚愕の声が、あの二人に聞こえてしまった。不味い。こちらに近づいてくる。こうなったら…

アニエスが次にとったのはあまりにも大胆な行動だった。

「なっ…」

ブチュ…

アニエスがルイズに濃厚なキスをしていた…。男は「ちっ」と舌打ちすると、その場から立ち去っていった。ルイズはその場にぷしゅーッと煙を吹きながら崩れ落ち、アニエスも自分のとっさの行動に、顔を赤くしながら固まっていた。

「ななな何すんのよ！？／／」

「こ、これも任務だ！／／」

ルイズは回復してすぐに起き上がって彼女に怒鳴り、逆にアニエスも強く言い返した。

「裏切り者をいぶりだすために、姫様が逃げたって情報を流したんですね」

宿屋のとある一室でサイトはアンリエッタと話していた。

「ええ、でもリッシュモンは偽の情報に引っ掛かるような男ではありません。ですから私なりに本気で逃げたのです」

「でもそれじゃ、姫様に危険が…」

「だからこそ、サイトさんに護衛をお願いしたのです。ごめんなさい、危険なことに巻き込むことになって…」

「いえ、俺のことは気にしなくて大丈夫ですよ。でもできることなら、違う人がよかったとか…？」

「…」

サイトにそう言われ、アンリエッタは図星を突かれた様子で黙り込んだ。

本音では、ウェールズと居たかった。でも最も大切な彼を危険に巻き込み、今度こそ死ぬことになってしまえば、もう自分は生きる気力まで失いそうだ。

「本当にごめんなさい、サイトさん…」

まるでサイトを囮に利用したような手口に、アンリエッタは自己嫌悪する。すごく落ち込んだ彼女にサイトな気にしてないと言おうとしたその瞬間、扉からドンドン！と叩く音が彼らの耳に飛び込んできた。

「開けろ！女王陛下捜索部隊の者だ！ここを開けろ！」

巡査の兵士たちがついにここまで来ていたのだ。不味いことにここは二階。窓から飛び降りたらけがでは済まないだろうし、余計怪しまれてしまう。今は鍵を閉めてるが、いずれこじ開けられてしまう。

「仕方ありませんわ。ウェールズ様、サイトさん…お許しを！」

「え…何をす、ってぇ！？」

「この！っ…」

扉を開けて入ってきた瞬間、兵士たちは赤面して黙り込んでしまった。

その目に飛び込んできた光景はあまりにも…

上半身のシャツを脱いだアンリエッタがサイトに抱きつきディープキスしてるではないか。確かに兵士の目を欺くためとはいえ、これは確かに謝らないとダメな気がする。

「ちっ、行くぞ」

兵士たちは調べるまでもないと判断し、その場から立ち去っていった。

「そ、そろそろ劇場へ参りましょう…そこでリッシュモンが密使と待ちあわせしてるそうです…／／」

「はっはい！／／」

強引ながらもシャツを着てアンリエッタは話を戻すことで気を取り直し、サイトもなんとか忘れようと必死になり、合意した。

「じゃあ裏切り者をいぶり出すために姫様はわざと逃げてサイトは姫様の護衛についてるのね」

ようやくルイズはアニエスから、今回の女王失踪の騒ぎの原因とアンリエッタの作戦についてアニエスから聴きだすことができた。

「ああ、サイトなら適任だと言っておられた」

「じゃあ私はただの脇役だってこと!?」

「あいや…それは…とにかく例の店で待機してくれ」

「どこへ行くの?」

「劇場だ」

「あらルイズちゃん」

背後からわざと声を高くした年増の男の声がした。ちょうどスカロンたちがやって来ていたのだ。

「何してるの?お芝居始まっちゃうわよ」

「…どのみち…来ることに…?」

「…ええ」

さすがのアニエスもスカロンの姿に引いており、ルイズもまたそれに同調するように答えた。

アニエスにアンリエッタを預け、サイトはスカロンたちの元へ劇の打ち合わせわ軽く行い、劇場でスカロンたち魅惑の妖精亭メンバーの劇が始まった。

主役はシュウヘイで、ウルトラマンが人の姿を借りた男の役を、ジェシカは彼に守られる貴族の令嬢の役、ルイズは他の貴族の女性役となった。サイトはというと、ガルベロスそっくりの着ぐるみを着せられている。しかし、そこでサイトはあることに気がつく。ガルベロスと言えば地獄の番犬をモチーフとした怪獣、つまり…

（劇でも犬かよ…）

せめてウルトラマンゼロ役に！と思ったが、男性スタッフ（スカロンはオカマで監督役なので除く）がわずか二人なため、残った女の子たちに痛い役を任せるわけにもいかないので結局この配役となった。

客席リッシュモンも劇を見に来ていた。というのは表向きで、実際は待ち合わせしていたアルビオンからの密使と秘密の会談をしていた。

「して陛下は未だに見つかってらっしゃらないのですね？…」

「左様…して、『例のアレ』は街においてきたか？」

「もちろんです。攻め込むなら今では…閣下？」

「ふふふ…今陛下はどこで何をしてるのやら…」

「ここにいますわ。リッシュモン殿」

「！」

この声は…！リッシュモンが驚くように後ろを向くと、そこには元のドレス姿からフードを被っていた女がいた。彼女が自らのフードを剥ぎ取ると、女王アンリエッタとしての姿を裏切り者に見せつける。

「陛下！」

「やはり思った通り私が失踪すればあなたは急いで密使を密約をかわすはずです。慌てれば慎重さは欠けます。注意深い狐もしっぽを見せてしまうものですわ」

「なるほど。失踪したのは私をいぶり出すための作戦だったと言うわけか」

「その通りです。リッシュモン殿。あなたを国家反逆の罪で逮捕します！」

すると、アンリエッタの後ろから銃士隊全隊員が剣を構えて現れた。

全員この時のために客に化けていたのである。

「フン！甘いぞアンリエッタ！！」

リッシュモンの後ろからも客に化けていた男性兵が現れた。同時にあたりから客のざわめきが漂う。

「陛下をお守りしろ！」

「「「「はっ！」」」」

「アンリエッタを斬れ！」

「「「はっ！」」」

銃士隊とリッシュモンの兵士の交戦が始まり、客たちは劇場から逃げ出した。

リッシュモンと会談していた密使も騒ぎに乗じて逃げようとしたかジュリオに捕まった。

「アルビオンの手先だな。スパイ容疑で逮捕する」

その頃アンリエッタは修羅場のど真ん中にいた。迂闊に動けば巻き込まれてしまいそうだったのだが、自身も逃げ場を失っていた。

「陛下！お覚悟！」

「！」

リッシュモンの二人の兵がアンリエッタに襲いかかった。

〈覇風撃！〉

「ぐぉあ！」

が、どこからか放たれた風の衝撃波と波動弾で吹き飛ばされた。

「大丈夫か？」

「シュウヘイさん…！」

シュウヘイのブラストショットと風の刃だった。

「まったく、主役の邪魔とはいい度胸だ。平賀、連れてってやれ」

「わかった。さあ姫様、こっちへ」

着ぐるみを脱いで駆けつけたサイトもデルフを引き抜き、アンリエッタを安全な場所へ連れて行こうとする。

一方、どさくさに紛れながら殺陣の中を潜り抜けたリッシュモンは舞台に立った。なぜ出口ではなくあの場に立ったかアンリエッタは一瞬で理解した。

彼の足元に逃げ道がある。

「待ちなさい！リッシュモン！」

「いつも詰めが甘いぞアンリエッタ。ではさらばだ！！」

彼が杖をつくと床に穴が空き、リッシュモンは落ちていった。

「フン！逃げ道なら常に用意していたのだよ。このあたりは私の管轄下にあるからな」

フライの魔法で一時的に浮き、ゆっくり地下道に降りる。私の勝ちだ。そう思っていたが、すでに先客がいたことまでは読めなかった。

「おやおや、変わった帰り道を通っておりますなリッシュモン殿」

彼を憎む女剣士アニエスが銃を構えていた。

「どけ。平民ごときに遅れをとる私ではないわ！」

「…貴様の策略で私の故郷ダングルテール村は火の海になり滅んだ…」

リッシュモンは金のためだけにロマリアからの依頼を受け、部下に村を滅ぼさせたのだ。彼にとってはどうでもいいほどのことだったのでアニエスがこのことを話すまでは思い出さなかった。

「なるほど。あの村の生き残りか」

「今こそ皆の敵をとってやる！！貯めた金は地獄で使え！！」

「平民に魔法を使いたくはないが…これも運命か…」

リッシュモンは即座に呪文を唱え、炎の渦をアニエスに浴びせた。

「ぐう！」

そのうねりをあげた炎はアニエスはを一瞬にして飲み込んでしまう。

彼女の故郷を焼き尽くした炎のように。

「フン！他愛ない」

勝ち誇るようにリッシュモンは嘲笑うが…

「はあああああ！！」

予想外なことだった。アニエスは炎の中を掻い潜ってリッシュモンの心臓に剣を突き刺した。

ドス！

「が…バカな…」

「これは我々平民が貴様ら貴族から受けた痛みで、せめて一噛みと磨いた牙だ。ミシェルの無念でより磨かれたこの牙で死ね。リッシュモン」

「…ふ…ふふ…」

急所を突かれ、いつ死んでもおかしくなかったリッシュモンは突然笑いだした。

「何がおかしい！？死に際で気でも狂ったか！？」

「ならば…私もせめて一噛みしようか…こんな最悪のことも考えておったよ…」

「なんだと！？」

「もしものときにアルビオンの密使が…用意してくれた…行け…ゼットン…バキシム…トリステインの者を道連れだ…」

リッシュモンが息を引き取ったと同時に地上から何かがズシンと落ちてきたような音と振動が響いてきた。

ズシン！

「く…女王陛下をお守りしなくては…どこまでも卑劣なやつだ…」

地上。トリスタニアに二ヶ所、妙なカプセルが設置されていた。アニエスがリッシュモンを刺し殺した時とほぼ同時にそのカプセルは爆発、その煙はやがて形をなし、『宇宙恐竜ゼットン』と『一角超獣バキシム』となる。

「…ゼッ…トン…」

「ガアアアア！！」

「ゼットンにバキシム！！」

二体の怪獣の出現は、もちろんサイトたちに察知される。特にゼットンはヤバい。あの初代ウルトラマンが敗れ、瀕死の重症を負わされた強敵だ。

でも敵が誰であっても、戦うべき敵とは戦い、勝たなくてはならないのだ。

「行くぞ」

ゼットンのプレッシャーに押されかけたサイトを後押しするように、シュウヘイは彼の肩を軽く叩く。それで少し元気が出たのか、彼はシュウヘイに大丈夫と頷く。

「デュア！」

「はっ！」

ウルトラゼロアイを目に装着しサイトはウルトラマンゼロ、シュウヘイはエボルトラスターを掲げウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

「デュア！」

「シャア！」

二体の怪獣はウルトラマンたちを敵と認識し、襲いかかってきた。彼らの思考にはただ一つ、命令が刻印のように刻み付けられていた。

――ウルトラマンを殺せ

先制を仕掛けに、ネクサスはバキシムを殴り付けた。

「シャ！」

「ガアアア！」

お返しにバキシムはクチバシでネクサスを突き刺そうとするが、なんとか避ける。だが避けて再び身構えようとしたところでバキシムはネクサスの腕に噛みついた。

「くそ…離せ！痛てえんだよ！」

ネクサスはバキシムを離そうと殴るがバキシムははなそうとしない。
噛みついたままネクサスを放り投げてしまう。

「グワア！」

地面に彼が激突したところで目から光線を放ったが、辛うじて光の盾で防ぐ。

〈サークルシールド！！〉

「フッ！！」

そして彼は飛び上がり光線を放とうとした。だがバキシムはその隙を与えずその角をミサイルのように発射した。

「グワア！」

地面に倒れ、そこにバキシムは飛び上がりネクサスを踏みつけた。

「ガアアアア！！」

「グウ！ガハ！！」

何度も踏みつけるバキシム。

「ガアアアア！！」

「グウウ…シャア！」

ネクサスは踏みつられまくる訳にはいかず、ジュネッストリニティにチェンジ、バキシムを蹴り飛ばした。

「ハア！」

「ガアアアア！！」

〈シュトロームソード！〉

立ち上がってすぐ、彼は光の剣を作り、それに雷を纏わせバキシムに斬りかかった！

〈雷光閃！〉

「デヤアアアア！」

ズバッ！

「ガ…アア…」

バキシムは首を跳ねられ絶命した。

その頃ゼロはゼットンと戦っていた。

「デュア！」

「ゼットン…」

ゼットンはゼロに連続光弾を放った。回避に彼が集中してる間もゼットンはさらに光弾を放ち続ける。

「グワア！」

一発喰らって地面に倒れるゼロ。ゼットンは追撃に飛び上がり、ゼロの上から降り、踏みつける。

〈ハンディショット！〉

「デュア！」

ゼロは光弾でゼットンを押し倒し、逆にのし掛かって殴りまくる。

「デュア！デヤア！！ハア！」

だがゼットンも殴られたままではいられず、ゼロを殴り倒して彼から距離をとる。

〈ハンディショット！〉

そこに光弾を撃ち込んだものの、ゼットンは自分を包み込む形でバリアを作り、それを防いだ。

（ウルトラマンもあれに苦戦したんだったな…でも…）

かつての初代ウルトラマンは当時、彼の持ち味であるほとんどの光線技をあのバリアで防がれてしまった。しかし、あれから何年も経て研究されれば、弱点を探られることもある。だからゼロはゼット

ンのバリアの弱点を見切っていた。
真上には、バリアは張られてない。飛び上がってゼットンの真上から急降下、必殺キックを放った。

〈ウルトラゼロキック！〉

「ダアッ！」

その炎の蹴りはゼットンの角をへし折った。怯みはしたものの、ゼットンはパッと一瞬にして姿を消した。

「！？」

一体どこへ？とゼットンはゼロの右方向に現れた。ゼロは再び構えるがゼットンは再び消える。

「！？」

辺りを見渡し、ゼットンをさがすが見当たらない。

「ゼロ！後ろだ！」

地下から出てきたアニエスの叫び声でゼロが振り向いたところでゼットンは再び光弾を撃ってきた。だが気づかれた攻撃がゼロには通じない。あっさりとブレスレットから出現した盾で防がれた。

〈ウルトラゼロディフェンダー！！〉

ピコンピコン…

そろそろ活動限界時間。早く決着をつけねばと、ゼロは必殺光線を放った。

〈エメリウムスラッシュ！〉

だがその光線を、ゼットンはいとも簡単に手の中へ吸い込むように吸収してしまった。

（しまった！）

焦って単調な光線を撃ってしまった。ゼットンは吸収したエネルギーを使い、ゼロを光線で攻撃する。

「グワ！」

ゼットンはふっ飛ばされながらも立ち上がろうとする彼に容赦なく光弾で攻撃してきた。

「ゼットン…」

「ぐ…」

「頑張れーーー！！ウルトラマーーーーン！！」

街の人たちの声援で押され、ゼロは再び立ち上がった。ゼットンは続けて光弾を放つが、彼は素手で弾き飛ばしてしまう。

そしてウルトラマンジャックが地球で二代目に当たるゼットンにやったように、ゼットンを持ち上げ投げ飛ばした。

〈ウルトラハリケーン！〉

竜巻のように宙に舞いながら身動きできないゼットンに必殺光線で止めを刺した。

〈ワイドゼロショット！〉

「デュア！」

ゼットンは光線をモロに喰らい、粉々に爆散した。

なんとか倒したが、急にゼロは頭を抱えながら片膝を着いた。頭が少し痛い。それになんだがめまいがする。

「大丈夫か？」

バキシムを倒したネクサスが駆け寄る。

「ああ…」（最近なんだが疲れやすい…どうしたんだ？）

ウルトラマンが怪獣を倒したので街の人たちは一安心。劇場の前でサイトやシュウヘイたちは一ヶ所に固まっていた。

「ふう…」

一息着いてるサイトに近づき、ルイズは突然彼の匂いを嗅ぎだした。

「な…何だよ…」

「これ姫様の香水の匂いよね。護衛ってここまで密着しないといけないの？」

ルイズの声は据わっていた。

「い…いやそんなことないぞ…」

必死に忘れようとしたのに掘り起こすなよ…ちょっと嬉しかったのが本音だが、あれは忘れなくては！

「なら俺が姫様を護衛してる間、お前も何してたんだ？」

「へ？」

そう言われてルイズの脳裏に浮かんだのは、アニエスとのキス。たちまちおぼつかない様子になった。

「べべべつに何もなかったわよ…」

「何かあったんだな？」

ジト目で睨むサイト。しかし、今日はなんだか突かれたのでそれ以上追求はしなかった。横からご主人様を疑って無視するな！とルイズが喚いてるが、構うと余計に疲労が激しくなりそうなので反撃はしなかった。

（どうしたんだろうな…俺）

6　サイトの異変

あれから数日後…

トリステインはゲルマニアとの連合軍を率い、アルビオンへ軍事制裁のため進軍した。その戦いでサウスゴータ区域までを占領するまでに至った。

当初はアンリエッタは直接アルビオンへの進軍を拒否していたが、国民や貴族たちの大半がアルビオンへの軍事制裁を求めていた。もし先送りを続ければ彼らはクーデターを引き起こし、アンリエッタは権力を失ってしまう。下手したら血の気の多い輩がトリステインの頂点に立ち、果てしない戦争を繰り広げてしまうことも考えられる。幼い頃より彼女を支持していたマザリーニ枢機卿の忠告でアンリエッタは進軍を決定した。彼女も今のアルビオン＝レコンキスタを許せなかったが、平和を望む彼女にとって苦渋の決断だった。

フクロウ便を通じてアルビオンへ呼び出しを受けたサイトとルイズ。現在港町ロサイスの屋敷で待っていたアンリエッタの前にいる。

「ルイズ、ごめんなさい。アルビオンまで呼び出して」

「いえ、大丈夫ですわ姫様」

アンリエッタの横にいるド・ポワチエ将軍が今回の作戦について話す。

「ヴァリエール殿。そなたにはシティ・オブ・サウスゴータの上空にて虚無の魔法を発動、敵を全滅してもらいたい」

作戦の内容からして、ルイズの虚無の力を戦争に利用することが丸分かりだった。

「!?」

無論サイトは納得できるはずもない。

「わかりました。このルイズ、お役目を果たして参ります」

「ルイズ!!」

なぜ受託した!反論しようとするが、アンリエッタがその怒りを抑えようと口を挟んだ。

「ごめんなさい…しかし、ルイズがこの作戦をしなくては我が軍は兵力を持ってサウスゴータに攻めなくてはなりません。そこの民も巻き込まれます。犠牲を無くすためにも」

「…」

ちくしょう…サイトは苦虫を噛むような表情で見ていたが、突然頭を抱えだした。また頭痛か…

「サイトさん?」

アンリエッタは彼の異変に気づいたのか、彼の顔を覗き込む。なんだか顔が青い。今の作戦内容を聞いただけでここまでなるとは思えない。

「顔色が優れてないようですが…」

「何でもないです。俺も行きます」

サウスゴータ上空、サイトたちはウルトラホーク一号でやって来た。この辺りで虚無の魔法を使い、敵兵を殲滅すること。それが今回の任務だった。

しかし、サイトはかなり疲れきったような顔をしていた。外は冬場なのに汗だく。それだけではない。彼の視界はまるで万華鏡のように同じものがいくつにも見え、霞みがかかってるようになっている。

「くっ…」

「どうしたのよ、サイト。まるで死んだ人の顔みたい」

ルイズもどうも気になっていた。無理をしてまで来ることはなかったのに…

「い、言っとくが…俺は死にたくないし、人なんか殺したくもないぞ」

サイトは目を擦りながらピリピリした様子で言う。ルイズがあまりためらわすこの任務を引き受けたからだ。体調が悪いにも関わらず、そんなルイズが心配だからこそ着いてきたのだ。

「わかってるわよ…でも姫様が私を必要としてくれてるんだもの。とても断れないわ」

「…」

「早速だけどやるわよ。しっかり運転してね」

ルイズは虚無の魔法を唱え始めた。国からは『奇跡の光』と呼ばれた光が、彼女の身を包むように起こる。

だが、その光が青から赤に変わったところでルイズは倒れてしまった。

「うっ…」

「ルイズ！どうした！？お前まで…」

そこでデルフが鞘から顔を出した。

「まだタルブ村で使った魔力が回復してなかったみたいだな。何十年も溜めていた分をあの時命懸けの状況でぶっぱなしたからよ」

「ったく…早く言えよ！それを」

そこに、ウルトラホーク一号を追って敵の竜騎士が二人やって来た。

ルイズは虚無の魔法を使えずに終わったが、先ほどとは違ってピンピンした様子で起き上がった。だが魔法を唱えてる余裕はない。サイトが便りだ。

「サイト！早く撃って！落とされるわ！」

「…くそ」

やるしか…ないのか。ウルトラマンたるもの自分の守る星での戦争などに関与するべからず。宇宙警備隊における教えなのだが、ウルトラマンゼロとルイズの使い魔であるサイトが同化したその日から、彼はそれができなくなってしまった。それでもその星を守りたいと、帰りたいという感情を圧し殺しながらここにいる。しかし、闇の戦士や侵略者、怪獣との戦いだけでなく、その優しさと意地っ張り具合がまさか彼の体を知らない間に蝕んでいたのだ。

敵を撃ちたくない。そして体の調子の悪さが彼の手を鈍らせていた。ビームを放つが、空振りだらけだ。対して竜騎士も反撃に魔法を放つが、ホークの装甲は怪獣の攻撃でようやく落とされるほどの丈夫さがある。簡単には貫かれない。しかし、この世界にも鉄を切り裂ける魔法がある。もしエンジンを攻撃されたらまずい。

「サイト、早く！私たちが落とされる！」

「あ…ぁ…」

しかしだんだんサイトの視界は真っ暗になり、最終的に彼は前呑めるように倒れてしまった。その時、偶然にもボタンを押して発射されたレーザーが一頭の竜の翼を貫き、二人のうち一人の竜騎士は落ちた。残ったもう一人は、仲間の身を案じすぐにそちらへ竜を飛ばす。

「ちょ、サイト！起きて！起きてよ！どうしたのよ！？」

ホークの運転席で意識を失ったサイトを必死に揺り動かすルイズだが、サイトは起きる気配を見せない。このままだと地上に激突して

ホークが大爆発する。

「娘っ子！そこのレバー、棒を引け！」

「え？」

デルフの突然の提案に固まるルイズ。このホーク一号はサイトにしか操作できない。どうやって運転しろというのだ。

「死にたくねえならさっさとしやがれ！」

デルフに怒鳴られるまま、ルイズは言われた通りホークのレバーを手間に引く。そのとっさの行動もあって、ホークは不時着に成功した。

『ゼロ…』

誰だ？サイトは仰向けに寝ている状態で目を覚ました。

いや、この声には馴染みがある。目の前に自分と似た顔に、頭に装着された一本の宇宙ブーメランと燃えるような赤いボディ。

父、ウルトラセブンの姿だ。

『今のお前は、数々の強敵との戦いで多くのダメージを受けている。

しかもこの星の環境は、光の国とも異なる環境のためその疲労は余計に侵攻してしまった』

確かにこの星の環境はウルトラマンには不慣れなものだ。彼らもかつて地球やハルケギニアの人間と同じような姿をしていたが、数万年前にウルトラマンとなった彼らは長きにわたる時を経るにつれ、一生を人間のいる星で生きることができない体となった。その環境の中で生死をかけるほどの戦いを繰り返せば、どんなに優れた戦士も限界にきてしまう。

『これ以上その星に留まることは危険すぎる。ゼロ、光の国へ帰還するときが来たのだ』

「だけどこの星を狙う侵略者や怪獣はあとを絶たない。それに戦争にも怪獣が使われるほど酷い状態だ。親父、俺がいなくなってシュウヘイ一人で守れる保証なんてどこにあるんだ！」

ウルトラマンネクサス、シュウヘイも負けたことがある。それほどの強敵がもういないなんてまずあり得ないのだ。この星から去ることは、やはりできない。それでもセブンはボロボロの息子にかつての自分の姿を重ね、心を痛めながら言う。

『ゼロ、今は自分のことを考えろ。これ以上その星に留まることは死を意味する！』

「元の体には戻れないのか？」

『そのためには光の国の銀十字軍で治療を受ける必要がある。今、お前を思ってウルトラの母がお前の大切なあの娘に自分の教えを必死に叩き込んでる。彼女の努力を無駄にする気か！？』

ハルナ、『テラ』の名を与えられた彼女はきっと必死に自分の力になるための修行を受けている。自分が死んだらきっと彼女は自分の努力が無駄になり、悲しみに暮れてしまうだろう。でもこの星には侵略者の魔の手がすでにアルビオンに来ている。今帰ったら、ルイズは間違いなく奴らの手によって殺されてしまう。学院で出会った仲間たちも…

「今は帰れない。仲間の命がかかってるんだ。このまま放っておくわけにはいかない…」

『ならば一つ忠告する！戦ってこれ以上エネルギーを消耗するな。光の国に帰ることもできなくなってしまう。変身してはいかん！』

「…と！サイト！」

「ぅ…」

セブンの声に続くように聞こえてきたルイズの声で、呻き声をあげながらサイトは目を覚ました。

「ルイ…ズ…？」

サイトが体を起こすと、ルイズは目尻に涙を溜めながら彼の胸板を

叩きまくる。

「バカバカバカ！心配したんだからね！」

「相棒、全く無茶したもんだぜ…」

憎まれ口を叩きながらもデルフは安堵の様子を見せ、地下水も口には出さなかったがひと安心していた。

とその時だった！

「はあ！！」

アルビオンの兵士がいきなりサイトたちのいる操縦室に飛び込んできた。とっさに地下水を構えるサイトだったが、その騎士は突然倒れた。するともう一人の騎士も現れ、彼を抱える。

「無理するな、ヘンリー。お前はけがしてるんだ」

「…貴族は…死んでも名誉を…はあ！！」

サイトほどではないが体調の優れないヘンリーは炎の魔法『ファイヤーボール』でサイトを攻撃したが、サイトが盾代わりに構えたデルフに吸収された。

「吸収した！？」

ヘンリーがその光景動揺してる間にサイトは彼にデルフを向ける。

「俺は人なんか殺したくない。大人しくしてくれ」

「貴様…なぜ殺さない!?僕がケガしてるからか!?」
「いい加減にしろ。このままじゃ共倒れだ。もう一度言うぞ、大人しくしろ」

アルビオンの首都ロンディニウム。最高指揮官となったシェフィールドが幹部の一人『ホーキンス』と話していた。

「シェフィールド殿。サウスゴータ上空にて鉄の竜を発見しました」
「竜騎士は?」
「発見されておりません」
「鉄の竜を回収しなさい。竜騎士は殺してもかまわないわ」
「はっ。ところで、サウスゴータですがこのままだとトリステイン軍に占領されます。援軍を送るべきでは?」

アルビオンの兵士たちは上層部ほど非常な連中ではない。むしろトリステインの人のように民を重んじる様子でいた。しかし、シェフィールドの命令は民の命を明らかに軽んじるものだった。

「食料を回収して全軍撤退しなさい」

「撤退？民のことは？」

「民の命などどうでもいいわ。早く実行しなさい」

「は……」

納得できない様子だったが、命令を引き受けたホーキンスはその場から去った。反論したいところだが、彼女には逆らえない。自分たちの知らない力を彼女は持っているのだから。一人になったところで彼女はバトルナイザーを取り出した。

「さっそく新しく手に入れたこの怪獣を試してみようかしら。それにしても鉄の竜…多分、あの少年だな。それもウルトラマンの…」

その頃、サイトたちのいる雪原では、ヘンリーと呼ばれた青年ははようやく落ち着いた。今は四人でホークの内部にいる。

「俺はルネ・フォンク。そっちはヘンリー・スタッフォードだ」

ヘンリーと別の青年は礼儀正しく自己紹介した。サイトとルイズも自己紹介する。

「平賀サイトだ」

「ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

ルイズが自己紹介を終えてヘンリーの顔を見たサイトは、あることに気がついた。微睡む寸でのところで自分が撃ち落とした飛竜に乗っていた男だ。

「お前あの竜の…」

やっと気がついたか、とヘンリーは足の怪我を堪えながらサイトを睨みながら言った。

「そうだ、貴様のせいで名誉の死をとげた。明け方まであいつは…『ウィンザー』は生きてたさ。僕が凍死しなかったのはあいつのお陰だ」

「ごめんなさい…」

ルイズは申し訳なさそうに謝る。

「謝ってどうする？殺さなくては殺される。戦場では当たり前だ」

でもサイトは納得しきれない様子で口を開いた。

「俺はさっきも言ったが人を殺したくない。どんな理由があってもだ」

「おかしな奴だ。妙な竜に乗ってこの戦地に来ておきながら…」

ヘンリーはサイトを鼻で笑う。命が惜しくて仕方ない臆病者を見下したような様子だ。ルネは首を傾げてサイトに尋ねる。

「…なら、どうしてお前は戦う？」

わかりきってる。サイトは迷うことなく答えた。

「仲間や、大切な人を守りたい。それだけだ」

「大切な人？ルイズか？」

それを聞いてルイズは顔を赤くした。いきなり何訊いてんのよ！と心の中で文句を言ったことを知るのは彼女だけ。

「まあ、ルイズは大事な仲間だ。学院のみんなや姫様だって同じだ。だから政治とかで人を殺せなんて言われても断る」

「気にしないで。こいつは貴族じゃないから貴族の名誉や誇りの大切さをわからないのよ」

「わかりたくもないな。貴族にとって大切かもしれないけど所詮死んだらただのガラスケースだろ」

ヘンリーはそれを聞いてひどく怒った。自分はその名誉がすべてとしつ生きてきた。それをばかにされたらムカついてしょうがない。

「貴様！！貴族を愚弄するのか！？」

怪我も辞さずヘンリーはサイトに食って掛かろうとしたが、ルネはそれを止めた。

「よせヘンリー。確かに名誉や誇りはガラスケースのようなものだ。ところが貴族はそれを理解せず、好きな人との別れも辞さず名誉のために死んでいく。ヘンリー、お前は婚約者と別れてまでここに来

てしまった」

ルネはどうもサイトたちと似た考えらしい。または彼らの言い分を理解できるほどおおらかなのかもしれないが。

「戦地に来たら死んで当然じゃないか。どのみち死ぬなら…早く別れたほうがいいだろう…？」

「…最低だな」

ヘンリーの言葉を、冷徹にサイトは否定した。

「何！？」

「貴族以前に男として最低だな。好きな人のために生きる！なぜそれをしない？大事な人のために命を張って生きることと、最初から死ぬつもりで戦うことは違うことがわかんねえのか！」

「く…」

「情けなくても生きろヘンリー！彼女は今もお前を待ってるかも知れないだろ！？」

すると、遠くから誰かの声が聞こえてきた。

「おーい！！」

鎧の色や模様からトリステインではなく、アルビオンの兵士のようだ。それも数人ほどだ。

「近くに俺たちを探しに来た部隊がいるみたいだな。俺たちが行こ

う。その間に君たちはこの鉄の竜で逃げろ」

「ありがとう二人とも」

ルイズは礼を言った。

「かりは返す。これも貴族ってものさ」

ルネは当然だと言うように笑う。

ルネとヘンリーがホークから降りてサイトたちが見つからないよう時間を稼いでる間、サイトとルイズはウルトラホーク一号に戻り、発進させてここを後にした。

（…僕も生きてみるか。サイト、ルイズ。いつかルネと彼女を連れてまた会おう）

ヘンリーはサイトたちが乗って行ったウルトラホーク一号を見てそう誓った。

アルビオン軍がサウスゴータを放棄したためトリステイン軍は難なく占領できた。しかし、ルイズたちの努力は虚しい結果となったことは変わりない。

「お役目果たせず、申し訳ありません」

「いいのよルイズ。あなたがとサイトさんが生きていた。それが私にとってとても嬉しいことなのです」

「姫様…」

「さあ、疲れたでしょう？街の宿で休んで」

「わかりました。でも次こそは必ず…」

シティ・オブ・サウスゴータ。そこのとある宿に泊まることになった。ルイズは今、他の作戦の件でアンリエッタの元で居残り、サイトは部屋をとることに。ロビーで部屋をとっている間、誰かが自分を見て立ち止まった。

「サイトさん？」

「シエスタ？」

街に張られたテントへ、サイトはシエスタに連れてこられた。どうも叔父があのスカロンで従姉妹がジェシカだという。これには驚いた。スカロンたち魅惑の妖精亭の人たちは慰問隊として来たのだ。シュウヘイに着いては、彼には戦地へ向かってほしくないと、強制的に休暇を取らせ国に置いてきた。

「確かに、似てるな」

二人の顔を見て、確かに瓜二つだとサイトは納得する。

「まさかシエスタの思い人があんたなんてね」

ジェシカのその言葉を聞いてシエスタは少し顔を赤くした。

「ルイズ悪いけどここは従姉妹を応援しようかしら。頑張りなさいよシエスタ」

「うん…」

しかし、再会したのはその二人だけではない。

「おや、サイトじゃないか」

「ギーシュ？」

軍に志願してから顔を見てないギーシュが偶然サイトたちのいるテントにやって来た。サイトはギーシュの胸に何かのバッチがついていることに気がついた。

「ギーシュそれは？」

「ああ、これはちょっとした手柄を立てたからね。ポワチエ将軍自ら僕にくれたんだ。これ以上の名誉はないよ。あはは！！」

ムカッ…その笑い声でサイトは名誉という言葉がこれほど嫌いになったことはなかった。

「サイト、いないの？」

サイトがいない間、宿に戻ったルイズ。珍しく部屋にはデルフや地下水、ウルトラガンなどの武装が置いてかれてる。

「ボロ剣、ナイフ。サイトがどこに行ったか知らない？」

「あれ、お前さんと一緒じゃなかったのか？」

「いえ…」

『名誉のために死ぬなんてアホだ！』

貴族にとっては名誉は自分の命より大事なことだと教えられた。だからサイトの考えにどうしても納得できずにいた。雪原で会ったヘンリーたちとの会話からずっと聞いてから理解に苦しんでいた。

「どうしてわからないの…名誉の大切さが」

そこで、珍しく部屋に置いてかれていたデルフが口を開いた。

「わかるはずないさ。相棒は完璧な平和主義者だからな」

「でも！」

「なのに体の不調を堪えてまでお前さんと一緒に戦地に来た。なぜかわかるか？」

「…使い魔だから」

「い～や、違いやすね」デルフに同調するように地下水も口を開く。

「あんたが大切だからさ嬢ちゃん。あんたの、いや他の人間の命も大切なのさお前はその気持ちに答えたことはあったかい？」

「…」

「もしお前さんが死んだら永遠にわからないさ。だからよ、せめて相棒に自分の気持ちぶつけてみな」

デルフは決してからかって言ってるのではない。彼らより長く生きてる。年下への面倒のいい兄貴のように相談に乗っているのだ。

「…ぶつける…ってまさか『好き』って告白しろってこと！？」

ルイズの顔が赤くなる。やはりルイズらしい。カトレアの時のように彼女はつい本音を漏らしてしまった。

「そこまで言ってないが、まあそういうこった」

「ななな何で貴族の私がつつつ使い魔なんかに！！」

「でもここで言わんと死んで永遠にわかってもらえないぞ？それでもいいのか？」

「…」

ルイズはデルフたちを持ってとりあえず宿を出た。サイトに会って話そう。気持ちをぶつけてみよう。

雪原の森の中、サウスゴータ外れの井戸の前に一人の兵士の付き添いでシェフィールドはいた。

「トリステイン軍は？」

「今はサウスゴータで全軍休んでいます」

「ご苦労。さて作戦を実行するわ」

彼女の身につけたアンドバリの指輪から井戸に一筋の水滴が落ちていく。

「一体何を?」

「知る必要はないわ。もうすぐ始まるわ。『怪獣』と『人間』の殺戮ショーが」

サウスゴータでは兵士たちは井戸から組み上げられた水をコップに注いで飲んでいた。

「喉乾いたなあ…」

「全くだな。トリステインから遠い戦地だからなぜか渇きまくるんだよ」

その水を飲んだ瞬間彼らはコップを落とした。脳裏にはただ一つ、至って単純な命令が下される。

『敵はアンリエッタだ…。奴を殺せ…』

人形のように彼は立ち上がり、武器を構える。

「お前バカか!?」

「なっ何だと!?」

一方、あのテントでサイトとギーシュは言い争いをしていた。

「名誉のためなら死ねる?ふざけるな!!それはアホの考えることだ!!」

「君はまた貴族を馬鹿にするのか!?」

「じゃあお前はモンモンが名誉の死を遂げて喜べるのかよ!?」

大事な人の名前を突きつけられてギーシュは言葉をつまらせた。

「…それは…」

きっと喜ぶさ、なんて言えない。自分の知るモンモランシーはそんなことで喜ぶような女ではないからだ。とその時だった。外から何かが爆発する音が響いてきた。

「なっ何だ!?」

「反乱だあ!早く逃げろ!!」

外から一人の兵士が叫んだ。

「馬鹿な!?我が軍が勝ってたのに!?」

ギーシュも軍と一緒に来ていた身。優勢にも関わらずなぜ？

「逃げるぞ！！」

サイトたちや魅惑の妖精亭の人たちは街の外へ向かって走り出した。

「一体なにが…」

屋敷の窓の外は火の手が上がっている。突然の異変に同様を隠しきれないアンリエッタ。そこにマザリーニ枢機卿が入って来た。

「陛下！大変です！我が軍が反乱を起こしております！！」

「何ですって！？」

「陛下も早くお逃げを！」

「く…仕方ありませんわ。今はロサイスへ引きましょう！民の避難を優先しなさい！」

「はっ！」

一方、ルイズはサイトを探していた。

「どういうこと!?何で反乱が…」

トリステイン軍の騎士たちの暴れように、何が起こったか理解できない。

「何かに操られてんだ」

地下水が言った。

「何か？」

「あの目を見ろよ。生気も見えねえ」

物陰に隠れながらルイズはトリステイン兵士たちの様子を見る。彼らはよだれが垂れてることにも気づかず、白目をむきながらただ「アンリエッタを殺せ…アンリエッタを殺せ…」と言っている。まるで死人のようだ。

「とりあえず相棒に早く合流しな。死ぬぞ」

デルフがそう言った時、逃げ惑う人の姿が目に入る。正気を保っているトリステインの兵士や貴族だ。

「助けてくれええ!!」

「嫌だあああ死にたくない！！」

所詮貴族も命が惜しいのだ。命ある限りなんとしても生きようとするのが人間の本能。サイトならそう言うだろう。

「…屈辱だわ」

しかし、サウスゴータで暴れてるのはシェフィールドのアンドバリの指輪で操られた兵士だけではない。

「怪獣だあああ！！ロサイスの方角にいるぞ！」

なんということだ。今やトリステインへの脱出地点となるロサイス。そこへの道を阻まれたら兵士たちは全滅、姫様もサイトも…

「っ！」

ルイズは意を決してロサイス方面で暴れる怪獣のもとへ向かった。

「くっ…」

一方、ロサイス方面への道を阻んでいた怪獣は、アンリエッタの力添えのためにアルビオンに来ていたジュリオ、彼の相棒でもあるゴモラと戦っていた。

しかし、その猛攻はすさまじく、嘴から放たれる光弾の火力はゴモラでさえ苦戦ぎみ。町の人たちも守らなくてはならないので、状況はあまりにも悪かった。

その怪獣は『双頭怪獣ネオパンドン』。かつての個体よりも強化された怪獣だ。シェフィールドの新しく手に入れた怪獣とはこのパンドンのことだったのだ。

「キシャアアア…」

ゴモラにもそろそろ限界が来ようとしていた。

「ゴモラがここまで苦戦するとは…ん?」

少し離れた場所でゴモラの指揮をとっていたジュリオは、パンドンから離れた場所である人影を発見する。

ルイズだ。確か女王陛下からの任務で虚無の魔法を使おうとしたが失敗したと聞き及んでいる。にも関わらず、無謀だ。

パンドンの攻撃は至って無差別。その口から放たれたエネルギー弾は彼女に呪文を唱える間も与えず向かっていく。

「きゃ…!」

死を覚悟して目を閉じるルイズ。しかし、その攻撃は彼女を庇う形で飛び出してきたゴモラに直撃する。

「戻れ…ゴモラ!」

ジュリオはバトルナイザーにゴモラを戻すが、パンドンに自分の存在を気づかれてしまった。パンドンの炎は容赦なくジュリオを襲う。

「ぐう…」

「ジュリオ！」

ジュリオの危機を見逃せないルイズだが、炎の勢いが強すぎて近づけない。しかも気づいたときには、自分もまた炎に囲まれてしまった。

その様子は、サウスゴータの街をちょうど出たサイトたちの目に止まる。

「サイトさん、ミス・ヴァリエールが！」

「ヤバい…ギーシュ、シエスタたちを頼む！」

「えっ？おいサイト、危険だ！」

サイトはギーシュにシエスタや魅惑の妖精亭のみんなを託し、ルイズたちの救出に向かった。

名誉の死は不快ではなかったのか？ギーシュはサイトの今の行動を見てそう思った。でもそれは誤解だった。

彼はただ、仲間が苦しむのを見たくなかった、放っておけなかったのだ。

誰の目にも止まってない場所で立ち止まり、サイトはウルトラゼロアイを手にとる。しかし、そこでまたセブンの声が聞こえてきた。

『待て、変身してはいかん！』

「……くそ！」

乱暴に彼はウルトラゼロアイを地面に叩きつけた。やっぱり何もできないのか？このまま指を加えるしかないのか？

その時、パンドンは近くにある岩を持ち上げた。ルイズとジュリオをあれで潰すつもりのようだ。

「！」

自分の体か、仲間の命か。

「……デュワ！」

サイトは仲間の命を選んだ。セブンの言葉を無視し、ウルトラゼロアイを拾って装着、ウルトラマンゼロに変身した。

「ジュワ！」

パンドンをタックルで飛ばし、炎の中を手で探りながらルイズとジュリオを手の中に納め、ギーシュたちの元へ置いた。

「ルイズ、大丈夫かい！？」

「ミス・ヴァリエール！」

ギーシュとシエスタはルイズたちの身を案じて駆け寄ってきた。これでひと安心…できなかった。

「カカア！」

パンドンはゼロからのタックルで落とした岩を拾い上げ、ゼロの後頭部にぶつけた。

「ッグア！ウ…」

今のは体長不良を必死に堪える彼に効きすぎた。その隙に背後からゼロの首を締め上げてきた。辛うじて抜け出したが、また頭痛や疲労、目眩がゼロを襲う。

（くそ…雪原で一度微睡んでから少しはよくなったらと思ったら…）

「ゼロの様子が変だ…」

ギーシュたちも、今のゼロの様子がいつもの彼の戦い方と比べてかなりおかしいことに気づいていた。

ふらつきながらもゼロはパンドンから距離を置き、額のビームランプから光線を放とうとした。

〈エメリウムスラッシュ！〉

しかし光線はパンドンには届かず、途中で途切れてしまっていた。光線もまともに使えない。絶対絶命のピンチだ。

パンドンはゼロの頭を掴むと、右手で思い切りゼロのこめかみをぶん殴った。

「グアアアア！！」

痛いなんてものじゃない。地面の上で頭を押さえながらゼロの腎症じゃない悲鳴が響く。

パンドンはそんな彼に全く容赦なく踏みつけ、けりつけ、殴る。

頼みの綱は、ゼロスラッガーしかない。ゼロは二本ともとっさにとるが、パンドンにはたきおとされてしまい、自身も突き飛ばされてしまった。しかも踏み潰され、拾うこともできない。デルフと地下水を持ってない状態なため彼らの意識はゼロスラッガーに宿ってない。彼らがいたがることのないのがせめてもの幸せだった。

「り、リトラ！」

【バトルナイザー、モンスロード！】

ジュリオは咳き込みながらネオバトルナイザーよりリトラを召喚、ゼロの援護に当たらせた。リトラは口から炎弾を放ち、パンドンを背後から攻撃する。

「カカア！」

パンドンは今リトラの方へ集中している。なんとか起き上がったゼロは立ち上がり、パンドンに踏まれて砂だらけになった二本のゼロスラッガーを拾いあげる。そして力を振り絞って切り込み、パンドンの右腕と尻尾を切り裂いた！

「ダアアア！」

ズバ！ドシュ！

「カカア…」

力尽きるようにパンドンは倒れていく。

かなり不味かったが、なんとか勝てた。ゼロはゼロスラッガーを戻し、両腕をクロスして元のサイトの姿に戻る。しかし、今の激しい戦いのダメージが、彼に更なる異変を引き起こした。

「あ…うぅあ…」

彼もまたパンドンのようにドサッ！と倒れて意識を失ってしまった。

変身した時に岩をぶつけられ、こめかみも殴られた影響で、彼の頭からは大量の血が流れ落ちていた。

7　贖罪ーエクスピエイションー

２０年前、ダングルテール村。
疫病発生を受け、魔法研究所実験小隊の小隊長を勤めていたコルベールは、上層部の命令になんなく従う男だった。その小隊に勤めている間、数々の汚い仕事をこなしていった。今回も同じである。

彼は「炎蛇」の名の通り、魔法で作り出した炎の蛇を使ってダングルテール村をあっという間に焼き付くした。
だが、後に彼はそれが…疫病が嘘だと知った。実際はリッシュモンがロマリアからの依頼で『新教徒狩り』を命じられ、コルベールたちにそれを実行させていたのだ。以後、彼は心に闇を抱え続けていた。身分を隠し、小隊を辞職した後学院の教師となって少しでも罪を償おうとした。でも、どんなに良い人間になろうとしてもその罪が晴れたと思える日は来なかった。

そんな時、サイトが召喚される少し前の真夜中、学院の裏手で彼は会った。

闇の巨人と。骨のような白いラインに赤と黒の模様、そして漆黒の黒い瞳。

サイトたちの戦った闇のウルトラマン、ダークメフィストだった。

「誰だ！？」

『私は、ダークメフィスト…』

「メフィスト…？」

『お前はかつて汚い仕事を躊躇うことなく受け、この国に貢献していた。しかし、それは同時に数多の人間を殺すこと。それによる後悔がお前の心に影を落とし、私という存在を作り出した』

このメフィストとやらは自分の過去を知っている。今や誰にも知られてない秘密なのになぜ?

「なぜ、知っている?君は何者なんだ?」

『言っただろう?私は影。ジャン・コルベール。お前自身が望んだお前の姿だ』

「…」

『戸惑うことはない。どんな戦争にも、正義も悪もない。あるのは強き者が生き残るという結果だけ。それでも後悔しているのなら、その過去の苦しみからお前を救ってやろう。そしてもっと強くなるがいい…』

メフィストは黒い煙のようになると、コルベールの頭を通して彼の中に入り込んでいった。

そして…

――冥王の予知した未来で、ウルトラマンゼロたる戦士がこの世界に来る。やつの心を闇に染め上げるため、そいつの心の支えとなる者を利用しろ

コルベールはメフィストの力を利用してサイトのいた地球にたどり着いた。そしてノスフェルを使い、彼女の家族を惨殺した。

「きゃあああ！！」

怯えるハルナの元に、彼は顔をローブで隠しながら現れ、ノスフェルと対峙する。それはハルナを油断させる演技だった。即座に振り向き、呆気にとられる彼女を炎の魔法『爆炎』で彼女を殺害した。

「…！？私は、なにを…」

自分は一体なにをしていたのだ？それにここは？コルベールは自分がたった今やった凶行に気づいてなかった。まるで、見えない何かに操られていたように。

――お前は人形

コルベールはその声に反応し、ノスフェルのいる方を向く。顔は見えなかったが、石堀の残虐な笑みがコルベールの目に映っていた。

――お前は人形

――俺の…

一一道具だ

ニヤリ…

「う…うわあああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

コルベールはガバッ！と起き上がった。外は夜。あの赤と青の双月が目に映る。一体今はいつ頃なのだ？まるでずっと眠っていたような…

一方、学院上空を飛行している船には、いかにも悪人顔の男たちが集まっていた。

「ガキの学院を攻めるなんて…歯応えがないなあ」

「今は女の部隊が守っているらしい」

「女？華やかだな。生け捕りにして慰み者にしようぜ」

「下賤なやつらだな。女だろうと関係ない。平等に燃やしてやる。ククク…力も得たしな…」

その集団はアルビオンからの依頼で雇われた傭兵。学院の人々を人質にトリステイン軍にアルビオンからの撤退を強制させるための作戦だった。

その頃、トリステイン魔法学院はアニエスたち銃士隊によって守られていた。アンリエッタもこのことを予期はしていたため、銃士隊に学院に残るよう言っていた。しかし…

「うわ！」

敵は一杉縄ではいかず、銃士隊の女兵士たちは次々とやられていく。

「フン！」

メンヌヴィルの火系統の魔法に、隊員たちは全く歯が立たない。

「学院の者全て食堂に集めろ！人質だ」

メンヌヴィルの命令によって学院の女生徒たちや教師は次々と食堂に囚われた。男子生徒や教師たちはアルビオンに進軍したためいない。戦闘経験皆無でしかも油断していたため、まともに抵抗できなかった。

オスマンも同じだ。高名なメイジである彼も生徒たちの命を握られては何もできない。それでも彼女たちを助けようとメンヌヴィルに懇願する。

「頼む！人質ならばわしだけにしてくれ。彼女たちを解放してほしい」

オスマンだけではない。学院に残っていたエレオノールとカトレアも言う。

「私はヴァリエール公爵家の長女よ。父は国を動かすことのできるほどの権力があるわ。私の命でも十分足りるはずよ」

「私も人質になります。ですから、生徒さんたちを解放してください」

だがメンヌヴィルは首を横に振った。

「貴様らだけでは足りぬ。この生徒たち全員は国中の貴族の子女なのだからな。死ぬことになればこの国に絶大な影響があるのだからな」

「ひっ…ひっく…うう」

人質の中、モンモランシーは恐怖に耐えきれず泣き出しそうになる。大事な話をしてる最中にピリピリしたメンヌヴィルは彼女の顎を掴む。

「静かにしろ。消し炭にされたいか？」

脅された彼女は必死に首を横に振って泣き止んだ。

一方、食堂の外では生き残った銃士隊の隊員たちが集まっていた。

「隊長！奴らは食堂に人質を！」

「くそ…人質をとられたか…」

もっと早く気づけば…アニエスは悔しげに顔を歪ませた。このまま放っておくわけにはいかない。いずれ捕まった彼女たちは殺されるだろう。アニエスの指揮の元、銃士隊は食堂を囲み窓に爆弾を仕掛けた。

「アルビオンの者共聞け！ここには武器もなければ政治的な拠点でもない！ただの魔法学院だ。人質を解放すれば命まではとらぬ！」

念のため降伏を呼び掛けるが、メンヌヴィルは爆弾を仕掛けられた窓に攻撃した。

「なっ！？」

バカな、どうやって気づいたのだ？

「姑息な手を使う。銃士隊！貴様らこそ無駄な抵抗は止めろ！」

やはり話し合いも脅しも無駄か…銃士隊全員アニエスに続いて入って来た。

瞬間、銃士隊とメンヌヴィル隊の戦いが始まった。

アニエスはメンヌヴィルに切りかかるが、対する彼は避け、鉄製のロッドを振り下ろす。アニエスが剣を盾代わりにし、剣と鉄製の杖がぶつかり合う。

「昔一つの村を焼き払ったことがある。あの燃え盛る景色は戦場の醍醐味、感嘆したぞ！」

アニエスはそれを聞いて動揺した。

「まさか、私の故郷ダングルテールを焼いたコルベールの部下か！」

「ほう…あの村の生き残りか。しかも奴を知ってるとは驚きだ。あの事件はこの国でも知る者が少ないトップシークレットだと思ってたが」

「貴様も、斬ってやる！」

リッシュモンの事件で消えかかっていた憎しみを剣にたぎらせ、アニエスは切りかかった。

「剣の腕は俺より優れていたようだが所詮平民だ！」

『白炎』、それが彼の二つ名。その名の通りの白き炎でアニエスの剣をいとも簡単に溶かしてしまった。

「くそ…」

「あの時、残念だが俺は副官に過ぎなかった。隊長のコルベールは俺より残忍で凶悪な炎を持っていて『炎蛇』と言われていた。俺はその男を焼きたい…俺の望みはそれだけだ！！」

「!?」

コルベールを焼きたい？一体こいつはなにを考えてる？まるで人殺しや戦いを楽しんでいるようだ。

「俺は奴を攻撃した。興味があったのさ、奴の力に。だが奴は難なく俺をあしらい、顔に火傷を負わせた」

そう言ってメンヌヴィルは顔の傷をさする。

「貴様は狂っている!!」

「確かに狂っているだろうな。さて学院長。アンリエッタに使いを出せ。アルビオンから引き上げると誓約書にサインさせるのだ」

メンヌヴィルはオスマンを見下ろす。彼の目を見てオスマンは青くなる。彼はアニエスと戦ってる間に、彼女や人質となった生徒たちを見せしめに焼き殺すつもりなのだ。

「無理じゃ！ワシ一人そんな権利はない！」

「大事な生徒が焼かれてもいいんだな？」

「く…！」

オスマンはメンヌヴィルを睨む。老練ながらスクウェアクラスのメイジが、なんたるザマだ。自分の無力さを呪った。

食堂の入り口付近には、いち早く騒ぎに気づいて難を逃れたキュルケ、タバサがいた。

「タバサ、フリーズスモークの準備できてる？」

（こく…）

準備はできたと、タバサは頷く。彼女が杖を掲げた瞬間、メンヌヴィルによって破壊された窓から真っ白の霧が立ち込めていく。

「？」

メンヌヴィルや彼の部下たちも目を丸くする。しかし、そこで彼らの中の一人から悲鳴が上がった。

「ぎゃあ！」

霧に紛れ、新たな剣を手にしたアニエスら銃士隊の隊員たちはメンヌヴィルの配下メイジたちを斬り倒していった。同時に霧を仕掛けたキュルケとタバサも人質たちの元へ向かい、彼女たちを縛り付けていた縄を解いていく。

「キュルケ！」

「モンモランシー、急いでみんなの縄を解放して脱出しなさい！」

モンモランシーから、そして次から次へと解放されていく生徒たちは仲間の縄を解き、そして食堂からかろうじて脱出した。

「おのれえ、なぐっ！？」

「ライトニングクラウド！」

配下メイジの一人が苛立ちのあまり人質の一人だった女子生徒の一人を手にかけようとしたが、オスマンもまだ若い者には負けんと、今までとっておいた魔力を解放、生徒たちを守るべく敵を殲滅する。

「今だわ！」

キュルケは敵大将のメンヌヴィルを見つけ、得意の『フレイムボール』で攻撃。しかし、結果は彼女の予想を見事に裏切った。

「ふん！」

メンヌヴィルは視界を閉ざされているにも関わらずキュルケをロッドで殴打した。

「きゃあ！！」

「残念だったな」

片腕を痛そうに押さえるキュルケを見下ろしながらメンヌヴィルは不気味な笑みを浮かべる。

「痛っ…まさか、見えるのか？」

キュルケはメンヌヴィルの目を見る。かれの目に光はない。彼の『白炎』のように真っ白で瞳がない。

「俺はダングルテールの時に奴を攻撃したと言ったな。その時目を焼かれたのさ。しかし俺はその状態で火の魔法を使ううちに敏感になってね、人も肌で感じる温度で判別できるのさ」

「！？」

「さて、まずはお前を燃えカスにしてやる。焼け死んだお前の匂いを嗅がせてくれ…」

「い…いや…」

今の彼女には、いつものような余裕な態度はない。あるのは、絶望と恐怖だけ。メンヌヴィルは彼女を焼き殺そうと杖を振り上げた。

が、その時だった。どこからか放たれし炎の蛇がそれを阻んだ。

「…私の生徒から離れろ」

「ミスタ…コルベール！」

あのコルベールが、傷つき倒れてずっと昏睡状態だったはずの彼が立っていたのだ。彼を目の前にし、メンヌヴィルは突然狂喜の笑みを浮かべた。

「おお…！！おおおおおおおお！！！！！お前はお前はお前はあ！！
やっと見つけた！会いたかったよ隊長殿！」

「！？」

残った一人の配下メイジを斬り倒したアニエスもその狂喜な笑い声に反応してそちらを見る。刹那、彼女の目は同様のあまりいつもの冷静さを失った。

（生きて…いたのか）

「隊長？」

一体なんの話だ？とキュルケやタバサは首を傾げる。

「俺だ！メンヌヴィルだよ！あんたの副官だったメンヌヴィルだ！」

「視力を…失ったのか」

「あんたのお陰でな。さすがは隊長、俺の炎を払うとは。まさか教師になってたとはな」

そこに、アニエスが突然コルベールに切りかかってきた。まるで血に飢えた獣のように、見た者を凍りつかせるほどの形相で。

「死ねえ！」

とっさに反応したコルベールは避ける。今は仮にも味方同士。ここで争ってる場合ではない。

「アニエス君下がれ！」

「ふざけるな！貴様のせいで私は家族、友、故郷を失ったんだ！お前は私が殺す！！」

邪魔をされて苛立ったメンヌヴィルは、アニエスに向けて白き炎を浴びせようとした。

「平民は引っ込んでろ！！」

不味い。アニエスは油断してメンヌヴィルの炎を避けるだけの余裕がない。

「危ない！！」

コルベールは彼女が炎に包まれる前に、アニエスを突き飛ばした。無論彼は代わりにメンヌヴィルの炎を浴びることになる。

「うわあああああ！！」

「ははははは！！どうだ隊長！！焼け死ぬ気分は！？」

メンヌヴィルはコルベールに止めを刺そうとしたが…

「皆の仇！！」

アニエスはコルベールに意識が向いてる隙を突き、メンヌヴィルの胸に剣をを突き刺した。瞬間、メンヌヴィルは倒れ、コルベールを包む炎が消えた。

「貴様！何故私を庇った…！？」

納得しきれないアニエスはメンヌヴィルの炎で大火傷を負わされたコルベールを見下ろす。今すぐにでも殺したい。だが、彼女は思い止まった。彼の背中の首筋辺りに、黒い火傷の痕がある。２０年前に自分を助けた誰かと同じものだった。

「…間違い…だったのだ…疫病だと聞かされた」

「疫病！？だが…」

「ああ、疫病など…なかった…」

ダングルテール村がコルベールの手によって焼失した時…

「おかしいんです。疫病の痕跡が見当たりません」

「何！？」

部下の一言でコルベールはやっと気づいた。自分は騙されていたのだ。

もしかしたらまだ生き残っている人がいるかも知れない。せめて誰か一人でも助けなくては。炎を潜りながら村を見渡すと、焼け野原の真ん中で一人の少女が倒れていた。その少女、当時のアニエス彼女を抱き抱え村を出ようとしたとき、焼け落ちた家の柱が彼の背中に直撃する。

「っぐぅ！」

コルベールは背中のに火傷の傷をこらえながら彼女をおぶって脱出した。

「今でも後悔している…その私の弱さが闇に、心を喰われることとなった…」

「だが…私を助けても仇であることにかわりない！！殺してやる！！」

アニエスが今度こそ積年の恨みを張らそうと、剣を振り上げて彼を刺殺しようとするが、キュルケとタバサが立ちふさがった。

「ダメ！！」

キュルケはコルベールを庇うように彼を抱きしめ、タバサも殺してはいけないと首を横に振る。

「退け！！この日のために２０年間生きてきた…２０年だぞ！」

「いい、ミス・ツェルプストー…」

コルベールはキュルケを退けながら、弱々しい声で言った。

「彼女には…私を殺す権利が…ある…」

「でも！」

「さっさと退けと言ってるだろ！！お前たちも斬られたいのか！」

こうなったらキュルケもろともコルベールを殺そうとまでするアニエス。怒りや憎しみはさらに彼女の目を眩ませていく。それでもコルベールは続けた。

「アニエス君…彼女たちには、手を出さないでくれ…いかなる理由があろうと…人殺しは…罪だ…」

「ふざけ…！？」

今度こそこの手で斬り殺してやろうとアニエスは剣を振り上げようとしたとき、背後から殴打による痛みが彼女を襲い、アニエスは倒れた。

「がふ…」

「は…はは」

死んだはずのメンヌヴィルはが立っているではないか。怪獣よりも残忍で冷酷、狂喜的な笑みを浮かべながら。

「ひっ！？」

キュルケは思わず悲鳴を上げた。

「馬鹿な！？急所は外してないはず！？」

起き上がったアニエスも驚愕の境地だった。

「…コルベール、あんたの役目はすでに終わった。これからは、俺がこの世界を闇に塗り込め、すべてを消し炭にしてやる…」

メンヌヴィルの手には、コルベールが闇の巨人だった頃に使っていた『ダークエボルバー』が握られていた。左右に引っ張った瞬間彼は真っ黒のオーラに身を包み、学院の外に闇のウルトラマン『ダークメフィストツヴァイ』としての姿を現した。

「あれは…あの時のウルトラマン！？」

校庭に逃げていた生徒たちにざわめきが生じる。

「！」

トリスタニアの町外れ、そこの森にある小屋で寝ていたシュウヘイは強い闇の力を過敏に感じ取って目を覚ました。目を閉じ、透視してみると、以前倒したはずのメフィストがそのおぞましい姿を見せつけていた。

行かなくては。自分の横でスヤスヤと寝ているテファの肩に毛布をかけ、彼は小屋から出た。エボルトラスターを引き抜き、彼は紅い

発光体となって空へ飛び立った。

アニエス、キュルケ、タバサが外へ様子を見に来た頃には、外は酷い有り様だった。

〈ダークフレイム！〉

「ハア！」

ツヴァイは闇の炎を撃ってで学院の幾多の箇所を爆発させていく。さらには生徒たちにも攻撃してきた。女子供関係なく、平等かつ無差別に殺す。それがメンヌヴィルのやり方だった。

「きゃあああああ！！」

ツヴァイの凄まじい攻撃に学院の校舎はボロボロになっていき、教師や女生徒たちは逃げ惑う。

「止めろ！！生徒は関係ない！！」

アニエスはツヴァイに銃を向けて脅すが、対するツヴァイは鼻で笑う。

「フン！言っただろう！！消し炭にしてやると！！」

「く…お前たちは生徒を！！」

「わかったわ！みんな、こっちよ！」

アニエスに生徒たち全員を託されたキュルケとタバサはみんなを連れて遠くへ避難していく。残ったアニエスはツヴァイに銃を放つが、敵の体が強靭すぎて効いてない。

「死ね」

お返しにツヴァイはアニエスに攻撃しようとしたが…

「！？グアア！」

突然紅い光に吹っ飛ばされた。そしてその紅い光は地上に降りると同時に、ウルトラマンネクサス・アンファンスとしての姿を現した。キュルケたちの目に希望の光が戻った。

「ウルトラマンネクサス！！」

「シャア！」

ツヴァイの方を見ながら、ネクサスは身構えた。

「ガアアア！ハア！」

怒り狂ったように唸り声を上げたツヴァイの目が赤くなった。そしてネクサスに襲いかかる。

「フッ！」

迫り来るツヴァイのジャブをかわし、ネクサスはタックルを喰らわせる。

「グアア！クッ…ダアッ！」

ツヴァイは突き、回し蹴り、足払いの順でネクサスに三回キックを放つがネクサスは俊敏な動きで避けていく。そして隙を突いてツヴァイの腹を殴り、そしてツヴァイの顔を飛び蹴りで蹴り飛ばした。

「ダアッ！」

「ギワア！！」

ツヴァイは地面を転がった。

「ハアア…」

出だしはいいが油断できない。敵はあのメフィストなのだ。ツヴァイは立ち上がり、メフィストクローを出現させると、ネクサスに切りかかってきた。

「ハッダアッ！」

次々と避けていくネクサスだっだが、一発エナジーコアの近くをメフィストクローで切りつけられた。

「グアア！」

「ハアア…ダアッ！」

ツヴァイはメフィストクローに力を込め、もう一発食らわせようと

ネクサスに振り下ろしてきた。ネクサスが辛うじて回避し、彼の背後にあった学院の外壁が振り下ろされたメフィストクローによって一部崩れ落ちた。

ローリングで地面を転がりながらネクサスはジュネッストリニティにチェンジ、空へ飛びだした。空中戦に持ち込むつもりらしい。ツヴァイもあとを追い、一発の光弾を放った。

〈ダークレイクラスター！〉

「ハア！」

光弾はいくつにも分裂に、ネクサスを襲う。

「オワ！？フッ！シャア！ハア！」

雨のように次々と絶え間なく襲ってくる光弾をなんとかすべて避けきったが、これはツヴァイにとって単なる牽制技でしかなかった。

「ハアアアアア！！」

〈ダークファランクス！〉

ツヴァイが突然彼の目の前に飛び込み、ネクサスにメフィストクローを何回も突き刺そうとした。

「ハアアアアアアア！！」

素早い身のこなしで次々と避けていくが、やはり早すぎて結局一発受けてしまう。そしてツヴァイは旋回し、怯んでいたネクサスを地

面に蹴りで叩きつけた。

「ガア！」

「グアアアアアア！！」

ドスン！！

「く…」

ネクサスは痛みをこらえながら立ち上がる。だがツヴァイはすぐに彼の前に降りたって容赦なくネクサスを切りつけ、地面に押し付けた。

「グゥ…」

「匂うな…」

ツヴァイがネクサスの匂いを嗅ぎながら口を開いた。

「俺と同じ、強い血の臭い…」

「だ、黙れ！」

必死にもがくネクサスだが、ツヴァイが彼のエナジーコアの辺りを残っていた左手で地面に押さえつけ、身動きを完封する。

「フッ…どのみち貴様のエネルギーはほっとけば時期に燃え尽きる。その前にその光…俺が全て吸い取ってやる！！」

左手を通し、ツヴァイはネクサスのエナジーコアからエネルギーを吸い取り出した。

「ハアアア…」

「グア…ア…グウ…」

エネルギーがみるみる内にツヴァイに吸いとられていき、遂にエナジーコアの中央に埋め込まれたネクサスのコアゲージが赤く点滅し始めた。

ピコンピコン…

「…」

やはりそうだ。自分はあの巨人を知ってる。ダングルテールを焼き尽くした後悔が彼の心に闇を植え付け、自分は『冥王』に操られてしまい、さらに罪を犯してしまった。

『ダークメフィスト』として。

ネクサスからエネルギーを奪っていくツヴァイを見てコルベールはすべてを思い出した。

「ぐぅ…」

右手に力を入れると、その拳に光が灯り、そして周りから飛び出してきた光が彼を包みこんだ。

「うおおおおおおおおお！！」

顔にヒビが入り、その中から一人の闇の戦士が飛び出すようなイメージ…

直後、どこからか現れた何者かがツヴァイを蹴り飛ばした。

「グア！！」

「あれは…」

「黒いウルトラマンが…もうひとり…！？」

キュルケとタバサは驚きのあまり目が飛び出しそうになった。

「まさか、コルベール…！？」

アニエスの予想は当たっていた。コルベールは闇ではなく、光の力で再びダークメフィストとなったのだ。

「お前はもう、変身できないはず！！」

納得できない様子でツヴァイはメフィストに切りかかった。だがメフィストは難なく避けた。そして返すようにツヴァイの横腹を蹴る。

「ハッ！」

「グア！！」

怒り狂うツヴァイの爪の攻撃を見事な身のこなしでメフィストは避けていく。コルベールは何も魔法だけではない。実をいうと格闘術

や剣技にも優れた力を持っていた。今までサイトのゼロやシュウへイのネクサスが苦戦したのもその為なのかもしれない。
光の力で変身したためか、今のメフィストに武器はなかったが戦闘力には申し分ない。
ツヴァイを掴み、そのまま学院から離れた場所へ投げ飛ばした。

「ハアアアア！！」

「グアア！」

ツヴァイはひっくり返されながら宙に打ち上げられ、地面に落ちた。

「メンヌヴィル…」

苦心してるようにメフィストはツヴァイに話しかけた。その言葉に耳を傾けようとツヴァイは再び立ち上がる。

「なんだ？苦しまずに焼いてくれと？安心しろ。昔馴染みのあんたが望むなら喜んでやってやる」

「降参してくれ」

なんとメフィストはツヴァイに頭を下げたのだ。

「私はもう炎の魔法も、闇の力も破壊のために使いたくないのだ。どうか…」

過去を悔やんだ結果、コルベールは教師となり、研究に没頭する道を選んだ。今までにない新しいものが、きっとこの世界に新たな光を灯すと。少しでもその努力が自分の過去を精算できると。彼もま

たサイトと同じようになりたいと思っていた。しかし、その心遣いはメンヌヴィル＝メフィストツヴァイに凄まじい不快感を与え、やがて自分とコルベールへの憎しみとなってしまう。

「俺はこんな腑抜けのために２０年間も時を費やしたのか。許せん…指先からローストにして食い千切ってやる…！」

「どうしてもか…」

「くどいわ！」

叫ぶと同時にツヴァイはメフィストクローを突き刺そうとする。メフィストはなんとか防ぐが、爪の刃先が少し刺さってしまった。

「グア…グ…」

一旦距離をおいたところで彼は自分の左肩を握り、痛みを押さえつけようとする。それでも切りかかってくるツヴァイをメフィストは回し蹴りを放つが避けられて蹴り返され、胸元を斬りつけられてしまう。

「ガッグア！！グアアアア！！」

平和的解決を望んだ者への一方的な暴力は、あまりにも残酷すぎて学院にいるキュルケやアニエスたちの心にまで痛みを与える。

「ハアア…ダアアアア！！！！！！！」

ドスッ！！

ツヴァイのメフィストクローがメフィストの腹を貫いた。

「ア…アア…」

学院の女子生徒たちは誰もがその悲惨な光景を見ることができず目を伏せた。

「クハハハハ！！ハハハハハ！！」

ツヴァイは喜びのあまり狂喜の笑い声をあげていた。

一方でネクサスは再び立ち上がり、彼らの元へ駆けつけようとしたが、メフィストがツヴァイを捕まえ、「近づくな！」と叫んだ。

「なっ！？何をする気だ！」

メフィストは指先から一個の火球を作り出し、自分とツヴァイの真上に打ち上げた。その火球は照明にもならないような小さな玉だったにもかかわらず、大爆発を起こした。密かにコルベール＝メフィストは戦いの最中、空気中の水蒸気を『錬金』の魔法できめ細かい油に変えたのだ。その爆発によって、彼とツヴァイのいた場所の酸素はあっという間に失われた。コルベールの最強にして凶悪な魔法『爆炎』。爆発した火球の周りから酸素を一気に焼き、その爆発の中にいた人間の肺の中の酸素すら消し去る。もし人間だったら今頃ツヴァイ（メンヌヴィル）は窒息死していた。ウルトラマンは酸素のない宇宙でも活動できるが、その環境になれてないツヴァイは死にまでは至らなかったが苦しんでいる。ちなみにメフィストはこの時口元を塞いでいたためダメージは軽減できた。

「今だ！！私に構わず撃て！！」

今しか止めをさせない。メフィストは窒息しかけて苦しむツヴァイを取り押さえながら自分ごとツヴァイを倒すことを促した。

「！？」

「がっ…は…せ…」

放せ！と行ってるようだが、声がほとんど掠れて言葉になってない。メフィストの傷口の辺りから光が溢れている。見るだけで辛くなる。ネクサスはメフィストたちから目を背けていた。

「何をしている！！それが光を得た君の…君の役目だ！！」

「…」

彼の言葉で彼は意を決した。右腕に光の弓矢を作り必殺の一矢を放った。

〈アローレイ・シュトローム！〉

「ハアアア…デヤア！！」

「グ…グアアアアアアアアアアア！！！！！！！」

弓矢を背中から直に受けたツヴァイはメフィストと共に光となって消滅した。

シュウヘイは痛みをこらえながら学院の校庭にやって来た。彼の、コルベールの様子を見に来たのだ。
コルベールは校舎の外の壁にもたれかかっていた。彼の身を案じて、キュルケとタバサ、そしてモンモランシーが駆け寄り、アニエスもやって来る。

「ダメだわ…傷が深すぎる」

モンモランシーとタバサは必死に水系統の魔法でコルベールの傷を癒そうとしたが、彼の傷は深すぎて彼女たちの精神力では治しきれなかった。

「アニエス君…」

アニエスが近づいてきたところで、コルベールは口を開いた。

「私は…ただの操り人形だった。メンヌヴィルもそうだ…
ダングルテール村を滅ぼした罪の意識で生まれた闇を、メンヌヴィルは私を殺したいという願望で生まれた闇を利用された…
『冥王』によって…」

「冥王だと?」

「気をつけるんだ…アルビオンも裏で操るほどだ…奴はもしかしたら君を狙うかもしれない…君の憎しみは…奴には大好物でしかない…どんなに強く心を留めていても…飲みこまれるかもしれない…」

不思議なことに先ほどまでの怒りがなかったように消え去っている。

やっとわかったのだ。自分がそうだったように、彼にも彼を信じる人がいる。もし彼を殺したら、自分を彼女たちが殺しにかかるかもしれない。そうやって憎しみの連鎖は続き、その連鎖から生まれる闇をその『冥王』は利用する。

「なぜ…」

今度はアニエスが言葉を発した。

「わざと私に殺されようとした？私にとって…」

彼女は身を屈め、コルベールにしっかり聞こえるように続ける。

「お前はすべてだった。すべてを奪い去ったお前を殺すためにとっておいた憎しみがあったから、私は戦争で戦い抜き、生きることができた。

私は頭の中で、非道で冷酷な仇の姿を勝手に描いていた。なのに…」

気づいてなかったが、彼女は知らず知らずの内に涙を流していた。イメージとも、闇に心を奪われていた頃とは全く違うコルベールのあんな邪気のない顔を見て、殺す気が失せていた。そして余計に許せなかった。

「死んで罪を償うなんて…最期だけ人間らしい顔して、卑怯よ！」

そう言って乱暴にコルベールの胸ぐらを掴む。

「本気で罪を償いたいなら、生きて罪を償え…償いなさいよ…もう一度、人間として…」

『過去は変えられないが未来は変えられる』。サイトの言った通りだ。どのみちコルベールを殺しても家族や友人たちは蘇らない。それはコルベールを殺しても同じこと。むしろさらに黒くよどみきった過去を作り出すことになる。
アニエスはあえて彼を生かし、生涯罪を償わせる道を与えたのだ。

「もう一度、人間として…」

コルベールはふっ…と笑った。決して侮蔑や嘲笑ではない、暖かい笑みだ。その笑みをこぼした瞬間、彼はゆっくり目を閉じた。

『炎蛇』の死は、学院中に悲しみの風を吹き抜かせた。

「…ガリア、ロマリア。そして…」

レーテの地下保管施設。石堀はコンピュータのディスプレイを見ながら気味の悪い笑みを浮かべていた。

映されていたのは名簿。その名簿には…

ハルナ、コルベール、メンヌヴィル、ウェザリー、ダンプリメ、ダーラム、ワルド。

グレイ

ジュリオとシェフィールド

ルイズとティファニアと、青い髪と髭の男性、若くジュリオ並に美しい顔を持つ青年。

そして…

サイトとシュウヘイの顔写真だった。

「闇の戦士など…いくらでも作れるのさ。レーテに吸収された闇が有る限り」

彼のいるコンピュータルームから、レーテを直接見おろすことができる。ガラス越しから見て、不敵な笑みを崩さないまま彼は呟いた。

「目覚め時は…近い」

8　ゼロよ光の星へ

「あんなボロボロの状態でパンドンを退けるなんて、只者ではないわね…でも」

ゼロに敗北し、倒れて動けなくなったパンドンを見てシェフィールドは素直にゼロの戦いぶりに感心した。彼女がバトルナイザーにパンドンを戻すと、トリステインの兵士たちが現れ、彼女に杖を向ける。

「貴様か！我が軍に怪獣を送り込んだのは！」

パンドンを自分たちの目の前で奇妙なマジックアイテムに閉じ込めたのだ。疑いようがない。

「ふふ、ちょうどいいわ」

シェフィールドはトリステインの兵士たちに向けて、一枚の紙をピュッ！と投げ、兵士の一人がそれをキャッチする。

「それをアンリエッタに渡しなさい。じゃ、御機嫌よう」

瞬間、シェフィールドの姿はどこかに消えて行った。

昨夜の反乱とパンドンの襲撃でトリステイン軍は混乱に陥りながらも、ウルトラマンゼロや、女王率いる残った兵士たちの的確な指揮でロサイスまで引き上げた。

「まさか…反乱が起こるなんて…」

今でも信じられないといった心情をアンリエッタは口にした。

「アルビオンに属する何者かのマジックアイテムによるもののようです」

マザリーニは兵士たちからの調査結果をアンリエッタに報告する。

「ルイズは？」

「ご無事のようです。今は町にいるでしょう」

「はあ…よかった」

大事な幼馴染の無事を知り、アンリエッタは安堵した。だがマザリーニはどこか悲しげな顔をしていた。

（陛下には申し訳ないが…）

そこに、一人の兵士が息を切らしながら大慌ててやって来た。

「アルビオンからの手紙です！アンリエッタ女王に渡せと」

「拝見します」

兵士から手紙を受け取り、アンリエッタは文章を読み上げていく。

「『7万の兵の代わりにより強化したパンドンを送り込む。一度暴れればいずれトリステインの大地に早急に辿り着き、破壊の限りを尽くすだろう。それが嫌なら今すぐ降伏の知らせをロンディニウムに伝えよ。今夜まで待つ。しかし、断ればパンドンをトリステインの大地を焼け野原にするまで暴れさせてやる』。なんて最悪な連中なんです…」

今にも破いてしまいそうに彼女は手紙を握り締める。

「いかがします？」

「あのような連中です。降伏したところで私たちも怪獣の餌食となるのは見えてます。民の避難を優先させましょう」

「サイト！サイトしっかりしてよ！」

パンドンとの戦いで傷つき倒れてしまったサイト。今、ロサイスの宿の一室で彼はルイズやシエスタ、魅惑の妖精亭の女の子たちに看取られている。

現在水のメイジたちは兵士たちの傷の手当てで忙しく、平民であるサイト一人の治療をする余裕はなかった。ルイズは涙ながらに意識のないサイトを必死に揺り動かすが、彼は「うぅ…」とうめき声しかあげてこない。

このことを聞きつけたアンリエッタは、彼らの元へ向かった。付き添いとして、顔についた火傷の上に絆創膏を張ったジュリオもいる。

「じ、女王陛下！？」

「姫様！」

「私も水のメイジです。未熟でしょうが、ある程度の治療で彼を少しでも楽にできるかもしれません」

ルイズを除く女性陣（一人は男だが）の驚きも目に向けず、呪文を唱え、杖の先を包帯でぐるぐる巻きになっているサイトの額に当てた。杖の先から発する水色の光が、彼の体を一瞬包み込む。

「はあ…はあ…はぁ…」

しばらくして、サイトは先ほどよりも落ち着いた寝息をたてていた。

「ふう…これでひとまず安心です」

「あ、ありがとうございます！姫様！」

ルイズは申し訳なさそうになりながらもアンリエッタに頭を下げた。

「これくらい当然です。サイトさんにはルイズ、あなたのことでお世話になってますもの」

しかし、その顔の笑みは作り笑いだった。

今や港は大騒ぎの状態。「早く乗せてくれ」とロサイスやサウスゴータの平民たち、仕事など各々の事情でトリステイン軍に同行して

きた人々がたくさんだ。

「姫様…」

「ルイズ、そしてみなさん。あなた方は急いで船に乗ってください。じきにアルビオンが七万の大軍で攻めてくると、マザリーニ枢機卿から報告がありました」

それを生きてルイズたちの顔に青筋が走り出した。七万…今のトリステイン軍では到底勝ち目のない数だ。それに、同盟を結んでいるゲルマニアからの援軍もここまで来るのに日数がかかりすぎて話にならない。

「しかも昨日の赤い怪獣はアルビオンの生物兵器のようです。駆けつけてくれたウルトラマンの活躍で退けましたが、あの一体だけとはとても思えません。ですから早く…」

「「「…」」」

誰もがおぼつかない足取りで船の駐留する港へ向かった。ルイズだけはまだアンリエッタに話があるのか、その場に残っていた。

「姫様も早く乗ってください！アルビオンの連中に捕まったりしたら…」

しかし、アンリエッタは首を縦に振らなかった。

「私は女王です。皆がこの国を出るまではこの町から動くつもりはありません」

「ですが…」

「これは命令です！ルイズ、あなたが私に忠誠を誓った家臣である以前に、私の大切な友達なのです。先におゆきなさい。サイトさんについては、他の怪我人たちと共に運びます」

「…はい」

アンリエッタはその場から立ち去ると、マザリーニが代わりに入って来た。

「ミス・ヴァリエール、少しよろしいか？」

「う…」

気付けば、もう外は夜だった。ようやく起きたサイトはベッドから身体を起こした。

「相棒やっと目が覚めたか！」

机に置かれたデルフが安心した様子で口を開いた。そこに、既に船に乗ったはずのシエスタが部屋に入って来た。

「サイトさん！」

彼女は目を覚ましたサイトの姿を見るや否や、彼に抱きついてきた。

「し…シエスタ痛いって…」

「あ、ごめんなさい。病み上がりなのに」

慌てて彼女はサイトを離す。すると、デルフなどサイトが持っている武器の他に置かれた物に目が入った。手紙だろうか?それを暗証すると、彼女の顔はたちまち真っ青になる。

「シエスタ?」

名前を呼ばれ、彼女は思わず身を強張らせた。

「あ、いえ…何でもありませんわ」

手紙の内容は残酷なものだった。もしこれをサイトが読むことになったら…

「…あの桃髪のお嬢の手紙だろ?」

「黙って!」

地下水に言われた瞬間彼女は凄まじい剣幕で地下水に怒鳴りだした。あの様子、只事では無さそうだ。今地下水は桃髪のお嬢、つまりルイズの事を言った。その手紙が彼女の物だと。

「シエスタ、本当の事を話してくれ」

「…サイトさんには関係無いです。早く一緒に脱出船に「シエスタ!」!?」

彼女は目を疑った。仲間には温厚なあのサイトが自分にウルトラガンの銃口を向けていたのだ。自分のひいじいさんの形見であるあの銃で。

「…ゴメン。でもその手紙の内容を知りたいんだ」

「…わかりました。読みます」

サイト。

私はアルビオンから迫り来る怪獣を食い止めるために殿(しんがり)を努めることになったわ。私が食い止めてる間に逃げて。虚無の魔法はこの前失敗したけど、今度は必ず成功させてみせます。

あんたは名誉の為に死ぬのを馬鹿にするのは、あんたなりの考えからによるものだって分かる。でも誰かが食い止めなきゃ、シエスタもキュルケもタバサもモンモランシーも、魅惑の妖精亭のみんなは殺されるかもしれない。辱められるかもしれない。

私も死ぬのは、本当は嫌よ。でも、仲間を守りたいのはあんたも同じでしょ?そのための名誉が、そんなにくだらないの?

最後に言わないといけない。あんたはこの世界の人間じゃないのに、私のせいで嫌な思いをさせていったわね。

ごめんなさい。

そして、さよなら

ルイズ

「あの馬鹿…一人でかっこつけやがって…」

サイトは手紙を握り締めて身を震わせた。行かなければ！ルイズを止めないと！彼はデルフを背中に、腰のベルトにウルトラガンと地下水をしまって部屋から出ようとした。しかし、シエスタがだ見過ごすはずがなかった。

「行かないで下さい！行ったらサイトさんが…ただでさえ怪我してるのに…」

「行かせてくれシエスタ！あいつじゃ怪獣を止められるはずない！あてずっぽで倒せるような生物じゃないんだ…」

彼の目は本気だった。これ以上何を言っても彼は聞かないだろう。ならば、と彼女はポケットから小さな小瓶を取り出した。

「…これを」

「それは？」

「睡眠効果のあるポーションです。もしミス・ヴァリエールがサイトさんと戦地に行くことになったらこれを彼女にこの薬を飲ませて逃げてください！！サイトさんがミス・ヴァリエールのために死ぬなんて私には耐えられません！」

「…ありがとう」

サイトはシエスタに礼を言い、宿から飛び出した。

一方、ルイズは馬の仕度をしに馬小屋にきていた。

「ルイズ」

この声は…彼女が振り向いた場所に、額をバンダナの様に巻きつけているサイトがいた。身体が壊れかけているにも関らず、ここまで走ってきたのだ。

「な、何で来たのよ馬鹿！逃げろっていったのに…」

やはり止めに来たのか？

「手紙でも書いてたけど」

「分かってる。俺がどれだけ言っても行くんだろ？でもせめて、納得できる形で分かれたいんだ」

そう言って彼は一本のワインのビンを見せた。

「昔、俺の国じゃ大切な人と永遠に別れる時は、こうやって一杯互いに飲むんだ。今生の別れってやつだ」

「あの、サイト。お願い、一つ聞いていい？」

ルイズは少し恥ずかしげに言った。

「何だ？何でも言ってくれ」

「ちょっと着いてきて欲しいところがあるの」

ルイズに着いて行って彼が辿り着いたのは、街の教会だった。ステンドガラスにはキリスト教のもののように、神秘的な絵が描かれている。

「ここで飲みましょう」

「ああ」

サイトは近くの椅子に置いた二本のグラスにワインを注ぐと、ルイズに悟られないように一本の方にシエスタから貰ったポーションの瓶から一滴落とした。

「ほら…」

ポーションを仕込んだグラスをルイズに渡し、二人は乾杯の意を込めて互いのグラスを軽く当て、そしてすぐに飲んだ。

「なあルイズ」

「なによ？」

「何十年か前、俺のオヤジはある人にこう言ったんだ。『空に明けの明星が輝く頃、一つの光が宇宙へ飛んでいく。それが僕なんだ』

って」

義理の母アンヌが、当時恋仲だったウルトラセブンから別れを告げられた時の言葉だった。今でも色あせることなく彼女の心に刻まれ、やがてサイトにも教えていたのだ。

「いい言葉だって思うわ。でも、一体どういう意味？」

「それは…『今度は俺がなる』ってことだ。明けの明星に」

「え？」

「今まで正体隠してきたけど、黙ってて悪かった。見ての通り俺の体はボロボロだ。だから今夜限り、この星を離れる」

だんだんサイトの言葉を聞いて、ルイズはだんだんある確信に気付いていく。確か、サイトは怪獣が現れたときはいつもどこかに姿を消していた。逃げてたか、あるいははぐれてしまったと思っていたが、違った。

「まさか、あん…」

確信を口に出そうとした瞬間、ルイズは床に崩れ落ちた。シエスタのポーションの効果が、ちゃんと効いたようだ。

「ごめんな……」

彼女を腕の中で受け止めたサイトには、寂しげな笑みが浮かんでいた。

「おや、サイトじゃないか？」

その声に反応して、サイトは入り口の方を振り向いた。

「さっき君の様子を見ようと宿に行ったらいなかったものだから、こんな場所に居たのかい」

「ジュリオか…ちょうどいい。ルイズを頼む」

サイトは抱きかかえていたルイズをジュリオに差し出した。彼は不思議そうにサイトを見ながらも、ルイズを代わりに抱きかかえる。

「かまわないが、どうしたんだい？僕は勝手に逃げろと言いに来たんだか」

「何で？」

「美しいルイズを怪獣にぶつけるわけにはいかないからね。できれば僕のゴモラで戦いたいが…」

バトルナイザーの蓋を開くと、小型モニターに未だ元気のないゴモラが映る。

「回復し切れてないってわけか」

つまり援軍は期待できないということになる。なおかつボロボロの状態で勝てるか分からないが…

「ところで、君はどうするつもりだい？」

「ちょっくら怪獣に挨拶にな」

出口に向かいながら告げるサイトに、ジュリオは眉をひそめた。

「君にとって名誉のために死ぬことはアホのやることじゃなかったのかい？」

彼は貴族のありように不服があることは、ジュリオも知っている。にもかかわらず彼は自ら死地に向かおうとしているのだ。

でもサイトの答えは死んで手にする名誉のためではなかった。それとは全く違うものだった。ルイズは名誉名誉言っていたが、彼女のそれが仲間を守るためのものだったからこそもあって彼は体調不良や怪我を辞さずに行こうと思ったのだ。

「名誉のためなんかじゃない。ルイズやトリステインのみんなを守るためだ。同時に、俺も生きるために」

「本気かい？君の身体いまや只事ではないはずだよ。それでも、自分が生き残れるなんて保証があるのかい？」

「選択肢に入らないわけじゃないだろ？だったら俺はその道を選ぶ。じゃあ、ルイズを頼むぞ。ルイズにはこういっててくれ。『また会おう』ってな」

「わかった。じゃあ僕はそろそろ行くよ。怪獣も、来ちゃったみたいだから」

外から、爆発音が響き、炎が街で燃え盛る光景が窓から飛び込んできた。ジュリオはルイズを抱えながらリトラに乗って、アルビオンから去って行った。

「…」

サイトはウルトラゼロアイをブレスレットから出し、いざ変身しようとした。でも、それを止めさせようとする人がいた。

『止めろ！止めるんだゼロ！今度こそ、本当に死んでしまう！』

ゴメンなオヤジ…俺決めたから！

「…デュア！！」

サイトは父セブンの制止を無視し、ウルトラゼロアイを身に付けてウルトラマンゼロに変身した。

最後の脱出船の中、アンリエッタはルイズが捨て石になることを知って。

「今すぐルイズを連れ戻さないと！！」

死地に無謀にも向かう主をマザリーニは放っておけるはずがない。

アンリエッタの肩をつかんでそれを阻んだ。

「なりません陛下！！今行けばお命はありません！！」

「だからといってルイズを見殺しにはできません。放して！放してください！！」

彼女はマザリーニを振り払ったが、彼の土下座する姿を見て立ち止まってしまう。

「しかし陛下、今ミス・ヴァリエールを連れ戻せば我らは皆殺しです！！ミス・ヴァリエールの覚悟も無駄に終わってしまうのです！！」

悔しさを必至に押し殺すマザリーニの言葉は、アンリエッタの最も望んでいなかった結果を事実として受け止めさせた。本当はマザリーニもこんなことを望んでなかった。ルイズが彼女の大切な幼馴染であることはよく知っており、同時に彼女の嘆きをいつも受け止めていた身なのだ。

「そんな…そんな…」

崩れ落ちる彼女は、ただ泣くしかなかった。

「お目覚めかな眠り姫？」

「ジュリオ…？」

起き上がって亜たちを見渡すと、夜風の吹きぬける甲板の上にたく

さんの兵士や一般人が船に乗っていた。

「船の上…？あ！！敵を足止めしないと！！」

自分の使命を思い出し彼女は立ち上ったが、もう遅かった。船は既にアルビオンから離れきっていた。

「ミス・ヴァリエール！！」

そこにシエスタ、ジェシカ、スカロンがやって来た。

「サイトさんはどこです！？船中捜して回りましたが、どこにも見当たらないんです！」

「サイト？そう言えばあいつは？」

いや、待てよ…教会で確かサイトと話してたら意識が飛んでしまって…

「彼はここにいない。彼はロサイスの街に現れた怪獣にたち向かって行った」

ジュリオの一言はその場の者達に衝撃を与えた。

「ルイズ、君がポーションの効果で眠っている間にね…」

「そんな…私を助けるために…」

衝撃のあまりルイズは後ずさる。

「そんな…私はサイトさんに生きてもらいたくて渡したのに…」

彼が死地に行くのを、逆に促す結果となった。シエスタはショックのあまり気絶した。

「シエスタ！」

床に崩れ落ちる彼女をジェシカは受け止める。

「サイト！サイト！」

ロサイスにまで引き返そうとルイズは飛び降りてまでした。スカロンは彼女を取り押さえてそれを阻んだ。

「ルイズちゃんもう遅いわ！！」

「いや、放して！サイトを死なせるわけにはいかないわ！あいつはもうぼろぼろなのよ！放して！行かせてお願い！」

ルイズは泣きながら振り払おうとした。あの教会での会話を思い出たことで、もうこの時には気付いていたのだ。

彼はずっと正体を隠し続けながら戦ってきたのだ。

宇宙の戦士、ウルトラマンゼロとして。

「サイトおおおおおおおおおおお！！」

シェフィールドの呼び出したパンドンはサウスゴータ区域からロサイスに向かおうとしていた。しかし、その足元には多くの兵士たちの集団がいた。アルビオンの、本来なら港にいるトリステイン軍を襲撃するはずの部隊だった。見たところパンドンと戦っているように見える。

シェフィールドはそれを町外れから見下ろしていた。

「どのみちこの国は滅びるわね。『ジョゼフ様』も『冥王』も飽きてしまわれたし、トリステインに乗っ取られても大したことできなくするように、痛めつけとこうかしら」

まるでただの気まぐれで始めたゲームのような扱いにしか見ていない。彼女はあまりにも薄情な人間だった。もう必要の無いアルビオンをとっとと捨ててしまうつもりなのだ。

「ホーキンス様！これは一体？なぜあの怪獣が我が軍の邪魔をしているのです！？」

「そんな事を気にしてる場合ではない！全軍体勢を立て直せ！怪獣を始末次第、裏切り者シェフィールドを見つけ次第捕獲せよ！」

しかし、混乱は簡単におさまる気配は無い。そんな時、ゼロが空から飛来、パンドンを空中から蹴り付けた。

「デュアアアア！！」

地上に降り立ったところでゼロは走りこみ、パンドンに殴りかかった。

「デュア！！」

だがパンドンは怯まずゼロを捕まえ、彼の背中を殴りまくってから投げ飛ばす。

「カカア！！カカア！！」

「グア…」

ピコンピコン…

ゼロのカラータイマーは、まだ変身して間もないのに点滅しはじめていた。

「ウルトラマンを援護！！全軍攻撃開始！！」

ホーキンスの指示によりアルビオン軍はパンドンへの攻撃を開始した。

「ファイヤーボール！」

「ライトニングクラウド！」

「グランドブレイク！」

火の弾、雷、土の巨人の手などがパンドンに襲い掛かる。ダメージは確かにあるが、まだ全然倒すには至ってない。

「デュア！！」

ゼロはパンドンを投げようとしたが、やはり今の満身創痍の状態では持ち上げれずそのまま倒れ、そして地面を転がりながら取っ組み合いに入る。

「カカア！！カカア！！」

〈ゼロスラッガー！！〉

ゼロは片膝を着いた体勢で、二本の宇宙ブーメランを投げつけた。

「デュア！！」

だが地下水のほうは叩き落されて地面に落ち、最悪なことにデルフの方はパンドンにそのまま奪われてしまった。

「しまった！」

「相棒！！気を付けろ！！」

「カカア！！カカア！！」

パンドンはゼロスラッガーをゼロに投げ返そうとしている。
その軍の中にいたヘンリーとルネは風の刃や炎の弾丸でネオパンドンに攻撃した。

「カカア！」

「デュア！！」

今の攻撃でパンドンが怯んでいる隙にゼロは、何かを待つようにさっきと少し違う構えで身構える。

「カカア！！カカア！！」

パンドンはデルフを投げ返してきた。

今だ！

「ダッ！！デュアアアア！！」

だがゼロは飛んできたゼロスラッガーを念力でネオパンドンに返し、パンドンの首を撥ね飛ばした。

ズバシュ！！

「カカア…」

パンドンは首をなくしてもゼロの方へ弱々しく歩き出すが、そのまま倒れた。

「やった…」

「やったあああああ！！」

自分達の勝利を悟り、アルビオン軍から歓声が上がった。そして夜が明けた。ゼロは打撃は受けたものの、地上の人間たちの無事を悟って空を上げ宇宙の大海原へ飛び立った。

「ジュワ！」

「偉大なる英雄ウルトラマンに、敬礼！」

ホーキンスが全兵士に呼びかけると、彼らは一斉に明けの明星の空へ飛び立ったゼロに敬礼した。

『空に明けの明星が輝く頃、一つの光が宇宙へ飛んでいく。それが僕なんだ』てオヤジは言ってた。今度は俺がなろうって思う。

ルイズは教会でサイトが言った言葉を思い出していた。

「ジュリオから聞いたわよ、『また会おうって彼が言ってたよ』って」

涙を流しながら彼女は空に見える一つの光をしっかり見つめる。

「使い魔なんだから、ちゃんと元気な姿で帰ってきなさいよ…」

彼女の涙もまた、空で輝く星の様に光っていた。

0　「あの時から始まってたんだ」

これはサイトがハルケギニアに来る前の物語である。

とある世界のビルの上で、そのサイトにそっくりな青年がベンチに座っていた。

「お、サイマ君じゃないか？」

サイマと呼ばれたその青年は声の聴こえたほうを見ると、彼よりも年上に見える青年が目に入った。

「君はやめろよ『ケイゴ』。そっちはもう仕事終わったのかよ」

「余裕余裕」

ケイゴと呼ばれた青年はサイマの横に座る。

「もうお前が俺たちの仲間に入ってから結構経ってきたんじゃねーの？」

「なに思い出させてんだよ？」

思い出したくもない。自分をいいように奴隷扱いし、全てを奪ったあのクソ女の顔…左手に刻まれた忌々しい刻印はまだ残っている。

そうだ、あの時から俺の日常は全て失われたんだ。あの日俺は異世界のとあるお嬢様に無理矢理召喚され、奴隷同然に扱われた。

「つべこべ言ってんじゃないわよ！あんたは黙って私に従ってれば良いのよ！」

逆らえば鞭でぶったたかれるわ、飯は固いパンすら与えられない。誰も自分に手を差し伸べもせず、貴族は俺をあざ笑い、同じ平民は見て見ぬフリか同情か。

でもそんな時、コイツが、ケイゴが助けてくれたんだ。俺があのクソ女とその部下に逆らえない平民から『お仕置き』というリンチをかけられたとき、あいつ等を殺しはしなかったが追い返してくれたんだ。

「俺と来いよ。自由になりたいだろ？」

あいつのあの笑ってる顔には、どうしてか惹かれていったんだ…

「なにしてんの役立たず！さっさとあの侵入者を殺しなさい！あの下等生物も捕まえるのよ！」

クソ女の手から逃げてると、ケイゴは真っ黒な霧のようなものを目の前に出現させると、俺ごとその中に飛び込んだんだ。

その時から、俺は闇の世界に身を投じることになった。

1　「三人で」

「さて、着いたぜ」

「…！？」

気がつけば、ケイゴに連れて来られた俺は見たこともない場所に来ていた。

何かの建物だろうか？天井とか床とか全部コンクリとか鉄パイプとかでできてて、さっきのハリポ○みたいな場所とは全く違っていた。

「まだ名前言ってなかったな。俺はマサキ・ケイゴ。お前は？」

「え？」

「名前だよ名前。あんだろ？」

「あ、サイト。平賀サイト」

「サイトか。よろしくな」

俺は正直こいつの言ってることがワケわからなかった。なんで俺を助けるか、いきなりこんな場所に連れてきた理由がわからなかった。

「なんで俺を助けてくれたんだ？」

「まあ、そうだな…」

ケイゴと名乗ったその男は答えにくそうに、返答を思案しはじめた。

「素質のある奴を見つけたら連れてこい、って話」

「素質？」

「心にかなり強い闇がある奴を集めること。それが俺の仕事だった」

「…」

闇…負の感情なら沸き立つほど出てたさ。あのクソ女、ただ何不自由なく暮らしてた俺を故郷から引き離しただけじゃなく、罪悪感すら出すことなく俺を奴隷としてコキ使いやがった！いつかゼッテーぶっ殺す…

「…あのさ」

ケイゴが話しかけてきたので、俺はとっさに滲み出てた感情を押さえ込んだ。

「やっぱお前も何かされてたんだな？」

「あんたも見てたろ…一目瞭然だ！あのクソ女のせいで俺の日常はあっさり崩れちまったんだ…いつか絶対…」

殺したくて殺したくて仕方ない。俺はあのクソ女『ルイズ』に召喚されて『ハルケギニア』の『トリステイン』とかいう腐敗国家で暮らす羽目になってからこの恨みを忘れたことはない。いつか殺すと誓った。絶対に…

だが、あいつは「殺す」と言おうとした瞬間「止めろ」と言った。

「復讐なんてやめとけ。後悔しか残らない」

「はあ！？あんな奴ら死んで当然だろ！身分の違いなんかで人を人とも思わず腐敗した国のために働けとか…愚者の境地だ！」

「相当ダメージでかいな…」

ケイゴは参ったな…と頭を抱えた。

「今のお前は悪いことした奴らを殺すのは当然のように言ってて正義を掲げてるんだろーが、それは違う。悪いのは、人の心の奥にあるものだ。それを帰れば人は悪者にもなれりゃ、善人にもなれる」

「どういう理屈だよ…」

「とにかく、そうカリカリするなよ。体に毒だぜ？」

「なんであんたはそうユルユルなんだよ…」

そういや素質がどうこう言ってたな…

「なあ、素質って何のことだよ？」

「…ついてくりゃわかるさ」

言われるがまま俺はケイゴに着いていった。

ケイゴに連れて来られた場所にはたくさんの人間がいた。広く作られていることから、何かの訓練施設なのか？

「サイトだったな。お前は今日から自由を手にするために戦うことになる。こいつら全員にな」

「…は？」

いきなり何言ってんだこの変人は？俺にこんな、軽く『五百』はいそうな人間と戦えって！？

「こいつらの中でただ一人勝ち残れたら、お前は『闇の力を得る候補者』となれる。お前も変えてみたいとは思わないか？お前と俺の会った、あの世界を正しい方向に」

「…できるのか？そんなこと」

ケイゴは俺の言葉にコクッと頷いた。

「俺も以前、故郷が戦争に巻き込まれたのが原因で心に深い闇を背負った。その後、故郷を壊した連中への復讐を誓って、軍に志願したんだ。それからしばらくして俺は故郷を壊した奴をこの手で殺した。

でも…」

その時のケイゴは、まだ戦いを知らなかった俺でさえ演技じゃなかったことを理解できた。すっげー悲しくて、やるせない。そんな感

じだったんだ…

「母さんも、妹も戻って来なかった。結局復讐もただの人殺しでしかない。しかも俺は、故郷を壊した張本人にも家族がいることを知って、そいつらからかなり恨まれた。『あいつを返せ』って。だから俺は軍を辞めたよ。そうしたら…」

「ここに来た、ってことか？」

「ああ、俺は前にここでたった一人勝ち残って候補者として残り、闇の力を手に入れたんだ。
俺は復讐の愚かさに気づいてから、決めたんだ。闇の力って悪いイメージあるけど、だからこそできることがある。俺はそれをしようって」

「闇の力…」

闇って、ゲームとかじゃ悪いイメージとか嫌なレッテルが張られてるよな。確かにイメージ悪い…物語の悪者とかよく使ってたりするし。

ん？そう言えば…

「ところでさ、ここに集められてる連中は俺を含めて一体誰の指揮で集めてるんだ？」

「実は俺もよくわからない。ただ噂で『冥王』って呼ばれてる奴が、仲間を欲しがってるとか…後7人ほしいとか言ってたらしいぜ」

「曖昧だな…」

まあ人には知らないことも多いから仕方ないか…

「とりあえず、やってみりゃいいんだな？
でもどうして俺なんだ？俺のいたハルケギニア、まああの世界には他にも闇を抱えた奴いくらでもいただろう？」

俺がケイゴに言うと、あいつは笑っていた。

「実はな、お前にとって大事な人から頼むよう言われてたんだ。さっき名前確認して間違ってなかったみたいから安心したぜ」

それを聞いた俺は驚きを隠せなかった。全部奪われた今の俺に、その言葉は鬼門だったかもしれない。

「あいつがいるのか？あいつが…」

「『ハルナ』ちゃんだろ？お前より一足先に勝ち残って候補者になってたんだ。会いたいだろ？でも…」

ケイゴが横を向くと同時に、俺も他の連中を見る。数的に半端ない。ケンカとか得意っちゃ得意なんだけど…

「頑張れよ」

そう言ってケイゴは俺の肩をポンと叩き、そのフロアから立ち去っていった。

なんだかよくわかんないけど、会えるんだよな？あいつに…

とにかく俺は、できることをやるしかないんだよな…

「んにゃろおおおお！！！！」

俺は、雄叫びを挙げて五百人の人間たちにケンカを売っていった。

「んで、お前が残ったんだよな。新しく『サイマ』って名前を変えてな」

「ああ」

時を戻し、ケイゴがサイマの顔を見て言うと、サイマは笑った。

「それから、ハル…じゃなかった『ナツキ』やあんたと一緒に任務に出掛けるようになった」

「主な仕事は怪獣の回収、だったな。俺や他の『闇の戦士』が戦ってる間、サイマはまだ候補者だから隠れて様子を伺う。弱ったところをバトルナイザーに回収するって感じだったな。ナツキもそうだった」

「あんたがいなかったら、俺はあのクソ女にいいようにされた果て

に、殺されるか捨てられてたかもな…。生き残ってたら完璧堕ちてた」

「おいおい、テンションさがること言うなよ。ほら」

ケイゴはそう言ってサイマの頬に、冷えきった缶を押し付けた。

「冷たっ」

「冷えてるうちに飲んどけよ」

カチッと缶の蓋を開き、ケイゴはジュースを飲む。

「あれ？早かったね二人とも」

そこにやって来たのは、ハルナに似たショートカットの少女。彼女がナツキである。

「遅いぞ、ナツキ！」

笑ってサイマは出迎えた。そんな彼にナツキも笑顔を返してサイマを、ケイゴと挟む形で座り込む。

「ごめん、今日ダーラムも手こずってた相手だったみたいだから遅くなっちゃった」

「あのおっさんも手こずるんだな…」

ケイゴは意外そうに言った。

「綺麗な夕陽…」

遠くに沈んでいく太陽を眺め、ナツキは感動していた。

「ずっとこんな風に二人と話してたいな」

とサイマ。

このときの彼は、まるで邪悪な面が見られない。後に出会うサイトと同じように明るい印象が持てるものだった。

親友と恋人との会話を心の底から楽しんでいる。

そんな彼が、なぜレコンキスタを裏で操り戦争を促すとか、怪獣を送りつけたり、果ては目の前で人殺しをしたのか。

この先を見ていけばわかるかもしれない。

2　任務（前書き）

最近『テイルズオブジアビス』にハマったせいもあって更新が遅れました…（汗）

多分この章、どの話も短すぎることになりますね…

ともあれ、読んでいただけると幸いです

2　任務

彼らの仕事は主に怪獣を回収すること。
今日もとある場所で任務に取りかかる。任務の手順はいたって単純で、ケイゴが怪獣と戦い、弱ったところをサイマやナツキたちが回収用のバトルナイザーに回収するといったことだ。

「あのさ…」

サイマはケイゴに話しかけてきた。

「どうした、サイマの坊っちゃん？」

「坊っちゃん止めろ！それより、俺たちはいつケイゴみたいに変身できるようになれるんだ？」

「私も気になってた。いつなれるの？」

「そうだな…。すでにその力の種はお前たちに植えつられてる。それがいつ目覚めるか俺にもわかんねーけど」

やれやれと言ってるかのような素振りでケイゴが言うと、二人は呆れたような顔をした。

「さて、ターゲットの怪獣さんはどこにいるのやら…」

ケイゴは辺りを見渡しながら怪獣の姿の確認をしようとしたが、今のところ見当たらなかった。

彼らは今街の真ん中にいる。街の名前はトリスタニア。サイトたち

も立ち寄ることになる街だ。ただ違うのは…

「平民の分際で！」

太っちょ貴族が素直に平伏していた平民の一人をいきなり蹴りつけた。

「な、何をなさいますか！？私はしきたり通り平伏しておりましたのに！」

「貴様、本気で平伏しておったのか！？さっき居眠りしていただろ！」

たかが居眠りなどで平伏してた相手の顔まで蹴るのか！サイマはいっそ殴りかかろうとしたが、ケイゴは彼の肩を掴んでそれを止めた。

「よせ。前にも言ったろ？」

「くっ…」

目の前で理不尽な暴力に苦しんでる人がいるのに、助けられないなんて…

「安心しろよ。そろそろだ…」

「え？」

「この世界は闇で腐敗仕掛けてるからな…特にビーストが繁殖してる」

ケイゴがそう言った時、先ほどの貴族は突然浮き上がった。

「ひっ！？なななんだ！？ぎゃあああ！」

その貴族は振りほどくことができないまま、中にいつの間にか浮いていたビーストの口の中に放り込まれた。

「メガフラシのお出ましか…」

フィンディッシュタイプビースト・メガフラシ。普段は空中に浮いてるため、捕食する時は磁力波では捕食する人間を引き寄せ、食らう。しかもウルトラマンネクサスのメタ・フィールドも無効化できる力も持っている。

スペースビーストは闇の巨人の僕のイメージが強いかもしれないが、実際は違う。石堀たちや身の戦士たちがただ彼らを利用しているだけなのだ。現在はビーストだけでなく、サイトの世界で生きる怪獣をも利用する意図を示そうとしていた。

「んじゃ、行ってまいりますか！」

ケイゴが取り出したのは、後に仮想世界でサイトと会うことになるダイゴが持っていたものと同じようで色が違う、『ブラックスパークレンス』を天に掲げ、黒と紫のオーラに身を包んで巨大化していった。

あのダイゴも戦うことになる光の戦士、しかし邪悪な人間との同化された影響で影の巨人となった不幸の超古代の戦士『イーヴィルティガ』を元に作られた闇の戦士『ダークイーヴィル』。

「ディア！」

彼が変身した直後、メガフラシは電撃をイーヴィルに向けて放出するが、イーヴィルはものともせず紫に光る盾を作り出して防ぐ。

〈イーヴィルバリア〉

「ヂュ！」

すぐ、メガフラシに反撃の光弾を発射する。

〈イーヴィルビーム！〉

「シャ！」

メガフラシは今ので怯んでいる。今の内に闇の戦士特有の空間『ダークフィールド』を発動させようとした時、突然彼の背後から一発の炎弾が飛び出し、彼に直撃した。

「グワ！？」

彼の背後から炎弾を撃って来たのは、新たに現れた地獄の番犬ビースト『ガルベロス』。

二体のビーストに囲まれ、さすがのイーヴィルも戦慄する。

（この世界は人の闇が充満してる分、強くなりすぎてるかもしれない…）

しかし、未来で生きるために今は戦うことしかできない。

まずはガルベロスに迫ってチョップし、キックで横腹を蹴りつけるが、お返しにガルベロスはラリアットで突き飛ばした。飛ばされ、地面に転がったところをメガフラシの電撃が襲う。

「キュオオオ！」

「グアッ…！」

痛みをこらえて立ち上がるも、やはりサイマたちに出会う前の怪獣よりも強い分類だった。彼はイーヴィルの力を手にした時から何度も怪獣と戦ってきたプロフェッショナルなのだが、ここまでされるとは思ってなかった。

（こりゃ、やりがいを通り越しちまいそうだな…）

冷や汗を拭き取るように手の甲で額を撫でると、ガルベロスに飛びかかり、そのまま両腕を掴んで手の動きを封殺する。しかし、ガルベロスが炎弾を吐くと、その炎弾はガルベロスを捕まえてるイーヴィルの背中に当たった。

「グハアッ！」

今の攻撃で彼はダウンしてしまい、そこに真上から落下してきたメガフラシがイーヴィルの腹の上にのし掛かってきた。

「ヌアア！」

ピコン、ピコン…

「サイマ、まずいよ…このままだと…」

ナツキが危機を感じ、サイマを見る。

「まだ早いけど、回収用バトルナイザーに！ケイゴが殺られるよかマシだ！」

彼らが持ってるバトルナイザーは怪獣の捕獲に使う機能しか働かないため、一般人でも使える代わり逆に怪獣を使うことができない。二人は回収用のバトルナイザーにビーストを閉じ込めようと、それを掲げた。本来ならここでビーストたちが光のカードになるはずだが、バトルナイザーに突然バチッ！と電撃のようなものが走り出し、彼らの手から弾かれた。

「くそ…やはり弱らせないと効果がない！」

なんとかイーヴィル、ケイゴを助けたい。しかし、自分たちにの闇の戦士としての力はいまだ覚醒していない。

「グッハ…」

もうイーヴィルのカラータイマーの点滅速度が絶え間ない状態になっている。あとどれぐらい持つのか…

もしこれで彼が死ぬことになったら…

いやだ。あいつは俺に人として生きる術をくれたんだ。死なせたくない。

死なせてたまるか！！

「うわあああああああ！！」

瞬間、彼の意識は飛んだ。

「つまり、彼はようやく覚醒したのかい？」

アジトに戻って来たケイゴたち。あれからビースト二体は回収するどころか、倒されたらしい。

助かったケイゴとナツキはダンプリメに事情を説明することにした。

「いや、途中で力を制御できず意識が飛んで、体も無理なパワーアップで壊れかけてしまったようだ…」

「しばらくは、目を覚まさないみたい…」

「やれやれ、彼も所詮力を扱えきれない失敗作か」

それを聞いた瞬間、ケイゴの頭から何かがプチンと切れた。

「お前、そんな言い方ないだろ！現に俺はあいつに…！」

「使える戦士にしたければ、僕たちに従ってるエイリアンに手術でも施してもらったらいいじゃないか。じゃあ」

反省の色を全く示さないまま、ダンプリメはその場から立ち去った。

「…確か、メイツ星人が医術に優れてたんだよな。サイマを運ぼう」

その後、サイマは手術室で手術を受けることになった。

手術に当たった星人の話によると、変身した時のパワーがあまりにも強すぎてサイマの体が耐えきれず、彼の体内が大きなダメージを受けていたことが判明した。

「サイマ様のお体はこのまま放置すれば、死に至る可能性が大きいです。体の半分を機械化、つまりサイボーグにしなくては変身した時のパワーに耐えられませんし…」

メイツ星人に言われ、選択に迷うケイゴ。

体を機械化、これはヒューマニズムを問われることになる行為。しかし今サイマは死にかけの状態だ。このまま放っておくわけにはい

かない。

「…わかった。頼む」

「了解しました」

メイツ星人は答えを聞き入れ、サイマの肉体の半機械化手術に取りかかるため、手術室に入っていった。

「サイマ、大丈夫かな…」

「あいつを信じるしかないさ」

不安そうになるナツキをケイゴは彼女の肩を優しく掴んでなだめた。

（私にも力があれば…）

こんなことにならなかったのでは？

ナツキはこの時、ある決意をした。

だがこの決意が、サイマを狂わせ、ケイゴに悲運な道へと歩ませるきっかけとなることを、知るよしもなかった。

3　砕ける心

「うぅ…」

自らの力に体が耐えきれず、サイマは昏睡状態に陥っていた。
半機械化を施したお陰でなんとか一命をとりとめた。現在は病室で寝かされていて、わずかな唸り声しか出してくれない。

「サイマ…」

元いた世界の戦争で死んだ家族と今のサイマを重ねていたケイゴ。
悔しかった。もっと強くあれたら、彼に苦しい思いを味あわせずにすんだのに。

「俺は大丈夫だ。お前も早く体治せよ」

彼は微睡むサイマにそう言い残し、病室を後にした。

「どうだい、少しは『あれ』の効果は上がったのかい？」

サイマやケイゴたちのいる建物のとある研究室。怪しげな液体カプセルと眼前で目映く光るモニターを見つめるダンプリメ。彼に答えたのは、科学者らしき一体のエイリアン。

「ええ、うまくできてると考えれます。連れてきたあのモルモットたちに微力に浴びせ、９９．９％の確率で強引ながらも変身しました」

「でも、ごくまれに僕らの手でも負えない奴が誕生したら、僕らでもコントロールできないはず。その時はどうしたらいい？」

「簡単です。そいつは肉体を分解して単純な闇のエネルギーを変えたあと、新たな人間を器として埋め込ませれば、コントロールが可能です」

「よし、引き続き頼むよ。あの『ウイルス』は後の作戦に必要だ」

ダンプリメが一度その場から立ち去ろうとすると、そこにナツキが走ってやってきた。

「どうしたんだいナツキ？ここは関係者以外立ち入り禁止なんだよ？」

「お願いがあるんです」

決意の眼差しを見せつけ、彼女は言う。

「私を…今すぐ闇の戦士に変えてください！」

「…」

随分大きく出たな、とダンプリメは思った。しかし、ここで彼の邪悪な本性が沸き出てきた。

（濃厚なウイルスを彼女に浴びせたら、かなりできのいい奴が完成するのかも…ふふ）「わかった。着いてきなよ」

彼女をどこかへ連れていってるときのダンプリメの顔は、かなり凶悪な笑みを浮かべていた。

それからしばらく経った頃、ケイゴは一人スクワットをして暇を潰していた。ゆっくりサイマを看病してやりたいとは思ってるが、残されたナツキを彼の分も頑張って守ろうと考えていた。

しかし、彼はある悩みを抱えていた。

（俺、どうしてここにいるんだ？なんでここにいようとしてるんだ？俺の居場所は…こんな暗闇に満ちた場所なのか？）

よくよく考えたら、ここにいる理由なんてあったのだろうか？

「１９８…１９９…」

「ケイゴ、ちょっといいかな？」

もうすぐ２００いきそうなところで、ダンプリメが彼に話しかけてきた。ケイゴはすぐにスクワットを止めてダンプリメに顔を向ける。

「どうしたんだ？お前が話しかけてくるなんて珍しいな」

「そうかな？とにかく、着いてきてくれないかい？」

着いてきてたどり着いたのは、模擬戦が行えるように作られた広めのアリーナだった。

「一体どんな用事で俺を呼び出したんだよ？」

「そう慌てないで。実はなかなかの出来具合の戦士を完成させたんだから、君に相手をさせてあげようと思ったんだ」

ダンプリメが指をパチンと鳴らすと、黒い霧のようなものが集まり、等身大の人の形を成していく。

たちまちその姿は、後にサイトたちと戦うことになる戦士、『ダークファウスト』となった。

「初期のファウストよりもパワーはあると思うよ。どちらが気絶するまで戦ってみてその出来具合を確認したいんだ」

「まあ、いいけど…」

あまり乗り気にはなれなかったが、ケイゴはブラックスパークレンスで等身大のダークイーヴィルに変身した。

「デュ！」

「ムン！」

互いのハイキックが繰り出されたところから模擬戦が始まった。

「シャッ！ハッ！」

「フン！デア！」

二人の手刀が相手のそれを受け流して防ぎ、そして再び放つ。その最中、ファウストは回し蹴りでイーヴィルの背中を突き放した。

「っ！ちっ…」

体制を整え、イーヴィルはファウストにキックを放つと、ファウストもそれをキックで返して、数回ぶつかり合う。

一旦距離を置いたファウストは両拳を合わせ、黒い稲妻を発する。必殺技が来るな…と見切ったイーヴィルも両腕を広げ、横長に黒い線を描く。それを前方に閉じると、まずファウストから必殺の光弾が発射された。

〈ダークレイ・ジャビローム！〉

同時にイーヴィルも逆Ｌ字型に両腕を組んで黒い必殺光線を放った。

〈イーヴィルショット！〉

互いの必殺技がぶつかると同時に小爆発が起こり、二人は自分たちの向いてる方とは反対側に吹き飛ばされた。

「グハッ！」

「グッ…」

受け身でイーヴィルは再び元の姿勢を保つ。強い、素直にそう思った。このファウストの力を試してみたくなるダンプリメの気持ちもわかってきた気がする。

しかし、割り込むようにダンプリメが入ってきた。

「もうこれくらいで十分だ。ありがとう、ケイゴ」

「え、もう終わり！？」

「うん、終わり」

まだやりたりない様子のイーヴィルに、ダンプリメは何の気負いもなく答える。

「パワーに関しては申し分ないね。もう少し育てたら…！」

とっさに反応したダンプリメは、突然背後から飛び出してきたファウストの拳を飛び上がって回避した。

「大丈夫か！？」

「平気だよ、ケイゴ。それより…」

ダンプリメが顔をあげ、イーヴィルがその方を向く。

「ヌアア…グゥオオ…」

ファウストの様子がおかしい。頭を抱え、見たところ苦しんでいる。

「ヤバイな、暴走してるよ」

「暴走!?」

「ケイゴ、気絶させて彼女を止めてくれないか?新しい、それも優れた器がないとまた暴走する恐れがある」

「はあ!?」

言ってる意味がわからねえよ!とダンプリメに突っかかろうとしたが、暴走したファウストがそれを許さなかった。

繰り出されるファウストのパンチをイーヴィルはなんとか右手で受け流し、お返しにファウストの背中を蹴飛ばした。

「ヌゥ…」

少し怯みはしたが、ファウストはイーヴィルを床に倒すと、彼を乱暴に踏みつける。

「グッ…!」

腹を踏まれたがその痛みを乗りきり、跳ね起きると同時にイーヴィ

ルはファウストの顔を蹴りつけ、彼女を巴投げで背後に投げ飛ばした。

「デア！」

即座に立ち上がり、わざと彼女のコアゲージに威力を加減して光弾を撃ち込んだ。

〈イーヴィルビーム！〉

「ヌガッ！？」

今の一撃が効いたのか、ファウストはショックで気絶し、動かなくなった。

「ごくろうさん」

ダンプリメが軽くケイゴの肩を叩いて言った。

「ったく、世話を焼かせやがって」

ふう…とケイゴはため息をついた。

「彼女は僕に任せて、君は自室で休むといいよ」

「そうさせてもらうぜ」

「やっぱりそう簡単に目を覚まさないか」

サイマのいる病室を出てきたケイゴ。相変わらず彼はあの調子のようだ。

だがもう一つ気がかりなことを思い出す。

（そういやナツキ、どこに行ったんだ？任務か？）

あれから彼女の姿がない。部屋を訪ねに行ったものの、扉を叩いても返事が返ってこなかったのだ。

（もう一回行ってみるか）

ケイゴはダメ元で彼女をもう一回訪ねに、彼女の部屋の前の扉にたち、ノックしてみた。やはり返事がない。寝てるのか？いや、そもそもいるのだろうか？

ドアノブを回して見ると、扉がなんと開いたのだ。

「開いてる？」

部屋はほとんどもぬけの殻空だった。ベッドも毛布がくしゃくしゃにもなっておらず、きちんと整った状態で保管されている。

やはり任務で出掛けたのか？

いや待てよ…
なぜかこの時、彼の頭にファウストの姿が思い浮かんだ。
嫌な予感がした。彼は地下の研究施設に走り出した。どうか、どうか俺の仮説が間違ってることを願う。そう思いながら。

地下の研究施設。今は夜中だからか誰もいなかった。ポットや液体で満たされたカプセル、怪しげな雰囲気は相変わらず。
なにやらカプセルの一つに黒い煙のようなものが溜まってもいたりした。

すると、彼は棺に似たカプセルがモニターの前に置かれているのを発見した。それを覗き込んだ瞬間、彼は思わず本当の意味で引いた。

「ナツキ…いや、違うか」

彼女に瓜二つだが、髪が彼女とは異なる、腰まで伸びきったロングヘアーの少女が眠っているのだ。だが、肌が真っ白で生気を感じない。
実はこの少女、石堀に操られていたコルベールが殺した時のハルナだった。

「なんでこんな女の子の遺体を…」

いや、確かダンプリメは「新しい器がないとファウストの暴走は止まらない」と言っていた。パワーが強すぎるため、うまくコントロールできるための器が必要だったとみられる。だとしたらこの少女、ファウストの器となるのだろう。

（まさか…）

自分もファウストと同じ、そしてダーラムやウェザリーと同じダークサイドの戦士だ。だとしたら…

（俺やサイマはこうやってダークサイドのウルトラマンになったのか！？）

つまり自分は一度死んで、器が必要だった闇の戦士の力をいただいたことで復活した…

（ゾンビ…！）

なんだよ、こんな命をもてあそんだようなのは…

彼は鳥肌をたたせながらも、真相を確かめようとモニターの真下にあるコンピューターのキーボードを叩き出す。すると、モニターにいくつかの情報が表示された。

○月×日

新たな闇の戦士の生成に『ウイルス』の作成が必要と断定。『ダークウイルス・プロジェクト』開始。

×月○日

バルタン星をはじめ、多星に踏み込み研究者集めを開始。結果、我がダークサイドの戦士に何十何億ものエイリアンの部隊も結成。

△月○日

『ダークウイルス』のプロトタイプ完成。被験者K・Mの遺体に浴びせた結果復活、後にダークイーヴィルに覚醒した。生前の理性も現存し暴走の心配なし。

しかし、生存した人間に浴びせた場合、暴走。理性を保たせたり、完全に思い通りにコントロールするには一度死亡させるべきと結論。同時に、肉体の優れ具合でも強さは変わることも判明。

△月×日

被験者W・Sと被験者J・K、ウイルスを浴びせたことでダークカミーラ、ダークメフィスト完成。

イーヴィルはプロトタイプながら怪獣の怪獣任務で予想以上の結果を残す。今後な作戦にも期待。

□月○日

被験者S、予想外の覚醒。現在は病室で闘病。
同日、被験者Nがウルティノイド化に申請。

□月×日

イーヴィルとの模擬戦でウルティノイド化させてファウストとなった被験者N。しかし途中で暴走。一度被験者Nの肉体を分解し、新たな器を必要とする。

ここでデータ内の記録は切れていた。

イーヴィル＝被験者K・M。これはおそらく自分、マサキ・ケイゴだ。あの文章から読み取って、彼は思い描きたくもなかった仮説が的中したことを実感した。ほぼ、絶望に似た感情を抱きながら。

「俺は一度、死んだのか…！」

イーヴィルになるために自分の命を…

じゃあサイマも俺が誘った時には…

一度死んだ…のか？

それに、被験者Sの予想外の覚醒。これは間違いなくサイマのことだ。だが気になるのは同日に記録された『被験者Nの申請』。

そして被験者Nが後にファウストになったとも…

そして肉体の分解…

N…

「NATSUKI(ナツキ)!?」

じゃあさっきあるカプセルに保管されてた黒い煙のようなものは…

「嘘…だろ…」

すがり付くようにケイゴは黒い煙の溜められたカプセルを見る。なんてことだ。

このカプセルの黒い煙はナツキだったのだ。

「……」

正直ダークサイドに介入してから、ただ任務に従うことがすべてだったかもしれない。

でも…

「こんな人形みたいな生活…なんの意味があるんだよ！」

ガシャン！と彼は一個のカプセルを蹴りで割った。

「ナツキ…ごめんな。先輩の俺がすぐ気づきさえすれば…」

こんなことにはならなかったのに。カプセルの中にある表情のない黒い煙に、泣きたくて仕方ないような顔になるケイゴ。

「もう、ここにはいられないな」

「んしょ」

サイマの病室で彼を担いだケイゴは、ダンプリメたちに気づかれないように、その施設から脱走した。

「サイマ、一緒に行こう。ここにいたらきっと俺たちは…」

まともな道を歩めなくなる。

知らなかったとはいえ、ナツキとサイマをこんな最悪な場所に連れ

てきたのは自分だ。責任をもって、彼らを自由にしようとケイゴは決意した。

それが、ダークサイドの戦士たちへの裏切りでもあることを自認しながら。

4　闇の英雄（前書き）

ルイズファンは見ないことを勧めます…

4　闇の英雄

「まだ見つからないの！？」

魔法学院にいた、サイマを召喚したルイズは苛立ちの境地だった。
ケイゴがサイマを連れ出したこと、つまりもの一つ盗られたことは貴族である彼女には屈辱的なことだったらしい。

「あの使い魔を拐った奴は見つけ次第殺しなさい！使い魔は逆らわなかったら連れ戻すのよ！」

雇った兵士の集団に怒鳴り散らすルイズ。淑女らしさがまるでない。

「しかし、もう見つからない可能性が高すぎます。どこへ行ったかわからないままですし…」

「つべこべ言わないでさっさと探しなさい！さもないとあんたの家を我がヴァリエール家の名をもってして焼き払うわよ！」

「…了解しました」

悔しそうに鉄兜の下で顔を歪ませながらも兵士はサイマ捜索を続行した。

サイトを召喚した方のルイズとは違って自分が非人道的なことをやっていたことを全く自認せず、自分の思い通りにならないものは即刻抹殺。

なんとも愚か、と思いたい。だがこの世界の悪しき風習が彼女をは

じめとした貴族を人であって人でないものに変えたことを忘れてはならない。

彼女もよくよく考えたら、悪しき風習の被害者なのだ。

「ケイゴが逃げただと？」

ダーラムがダンプリメの話を聞いて顔をしかめた。

「そうみたいだね」

対するダンプリメは呑気な返事をする。

「もし我々の情報が漏らされたらどうする？追っ手を差し向けるべきだ」

「もう送っといたよ。ウイルスを浴びせて作った５０人ほどの『ウルティノイド』をね。僕が裏切り者をみすみす逃がすような奴だと思ったかい？」

「そうか…もし光の戦士共に知られたら厄介だしな」

一方、ケイゴは…

「自由の代償って、こんなに高いのか？」

ハルケギニアのとある草原でケイゴは目の前に拡がる闇の巨人の一般兵の『ウルティノイド』たちを目の当たりにして頭を抱えていた。

サイマに関しては、近くの岩の影に隠している。

ケイゴはブラックスパークレンスを手にとり、祈りを捧げるように額に当て目を閉じる。

「自信を持て。俺ならできる」

意を決してそれを掲げるとダークイーヴィルに変身、ウルティノイドたちと対峙する。

「デアアア！」

一体のウルティノイドがイーヴィルに襲いかかるが、対するイーヴィルはそれを受け流し、腕を捕まえて他のウルティノイドたちの方へ放り投げた。

「ドリャアア！」

だが敵は５０人で自分は特別とはいえ同じウルティノイド。実力は自分より下だとしても、数の暴力に果たして勝てるのか…？

いや、自信を持たなくては。でないと、サイマが…

「まだまだ、いけるぜえええ！！」

空高く飛び上がり、地に降り立った瞬間彼の周りから発せられた風圧で彼を囲んでいたウルティノイドたちは吹き飛ばされた。

しかし、遠くから一個の光弾が放たれ、イーヴィルな直撃する。

「っぐ！」

別のウルティノイドが撃ってくる光弾を手刀で次々に跳ね返し、撃ってきたそのウルティノイドを殴り倒した。

敵も必殺光線を彼に放ち、イーヴィルも自分の光線で応戦するが、やはりこうも５０人を相手にすると隙を突かれてしまう。いざ光線を放とうとするも、がら空きになった背中が狙われた。

「っくっそがああ！！！！！」

逆上したように叫び声を上げたイーヴィルは再び高く飛び上がり、全エネルギーをかけて必殺光線を地上のウルティノイドたちに放った。

〈イーヴィルショット！〉

「おっさん、次の街まであとどれくらい？」
ケイゴは昏睡したままのサイマを連れ、トリスタニアから離れようとした馬車の荷台に乗せてもらった。

「いや～馬車でも時間はかかるぞ？もって五日だ」

「はあ、身を隠すためとはいえ、面倒だったかな」

さっきのウルティノイドたちとの戦闘で変身できるだけのエネルギーは残ってない。また教われたりしないことを願うばかりだ。

「いっそお前を囮に逃げ出そうか？」

いたずらっ子みたいな笑みでケイゴは微睡んだままのサイマに言う。

「そう怒るなって。お前を置いてったりはしないよ。大事な友達なんだからな」

「…」

とその時だった。馬車に突然弓矢が放たれ、馬車は横倒しに横転した。

「うぉわ！」

いきなり何が起こったのだ？サイマを背負い、ケイゴは馬車を運転していた男の様子を見に行った。
男は今の弓矢で胸元を貫かれ死んでいた。

この攻撃、ウルティノイドじゃない…弓矢の放たれた方を見ると、

たくさんの鎧を着こんだ兵士たちが彼に剣や弓などの武器を向けていた。ざっと１０００人か…

「その小僧を渡せ。ヴァリエール様の所有物だ」

一人の兵士が言う。サイマを狙ってるようだ。

理由はわからないが、いきなり弓矢を放ってきた連中に彼を引き渡せば、自分も彼もロクなことはなさそうだ。

「悪いけど…」

馬車の影にサイマを隠したケイゴは、とっさに走り出して別の兵士を殴り飛ばし、剣を奪い取った。

「ダチをすんなり渡すほどお人好しじゃないぜええ！！」

剣を握りしめ、友を守るために彼は兵士の大軍の方へ走り出した。

「迎え撃て！」

ピチャッ…

雫石が自分の顔に流れ落ちるのを感じると同時に、サイマは目を覚ました。

俺、何をしてたんだ?確かケイゴを助けようとして…

そこからは覚えてなかった。

馬車の外は雨が降り注いでいた。まさき空虚の場所とも言える荒野を、ぎこちない足取りで歩き出す。

「!」

しばらく歩いた先に、誰かが倒れてるのを見た。全身針ネズミのように矢が突き刺さり、切り傷からながれ落ちる血でまみれた男が。

「ケイゴ!?」

彼は転びそうになりながらも彼に駆け寄ってきた。

「やっと…お目覚めか?」

力のない声でケイゴは口を開いた。

「俺、やっとわかった…俺がどうして、ダーク…サイド…にいたままなのか…」

「え?」

「同じ痛みを知る仲間がほしかった…そしてそいつを助けて…守りたかったんだ…それが、お前だった…」

ケイゴは今にも落ちそうな手でサイマの顔を撫でる。

「お前も、その痛みを知る…誰かを…救っ…や……」

パシャ…

最後まで言い終える前にケイゴは目を閉じ、サイマの顔に触れてた手も水溜まりの中に落ちた。

「やっと見つけたわ」

背後から誰かの足音が聞こえてきた。顔をケイゴに向け、背後の声の主に背を向けたまま彼は尋ねる。

「…お前が、殺ったのか」

「当たり前よ。このヴァリエール家の三女であるルイズ・フランソワーズの所有物を盗んだ無礼な族よ。死んで当たり前じゃない」

その声の主、ルイズは全く反省の色を見せてなかった。後ろには護衛が念のため武器を手に持っている。

「お前、狂ってるよ」

「はあ?私は貴族よ。平民は貴族の命令に従うのが常識じゃない。従うこともできないそんなゴミ、生きる価値もないわ」

悪辣な言葉と同時に彼女は非情にもケイゴの死体を踏みつけた。

プチン…

彼は即座に立ち上がってルイズを殴り飛ばした。

「いった!?なにすんのよ!」

逆ギレしてサイマを睨み付けるルイズ。しかし、彼にその言葉は届かなかった。ケイゴによって押し潰されていた殺意が沸き上がり、それはやがて彼に単眼のメガネ型アイテムを与えた。

「死ねばいいんだ。どうせお前ら生きてても世界を濁らせるだけだし」

殺してやるよ…

その時のサイマの、まるで神話に登場する悪魔のような恐ろしい笑みにその場の人々は恐怖のあまり身をこわばらせた。

単眼のメガネ型アイテム『ダークロプスアイ』を装着し、黒い巨人となった。黒と橙の模様に赤き単眼…

半機械の闇の戦士『ダークロプスゼロ』が真に覚醒したのはその時だった。

〈ダークロプスメイザー!〉

彼の憎しみはまず単眼から放たれる怪光線となって放たれた。

「ぎゃあああああ!!」

その光線はルイズの護衛していた人々をあっさりと全滅させた。

「…え」

何が起こったか理解できぬままルイズは呆然と立ち尽くしていた。だが彼の憎しみはこれだけでは終わらない。空へ飛び立って行き、ハルケギニアに存在する街やそこに住む人たちを次々に破壊していった。

〈ダークロプススラッシュ！〉

「うわあああ！」

「きゃあああ！！」

アルビオン、ガリア、ロマリア、そしてトリステイン。そのすべてを破壊し尽くし、そして人々も死んでいく。

本来なら仲間になるはずだったギーシュ、キュルケ、タバサ、シエスタ、アンリエッタもダークロプスゼロの憎しみの光で死んでいった。

約数時間…ルイズの周りには荒野しか残されてなかった。もう何もなかった。すべて自分が奴隷扱いしていた使い魔によってすべて壊されてしまっていた。

その世界のすべてを破壊し尽くしたロプスゼロはのしのしとルイズに近づき、彼女を右手の中に納めた。

「最後はお前だ…」

「い、いや…」

ルイズの心に恐怖心が一気に込み上げてきた。

いやだ嫌だ。死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない…

「おおおお願い……ここ殺さないで…何でも言うこと聞くから…」

助けてください。必死に命乞いをするルイズだったが、それは彼の逆鱗に余計に触れてしまった。

「お前はそうやって命乞いした奴を、自分がただムカつくってだけで…」

何人の人を殺してきたんだ?

ルイズに酌量の余地なし。

「死ね」

ロプスゼロの五本の指が、彼女の真上から覆い被さっていった。

「いやあああああああああああああああああああああああああ!!!!!!!!!」

それ以後、彼女を見た者は誰もいなかった。

「ケイ…ゴ」

変身を解いて再びケイゴの元に駆け寄るサイマ。やはり彼は目を覚まさなかった。いや…覚ませるはずもなかった。

だってもう…

彼は死んでいたのだから。

「ぐっ…うう…」

仇を討っても仕方なかったかもしれないのはわかっていた。でも許せなかった。

またあいつに…奪われたんだ…

彼は雨に濡れながら空に顔を向け、涙の咆哮を轟かせた。

「うぉおおぉおおおぉおおおぉおおおぉおおおぉおおおぉおおおぉおおおぉおおおぉぁおおおぉおおおぉおおおぉお！！！！！！！！！！！！！！」

その日からだった。

サイマがすべてを憎む悪の戦士となったのは…

5　取り戻したかったもの

「お休み、ケイゴ…」

ケイゴの遺体を見晴らしのいい崖の上の地面に埋葬し、木材で十字架を立てた。

雨はまだ止まない。涙はすっかり洗い流されていた。

なんでこうなった?

なぜケイゴは死んだ?

なぜ殺されなきゃいけなかった?

いや、わかりきってる

ケイゴが死んだのは、この世界…いや他のどの世界も狂ったからだ。

「全部壊して…全部変えてやる」

俺の手で。

「なら、俺のところに来ないか?」

背後から誰かが話しかけてきた。しかしサイマは驚かない。背を向けたままサイマは声の主に問う。

「あんたは?俺と同じ闇の匂いがするが」

「俺が誰か?そうだな…君のよき理解者と思っていただいて結構…」

「回りくどい言い方だな。『冥王』だと名乗ったらどうなんだ?」

サイマは振り向いて相手の顔を確認する。

声の主はシュウヘイにとって宿敵にあたる男、石堀光彦だった。

後にサイマは、ナツキの失踪を知ることとなった。

その日から彼はダークサイドの戦士として暗躍していった。シェフィールドを通してウルトラマンゼロ＝サイトたちのハルケギニアでのレコンキスタ創設と行動を仕切るクロムウェルの監視もその一つだった。

冥王は言った。

命令に従えばナツキやケイゴを返してやると。そしてサイマの野望…『世界の破壊による変革』のために協力するとも。

しかし、サイトたちの元にハルナが滞在してたとき、真相を知った。

ナツキはファウストとなったが、力をコントロールできず自我を破壊され暴走してしまったこと。そして今、体を分解された彼女がフ

ァウストの力の源としてハルナの肉体に埋め込まれたことを。
そして裏切り者であるケイゴを復活させるつもりなど最初からないことも。

その件で尋ねたところ、石堀は謝るどころか酷い言葉で一蹴した。

お前たちは所詮、俺の人形だと。

「石堀りいいいいい！！！！！！」

レーテの保管場所で言われたサイマは怒りと憎しみを乗せてダークロプスゼロに変身、石堀に襲いかかったが、逆に石堀の変身したダークネクロスに反撃を食らってダメージを受けてしまう。

「ぐっ…もうお前には従わない…」

自力で、せめてナツキだけでも取り戻してやる。彼はそう決意して向かったのは、自分がいたものとは違う、サイトたちが生活しているハルケギニアだった。

そこでわざと暴れ、ナツキ＝ファウストの器となったハルナの居どころを知っているであろうウルトラマンゼロを引っ張りだそうと考えた。しかし、ファウストは発見したもののウルトラマンネクサスとゼロの邪魔立てで失敗、ファウストも逃がしてしまった。

彼女がサイトの腕の中で消えたことはサイマも知っていた。が、その後彼はハルナが光の国で新しい命を手に入れて復活したことを知った。ガッツ星人とゼロの戦闘で光の存在となった彼女を見たからだ。

彼女を連れ去れば、ナツキとまた笑い合えるかもしれない。だが光の国にはウルトラ兄弟をはじめとした数多くの宇宙警備隊ウルトラマンたちが警戒体制を張っている。何者かが、怪獣との戦いで敗れた初代ウルトラマンやジャックのような死人に新たな命を与えるために使われた研究のデータを無断で削除して以来、警備が厳しくなっていたのだ。

それでも、取り戻せるものは取り戻したい。わずかな可能性も信じているところは、やはり彼もまた『平賀サイト』という人間だった。

彼が動き出したのは、ウルトラマンゼロが帰還してから少し経ってからのことだ。その時のゼロは治療中のため安静中だった。

彼は大胆にもロプスゼロに変身して光の国に侵入、ハルナ＝元ファウストのテラを探し出す。おそらく銀十字軍にいるはずだ。彼はそこに行ってみることにした。

しかし、やはり中に無断で入れるはずもなく、見張りの兵に止められた。

「ここは関係者以外立ち入り禁止です。お引き取りくださ…グボ！？」

見張りの警備員が追い返そうとした瞬間、彼は頭に着けていたダークゼロスラッガーで警備員の腹を斬りつけた。倒れる警備員を他所に彼は銀十字軍基地の内部に堂々と侵入する。

無論彼の侵入と同時に警報が鳴り出した。

「敵襲ううう！！」

すぐさま銀十字軍基地内にネオス、セブン２１、パワード、グレート、スコット、チャック、ベスなどのウルトラマンたちが現れる。

「なぜここに来たかはわからないが、君の狼藉を許すわけにはいかない！」

「そこをどけ…雑魚どもがあああ！！！！」

ロプスゼロは苛立ちのあまり吠え、ダークゼロスラッガーを握る手に力を込めてそれを振り回していった。

「フッ！」

ロプスゼロに最初に挑んだのはウルトラマングレート。パンチなどの連撃で、途中から援護してきたウルトラマンマックスやウルトラマンゼノンと共に攻撃を仕掛けるが、三人がジャブを同時に繰り出した時に素早く伏せ、黒き炎を纏った蹴りで三人を突き飛ばした。

〈ダークゼロキック！〉

「デアアア！」

「ヌワアアア！！」

その後もすかさず光の戦士たちはネオスとセブン２１、スコットとチャックの順で光線を仕掛ける。

〈マグニウム光線！〉

〈アドリウム光線！〉

〈〈グラニウム光線！〉〉

しかし、ロプスゼロが次にとった行動は残忍極まりない手口だった。パワードとベスを捕まえたと思ったらその二人を盾代わりに、光線を受けさせたのだ。

「ウォワ！？」

「アゥ！」

そしてその二人を光線を放った四人の戦士に向けて蹴り飛ばし、パカッと割れた指先の小さな銃口からマシンガン並の速度のきめ細かい光弾を連射した。

〈チェリーブラスト！〉

「邪魔だあああ！！」

ババババ！！

「「「ウワアアア！！」」」

爆発と同時に、建物を突き破りながらネオスたちは見えないところまで吹き飛ばされた。

「ちっ…苛立たせやがって…」

しかし、それだけで邪魔が入らなくなったわけではない。今度はウルトラマン８０、ウルトラマンエース、ウルトラマンジャックの三人、続いてウルトラマンレオとアストラの兄弟が現れる。

「お前は確か…」

レオはロプスゼロの顔を見て、かつて彼が自分の愛弟子を追い詰めたことを思い出す。

「ふん…いちいち眩しい連中だ。お前らの無駄に眩しい光が、俺という影を作り出すんだ」

「なにを言ってる？お前は何が言いたいんだ？」

「全員、死ねって意味だよ！！」

ロプスゼロは再び牙を剥き出すようにレオ兄弟たちに襲いかかってきた。対するウルトラ兄弟たちもロプスゼロに応戦する。

８０とジャックそしてエースがロプスゼロに肉弾戦を挑もうと、蹴りやパンチを次々と放ち、ロプスゼロはそれらを受け流し、時には蹴り返して反撃する。その隙に獅子の兄弟は互いの手を合わせ、三人が一旦ロプスゼロから離れたと同時に特徴的な必殺光線を放った。

〈ウルトラダブルフラッシャー！〉

「「イヤア！」」

しかし彼は即座に飛び上がって回避し、今度は膝をパカッと開いてそこから一個の爆弾を落とすと、それは爆発すると同時に彼らをあっという間に包み込む火柱となった。

〈ヘル・ブーケット！〉

「そらよ！」

「「「「「うわあああああ！！！！」」」」」

火柱の中で苦しむ兄弟たちを尻目に、彼は銀十字軍基地内の先に進んでいく。

「邪魔だと言ってるだろうが、この年増野郎共が」

悪態を着きながら彼は自分が望む人の元へと急いでいく。
そして彼は彼女を見つけきれないまま、最上階にたどり着いた。

「…」

光の方も闇の方も、気持ちで笑ったり怒ったり悲しんだりはできるだろうがウルトラマンには表情は作れない。もし人の顔だったらたった今の彼の顔は嫌そうなんてものではない、かなり嫌悪感に満ちたものになっていただろう。
なぜなら、彼が今目の前で見えたカプセルの中に彼がいたのだから。

この次元世界で生を受けたもう一人の自分が。

「貴様の夢は、貴様を監視していたから知っている。『誰もが笑顔でいられる世界』だったな…」

普通聞けば夢想や妄想にしか聞こえないだろうが、決して悪い夢だとは誰が思うのだろう?だが、今のロプスゼロは怒りをにじませるように震えながら握り拳を作っている。

「甘いんだよ…そんなぬくぬくとした世界があるか！光が強すぎれ

ば強すぎるほど、『影』も強くなるんだよ！今の俺や、あいつら…ケイゴとナツキのようになあああ！！」

ロプスゼロはダークゼロスラッガーを一本引き抜き、『もう一人の自分』を刺し殺そうとした。が、どこからか飛んできた宇宙ブーメランが真横から飛び出し、彼は刺殺を中断してそれを飛んできた方へ弾き飛ばした。

「ふん、いきなり訪問者に武器を投げるとはとんだ親バカもいたものだ」

冷やかすように彼はいう。今飛んできたブーメラン『アイスラッガー』の持ち主であるウルトラセブンに。

「君は、レオが言っていたもう一人の…」

「もう一人…だと？」

いちいち癇にさわる野郎共だ…彼は『もう一人の自分』の入ったカプセルを持ち上げた。

「何をする気だ…止めろ！」

必死に止めに入るセブンを無視し、彼は光の国の上空に飛び立つ。

「もう一人なんかじゃない。俺は俺だ…」

カプセルを宇宙に向けて放つと、両腕をL字型に組んだ必殺光線を撃ち込んだ。

「俺なんだ！」

〈ダークゼロショット！〉

バアアアアン！！

凄まじい爆発音と共にカプセルは宇宙のチリとなった…

「…なんてことを」

目の前で息子の、ほぼ殺されたかのように見える光景に、セブンは犯人であるロプスゼロに怒りを露にするように身を震わせる。

「酷い…酷いです」

ロプスゼロは真っ先にその声に反応した。自分が待ち望んでいた人が、やっと目の前に現れたのだ。

元々闇の戦士ファウストだった、ハルナことウルトラウーマンテラが。

だが対するロプスゼロは彼女の怒りを無視し、ハルナとしてではなく自分の恋人として接する。

「迎えに来たぞ、ナツキ」

「え…？」

いきなりなにを言い出すんだ？私はナツキじゃない。今も昔も高凪ハルナという人間としての名前がある。

「俺と一緒に来いよ、こんな世界を『正義』なんてくだらないもんで無駄に明るくして、世間で疎まれるしかない闇を浮き彫りにするような連中に味方する義理なんかないだろ。さあ…」

ロプスゼロはテラに手を伸ばしていく。

なぜか彼女は、目の前にいる、彼そっくりの男に懐かしさを感じていた。彼女の記憶では初めて会うはずなのに、まるで昔からの知人のような…

その時だった。

――お願い！サイマを止めて！

「！」

幻聴だろうか。今自分の頭の中から、自分の声にそっくりの声が聞こえてきた。

「さあ…なにをしてるんだ！早く来い！」

「…嫌です」

返事を待つ内に苛立つロプスゼロ。しばしの沈黙の果て、彼女は断った。

「私は確かに闇の住人だった。それでたくさんの人を傷つけたことは許されないことかもしれない…。でも…」

彼女は顔をあげ、ロプスゼロに向かって恐れることなく強く言い放った。

「理由はわからないけど、あなたのようにただムカつくからとか悲しいからとか、どんな理由があっても光の中で生きる人々に八つ当たりするような弱い人に着いていくつもりはありません！」

ブチッ…

理性の糸が切れたように、今ロプスゼロの頭の中にある糸が切れた。

「…お前だけでも生かしてやりたかったが…」

彼がテラにダークゼロスラッガーの一振りを振り上げたその時だった。

「グハアッ！？」

彼は突然自分の真上から放たれた衝撃波によって光の国の大地に叩きつけられた。

今のは…セブンとテラも地上に急いで降り立つ。ロプスゼロの前には、老練な風貌と赤い瞳を持つ伝説のウルトラマン、『ウルトラマンキング』がマントを棚引かせながら舞い降りてきた。

「ダークロプスゼロ、光の国を汚す者よ…はあ！」

「ぐう！？」

キングが両手を広げた瞬間、ロプスゼロは稲妻状の光の手錠を掛け

られ動きを封じられた。

「闇の中で、罪の報いをうけるがいい…」

「このじじぃ…放せ、放しやがれえええええええええ！！！！！！」

必死にもがき喚くロプスゼロの声は、光の国の瓦礫によって包まれ、最終的にサイコロのような立方体となって固まった。その中にロプスゼロを閉じ込めて。

「…怪我人の手当てを急ぐのだ」

「はっ！」

キングは感情を押し殺すような声で宇宙警備隊の一般隊員に命じた。

「たった一人で、この国を襲撃するとは…」

セブンはロプスゼロの閉じ込められた巨大なキューブを見上げる。

「テラ、あいつを探してくれ。まだどこかにいるはずだ」

「はい！」

テラはセブンに言われた通り、宇宙へ自分の想い人を探しに飛び立っていった。ロプスゼロの閉じ込められた巨大なキューブを横切るとき、どうしてか胸が締め付けられたような感覚を覚えた。

――悲しまないでサイマ

――そうだぜ、そんな根暗な性格はお前には合わないぜ

「……」

数日後、宇宙牢獄と言われる罪人拘束施設の奥に、芸術的彫刻のように壁の中に体を埋め込まれ顔だけ露になっていたダークロプスゼロの姿があった。

彼の悲しみと怒りは、いまだに晴れることはない…

果たして、彼の心に光が射し込む日は来るのだろうか…

0　蘇れ！ウルトラマンゼロ

一度はアルビオンから退いたトリステイン軍だが、最高指揮官の失踪をきっかけに戦力をまとめきれなくなり、トリステインに全面降伏した。これでトリステインとアルビオンに平和が戻り、アルビオンはトリステインの領土となった。

アルビオン地方の新たな指導者としてウェールズが選ばれた。無論元は死んだとされていた人物なため、偽物疑惑などが殺到したが、数々のマジックアイテムによる検証や本人からの、レコンキスタに占領される前のアルビオンの内情について彼が話したため、疑いは晴れることになった。

アルビオンはウェールズの指導の下、根本的な建て直しを図られた。ウェールズは戦わずアルビオンと取り戻したこと、そしてアンリエッタとようやく結ばれることに喜んだ。だがアンリエッタとウェールズは心の底から喜べなかった。

そう、アルビオンでルイズの変わりに捨て石になったサイトのことだった。

しかもウルトラマンゼロになりぼろぼろの状態でパンドンに立ち向かった。生存は絶望的だった。

そんなある日、一つの青き発光体が宇宙から飛来し、ハルケギニアの大地に落下した…

あれから一ヶ月過ぎた、学院長室…

「まさか…あのサイト君が…」

信じられない。寂しげにオスマンはネズミのモートソグニルを手の中で撫でながら呟いた。

「彼のお陰で我々は助かったのです…」

アニエスもまた、このことを重く感じ取っていた。アンリエッタに至っては責任のあまり涙まで流していた。

「ごめんなさい…何もかも私の責任です…」

自分の幼馴染みが大事に思っていた人を彼女ごと自分が戦地に追い込んだ。つまり、自分が彼を殺したようなものなのだ。

誰もが死んだと思っていた。

たった一人、生身で怪獣に挑んだ平民の英雄。

名は『平賀サイト』。

彼の死を、たった一人だけ認めない少女がいた。

彼の主人、ルイズ・フランソワーズ。

彼女は今沈黙したまま窓の外を見つめていた。彼が帰ってくることを望みながら。

そのとき、扉をノックする音がトントンと聞こえてきた。なんだろうと扉を開けると、それはジュリオだった。

「やあルイズ」

「ジュリオじゃない。何しにきたのよ？」

「アルビオンにいる皇太子からの頼みで、ミス・ヴァリエールにアルビオンに来てくれってね」

「アルビオン？どうして…？」

「詳しいことは向こうで話すそうだ。支度してくれだそうだ」

「わかったわよ。行けばいいんでしょ？」

ルイズは支度をし、ジュリオの竜に乗った。

「リトラ」

ルイズを乗せ、バトルナイザーから飛び出したリトラは空を飛び立ってアルビオンへ向かった。

ニューカッスル城跡に建てられた砦。そこまで送られたところで、ルイズは降ろされた。

「僕はロマリアの方で仕事だ。だからしばらく君とも会えそうにな

い」

「そう…」

「おや、もしかして名残惜しいのかな?」

「んなわけないでしょ!行くならさっさと行きなさい!」

からかうように言ってきたジュリオに、ルイズは顔を真っ赤にして怒鳴り出した。

「あはは、じゃあまた会おうか、美しいルイズ」

最後までおどけたような態度を崩さないままジュリオはリトラに乗ってどこかへ飛んでいった。

直後、ルイズがやって来たことを察知してウェールズが数人ほどの護衛を着けてやって来たこと。

「待っていたよミス・ヴァリエール」

「はい」

「君には見て貰わねばならないものがある。着いてきてくれ」

ウェールズはルイズをつれ、城の跡の砦に案内した。

「皇太子様、見せたいものとは?なにか保管しておられるのですか?」

「君とは深い関係にある『人』だよ」

階段を登り、最終的に二人は砦の最上部にたどり着いた。外からは見えなかった砦の中心の吹き抜けがよく見える。

「あれだ」

「！」

ウェールズが指を差した方、砦の中心の吹き抜けを見たルイズは、驚きのあまり目を見開いた。

そこには巨人が横たわっていた。そう、ルイズを救うためにたった一人で、ウルトラマンとして怪獣からアルビオン軍を守るために命懸けで戦ったウルトラマンゼロだった。

一体どれほど苦しい戦いだったのか。ゼロの体は傷だらけだった。

「…」

ルイズの目から涙がこぼれた。

自分がゼロゼロとバカにされたことなんかよりもずっと体と心をすり減らしながら戦ってきた。

ガルベロスやペドレオン、ノスフェル、闇の巨人、ガッツ星人、キングジョー、ベキラ、テレスドン、ゼットン、そしてパンドンを相手に、ずっと正体を隠しながら…

証拠に、左手の甲にガンダールヴのルーンが見えにくくもちゃんと刻まれていた。

「かなりの傷とエネルギー不足で目覚めようとしないんだ。水のメイジが大がかりで傷を癒してもだ。アンから君と彼の関係を聞いたから、どうしとも会わせてやりたかったんだ」

ウェールズの言う通り、今の彼からはあまり生気が感じられない。言うなれば仮死状態だ。

「疲れはてて、ボロボロになって、休む暇なんかなくて…それでも人を信じてこの世界に留まって戦ってきた…
こいつはこの世界の人よりもこの世界が大好きな…」

涙で濡れた目を擦りながら、彼女は言った。

「大バカ犬よ…」と。

「…さあ、今日は疲れたはずだ。宿を手配したから休むといい」

「ありがとうございます…」

ルイズは名残惜しそうに横たわったままのゼロを見つめながらその場を後にした。

待っていよう。彼が目覚めるまで…

その夜、アルビオン大陸の山奥の湖。

「ふう、暗くなったし帰るかの」

釣りをしていた男がバケツと釣竿を持ってその場を後にしようとしたとき、突然湖から水しぶきが巻き起こった。

「わわ！なんじゃああ！？」

釣り人の男性は腰を抜かし、大慌ての様子で逃げ出した。

「キィィ！！」

湖から何かを擦り付けたような鳴き声が聞こえたのは、その場に駆けつけた少女ただ一人。

「この鳴き声…怪獣？」

夜の闇のように美しく長い髪を持つ少女、ハルナだった。前回でも知っての通り自分の想い人を探しにやって来たのだ。

鳴き声はしばらくすると、聞こえなくなった。

「このあたり、奴らがいるみたいね。早く平賀君を探さないと…」

ハルナは急いで湖から離れ、ニューカッスル城跡の砦へ向かう。

湖の上空には、怪しげな飛行物体が飛んでいた。内部には、二人組の女性がいた。

「ウルトラマンがおねんねしている今がチャンスね」

「この大陸を拠点に私たちの侵略計画を始め、いずれこの星の全区域を私たちのものにする。素敵なものね」

二人のうち一人はテーブルの真ん中にある、水で満たされたガラスケースの中にいる小さな怪物に目を向けた。

「しっかり働いてね。私たちのかわいい『エレキング』…」

翌日…

ルイズは起床しベッドから降りてきた。

「あのバカ犬、まだ目が覚めないのかしら」

髪をとかし、いつもの制服を着込む。

「あら？」

テーブルの上にいつの間にか一通の手紙が置いてある。文を確認すると、驚くべき言葉が目に飛び込んだ。

ルイズ、話がある。すぐ湖の方へ来てくれ

サイト

「サイト!?」

もう目を覚ましたのか!?盲目のように彼女は部屋を飛び出し、馬に乗って近くの湖まで走らせた。

その時の彼女はサイトに会いたい気持ちが強すぎるあまり、ウルトラマンゼロがいまだ砦の真ん中の吹き抜けで寝かされていることに気づかなかった。

「サイト、どこにいるの!?」

湖のほとりに着いたのはいいが、彼の姿が見当たらない。しかし、そこであるものに目が入った。六角形の小さな建物がある。近づいてみると、入り口が空いている。中にサイトがいるのだろうか?彼女はその中に足を踏み入れた。

彼女は謎の女たちもいた、ガラスケースの保管された部屋にたどり着いた。しかし、そこにサイトはいない。

「…何よ!ご主人様がわざわざ会いに来たのに!」

不平を漏らすルイズ。だがこうも考えられた。誰かのいたずらだろうか?と。

「ふふふ…」

どこからか薄ら笑いをする声が聞こえてきた。とっさにルイズは太ももにくくりつけていた杖を取り出した。

「何者!?名乗りなさい!」

ルイズが喚くと、二人組の美しい顔立ちの女性が彼女の前に現れた。
そして二人の真ん中に、あの女が現れる。

「始めまして虚無の担い手ルイズ・フランソワーズ様。シェフィールドといいます」

レコンキスタの指揮官だった女、シェフィールドだった。

「まさか、あんな紙切れ一枚でまんまとここに来るなんて、単純ね」

バカにするようにふふ、と笑うシェフィールド。事実とはいえルイズは恥ずかしく赤面する。

「早速あなた、またはあなたの使い魔君の力、私にみせていただきたいわ」

「シェフィールドと言ったわね？あんたの狙いはなんなの？私をおびき寄せて何を考えてるの？」

「狙い？そんなものないわ。私はただ、我が主の善き遊び相手になっているだけ…じゃあ後はよろしく、『ピット星人』」

シェフィールドは二人組の女性にいうと、一瞬にしてフッ…と消え去った。

「まちなさ…」

ルイズはシェフィールドを追いかけようとしたが、ピット星人と呼ばれた女性たちに銃を向けられ足を止めてしまう。

「下手な魔法より銃が速くてよ」

ルイズは彼女たちを見て言葉を失う。なぜなら、自分でも妬みそうな美しい顔だった二人の女性の姿が、人間とは思えない顔に変化していたのだ。

『変身怪人ピット星人』

「じゃあ、そろそろエレキングに出てもらおうかしら…」

ピット星人の一人が、ガラスケースのスイッチを押すと、その中に保管された小さな怪物は一瞬にして姿を消した。

「おゆき、エレキング」

その時、釣り人が最初に見たように湖から牛のような黒いブチ模様の着いた怪獣が現れた。
ウルトラセブンやウルトラマンタロウと戦った怪獣、『放電竜エレキング』。

「キィィ!!」

エレキングはのしのしと歩きながらニューカッスル城跡の砦の方へ歩き出した。

その事態は斥候部隊の兵士を通してすぐウェールズたちの方へ伝わった。

「皇太子大変です!!謎の飛行物体と怪獣が出現!」

「何!?すぐに応戦せよ!」

「はっ!!」

ウェールズ直属の兵士たちはすぐに大砲の用意と、メイジたちに呪文の詠唱を開始する。すると、ピット星人が人間の女性の声で、無線で地上の兵士たちに呼び掛けた。

『我々はピット星人。あるお方の命令でウルトラマンゼロの抹殺を命じられた』

「ウルトラマンゼロの抹殺!?」

突然声が聞こえたと思ったらウルトラマンの抹殺、兵士たちからざわめきの声があがる。

『ウルトラマンゼロを渡せば貴様らの命は助けてやる。もし逆らえば…』

『ちょ…放しなさいよ!』

ピット星人の声に続きルイズの声が聞こえてきた。

「ミス・ヴァリエール!?」

驚きの声をあげるウェールズ。なぜ彼女の声があの飛行物体の中から?

『3分時間をやる。だが断ったら真っ先にウルトラマンゼロを、次

にこの娘を抹殺させてもらう。無駄な抵抗は止めて大人しく我々に降伏するのだ』

「く…」

実際映像とかで見せられてないのでルイズが本当にピット星人の宇宙船にいるかどうかまではわからない。しかし、ハッタリである保証がない。ルイズの姿を今朝から確認してないのだ。結局攻撃できないことに代わりないのだ。

しかも、向こうからエレキングがこちらに迫ってきている。ウェールズたちは絶対絶命のピンチに陥っていた。

「放しなさいよ！こんなことが許されると思ってるの！？卑怯者！」

ピット星人の一人に両手を捕まれ動きを封じられたルイズ。魔法もこんな狭い場所では詠唱が間に合わず攻撃されるだけ。

「卑怯？バカね…この世は強い力を持つ者こそ頂点にたつ資格があるのよ」

「さて、まずはあのウルトラマンをこの太陽エネルギー砲で吹き飛ばしちゃいましょ」

もう一人にのピット星人はテーブルの真ん中にあるコントロール装

置のスイッチを押すと、宇宙船は砦の真上に移動し、宇宙船の真下の部位にレーザー光線の砲口が口を開いた。あの口から放つレーザーで真下でいまだ意識のないゼロを木っ端微塵にするつもりなのだ。ルイズは科学や機械に関して全く詳しくないが、次にピット星人たちのとる行動を読めていた。

「や、やめなさい！」

「ウルトラマンゼロ抹殺開始まで5…4…3…2…1…」

太陽エネルギー砲からレーザーを放つスイッチに、ピット星人の指があと一センチで届きそうになった時だった。

「させない！」

バシュン！

どこからか飛んできた波動がスイッチを押そうとしたピット星人の手に直撃、そのピット星人は後ろへ仰け反った。

「あんたは…！」

ルイズは夢でも見てるのかと目を疑った。彼女の記憶では死んだはずのハルナが目の前に立っているのだ。

「その人を放しなさい！」

「何すんのこの小娘！」

ハルナはとっさにテラに変身、ピット星人の一人を捕まえ、床に倒した。これでルイズは自由になれたがまだ安心できない。

太陽エネルギー砲のコントロール装置のスイッチやレバーを必死にいじりだす。

「このガキ！」

ピット星人は苛立ってテラを背後から殴り付けた。

「うっ！」

痛む肩を押さえ少し後ろにふらつくが、ルイズを抱き抱えると一瞬にして宇宙船から姿を消した。

「人質が！」

「案ずることはないわ。人質で手一杯のようね」

悔しがる相棒をなだめるように、もう一人のピット星人は言う。確かに人質は奪われたが、邪魔者さえいなければいつでもこの兵器を起動できる。

「発射！」

ついにピット星人によって太陽エネルギー光線の発射スイッチが押された。

一方、地上への脱出に成功したハルナとルイズ。

「あんた、どうして！？」

ルイズは彼女の顔を見て信じられないと言ってるような顔をする。

「はっ、そんなことよりあの賊を仕留めないと！」

ピット星人たちはいつでもゼロを抹殺するための兵器を使うことはできる。発動前に阻止しなくては、と思って走り出すが、ハルナがそれを止めた。

「行ったらダメです！危険よ！」

「放しなさいよ！あんた、サイトが殺されて涼しい顔が…」

できるのか！？と言おうとしたちょうどその時だった。ピット星人の宇宙船が太陽エネルギー光線をゼロが眠る砦に放った。

「やめろおおおおおおおおおおおお！！！！」

ウェールズも別の場所で懇願の雄叫びをあげるが、もう遅かった。

ドォオオオン！！！！

太陽エネルギー光線によって砦は大爆発をお越し、爆発がおさまった頃には、砦のあった場所はただの瓦礫の山になっていた。

「そんな…」

ルイズは力が抜けて膝をついた。ルイズだけではない。ウェールズもこの世界を守ってきた英雄を、逆に守れなかった自責の念で自らを苦しめ、ウェールズの配下たちの目からも希望の光が消えかけていた。

（間に合わなかった…？）

ハルナも自分の必死の努力が無駄になった、自分の大切な人を救えなかったことを悔やみそうになる。

誰もが諦めかけた。

だが…その時奇跡が起こった！！

がしゃっ！

「え？」

ルイズ、ハルナ、ウェールズ、そして彼の配下たちは今の音で顔を一斉にあげた。

瓦礫の山から、震えながら青い巨大な腕が一本、地面から生えてきた植物のように伸びて握り拳を作り出した。さらにもう一本飛び出し、力を振り絞るようにブルブルと震える。

そして…

「デュア！」

銀色に光るマスクが瓦礫の山から飛び出し、地上の人々をその黄色い目で見下ろした。

「ゼロが…」

「奇跡だ…」

誰もが奇跡としか思ってなかったかもしれない。

「やった…やりましたよルイズさん！！」

間に合った！実はさっきピット星人の宇宙船にあった太陽エネルギー光線のコントロール装置をハルナの変身したテラがいじった時、彼女はその装置のデータをハッキングであっという間に破壊し、新たに『エネルギー供給装置』のデータをインプットしたのだ。よって、破壊のためだけだった太陽エネルギー光線は、眠れる獅子を目覚めさせる目覚まし時計となったのである。

「サイト…」

ルイズから笑みがこぼれていた。

ついに優しき青の英雄、ウルトラマンゼロが復活した！

ウルトラマンゼロは立ち上がり、エレキングとピット星人の宇宙船を睨む。

ピット星人の宇宙船から今の太陽光線とは別のレーザーが放たれたが、ゼロの頑丈な体はびくともしなかった。お返しにゼロはピット星人の宇宙船に光線を放つ。

〈エメリウムスラッシュ！〉

「デュ！」

光線をモロに喰らったピット星人の宇宙船は爆発した。残るはエレキング。

「デュアアアア！」

ゼロは高く飛び上がり、エレキングに飛び蹴りを放った。

「デュア！」

続いてタックルで突き飛ばす。エレキングも負けずとばかりゼロに殴りかかるかゼロは難なく避けられ、パンチを連続で食らわされる。

「ダッデュア！」

再びジャブで攻撃するエレキングだが、またしても避けられた。さらにゼロは飛び蹴りを放ってエレキングを突き飛ばす。

「デュア！」

「キシャアア！」

立ち上がったエレキングはしっぽを鞭のように振るがゼロは軽くジ

ャンプして回、エレキングのしっぽを捕らえハンマーのように振り回し、遠くへ投げ飛ばした。

「デュアアアアア！」

「キシャアア！」

ゼロはさらにエレキングに攻撃を仕掛けようと走り込む。
が、ここで思わぬ反撃を受けた。

「キシャアア！」

エレキングは指先から二酸化炭素ガスを噴出し、ゼロの顔に浴びせた。

「グアア…グウ…オア…」

エレキングはさらに二発殴り、今度は火炎放射まで放ってきた。この能力はウルトラマンタロウが戦った個体と同じである。

「グウ…アア…」

エレキングはゼロを殴りつけ持ち上げると、そのまま地面へ投げ倒した。

「グワア！！」

「サイト！！頑張って！！」

ルイズは必死に勝利を祈ってゼロを励ます。しかし、そんな願いも

虚しくゼロはエレキングの猛攻を次々と受けてしまう。

「グアア！」

エレキングはさらにしっぽを鞭のように振り回し、ゼロの体を叩く。

「グオ！！」

まだまだエレキングの攻撃は終わらない。しっぽでゼロを縛り付け、何百万ボルトもの電撃を浴びせた。

「グワアアアア…！」

大ダメージを受けてしまい、ゼロは力なく膝をついた。

ピコンピコン…

ゼロのカラータイマーも点滅しはじめている。

「全軍、怪獣に攻撃！ウルトラマンゼロを援護せよ！」

危機を感じたウェールズは前兵士に向かって攻撃命令を下した。

「了解！大砲用意！」

大砲部隊の隊長は部下たちに大砲の用意を呼び掛け、他の者たちも呪文の詠唱を開始する。

ルイズにもその命令は耳に届いていた。今度こそ彼の力になりたい。助けたい。その思いは彼女に膨大な精神力を与えていく。

エルオー・スーヌ・フィン・ヤルンサクサ…

「発射！」

「ファイヤーボール！」

「行け、ゴーレム！」

「エア・カッター！」

大砲の弾、炎の弾丸、土のゴーレムの拳、鉄をも切り裂く風の刃がエレキングに直撃、エレキングは怯み出した。だが、まだもう一発残っている。

ウルトラマンゼロ＝サイトの主人、ルイズの魔法が。

「エクスプロージョン！」

とてつもない爆発が、エレキングに凄まじくダメージを与えた。

「キィィ！？」

今の一撃のせいか、しっぽの締め付けが緩んでいる。

今だ！

「デュワ！」

ゼロはエレキングが怯んでいる隙にエレキングのしっぽを振りほどいた。

「よし！」

「やった！」

ゼロのターンが始まった。チョップを放ち、膝蹴り、、パンチ、回し蹴りの順で繰り出す。

「ダッ！ハア！デュア！！ダアッ！」

「キシャアア！？」

そろそろ止めだ。

ゼロは少し距離を置いて両腕をクロスし、引いて、プロテクターに太陽エネルギーをため、両腕をＬ字型に組んで必殺光線を放った！

〈レジアゼロショット！〉

「デュア！！」

エレキングは光線が終わると同時に、力尽きて倒れた。

ウルトラマンゼロの、文句のつけようのない勝利だった。

ゼロは自分の恋人と主人、ハルナとルイズを暖かい目で見下ろした。

「…お帰りなさい」

ルイズは笑みを浮かべてゼロに言った。

一方、ゼロに倒されたエレキングの方には、ロマリアにいるはずのジュリオがいた。

「エレキング、君の力を貸してもらうよ」

誰にも悟られないうちに彼はネオバトルナイザーにエレキングを回収、その場から影のように立ち去っていった。

1　UFZ結成！

「バカバカバカ！」

再会早々ルイズはサイトの胸の中で彼の胸板をバンバン叩いていた。

「わりい、遅くなった」

慰めるようにサイトは彼女の頭を優しく撫でる。そして自分の恋人の方にも顔を向ける。

「ハルナ、来てくれてありがとう」

「うぅん、気にしないで」

私は当たり前のことをしただけだから。と彼女は言う。

「でも、そろそろまた帰らないとダメなんじゃないかな？」

ハルナがそう言った瞬間、ルイズはハッ！となった。また帰るのか！？やっと会えたのに。

「ちょっと、ふざけないでよ！こいつは私の使い魔なのよ！勝手な真似は…」

「ルイズさん」

怒鳴られても気負うことなく、ハルナはなぜサイトをこの星に留まらせようとしないのか、その理由を告げた。

「私たちはこの星の人間じゃないんです。事情も詳しくは知らないし、この体もこの星の環境に適してるわけじゃないから一生をこの星で過ごせないんです。だから無闇に別の星に留まることは、本当はダメなんです」

「でも！」

それでもルイズは納得できない。一言もの申そうとしたが、サイトがそこで口を開いた。

「なあハルナ、俺もこの星にしばらく留まりたいんだ」

「え？」

「この星も侵略者やダークサイドの連中に狙われてるんだ。だったら仕事や任務でなくても、積極的に守ることぐらい罪にはならないだろ」

「…」

サイトに言われ、しばらくハルナは思考した。確かに、自分も私的な理由でサイトのために働きたいと考えてるのは事実。断る理由などどこにあるのか。

「…わかった。私もこの星にしばらく一緒にいる。監視役にもなるだろうし」

「監視役とはなんかかたいな…」

「後でウルトラサインでゾフィーさんに知らせましょ。それならなんとか許可を降ろされると思うし、お義父さんたちもこの星を狙う人たちには目くじらたててたから」

「まあ確かに…ってお義父さん!?」

待てよ、ハルナは元々地球人。光の国に父親なんていないはず。だとしたら…

「もしかして…俺の親父のこと?」

「セブンさん以外に誰かいるの?お義父さんは言ってたよ。『うちのバカ息子をよろしく』って」

なぜかその時、爽やかにサムズアップしてるウルトラセブンの姿がリアルに浮かび上がったとサイトは後に語る。

(あのバカ親父…)

自分の父親に呆れて頭を抱えるサイト。どっちがバカなのやら…その時、背後から何やらどす黒いオーラが発せられていることに気がつく。

「へえ〜、私の知らない間にその女婚約者に…」

「ややちょっと待て!落ち着け!話せばわかるから…な?」

冷や汗を大量にかきながらサイトはルイズを落ち着かせようとしたが、肝心のルイズの怒りは収まらない。

「このスケベ犬うううううううううう！！！！」

どこからか取り出した鎖鎌を振り回しながらサイトを全速力で追いかけ始めた。

「もう嫌だこの無限ループううううううううううう！！！！！！」

自分のご主人の魔の手から必死に逃げるサイト。ちなみにウェールズもルイズたちを探しにやって来ていたのだが、嫉妬魔神と化したルイズに恐怖し「しばらく手を出さないでおこう…」と結論した。

その後、サイトの帰還を知らせるためウェールズを連れてトリステインに向かうことにした。移動は、一ヶ月前にアルビオンに放置したままだったウルトラホーク一号があったのであっという間にトリスタニアに到着。

城の王座の間でアンリエッタは暖かくサイトたちを出迎えてくれた。サイトが元気な姿で帰ってきたことに、彼女もまた涙ながらに感激していた。

「ああ！サイトさんご無事でしたのね！」

しかし、そこで彼女は言葉を失う。なぜなら、死んだと聞かされていたハルナが彼の後ろに着いてきてるではないか。

「ハルナさん、どうして！？あなたは確か…」

「姫様、実は…」

死人が歩いてるなんて思われたら心地よくないだろう。ハルナはなぜ生きてるのか事情を話した。

「そう、あなたもサイトさんと同じ人種に生まれ変わって…ともあれ、またこうして会えてよかったですわ」

「いえ、そんな…」

遠慮がちに彼女は言う。続いてサイトが口を開いた。

「すみません、ご心配をおかけしました」

「よいのですサイトさん、またこうして戻ってきてくださいましたから。あなたにはいくら感謝しても足りませんわ。でも…」

次にアンリエッタが浮かべた表情は重苦しいものだった。

「私はこの世界を守ってきた英雄を、そしてルイズを戦地に追いやり、結果的にあなたたちのお命を奪いそうになるところでした。このことは、償わなくてはなりません…」

後悔していた。ルイズのみならず、サイトをこの世界における戦争に巻き込んだのは、紛れもなく自分なのだと彼女は自分を、サイトが一時光の国に帰還した時から責め続けていた。彼女を慰めるようにウェールズは彼女を抱き締める。

「アン、気持ちはわかるよ。でもそう自分を責めては君が持たなく

なる。もし君に何かあったら、僕は耐えられないよ」

「ウェールズ様…ごめんなさい、せっかく帰って来てくだされたのに、こんなおも苦しくしてしまって…」

ようやく泣き止んだところでアンリエッタはサイトに一枚、賞状のような豪華な紙を差し出した。

「あなたはこの国を救った英雄です。本当なら領地を与えたいほどなのですが、この謁見自体秘密なのでこのくらいしか与えれませんが…」

「いえいえ！俺はお礼言われたくて戦ってきた訳じゃないから気にしないでください」

慌てた口調でサイトは言う。

「サイトさん、あなたにシュヴァリエの爵位を与えます。受け取ってくれますね？」

「シュヴァリエですって！？」

ルイズは顎が外れてしまいそうなほどビックリした。シュヴァリエとは貴族の地位の中では低い方だが、爵位を持たないものより十分な力を持つ。つまり…

「どういうこと？」

「バカねサイト。あんた貴族になるってことよ」

「え！？俺が貴族！？」

サイトもようやく理解したところでぎょっとなる。

「同時に、あなたに怪獣対策部隊の隊員として活躍していただきたいのです。表向きは私の近衛部隊、つまり私の騎士部隊ですが」

怪獣対策部隊…サイトはなんとなくそれに関しては想像がついた。自分が知る対怪獣防衛チーム『ＧＵＹＳ』や仮想世界で見てきた、違う世界の防衛チームのようなものと。

「本当なら、あなたにはこのまま故郷に帰してあげようかと考えています」

「陛下！」

ルイズは思わず抗議の声をあげようとしたが、彼女の辛そうな顔を見て思い止まった。自分が今、抗議しようとするのは、サイトを余計戦いの渦に巻き込むと言うことなのだとやっとわかったのだ。このまま故郷に帰し、そこで幸せを掴ませるという選択肢を与えようとしているのである。

サイトをこんな人間同士の世界規模の争いがほとんど終わってない世界に無理やり連れてきたのは自分だ。自分がこの星に留まれ、なんて言う資格などないのだ。それでもサイトにいてほしいという願望が彼女の心を揺るがせる。

「サイトさん、シュヴァリエのことも強制はしません。このままハルナさんと故郷にお帰りになられるか、または留まってこの世界を守るために戦い続けるか…」

これ以上よそ者の彼にこんなことを頼んではならないのはアンリエッタもウェールズもわかっている。しかし今のハルケギニアはただでさえ文明が地球に追い付ききれてない上、怪獣や異星人の知識に乏しいのは致命的だ。
それでも拒んでも構わない。国を守る柱としてダメ元で頼んでみたのだ。

「…受けとります。いえ、受け取らせてください！」

しばしの沈黙の後、サイトは意を決して言った。まさか本当に！？と思ってるかのようにアンリエッタは思わず驚愕の表情を露にする。

「俺は最初にこの星に来た時は訳がわからなかった、それは事実です。でもこの星も他の侵略者や怪獣に狙われてる。宇宙の秩序を守る者としては、見て見ぬふりなんてできないんです。何より俺は、この世界でできた仲間たちが身勝手な侵略で傷つき死んでいくのを見たくない！放っておきたくもない！だからやらせてください！」

「サイトさん、あなたという人は…」
優しすぎます。感激のあまり彼女はまた涙してしまう。

「ならば、受け取ってくださいますのね」

「はい」

「ならば…姿勢を低めて」

アンリエッタに言われた通りサイトが片膝を着いた状態で姿勢を低めると、アンリエッタは自分の杖を彼の肩に軽く乗せた。

「我、トリステイン女王アンリエッタはこの者に騎士なる資格を与えんとする。忠誠を誓いますか？」

「誓います」

誓いの言葉を聞き入れ、彼女は杖を戻した。

「これであなたは私の騎士兼対怪獣対策部隊の隊員となりました。サイト・シュヴァリエ・ド・ヒラガ殿」

アンリエッタからシュヴァリエの任命書と上等なマントを、サイトはしっかり受け取った。

「サイト殿、僕の大切な従妹の頼みを聞き入れてくれて、感謝する」

ウェールズも感謝の気持ちのあまりサイトに頭を下げた。

「あ、頭をあげてくださいよ！あなたは王子なんですし…」

サイトはアンリエッタの時のように、慌てて頭を上げるように言う。

「では、対怪獣対策部隊についてお話しておきますね。この部隊は表向きは私の近衛兵の部隊とします。他の隊員に関しては、サイトさんが信頼なさっている学院の男子生徒を中心に構成いたします。基地に関しては学院からほど近い場所に設置いたしてますので、有効活用してください」

「ありがとうございます、姫様」

「いえ、お気になさらずに。次にハルナさん」

「はっ、はい！」

自分まで呼ばれるとは思わなかったハルナは思わずビックリする。

「申し上げにくいんですが、あなたには公にされてるほどの活躍がありませんから爵位は与えられません。ですが、サイトさんと共にこの世界で生きる資格代わりとなるものを」

アンリエッタは新たに、サイトのシュヴァリエの任命書に似て否なる別の書をハルナに手渡した。

「あの、私この世界の字はまだ読めなくて…」

「なら俺が読んでやるよ」

戸惑いを隠せないハルナをフォローするように、ようやくサイトの愛剣デルフリンガーが鞘から顔を出した。

「ボロ剣、あんた生きてたの！？」

そう言えば忘れてた…とルイズは思っていた。

「ひでえな娘っ子、俺は肌身離さずの状態で相棒といたんだから、一緒にいて当然だ。とにかく読んでやるよ」

ハルナの受け取った書に目（？）を通し、デルフはそれを読み上げた。

そなたを以下の者の専属メイドに任命する

サイト・シュヴァリエ・ド・ヒラガ

「つまり、お前さんは相棒のメイドになったってことだ」

「「「ええええ!?」」」

サイト・ハルナ・ルイズの三人が同時に声を揃えた。

待てよ、ってことは…

『お帰りなさいませ、ご主人様♪お食事のご用意ができております わ』

可愛らしくメイドの格好で自分っ接するハルナを想像して、思わずサイトは顔が緩み出していた。ハルナに至っては恥ずかしそうにもじもじしている。無論嫉妬深いルイズはキーッ!とお怒りの表情だった。

「あ!そう言えば王子様」

ルイズの殺意の視線から逃げるように、サイトはウェールズに話しかけた。

「おや、なんだい?」

「あいつを、シュウヘイを部隊に入れたいんですが、構いませんか?」

「何を言ってるんだい？入るも何も、彼はもう入隊してるんだよ。僕からもシュヴァリエの位を与えてね。彼は恩人だから、本当ならアルビオンの主にしておきたいくらいだ」

「いつの間に…」

まさかシュウヘイがもう部隊に入ってるとは思わなかった。

「子供たちのことも、トリスタニアに孤児院を創設することで保護、彼とティファニアを支えてたミス・サウスゴータに院長を勤めさせる条件で彼は承諾したんだ」

なるほど、これならシュウヘイたちが保護していた子供たちやフーケもといマチルダの生活も安心だ。

「さて、堅苦しい話はここまでとしましょう。サイトさん、まずは対怪獣対策部隊の基地に立ち寄ってくださいな」

「わかりました」

アンリエッタの言う、対怪獣対策部隊の基地は学院の校庭に、使用人寮と同じ形で建てられていた。

「ここなのかしら？」

「とりあえず、入ってみるか」

サイトが扉を開けた瞬間、パンパンとクラッカーの破裂する音が響き、紙吹雪などが彼の顔に降りかかる。

「サイト・シュヴァリエ・ド・ヒラガ、ばんざあああああい！！！！」

「なっ、なんだあ！？」

いきなり何が起こったか理解できないサイト。そこで中にいたギーシュが話しかけてきた。

「やあサイト！君なら来ると信じてたぞ！」

「ギーシュ、これなんだよ？」

「何って、君の生還とシュヴァリエ授与をこうして祝ってるじゃないか！同じ仲間としてね。さあ、ルイズと君も入りたまえ」

ギーシュに連れられるがまま、三人は基地に招き入れられた。

基地の中には、奥に黒板、二階に続く階段、部屋の真ん中は作戦を取り決めるための会議などに使われそうな大型のテーブルがある。椅子は１０人分はあり、その椅子には見覚えのないメガネの男子生徒と、太っちょの…確かマリコルヌという生徒がいる。同時に、シュウヘイと…なぜかテファやモンモランシーもいた。

「紹介しよう。メガネの彼はレイナール。実務や書記の担当だ。もう一人、マリコルヌは風のメイジだ」

「やあ、よろしくサイト」

「ああ、こちらこそ」

レイナールとマリコルヌの二人と、サイトは厚く握手した。

「ところで、なんでボンボンまでいるんだ？」

不思議そうな眼差しでサイトはモンモランシーを見る。

「私はモンモン…じゃなかったモンモランシーって言ってるでしょ！」

「今、明らかにモンモンって言ってたな？」

意外に悪く思ってなかったみたいだね～、とサイトは意地の悪い笑みを浮かべる。

「そ…そんなわけないじゃない！モンモンだなんて、みっともない」

「まあまあ、彼女がなぜここにいるか僕が話すよ」

モンモランシーをなだめ、ギーシュは説明した。

サイトが一時この世界を去る前に、この学院がメンヌヴィルというレコンキスタの傭兵に狙われ、コルベールがその戦いで戦死した。

それを聞いてサイトは青くなった。そして沈まざるを得なかった。

「そんなことが…」

話を聞くところ、コルベールは人の心を取り戻したことになる。せっかく普通の人生を歩めるはずだったのに…

「私はコルベール先生のけがを治せず死なせてしまったから、ここで修行して立派な水のメイジになるって決めたのよ」

モンモランシーもコルベールの件で悔やんだ一人。それがこの部隊にいる理由なのだろう。

そこでシュウヘイが固く閉ざしていた口を開いた。

「平賀、コルベールの件も俺の力不足が原因だ。お前が悩んだところで何も始まらない」

「…ああ、わかってる。そのために、俺たちがなんとかしないとな！」

でももう一つ気になることがある。ハーフエルフであるテファがどうしてここにいるかだ。しかも学院の制服まで着ている。

「私、シュウと離れるのが嫌だったから…でも子供たちはマチルダ姉さんがなんとかするからって、シュウがきっと守ってくれるから行ってこいって言われたから…」

なるほど、シュウヘイがこの部隊に入るに置いて、その間にルイズと同様虚無の力を持つテファを目の届く場所で最も安全なシュウヘイの元に置く。そのために学院の新入生としてここに来ていたのだ。

「それに私もけがの手当てや薬の扱いには、少しは役に立てるかも

って、決心して来たの」

「そっか、なら無理をしないよう頑張って」

サイトが手を伸ばすと、彼女も快く笑顔で彼の手を握り返した。

「あの…ちょっといいですか？」

ハルナが何か言いたそうに手をあげた。

「このハルケギニアには通信機器がないでしょ？だとしたら、いくらホークで遠方に行けても現地の情報がわからなかったら…」

「あ！」

サイトはそこで気づいたように間抜けな声をあげた。そうだ、現地の情報を知ることはアンリエッタたちを通して知ることはできるだろうが、即座に彼女と連絡さえとれないのは不味い。それに、とっさの対応が必要なときもあるので連絡網は必要不可欠だ。しかし、このハルケギニアで通信機器による通信ができるのは、キリヤマ隊長の形見のビデオシーバーを持つサイトと元々故郷の地球防衛軍の隊員だからパルスブレイカーを持つシュウヘイのみ。

それを知ってギーシュたちもこれは悩まされることになった。

「困ったな、ふくろう便でも時間はかなりかかるぞ」

「何かできないかな？」

サイトがハルナに尋ねると、彼女はどこからか大きなケースを出し、

テーブルに乗せた。そのケースの中には、なんとサイトが持っているビデオシーバーとよく似た通信機器と、ウルトラガンに似た銃が各１０個ほど、そしてノートパソコンが一つあったのだ。

「いつの間にこんなものを準備してたんだ!?」

「どうせ平賀君のことだからこの世界に残るんでしょ?だから、この世界にある怪獣問題に少しでも対応できるように、あらかじめ用意していたの。怪獣の発する振動やエネルギーを探知する人工衛星も、実はハルケギニアの大気圏外に設置したの。女王様たちにも連絡できるように一個ずつ渡しておいたから」

なんだが話が、主にハルケギニアのメンバーから見えてこないがともあれ、ルイズはハルナがよりただ者ではないことを悟った。

「すごいじゃないかハルナ!こんな準備をたった一人で!?」

「私戦闘はまだできないから、せめてこれだけでもって。余計、だったかな?」

「そんなことない。助かるよ!」

サイトは本当に感謝していた。が、これらが必要ということは、これから戦いに巻き込まれるという証しでもある。しかし、それを決めた以上退くわけにはいかない。

「使い方、難しくないのかな?」

ビデオシーバーの一個を興味深そうに見ながらも、使い方が難しいのではないのかとレイナールは言った。無論ギーシュやマリコルヌもだ。

「大丈夫、使い方は簡単ですよ」

「それはよかった。ところでそろそろ決めたいことがあるのだが…」

決めたいこと？一同はギーシュを一斉に見る。

「サイト、君への配慮を考え君はこの部隊の副隊長ということになった。いきなり隊長では、妬みのあまり君を狙う輩が貴族の内部からでるかもしれないからね。ちなみに僕が隊長だが…」

「なんだよ？」

隊長が誰なのかという問題はともかく、一体なんなのだろう？サイトは首を傾げる。

「この部隊の名前さ」

そう言えば、確かこの部隊の名前はまだ聞いてなかった。

「決めてないのか？」

「ふむ、僕は一つ候補があるのだが…」

彼があげた名前候補、それは『水精霊騎士隊（オンディーヌ）』というものだ。しかし、それはその昔、トリステインで名を馳せた部隊の名前をそのままとったものなので、いくら女王のアンリエッタが認めたものでも、まだ学生の彼らが名乗るにはいかがなものでは？とレイナールの適切な判断で保留となった。

「なあサイト、君は何かいい名前ないかな」

「そうだな…」

ＧＵＹＳとかＧＵＴＳはダメだ。単純なパクリでしかない。しばらくサイトは何がいいか考え込んだ。

「あのさ、シュウヘイは何かいい名前ないのか？」

シュウヘイに尋ねてみたが、「ない」と即答された。ないのか…ちょっと期待していたサイトは残念がってたが、やはり自分が考えるしかない。

しかし、やっと一つ思い付いた。

「決めた！部隊名は『ＵＦＺ』！」

「ゆー…え？」

何語？かとルイズやギーシュらハルケギニア組は一斉に首を傾げた。

「今のは略称で正式には、『ウルティメイトフォースゼロ』！ウルトラマンにも引けをとらない、そんな部隊を目指して人を守る部隊だ。悪くない…かな？」

ちょっとかっこつけすぎたような名前だからちょっと頬を赤く染めるサイト。

「俺は構わない。いいんじゃないか？『ＵＦＺ』で」

「うーむ…わかった」

シュウヘイに言われ、しばらく思案した結果、ギーシュはその名前を採用することにした。

「よし、今日より我々は『ＵＦＺ』だ！みんな、心して任務にかかるぞ！ウルトラマンにも遅れをとるなあああ！！！！」

「「おおおお！！」」

ギーシュに賛同するように、レイナールとマリコルヌが右拳を高く掲げた。

「ギーシュにしては、なかなかね」

「はは…だな」

サイトは改めて知った。元々住んでいた地球にあったＧＵＹＳや、仮想世界で見てきた防衛軍のように、いつまでもウルトラマンに頼るわけにはいかない。彼らもまた、ウルトラマンと肩を並べて戦い、この大地を守りたいのだと。

異世界ハルケギニアにて初の防衛チーム、『ＵＦＺ』（ウルティメイトフォースゼロ）がここに誕生した。

2　学園パニック

さて、ＵＦＺが結成されて約数日…

「今日も異常なし、か」

基地で光の国から持ってきたノートパソコンの画面を見るハルナ。
画面にはハルケギニアやその周辺の大陸の地図が表示されている。
これで怪獣や、はては何か異常な物体の反応がないか確認しているのだ。
余談だが、今はサイトの専属メイドということでメイド服を着込んでいる。

「暇だけど、こういう平和が大事なことか…」

とその時、誰かが扉をノックしてきた。誰だろうと扉を開けると、自分と同じ黒髪のメイドが顔を出してきた。確か、シエスタという名前だったはず。

「あの…ここは関係者以外立ち入り禁止ですけど」

「なんでです…」

なんだかシエスタから黒いオーラがほとばしっている。

「なんであなたがサイトさん専属メイドになれたんですかあああ！！」

「…へ」

いきなり押し掛けてなんだと思ったら…どうもシエスタはサイトのメイドになるのが自分ではなくハルナであることに納得しきれてないようだ。

「いいですかハルナさん！いくらあなたがサイトさんの彼女でも、サイトさんは渡しませんからね！」

事実上の宣戦布告。シエスタはふん！と言うと、きせるを返して仕事に戻っていった。

「ははは…」

知らず知らずの内に他者の怒りを買っていたようだが、どうするべきかわからず苦笑いするしかなかった。

「サイト、君はどう思う？」

休み時間、この合間でサイトたちＵＦＺは仲間たちと話し合いをする。

「どう思うってなんのことだよギーシュ」

「ティファニアだよ。彼女のあのけしからん胸が本物かどうか…」

鼻の下が延びてるぞ…とシュウヘイは細目でギーシュを見る。
テファは編入して早々その美貌と胸で爆発的に男子生徒からの人気が高まっていた。無論本人から見れば迷惑でしかないのだが、ファンの勢いとは止まらないものだ。

「各なる上は僕がこの手で！」

「グラモン」

歯をキラリと輝かせて気合いを入れるギーシュに、シュウヘイはブラストショットを向ける。

「その決意は、死の宣告を受け止めるつもりと解釈するが？」

「…なんでもないです」

はあ…とふしだらな野望が叶わないことを思い知らされ、ギーシュはため息をつく。まあどちらにせよモンモランシーに殺されてしまうが。

「ちょ、やめてください！」

テファの嫌がる声を聞いてシュウヘイ、そしてサイトたちも顔をあげる。階段の踊り場で男子生徒に囲まれてるテファが、男子生徒たちがプレゼント用に持ってきた帽子と取り替えようと無理やり、彼女がハーフエルフであることを隠すために被っていた帽子を剥ぎ取ろうとしている。

「ったく…」

シュウヘイはすぐ階段をかけ上がり、テファの手を引っ張って男子生徒たちの輪から抜け出した。

「おい平民！僕は今はティファニア嬢と話してたんだぞ！」

そんな彼らの文句を尻目に、シュウヘイはテファを引っ張って廊下を走り抜けていった。ちょうどその時、ツインテールの少女とテファが軽くぶつかったが、二人は気づかなかった。

「いたっ！」

「姫殿下、大丈夫ですか！？」

「全く無礼な…」

彼女を取り巻く三人の女子生徒は二人の背中を睨み付けていた。

実を言うとシュウヘイは使用人の女性から貴族の女子生徒、ティファニアはさっきも見た通り男子生徒からの人気が高まっていた。しかし、異性からの評価は高い分、同じ性の集団からあまり高評価を受けてなかった。

たった今テファとぶつかった少女ベアトリスも、テファが編入する前まで、学年で一番人気の女子生徒だったがテファが来て一変、ベアトリスのファンである男子生徒たちはあっさりとテファの方へ目を向けてしまったのである。よってベアトリスもテファのことを嫌っていた。

シュウヘイに関しては、使用人の女性たちだけでなく女子生徒たちの中でひそかに決まっていた学院にいるかっこいい男ランキングで今トップになっていた。ちなみに二位はサイトで、ギーシュの場合

ランクが下がっているとのこと…

「ちょっと一言言うべきですわ、殿下」

「そうね…」

取り巻きの女子に促され、ベアトリスの独立国の姫としてのプライドが表に出ようとしていた。

「ちょっと男子、話があるわ」

今日の授業が終わり、日が沈みかけた頃のこと。

「君に話がある」

授業がある頃シュウヘイは事件などに備え基地で待機しており、授業が終わる頃は彼女を迎えに教室へ向かう習慣をつけていた。もちろん日比の訓練は欠かさない。

しかし、なぜか多くの男子生徒たちに阻まれていた。なぜここに男子生徒たちが大勢いるか？

実はさっき彼らはベアトリスから『あの女と一緒にいる男を人質にとれ』と言われたのだ。シュウヘイの命を手のひらに乗せることができれば、大嫌いなティファニアを学院から苦しませながら追い出せると思っていたのだ。ティファニアがこの学院に来なくなるのは男子生徒から都合が悪く見えそうだが、追い出され生徒じゃなくなった彼女を自分の実家に招き入れてしまえばいい、と考えてたので、

結局彼らから見れば大して問題ないのである。

「そこを通してくれないか？」

シュウヘイが彼らにそう頼むが、男子生徒たちは道を開けようとしない。

「君は平民の癖に貴族への口の聞き方がなってないんだね。このド・ロレーヌにもそんな態度をとるとは」

「…話は終わりか？」

ロレーヌの威張り具合の強い態度にうんざりしたシュウヘイはなんの気負いもなく言う。ロレーヌは驚くように目を開いた。

「用が済んだなら立ち去れ。お前たちに関わり、無駄な時間を過ごす気はない」

「…言わせておけば、成り上がりの癖に」

「女子にチヤホヤされていい気になりやがって」

男子生徒たちは冷ややかな言葉を口々に言う。

「話は終わってないぞ」

「なんだ？手短にしてくれ」

面倒だな…と思いながらもシュウヘイはロレーヌの言葉に耳を傾ける。

「ティファニア嬢から離れてくれ」

「…なぜだ?」

言ってる意味がさっぱりわからない。

「君のような汚れた臭いのついた平民が彼女の魅力を落とし、そして不幸にしている。それに比べ僕ら貴族は彼女を常に気遣える紳士だ。彼女は、本当は僕らと共に貴族の淑女としてあるべきであることも知ってる。君のようなゴミ虫がくっついていいわけないじゃないか」

確かに自分は臭うかもしれない。この手は人やビーストの血で汚れきっている。臭いだって染みついてるような感じもある。テファを不幸にしていることも自分の口からは否定できない。彼女は誰にでも慈しむことを忘れず接するから、自分が傷つくことにも傷心してきたのは本当のことと言えるのだ。

だが…それでも彼女は自分を信じてくれた。本当は優しく、強い人だと…そして怪獣たちとの戦いで必ず帰ってくると信じて待っていた。

だからこう言った。

「お前たちは勘違いしてる」

「なんだと?」

「あいつの幸せは…あいつにしか選べない。お前たちの独りよがりな妄想と一緒にするな」

ロレーヌたち男子生徒たちはいい加減シュウヘイのそのスカしたと見てとれる態度にイライラが募り、遂に堪忍袋の尾が切れた。

「君に決闘を申し込む！」

拒否されるのもままならないまま、彼はサイトがギーシュと初めて決闘した場所、『ヴェストリの広場』まで連れてこられた。

（敵は全員で…）

目の前で立っている男子生徒たちを数えてみる。見たところ１０人のようで、他の男子生徒たちは嫌な笑みを浮かべて逃げ道を塞ぐように囲んでいる。

「さあ、下手したら死ぬかもしれない。今のうちに『ごめんなさい。もう麗しきティファニア嬢には近づきません貴族様』と言えば…」

「おいロレーヌ」

ロレーヌは自分だけたんたんとしゃべってたので気づかなかったが、またしてもシュウヘイを嫌うものを見た。決闘相手のシュウヘイは呑気に武器の手入れと磨きをしているではないか。わざと隙だらけにしてるようにも見え、余計にロレーヌたちを挑発することになった。

「ファイヤーボール！」

「ウィンドブレイク！」

一方その頃…

「異常は見つかってないか?」

サイトはほとんど暇な時間は基地にいるようになったが、同時に寂しさからかルイズも一緒に着いてくるようになった。

「まだ何も。でもこれが一番だって思うわ」

私たちの力が必要なくなった時こそ、本当の平和なのだから。ハルナのその言葉に、サイトも頷く。

「そうだな。本当の平和な世界で、戦う力なんて必要ないもんな」

「あんたたちはそれでいいの?」

ルイズは不思議そうに尋ねる。戦うことがウルトラマンの使命なら、もし戦いが終わったら彼らは一体どうするつもりなのだろう。それが知りたかった。

「いいんだよ。戦いが終わったら復興作業とか、平和の尊さを説くために星から星を回っていけばいい」

「そう…」

それなら…と思った時、どこからか何かが暴発する音が聞こえてきた。

「なんの音？」

「またルイズが失敗したのか？」

「失礼ね！私はここにいるじゃない！」

わざとらしく冗談を言うサイトをルイズは睨み付ける。

「とにかく、行ってみましょう！」

何かがあったかもしれない。ハルナに続き、サイトとルイズも急いで現場に駆けつけた。

そこはある意味惨状だったかもしれない。１０人ほどの男子生徒が怪我をしてその場に転がっていたのだ。

「ぐああ…」

「ちくしょ…平民の癖に」

観戦していた男子生徒や、途中で見に来た女子生徒たちは驚きのあまり声が出しきれてなかった。

たった一人、銃が持ち手代わりの光る剣一本だけを持った平民一人に１０人係りのメイジがあっさりと敗れ去っているのだ。勝者であるシュウヘイは、痛みにもがき苦しむロレーヌの胸ぐらを掴み、持ち上げる。

「ひっ！？」

「…二度と下らん真似をするな」

そう言ってロレーヌを乱暴に放した。恐れをしたロレーヌは一人、悲鳴をあげながらどこかへ逃げていった。

「ちっ、使えない男子ね」

決闘を見ていたベアトリスは誰にも気づかれないように舌打ちした。

「なんだ、ギーシュの時みたいなもんか…」

直後にシュウヘイから事情を聞いたサイトは呆れ返る。女絡みの下らない理由で決闘とはどれだけ決闘好きなのだ。

「ロレーヌの奴、また情けないところ見せつけたわね」

やれやれと言ってるようにルイズはため息をつく。

「知ってるのか？」

シュウヘイが尋ねると、ルイズは説明した。

ロレーヌは以前風のメイジとしてルイズたちの現三年生たちから評価を受けていた。しかし、自分より成績優秀なタバサが後に留学してから自分より優れた彼女を妬み、タバサに決闘を申し込んだ結果情けなく負けてしまったとのこと。

あんな小物相手に熱くなりすぎたか？とシュウヘイは頭を抱えた。

「シュウ！」

いつまでも迎えに来なくて心配になったのか、テファがシュウヘイの元に駆け寄ってきた。

「何があったの？なんだか男の子たちに連れていかれたって…きゃ！」

突然彼女は、ロレーヌに荷担していた巨漢の男子生徒に捕まってしまう。その生徒、スティックスはテファをしっかり捕まえ杖を突き付けながらシュウヘイに言う。男子生徒たちの本来の目的はシュウヘイを追い出してテファを手にすることにあったのだから、この手を使うのもやむを得ないとの考えらしい。しかし何にせよ最低としか言えない。

「今すぐ武器を捨ててティファニア嬢に永遠に近づかないと言え！でなければ…」

（ふふ…）

ベアトリスもスティックスのまさかの行動に驚きはしたが、ある意味自分にも都合のいい展開となっている。

「…」

貴族はこんなにも汚い真似をするのか？こんな奴等のために俺は体を張ったのか？一種の絶望感をシュウヘイは感じていた。

「お前…今すぐテファから離れろ！貴族以前に男として最低だ！」

サイトはスティックスを睨んで叫ぶ。

「そうよスティックス！あんたキュルケにフラれたからって、そんな真似してまで女の子手玉にすることは許されないわよ！」

ルイズが言った通り、実はスティックスは以前キュルケと付き合っていたのだが、サイトとギーシュの決闘を見て、サイトに彼女が乗り換えた時に飽きられてしまったのだ。そのショックもこの行動を起こす要因となったかもしれない。が、結局最低な手口だ。

「うるさい！」

もう後戻りはできない。スティックスはどうあろうとテファを手に入れるつもりなのだ。

「さて、ティファニア嬢。そのような帽子なんかさっさと捨ててくれ。帽子をとったあなたの顔を見たい」

「まっ待て！」

シュウヘイはスティックスの次にとる行動がわかっていた。彼女が被ってる帽子を取るつもりなのだ。そうなったら彼女がハーフエルフであることがバレてしまう。エルフは人間たちから化け物扱いされてるのだ。

「や、止めて！」

乱暴に帽子を掴みとろうとするスティックスの手を、テファは必死に振りほどくが、帽子は奪われてしまった。同時に、エルフの証である先の尖って垂れた耳が露になってしまった。

「え、エルフ！？」

スティックスはその耳を見た瞬間彼女を畏怖するめで見ながら突き放した。もちろん、野次の形で集まった周りの生徒たちにも伝わってしまう。

「エルフだ！砂漠の悪魔だあああ！」

「いやあああ！！」

完全に化け物扱いされてしまったテファ。しかし彼女はバレたからには仕方ないと、逃げ惑う生徒たちに呼び掛けた。

「落ち着いてください！確かにエルフはあなた方人間と長い間争ってきました。でも私の両親は愛し合い、人間とエルフの血をくれたんです！皆さんと争うくらいなら仲良くなりたいんです！」

「ふざけないで混じり物の癖に！」

彼女の言葉を、ベアトリスは一蹴した。エルフなんかに自分の人気を奪われてしまったことが屈辱だった。何がなんでも懲らしめてやる。

「では聞くけど、あなたの信じる神はエルフたちの信じる方？それとも始祖ブリミル？
もし私たちと同じ神を信じるなら、この学院にいること認めてあげる」

「…それがみんなと仲良くなる条件なら」

「言ったわね。来なさい！」

彼女が指をパチンと鳴らすと、空から何十体もの竜が飛来、そして背中から竜騎士たちが何人も降りてきたのだ。

「今から異端審問を始めるわ」

異端審問、それを聞かされて回りが「マジかよ…」「不味くない？」とざわつき始めた。

「異端審問ってそんなにヤバイんですか？」

ハルナがルイズに尋ねると、彼女は頷いた。

「始祖ブリミルに逆らう異教徒をいぶり出すための裁判みたいなものよ。例えば何度にも熱を加えた釜のお湯に浸からせ、それで生き残れたら信者として認められるけど、死んだ場合は異教徒と見なされる。ヤバイも何もヤバすぎることなのよ」

「何だよそんな無茶苦茶な！」

サイトはこれには納得できない。思想の自由が大抵の国で認められてる地球人から見れば、自由を奪われた話でしかないのだ。

「止めないとダメじゃないか！」

ベアトリスに断固抗議しようとしたが、ルイズがそれを止めた。

「ダメよ！」

「なんで！？あの二人を見殺しにしろってのか！？」

「そうじゃないよサイト！」

駆けつけたギーシュとマリコルヌも反対の意を見せる。

「君まで歯向かったら命はないぞ。あのベアトリス殿はトリステインから独立したクルデンホルフ大公国の王女でもあるんだ！金をトリステイン貴族にも貸してるから逆らえきれない人ばかりだ。それにあの竜騎士は『空中装甲騎士団』！ハルケギニア最強の部隊と言われてる！」

たかが王女の留学で護衛があんなに必要なのか？とサイトは疑問に思ったが、続いてマリコルヌも忠告する。

「それに異端審問の邪魔をしたら、下手をしたら君は牢屋行きになるよ！」

「だけど…」

悔しそうにサイトは歯を食い縛った。

「『あれ』は用意したかしら？」

「はっ！仰せのままに」

ベアトリスに問われ、竜騎士の一人が敬礼しながら返事する。

ベアトリスが竜騎士に用意させた『あれ』とは、ルイズが説明した通りの釜だった。中にはグツグツと熱くなってるお湯が溜まっている。入ればさぞかし石川五衛門気分になる…なんて悠長なことは本気で言えない。

「あの釜に入って生き残れたら、ブリミル教信者として認めてあげるわ。嫌なら今すぐ田舎に帰りなさい」

どうせ怖がって帰ると思っていたベアトリスだが、テファの答えは全く逆のものだった。

「私はずっと外の世界を見たいって思ってた。マチルダ姉さんやシュウに出会って、サイトやルイズと会っていろんなものを見てきた。これからもそれを見たい。だから帰らない！」

「ぐぐっ…私が帰れと言ったら帰るの！さっさと釜に入るか帰りなさいよ」

大した利益もないのに自分の我が儘を無理やり押し通すベアトリスの姿に、テファは哀れむような表情になった。

「可哀想な人。うぅん、まだ子供なのね」

ムカッ…

今のでベアトリスは完全に怒った。

「二人とも釜に入りなさい！」

グツグツ…釜は冷める気配なんかまるで見せてない。

「…」

釜を見てテファはゴクッと唾を飲み込んだ。その目には強い意志が秘められていた。

（まさか本気で入るの？エルフの癖に…）

ベアトリスはあり得ないと言ってるような顔をしている。証拠にテファは釜の方へ歩き出してるではないか。だが、シュウヘイが彼女の肩をつかんで阻む。

「先に俺が入る」

「でも！」

「いいから。どのみち二人とも入るだろうし」

シュウヘイは釜にゆっくり歩き出していく。まさかエルフである彼女を庇うようなことをするとは…と生徒たちは密かに驚いていた。やがれ彼は釜の前に着いた。やはり入るのか？と思った次の瞬間！

「オリャア！」

ズバッ！バシャアアアアアア…

なんとシュウヘイはディバイドセイバーを出したかと思えば釜を縦から真っ二つに叩き斬ってしまったではないか。

「「「「ええええええええええええええええええええええええ！！！！？」」」」

誰もが流れからして彼が釜に入るのかと思ったが、彼の思いがけない行動に誰もが顎を外しかけ、眼球が飛び抜けそうになった。

「信者でもあんな釜に入って生きてられるわけないだろう」

確かにそれは正論ですが…

「ちっ、あの者は異教徒よ！エルフもろとも捕まえなさい！」

竜騎士たちはベアトリスの命令でシュウヘイとテファに襲い掛かる。シュウヘイは新たにエボルトラスターを持ち手にシュトロームソードを左手に持ち、二刀流の構えで振るった。

「せい！はっ！とうっ！」

しかし、数は半端ではない上、ギーシュが恐れてる通り一人一人がしぶとく強い。それでも彼は戦う。大切な人を、かつての恋人のように死なせたくないという思いがあるのだから。

「覇風撃！」

「なっ！？エアカッターだと！？」

竜騎士の一人は、風の魔法と酷似した風の刃に目を丸くするが、それが油断となり彼の鎧を砕く。

「炎竜昇！」

続いて炎の剣で切り上げ攻撃。炎に抱かれながら喰らった竜騎士のうち数人ほどが打ち上げられた。

しかし、数が多くてキリがない。一気に決める。

「滅閃光！」

拳で地面を殴った瞬間、黒き真空波動がシュウヘイの周りから放出され、迫り来る竜騎士たちを吹き飛ばした。

しかし、竜騎士の一人が隙をついてテファに剣を振り上げてきた。無論彼女に対抗手段はない。しかし、急いで駆けつけたシュウヘイがその竜騎士を横から突き飛ばした。が、次に来た別の竜騎士の迫る剣を避けきれず…

「ぐあぁっ！！」

「！」

ショックな光景に思わずテファは口を塞いだ。彼は右目の瞼の上を切られてしまったのだ。視界が片方閉じられてしまい、よりピンチに陥ってしまう。

「っろう！」

「ぐほっ！」

逆に今攻撃してきた兵士を斬り倒したがそれでも数が減らない。殺さないように戦ってるので敵が復活することもある。
そのまま続けること約三分…そろそろシュウヘイも体力の限界に達していた。

「ぐっ…」

「あんた、なんでそんなになってまでそのエルフを庇うのよ…？信

じられないわ。エルフは始祖ブリミルの永遠の敵なのよ？」

ベアトリスも人殺しの経験などないため、さすがにこれ以上不味いことを起こすべきではないだろうとは考えていたが、自分の傲慢さが邪魔をする。

ベアトリスの質問に、シュウヘイは右目の瞼から流れる血を拭き取りながら言う。

「エルフがどうした…テファは、たくさんの人を殺してきたこんな俺を信じてくれた女だ…。命を削ってでも守らなくてはならない大切な人だ…。だから…」

彼はベアトリスにディバイドセイバーの先を向けて、迷い無き眼差しを見せつけた。

「その笑顔を奪う奴は女子供だろうが王族だろうが関係ない。全員俺の敵だ！」

「よくぞ言った！さすがはサイトが認めた男！」

その声と共に、シュウヘイの横にギーシュが自分の魔法で作り上げた青銅のゴーレム『ワルキューレ』を率いて現れた。サイトもデルフを引き抜き、レイナールとマリコルヌも杖を手にベアトリスと対峙する。

「お前たち…」

「無茶しすぎだぜ、シュウヘイ」

サイトはシュウヘイの肩を軽く叩く。

「ＵＦＺ行くぞ！」

レイナールの掛け声と共にいざ戦い開始。

シュウヘイとの戦闘で消耗したこともあって空中装甲騎士団たちはあっという間に全滅した。まさかの事態に呆然と立ち尽くすベアトリス。

そこで横入りする人物がいた。

「ルイズ！？」

思わずサイトは声を上げた。

「ベアトリスとか言ったわね？」

ルイズはベアトリスを見て彼女に話しかける。

「異端審問を行うというこっは、司教の資格が必要よね？」

「司教の免状なら実家にあるわよ。それが何か！？」

「嘘ね。異端審問を行うには免状だけでなく、ロマリア宗教長からの認可状も必要なのよ？司教ならご存知なはずだけど」

「っ！」

ベアトリスはそれを言われて言葉を失った。実は彼女はそれを知らず、テファへの嫉妬心のあまり軽はずみに異端審問を開始してしまったのである。

これは彼らハルケギニアの人で分かりやすく言えば、神の名を騙ったことになるのだ。

「だいたいあんた、いくら一国の姫でもこの学院の最高権力者はオールド・オスマンよ。学院の生徒である以上あんたが異端審問なんて勝手な真似は許されないわ。これすごい重罪に当たることなのよ」

ルイズに次から次へと痛いところを突かれ、ベアトリスはもはや反撃の余地も無くした。周りの野次から「やりすぎだベアトリス！」「神の名を騙ることがどういうことかわかってるだろうな！」とベアトリスに避難の声があがる。竜騎士部隊も半壊し孤立無援。

そんな中、テファが彼女に近づいてきた。

「こ…来ないで！」

怖じけついて後ずさるが、彼女は腰を抜かして芝生に尻餅をついてしまう。テファも身を屈めた。あれだけ酷いことをしたのだ。人間から恐れられたあの『先住魔法』で殺されてしまうのか！？と思い、恐怖と防衛本能から目を固く閉じた。しかし、彼女を襲ったのは魔法などではなかった。

パシン！

ベアトリスの頬から乾いた音が響いた。テファが彼女を叩いたのだ。なぜ殺さない？と不思議がってベアトリスは目を開けた。

「私はともかく、あなたがシュウにしたことは許しがたいです。でも恨んでも仕方ないから、今のでなかったことにします」

テファはそう言ってベアトリスの手を、優しく包み込んだ。

「お友達になりましょう？」

母性溢れるその慈愛の瞳が、ベアトリスの目に飛び込んできた。

「…ぅ…うわあああああああああん！！！！」

テファの優しさに心まで打ちのめされたベアトリスは、彼女の胸の中に飛び込み、子供のように泣き出した。

誰もがエルフを悪魔のような存在と思っていた。なにせ自分たちの始祖の敵と認知されていたのだから、そう教え込まれてしまったのだ。だがこの時のテファの姿を見て、誰もが考えを改めた。「エルフは本当は優しい種族なのだ」と。

サイトも一安心した。これぞ自分が目指していた、平和的解決と悟りながら。

「いたたっ」

ＵＦＺ基地は一階だけでなく二階にも入り口があるので、直接外の階段で二階にあがることができる。

二階にはシュウヘイとテファが寝室として扱ってる部屋、仮眠室、そして医務室がある。
あの後、基地の二階にある医務室まで大急ぎでルイズとハルナに連れてこられたシュウヘイは、ハルナとモンモランシーに治療を受けることになった。

「まったく男って無茶ばっかするわね」

モンモランシーはため息をつきながらシュウヘイの右目瞼の傷口に塗り薬を塗りつける。

「全くですね。私の彼もそうだし」

ハルナも同調しながらシュウヘイの右目を包帯で覆っていく。

「…ヴァリエール」

「なっ、なによ?」

珍しいわね、あんたが話しかけるなんてと思いながらルイズはシュウヘイの言葉に耳を傾ける。

「さっきは済まなかったな。お前がああ言ったから大事には至らなかった」

まさか礼まで言われると思わなかったルイズは、照れたのか顔を赤くしてそっぽを向いた。

「別にいいわよ。うちの使い魔も世話になってたからその借りを返しただけよ」

「失明まではしてないけど、しばらく激しい運動は避けてね」

ハルナはそう言って包帯を巻き終えた。

「…わかった。ところで平賀たちは？」

そのサイトたちはと言うと…

「サイト様、私と握手なさって！」

「ギーシュ様あ！」

サイト、ギーシュ、マリコルヌ、レイナールはあの戦いぶりが認められたのか、女子生徒たちから異様にモテ始めていたのだ。

「あ、あの…」

「いやあ、もっと君たちに魅せるべきだったかな？このギーシュ・ド・グラモンの華麗なる勇姿を！」

サイトは苦笑いだったが、ギーシュは当然のように調子に乗っている。

下に降りてきたハルナとルイズはサイトを、モンモランシーは嫉妬の眼差しで自分の恋慕う男の耳を引っ張ってどこかへ歩き去っていった。

「いっ痛い痛い！ハルナさんルイズさん痛い！」

「み、耳を引っ張らないでくれモンモランシーいいいい！！！！」

続いて降りてきたシュウヘイははあ…と呆れたため息をつく。

そこにさっきのサイトたちのように、別の女子生徒たちが駆け寄ってきた。

「素敵でしたわ！あなたのあの凛々しい剣技！」

「私に今度お見せいただけませんか！？」

「あの、お目の方は大丈夫なんですか？」

「え、あ…あぁ…」

どう答えたらいいのかわからず、歯切れ悪く彼は答えるしかなかった。

そんな時、テファがシュウヘイの前に歩いてきた。まだ恐れてるのか、それとも彼女を気遣ってるのか思わず女子生徒たちは彼女のために道を開ける。

道ができた瞬間、彼女はシュウヘイの胸に飛び込んだ。

「ごめんなさい…」

自分のせいでシュウヘイが傷ついたと思い、責任を感じているようだ。

「…いい。謝るな」

俺が自分で選んだことなのだから。そう言って優しく背中を抱いてもも彼女はシュウヘイの胸の中で泣き続けた。

その頃、基地でハルナが怪獣探知に使うノートパソコンからピーッピーッと音が鳴っていた。
画面に映る地図には、反応の証である一つ赤い点が打たれていた。

3　虫、虫、虫！

シエスタの故郷タルブ村。自然に溢れ、ハルケギニアではブドウの名産地とされている田舎の村。

都市部よりも少なくとも平和なこの村に、恐ろしいことが起り始めていた。

ブドウ畑から尋常でない悲鳴が轟いていた。

「なっなんだよ…あっちいけ！
わっわあああああああ！！！！」

その畑の主と思われる男性の悲鳴が消えた場所には、巨大なカマキリの化け物が口元にある牙を血で紅く染め上げていた…

「グルル…」

「っ…」

ＵＦＺ基地の一階作戦室でシュウヘイは右目の包帯を擦っていた。

まだ少々痛む。テファは心配そうに彼の顔を見る。

「まだ、痛む？」

「まあな。でも時期に治るだろ。気に止めなくていい」

ここ数日、何事もなく平和が続いてるように見えた。が、ハルナがノートパソコンに表示された地図に赤い点を発見して事態は一変する。

「怪獣反応…！」

とその時、画面の地図が消えたかと思ったら、アンリエッタの顔が映った。

『あっよかった…初めて使うものですからどうしようか不安でしたわ』

ハルナから情報提供のために譲られたビデオシーバーを使っているのだが、ハルケギニアの人間は機械とは縁遠いものだから、繋がらなかったらどうしようか不安だったご様子だ。

「何があった？」

シュウヘイも顔を出して画面に映るアンリエッタの顔を見る。すると、画面越しの彼女の顔に青筋が走った。

『シュウヘイさん、お顔が…！』

彼の右目を覆う包帯を見て驚いてしまったようだ。

「ああ、気にしなくていい。それより、何かあったのか？」

『あっ、すみませんビックリして…実は、タルブ村から怪事件が起こってると現地の方から報告がありました』

「怪事件ですか？」

ハルナも耳を澄まし、アンリエッタの話に耳を傾けようとする。

「その前に平賀君たちを呼び出します。ちょっと待っててください」

それからサイト、ギーシュ、レイナール、マリコルヌ、そしてルイズも集まり、アンリエッタよりタルブ村での怪事件のことを聞くこととなった。

『タルブ村に巨大なカマキリのような化け物が現れたとのことです。それで農家の方々が…』

それ以上アンリエッタは言わなかった。その沈黙は、先のことを彼らに容易く想像させた。しかしここで引くべきではない。ルイズがそこで口を開いた。

「被害の状況はどうなってます？」

『全体的に見ればまだ大きくはありませんが、今の内にこの事態を処分しなくてはなりません。被害が大きくなる前に』

「わかりました。直ちに向かいます」

サイトは承諾し、ホーク一号を起動しようと外に飛び出した。ルイ

ズも後に続こうとしたが、『ルイズ』とアンリエッタが引き留めるような声を聞いて足を止めた。

『無理をせずここに残ってください。私はあなたにだけは…』

行って欲しくない。そう言いかけたがルイズは首を横に振った。

「私にはあの使い魔の主として共に行く義務があります。それ以前に貴族として、民を守らなくてはなりません。あなたに代わって」

『でも…』

「大丈夫です。私は昔のように死を美化するつもりはありません。姫様がたとえ望まなくても、生きて帰ります」

命懸けで戦い続けたサイトの姿を見て彼女は考えを改めた。ただ国のために戦って死ぬことなんて簡単だ。だが遺された人々の嘆きは癒せずしこりが残る。下手をしたら憎しみのあまり自分の仇を討とうと自分と関わりのある人が復讐しに向かい、そして戦いの輪廻が起こる。その戦いで敵の有力者だろうが、殺すことを罪と思うばかりか誉れ高いことと思うこと。それがハルケギニアでの貴族のあるべき姿を遠ざけ、ちっぽけな名誉への盲目を引き起こす要因になったのかもしれない。

だが今の彼女は、みっともなくても生きようと考えた。この無駄に高いプライドが氷解したとは言いがたいが、努力すればきっと…

『約束ですよルイズ。あなた方に始祖のご加護があらんことを…』

「よし、僕も現場に行こう。レイナールとマリコルヌは予備戦力として、シュウヘイはケガのこともあるから今回は待機だ」

ギーシュもルイズに続いて出発した。

「…」

ホークの搭乗席に着き、サイトはもちろん操縦席、他の三人は他の座席に座った。

なぜ『三人』かと?それはシエスタもサイトの判断で連れてきたのだ。

「なんでこの女も連れていくのよ!?」

納得しきれてない様子でルイズはサイトに怒鳴る。

「いや、タルブ村を一番よく知ってるのは彼女ぐらいしか思い浮かばないから…」

決して疚しい気持ちで連れて来たのではない。以前もタルブ村を案内してもらったので彼女にも今回道案内をしてもらおうと考えたのだ。

「…」

だがそのシエスタもルイズ並みに不機嫌そうだ。サイト専属メイドになったのが自分ではなくハルナだと知ったこともあり、最近サイトを嫌うかのように避けている。

「あの、シエスタさん？なんでそんなに不機嫌なんですか？」

「自分の胸に聞いてくださいよ」

なんで自分じゃないのかはわかる。女王陛下の命令でハルナはサイト専属メイドとなったそうなのでとてもただの平民である自分がどうこう言える立場ではない。それでも悔しかったのは事実なのだ。サイトの心に決めた女性がハルナただ一人であることと同じように。

「んじゃウルトラホーク一号、発進！」

発進レバーを引くと同時に機関部が火を吹き、ウルトラホーク一号はタルブ村へ向けて飛び立った。

「変わらないなあ～」

久しぶりのタルブを峠から見下ろしながらサイトは言った。田舎な

だけあって空気が美味しいものだ。

「じゃあシエスタ、案内してくれ」

「はい…」

いまだ機嫌の治らないシエスタ。今回の件もタルブ村の事件とか起こったりしなかったら来ようとも思わなかった。

機嫌の悪さが態度にも出ている彼女だったが、三人をタルブ村へと導いた。

村の道を歩いてると、ブドウ畑の入り口付近に人だかりができていた。

「あそこで何かあったみたいだね。行ってみようじゃないか、サイト」

「ああ」

サイトは人だかりの中にいる少年に話しかけてみる。

「あの～すみません」

「なっ、なんでしょう?」

その少年を見てサイトは一瞬驚きの表情になる。シエスタや自分と同じ黒髪と黒い瞳だったのだ。しかも少年もシエスタの顔を見てビックリしている。

「あれ、姉さん!?」

「「「姉さん！？」」」

サイト、ルイズ、ギーシュは驚きのあまり声をハモらせた。

サイトは以前タルブ村でシエスタの小さな弟たちを見たことはあるが、この少年は15歳ほどに見える。ここまで成長した兄弟までは見たことなかった。

「ジュリアン、この人だかりは何？」

シエスタが尋ねると、ジュリアンは暗い表情で言った。

「…殺されたんだ。アラドが」

「え！？」

ジュリアンの話によると、彼の親友で家族と農業を営んでいたアラドという少年が巨大なカマキリに食い殺されてしまったらしい。死体も残らなかったが、彼の破けた服の一部と彼の血液と思われる赤い液体がそれに染み込んでいたことから、彼の死は確定したらしい。ジュリアンはちょうど現場に居合わせ、彼の衝撃的を通り越した死で、ショックを隠しきれずにいた。

巨大なカマキリは以前にも現れたことがあるようだが、アラドが殺された時は以前よりはるかに巨大化していたとのことだ。

「でも、その時は傭兵メイジくらい事前に雇ったりしなかったの？」

「…傭兵の方々は全員殺されました」

ルイズの問いに、暗い表情を変えないまま呟いたジュリアンのその

言葉で、サイトたちから血の気がサァーッと引いた。

「もうタルブは終わりだ…姉さんも早死にしたくなかったら勤務先の学院に戻りなよ…」

おぼつかない足取りでジュリアンは自分の家へ帰っていった。

「サイト、僕たちはどうする?」

ギーシュがサイトの顔を覗き込んで尋ねた。

「何って、やはりその巨大カマキリをなんとかする必要があるだろ」

「ギーシュ、別に無理しなくてもいいのよ?帰りたければ早く帰りなさい」

ルイズも強制する意志は見せなかった。命懸けの戦いになることに、強制を心がけることは、その人を殺すことと同じようなものだ。だから選択肢としてギーシュに問う。

逃げるか、戦うか。

「…いや、逃げるわけにはいかないさ」

恐怖してないと言えば嘘になる。だがそれ以上に彼はあることに恐怖していることに気がついた。

仲間や自分の家族に、モンモランシーが巨大カマキリの餌と化すこと。

「僕はこれでもトリステインの大物軍人グラモン元帥の息子。同時に仮にもＵＦＺ隊長だ。それ以前にか弱き乙女たちを助けるのも僕の信条なのだよ」

「はは、ギーシュらしいな…」

結局女の子のため。まあ決して下心から来るとは言い難いが悪い信条ではない。彼も動機はどうあれ一人の男なのだ。

「無理すんなよ」

「でもよ相棒、その巨大カマキリはどこにいるのかわかるのか？」

鞘からデルフが顔を出してサイトに問いだす。さすがに手当たり次第は時間がかかり、もしタルブ村の外に巣があるとしたら巣から離れ自分たちがそこを探してる間に巨大カマキリがタルブ村の人々を食い尽くすっいう最悪の状況を想定してしまう。

「ハルナ」

ビデオシーバーを開き、基地のハルナに調べさせてもらうことにした。

『何？』

「現場は、すでに巨大カマキリの被害が出てる。巣の位置とか特定できないか？」

『…ダメ。レーダーには反応がない』

「そっか…わかったらすぐに連絡してくれ」

『うん』

通信を切ってビデオシーバーの蓋を閉じた。レーダーにも反応がないのでは探しようがない。

「早いところなんとかしないと、タルブ村どころかこの星の人類が絶滅してしまうな…」

「サイトさん、それは大袈裟じゃ…」

虫の知識はハルケギニアでは少しはあるかもしれないが、虫とは少年や昆虫マニアぐらいにしかまともに愛されないような傾向にある。６０００年も貴族政治を保ち続けたかの世界の人間だ。綺麗好き過ぎて虫を気持ち悪がって調べようとしない人も多いだろう。

サイトはシエスタの問いに首を横に振った。

「いや、そんなことはないと言った方がいい。虫は鳥や小動物など天敵が多い分、繁殖力があるんだ。普通のカマキリだって、一度の産卵に百万近い卵を産むって聞いたことがあるし」

それを聞いてルイズとギーシュは全身に鳥肌が立つのを感じた。

「きき、キモいこと言わないでよ！」

「言わなかったらどうしたんだよ？あらかじめ言わないと見たとき余計鳥肌立つんじゃないか？」

最初に言うことで耐性に似た覚悟を植え付ける、そのつもりでサイ

トはカマキリの話をしたのだ。まあ確かに…と渋々ながらもギーシュとルイズは納得したのだった。

「シエスタ、もう一度ジュリアンと話したいけどいいかな？もしかしたら何か知ってるかもしれない」

「…」

どうしたのだろうか。シエスタまでジュリアンと同じように沈んだ顔になっている。

「シエスタ？」

「…やっぱり、無駄だと思います」

「どうして！？」

「だって、あんな化け物をどうやって退治するんですか？根絶やしにするまでとっとと排除しろなんて無理ですよ。どうせここで倒したって…また別の怪獣とかが現れたら…」

結局またこの世界は荒らされるじゃないか。サイトに近づくチャンスを奪われかけ、しかも自分の故郷が怪獣に荒らされるショックの連続で自暴自棄状態だった。

パシン！

シエスタの頬から乾いた音が響いた。彼女の目の前に、怒りを露にしたルイズがこちらを鋭い眼光で睨み付けている。

「あんた、寝惚けるのも大概にしなさいよ。以前のあんたは惚れた男にはとことん付きまとう勢いくらいはあったはず。なのに、そのシケた顔は何!?そら怪獣がしつこく現れたら自分たちのやってることの儚さを思い知らされるかもしれないけど、だからってこのまま食われるのを待つなんてズレてるわ!何がなんでも生き残るのが生物の本能じゃなくて!?」ルイズの言葉で彼女は目を覚ましたような感覚にかられた。彼女の言う通りだ。自分は確かに大好きな人のためなら肌を見せることだってできる。それぐらいの根性を見せろとルイズは言ってくれたのだ。

「…すみません、サイトさんやミス・ヴァリエールが必死なのに、こんな弱気になって…
すぐに案内しますね」

シエスタの弟ジュリアンは部屋に閉じ籠っていた。親友アラドの死を目の当たりにしたショックが自分を闇に引きずりこもうとしている。ただ部屋のベッドで踞っている。とそこに、ノックする音が聞こえてきた。姉のシエスタだろうか?

ドアを開けると、確かに姉だった。

「ジュリアン、入るわよ」

弟の「一人にしてよ」的な態度を省みずに彼女は部屋に入って椅子に座る。

「何の用？姉さん」

「まだ…立ち直れてない？」

「…」

アラドはジュリアンにとって唯一無二の親友だった。あのトリステインとアルビオン（レコンキスタ）の戦争でも共に生き残ることを誓い、それを果たした。その矢先で彼は…

「ジュリアン、あなたは巨大カマキリの巣とかわからないかしら？」

「…知ったところでどうなるんだよ。倒すなんて馬鹿げた夢でも見てるの？勝ち目なんかないんだ」

ジュリアンに気力と言えるものは見られなかった。ただ沈んだ態度を崩さないままボーッとしている。そんな彼に、シエスタは弟の顔を自分に無理やり向けさせる。

「勝ち目のあるなしの問題じゃないの！このままだと村のみんなが化け物に食べられる、それを黙って見過ごせるって言うの！？」

とその時、外がなんだか騒がしくなった。まるで悲鳴にも聞こえる。いや、それは本当に悲鳴だった。

外では遂に現れたのだ。巨大カマキリ『昆虫怪獣マジャバ』が。

マジャバの雄は空から滑空しながら地上にいる人間を捕らえ、彼らを口の中へ放り込んでいった。

「うわあああああ！」

タルブ村の人々は必死に雄マジャバから逃げ延びようと村の外へ走り出す。

見捨てるわけにはいかない。外にいたサイトはウルトラガンで、ギーシュも弓矢を所持したワルキューレを作り出し雄マジャバに攻撃する。

「行けワルキューレ！一斉射撃だ！」

十体ほどのワルキューレの持つ弓から何本もの矢が空を飛んでいるマジャバに突き刺さっていく。サイトのウルトラガンから放たれたビームはマジャバの翼の付け根を的確に狙い撃った。

「グルァ！？」

今の攻撃でマジャバは浮力を失って地上に落ちていく。

「よし、今だルイズ！」

「任せなさい！エクスプロージョン！」

ルイズの杖より白き光が放出され、やがて凄まじい威力を誇る爆発となって雄マジャバに直撃、体内よりマジャバは破裂して砕け散った。

「はあ…やった…」

虚無の魔法は初歩に当たる『エクスプロージョン』でも精神力を著しく減らしてしまう。以前より使えるようにはなってるものの、や

はり簡単に身に付くものではないのだ。

「頑張ったなルイズ」

「あっ、当たり前よ…」

「少し休んどけ。疲れたろ？」

疲れて膝を着く自分に気遣いの言葉をかけるサイトにルイズは少し赤面した。

「みなさん、ご無事ですか！？」

そこにシエスタとジュリアンも駆けつける。

「あの、今の騒ぎは？」

「退治したよシエスタ。これで解決かな」

ふうっ…とサイトは額に溜まった汗を拭き取る。

「そっ、そうか～これで」

やっと帰れると言おうとしたギーシュだが、ジュリアンは「まだ」と呟いた。

「一匹だけじゃないんだ」

沈黙…

その間は彼らが動揺と恐怖を感じた証となった。ジュリアンはたっ

た今ルイズのエクスプロージョンで死亡したマジャバを見て続けた。

「こいつは多分雄だ。もう一匹、雌がいる。以前奴らが巣へ帰っていった時の方角、覚えてます」

「一難去ってまた一難ね…」

ルイズは新たに虚無の魔法を発動するための精神力はもう残ってない。息がきれかけている。

「でも巣の位置がこれで特定できるよ。シエスタはルイズを見ててくれ。ジュリアンは道案内、頼めるか？」

「はい」

サイト、ギーシュはジュリアンの道案内でアラドの死亡した肌を畑に入り、そこから北の方向に向かった。その先を行けば巣にたどり着くことができるらしい。

「なあサイト」

「どうした？」

「あのカマキリだが、一体どうやって生まれたのだ?あのような人を襲う怪物なら、やはり侵略者の送り込んだ刺客ではないのか?」

「…」

確かに、あのマジャバは宇宙から送り込まれた怪獣だという憶測は今のところ有力だ。あれがもし元々ハルケギニアにいた生物なら、とっくの昔に人類は滅び、彼らがこの星の支配者となったはずだ。おそらく最近この星に来た…いや、本当にそうだろうか?突然変異の可能性だって考えられる。それに肉食というのはおかしな話だ。

とにかく、今はマジャバの巣に向かう方がいい。

しばらく歩くと、あるものを見た彼らは思わず身構えた。雌のマジャバがいる。鳥類のように巣を作り、卵を守っている。

「まずは卵の破壊だ。奴は僕のワルキューレで誘き寄せる。サイトはその間に」

「よし、頼んだぜギーシュ」

「ふふ、このギーシュ・ド・グラモンに任せろ」

得意げになるギーシュは弓矢を持つワルキューレを再び作り出し、自分たちとはマジャバを挟んで向こう側に位置する場所まで移動させた。しかし、金属の塊で生命体ではないワルキューレたちにマジャバは顔を向けない。彼女の興味はどうも生物の肉でしかないようだ。ならば、注意を引かせればいい。

「放て、ワルキューレ！」

雄の時のようにワルキューレたちの弓から何本もの矢が放たれた。しかし、先ほどの雄とは違い、全く通じてなかった。

「なっ、なんて硬さだ…」

雌のマジャバは雄よりも体表が硬くできていたのだ。おそらくさっきのように卵を守るために、自らの体表が硬くできるように進化した。

しかし、ギーシュのワルキューレによる囮作戦は成功したと言えた。ワルキューレを敵と見なしたマジャバは注意を引かれ、巣から離れて逃げていくワルキューレを追っていく。

「今だ！」

三人は巣に近づき、サイトはデルフで、ギーシュは魔法で作った鋼の剣で、ジュリアンも斧で卵を砕き始めた。

（アラドの仇！）

ジュリアンは親友を奪われた悲しみと怒りを斧に乗せてそれを振り下ろす。

（悪く、思わないでくれ）

サイトの心に罪悪感が芽生えていた。確かにマジャバは人を襲う怪獣だが、それ以前に自分の産んだ我が子の宿る卵を守る母性を持つ生命体。そう考えると自分たちが悪者に思えてきた。

「グルル…」

向こう側から何かの鳴き声が聞こえる。いや、向こうどころかすぐ近くだった。マジャバに遂に、卵を砕いていたのを気づかれてしまったのだ。

「退避だ！」

とっさにギーシュが叫び、彼らは一斉にマジャバから離れた。しかし、サイトはギーシュやジュリアンとはぐれた。マジャバが真っ先に目を向けたのは、ジュリアンとギーシュだった。

「相棒！／旦那！」

デルフと地下水が叫んだ。今こそ変わるとき！

「わかってる！」と答えたサイトはウルトラゼロブレスレットからウルトラゼロアイを出現させ、目に装着した。

「デュア！」

目に着けたウルトラゼロアイが光り、やがて頭から彼の顔を銀色のマスクに覆い始める。金色の瞳と胸元を覆う鎧が完成し、体全体が一瞬光ると、赤と青の模様が胸から下に刻まれ、巨大化した。

「ジュワ！」

「ウルトラマンゼロだ！」

「あれが…ゼロ」

宇宙の戦士ウルトラマンゼロの降臨。ギーシュに笑みがこぼれ、ジュリアンからは初めて見る巨人の姿に目を奪われる。
ゼロはジュリアンとギーシュからマジャバを蹴りで突き放した。

「ギュルル！」

ゼロを敵と見定めたマジャバは両手にある鎌の内、右手の方を振り上げゼロを切り裂きにかかる。対するゼロはゼロスラッガー（デルフ）を引き抜いて左手に掴み取りガンダールヴの力を発動、その鎌を防いでる間に残った右手でマジャバの腹を殴る。

「デュ！」

水面蹴りで足を払ったが、その弾みで鎌が自分に当たってしまい、ゼロはマジャバにのし掛かられた。体制を持ち直したマジャバはその体制からゼロスラッガーを投げようとするゼロの右手を攻撃。ゼロスラッガーを弾き飛ばした。拾いに行くことも許さず、彼の首の両側の地面に鎌を差し込んで動きを封じ、口から毒の含まれた息を吐き出した。

「グァ…！」

毒はウルトラマンにも害をなす。これ以上無理やり吸わされたら命はない。ゼロは力を振り絞って足に炎を纏い、マジャバを背中から蹴り飛ばした。

〈ウルトラゼロキック！〉

「デュワ！」

「ギェ！？」

起き上がったゼロは二本のゼロスラッガーを手に取り、それを念力で宙に浮かせると、それを蹴り飛ばし、勢いの増した二本は倒れていたマジャバの両手の鎌を切り落とした。

二本が戻ってきたところでゼロは額のビームランプより放った必殺の閃光をマジャバに撃ち込んだ。

〈エメリウムスラッシュ！〉

「デュワ！」

「ギュルル…ォ」

光線をモロに受けたマジャバは、赤く光るその目をゆっくりとじて二度と動かなかった。

勝利を悟ったゼロは空を見上げ、遥か彼方へ飛び立った。

「デュア！」

「うぅ…にが…」

変身した時に毒ガスを吸ったので、サイトは帰ってきてから苦い液状の飲み薬を飲む羽目になった。

「薬くらいちゃんと飲みなさい。男でしょ」

モンモランシーは苦虫を噛んでるような顔のサイトに喝を入れる。

「ハハハハ、モンモランシー聞きたまえ！この僕の華麗なる武勇伝を！」

「はあ…」

帰ってきてからギーシュは調子に乗ってる。まあ彼らしいと言えるが、これから先また事件があるのは間違いないので油断はできない。無事だったからよかったが。

「気になってたけど、虫が人を食べるなんて聞いたことないわね」

ルイズはまだ気になる様子で言った。虫があれほど巨大になって人を食べる話は聞いたことがない。

「シュウヘイ、もしかしたらあれもスペースビーストの類いなのか？」

「いや、ビースト因子が検出されてなかったはずだ」

サイトの問いを否定し、シュウヘイはハルナの方へ目を向ける。

今ハルナはノートパソコンと連結させた機械で一個だけ残ったマジャバの卵を解析している。

「この怪獣は猛毒を体内に持ってる。でも黒崎君の言う通りビーストの体内にあるビースト因子は見られないから、違う方法で人為的にカマキリが進化したって考えられる」

「違う方法で…」

サイトは難しい顔をして思考した。

カマキリを無理やり進化させたなんて、一体誰がなんのために…？

とそこにシエスタが基地に入ってきた。手には熱そうな鍋を持っている。

「皆さん、タルブ村名産の『ヨシェナベ』ですわ！」

ヨシェナベ…？いや、これは…と地球出身のサイト、ハルナ、シュウヘイは目を凝らして見た。

それは、正確には『寄せ鍋』という料理だった。

「これ寄せ鍋じゃないか！なんで？」

「これは私のひいおじいちゃんが村のみんなに教えたと言われているんです。今やタルブ村の名物料理にもなってるんですよ」

キリヤマ隊長は料理もできたのか…意外に家庭的な人だったんだな…とサイトは思った。

「さあ、みなさんお疲れでしょうから私のお料理をお食べになってください！私の故郷、タルブ村を助けてくれたお礼ですわ！」

「そうだな…みんないただこうぜ！」

その日は寄せ鍋パーティーとなり、夜になっても基地の明かりは灯り続けた。

4　炎のはぐれ宇宙海賊

今から約半年前、ウェールズのアルビオン王国がレコンキスタに占領された直後のこと。

「ちっ…」

トリステインのとある性悪貴族の屋敷。外見年齢はおそらく２０代後半の、炎のような赤く短い髪を持つ男がいた。どうも宝物庫の宝石などを漁っているようだが、彼はあまり上機嫌とは言えなかった。面白くない。張り合いがない。敵が弱すぎて刺激が足りない。

彼は戦うことが大好きで、平和を愛し無駄な戦いを避けたがるサイトとは大違いだった。宝石庫を守る見張りの兵と戦ってたが、自分が満足できるような相手ではなかった。

しかし、そんな彼は感じた。

ずっと求め続けていた強者の気配…

「匂う…」

犬のように鼻で匂いをかぎとり、その匂いの元を探しに宝物庫を出ようとした時、見つけた。

「お前強いんだなあ…俺様と戦ってくれよ」

やっと待ち望んだ強者との出会い。しかし、対する相手は男の姿を

まるで眼中に示そうともせずいくつかの宝物を手にとると、そのまま歩き去っていく。

「おいこら！無視すんじゃねえよ！」

プライドの塊とも言える彼は『無視される』というこっを大いに嫌っていた。苛立ちのあまりか、彼は姿を変えた。

全てを焼き尽くす炎の戦士に。だが、変身したのは彼だけではなかった。

自分が戦いを挑んだ相手もまた姿を変えたのだ。

銀色の体にＹ字型の輝きを持つ、紅き閃光の戦士に。

そして炎の戦士は、負けた。

「ぐがっ…くそ…」

今までどんな奴が相手でも負けはしなかった。しかし、負けた。

誇り高い自分のプライドが自分の無力さを呪う。

「船長、悪いな…俺はあの野郎をぶっ倒すまで帰らねえ…」

長い棒を手に握り締め、彼は夜空を見上げる。

「あの野郎…覚えてやがれえええええええええええええええ！！！！！」

虚無の曜日は、地球では日曜日的存在である日。学院もその日は休みなので、シュウヘイとテファは子供たちの様子を見に行こうとバイクに乗って新しく設立された孤児院に向かうことにした。

「目、大丈夫？」

「問題ない」

シュウヘイは右目の包帯を取っていた。右目の瞼にくっきり傷痕が串を刺してるように出来ていた。失明にまでは至らなかったらしいのでちゃんと見えているようだ。
テファを後ろに乗せ、シュウヘイはバイクを走らせた。

「ごめんなさい…」

「また目のことか？」

「だって…」

自分を庇って出来た傷だ。無責任な奴なら「俺は悪くねぇ！」と言い逃れをするだろうが、テファはそんな最低な女性ではない。でなければ孤児を養えるはずがない。

「ジムたち、元気にしてるな？」

「学院に来てからまだ日が浅いから大丈夫だろ。そこまで弱くはな

い。

さ、そろそろだ」

バイクに乗って地を駆ける二人の前にはすでに、トリスタニアの街が拡がっていた。

「匂う…」

一方のトリステイン魔法学院。今日は休みなので生徒たちは授業の復習をやったり友達や恋人と暇な時間を潰していた。そんな彼らを外壁から見下ろす男がいた。先ほどの過去話で紹介した謎の男である。

「間違いない…あいつの気配だ！」

一一一…

「どうした？自分の目をまだ信じられないのか。忘れたとは言わせんぞ俺の名をな！」

今謎の彼は目の前にいる青年と対峙している。彼にとって因縁な深いとしている存在…

「まさか生きていたとはな！紅蓮・ダイスケ！」

なんとその青年はシュウヘイだったのだ。紅蓮と名乗る謎の男とは以前から知り合いだったかのようにシュウヘイは驚く。

「確かに俺様はあの時貴様に負けた…だがそんな死人を見ているような言い方は心外だな。
俺様はあれから地獄以上の特訓を積み重ね、再びお前の前に現れたのだ。」

「タフな奴め」

「全てはお前との決着のため…降りさせはしないぜこの勝負！」

紅蓮は炎に包まれた如意棒『ファイヤースティック』を手に取る。
戦う意思が本気で見受けられる。

「望むところだ紅蓮！お前との勝負を降りる理由などない！」

「それでこそ俺様の認めた好敵手、覚悟しろ！言っておくがあの時とは違うぞ！」

それから数分後…

「ぐっ…」

紅蓮の目の前に傷を負った状態でふらつくシュウヘイの姿があった。

「俺様が最強だ！」

「くっ…悔しいが認めざるを得ないな…紅蓮、お前は誰よりも強い！俺が保証するぞ！」

これはどういうことか。まるでいつものシュウヘイとは違う、相手をありのまま受け入れ認めているようで性格にも影が射してないかのようだった。

「お前もよく戦ったな…『シュウヘイ』よ！ワハハハハハ！」

――…

「よし、イメージトレーニングは完璧だな」

場所をトリステイン魔法学院の外壁に戻す。

って空想だったの！？紛らわしい！

「ええいうるさいぞナレーター！

とにかくこれでシュウヘイが現れても慌てることはあるまい。ふふふ…」

紅蓮は外壁から降りると、まっすぐ迷うことなくＵＦＺの基地に向かい、思い切り扉を開いた。

「待ちわびたぞ！シュウ…へ？」

彼はこの時ほどあれ?と思ったことはなかった。シュウヘイの姿はなく、代わりに椅子に座るサイト、コンピューターのキーボードをたたくハルナ、それをじっくり見ていたルイズの三人しかいかなかった。ちなみに他のメンバーは自室などで休養中である。

「あの、何かご用ですか?」

「って言うかあんた誰?学院勤務の平民にも生徒にも見たことない顔だけど」

ハルナとルイズが順に言葉を発した。

「いやっ、こっちの台詞だ!」

「…」

サイトは座ったまま紅蓮の顔を見る。なんかどこかで見たような…確か宇宙警備隊の手配書で…

「頭は、燃えてないな」

そう言われた時の紅蓮はなぜか頭をあわてて隠した。バレたら不味いのだろうか?

「うん、俺も知らない」

「なっ、なんだその知ってるようで知らないような言い方は?まあいい、どうやら間違えたようだ。失礼!」

そのまま紅蓮はピュウ!と風のように消えていった。

「なんなんだあいつ？」

サイトがハルナとルイズに視線を向けると、二人は同時に「さぁ？」と言った。

「シュウ兄！テファお姉ちゃん！」

あのメフィストの事件からだいぶ回復したエマは元気になっていた。シュウヘイやテファがウェールズの助力で新しく設立された孤児院に到着した瞬間、二人に向かって走ってきた。しかし、勢い余ってずっこけてしまう。

「あいたっ！う…」

「もう、いきなり走ったら転んじゃうよ」

テファは屈んでエマの服についた砂を払う。

「あら、二人とも来てくれたのかい？」

二人が来たことに気づいたのか、元土くれのフーケもといマチルダ

もやって来た。今はウェールズの計らいでこの孤児院の園長を勤めている。

「そりゃ、あんたには世話になったし、チビたちの様子を見に来たくなってな」

「にしても、見ない間にたくましくなったもんだね」

クスクス笑いながら彼女はテファの耳元でシュウヘイに聞こえないようにとんでもないことを口にした。

「早く告白しな。でないと他の女に盗られちまうよ」

「!?／／」

言われた瞬間彼女の顔はボッ！と赤く染まり、煙まで噴き出していた。

「ふふ、やっぱりかわいいわね」

「なあ、さっきから何をこそこそ話してるんだ?」

置いてけぼりのシュウヘイは一体二人が何の話をしてるのか気づかないままだった。

「あっいやいやこっちの話さ。それより入りなよ。他の子たちの相手もしてちょうだい」

マチルダはエマを抱き抱えると、孤児院の扉の向こうへ歩いていった。

シュウヘイはテファに目を向けると、彼女の顔が真っ赤であることに気づく。

「どうした？風邪か？」

「なんでもない…」

そんな二人のやり取りを、木の影から見ていた不届きな輩がいた。紅蓮である。

「あやつめ…女連れとは色気好きおって…
まあいい、ようやく見つけたのだ。もう会えないかと冷や冷やしたぞ。さあ早速感動の再会といこうか。とう！」

紅蓮は木陰から高く飛び上がってスタッ！と降り立つと、かっこよく髪をなびかせていざ！宿敵に再会の挨拶を決めようとした。

「待ちわびたぞ！シュウ…へ？」

しかし、いつの間にかシュウヘイたちの姿はなく、代わりに彼のバイクがポツンと置いてあるだけだった。

「おっ…俺様を置いていくなあああああああああああ！！！」

二人は孤児院の庭で子供たちと戯れていた。

「今変な叫び声が聞こえたけど…」

なんだろうとテファは入り口の方角を振り向く。しかし、子供たちが「遊んでよ！」とせがむものだからすぐにその声のことは忘れてしまった。

レコンキスタとの戦争が完全に終結してから孤児の数も多くなった。園長であるマチルダくらいしか大人はおらず、子供たちのリーダーにはジムが選ばれてるが、先の運営などに苦労が生じそうな勢いだった。

「チビたちの相手も、楽じゃないんだよね」

カップに注いだ茶をすすりながらマチルダは言う。

「それでもあんたのおかげでこんな立派すぎる孤児院ができたんだけど」

この孤児院は見かけからして金持ちの屋敷に似た形式で建てられていた。それでわざと孤児のフリをして住み着こうとする悪ガキが侵入して、孤児の子供たちとトラブルにもなりかけたとか。

「そうそう、エマの奴音楽に目覚めたのさ」

「音楽？」

シュウヘイは不思議そうにマチルダを見る。

「フルートをいっちょ前に練習して吹くようになってね、『シュウ兄やお姉ちゃんに聴かせるんだ！』って張り切ってたんだよ」

「エマの音楽か、聴いてみたいなぁ…」

自分のためにフルートを吹いてくれるなんて、親身のテファにとって嬉しいことだ。

「そう言えば、お前は歌が歌えたよな。ハープの演奏と一緒に」

アルビオンのウエストウッド村にいたときだ。ある夜、子供たちがもう寝た頃にシュウヘイはハープを弾きながら外で歌を歌う彼女を見た。

聴いた瞬間、今までアイドルの歌にすら全く興味を示さなかった彼も彼女の歌声に聞き惚れていった。

神の左手　ガンダールヴ
勇猛果敢な　神の盾
左には握った大剣を
右には握った長槍で
導きし我を守りきる

神の右手はヴィンダールヴ心優しき神の笛
あらゆる獣を操りて
導きし我を運ぶは地海空

神の頭脳はミョズトニルン知恵の塊の神の本
あらゆる知識を溜め込みて導きし我に助言を呈する

そして最後にもう一人
記すことさえ憚られる

「今度エマがフルートできるようになったら、一緒に聴かせてくれないか」

「え？」

シュウヘイの提案にテファは目を見開いた。

「いい案じゃないか。やってみなよ。もし客を集めたら大盛況だ」

マチルダもこれには興味を示した。彼女の歌声は自分でさえ妬みたくなる美しさがある。エマの完成したフルートの音と合わせたらどれほどのものになるか見ものだ。

「うん、やってみる」

彼女もそれを承諾した。
とその時だった。庭にいたエマが突然彼らの元に走ってきた。しかも顔がくしゃくしゃになっている。

「どうしたの？喧嘩？」

自分の胸に泣きながら飛び込んできたエマにテファは一体何が起こ

ったのか尋ねると、エマはあるものを彼らに見せる。変な方向に曲がった金属の棒、いやエマの愛用するフルートだった。シュウヘイがそれを見たところ、曲がったところに足で踏まれたようなあとがある。「誰かに踏まれたのか」

「酷い…誰にされたの？」

「あの赤い髪の人に…」

庭の方を見ると、見覚えのない赤い髪の男がウロウロしている。子供たちは怪しげな男の存在に怯えて彼から離れていた。

「あいつか…」

シュウヘイは庭に飛び出してその男、紅蓮と対峙する。

「お前か？人の大事なガキを泣かせたのは？」

「ん？おぉ！」

紅蓮の目が、シュウヘイを見た瞬間瞬く間に宝石のように輝いた。やっと念願の相手に会えた。

「久しぶりだな！もう会えないかと思ってヒヤヒヤしたぞ」

「…？」

言ってる意味がわからないと、シュウヘイは首をかしげた。

はっきり彼はこう思った。

（……誰だ？）と。

シュウヘイはマチルダがまだフーケとして盗賊をやってるとき、紅蓮と偶然鉢合わせしてほぼ成り行きに戦うことになり、彼を打ち負かしたことがあった。その出来事が偶然をシュウヘイへのリベンジへの原動力となったのだが…悲しきかな、当のシュウヘイは紅蓮のことを全く覚えていなかった。

「忘れたとは言わせんぞこの俺様の名をな！この炎の宇宙かい「おい」…。」

いざ名乗ろうとした紅蓮の言葉を遮るようにシュウヘイの言葉が発せられた。

「人の話を聞いてないのか？どこの誰だか知らんが堂々としゃしゃり出てエマのフルート壊して、いいご身分だな」

「はっ？」

イメージトレーニングとも全く違うシュウヘイの返答に紅蓮は間抜けな声をあげる。まさかこいつ、俺のことを忘れてたのか！？

ってか…俺様何か悪いことした？

対する紅蓮もまた、エマのフルートを壊してしまったことに気がついてなかった。シュウヘイの匂いを嗅ぎ付け、いざかっこよく孤児院の中庭に飛び降りた時、ベンチに置かれたエマのフルートをベンチごと誤って踏み潰してしまったのだ。その直後エマがそれを見てしまい、シュウヘイとテファに知らせて今に至る。

「とっととエマに謝ってここを立ち去れ」

「そっ、そうはいかんぞ！俺様はお前と決着をつけまいとここな来たのだ！このまま帰るわけにはいかん！以前の雪辱を晴らすためにもな！」

紅蓮の勝手ぶりにシュウヘイはだんだんイライラしていった。自分が危害を加えたエマに謝ることよりも、記憶にないリベンジを仕掛けられることに、胸くそが悪くなっていく。

「さあ、忘れたとしても今さら逃がすわけにはいかないぞ、俺との決着をな！」

紅蓮に退く気は見られないようだ。エボルトラスターを握り、彼は紅蓮を睨む。

「…いいだろう、望み通り相手してやる。ただここだと周りを壊しかねないし正体がバレる。場所を変えるぞ」

シュウヘイの提案で紅蓮は孤児院から離れた森の中に連れて来られた。

「ふふ…本当に待ちわびたぞ。お前と再び戦うこの瞬間をな！」

以前の敗北の雪辱晴らしができることに紅蓮は笑顔が絶えないが、対するシュウヘイは苛立っていた。

「いっくぜ…ファイヤあああああ！！」

炎の如意棒ファイヤースティックをファイヤースティックを手に取った瞬間紅蓮は灼熱の炎に身を包むと、赤き炎の戦士へと姿を変えた。

炎の宇宙海賊・グレンファイヤー。

「負け犬が…目障りだ」

手に持っていたエボルトラスターを引き抜き、シュウヘイもウルトラマンネクサス・アンファンスに変身する。と、変身するや否やグレンファイヤーはいきなりネクサスに殴りかかってきた。

「オリャア！」

「ヌォ！？」

ズササ！と勢いづいて後方へ引き摺られたネクサス。彼が立ち上がろうとした瞬間も逃さず拳の乱打を繰り出す。

「オラオラどうしたあ！」

最後にファイヤースティックでネクサスを倒し、坂さまにネクサスを持ち上げると、高く飛び上がって脳天からプロレス技のようにネ

クサスを地面に叩きつけた。

〈グレンドライバー！〉

ネクサスが叩きつけられた瞬間、地面に大きなひび割れが走る。グレンファイヤーは立ち上がって、ぐったりと倒れたネクサスを見下ろした。

「なんだよ、大口叩いてるわりには」

「大したことないと？」

「なっ！？」

背後に聞こえた声に反応したグレンファイヤーは目を疑った。たった今目の前で叩き伏せたはずのネクサスが自分の背後にいるではないか。しかもジュネッストリニティへのチェンジも完了している。じゃあ目の前の奴は？グレンファイヤーが目の前で倒れてるネクサスを見た瞬間、それはフッ…と姿を消した。

「てめえ、幻で惑わそうなんてひきょ…ごふあ！？」

一言もの申そうとしたグレンファイヤーだったが、腹に繰り出されたネクサスの鉄拳で怯んでしまう。

「いきなり殴りかかってきた負け犬に言われる筋合いはない。覚えてないが」

「んにゃろ！おら！」

ファイヤースティックを振り上げ、一発咬まそうとするグレンファイヤー。ネクサスも光の剣を作り出して応戦する。

〈シュトロームソード〉

ガキン！ガキン！

「デヤ！セイ！シャ！」

「ウラ！デイ！ラア！」

紅の光の剣と炎の如意棒、ぶつかり合う度に金属音が轟く。

それから一分…

「だああくそ！当たれってんだ！」

塞がれたり避けられたりと先ほどから互いの攻撃が当たらなくなってる中、グレンファイヤーの方が冷静さを失っていた。イメージトレーニングで自分の勝利という幻想を見すぎて、自分が間違いなく勝つと盲信してしまったのだ。

案の定彼の攻撃はだんだんネクサスに簡単に見きられるようになり、遂に…

〈雷光閃！〉

ネクサスの雷撃の剣で脇腹を切られた。切られた瞬間、グレンファイヤーは膝を着いて脇腹を押さえる。

「ぐがっ…この野郎…！」

松葉杖代わりにファイヤースティックで体を支えながら立ち上がる。

が、休む間も与えずネクサスは自分の技『双夢幻』で作り出した幻影がされたように、グレンファイヤーを坂さまに持ち上げた。

「おいこら！放せ！」

必死にもがくがネクサスの呪縛から離せない。ネクサスは空高く飛び上がると、そのまま坂さまにグレンファイヤーを持ったまま地上へ急降下、彼を思い切り地面に叩きつけた。

〈ネクサスドライバー！〉

「ゴブッ！」

叩きつけたと同時にネクサスはグレンファイヤーから離れた。

ちょうどその頃、ネクサスとグレンファイヤーの決闘を見にテファとマチルダが孤児院の子供たちを連れてやって来た。

「派手に暴れてるねぇ…あいつ」

「さて、そろそろ懺悔するべきじゃないか？エマのフルート踏み潰したことを」

両腕を組んで上から目線でグレンファイヤーを見下ろすネクサス。

対して膝を着いてるグレンファイヤーはまだ諦めようとはしてなかった。

「俺が…俺が最強なんだよ！そう認めてくれた船長たちに負け犬面して、帰れるかああ！」

ファイヤースティックに今までにないほどの炎を纏わせ、グレンファイヤーはネクサスに襲いかかってきた。

〈ファイヤーフラッシュ！〉

まだ諦めないか…その虫の悪さだけは認めたネクサスはジリッ…と剣をグレンファイヤーに向けて身構えた。その時、彼のエナジーコアの奥に隠れたリーヴスラシルのルーンが紅く輝く。

「デヤア！」

すれ違い様の形でグレンファイヤーは如意棒をネクサスにぶつけた。瞬間、ネクサスは炎に包まれて姿が見えなくなった。

「へっ…やっぱり勝つのは俺様…なっ！？」

またしても目を疑ったグレンファイヤー。ネクサスは焼かれたのではない。逆に身を包もうとするグレンファイヤーの炎をコートのように纏ったではないか。

よく見ると、竜巻がネクサスの足元より発生し、ネクサスを守るバリアのように巻き起こっている。本来敵の捕獲のために使っている技「ネクサスハリケーン」の風向きを自分から上空に向けることで彼は炎に焼かれることなくグレンファイヤーの炎を我が物にしたのだ。

「炎が炎を焼く瞬間、とくと味わってもらおうか」

炎につつまれし光の剣を構えた瞬間、ネクサスハリケーンの風力がグレンファイヤーを無理やり吸引させた。

「なっ、体が…！？」

後一寸先のところで、ネクサスは自分も竜巻のように回転して宙へ舞い上がりながらグレンファイヤーを炎の剣で斬りまくった。

〈鳳旋火！〉

「グォアアアア！！」

逆に炎の戦士がその熱さにやられそうになった時だった。大ダメージを受けてグレンファイヤーは地上へ落下する。ネクサスも地上に降りて彼に言った。

「貴様の弱点は冷静さをすぐに欠くところだ。少しは落ち着きを持って行動するんだな」

「ってめ…まだ俺様は負けちゃ」

とその時だった。突然グレンファイヤーにスポットライトのような光が差し込み、まるでＵＦＯに拐われるかのように彼は自分の意思と関係なく浮かんでいった。

ネクサスたちが上空を見ると、グレンファイヤーの真上に炎に身を包む巨大な船が浮かんで停まっていた。

『ぐれえええん!!お前という奴はまた勝手な真似しやがって…』

「せっ…船長!?」

船の甲板から三人、人間の中年の男性が現れた。彼らがこの船『アバンギャルド号』の船長兄弟『ガル』『ギル』『グル』である。

「いや…俺は…その…」

「言い訳は聞かんぞこのわんぱく坊主!後で勝手な真似をした分みっちりお仕置きしてやる!」

「い…嫌だ!待って!お願い!」

まるで助けを求めるかのようにグレンファイヤーは地上に手を伸ばすがかなわず、結局船に吸い込まれるように姿が見えなくなった。

『チクショおおおおおおお!待ってろよ!俺は必ず、戻ってくるからなあああ!!』

三人の船長の強引な強制搭乗が完了したのか、アバンギャルド号はどこかへ飛び去ってしまった。

(……結局あの熱血バカはなんだったんだ?)

ネクサスはなんのこっちゃ?と言うかのように首を傾げていた。まあできれば会いたくない奴ナンバーワンに指定されたが。

テファは先ほどのグレンファイヤーを見て、エマのフルートを無闇

に壊すような男ではないことは認知した。
（もしかして…意外に楽しい人？）と思いながら。

5　鏡の騎士（前書き）

グダグダな気はしますがやっと更新…です。お待たせしました

ちょっと危機かもしれません…

5　鏡の騎士

今日、トリスタニアの街は活気がいつも以上に溢れていた。まるで何かを祝福するかのように「万ざあああああい！」とどこからか聞こえてくる。

まるで、ではなかった。今日は国民たちにとって、そして一部の貴族にとっても喜ばしい日だった。

トリステイン女王アンリエッタとアルビオン皇太子のウェールズの結婚が決まったのだ。

それを知ったルイズは大喜びだった。今まで酷いほど愛する人と引き裂かれかけた幼なじみの恋が、ようやく成就したのだから嬉しくて仕方ない。

「おめでとうございます、姫様！」

『ありがとう、ルイズ』

モニター越しから自分の親友から祝福され、アンリエッタも笑顔を隠しきれていなかった。

『これもルイズやサイトさん、そしてシュウヘイさんのおかげですわ。ありがとう。あなた方の活躍がなければ、私は女としての幸せを掴めないままだったに違いありません』

「…気にするな」

シュウヘイは素っ気なく返した。ルイズはそんな彼の様子をしかめっ面で睨む。

「何よ?せっかく姫様がお礼を言ってるのにその態度、ホントヤな奴ね」

『いいのだよミス・ヴァリエール。彼は、あまり喜ぶ様子を見せたがらないだけさ』

「ウェールズ、その話はいいだろ。ところでアルビオン大陸の方はどうする気だ?」

この結婚、実際アルビオンの実質指導者であるウェールズが抜けると、今やトリステインの領土になったとはいえアルビオンの政治情勢を崩しかねない。だが、この結婚は政略的要素も含まれていた。

レコンキスタが支配していたアルビオンに対して、トリステインが戦後補償を多く求めなかった。そうなると自分たちのもらえる報償が少なくなり、褒美も切れてしまう。それで内部の連中が「トリステインはアルビオンの属国に成り下がった。降伏した」と心ない噂をたてていたりと不平を露にし始めたのだ。

ただの噂で終わればいいのだが、この噂に乗せられた愚か者が第二第三のレコンキスタを誕生させかねない。

今回のアンリエッタとウェールズはそれらを防ぐために表向きは政略の結婚をして、今や事実上の合併を果たした二国の連携を強めることにしたのだ。無論ただの政略ではなく、この二人は互いに愛し合ったことが最もな理由だ。

だがシュウヘイの言う通り、ウェールズのいないアルビオンはがら

空きと化してしまう恐れがある。

『その点に関してはなんとかできる。マザリーニ枢機卿がアルビオンに向かってくれると仰られた』

二人はマザリーニからの立候補で空いたアルビオンを彼に任せることにしたようだ。

『本当ならね、僕と同じアルビオン王族の血を引くティファニアに頼みたいと考えていた。彼女は僕たちの従姉妹だからね』

「従姉妹!?」

そんなの初耳だとサイトは目を丸くした。

『ティファニアの父モード大公は、ウェールズ様の父であるアルビオンの前国王の弟に当たります。モード大公は私にとっても叔父に当たりますので彼女も立派な王族なんですよ。なにより、彼女も王族が持つべき正しき心をお持ちですから』

「そんな、私には大役過ぎて…」

いきなり王様になれと言われてできるはずもない。ただ静かに暮らすことが望みと言えるテファにそのようなリクエストはかえって困らせてしまう。それに彼女は政治力が固められてないので不向きだ。

『いずれ夫として、ぜひシュウヘイには彼女を支えて欲しかったのだが…』

それを言われテファは顔を真っ赤に、シュウヘイはちょうど飲んで

いたお茶をブゥーーッ!!と噴き出してサイトにかけてしまう。（サイトは顔をしかめながら顔を拭き始めた）

「心臓に悪いぞ。ウェールズ」

『ははは、済まない。わかってるよ。君たちが望むのは王族の座ではなく、平和な日常だということをね』

二人の結婚式は一週間後の虚無の曜日に行われる予定らしい。サイト、ルイズ、シュウヘイ、テファの四人は特別に立派な宿を二人の権限で手配してもらい、式の二日前に街の高級ホテルに泊まることになった。

しかし、どこまでも『影』は付きまとうものだ。

「『冥王』の命令で来たのはいささか気に食わんが、この街の祝福の声が絶望に切り替わった時が楽しみだよ…フフ」

黒い帽子と黒いローブを身に纏う怪しげな男は街の中へ消えていった。

そして次の虚無の曜日。二人の結婚式が行われた。式はまずトリスタニアの教会で行われ、その後は街で盛大なパレードが行われるといった手順だ。

「ウェールズ・テューダー。そなたは始祖ブリミルの名のもと、アンリエッタ・ド・トリステインを愛すると誓いますか？」

「誓います」

「アンリエッタ・ド・トリステイン。そなたは始祖ブリミルの名においてウェールズ・テューダーを夫として愛すると誓いますか？」

「誓います」

ここに来て誓えませんなんて言えるはずもない。二人は誓いの口づけも交わし、式はめでたい形で終わった。

翌日はいよいよパレードになる。

用意されたホテルのロビーで四人はその事を振り返っていた。

「やっぱり姫様は麗しいわ。今日はウェディングドレスでより一層増したと思わない？」

ルイズがサイトに問う。

「ああ、ホントにそう思う。シュウヘイとテファはどう思う？」

「うん、綺麗だった」

「…ああ」

テファは素直に答えたが、シュウヘイはボソッと呟いていた。話を聞いてないと見てとれる彼の様子に、ルイズは少しイラッとする。個人的に彼女はシュウヘイのことを快く思えずにいた。

「なによ、姫様の美しさが理解できてないの？」

「…」

彼女の眼光にも怖じけた様子を見せず、ただ横目でどこかを眺めていた。

（ウェールズは遂に愛する人と結ばれるのか…）

自分の手のひらを見つめ、彼は思う。

正直言えば、ウェールズを羨ましく思っていた。彼はやっと愛する人との幸せを掴むことができた。だが、自分がそう想い続けた人は…

地球にいた頃、『彼女』の血で染まった自分の手のひらの有り様がフラッシュバックのように蘇り、少し手が震えた感覚を覚えた。

（いや…腐るほど負い目を感じても仕方ないな）

シュウヘイはロビーの椅子から立ち上がってどこかへ歩き出した。

「どこ行くんだ？」

後を追うようにサイトが尋ねる。

「もう寝る。明日、あいつの門出をとことん祝うとしようか」

（…）

テファには今の彼の目がどこか悲しげに見えていた。

「果たして、祝えるかな？」

「！」

サイトは思わず自分の背後から発せられた声に反応するかのように振り向いた。しかし、振り向いた先には誰もいない。

「サイト？」

「えっ、ああ～なんでもない。俺たちも寝ようぜ」

ルイズの不思議そうな眼差しから逃げるように作り笑いを浮かべてサイトも自室へ歩き出した。その時の彼が、シュウヘイとは違う意味で深刻な顔をしていたのは誰も知らない。

（一瞬黒い服と帽子の男が見えた。でも…幻だったのか？）

少なくともわかったのは、一瞬その黒い服と帽子の男から凄まじい悪意を感じたことだけだった。

「ウェールズ様、私たちはようやく…」

「ああ…」

一方二つの月の光が差し込む城のアンリエッタの私室で、ウェールズとアンリエッタは夜風が吹き込むバルコニーから街を見下ろしていた。

「大変なことだらけでしたわね」

今までの出来事を振り返るアンリエッタ。確かに大変、いやその言葉だけでは表しにくいことが多すぎた。二人を引き裂こうとした、かりそめの民主制を掲げて乱を起こした不義の組織レコンキスタ。それだけではない。ハルケギニア大陸だけでなくこの星で現れることのないはずのイレギュラーな存在である怪獣。二人は何度も引き裂かれそうになったが、やっと未来をつかむことができた。

「三年前でしたね、私たちがこうして愛し合い始めたのは…」

三年前のアルビオンとトリステインの貴族たちの晩餐会の中、二人はひそかに会場から抜け出してラグドリアン湖のほとりいた。そこで風のルビーと水のルビーを見せ合い、小さな虹を作っていた。

『風と水は虹を作る。王家を繋ぐ橋を』

『私たちにもいつか、美しい虹の橋が架かりますように。たとえ私たちを引き裂く運命が待ち受けても…』

その時、アンリエッタは輝かしい宝石を散りばめたティアラを頭から外してそれを見つめた。

『異界より、始祖の力となりし鏡の戦士が私たちを救ってくださるでしょう』

そして三年たった今、その架け橋は完成した。しかし、抜け目を見せないような表情でウェールズは口を開いた。

「まださ、まだこれで終わりじゃない」

いつまたレコンキスタを継ぐような愚か者が出てこないとも限らないし、怪獣の脅威が過ぎ去ったわけでもない。結婚は終わりではない。始まりなのだ。ウェールズは何度も言い聞かせていた。これから二人でハルケギニア中の体制を少しずつ変えていかなくてはならない。今まで通りの政治を続けては、怪獣を相手にするどころか、その前に国が内部崩壊しかねない。

「僕たちには怪獣に敵うだけの力は保持していない。ならせめて、この世界を守ろうと命を懸けている彼らのために、僕たちは…」

「この国を変えていこう、ですわね？」

愛する夫に続くように、アンリエッタは微笑みながら言った。

「つまり人が変わると言いたいのですかな？」

とっさに二人は背後を振り向いた。暗くなった部屋の影よりコン…コン…と何者かが忍び寄ってくる。気配だけで理解できるほど、黒くて深く、深い何かを感じ取った二人は杖を手にとる。

「何者ですか!?」

「なに、ただの訪問者ですよ」

月の光に照らされ、歳をとった男の口元が露になった。歪んだ笑みを浮かべてこちらを見ている。

「しかし、国を変える、か。生温い理想ですな」

「なんだと…」

いきなり会って人の話を立ち聞きして、しかも人の夢をないがしろにするような言葉。初対面への対応とは思えない。ウェールズは黒い服の男を睨む。

「あなたは、この国の…この世界の何を知ってて言ってる?」

「…人間の本性ですよ。ウェールズ・テューダー殿」

自分の名前を知ってる。この男は一体何者なのだ?それに人間の本性?

「人間とは、特に貴族は醜い生き物ですな。神を崇拝して聖職者を気取る一方で立場の弱い者を蔑み、ゴミのように扱う。政治的な邪魔者がいたら汚い手口で陥れる。その醜さがやがて平民にも伝染し、亜人などとのつまらない衝突を招く。そして争って憎しみや恨みが生まれ、それが更なる争いの火種となり、繰り返される。これが愚かでなくてなんと言うか?」

「「…」」

図星としか言いようがない。元にアンリエッタは幼い頃から世話になった高等法院長リッシュモンが賄賂や政治的汚職、果ては売国奴同然の犯罪を犯した。醜い政治家代表である。ウェールズも平民たちを偽の民主制のために立ち上がらせ、自分たち王族に反旗を翻したレコンキスタの汚さを忘れたことはない。

だが、そんな人々を守る人だっていることも知っている。この世界が良い方向に変われると信じて戦う二人の戦士を知っている。

「あなたが思ってるほど、人間は弱くはないですわ」

「それは『ウルトラマン』の存在の有無が決めているだけでは？」

「「！」」

得体の知れない怪しげな男の発言で言葉を失う二人。その発言によるものではない。

直感だがなんとなくわかっていたかもしれない。

この男は、自分たちよりウルトラマンを知っている。

「あなたは…何者だ？」

杖を向けるウェールズに、男は言った。

「私は…『異次元人ヤプール』。ウルトラマンとはつくづく縁のある者」

男が自らヤプールと名乗った瞬間、城からほど近い街から爆発音が響いた。

「なんだ!?」

街から火の手が上がっている。しかも街に巨大な影が見える。金色の亀の甲羅のような鎧を持つ怪獣が暴れている。ビームを撃ち込んだりして建物を次々と破壊していった。祝い事前夜で油断していた人々は対応に遅れながらも怪獣から必死に逃げていた。

「せっかくの初対面なので置き土産を差し上げますよ。『鋼鉄怪獣アイアン』を。では…」

ヤプールの背後の空間突然ガラスが割れたような穴が開き、ヤプールはその中に入った瞬間、割れた空間は跡形もなく閉じられた。

「ガアアアア!」

まずいことにアイアンがこちらに迫ってくる。

「アン、ここは危険だ。退こう!」

「ですがウェールズ様！私たちは…」

いくらサイトたち平民たちと関わったアンリエッタも元は王族として育てられた身だ。簡単に城を捨てることなどできない。だがウェールズは違った。

「城よりも、命を優先するんだ！早く！」

とその時だった。二人のいるバルコニーの足場が、アイアンの鉄鎚によって破壊され、二人は宙に投げ出されてしまった。

「うわあああああ！」

「きゃあああ！」

地上から何十メートルも離れている。このまま落下すれば命の保証など馬鹿げた話だった。

終わるのか…

命の恩人である友達に報いることもできないまま…

やはりアンリエッタとは許されない愛だったのか？

だったら今まで僕は…

落ちる最中、ウェールズの頭の中は真っ白になっていった。

その時、月の光に照らされて反射したアンリエッタのティアラが光り、ウェールズを照らした。
光を浴びて、彼は本能からか、思わず叫んだ。

ミラー！！

瞬間、二人のいた場所が強い輝きを放ち、光は巨人の形を成した。
銀色の体と、顔には闇夜に輝く金色の光の十字架。

遠くから見ていたヤプールと、突然の怪獣の出現にホテルを飛び出してきたサイトたち。サイトとヤプールは同時に彼をこう呼んだ。

「鏡の騎士…『ミラーナイト』か（！？）」

ミラーナイトは高く飛び上がり、アイアンの頭の先に自分ぼ足を引っ掛け、アイアンを無理やりひっくり返した。

「デア！」

立ち上がったアイアンの頭からビームが放たれたが、ミラーナイトは鏡の盾を瞬時に構成、アイアンにビームを跳ね返した。

アイアンにダメージはいったようだが、鋼鉄の体なだけあってあまり通じていないようだ。ミラーナイトはアイアンの攻撃を待ち構えるように身構える。しばらくの沈黙の末、アイアンに攻撃の意思が見られないのを認知したミラーナイトはいざ反撃に転じようとアイアンに向かって突出した。しかし、ぶつかりそうになった瞬間アイアンの姿がまるで霧のように消え去った。

「！？」

あの重たそうな硬質な体で一瞬も内に姿を消すとは、予想だにしなかった。あたりを見渡してアイアンを探すミラーナイト。とその時、背後からアイアンが姿を現し、ミラーナイトの四肢を捕まえて動きを封じてしまった。さらにアイアンの、先が二つに分かれた尾が彼の首を絞めつける。

「デア！」

その体制からミラーナイトはアイアンの両腕から自分の両腕、そして両足を無理やり解放してすぐ前転、アイアンからわずかに距離を置いた。アイアンに対地攻撃を仕掛けようと飛び上がるが、隙を見せた彼にアイアンのビームが直撃してしまった。

地に落ちたミラーナイトに、威圧感を露にしながらのしのし近づくアイアン。このままやられてしまうのか？

だが、ミラーナイトは諦めなかった。一発逆転を狙って必殺のナイフ状の光線をアイアンの顔面に向けて撃ち込んだ。

〈ミラーナイフ！〉

「デア！」

「グオオ…！！」

光線は見事にアイアンを貫き、アイアンは力尽きて倒れ、奇妙な緑色の液体を流しながら絶命した。

勝利を悟ったのか、ミラーナイトも霧のように消えていった。

「敵はウルトラマンだけでは済みそうにないな…」

他にも手を打たなくては…ヤプールはそう言い残し、割れた空間の中へ再び姿を消した。

「…」

サイトはしばらくミラーナイトのいた場所を見つめていた。

果たして味方なのか敵なのか…

それはまだわからない。

『ウェールズよ、６０００年前にこの世界に大災厄が起きたことは知っておるな』

『はい、父上』

『その時代、秩序を守る戦士がいたことまでは知らないだろう?』

『秩序を守る?そんな者がいたのですか?』

『うむ。我々アルビオン王家はその血を…』

「…さま!ウェールズ様!」

彼女の声が聞こえてきた。うめき声をあげながらウェールズは起き上がった。

「ああ…よかった」

また自分たちを引き裂く不届きな輩のせいで大事な人を失うかと思ったアンリエッタはウェールズの胸に飛び込んできた。

「僕は…」

夢だったのか?さっきまで何をしていたんだろうか?確か城のバルコニーからアンリエッタと一緒に落ちたはずじゃ…

さっきまでの記憶が途切れていた彼は、一体何が起こっていたのかわからなかった。ただわかったのは、愛する人がそばにいるという温もりだけ。

それからしばらくして、街が少し修復されてから二人の結婚記念パレードは再開され、トリステインは再び活気に満ちることとなった。

6　狙われない街

それは、ある日の夜のことだった。

「がああああああ！！」

トリスタニアの街の路地裏から凄まじい叫び声が響いた。まるで本能のまま暴れる怪物のように轟くその声の主の男性は、建築の材料として使われていた棒を振り回して周りにいる数人ほどの人々に襲いかかっている。

「止めろ！」

王宮の魔法衛士隊や銃士隊な隊員たちも騒ぎを聞きつけ、暴れる男性を止めようと奮闘するも、呪文の詠唱が間に合わなかったり銃で撃ち込む余裕も与えられない男性の暴れっぷりに苦戦する。

しかし、男性はそれからわずか一分ほどで突然倒れ伏した。

「なっ…なんだ？」

一体なんだったのだろう…その場にいた者たちは首を傾げるしかなかった。

ただわかったのは、男性のそばに、タバコの入った小さな小箱が転がっていたことだけ。

「ヤプール！？」

ハルナのパソコンの画面に映るウェールズの口から聞いた『ヤプール』という単語にサイトは過剰反応した。

『ちょ…どうしたんだいそんな血相を変えて』

「変わるも何も、なんで早くそいつが出てきたことを教えなかったんですか！」

「～～！」

凄まじい雄叫びでパソコンの前に座っていたハルナは耳を塞いだ。

「平賀、止せ！」

モニター越しのウェールズに怒鳴り散らすサイトをシュウヘイは彼の肩を掴んで静めさせる。

「そのヤプールとやらは俺も知らないんだ。いくら危険人物でも知らないことでいきなり他者に怒鳴るのはいいことじゃない」

「ご…ごめん…」

「ヤプールって何者なんだい？」

横入りするように尋ねるギーシュにサイトは全員に教えるつもりで向き直った。

地球人としてのサイトが生まれる数十年前、ウルトラ兄弟の五番目『ウルトラマンエース』が地球防衛に関わっていた頃、ヤプールは

怪獣を生物兵器として強化した『超獣』を送り込んで何度も地球に痛みをもたらした凶悪なエイリアンで、後に六番目ウルトラマンタロウ、三・四年前ウルトラマンメビウスが地球にいた頃にもまた復活してウルトラマンたちから見ても宿敵格の危険人物。ウルトラマンからも恐れられ、しかもしぶとく復活するヤプールに基地にいる全員はまだ見ぬヤプールに戦慄する。

「ねえサイト。そのヤプールも気になるんだけど、姫様たちの結婚式に現れたあの銀色の巨人もウルトラマンなの？」

ミラーナイト。サイトが名付けたあの巨人もまたウルトラマンでは？とルイズに問われた。

「いや、あれはウルトラマンじゃないよ。顔つきとかから全く違ってたし…でも基本的なスペックはほぼ同等だと思う。ただ…」

「ただ…どうした？」

歯切れ悪そうなサイトにシュウヘイは不思議そうな視線を放つ。

「だいぶ昔、『ミラーマン』っていう鏡を象徴とした戦士がいたってきいたことがあってさ、そいつに似てたから『ミラーナイト』って名付けたんだ」

『あの…』

ちょっと空気化してたのが嫌だったのか、ウェールズは声を発した。気がついたように

「あっ、すいません…。ところで今日は？」

ウェールズからの依頼でサイトとルイズの二人はトリスタニアで起こった事件の現場に着いた。

現場の路地裏はガラス窓が粉々に砕かれ、所々血のあとも残っている。

「酷い有り様ね…メイジが一思いに暴れたみたい」

「ああ…」

一体どんな人間がこれほどの被害を与えることができるのか不思議だ。

「すみません」

サイトは現場にいた調査隊の一人に詳しい事情を訊いてみた。ウェールズから聞く限り、人が突然狂変して暴れだしたと言っていたが…

「ここ最近多いんですよ、いきなり暴れだす連中が。加害者は気絶したところを全員捕まえて取り調べてますけど、みんな暴れている間の記憶が飛んでたそうです」

「つまり、何も覚えてないってことになるの？」

ルイズの問いに、「はい」と調査隊兵士は答える。

「暴れてた癖にシラを切ってるのかしら？」

加害者の言っていた言葉にルイズは胡散臭そうに顔をしかめる。

「いや、そうとは限らないはずだ。とにかく加害者の人から話を聞いてみても遅くないと思う。
取り次げますか？俺たちはウェールズ様より今回の件の調査を依頼されてましたが」

「あっ、はい。ではこちらへ」

兵士に連れられ、二人は捕らえられた加害者のいる留置所に向かった。
大体市街地で犯罪をおかした者は罪が重くない限りは街の衛士隊の部屋にしばらく保護されることになっている。現在暴れた加害者には危険はあまり感じられないため、見張りの兵士が一部屋ずつ加害者たちの部屋の前で見張っているのだ。もしもの時を考え、兵士の監視下のもとサイトとルイズは加害者から話を伺ってみることにした。

「どうして街で暴れていたか教えなさい！」

話を早速聞こうとしたところでルイズは加害者の男性に怒鳴り出した。

「し、知らないんです！暴れてたかどうかの記憶なんてないですし…」

相手は貴族の令嬢。それだけでも平民である彼には恐ろしかったのか、男性は怯えながらも無実を訴える。

「まあまあ娘っ子、相手を怖がらせたらまともに話が聞けねえよ。落ち着きな」

サイトの背中に背負われた鞘からデルフが顔を出して宥め、しぶしぶながらもルイズは黙り込んだ。ふう…とサイトは一時はどうなるかと、と言ってるかのようにため息を着いて、改めて男性に尋ねてみることにした。

「暴れていた時の記憶は本当にないんですか？」

「はい…休みで仕事がなかったので私はいつものように買い物に出掛けてました。食料に酒とかタバコとか…」

「タバコ…？」

「そっ、そう言えばタバコを吸ってからの記憶が無かったんです。まるで私の頭の中に何かが沸き上がるような感じがして周りが見えなくなって…」

「そのタバコはどこで？」

「飲食店近くにあるタバコ屋で買いました」

「…」

暴れていた理由をたかがタバコのせいにするのか？ルイズは言い訳臭く思って男性に一言もの申そうとしたが、その瞬間サイトは

「お話してくれてありがとう」

そう言い残して部屋の扉に向かっていたのだ。納得しきれない様子でルイズはサイトを引き留める。

「ちょっと待ちなさいよ！タバコのせいにしてるだけじゃない！もっと問い詰めて…」

「いや、これ以上問い詰めても無駄だルイズ。他の加害者の人たちからも訊いてみようぜ」

それから二人は数件分の加害者たちからなぜ暴れたのか、暴れた時の記憶はないのか尋ねていったが、全員同じように「タバコを吸ってからの記憶はない」と答えていた。

建物から出てきた時にはルイズも加害者たちへの疑いが晴れかけていた。全員同じことを言っていれば、何かあると確信していたらしい。

「とりあえず、あの人たちの言ってた店に行ってみようぜ」

「わかったわ」

二人は互いに頷いて加害者たちの言っていたタバコ屋に寄ってみることにした。

その時、密かに怪しい人影が二人を物陰から覗き見ていた。

「在庫が一個だけだったけど、これだけでも調べれるかな？」

学院のＵＦＺ基地でルイズと戻ってきたサイトはハルナに店から買ってきたタバコを見せた。

タバコの箱を見て、ハルナなシュウヘイは少し驚いたような顔になった。なぜなら、そのタバコの箱と中身は地球で市販されているものとあまり変わらない形だったのだ。

「なあサイト、本当にこんなタバコで人間が暴れていたのかい？」

「話を聞く限り、そうとしか言えないな」

たかがタバコで、といまいち納得できずにいるギーシュに、サイトは否定する根拠がないので「違う」とは言えなかった。

「うーん…」

ハルナはタバコを千切ってその中身を出すと、なにやら赤い謎の鉱物が顔を出した。

「これは…」

急いでデスクに座り、彼女はコンピューターのキーボードを叩く。いくつかの検索の末、あるデータファイルが画面に現れる。

「このタバコの赤い結晶が原因みたい。しかも、ワイ惑星の宇宙ケシ…」

ファイルを開くと、画像に赤いケシの花が表示された。この結晶はその花から採取されたものらしい。

「そんなにマズイものなの？」

ルイズが尋ねると、ハルナは迷うことなく頷いた。

「この結晶に火をつけて起こる煙を吸うと、人間の脳に悪影響を及ぼすの。理性を麻痺させ、目に映るもの全てが自分の敵と認知する。最近の事件の加害者たちはみんなこのタバコを吸っていたから暴れたんだわ」

タバコにこんな麻薬よりも恐ろしいものを混入させるとは…ギーシュやルイズ、同じく同室だったレイナール、モンモランシー、テファ、シュウヘイは血の気が引くのを感じた。こんなタバコが世界中に広がったら、あっという間に各地で紛争が勃発、国を簡単に滅ぼしてしまう。

とその時だった。

「あ〝あああああああああ！！！！」

学院の校舎からとてつもない叫び声が響き、さらにはガシャアアア

ン！とガラスを割る音が轟いた。何事かとサイト、シュウヘイの二人は基地を飛び出して校舎に向かう。

「ちょ、ミスタ・ギトー！どうなさったのです！」

「あ〝あああああああああああ！！！！！！！」

中年の女性教員シュヴルーズが、ちょうど通りかかったと思われる生徒たちを逃がしながら同僚のギトーを止めようと、土系統の魔法で作った粘土を彼に向かっていたのだ放とうとしたが、ギトーの風魔法「エア・ハンマー」がその余裕すら与えることなく彼女を吹き飛ばした。

「あ〝あああああああああああ！！！！！」

ギトーはそれからも生徒たちや止めに入ろうとする同僚教師たちにも魔法を連発していく。正気の沙汰ではない。サイトは両腕をクロスして力を込めた。

「デュ…！」

「ぬ…がぉああ…」

ウルトラ念力。その超能力でギトーは杖を落とし、最終的に死んだように意識を失って倒れた。直ちに駆け寄ると、彼の足元にタバコの吸殻が落ちていた。

やはりギトーもあの禁断のタバコを吸ってしまったらしい。

「シュウヘイ、俺もう一度街に行く。その間に姫様たちに、ただち

にタバコの回収を兵士たちに行わせるよう伝えてくれ」

「ああ、わかった」

シュウヘイにそう言い残し、サイトはただちにホーク一号に乗ってトリスタニアの街へ急行した。

「売り切れ…」

タバコ屋のタバコはすでに在庫切れ、とは言ってもさっきサイトが買った分が最後なのだが。

それにしてもこのタバコを利用した事件、どこかで聞いたことがあったようなないような…

サイトが思考したちょうどその時、行儀悪く何かを捨てた男がいた。

ポイ捨てなんか…一言注意しようと捨てたものに目を運ぶと、彼は思わず手を引っ込めた。

捨てられたのはあのタバコだった。バッ！と顔を上げると、たった今ポイ捨てした男がこちらを殺意を秘めた眼差しでこちらを見ていた。

「うあああああ！！」

真っ先に目が入ったサイトを彼は近くに落ちていた木材を持って襲いかかってきた。

「くっ！」

辛うじて避けはしたが、男の暴走は止まることを知らない。ブンブンと木材を振り回し、店棚や窓ガラスが壊れ行くのを気にも止めず、目に映った人々を襲う。

「何をしている！！」

ちょうど通りかかった魔法衛士隊兵士が駆けつけ、男の攻撃を掻い潜って彼を取り押さえる。それでも男は喚きながら必死に抵抗したが、しばらくして意識を失って微睡んだ。

「大丈夫か？」

「はい、大丈夫です…」

兵士に手を差し伸べられ、サイトはその手を掴んで立ち上がる。

「これて何件目だよ…ったく」

最近の事件に頭を悩ませてる様子だ。サイトの怪我がなかったことを確認した兵士は気を失った男を背負ってどこかへ去っていった。

それにしても、このタバコは誰が販売しているのだ？サイトは店を覗き込んでみた。先程までいた店員はいなかった。すでにとんずら

していたらしい。

まさか…辺りを見渡してどこかにいないか確認してみた。

「ん?」

誰かが建物の物陰からこちらを見ている。あいつか!サイトは自分を覗き見ていた影を追って走り出した。

「くそ…見失ったか」

先程の影を追って薄暗い路地裏にたどり着いたが、見失ってしまった。一体どこへ消えて行ったのだろうか?このまま見逃したら、被害が拡大しかねない。

その時、彼の足元に何かが転がってきた。どこか懐かしい音と共に落ちてきたそれは、なんとジュースなどに使われる地球製の空き缶だった。

「なんでこんなところに…」

この星にこんな空き缶はなかったはずだ。敵は地球を知ってるのだろうか?

「…」

上を見上げると、目の前の建物の窓が空いている。

まさか、誘っているのか。

「旦那…」

「ああ」

敵はあの建物の二階にいるようだ。狭い場所だからそれに備え、サイトは右手にウルトラガン、左手に地下水を持ってその建物に入り込む。

中は古くて人気がありそうにない。蜘蛛の巣があまり見られないから誰が住んでいるようだ。

入ってすぐのところに二階に続く階段がある。足音をたてないように彼は階段を上がっていく。二階の踊り場にたどり着いた瞬間、ギィィ…と扉が開いた。

「ここだな…」

ゆっくり半ドアの扉を掴み、バッ！と開いてウルトラガンを構えた。

しかしいたのは…

「やっ♪」

白髪の生えた６０歳近くの男性だった。

「あなたは…？」

「何って、わからないの？いやー父親と違って鈍いのかねえ」

老人は少々拍子抜けたように呟いた。

「父親？」

どこか引っ掛かる単語だ。彼は一体何が言いたいのか？

「あれは４３、いや４年前だったか…私は侵略工作のため地球に潜伏していたのさ。タバコに宇宙ケシから取れる赤い結晶を混入させてな。異様な暴走で地球人同士の信頼関係を壊して同士討ちを計る。でも残念なことにバレちゃってね。君の父親とその仲間にまんまと作戦が明るみになった上に倒されたのよ」

「まさか、お前…」

「まあまあ、こっちに座りなよ」

老人はおいでおいでと手招きしながら部屋の中へサイトを案内した。そこには床に敷かれた畳と、その上にちゃぶ台。他には回りにハルケギニアの店などに並んでいたものや地球製の本やおもちゃや、たくさんのお土産グッズが置いてある。老人は靴を脱いで畳に座ると、一個の空き缶をサイトの前に置く。

「はい、眼兎龍茶（メトロンちゃ）」

「…」

怪しそうに茶の入った缶を睨むサイト。この中にもあの結晶が入ってるのでは?と疑ってしまう。

「毒なんか入ってないよ。ほれ」

毒味のつもりで老人はストローを通して飲む。ちょっと胡散臭いがサイトもプシュッと缶の口を開けてお茶を飲んだ。

「あ~おいち~♪」

老人がそう言った瞬間、彼の姿は一瞬にして人間の姿から全くの別物に変わった。ビックリしてサイトはぶっ!と噴き出しそうになる。

「ごふっ…そ、そうか。道理で俺の親父を…」

さっきまで老人の姿だったこの異星人は自分も知っている。

幻覚宇宙人メトロン星人。

「いやー懐かしいね。君を見てると地球で君の父親『ウルトラセブン』とこうやってちゃぶ台越しに話したのを思い出すよ。その正義の味方らしい目付きがそっくりだ」

「お前はなんでこの星にいるんだ?確か親父に倒されて死んだはずじゃ…」

「あの時は私も死んだかと思ったさ。でも辛うじて生きてたんだよ。セブンが立ち去った隙に傷ついた体を引きずって家に置いてた予備の宇宙船に戻っていざ地球を去ろうとしたら、いきなり私の宇宙船が光に包まれたんだ。そして気づいたら地球とは似て非なるこの星

に漂流してたわけよ」

キリヤマ隊長と同じパターンだ。このメトロン星人もハルケギニアに偶然ながらも流れ着いてしまっていたのだ。

「どうしてすぐに帰ろうとしなかった？」

「帰ろうにも帰れないさ。怪我の影響もあるし、宇宙船も修理できないほど大破しちまったんだから。だからしばらく潜伏させてもらったんだよ。旅人気取りでこの星を転々と旅しながらね」

「なら、なんでタバコに麻薬みたいなあの結晶を使う必要があったんだ」

「だったらウルトラマンゼロ。君に尋ねるよ。人間を守る意味があるのかい？」

一時的に老人の姿になって眼兎龍茶を飲み、また元の姿に戻るメトロン星人。

「この星の人間は過去に囚われすぎて、国が起こって６０００年経った今でもちっとも進化してない。これも為政者たちがバカのままだからさ。しまいにゃ無関係の平民にまでバカが伝染するもんだから街中どこを行っても『猿』だらけ！地球だってそうだ。進化し過ぎて便利にこだわり過ぎ、今じゃ便利なツールを手に入れたせいで脳が畏縮してる。
うんざりしたし、別に深いことしなくても地球もこの星も私たちの手に落ちると確信したんだ。だから帰る」

「何…！」

その時のサイトはウルトラガンを握る力を強めていた。

「そんな怖い顔するなよ。お前さんだって宇宙人の仲間だろう？守らなくたっていいじゃないか。身分なんかで対人関係を取り持とうともせず礼儀も知らない、私的で無駄な戦争とかで環境を壊す人類を。なんなら一緒にメトロン星に来るか？」

「いいから早く帰れ！いずれここもバレて捕まる！」

いきり立つようにウルトラガンの銃口を向けるサイト。

「そんな物騒なもの向けるなよ。ならジャンケンしよう。もし君が勝ったら私は帰る」

ジャンケンで…なんか間抜けな解決法だが、気にしてはダメなのだろう。それにしても、手の形からしてメトロン星人は手も開けないしグーのように握り拳も作れない。つまりチョキしか出せない。

「バカなやつだ…」

聞こえないようにサイトはちょっとメトロン星人を嘲笑う。

「何か言った？」

「い、いや…」

「んじゃ、最初はチョキ！ジャンケン…ポン！」

同時に二人の手が向き合う形で並ぶ。無論サイトはグーでメトロン

星人はチョキだ。

「ああ～、やはり私の弱味を知っていたか～」

メトロン星人はわざとなのかそれとも本気なのかわからないが、悔しそうな様子で頭を抱える。

「さて、ちょっと」

荷物の山の前に立ってサイトを誘い込むように手招きするメトロン星人。

「え？」

「荷物が多くてな～。もうすぐ仲間が迎えに来るんだけど片付け手伝ってくれよ」

「そんなのあらかじめやっとけよ…」

どうも憎めないこのメトロン星人。侵略者としてのキャラが全くと言っていいほど見られない。自分としては平和的解決ができそうな流れだが、さっきからこいつのペース。なんか腑に落ちない。

十分後、荷物はメトロンの風呂敷の中に詰め込まれた。

「あっ、そう言えばあのマジックアイテム買い忘れてたな！悪いけど買ってきて」

こいつパシる気か！

「なんでもいいから早く出ろよ！人を暴走させるもの流出させるなんて真似をしたんだ。いずれお前のことを他の連中に突き止められ、最悪捕まって処刑されるぞ」

「人間なんかに捕まるほど脆弱じゃないさ」

相変わらず余裕とノリノリな態度を崩さないメトロン星人。再び畳に座った。

「んじゃあもう一回ジャンケンしよう。それで私が負けたら、さっさと消える！」

「…宇宙人に二言はないぞ」

「それを人間たちにも教えてやれよ」

そう言ってメトロン星人は手を突きだし、サイトもジャンケンの構えをとる。

「最初はチョキ！ジャーンケーン…ポン！」

このときまでサイトは自分が絶対グーで勝つと思っていた。

メトロン星人の手がパーでなければ。

「…え？」

いつの間にかメトロン星人は老人の姿に変身していたのだ。これならチョキ以外も出せる。まんまとサイトは油断してしまったのだ。

「おあいにく様、同じ手は食わないぞ。いつでもあると思うなアザザクラっと…イェーイ！」

ガシャアアアン！

メトロン星人は立ち上がった瞬間、そのまま建物の天井を突き破って巨大化した。

外は美しい夕日が沈もうとしている。

そして夕日とは反対側の真っ暗な空から、サイトの変身したウルトラマンゼロが飛来した。

「デュ！」

警戒の意を示しながら身構えるゼロ。

「人間の住む星の夕日は美しいものだ。これが一番の土産になる」

「つべこべ言わずに立ち去るか、もうこの星で人間らしく大人しくしててくれ！でないと俺はお前を倒さなくてはいけない」

忠告するゼロに、メトロン星人は「ビュウウ♪」と口笛を吹く。

すると、夕日の方角から丸いものが二つくっついたような形の何かが近づいてくる。メトロン星人の仲間の宇宙船だった。

メトロン星人はゼロに手を振ると、なぜかゼロも親しみ深げに手を振ってしまった。

「おい相棒、なに仲良さげに…」

ゼロスラッガーの片方からデルフの呆れぎみなツッコミでゼロはハ

ッ！となる。

（や、ヤバい！あいつのペースに呑まれてた…）

気を取り直してメトロン星人の方を見るが、メトロン星人は青い球体となって宇宙船に飛び込み、宇宙船は街に危害を与えないまま遥か彼方へ飛び去っていった。

（この星や地球に見切りをつけたのか…）

その翌日、メトロン星人の発売したタバコは魔法衛士隊や銃士隊によって強制回収、処分された。

メトロン星人は地球では悪名高い存在だった。しかし、実際は本当は親しみやすい知的生命体。だから武力ではなく謀略による侵略を企てたのかもしれない。その動機が彼の星の内情に関わることなのか、それとも彼らの私的な楽しみや領土拡大のためなのかは、結局わからないままだった。

7　奮闘のマリコルヌ

宇宙より飛来した謎の隕石。それはハルケギニアのとある大地に落下した。その夜から、落下地点付近の山脈に異変が起こる。

「ううあ…」

トリステインとガリアの国境に存在する山脈地帯。

皆さんは霧を当然、ご存知なはず。大抵冬に近づいていく頃に時々空気中を包む真っ白な煙に似たもの。しかし、この地帯はさほど寒くもないし、夏が近い時期。

にもかかわらず。と言わざるをえなかった。

霧が立ち込めていた。その霧の中を、恐怖から必死に逃れようと走る男性の姿が見えた。

「はあ…はあ…あ！」

走っている内に彼は転んで落ちた木の葉だらけの地面に倒れ、霧に包まれていく。彼はその中で見た。

死人のような、白目を向きながらこちらを見下ろし、ゆっくりと近づいていく。

早く立ち上がって走って逃げなければ。しかし、恐怖のあまり腰が抜けて立ち上がれない。

「あ…あぁ…あああああああああ！！！！」

その日から、その男性を見た人は誰もいない。悲鳴もまた、霧の中へと滅していった…

国境付近の異常は王室へ、そして学院のＵＦＺ基地にも伝わった。

「霧？」

「ええ、さっき女王様からの連絡でガリアとの国境付近の山脈に謎の飛行物体が落下、それから異常な霧が発生、行方不明者が続出してるって」

一同はハルナから今日起こった事件の詳細を聞いていた。

「さてマリコルヌ、そろそろ君も任務に出かけるときではないか？」

「ああ！？」

ギーシュからいきなり吹っかけられてマリコルヌは嫌がりの声を上げた。実を言うと、彼は今不機嫌だった。それも周りの連中が寄り付かなくなるほどの。

「そ、そんなに怒るなよ…何かあったのか？」

彼を諌めようとするサイトだが、マリコルヌからの怒りの視線で、話しかけたらかえって機嫌を損ねると悟って黙ることにした。そんななか、まだ気になる様子のテファにレイナールは耳打ちする。

「あの…この前ベアトリスと君のトラブルで彼女の騎士団と僕たちが衝突したじゃないか。その後マリコルヌもちょっとモテたんだけど…」

それ以上言うまでもないが一応言うことにする。要するにせっかく手に入れた女子生徒たちからの人気が他の男性陣（彼以外のＵＦＺメンバー）にもっていかれてしまい、ついさっき告白した相手から無残にも振られてしまったのだ。

「はあ…」

大切に思う人はいるものの、恋愛経験がまだまだ浅いテファ。振られた男の気持ちを完全に理解しきれなかった。少なくとも残念そうな様子なのは確かだが…

「…で、そこに行けというわけか」

聞こえていたようなのか、マリコルヌの不機嫌の原因を知って呆れた様子で頭を抱えるシュウヘイ。

「サイト、君は先日の事件で一人苦労しただろう？今回はシュウヘイとマリコルヌに任せてみては？」

「大丈夫なのか？」

ギーシュの提案にサイトはいろんな理由で困惑した。まだ任務に着いたことのないマリコルヌをいずれ現場に派遣しなければならない

のは確か。しかし今機嫌の悪いマリコルヌとあまり親しくない他人との関わりを持とうとしないシュウヘイ、この組み合わせだと現場で衝突、事件解決が余計に難航する心配がある。

同行者にマリコルヌがくることにシュウヘイの反応は、相変わらず。

「行く気がないのなら俺は一人でいい。ただ止めはしない。着いてくるなら勝手に着いてくればいいさ」

カチン！マリコルヌの眉間にシワが寄る。

「君はずいぶん図に乗ってるな！美女たちに好かれてるからっていい気になって！この色男！」

「美女からの人気？そんな低俗なものに興味はない」

彼の発言に全く応じないユウヘイ。

「み、見ていろよ！僕はみんながびっくりするほどの効果を持つ『究極の惚れ薬』を！」

それを聞いて全員「ハハハハハハ！！！！！」と爆笑の嵐を起こした。シュウヘイだけは笑わず、ため息をついていた。

（薬による恋愛など幻想にすぎんだろうが…）

「惚れ薬の使用は法律に禁止されているわよ」

無理のある虚勢を張るマリコルヌに、モンモランシーが横入りする

ように言った。人のこと言えないくせに…とサイトはぼそっと彼女を横目で見ながら呟いた。

「準備をしてくる」

シュウヘイは一同に背を向けると、二階にある自室に向かっていった。

それから数分後、彼は普段と違う服装で降りてきた。

「おま…その格好!?」

その場の大多数が驚いていた。黒と紺を強調とした軍服のようだった。

「この格好、久しぶりだな」

自分が着込んでいる服を眺め、指先が露出されたグローブをしっかり付け直すシュウヘイ。知っているかもしれないが、これは彼が所属していた対ビースト対策チーム『ナイトレイダー』の隊員服だ。もしかしたら怪獣の巣窟に潜ることがあると考え、普段着よりも防具としての役割を果たせるこの格好が良いと考えた。

「本格的だなお前…ちょっとかっこよくて羨ましいけど」

サイトにとって地球防衛軍の服装は憧れでもあったので、自分も着てみたいと思っていた。

「ふ、なにを言うんだい?僕のファッションセンスの方が」

自慢げに高らかに薔薇を掲げるギーシュだが、彼を除く全員から（

モンモランシー含む）「それは絶対ない！」とドつかれ、部屋の片隅でいじけてしまった。実際彼の格好は制服ではなく、彼の絶望的ファッションセンスによるもの。かなりのナルシストである彼は、これがナイスだと錯覚していた。哀れなりギーシュ。

「じゃあ平賀、ウルトラホークを借りるぞ」

「あ、待ってよ！」

シュウヘイが基地を出ると、マリコルヌも彼を追って出ていった。その後、ウルトラホーク1号は二人を乗せて発進した。

「シュウ、気を付けて…」

心配そうにテファはホークの飛び去った空を見上げていた。

「しかし、この鉄の竜はすごいものだね。生きた竜よりも遥かに速い」

窓の外に見える景色がホークの速度のあまりドンドン変わっていくのを見ているマリコルヌは驚いていた。

「それにサイトしか操縦出来ないハズのこれを君も動かせるなんて」

「原理は俺の元いた世界の飛行兵器とほぼ同じだ。試運転のときは思った以上の苦労はなかった」

「…」

できて当然みたいな言い方しやがって…とマリコルヌは心の中でぼやいた。同時に劣等感も覚えた。シュウヘイやサイトはほぼなんでもできると考えられる。サイトはあの女王からシュバリエに叙せられた身。シュウヘイもウェールズから同じ階級を手に入れた数少ない平民の一人。しかも戦場慣れしている様子だ。それに比べたら、自分はなんと非力なことか。

自分もアルビオンの戦場に立ったことはある。しかし、ベテランほど戦うことはできなかった。戦場で殺されかける恐怖、人を殺す恐怖に恐れをなし、戦場からできる限り逃げようとすることに必死になっていた。

（どうしたら君たちみたいになれるんだ？）

とその時だった。ホークの機体全体が大きく揺れ出した。

「っぐ！」

「わわわ！なな、なに！？」

「ちい、操縦不能か…不時着する！」

ホークは幸か不幸か指定された現場の山脈付近に着陸した。二人はホークから降りて死んだように枯れている林を歩く。

「一体どうなってるんだ！いきなり揺れたと思ったら地上に落ちたし！」

「なにか強力な磁場に捕まったようだな。通信も封じられている」

不時着直後、シュウヘイはパルスブレイカーで本部のハルナに連絡をとろうとしたが、ノイズのせいで連絡が取れずじまいだった。

「現場に向かうぞ。この磁場と現場で発生した霧、何か関係があるのかもしれない」

「えええええ！！！もう帰ろうよ～…」

今の不時着の衝撃でマリコルヌはもう懲りかけていた。

「しばらくホークは使えん。帰りたくても帰れんぞ。そんなに帰りたかったら徒歩で消え失せるんだな」

「う…わかったよ」

つまりここで一人待っていろという意味と悟り、渋々ながらもシュウヘイに着いていくことにした。

二人がホークから離れていくのを、小さな人影が見ていたのを、このとき誰も知らなかった。

「この辺に小さい村があるはずなんだが…」

予備に保管していたトリステイン王国地図を拡げながら、シュウヘ

イは当たりを見渡していた。歩いて約３０分。太っちょのマリコルヌはもう息を切らしていた。

「ち、ちょっと休憩しない？ぜえぜえ…」

「ん？」

向こうにいくつか小さな家が見える。地図に載っている村のようだ。気になった二人はその村に足を踏み入れた。しかし、妙なことがあった。

人の気配が全くなかったのだ。二人は手分けして村中の家を一回りしてみた。が、誰もいなかった。誰かいないか不法侵入をしてでも村人たちの安否を確認したが…

「誰か見つけたか？」

「ダメだよ。誰も見当たらなかった。でもついさっきまで人がいたような気がするんだけど…」

「もう一度くまなく探すんだ。要救助者が一人でも見つかったら躊躇わず保護しろ」

とその時、シュウヘイは何か気配を感じ取り、咄嗟に振り向いてブラストショットを構えた。最初は敵か、火事場泥棒かと思ったが、全く違った。見たところ１６歳ほどの少女だった。彼女は疲れきったようにシュウヘイに寄りかかるように倒れ、シュウヘイは少女が地面に落ちる前に彼女を抱きかかえた。よく見ると、服が濡れている。

「大丈夫か!?」

「…りが…」

何かうわごとのように言っている。二人はその言葉に耳を澄ませてみた。

「霧が来る…」

少女はそのまま意識を失ってしまった。

「ん…」

少女はゆっくり目を開いた。気がつくと何かの建物の中のベッドに寝ていた体を起こして周りを見ると、ベッド脇に太っちょの男と、キッチンに整った顔立ちの青年がいる。

「ここは…?」

「気がついた?」

「ひゃ!」

いきなり太っちょの男、マリコルヌが顔をのぞき込んできたものだから少女はびっくりして身を強ばらせた。その時、彼女はあることに気がつく。さっきまで着ていた服が干されている。今の自分の格好は平民の女性が着てそうなものだ。

「風邪予防とはいえ、済まないがあんたの服、濡れていたから渇かせてもらった」

「ふぇ！？」

確かに濡れていたが、知らない間に脱がされていたらしい。少女の顔は真っ赤に染まった。

「そそ、そんな！いきなり過ぎますよシュウヘイ様！私、恥ずかしすぎて死んじゃ…」

布団に恥ずかしそうに顔を埋める少女。しかし、対するシュウヘイは全然羞恥の念が見受けられなかった。それどころか、ある確信にたどり着いたように少女を見ている。

「さっきのお前の服からすると、お前も学院の生徒か？」

「ううう…」

少女は当然だろうが今だに顔を埋めたままだ。ふう…とシュウヘイは本日三度目のため息をつく。

「着替えさせたのは俺じゃない」

「…へ」

彼女の顔の熱が一気に冷めた。じゃあ着替えさせのはシュウヘイではなく…

「いやあああああああああ！！！！！」

「ぶほ！？」

鉄拳制裁。それからしばらく少女の暴走が続いたのは言うまでもなかった。

ようやく彼女が落ち着いてから話を聞いてみた。このときのマリコルヌは顔が腫れ上がっていたが。（元から腫れてもいるが）

少女の名はブリジッタ、魔法学院の一年生でテファとは同級生にあたる。なぜその無関係なはずの学院の女子生徒がここにいるのかというと、その理由はなんとも不純なものだった。

「俺の活躍が見たかった？」

間抜けに声を上げるシュウヘイにブリジッタは頷きながら頬を朱色に染める。彼女はどうもシュウヘイのファンであるらしく、彼がベアトリスの身勝手な異端審問で捕らえかけられたテファを、身を呈してまで守ったその姿に惹かれてしまったという。彼が重要な任務を上流階級の人間から受けているのを知り、気づかれないようにウルトラホークに忍び込んでいたのだ。悪気はなかったとはいえ、マリコルヌが自分の服を乾かしたことを聞くまで恥ずかしくもちょっぴり嬉しそうな様子だったのはファンであるが故の反応と見られる。

しかし、かえってそれは彼を不快にさせた。なにせここは戦場よりも危険かもしれないのだ。命が奪われてもおかしくない。

「俺は見世物じゃない。ふざけた理由で付いてこようとするな」

「…ごめんなさい」

憧れの男からきつく叱られ、ブリジッタは落ち込んでしまった。すると、外からなにか物音が聞こえてきた。もしかしたらこの家の家主だろうか？シュウヘイは外の様子を見に玄関から出てみた。

「申し訳ない。怪我人の保護を頼もうとしたんだが、不在を承知で…」

そこで彼は言葉をとぎらせた。何人もの村人らしき集団が集まっていた。家主に見える人間は見当たらない。というか様子がおかしいのだ。目に生気は宿っておらず、死人のような目でこちらを見ている。

原因は一目で分かった。彼らの首元に何か気持ちの悪い臓器のような物体がグジュグジュと音を立てながら張り付いている。女子供や老人も含めた村人たちは、鎌や鍬…本来農業に使う道具を凶器のように振り上げてこちらに近づいてきた。

「「「あああああああああああ……」」」

「おい！窓も扉も全部閉めろ！」

戻ってきてすぐ彼は玄関の扉を閉め、マリコルヌたちに怒鳴り散らした。他の二人も外を見て動揺しながらも、咄嗟に扉や窓を閉める。

「どうなってるんだよこれ！」

「俺が知るか！裏口から脱出するぞ！」

三人は急いで家の裏口から脱出した。

しばらく林の中の獣道を走っていると、さらなる驚異が彼らを襲う。

霧に紛れ、先程の村人たちにへばりついていた物体が何十も飛来し

てきたのだ。彼らが狙っているのは、シュウヘイたち三人。

「き、気持ちワル！」

「気をつけろ！こいつらが村人たちを操っていた！」

ブラストショットの銃声が、彼の怒声と共に唸る。マリコルヌもこのままやられる訳にもいかず、杖を取り出して風の魔法で謎の物体に攻撃した。

「エア・ニードル！」

風で構成された鋭い針が、物体たちを貫いていく。

「きゃ！」

その中、ブリジッタの腕に物体が密着することもあったが、シュウヘイがその個体を無理やり引き剥がし、波動銃の弾丸で破壊する。しかし、数は一向に減らなかった。むしろ霧の中から次々と飛び出し、数が増えていく。

「これじゃあキリがないよ！」

「下らんシャレを言ってる場合か！霧に追いつかれる前に退避だ！」

峠から見下ろす村の姿は、すっかり霧に包まれたいた。あの中にいる人間たちはおそらくひとり残らずあの奇妙な物体の餌食となっているはず。

「情報によると、最近ん落下してきた隕石が関係しているかもしれないな。奴らは宇宙から飛来した生命体、通信不能なのもおそらく…」

「どうしたらいいんだよ～～…あの化け物全員やっつけるとしたら無理がありすぎるし…」

弱気になるマリコルヌ。とその時、またしても霧が彼らに近づいてきた。

「もうここまで来たか…先に行け！ここは俺が食い止める」

「待ってください！シュウヘイ様は…」

まさか玉砕するつもりなのか？ブリジッタは声をあげた。

「いいから行け！その子を頼んだぞグランドプレ！」

「で、でも僕は…無理だ…」

君よりも非力だ。なのにこの娘を頼むと言われても無理難題でしかない。しかし、シュウヘイはマリコルヌの弱気な発言に腹を立てるように叫んだ。

「諦めるな！」

「…！」

その気合に押されたのか、マリコルヌはブリジッタを引っ張ってそ

の場から逃走した。残ったシュウヘイはブラストショットと、腰のホルダーにしまい込んでいたディバイドシューターで、霧の中から現れた物体を次々と撃っていく。

もうあの二人は逃げ切っただろうか？三分近く奮闘したその時だった！

「んぐぅ！」

ついに彼の首にもあの物体がへばりついてしまった。そのままバランスを崩した彼は、近くを流れゆく川の中に落ち、下流へと流れていった。

一方、シュウヘイと離れ離れになったマリコルヌとブリジッタは、ある小屋にたどり着いていた。

「どうして、殿方はみんな死地に足を踏み入れるんでしょうか…」

小屋の中でマリコルヌと二人、ブリジッタは口を開いた。憧れのシュウヘイも自ら死地に残って自分たちを逃がした。死んでまでカッコつけたいのだろうか？

「私の父上も、アルビオンとの戦争で戦死しました。祖国のためにと言って…」

「…」

「死んでどうしろって言うんですか？その人の死を、大切な人死を

喜べって言われても、そんなのただの人でなしじゃないですか！」

悲痛な彼女のわめきにマリコルヌは思い返していた。彼が別れ際に言ったあの言葉を…

『諦めるな！』

「…違う」

「え？」

「少なくとも彼は違ったよ。僕はそう思う。『諦めるな！』って本気で言える人が、簡単に死ぬことなんてできない。僕らも助けて、自分も生きるつもりなのかもしれない」

「…」

「どうして男が戦地に向かうかわかるかい？それは大抵貴族としての名誉を守るためとか言う人が多いけど、実はそうでない人も多い」

「なんで、あなたはそれをわかるんですか？」

「…たった今なんだけどね。ようやくわかったよ。それは…」

命に代えても、祖国には守りたい人がいるからさ。

「…！」

ブリジッタがその一言に大きく胸を打たれている時、ついに彼らのいる小屋にもあの霧が入り込んできた。

「まずい！」

すぐ外に出る二人だったが、そこでマリコルヌにピンチが訪れた。

「うあ！」

彼の胸元にあの物体がへばりついたのだ。力強くくっついて離れようとしない。家の壁に寄りかかり、杖を落とした瞬間彼は地面に倒れ込んだ。

「マリコルヌ様！」

ブリジッタは彼のもとに駆け寄る。密着時間が長引くに連れ、彼の意識が朦朧としていく。

「は、早く逃げるんだ…君も、奴らに…」

「シュウヘイ様の言ってたこと、否定するんですか！」

「そ、そうだった、かな…」

マリコルヌが苦しそうにしながらも謎の物体を握り締め、彼女も一緒にその手を優しく、そして強く握る。

極限状態になると人間はとてつもない力を発揮する。口の聴き方が悪くなるほどキレたら手が付けられない存在として、ルイズほどではないが密かに恐れられていたマリコルヌに相応しい教訓だ。

「人間なめたら…あかんでえええええ！！！」

バリ！自らの胸元にまでくっついていた物体を見事引きはがした彼は、再び風の魔法『エア・ニードル』でその物体を風船のように破裂された。

「やった！」

「いや、まだ安心はできない…」

この霧が被っている場所にはあの不気味な物体が襲ってくる。何か手はないのだろうか？とそこで、ブリジッタがあることを思いついた。

「水よ！」

「水？」

「はい、私が最初お二人にあった時を覚えてますか？」

「う、うん。確か全身濡れてて…！」

「私、お二人の前に来る直前、川沿いを歩いてシュウヘイ様を探してたんです。そうしたらあいつらが襲ってきて…」

マリコルヌもそこで納得した。奴らは水が弱点なのだ。彼女が自分たちと会うまでに助かったのは、その川に飛び込んでいたからなのだ。

「水の魔法は使えるかい？」

「はい」

「よし、水を作り出すんだ。僕の風で奴らに浴びせる」

言われたとおりブリジッタは水球を作り出し、マリコルヌはそれらを風で吹き飛ばす形で謎の物体たちに浴びせた。

ジュウウウウウウウ…

あの気味悪い物体たちは水を浴びた影響でみるみるうちにしぼみ、やがて消滅した。

「よし、行こう！」

ここに長くは居られない。二人はすぐさまその場を後にした。

一旦ホークの着地地点まで戻ろうとしばらく山道を進むと、二人はあるものを発見した。

「あれは…」

どこかさっきまで見てきた物体と似た、巨大な岩、いや隕石だった。その周りにはあの物体が飛び回り、その物体にくっつかれたせいで正気を失った人たちが集まっていた。

「あれが霧と、変な物体の本体？」

しばらく観察すると、人々から青い光のようなものが放出され、隕石に集まっていく。光を放射した人はだんだん死んだように倒れていった。くっついた物体を通して彼らから生命エネルギーを吸い取っているのだ。

「マリコルヌ様…」

「うん…！」

さっきのように水を浴びせれば、少しはなんとかなるかもしれない。二人は杖を構え、いざ作戦決行しようとしたときだった。霧がだんだん一箇所に集まっていき、形を形成している。やがて霧は、隕石と同じような不気味な姿をした怪獣となった。

『寄生怪獣マグニア』。

マグニアがこちらに迫ってくる。あの隕石を二人の思い通りにされたくないようだ。

「く！」

怪獣相手では、部が悪すぎる。自分たちの精神力はさっきまでの戦闘でそこり少ない。まさに絶体絶命の危機だった。

「ぐ…」

一方、川岸にうちあげられていたシュウヘイは目を覚ました。頭を強く打ったせいで気絶、そのままここまで流されてきたようだ。立ち上がった瞬間、彼は何か強大な何かを感じ取った。目を閉じ、デュナミスト特有の透視能力で見ると、マリコルヌたちがマグニアに襲われている光景が目に入った。

咄嗟にエボルトラスターを取り出し、鞘から引き抜いた瞬間彼は紅

の輝きに身を包んだ。

「デァ！」

空から降ってきた強烈な蹴りでマグニアは突き飛ばされた。なんとかマグニアから逃げ切ろうとした二人は、振り向いて目に映った光景を見て希望の光を目に宿した。

空からやってきた紅い光が地面に激突するように降り、やがて銀色の巨人の姿になった。

「ウルトラマンネクサス！」

「シャ！」

ネクサスが身構えた瞬間、隕石からエネルギーが放出され、マグニアに吸収された。人間から吸い取ったエネルギーでパワーアップを謀ったのだ。ネクサスもジュネッストリニティにチェンジ、マグニアにダッシュパンチを繰り出した。

「ハッ！」

それから連続で蹴り、パンチを何発を食らわせた。が、マグニアは全くと言えるほど効果が無かった。逆にマグニアのアッパーを受けて大きく仰け反ってしまう。

それからネクサスは光の剣で応戦、マグニアの体を切り裂こうと剣を振るった。

「ゼイ！デァ！」

拳による攻撃よりは効果があったものの、またマグニアは隕石から、今まで人間から吸い上げてきたエネルギーで回復、先ほどより重くなった鉄拳でネクサスを吹っ飛ばした。

「ヌオ！？」

「ピュウウウウ！」

さらなる追撃でのしかかってきたマグニアを、ネクサスは蹴り飛ばし、今度は地面に剣を突き刺すと、氷の牙が次々と氷山のごとくマグニアの足元から這い出でてきた。

〈氷狼牙！〉

「びゅ！？」

ただ体が氷の牙で体を切り裂かれただけじゃない。マグニアは自分を囲う氷山を嫌がっていた。そこから逃げようとしたが、氷に触れないのでは意味がない。

（氷、いや水が苦手なのか？）

しかし、弱点をつかんでもマグニアは無限にエネルギーを吸い取っていく。炎を氷山に浴びせ、溶かしてできた水を浴びせても回復されてしまう。

「ウルトラマン！あの隕石を攻撃するんだ！」

どこからかマリコルヌの声が聞こえてきた。早速当たりを見渡すと、マグニアの背後にあの隕石が置かれていた。ネクサスはマグニアが動けない隙に隕石の方へ飛び、中に舞い上がってる間に右拳に黒きオーラを纏う。そして隕石にその拳で殴りかかった瞬間、黒い光がネクサスの拳から発生、隕石を包み込んだ。

〈滅閃光！〉

「ディア！」

その黒い光に包まれた隕石はビキビキ！とヒビが入り込み、砕け散った。

「！？」

氷山に気を取られていたマグニアは、自分の命綱が奪われたことに呆気にとられる。だがまだ終わりではない。

〈炎竜昇！〉

今度は炎を纏った剣で氷山が切られた瞬間、氷は水となってマグニアの体にバシャ！とかかった。

「イイイイイイイイイイ！」

水を浴びたせいで体がだんだんしぼんでいく。しかもエネルギータンクの役割を担っていた隕石が破壊され回復もできない。
止めにネクサスは、胸のエナジーコアから凄まじい必殺光線を浴びせた。

〈コアインパルス！〉

「タアアアアアアア！」

光線を真っ向から受けたマグニアは、背もたれる形で倒れ、爆発四散した。

それから僅か二日後の学院…。

「見てくれよ！ブリジッタが僕のためにセーターを編んでくれたんだ！」

「やだ、マリコルヌ様ったら…」

マリコルヌとブリジッタがお揃いのハートマークのセーターを着た自分たちの姿を仲間たちに見せびらかしていた。マグニアの事件以前とはまるで別人だ。ついにモテなかった彼にも春が来たのである。

「あの惚れ薬なら、許せるな」

「な、なんで私を見るのよ？」

悪戯っ子みたいな笑みを浮かべながらサイトは横目でモンモランシーを見、対するモンモランシーはとぼけたような言い回しをしながらも、返す言葉が見つからなかった。

「ふん…」

ルイズは羨ましいという本音を隠すように熱々のマリコルヌを直視しなかった。

「マリコルヌさん、幸せそう」

テファはこのめでたい朗報に喜んでいた。

（おめでとう…）

そのクール性格からファンが減っても平気だった。それに今のシュウヘイには、二人を祝福する気持ちでいっぱいだった。これからもその幸せが、自分とは違って末永く続くことを祈りながら。

8　薔薇の悲劇

ズォオオオ！

昼間から凄まじい音の響く草原。そしてその真ん中を走っていたと思われる二台の馬車。一体何事だろうか？

この小さくも恐ろしい戦場に、ギーシュがいた。彼は今回アンリエッタから、ある人物の護衛を任されていたのだ。
その人物はアルビオンの兵器開発担当者で全権大使になったホーキンスで、対怪獣兵器の開発の協力者としてトリステインに招かれるはずだった。
しかし、ホーキンスは突然現れた襲撃者の発砲した銃によって殺されてしまい、馬車も破壊されてしまった。
現在ギーシュは壊されて横転した馬車の影にいる。
襲撃者は現在二名ほど。この命懸けの戦いの中ではさすがのギーシュも焦りを感じていた。

「行け！ワルキューレ！」

ギーシュの青銅でできた戦乙女のゴーレムが地面より光の柱から現れるように飛び出し、馬車の向こう側にいた二人の襲撃者を剣で切りつけた。

「ぐぎゃ！」

襲撃者たちは大怪我を負わされ、その場に倒れて意識を失った。

「くそ…ペリッソン！」

馬車の影から出てきて辺りを見渡すギーシュ。
実はこの任務、彼以外にも新しいＵＦＺのメンバーとして同行してきた人物がいた。
ペリッソン。以前キュルケと交際したが呆気なく飽きられたという可哀想な経験を持つギーシュの同級生。彼もこの任務で兵器開発担当者を護衛していたが、今の戦闘で行方がわからなくなっていたのだ。
「ペリッソおおおおおん！」
ギーシュが仲間の名を叫んだその時だった。
ＤＯＮ！
「っぐぁ！？」
ギーシュは突然脇腹を撃たれた。しかし、苦し紛れにギーシュはワルキューレに弓矢を放たせ、その矢はもう一台の馬車の影にいた別の敵に当たった。
「ぐ！」
もう一人の襲撃らしき男は頬を隠すように押さえながらどこかへ逃げ出した。
「あっ…ぐぅ」
追いかけようとするギーシュだったが、撃たれた腹の痛みと多量の出血のせいで意識が薄れていった。そのため、自分を撃った犯人の顔までは特定できず、その場に倒れてしまった。

「…シュ！ギーシュ！」

この聞き慣れた少女の声は…ギーシュは目を開けた。そこは基地の二回にある医務室のベッド。真っ先に視界に入ったのは、目尻に涙を溜めるに溜めた恋人のモンモランシー。

「心配かけて、もう…」

「もんも…あだだだ！」

いきなりモンモランシーに抱きつかれ、ギーシュはまた腹を痛める。

「モンモランシーさん、彼はまだ完治してませんから…」

「あっ、ごめんなさい…」

ハルナに言われ、モンモランシーはギーシュから離れる。

「ギーシュさんも迂闊に動き過ぎないでください。下手したら死んでいたかもしれない怪我だったんですから」

彼の治療にはハルナも協力していた。光の国独自の医療技術の一端を利用し、そしてモンモランシーとの協力でなんとかギーシュの一

命をとり止めたのである。しかし気になることがある。同行していたペリッソンはどこに行ったのだ?

「そう言えば、ペリッソンは?」

「あいつなら顔に軽い切り傷を負った程度で済んだぞ」

そこにサイトとルイズも入ってきた。

「ヒヤヒヤしたぜ。もしお前のモグラが助けに向かわなかったらあの世行きだったんだ。間に合ってよかった」

「僕のモグラ…ヴェルダンデか」

思えば、自分のいた場所は学院からもトリスタニアからも離れている。なにせアルビオンとトリステインを行き来していたのだ。ヴェルダンデがそんな距離を地面を必死に掘り進みながら助けに来てくれたのだ。後でご褒美を与えないと。

「今、ペリッソンは?」

「さっき姫様からのご褒美をもらいに行ったとか…」

「そうか…あだ!」

ルイズから話を聞き、無事をその目で確認しようと立ち上がるギーシュだが、やはり痛みは消えてない。

「無理すんなって。俺が運ぶよ」

「いやーおめでとうペリッソン。精霊勲章だそうじゃないか」

ペリッソンは立派なマントを着込んでいた。ギーシュはそんなかれに祝福の言葉を送る。サイト、ルイズ、マリコルヌ、レイナールも集まって二人の会話を聞いている。ペリッソンは今回の任務で、立派な功績をおさめたことが認められていた。実はペリッソンは本物のホーキンスと、魔法人形スキルニルで作った彼の偽者を犯人から見つからない内に入れ替え、ギーシュが二人の襲撃者と交戦してる隙に彼を無事トリスタニアまで運んでいたのだ。

「あのタバサと同じ階級、羨ましい限りだ」

「悪いなギーシュ。先を越させてもらって。おかげで『ゆーなんとか（ＵＦＺ）』とかいう殺風景な騎士ごっこの団体にずっといなくて済んだよ。はははは」

ペリッソンのその一言でギーシュ以外の一同はカチンとなった。新人の癖になんて失礼な奴だと。自分たちがどんな覚悟と思いで戦っていると思っているのだ。去り行くペリッソンへの視線は冷ややかだった。

「あれが同級生にいう言葉なの？失礼じゃない！」

「最近のペリッソン、言葉使いが悪くなってるよ。態度だって」

ルイズとマリコルヌがそれぞれ文句を言う。サイトもペリッソンの

軽率かつ礼儀のない発言に苛立ちを覚えていた。しかしギーシュだけは違った。

「あれでも根はいい男なんだ。ただ…」

ギーシュは自分の薔薇型の杖を見つめ、どこか切なげに呟いた。

「僕らの友情を邪魔してるのは…これかもしれない」

魔法。貴族全員が使うことができる力。同時に使い方次第でどこまでも大きくなれるその力は、魔法が使えない平民への差別意識の要因にもなった。だがなにも平民と貴族の隔たりだけではない。貴族同士のわだかまりも生み出す。ペリッソンのあの態度もそれによるものだろうか？

だが気になることがある。ペリッソンの頬にできたあの傷と、自分が銃弾で負傷した時自分の前から逃げ出した男…

「…」

一方で自室にいたペリッソンは自分の杖を見つめていた。すると、誰かの声が聞こえてきた。

『精霊勲章獲得おめでとう、ペリッソン君』

驚いたように顔を上げるペリッソン。今ここには誰も居ないはず。

なのに…いや、この声には聞き覚えがある。

「お前は夕べの？」

『君の望み通り勲章を与えさせるほどの活躍をさせたよ。勲章を貰ったのは、活躍した君一人だ』

「…ああ、確か俺は『仲間を消してでも勲章が欲しい』と言っていた。じゃあ昼の騒動はお前が？」

『そのとおり。だが、私の言うことを聞いてくれるなら、勲章よりももっと立派なものを君に差し上げよう』

「もっといいもの？」

『そう、例えば…世界とか』

トントン！ペリッソンと正体不明の声の会話に横入りするように、扉をする音が聞こえて来た。ペリッソンは会話を邪魔されたせいか、不機嫌そうな顔になる。渋りながらも彼は扉を開けると、ギーシュがいた。

「やあ、難しい顔をしているが、僕が邪魔だったかな？」

「いや、大丈夫だ。入るといい」

ペリッソンは何もなかったかのようにギーシュを自室に招き入れた。渋そうな顔は、もう消えていた。

「その傷、大丈夫か？」

ギーシュはペリッソンの頬を指さして尋ねる。そう言われてペリッソンはほほの傷を軽くさすって平気そうに笑った。

「あの任務で残った犯人を追っていたが、反撃されてな。なんとか成敗したがこの通りだ」

（…？）

仲間たちの言うとおりかもしれない。漠然とした勘だが、彼はいつものペリッソンとはどこか違う気がする。それにあの頬の傷には見覚えがある。そして自分を撃った正体不明の犯人。

「それはそうと、お前は腹の傷は平気なのか？」

「僕は別にいいんだ。ただ、今回君に訊きたいことがあってね」

「どうしたんだ？」

「ペリッソン、君は僕に隠し事をしてないか？」

ギーシュにそう言われたペリッソンは顔をしかめた。いきなり何を言い出すのだ？それとも…わざととぼけたフリをした。

「隠す？バカをいえ」

「しかし今の君はどうもいつもと違うようだ。なあペリッソン、僕たちは同級生で、あのアルビオンとの戦争で共に生き残った仲じゃないか。悩み事なら相談に乗るよ。恋の悩みなら特に」

対するギーシュも口ではちょっとふざけてはいるが、真意を隠しながら何かを突き止めようとしている顔をしている。

「うるさい、お前に話すことなど何もない。さあ、さっさと出て行け！」

「…仕方ない。なら僕から言おう」

やはり、本当の彼らしくない。ギーシュは単刀直入に訊きたいことを口にした。

「あの時僕を撃ったのは君だろ？」

「！」

真実を突かれ、驚いたようにペリッソンは目を見開いた。間違いなく予感していたとおりだった。ギーシュは気づいたのだ。今ギーシュが言ったとおり自分を撃ったのはペリッソンだと。

「本当は昼間の連中ともグルだった、そうだろ？」

しかし、ペリッソンはとぼけたまま馬鹿笑いを始めた。

「ははは、何を証拠にそんな言いがかりを付けるんだ？」

それでもギーシュは怯まなかった。決して揺らぐことのない証拠を既に持っていたのだ。

「証拠は、その顔の傷だ」

さらなる図星を突かれ、ペリッソンは思わず自分の頬の傷に触れる。

「さっき思い出したばかりだがその傷は、僕のワルキューレがつけたものだ」

「ち！」

舌打ちし、ついに本性を表したのかペリッソンは銃を取り出してギーシュを撃とうとするが、その前にギーシュが彼の腹に銃口を向けていた。ハルナからＵＦＺの隊員に配布されたその銃を向けたままギーシュは、部屋の扉の方へペリッソンを連れていく。

「さあ、銃を捨てろ。できれば君を撃ちたくはない」

「…やるなギーシュ、だが…」

案外素直に銃を落とすペリッソン。だがそれは罠だった。ペリッソンの持っていた銃のなかに、弾に似せて作られた爆薬があった。落ちた衝撃でその爆薬は花火のように暴発、ギーシュはそちらに一瞬気を取られてしまう。その隙にペリッソンはギーシュの銃を奪ってその持ち手の角を彼の頭に思い切り叩きつけた。

「ぐあ！うぅ…」

「ははははははははは！！！」

頭を強く打たれ、ギーシュはペリッソンを睨む。だんだん意識が遠のく中、ペリッソンの勝ち誇ったような笑い声がエコーのように聞こえ、やがてギーシュの視界は真っ暗になった。

「う…」

ギーシュはようやく目を覚ました。今彼は手足を、自分がすっぽり入る程の大きさのリンクから生えた拘束具によって動けなくなっていた。リングは静かに音をほとんど立てないまま回っていた。すると、自動扉の方からペリッソンともう一人、青い体毛に身を包む怪しげなエイリアンがやってきた。

『催眠宇宙人ペガ星人』。

「ようこそ、ギーシュ君」

「貴様、何者だ?」

「アルファ・ケンタウリ第十三惑星からきたペガ星人だ」

「ペガ星人、これはいったいどういうことだ?なぜペリッソンがお前と一緒にいる?」

「私はある方からこの国の制服と、ある人物の誘拐を命令された。しかしそのために君たちＵＦＺがいずれ我々の厄介な敵になると判断し、まずは少々姑息な手を使わせてもらった」

「まさか、ペリッソンが狂ったのはお前の仕業!?」

「その通り。彼には、今君を拘束している洗脳装置を使い私の命令通りに動く傀儡にさせてもらったのだ」

だとしたら、昼間の任務で自分を襲ってきたあの男たちもこのペガ星人仕業だと断定できる。だが一つ腑に落ちないところがある。

「しかし、なぜペリッソンを、人間を利用するんだ!?」

「残念なことに我々ペガ星の者はこの星の気圧に耐えられない。なにせペガ星は気圧の薄い環境の星なのだから、暑い気圧への耐性が出来ていないのだ。だから私はこの円盤から外には出ない」

「円盤?じゃあここは…」

「そう、私の船だ」

現在彼らのいるペガ星人の宇宙船は、夜風が吹き荒れる遥か空の上を飛んでいたのだ。逃げようにも逃げられない。

「君も私の命令通りに働く人形になるがいい。ふふふふ…」

「ぼ、僕は仮にもグラモン元帥の息子だ!そんな術には…」

かからないぞ!と言おうとした瞬間、ペガ星人は壁に埋め込まれていた装置のスイッチを押した。瞬間、彼を捕らえていた装置から凄まじい電撃が襲う。

バリバリバリ!!!

「ぐあああああああああああああ!!!!!」

翌日。基地にアンリエッタからの通信が入った。その場にメンバー全員が呼び出されたが、ギーシュとペリッソンは何事もなかったかのように無表情だった。あのいつもテンションの高いギーシュがこんなに沈黙していることに一同はどこか不安を感じていた。

『先日、ギーシュさんがペリッソン殿と護衛を頼んだホーキンス殿を無事アルビオンに送り返したいのです』

「じゃあ、新兵器の件はどうなったのですか？」

『まだ兆しは見えたばかりでなんとも言えませんが、今後のことも考え続行しなくてはなりません』

今のルイズの質問に答えた時の、モニター越しから見えるアンリエッタの顔は沈んでいた。

『前回彼の命を狙う不届き者に備え、今日はサイトさん、大変申し訳ないのですがあなたも行ってもらえませんか？』

「俺に？わかりました！ギーシュも連れていこうと思います」

前回の事件のことは、漠然とした勘にサイトは単なる野盗の襲撃とは思ってなかった。経験者であるギーシュを連れていったら何かわかるかもしれない。

謎の襲撃者のことを考え、今回はなるべく隠密に進めなくてはならない。翌日の早朝のうちに二頭の馬車を使ってアルビオンへ向かう

ことにした。

ペリッソンはホーキンスを乗せた先の馬車、そしてサイトとギーシュの二人はあとの方から着いてくる馬車に乗ることになった。

しかし、出発時間である翌日の早朝、ギーシュが奇妙な提案をサイトに持ちかけた。

「ルイズを連れてこい？なんで？」

「彼女の魔法は頼りになれる。是非連れていきたいんだ」

おかしい。ルイズの魔法は表向きでは全然頼れないものとして扱われている。実際に強大な魔力を持っていることを知っているのは自分やシュウヘイ、同じ虚無の担い手であるテファにアンリエッタとウェールズ。ギーシュには耳に入ってないはずだ。反対しようとしたが、そこに割り込んできた人物がいた。ルイズ本人である。

「私も着いていくつもりだったから安心なさい」

「はあ…」

これ以上とやかく言ってもルイズはまるで聞かないことが多かった。仕方なく連れていくことにした。

やがて準備が出来たところで二題の馬車は出発した。

しばらくして、サイトとルイズはギーシュのいつもと違う態度にだんだんと不信感を抱いていく。馬車を運転していたサイトはギーシュに話しかけてみた。

「なんかギーシュらしくないぞ。いつもみたいなチャラ男っぷりはどうしたんだ？」

「…」

「ちょっとギーシュ、あんたどうしたのよ？」

「…うるさいな。少し黙っていろ」

「「…」」

いつもの彼からは感じられない威圧感に二人はさらに違和感を覚えた。いったいどうしたのだ？とその時だった。

目の前の馬車の速度が、まるでバイクのように速くなっているではないか。しかも煙幕をまかれ、前の馬車が見えなくなっていた。煙幕が消えた頃に、ホーキンスとペリッソンを乗せた馬車は姿を消していた。

「くそ、なんなんだ？」

サイトは苦虫を噛むように顔を歪ませた。

「相棒、あのペリッソンての、なんか様子がおかしかった。何かあるぜ」

デルフも鞘から顔を出して言った。長年生きてきた勘がそう言っているようだ。

「ああ、さっきのを見れば一目瞭然だよ」

「私も何となくそんな気がしたわ」

ルイズも同級生であることもあってペリッソンのことは知っている。だから、彼のあの様子には疑問は抱いていたが、今のは余りにも不審にとれる行動だった。

道の上に前の馬車の車輪の跡がある。これを辿っていけばなんとかなるかもしれない。

「あの車輪の跡を追ってみよう」

「ええ」

「待て」

いざ鞭を振って再び馬車を動かそうとした時だった。鞭を持つサイトの手をギーシュが握り締めていた。

「手を放すんだサイト」

「何だって？」

いくらギーシュでもこの状況でこんなことが言えるのはおかしい。やはり今朝からの様子の異変は単なる意識障害などではないのか？

「ちょっとギーシュ！何を言ってるのよ！？」

「ペガ星人は、ある方からの命令でルイズの『誘拐』を依頼された。ペガ星人の任務は僕の任務。だから邪魔はさせない」

「じゃあ、お前まさか…」

「そう、僕はペガ星人のために」

と言った瞬間、馬車の外の地面からワルキューレたちが現れ、サイトたちに剣などの武器を振り上げ、襲いかかってきた。同時にギーシュも馬車から降りてワルキューレたちの背後に回る。

「ギーシュ、やめろ！」

「やれ！そしてルイズを捕まえろ！ペガ星人の主『シェフィールド様』のために！」

シェフィールド。その言葉に過剰な反応を表したのはルイズだった。以前ピット星人を操って自分を襲ってきた謎の女。ギーシュもペガ星人を通して何かされたのだろうか？

ワルキューレはかなりの数だった。初めて決闘したときの三杯、それにあれからもギーシュは腕に磨きをかけているため、苦戦しそうだ。

「娘っ子！始祖の祈祷書は持ってるか？」

いきなり怒鳴られる勢いでルフに言われてびっくりしたが、ルイズはコクっと頷く。

「そん中に解呪…『ディスペル』が出てくるはずだ！それを使え！その間俺たちで時間を稼ぐ！」

「わ、わかったわ！」

「よし、俺もなんとかするから頼んだぜルイズ！」

気合を入れながらサイトはデルフを鞘から抜くが、やはり性格上の躊躇いはあった。もし下手をしたら、ギーシュに万が一の事態が起こるかもしれない。そうしたらモンモランシーに恨まれるのは必然だ。以前シュウヘイとテファが保護していた少女を傷つけた時と同じように…でもこのまま突っ立っていたら殺されてしまう。ここは自分とルイズの腕を信じるしかない。

「だあああああああああ！！！！！！！！」

サイトは左手の甲に刻まれしガンダールヴのルーンを輝かせ、ワルキューレの大群に切りかかった。その間、ルイズはアンリエッタから譲られた水のルビーを指に装着し、肌身離さず持っていた始祖の祈祷書を開く。すると、ある１ページに文字が光りながら浮かび上がっている。

「これね！」

解呪（ディスペル）のページ。その呪文を彼女は静かに唱えていった。

「くそ！やっぱ前より強くなってる…」

そんな中サイトも必死にワルキューレからの攻撃を食い止めていた。

そして…

「ディスペル！」

ルイズの杖から白い光が放射され、その瞬間ワルキューレは溶けるように土に還っていく。この魔法にはいかなる魔法の力も無効化してしまう効果があったのだ。ワルキューレを失い裸同然となったギーシュ。サイトはすぐさま彼に近づいて、峰打ちでギーシュを気絶させた。

「ふう…サイト、大丈夫？」

「ああ、なんとかな。さあ、すぐに行こう！」

サイトはギーシュを背負って馬車に乗り、ルイズも乗ったのを確認すると、馬に鞭を打って馬車を走らせた。

「お、おい！これはどういうことだ！？」

一方、サイトたちから逃走を謀るペリッソンは、馬車を暴走特急のごとく運転していた。今は目的地からもズレている山道。場の異変に気づきつつあったホーキンスの言葉に、馬車を動かしていたペリッソンは怪しげな笑みを浮かべながら銃を向けていた。

「大人しくしてろ。さもないと殺す」

「く…」

その時、後方から何かが近づいてきた。サイトたちの乗る馬車だ。もうここまで追ってきたのだ。

「うるさい奴らだ」

ペリッソンはメイジのやり手とは思えない手段に出た。彼が取り出したもの、それは爆弾だった。火の魔法で着火、それをサイトたち

の方へ投げつけた。

ドオオオオオオオン！！！！

「うああ！」「きゃあ！」

爆発の衝撃で馬車は横転、サイトとルイズと気絶していたギーシュは放り出され、地面に激突してしまう。

「う…」

最初に起きたのはギーシュだった。彼は起き上がって当たりを見ると、横転した馬車と、地面の上で気絶している仲間の姿が目に入った。ただ事ではないのが丸分かりだ。

「！サイト、ルイズ！」

二人を揺り動かすが、二人は起きなかった。頭を強く打ってしまったせいでシグには目を覚まさないだろう。

「僕は何をしていたんだ…？」

記憶の糸をたどっていくギーシュ。そうだ、確かペリッソンと同じようにペガ星人の催眠術にかかって…

「そうだ！ペリッソン！」

今頃あいつはあの円盤にホーキンスを連れ去り、ルイズを差し出さなくてはホーキンスの命がないとか脅してくるかもしれない。確かここを登ったら追いつくはず。ギーシュは自分のいる道のすぐ右側

にある急な土手を登り出した。その上の道に着くと、ペリッソンの乗る馬車が走ってくるのが目に入る。行く手を阻もうと彼は五人ほどのワルキューレを作り出し、道を通せんぼさせた。
ペリッソンはちっ！と舌打ちし、ホーキンスを引っ張り出す。人質のつもりか。

「ペリッソン！君はペガ星人の催眠術にかかってるんだ！目を覚ませ！」

ギーシュは必死に説得を試みたが、ペリッソンは悪意のある笑みを浮かべたまま銃を下ろさない。

「ふん、騙されるもんか」

「騙されてるのは君だ！さあ、その銃を捨てろ！」

「断る！こいつを助けたければ、俺と勝負しろ！」

「勝負？」

「いいかギーシュ、俺が五つ数える。数え終わったらお前を撃つ」

「本気か…」

ギーシュの説得も虚しく、ペリッソンは銃を下ろさないまま、数値を数え始めている。殺らなければ、殺られるのか…

「一つ、二つ、三つ、四つ…」

そして、二人が互いに銃を向けた瞬間、バババン！と二発同時に発砲

された。果たしてどちらが倒れるのか。
倒れたのは…

「…ぅ」

ペリッソンだった。彼は胸元を撃たれていた。対するギーシュは幸い当たらなかったため無傷だった。

「ペリッソン…」

だんだん冷たくなっていくペリッソンの腕を、ギーシュはもの悲しそうに握った。その時、バン！と爆発音と共に近くの地面がひっくり返った。向こうの空を見上げると、ペガ星人の円盤がこちらに近づいてきている。今自分たちは格好の的だ。

「ホーキンス殿、さあ早く！」

「す、すまぬ…」

ギーシュはホーキンスを連れて急いで退避した。

一方、気絶していたサイトはその爆発音のせいか、目を覚ました。

「う…は！」

起き上がって目に入ったのはペガ星人のものと思われる円盤。彼はウルトラゼロブレスレットからウルトラゼロアイを取り出し目に装着、ウルトラマンゼロに変身した。

「ジュア！」

ペガ星人の円盤はゼロにビームを放つが、ゼロが×印に交差させた両腕で防がれる。しかし、次に発射されたのは強力な対空砲火。絶え間なく放たれるその嵐の中をくぐり抜けるのは決して簡単ではない。暴発による煙と砂煙で自分の姿が見えなくなるほどだ。

なんとかその対空砲火をくぐり抜けながらゼロは岩山の影に隠れシャドーアーマーを装着、手裏剣のごとき光弾を連射した。

〈手裏剣光線！〉

光弾は次々と円盤に当たっていくが、威力が弱くて破壊まではできなかった。このまま光弾を撃ち続けても無駄でしかない。鎧を解いて元の姿に戻ったゼロは対空砲火の中を無理やりくぐり抜けていった。

「デュワ！」

彼はそのまま空へ飛び出し、等身大の大きさになってペガ星人の円盤に侵入した。

「く、おのれウルトラマンゼロ！」

円盤に侵入し、自分の目の前にいる邪魔者、ゼロをペガ星人は恨めしそうに睨みつける。

「ペガ星人、なぜこんな馬鹿げたことをするんだ！一体なんのために？」

「黙れ、貴様に話すことなど何もない！」

「これは警告だ！今すぐお前の星へ帰れ！」

「うるさい！」

出来ることならこのまま見逃して置きたいのだが、ペガ星人はまったくその素振りを見せず、ゼロに飛びかかってきた。だが格闘術ではゼロの方が圧倒的に勝っている。ゼロに投げ倒された彼は立ち上がって近くにある装置のスイッチを押すと、真黄色のレーザーがゼロを襲う。だが、ゼロはそれを耐え抜いてペガ星人に深緑の輝きを放つ閃光を撃ち込んだ。

〈エメリウムスラッシュ！〉

「デュ！」

「ぐあ…」

絶命して床に崩れ落ちたペガ星人は、この星の気圧のせいか見る見るうちに膨らんでいく。ゼロは円盤から脱出し、再び巨大化するとL字型に両腕を組んで必殺光線を円盤に放った。

〈ワイドゼロショット！〉

ゼロの光線を受け、ペガ星人の円盤は岩山に墜落、大爆発を起こして消えた。

「…」

サイトとルイズに笑顔はなかった。今のギーシュは同級生を亡くした嘆きで何も言わない。彼はペリッソンの遺体の上に自分と彼の杖を交差する形で置き、静かに黙祷した。（悲しんでも仕方ない。そうしてる間にペリッソンのように犠牲になる人がいるのだから）と思いながら。

しかし、気になるのはシェフィールド。一体何のためにルイズをさらったりしたのだろうか？

（いつかまた会うことになったら、絶対許さないんだから）

ルイズは悲しみに満ちたギーシュの背中を見てそう思った。憎しみがないと言えば嘘になる。でも彼女と、彼女の使い魔は心を失わない。その黒くよどんだ感情に流される愚かさを知っているのだから。

9　少女の歌声

「な、なんだこれは？」

トリスタニアの街の郊外、王室よりその場の調査を依頼された魔法衛士隊。本来なら普通に草原が拡がっているはずだった。

真っ白のゴムのような巨大な物体。それがどういうわけか置かれているのを除けば。つついても何も起こらない不思議な物体。一体なんなのだろうか？

「隊長、いかがします？」

「手っ取り早く処分しろ。放置したら何が起こるかわからん」

彼らは、まさかこのまま放置したほうが逆によかった、そう思うことになるとは想像もしていなかった。

「ファイヤーボール！」

「ライトニングクラウド！」

「エア・カッター！」

一斉に発射される風や炎の魔法、巻き上がる砂埃と共に白い物体は炎上した。メラメラを燃え上がるその火によって誰もが焼き消されると思っていた。

「グルルル…」

炎の中から怪物の唸り声のような声が聞こえてきた。そして、その中から四足歩行の巨大な化け物が姿を現した。

「な！？」

さっき確かに焼き払ったはず。誰もが信じられない光景に目を疑った。

「う、撃て！撃てえええええ！！」

再びたくさんの魔法が一斉に発射されたが、驚かざるを得ないものを彼らは見ることになった。自分たちの魔法が次々と怪物に吸い込まれていってるではないか。

「な、なんなんだこの化け物はあああああ！！！！！？」

「ゴアアアアアアアアアア！！！！！」

「これって…」

基地のパソコンに搭載された怪獣センサーに反応が表れたことに気がつくハルナ。他にサイトもこの事態に気づいたように駆けつける。ディスプレイに映る地図に赤い点。怪獣が現れた証だ。

「お、おい！これ街のすぐ近くじゃんか！今シュウヘイたちが街の孤児院にいるってのに！」

「え！？」

「ハルナ！すぐシュウヘイに連絡入れてくれ！」

「わ、わかった！」

「どうだ？もう聴かせてくれるか？」

今日もシュウヘイとテファは孤児院に足を運んでいた。気になっていたのは自分たちの養っていた少女エマのフルートの演奏。孤児になる以前親が少ない財産を使って歌劇を彼女に見せたのがきっかけらしい。それで音楽に目覚め、是非二人にも聴かせたいと言っていた。

「まだちょっと不安だけど…やってみる！」

「テファも、やってくれるか？」

「うん、さっき軽く練習したから」

しばしの準備を経て、中庭に集まったたくさんの子供たちやシュウヘイ、そして孤児院の責任者であるマチルダが見守るなか、いよい

よ二人のミニコンサートが始まろうとしたそのとき、突然パルスブレイカーが音を鳴らし出した。起動させると、その小さな画面にかなり焦った顔をしたサイトが映った。

『大変だ！怪獣がそっちに向かってる！』

「何…？」

「グエアアアアアアアア！！！！」

巨大でおぞましいドラゴンのようなその雄叫びは、孤児院のすぐ近くから轟いた。さっき魔法衛士隊が目覚めさせてしまった怪獣がこの孤児院に近づいてきたのだ。

『完全生命体イフ』。

「逃げろ！怪獣が来た！」

シュウヘイが子供たちに一斉に警告したときには、イフは孤児院の中庭の真上の吹き抜けからも見えるほど接近していた。

「「「わあああああああああああああ！！！」」」

「落ち着いて！みんなで固まって逃げるのよ！」

怪獣がすぐ近くにいるという極限状態にパニック状態に陥る子供たちを、マチルダは冷静さを保って彼らを出口へ導いていった。

このままだと孤児院が破壊されてしまう。シュウヘイはエボルトラスターを取り出し、近づいてくるイフを睨む。しかし、自分の背後

でテファが最後の最後で残っていたことに気がつく。

「テファ、お前も逃げろ。」

「でも…」

本当は、戦って欲しくない。彼女は今そんな顔をしていた。

「早く行け！お前がここにいると俺は戦えない」

「…無理しないで、ね」

ようやくテファは出口の方へ走っていった。フゥー…と彼は少しため息を突き、再びイフの法に向き直る。もうあと一寸先にまで近づいていた。

「しなくて済めばな…」

彼は小さくそう呟くと、鞘からエボルトラスターを引き抜き、変身と同時にイフを孤児院とは反対方向に蹴飛ばした。

「ジェア！」

「ウルトラマンネクサスだ！」

孤児院から結構離れた場所にまで離れたところでイフの方を向いた子供たちの目に、光が戻った。

「シュウ…」

先に逃げた子供たちを追っている状態のため彼らほど孤児院から離れてなかったテファは、戦場の近くで自分の信じる銀色の戦士を見上げる。どうか無事で居て欲しいと願いながら。

「デァ！」

ジュネッストリニティにチェンジしたネクサスは孤児院からイフを離れさせるため、無理やりイフを押し出していった。イフも反撃のつもりで自分を後方に押し出すネクサスを頭突きで突き飛ばし、数多のメイジから奪い取った炎の魔法を口から吐いて攻撃する。

〈フレイムボール！〉

数々の炎弾が襲ってきたが、ネクサスは咄嗟に光の盾で防ぐ。しかし新たに風の魔法も彼に迫ってきた。

〈エア・カッター！〉

だが、今のネクサスには簡単に見切られた。光の剣を振るい、それらを切り裂いた。

〈シュトロームソード！〉

攻撃が止んだところでネクサスは両腕を×印を描くように下向きに重ね、一度空に向けて上げてすぐ十字型に組んで必殺光線を放った。

〈オーバークロスレイ・シュトローム！〉

「オオオオオ……デァ！」

「ギイイイ！！！」

光線を正面から受けたイフは、バアアアアアアン！と木っ端微塵に弾け、砕け散った。

「やったあああ！」

孤児院の子供たちや、テファに笑顔が戻った。誰もがウルトラマンの勝利を悟っていた。しかし、次に彼らが見た光景は、一気にその場の明るかった空気を冷ました。

砕けたはずのイフの体の破片が、次々と元の場所に集まっていく。ひとつ残らず一つに合成したイフの破片は、新たなイフを構成して蘇った。今度のイフは金色の鎧のような突起物を何本も生やし、二足歩行になっていた。

（バカな！）

流石のネクサスも動揺するしかなかった。何体ももビーストを倒した高威力の光線をモロに受けたのに生きているどころか、パワーアップして復活するなど…

しかし、まだ驚くべき出来事が起こった。イフはネクサスと同じように両腕を十字形に組み合わせた。

（まさか…！）

そのまさかだった。たった今彼が放ったものと全く同じ光線がイフから放たれネクサスに直撃、そのまま彼を吹っ飛ばした。

「ヌアアアアアアア！！！！」

「シュウの技を…吸収した…？」

攻撃を加えてもダメージは通らず、それどころか敵の能力を習得する。一体どうやって倒せというだ！？

「ガアアア！」

「グォ！」

猛獣以上に凄まじく吠えながらイフはネクサスに殴りかかってきた。ネクサスも反撃しようとイフにラッシュパンチ、キックを繰り出すが、全く効いていない。逆に回し蹴りを受ける始末。もう一発ジャブを受けて突き飛ばされたネクサスは身を屈めた体制で光の剣を再び作り出し、風の魔法から編み出した真空波を放ってイフの体に傷を負わせる。

〈覇風撃！〉

「ダア！」

傷を負わせはしたものの、この程度で倒れはしなかった。しかもイフもシュトロームソードを作り出し、全く同じ真空波「覇風撃」をネクサスに撃ち込んだ。

ドシュ！ザク！

「グア…！」

ピコン、ピコン…

体のあちこちがあっという間に切り傷だらけになってしまった上に、コアゲージも点滅を開始した。

「シュウ逃げて！このままだとあなたが殺される！」

「……」

悔しそうに握り拳を作るネクサス。悔しかった。まともに攻撃しても倒せず、ここまで完封なきに叩きのめされたことが。

「デァ！」

敗北感いっぱいの思いで彼は空の彼方へ飛び去っていった。

「がアアアアアア！！！」

イフの暴走は終わらなかった。標的を失った不満をぶちまけるようにイフは孤児院をその鉄槌で破壊していく。

「止めて…」

テファの願いも虚しく、イフはそれからも暴れ続けた。あのおぞましい姿に進化してからわずか三時間、トリスタニアの街は壊滅的被害を受けた。

そして、気付けばもう夜になっていた。

「私たちは、決して開けてはならないパンドラの箱をあけてしまったかもしれない」

幸い被害のなかった学院とそこに置かれた基地。もしもの自体に備え、シュウヘイとテファを除くメンバー全員あつまっていた。静まり返って夜の闇の中に、窓から差し込む月の光に照らされながらハルナは言った。

「シュウヘイとテファはまだ戻らないの？」

ルイズが尋ねると、ハルナはコクっと頷く。

「子供たちのそばに居てやらないとダメなんだって」

怪獣が自分たちの住む場所に踏み込む、まだ年行かない子供にはショックなのは間違いない。だから向こうに残ったままなのだろう。今度はサイトが口を開く。

「今、イフはどうしてるんだ？」

「さっきから動いてないってことは、きっと眠ってるわ」

「じゃあ、今のうちに弱点を狙って攻撃すれば！」

とルイズがいおうとしたが、サイトがそれを阻んだ。

「バカ言うな！お前さっきシュウヘイから奴の能力聞いただろ。あいつはウルトラマンの技も自分のものにしやがったんだ。たとえどんなに強い戦士が現れても、きっとその力もものにしちまう。余計な混乱を招くがオチだ」

「とにかく、今は手が出せない以上、僕たちにできるのは一般人の犠牲をなくすことだけだ。今は、見守ろう」

ギーシュの一言で、再び基地は沈黙に包まれた。

一方、シュウヘイはテファから傷の手当を受け、子供たちの安否を確認した。あの状況で全員無事とは限らないのだから。

しかし、夜になってからここで起こってほしくない事態が発生した。

「大変だシュウ兄！エマがいねえ！」

ジムの一言で一安心になるはずだった空気は一瞬にして変わった。さっきまで一緒だったはずのエマが、言葉通り行方が分からなくなったのだ。しかも彼女を探しにテファもここを離れてしまったという。

「あたしはここでチビたちを見てる。シュウヘイ、けがのところ悪いけど探してくれないかい？」

「わかった」

捜索をマチルダに任され、シュウヘイはバイクに乗って、まず街に進路をとって二人を探し始めた。

「怪獣さん…」

現在テファとシュウヘイが探しているエマ。彼女は今、あまりにも危険としか言いようのない場所にいた。

今、彼女の目の前にはなんと、あのイフが眠っているのだ。「グルルル…」を猛獣のようないびきを書いていることから、結構熟睡しているようだ。

「怪獣さんは、音楽嫌い？」

エマは瞼の閉ざされたイフの顔を見て言う。

「私は、大好きだよ」

「エマ！」

そこにエマを探しに来たテファがやって来た。目の前に怪獣がいることも構わず。すぐに彼女を抱き抱えて逃げようとしたが、抱えられる前にエマはそれを拒むように首を横に振ると、テファが歌う時によく使う使うハープを彼女に差し出した。

「お姉ちゃん、歌って」

「え？」

「怪獣さんに、聴かせてあげたい」

怪獣に歌を?普通に考えればこんなことは正気の沙汰ではない。もし起こしたりしたら、真っ先に狙われるのは目の前にいる自分たち。でもエマはフルートの吹き口に唇を添え、吹き始めた。

♪~♪~

笛の音色が、夜空に美しい旋律を奏で、冷たかった空気が暖かくなるような感じがイフに伝わっていく。

そして、イフは閉じていた瞼を開き、赤く光る目をギラリと光らせ、立ち上がった。それに反応するようにテファはエマを庇うように彼女を抱きしめ、イフを睨む。

しかし、イフは二人を襲う素振りを見せなかった。それどころか、彼の体に不思議な変化が見られた。

ズズズ…とイフの体からパイプが何本も生えてきた。そのパイプは、パイプオルガンのように、旋律を奏で始める。その曲は、エマがフルートで吹いたものと全く同じものだった。

テファは声にならないほど驚いていた。あれほど恐ろしい力と能力を見せつけたイフが、さっきまでの、破壊だけを求める怪物とは縁遠く感じた。

歌ってみよう。彼女はハープを手にとり、弦をポロンと指先で弾きながら歌い始めた。

神の左手　ガンダールヴ
勇猛果敢な　神の盾
左には握った大剣を

右には握った長槍で
導きし我を守りきる

神の右手はヴィンダールヴ心優しき神の笛
あらゆる獣を操りて
導きし我を運ぶは地海空

神の頭脳はミョズトニルン知恵の塊の神の本
あらゆる知識を溜め込みて導きし我に助言を呈する

そして最後にもう一人
記すことさえ憚られる

エマの奏でる旋律とテファの神々しい歌声。それを聴きながら共に演奏していたイフ。恐ろしい怪物の姿をしていたイフは腕がトロンボーン、背中が巨大なハープ、そして顔が歌声を響かせる女神像に変化した。

♪~♪~

駆け付けたシュウヘイは、その瓦礫だらけの平野のコンサート会場と、少女と美女とそして彼女たちに会わせながら演奏する野獣の姿に目も耳も奪われた。
更正するまで音楽を忌み嫌い、興味を持てなかった。そんな自分がこの音色に惹かれたことが不思議だった。

静かに彼はエボルトラスターを引き抜いてウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。演奏していた二人がそれに気づいて振り

向くと、ネクサスは手のひらを地面の上に乗せている。
二人が彼の手のひらに乗ると、ネクサスは二人を薄いバリアの中に閉じ込め、空に浮かび始めた。手のひらの上で再び演奏する二人。イフはそれに反応し、宙に浮かぶネクサスを追う。

二人を乗せたネクサスとイフがもう街が豆粒程度に小さくなるほど高い位置にいた頃、それを見ていた集団がいた。

ウルトラホーク一号に乗っていたＵＦＺの仲間たちだった。主体であるα号にサイト、ルイズ、ハルナ。β号にギーシュ、マリコルヌ、レイナール、モンモランシー。
どういうことか今回は珍しくキュルケとタバサまでいた。それもサイトたちのいるα号に。

「なんであんたたちまでいるのよ?」

「いいじゃない。面白そうだったから」

相変わらずキュルケは「面白そうだったから」ですませる。タバサもまた無言ながらも同じだった。外に見えるその光景が、なにより美しく見えていた。

「攻撃には攻撃、音楽には音楽、か」
レイナールは納得したように言った。

「無力な少女たちが、世界を救うとは、すごいものだよ」

窓越しからも聞こえる歌声と旋律。ギーシュは後にこれまでにない美しさを持っていたと語った。

「綺麗…」

「ずっと聞いていたいな」

モンモランシーやマリコルヌも感嘆した。

「いつか、私たちウルトラマンがいなくても平和な世界が来るといいね」

ハルナがサイトにそう言うと、彼は笑顔を見せて言った。

「ああ、本当の平和が来た証だからな」

やがて、ネクサスとイフはその星の大気圏すらも飛び越えていた。
再びハルケギニアの大地に朝日が昇るまで、少女たちと怪獣の姿を無くした女神像のコンサートは、宇宙の遥か遠い場所にも響き渡った。

10　怒れる者たち

「ははははは！さあ、やれ！」

ビュウウウウ！

「「うあああああああ！」」

ある日の真夜中、街の人々がどこからか放射された冷たい風を浴びせられた。その風は南極の吹雪よりも冷たく強烈なほどで、浴びせられた人々は次々と体を固められていった。

「ひ、ひいいいいい！」

かろうじて逃げた一人の女性。背後から襲いかかってくる見えない敵から必死に逃げ延びようと森の中を走りに走っていく。

「はあ…はあ…」

彼女は後ろを振り替えって見た。後ろには誰もおらず、闇夜があるのみ。よかった、なんとか助かった…と思った次の瞬間だった。

「ハハハハ！」

「え…」

彼女は反射的に前を向いた。と同時に眩しい光が彼女を包み込み、やがてどこにも姿が見えなくなった。光が消える直前、赤い眼を持った、カラスのような顔が一瞬だけ見えたのは誰も知らない。

トリステインだけでなく、アルビオンにも怪獣が現れるという事態は決してなかったわけではない。主にスペースビーストを使役して王室を転覆させようとしたレコンキスタが消滅した今も怪獣たちが現れることがあった。

アルビオン首都のロンディニウムから救援要請を受けてトリステインから幾つかの部隊、そしてアンリエッタからの密命でサイトとルイズがやって来た。

「一思いに暴れたもんだぜ」

荒れた現場に駆け付け、サイトの鞘から顔を出したデルフが言った。

「なによこれ…一体なんのためにこんなこと…」

宇宙人たちがなぜ他星に土足で足を踏み入れ、荒らしまくるのかまるでわからない。彼らの狙いはやはり侵略なのだろうか？ルイズは宇宙人への怒りが募っていた。

「ん、旦那ちょっと」

「どうした地下水？」

ウルトラガンを収納している腰のホルダーから地下水が話しかけてきた。

「なんか…この辺りの空気が冷たくないかい？」

「空気…？」

今の季節は確かに寒い時期ではないが、地下水の言う通りなんだが寒気を感じた。

「ちょ…これ！」

ルイズが建物の一つを指差して叫んだ。サイトもそれに目をやると、目に飛び込んできた光景を疑った。

「これは…氷？」

そこだけではなかった。街の奥に進むにつれ、建物のところどころが、中には内部も外部も氷漬けになったものもあった。同時に、街の住人の姿も見当たらなかった。いるのは、調査に来ていた軍の兵士たちぐらい。

「もう街の人たちは避難したのかしら？」

「いや…」

住宅の床を見つめながら身を屈めるサイト。彼の目先には足跡があった。だが妙だ。足跡の回りを描く縁が家の柱を無理やり抜き取っ

たようになっている。

「人を凍らせていたのか。そのせいで地面に足が密着していたから無理やり引き抜いた、ってことか」

「人を凍らせる？」

そんなことできるのか？とルイズは思った。いくらスクウェアメイジでも氷の中に人を閉じ込めるなんて真似をした例は知られていない。だとしたら、これができるのは…

「怪獣…もしくは…」

「宇宙人だな」

しかし、なんのために人間を氷漬けに？これが本当に自然災害の類いでないのなら、一体敵の狙いはなんなのだろう…

とその時だった。

「なんだお前たちは？」

怪しげな低い男の声を聞いて二人はバッ！と背後を振り返った。

「お前は…」

声の主は人の姿をしてはいなかった。少し小柄で丸い目と口に、全身が黒く塗りつぶされた姿をしている。隣には、白い薄着に真っ白な肌をした女性がいる。

『冷凍怪人ブラック星人』。

「ブラック星人…！」

「む？」

ブラック星人はサイトの顔をジッと見て、何かに気がつく。

「なるほど。同じ宇宙人同士、同じ匂いを嗅ぎ付けたか…ウルトラマンゼロ」

「…！」

正体を見抜かれ、サイトは驚いたように少し後ずさる。

「あんた…ブラック星人とか言ったわね？この有り様はあんたな仕業ね。ここの街の人たちをどこへやったか教えなさい！」

いつでも自慢の魔法が放てるよう杖を向け、ブラック星人を脅すルイズ。しかし、ブラック星人は全く動じるそぶりを表さない。

「素直に教える訳がなかろう。人間、翼人、エルフ…やはりヒューマノイドとは野蛮な種族だ」

「野蛮ですって…？」

プライドの高いルイズは同時に小さな悪口も許せない。感情のまま魔法を使おうとしたがサイトがバッ！と手で制した。

「落ち着けよルイズ。ブラック星人、野蛮ってどういう意味だ？」

「言葉通りだウルトラマンゼロ。全く、我が同胞の数十年前の非礼を詫びようと地球に和平を申し入れようとした矢先に、この星の連中から不意討ちを受けるとは…これが野蛮でなくてなんだ？」

「この星の連中から襲撃された…？」

あり得ない。キリヤマ隊長がこの星に漂着したように、宇宙に進出した人類がこの星に来ることはできるかもしれない。だが、この星の文明は宇宙へ行くには早すぎると言えるし、それどころか他国への入国さえ厳しいのだ。攻撃されたなんて嘘に決まってる。

「嘘をつくな！この星の人間はまだ宇宙の存在さえまともに認知しちゃいないんだぞ」

「嘘ではない！我々は侵略派の同胞たちを処罰してから平和な時を過ごしていた。にも関わらずお前たちの同胞たちはこちらから手を出してないのに攻撃を仕掛けてきたのだ！あの破滅を呼ぶ『魔法』のせいで私の仲間が何人も犠牲に…」

ギリッ…と怒りをにじませるようにブラック星人は握り拳を見せつけた。

「あの魔法は紛れもなくこの星の人間どもによるものだった！あの時の襲撃者たちは僅かだったが、いずれやつらは大大軍を率いてまた襲ってくるに違いない」

ブラック星人の言葉に、嘘を隠してるようなところは見受けられなかった。だがそれはサイトに残酷な事実を突きつけることとなった。

この星の人間が?

無実の星人を?

なぜ?

どうして?

一体なんのために?

「何かの間違いだブラック星人!もう一度考え直せ!」

「そうよ!今私たちは宇宙に目を向ける余裕なんてないわ!」

なんとか誤解を解きたいと説得を試みるサイトとルイズ。しかし、対するブラック星人は聞く耳を持たなかった。

「黙れ!侵略されるくらいなら、先に侵略する!それが悲しい摂理なのだ…やれスノーゴン!」

ブラック星人の命令に応え、真っ白な女性は吹雪のような霧に身を包むと、みるみる内にその美しかった姿は見る影もなく、白熊の体に狼の頭を持った怪獣となった。

『雪女怪獣スノーゴン』。

「グオオオ!」

スノーゴンの口から強烈な冷凍波が放出、サイトたちのいる場所が

あっという間に凍りついていった。

「ルイズ走れ！」

ルイズに逃亡を促し、サイトは彼女と急いでスノーゴンから離れようと走り出した。ここで変身するといきなり冷凍波を直に浴びせられてしまう。寒さに弱いサイトはルイズを避難させつつ、少しでも離れた場所から攻撃できるように試みたのだ。

しかし、相手は巨体。歩く速度も速かった。しかも冷凍波が二人の体をだんだん凍りつかせていく。

「うっ…」

気付いたときには、二人の体は肌が真っ白になるほど凍りついていた。さらに悪いことに、ルイズが寒さに耐えきれなくなり倒れてしまう。

「る、るい…」

彼女の元に駆け寄ろうとしたサイトだったが、彼の場合ルイズよりはもっていたが、体がまともに動かせなくなるほど凍っていた。彼女を守ろうと必死に手を伸ばす。

やはりここは…この手しかない。

「じゅ…ジュワ！」

辛うじてブレスレットから取り出したウルトラゼロアイを装着、ウルトラマンゼロに変身した。すぐルイズを拾い上げ、戦いの場から

離れた場所へ運ぶ。

「ジュワ！」

いざスノーゴンに向かって身構えるゼロ。しかし、形勢逆転にまでは至らなかった。

ゴォォォォ！

「ジュ…！？」

スノーゴンの口からとてつもない風力で冷凍波が放射、ゼロの顔に豪雪のごとくかかった。

「ウルトラマンゼロをそのままカチンコチンにしてしまえスノーゴン！」

口からだけでなく、さらに合掌させた手からも冷凍波を放射してゼロを凍らせようとするスノーゴン。対するゼロは弱点攻撃を立て続けに受けているせいでまるで歯が立たないままだ。

以前ウルトラマンジャックが戦った時、ジャックはスノーゴンの同族に全身を凍らされ、四肢も胴体から引きちぎられバラバラにされてしまったことがあったがウルトラブレスレットの力で蘇ることはできた。しかし今回の場合は違った。以前ウルトラマンタロウが「新しい命のエネルギーの精製が不可能になった」と言ったことを覚えてるだろうか？

ゼロのウルトラゼロブレスレットに、持ち主を復活させられるだけのエネルギーはない。つまり一度でも動けなくなれば…

ウルトラマンゼロは間違いなく死ぬ。

辛うじて手はまだ動けるのだが、このまま浴びせられたらもう助からない。

最後に残された手段は、一旦逃げることだけだった。

「く…デュ！」

ゼロはなんとか下向きに両腕を×印に組んで変身を解除、スノーゴンが自分を見失ってる隙に逃げ切った。

「ふん、さすがのウルトラマンも弱点を突かれたらひとたまりもないか。次はトリステインの連中も凍りつかせ、我がブラック星の奴隷にしてやる」

ゼロの逃亡を悟ったブラック星人は、怪獣を操る機械『バトルナイザー』にスノーゴンを戻すと、どこかへ消え去っていった。

「くそ…」

スノーゴンに敗北したその日の夕方、サイトはなんとか学院の基地にルイズを連れて帰還した。
ハルナから治療を受け、肌の色は元に戻った。

「へっくしょん！」

毛布を被り、寒そうにくしゃみするルイズ。

「くそ…！」

椅子に座り、顔を俯かせたままサイトは握り拳を作った。

「負けた…」

弱点を突かれたとはいえ、全く歯が立たないままここまで逃げた弱い自分に苛立ちを覚えていた。同時にブラック星人の言っていた言葉にも引っ掛かって戦いに集中できずにいた。

『侵略される前に侵略する』。

本当に真実なのだろうか？宇宙に進出するどころか他国との和平もまともに成り立ってないこの星の人が、彼らの故郷を本当に…

「平賀君…大丈夫？顔色悪いわ」

「え？あっ、大丈夫だよ」

心配そうに顔を覗きこんだハルナにびっくりし、あわてて何でもな

いフリをした。

「そう言えば、シュウヘイたちはどうしたんだ?」

戻ってきた時、どういう訳かシュウヘイだけでなく、ギーシュたちもいなかった。

「黒崎君たちなら、女王様から出動要請を受けて街に行ったそうよ」

「事件…またあったのか」

いずれブラック星人は報復目的でまた姿を現すに違いない。それまでに何か対策を練らなくてはならない。しかし、どうやって立ち向かえばいいのだろうか。おそらくあのブラック星人は自分の同胞がジャックに倒されたことを反省し、新たな一手を考えている。ジャックの場合ウルトラディフェンダーで冷凍波を打ち返すという方法でスノーゴンを逆に凍らせてしまったが、同じ手を二度も許すほど間抜けとは考えにくい。

どうする…

思案するサイト。その時だった。

『ゼロ…』

「!」

頭の中に誰かの声が聞こえてきた。この声には聞き覚えがある。反射的にサイトは椅子から立ち上がり、外へ飛び出した。

「サイト!?」

「平賀君!?」

いきなり彼が飛び出したことに動揺を感じながら、ルイズとハルナも彼のあとを追った。

校庭の入り口で彼は立ち止まった。着いてきた二人も彼の後ろ手立ち止まる。目の前には、杖を持ち、傘を被った黒い僧侶の服を着た男がいた。風で、杖の先の大きな輪にくくりつけられた小さな輪がシャンシャンと音をたてている。

「ちょっとあんた。どこの誰か知らないけど、ここは無関係な平民の来る場所じゃないのよ」

ルイズがその男に注意を呼び掛けるが、男は態度を変えないまま言った。

「安心してくれ。俺は関係者だ。平賀サイトのな」

サイトの名を知っている。この怪しそうな男は一体?

「レオ…」

ルイズは驚いたようにサイトの顔を見た。サイトまでこの男を知っているとは思わなかった。

「平賀君の、師…」

師!?じゃあまさか…ルイズは再び謎の僧侶に顔を向けた。

「君がルイズか。弟子が世話になっている」

僧侶は傘をとって素顔を露にした。

厳格な賢者のような鋭い眼光と年相応の渋さを漂わせた顔。

ウルトラマンレオの人間の姿、おおとりゲンである。

「あんた…どうしてこの星に?」

「知らせがある。お前の処罰についてだ」

処罰?サイトの?ルイズには彼の口から発せられた言葉の意味があまり理解できなかった。しかし、サイトとハルナの表情が険しくなっている。何があったのだろうか?

「以前、俺がハルナを救えなかったことで自暴自棄になってた頃だ」

サイトはルイズに説明した。自分がファウストだった頃のハルナをノスフェルに一度殺されたとき、ゼロ（サイト）は憎しみから力を求め、ウルトラ戦士として絶対にやってはならないこと、彼らウルトラマンの生命の源であるプラズマスパークコアに触れ、それを自分だけのものにしようと奪い取ろうとした。プラズマスパークの光は長きにわたって彼らに毎日暖かい光をもたらした分、寒さに満ちた日を奪った。もし抜き取られたりしたら、寒さへの耐性ができてない光の国にいるウルトラマンたちは氷づけになり、いずれ死に絶える。

つまり、結果的にサイトは同胞殺人未遂の容疑者なのだ。
でも、サイトはパンドンとの戦いで一度光の国に帰還したはず。そんな大罪人である彼がどうして帰れたのだろう。

「だが、立ち直ってからのお前の活躍と普段の行動を、我々兄弟は密かにこの星で監視した。お前はお前なりに、よくやったといっていいかもしれん」

いつの間に…気づかなかった、とサイトは思った。すでに彼らウルトラ兄弟は密かにサイトを監視していたのである。もしあの時のままだったら、きっと今頃彼らによって自分は捕まっていたに違いない。

「お前が治療を受けていたころ、会議でお前の処罰に関してだが、宇宙警備隊への復帰を許可することとした」

「じ、じゃあ俺は、また帰っても大丈夫だってことか?」

こののち故郷に帰っても誰も文句は言うことがなくなったということだ。これは喜ばしいこととしか言えない。サイトとハルナは笑顔がこぼれた。しかし、いまだ厳格な表情のままのゲンは鋭い眼光をはなったままだ。

「セブン兄さんでさえお前の活躍を認め、帰還を許可した。だがな……」

俺は許さん!!!!!!

体の芯に届きそうなその怒声は、サイトたちの胸を貫いた。

「お前の帰還に、俺とアストラはこの決定に異議を唱えた」

「な、なんでよ！あんた…自分の弟子が故郷に戻ることが喜べなかったの！？」

師匠なら、普通弟子の復帰に喜びを示すはず。なぜゲンはこれに異を唱えるのかルイズはわからなかった。確かに彼は罪を犯したかもしれない。でも今はこの星のために戦っているではないか。何がいけないと言うのだ？

「規則だからなのか？レオ…」

「それだけではない。俺は、故郷を踏みにじった者を許す気はない。例え他の誰もが認めても、俺はお前のしたことを許すわけにはいかん！」

「レオさん！何もそこまで言わなくても…」

「なら君は自分の故郷が、ゼロの手で破壊されたとして、それを許せるのか！？」

一言物申そうとハルナも反論したが、逆に言い返され何も言えなくなった。許せるわけがない。例え自分の思い人でも、いや思い人だからこそ許せない。

「なら、なんでこの星に来たんだ？ただ単に俺にそのことを教えに来たんじゃないんだろ？」

「見極めに来た。お前が信ずるに値するかをな」

すぐにその意味が分かった。ゲンは自分の弟子に戦いを挑むためにこの星に来たのだと。
ハルナはゲンに向かって再び反論する。

「ちょ、待ってください！戦わなくても…」

同じウルトラマン同士、戦う必要などないではないか。なぜ戦いで判断する？しかし、サイトは彼女が目を向けた時にはすでにウルトラゼロアイを手に持っていた。

「止めないでくれ。この人は、俺の師だからこそこのやり方で見極めようとしてるんだ」

「その通りだ。俺はお前の師だからこそ、お前の愚行が許せなかった。本当に俺が信じられるウルトラ戦士なのか、確かめさせてもらう」

二人の目は、すでに戦う男の目をしていた。もう自分では止められないことを悟り、ハルナとルイズは二人のもとから離れた。
ゲンは彼女たちが離れると同時に、左手の中指に着けていた『レオリング』を前に突き出した。

「レオおおおおおおおおお！！！！」

レオリングに掘り込まれたライオンの彫刻の目の宝石『獅子の瞳』が輝き、赤き獅子の戦士ウルトラマンレオに姿を変えた。

「ジュワ！」

サイトもウルトラゼロアイを装着してウルトラマンゼロに変身、レオの方を見つめ、ジリ…と身構えた。相手の金色の瞳から放たれる殺気…
こうして立ってるだけで歴戦の戦士としてのプレッシャーを感じずにはいられなかった。

「ダア！」

レオのハイキックが、ゼロに襲いかかってきた。

果たしてゼロ（サイト）は師であるウルトラマンレオから認められるのだろうか？

そして街に出動したシュウヘイたちは…？

11　師だからこそ

「イヤア！」

レオのハイキックがゼロのガードを崩し、ジャブを突き出す。それを避けたゼロは後ろに回り込み、突き出されたレオの腕を捕まえた。だが逆にレオはそのゼロの腕をへし折ってしまいそうな力でゼロの肩をひねらせ、地面にひっくり返す。立ち上がったゼロに彼はすかさず追撃した。

「ダ！ハ！ヤ！」

ゼロはレオのパンチを受け止めはしたが、続いて放たれた二発目を防げずまたガードを崩され、蹴りを連続で喰らってしまう。

やはりレオは強かった。打ち込んでくる一撃がすべて重い。

「本気で来なければ、死ぬことになるぞ？」

その言葉に躊躇いは微塵もなかった。レオは手加減する素振りを全く見せる気はないのだ。

再びレオはゼロの方へ走りこむ。

「ムン！」

突出してきたレオを、ゼロは蹴りを突き出したが、レオは簡単に突き出されたゼロの足をつかんでひっくり返し、拳を突き出す。何とかそれを防ぎ、レオを投げ倒したゼロ。だがその程度でレオは怯みもしなかった。すぐ立ち上がってカウンターで回し蹴りを放つ。

ゼロはその蹴りを避けると、レオと背中合わせする形でレオの両腕を封じ、そのまま前に投げようとしたが、レオは難なく着地し、逆にゼロを巴投げで後ろに投げ倒した。

「ク！」

ならば！とゼロはブレスレッドを掲げ、シャドーアーマーを装備、目にも止まらぬ速さで姿を消した。さすがのレオもこの速さを肉眼で勅使はできないはず。死角から彼を攻撃しようとした。思いっきりぶつけてやる！と思った次の瞬間だった。

〈レオチョップ！〉

「ヤアアアアアアア！！」

なんとレオはゼロのマッハ速度で打ち込まれた拳を直接見ないまま平手で受け止め、赤いオーラを纏ったチョップでゼロの鎧に攻撃した。

バキイイイイン！！！！

すさまじい金属音と共に、ゼロのシャドーアーマーは無残にも砕け散った。

「な…！？」

まさかの事態に困惑するゼロ。砕かれてしまった以上もうシャドーアーマーは二度と使えなくなってしまった。

「デアアアアア！」

驚く間さえほとんど与えないつもりか、レオはジャンプしてゼロを地面に押し倒し、彼の顔面を殴りつける。対してゼロは彼の背中を蹴って抜け出しはしたが、決して旗色はよくなかった。立ち上がってレオに炎の鉄拳を放つ。

〈ビッグバンゼロ！〉

「ダア！」

その拳さえレオには通らなかった。あっさりと受け流され、逆に自分が連続でパンチを食らい、再び投げ倒されてしまう。

地面を転がされるゼロに容赦なく、レオは空高く飛び上がると、足にエネルギーを収束させ、ゼロに向かって急降下した

〈レオキック！〉

「イヤア！」

ゼロはとっさにキーパーアーマーを装着し、レオと同じように飛び上がり、レオに向かって鎧の効果で威力の上がった必殺キックを放った。

〈ウルトラゼロキック！〉

「ジュワ！」「ヤアアアアアアアア！！！」

ドオオオオン！！！

二人の蹴りがぶつかり合った瞬間とてつもない爆発が起こった。どっちが勝ったのか?できればサイトの方に勝利の女神が微笑んでほしいと願うルイズとハルナだったが、その期待は見事に裏切られてしまった。

ズシン!と音を立てて落ちてきたのは、またしても鎧を砕かれて元の姿に戻されたゼロ。対するレオは何事もなかったように着地した。

負けた…。ブレスレッドギアは二つとも破壊され、還付なきままに叩きのめされ、サイトは体を引きずりながら悔しさで身を震わせた。

「大丈夫平賀君!?」

心配そうにハルナはふらつくサイトを支える。

同じように変身を解いたゲンに傷はまるで見受けられなかった。

「あんた…サイトと同じウルトラマンなのにどういうつもり!?」

ゲンへの怒りを露わに、ルイズはゲンに杖を向ける。それでも彼はルイズの形相に涼しげな顔のままだった。

「魔法も所詮武器の一つにすぎん。武器に頼れば隙が生じる。その隙を君はなくしきれていない」

「…!」

その気になればこの距離からでもお前を一撃で仕留められる。彼の

目はそう語っていた。相手はウルトラマンである以前に、数々の戦いを勝ち抜いた歴戦の戦士。自分が敵う相手ではないのがよくわかった。

「ゼロ、本来己の肉体で戦うのが我らウルトラ戦士。自らを強化する鎧を着こんでおきながらこの程度とは…武器や仲間に頼りすぎたせいで弱くなったのではないか？」

「…！」

武器に頼って逆に弱くなった。それはサイトの相棒であるデルフの堪忍袋を千切った。彼は伝説の使い魔『ガンダールヴ』の剣。その誇りを馬鹿にされた気がしてならなかった。

「てめえ…もういっぺん言ってみやがれ！」

「止せ！」

サイトは怒鳴ってデルフを黙らせようとする。

「相棒、悔しくねえのかよ！あんな好き放題言われて！」

「…」

悔しくないと言えば嘘になる。だが、ゲンに返す言葉が全く見当たらず、顔がみるみるクシャクシャになっていった。

「その顔はなんだ？その眼は…？その涙はなんだ！！！」

ゲンの怒鳴り声に、サイトは顔を上げた。目じりに、悔し涙が溜ま

っていた。

「お前のその涙で、今度こそこの世界が救えるのか？同じ光の国の同胞やこの星の人々を守れるのか？」

彼は突然サイトに黒いものを投げ渡した。それはボロボロの黒い道着だった。

「スノーゴンを倒してみろ。ジャック兄さんの時とは違い、お前の肉体のみでな。着いてこい」

「これは…」

ゲンに着いて行ってたどり着いたのは、とある山中の滝つぼ。滝の水が凄まじい水しぶきを上げながら崖から流れ落ちている。

「ゼロ、あの滝の中に入れ」

「え？」

「あの滝の水をスノーゴンの冷凍波を思え。お前が手にしている力『ガンダールヴ』なら武器を持つことでスノーゴンの攻撃を素早くなった身のこなしで避けることができるかもしれん。だが敵がそれを易々と許すはずもない。常に武器を手に持っているわけではないからな。いかにしてスノーゴンの冷気を耐え抜き、反撃に転じるか、そのための特訓だ」

あの流れ落ちる滝をスノーゴンの冷凍波と捉える…確かにあの滝を常時浴び続ければｓの恐ろしい冷凍波を受けた時のようにとんでもない寒気が全身を襲うのは間違いない。ｓの状態からどのようにして反撃に転じるか、か。

デルフなどの装備品を平たい岩の上に置き、ゲンから借りた黒い道着を着たサイトは滝の中に入った。

「全くどういうつもりよあいつ！あんな酷い奴がウルトラマンだなんて信じられない！」

学院でサイトを待っているルイズはゲンの態度とサイトへの扱いに憤慨していた。彼女の中で、ウルトラマンレオは嫌な奴だという法則が出来上がりつつあった。

「今度顔見たら私の虚無でとっちめて…」

「ルイズさん、レオさんはあなたが思っているような人じゃないです」

ルイズを落ち着かせようとハルナは彼女に言った。

「どこが！？あんな奴自分の弟子も大事にできない人でなしじゃない！！さっき変身したときだって」

「あそこまで鬼になれるのは、あの人のつらい過去に原因があるんです」

「過去ですって？」

過去に何かあったのか？ようやく熱が冷めたのか、ルイズはハルナの言葉に耳を傾けた。

「ええ、レオさんは侵略者に生まれ故郷を滅ぼされたんです」

ウルトラマンレオとアストラはたいていのウルトラマンとは違い、Ｍ７８星雲の出身ではなく、地球でいう『獅子座Ｌ７７星』の出身でその星の王子だったらしい。文明と自然に溢れた美しい星だった。だが、突如『サーベル暴君マグマ星人』が『双子怪獣レッドギラス』と『ブラックギラス』を従えて飛来、Ｌ７７星で破壊の限りを尽くした。その事件で王である父『アルス』は死亡、弟であるアストラも地球で再会するまで彼が死んだと思わされた。

レオは『おおとりゲン』として地球を第二の故郷とし、恋人や友人を作って新たな人生を歩んだ矢先に、またしてもマグマ星人が出現しこれを苦肉の特訓の末撃退した。

しかし彼の悲劇は終わらなかった。今度は『円盤生物』を操るエイリアン『ブラック指令』に防衛チーム『ＭＡＣ』の仲間と、地球でできた恋人や友人を一気に奪われてしまった。後にブラック指令を倒して仇を討ったものの、平和が訪れる喜びと同時に、失った大事なものの重さを思い知らされたのだった。

さすがのルイズもさっきまでの自分の発言に羞恥を感じた。レオは誰よりも故郷を重んじる戦士なのだ。彼に降りかかる数々の悲劇が、今の彼を作り上げたと悟った。弟子に対してあんなに厳しくせざるを得なかったのだ。弟子がかつての自分のように大事な物を失うよ

うなことがないために。

「みんな、嫌なことを背負ってるのね…」

「ぐ…」

水が冷たすぎる。指先がまともに動かせない。体もまともに動かせない。スノーゴンに負けた時と同じだった。サイトはとてもその極寒の水の中で平気でいることはできなかった。しかし、この状況を耐え抜けないようではスノーゴンには勝てない。
その場から動かず凍りつくこともなく敵に反撃する方法…
何か手はないのだろうか？

「くそ…」

これじゃ特訓を終わらせる前に自分が凍死してしまう。なんとか体を擦って温めるが、なかなか温められない。

さすがにずっと浴び続けたらそうなってしまうので一旦岸に上がることにした。タオルで顔をふき取り一息ついて岩に座り込むサイト。極寒の中で温もりを保たなくては、たとえ亜寒帯に生息する生き物だって死んでしまう。何か方法があるはずだ。

「大丈夫か相棒？唇紫色だぞ」

「ああ、ガチで冷たいからな…」

「アルビオンの雪原じゃあ動き回ってたから平気だったみてえけどなあ」

「雪原…」

そう言えば、戦時中にルイズとアルビオンに行った時も雪原の森に足を踏み入れたことがあった。あの時は確かに線上の真ん中で敵兵と遭遇したこともあって動かなければならなかったこともあって寒さを感じるどころか、むしろ熱く感じた。

まてよ…？

「そうだ！」

何かひらめいたようにサイトは再び滝の中に入り込んだ。

そして…

「できた！」

「おお！さすが旦那！」

しばらくして滝の中から満足げに晴れやかな顔をしたサイトが岸に上がってきた。しかし同時に「へっくしょい！！！」と鼻水を垂らして大きなくしゃみをする。

すると、岩の上に折りたたんだ服の上に置いていたビデオシーバー

から音が鳴り出した。サイトはすぐ蓋を開き、画面に映った人物を見る。映ったのはハルナとルイズだった。

「はい」

『怪獣がラ・ロシェールの方からトリスタニアに向けて移動しているそうよ！』

『平賀君急いで！』

「わかった！すぐ行く！」

ビデオシーバーを閉じ、彼はウルトラゼロアイを装備、ウルトラマンゼロに変身して大空へ飛び立った。

「ジュア！」

「わあああああああ！！！！」

一方、ゼロを敗北に追い込んだブラック星人は再びスノーゴンを使って人間たちに危害を加えていた。現在ラ・ロシェールにて、人間たちをその凶悪な冷凍波で多くの人間たちを凍らせていった。

「さあスノーゴン！この星の人間たちを全部氷漬けにしてしまえ！」

「たっ助けてくれえええええ！！！！」

次々と人々は凍らされていく。しかし、ついにウルトラマンゼロが

空から急降下する形で飛来、飛び蹴りでスノーゴンを蹴り飛ばした。

「ジュワ！」

「む、やはりきたか」

遠くからスノーゴンの前に立ちふさがって身構えるゼロを、ブラック星人は見つめる。同じようにゲンも特徴的な僧侶の服を着て見ていた。

「見せてもらうぞ…」

「さあスノーゴン！そのくたばり損ないをもう一度凍らせてしまえ！」

「グオオオオオ！！！」

スノーゴンの冷凍波が再びゼロに向かって放射された。先ほどの戦いから何も進歩がなければこのまま凍らされてしまう。ブレスレットにも復活効果もない今どのような手を使うのか？だが、さっきのサイトの満足げな笑みは決して意味のないのではなかった。

「ハ！デアアアア！！！」

ゼロは宙に浮かび、体を回転させた。回転していくうちに彼の姿ははっきり見えなくなり、最終的に風車のように高速回転していた。回転するときに発生する風圧によって襲いくる冷気を吹き飛ばし、そして空気との摩擦熱で体を温め、そのままスノーゴンに思いきりぶつかった。

「ゴオ！？」

「な、なに！？」

ブラック星人はまさかの事態に驚いた。

「あれはセブン兄さんの？」

そう、かつてウルトラセブンが自分の偽物『ロボット超人にせウルトラセブン』を倒した時に使った技『ボディ風車』。誰かが教えたわけでもないのに、それを自ら編み出したのだ。

「おのれえええ…こうなったら！」

ブラック星人は持っていたバトルナイザーを天に掲げると、一枚の光のカードが飛び出した。

そんな中、ゼロは再び放射された冷凍波をボディ風車で吹き飛ばしつつ、飛び蹴りでスノーゴンに反撃、スノーゴンを突き飛ばした。

もう自分の勝利は確実なものとなったことを悟り、ゼロは額のビームランプより閃光を放とうとした。が、彼はそこで動きを止めた。

なぜなら、新たに現れた『ブロブタイプビースト・ペドレオン（グロース）』が触手に人間を三人ほど捕まえ、人質のつもりでゼロに見せつけていた。

「この蟻共を見殺しにはできまい。攻撃しなければ命は保障する」

「く…！！」

ここにきて人質作戦とは…被害者ならなんでもしていいってのか！

!!あのペドレオンは間違いなくブラック星人のものだ。ブラック星人の愚行と人質を救えない自分に悔しそうにゼロは握り拳を握る。

「やれスノーゴン！ペドレオン！」

二体の怪獣が手を出せないゼロに襲いかかってきたその時！

「レオオオオオオオオ！！」

その叫びと共に、金色の光が空を照らし、ゼロの前に赤い巨人が姿を現した。

「なに！？」

またしても予期せぬ出来事にブラック星人は驚いた。まさかここで、ウルトラマンレオが加勢に入るとは…。

〈レオチョップ！〉

「イヤア！」

レオの唸りを上げたチョップが人質となった人間を捕まえていたペドレオンの触手を千切り、その手に人質の人々を乗せて安全な場所に降ろした。

「レオ！」

「呆けてる場合じゃない、行くぞ！」

「おう！ジュア！」「デア！」

二人の師弟ウルトラマンはビシッと身構え、ゼロはスノーゴン、レオはペドレオンに向かって突出した。

「ギュオオオオ！！！」

ペドレオンの赤い電撃がレオを襲うが、対するレオはバック転で後方に後退しながらそれを回避。すぐペドレオンに接近して後ろ向きに蹴り技を与え、そしてジャンプするとタックルで突き飛ばした。さらにラッシュパンチでペドレオンを攻撃した。

「デア！ムン！ヤアアア！」

ゼロの方もスノーゴンの口を抑え込み、膝蹴りでスノーゴンの顎を打ち、横腹を蹴って突き飛ばした。スノーゴンも反撃に頭突きを放つが、いとも簡単に防がれ、逆にハイキックでスノーゴンの顔を連続で蹴り、最後に光線で吹っ飛ばした。

〈エメリウムスラッシュ！〉

「デュ！」

「グゴオオオ！！！」

一旦同時にバック転して両側に立った二人の戦士は互いに頷き合い、そして同時に飛び上がると、レオは左足、ゼロは右足を突き出し、合体必殺キックを放った。

〈レオ・ゼロキック！〉

「ダアアアアアアア！！！！」
「エイヤアアアアアア！！！！」

「「ギャァァアアアアアアア！！！！」」

ブラック星人のしもべの怪獣たちは、キックの威力に耐え切れず、爆発して跡形もなく消し飛んだ。

「おのれ…この雪辱必ず晴らさせてもらうぞ！『人類奴隷化計画』はまだ終わってないのだからな！」

捨て台詞を吐き、ブラック星人はどこかへ消え去った。

「レオ…」

ゼロは自分の師の方を向いた。果たして、彼は今のゼロをどう思ってるのだろうか？レオは背を向けると、ただ一言自分の弟子に言った。

「強くなったな、さすが俺の弟子だ」

あの自ら編み出したボディ風車。驚嘆に値したようだ。
そして人質への配慮、あの時の彼のままだったらゼロは人質がいても躊躇わず攻撃していたかもしれない。光の国の同胞たちを手にかけてまで力を手にしようとはもう思わないだろう。

レオは空を見上げ、遥か宇宙の彼方へ飛び去って行った。

しかし、ブラック星人のことも気になっていた。彼の言った『侵略される前に侵略する』という一言。一体何が彼らの星で起こったの

だろうか？それに、今まで彼にさらわれた人たちはどこに…？

「考えるのは後にしたらどうよ旦那？」

「そうそう、せっかくお前さんの師匠が認めてくれたんだ。人質も助かったし、喜ぼうぜ」

地下水とデルフの声で、ゼロはハッ！と我に返った。

「あ、ああ…そうだな」

今は勝利を喜んで学院に戻ろう。ゼロも空を見上げ、帰りを待ってる少女たちの元へ帰って行った。

「デュワ！」

12　人類奴隷計画

「畜生めあのカラス野郎ども！」

今回久々にしていきなりの登場から凄まじく怒り、その怒りで辺りの森林を燃やしかねない男がいた。宇宙海賊船の用心棒にして、以前シュウヘイに決闘を挑んだこともある男『グレンファイヤー』である。現在、人間の姿『紅蓮』として、とある森の中を全速力で走っていた。

「うちのクルーを何人もさらいやがって！ぜってーぶちのめしてやらあ！！」

「ここか…」

サイトがレオと会っている間、シュウヘイ、ギーシュ、マリコルヌ、レイナールの四人は廃墟と化した屋敷の門前にいた。
この屋敷は、サイトがシエスタを連れて帰るために訪れたこともある、今は亡きモット伯爵の屋敷である。

「テファ…」

遡ること二時間前…

「カラス人間ですか？」

サイトが不在の間、アンリエッタからある連絡が届いた。モニター越しから顔を表すアンリエッタは言う。

『以前、イフなる怪獣の被害で半壊したトリスタニアですが、その作業員たちが主にそのカラスに酷似した顔を持つ亜人に誘拐されたと、被害者の関係者から通報がありました。危険だとは思いますが、皆さんにも調査をお願いできますか？』

「お任せください女王陛下！このギーシュ・ド・グラモン、あなた様のためなら！」

「はあ…」

いくら相手が美人の女王様だからって聞き分けが良過ぎる…とシュウヘイは呆れ顔で頭を抱えた。

「こいつだと不安だし、俺も行く。異論はないか？」

彼の意見に反対する者はいなかった。それだけでなく、レイナール、マリコルヌと、ほかの二人も席を立つ。

「僕も行くよ。今までまともに働いたことなかったからね」

「僕も」

「待てえええええええい！！！！！」

しかし、ここでギーシュが異議を唱えるように喚いた。

「どうした？」

「『こいつだと不安』とはどういう意味だね！断固抗議するぞ僕は！」

「ああ、すまん。悪かった…悪かったから気を静めろ」

本気なのか、それとも付き合うのが面倒臭いのか、シュウヘイはとりあえず謝った。

それからまず町に向かった時。

「なあ、そういえばテファはどうしたんだ？」

町に着いたところでギーシュはシュウヘイに訪ねてきた。

「孤児院が壊されたからな、子供たちを安心させたいって今、修道院に預けられたチビたちの様子を見に行ってる」

「君は、なんで行かなかったんだい？彼女の使い魔なんだろう？」

「離れた場所から支えることは可能だ」

「あ！」

急に耳元でギーシュが大声を上げたものだから、シュウヘイは思わず身を震わせた。

「な、なんだ？いきなり大声だして…」

「このギーシュ・ド・グラモン、ピンと来たぞ！ははは、君も愛いやつだなあ」

「なんだなんだギーシュ？シュウヘイについて何かわかったのかい？」

気になる様子でマリコルヌが詰め寄る。

「彼は照れ臭いんだ！テファと一緒にいるくせに！」

「な…／／」

珍しくあのシュウヘイが顔を赤くした。完全に図星であるのがうかがえる。これをギーシュたちが見逃すはずなかった。

「ははははっはははは！！！そうかそうかやはりそうだったか！！！」

「ち、ちが…」

無論この状況で否定しないシュウヘイではない。しかし、ギーシュの勢いは止まることを知らなかった。

「違うって何がだ！だったらなんだ！ベアトリスの似非異端審問の時彼女を守ったときのセリフ！」

そこからわざとシュウヘイみたいに格好つけて続ける。

「『命を削ってでも守らなくてはならない。その笑顔を奪う奴は、全員敵だ』！」

「フゥーーーー！！！」

ゲンコツ！！！！！

とある世界のカードゲームの達人であるとある社長の操る神が放つような神の鉄槌、またはとあるおにぎり頭の五歳児の母親の鉄拳制裁がギーシュとマリコルヌにヒットし、二人は町の大理石に首から上が埋まったのは言うまでもなかった。

「…」

空気化していたことを抗議しようと思っていたレイナールは、なにもしなくてよかった…と一人ヒヤヒヤしていた。
周りで見ていた人たちも一瞬ながらもその中に詰めに詰め込まれた恐怖から彼をこう呼ぶようになった。

（あ、悪魔…）

しかし、そんな幸せ（？）な空気は一気に崩れ去る。

ビシュウウウン！

「わあああああ！」

「「「「！」」」」

人混みの中から男性の叫び声が、そして波のようにたくさんの町の人たちの悲鳴が轟いた。

四人が（ギーシュとマリコルヌはすでにボロボロだが）駆けつけると、見たこともない亜人が奇妙な銃を使って、沢山の人々を無差別に銃から放射された光を当てる。光を当てられた人は、手のひらに収まるほど縮小され、銃に吸い込まれていった。
顔はカラスに酷似した亜人。少なくともこの星の生命体ではなかった。

誘拐宇宙人レイビーク星人。

「ＵＦＺ、行くぞぉ！」

ギーシュが薔薇の杖を振りかざすと同時に、彼らはレイビーク星人に突出した。
「ワルキューレ、矢を放て！」

「エア・カッター！」

「フレイムボール！」

ギーシュはワルキューレ、マリコルヌは風の魔法、レイナールは炎の魔法で攻撃。突如の奇襲にレイビーク星人たちの陣形が崩れた。
無論彼も忘れてはいけない。

ドン！

「ぐぎゃ！？」

シュウヘイのブラストショットから放たれし波動弾がレイビーク星人の一体を貫く。

「グラモン、ワルキューレで壁の陣形を作れ！あの光に当てられたら捕まるぞ！」

「了解！」

シュウヘイが光の剣でレイビーク星人たちを切り裂くなか、彼からの指示でギーシュは各自に囮役のワルキューレを二人ずつ配備、これであの特殊な銃からの光を浴びる確率が減った。

「トリステインの治安を乱す者め、かかれ！」

「「「はっ！」」」

ここで魔法衛士隊やアニエス率いる銃士隊の隊員たちが現れ、シュウヘイたちと足跡ながらも共同戦線に入る。

レイビーク星人たちは数が少なかったからか、ＵＦＺに魔法衛士隊、銃士隊すべての数には敵わず、遂には少しずつ引き上げていった。

「くそ！下等生物と思って油断したか…」

一体のレイビーク星人が捨て台詞を吐き捨てて逃げ出そうとしたが、シュウヘイはそれを見逃さなかった。

「逃がすか！」

ネクサスの技「セービングビュート」。光の縄でそのレイビーク星人を捕まえた。偶然にも、そのレイビーク星人はあの銃を持っていた。

「さて、貴様の仲間はどこにいる？他にも知ってることを全て明かしてもらおうか」

縄でぐるぐる巻きに縛り付けられたレイビーク星人にアニエスは目に殺気を放ちながら問い続ける。

「無言を貫き通すなら、それなりの覚悟をしてもらおうか」

「ふん…私を殺せば同胞たちの居場所はわからないままだぞ」

「別に構わんさ。こちらで自力に探せば見つかる。貴様らは知らんだろうが、この世界でも貴様たちの持つ機械とやらを理解できる連中がいるからな」

非情な眼差しを秘めながらアニエスは持っていた剣を振り下ろそうとする。

「まっ待て！待ってくれ！わかった！教えるから命だけは！」

さっきまで下等生物呼ばわりしてたのに、遂には怖じ気つくレイビーク星人。

ともあれ、敵のアジトの居場所を掴むことはできそうだ。

「も、モット伯爵とかいう奴の屋敷だ！廃屋にはなってたが、我々で使わせてもらってる。さらった連中は我々の星で奴隷に、または他星の連中に商品として売りさばくのだ」

「ほう…」

シュウヘイたちも今のレイビーク星人の吐いた情報を聞いていた。

「貴殿らはもう下がっておけ。後は我々に任せろ」

アニエスは警告するつもりでギーシュらに言った。しかし、ギーシュたちはそこで下がろうとは思わなかった。

「ミス、我々も一介の貴族。民を守るのは我々の使命だ。引くわけにはいかない」

「しかし主らはまだ若い。ここはやはり我々…」

とそこでまだ幼い少年が走ってきた。ぜいぜいと息を弾ませながらシュウヘイの前に彼は止まった。

「ポウ?どうしたんだ、こんな場所にまで走って来て」

どうやらシュウヘイが養ってる孤児の一人のようだ。

「大変だよ兄ちゃん!お姉ちゃんが、テファ姉ちゃんがさっきのカラスもどきに!」

「何!?」

それを聞いてシュウヘイは血相を変えた。

テファが拐われただと!?

「さっき姉ちゃんと買い物に着てたんだけど、あのカラス人間たちの光に僕を庇って…ごめん…」

「泣くな…俺が連れて帰るから、先に戻れ」

「うん…」

ポウは頷くと、そのまま戻っていった。ギーシュはそれを見て頑な決意をした。やはり自分たちも行かなくては！と。

「よし、やはり僕たちも行こうか！ＵＦＺ、行くぞぉ！」

「「おーっ！！」」

「おっお前たち待て！！」

彼らを引き留めようとしたアニエスだったが、残念ながら彼ら全員、モット伯爵の屋敷に向かってしまった。

「全く…」

はあ…と一人ため息をつくアニエスの姿はその場にいた者たちには理解されなかった。

そして現在に至る。モット伯爵の屋敷は野生のカラスが飛び回り、窓ガラスも無罪に割れて寂れかえっていた。

「さて、早速侵入さてみるかい？」

「ダメだ。いきなり正面から入れば格好の的だ。ちょうど四人いるから二手に別れたほうがいい」

目立ちたがりなギーシュに、シュウヘイが言う。彼女がさらわれたからと言って冷静さを失えば元も子もなくなってしまう。

「なら、マリコルヌとギーシュで囮役をやる。その間にシュウヘイは僕と同伴で拐われた人の救出に。ギーシュならワルキューレを新たな囮として作れるし、敢えて術者を表にさらけ出せば敵からの信憑性が増す。異論はないかな？」

レイナールの提案に反対の意見はなかった。

いざ、侵入開始といこうとしたがその時、屋敷の方から爆発したような音が響いた。

「なんだ！？」

思わずマリコルヌが声を上げる。

「俺たち以外にもいるようだな。侵入者が」

彼らより先に屋敷で暴れていた侵入者。それは…

「ファイヤあああああああ！！！！」

あのグレンファイヤーだった。炎の如意棒をぶん回しにぶん回して

凄まじい暴れっぷりにレイビーク星人たちはたじろいでいた。

「なっ、なんだこいつは!?」

「誰だ?あの暴れん坊は?」

庭の木に隠れながらその暴れん坊、グレンファイヤーを見るギーシュ。

「誰でもいい。どうやらあいつが偶然にも悪露理になってくれるようだ。腕も立ちそうだし、全員で侵入しよう」

彼が暴れている隙に、どさくさに紛れながらシュウヘイたちは屋敷に突入した。囮役はすでにグレンファイヤーが務めてくれてるので、全員捕まった人たちの救出に向かう。

「くそ、どこの馬鹿が我々の領域に…」

遅れて一体のレイビーク星人が、騒ぎを聞きつけてグレンファイヤー討伐に向かおうとした。しかし、背後から忍び寄る複数の陰に囲まれてしまう。

「!?」

「ごきげんよう、ミスター。突然の訪問で申し訳ないがあなたに聞きたいことがある」

「ぬ…」

ギーシュが背後から土系統の魔法で錬成した青銅の剣をレイビーク

星人に突き付け、レイビーク星人は苦虫を噛むように鳴いた。

「ここから地下への階段に奴隷として捕まえてる人たちが収容されてるそうだ」

屋敷の二階にある、亡き伯爵の部屋に着いた四人。だが辺りを見渡しても階段らしきものは見当たらない。

「階段もないじゃないか。ここから地下へいけなんてどうしろって言うんだよ！」

おて上げだ！とマリコルヌは喚く。そんな彼をレイナールは口をふさいで沈めさせる。下手したら今の大声で外のレイビーク星人たちが今自分たちが彼らのテリトリーに侵入していることがばれてしまう。

「こういうのは、隠し通路があるというのが相場なんだ。くまなく、急いで探そう」

一方、テファはようやく目を覚ました。体が動かない。透明の紐にしばりつけられている。ここはどこなのだろうか？確か町へ買い物に出かけ、カラスみたいな顔をした亜人に捕まって…。周りには意識を失った人間たちが自分と同じように拘束されていた。

どことなく恐怖が彼女にふりかかってきた。石堀に捕まった時のような恐怖。

いや、ダメだ。ここで泣いたって何を変わらない。何とか抜け出さなくては、何をされるか分かったものじゃない。真上は地球でいう窓ガラスのようにそとの天井が見えていた。

と、そこで誰かの話し声が聞こえてきた。

「同盟を申し込んできたブラック星人が敗走したそうだ。どうもあの噂のウルトラマン、ゼロに負けたらしい」

「ふん！情けない。所詮復讐心に目をくらませた馬鹿に我々の手伝いができるはずもない。ところで、ブラック星人が捕えた人間たちは？」

「解凍してすぐ縮小させて収納した。女はブラコ星人へ売るために男どもから隔離させている。さぞ、高く売れることだろう」

縮小？隔離？

一体彼らは何の話をしているのだ？

すると、彼女の視界に、巨大な鳥の化け物の顔が現れた。

「きゃあ！？」

「おや、おひとり起こしてしまいましたか。まあいいでしょう」

いや、よく見るとさっき自分を捕まえたカラス人間だった。ただ、自分を捕えた個体は金色の目、今自分が見てるのは真っ赤な目の個

体だった。
巨大に見えるのは、あのカラス人間がでかいのではなく、テファら捕まった人たちが小さくされてガラス窓の付いたケースに拘束されているだけなのだ。

「あなたは、誰？」

恐怖を必死で押し殺しながら彼女はその赤い目をしたレイビーク星人に話しかけた。

「我々はＰ４１３惑星から来た者です。君たちのような人間が我々の星に奴隷として働かせているのですが、最近数が減っていましてね、この星に目を付けたのですよ」

「奴隷…酷い」

人を者扱いするなんて、なんて連中だ。これをもしルイズが聞いていたら間違いな癇癪を起すのは目に見えるほどだ。

「あなたは女性ですね。あと数人ほど女性をブラコ星人に売るつもりですのであなたにも来てもらいましょうか。連中は女性が好物だそうなので。けけけけ」

あざ笑うレイビーク星人。彼は蓋を開けて、テファの方へ手を伸ばしてきた。だがそこで、一体の下っ端レイビーク星人が大急ぎで降りてきた。

「大変です！侵入者です！！」

「何！？」

（侵入者…？）

もしかして…

彼女のおぼろげな予感は当たっていた。彼が、いや彼らが来てくれたのだ。

「ワルキューレ！突撃だ！！」

その頃、ギーシュのワルキューレの一鼓隊が彼らの盾となりながらレイビーク星人たちに突撃、そのあとに銃弾や魔法でレイビーク星人たちをシュウヘイたちが攻撃していた。

「もう持ちこたえれません！」

「なら縮小光線銃で捕まえろ！」

「それが、奴らの中に光る縄使いがいて、全部使用する前に奪われました！」

「ええい！！ならこの奴隷どもを運んで脱出の準備にかかれ！」

「は！」

どうもあの赤い目の星人がリーダーのようだ。赤目の星人指示通り、部下の星人たちは奴隷の人間たちの入ったケースを抱えて走り出した。彼らはよく見ると、壁の方へ向かっている。一見わざと壁にぶつかりに行ってるように見えるが、彼らが壁に近づいた瞬間壁がねじれた。そしてレイビーク星人たちはその中に逃げ出していく。

ちょうどそこでシュウヘイたちが奴隷にされかけた人たちが捕まった部屋にたどり着いた。

「テファ！どこだ！？」

辺りを見渡すシュウヘイだが、テファの姿は見当たらなかった。だが、レイビーク星人たちが集団でどこかに向かい、何やら気になる箱を運んでいるのを見かけた。

「怪しいな、捕まえろワルキューレ！」

ギーシュが杖を一振りするとワルキューレたちは壁の向こうへ逃げるレイビーク星人を負ったが、間に合わず壁のねじれは閉じた。しかも、気づいた時にはレイビーク星人たちに囲まれていた。

「下等生物め、邪魔しおって…」

「囲まれたか…」

苦虫を噛むようにシュウヘイは聖人たちをにらむ。こんな場所に止められてら彼女だけでなく、他に攫われた人たちが自分たちの目の届くことのない星に連れて行かれてしまう、そうなったら二度と助けられない。

「シュウヘイ、先に行きたまえ！ここは僕たちで食い止める！」

ギーシュが彼の背中を押して言った。これにもっとも驚いたのは、まぎれもなくシュウヘイだった。

「彼女を守るんだろ?だったら僕らに構わず先を急ぐんだ!」

「…済まない。後を頼んだぞ!」

彼は心の底からギーシュに感謝した。ギーシュに押され、シュウヘイはブラストショットを撃ち込んで星人たちの囲いから抜け出した。

「おのれ逃がすか!」

レイビーク星人たちはシュウヘイを追おうとしたが、そんな彼らにワルキューレの弓矢に炎や風の刃が放たれた。

「愛のために戦う男の邪魔は、野暮といういものだよ?」

しかし、どれだけの数がいたのだろうか。シュウヘイが向かった先にもレイビーク星人たちが立ちはだかった。

「ち…」

小さく舌打ちして彼はエボルトラスターを鞘から引き抜き、それに刻まれたエナジーコアの模様が見えるように胸に当てた。瞬間、彼は紅の光を纏い、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

「シュ!」

変身してすぐ、レイビーク星人たちに向かって身構えるネクサス。すぐさまジュネッストリニティにチェンジした。

まず一体目が襲い、それを回し蹴りで蹴り飛ばす。二体目にはかか

と落とし、三体目の足には水面蹴りを与えて転ばせた。四体目には顔面蹴り、五体目は背負い投げた。でもレイビーク星人も、内一体がこちらに飛び蹴りを仕掛けてきたが、ネクサスはそれをしなやかに受け流し、光の剣で斬りつけた。

〈シュトロームソード！〉

「デア！」

「グエ！」

二階の踊り場に追い詰められても、彼は立ち止らなかった。迫りくるレイビーク星人を多彩な攻撃で退けていった。踊り場から落とし、階段から次々とレイビーク星人たち。

まだ一階にも残っている。二階から飛び降りてネクサスは残ったレイビーク星人と対峙する。一斉に敵が襲いかかったが、剣を竜巻のように振り回した。

〈鳳旋火！〉

「ディアアアア！！！」

「「「ギョワアアアアア！！！」」」

六体全員ネクサスの炎の竜巻の如き剣捌きに吹き飛ばされていった。

「！」

廊下の向こう側の壁が、異空間の入り口のようにねじれ、開いてい

るのを発見した。どさくさに紛れてレイビーク星人の一人が入り込んだようだ。そのねじれは急速に元に戻っていく。その先にきっと捕まった人たちがいる。そう予想した彼は壁に向かって突撃した。壁は飛び込むと同時に、拳によって砕かれた。

「なあレイナール。あと、どれくらい精神力残ってる？」

「もう蝋燭さえ灯せないよ…」

気力を無くしかけ膝をつくマリコルヌ。魔法を使い過ぎてかなりばてている。ギーシュも同じだった。ワルキューレたちは全部お釈迦になってただの鉄くずと化している。

「てこずらせやがって、生意気なガキだ。お前たちも我々の奴隷になるがいい！！」

一体のレイビーク星人がこちらに歩いてきた。手にはあの縮小光線銃。ギーシュたちも奴隷として捕まるのだ。

「ふ、友のために命を懸けたんだ。悔いはない」

覚悟を決めて目を閉じる三人。銃口に光が灯り始めている。ここまでか…とその時だった。

「ファイヤアアアアアア！！！！！」

「「ぎゃあああああああああ！！！！」」

どこからか炎が飛び出し、レイビーク星人たちは焼き尽くされた。

「おいこら、うちのクルーをどこに…あら？」

彼らの窮地を救ったのはグレンファイヤーだった。気が付いた時には敵が全滅していることに気付くという、少々間抜けな形で。しかし、ギーシュたちを見て彼は血相を変えて詰め寄った。

「てめえ！！！うちのクルーをどこへやりやがった！ああ！？」

乱暴に彼はマリコルヌの胸ぐらを掴み出す。

「わあああ！！僕は違います！誤解ですううう！！」

「お前のクルーとやらは、これか？」

そこで彼に話しかけてきた者がいた。ネクサスが、いくつか重ねられた箱を床に置き、レイビーク星人の光線銃を手に持っている。等身大でネクサスが現れたことには、三人はまたしても驚いた。（フーケ事件にかかわっていたギーシュは彼の正体を知ってたためか一番リアクションに薄かったが）

彼が差し出した一個の箱に、いかにも海賊の格好をした男たちが拘束されていた。

「おお！うちのクルーだ！わりいな」

箱を受け取った瞬間グレンファイヤーは走り去ってしまった。

「…」

何なんだあいつ？と一同は走りゆくグレンファイヤーの背を茫然と見ていた。しかし、次に大きな地響きが彼らを襲った。

「なんだ！？」

そのころ、地上では謎の飛行物体が飛来していた。奴隷たち、主に食用に利用するために女性たちを引き取りに来た『宇宙怪人ブラコ星人』たちの宇宙船だった。その数は何十っ機にも上った。彼らは以前、母性で採れる胞子を食用にしていたが、それらが不足して気球に接近、人間の女性ホルモンがその胞子を育てることに適していることに目をつけてサイトの義母アンヌなど地球の女性を襲ったことがある恐るべき宇宙人だ。

地上に上がってきた四人は空を覆い尽くすブラコ星人の宇宙船の大群に目を奪われた。すぐネクサスは巨大化してブラコ星人の宇宙船群を迎え撃った。

「デア！」

一方、グレンファイヤーはレイビーク星人のボスと対峙していた。

「貴様のせいで我々の計画が…」

「は！人の仲間さらっといて偉そうにしやがって！焼き鳥にして食ってやらああ！」

グレンファイヤーの繰り出した拳を、レイビーク星人は受け流し、

カウンターでパンチを繰り出した。しかしグレンファイヤーはそれを受け止め、新手にキックを喰らわせた。

「ぬぐう…」

お返しにレイビーク星人は目から放つ怪光線でグレンファイヤーを攻撃した。次から次へ撃ち込まれる光線を避けていくが、一発食らってしまう。

「ぐぉ！？痛っ！」

「きひひ…食らえぃ！」

再び怪光線を放つ星人。しかし、その一発はグレンファイヤーの拳によって打ち砕かれた。そして彼はレイビーク星人を逆さに吊るし、両足を捕まえて飛び上がると、一度ネクサスにも喰らわせた技を繰り出した。

〈グレンドライバー！〉

「おりゃあああああああ！！！！！」

「ぐえ…」

レイビーク星人はグレンファイヤーの強烈な技で背中を強く打ち、背骨をへし折られた。

「不味いぞ、ウルトラマンが！」

地上では不味いことが起こっていた。ネクサスがブラコ星人たちの宇宙船を迎え撃っていたのだが、彼の宇宙船より放たれたビームウエブに捕まり、身動きがとれなくなってしまったのだ。

「グッ！ジュ！」

なんとか体を動かして呪縛から抜け出そうとしたが、身動きがうまくとれない。このままだと何もできないままエネルギーを切らしてしまう。

とそんな時、炎の鉄拳がブラコ星人たちの宇宙船を打ち砕いた。爆発した影響で他の宇宙船にも誘爆、いくつか空の藻屑と化した。解放されたネクサスは、グレンファイヤーを見る。

「お前は…」

「へへ、どうよ自分が負かした野郎に助けられた気分は？」

わざと意地悪な言い方をするグレンファイヤー。しかし…

「誰だ？」

またしても忘れていたネクサスであった。

「てめえええええ!!やっぱり、ケンカ売ってやがんのかこらあああああ!!」

「耳元でギャーギャー喚くな。鼓膜が破れる」

向かっ腹を立てて喚くグレンファイヤーを無視し、ブラコ星人たちの宇宙船を見るネクサス。まだかなりの数が残っているが、恐れることはない。もう捕まりはしない。後は全て仕留めるのみ。

「おい、手伝ってくれ」

ネクサスはグレンファイヤーに言う。

「ああ?なんでてめえなんかを手伝わなきゃいけねぇんだよ?」

やはり今までのネクサスの態度が気にくわなかったのか、うんとは言わなかった。

「ならいいさ。後は俺一人でやる。足手まといは不要だ」

ブチッ

ネクサスのその冷めきった言葉は、かえってグレンファイヤーの闘士の炎を燃え上がらせた。

「いいだろう!俺様の活躍、眼球がえぐれるほど目をほじくってよく見てやがれ!」

(扱いやすい奴…)

実は、これはグレンファイヤーを奮い立たせるための一計だった。
わざと彼を逆撫でして利用する。詐欺っぽいがここは置いておこう。

（まあ、助けてくれたことは感謝するさ）

彼はそう思いながら光の弓をエナジーコアより作り出す。

「ファイヤースティック！」

〈アローレイ・シュトローム！〉

「デヤア！」

炎の如意棒の一撃と光輝く一矢、それらによってブラコ星人たちの宇宙船群は全滅した。

「シュウ…！」

元の大きさに戻った瞬間、テファはシュウヘイに抱きついてきた。
相当不安だったらしい。

「…もう大丈夫だ」

自分の胸の中で震える彼女を彼はただ、顔は無表情ながらも優しさに満ちた両手で包み込んだ。

他にも捕まった人たちがいたが、ちょうどブラック星人との戦いから戻ってきたサイトがガンダールヴの力を利用してレイビーク星人の縮小光線銃を、逆に拡大するために使用したことで無事救出された。

「見せつけれくれるよ。まったく」

「シュウヘイも素直というか、感情表現が不器用だよねぇ～」

「ははははは…」

今回同行していたギーシュら三人はニヤニヤしながらも温かく見守っていた。

「くそ～…俺彼女いないってのに見せつけやがって…」

物陰から密かに見ていた紅蓮はミシミシと壁をひび割れるほど握りしめていた。男の嫉妬は醜いので皆さん注意するように。

ちなみに彼はその後、彼が所属する海賊団のガル船長に発見され、無理やり引きずられながらアバンギャルド号に強制帰還されてしまった。

13　星の破壊者

トリステインとは別の国の空に、紫色の暗雲が発生した。その怪しげな暗雲より二つの光が発生、地上に激突した。片方は山の谷に消え、もう一つは地面に激突した瞬間青年の姿になった。だが、彼が人間とは思い難いものが彼の右腕から流れ落ちていた。

絵具のパレットのような、青い血。

「ぐ…」

彼は重くなった身体を引きずりながら林の中へ消えていった。

「これは、次元振動…？」

コンピュータのディスプレイに表示されたマップに不思議な反応が見つかった。ゲルマニアの山中に何やら怪しげな振動がキャッチされている。いざ解析に移ろうとしたハルナだったが、調べようとキーを打とうとした瞬間、反応は消えてしまった。

「消えた？」

一体なんだったのだろう？最初は何でもないようなもんだと思っていたが、それから翌日にアンリエッタから通信が入った。

『ゲルマニアより依頼が入りました。国境の山中に謎の発行体が飛来、激突した瞬間消失したそうです。同盟国としての信頼を深めるため、ぜひとも調査に協力してほしいと』

「ゲルマニア！？あんな成り上がりの国なんかの頼みを聞くのですか！？」

ルイズは納得できない様子で声を荒げた。彼女は知ってのとおりゲルマニアを嫌っていた。キュルケの実家ツェルプストー家は自分の実家と昔からの因縁もあり、こんな依頼は却下すべきと考えていた。

「いいじゃんかルイズ。いがみ合うよか仲良くした方がずっといいだろ？」

サイトもゲルマニアのことは知っている。しかし、あの国では貴族はたいていただの金持ちということもあって貴族平民の差がほとんどない。その分地球の日本と価値観が似ているので、彼はむしろいい国だと思っている。同じようにハルナやシュウヘイも同意見だった。

「それはそうだけど、よりによってあの野蛮な成り上がりなんか…」

「じゃあ俺が行くよ。ルイズは無理せず残っていい。同行者にはゲルマニア人のキュルケを連れて行きたいんですけど、構いませんか？」

『ええ、ゲルマニアの方も連れて行った方が私もよろしいと考えてます。お気をつけて…』

そこでブツン！とモニターに映っていたアンリエッタの顔は消えた。

「さて、キュルケも呼ばないとな」

「サイト！」

あれほど仲の悪い奴に協力を仰ぐのを反対する、こうしてみると単なる私事ではないと思えてくる。しかし結局そんなことにこだわっている場合じゃない。このまま放っておいたら犠牲者を生み出す可能性が大きい。引き留めようと自分の袖をつかむルイズの手を、サイトは無理やり話した。

「お前だって、わかってるだろ？もう昔にこだわってんじゃ何も変われないって」

「それは…」

「したくないんなら無理しなくてもいいんだぜ？俺が背負うから」

ニコッ！と笑みを浮かべるサイトに、ルイズは思わず顔を赤くした。

「い、いいいいから！行くならとっとと行きなさいよ！」

「な、なに怒ってんだよ？」

「怒ってないわよ！」

怒ってんじゃん…内心毒を突きながらもサイトは基地を後にした。しかし、怒ると照れるを間違えるサイトも考え物である。

今回同行しているのはキュルケと、傷の手当を考慮して医務を担当

するハルナ。ウルトラホークに乗ってゲルマニアのツェルプストー領に向かった。

飛行中、窓から地上のゲルマニアを見て、サイトは驚いた。

「これが、ゲルマニア…」

地球ほどじゃないが、他の国にはないものが多く見られた。建物の作りは国の違いがあるためトリステインやアルビオンとも違うが、何より彼らは、ある建物が見えた時にはかなり驚いていた。

「工場…！」

「他の国より、なんか近代的…」

街は馬車などの交通機関を通しやすいように広くできており、整備もしっかりしている。これはサイトが異星人特有の優れた視力で見えたものだが、貴族らしき少年が身分の低い子供たちと遊んでいる光景も見えた。本当に身分の隔たりがないというゲルマニアに、彼は惹かれた。

「すごいでしょ？ゲルマニアは魔法などの昔ながらの方法より、新しい方法で国を発展させてるのよ。トリステインが協力せざるを得なかった要因はここにもあるのよ」

たしかアンリエッタはゲルマニアとの同盟のために政略結婚を迫られたことがあった。少なくとも小国のトリステインより国力と軍事力がある。それはこの国が新しいものに目を向けることを優先しているためだろう。

だがサイトは同時に不安も持っていた。文明の発展は軍事力を強化

させることが多い。力におぼれ、この国の人が争いを起こしたりしたら…
いや、止そう。
信じる者は救われるって言うし。

ツェルプストー家に着いた三人はキュルケを通し、はツェルプストー家より領内の調査許可をもらい、早速領内の山林の調査を開始した。

「自然の空気がおいしいな」
「地球じゃあまり見られなくなっちゃったね」

山は緑あふれる自然で一杯だった。空気は新鮮で清い。そして自然は美しい。

「怪獣反応もないし、センサーの誤作動かな?」

サイトはビデオシーバーの磁場探知機で辺りを調べているが、何も異常は見当たらない。

「油断禁物!宇宙船が飛来したかもしれないじゃない」

ハルナが背中を押すように言うが、サイトは一つの疑問を彼女に言う。

「それなら、ハルナの設置した監視衛星にキャッチされるはずだろ？」

「そっか…」

「かんしえいせい？なにそれ？」

二人が突然意味不明なことをつぶやき、キュルケはなんのこっちゃ？と首を傾げた。

「え、あああなんでもない！！」

わざと何事もなかったようにサイトはふるまって誤魔化した。

それから彼らは手分けして調査を再開することにした。手分けしてからサイトは心配になってハルナに確認のつもりで連絡を入れてみた。

「なあハルナ。なにか異常…」

しかし、ここで異変があった。ビデオシーバーのモニターは砂嵐で何も映ってないのだ。まさか、ハルナの身に何かあったのか！？今度こそ彼女を失うことになったらもう考えるだけで耐えられない。サイトは彼女を探しに足を速めた。

その時、彼は辺りの異常を感じた。今日は快晴の天気なのに、霧がさっきから濃くなっている。気になって山を登ると、彼はあるものを発見した。

「なんだあれは？」

デルフが顔を出してサイトに話しかける。

「わからない。でも、この星の機械には見えない」

彼らが見たもの。それは山に食い込んでるように落ちていた。約十メートルの縦に長い巨大なポッドだった。

「あれ？なにも映らない？」

通信不能の異常はハルナも同じだった。たった今ビデオシーバーから音が鳴ったのは確かなのに…

「故障？それとも…」

そんな彼女は辺りを見渡した。かなり奥まで進んでいたようだ。そして目の前に人がすっぽり入れるほどの洞窟の入り口があった。よく見ると、誰かが通った足跡がある。気になった彼女は洞窟の中へ足を踏み入れた。中は結構天井が高くて広かった。彼女はウルトラ一族になって以来聴力も優れている。つまり地獄耳。奥からかすかに聞こえるのだ。誰かが息を荒げているのが。

「はあ、はあ…」

誰かが倒れている。見たところ自分より年上の青年のようだ。あの

様子だとかなり疲れ切っている。

「大丈夫!?」

「うん?」

ここはどこだ?青年は目を覚まし、体を起こした。けがをした右腕は誰かがしてくれたのか包帯でまかれている。左腕には矢印のランプのマークが一つついている機械が身に着けてある。それを見て彼はホッとしたが、すぐに「だめか…」とどこか落胆したような表情を浮かべた。

「起きたんですね」

その声に警戒したのか、彼は変わった形の銃を構えた。声の主はハルナだった。手には温まった食べ物の乗せられた皿がある。

「脅かしてごめんなさい。おなかすいてるんじゃないかって、温かいもの用意してもらったんですけど」

「もしかして、お前がこの傷を?」

「はい、ある程度の医療を身に着けてましたから」

「そうか…」

ベッド脇の机に食べ物を置き、ハルナも椅子に座った。それでも青年は銃を降ろさない。かなり開会しているようだ。

「お前は何者だ？なぜ俺を助けた？」

「私、ハルナって言います。対怪獣組織ＵＦＺでオペレーターを務めてるんです」

刺激を与えないように彼女は自己紹介した。

「ＵＦＺ？」

「あなたの名前は、なんて言うんですか？あなたの血液からすれば、この星の人じゃなさそうですけど」

「お前に言うことなどない」

青年は銃を降ろしはしたものの、まだハルナに敵意を示してるように彼女をにらんでいる。

「あなたを助けたいんです。お願い、話して」

ハルナは正直青年があまりにもにらんでくるものだから僅かながら恐怖を感じたが、勇気を出して青年の手を握った。彼に敵意を持っていないと伝えるために。

すると、しばしの沈黙の末青年は口を開いた。

「…ケサム。お前の言うとおり俺はこの星の人間じゃない。装置のトラブルでこの星に流されただけだ」

ようやく自分のことを話してくれたのか、ハルナは笑みをこぼした。

「宇宙船は？」

「そんなものは使わない。こいつで空間移動する」

ケサムはハルナに、左腕に身に着けていた装置を見せた。さっきよりも矢印の数が増えている。

「座標をセットしてスイッチを押す。それで星から星へ移って行くんだ」

「次元振動の異常はそのせいなのね？だから監察衛星にもキャッチできなかったんだ…だったら私たちに任せてもらえませんか？そうすればあなたの身柄を…」

「よせ！」

ケサムは平手で制してハルナに言った。

「俺のことは言うな。装置は今充電中だが、直り次第この星を去る」

「そう、わかりました」

ケサムは驚愕した。この女、本当に言わないのか？俺はもしかしたら不審人物かもしれないのに…

「なぜ、言わないなんて…」

「けが人のお願いの一つくらい、聞いてあげなきゃ」

「真面目に答えろ！」

ふざけてるのか！？ケサムは癇癪を起したように怒鳴った。いきなり怒鳴られた彼女は身を強張らせはしたが、すぐ答えた。

「私は真面目よ。例え宇宙人だろうと困ってる人を助けるのが、私のやるべきことなんだもの」

「…」

ハルナはケサムの左腕の装置に目を向けた。確か星と星をあれで移動していると。

「あなたはたくさんの星を回ったんですね」

「ああ」

「うらやましいな。そこでいろんな人たちと交流したんですね」

「はっ」

ケサムはそれを聞いて鼻で笑いだした。

「私、何かおかしいこと言いました？」

「あまりの単純思考さに驚いただけだ」

ムッとしてハルナはケサムを睨む。

「私のどこが単純なの？ほかの星の人たちと心を通わせるなんてすばらしいじゃない」

そうだ、今この星で仲間を作ったことを誰が笑う？なにもおかしいことなんてないじゃないか。

「出会いなど、意味ないんだよ」

ケサムはベッドから立ち上がって歩き出した。しかし、すぐ傷が開きそうになったことで激痛が彼を襲う。床に倒れそうになったところを、ハルナはすぐ受け止めた。

「無理しないで。あなたの傷は深いんですから」

「みんな、これを見てくれ」

基地。一時帰還したサイトはモニターに映し出した映像を仲間たちに見せた。うつされたのはあの縦長のポット。

「これは何なの？」

ルイズがサイトに尋ねると、彼は首を横に振った。

「わからないな。でも何か危険なもののように見えるのは確かなんだけど…。
ところでハルナはどこだ?あいつに調べて欲しかったんだけど」
仲間たちの中で解析や医療に優れているのは彼女だ。だが、そのハルナがいない。さっきから姿が見当たらないのだ。
「みんな知らないか?」
サイトの質問に、誰もが「さあ?」と答えた。誰も知らないらしい。
謎のポッドが発見されて三日過ぎた。サイトはルイズとハルナ、この三人で寝るようになっていたが、彼は起きた時あることに気が付く。
ハルナの姿がないのだ。
一体どういうことなんだろう。少なくとも起きたときはいつもいるはずなのに。そう言えば、三日前の夜から「先に寝ていいよ」と言ったきり彼女の姿を見ていない。
気になったサイトは起きて彼女を探してみた。

「なにしてるんだろ?」

学院のあちこちを探してみたが、彼女の姿は見当たらなかった。そこで

「さあな、もしかしたら男かもしれんぜ?」

「はああ!?」

思わずサイトは大声を出してしまった。あの清純そうなハルナが自分以外の男にうつつを抜かすなんてありえない。まず浮気されるような要素なんて何もなかった。(あくまでもサイトの記憶では)しかし…

「じゃあケサム、無理しないで休んでてね」

「!」

ハルナの声がどこからか聞こえてきた。浮気疑惑のためか、彼の足は自然と早まり、一直線に向かった。たどり着いたのは、生徒用が寝泊まりする寮の空き部屋だった。

誰かの気配がする。この部屋は誰にも使われてないはずなのに。

「ハルナ、いるのか?入るよ」

彼がすう、と扉を開けた瞬間いきなり扉の向こう側から銃弾ほどの

大きさの光が飛び出してきた。幸いサイトは瞬時に避けることができた。
ウルトラガンを手に、サイトは部屋に飛び込んだ。部屋は至って質素。ただ一人、ケサムがいることを除いて。

「君は…この星の人間じゃないのか？」

「お前だってそうだろ。ウルトラマン」

ケサムは銃をサイトに向けたままゆっくり椅子から立ち上がった。
明らかに高度の武装をし、敵意を向けるケサムを警戒するサイトはウルトラガンを降ろさないまま口を開いた。

「ハルナは？」

「安心しろ。なにもしちゃいない。お前とすれ違う形でついさっき出た。協力してくれると言ってな」

「協力？なにを言ってる？」

すると、ケサムは突然自分の腕を撃った。

「な！？」

「ぐう…！！」

いきなり自分の体を傷つけるなんて、一体どういうつもりだ！？サイトはその場で茫然とする。と、そこでハルナが駆けつけてきた。

「何の音？ケサ…」

サイトとケサム。二人の今の状態を見てハルナは言葉を失った。銃を向けるサイトと、腕が傷ついて青い血を流すケサム。彼女はサイトをにらみつけて怒鳴った。

「平賀君、なんで!!なんでケサムを撃ったの!?ケサムは悪い人じゃないのに!!」

「な、違う!俺じゃない!」

彼女は自分を誤解しているようだ。サイトは何とか弁解しようと強く言うが、ケサムがそれを遮るように言った。

「俺は、こいつに撃たれたんだよ。俺を侵略者と決めつけてな!」

「やっぱり…平賀君がやったのね!」

まずい。彼女はこのケサムという男を信じきっている。何とか弁解しようとするが、彼女は聞く耳を持たなかった。

「平賀君、言ったよね。誰もが手を取り合える平和な世界を作るって!なのに、これのどこが平和なの!?」

「違う!誤解だハルナ!俺は確かに銃を向けていたけど、何もしてない!」

しかし、バシン!乾いた音が部屋中に響いた。

「私が馬鹿だった…平賀君なんか大嫌い!」

「…！！？」

すべてが真っ白になったような気がした。ショックのあまりその場にウルトラガンを落とした。

「お前に見せたいものがある。来てくれるか？」

「ええ」

ケサムに促され、ハルナは彼と共に外に出た。

「……」

「旦那、大丈夫かよ？」

気の毒に感じて、地下水がサイトに話しかけるがサイトは黙って顔に影を落としたままその場に立ち尽くしていた。

失望された、裏切られた。そんな感覚が彼の心を支配していた。

とその時、サイトのビデオシーバーから音が鳴り出した。サイトは魂が抜けたようにビデオシーバーを開くと、シュウヘイの顔がモニターに映った。

『平賀、ゲルマニアにある巨大ポッドに異変が起きた！しかも高凪の設置した衛星から解析した結果、どうも高威力の爆弾らしい』

「え…？」

確か、ポッドと言えば自分があの時ゲルマニアのツェルプストー家領の谷で見つけたものだ。あれは爆弾だったのか？

『ところで、高凪はどうした？本来この役目はあいつのはずだが』

「ハルナは…」

彼はそこで発した言葉を重くした。さっきハルナに見限られたショックが大きすぎた。

『何言ってるのか聞こえんぞ？情報伝達は速やかに、正確に行え。死人見たいな目をした奴が惚れた女を守れるのか？』

「…！」

ハッとなってサイトは顔を上げた。そうだ、俺は何をしてるんだ？彼女がファウストにされて、その呪縛から放たれて帰ってきてくれたときのあの気持ちは何だった？
たとえ何者になっても、彼女を守ろうって誓ったんじゃないか！

『ところで、高凪はどこだ？』

「…言う必要はないよ。俺、言ってくるから」

『…わかった。油断するなよ』

シュウヘイは安心したのか、そう言って通信を切った。サイトもビデオシーバーを閉じ、意を決してウルトラゼロアイを手に外へ飛び出した。

「見せたいものって、なんですか？」

ハルナは気になる様子でケサムに尋ねる。一体なんなんだろう？

「…そろそろだな」

ケサムは自分の腕に着けられた、矢印のランプがついた装置を見つめる。

「あれだ」

彼が指差した方には、サイトが見つけたあのポッド型の爆弾だった。次に彼が口にした言葉は、彼女には理解しきれなかった。

「もう、この星に心残りは？」

「…え？」

「お前の恋人であるあの男に、未練はないか？」

「それ、どういう…っ！？」

突然ハルナはケサムに背後から取り押さえられた。彼女は自分の首回りみまきついたケサムの腕をほどこうとするが、力強くて敵わない。

「ど、どういうこと！？」

「あれは星の文明を一気に破滅させることのできる爆弾だ」

「なんですって!?」

「俺はいままで星と星を渡りながら、知的生命体たちの無益な争いを目にしてきた。自分たちに不都合なものを排除し、自然を破壊し、無駄な争いがこの星以外にも繰り替えされている。それを起こす愚かな人類を破滅させることが俺の使命だ」

「そんな…そんなことしたらあなたただってただでは!」

「爆破直前に俺は他の星に移る。今までと同じようにな」

「ケサム…あなた私をだましたのね!!!」

こみ上げた怒りを眼光として放ちながらハルナはケサムをにらみつけた。さっきの「見せたいもの」とは、学院から抜けるためのだまし文句だったのだ。

「お願いやめて!確かに人は自分の住む星を汚し、蝕んでるかもしれない。でも中には自分たちの罪を認め必死の努力をしている人だっているのよ!!!」

「それも結局むなしい努力に終わる」

「むなしいのはあなたじゃない!無から何が生まれるの?大切なのは互いに信じ合うことよ。私があなたを信じたように」

「自分の思い人を裏切ってもか?」

それを言われ、彼女は何も言えなくなってしまう。そうだ、私は彼を見捨ててしまった…。あの時私がファウストだった時のように助けようとすることなんて、もう期待できそうにない。
でも彼女は一つ信じていたことがあった。ケサムも本当は優しい人だ。
だから戦争を起こし、自然を破壊する生命体が許せないんだ。

「この装置の六つ目の矢印のランプが点灯したとき、あの爆弾は起爆しすべてが無に帰る。あと、五分というところだな」

ケサムの腕の装置の矢印は
しかし、そこで思わぬ援軍が彼らの頭上から目の前に飛来した。

「え…？」

「なぜ…だ？」

「ジェア！」

ドスン！！と地響きが起こると同時に、その援軍たる戦士が舞い降りた。

まぎれもない、ウルトラマンゼロだった。
彼は谷に落ちていた爆弾を拾い上げる。宇宙に捨て去る気か！ケサムもあれがなくては困る。乱暴にハルナを離すと、彼の周りを竜巻が覆い、彼の姿を隠して巨大化していく。
竜巻が消えた場所には、本来の、エイリアンとしての彼が姿を現していた。まるで石像のような顔に、黒と銀の鎧に身を包んだ戦士。

『宇宙工作員ケサム』。

「それをよこせ」

ケサムはゼロに手招きして言った。

「ケサム、お前はこれをどうするつもりだ？」

「この星の文明の破壊に使うだけだ」

「この星には何百万もの命が生きてるんだぞ！正気か！？」

「ああ、この星の文明を壊すことでこの星が救われるのなら、俺はいくらでも血を浴びてやる！」

瞬間、ゼロはケサムの拳によって殴り飛ばされた。谷にぶつかってしまったゼロに、ケサムはさらなる追撃として、手から衝撃波を放つ。ゼロはそれらを、爆弾が刺激され起爆しないように守る。だが、ケサムは容赦なくゼロに急接近、ハイキックとラリアットの順で攻撃を加える、何とか避けていってはいるものの、爆弾を持ってる右腕が封じられてるのでは攻撃がまともにできない。

ケサムに殴られ、ゼロは爆弾を落としてしまう。しめた！とケサムはそれを奪おうとするも、ゼロが途中で彼を背後から抑え込んでそれを阻む。

「デルフ、いけ！」

ゼロがケサムの動きを封じながら、ゼロスラッガーの一本を開放し、自らの意志で宙を舞ったゼロスラッガーはケサムの肩を斬りつけた。

「ヌオ！？」

今の一撃でケサムはゼロからも爆弾からも離れてしまう。その隙にゼロは爆弾をケサムとは逆方向に口を開けた崖に隠した。

ケサムは赤い光弾を撃つこむがゼロのブレスレットから出した盾によってすべて跳ね返された。

〈ウルトラゼロディフェンダー！〉

ゼロは全速力に走ってケサムに近づき、鉄拳を撃ち込んだがケサムそれを避け、ゼロを赤い左腕から放出したビームワイヤーに絡ませて動きを封じてしまう。

「ウワアア！！」

「止めだ…」

ケサムが右拳にエネルギーをため、それをゼロにぶつけようとした時だった。

「ケサム、星と文明が共存できる方法は必ずあるはずよ！あなたとも分かり合える！」

ハルナの声が彼の耳に届き、彼は動きを止めた。そして、地上を見る。ハルナは悲痛な表情を浮かべながらも続けた。

「私は、あなたを助けたことを後悔なんてしてない！たとえ星の破壊者だったとしても！！」

「……」

なぜ、だ？なぜそうまでして俺を信じられる？

「！」

ケサムがハルナに気をとられ、油断している隙にゼロの左手のガンダールヴのルーンが青く輝いた。再びゼロスラッガーを使ってビームワイヤーを切り離し、そしてもう一つブレスレットから飛び道具をケサムに向かって投げつけた。

〈ウルトラゼロスパーク！〉

「！」

いち早く気づいたケサムはそれを避けはしたが、それは囮だった。

「デュ！」

〈エメリウムスラッシュ！〉

「グアッ…！」

ゼロの額のビームランプから放たれた緑の閃光がケサムの肩に直撃した。

顔を上げたときには、ウルトラゼロランスの矛先を自分の眼前に向けているウルトラマンゼロがいた。

「もう、いいだろ？急所も外してある」

「…」

降伏を促すゼロ。ケサムの命を絶とうとまでは思わなかった。しかし、次の瞬間ケサムはゼロが隙を見せたのを見計らい、彼の槍を握り、ゼロの腹を蹴りつけた。

「グッ！？」

「どうして！？」

やはりこの星の人が信じられないのか？ハルナはケサムをじっと睨む。

ケサムはあの爆弾を手に取ってゼロたちの方を見る。

「俺の罪は、誰も信じられずにいたこと。だが、お前たちなら…」

その時、変身する前にも彼が身に付けていた装置の六つ目の矢印が点灯した。同時に、彼の持つ爆弾のランプが赤く点滅し始める。

「さらばだ」

そう一言だけ言い残し、ケサムは現れた紫色の暗雲、時空の歪みの中へ飛び込んで姿を消した。

「ケサム！」

彼を引き留めようと、届かない手を伸ばしたゼロ。

その時、ハルケギニアの空の向こうの宇宙が爆発した。

「まさか…」

間違いない。ケサムは自分の爆弾で自らの命を絶ったのだ。この星が、いやどの星も巻き込まれない場所で爆破して…
ハルナは力が抜けたように膝を着いた。

「友達になれたかもしれないのに…」

ポロポロと、彼女の目から涙の雫石が落ち、地を濡らしていった。
ゼロも、悔しそうに拳を握った。

「平賀君、酷いこと言って…ごめんなさい」

「…」

帰ってきてからサイトはハルナに対して不機嫌そうだった。ケサムの捨て身によるショックもあるが、今回はハルナの誤解から始まった亀裂だ。

「平賀君はずっと私のことを思ってくれていたのに、裏切るようなこと言って…」

「…」

「言い訳なんて見苦しいよね。私はもう平賀君と一緒にはいられない」

彼女はサイトに背中を向けると、彼の前から立ち去ろうとした。だが、サイトは彼女の手を取って引き留めた。

「逃げんなよ」

「え？」

彼女はサイトの顔を見た。その目はまっすぐ自分を見ていた。

「このまま逃げるなんて、俺は余計君を許せなくなる」

「でも、私は…」

「本気で俺を気遣ってんなら、これから先も俺と一緒にいてもらうよ。いや、嫌でも一緒にいさせてやる」

「でも…」

それでもハルナは納得しきれてない様子だった。

「確かハルナは俺のメイドさんだったよな。だったらご主人様命令だ。
俺から逃げるな！拒否権なし！いいな」

彼女の両肩を掴み、彼はそのままハルナを自分の腕の中に閉じ込めた。

「ケサムは俺たちを信じて、この世界の文明を生かしたんだ。ここで逃げたら命を張ったケサムが浮かばれない。そうだろ？」

「…うん」

かすかに涙声を発して、ハルナはようやく頷いた。

密かにルイズはそれをじっと見ていた。

本当はわかってはいた。自分では彼女には敵わないと。彼が自分より先に彼女を愛してる時点で、きっと…

これから先も妬くことはあるかもしれない。それでも彼を支えていけるご主人様でありたいと、強く心に刻んだ。

2018

１４　ネクサスノチカラ

２０１１年１０月の末…

「ふう…」

ここに何の影も秘めてなさそうな、箒を片手に太陽のように明るい笑顔で背伸びする青年がいた。

千樹憐。シュウヘイの数少ない親友の一人で、彼と同じように、ある超能力者のＤＮＡから誕生したプロメテの子の若者。

しかし彼が、シュウヘイがいなくなってからもう一年近くも経っていた。もうすぐ遊園地ではハロウィンイベントの飾りつけで忙しくなるというのに…いやそんな悠長なこと考えたら彼に悪いか。掃除道具を店の倉庫に押し込み、彼は休憩に店の客席に座って背伸びした。

彼が失踪した当初はさぼりとかの疑いがかけられたが、一か月、そして二か月と姿を現さない。もはや彼の行方不明はかなりの大問題に発展していた。

無論これを彼の所属していたＴＬＴ・ナイトレイダーのメンバーや作戦参謀長の吉良沢もこの件に頭を悩ませていた。そして心配していた。また彼が光から閉ざされた世界に身を投げたのではとか、または自分たち見てないところでビーストに襲われ帰らぬ人に…と縁起でもないことを嫌でも描くようになっていた。

「過去に何があってもあいつは、また帰ってくる。俺は、一度も疑ってないからな」

空を見上げながら彼は友達の姿を思い返す。

最初に会った時の彼は、誰にでも牙をむく獣のようだった。でも、自分たちと関わるうちにだんだん心を開いていった。まだ自分がデュナミストだったころに出会い、遊園地でしばらく働くこととなったときは、とにかく自分のありったけの常識とか特技を彼に仕込ませようと張り切ったものだ。

もともと犯罪者である彼が社会復帰できたのはそれだけじゃなかった。

欠陥が生じていたとはいえ、プロメテの子をほぼ厄介払い同然にアカデミーから追い出し、心無い金持ちの元に押し付けて、結果的に犯罪者に育てたのは自分の責任だといった人が、彼をＴＬＴの管轄下に置くことで責任もって更生させておきたいといった人がいた。

海本隼人。プロメテの子たちの元となった超能力者。彼がシュウヘイの保護を上層部に進言したのだ。彼にとって自分のＤＮＡから生まれた子たちは自分の子供同然だった。彼を失敗作だからという理由で捨てた果てに、彼を血まみれにしたのは自分だと後悔していた。それで当時、細胞崩壊（アポトーシス）で亡くなるはずだった憐と一緒に遊園地に置いて、憐と同時に監視していたのだ。

そして五代目デュナミストの孤門の変身したウルトラマンがすべての元凶を倒したのち、彼は身体能力を買われナイトレイダーに配属された。

やっと彼が光に満ちた未来を歩める。そう思った矢先に彼はいなくなってしまった。

「憐兄」

彼がいなくなってから定期的にこの遊園地に来る少年がいた。真木継夢。現在１０歳の少年で、将来空を飛ぶことを夢見ている。以前

も説明したと思うが、彼は初代デュナミスト真木舜一の息子だ。TLTに配属される以前からのシュウヘイと交流し、彼を兄のように思っていた。
兄のように慕う彼がいなくなったときはとても傷ついていた。

「シュウ兄はまだ帰ってきてくれるよね？」

「当たり前だろ？あいつなにかとしぶといし、そのうち心の地図だって治してひょっこり帰ってくるさ。そん時はきっと、俺たちに向かって笑ってくれる」

「そうだよね。僕、シュウ兄が帰ってきたらどうしようか考えてたんだけど、何がいい？」

「そりゃあもちろん、お説教と一か月トイレ掃除当番に決まってるだろ？」

身をかがめて意地の悪さを含めた笑みを憐は浮かべた。継夢も「大賛せ～い！」と納得の様子。

「さ、せっかく退院して来たんだから友達ととことん遊んで行けよ」

「うん！」

継夢は笑顔を浮かべながら、通園地のあまたの遊具に向かって走って行った。

「子供の笑顔、悪いものなんて言えないな」

パシャ！背後からカメラのシャッター音が聞こえ、憐は背後を振り

向いた。
姫矢准。真木の次にデュナミストとなったカメラマン。もともと純粋で熱血な性格で、ファインダー越しから面と向かい合って世界を見てきた。彼のそれはいつしか世界中の人たちを惹きつけ、多大な評価を受けた。しかし、真実を求めるうちに彼は人間の闇に踏み込む、いや『踏み込まされる』ようになった。普通ならこれでよかったと割る切れることにも常人以上に悩み、自分を精神的に追い詰めるようになった。そんな中、自分に追い打ちをかけるように彼は内戦中の異国に旅立ち、戦争の悲惨な光景を撮っていた。
死と隣り合わせの危険な世界で生きる中、姫矢は『セラ』という少女と出会う。負傷した自分を彼女は必死に看てくれた。心が荒んでいた姫矢にとって大きな光を灯した、妹のようだった。だが、姫矢が再び戦地の撮影に向かうと、彼の身を案じて追いかけてきた彼女は姫矢の目の前で爆死してしまう。このあまりにも酷な出来事、そしてその時に撮ってしまった写真が皮肉にも世界に評価を受けたことが、より一層彼を苦しめた。後に彼は死んだセラに導かれ、ウルトラマンとして『償い』という名の戦いに身を置くことになった。
孤門の変身したウルトラマンが元凶を倒してからの時期に、新聞社に復帰した彼はシュウヘイと知り合った。恋人を殺めてしまった、自分と似た過去を持つ彼に姫矢は彼と自分を重ねたこともあり、衝動的に彼を撮ったことで二人は仲が良くなっていった。

「姫矢さん、来てたんだな」

「ああ」

姫矢は近くのベンチに座り、自分が仕事やプライベートで撮った写真をテーブルの上にばらまく。

「姫矢さんの写真、ほんとすごいよな。他の写真家にはない何かを

持ってるような感じ」

「そうか？ところで…」

「あ～、あいつならまだ…」

「そうか…」

もしまた、シュウヘイが苦しんでいるのなら、似た過去を持つ人間として彼を助けたいと姫矢は思っていた。しかし、彼はどこに行ってしまったのだろうか…

「おーい！」

今遠くから走ってきたのは孤門だった。

「孤門、仕事はどうしたんだ？」

「姫矢さんも来てたんですか。今日は休みだからここの手伝いに来たんですよ。ビーストが現れたら直ちに行かないといけませんけど。そういう姫矢さんこそどうしたんです？」

「ああ、あいつがまだ戻ってないのか、な」

「その様子だと、まだ…」

あの日以来、彼が行方不明になったことで、ＴＬＴは彼を捜索するためにメモリーポリスやホワイトスイーパーを派遣したが、手がかりは皆無。結局捜索は中断された。姫矢の様子から、シュウヘイがまだ戻ってきてないことを孤門は悟った。

「僕はあいつが戻ってきてくれる気はするんだが、なんか…」

「「？」」

「漠然としているけど、すごく不安なんだ。まるで、ビーストよりも恐ろしい何かが来るような…」

ビーストよりも恐ろしい？彼はいったい何に不安を感じてるのだろうか。

とその時、孤門が身に着けていたパルスブレイカーがピピピ！と音を鳴らしだした。こんな日に出動とはついてないと思うことなく、彼は電源を入れると、彼の所属するナイトレイダーＡユニットの副隊長『西条凪』の顔が映った。

『孤門隊員、今すぐポイント３７７地点に急行して』

「ビーストですか？」

『いえ、もっと悪いものよ。さっきもＣＩＣのデータルームに侵入者がいたと報告があったわ』

「なんですって！？本当ですか？イラストレーターは！？」

イラストレーターは吉良沢の異名で、彼が予知能力に目覚めた時、イラストに未来を現した絵を描いたことでそう呼ばれている。データルームは彼の管理下にあるため、孤門は吉良沢に何かあったのではないかと懸念した。

『心配ないわ。一時コンピューターの機能が停止しただけで済んだ

そうよ』

「よかった…」

『とにかく早く来なさい！下手をしたら犠牲者が増えるわ』

凪からの通信はそこで途切れた。凪の話を聞いて三人は顔を見合わせた。ビーストよりも恐ろしいもの…彼らを苦しめてきたあの黒いウルトラマンたちウルティノイドだろうか。それとも別の何か？

「行って来い孤門。俺たちはここでテレビを通して見ている」

「はい！姫矢さんと憐も気を付けて」

孤門は大急ぎで二人の前から去って行った。ビーストの魔の手から無力な人々を救う。それが自分の使命なのだと言い聞かせながら。

「孤門の顔、以前よりよくなってきたな」

最初に姫矢が彼と会ったとき、人を守ることに何の疑いもなくまっすぐなのは確かだが、若さゆえかまだまだ未熟なところが多かった。だが今は、迷うことなく前に進んでいる。人間が忘れかけている美徳を彼は持っている。

「もうテレビで出てんのかな？と」

憐はテレビの電源を入れてみた。思った通り逃げ惑う人たちがパニックを起こして逃げている姿が映っている。だが、二人は次に画面に映ったものを見て驚愕を露わにした。

「ば、馬鹿な…」

「嘘だろ！あれって…」

一方、出動したナイトレイダーたちはクロムチェスターα、β、γ、δの四機から外の様子を見ていた。

「あれは、なんだ？」

β機に登場している和倉隊長は目に映っている不思議な何かに目を奪われている。

銀色でドロドロしたものが空を駆け廻っていた。今まで見てきたビーストとはあまりにも異色過ぎる。

そこで、吉良沢より通信が入った。

『みなさん、あれはビーストではありません。今調べたところ、全く別の生命体であることがわかりました』

「ビーストじゃない？じゃあ、あれは何なの？」

γ機を操縦する詩織が声を上げる。

『金属で構成されていること以外僕にもわかりません。ですが、あれが先ほど僕の管理するコンピュータに侵入していました。その目的はいまだ不明ですが、なにかしらよからぬことをたくらんで僕のコンピュータのデータに侵入したのは確かです。何あれには機密事項が山ほどありますから』

「では、作戦は？」

和倉が吉良沢に尋ねる。

『奴を逃がしたら我々の重要な情報がビーストたちにも漏れる可能性があります。住民への被害を考慮しながら、早急にターゲットを殲滅してください』

「了解。各機、攻撃開始！ターゲットを掃討せよ！」

『『『了解！』』』

和倉の指示に従い、クロムチェスター四機は一斉に攻撃した。

「スパイダーミサイル、ファイア！」

「喰らいなさい！アピロックミサイル！」

「レーザーバルカン発射！」

「クアドラブラスター、シュート！」

四人の握るトリガーのスイッチが押された瞬間、凪のα機と詩織のγ機から蜘蛛の巣を描く等にミサイルが、和倉のβ機と孤門のδ機から強烈なレーザーが放たれ、空を飛行していた物体に直撃し、物体は広大な空き地に落下した。

激突と同時に起きた衝撃からか、物体は銀色に光る液体金属の池と化した。

「…」

倒したのか？それにしてもあれはなんだ？金属で構成されたと聞い

たが、自分たちはビースト、それ以外ではウルティノイドとしか戦ったことがないのであのような生命体は異種的すぎる。

と、次の瞬間だった。ドロドロの液体金属の池から眩しい光が巻き起こって辺りを包み込んだ。

「うわ！？」

チェスター四機に乗る四人は思わず目をふさいでしまう。彼らはその光を浴びているとき、本能的に違和感を感じ取っていた。

『彼』に似た、赤い光に。

四人は光がやんだところで目を開けると、驚くべき光景を目にした。

「う、嘘お！？これどういうこと！？」

あまりにもびっくりして詩織は間抜けな叫び声をあげた。

「そんな…なんで？」

一番これに動揺していたのは孤門だった。だって、彼は自分から離れて以来全く姿を見せていないのに…

しかも、「三人」であるのはあまりにもおかしい。

だが、それだけではなかった。空に真っ黒の怪しげな暗雲が起こったのだ。

「あれは…アンノウンハンド！！！！？」

彼らナイトレイダーにとって一番の強敵でもあった「冥王」の、姿なき手。数々のビーストを送り込み、ウルトラマンを苦しめた存在。今やＴＬＴの存在が公のものとなった今では悪名高い凶悪な存在として知られていた。

「いっしーは孤門君がやっつけたのになんで出てくんのよ！？」

彼女の言う「いっしー」とは、シュウヘイが倒すべき敵として定めている男、石堀。かつてはナイトレイダーの一員でともにビーストと戦った仲間、というのは彼らの目を欺くための芝居だった。実際は凪がウルトラマンの光を手にするのを予知し、彼女の心に闇を植え付け、その闇が彼女の変身したネクサスの光エネルギーを、石堀が真の姿を取り戻すためのエネルギーとして利用されてしまった。自分と交際していたこともそのための演技だったことを知ったことで、詩織はたった今見ているアンノウンハンドに激しい怒りの眼差しを向けていた。

アンノウンハンドは放射した紫色の光で「三人」を包み込むと、何事もなかったように姿を消した。

「消えた…？」

茫然と隊員たちはアンノウンハンドの消えた空をただ見上げるだけだった。

「…」

一方、彼らが捜している青年、シュウヘイは学院の外を基地の窓際から眺めていた。そんな彼にサイトが話しかけてきた。

「どうしたんだそんなに空を見上げて」

「いや、大したことじゃない。ただ…」

「ただ、なんだ?」

「故郷から離れてもう一年たったんだな、って思ってたんだ」

「そういやお前、この次元とは違う地球からきたんだよな。俺とは違って、帰る方法がわからないんだから、結構つらいだろ」

「まあ、な。向こうにも仲間はいる。尊敬してる人もいる。帰りたいとは思うんだが…」

帰れない。第一手がかりがないし、やるべきことを中途半端に残して帰ったら後味が悪い。それに…

(テファ…)

彼は、もしかしたら自分と仲間を引き離したことで憎んでいたかもしれない少女と心を通わせ始めていた。元の世界に帰って彼女と離れることになるかもしれない。だが、自分はそうたやすくためらうことなく帰ることができるだろうか…。

密かに、それを基地の入り口のドア越しから聞いていた人物がいた。シュウヘイと心を通じ合わせてきた少女テファ。中から聞こえる彼の話を聞いて彼女は不安を感じていた。

思えば、ルイズがサイトを地球から召喚したように、自分もまたシュウヘイを故郷の仲間から引き離した女。以前ウェザリーの計らいで彼の世界を模した仮想世界に行ったことがあった。幻想だったのは確かだが、それでも彼の仲間たちは彼を本気で気遣っていた。

自分は、彼がやっと手に入れた大切なものを引きはがした…最低な女だと思いこんだ。彼が故郷にいたままなら、自分のことやこの世界のために苦しむことなんかなかったかもしれないのに…

（私、酷い女だ…）

表情を暗くしていくテファ。自分は彼にふさわしくない。自分せいで心に深い傷を負っている彼をさらに肉体的にも、精神的にも追い詰めていったのだ。

彼女は基地から背を向けた時だった。

「な、何このとんでもないエネルギー反応！？」

中から飛び上がったかのように叫ぶハルナの声が響いてきた。一体どうしたのだと基地内で待機していた仲間たち、そしてテファも気になってコンピューターの画面を見る。赤い点が表示された箇所に。赤い点が撃たれているが、それを現すエネルギー数値があり得ないスピードで上昇している。

と、そこでシュウヘイも見られないようにエボルトラスターを取り出した。ビームランプの緑色の光が、とてつもないほどの速さで点

滅している。今回の敵はかなりの大物に違いない。

「ハルナ、画面に出してくれないか？」

サイトに言われ、ハルナは現場の映像をアップして表示した。そこには、シュウヘイの世

「アンノウンハンド…！」

それを見てシュウヘイは表情を堅くした。まぎれもなく、奴が…

石堀が刺客を送り込んでくる前触れだと思いながら。

だが、その刺客の正体を誰が予想できたと言えたのだろうか。アンノウンハンドの中心部から赤い光が三つ飛び出し、地上に落下した。

「な！？」「うそ！？」「なに！？」

ルイズやギーシュ、他の面々をこれを見て自分たちの目を疑った。一番驚いていたのは、シュウヘイだった。

「馬鹿な…これは！？」

画面に映っていたのは、なんとウルトラマンネクサスだった。それも一体ではなく、三体だ。

一体目は、最初のビースト『ザ・ワン』と戦ったときに初代デュナミストの真木が変身したウルトラマン・ザ・ネクスト・ジュネッス、もう一人はかつて姫矢の変身したウルトラマンネクサス・ジュネッスに、残った一体は憐の変身していたウルトラマンネクサス・ジュネッスブルー。

先ほど、ネクサスの世界でナイトレイダーの面々が見た光景は、彼ら三人が同時にいたものだった。

と、ここでサイトのビデオシーバーが鳴り出し、サイトは蓋を開くと、画面にアンリエッタの顔が映された。

『みなさん！シュウ…いえ、あれはどういうことです！？』

思わずシュウヘイの名を呼ぼうとしていたことに気が付き、危ういところで口を一回地座した彼女は改めてサイトに尋ねる。余談だが、さっきルイズとギーシュもシュウヘイのことかと思ったが、すぐに知らないふりをした。

「それは…」

返答に困るサイトの代わりに、ハルナが代わりに答えた。

「強すぎる金属反応…あれはウルトラマンネクサスじゃありません！黒崎君のいう、アンノウンハンドが他の生命体の姿を借りれる怪獣を送りこんだんです。その怪獣が、おそらくネクサスの姿をコピーした。おそらく能力もすべて…」

『じゃあ、あれは偽物なのですね！？』

偽物とはいえ、三体ものウルトラマンが相手…これは戦慄というものを感じざるを得ない。それにもしあのにせウルトラマンたちが町の人たちに襲い掛かったらひとたまりもない。

一刻も早い対処が必要となる。

「アンリエッタ、攻撃してくれ」

シュウヘイの心の中は複雑なものだった。
今や町に出かけたら英雄扱いされているウルトラマンの話を耳にタコができるほど聞いている。それを利用したアンノウンハンド＝石堀に対する怒りを抑えていた。それにあのウルトラマンたちは自分の先代たちの姿をコピーしたもの。攻撃することを自分にも、他にウルトラマンを崇拝する者たちにも躊躇いの心を植え付ける意図が見える。だが、どのみち倒さなくてはならないのは確か。

「俺もホークで援護する」

そういって彼は基地を出た。サイトも彼を追って外に出た。だが、彼だけでなく、レイナールも衝動的に二人を追っていった。

（先代と現役の戦いを観戦して楽しむために、先代の偽物を送り込んだのか？石堀め…）

トリスタニアの郊外で、何百人もの大砲隊と、それに相当する数の大砲が並べられた。

「陛下、本当にウルトラマンを？」

武装した王宮の兵たちは主であるアンリエッタを見る。彼女も武装して現場の指揮を執る様子だ。

「同じ姿のウルトラマンが三人も同時に出るなんてありえません。

それに彼らは怪獣たちとの戦い以外で出てくることはなかった。おそらくあの偽物たちは、本物と戦うために送り込まれた刺客だと予想しています」

「了解…各員、ウルトラマンを攻撃しろ」

兵士たちは衝撃的な顔になったが、「り、了解…」と歯切れが悪そうに承知した。

「なあ、本当にウルトラマンを…」

「相手が何であれ、それが任務なんだ」

やはり偽物だと知らされても、兵士たちの顔に迷いが生じていた。それでも感情を律して命令通りに動こうとする者もいたが。

（シュウヘイさん…どうか早く来てください。兵士たちは混乱している…）

アンリエッタは本物のネクサス、シュウヘイが来るのを願いながらにせの巨人たちを遠くから見つめる。

「う、撃てええ！」

魔法衛士隊の部隊から風、火の魔法が発射され、そして大砲部隊から砲弾が発射された。

魔法や砲弾による火花が偽物たちの体にあたって起きるが、どういうことなのだろうか？にせウルトラマンたちは反撃してこない。

「待っているのか？本物が現れるのを…。それとも…」

そう思ったとき、にせネクストが光の刃で反撃しだした。

〈ラムダ・スラッシャー！〉

「「うわあああああ！！！」」

いくつかの大砲があっけなく爆発していく。
ちょうどその時、サイト、シュウヘイ、レイナールの乗っているウルトラホーク一号が飛来した。中央胴体部のα機にサイトとレイナール、β機にシュウヘイが搭乗している。
だんだん偽物たちが暴れだしていく。我慢できなくなったサイトはレーザー光線の発射スイッチを押そうとした。が、そこで横からレイナールが彼の手を阻んだ。

「レイナール！？」

「偽物だって、頭ではわかるんだ。だけど…」

僕には攻撃できない！！！
ホークの内部に彼の悲痛な声が響いた。

「僕は、黒いウルトラマンが現れる以前ウルトラマンネクサスに命を救われたことがある」

数か月前、彼が領地に帰省した時に彼の領地が襲われたという。たくさんの人たちが怪獣の魔の手にかかり、ついにはレイナールの屋敷にまで伸びてきた。
その時彼を襲ったのは『宇宙戦闘獣コッヴ』。彼は屋敷の瓦礫に逃げ場を阻まれ、ついにコッヴの鎌状の手が振り降ろされようとした

時だった。

『うわあああああ！！！』

どこからか飛来した紅い光がコッヴを突き飛ばし、光は彼の前に銀色の巨人として舞い降りた。

〈炎竜昇！〉

『ギエエエエ！！！』

ネクサスの炎を纏った切り上げ攻撃でコッヴは間二つに割られ燃えつくされ、焼失した。これがレイナールが、ネクサスに助けられた時だった。

「ウルトラマンは、僕たちにとって英雄で、一緒に戦ってきた仲間なんだろ！？」

「レイナール…」

偽物なのが分かっても、彼を信じてるからこそ攻撃できない。自分にとって悪に落ちた大切な人が、またはその偽物が悪さをしたら、とても嫌な気分にはなる。でももし、自分が攻撃しなければならない立場に立たされたら…悩まず攻撃なんてできはしない。サイトもレイナールの気持ちがわかるような気がした。

シュウヘイはレイナールの言葉を聞き、エボルトラスターを見る。心臓が動いてるようにドクン、ドクンとランプが点滅している。

「…行くか」

あいつの思いに応えないとな。エボルトラスターを鞘から引き抜き、紅の光に包まれた。

「あれは…」

ドスン！と音を立てながら四つ目の紅い光が舞い降り、ウルトラマンネクサス・アンファンスとなった。

「シュア！」

〈パーティクルフェザー！〉

「グオ！？」「ヌウ！？」

三日月上の光弾がにせネクサスたちに直撃し、偽物たちは攻撃を中断させられて大きく仰け反った。
レイナールやサイトの顔に笑みがこぼれた。

「来てくれたのか…本物のウルトラマンネクサス」

（シュウヘイ、本物の意地を見せてやれよ）

「ジュワ！」

「「「ディア！」」」

互いに身構える本物のネクサスと三体のにせネクサス。しかし相手

は偽物とはいえ数々の強敵と戦ってきた先代たち。戦力的に不利に見て取れる。だからサイトも変身しようと思ったが、レイナールがついて来てるものだからしたくてもできない。それに…

（なんか今回、あいつ助太刀とかを拒否しそうな気がする…）

彼の予想は当たっていた。ウルトラマンとして、先代という名の越えなければならない壁を越えようとシュウヘイは思っていた。

真っ先に攻撃を仕掛けてきたのは、にせジュネッスだった。拳を突き出してネクサスに殴りかかろうとする。それを受け止めたネクサスはカウンターでハイキックを与える。

「デア！」

そこからにせジュネッスにラッシュパンチを放ったが、途中でにせブルーの背後からの蹴りによる妨害に会い、にせネクストの方に飛ばされた。

「フン！」

ネクサスを受け止めたにせネクストも彼の頭をつかみ、腹を殴り、膝で蹴りつけ、そのまま投げ倒した。

続いてにせジュネッスが彼を無理やり起こし、連続でハイキックを放つ。ネクサスも同じように連蹴りで相手のキックを受け止めていくが、彼がにせジュネッスと戦ってる隙に横から他の二体が光弾をぶつけてきた。

〈ラムダ・スラッシャー！〉〈パーティクルフェザー！〉

「グアア！！！」

横からの不意打ちを受けてネクサスは左方向に地面を転がされた。起き上がった時には三人のにせネクサスたちが自分を囲んでいる。しかも悪いことに、にせネクストは両腕を十字に、にせジュネッスはＬ字型に、にせブルーは右腕に光の弓矢を作り、オリジナルと同じように必殺光線の構えをとっていた。

いかに本物でもまともに全部受けてたらひとたまりもない。絶体絶命、いやこういう時こそ冷静に対策を練らなくてはならない。

（おそらくチャンスは一度きりだ。うまくやれよ）

心の中で自分に言い聞かせるネクサス。普通ならここで逃げる手を吹かうだろうが、彼はその選択をとろうとは考えなかった。

「逃げて！！！！」

基地のモニターから彼の様子を見ていたテファは必死に叫ぶ。その瞬間、にせネクサスたちから必殺光線が放たれた。

〈エボルレイ・シュトローム！〉〈オーバーレイ・シュトローム！〉〈アローレイ・シュトローム！〉

（今だ！）

〈セービング・ビュート！〉

ネクサスはにせブルーに向かって光の縄を飛ばし、縄は光の矢を突き破ってにせブルーを捕えた。そして力いっぱいにせブルーを自分

の方へ引き寄せ、

〈マッハムーヴ！〉

瞬時に両腕を×印に組んで一瞬にして紅い残像となってその場から消える。その結果、偽物たちの光線を受けたのはネクサスではなくにせブルーだった。忍者でいう、変わり身の術というものだ。

「グアアア！！」

にせブルーが自分たちの攻撃を受けてしまったことに動揺したのか、光線を止めてしまう二人のにせネクサス。しかし、その隙に空の彼方から現れ、かついつの間にかジュネッストリニティにチェンジしたネクサスが、自分たちの間の地面を殴ると同時に放たれた波動攻撃を受けてしまった。

〈滅閃光！〉

「ダアアアア！！！」

「「グワアアアアアアア！！！」」

にせネクストとにせジュネッスはにせブルーと同じ方に飛ばされ、落下した。

その時、三体の偽物たちに異変が起こった。何やら顔の辺りがドロッ！と溶け出し、まるでやけどを負ったかのように顔のあちこちが黒くでこぼこしたかのようになった。

偽物の化けの皮が、ついにはがれ始めたのだ。

「これで心置きなく攻撃できますね。全軍攻撃を！」

「正体を現せ！偽物野郎が！」

アンリエッタの指揮で大砲隊の砲撃、魔法衛士隊の魔法攻撃、そしてウルトラホークからのビームが偽物たちに襲い掛かった。

「「「グワアアアアアア！！！！」」」

凄まじい砂煙と爆発、その中に飲み込まれるうちに偽物たちは化けていた相手の姿をほとんどとどめていなかった、体中怪獣の体表のように黒くでこぼこし、不自然な個所に奇妙な突起物が現れていた。

三体の姿が完全に砂煙の中に飲み込まれてから晴れると、そこに偽物の正体があった。体長はウルトラマンと変わらないが、明らかに異なる姿をしていた。

と、突然正体を現した偽物の方から、先が二つに分かれた刺股のような杭が飛び出し、ネクサスの首元に直撃した。

「ヌワア！？」

それを基地のモニター越しから見ていたテファは仰天して口元を抑えてしまう。首元に刃物が当たったように見えたため、かなり最悪なことを想像してしまっていた。だが実際にはそうではなかった。あれは相手を地面に縫い付ける形で拘束するものだった。テファが想像してしまったようなことではなく、ネクサスは首元を押さえ込まれたように地面に拘束されてしまった。何とか首を拘束する杭を外そうとしたとき、また新たに杭が四つ飛び出し、今度は両腕と両足を拘束されてしまう。

「グウ…ウオ…！」

ネクサスが必死にもがく中、ようやく砂煙の中から三体の偽物が姿を現した。

『金属生命体ミーモス』。三体だったミーモスのうち二体はドロドロに溶け出し、真ん中にいた個体の体表にまとわりつき、一体に合体した。

「ギュルルルル！！！」

ミーモスは短刀代わりに杭を一つ手に持ってネクサスに止めを刺そうと身動きが取れない彼に近づいていく。

「ジュ…！」

「攻撃だ！」

「全軍ウルトラマンを援護！心おきなくやりなさい！！！」

サイトがホークのトリガースイッチを押してビームを、アンリエッタの指示で先ほどのように大砲隊と魔法衛士隊がミーモスに攻撃、ミーモスはひるんだ。

「ギュリュウ！？」

「デアアアアア！！！！」

その隙にネクサスは自らの体を発光させて力を振り絞り、無理やり杭を破壊し、立ち上がった。

今ミーモスはトリステイン軍やホークからの攻撃で気を取られている。今のうちに止めを刺しに、両腕を十字型に組み上げた。

〈オーバークロスレイ・シュトローム！〉

「デアアアア！！！」

「ギエエエエエエエ！！！！！」

ネクサスの必殺光線を受けて、ミーモスは後ろにのめりこむように倒れこんだ。

「やったあああ！！！」

ミーモスの撃沈によってトリステイン軍から勝利の歓声が上がった。

だが、その時倒れこんだミーモスの体が溶け出して地面に染み込んでいったとき、ミーモスの体から怪しげな赤黒いオーラのようなものが現れた。その中に守られているようにY字型の、エナジーコアに似た形の赤い何かがある。

なんだ、あれは…？

と次の瞬間そのエナジーコアに似た「それ」はネクサスの方に飛び出てきた。とっさに身を守ろうとするが、ぶつかった瞬間消え去った。

「…？」

一体なんだったのだと彼は気がかりだったが、ダメージもなく何事

もないようだ。

しかし、その夜から彼に異変が起こった。

ベッドで寝ていると、勝手に胸のリーヴスラシルのルーンが赤く光りだし、そして夢の中で何者かが自分に語りかけてくる声が以前にもまして強くなっていくのだ。

――血を、闇を求めろ

――光を、輝きを求めるな

――君は、我々と同じ…

――闇の存在なのだ

彼は光のない場所に立たされ、声の主の元を探ろうと辺りを見渡すと、いきなり目の前から血まみれに濡れた手が自分を闇の中に引きずり込もうと近づいてくる。

――止めろ

――来るな

「近寄るなあああ！！！！」

ガバ！！と尋常ではないほどに勢いで彼は起き上がった。

「はあ…はあ…またか」

どれだけ悪夢に悩まされるんだ俺は…汗をふき取りながら彼は起き上がって窓を開け、夜風を浴びた。知らない間にルーンの輝きも消えている。

「くしゅん」

背後からかわいらしいくしゃみが耳に入り、彼は背後を振り向いた。どうもテファがさっきの自分の叫びでびっくりして起きてしまい、夜風が入り込んだこともあって寒気を感じたらしい。それに気が付いてシュウヘイは窓を閉めた。

「起こしたか、悪い」

「ううん…」

彼女は、本当はさっきの彼の様子を見て何か言おうとしたのだが、何も言わずに布団に身を包ませた。

言おうとしたのは、今朝彼が言っていた「故郷」のこと。

（やっぱり、帰りたいのかな…）

聞いておきたいことなのだが、聞くことが怖い。彼を自分がこの世界に縛り付けているせいで苦しんでいる、だからもとの故郷に帰し

てあげたいと思っていたが、それもまた怖かった。彼が自分の目の前から消え去ることが、それ以上に怖く感じるのだ。

恐怖という点ではそれに以前のように、彼が彼でなくなることもまた…

（始祖ブリミル…教えてください。どうして彼ばかりこんなに苦しい目に合うのですか…？）

その頃、彼らが寝泊まりしているＵＦＺ隊舎の外で一人の人影が闇夜に紛れ込んで足を踏み入れていた。

「ミーモスに仕込んでいた俺からのプレゼント、気に入っていただけたかな？黒崎…」

あの「ウイルス」がルーンと共鳴したことでより俺に近づいてきたんじゃないか？偽物とはいえ、先代をあれほどの動きで圧倒したのだしな…

その人影、『冥王』こと石堀がこのとき不敵な笑みを浮かべたことは誰も知らなかった。

15　空飛ぶ大鉄塊

五年前、リュティスの宮殿…

幼さを残した青い髪を持つ少女は寝静まった夜、寝つけなかったのか起きていた。トイレに行こうと部屋を出て廊下を歩いてると、自分の父ともう一人の男が居間で何か話しているのを耳にする。

『「空飛ぶ大鉄塊」か…結局子供だましの小説に終わってしまったか』

『何を言ってる。君の小説は我々の想像をはるかに超えた逸材じゃないか。それほどのものだから狙われもする。奴らにね』

『何としてもこの本に隠された真実を隠さなくては…しかし、本当に協力してくれるのか？』

『僕は家臣の悩みでさえ聞いてあげないといけない性分でね』

「…」

少女はこの時、一体自分の父ともう一人の男が言ってる言葉の意味を理解できずにいた。

「ん…」

ある朝、今日もタバサは常に心がけてるとおり早起きした。大事なものを失った分、今日は何事もない日々でありますように…

幼いころから彼女は本を読むことが大好きだった。時にお気に入りは『イーヴァルディの勇者』。平民出身の戦士イーヴァルディが自分と恋に落ちた少女を攫った悪いドラゴンを倒し、最終的に彼女を結ばれるというファンタジー小説。平民たちの読む小説の中ではベストセラーに上るが、貴族たちからは貴族と平民の恋愛が快いものではないためか、一部の者にしか評価を受けなかった。だが、タバサは自分を陥れた過去からこの小説のヒロインに憧れていた。自分の前にいつかイーヴァルディが現れることを、ずっと夢見ていた。

イーヴァルディ、その単語で彼女は自分の知る男子の顔を浮かんでみた。ギーシュはまずあり得ない。マリコルヌも趣味が変人級という噂だ。レイナールはいざというとき頼りなさそうだ。

最終的に残ったのは、シュウヘイとサイト。なぜシュウヘイが浮かんだのか、やはり彼の正体が原因だろう。

「ウルトラマンネクサス…」

今でも色あせることなく覚えている。彼と初めて会った時に見せた、白く輝く優しい瞳。二度目に会ったときはショックだった。まさか盗賊の手助けをしていたとは。彼がウルトラマンだと知った時、なぜ自分を助けた巨人がこんな真似をしたのかと思ったが、それは彼らが育てている子供たちを養うための生活費稼ぎにすぎなかった。

不幸な子供たちを守り、育む彼。自分が言うのもなんだが普段の冷たい印象と大きく違う彼の姿はまるでイーヴァルディのようだ。

だが、なぜサイトまで残ったのだろう?シュウヘイにはもう守るべき人がいるからだろうか?確かに彼は他の人間にはない特別なものを持っているのは確かだ。でもさっき浮かんだとおり名はならない。ギーシュと違って誠実さを保っている彼は妙にモテるし、恋人がい

る。でも一つ気がかりなことがあるとすれば…

（戦い方がウルトラマンゼロそっくりだった。なぜ…）

いや、考えても仕方ない。

とその時、彼女の窓に一羽のフクロウが飛来し、足に掴んでいた手紙を彼女の足もとに置いた。

彼女は封を開き、中身を確認する。たった一枚の手紙にはこう書かれていた。

ガリア国境の岳付近にて謎の鉄の塊を発見した。各地に向かって移動中、その目的は不明。各国に悪影響を与えるやもしれないので排除せよ。もし命令違反、失敗をすれば、あなたの母上は…

シェフィールド

苦虫を噛むどころか、激しい憎しみで顔が歪んでいることに気が付いた彼女は冷静さを何とか取り戻し、窓際で指笛を吹いてシルフィードを呼んで乗ると、遥か彼方の空へ飛んで行った。

ガリアにて異変が起こったそうなので、ひとまず自分の自宅である屋敷に戻ってきた。

出迎えてきたのはただ一人、老練な平民の使用人ペルスラン。使用人の数は以前より少なくなった気がした。

「おかえりなさいませ」

「ご苦労様」

まずは母の元へあいさつに行ってみよう。実家に帰る以上、たとえどんな態度を示されても会わないといけない。だが、予想通り彼女は母から凄まじい剣幕で怒鳴られた。

「またしても現れたのか！！シャルロットの命を狙う下郎！」

彼女の母がこうなってしまったのは、すべて父を殺したあの男だ。父シャルルの兄である伯父ジョゼフ一世。彼の臣下が自分に手渡されたグラスに盛られた、心を破壊する薬。父の死後の晩餐会で自分を庇って母はそれを飲んでしまった。それからは自分ではなく、自分が母からプレゼントされた人形を自分の娘だと錯覚してしまうようになった。

「恐ろしや、私たちがいずれ王座を狙うなどと…私たちは静かに暮らしたいだけなのに。下がりなさい！」

「…また会いに来ます。母様」

今でもこみあげてきてしまう。今日は自分部屋で違う本でも読んで気分転換してみよう。自分の自室に戻り、彼女がそう思って手に取った本の題名は…

『空飛ぶ大鉄塊・上巻』

そう言えば、今朝小さいころの夢を見た。まだ父が生きていて、母も今のように狂乱しておらず、優しい母だった頃。

あの夜、自分の寝室に戻るとき父の部屋の前を通っていた。扉は偶然にも半ドアになっていて、中はかすかに見えそうだ。

『父様、開いて…』

思わず自分はそこで言葉を途切れさせてしまう。半ドアの向こう側に見えた影が、父のでもなければ人間のものでもなかった。まるで、亜人がさらに不気味に変化したような、畏敬の影…
その影の主は…

（誰だったんだろう…それとも夢？）

その先の出来事を彼女は覚えてなかった。
とりあえず彼女はこの『空飛ぶ大鉄塊』を開いてみた。出版当時、あまりにも荒唐無稽な内容が受け入れられず、下巻が発行されないまま絶版となったその本を、幼い頃はよく父にせがんで寝る前に読んでもらっていたものだった。

『ガリア軍は、山の上に巨大な影を見つけました。防衛軍が大砲の砲弾を撃ち込むと、巨大な筒状の、鉄の塊のようなゴーレムが現れたのです。大鉄塊は未完成ですが、自由に動き回れました。ため込んだエネルギーを放つと、一つの都市を一気に壊してしまえるのです』

「父様…」

あの頃のように、父が自分に本を読んでくれることは、もうない。
それは自分がもう１５歳だからとかではなく、父は伯父の手によって亡くなってしまった。

しかし、彼女はこれまでの出来事の積み重ねで復讐を誓ったのだが、彼らが現れ、彼らに降りかかる事件、それらを通していくうちに、彼女の復讐心に揺らぎが現れだした。

憎しみでは何も変えられない。過去は変えられないが、未来を変えることができる。

自分はいったいどうしたらいいのだろう。結局復讐の道を行くべきなのか？それとも、彼らのような道を行くべきなのか？

懐かしい思いで上巻を読みふけるタバサだが、異変は突然起こる。大きな地震が起こり、彼女の屋敷全体が大きく撓れだした。

「！？」

すぐ玄関から外に出てシルフィードを呼び、急いで飛び立った。屋敷から一番近い岳の麓に、謎の物体が出現。

それを見て彼女はいつになく驚愕せざるを得なかった。

不格好さが見えない整った筒状の鉄の塊が、山肌から顔を出している。

「どうして…！？」

それは、今朝読んだ『空飛ぶ大鉄塊・上巻』の挿絵に登場したゴーレム「大鉄塊」の待機状態に酷似した姿をしていた。その鉄の塊は地面の中へと姿を消した。

「あれ？」

大鉄塊の出現は、学院のＵＦＺ基地にも影響した。ハルナの管理するコンピューターにも大鉄塊に酷似したゴーレムの反応がキャッチされたのだ。

「何かあったのか？」

サイトたちＵＦＺの男性陣も察知して彼女の元に集まる。

「ガリアの方面に強いエネルギー反応が！今映像に映してみるね」

彼女がキーボードのキーを叩き、画面に現場の映像が映された。山肌から筒状の鉄の塊が顔を出している。あれはいったいなんだろう？

「あの塊からエネルギー反応が出てる…」

「なら俺、行ってくる」

サイトは基地から出てウルトラホークに登場してガリアに向かった。しかし、彼がホークで駆けつけた時に、あの塊は地面に潜ったのか姿を消した。

「いなくなってる。逃げたのか？」

ホークの操縦席から外を眺める彼は、そこで思わぬ人物を見かける。シルフィードに乗って自宅に戻っていくタバサだ。

「タバサ？」

「…？」

とりあえずなぜ彼女がここにいるのかを尋ねに行ってみる。彼女の家は、林の中に囲まれていて、古くも立派な屋敷だった。しかし、サイトは彼女の屋敷の人たちが異様に少ないことに気が付く。彼女も貴族だから使用人がたくさんいるはずだが。

「御無事で何よりです。お嬢様」

いつものようにペルスランが出迎えてきてくれた。

「客人がいるから」

「はっ」

もてなしてくれ。そういう意味でも言ったのだが、彼女のその言葉の意味をペルスランは理解した。本当のことを話さないでくれと。キュルケ一人ならまだしも、誰から見ても気のいいサイトが知ると騒ぎが大きくなりそうな気がしたのだ。自分が、本当はガリア王族で、政治権力争いで没落し、母が心を無くしたことにまで彼を干渉させたくなかった。

応接室のソファに腰かけるサイトに、ペルスランは紅茶の入ったカップと砂糖の入った小瓶をテーブルに置いた。その時、二人は視線が合った。

（なんだ、この爺さんは…普通の人とはどこか違う気がする）

（そうか、彼が噂の…）

「どうかした？」

横から本にしおりを挟んで尋ねるタバサに、サイトは思わず挙動不審になる。

「あ、ああなんでもないよ！それより、タバサはなんたってガリアに？」

「…」

彼女は自分が手に持っていた小説、『空飛ぶ大鉄塊・上巻』を彼に手渡した。

「えっと、この本は？」

あんまりこの世界の字は読めないままだが、ためしに本を開いてみた。

「空飛ぶ大鉄塊・上巻。これに出てくるゴーレムが実際に現れた」

「え！？」

これに出てくるゴーレムが実際に現れた？サイトはページを捲りにめくりまくって挿絵を探してみる。最初の挿絵を見て彼は驚愕した。基地のモニターで見た鉄の塊と、今見ている挿絵に描かれている筒状の鉄の塊の姿が、全く同じではないか。

しかもそれだけではない。その鉄の塊、待機状態の大鉄塊の中身の構図を現す電子板のイラスト、これは高度な科学力を持つ星人にしか設計できないものだ。

（なんだこの小説…まだ機械が未発達なこの星では、こんな精密な機械の設計さえできないはずなのに…）

まさか、この小説の作者は…

「そろそろ行かないと…」

タバサはソファから立ち上がって、杖を手にとる。

「お、おい！行くってどこにだよ！」

「大鉄塊を探す」

彼女はそう言って玄関からシルフィードに乗って空へ飛んで行った。

「タバサ…」

この小説に、何か特別な意味でもあるのだろうか？ここで解析はできないだろう。タバサが心配だがここは一旦トリステインに戻ってこの小説を調べてもらうことにした。

一方、タバサは大鉄塊を探していた。シルフィードの背中から地上を眺め、どこかに大鉄塊がいないか探してみる。しかし、どこからか炎が自分の方へ飛び出し、それに反応したタバサは身をかがめ、シルフィードは主を守ろうとヒュ！を素早く降下してその炎を回避した。

何者かが自分に火系統の魔法で攻撃してきたようだが、一体何者なのだ？顔を上げて敵を確認してみると、身に覚えのない竜騎士の三人組だった。あの鎧からして、自分が所属する北花壇騎士とは違う部隊の兵士のようだ。これも叔父であるジョゼフの差し金だろうか？しかしタバサは彼らの後頭部に何かあるのを発見した。何か、張り付いてるのか？

彼女の予想は当たっていた。彼らの後頭部に、４０サント（地球単位でセンチ）ほどの奇妙な蛾に酷似した生命体が張り付いていたのだ。こいつらがこの騎士たちを操ってるのか？

この蛾のような生命体、実は異星人だったのだ。

『宇宙昆虫ガロ星人』。

ガロ星人に操られた竜騎士の一人がこちらに風の刃『エア・カッター』を仕掛けてきた。その攻撃もシルフィードの身のこなしで避けることができたものの、隙をついてもう一人の騎士が自分の眼前に迫ってきた。しかも『エア・ニードル』の準備が整っている。何とか避けて、自分も魔法で反撃に転じなくては。彼女は呪文を唱え、凄まじい風の衝撃を発生させる。

「ウィンド・ブレイク！」

その突風は、三人の竜騎士を、彼らの乗る竜から引きはがし、地上に落とした。身を守るためとはいえ、後味の悪さを思い知らされた。が、安心するのはまだ早かった。背後から水魔法によって作られた水球がタバサを襲う。まだもう一人ガロ星人に操られた刺客がいたのだ。彼女はいち早く反応し、身をそらしたが、それが仇となった。シルフィードの背中から自分の身が離れていく。

（しまっ…！！！）

「お姉さま！！」

自分から離れていく主を救おうと、急降下を図るフィードだったが、さっきの竜騎士が炎の魔法でこちらに攻撃を仕掛けているせいで時すでに遅し、タバサは地上に転落してしまった。

「あああああああああ…！！！！！」

「タバサから、これを預かってきた」

基地に帰還してタバサから託された「空飛ぶ大鉄塊・上巻」を見せたサイト。仲間たちはその小説を手に取り、読んでみた。

「これ、絶版になった小説じゃないか。タバサはこんな意味不明なものを読んでいたのか？」

この小説は下巻が出ないまま絶版になったというから、やはり世間的には酷評らしい。
その挿し絵を見たシュウヘイは、驚愕の表情を露わにした。

「これは…確かＴＬＴで開発中とされていた重力遮断システムの設計図に酷似している！」

「なんだって！？本当か？」

「ああ、俺も元は防衛軍の隊員だ。こういったものに触れることが多いが、なぜこの星の小説にこんなものが…機械がほとんど出回ってないこの世界じゃありえないぞ」

シュウヘイとサイトの地球人どうしの話は、周りにいるギーシュたちは着いていけず、頭上に「？」マークを出すばかりだ。

「じゃあまさか、この小説を書いた奴って…」

サイトの中である予想が浮かび上がった。この星でありえないのなら、やはりどう考えても…

「タバサも心配だ。もっかい行ってくる！！」

「ん…」

背中がちょっと痛い。なにか堅いものの上で眠っていたようだ。いや、眠っていたなんてありえない！先ほどのことを思いだしてタバサは起き上がった。自分は襲ってきた竜騎士たちによってシルフィードから落とされて地上に…。どうして助かったのだ？しかもここは自分の屋敷の自室ではないか。誰が自分を助けてくれたんだろうか？シルフィードは外で寝ている。

ふと、そこで自分の部屋に入っていた人物が椅子に座っていることに気が付いた。

「ペルスラン？」

「おお！お嬢様、お気づきになられましたか！」

「もしかして、あなたが…」

「ええ、間に合って安心しましたよ」

そういうペルスランだったが、おかしい。あの高さからレビテーションの魔法を対象者にかければ助かるかもしれないが、ペルスランは平民のはずだ。

いや、待てよ…

その時の彼女の脳裏にある光景が浮かんだ。あの夜、トイレから自室に戻るとき、父の部屋の奥から見えた「人」ではない影。その時の彼女に気付いたのか、影の主はタバサに近づいて、扉を開いた。開いてきたのは、その部屋の所有者である自分の父ではなかった。

ペルスランだった。

「まさか、あなたは…」

墓にも思い出したことがある。彼女は、幼い日に本を読み聞かせてくれたのが父ではなくこのペルスランだったことを思い出した。父はなかなか政務で戻らないとき、彼に頼んで枕もとでイーヴァルディの騎士や空飛ぶ大鉄塊を聞いていた。

「そうだ、あなただった…私に枕もとで本を読んでくれていたのも、父様じゃなかった。ペルスラン、あなただったのよ。そしてあの夜、私が見た人間じゃない影の正体も…」

「…お気づきになられたのですか」

いつかは自分の正体がばれることを、ペルスランは予測こそはしていたようだ。

「お嬢様のご察しどおりです。私はこの星の住人ではございません。『キュルウ星』と呼ばれる星の者なのです」

「キュルウ星？」

「ええ、今から二十年前のことです…」

ペルスランの正体は、２０数年前にこの星に漂着した『帰化宇宙人キュルウ星人』だった。

当時、まだ若かったタバサの父シャルルがこの世界に流れ着き、故郷に帰れなかった彼を保護したのだ。実は彼こそが「空飛ぶ大鉄塊・上巻」の作者で、故郷へ帰るため宇宙船の建造技術を持つ者を探すために小説として出版したものだった。

だが、結局「空飛ぶ大鉄塊・上巻」は子供だましの空想小説としか受け止められず、下巻は出版されないまま絶版となった。逆にペルスランは侵略をもくろむガロ星人に目をつけられてしまう。

「ガロ星人は、現ガリア王ともつながりを持っておりました。お嬢様もご覧になった大鉄塊は、ガロ星人が上巻の内容をもとに作り上げ、再現したものです。そのせいで、私を守るために保護してくだされたあなたの父上は余計に命を狙われ、最終的に殺されました」

タバサは衝撃を受けた。父が殺されたのは、権力争いだけが原因ではなかったのだ。大鉄塊の秘密を守るため、自分の危険を顧みることなく自分の父は殺されていた。

恩人であるあの方の死は、私の責任でもあるのです。そう悲痛に語るペルスラン。大鉄塊を書いたことを後悔しているのだ。

「ガロ星人とガリア王は、おそらく大鉄塊のコントロール方法を求めています」

「使い方がわからないの？」

いや、あのシェフィールドならたとえコントロール方法がわからなくても、使い方がわかるのではないか？現にあの女は、たくさんのマジックアイテムを使いこなしている。なにせ奴もサイトたちと同様…

「いえ、たとえシェフィールドの能力をもってしても、使い方を理解しなくては、そして条件を満たさなくてはコントロールできないのです。ですから、連中は探してるのですよ。私か、大鉄塊の下巻の原稿を」

ガロ星人は、コントロール方法が載っているはずの下巻を探しており、タバサが狙われたのもそのためだった。

今、ペルスランは手に数枚の紙の束を手に持っている。

「これは大鉄塊の下巻の原稿です。コントロール方法が書かれております。これは作者である私には処分できなかった。ですから、お手数かけることになりますがお嬢様の手で、消してください。そして、覚えていてください。

いかなる世界でも常に、科学も魔法も、正義のために使われるべきなのです」

出版されることのなかった下巻の原稿をタバサに託し、ペルスラン

は彼女の部屋を後にした。

「ペルスラン！」

それを追うタバサだったが、ペルスランの姿は彼女が廊下に出た時は完全に姿を消していた。

そのペルスランは、ガロ星人に操られた竜騎士に囲まれていた。

「大鉄塊のコントロール方法を吐くのだ」

「貴様らにくれてやるものなどない！」

しかし、いくらペルスランも老人。この数で、しかも相手がメイジでは分が悪い。と、その時だった。

「は！」

「ヌオ！？」

タバサの無事と大鉄塊の捜索に来たサイトが彼の前に現れ、彼を襲ってきた竜騎士の一人を蹴とばした。

「相棒！こいつら虫が張り付いてんぞ！」

「わかってる！」

ガロ星人に彼らは操られているのだ。自分に次々と襲い掛かる魔法を時に避け、時にデルフに吸収させながらサイトは彼らの後頭部に付着しているガロ星人をウルトラガンで狙う。

「今だ！」

ビイイイ！！まず一体目、そして二体目がウルトラガンのビームを受けて剥がれ、操られていた竜騎士のうち二人が地面に崩れ落ちる。残った一体も、サイトが地下水の水魔法で操っていた竜騎士の足を凍らされ身動きを封じられ、直接投げナイフとして地下水を突き刺されて倒れた。

「けがはないですか？執事さん」

「うむ、助かったよ」

サイトの活躍で無事助けられたペルスランは彼に礼を言った。サイトは今一度ペルスランを見て、すぐに気付いた。彼は人間ではないと。

「あなたも、宇宙人なのか？」

「ああ、ウルトラマンゼロ。君のその姿がこの星での仮の姿であるように、私の、この『ペルスラン』としての姿も、私の仮の姿」

「教えてほしい。あの大鉄塊を倒す方法を」

「大鉄塊は完璧な兵器だ。いくら君でも倒すのは無理だよウルトラマンゼロ。すべては、私が書いた一冊の小説が招いたこと。この始末は私自身の手で決着をつける」

「だが…！」

無茶だ！そう言おうとした瞬間、キュルウ星人ペルスランの姿は消えた。

そしてちょうどその時、火山の火口の中から大鉄塊が出現した。

「なぜあんな場所に…」

一方、大鉄塊の内部にてガロ星人たちが現状の把握とこれからの行動について話し合っていた。少しあわてているようで、彼らも彼らで必死の様子だ。

「キュルウ星人が生きていた。しかしウルトラマンゼロに邪魔をされた」

「大鉄塊でキュルウ星人を誘導して、コントロール方法を把握せねば」

「まずはエネルギー補給だ。エネルギー量子変換システムを稼働させる！」

すると、火山の火口の真上に浮かんだ大鉄塊は、火口のマグマより赤く染まったオーラを、電球のランプのようなコアに吸い上げていく。火山のエネルギーを吸収しているのだ。

一方、タバサは自室で大鉄塊・下巻の原稿を読み上げていた。どのみち処分される前に、一度でも読んでみたい。あの続きがどうなってるかも…

――――大鉄塊は未完成だった。しかし、それでも都市を粉々にできる力を、保持しているのだった。今や大鉄塊には力が満ちていた。発光する体は破壊の限りを尽くすことを意味していた。その力は決して止まることを知らない。例え宇宙を守る神が、目の前に現れたとしても…

ついに、ガロ星人に操られた『鉄鋼ロボット・大鉄塊』が稼働した。以前のような筒状の待機状態ではなく、四肢と頭が存在する戦闘形態に変形して。
それを見たサイトはウルトラゼロアイを装着し、青き光に包まれた。

「ジュワ！」

直後、薄い雲間より青き戦士、ウルトラマンゼロが飛来した。まっすぐ大鉄塊の方に向かっている。
大鉄塊内部のガロ星人たちもそれを察知した。

「ウルトラマンゼロだ！情報はまだか？下巻の情報がなければ大鉄塊は未完成のままだ。シェフィールド殿も『完成状態で渡せ』とおっしゃられてる」

「未完成でもパワーはある。ゼロには量子変換システムの実験体になってもらおう！」

〈エメリウムスラッシュ！〉

「ジュ！」

ゼロのビームランプから閃光が放たれ、大鉄塊に向かうが、光線は大鉄塊の目の前で粒のようにつり、大鉄塊の胸のコアに吸収されてしまう。大鉄塊は反撃にゼロに、赤い稲妻状のワイヤーを放出してゼロの自由を奪う。自分に引き寄せ、彼の額のビームランプからエネルギーを吸収し始めた。

「グァ…！？グウ…ダア！」

〈ビッグバンゼロ！〉

力を振り絞り、ゼロは炎の鉄拳を大鉄塊に食らわせ、自分ごと地上に落下した。

……

しばしの沈黙の末、ゼロは頭に乗った土を払って立ち上がった。一方の大鉄塊は機能停止したのか動いてない。

今のうちに破壊しなくては。そう思って彼は大鉄塊に近づいていくが、それは大きな油断だった。

「デア！？」

突然胸のコアから発射されたビームを喰らい、ゼロは大きく仰け反り、前呑める形で倒れてしまう。辛うじて立ち上がったが、大ダメージの影響でカラータイマーが点滅を開始していた。

ピコン、ピコン…

根性で立ち上がり、ゼロは大鉄塊を取り押さえたが、同じように立ち上がった大鉄塊の凄まじい力で振り払われてしまう。もう一度立ち上がりはしたが、エネルギーをかなり吸い取られたこともあってかなりふらついている。なんども殴ってはいるが、ボディが頑丈すぎて全く打撃が通じない、逆に地面にたたき伏せられ、蹴り飛ばされてしまう。

「ぐ…」

絶体絶命のゼロ。エネルギーを吸い取られるうえ、ボディが頑丈すぎるせいで、まともなダメージがいまだに与えられてない。もし、他のウルトラマンがゼロに味方しても同じことだったかもしれない。

『止めだ…』

大鉄塊の胸のコアに光が集まっていく。このままだとやられてしまう。

「ガロ星人！」

そこで大鉄塊の中のガリ星人に呼びかける者がいた。ペルスランだ。

「私は大鉄塊の完全なコントロール方法を知っている！まずは私を大鉄塊に吸収させろ！」

自分から大鉄塊に取り込まれるというのか？ゼロには、ペルスランが何を考えてるのかわからなかった。

『わかった』

大鉄塊のコントロール方法に飢えていたガロ星人はそれに承諾、胸のコアから放出した光をペルスランに浴びせ、大鉄塊の中に取り込んだ。

ペルスランは大鉄塊を止めるために、わざと取り込まれたのだ。しかし…

「ぐおお…！！あああああ…」

『ばかめ、キュルウ星人よ。貴様の魂胆などお見通しだ』

『大鉄塊を止めるつもりのようだが、そうはさせんぞ』

ガロ星人の術でペルスランの意識が、奪われ始めていた。

――大鉄塊を完成させるには、人の熱い思いが必要なのです。量子変換システムには人の思いをエネルギーに変えることが可能なのです。私があの大鉄塊に乗り込めば、あの荒ぶる神を正義の神に変えることができるでしょう。

この星を救うには、私が大鉄塊と一つになることだけなのです

タバサはここまで原稿を読み上げて理解した。大鉄塊の完全なコントロール方法、それはペルスラン自身をエネルギーとして大鉄塊に取りこみ、彼の魂と共鳴させるというものだった。

しかし、大鉄塊と一つになって、無力化するには…
最悪の展開が、瞬時に彼女の頭の中に浮かび上がった。

「シルフィード！」

自分の使い魔の竜を呼び寄せ、彼女は飛び立った。

その頃、止めに放たれた粒子ビームはゼロには当たらず、彼の目の前にあたっただけだった。

一体どうしたのだ？ここにきて外すなんて…そう思うゼロの頭の中に、声が聞こえてきた。

『ウルトラマンゼロ…』

『その声、キュルウ星人か？』

『何とか大鉄塊の動きを封じることはできた。もうじき私の意識はガロ星人に奪われるだろう。その前に、私ごと大鉄塊を破壊してくれ！』

大鉄塊を彼もろとも破壊する！？そんなことしたら残されたタバサは…

『な、何をするのだキュルウ星人！』

ガロ星人の悲鳴を無視し、大鉄塊は自らの胸のコアの蓋をこじ開けた。

『さあ、ここをねらうんだ！』

「やめて！」

その時、少女の声が彼の耳に届いてきた。タバサだ。彼女はいつもの冷静な姿勢を完全に崩し、悲痛な声でゼロに懇願した。

「お願いやめてゼロ！！！その人は私にとって数少ない、大切な人なのよ！！！！」

タバサの叫びにためらうゼロ。だが、ペルスランの必死の叫びも彼をさらに悩ませる。

『何をしてるんだ！さあ、早く！！！』

もし今大鉄塊を破壊しなければ大鉄塊は他の町でも大暴れし、たくさんの犠牲が出るのは間違いない。しかし、だからと言って言うとおりにしたら、以前憎しみに任せてシュウヘイとテファを養っていた少女エマを傷つけた時のように…

（なんなんだよ…俺って結局無力じゃないか…！！）

自分の無力さを呪うゼロ。ウルトラマンになっても、ガンダールヴの力を得ても、助けたい命を助けられないなんて…

（いや、まてよ…）

ガンダールヴ？そこでゼロは、指をパチン！と鳴らして「ひらめいたぜ！」と叫んだ。

「ど、どうした旦那？いきなり大声出して」

このつらい状況で能天気そうな声を上げたゼロに、ゼロスラッガーに乗り移った地下水はぎょっとなる。

「時間がない、行くか！」

突然ゼロは自分の体を発光させ、光になると、なんとペルスランのように露出された胸のコアから大鉄塊の中に入り込んだではないか。

「……」

一体彼は何をするつもりなのだ？残されたタバサはただ茫然とシルフィードの背中から眺めていた。

とその時だった。

『グアアアアアアアアアアアアアア！！！！！』

ガロ星人の悲鳴が響くと同時に、大鉄塊が関節部を中心に火花を散らしていく。そして胸のコアから、ウルトラマンゼロが手の中になにかを持っている状態で飛び出してきた。

『おのれ、ウルトラマンゼロおおおおおおおおおおおお！！！！！』

尋常でないほどの断末魔を残し、大鉄塊は砕け散った。

実は、ゼロは大鉄塊の中でガンダールヴの力を使って大鉄塊にガロ星人の命令の無視をプログラミングし、その後は洗脳術さえも無力と化したガロ星人たちをエメリウムスラッシュで撃破したのだ。

爆発がやむと、ゼロは握っていた右手をタバサの前に差し出し、開いた。
そこには、なんと大鉄塊に取り込まれたペルスランがいたのだ。

「ペルスラン…」

こみ上げくる涙をこらえながら、タバサはシルフィードの背中に彼を迎え入れる。ガロ星人の術の影響か、意識はなかったが無事のようだ。

「ありがとう…」

自分を見下ろすゼロに、感謝の眼差しを向けるタバサ。今度こそ、誰かを救うことができたことに満足し、ゼロは彼女に頷いて、大空へ飛び去って行った。

「ジュワ！」

科学も魔法も、常に正義のためにあらねばならない。
学院に戻ってから彼女は、再び「空飛ぶ大鉄塊・下巻」の原稿を読み上げていた。
そして最終回の後に、新たに書き加えた。

――――大鉄塊は、人間と同じ心を手に入れました。しかし、最初は

彼を受け入れてくれる人はいませんでした。なにせ何人ものスクウェアメイジが一斉にかかっても倒せないほどの強さだからです。一人寂しく、大鉄塊は孤独に絶望していました。

しかしある日、凶悪な怪獣が現れたのです。町の人たちは迫る死の恐怖に耐え切れず、逃げ出す中、大鉄塊は大好きな人たちを守るために立ち上がったのです。

その戦いで、彼は完全に力尽き、動かなくなりました。人々は彼の、人間でいう死を知り、とても哀れに、そして彼を受け入れなかったことに後悔しました。

『始祖よ、どうか彼にもう一度新しい命をおたえください』

みんなが祈った時、雲で覆われた空から一つの光の柱が地上に根を下ろし、そこから青い巨人と銀色の巨人が現れました。

『お前たちの願い、聞き入れた』

彼らのまばゆい光で、奇跡が起こりました。

大鉄塊は蘇りました。そして、こんどこそ人々に愛された守り神として人間たちと共にこれからの人生を歩んでいくのでした。

「科学も魔法も、常に正義のためにあらなくてはならない…」

ペルスランが教えてくれた言葉を胸に、彼女は今日も新たな日々を送るのだった。

一方、ガリア首都リュティスの宮殿。

そこの一室で、あのシェフィールドと、もう一人タバサと同じ髪の色をした男が話していた。

彼こそが現ガリア王、ジョゼフ一世なのだ。

「ジョゼフ様、ガロ星人たちは結局大鉄塊のコントロール方を探せず倒されたようです」

「そうか、所詮レコンキスタのように、僅かな余興にすぎなかったというわけか。しかし、ウルトラマンゼロか。いずれ我々の障害になるやもしれぬ」

「何か手をお打ちになされるのでしたら、なんでもおっしゃってくださいませ」

「そうだな…そろそろトリステインとアルビオンの虚無にちょっかいでも出してみようか」

ガロ星人ともつながり、さらにはレコンキスタを操ってアルビオンを陥れようとする彼らの狙いは、一体何なのだろうか…

１６　二人の虚無と絆（前書き）

前回誰も感想送ってこなかった…（泣）

16　二人の虚無と絆

ずっと守られていた。彼は自分の傷をものともせず、ひたすら私を助けてくれた。
どうしてそうまでして傷つくことを恐れないの?どうして痛みをそんなに堪えきれるの?
私が、あなたの初恋の人に似てるから?その人を助けられなかったことを今でも後悔してるから?

もう私のために傷つかないで。
気持ちは嬉しいけど、私だって辛いから。
そう言ってもあなたがそんなこと、聞くはずないか…

せめて私も、あなたの力になれるだけの力があったら…

BYテファ

「はあ…」

朝から元気のないため息をつくテファ。自分の罪を自覚してから落ち込み気味だ。
その罪とは、自分の身勝手で彼を故郷から引き剥がし、この世界に縛り付けていること。

自分がもし、他の誰かに召喚されて使い魔になれ、などと言われた

ら嫌だ。自分が育ててきた子供たちと離れると考えると、自分がいなくなったら彼らはどうなるというのだ。

考えていくうちに自己嫌悪に陥っていくテファ。一体どうしたらこの過ちを正すことができるのだろう。彼もこんな風に悩んでいたのだろうか。自分が憎しみに身を任せたことで人殺しを辞さない悪になったこと、挙げ句の果てに恋人さえ手にかけた自分がこの先どうやって生きていくのかを。

そんな彼を自分は余計に苦しめている。使い魔の印であるルーンを刻み付けられたせいで、彼は一度自我を失い、悪魔そのものと化したことがあった。

せっかくかつての恋人のことを吹っ切れそうになったのに…あんなものを刻まなければ、彼は新たな悩みを抱えることもなかった。

「…」

どうにかして彼を解放できないのか？それか、彼にしてやれることがなんなのか…

「どうしたテファ。具合でも悪いのか？」

「え？」

実はさっきまで授業だったテファ。いつの間にか授業が終わり、シュウヘイが迎えに来てくれていた。

「あ、ううん。なんでもないの…」

まるで避けるかのように彼女は教科書の束を抱え、教室を後にした。
最近彼女が自分を避けている気がする、何かあったのだろうか。それとも…

（俺とはもういたくないってか…）

自分の両手を見るシュウヘイ。いくら善人ぶって戦って、彼女を守ろうと思っても過去が消え去ることなどありえない。血でどっぷり塗れたことのある手を、彼は憎らしげに睨みつけていた。

「はあ…」

何をしているんだろう…こんなことしても全然彼のためにならないのに…彼は自分をとことん追い詰める人だから、やはり自分といたくないなどと誤解されかねない。

私が彼にできること。それがきっと彼への償いになる、いや、本当にそうなのだろうか？彼もたとえ、ウルトラマンとして戦っても本当は許されるわけではないとわかっていた。
じゃあ、どうして彼は戦うのだろうか？
やはり授業中に考えていた通りなのだろうか。

「何してんのよこんな場所で」

誰かに呼ばれ、テファは顔を上げた。自分を読んでいたのは、ルイズだった。二人は廊下を歩き、噴水の腰掛に座った。

「ねえ」

彼女に聞いてみよう。同じ人間の使い魔を召喚した彼女に聞けば、何か見いだせるかもしれない。

「なによ？」

「ルイズは、サイトを召喚したこと、どう思った？」

「急にどうしたのよ。そんなこと尋ねて」

「教えて、どう思ったの？」

「そうね…」

ルイズはしばらく沈黙し、再び口を開いてテファに言った。

「最初は嫌だったわよ。こんなへっぴり腰の平民なんか召喚するなんて情けないって。でもその時の私、『ゼロのルイズ』って馬鹿にされたこととか、ヴァリエール家の三女だからとか、そのせいかもしれないけど、何もわかってなかった。ただみんなに認められたいってそれだけを考えて、他の誰かの気持ちとか、自分の国のためなら相手を倒すことの罪の重さとかまるで考えようともしなかった。でもサイトと関わるうちに変わったわ。

あいつはあの時からすごく優しかった。甘ちゃん呼ばわりされてもおかしくないほどにね。もちろんそれも気に入らなかったけどあの性格が、私のように国や自分の名誉のために戦うんじゃなくて、誰かのために体を張ることの方がよほど価値のあることに気付かされた。

だから、あれだけのお人よしをこんな残酷な戦争が起こる世界に引き込んだことを後悔したことがあった」

ルイズもまた、テファのようにサイトを召喚したことを悔いたことがあった。

「でも、本音でいえば帰って欲しくない。ずっといてほしいって思ってる。べべ、別にあいつがすす、好きだからってわけじゃないわ！ただ、使い魔と主人は一緒にいるべきって考えてるから…でもあいつには心に決めた人がいる。私じゃ、踏み込めない領域に行きつつあるところにいるから、引き留める権利なんてない…」

それを聞いて押し黙ってしまうテファ。その通りだ。帰って欲しくないのは自分も同じだが。それを引き留める権利など自分にはないのだ。

「あんたも同じこと考えてるのね。でも私とはいい意味で状況が違うからうらやましいわ」

「え？」

「あんたの場合、使い魔と両想いだからよ」

それを言われてテファはボッ！と顔を真っ赤にした。両想い！？

「そそ、そんな…私たちは別に…」

「図星ね…」

自分もこんなだったか？そう考えると自分が結構単純な人間だと思

い知らされ、ため息をつくルイズだった。

「あんたの場合、私とは違って選ぶ権利がある。未来をあいつとどう過ごしていくのか、それとも全く別の道か」

「選ぶ権利…そんなの私にはないです…」

そうだ、故郷から彼を無理やり引きはがした自分にそんな権利があるといえようか。しかし、次にルイズが言った一言で彼女は言葉を詰まらせた。

「もし、シュウヘイがあんたを手放したくないなんて言っても、そんなこと言えるかしら?」

「え…?」

そこまでは考えたことなかった。彼が自分を望んだら?
それは確かに嬉しいのだが…

「あんたは、あいつのことどう思ってるの?好きじゃないの?」

「嫌いじゃないんだけど、まだよくわからない。男の人と話したことなかったから意識したことなかった。でも、彼と話すと、今まで感じたことのない感情が入ってくる。他の女の子と話してるとなんだかそわそわして落ち着かないし…」

と言ったその時だった。彼女たちの鼻が、異様な匂いを感じた。まるで菓子、いや菓子ともまるで違う甘い匂いだ。
ちょうどそこを一人の生徒が通りかかった。しかし、妙だ。なぜか女子生徒を抱えてるし、抱えている生徒はマントを頭に被っている

上、抱えられている女子生徒は寝ているように見えるし、どことなく怪しさを感じる。

「なんか怪しいわね。追うわよ」

「え、ちょ！？」

ほぼ強引ながらテファはルイズの、不審者追跡に付き合わされた。

男子生徒と思われるその怪しい不審者はマントを頭に被ったまま学院の外壁の外側に辿り着き、そこで運んでいた女子生徒を降ろした。そして自分の顔を女子生徒に近づけていく。はたから見ればただの変態にしか見えない。が…

「グルル…」

その生徒から獣の唸り声に酷似した声が発せられていた。

そこにルイズがテファを背にした状態で現れた。

「待ちなさい！その娘をどうする気？」

「グル…？」

「「グル？」」

その怪しげな男の違和感のある返事に二人は一瞬戸惑ってしまう。

と、そこで思わぬ真打が現れた。

「テファ、ヴァリエール？なぜここにいる？」

「え、シュウヘイ！？」

ブラストショットを手に現れたシュウヘイだった。すると、いきなり怪しげな生徒はシュウヘイに襲い掛かってきた。が、自分の方に伸びてきた腕を捕まえ、外壁に押し付けると、左腕に着けていた通信機『パルスブレイカー』を押し付けた瞬間、怪しげな生徒の体が凄まじい勢いで発生した電撃を浴びせられ、地面に崩れ落ちた。パルスブレイカーには通信機能だけでなく、武器として扱うこともできる。今のはスタンガンの効果だ。

「まさか…殺したの？」

「…いや、まだだ」

彼の言うとおりだった。まだその男は死んでもいなければ気絶さえしてなかった。

立ち上がった瞬間、怪しげな男は逃げ出したが、シュウヘイが撃ち込んだブラストショットでバアアン！！と砕け散った。

「ちょ、あんたやり過ぎでしょ！人を…」

「お前の目は節穴か？あれはビーストだ」

「え？」

吹き飛んだその生徒、もといビーストの残した服の切れ端に、べとべとした体液が付着していた。

「人間に擬態するビースト、か…」

「生徒の中にビーストがまぎれていた?」

基地で先ほどの騒ぎを聞いたサイトは驚いていた。ビーストは夜な夜な人を捕食するのを基本的な繁殖方法としているが、人間のフリができるほどまで能力と知能が発達しているとまでは予想していなかった。

ちなみにさっき襲われた女子生徒はモンモランシーが看病していて、命に別状はなかった。

「恐ろしい化け物ね。人間に成りすまして、隙あらば食べる気だったなんて」

ルイズは顔をしかめて言う。同調するようにシュウヘイも言った。

「それが奴らの恐ろしいところだ。常にエグイやり方で獲物を捕らえる」

「結晶系がα型構造…」

ハルナはビーカーに詰めていたビーストの体液をコンピューターで調べていた。結果、あることが判明する。

「さっきの話と合わせると昆虫人間ってところかしら？」

「微弱だが、さっき俺のパルスブレイカーもビースト振動波を出していた。だから奴の正体を見破れた」（エボルトラスターにも反応があったしな）

それで…と、ルイズとテファは納得した。確かに、あの人間に化けたビーストは奇妙な唸り声を出していた。物まねにしてか行き過ぎてたし、第一この学院の生徒は全員貴族だ。化け物の物まねなんて野蛮なことをするわけがない。

「ブルードか」

「『ブルード』？なんだいそれは？」

シュウヘイの口から発せられた単語に、ギーシュが尋ねてくる。

「ん…？」

とその時、ピピ…パルスブレイカーからまた反応がある。胸の内ポケットにも隠しているエボルトラスターもこの時反応していた。しかもその位置は…

「二階か！」

シュウヘイはとっさに二階に上がって行った。ギーシュも、そしてサイトも（何かが来たんだ！）と確信し、後に続く形で二階に向かう。

「おおおい！！ブルードってなんなんだい！まだ聞いてないぞ！！」

二階では、学生服姿の昆虫人間が医務室の扉を開こうとしていた。『インセクトタイプビースト　バグバズン・ブルード』。それが奴の正体だった。

「患者ならまだ寝ているんだが、何か用か？」

そこにシュウヘイ、後に続いてギーシュ、サイトが武器を手に立ちふさがる。ブルードは気づかれて不味かったのか、ブルードは彼らを突き飛ばして逃げ出す。

「っ…待てよ！！」

サイトが怒鳴り声を散らす中、基地の一階にブルードが脱出目的で降りてきた。

「あ！こいつ…！」

ルイズがそれにいち早く気づいたが、彼女も突き飛ばされ、壁にぶつかってしまう。標的のブルードはそのまま外に逃げ出した。それをシュウヘイが追っていく。

「ルイズ！」

「った…」

床に手を痛そうに押さえて座り込む彼女に気付いたサイトは彼女の元に急ぐ。壁にぶつかったせいで左手の甲に怪我を負っていた。

「ま、待ちなさい！」

今の一発で起こったのかルイズは手の痛みをこらえながら立ち上がってブルードを追っていった。

「おいルイズ！」

「待って！」

引き留めるように言ったサイトとテファだったが、彼女に彼らの声は聞こえなかった。

「あんにゃろ…！」

サイトとテファも、先に向かった二人の身を案じながら帰途を飛び出した。

一方、シュウヘイとルイズは逃げ出したブルードを追っていた。現在学院のすぐ近くにある森の中にいる。ここでブルードを見逃してしまったのだ。

「なんであんたがいるのよ」

「こっちが聞きたいところだ。なぜ怪我人が出しゃばる？」

「決まってるでしょ！貴族の学び舎に忍び込んだ輩、それも乙女の肌を傷つけた不届き者を討ち取るのよ」

「はあ…んで、殴り返すと？」

まあ、女子の肌は大事だから大事にしろと先輩の女性隊員に言われたことがあったりするのだが、だからって無謀に出しゃばることもないだろうが…。

「当然でしょ！」

そのセリフと共にいきなり彼女は少し離れた方の木に飛びついた。その木の向こうには、ブルードが着ていた学生服の後ろが見えていたのだ。しかし、彼女がそれを手に取った瞬間学生服は木からズルッ！と引きはがされた。

「あれ？」

と、次の瞬間横からブルードが現れ、彼女の沼蔵を捕まえ、口から紫色の息を吐き出した。

「っう！！」

「ち！そいつをおろせ！」

ブラストショットから放つ波動弾をブルードの、ルイズを捕まえてる腕に撃ち込み、ブルードは腕を痛めてルイズを落としてしまう。ブルードに息を吐かれたルイズは意識が飛びかけていた。

「この…甘い…匂いは、さっきの…」

確かテファと会話していた時にもこの匂いを嗅いだ。やはりさっき

女子生徒に襲い、シュウヘイに抹殺されたのはこいつの同族だった。

「おい！しっかりしろ！」

ルイズを抱え、自分の後ろに運ぶシュウヘイ。
その時、彼の目の前にいるブルードの頭上に、黒く渦巻いた暗雲が現れた。そして、真下にいるブルードに邪悪な光を浴びせだす。

「アンノウンハンド…石堀か」

ブルードはアンノウンハンドの放射する光を浴び、さっきよりも１０メートル級の巨体に変異している。
こうなったら、変身するしかなさそうだ。そう思った彼はエボルトラスターを手にとり、鞘から引き抜いた。同時に、ブルードと彼は金色に輝く光のドームに包まれていった。
サイトたちが駆けつけたのは、ちょうどその後だった。ブルードがアンノウンハンドの光を浴びてる時に発した唸る声を辿って森の中を進むと、意識を失って倒れていたルイズを発見した。

「ルイズ！大丈夫か！」

「ルイズ！」

しかし、ルイズ救出を阻むように、たくさんの服装のバグバズン・ブルードが二人の前に立ち塞がった。

「お前ら、そこをどけよ！」

その頃、メタ・フィールドの中で巨大化したバグバズン・ブルードとシュウヘイが変身したウルトラマンネクサス・ジュネッストリニティの激しい戦いが繰り広げられていた。

〈覇風撃！〉

「シェア！」

空中からネクサスの剣から放たれた風の刃がブルードの体を切り裂く。凄まじい火花が巻き起こり、ブルードを包み込んだ。晴れた時には、ブルードの姿はなかった。

今の攻撃で倒したのか？いや、それにしてはあっさりしすぎている。

もしかしたらどこかに隠れたのかもしれない。

「ガアア！」

「！！」

後ろから聞こえた鳴き声でネクサスは背後を振り向くと、ブルードがネクサスの首元を締め上げ、腕を通してネクサスに電撃を浴びせる。

「グウウオ…！ヌウウ、シェア！」

力を振り絞ってネクサスはジュ分の首を絞めるブルードの腕を、より強い握力で握りしめる。ミシミシを生々しい音が響き、ブルードは痛みに耐え切れず振りほどこうとしたが、ネクサスの腕が自分の腕をつかんで離さない。そのまま地面に投げ倒された。

それから立ち上がったところを、ネクサスの連蹴りが撃ち込まれる。

しかし、ブルードも負けずネクサスに反撃としてあの甘い匂いの含まれた息を吐き出した。あの息には、さっきのルイズに起こった症状からすると相手を眠らせる催眠効果があるはず。ここで眠らされるわけには、と思った次の瞬間だった。

またリーヴスラシルのルーンが勝手に暴れだすかのように紅く光り、ネクサスの精神を奪おうとする。

（ぐ…まさか、奴の吐息に…なにかが…）

彼の予想は当たっていた。ブルードの吐息にはほんのわずかに、石堀がミーモスにも仕込んでいた「ウイルス」を混入させていたのだ。それがルーンに染み込み、ウイルスを吸収したルーンの効果で暴走したときのように急激にパワーが上がり、ネクサスの頭の中をじわじわと侵していく。

（こんなものに飲み込まれて…たまるか！！）

ギギ！！と体に力を込めると、だんだんルーンの光が静まり、頭の中の違和感も嘘のように消え去った。しかし、その隙を突いてブルードがかぎ爪でネクサスの身を斬りつける。

「ヌアア！！」

そしてまたネクサスの首を締め上げて、脇腹にジャブを放つ。だが、ネクサスはその手を払い、掴み取ってブルードをもう一度投げ飛ばした。

「デア！」「グギャア！！」

さらなる追撃として、ネクサスはブルードに空中回転しながらタックルして突き飛ばし、再び放たれたブルードの手を受け流して、一本背負いで地面に押し倒す。ブルードはそれでも諦め悪く爪を突き出したが、ネクサスはブルードの頭上を飛び越え、背後に回る。

（平賀、技を借りるぞ）

心の中で呟きながら左拳に炎を纏い、振り向きざまに彼はブルードに炎の鉄拳を撃ち込んだ。

〈豪零掌（ビッグバンゼロ）！〉

「デアアアア！！！」

「ギエアアアアアアア！！！！」

鉄拳をモロに喰らい、宙を飛ぶブルードに、ネクサスは止めに、両腕を十字型に組み立て必殺光線を放った。

〈クロスレイ・シュトローム！〉

「ディア！」

「グギャアアア！！！」

光線を受けたブルードは、地を二度と踏むことなく爆発、消滅した。

「さすがに、きれいな花火にはならないか…」

一方、現実世界ではサイトがテファを背後にした状態でブルードたちと交戦していた。

「行け！」

ブレスレットから出現させたウルトラゼロスパーク、ウルトラゼロランスをブルードたちに投げつけ、ブルードたちは次々に倒れていく。そして残り少なくなったところでサイトはデルフを構え、左手のガンダールヴのルーンの青い輝きとともにブルードたちの残りを素早く、即効で斬り倒した。

「テファ、けがは？」

「うん、大丈夫」

「よかった。君が少しでも怪我したらシュウヘイに申し訳が立たないから。
ルイズは……！？」

テファから目を離し、ブルードの囲いの中で倒れてたルイズの方を向いたサイトだったが、彼は振り向いた瞬間目を疑った。

「る、ルイズ！？」

ルイズの姿がどこにもなかったのだ。

そのルイズは、運悪く逃げ延びたブルードの一体に攫われていた。

人気のない場所に彼女を置き、彼女の首筋にその凶暴な口を近づけていく。このまま食われてしまうのか、と思ったその時だった。

バシュン！！

「グゴオオオ！？」

ブルードに波動弾が撃ち込まれ、ブルードは瞬時に消滅した。変身を解いたシュウヘイが、辛うじて駆けつけてきたのだ。

「大丈夫か、ヴァリエール？おい！」

「ルイズ、大丈夫なのか？」

心配そうに尋ねるサイト。

「ええ、ハルナとモンモランシーが看てくれたから」

基地に戻り、ルイズは何事もなく目を覚ました。彼女より先にブルードに襲われた女子生徒も寝覚めたが、ビーストの知識を持つシュウヘイにまだ帰すのは危険と反対された。

「なんでまだ帰さないんだい？」

とギーシュ。

「バグバズン・ブルードには、相手の意識を奪うガスを吐き、獲物を取り逃がした時の保険として甘い匂いを残す。今ヴァリエールの体からも匂うようにな」

え？とシュウヘイに言われ、ルイズは自分の匂いを嗅ぐと、妙に甘い匂いが自分の体から漂った。

「うわ！なにこれ！！最悪…」

決して臭くはないが、これをキュルケに知られたら『匂いの管理もできないなんて』などと冷やかされかねない。今日はとっとと風呂に入りたいものだ。

「そんなことまでできるのか…」

とマリコルヌ。

「人間に擬態できるんだ。正体を知られたら連中もまずいと言うことを自覚してるわけだ」

見た目からして頭脳明晰なレイナールもこの話を理解していた。

「目撃者の抹殺を兼ねた捕食というわけか…だとしたら、またルイズは襲われるってことじゃないか！」

ギーシュがそう呟いた時、コンピューターに画面にアンリエッタの顔が映った。

『みなさん事件です！ここ数日、住民の行方不明の件数が十六件に

上ってます！』

彼女の口からきいた一同の空気に戦慄が走った。もうすでにトリスタニアに被害が出ているとは…

『目撃者の証言によると、甘い香りと猛獣のような唸り声を上げる怪しげな男に攫われていると』

「これで確信が付いたな…」

「確信？」

シュウヘイの一言に、ハルナは何のことだろうと尋ねる。

「ああ、この学院と王都の付近に、奴らの巣がある。もしかしたら、奴らの親もいるのかもな」

その後、一旦ブルードが現れるまで一同は解散した。ブルードはおそらく自分を襲うだろうから、ルイズだけは基地から離れないように言われた。

「ルイズ…大丈夫なの？」

ルイズとテファは基地の近くのベンチに座り込んでいた。

「平気よ。それにいい機会だわ。女の子に変な匂いつけたこと、恐れ多く私にまた挑戦してくること後悔させてやるんだから」

「すごい自信ね、私には思えない…」

彼女は自分とは違って攻撃魔法がある。それだけでも彼らの力になれるのに、自分にはそれがないことにテファは劣等感を感じていた。でも、ルイズもまたテファに劣等感を感じていた。

「何でよ。あんたは確かにおとなしいけど、私より立派なものがあるじゃない。たとえば、その…むむむ…」

言いにくそうに彼女は顔をひきつらせながら指差した。テファの豊満な胸を。それに気付いたのか、テファは顔を赤くして胸を両腕で覆った。

「胸のことはいいんです!!!私が言ってるのは、魔法です!!／／」

「魔法？」

「ルイズは攻撃の魔法があるのよね。私にはないから、怪獣とか出てきたとき役に立てないから…」

「？あんた、魔法が使えないの？」

「使えないわけじゃないの。記憶を消す魔法が使えるけど、四系統の魔法が全く使えない。使おうとするたびに小さく爆発が起こるの」

これにルイズは多大に驚愕した。彼女もそうだったのだ。自分と同

じようにたいていの魔法が使えないのだ。しかも、使うたびに爆発しか起こせないなんて、虚無に目覚める前の自分と変わらないじゃないか。

「マチルダ姉さんに教えられたことはあるけど、全然だめだった。姉さんは『魔法が使えなくてもいい』っていったから気にならなかったけど…」

気になりだしたのだ。忘却の魔法だけで、本能のまま暴れだすスペースビーストをはじめとした怪獣に聞くかどうかなんて言い難い。テファは少しでも何か手に入れたかったのだ。彼の力になれる手段を。

「…わかったわ。できるかどうかわからないけど、初歩の初歩の初歩ならあんたでも…」

それから数時間、夕方の時刻。

自分が残した甘い匂いに誘われ、ブルードが学院に再び忍び込んできた。

基地に入り、さっき被害にあった女子生徒をモンモランシーが看ていたが、突如どこからか現れた学生服のバグバズン・ブルードの姿に腰を抜かしていた。

「な、何よ！あっち行きなさい！」

しかし、そんな命乞いがビーストに伝わるはずもなかった。彼らに

とって人間など、格下の獲物にすぎないのだから。迫りくる昆虫人間と死の恐怖に涙目になるモンモランシー。がちがちと歯を鳴らし、体がまともに動いてくれない。

「いやあああ！！！」

彼女の悲鳴がこだましたその時、波動弾とビームがブルードに飛んできた。サイトとギーシュ、そしてシュウヘイだった。しかし、それに気付いたのか、ブルードはギリギリで避け、頭にかすり傷を負っただけで、窓から飛び降りて逃げだした。

「大丈夫かいモンモランシー！？」

彼女を気にかけて、ギーシュはモンモランシーの元に駆け寄る。

「待て！」

窓から逃げ出したブルードを追うサイト。しかし、そこでシュウヘイに一旦止められた。

「まだ撃つな。奴を泳がせて巣を突き止める」

「え？でもお前の通信機なら位置が…」

「ブルードは頭の組織でビースト振動波の周波数を変えられるから、俺のエボルトラスターでも反応は一瞬しかない。さっきお前の銃が奴の頭を掠めたのは幸運だったな…。平賀は基地に念のため待機しててくれ。他にもあの匂いを辿って学院にいるヴァリエールまで襲われたら敵わない。もし俺が夜まで戻らなかったら来い、いいな？」

「あ、ああ。わかった」

武器を一旦しまい、サイトは予備兵力として基地に、シュウヘイはブルードを追い始めた。密かに二人に人物が彼を追っていたことは、誰も知らない。

しばらくブルードを追い、彼は王都から数キロ離れた野原に辿り着いた。ブロードは今自分の前をふらふらと死人のように歩いている。すると、彼はとっさに茂みの中に隠れた。貴族服、農家、商人、騎士。多彩な服装を着た、彼の視界にとんでもない数のブルードが、一定の方向に向かって歩いてるのだ。その数は何十、いや何百にも上った。

「平木隊員の時と同じ、あれだけの数がいたのか」

だとしたら、奴らの親がきっとこのあたりにいるはず…。と、噂すれば影、地面が大きく揺れだした。そして地面が割れ、裂け目から巨大な昆虫型ビーストが姿を現した。

ブルードたちの長である『インセクトタイプビースト・バグバズングローラー』。

グローラーは触手を伸ばすと、数体のブルードを捕まえ、自分の口の中に放りこんでバリバリとむさぼり始めた。

「人間に擬態したブルードに人を食わせ、親玉のグローラーに食わせる。相変わらず悪趣味だ…」

「グルルル！！！」

背後から聞き覚えのある唸り声が聞こえる。とっさに振り向くと、ブルードが数体、自分を囲んでいる形で近づいていた。

「…」

ブラストショット、そしてディバイドシューターをビームソードに変形させたディバイドセイバーを構えるシュウヘイ。やられる前にやってやる！武器を握る腕を強め、ブルードたちに斬りかかった。

「ふ！」

一体目を剣で、二体目を銃でとブルードを倒していくシュウヘイ。だが、数が多いせいでだんだん接近を許すことになった。一体のブルードが彼に飛びついてきた。

「ち！この…」

「ブアアア！！」

つかみかかるブルード。シュウヘイは自分を掴むその手を力一杯に振りほどこうとするが、相手の力が強くてなかなか離れようとしない。

とその時だった。

「その人から離れて！」

突然聞こえてきた少女の声と共に、シュウヘイに掴みかかっていたブルードは爆発した。

今の声は、この星で彼が最も聞きなれた声だ。聞こえたのは左の方からだ。振り向くと、本当に彼女がいた。それも付き添いで桃髪の少女も。

「テファ?それにヴァリエール?」

「大丈夫!?けがはない?」

「なぜここに来た?お前たちの手に負える連中じゃないんだぞ!」

あんな化け物と戦うのは自分だけでいいんだ。もし万が一のことがあったら…、彼女の影響なのか、それとも地球にいる自分の仲間たちの影響からなのか、シュウヘイは冷たい第一印象とは裏腹に心配性になりつつあった。それが自分にとって大切に思ってる人であるほど…。

だが、テファはここで黙ろうとはしなかった。

「私、ずっと考えてた。ずっとあなたをこの世界に縛り付け、守られていくのかなって。でも、あなたにはいつか帰る場所がある。その場所からあなたを引きはがしたのは他の誰でもない私。だから責任があるの。あなたが帰るその時まで、私も」

「しかし!」

「シュウヘイ、あんたの気持ちは理解できるわ」

納得しきれてないシュウヘイに、ルイズが口を挟んできた。

「でも、あんたもウルトラマンでもこの娘の使い魔でもなく、一人の人間としての立場から考えてごらんなさい。きっとテファと同じ

気持ちのはずよ」

「…！」

少し舞い上がった心を落ち着かせ、シュウヘイは冷静に考えた。確かに、自分はウルトラマンである以前に人間だ。いつかは先代のデュナミスト同様、光を手放し、防衛軍の隊員として、人間として戦うことになるのは、この先きっと生き残れば確実な話だ。そう考えればいつまでも、この力に頼ってるわけにもいかないと改めて思い知らされる。彼女も、自分が守られてばかりの立場でいるのは無責任だと感じたのだ。ルイズも自分の使い魔のウルトラマンに頼るだけの主人でいることが、性格上嫌気がさしたので彼女に同調したのだ。

（もしかして、今朝俺を避けていたのはそのことに負い目を感じていたからか？）

彼がそう思ったとき、グローラーがついに動き出した。それに気付いたシュウヘイはエボルトラスターを引き抜き、ウルトラマンネクサス・アンファンスに変身した。

〈豪零掌！〉

「デア！」「ギオオオオ！！！」

さっそく一発鉄拳を喰らわせ、グローラーを殴り飛ばすネクサス。そして間を置かずジュネッストリニティにチェンジ、拳に光を灯らせ、それを空に放射した。

〈メタ・フィールド〉

「ヌウウウ、ダ！」

放出された光はドーム状に形を成し、ネクサスとグローラーを包み込んでいく。

ルイズとテファも顔を一度見合わせると、互いに頷き合ってメタ・フィールドの中に飛び込んでいった。

「シャ！」

ネクサスの回し蹴りが、グローラーの頭にクリーンヒットする。しかし、グローラーも反撃としてネクサスに突進し、彼をひっくり返した。地面に倒れた彼に爪を振るグローラーの攻撃を、バック転でかわしていく。そして直立したところで蹴りを与えたところで、メタ・フィールドに異変が起こった。

辺りが邪悪な紫に染まり、やがてネクサスの作り出した亜空間は赤黒い空と真っ赤な地面の不気味な空間に変わってしまった。

（石堀…）

アンノウンハンドの力、『ダークフィールドG』。ウルティノイドたちが展開するダークフィールド以上にビーストはパワーが上がり、逆にウルトラマンは力が落ちる死の空間だ。

だが、たとえどんなに環境の悪い場所でも倒すべき敵がいる以上戦わなくてはならない。

〈豪零掌！〉

もう一度炎の鉄拳でグローラーの腹を攻撃するネクサス。さっきより威力を上げて放ったからより大きいダメージのはず。しかし、対

するグローラーには通じていなかった。

（く…！）

やはりダークフィールドGの影響で威力が落ち、グローラーの体表が硬くなっていたのだ。他にも、通常のバグバズンよりクチクラの強度が3倍に強化されていて、苦戦勝ちも引き分けも許さないほど強くなっていた。

「ガアアアア！」

「グアアアア！！！！！」

グローラーのかぎ爪がネクサスに一発、さらに二発と当たっていく。地面に膝を着いた時には、彼のコアゲージが赤く点滅を始めていた。

ピコン、ピコン…

「私たちも援護しましょう！教えたとおり、できるわね？」

「うん！」

ルイズの意見にテファも賛同し、二人はすぐさま杖を手に、呪文を唱え始めた。

エルオー・スーヌ・フィル・ヤルンサクサ…

この呪文の発音は『爆発（エクスプロージョン）』だ。だが、これ

はルイズだけでなく、テファの口からも発せられている。
実はシュウヘイを密かに追っていた時、ルイズがテファにこの魔法の発動方法を教えていたのだ。虚無の魔法の中でも初歩の初歩の初歩とされている魔法なら、テファにも教えさえしたら使えるのではないかと勘繰ったのである。

「フ！」

力を振り絞って立ち上がったネクサスは、左拳を掲げ、魔法を放とうとする二人に目線を合わせる。コクリを二人が頷くと、ネクサスもゆっくり頷き返した。
やがてネクサスの突き上げた拳に、ダークフィールドの闇が集まっていき、彼の拳で光に変換された。
さらに、二人が杖を降ろした瞬間、二人の虚無の魔力もまた、ネクサスの拳に吸収されていく。

本能からか、嫌な予感を感じたグローラーは技を喰らう前にネクサスを始末しようと突撃を開始した。が、それは自ら死地に飛び込むことだった。

〈ナックルレイ・エクスプロージョン！！！〉

「ダアアアアアア！！！」

「グゲァ…！？」

ドオオオオオオオオン！！！！！！！！

ズボ！！とネクサスのこぶしがグローラーを貫いた瞬間、ルイズが戦闘で、それも単独で発動する時以上の大爆発が起こり、グローラ

ーは爆発で起こった砂煙の中に消えていった。

ダークフィールドGは戦いの終わりを悟ったのか消滅。
ちょうどその時、ネクサスは二人に背を向けたまま彼女たちを見つめ、サムズアップした。

（人は思い一つで強くなれる、か）

それにこたえるように、テファも笑顔でサムズアップ、ルイズも「今回だけだからね…」と相変わらず顔を赤くして照れて、サムズアップを返した。

その夜…

先日のように『空飛ぶ大鉄塊』を読んでいたタバサ。そんな彼女にまたふくろう便が届く。

「…」

手紙をふくろうから受け取り、手紙を受け取った彼女は、いつになく驚愕の表情を露わにしていたことを、誰も知らなかった。

0　裏切りのタバサ

「スレイプニィルの舞踏会？」

サイト、シュウヘイ、ギーシュ、マリコルヌ。この四人で食堂で話しているとき、ギーシュが言ったことにサイトは何だろうと首を傾げる。

「そう、ティファニアなど一年生が入ってきただろ？だが社交界が初めての人もいるんだ。だから僕たち上級生が大人の世界を教えてやろうってわけさ」

「それをたてにナンパをする気か？」

シュウヘイの一言でギーシュは絶句した。どうも図星のようだ。

「でもたかが舞踏会でなんでギーシュが得意気なんだ？」

とサイト。そこでマリコルヌが説明のつもりで口を挟んだ。

「仮装するんだよ」

「仮装？」

「『真実の鏡』を使うんだ。その鏡を使うとその人は自分の最も憧れている人に変身できるそうなんだ」

「憧れか…が」

憧れ、サイトにとっては自分の父ウルトラセブン、または師であるゲン（ウルトラマンレオ）が浮かんだ。高く、届きそうにないが、彼らのような男になりたい。

「まあ、僕は僕のままだろうな。なんたって僕は世界一の美男子だから！ハッハッハッハッ！！」

彼らは万階一致で思った。今のギーシュはっきり言って…。

「図々しいにも程があるな…痛すぎる…」

呆れた様子でシュウヘイは頭を抱えた。

「どうしよう二人とも！！僕美少女になっちゃうかも！！」

「「「は？」」」

いきなりのマリコルヌの発言に三人は間抜けな声を吐いた。

「ブリジッタといい、ルイズにタバサにティファニアに…ああ、こんな美少女たちがこの学院に次々と現れるものだから目覚めちゃったよ！」

あの時のマリコルヌはどこへやら…禁断の趣味に目覚めつつあった彼の姿はただの変質者だった。

「ああ…今日もブリジッタに捕まって縛られて…」

なんということか。あのブリジッタでさえこの趣味に付き合っているのか。実を言うと、あの二人は人目のない場所で…いや、これは

失礼。これ以上はいろんな意味で語れない。

「君たちは何になりたい？」

「俺は…」

真っ先に浮かんだのは自分の命を救った男や、自分と同じプロメテの子である少年の姿が思い付いた。彼らは今どうしてるのだろう…？

ちょうどそこで、四人のテーブルの近くをレイナールと彼の同級生のギムリが横切った。

「レイナール聞いたか？最近怪鳥が学院上空を飛び回っているそうなんだ」

「僕も聞いたよ。怪獣ではないかっていう噂もある」

気になったサイトは二人を引き留めて話を聞いてみた。怪獣がまた出てきたのか？

「その話本当か？」

「ああ、夜中に激しい羽音なのか鳴き声なのかわからない音をたてて消えるんだ」

（怪獣じゃなければいいけどな…）

もし怪獣でも、人間に危害を加えるような奴じゃありませんように…とサイトは願った。

基地の作戦室に戻るとハルナが一人掃除していた。学院にきてからずっとメイド服でいる。当然健全な男子のサイトは見惚れてしまうことが多いが、いちいち気にするとただの変態になるのでグッとこらえる。

「お帰り平賀君」

サイトの来訪に気が付き、ハルナは一旦手を止めた。

「ありがとうハルナ。掃除してくれて」

「平賀君の世話になってばかりだから…」

と、そこでルイズとシエスタが入ってきた。いつになく真剣な表情をしている。一体どうしたのだ。何か事件でもあったのか？だが、至ってなんてことないことだった。

「サイト、今日スレイプニィルの舞踏会なのは知ってるわね？」

「ああ、聞いたよ。仮装するんだろ？」

「サイトさんには、仮装した私たちを探して欲しいんです」

「何で？」

十分前、二人は今日こそサイトをモノにしようと話し合ったところ、仮装した自分を見つけられなかった場合は諦めるということになっ

た。

「ハルナ、あんたも強制参加よ」

「ええ!?何でそうなるんですか!?私はちゃんと平賀君に告白してOKもらったのに!」

ハルナは納得できず抗議する。

「いいえ!何にせよ参加させてもらいます!今度こそサイトさんをもらいますからね!!」

ハルナの抗議に聞く耳を持たないまま二人はそう言って部屋を出た。

「勝手なやつらだな…」

呆れてサイトはため息をついた。自分がらみになるとどうもあの二人は熱くなってしまいがちだ。

「もう…」

ハルナも納得できない様子で膨れっ面になった。

その夜、スレイプニィルの舞踏会が始まった。

今のところサイトはまだ来ていない。生徒たちは、舞踏会会場のカーテンの奥に用意されたマジックアイテムの鏡『真実の鏡』の前に

立ち、自分の憧れの人間に化けていく。

「やった！僕竜騎士に憧れてたんだ！」

「ふふ、一度お姫様になりたかったのよね」

レイナールは竜騎士、モンモランシーはアンリエッタ。ここまでは普通だった。しかし…次に出てきたマリコルヌによって普通じゃなくなってしまった。

「美少女になっちゃったよ僕♪」

美少女に変身した彼に二人はドン引き。青筋が半端ではなかった。続いてギーシュがカーテンの向こう側から出てきた。しかし、どう見てもいつもの彼。何の変化もなかった。真実の鏡は、その人の憧れの人に化けさせる。つまり…

「やっぱり僕は美しい！！ハッハッハッハッ！！」

さすがはナルシスト。自分の姿がベストのようだ。だが同時に図々しい…と思う他の三人だった。

すると、今度は何とマチルダが彼らの前に現れた。

「ミス・ロングビル！？いや…？」

彼女の正体と業績を知るギーシュは、警戒心のあまり杖を手にとったが、彼女の漂わせる雰囲気に違和感を覚える。

「あの…私ですけど…」

「その声、ティファニア!?って…」

このおとなしそうな少女の声、確かにテファのものだった。彼女はマチルダを姉のように信頼してるがゆえにあの姿となったのだ。ただ、胸だけなぜか元のままだった。

「何でだろう…?姉さんに化けたのになぜか胸だけ…。そういえばシュウヘイは?」

「まだ出てきてないみたいだが…」

もう出てきたのでは?それともまだ来ないのか?そう思って彼らは辺りを見渡した。とその時、背後から何者かがトントンとギーシュの肩を叩いた。

「だっ、誰だ!?」

振り向いたギーシュ。彼の背後にいたのは、ハルケギニアでは見られないオレンジのジャンパーを着た少年だった。笑顔が似合うはずなのに、どうもムスッとした無表情だ。

「俺だ」

その少年の正体はシュウヘイだった。

「へ?シュウヘイ!?誰なんだいその姿?」

「シュウ、その人は…」

テファは一度だけだが、今の彼の姿の元になった人を知っている。
確か、彼のいた地球に住んでいる少年だ。

「まさか憐になるとはな…しかし、よくできてるな。グラモンやグランドプレみたいじゃなくて安心した」

「「おい！」」

自分の憐そっくりに化けた姿を眺めながらつぶやく彼に、二名の男（？）たちは突っ込む。

一方でサイトより先に会場に来ていたルイズ、シエスタ、ハルナの三人も真実の鏡の力で別人の姿に変身していた。
ルイズは姉のカトレア、シエスタはジェシカ、ハルナはサイトの義理の母であるアンヌといった具合だった。

「サイトったら遅いじゃない…どこで何をしてるのよ…」

いつまでたっても来ないサイトにルイズはだんだんそわそわし始める。まだ来てないのか、それとも自分たちの正体がわからないままどこかをさまよってるのか。

「ジェシカに化けるなんて…それにしてハルナさん、それはいったい誰なんです？」

「あ、これ平賀君のお義母さんなんです」

「へえ、ってええ！？」

まさかの事態にシエスタは驚愕した。変身した人がサイトの母なら

真っ先に彼女の方へサイトが走ってしまうではないか。

「この勝負、もらいましたね」

勝ち誇ったようにハルナが笑うと、ルイズとシエスタはぎぎぎ…と悔しそうに歯ぎしりした。

すると、ピピピ…

シュウヘイの腕の『パルスブレイカー』が何かに反応したのか、音を鳴らし始めた。

「…？ビースト？」

その直後だった。辺りが急に真っ暗になった。いきなり闇の中に突き落とされ、会場の人たちはパニック状態になってしまう。

「なんだ！？いったいどうしたんだ？」

そして、パリイイイイイン！！！と何かが割れたような音が響き渡る。

ようやく明かりがついたが、会場の人たちは目を丸くした。自分たちの姿が元に戻ってるではないか。

そして、一人の男子生徒が会場中に向かって叫んだ。

「大変だ！真実の鏡が割れている！」

その頃のサイトは…

「やっばい！！遅刻だ！！」

どういうわけか、遅刻してしまったようだ。急いで会場に急いでいる。

「ん？タバサ？」

サイトは校門にタバサがいるのを発見した。こんな場所で一体どうしたのだろう？彼女のことだから今日キュルケに誘われて舞踏会に来るんじゃなかったのか？

「タバサ、舞踏会はどうした？」

とその時だった。タバサは突然氷のつららをいくつも作り出し、それをサイトに向けて飛ばしてきた。

「うわ！！」

とっさに真横に転がってサイトはなんとか回避した。

「何すんだよタバサ！？」

気でも狂ったのか？彼女に訳を問うが、タバサは質問に答えず、すかさずサイトに攻撃してきた。
デルフを抜いてそれらを防ぐサイト。

「タバサ！どういうつもりだ！？」

「ごめんなさい…命令だから」

「命令？何だよ命令って！！」

と、そこでシュウヘイとテファ、ルイズにハルナが駆けつけた。

「タバサ？あいつ何をしてるんだ！？」

「わからねえ！何だか命令って言ってるみたいだが…」

一体彼女はどうしてしまったのだ？自分たちが彼女に何か悪いことでもしてしまったのだろうか？だが、そんなことした覚えなんかなに一つない。

「おや、もう一人の虚無が来るとはね」

どこからか声が聞こえてきた。ルイズとシュウヘイは子の声に聞き覚えがある。どことなく妖しげな雰囲気を漂わせる声。空を見ると、ガーゴイルの上に女性が立っていた。

「誰だ！？」

「あなたとは初対面だったわねガンダールヴ。私はシェフィールド。神の頭脳ミョズニトニルン」

シェフィールドは改めてサイトたちに自己紹介し、額を隠す前髪を捲る。そこにはサイトとシュウヘイのものとよく似たルーンが紫色の光を放っている。

「ミョズニトニルンだと！？」

虚無の使い魔とかかわりのあるデルフは驚きの声を上げた。

「知ってるのか！？」

「あたぼうよ相棒！あらゆるマジックアイテムを使える力を持つ、虚無の使い魔の一人だ。だとしたら…」

シュウヘイはようやく理解した。以前クロムウェルを問い詰めた際、彼女は自分を『同胞』と呼んだ。同じ虚無の使い魔だったからそういったのだ。

「そう、我が主も虚無の担い手よ。さて、ガンダールヴに名も無き伝説の使い魔君。あなたたちの主を頂けるかしら？」

「愚問だ！」

サイトは高く飛びシェフィールドに攻撃しようとしたがタバサが笛を盾にしてそれを阻んだ。

「タバサ、退けよ！何してんだ！」

だがタバサは退こうとしない。それどころか更に強力な氷の魔法『ジャベリン』を唱えている。その証拠に巨大な氷の槍が形成され、こちらに牙をむいている。

そしてタバサが杖を振り降ろした瞬間、氷の槍はサイトの方に向かって急降下した。サイトはデルフを盾代わりにして防いだ。だが氷はまだ消えず、デルフごとサイトを貫こうとしている。

「んぐうう……うおおおお！！」

彼が力を振り絞る地同時に、彼のガンダールヴのルーンが青い輝きを増し、氷の槍無理やり打ち砕いた。

「！？」

タバサの眼前ですでにサイトの剣が振り上げられる。っここまでか…気負いされて仰向けに倒せれたタバサは死を覚悟し、目を瞑った。

ガキイイイイン！！！！！

…？痛みがない。

「どうして…？」

自分の顔の真横でデルフの剣先が突き刺さっていた。

「止めをさせたのに…」

なんでだ？なぜ自分を襲った人間に止めを刺さない？いったいどういうつもりなのだ？

疑問に思ってサイトを見るタバサに、彼はただ一言言葉を返した。

「仲間だからだろ？」

仲間…

自分を殺しにかかった人間が、いまだに自分を仲間と呼んでくれる。

信じられなかった。ここまで優しさを振りまく彼はまるで…

（私には、やっぱり…）

タバサは立ち上がり、魔法で姿を消した。

「ふん、逃げたか。まあいいわ。力ずくでも奪ってあげる」

シェフィールドは懐からバトルナイザーを取り出した。

【バトルナイザー、モンスロード！】

バトルナイザーより光のカードが何体もまき散らされ、空から飛行形態のペドレオン・フリーゲンがたくさん現れた。

「あの虚無の担い手二人を捕らえなさい！」

シェフィールドの命令通り、ペドレオンたちはルイズとテファに突撃した。

「ルイズ、下がれ！ハルナはルイズを見ててくれ！」

「わかったわ！」

「テファ、お前も下がれ」

自分の大事な人を攫われて黙ってられるはずがない。サイトはウルトラガン、シュウヘイはブラストショットでペドレオンたちを撃ち落としていく。ルイズもテファも黙って見てるのはもう耐えられない。杖を手に、呪文を唱え始めた。

「「エクス…プロージョン！！！！」」

青白い光とともに爆発がペドレオンたちを包み込む。

だが、敵の数が多すぎた。もともと小型だからか、バトルナイザーに普通の怪獣よりも何体も多く収納できたかもしれない。

「キリがないな」

「仕方ない…」

今自分たちが守っている面子は自分たちの正体を知ってるし、他に知る人たちがいないのなら…二人は変身アイテムに手をつけようとしたその時だった。

どこからか煙を吹きながら流てきた小さな物体が一体のペドレオンにあたった直後、爆弾以上の大爆発が起こった。一発だけじゃない。他にもいくつかそれが他の個体のも当たっていく。そして爆発を起こしていく。

ピュルルルル…ズオオオオオオオオン！！！！！

「ギオオオオオオオ！！」

その爆発によってペドレオンたちは次々と爆死していった。防衛本能から逃げようとした個体も爆発から逃げきれず、巻き込まれて燃え尽きていった。

「ち…一旦退くか…」

舌打ちしながらシェフィールドはその場から姿を消した。

「あれは…！？」

サイトたちは驚いた顔で空を見上げた。自分たちを月の光から隠す巨大なものが、自分たちを見下ろしていた。

巨大なウィング、前方に着けられたプロペラ。唸るエンジン音。まぎれもない飛行船だった。まだこの星では開発されてない乗り物。

「どうかな？私の発明『空飛ぶヘビ君』の威力は！？」

サイトは、いやサイトだけでなくシュウヘイも飛行船から聞こえてきたその声に驚きを隠せなかった。

「ばかな…あんたはあの時…」

死んだはずだ。自分も彼の死を遠くから看取っていた。なのに…

「その声…コルベール先生！？」

かつて自分の闇に取り込まれながらも、その呪縛から自分を解き放ったトリステイン一の名教師、ジャン・コルベールが甲板から自分たちを温かい眼差しで見つめていた。

1　囚われのタバサ

シェフィールドから言い渡された任務の内容はルイズとテファの誘拐。だが彼女は仲間を攫うことができなかった。タバサは任務に失敗したのだ。

（母様…）

任務に失敗したら、人質である自分の母は伯父の兵士に連れて行かれるだろう。その前に、何としても母を奪還しなくては。

そう思って彼女はガリア王国の自宅である旧オルレアン領の屋敷に向かう。彼女はシルフィードを門の前に待機させ、屋敷に入った。母親のいる部屋に入ったが、いつものように窓際の椅子に座っているはずの母親の姿がない。

彼女はその時、ろに何者かの気配を感じた。

「どこへやったの？」

「オルレアン夫人のことか？彼女はガリアの軍隊に連行された」

振り向いて彼女はその気配の正体をみる。とんがり帽子の若い男性のようだがよく見ると、テファと同じように男の耳の先が尖っている。

「エルフ…！」

「いかにも。私はエルフのビターシャルだ。お前の伯父から連れて

くるように言われている。抵抗せず、こちらに来てもらおうか」

「…」

タバサに従う気はなかった。氷の槍を連続で飛ばし、男に攻撃した。だが、男の目の前で氷の槍は見えない壁に阻まれたように止まり、くるりと反対方向に向き直ってタバサに跳ね返った。

「うっ…！」

自分の作りだした氷の槍の雨を受け、タバサは床に倒れこんだ。

「先住…魔法…！」

「その呼び方は好ましくないな。精霊の力と呼んでもらいたい」

すると、シルフィードが主の危険を察知したためか、窓ガラスを割ってビターシャルに襲いかかってきた。

だがビターシャルは全く動じず、目に見えぬ盾でシルフィードの動きを止める。しばらく抵抗するシルフィードだったが、ビターシャルの精霊の力によって起こった睡魔によって眠らされた。

タバサも意識を失った。

翌日の朝、学院の外にウルトラホーク1号より大きな飛行船が置かれ、学院の生徒たちも、シエスタをはじめとしたメイドや使用人たちはその迫力と凄まじさに目が釘付けになっていた。

サイトたちはその飛行船の甲板にいた。

「凄いでしょ？私のジャンと私の愛の形『東方号（オストラント）』よ」

いつからそんな関係になったのか、キュルケはコルベールにくっつき、しかも今彼らのいる飛行船を『愛の形』と称している。

「ミス・ツェルプストーの資金援助もあって完成したんだ」

「まさか、こんな船を作って帰ってくるなんて驚きました」

「あの時、俺はてっきり…」

メンヌヴィルの事件のとき、コルベールは死んだはずだった。現場にいたシュウヘイだってコルベールの死に何の疑いもなかった。

「ミス・タバサがアニエス君の目を欺くため、仮死の魔法で私が死んだように見せかけたんだ。それからはミス・ツェルプストーの実家でお邪魔させてもらってたんだ」

「コルベール先生、生きていてくれて本当によかったです…」

サイトは少し涙ぐんだ。いかに闇に引き込まれた彼でも、心ある人間としてここに立っているなら文句なしだ。

「でも、どうして私たちに話さなかったの！？」

自分たちに話してもよかったのでは？とルイズは言う。

「悪かったわ。話そうと思ってたけど、きっかけがなかったのよ」

「心配かけたね、サイト君、シュウヘイ君、ミス・ヴァリエール」

「いえ、おかえりなさい。コルベール先生」

ルイズがそう言った時だった。突然どこからか青い髪の女性が現れ、サイトに飛び付いてきた。

「大変なのね！！」

「うわ！！何だ！？」

しかも、なぜか女性は裸だった。一瞬男の本能からか、自分の意思と関係なくサイトの鼻の下が伸びかけていたことをルイズとハルナは見逃さなかった。

「さあああああああいいいいいいとおおおお！！！！！」

「平賀君のエッチいいいいいいいいい！！！！！！」

ダブルパンチでサイトは股間と頭を攻撃された。

「ぶべらあああああああああああ！！！！！！」

その後も二人の『乙女の怒り』によって、オストラント号に鮮血が染み込んでしまったという…。

「とにかく、服」

シュウヘイは自分の黒い上着を女性に上着を差し出した。いくら彼

でも女性の肌を見るのは目の毒だ。しかし、どういうわけか彼女は嫌がっていた。これではただの露出狂にしか思えない…。

「嫌！服なんか着たくない！きゅいきゅい！」

嫌がる女性に彼は羞恥といら立ちで顔を真っ赤にし、もうこの手しかないとブラストショットを向けた。

「……着ろ」

「…着ます…」

ようやく彼女が古い布地を上に着て、ＵＦＺ基地で彼女が何者か尋ねることとなった。話によると女性の名前は「イルククゥ」で、タバサの妹らしい。

「話ってなんだ？」

サイトがイルククゥに聞くと、彼女は大慌ての様子で答える。

「お姉さまがさらわれたのね！」

「さらわれた？どういうことだい？」

タバサがさらわれた？彼女のことは自分たちだって知ってる。学年でも魔法の才にあふれたメイジだ。さらわれたりするような感じが

しない。

「もしかして…」

キュルケには思い当たる節があった。以前聞いたきりで気にする具合が薄れていたが、基地にいるみんなにタバサの正体、今までのガリアからの任務のことを話した。

「ひでえ…ルイズとテファを拐おうとしただけでなくタバサに…」

サイトは怒りを露に、握り拳を作った。それを見てマリコルヌは恐る恐る尋ねる。

「やっぱりタバサを助けに行くのかい？」

「当たり前だ！」

大鉄塊の事件で、あの時に見せたタバサのとり乱し様と言葉を彼はしっかり頭に刻みつけていた。

『その人は私にとって数少ない大切な人』。あの言葉は、自分の大切な人が奪われた、彼にそう思わせていた。

しかし、シュウヘイが口を開いた。

「待て」

「なんだよシュウヘイ。何かあるのか？」

「こいつの話が本当かはっきりしていない」

そう言ってイルククゥを見た。ギーシュもシュウヘイに続くように

言った。

「確かに。ガリアの手先で、ルイズとティファニアを狙う刺客かも知れない」

「身長もタバサより大きめで顔も似てないじゃないか」

レイナールも言う。確かに顔が全く似ていないし、一見見れば彼女よりも年上の少女にしか見えない。まったくとは言わないが信憑性に欠けているのだ。

「い…妹なのね！！」

それでも信じてほしいとイルククゥは反論した。

「何か…証拠があればよいのだが…」

コルベールの言うとおり、まず証拠もなしに胡散臭い頼みごとをするのは無理がある。イルククゥはそれを持っているようだが、どうも明かすのをためらっている様子だ。するとサイトに背負われていたデルフが、鞘から顔を出して口を開いた。

「証人を連れてくるのね…」

彼女はしびれを切らしたように外に出て行ってしまった。念のためサイトたちも外に出て様子を見に行くが、イルククゥの姿が見当たらない。

「あれ？イルククゥ、どこに…」

その時、空から大きな影が近づいてきた。タバサの使い魔である竜、シルフィードだった。シルフィードはサイトたちの前に降り立った。

「シルフィードじゃないか！」

「なあ、シルフィード。さっき青い髪の女の子見なかったか？」

サイトが尋ねると、シルフィードは頷いた。

「じゃあ、タバサの妹にイルククゥって娘、いるのは本当か？あと、タバサがさらわれたってことも」

「きゅい」

この質問にもシルフィードは頷いた。ようやくイルククゥ、そしてシルフィードの話に信憑性が見えた。しかし、レイナールが何か悩んでる表情に気が付き、シュウヘイがそれに気付いて彼に話しかけてきた。

「どうした？」

「あ、いや…僕らは表向きは陛下の近衛兵だろ？勝手なことしていいのかなって」

「なるほどな、確かに無断で他国に行くのはまずい」

「ならば簡単な話だ！」

二人の会話を聞き、ギーシュは一堂に向かって杖を掲げる。

「よし、僕とサイト、マリコルヌ、ルイズの四人でタバサのことを王宮に報告するぞ」

シルフィードはようやく信じてもらえたので安心した表情を見せた。

ヴェルサルテイル宮殿。ガリアの王族たちと重臣たちが居座っている豪華な宮殿だ。

ジョゼフは自室にて、ある男と対談していた。だが、空気が異様にギスギスしていて、仲良く話してると言うような様子ではない。

「約束通り連れてきたぞ」

意識のないタバサをジョゼフの前に置いて、ビターシャルは言う。

「ご苦労。では約束通りお前たちの望みを聞いてやる。要件は何だ？」

「貴様ら蛮人の言う『聖地』、悪魔の門が何者かによって奪われた」

「ほう、それで？」

「あれを狙うのは悪魔の力…貴様らが始祖と崇めし者の力を受け継ぎし者と従順な崇拝者以外考えられん。何か心当たりはないか？」

「…なぜ、俺にそんなことを聞く？知ってどうなると？」

「あの門から強大な怪物が現れ、この世界を破滅させかけた。あの門を開いたのはシャイターン…つまり貴様らの崇めし始祖ブリミルだ。
もしあれを悪魔の子孫どもに奪われとなったら、間違いなく６００年前に起こった大災厄が繰り返される！お前たち蛮人とてただでは済まされないぞ！」

「その言い方からすると、まるで人間の手に落ちたような言い方だな。エルフのビターシャル卿…
我々人間は、ここ数百年で聖戦のために兵など起こしたことなどないが？」

「確かに、蛮人たちの兵が最後に攻めてきたのは数百年も昔だ。しかし、私は見たぞ。
お前たちが異星人と…」

とビターシャルが言おうとしたとき、彼はゴォッ！と何かとてつもない邪悪な気迫を感じた。それも、目の前にいるジョゼフから。

（なんだこいつは…確かにこやつもシャイターンの力を継ぎし者なのは知っているが…）

それだけ、だろうか？もっと深く邪悪なものが、彼の瞳の奥に見えた。

それどころか、ビターシャルの目の前にいるジョゼフの姿が、一瞬にして別人に変わっていたのだ。

「…！？」

「ビターシャル卿、このことは他言無用。君には私の命令を忠実に聞く部下になってもらう」

「なんだと…！？」

「もし、約束を破ればお前の同胞もただでは済まされまい」

「貴様は危険だ！やはり、ここで『大いなる意思』のもと天誅を下す！」

ビターシャルは目を閉じると、彼らの部屋の壁がピシッ！とひび割れ欠片となると、その欠片たちが一つの塊になってジョゼフの方に飛んでいった。

「石の精霊よ、一つに集まり、邪なる者を滅ぼさん！」

しかし、ギン！とジョゼフの目が開かれた瞬間、その石つぶては木っ端微塵に砕け散った。

「バカな…精霊の力がなぜ…」

「残念だが、精霊とやらは私への恐怖で戦意喪失気味のようだな。さあどうする？」

もし、下手に抗えば今度こそ殺られるかもしれない。自分はエルフの政府でも重要な立場にある以上その選択は無理に近い。

「…わかった」

「君は頭が固そうだが、承諾してくれてよかったよ。ではまず手始めに…」

トリスタニアの王宮を訪ねたサイトたちはアンリエッタ、ウェールズのいる王座の間にやって来た。サイトはシュヴァリエのマントを着ている。

「姫様！皇太子様！俺たちをガリアに行かせてください！」

必死に懇願するサイト。仲間を助けに行きたい思いで一杯だった。しかし、アンリエッタは首を横に振った。

「いけません」

「何で！？」

納得できないサイトに、ウェールズが説明した。

「タバサ殿は聞くところ任務失敗で、しかも犯罪者として捕らえられたそうじゃないか。サイト君も含め、君たちは貴族だ。同時にサイト君は、トリステインで平民でありながらレコンキスタ軍を止めた英雄として名を馳せている。そのような方がガリアにて犯罪者を救出するなど明らかな敵対行為だと受け止められる。だから…行ってはならない」

政治的にもそうだが、個人的にもアンリエッタたちは彼らを行かせ

るわけにはいかなかった。彼らはルイズの大切な人たち。だがサイトはシュヴァリエのマントを脱ぎ、アンリエッタに差し出した。

貴族にとってマントは、自分が貴族である証。それを差し出すことは、貴族の名を捨てることを意味していた。

「サイトさん何を！？」

「これはお返しします。これでトリステインに迷惑はかからない」

「僕とマリコルヌも副隊長の意見に同意します」

「え！？うう…」

サイトに続き、ギーシュも貴族の証であるマントを脱いだ。マリコルヌも一人抜けるわけにもいかず、渋々マントを脱いだ。

そして、ルイズも貴族マントを脱いだ。あのプライドの高いルイズでさえトリステインで誇りあるヴァリエール家の名を捨てることさえ躊躇わない気なのだ。

「君たち…」

「ルイズ、あなたまで…」

「これで私は貴族ではありません。ただのルイズです」

「…そうですか。あなたたちが自分の筋を通すというのなら…私たちは国の柱としての措置を取らねばなりません」

アンリエッタは机の上に置いてあるベルを鳴らした。その音に応え、

アニエスが王座の間に入ってきた。

「この者たちを逮捕なさい」

その光景をシルフィードは空を飛びながら見ていた。

「たたた大変なのね！逮捕されたのね！！」

サイトたちが捕まってからあまり時間のたたない頃、シルフィードと入れ替わるようにいなくなっていたイルククゥがＵＦＺ基地に飛び込んできた。

「ギーシュたちが！？」

「逮捕されただと…！？」

「くそ、だから言ったんだ！姫様が許可するはずがないって！！」

モンモランシー、シュウヘイの驚愕に続き、言わんこっちゃないとレイナールが苦虫を噛むような顔を浮かべる。

「でも、どうして逮捕されたってわかったんです？」

テファの質問に、イルククゥは思わず息を妻刺せ、冷や汗をかいた。どうも痛いところを突かれた様子である。

「て、天国耳なのね！！」

「それを言うなら地獄耳」

シエスタが突っ込む。

結局、サイトたちは牢屋に閉じ込められてしまった。牢屋番の兵がしっかり彼らのいる牢獄の扉の前に仁王立ちしている。部屋の中は簡素で、光があまり差し込まない。ベッドと、外が見える狭い窓ぐらいしかない。

「わりいみんな、俺のせいで」

「何を言い出すんだいサイト！！むしろ感謝したいところさ！」

「は？」

感謝？なぜ流させるように捕まったことを彼は感謝しているのだ？

「城の牢獄に閉じ込められることなんてめったに体験できない…ああ、学院の女の子たちの顔が目見浮かぶよ」

なるほど、彼の自慢話に女子生徒たちが食いついているからのようだ。今回のこともネタに女の子たちと戯れる魂胆なのだ。だが、マリコルヌは悲鳴に近い声を上げている。

「何のんきなこと言ってるんだよおおお！！ああ…こんな場所に閉

じ込められてるんじゃブリジッタに会えないじゃないかあああ！！」

ベッドに顔を埋めて泣き出すマリコルヌ。確かに、武器を奪われたこの状況にはギーシュもお手上げの様子でため息をつく。

「はあ、しかし杖さえあれば…」

「俺もデルフ没収されたし…」

ゼロに変身しようにも、サイトの正体を知るアンリエッタの計らいでブレスレッドも没収されている。もしあったとしても、すでに正体を知るルイズはともかく、ギーシュとマリコルヌがここにいる上、牢獄からウルトラマンが飛び出すなんてことが知られたらかえって事態を混乱させるだけだ。

「諦めるわけにはいかないわ。何とか脱出しないと」

ルイズは窓の外を眺めた。さすがは国の柱たちが住む城。脱出するには強固で守りも固いもがわかる。だが、ここから抜け出さなくては彼女を、タバサを助けられないのだ。

「…？」

意識を失っていたタバサは起き上がった。見たところ自分の屋敷で

はないようだ。扉離隔のソファに、あのエルフの男が本を読んでいた。自分の杖も彼の手元にある。

「あなたはあの時の…ここはどこ？」

警戒心をこめて尋ねるタバサ。

「ガリアと、我らエルフの国の国境付近にあるアーハンブラ城だ。王族なら名を聞いたことぐらいあるだろう」

「私の使い魔は？」

「あの竜なら逃げた。助けを呼ぼうとか、逃げ出そうとは考えないことだ」

ビターシャルの言うとおり、この城は窓の外に数多くの兵士が張り付いて、とても脱出できる余裕などない。

「母は？」

「会いたいか？」

ビターシャルは部屋の扉を開け、彼女を手招きして誘う。連れて行かせてくれるようだ。

自分より暗く閉ざされた部屋。そこにタバサの母、オルレアン夫人がいた。ベッドの上で横たわる彼女の元へ、タバサは駆け寄った。母はしっかり自分の娘と思い込んでる人形を抱きしめている。

「暴れるんで眠らせてもらった。危害は加えていない」

「…これから私たちをどうする気？」

「お前には薬を飲んでもらう。お前の母が飲んだものと同じ、心を無くす薬だ」

「あの薬を…！」

心を無くす薬、あれを飲まされたら…彼女は自分の母を見つめる。母と同じ運命をたどるのか…。

「本でも読んで暇を潰すといい。竜に攫われた姫を助けに行くイーヴァルディの物語だ」

ビターシャルの手から差し出された『イーヴァルディの勇者』の本。自分にとって最も馴染み深い本。それが、自分の読む最後の小説となるのか。どこか儚さと切なさを感じていたが、タバサはそれを顔に出すことはなかった。

「しっかし、スプーンなんか持ってんだなマリコルヌ、それも何本も」

場所を戻して城の牢獄。サイト、ギーシュ、マリコルヌは壁と向き合い、マリコルヌの持っていたスプーンで壁に穴を掘っていた。

「いつでも食べられるように持っているんだ」

そう言って何本も持っているスプーンを見せびらかす。時間はかかるかもしれないが、この手しかない以上やるしかないのだがし、ルイズはなぜか手伝っていなかった。

「なあ～手伝ってくれよルイズ」

「女の子を働かせる気？手を止めないでやりなさい」

それはないだろ…とつぶやくサイトを余所に、彼女はここで耳を澄ませながら外を見る。何か町の様子があわただしいうえ、大きな声が町に轟いている。

『皆さん！今日はトリステイン初の蒸気飛行船、オストラント号の御披露目をしに参りました！平民から貴族の方々、どうぞご覧くださいませ！』

この大きい声の主はシエスタだった。彼女の声を拡声器で街に大きく響かせていたのだ。言葉通り、オストラント号がトリスタニア上空を飛んでいる。その甲板ではシエスタ、イルククゥ、テファが手を振っている。

「くそ…のんきに手なんか振りやがって」

閉じ込められてる自分たちの気も知らないで…とギーシュが歯ぎしりしたその時だった。

「うわ！！」

牢屋番の兵士の悲鳴が聞こえてきた。気になったサイトたちは鉄格子の向こう側を覗くと、見張りの兵士が倒れている。

「大丈夫平賀君!?」

「ずいぶん辛気臭い場所に閉じ込められたな、平賀」

鉄格子の向こう側から自分と同じ地球人の二人が顔を出した。間違いない、恋人のハルナと戦友のシュウヘイだ。

オストラント号に王宮の兵士たちが気を取られている間に、シュウヘイ、ハルナ、コルベールの三人で救出に来たのだ。

「ハルナ、シュウヘイ!!」

そして二人の後に、コルベールも現れた。

「さあ、今のうちに!」

コルベールらの助けもあって、彼らは城を脱出に成功した。

一旦町の近くの森に他の面々を待たせていたので、一旦そこに集合した。

「なあギムリ、なんで君までここにいるんだい?」

「いずれここに入るつもりだったんだよ俺は」

サイトは、シエスタ、キュルケ、レイナール、テファ、イルククゥ、モンモランシー…そして新たに仲間に入ったギムリ。迎えに来た仲間たちの顔を見て笑顔がこぼれた。

「みんな、来てくれたのか!」

「でも、どうして僕たちが捕まったことがわかったんだい？」

ギーシュの一言で、またしても顔を引きつらせるイルククゥ。最初にこの事態を報告したのは彼女だ。とはいえ、地獄耳だからなんて理由でも虫のいい話だ。

するとサイトに背負われていたデルフが、鞘から顔を出して口を開いた。

「なあ、青髪の娘っ子。もうお前のこと話したほうがいいんじゃねえか？」

「う…仕方ないのね。

我を纏う風よ、我の姿を成せ…」

イルククゥが合掌した瞬間、竜巻のごとし風に包まれ、彼女の姿は一匹の竜になった。あの竜を学院で見ていない者は誰もいない。春の使い魔召喚の儀式でタバサが召喚した使い魔で、珍しいこともあって学院の注目を集めた竜だ。

「シルフィード！？」

誰もが驚く中、ルイズが驚きのあまり声を上げた。デルフが補足説明のつもりで言った。

「あいつは韻竜だったんだ。韻竜は人間の言葉を理解し、先住魔法が扱える古代の竜だ。研究者の格好の餌になっちまうのを懸念して、あいつのご主人は口止めしてたんだ」

確かにシルフィードら韻竜の希少性と能力から考えれば、研究者でなくても手にしたいと考える人間が皆無とは言えない。

と、ここでコルベールが口を開いた。

「みんな、ずっとここにいてはまずい。いずれ兵がここにも来るはずだ。どこかに隠れよう」

ギムリがそれを聞いて言う。

「オストラント号を捨てるんですか！？」

今、ここで逃げたらオストラント号は間違いなく城の兵の監視下に置かれる。サイトたちが城にくるまでに利用したウルトラホーク一号も同じだ。

「今は時間がない。まずは隠れる方が優先だ」

2　タバサ救出作戦

サイトたちは魅惑の妖精亭に身を隠していた。
案の定、ホークとオストラント号は銃士隊や魔法衛士隊の手によって回収されてしまっている。
街には巡査兵がサイトたちを捉えようと街を廻っている。

「まさかあんたたちが王宮に捕まってたとはね」

サイトとルイズを見てスカロンは言う。ジェシカも、彼らを見て呆れを通り越して褒めたくなるほどだ。

「貴族の位まで捨ててまで、全くバカっていうかあんたたちらしいというか」

「でも女王陛下にそこまで背いて捕まれば重罪よ。それでも行くの？」

スカロン言うとおりだ。女王命令に従わなかっただけでなく、脱獄とその手引きまでしたのだ。ただではずまされないのは丸わかりだ。例え相手が、あのアンリエッタとウェールズでも。

「もうここまで来たからには後戻りなんてできないわ」

「ルイズの言うとおりだ。必ず助けないと！」

「唯一無二の親友だもの」

ルイズに続き、サイト、キュルケ…彼らの目はこう語っていた。タ

バサを連れて帰ると。もう説得は無理だろうと悟ったジェシカとスカロンの親子はため息をついた。

「バカにつける薬はないか」

「しょうがないわね。ジェシカ、ちょっと手伝って」

二人が店の奥に行って、コルベールがテーブルの上にハルケギニア全体の地図を広げた。

「ではまず、作戦を練ろう。ガリアへは陸路で向かう」

「陸路ですか！？疲れちゃいますよ！？」

見るからに運動ができてないマリコルヌにとって、陸路で遠く離れたガリアに向かうなんて、地獄のようなものだ。彼にとっての血を吐きながら走るマラソンかもしれない。

「つべこべ言ってる場合か？」

「う…」

シュウヘイの言うとおりここでウダウダしていてタバサがもう手遅れになったらたまったものではないので、結局マリコルヌはそこで黙った。

「まず、二班に別れる。一方はオストラント号を操縦し、ゲルマニア近くの方からガリアへ向かうと見せかけて旋回する。つまり囮だ。その間にもう片方の班は陸路からガリアへ直接向かう。まずオストラント号は私が何とかする」

「ちょっとジャン！それ本気！？」

キュルケが反発する。今頃オストラント号にはかなりの数の見張りが付いているはずだ。無理やり奪おうにも、国の一軍を相手にするに等しい。

「そうです！危なすぎます！」

サイトも反論する。しかし、迷いなき目つきでコルベールは続けた。

「今最も危険なのはミス・タバサだ。彼女は私の生徒、それに仮死の魔法で私を救ったのだから少しでも体を張らないといけないのだ」

「先生、ならば僕も手伝います！」

「俺にも手伝わせてください！オストラント号の操縦で、必ず力になりますから！」

レイナールとギムリも彼に同行を申し出た。

「君たち…ありがとう」

「さすが私のジャン！かっこいいわ！」

惚れた相手にはとことんくっつきたがるキュルケは、飛びつくようにコルベールに抱きつく。女性に免疫のないコルベールからすればこれは職務上まずいことだが、キュルケからすれば全然たいしたものには見受けられない。

「ちょっ、止めたまえミス・ツェルプストー！」

「私はもちろん、サイトさんに着いていきます！」

シエスタもサイトに抱き着こうとしたが、その前にハルナとルイズがサイトの前で、立ちふさがる形で仁王立ちする。二人の黒いオーラに圧倒されかけるシエスタだが、女の意地で耐える。ちなみに最も圧倒されていたのは、サイトの方だったことには気づいてないのだった。

「シエスタさん、どさくさに紛れて抱き着こうだなんて不謹慎です」

「その通りよハルナ。メイド、あんたに勝手な真似はさせないわ」

「いくら彼女だからって、サイトさんのご主人様だからって関係ありません。サイトさんはいずれ私の旦那様にするつもりですから、どこにだって着いていきます」

決意の意を表すシエスタ。しかし、シュウヘイがそこで口を挟んだ。

「ダメだ、お前はコルベールの班に行け」

「そ、そんな！どうしてです！？」

「お前はこの面子の中で最も戦闘経験が浅いうえに、戦場における取り柄がないからだ。足手まといについてこられると任務遂行が困難になる」

「でも、ハルナさんやティファニアさんだってそれは同じじゃないですか！」

「高凪はモンモランシと同様、現地での医務もできる。テファは攻撃用の魔法をヴァリエールから学んだし、とっておきの手段として『忘却』の魔法を持っている。俺と平賀は魔法が使えないが戦闘経験はある。だが、お前はどうなんだ？いきなり野盗に襲われたとき、魔法も使えないだけでなく、剣もまともに振れない、そしてまともに戦ったことのない奴が平賀の力になれるのか？なるどころか、最悪の状況に陥って平賀を余計に苦しめてしまうんだぞ」

「…」

事実を突き付けられ、押し黙ってしまうシエスタ。そんな彼女を見かねてサイトがシュウヘイに言う。

「なあ、シュウヘイ。何もそこまでいわなくても」

「俺は事実を述べたまでだ。厳しいようだが、単純な私情だけで任務に着いてきたら荷物になる。もし手遅れになったとき、お前が一番後悔するぞ」

「…わかった」

一見彼は大人げないほど厳しいが、言ってることは全部事実だ。かわいそうだなんてことでは連れていけない。

「まあ、それでもついていくのなら、自己責任だ。もう少し考えながら決めるといい」

「…はい」

シュウヘイの言葉に、思い悩みながらシエスタは頷いた。
と、ここでスカロンたちが倉庫から籠いっぱいに詰め込まれた何かを抱えて持ってきた。

「それは？」

「前に貧乏くさい旅芸人が食料と引き換えに置いていったのよん」

「これなら一目見ただけならバレないわ」

「つまり、変装ってことかい？」

「あ・た・り♪」

ギーシュの質問にジェシカはウインクした。

「さあ、男子は下、女子は二階で着替えなさい！」

それから十分後、サイトは平民たちが着る袖なしの薄着に、ギーシュは口ひげの生えた太鼓叩き、マリコルヌはピエロの格好に着替えた。

「「だはははは！！」」

あまりにもマリコルヌの格好がしっくりきていたため、二人は腹を抱えて大笑い。

「何で笑うんだよおお！？」

「だって…似合いすぎて…ぷぷ」

「その服といい、その鼻といい…」

「「だはははは!!」」

「二人とも酷いじゃないかあああ!!!」

二人の馬鹿笑いがあまりにも半端ないものだからマリコルヌはちょっと卑屈になった。

それから女性陣も降りてきた。ハルナとキュルケとモンモランシーは露出の高い踊り子服、テファとイルククゥもスカートのスリットが目立つ色気あふれる服装だった。

「恥ずかしいよ…平賀君…」

「…あんまり見ないで…ください」

「この格好着やすいのね♪」

「もう、こんなはしたない服でいかないといけないの!?おへそ丸見えじゃない!」

恥ずかしすぎて悲鳴に近い声を上げるモンモランシー。でもキュルケは慣れている様子だ。

「あら、別にいいじゃない?注目されてないのもいるけど」

「何よ?」

ルイズは特にこれといった飾りつけのない、ジェシカの服の色違い給士服だった。

「なあ…ツェルプストー。この格好しか本当になかったのか?」

シュウヘイがどういうわけか、恥ずかしそうに扉の向こう側から話しかけている。一体どうしたのだろうか?とサイトやテファは彼のいる方を見る。

「いいじゃないの、なかなか『かわいく』着こなせてるじゃない」

『かわいく』?一同がその意味を理解できぬままキュルケは彼の隠れている扉を開いた。開かれた瞬間、誰もが驚いていた。扉の向こう側に、ここにいる女性メンバーにも引けを取らないかなりの美貌の女性がいたのだ。

「おおおお!!」

ここで真っ先にギーシュが飛び出し、モンモランシーの嫉妬で鋭くなった眼光さえ認識せず女性の手を取ってその甲にキスをしようとしたが、その手をあっさりと払われた。

「ったく、男にまでそんな真似をするのか?」

「…え」

今の声、シュウヘイのようだ。しかし、ギーシュは辺りを見渡しても彼の姿を確認できない。いや、今の声は目の前から聞こえた。つまり…

「まだ、気が付かないのか？」

目の前の美女が言った。それもシュウヘイの声で。

「「「なにいいいいいいいいいいいいいい！！！！！！」」」

直後、魅惑の妖精亭の建物全体に驚愕の声が轟いた。彼の格好はテファたちのようにスリットがあるが、彼の鍛えられた体をうまく隠した露出の少ない平民女性用のドレスに女性用タイツ、桃色の口紅、頭に着けられたかわいらしいカチューシャ。まつ毛にも手が加えられている。

「しかし、余ったからと言って俺にこんな服を着せるか…」

「え〜、結構似合ってるのに」

どう表情を作ればいいのかさえ分からず、顔を伏せるシュウヘイにキュルケはブーたれるように言う。

「でも、かわいいですよ本当に。イメージがガラって変わった」

「ええ、ギーシュが見惚れるほどだもの。女としては嫉妬したくもなるわ」

「今度その格好でこの店の妖精さんたちと働いたらどう？いつも以上に繁盛するわよ」

「お姉さまほどじゃないけどかわいいのね！きゅいきゅい！」

「うわあ…君女の子やっていけるんじゃないか？」

「ああ、顔見知りじゃなかったら話しかけていたぜ」

ハルナ、モンモランシー、ジェシカ、イルククゥ、レイナール、ギムリの順で感想を言うが、彼の精神を削り取るものでしかなかった。こんな場所を、憐をはじめとした仲間たちに見られたら明らかに馬鹿にされるか、怒られるか、またはドン引きされるか…彼らに見られなかったのはまさに不幸中の幸いだ。

『だははははは！！！お前どうしちゃったんだよその格好！』

『かか、かわいい…ぷぷ、はは腹が痛いひひひひ！！！』

今の自分を見て笑うのは間違いなく憐と、先輩の詩織だ。その二人が馬鹿笑いする光景が浮かび上がる。

こうなったらテファに助けを求めるしかない、とテファの方を見るシュウヘイだったが…

「シュウ、かわいい！」

肝心の彼女は笑顔で褒めてしまった。が・く・ぜ・ん…テーブルの上で彼は撃沈し、自分が何かいけないことを言ったことに気付かないテファはオロオロしだしたとか。

そんな中、シエスタがサイトの前に来た。彼女だけ着替えていない。

「サイトさん、私もミスタ・コルベールに着いて行きます。私が行っても足手まといだから…」

やはりシュウヘイの言葉を大きく受けてとめた結果、サイトと別行

動をとることにしたのだ。

「そっか…その方がいいよ」

「でも心はいつも繋がっていますからね！」

そう言ってシエスタは豊満な胸を押し付けながらサイトに抱きつく。

「ちょっ、シエスタ！二人が見て…」

抱き着かれるサイトを見て、ルイズ、ハルナは鬼の如き目つきで睨んでいた。

「よし！ミス・タバサ救出に向けて、出発！」

「「「おおおおー！！」」」

そして夜、タバサ救出作戦が開始された。

まずこちらはコルベール、シエスタ、ギムリ、レイナールの四人。

学院の外に、鎖で地面に固定されたオストラント号とホークの近くの木に隠れていた。

「見張りの兵士が…なんて数だ」

ギムリの言うとおり、オストラント号の周りには数多くの見張りの

兵士たちが張り付いている。昼間のサイトたちの脱獄と同じタイミングであの船が現れたことで、サイトたちとの関係性があからさまなことが読まれたのだ。

「どうします？」

「仕方ない…シエスタ君。脱ぎたまえ」

「脱ぐって…ええ！？」

それを聞いてシエスタの顔は真っ赤になった。脱ぐ、つまり色字掛けの手を使えということだ。実際コルベールも両親が傷んでいるだろうが、今一人の生徒が危機なのだ。いちいちこだわっている場合ではない。

その頃のサイトたちは、町から大分離れた場所にいた。

「あいた！」

マリコルヌは荷台の荷物に鼻をぶつけ、赤っ鼻を落とした。気が付けばもう、国境近くの山の前にいた。検問のため、十人ほどの兵士たちがいる。

「僕らが逃げたことを見抜いて、検問してるんだ」

荷台を引っ張っていたギーシュは付け髭を揺らしながら言う。

「ああ…もし捕まったら…」

一番メンバーの中で臆病なマリコルヌに、サイトは安心させようと声をかけた。

「変装してるから大丈夫だ。そう簡単にばれないよ」

「ここは自然体で行きましょ」

キュルケの一言で彼らは互いの顔を見て頷き、ばれないように至って普通の態度をとる。見張りの兵士たちがサイトたちに近づいた。

「旅芸人の一座か。よし、行っていいぞ」

「ありがとうございます」

特に怪しまれることなく、サイトたちは前へ進もうとしたが、ちょっと歩いたところで一人の検問兵がマリコルヌを見て、彼を呼び止めた。

「そこのデブっちょ待て！」

「ひい！…もうだめだ…」

ついにばれてしまったか？冷や汗がたくさん服に染み込ませながら、マリコルヌは絶望した。検問兵が、マリコルヌに近づいてくる。

「どうする？サイト」

「仕方ない。いざとなったら…」

サイトはデルフを手につかむ。もしもの時は戦って気絶させるしかない。しかし、次にとった検問兵の行動は予想とは大きく違っていた。

「落としたぞ」

近づいてきた検問兵はマリコルヌの落とした赤っ鼻を着けてあげた。

「あ…ありがとうございます…」

ばれてなくてよかった…こみ上げる安心感のあまり、マリコルヌは泣きながら礼を言った。こうして結果的に何事もなく彼らは再び前進した。

「ヒヤヒヤさせやがって…」

ギーシュは少々不機嫌気味で荷台を引っ張りながらマリコルヌを睨む。

「だってえ…」

「これで山を越えればガリアだね」

「ああ…だがここからが本番だ。油断はできない」

テファの一言に、シュウヘイは木を引き締めるように言った。

「…」

ルイズはさっきから沈黙したままだった。

（もう私はヴァリエールの名を捨てた。お母様やお姉様とも、もう縁を切ったのよ。もう頼れるのは、サイトだけ）

ちらとサイトを見やるルイズ。例え彼が自分を愛さなくてもいい。自分は彼がいたから変われた、そして仲間のためにここまでのことができるようになったのだ。少しずつ、彼のために強くなろう、そう思いながら彼女は仲間と共に目の前に伸びる道を歩いて行った。

その頃のアーハンブラ城、タバサは『イーヴァルディの勇者』を読んでいた。

今読んでいる場面は、ヒロインの両親が主人公イーヴァルディを傷つけ、ヒロインは悪い竜に拐われ、自分への罰だと受け入れているところだった。

――ルーはぐっと涙をこらえました。イーヴァルディをあれほどまでにひどい目にあわせた両親の娘なのだから。涙することなんて許されない。これは、自分に与えられた罰なのだと…

「罰…私も友達を裏切った…」

再び、オストラント号前。コルベールの指示通りシエスタは見張りの兵士の前に立った。彼女が二人の兵士たちの前に来たのを見計らい、他の三人はすぐ別の場所に移動する。

「お、おとつめご苦労様です」

「女、もう遅いぞ。早く帰れ」

「あの…」

正直言って羞恥心で一杯だが、シエスタは勇気を出してスカートを捲りだした。ガーターベルトまでは見えていたものの、ギリギリで下着は見えてない。

「おお!?」

「もっといいものが…」

シエスタはさらにスカートを捲ろうとし、さすがの兵士たちも彼女の色気と自分の男の欲望に敵わず、グッグッ…と近づいてくる。

「もっといいもの!?」

「た、たまらん…」

しかし、そのいいものを見ることはなかった。隙だらけの兵士たちの後ろから三人が現れ、ギムリとレイナールは木の棒で兵士の頭を殴って気絶させた。

「へへ、ちょろいぜ」

「よし、今のうちに船に乗るんだ」

コルベールたちはオストラント号に乗船した。
ギムリ、レイナールは機関室へ、コルベールとシエスタは操縦室に入った。コルベールは舵を握り、オストラント号を発進させようとする。船体の最前にあるプロペラが回転し始めた。

「く、やはり…」

しかし、今のオストラント号は地面に縫い付けられ、うまく浮上してくれなかった。しかしめげている時間などない。まず飛び立たなくてはサイトたちの囮がつとまらないのだから。

「ミスター！兵隊がもう来ちゃってます！」

「二人とも、もっと石炭を積んでくれ！」

「「はい！」」

機関室とつながっている連絡パイプを通して、コルベールは機関室のギムリとレイナールに呼びかけた。それに応え、二人もシャベルに石炭をため込み、それを釜の火の中に突っ込む。

「ぐ、飛んでくれ…」

必死に舵に力を込め、船を浮上させようとするコルベール。

「うおおおおおおおおおおお！！！」

すると、奇跡が起こった。地面に縫い付けられた鎖を無理やり引きちぎり、オストラント号が浮上しはじめたのだ。

「「やったあああ！！！」」

機関室の二人が達成感に浸って飛び上がった頃には、地上からすっかり離れていた。

「あ、ミスター！後ろから竜騎士が！！」

シエスタがオストラント号の背後の方を指差した。もう竜騎士たちが追ってきていたのだ。

「もっとスピードを上げないと捕まっちゃいますよ！」

「大丈夫だ。私たちはあくまでも囮、サイト君たちが国境を超えるまで時間を稼げばいい」

一方、地上ではアニエスがそれを見て各員に命令を下していた。

「ぼんやりするな！奴らはゲルマニアからガリアに向かって国境を超える気だ！先回りしろ！」

それから数時間たった。オストラント号は竜騎士たちに追い付いてきた。しかも相手は次々と魔法で攻撃している。船体全体に、その衝撃による揺れが発生していた。

「くそ…僕たちも反撃しましょう！」

連絡パイプでコルベールに許可を向止めるギムリだったが、コルベ

ールはそれを却下した。

「ダメだ！我々はあくまで囮だ。反撃してはいけない！」

「きゃああ！」

シエスタは船体を襲う大きな揺れから逃れようと、柱に縋り付く。

「これ以上は危険だな…」

もう、逃げ回ることはできないだろうと判断したコルベールはオストラント号を着陸させた。

まずギムリ、レイナール、シエスタが船から降りた。

一般兵たちは船内を見回ったが、やはり見つかったのは四人だけ。

「たったの四名だと！？他の者は！？」

納得しきれないアニエス。

「もう国境を越えた頃だ」

そんな彼女に、夜の闇の中からコルベールが現れた。

「なっ…」

彼の姿を見て、アニエスは驚愕のあまり目を大きく見開いていた。

なぜ、間違いなく自分の目の前で死んだはずの男が…

「貴様…生きていたのか…」

自分の故郷を焼きつくした男。自分の家族、友人を消した男、自分からすべてを奪った憎き男!!!

「うおおおおおお!!」

アニエスは剣を抜いてコルベールに襲いかかったが、寸でのところで止めた。その息遣いは血に飢えた猛獣のような荒々しさだった。辛うじて思い出したのだろう、自分が彼の偽りの死に際で言った言葉を。

『罪を償いたければ生きろ』と。

それを取り消せば、一度言った自分がまるで馬鹿にしかならない。

「っちい、私が三度としてやられるとは…着いて来い。せめてお前たちを連れて帰らねば私の立場がない!」

一方、ヴェルサルテイル宮殿。

「私の力を受け継いだミューズ、よくぞ『あれ』を完成し、使いこなした。虚無のガンダールヴ、いやウルトラマンゼロの抹殺失敗、そして二人の虚無の担い手に誘拐失敗は帳消し、いやそれ以上に褒めて遣わそう」

「ありがとうございます。身に余るお言葉でございますわ。しかし、ひとつ気になることが…」

「どうした、うかない顔になっておるが」

シェフィールドはジョゼフの耳元で、現在のルイズたちの状況を伝える。彼女の力で操っている魔法人形『ガーゴイル』。それを各国に飛ばし、その目を通して現状を把握していたのだ。

「反逆者としてあの虚無の担い手たちが追われていると？」

「シャルロット姫の救出が目的と思われます。ここは私が出向いて皆殺しに」

「あわてるなミューズ。我が姪が永遠の眠りにつく前に一目会いたかろう。それにあの城にはビターシャルもいるこれもまた一興なのだ」

我々がこの星を乗っ取るまでの…な。
そう言った時のジョゼフの後ろに伸びた影は、人間のものではなくなっていた。まるで肩が剣山のようなもので覆われ、手が扇状になっていた。
もしこれを、光の国のウルトラ戦士が見たらどれほど驚愕することなのだろう…

タバサは夜になっても『イーヴァルディの勇者』を読み続けていた。自分がサイトにしてしまったこと。それを思い出しながら。

――ルーはじっと考えました。しかし、残ったのは友を裏切った事実だけ。一つ望みがあるとすれば、裏切った友に許しを請いてもらうこと。しかし、それは叶わない望みなのでした。

「決して…許されることなんて、ないのだから…」

ポタ…一筋の涙が、彼女のほほをつたってベッドの布団に染み込んでいった。

科学も魔法も、正義のためにあらねばならない、自分の重臣たる執事の言葉さえ踏みにじってしまった彼女の心は、深い後悔と悲しみに満ちていた。

3　イーヴァルディ

サイトたちはガリアのオルレアン領で聞き込み調査を開始した、がこれをうまくこなせたのはキュルケぐらいだった。

「まったく、オルレアンの屋敷から病気の女連れ出すなんてよ、退屈でしょうがねえぜ！」

酒場で酔っ払った兵士の『オルレアン』という単語を聞き逃さず、キュルケはその兵士に近づく。

「もったいないわ、あなたのように素敵な方が。でも私、強い男は好きよ。あなたのお話、聞かせてもらえるかしら？」

「お、おう…」

「本当！？ありがとう！」

美貌に胸と、積極的アプローチ。女としての武器を使いこなし、もうすっかり溶け込んだキュルケを、サイトたちはもはや呆れを通り越して関心していた。

「すごいよなキュルケって。なんか男の弱点を知り尽くしてるというか」

「そうね、あれはもはや才能だわ」

ルイズも、自分の実家の過去の出来事から彼女を嫌っていたが、素直に評価するしかなかった。

キュルケの活躍で、一同はタバサがアーハンブラ城に捕らえられていることを知った。まずは宿に部屋をとってもらい、そこで作戦会議とした。

「アーハンブラ城は、マリコルヌが『遠視』の魔法で見たところ、百人の兵が城中を見張っているようね」

「とにかく、僕が酢酸のお酒を買って…」

「私がたくさんの眠り薬を調合するのはわかったけど、どうやって城の百人の兵士に飲ませるのよ？」

ギーシュをモンモランシーが口々に尋ねる。

「ところで、話が切り替わるようで悪いがテファとイルククゥはどこに行った？」

水を飲みながらシュウヘイがキュルケに尋ねた時、彼女の表情は妙に笑顔だった。

「さあ、秘密兵器のお二人さん。いらっしゃい」

彼女の呼びかけで、二人の女性が部屋に入ってきた。それは、キュルケとハルナとモンモランシーと同じ踊り子服のテファとイルククゥだった。

「「「おおおおお！！！！！」」」

「ぶふ！？」

これを見てサイト、ギーシュ、マリコルヌは機関車の煙のごとく鼻息を吹き出し、シュウヘイは仰天しすぎて口に含んでいた水を思いきり吐き出してしまった。

「シュウ…あ、あんまり見ないで…」

「動きやすいのね！きゅいきゅい！」

動きやすい服装で喜ぶイルククゥとは違い、恥じらいの表情でシュウヘイに言うテファだが、さすがのシュウヘイも今は女装しているとはいえ、今の色香満載の彼女を直視できなかった。

「私とテファとイルククゥとモンモランシーとハルナ。この面子で踊ってる間に眠り薬を混入した酒を百人の兵士たちに飲ませるのよ。なかなかいいでしょ、このアイデア？」

「「「いい！！すごくいい！！」」」

男三人の下心満載なのが目に見えてわかる返事に、ハルナはちょっと複雑な顔をした。いくら自分と恋仲とはいえ、サイトも健全な男子。違う女の子の肌とか胸とか見たら、ちょっと妬いてしまう。

「じゃあギーシュとマリコルヌはお酒を買ってきて。モンモランシーは眠り薬の調合、イルククゥと私とハルナで手伝いよ」

キュルケの指示で一同は一斉に準備に取り掛かった。

「ちょっと待って！」

しかし、ルイズは納得できない様子で立ち上がった。自分やサイトには何に支持も下されなかったのだ。

「私たちには何もないの！？」

「今回は休んでなさい。」

「それは、確かにあんたは私のことを嫌ってるでしょうけど…」

確かに自分をキュルケは、昔からの実家の対立状況から不仲だった。だから今回自分にできることを省けているように思っていたが、予想外の答えが返ってきた。

「嫌ってるんじゃないわ、認めてるのよ。今のあなたを…そしてあなたの力を」

「え？」

ルイズがしゃべったわけではないが、キュルケはもう彼女の力の秘密を見抜いていた。彼女はルイズの手を握り、頭を下げて言った。

「先祖の無礼は謹んでお詫びするわ。どうかあなたのその伝説の力をお貸しくださ い」

「な な、何言ってるのよ！別に私はもうヴァリエールの名を捨てたただのルイズなんだもん…」

「謙遜しちゃって、かわいいわ」

そう言って自分の胸にルイズをギュッと抱きしめた。

「ななな、何すんのよ！！！離してよキュルケ！！」

ケンカするほど仲が良いという言葉があるように、なんだかんだでこの二人は仲が良かったのかもしれない。ただ今までそれに気付けないままだった。

自分が望む平和は、長い間対立していたもの同士でさえ仲良くじゃれ合える。

サイトは今の二人を見て、笑顔をこぼしていた。

「でも私だけ特別扱いは嫌だわ。キュルケ、踊り子服に余りはあるかしら」

「ええ、もしかしてあなたも踊るの？」

「もちろんよ」

一方、下の階では、買ってきた酒樽に、調合した眠り薬をモンモランシー、テファ、イルククゥ、ギーシュ、マリコルヌ、ハルナ、そしてシュウヘイは手分けして混入していた。

それを、近くの建物から見ていた一つの視線があった。

「…見つけたわ。『悪魔』の力を持った…」

その視線の先には、テファがいた。それに気付くことなく彼女は作業を黙々とこなしていく。声の主は、テファたちのいる宿の近くにある店の一階の窓から彼女を双眼鏡で眺めていた。

「向かう場所はアーハンブラ城ね。おじ様がガリア王から聞いたと

か言ってたけど…」

「何をしてる？」

「！」

視線の主は顔を上げた。すでに自分の場所を、目の前にいるどこからか現れた女（女装しているシュウヘイ）に掴まれていたのだ。

「やば！」

「待て！」

声の主は、フードを深くかぶっていて顔は見えなかったものの、声の高さからすると若い女性のようだ。彼女は素早い身のこなしで彼の前から窓から飛び出して逃げ出した。それを追うシュウヘイだったが、店の角を曲がったところでフードの女性を見失ってしまった。

（く…逃がしたか）

「シュウ、どうしたの？」

心配になって、小走りで追いかけてきたテファが尋ねる。

「いや、なんでもない。戻って作業を続けるぞ」

「う、うん…」

夕方、酒に薬を盛る作業が終わり、サイトたちはアーハンブラ城にやってきた。城の主である男爵に、まず口上手なキュルケが取り持った。

「お城の兵士さんにも楽しみが必要ですわ。私たち、それを売りに来ましたの」

「ふむ、酒と踊りか」

男爵は女性陣に目を向けしばし考えるとキュルケの耳元であることを囁いた。それを聞いたキュルケは、少し驚いたような顔になったが、すぐ冷静に男爵が耳元で言った頼みごとを聞き入れた。

（ちょっとまずいわね、男爵の頼みごと…）

そして夜。舞台が完成し、カーテンの裏に女性陣が準備。その間に手始めにマリコルヌが司会を務めた。

「さてお立合い…」

「さっさとはじめろ！」「男はひっこめ！！」

速く女性陣の踊りが見たいと、城の兵士たちは騒ぎ出す。正直びく

びくしているマリコルヌだったが、「おびえるな！」と耳打ちするギーシュの言葉もあって、勇気を出して続けた。

「今宵に咲くのは、砂漠に咲いた花々です。それでは踊り子ちゃん！シルブプレイ！」

カーテンが開かれ、踊り子服に着替えたルイズ、キュルケ、ハルナ、モンモランシー、テファが姿を現した。

「おお！！」

兵士たちは女性陣の美しい姿に目を奪われた。ギーシュとマリコルヌは太鼓を叩き、そのリズムに合わせてキュルケが美しく踊る。城の兵士たちからは「おおおおお！！！」と簡単の声が轟いていた。キュルケは本当に踊りがうまかった。しかも持前の美しさをしっかり利用し、兵士たちの目を釘付けにしている。

「どうやったらあんなのできるのよ？」

「わかんないわよ…」

ルイズとモンモランシーはどう踊ったらいいかわからず、しばらく彼女の踊りを後ろから途方にくれながら見ていた。

「きゃう！」

「う、うまくできませえええん…」

ハルナとテファも頑張るが、ハルナは足を絡ませて転んでしまった

り（その可憐なしぐさが、逆に日ごろの当直などで疲れている兵士たちの癒しになったが）、テファの限っては胸だけ異様に揺れたり。一方でサイト、シュウヘイ、イルククゥは兵士たちに酒を配っている。

「どんどん飲むのね！」

「お酒の足りない方いらっしゃいませんかー？」

数分後、一旦踊っていた女性陣は休憩に入った。男性陣は飲み干されたジョッキの片付けに取り掛かっている。だがここで一つ問題があった。

「あの男爵が女性全員を集めて妾を一人指名するですって？」

それを聞いたモンモランシーは顔を青くしていた。下手をすれば、男爵のいいようにいたぶられ、辱められる、女性としては絶対に味わいたくない状況に陥るのだ。

「ええ、あの男爵私たちのこと気に入ったみたいなのよ」

「それがどんな屈辱かキュルケも知ってるでしょ？ましてや二人きりなんて…」

「とにかく、何とか適当に、もちろん最悪の事態のならないうちに相手して男爵の目を切り抜けましょ。時期に城中の兵士たちは薬の

効力で眠らされるはず」

「もしかして、全員で？」

「ええ、全員の中から一人選ぶのよ。今夜の相手をね」

「寒気がするわ…あの男爵見た目方からてデブっちょで全然イケてないもの…」

嫌悪感のあまり身震いしたモンモランシー、キュルケも全然惚れてもない、それもあんなけだものの塊みたいな男に言い様にされるなんて貴族以前に女性としての屈辱感で一杯になるに違いない。

「適当に相手して、逃げ切ればいいんでしょ？どうってことないじゃない」

二人の間にルイズが口を挟む。ハルナとテファ、イルククゥもそれを聞いていた。

「あんた、そんな簡単に済む話じゃないのよ。もし、あの男に抱かれてごらんなさい。お嫁にいけない、なんて程度じゃすまないわよ。迂闊に魔法使うと怪しまれるし」

「それはそうだけど、ここであいつの要求飲まなかったら、怪しまれるんでしょ？」

ルイズの言うとおり、タバサを助ける前にここで男爵の機嫌を損ねてしまえば、城から追い出されるかもしれない。そうなったらタバサを助けるチャンスを永久に失うのだ。

「だったら、奥の手を使うまでよ」

奥の手、そのキュルケの提案で呼び出されたのは…

「…俺？」

予想した人もいるかもしれないが、女装したシュウヘイだった。

「そ、魔法なしでも強い上、女装してるあなたも連れて行けば、何とかなるかもしれないわ」

「話は大体分かった。だがツェルプストー、俺が選ばれる可能性なんてあるのか？」

「じゃああなた、テファがあの変態男爵にいたぶられちゃっても言い訳？」

キュルケにそう言われ、絶句するシュウヘイ。テファをちらと見て、すぐに答えを出した。

「わかった」

「ふふ、決まりね。頼んだわよ、テファの騎士」

「騎士ってなんだよ…」

「なんか不安です…」

うまくいけるか、心配になったハルナに、ルイズが喝を入れるように言う。

「しっかりなさいハルナ、ここで不安になっても仕方ないわ」

なるべく手っ取り早い方がいいだろうと思い、男性陣に時間を稼ぐように伝え、こうしてシュウヘイ含む女性陣は男爵の部屋に向かうのだった。

ちなみにこのことを男性陣に言ったとき、女性陣に恋人のいるサイトとギーシュが血眼で男爵を半殺しにしたくてしょうがなくなったのは言うまでもない。

――イーヴァルディが竜の洞窟に入った頃、ルーは暗い部屋の中に閉じ込められていました。

そろそろクライマックスの場面を読んでいる中、ビターシャルが入ってきた。

「時期に薬が完成する。その前に旅芸人の一座の芸を見に行くか？」

「情けはいらない…」

「そうか…」

どこか彼女を憐れむように、ビターシャルは部屋を後にした。

「私に、イーヴァルディは…勇者はいない」

扉が閉まるのと同時に、タバサは母親のベッドに顔を埋め、泣き崩

れた。

男爵の部屋に着いたシュウヘイたちは、男爵の前に一列に並んだ。しかし、ここで予想おだにしないことがあった。男爵の護衛兵が二人いたのだ。

（まずいわね…まだいたなんて）

キュルケは誰にも見られないように唇を噛み締める。なんとかあの二人からも意識を奪っておかなければ。

「どうした？固まっているな」

「た…大変光栄なことなので緊張しております！」

にやける男爵に、ルイズが身を強張らせて答えた。

「そうかそうかかわいい奴らだ。さて、誰にしようか…」

男爵は一列に並んだシュウヘイたちに近づいてハルナ、テファ、ルイズ、シュウヘイ、イルククゥ、キュルケ、モンモランシーの順で彼女たちの顔を観察していく。

「お主はら容姿が美しいな」

「い…嫌ですわ…」

屈辱感を我慢しながらモンモランシーが言う。顔に浮かべた作り笑いがかなり引きつっていた。

「うーむこの珍しい夜空のような黒髪の娘もいいな。いや、この女子も悪くない」

男爵はハルナとテファの顔を凝視する。無論見られていたハルナは内心凄まじい怒りをにじませ、テファは恐怖で思わず身縮めた。

「それともこやつがいいか？」

続いて男爵が見たのは、シュウヘイ。素で目を合わせたくないためか、男爵が自分の顔を見るたびに、男爵の顔とは違う方に目を背けていた。

「決めたぞ、今夜の相手は…」

再び一同の列を一通り見回り、男爵は今夜の相手を指差した。

「この桃髪の娘っこと、この骨太の娘だ！」

桃髪の娘、無論すぐにルイズなのはわかった。そしてもうひとりの『骨太』の娘…。男爵も含め、女性陣は一斉にある人物の方に注目した。

骨太の女性…シュウヘイに。

「いや、ちょ…ちょっと待て！いや、待ってください！！」

まさか、『男性』である自分が選ばれるとは全く予想していなかっ

たシュウヘイは顔を真っ青にした。

「ふふふ…その拒むしぐさが可憐だ。そしてもう一人選んだ娘もよい。特にその胸！」

「…はい？」

シュウヘイの容姿だけではない。男爵はルイズの胸に釘付けだった。あの真っ平らな彼女の胸に。人の好みは人それぞれというが…なんでしょう。この妙な不快感のような感情は…

「この胸かわからぬぺったんこさが私の胸をくすぐるのだ！」

男爵のまさかの貧乳好きという本性を知ってこれまでの人生で最もドン引きしたルイズ。顔が凄まじい勢いで真っ青になった。

（ががが…我慢よ！ここで負けたらタバサを助けられなくなるんだもの…）

他の女性陣は選ばれなかった安心感より、複雑な気分で一杯だった。ルイズより体に自信のあるキュルケやモンモランシーはどこか負けた気がしていたが、何より万階一致でこう思っていた。

まさか「男」が選ばれるとは。

「さて、兵よ。後はお前たちにやる」

「「ありがたき幸せ！！」」

二人の兵士はすでに声が上がっている。相当嬉しかったようだ。

シュウヘイは他の女性人たちの顔を見ると、彼女たちは（しっかりね）と励ますつもりで頷き、キュルケを先頭に兵士たちに連れられた。

（ほら、適当に相手して出ましょ）

（あ、ああ…）

二人以外の女性陣が出払った後、瓶を手に取るルイズ。シュウヘイも少々冷静さを取り戻し、トレーにグラスと瓶を乗せ、男爵に近づく。

「お、お注ぎしますわ」

ルイズが瓶を手に取り、男爵のグラスにワインを注いでいく。先ほどからこちらを見ている男爵視線に耐えながら。

「お前たちはわしのことをどう思う？」

男爵が二人に聞きたくもない質問を投げかけてくる。真面目に付き合う暇なんてないので、少々遠まわしに答えることにした。

「ええ…」

シュウヘイが慣れない高声で言う。

「『ええ』とはなんだ？わしのことが気に入らんのか？」

「…私は、男爵様をお好きになれませんわ」

「申し訳ありませんが、私もです」

「なんだ?ずいぶん冷たいことを言う女子だ。そういわずもっと語り明かし、『イイコト』もしてみようではないか?」

「だって…」

そう言ってシュウヘイはドレスを掴みだす。

「俺はあんたのような薄汚い豚野郎はお断りなんでね!」

バッ!とドレスとカチューシャを脱ぎ捨て、元の黒の薄い上着と赤いシャツの姿に変わり、手に持ったエボルトラスターからシュトロームソードを構成、刃先を男爵に向けていた。ルイズは太ももに括り付けていた杖を男爵に向けていた。

「な、お…男!?貴様よくもだましおったな!!ただの旅芸人の一座かと思えば…」

まんまとだまされた男爵はのど元に突き付けられた剣を前にして動けず、ただ骨太の美女の正体だったシュウヘイを睨む。

「さて、悪いけどあんたみたいな変態男爵に構ってる暇はないわ」

「…よい夢を」

ドゴ!バキ!ザシュ!ドゴオオオン!!

瞬間、男爵の意識は昇天するかのように途切れた。

「キュルケたちが心配だわ。急いでいきましょう」

「わかってる」

二人は男爵の部屋を出て、キュルケたちのいる部屋を探し始める。
が、ここで予想もしていなかった事態が起こっていた。

「待ちなさい！テファを攫ってどうする気？」

廊下の向こう側からモンモランシーの声が聞こえる。テファを攫って？いったいどういうことなのだろう？
すると、二人の前にフードを被って顔を隠していた何者かがこちらに近づいてきた。手には、何か大きいものを抱えている。

「二人とも、そいつを捕まえて！！どういう気か知らないけど、テファを攫おうとしてる！！」

「「！？」」

その謎の人物に攫われていたのは、なんといつの間にか意識を無くしたテファだった。謎の人物はテファを肩に抱えてこちら側に逃げようとしている。

さっきまでキュルケは男爵の護衛兵士を、難なく気絶させたものの、そこで思わぬ乱入者としてあのフードの人物が現れ、テファを気絶させて誘拐を謀ったのである。

「退きなさい！」

前方にいた二人を突き飛ばしてフードの人物は逃亡を続けていく。

「悪魔の力を持った我らの同胞、研究に使えるかもしれない」

しかし、夜空に照らされた城の渡り廊下でフードの女性は、サイトたち三人と鉢合わせする。男性陣の方ではようやく酒に持った眠り薬で、全百人の兵士は眠りについたところでサイトたち三人が女性陣たちの様子を見やってきていたのだ。

「やば…！」

後ろから挟まれ、そして前方も逃げ場をふさがれてしまった。キュルケは男性陣の姿を見てふう…と安心のため息を着き、フードの人物に杖を向ける。

「そこまでね。男ども、そいつを捕まえて！テファを攫おうとしてる」

「何…」

現状があまり飲み込めなかったものの、テファがピンチだということは理解できたため、サイトはデルフ、ギーシュとマリコルヌは杖を構えた。

「お前は、確か昼間の奴か？テファを攫って、どうする気だ？いちいち要救助者を増やしやがって」

シュトロームソードを向けてフードの人物を睨むシュウヘイ。さっきをほとばしらせながらゆっくり近づいていく。

「ったく、蛮人の男ってすぐ熱くなるのよね」

蛮人？その言い方に一同は違和感を覚えた。

「貴様ら、そこで何をしている？」

城の屋根の方から男性の声が聞こえ、サイトたちは声の聞こえた方を見上げた。屋根の上にあのビターシャルが立っていた。

「あのエルフがお姉さまを攫ったのね！」

イルククゥがビターシャルの方を指差して言った。彼女の言う通りならば、あのタバサを攫うことができる、つまりそれだけの力を持った強敵ということだ。

だが、ビターシャルが脅威に感じられたのはそれだけではなかった。

「エルフだって！？エルフ一人に勝つのに普通の何倍もの軍隊が必要だって言われてるんだよ！！」

マリコルヌが悲鳴を上げるように言った。彼らの先住魔法…精霊の力はエギンハイム村の翼人たちと同様、木々や石など、身にまわりのものに存在する精霊と契約を交わすことで行使する。その威力は通常の魔法以上、しかも呪文を覚える必要がなく、契約した精霊に命令を口語で下せば簡単発動できるのだ。

「それにしてもルクシャナ、こんなところで何をしている？」

フードの人物に、ビターシャルが話しかける。どうもこの二人は顔見知りのようだ。

「悪魔の力を受け継いだエルフがいるって、蛮人の世界に忍び込ま

せた同胞がいたのよ。それを確かめにきて、ご覧のとおり捕まえたってわけ」

ルクシャナはそう言って抱えていたテファを見せつける。一見冷静そうなビターシャルも、これには驚いていた様子だ。

「悪魔の力を持った同胞だと？まさか…いや、ルクシャナ。その娘を調べるんだ。悪いように扱うなよ」

「久々に会って人使い荒いのね、叔父様ったら。言われなくてもわかってるわ」

ルクシャナはビターシャルに言うと、ぴいいいい！と指笛を吹いた。その指笛に応え、一匹の竜がやってきて、その背中に自分とテファを乗せる。このまま逃げ出すつもりのようだ。

「待て！！」

一瞬追いかけようとしたが、ここで足を止めてしまった。自分がここに来たのはタバサの救出のため。しかも今対峙しているのはタバサを捕まえるほどの強者。自分の独断で行っていいのか？

「何をしてるんだシュウヘイ。行きたまえ！」

ギーシュがビターシャルに杖を向けて言った。

「以前テファが捕まった時の僕らの努力を無駄にする気かい！？捕まったのなら、もう一度奪い返すのが君の役目なのだろう！？」

「…！！」

「ギーシュに賛成ね。ここでヒロインと永久に別れましたなんてバットエンドは許さないわよ」

キュルケも賛同する。

「済まないが、私はお前たちの邪魔をせねばならぬ。勝手な真似はさせん」

ビターシャルが言ったとき、ギーシュとマリコルヌが放った石と風の礫が彼の方に飛んできた。二人の攻撃によってビターシャルのいた場所に激しい砂煙が巻き起こる。

「シュウヘイ、ここは俺たちに任せて、テファの元に行け！」

サイトがデルフをわざとシュウヘイに向けて言う。タバサを助けて、テファを助けないなんて、道理が通じない。だから嫌でも自分たちを手伝わせず、テファの救出に集中させるつもりでデルフを向けた。

こうまでされたら。行くしかない。ルクシャナが竜に乗って空を飛び立つと同時に、シュウヘイは城の外壁から飛びおりた。

「レビテーションをかけるわ！」

「いや、必要ない！そっちの敵に集中しろ！！」

モンモランシーの要求を拒み、彼はブラストショットの銃口を天に向け一発波動弾を放つと、空から『ストーンフリューゲル』が飛来、彼を乗せてルクシャナを追って行った。

「さあて、騎士殿を行かせたことだし、私たちはこっちの敵に集中しましょうか」

キュルケの一言で、サイトたちはビターシャルの方を見る。今の攻撃は相当深く当たったはず。だが、砂煙が晴れた時、彼らは目を疑った。ビターシャルの頭上に、ギーシュの放った石の礫で構成された巨大な岩があった。それを投げつけられ、かろうじて避けたキュルケ、ギーシュ、マリコルヌ。

そこにサイトが剣を振りかざしたが、ビターシャルがこちらに平手を向けた瞬間、出ｒｙ負の刀身が見えない何かに受け止められてしまう、サイトは弾き飛ばされた。

「うわ！」

「サイト！」「平賀君！」

ルイズとハルナは直ちに石の床の転がされたサイトのもとに駆けつける。

「立ち去れ蛮人共。我々は争いを好まない」

「魔法が全部跳ね返されるなんて反則よ…」

モンモランシーが言う。と、ここでサイトの背中に背負われたデルフが鞘から顔をだした。

「魔法も剣の攻撃も効かないってことはカウンターだな。あらゆる攻撃を跳ね返すえげつない力だ」

「じゃあどうするのよ？」

ルイズが尋ねると、今度は地下水が口を開いた。

「お嬢は持ってるぜ。あれを何とかする魔法『解呪』を」

「解呪…ディスペルね！」

「よしルイズ、詠唱しろ。その間は俺が足止めする。みんなはそれまで巻き込まれないように避難しててくれ

サイトはデルフを構え、ビターシャルの攻撃に備えた。

「石の精霊よ。古い制約に基づき命令する。礫となりて我に仇なす敵を討て」

ビターシャルの命令で城の石が、次々と弾丸のようにサイトに襲いかかった。それをガンダールヴの力を発揮して石の礫をことごとく弾き飛ばしていく。

「はあああ！！」

…エルフェオーイース！

「娘っこ、俺にディスペルをかけろ！」

詠唱を完了したルイズはデルフに言われたとおり、デルフにディスペルをかけると、デルフの刀身が青白く輝く。サイトは高く飛び上がって、ビターシャルにデルフを振り降ろした。

「はあああ！！」

しかし、ビターシャルにあたる前に刀身が見えない壁、カウンターに受け止められてしまう。

「無駄だ！貴様などにこの盾は…何！？」

彼が目を見開いたとき、ビターシャルの作り出した精霊の盾にひびが入りだしていた。そして間も与えず、盾は砕け散った。

「これが世界を汚した悪魔、シャイターンの力か…」

サイトはビターシャルにデルフを向け、ビターシャルに言った。

「邪魔しないでくれ。俺たちはタバサを助けに来ただけだ。お前と戦いに来たんじゃない」

この青年は私を見逃すというのか？カウンターが破られた今、止めを刺せるはずなのに。ビターシャルはサイトの思わぬ対応に固まったが、すぐいつも通りの態度をとり戻し、サイトに言った。

「…あの娘は北の塔にいる。精霊の力で扉を塞いでいるが解いておこう。だが忠告しておく。ガリア王ジョゼフは冷酷な男だ。何をしてくるかわからん。覚えておけ」

そう言い残し、彼はどこかへ去っていった。

――竜を倒したイーヴァルディは、ルーの部屋に入りました。ルーはそこでおびえて座り込んでいました。イーヴァルディは彼女の両親にひどい目に合わされたことを気にせず、ルーに手を差し伸べました。

もう、誰にも会えない。自分を最も気遣ってくれたキュルケもきっと来ない。母を助けるために、何度も伯父たちに危険な命令を下され、感情を押し殺しながら汚い任務をいくつもこなしてきた。しかし、それもすべて無駄な足掻きだった。結局自分も母と同じように心を失い、自分が自分でなくなるのだ…。

とその時、誰かが入ってきた。ビターシャルだろうか？ついにこの時が来たのだろうか？

「誰？」

涙を拭いた彼女は顔を上げた。部屋に来たのはビターシャルではなく、サイトたちだった。

「ハアーイタバサ♪」

「タバサ、もう大丈夫だ。さあ、帰ろう…」

「…ぅ…う…」

優しく手を差し伸べるサイト。タバサは更に大粒の涙を流した。自分を助けてくれるイーヴァルディの騎士がいた。その事が彼女の心を満たした。

サイトたちは誰にも悟られぬようタバサとオルレアン夫人を連れて城を脱出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9481r/

ウルトラマンゼロ 使い魔もゼロでセブンの息子

2011年11月29日13時50分発行